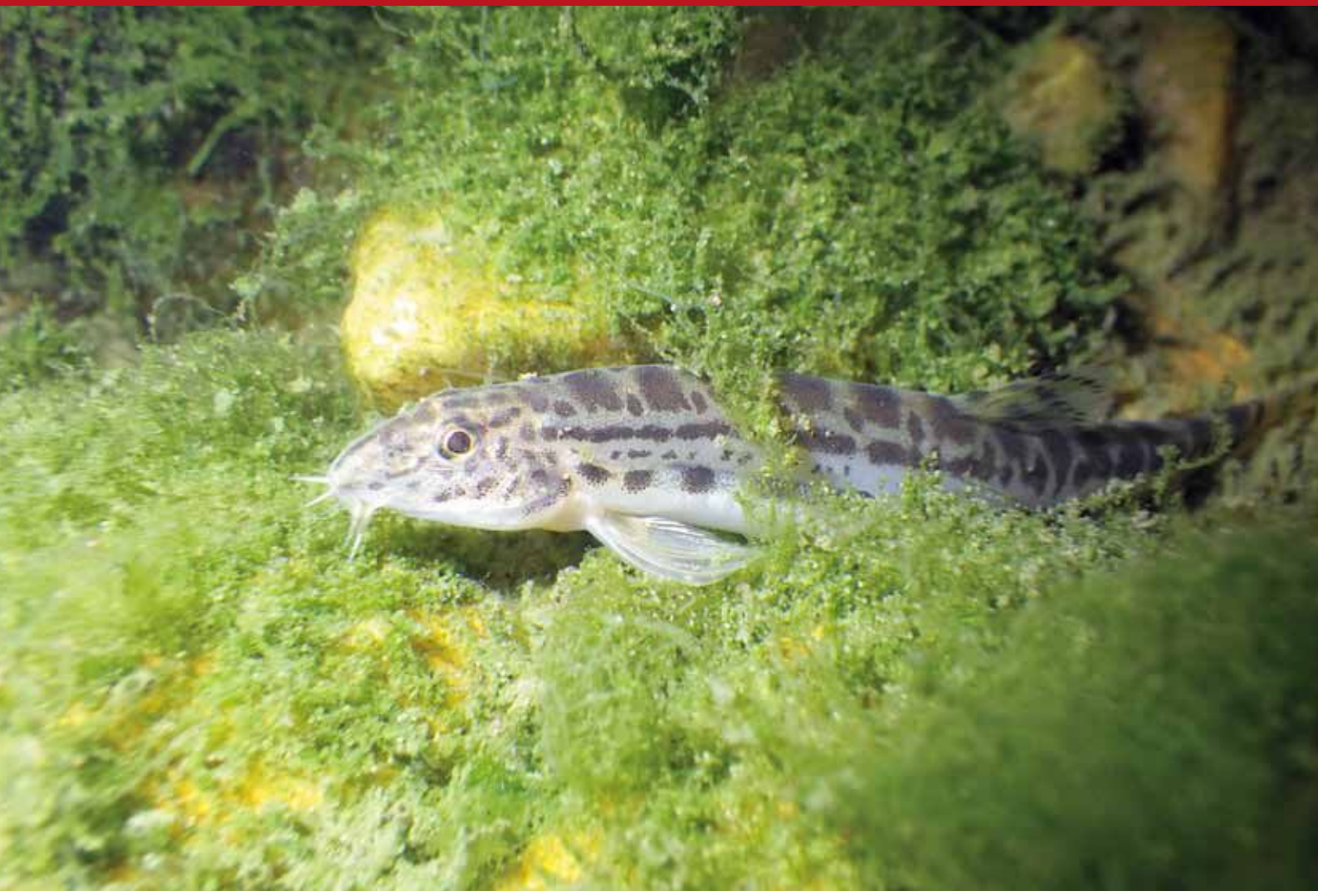
レッドデータブック
なごや 2025



名古屋市の絶滅の
おそれのある野生生物

動物編

名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物
Threatened Wildlife of Nagoya City

レッドデータブックなごや 2025
RED DATA BOOK NAGOYA 2025

－ 動 物 編 －
－ Animals －

２０２５年４月

【 表紙写真 】

表：トウカイコガタスジシマドジョウ　名古屋市東区、2024 年 8 月 12 日　鳥居亮一 撮影

裏：シロヘリツチカメムシ　名古屋市天白区植田川、2020 年 5 月 20 日　戸田尚希 撮影

【修正について】

2025 年（令和 7 年）4 月 30 日に「レッドデータブックなごや 2025」を本市ウェブサイトにて公表しましたが、この冊子では字句等を一部修正しています。

レッドデータブックなごや２０２５の発刊にあたって

名古屋市には、北西部の平野や、中央部の台地、東部の丘陵地など、それぞれの地域ごとに特色のある自然があり、そこでは多様な野生生物が「お互いにつながりあい」そして「バランスを取りながら」暮らしていました。しかし、都市化の進行など人間の活動による影響を受け、かつては身近にいた野生生物が見られなくなったり、その数を減らし絶滅のおそれが生じたりしているものがあります。

本市では、2010（平成 22）年に愛知・名古屋において生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）が開催されたことを契機に、身近な自然の保全・再生と生物多様性の持続可能な利用を、市民・事業者のみなさまとともに推進してきました。2022（令和 4）年に開催された COP15 においては、新たに、2030 年までに自然を回復軌道に乗せるために生物多様性の損失を止め反転させる「ネイチャーポジティブ」の考え方が示され、それに向けて世界が大きく動きだしました。この「ネイチャーポジティブ」という新たな転換点を迎えた今、まちづくりや社会変革などの新たな視点も取り入れながら、生物多様性保全のための取組みを進めていくことが求められています。

生物多様性の指標となる、市内の野生生物の生息・生育状況については定期的に調査を行っており、2004（平成 16）年に絶滅のおそれのある野生生物の分布状況や減少の要因などについてとりまとめた「レッドデータブックなごや２００４」を発行しました。その後、2010（平成 22）年に補遺版を、2015（平成 27）年に改訂版の発行を経て、このたび最新の情報を反映させた「レッドデータブックなごや２０２５」を作成しました。

本書がより多くのみなさまに、本市に残された自然環境への理解を深めていただくきっかけとなり、また、多様な野生生物を守る身近な取組みの輪を広げていくための一助となることを願っています。作成にあたり、ご協力、ご尽力いただきました名古屋市動植物実態調査に係る専門家会合の委員を始めとする多くの関係者のみなさまに、厚くお礼申し上げます。

令和 7 年 4 月

名古屋市長　広沢一郎

目次

１．レッドデータブック作成の経緯と目的.....1
２．調査の概要.....2
（１）調査体制.....2
（２）調査対象と調査方針.....3
（３）調査方法.....5
（４）レッドリストのカテゴリーと評価基準.....6
３．名古屋市版レッドリスト.....9
①名古屋市版レッドリスト 2025（哺乳類）.....10
②名古屋市版レッドリスト 2025（鳥類）.....11
③名古屋市版レッドリスト 2025（爬虫類）.....13
④名古屋市版レッドリスト 2025（両生類）.....14
⑤名古屋市版レッドリスト 2025（魚類）.....15
⑥名古屋市版レッドリスト 2025（昆虫類）.....17
⑦名古屋市版レッドリスト 2025（クモ類）.....21
⑧名古屋市版レッドリスト 2025（エビ・カニ類）.....23
⑨名古屋市版レッドリスト 2025（貝類）.....24
４．名古屋市の野生生物の現状.....27
哺乳類.....27
①名古屋市における哺乳類の概況.....27
②名古屋市における絶滅危惧種の概況.....30
③レッドリスト掲載種の解説.....31
絶滅（EX）.....32
絶滅危惧 IA 類（CR）.....33
絶滅危惧 IB 類（EN）.....45
絶滅危惧Ⅱ類（VU）.....49
準絶滅危惧（NT）.....51
鳥類.....53
①名古屋市における鳥類の概況.....53
②名古屋市における絶滅危惧種の概況等.....53
③レッドリスト掲載種の解説.....58
絶滅危惧 IA 類（CR）.....60
絶滅危惧 IB 類（EN）.....62
絶滅危惧Ⅱ類（VU）.....70
準絶滅危惧（NT）.....84
情報不足（DD）.....105
国リスト・県リスト.....108

爬虫類.....109
①名古屋市における爬虫類の概況.....109
②名古屋市における絶滅危惧種の概況.....111
③レッドリスト掲載種の解説.....117
絶滅危惧 IB 類（EN） 119
絶滅危惧Ⅱ類（VU） 121
準絶滅危惧（NT） 125
情報不足（DD） 126
両生類.....129
①名古屋市における両生類の概況.....129
②名古屋市における絶滅危惧種の概況.....131
③レッドリスト掲載種の解説.....132
絶滅危惧 IA 類（CR） 133
絶滅危惧Ⅱ類（VU） 140
情報不足（DD） 141
魚類.....143
①名古屋市における水域環境および魚類の概況.....143
②名古屋市における絶滅危惧種の概況.....144
③レッドリスト掲載種の解説.....146
絶滅危惧 IA 類（CR） 147
絶滅危惧 IB 類（EN） 156
絶滅危惧Ⅱ類（VU） 164
準絶滅危惧（NT） 170
情報不足（DD） 175
絶滅のおそれのある地域個体群（LP） 181
昆虫類.....183
①名古屋市における昆虫類の概況.....183
②名古屋市における絶滅危惧種の概況.....186
③レッドリスト掲載種の解説.....187
絶滅（EX） 188
絶滅危惧 IA 類（CR） 222
絶滅危惧 IB 類（EN） 248
絶滅危惧Ⅱ類（VU） 268
準絶滅危惧（NT） 293
情報不足（DD） 352
クモ類.....365
①名古屋市におけるクモ類の概況.....365
②名古屋市における絶滅危惧種の概況.....366
③レッドリスト掲載種の解説.....368

絶滅危惧 IA 類（CR）.....369
絶滅危惧 IB 類（EN）.....375
絶滅危惧Ⅱ類（VU）.....379
準絶滅危惧（NT）.....387
情報不足（DD）.....396
エビ・カニ類.....401
①名古屋市におけるエビ・カニ類の概況.....401
②名古屋市における絶滅危惧種の概況.....402
③レッドリスト掲載種の解説.....403
絶滅危惧 IA 類（CR）.....404
絶滅危惧 IB 類（EN）.....405
絶滅危惧Ⅱ類（VU）.....406
準絶滅危惧（NT）.....411
貝類.....417
①名古屋市における貝類の概況.....417
②名古屋市における絶滅危惧種の概況.....418
③レッドリスト掲載種の解説.....419
絶滅（EX）.....420
絶滅危惧 IA 類（CR）.....430
絶滅危惧 IB 類（EN）.....454
絶滅危惧Ⅱ類（VU）.....464
準絶滅危惧（NT）.....490
情報不足（DD）.....510

【資料編】.....517
１．名古屋市版レッドリスト 2025（案）（2024 年 5 月公表）からの変更点.....518
２．レッドデータブックなごや・動物編に関するＱ＆Ａ.....519
３．執筆責任者および協力者.....520

【索引】.....523
１．索引（和名五十音順）.....524
（１）哺乳類.....524
（２）鳥類.....524
（３）爬虫類.....526
（４）両生類.....526
（５）魚類.....526
（６）昆虫類.....527
（７）クモ類.....530
（８）エビ・カニ類.....531
（９）貝類.....531
２．索引（分類順）.....535
（１）哺乳類.....535
（２）鳥類.....535
（３）爬虫類.....537
（４）両生類.....537
（５）魚類.....537
（６）昆虫類.....538
（７）クモ類.....541
（８）エビ・カニ類.....542
（９）貝類.....542

１．レッドデータブック作成の経緯と目的

我が国は、昭和 40 年代に高度経済成長期を迎えて第 2 次産業が大きく発展し、人口は都市部に集中するようになり、道路や鉄道の整備、住宅団地の建設等が盛んに行われるようになった。それとともに自然生態系が圧迫されるようになり、野生生物の生息環境が改変されたり減少したりして、絶滅する種も生じるようになった。

このような現象に対応するため、国レベルで野生生物の絶滅のおそれのある種について調査が行われ、1989（平成元）年に(財)世界自然保護基金日本委員会と(財)日本自然保護協会が「我が国における保護上重要な植物種の現状」（植物編）を、1991（平成 3）年に環境庁（現環境省）が「日本の絶滅のおそれのある野生生物」（動物編）を発行した。その後、1994（平成 6）年に国際自然保護連合（IUCN）がレッドデータブックのより定量的な評価基準に基づく新たなカテゴリーを採択したことから、環境庁は 1995（平成 7）年度から植物編レッドデータブックの作成、動物編レッドデータブックの見直し作業を開始し、維管束植物については 2000（平成 12）年 7 月に「改訂・日本の絶滅の恐れのある野生生物―レッドデータブック植物 I （維管束植物）」が発行された。レッドデータブックはその後も継続的に見直しが行われており、2015（平成 27）年には改訂版、2025 年には植物の再改訂版が公表された。

国レベルでの情報の整備を受けて、各都道府県でもその地域で絶滅が危惧される生物に関する情報の収集整理が図られ、愛知県でも、1996（平成 8）年度から 5 年計画で調査が行われて、2001（平成 13）年 9 月に「レッドデータブックあいちー植物編 2001」、2002（平成 14）年 3 月に「レッドデータブックあいちー動物編 2002」が作成された。こちらも、その後国と同様に継続的な見直しが行われ、2009（平成 21）年には改訂版、2020 年には再改定版が発行されており、2025 年にはリスト部分の見直しが行われた。

名古屋市においても、環境省や愛知県と同様に 2000（平成 12）年度から市内における動植物の生息・生育実態調査を実施し、2004（平成 16）年 3 月に「レッドデータブックなごや 2004」を植物編と動物編に分けて作成した。そして、2010（平成 22）年 3 月にその補遺版、2015（平成 27）年 3 月に改訂版を発行し、2020（令和 2）年 3 月にリスト部分の見直しと追加種の解説を公表した。そしてこのたび、その後の調査を踏まえて、再改訂版「レッドデータブックなごや 2025」を発行することとした。

レッドデータブックは、レッドリストに選定された種の分布の概要、生息地の状況、減少の要因などを個別に記述し、絶滅危惧種の現状と保全上の留意点が理解できるように作成されている。規制等の法律上の効果を持つものではないが、絶滅のおそれのある野生生物に関する理解を深めていただくための基礎資料であり、各種開発事業の環境影響評価などに活用されることによって、野生動植物への配慮が適切になされることを目的としたものである。

なお、全国版レッドデータブック掲載種の中で特に保護の優先度が高い生物種は、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」に基づく国内希少野生動植物種に指定され、保護が図られている。愛知県版レッドデータブック掲載種の中で特に保護の優先度が高い生物種も、「自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例」に基づく「指定希少野生動植物種」に指定され、保護が図られている。また、国、あるいは各地方で文化財として重要な動植物は、「文化財保護法」等に基づく天然記念物に指定され、保護が図られている。

２．調査の概要

（１）調査体制

調査の実施にあたっては、2022（令和 4）年度から野生動植物に関する学識者を中心とした「名古屋市動植物実態調査に係る専門家会合」を開催し、調査および検討を進めた。

各委員は担当分類群について協力者と連絡をとりながら情報を収集するとともに、専門家会合において調査・作業状況を報告し、意見交換した。

専門家会合の構成は表１のとおりである。

表１　名古屋市動植物実態調査に係る専門家会合の構成

担当分類群	委　　員
種子植物	芹沢　俊介　（愛知教育大学名誉教授）
	長谷川　泰洋（名古屋産業大学現代ビジネス学部・大学院環境マネジメント研究科准教授）
シダ植物	村松　正雄　（愛知植物の会会員）
哺乳類	野呂　達哉　（四日市大学環境情報学部特任准教授）
鳥　類	金澤　智　　（日本野鳥の会会員・名古屋市立大学大学院医学研究科学内講師）
爬虫類	矢部　隆　　（日本カメ自然誌研究会）
両生類	藤谷　武史　（名古屋市緑政土木局東山動物園職員）
魚　類	谷口　義則　（名城大学人間学部人間学科教授）
昆虫類	戸田　尚希　（名城大学農学部昆虫学研究室研究員）
クモ類	加藤　修朗　（日本蜘蛛学会会員）
エビ・カニ類	中嶋　清徳　（名古屋港水族館飼育展示第一課長）
貝　類	川瀬　基弘　（東海化石研究会会員）

また、株式会社テクノ中部が、検討結果のとりまとめおよび連絡調整を行った。

（２）調査対象と調査方針

今回のレッドデータブックなごや 2025 では、動物関係の調査対象分類群は哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫類、クモ類、エビ・カニ類、貝類の 9 つとなった。なお、従来「カニ類」としていた分類群にエビ類を含め、今回より「エビ・カニ類」に改めることとした。

①　哺乳類

哺乳類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種および一過性の確認種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上および陸水中とした。また、干潟、河口部も含むものとした。

②　鳥類

鳥類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種および不定期または偶発的に記録される種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上および陸水中とした。また、沿岸の浅海域、干潟、河口部も含むものとした。

③　爬虫類

爬虫類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上および陸水中とした。

④　両生類

両生類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上および陸水中とした。

⑤　魚類

魚類の種または亜種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸水中（河川、湖沼等）とした。また、汽水域に生息する種も対象とするため河口部も含めた。

⑥　昆虫類

昆虫類の種または亜種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種および一過性の確認種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上および陸水中とした。また、干潟、河口部も含むものとした。

⑦　クモ類

クモ類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上および陸水中とした。また、河口部も含むものとした。

⑧　エビ・カニ類

エビ・カニ類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上および陸水中とした。また、沿岸の浅海域、干潟、河口部も含むものとした。

⑨　貝類

貝類の種または亜種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸域、淡水域、河口域および浅海域とした。

（３）調査方法

調査は、2022（令和 4）年度から 2024（令和 6）年度にかけて、以下の方法により実施した。

①　哺乳類

調査対象種について、文献調査および現地調査により生息状況の把握を行った。

②　鳥類

調査対象種について、文献調査により生息状況の把握を行った。

詳細は鳥類の概要ページ（53 頁）に記した。

③　爬虫類

調査対象種について、文献調査および現地調査により生息状況の把握を行った。

④　両生類

調査対象種について、文献調査および現地調査により生息状況の把握を行った。

⑤　魚類

調査対象種について、文献調査および現地調査により生息状況の把握を行った。

⑥　昆虫類

調査対象種について、文献調査および現地調査により生息状況の把握を行った。

⑦　クモ類

調査対象種について、文献調査および現地調査により生息状況の把握を行った。

⑧　エビ・カニ類

調査対象種について、文献調査および現地調査により生息状況の把握を行った。

⑨　貝類

調査対象種について、文献調査および現地調査により生息状況の把握を行った。

（4）レッドリストのカテゴリーと評価基準

評価基準は、国および愛知県のレッドリストとの整合性を確保するため、原則として IUCN 基準に準拠することとした。各調査対象種の絶滅のおそれの程度について、図 1、表 2 に示す評価基準に従い、各調査対象種について収集した情報をもとに、名古屋市内の分布の状況などを勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要因に従って絶滅のおそれの程度を判定した。

「絶滅」の評価については、「過去に確実に生息していた種」と判断する文献や標本の整備状況および種の移動能力が分類群毎に異なることから、表 3 に示す要件により判定した。なお、評価区分のうち「野生絶滅」は、原産地や遺伝的混乱の防止体制に疑問があると思われる場合もあり、また個人的に管理されているものもすべて確認することも困難であると判断されたので、今回のレッドリストでは絶滅とあわせ、「絶滅・野生絶滅」として扱うこととした（ただし、表記上は絶滅（EX）とした）。

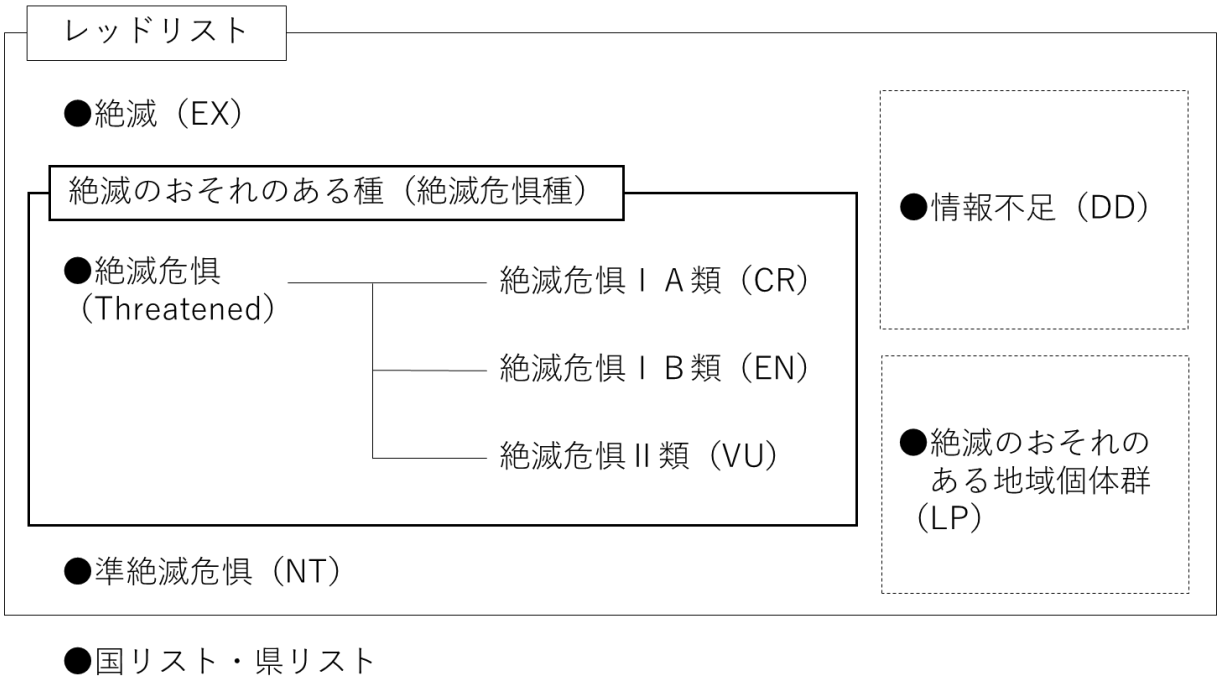


図 1　名古屋市版レッドリスト 2025（動物）に用いたカテゴリー

表２　名古屋市版レッドリスト 2025（動物）に用いたカテゴリーと判定基準

<table>
<tr><th colspan="2">区分および基本概念</th><th colspan="3">定性的要件</th></tr>
<tr><td>絶　滅
Extinct（EX）
・
野生絶滅
Extinct in the Wild（EW）</td><td>名古屋市ではすでに絶滅したと考えられる種。
野生では絶滅し、飼育下等でのみ存続している種。</td><td colspan="3">過去に名古屋市に生息したことが確認されており、市内において少なくとも本来の自然生息地ではすでに絶滅したと考えられる種（飼育下等では存続している種を含む）。
【確実な情報があるもの】
1　信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。
2　信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。
【情報量が少ないもの】
3　過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">絶滅危惧Ⅰ類
Critically Endangered
+ Endangered
（CR+EN）</td><td rowspan="2">絶滅の危機に瀕している種。
現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</td><td rowspan="2">次のいずれかに該当する種。
【確実な情報があるもの】
1　既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。
2　既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。
3　既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。
4　ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。
【情報量が少ないもの】
5　それほど遠くない過去（30 年～50 年）の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。</td><td>絶滅危惧
IA類
（CR）</td><td>ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。</td></tr>
<tr><td>絶滅危惧
IB類
（EN）</td><td>IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。</td></tr>
<tr><td>絶滅危惧Ⅱ類
Vulnerable（VU）</td><td>絶滅の危険が増大している種。
現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。</td><td colspan="3">次のいずれかに該当する種
【確実な情報があるもの】
1　大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。
2　大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。
3　大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。
4　分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。</td></tr>
<tr><td>準絶滅危惧
Near Threatened
（NT）</td><td>存続基盤が脆弱な種。
現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。</td><td colspan="3">次に該当する種。
生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
1　個体数が減少している。
2　生息条件が悪化している。
3　過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。
4　交雑可能な別種が侵入している。</td></tr>
<tr><td>情報不足
Data Deficient
（DD）</td><td>評価するだけの情報が不足している種。</td><td colspan="3">環境情報の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性（具体的には、次のいずれかの要素）を有しているが、生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていない種。あるいは確認例が極めて少なく、希少であるか否かも不明な種。
1　どの生息地においても生息密度が低く希少である。
2　生息地が局限されている。
3　生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。
4　生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。</td></tr>
<tr><td>地域個体群
Threatened Local Population
（LP）</td><td colspan="4">その種の国内における生息状況に鑑み、名古屋市内において特に保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群。</td></tr>
<tr><td>国リスト
・
県リスト</td><td colspan="4">環境省レッドリスト 2020 またはレッドリストあいち 2025 に記載されているが、名古屋市において上記の要件に該当しない種。</td></tr>
</table>

表３　名古屋市版レッドリスト 2025（動物）の過去の生息種の要件

分類群	内　　容
哺乳類	標本等の確実な生息記録がある種。
鳥　　類	継続（経年的）確認記録がある種。ただし、迷行的に記録される種など一過性の種は除外。なお、隣接する市町村での生息状況も加味。
爬虫類	標本等の確実な生息記録がある種。
両生類	標本等の確実な生息記録がある種。
魚　　類	標本等の確実な生息記録がある種。
昆虫類	標本等の確実な生息記録がある種。なお、隣接する市町村での生息状況も加味。
クモ類	標本等の確実な生息記録がある種。ただし、調査記録は昭和 35 年以降。
エビ・カニ類	標本等の確実な生息記録がある種。
貝　　類	標本等の確実な生息記録がある種。

３．名古屋市版レッドリスト

今回の改定により、名古屋市版レッドリスト（動物）に掲載した種数は表 4 のとおりであり、各分類群のリストは以下に示す。

表４　名古屋市版レッドリスト 2025（動物）掲載種数

評価区分 / 分類群	絶滅（EX）	絶滅のおそれのある種				準絶滅危惧（NT）	情報不足（DD）	地域個体群（LP）	計	国・県リスト
		絶滅危惧 IA 類（CR）	絶滅危惧 IB 類（EN）	絶滅危惧Ⅱ類（VU）	小計					
哺乳類	1	12	4	2	18	1	0	0	20	0
鳥類	0	2	8	14	24	21	3	0	48	1
爬虫類	0	0	2	4	6	1	3	0	10	0
両生類	0	7	0	1	8	0	2	0	10	0
魚類	0	9	8	6	23	5	6	1	35	0
昆虫類	34	26	20	25	71	59	13	0	177	0
クモ類	0	6	4	8	18	9	5	0	32	0
エビ・カニ類	0	1	1	5	7	6	0	0	13	0
貝類	10	24	10	26	60	20	7	0	97	1
計	45	87	57	91	235	122	39	1	442	2

①　名古屋市版レッドリスト 2025（哺乳類）

目および科の範囲、名称、配列、種の学名と配列は原則として、「世界哺乳類標準和名リスト 2021 年度版」（日本哺乳類学会分類群名・標本検討委員会，2021）に準拠し、コウモリ類に関して最新の知見を加えて整理した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	オオカミ	食肉	イヌ	*Canis lupus* Linnaeus, 1758	EX	EX	EX

絶滅危惧 IA 類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ニホンリス	齧歯	リス	*Sciurus lis* Temminck, 1844	LP	NT	CR
2	ムササビ	齧歯	リス	*Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827)	－	NT	CR
3	ハタネズミ	齧歯	キヌゲネズミ	*Alexandromys montebelli* (Milne－Edwards, 1872)	－	NT	CR
4	ニホンノウサギ	兎形	ウサギ	*Lepus brachyurus* Temminck, 1844	－	NT	CR
5	ニホンジネズミ	真無盲腸	トガリネズミ	*Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842)	－	LP	CR
6	ニホンキクガシラコウモリ	翼手	キクガシラコウモリ	*Rhinolophus nippon* Temminck, 1835	－	NT	CR
7	オヒキコウモリ	翼手	オヒキコウモリ	*Tadarida insignis* (Blyth, 1862)	VU	DD	CR
8	ニホンテン	食肉	イタチ	*Martes melampus* (Wagner, 1840)	－	NT	CR
9	アナグマ	食肉	イタチ	*Meles anakuma* Temminck, 1842	－	NT	CR
10	ニホンイタチ	食肉	イタチ	*Mustela itatsi* Temminck, 1844	－	－	CR
11	カモシカ	偶蹄	ウシ	*Capricornis crispus* (Temminck, 1836)	－	－	EN
12	スナメリ	鯨	ネズミイルカ	*Neophocaena asiaeorientalis* (Pilleri et Gihr, 1972)	－	NT	CR

絶滅危惧 IB 類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	カヤネズミ	齧歯	ネズミ	*Micromys minutus* (Pallas, 1771)	－	VU	EN
2	ヒミズ	真無盲腸	モグラ	*Urotrichus talpoides* Temminck, 1841	－	－	EN
3	ヒナコウモリ	翼手	ヒナコウモリ	*Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)	－	EN	DD
4	アカギツネ	食肉	イヌ	*Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)	－	－	EN

絶滅危惧II類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	アカネズミ	齧歯	ネズミ	*Apodemus speciosus* (Temminck, 1844)	－	－	VU
2	コウベモグラ	真無盲腸	モグラ	*Mogera wogura* (Temminck, 1842)	－	LP	VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	タヌキ	食肉	イヌ	*Nyctereutes viverrinus* (Temminck, 1839)	－	－	NT

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
（該当種なし）							

②　名古屋市版レッドリスト 2025（鳥類）

目および科の範囲、名称、配列、種の学名と配列は特に修正が必要なものを除き、「日本鳥類目録改訂第 8 版」（日本鳥学会，2024）に準拠した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
	（該当種なし）						

絶滅危惧 IA 類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	*Caprimulgus jotaka* Temminck & Schlegel, 1844	NT	繁殖 EN 通過 VU	CR
2	クロツラヘラサギ	ペリカン	トキ	*Platalea minor* Temminck & Schlegel, 1849	EN	越冬 VU	CR

絶滅危惧 IB 類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	タマシギ	チドリ	タマシギ	*Rostratula benghalensis* (Linnaeus, 1758)	VU	繁殖 EN 越冬 EN	EN
2	オオジシギ	チドリ	シギ	*Gallinago hardwickii* (Gray, 1831)	NT	繁殖 EX 通過 VU	EN
3	ツルシギ	チドリ	シギ	*Tringa erythropus* (Pallas, 1764)	VU	通過 EN	EN
4	コアジサシ	チドリ	カモメ	*Sternula albifrons* (Pallas, 1764)	VU	繁殖 EN 通過 VU	VU
5	ヨシゴイ	ペリカン	サギ	*Ixobrychus sinensis* (Gmelin, 1789)	NT	繁殖 CR 通過 CR	EN
6	ミゾゴイ	ペリカン	サギ	*Gorsachius goisagi* (Temminck, 1836)	VU	繁殖 VU 通過 NT	EN
7	コノハズク	フクロウ	フクロウ	*Otus sunia* (Hodgson, 1836)	－	繁殖 CR 通過 VU	EN
8	フクロウ	フクロウ	フクロウ	*Strix uralensis* Pallas, 1771	－	繁殖 NT 越冬 NT	EN

絶滅危惧II類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	トモエガモ	カモ	カモ	*Sibirionetta formosa* (Georgi, 1775)	VU	越冬 VU	VU
2	ヒクイナ	ツル	クイナ	*Zapornia fusca* (Linnaeus, 1766)	NT	繁殖 VU 通過 NT	VU
3	ホウロクシギ	チドリ	シギ	*Numenius madagascariensis* (Linnaeus, *1766)*	VU	通過 EN	VU
4	オグロシギ	チドリ	シギ	*Limosa limosa* (Linnaeus, 1758)	－	通過 EN	VU
5	ウズラシギ	チドリ	シギ	*Calidris acuminata* (Horsfield, 1821)	－	通過 EN	VU
6	タカブシギ	チドリ	シギ	*Tringa glareola* Linnaeus, 1758	VU	通過 EN	VU
7	ズグロカモメ	チドリ	カモメ	*Saundersilarus saundersi* (Swinhoe, 1871)	VU	越冬 VU	VU
8	ハチクマ	タカ	タカ	*Pernis ptilorhynchus* (Temminck, 1821)	NT	越冬 VU 通過リスト外	VU
9	チュウヒ	タカ	タカ	*Circus spilonotus* Kaup, 1847	EN	繁殖 CR 越冬 VU	VU
10	サシバ	タカ	タカ	*Butastur indicus* (Gmelin, 1788)	VU	繁殖 EN 通過 NT	VU

11	アオバズク	フクロウ	フクロウ	*Ninox japonica* (Temminck & Schlegel, 1845)	－	繁殖 EN 通過 VU	VU
12	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	*Falco peregrinus* Tunstall, 1771	VU	繁殖 VU 越冬 NT	VU
13	コシアカツバメ	スズメ	ツバメ	*Cecropis daurica* (Laxmann, 1769)	－	－	VU
14	コイカル	スズメ	アトリ	*Eophona migratoria* Hartert, 1903	－	－	VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	カッコウ	カッコウ	カッコウ	*Cuculus canorus* Linnaeus, 1758	－	繁殖 VU 通過 NT	NT
2	クイナ	ツル	クイナ	*Rallus indicus* Blyth, 1849	－	越冬 NT	NT
3	セイタカシギ	チドリ	セイタカシギ	*Himantopus himantopus* (Linnaeus, 1758)	VU	繁殖 VU 越冬 NT	NT
4	イカルチドリ	チドリ	チドリ	*Charadrius placidus* Gray & Gray, 1863	－	繁殖 VU 越冬 NT	NT
5	シロチドリ	チドリ	チドリ	*Charadrius alexandrinus* Linnaeus, 1758	VU	繁殖 EN 越冬 VU	NT
6	メダイチドリ	チドリ	チドリ	*Charadrius mongolus* Pallas, 1776	－	－	NT
7	ダイシャクシギ	チドリ	シギ	*Numenius arquata* (Linnaeus, 1758)	－	越冬 VU	NT
8	オオソリハシシギ	チドリ	シギ	*Limosa lapponica* (Linnaeus, 1758)	VU	通過 EN	NT
9	オバシギ	チドリ	シギ	*Calidris tenuirostris* (Horsfield, 1821)	－	通過 VU	NT
10	コオバシギ	チドリ	シギ	*Calidris canutus* (Linnaeus, 1758)	－	通過 VU	NT
11	エリマキシギ	チドリ	シギ	*Calidris pugnax* (Linnaeus, 1758)	－	通過 CR	NT
12	ハマシギ	チドリ	シギ	*Calidris alpina* (Linnaeus, 1758)	NT	越冬 VU	NT
13	ヤマシギ	チドリ	シギ	*Scolopax rusticola* Linnaeus, 1758	－	越冬 NT	NT
14	アカアシシギ	チドリ	シギ	*Tringa totanus* (Linnaeus, 1758)	VU	通過 VU	NT
15	チュウサギ	ペリカン	サギ	*Ardea intermedia* Wagler, 1829	NT	繁殖 NT 通過 NT	NT
16	ミサゴ	タカ	ミサゴ	*Pandion haliaetus* (Linnaeus, 1758)	NT	繁殖 VU 越冬リスト外	NT
17	ツミ	タカ	タカ	*Accipiter gularis* (Temminck & Schlegel, 1845)	－	繁殖 NT 通過 －	NT
18	ハイタカ	タカ	タカ	*Accipiter nisus* (Linnaeus, 1758)	NT	越冬 NT	NT
19	オオタカ	タカ	タカ	*Accipiter gentilis* (Linnaeus, 1758)	NT	繁殖 VU 越冬 VU	NT
20	オオコノハズク	フクロウ	フクロウ	*Otus semitorques* Temminck & Schlegel, 1844	－	繁殖 VU 越冬 NT	NT
21	サンショウクイ	スズメ	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus* (Raffles, 1822)	VU	繁殖 － 通過 －	NT

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ウズラ	キジ	キジ	*Coturnix japonica* Temminck & Schlegel, 1849	VU	越冬 EN	DD
2	シベリアオオハシシギ	チドリ	シギ	*Limnodromus semipalmatus* (Blyth, 1848)	DD	通過 CR	DD
3	ノジコ	スズメ	ホオジロ	*Emberiza sulphurata* Temminck & Schlegel, 1848	NT	繁殖 EX 通過 EN	DD

国リスト

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ケリ	チドリ	チドリ	*Vanellus cinereus* (Blyth, 1842)	DD	繁殖 NT 越冬 VU	国リスト

③　名古屋市版レッドリスト 2025（爬虫類）

目および科の範囲、名称、配列、種の学名と配列は特に修正が必要なものを除き、「日本産爬虫両生類標準和名リスト」（日本爬虫両棲類学会，2024）に準拠した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
	（該当種なし）						

絶滅危惧 IA 類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
	（該当種なし）						

絶滅危惧 IB 類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	シロマダラ	有鱗	ナミヘビ	*Lycodon orientalis* (Hilgendorf, 1880)	－	DD	EN
2	ジムグリ	有鱗	ナミヘビ	*Euprepiophis conspicillatus* (Boie, 1826)	－	－	EN

絶滅危惧II類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ニホンイシガメ	カメ	イシガメ	*Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel, 1838)	NT	NT	VU
2	ヒバカリ	有鱗	ナミヘビ	*Hebius vibakari vibakari* (Boie, 1826)	－	－	VU
3	ヤマカガシ	有鱗	ナミヘビ	*Rhabdophis tigrinus* (Boie, 1826)	－	DD	VU
4	ニホンマムシ	有鱗	クサリヘビ	*Gloydius blomhoffii* (Boie, 1826)	－	－	VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	シマヘビ	有鱗	ナミヘビ	*Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)	－	－	NT

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	クサガメ	カメ	イシガメ	*Mauremys reevesii* (Gray, 1831)	－	－	DD
2	ニホンスッポン	カメ	スッポン	*Pelodiscus japonicus* (Temminck et Schlegel, 1838)	DD	DD	DD
3	タカチホヘビ	有鱗	タカチホヘビ	*Achalinus spinalis* Peters, 1869	－	DD	DD

④　名古屋市版レッドリスト 2025（両生類）

目および科の範囲、名称、配列、種の学名と配列は特に修正が必要なものを除き、「日本産爬虫両生類標準和名リスト」（日本爬虫両棲類学会，2024）に準拠した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
	（該当種なし）						

絶滅危惧 IA 類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	オワリサンショウウオ	有尾	サンショウウオ	*Hynobius owariensis* Sugawara Fujitani Seguchi Sawahata et Nagano, 2022	VU	－	CR
2	アカハライモリ	有尾	イモリ	*Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)	NT	NT*	CR
3	アズマヒキガエル	無尾	ヒキガエル	*Bufo formosus* Boulenger, 1883	－	－	CR
4	ニホンアカガエル	無尾	アカガエル	*Rana japonica* Boulenger, 1879	－	－	CR
5	ツチガエル	無尾	アカガエル	*Glandirana rugosa* (Temminck et Schlegel, 1838)	－	－	CR
6	ナゴヤダルマガエル	無尾	アカガエル	*Pelophylax porosus brevipodus* (Ito, 1941)	EN	VU	CR
7	シュレーゲルアオガエル	無尾	アオガエル	*Rhacophorus schlegelii* (Günther, 1858)	－	－	CR

絶滅危惧 IB 類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
	（該当種なし）						

絶滅危惧II類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	トノサマガエル	無尾	アカガエル	*Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)	NT	国リスト	VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
	（該当種なし）						

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ヒガシニホンアマガエル	無尾	アマガエル	*Dryophytes leopardus* Shimada, Matsui et Tanaka, 2025	－	－	－
2	タゴガエル	無尾	アカガエル	*Rana tagoi* Okada, 1928	－	－	DD

*) アカハライモリは、愛知県レッドリスト 2025 においては渥美種族を CR、渥美種族を除いた個体群を中間種族として NT に評価している。名古屋市に生息するアカハライモリはここで言う中間種族に該当することから、NT と記載した。

⑤ 名古屋市版レッドリスト 2025（魚類）

目および科の範囲、名称、配列、種の学名と配列は「日本産魚類検索　全種の同定第３版」（中坊編，2013）の記載を基本とし、最新の情報をもとに整理した。なお、ドジョウ類は「日本のドジョウ」（中島・内山，2017）によった。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
	（該当種なし）						

絶滅危惧 IA 類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	スナヤツメ類	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	*Lethenteron* sp.	VU	EN	CR
2	ヤリタナゴ	コイ	コイ	*Tanakia lanceolata* (Temminck et Schlegel, 1846)	NT	CR	CR
3	カワバタモロコ	コイ	コイ	*Hemigrammocypris rasborella* Fowler, 1910	EN	EN	CR
4	キタドジョウ	コイ	ドジョウ	*Misgurnus* sp. (Clade A)	DD	CR	－
5	トウカイコガタスジシマドジョウ	コイ	ドジョウ	*Cobitis minamorii tokaiensis* Nakajima, 2012	EN	EN	CR
6	ホトケドジョウ	コイ	フクドジョウ	*Lefua echigonia* Jordan et Richardson, 1907	EN	EN	CR
7	アカザ	ナマズ	アカザ	*Liobagrus reini* Hilgendorf, 1878	VU	NT	CR
8	ドンコ	スズキ	ドンコ	*Odontobutis obscura* (Temminck et Schlegel, 1845)	－	EN	CR
9	トウカイヨシノボリ	スズキ	ハゼ	*Rhinogobius telma* Suzuki, Kimura and Shibukawa, 2019	NT	CR	CR

絶滅危惧 IB 類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ニホンウナギ	ウナギ	ウナギ	*Anguilla japonica* Temminck et Schlegel, 1847	EN	EN	EN
2	カワムツ	コイ	コイ	*Candidia temminckii* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	EN
3	ニシシマドジョウ	コイ	ドジョウ	*Cobitis* sp. BIWAE type B	－	VU	EN
4	カマキリ(アユカケ)	スズキ	カジカ	*Rheopresbe kazika* (Jordan et Starks, 1904)	VU	EN	EN
5	ウツセミカジカ	スズキ	カジカ	*Cottus reinii* Hilgendorf, 1879	EN	VU	EN
6	トビハゼ	スズキ	ハゼ	*Periophthalmus modestus* Cantor, 1842	NT	VU	EN
7	マサゴハゼ	スズキ	ハゼ	*Pseudogobius masago* (Tomiyama, 1936)	VU	VU	EN
8	エドハゼ	スズキ	ハゼ	*Gymnogobius macrognathos* Bleeker, 1860	VU	NT	EN

絶滅危惧II類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ゼゼラ	コイ	コイ	*Biwia zezera* (Ishikawa, 1895)	VU	NT	VU
2	ドジョウ	コイ	ドジョウ	*Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor, 1842)	NT	VU	VU
3	アユ	サケ	アユ	*Plecoglossus altivelis altivelis* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	VU
4	シラウオ	サケ	シラウオ	*Salangichthys microdon* (Bleeker, 1860)	－	VU	VU
5	ミナミメダカ	ダツ	メダカ	*Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel, 1846)	VU	VU	VU
6	カワアナゴ	スズキ	カワアナゴ	*Eleotris oxycephala* Temminck et Schlegel, 1845	－	NT	VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ウグイ	コイ	コイ	*Tribolodon hakonensis* (Günther, 1877)	－	－	NT
2	タモロコ	コイ	コイ	*Gnathopogon elongatus elongatus* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	NT
3	ナマズ	ナマズ	ナマズ	*Silurus asotus* Linnaeus, 1758	－	－	NT
4	スミウキゴリ	スズキ	ハゼ	*Gymnogobius petschiliensis* (Rendahl, 1924)	－	－	NT
5	ウキゴリ	スズキ	ハゼ	*Gymnogobius urotaenia* (Hilgendorf, 1879)	－	－	NT

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	コイ(在来型)	コイ	コイ	*Cyprinus carpio* Linnaeus, 1758	LP	DD	DD
2	ヌマムツ	コイ	コイ	*Candidia sieboldii* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	DD
3	ウシモツゴ	コイ	コイ	*Pseudorasbora pumila* subsp.	CR	CR	DD
4	カワヒガイ	コイ	コイ	*Saucocheilichthys variegatus variegatus* (Temminck et Schlegel, 1846)	NT	CR	DD
5	サツキマス･アマゴ	サケ	サケ	*Oncorhynchus masou ishikawae* Jordan et McGregor, 1925	NT	DD	DD
6	クルメサヨリ	ダツ	サヨリ	*Hyporhamphus intermedius* (Cantor, 1842)	NT	DD	DD

絶滅のおそれのある地域個体群（LP）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	オイカワ（庄内川個体群）	コイ	コイ	*Opsariichthys platypus* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	LP

⑥　名古屋市版レッドリスト 2025（昆虫類）

目および科の範囲、名称、配列、種の学名と配列は「日本昆虫目録 Catalogue of the Insects of Japan」（日本昆虫学会）を基に、既刊の図鑑等から新しい知見を加え整理した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	コバネアオイトトンボ	トンボ	アオイトトンボ	*Lestes japonicus* Selys, 1883	EN	CR	EX
2	アオハダトンボ	トンボ	カワトンボ	*Calopteryx japonica* Selys, 1869	NT	国リスト	EX
3	グンバイトンボ	トンボ	モノサシトンボ	*Platycnemis sasakii* Asahina, 1949	NT	EN	EX
4	ヒヌマイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Mortonagrion hirosei* Asahina, 1972	EN	EN	EX
5	キイロヤマトンボ	トンボ	ヤマトンボ	*Macromia daimoji* Okumura, 1949	NT	NT	EX
6	オオキトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum uniforme* (Selys, 1883)	EN	CR	EX
7	マダラナニワトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum maculatum* Oguma, 191*5*	EN	CR	EX
8	ベッコウトンボ	トンボ	トンボ	*Libellula angelina* Selys, 1883	CR	CR	EX
9	タガメ	カメムシ	コオイムシ	*Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy, 1864)	VU	EN	EX
10	トゲナベブタムシ	カメムシ	ナベブタムシ	*Aphelocheirus nawae* Nawa, 1905	VU	EX	EX
11	ミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Gyrinus* (*Gyrinus*) *japonicus* Sharp, 1873	VU	CR	CR
12	コミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Gyrinus* (*Gyrinus*) *curtus* Motschulsky, 1866	EN	CR	CR
13	ルイスツブゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Laccophilus lewisius* Sharp, 1873	VU	国リスト	CR
14	シマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydaticus* (*Guignotites*) *bowringii* Clark, 1864	NT	CR	CR
15	クロゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Cybister* (*Melanectes*) *brevis* Aubé, 1838	NT	VU	CR
16	ゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Cybister* (*Scaphinectes*) *chinensis* Motschulsky, 1854	VU	CR	EX
17	コガタノゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Cybister* (*Cybister*) *tripunctatus lateralis* Fabricius, 1798	VU	EX	EX
18	マルガタゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Graphoderus adamsii* (Clark, 1864)	VU	EX	EX
19	スジゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydaticus bipunctatus* WEHNCKE, 1876	EX	EX	EX
20	マダラシマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydaticus* (*Guignotites*) *thermonectoides* Sharp, 1884	CR	EX	EX
21	カワラハンミョウ	コウチュウ	オサムシ	*Chaetodera laetescripta laetescripta* (Motschulsky, 1860)	EN	EX	EX
22	ヒトツメアオゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Callistoides deliciolus* (Bates, 1873)	NT	CR	－
23	カワラゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Omophron* (*Omophron*) *aequale aequale* Morawitz, 1863	－	VU	CR
24	フタモンマルクビゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Nebria* (*Eunebria*) *pulcherrima pulcherrima* Bates, 1873	EN	EX	CR
25	キベリマルクビゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Nebria* (*Paranebria*) *livida angulata* Bänninger, 1949	EN	EX	EX
26	エチゴトックリゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Oodes echigonus* Habu & Baba, 1960	NT	EX	EX
27	シワムネマルドロムシ	コウチュウ	マルドロムシ	*Georissus* (*Neogeorissus*) *kurosawai* Nakane, 1963	－	－	DD
28	ガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Hydrophilus* (*Hydrophilus*) *acuminatus* Motschulsky, 1854	NT	国リスト	CR
29	クロモンマグソコガネ	コウチュウ	コガネムシ	*Aphodius* (*Aphodaulacus*) *variabilis* Waterhouse, 1875	NT	EX	－
30	ヨツボシカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	*Stenygrinum quadrinotatum* Bates, 1873	EN	EN	CR
31	ギフチョウ	チョウ	アゲハチョウ	*Luehdorfia japonica* Leech, 1889	VU	VU	EX
32	シルビアシジミ	チョウ	シジミチョウ	*Zizina emelina emelina* (de l'Orza, 1869)	EN	EX	EX
33	オオウラギンヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Fabriciana nerippe* (C.Felder et R.Felder, 1862)	CR	EX	EX
34	ヒメヒカゲ	チョウ	タテハチョウ	*Coenonympha oedippus* (Fabricius, 1787)	EN	EN	EX

絶滅危惧 IA 類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	オオイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Paracercion sieboldii* (Selys, 1876)	－	EN	CR
2	アオヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Brachytron longistigma* (Selys, 1883)	NT	CR	CR
3	メガネサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Stylurus oculatus* (Asahina, 1949)	VU	EN	CR
4	キイロサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Asiagomphus pryeri* (Selys, 1883)	NT	VU	CR
5	ムカシヤンマ	トンボ	ムカシヤンマ	*Tanypteryx pryeri* (Selys, 1889)	－	－	CR
6	エゾトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Somatochlora viridiaenea* (Uhler, 1858)	－	CR	CR
7	ハネビロエゾトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Somatochlora clavata* Oguma, 1913	VU	EN	CR
8	クツワムシ	バッタ	クツワムシ	*Mecopoda niponensis* (de Haan, 1843)	－	－	EN
9	コバンムシ	カメムシ	コバンムシ	*Ilyocoris cimicoides exclamationis* (Scott, 1874)	EN	CR	CR

10	イトアメンボ	カメムシ	イトアメンボ	*Hydrometra albolineata* (Scott, 1874)	VU	VU	CR
11	クロホシコガシラミズムシ	コウチュウ	コガシラミズムシ	*Haliplus* (*Liaphlus*) *basinotatus latiusculus* Nakane, 1985	VU	CR	CR
12	オオミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Dineutus* (*Ciclous*) *orientalis* (Modeer, 1776)	NT	EN	VU
13	コオナガミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Orectochilus* (*Orectochilus*) *punctipennis* Sharp, 1884	VU	NT	VU
14	コウベツブゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Laccophilus kobensis* Sharp, 1873	NT	国リスト	NT
15	トダセスジゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Copelatus nakamurai* V. B. Guéorguiev, 1970	VU	NT	NT
16	キベリクロヒメゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Ilybius apicalis* Sharp, 1873	NT	国リスト	NT
17	オオヒョウタンゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Scarites* (*Scarites*) *sulcatus sulcatus* Olivier, 1795	NT	VU	CR
18	ホソハンミョウ	コウチュウ	オサムシ	*Cylindera* (*Cylindera*) *gracilis* Pallas, 1773	VU	CR	EN
19	ヤマトホソガムシ	コウチュウ	ホソガムシ	*Hydrochus japonicus* Sharp, 1873	NT	EN	DD
20	オオクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	*Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse, 1874	VU	CR	CR
21	ヤマトモンシデムシ	コウチュウ	ハネカクシ	*Nicrophorus japonicus* Harold, 1877	NT	CR	EN
22	マメハンミョウ	コウチュウ	ツチハンミョウ	*Epicauta* (*Epicauta*) *gorhami* (Marseul, 1873)	－	－	CR
23	ヤマトオサムシダマシ	コウチュウ	ゴミムシダマシ	*Blaps* (*Blaps*) *japonensis japonensis* Marseul, 1879	NT	国リスト	NT
24	オオシロカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	*Olenecamptus cretaceus cretaceus* Bates, 1873	－	－	CR
25	ミヤマチャバネセセリ	チョウ	セセリチョウ	*Pelopidas jansonis* (Butler, 1878)	－	EN	CR
26	ウラナミジャノメ	チョウ	タテハチョウ	*Ypthima multistriata* Butler, 1883	VU	VU	CR

絶滅危惧 IB 類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	オツネントンボ	トンボ	アオイトトンボ	*Sympecma paedisca* (Brauer, 1877)	－	－	－
2	モートンイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Mortonagrion selenion* (Ris, 1916)	NT	VU	NT
3	ミルンヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Aeschnophlebia milnei* (Selys, 1883)	－	－	－
4	オオルリボシヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Aeshna crenata* Hagen, 1856	－	－	－
5	ナゴヤサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Stylurus nagoyanus* (Asahina, 1951)	VU	NT	NT
6	ホンサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Shaogomphus postocularis* (Selys, 1869)	－	－	EN
7	キトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum croceolum* (Selys, 1883)	－	EN	EN
8	セグロイナゴ	バッタ	バッタ	*Shirakiacris shirakii* (Bolívar, 1914)	－	－	VU
9	ニホンアカジマウンカ	カメムシ	アカジマウンカ	*Ommatidiotus japonicus* Y.Hori, 1977	－	NT	EN
10	ハウチワウンカ	カメムシ	グンバイウンカ	*Trypetimorpha japonica* Ishihara, 1954	VU	国リスト	EN
11	エサキアメンボ	カメムシ	アメンボ	*Limnoporus esakii* (Miyamoto, 1958)	NT	NT	EN
12	クロマダラタマムシ	コウチュウ	タマムシ	*Nipponobuprestis* (*Nipponobuprestisia*) *querceti* (E. Saunders, 1873)	－	VU	EN
13	ゲンジボタル	コウチュウ	ホタル	*Luciola* (*Luciola*) *cruciata cruciata* Motschulsky, 1854	－	－	EN
14	ヘイケボタル	コウチュウ	ホタル	*Luciola* (*Luciola*) *lateralis* Motschulsky, 1860	－	DD	EN
15	マルヒラタガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Enochrus* (*Lumetus*) *subsignatus* (Harold, 1877)	NT	国リスト	NT
16	アカマダラハナムグリ	コウチュウ	コガネムシ	*Anthracophora rusticola* Burmeister, 1842	DD	NT	EN
17	ウラギンスジヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Argyronome laodice japonica* (Ménétriès, 1857)	VU	VU	EN
18	ウラギンヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Fabriciana adippe pallescens* (Butler, 1873)	－	－	EN
19	マエジロツトガ	チョウ	ツトガ	*Pseudocatharylla infixella* (Walker, 1863)	－	－	EN
20	オオチャバネヨトウ	チョウ	ヤガ	*Nonagria puengeleri* (Schawerda, 1923)	VU	NT	EN

絶滅危惧II類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ネアカヨシヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Brachytron anisopterum* (Selys, 1883)	NT	NT	VU
2	カトリヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Gynacantha japonica* Bartenev, 1910	－	－	－
3	タベサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Trigomphus citimus* (Needham, 1931)	NT	国リスト	VU
4	オグマサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Trigomphus ogumai* (Asahina, 1949)	NT	EN	EN
5	フタスジサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Trigomphus interruptus* (Selys, 1854)	NT	VU	EN
6	トラフトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Epitheca marginata* (Selys, 1883)	－	VU	NT
7	ノシメトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum infuscatum* (Selys, 1883)	－	NT	国・県リスト
8	ミヤマアカネ	トンボ	トンボ	*Sympetrum pedemontanum* (Müller *in* Allioni, 1766)	－	NT	VU
9	チッチゼミ	カメムシ	セミ	*Kosemia radiator* (Uhler, 1896)	－	－	VU
10	ヒメタイコウチ	カメムシ	タイコウチ	*Nepa hoffmanni* Esaki, 1925	－	NT	VU

11	オオアメンボ	カメムシ	アメンボ	*Aquarius elongatus* (Uhler, 1896)	－	NT	VU
12	ナミハンミョウ	コウチュウ	オサムシ	*Cicindela* (*Sophiodela*) *japonica* Thunberg, 1781	－	－	VU
13	ミツノエンマコガネ	コウチュウ	コガネムシ	*Parascatonomus* (*Necramator*) *toricornis* (Wiedemann, 1823)	－	－	NT
14	オオツノハネカクシ	コウチュウ	ハネカクシ	*Bledius* (*Bledius*) *salsus* Miyatake, 1963	DD	VU	－
15	ベーツヒラタカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	*Eurypoda* (*Neoprion*) *batesi* Gahan, 1894	－	－	VU
16	ミヤマセセリ	チョウ	セセリチョウ	*Erynnis montana montana* (Bremer, 1861)	－	－	VU
17	ウラクロシジミ	チョウ	シジミチョウ	*Iratsume orsedice orsedice* (Butler, 1882)	－	VU	VU
18	イチモンジチョウ	チョウ	タテハチョウ	*Limenitis camilla japonica* Ménétriès, 1857	－	－	VU
19	ゴマフツトガ	チョウ	ツトガ	*Chilo pulveratus* (Wileman & South, 1917)	NT	－	VU
20	エンスイミズメイガ	チョウ	ツトガ	*Eristena argentata* Yoshiyasu, 1988	－	NT	EN
21	アヤコバネナミシャク	チョウ	シャクガ	*Acasis bellaria* (Leech, 1891)	－	－	VU
22	ヌマベウスキヨトウ	チョウ	ヤガ	*Chilodes pacificus* Sugi, 1982	VU	－	VU
23	トビイロアカガネヨトウ	チョウ	ヤガ	*Euplexia albilineola* (Wileman & South, 1918)	－	－	VU
24	キスジウスキヨトウ	チョウ	ヤガ	*Capsula sparganii* (Esper, 1790)	VU	NT	VU
25	ガマヨトウ	チョウ	ヤガ	*Capsula aerata* (Butler, 1878)	VU	－	VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ニホンカワトンボ	トンボ	カワトンボ	*Mnais costalis* Selys, 1869	－	－	VU
2	ベニイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Ceriagrion nipponicum* Asahina, 1967	NT	VU	VU
3	セスジイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Paracercion hieroglyphicum* (Brauer, 1865)	－	－	NT
4	ムスジイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Paracercion melanotum* (Selys, 1876)	－	－	NT
5	サラサヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Sarasaeschna pryeri* (Martin, 1909)	－	－	NT
6	コシボソヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Boyeria maclachlani* (Selys, 1883)	－	－	NT
7	マルタンヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Anaciaeschna martini* (Selys, 1897)	－	－	NT
8	ヤマサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Asiagomphus melaenops* (Selys, 1854)	－	－	－
9	コヤマトンボ	トンボ	ヤマトンボ	*Macromia amphigena* Selys, 1871	－	－	－
10	タカネトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Somatochlora uchidai* Förster, 1909	－	－	－
11	ナツアカネ	トンボ	トンボ	*Sympetrum darwinianum* (Selys, 1883)	－	－	NT
12	マイコアカネ	トンボ	トンボ	*Sympetrum kunckeli* (Selys, 1884)	－	NT	NT
13	ハッチョウトンボ	トンボ	トンボ	*Nannophya pygmaea* Rambur, 1842	－	－	NT
14	ナナフシモドキ	ナナフシ	ナナフシモドキ	*Ramulus mikado* (Rehn, 1904)	－	－	NT
15	トゲナナフシ	ナナフシ	トビナナフシ	*Neohirasea japonica* (de Haan, 1842)	－	－	NT
16	ヒメカマキリ	カマキリ	ハナカマキリ	*Acromantis japonica* Westwood, 1889	－	－	NT
17	オオゴキブリ	ゴキブリ	オオゴキブリ	*Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki, 1906)	－	NT	NT
18	コロギス	バッタ	コロギス	*Prosopogryllacris japonica* (Matsumura et Shiraki, 1908)	－	－	NT
19	ハネナシコロギス	バッタ	コロギス	*Nippancistroger testaceus* (Matsumura et Shiraki, 1908)	－	－	NT
20	ヤマトフキバッタ	バッタ	バッタ	*Parapodisma setouchiensis* Inoue, 1979	－	－	NT
21	ハルゼミ	カメムシ	セミ	*Terpnosia vacua* (Olivier, 1790)	－	－	NT
22	タイコウチ	カメムシ	タイコウチ	*Laccotrephes japonensis* Scott, 1874	－	NT	NT
23	ミズカマキリ	カメムシ	タイコウチ	*Ranatra chinensis* Mayr, 1865	－	NT	NT
24	シロヘリツチカメムシ	カメムシ	ツチカメムシ	*Canthophorus niveimarginatus* Scott, 1874	NT	国リスト	NT
25	マダラコガシラミズムシ	コウチュウ	コガシラミズムシ	*Haliplus* (*Liaphlus*) *sharpi* Wehncke, 1880	VU	NT	NT
26	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	*Canthydrus politus* (Sharp, 1873)	VU	NT	CR
27	キボシチビコツブゲンゴロウ	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	*Neohydrocoptus bivittis* (Motschulsky, 1859)	EN	NT	NT
28	サメハダマルケシゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydrovatus stridulus* Biström, 1997	－	NT	NT
29	マルチビゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Leiodytes frontalis* (Sharp, 1884)	NT	NT	NT
30	イグチケブカゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Peronomerus auripilis* Bates, 1883	NT	－	NT
31	マイマイカブリ	コウチュウ	オサムシ	*Carabus* (*Damaster*) *blaptoides oxuroides* (Schaum, 1862)	－	－	－
32	オオチビマルハナノミ	コウチュウ	マルハナノミ	*Yoshitomia beattyi* (Pic, 1918)	－	－	－

33	アヤスジミゾドロムシ	コウチュウ	ヒメドロムシ	*Graphelmis shirahatai* (Nomura, 1958)	EN	－	－
34	ヒメボタル	コウチュウ	ホタル	*Luciola* (*Hotaria*) *parvula* (Kiesenwetter, 1874)	－	－	NT
35	ヤマトエンマムシ	コウチュウ	エンマムシ	*Hister japonicus* Marseul, 1854	－	－	NT
36	ヒラタクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	*Dorcus titanus pilifer* (Snellen *van* Vollenhoven, 1861)	－	－	NT
37	コカブト	コウチュウ	コガネムシ	*Eophileurus* (*Eophileurus*) *chinensis chinensis* (Faldermann, 1835)	－	－	NT
38	バッキンガムカギアシゾウムシ	コウチュウ	ゾウムシ	*Bagous buckinghami* O'Brien & Morimoto, 1994	－	NT	－
39	ツヤネクイハムシ	コウチュウ	ハムシ	*Donacia* (*Donaciomima*) *nitidior* (Nakane, 1963)	－	－	－
40	ホソバセセリ	チョウ	セセリチョウ	*Isoteinon lamprospilus* C.Felder et R.Felder, 1862	－	VU	NT
41	ジャコウアゲハ	チョウ	アゲハチョウ	*Atrophaneura alcinous alcinous* (Klug, 1836)	－	－	NT
42	ツマグロキチョウ	チョウ	シロチョウ	*Eurema laeta betheseba* (Janson, 1878)	EN	NT	NT
43	ウラゴマダラシジミ	チョウ	シジミチョウ	*Artopoetes pryeri pryeri* (Murray, 1873)	－	－	NT
44	オオウラギンスジヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Argyronome ruslana* (Motschulsky, 1866)	－	NT	NT
45	ヒオドシチョウ	チョウ	タテハチョウ	*Nymphalis xanthomelas japonica* (Stichel, 1902)	－	－	NT
46	ジャノメチョウ	チョウ	タテハチョウ	*Minois dryas bipunctata* (Motschulsky, 1861)	－	－	NT
47	ハイイロボクトウ	チョウ	ボクトウガ	*Phragmataecia castaneae* (Hübner, 1790)	NT	国リスト	NT
48	クワトゲエダシャク	チョウ	シャクガ	*Apochima excavata* (Dyar, 1905)	NT	－	NT
49	オナガミズアオ	チョウ	ヤママユガ	*Actias gnoma gnoma* (Butler, 1877)	NT	国リスト	NT
50	イボタガ	チョウ	イボタガ	*Brahmaea japonica* Butler, 1873	－	－	NT
51	ヤネホソバ	チョウ	ヒトリガ	*Eilema fuscodorsalis* (Matsumura, 1930)	NT	－	NT
52	キシタアツバ	チョウ	ヤガ	*Hypena claripennis* (Butler, 1878)	NT	国リスト	NT
53	フシキキシタバ	チョウ	ヤガ	*Catocala separans* Leech, 1889	－	－	NT
54	コシロシタバ	チョウ	ヤガ	*Catocala actaea* Felder & Rogenhofer, 1874	NT	－	NT
55	マダラウスズミケンモン	チョウ	ヤガ	*Acronicta subornata* (Leech, 1889)	－	DD	NT
56	ホソバオビキリガ	チョウ	ヤガ	*Dryobotodes angusta angusta* Sugi, 1980	－	－	DD
57	ウスミミモンキリガ	チョウ	ヤガ	*Eupsilia contracta* (Butler, 1878)	NT	国リスト	NT
58	ミスジキリガ	チョウ	ヤガ	*Jodia sericea* (Butler, 1878)	NT	－	NT
59	アトジロキリガ	チョウ	ヤガ	*Dioszeghyana mirabilis* (Sugi, 1955)	－	－	NT

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	タイワンクツワムシ	バッタ	クツワムシ	*Mecopoda elongata* (Linnaeus, 1758)	－	NT	－
2	ホソクビツユムシ	バッタ	ツユムシ	*Shirakisotima japonica* (Matsumura et Shiraki, 1908)	－	－	DD
3	ハネナガイナゴ	バッタ	バッタ	*Oxya japonica* (Thunberg, 1824)	－	－	NT
4	コオイムシ	カメムシ	コオイムシ	*Appasus japonicus* Vuillefroy, 1864	NT	国リスト	DD
5	クロエンマムシ	コウチュウ	エンマムシ	*Hister concolor* Lewis, 1884	－	DD	DD
6	ヒメシジミガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Laccobius* (*Microlaccobius*) *fragilis* Nakane, 1966	－	－	DD
7	コガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Hydrochara affinis* (Sharp, 1873)	DD	－	DD
8	ヤマトヒメダカカッコウムシ	コウチュウ	カッコウムシ	*Neohydnus hozumii* Nakane, 1981	－	－	DD
9	カギアシゾウムシ	コウチュウ	ゾウムシ	*Bagous bipunctatus* (Kôno, 1934)	－	DD	DD
10	ヤホシホソマダラ	チョウ	マダラガ	*Balataea octomaculata* (Bremer, 1861)	NT	－	DD
11	オオシモフリスズメ	チョウ	スズメガ	*Langia zenzeroides nawai* Rothschild & Jordan, 1903	－	－	DD
12	トウカイツマキリアツバ	チョウ	ヤガ	*Tamba roseopurpurea* Sugi, 1982	－	－	DD
13	カギモンハナオイアツバ	チョウ	ヤガ	*Cidariplura signata* (Butler, 1879)	NT	国リスト	DD

⑦　名古屋市版レッドリスト 2025（クモ類）

目および科の範囲、名称、配列、種の学名と配列は、「日本産クモ類目録 ver. 2025R1」（谷川明男, 2025：インターネット上にて公表）に準拠した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
	（該当種なし）						

絶滅危惧 IA 類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	カネコトタテグモ	クモ	カネコトタテグモ	*Antrodiaetus roretzi* (L. Koch, 1878)	NT	VU	CR
2	キノボリトタテグモ	クモ	トタテグモ	*Conothele fragaria* (Dönitz, 1887)	NT	VU	CR
3	キシノウエトタテグモ	クモ	トタテグモ	*Latouchia typica* (Kishida, 1913)	NT	VU	CR
4	ムツトゲイセキグモ	クモ	コガネグモ	*Ordgarius sexspinosus* (Thorell, 1894)	－	EN	CR
5	カコウコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Pardosa nojimai* Tanaka, 1998	－	VU	CR
6	テジロハリゲコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Pardosa yamanoi* Tanaka & Suwa, 1986	－	EN	CR

絶滅危惧 IB 類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ワスレナグモ	クモ	ジグモ	*Calommata signata* Karsch, 1879	NT	VU	CR
2	チビクロドヨウグモ	クモ	アシナガグモ	*Meta nigridorsalis* Tanikawa, 1994	－	－	EN
3	スジブトハシリグモ	クモ	キシダグモ	*Dolomedes saganus* Bösenberg et Strand, 1906	－	－	EN
4	ハヤテグモ	クモ	キシダグモ	*Perenethis fascigera* (Bösenberg & Strand, 1906)	－	－	EN

絶滅危惧II類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	アカイロトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne yunoharuensis* Strand, 1918	－	NT	VU
2	トゲグモ	クモ	コガネグモ	*Gasteracantha kuhli* C. L. Koch, 1837	－	VU	VU
3	ゲホウグモ	クモ	コガネグモ	*Poltys illepidus* C. L. Koch, 1843	－	NT	VU
4	クリチャササグモ	クモ	ササグモ	*Oxyopes licenti* Schenkel, 1953	－	－	VU
5	エビチャコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Arctosa ebicha* Yaginuma, 1960	－	EN	VU
6	ミナミコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Piratula meridionalis* (Tanaka, 1974)	－	NT	VU
7	オビボソカニグモ	クモ	カニグモ	*Xysticus trizonatus* Ono, 1988	－	VU	VU
8	オビジガバチグモ	クモ	ハチグモ	*Castianeira shaxianensis* Gong, 1983	－	NT	VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ギボシヒメグモ	クモ	ヒメグモ	*Chikunia albipes* (S.Saito, 1935)	－	－	NT
2	コガネグモ	クモ	コガネグモ	*Argiope amoena* L. Koch, 1878	－	NT	NT
3	ビジョオニグモ	クモ	コガネグモ	*Bijoaraneus komachi* Tanikawa, Yamasaki & Petcharad, 2021	－	－	NT
4	オオトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne akirai* Tanikawa, 2013	－	NT	NT
5	トリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne bufo* (Bösenberg & Strand, 1906)	－	NT	NT
6	シロオビトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne nagasakiensis* Strand, 1918	－	NT	NT
7	スズミグモ	クモ	コガネグモ	*Cyrtophora ikomosanensis* (Bösenberg & Strand, 1906)	－	－	NT
8	ハマキフクログモ	クモ	フクログモ	*Clubiona japonicola* Bösenberg & Strand, 1906	－	－	NT
9	ヒゲナガツヤグモ	クモ	ワシグモ	*Micaria dives* (Lucas, 1846)	－	－	NT

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ヒゴユウレイグモ	クモ	ユウレイグモ	*Pholcus higoensis* Irie & Ono, 2008	－	－	－
2	ムロズミソレグモ	クモ	スオウグモ	*Takeoa nishimurai* (Yaginuma, 1963)	－	DD	DD
3	カトウツケオグモ	クモ	カニグモ	*Phrynarachne katoi* Tikuni, 1955	－	EN	－
4	シロスジグモ	クモ	カニグモ	*Runcinia insecta* (L.Koch, 1875)	－	－	DD
5	ヤギヌマフクログモ	クモ	フクログモ	*Clubiona yaginumai* Hayashi, 1989	－	－	DD

⑧ 名古屋市版レッドリスト 2025（エビ・カニ類）

目および科の範囲、名称、配列、種の学名と配列は、「WoRMS Editorial Board (2024). World Register of Marine Species.」（インターネット上にて公表）等に準拠した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
	（該当種なし）						

絶滅危惧 IA 類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	サワガニ	十脚	サワガニ	*Geothelphusa dehaani* (White, 1847)	－	対象外	EN

絶滅危惧 IB 類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ハクセンシオマネキ	十脚	スナガニ	*Austruca lactea* (De Haan, 1835)	VU	対象外	EN

絶滅危惧II類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	アカテガニ	十脚	ベンケイガニ	*Chiromantes haematocheir* (De Haan, 1833)	－	対象外	VU
2	ウモレベンケイガニ	十脚	ベンケイガニ	*Clistocoeloma sinense* Shen, 1933	－	対象外	VU
3	ユビアカベンケイガニ	十脚	ベンケイガニ	*Parasesarma tripectinis* (Shen, 1940)	－	対象外	VU
4	チゴガニ	十脚	コメツキガニ	*Ilyoplax pusilla* (De Haan, 1835)	－	対象外	NT
5	コメツキガニ	十脚	コメツキガニ	*Scopimera globosa* (De Haan, 1835)	－	対象外	NT

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	ミゾレヌマエビ	十脚	ヌマエビ	*Caridina leucosticta* Stimpson, 1860	－	対象外	－
2	サメハダヘイケガニ	十脚	ヘイケガニ	*Paradorippe granulata* (De Haan, 1841)	－	対象外	NT
3	マメコブシガニ	十脚	コブシガニ	*Pyrhila pisum* (De Haan, 1841)	－	対象外	－
4	マキトラノオガニ	十脚	ケブカガニ	*Pilumnopeus makianus* (Rathbun, 1931)	－	対象外	－
5	クシテガニ	十脚	ベンケイガニ	*Parasesarma affine* (De Haan, 1837)	－	対象外	VU
6	モクズガニ	十脚	モクズガニ	*Eriocheir japonica* (De Haan, 1835)	－	対象外	NT

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
	（該当種なし）						

愛知県のレッドリストあいち 2025 では、エビ・カニ類は調査対象外となっている。

⑨　名古屋市版レッドリスト 2025（貝類）

目および科の範囲、名称、配列、種の学名と配列は「Biology and Evolution of the Mollusca（Winston Frank Ponder, David R. Lindberg, Juliet Mary Ponder）」を参考に、名称は WoRMS 等を参考に最新の知見を元に整理した。

絶滅（EX）

No.	区分	種名	目名（上科名）	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	汽水	ハイガイ	フネガイ	フネガイ	*Tegillarca granosa* (Linnaeus, 1758)	VU	EX	EX
2	淡水	オバエボシガイ	イシガイ	イシガイ	*Inversidens brandtii* (Kobelt, 1879)	VU	EX	EX
3	淡水	ササノハガイ（トンガリササノハガイ）	イシガイ	イシガイ	*Lanceolaria oxyrhyncha* (E. von Martens, 1861)	VU	CR	EX
4	淡水	マツカサガイ	イシガイ	イシガイ	*Pronodularia japanensis* (I. Lea, 1859)	NT	CR	EX
5	淡水	カタハガイ	イシガイ	イシガイ	*Obovalis omiensis* (Heimburg, 1884)	VU	CR	EX
6	汽水	アゲマキ	マルスダレガイ	ナタマメガイ	*Sinonovacula constricta* (Lamarck, 1818)	CR+EN	EX	EX
7	汽水	イチョウシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Serratina diaphana* (Deshayes, 1855)	CR+EN	EX	EX
8	淡水	マメタニシ	クビキレガイ（上科）	エゾマメタニシ	*Parafossarulus manchouricus japonicus* (Pilsbry, 1901)	CR	CR	EX
9	淡水	モノアラガイ	モノアラガイ（上科）	モノアラガイ	*Radix japonica* (Jay, 1857)	NT	DD	EX
10	淡水	カワネジガイ	モノアラガイ（上科）	ヒラマキガイ	*Camptoceras hirasei* Walker, 1919	CR	EX	EX

絶滅危惧 IA 類（CR）

No.	区分	種名	目名（上科名）	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	淡水	ヌマガイ	イシガイ	イシガイ	*Sinanodonta lauta* (Martens, 1877)	－	－	EN
2	淡水	ミナミタガイ	イシガイ	イシガイ	*Beringiana fukuharai* Sano, Hattori and T. Kondo, 2020	－	－	CR
3	淡水	イシガイ	イシガイ	イシガイ	*Nodularia douglasiae* (J. E. Gray, 1833)	－	CR	CR
4	汽水	イセシラガイ	ツキガイ	ツキガイ	*Pegophysema bialata* (Pilsbry, 1895)	CR+EN	CR	CR
5	汽水	マゴコロガイ	ウロコガイ（上科）	チリハギ	*Peregrinamor oshimai* Shôji, 1938	NT	CR	CR
6	汽水	アオサギガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Psammacoma gubernaculum* (Hanley, 1844)	－	CR	CR
7	汽水	ヤチヨノハナガイ	マルスダレガイ	バカガイ	*Raeta pellicula* (Reeve, 1854)	CR+EN	CR	CR
8	汽水	ウラカガミ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	*Dosinia corrugata* (Reeve, 1850)	CR+EN	CR	CR
9	汽水	ハナグモリ	マルスダレガイ	ハナグモリガイ	*Glauconome angulata* Reeve, 1844	VU	CR	CR
10	汽水	ウミタケ	オオノガイ	ニオガイ	*Barnea dilatata* (Souleyet, 1843)	VU	CR	CR
11	汽水	ヒメマスオガイ	オオノガイ	オオノガイ	*Cryptomya busoensis* Yokoyama, 1922	VU	VU	CR
12	汽水	クシケマスオガイ	オオノガイ	オオノガイ	*Cryptomya elliptica* (A. Adams, 1851)	NT	VU	CR
13	汽水	イボキサゴ	ニシキウズ	ニシキウズ	*Umbonium moniliferum* (Lamarck, 1822)	NT	EN	CR
14	汽水	イボウミニナ	オニノツノガイ（上科）	ウミニナ	*Batillaria zonalis* (Bruguiére, 1792)	VU	EN	CR
15	汽水	ヘナタリ	オニノツノガイ（上科）	キバウミニナ	*Pirenella nipponica* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016	NT	NT	CR
16	汽水	カワアイ	オニノツノガイ（上科）	キバウミニナ	*Pirenella pupiformis* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016	VU	CR	CR
17	汽水	ヨシダカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Assiminea yoshidayukioi* Kuroda, 1959	NT	VU	CR
18	汽水	サザナミツボ	クビキレガイ（上科）	ワカウラツボ	*Nozeba ziczac* (H. Fukuda & Ekawa, 1997)	NT	EN	CR
19	汽水	タクミニナ	タクミニナ（上科）	タクミニナ	*Mathilda sinensis* P. Fischer, 1867	CR	CR	CR
20	汽水	イソチドリ	トウガタガイ（上科）	トウガタガイ	*Amathina tricarinata* (Linnaeus, 1767)	CR+EN	CR	CR
21	汽水	ナラビオカミミガイ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Auriculastra duplicata* (L. Pfeiffer, 1854)	VU	CR	CR
22	汽水	オカミミガイ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Ellobium chinense* (L. Pfeiffer, 1854)	VU	EN	CR
23	汽水	クリイロコミミガイ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Laemodonta siamensis* (Morelet, 1875)	VU	CR	CR
24	汽水	キヌカツギハマシイノミ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Melampus* cf. *sincaporensis* L. Pfeiffer, 1855	VU	CR	CR

絶滅危惧 IB 類（EN）

No.	区分	種名	目名（上科名）	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	汽水	オキナガイ	スエモノガイ(上科)	オキナガイ	*Laternula anatina* (Linnaeus, 1758)	－	NT	EN
2	汽水	サビシラトリ	マルスダレガイ	ザルガイ	*Macoma contabulata* (Deshayes, 1855)	NT	EN	EN
3	汽水	ハマグリ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	*Meretrix lusoria* (Röding, 1798)	VU	NT	EN
4	淡水	ウエジマメシジミ	マルスダレガイ	シジミ	*Odhneripisidium uejii* (Mori, 1938)	－	－	EN
5	淡水	マルタニシ	タニシ(上科)	タニシ	*Cipangopaludina* cf. *laeta* (Martens, 1861)	VU	NT	CR
6	汽水	ウミニナ	オニノツノガイ(上科)	ウミニナ	*Batillaria multiformis* (Lischke, 1869)	NT	NT	CR
7	汽水	オリイレボラ	コモロガイ(上科)	コモロガイ	*Trigonaphera bocageana* (Crosse & Debeaux, 1863)	VU	EN	EN
8	陸	ナガオカモノアラガイ	オカモノアラガイ(上科)	オカモノアラガイ	*Oxyloma hirasei* (Pilsbry, 1901)	NT	NT	EN
9	陸	ナミギセル	キセルガイ(上科)	キセルガイ	*Stereophaedusa japonica* (Crosse, 1871)	－	－	EN
10	陸	ヒルゲンドルフマイマイ	マイマイ(上科)	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Aegista hilgendorfi* (Kobelt, 1879)	NT	NT	EN

絶滅危惧II類（VU）

No.	区分	種名	目名（上科名）	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	汽水	ツヤガラス	イガイ	イガイ	*Jolya rhomboidea* (Reeve, 1857)	－	VU	VU
2	淡水	ドブシジミ	ドブシジミ(上科)	ドブシジミ	*Sphaerium japonicum* (Westerlund, 1883)	－	－	VU
3	汽水	イヨスダレガイ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	*Paratapes undulatus* (Born, 1778)	－	NT	VU
4	汽水	ヒロクチカノコ	アマオブネガイ(上科)	アマオブネ	*Neripteron* sp.	NT	VU	VU
5	陸	ヤマタニシ	ヤマタニシ(上科)	ヤマタニシ	*Cyclophorus herklotsi* E. von Martens, 1861	－	－	NT
6	陸	ミジンヤマタニシ	ヤマタニシ(上科)	ヤマタニシ	*Nakadaella micron* (Pilsbry, 1900)	－	－	NT
7	淡水	オオタニシ	タニシ(上科)	タニシ	*Heterogen japonica* (Martens, 1861)	NT	国リスト	VU
8	汽水	フトヘナタリ	オニノツノガイ(上科)	キバウミニナ	*Cerithidea moerchii* (A. Adams, 1855)	NT	NT	VU
9	汽水	ワカウラツボ	クビキレガイ(上科)	ワカウラツボ	*Wakauraia sakaguchii* (Kuroda & Habe, 1954)	VU	VU	VU
10	汽水	クレハガイ	イトカケガイ(上科)	イトカケガイ	*Epitonium latifasciatum* (G. B. Sowerby II, 1874)	NT	NT	NT
11	海	セキモリ	イトカケガイ(上科)	イトカケガイ	*Epitonium robillardi* (G. B. Sowerby III, 1894)	NT	NT	NT
12	汽水	ムシロガイ	エゾバイ(上科)	オリイレヨウバイ	*Nassarius livescens* (R. A. Philippi, 1849)	NT	NT	VU
13	汽水	ヌカルミクチキレ	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	*"Sayella"* sp.	NT	VU	VU
14	汽水	カキウラクチキレモドキ	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	*Brachystomia bipyramidata* (Nomura, 1936)	－	NT	NT
15	淡水	ヒメヒラマキミズマイマイ	モノアラガイ(上科)	ヒラマキガイ	*Gyraulus* sp.	EN	DD	VU
16	淡水	ヒラマキガイモドキ	モノアラガイ(上科)	ヒラマキガイ	*Polypylis hemisphaerula* (W. H. Benson, 1842)	NT	NT	VU
17	陸	イボイボナメクジ	アシヒダナメクジ(上科)	ホソアシヒダナメクジ	*Granulilimax fuscicornis* Minato, 1989	NT	NT	－
18	陸	タワラガイ	ネジレガイ(上科)	タワラガイ	*Sinoennea iwakawa* (Pilsbry, 1900)	－	－	NT
19	陸	ウラウズタカキビ	カサマイマイ(上科)	シタラ	*Coneuplecta* sp.	－	NT	－
20	陸	ヒゼンキビ	カサマイマイ(上科)	シタラ	*Parakaliella hizenensis* (Pilsbry, 1902)	NT	NT	VU
21	陸	ウメムラシタラ	カサマイマイ(上科)	シタラ	*Sitalina japonica* Habe, 1964	NT	NT	NT
22	陸	ヒラベッコウ	ベッコウマイマイ(上科)	ベッコウマイマイ	*Bekkochlamys micrograpta* (Pilsbry, 1900)	DD	VU	NT
23	陸	カタマメマイマイ	マイマイ(上科)	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Lepidopisum conospira* (Pfeiffer,1851)	VU	VU	－
24	陸	ビロウドマイマイ属の一種	マイマイ(上科)	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Nipponochloritis* sp.	DD	NT	VU
25	陸	ニッポンマイマイ	マイマイ(上科)	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Satsuma japonica* (L. Pfeiffer, 1847)	－	－	NT
26	陸	コベソマイマイ	マイマイ(上科)	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Satsuma myomphala myomphala* (E. von Martens, 1865)	－	－	NT

準絶滅危惧（NT）

No.	区分	種名	目名（上科名）	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	汽水	ズベタイラギ	カキ	ハボウキガイ	*Atrina pectinate* (Linnaeus, 1767)	NT	NT	NT
2	汽水	ソトオリガイ	スエモノガイ（上科）	オキナガイ	*Laternula gracilis* (Reeve, 1860)	－	NT	NT
3	汽水	ツキガイモドキ	ツキガイ	ツキガイ	*Lucinoma annulata* (Reeve, 1850)	－	NT	NT
4	汽水	マテガイ	マテガイ（上科）	マテガイ	*Solen strictus* A. Gould, 1861	－	NT	NT
5	汽水	ヒメシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Macoma incongrua* (E. von Martens, 1865)	－	－	NT
6	汽水	ゴイサギ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Macoma tokyoensis* Makiyama, 1927	－	NT	NT
7	汽水	ユウシオガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Jitlada culter* (Hanley, 1844)	NT	NT	NT
8	汽水	サクラガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Nitidotellina hokkaidoensis* (Habe, 1961)	NT	NT	NT
9	汽水	イソシジミ	マルスダレガイ	シオサザナミガイ	*Nuttallia japonica* (Reeve, 1857)	－	－	NT
10	汽水	ウネナシトマヤガイ	マルスダレガイ	フナガタガイ	*Neotrapezium liratum* (Reeve, 1843)	NT	国リスト	NT
11	汽水	オオノガイ	オオノガイ	オオノガイ	*Mya* (*Arenomya*) *arenaria oonogai* Makiyama, 1935	NT	NT	NT
12	陸	ヒダリマキゴマガイ	ヤマタニシ（上科）	ゴマガイ	*Palaina pusilla* (E. von Martens, 1877)	－	－	NT
13	汽水	クリイロカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Angustassiminea castanea* (Westerlund, 1883)	NT	NT	NT
14	汽水	ツブカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Assiminea estuarina* Habe, 1946	NT	NT	NT
15	汽水	ヒナタムシヤドリカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Assiminea* aff. *parasitologica* Kuroda, 1958	NT	NT	NT
16	汽水	カワグチツボ	クビキレガイ（上科）	ワカウラツボ	*Fluviocingula elegantula* (A. Adams, 1861)	NT	NT	NT
17	汽水	エドガワミズゴマツボ（ウミゴマツボ）	クビキレガイ（上科）	ミズゴマツボ	*Stenothyra edogawaensis* (Yokoyama, 1927)	NT	NT	NT
18	淡水	ヒラマキミズマイマイ	モノアラガイ（上科）	ヒラマキガイ	*Gyraulus chinensis* (Dunker, 1848)	DD	NT	NT
19	陸	ヒメカサキビ	カサマイマイ（上科）	シタラ	*Trochochlamys subcrenulata* (Pilsbry, 1901)	NT	NT	NT
20	陸	オオケマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Aegista vulgivaga* (Schmacker & Boettger, 1890)	－	－	NT

情報不足（DD）

No.	区分	種名	目名（上科名）	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	淡水	ヤハズヌマガイ	イシガイ	イシガイ	*Buldowskia shadini* (Moskvicheva, 1973)	－	－	DD
2	淡水	タブネドブガイ属の未定種	イシガイ	イシガイ	*Buldowskia* sp.	－	－	－
3	淡水	マシジミ	マルスダレガイ	シジミ	*Corbicula leana* Prime, 1864	VU	DD	CR
4	淡水	カワニナ	オニノツノガイ（上科）	カワニナ	*Semisulcospira libertina* (A. Gould, 1859)	－	－	DD
5	淡水	チリメンカワニナ	オニノツノガイ（上科）	カワニナ	*Semisulcospira reiniana* (Brot, 1876)	－	－	DD
6	汽水	タケノコカワニナ	オニノツノガイ（上科）	トゲカワニナ（トウガタカワニナ）	*Stenomelania crenulata* (Deshayes, 1838)	VU	EX	－
7	汽水	ヒナツボ	シロネズミ（上科）	シロネズミガイ	*Berthais egregia* (A.Adams, 1863)	－	DD	DD

国リスト

No.	区分	種名	目名（上科名）	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2020
1	陸	オオウエキビ	カサマイマイ（上科）	シタラ	*Trochochlamys fraterna* (Pilsbry, 1900)	DD	国リスト	国リスト

４．名古屋市の野生生物の現状

哺乳類

①　名古屋市における哺乳類の概況

既存の市内における哺乳類の生息情報については、主に「レッドデータブックなごや 2004」（名古屋市，2004）、「レッドデータブックなごや 2010（2004 年版補遺）」（名古屋市，2010）、「レッドデータブックなごや 2015」（名古屋市，2015）、「名古屋市版レッドリスト 2020」（名古屋市，2020）、「新修名古屋市史資料編自然目録」（名古屋市，2008）を参考とした。また、なごや生物多様性保全活動協議会などで実施した哺乳類調査の結果を追加した。その他、なごや生物多様性センターに寄せられた情報や新聞記事を参考資料とした。これらについては、確認場所や日時、写真、標本が残っているなど、信頼に足ると判断された情報を使用した。

現地調査として、陸生の哺乳類については、フィールドサインの確認、センサーカメラによる自動撮影、各種トラップによる捕獲、環境 DNA による調査を行った。また、コウモリ類については、ハープトラップによる捕獲および冬期のねぐら内の踏査、エコーロケーションコールの録音とその解析、環境 DNA による調査を実施した。

以下、名古屋市に生息する哺乳類相の特徴を地域ごとに述べる。

東部地域（山地および丘陵地）

東部地域には樹林地が広く分布しており、その多くは現在、公園緑地や風致地区として残されている。東部地域の最北東部にある東谷山は市内最高峰（198.3m）の山地で、ニホンリスやムササビ、ニホンテン、ニホンカモシカといった森林性の強い種の主要な生息場所となっている。周辺山域との連続性が保たれているため、近隣からの個体の流入があると推測され、ニホンザルの「離れザル」やニホンカモシカの他、市内からは近年絶滅したと考えられていたイノシシやニホンジカが再確認されている。イノシシは 2010 年頃より市内で再確認され、分布を広げつつある。また、ニホンジカは 2018 年頃より東谷山地域で再確認されるようになり、今後、増加していくことが予想され、同地域に生息するニホンカモシカとの競合が懸念される。その他、ニホンイタチについては、東谷山山麓の農地で捕獲された。ニホンノウサギについては最近の記録は東谷山のみである。市内での記録がほとんどないニホンテンも東谷山地域で確認されている。

東谷山山麓のため池周辺では、エコーロケーションコールの音声録音により、ニホンキクガシラコウモリ、オヒキコウモリが確認された。同地域では、ヒナコウモリまたはヤマコウモリと推測される最低周波数が 20 kHz 前後の音声や FM 型コールを発するモモジロコウモリと推測される音声も確認されている（ヤマコウモリとモモジロコウモリは生体や標本といった実物が確認できなかったため、今回のレッドリストには掲載しなかった）。また、このため池に隣接するゴルフ場駐車場では、オヒキコウモリの音声が確認されている。木曽川を水源とする愛知用水の暗渠入口では、ニホンキクガシラコウモリの音声や FM 型コールを発するモモジロコウモリと推測される音声も確認されて

いる。

このように、東谷山地域は現在も周辺山域との連続性を保っており、市内の他の地域ではほとんど見られない種の生息地となっていることから、市内における哺乳類のホットスポットでありコアエリアとして非常に重要な位置を占めていると言えるだろう。

守山区中志段味の北部に位置する才井戸流は東谷山と並び特筆すべき地域である。斜面に残された壕はニホンキクガシラコウモリのねぐらおよび越冬場所となっている。環境 DNA による調査によってニホンイタチも確認された。競合する外来種のシベリアイタチが市内全域に分布を広げた現在、ニホンイタチが市内で生き残っている場所は東谷山地域や才井戸流が隣接する庄内川上流域である可能性が高い。近年の市内での確認事例がなかったニホンジネズミも新たに才井戸流で確認されている。最近、才井戸流に隣接して大型商業施設が開業し、生息地の孤立や乾燥化、光害といった影響が懸念される。

東部地域には、東谷山以外にも小幡緑地、明徳公園、平和公園、東山公園、牧野ヶ池緑地、猪高緑地、相生山緑地、大高緑地といった規模の大きい緑地が多数点在する。かつては繋がりが保たれていたこれらの緑地も、現在では周辺を市街地が囲み、孤立化が著しい。そのため、東谷山地域と比較して、森林性の強い種や生息に広い面積を必要とする大型種の存続は難しいと考えられる。ただし、小型で移動能力が低いモグラ類、ネズミ類や市街地にも進出したタヌキにとっては、これらの孤立した緑地が現在の主要な生息場所となっている。また最近では、アカギツネが広範囲で確認されるようになった。さらに、ごくまれではあるが、ニホンザルやイノシシの目撃例、捕獲例も知られている。これらは単独行動をする他地域からの分散個体であると考えられ、現在、孤立した緑地での繁殖、定着はほとんど進んでいないと推測される。しかし、今後の展開によっては、これまで確認されていない場所にも定着する可能性があり、注視が必要である。その他、2013 年には、豊明市との市境付近の農地で、市内では 31 年ぶりとなるアナグマの生息が確認されている。この農地は愛知用水沿いにある風致地区で、比較的里山の景観が残されている地域ではあるが、すでに周辺まで宅地が迫っており、今後の存続が危ぶまれる。

エコーロケーションコールの音声録音では、緑区鳴海町付近の愛知用水において、FM 型コールを発するモモジロコウモリと推測される音声が多数確認されている。

外来のアライグマやハクビシン、シベリアイタチは、すでに東谷山一帯や市東部の孤立した緑地にも生息している。今後、在来種への影響や他地域への広がりも含めて注視が必要である。これらの外来哺乳類は、緑地内に生き残る様々な在来生物に影響を与えていると推測される。特にアライグマについては、両生類やニホンイシガメといった水辺の生物に対する食害が懸念される。また、これらの外来哺乳類は周辺の市街地にも進出し、家屋への侵入や糞尿による被害等を引き起こしている。緑地内に定着しているイエネコについてもネズミ類やモグラ類、鳥類に対しての食害が懸念される。その他、東部地域のため池や河川では外来種のヌートリアが繁殖、定着している。

中央部地域（洪積台地）

都市域の中央部地域で規模の大きい緑地が残っているのは、熱田神宮および名古屋城である。この内、熱田神宮にはタヌキと外来種のハクビシンが生息する。名古屋城とその周辺にはコウベモグラとタヌキ、外来種のヌートリアとハクビシンが生息する。特に名古屋城の外堀は、日常的な人の侵入がほとんどないため、タヌキやコウベモグラの好適な生息場所となっている。最近では徐々に

市内での分布を広げているアカギツネやアナグマの生息場所にもなっている。

名古屋城の水堀にはヌートリアが生息し、岸辺にトンネル状の巣を作っている。この水堀では、希少な水生植物のオニバスが 20 年ぶりに確認されたが、オニバスが生育している場所のすぐ近くにヌートリアが営巣しているため、オニバスへの食害が懸念される。ヌートリアについては市の中心部を流れる堀川でも生息が確認されている。

その他、名古屋城とその周辺ではオヒキコウモリの活動が確認された。名古屋城の石垣をねぐらとして利用している可能性もあるが、現在までねぐらは確認されていない。オヒキコウモリは長距離飛行も可能であることから、採餌のために市外から飛翔してくる可能性も残されている。この地域では、その他、音声録音によってヒナコウモリまたはヤマコウモリと推測される最低周波数が 20 kHz 前後の音声も確認されている。

外来種については都市部を含む中央部地域においても、ヌートリアの他にアライグマ、ハクビシン、シベリアイタチが確認されている。これら 3 種の外来種は、周辺に緑地がほとんど見られない市街地にも進出しており、家屋や軒下、排水管内といった人工物をねぐらとし、放置ゴミやペットの餌など人為的なものも含めて様々な食物を採食しているものと推測される。東部地域と同様、家屋への侵入や糞尿による被害が見られる。

西部地域（沖積平野）

西部地域は樹林地が少ないため、森林に強く依存した種を欠くが、その代わりに農地や河川敷の緑地が広がり、その一帯が哺乳類の生息場所となっている。庄内川下流域の河川敷に広がる土壌堆積地にはコウベモグラが生息し、高茎草地にはカヤネズミやアカネズミが生息する。河川敷に残されたこのような自然環境は、近年、河川の改修工事等によって、消失、分断され、縮小・孤立化する傾向にあるが、それでも、タヌキなどの中型哺乳類は頻繁に利用しており、最近ではアカギツネの進出も確認されるようになった。アカギツネは庄内川沿いを回廊として上流域から移動してきた可能性がある。

その他、西部地域でも、外来種のヌートリア、ハクビシン、シベリアイタチ、アライグマが確認されている。特に水田の多い西部地域では、ヌートリアによる食害がみられる。また、アムールハリネズミ、カイウサギ（アナウサギの家畜品種）が西部地域で見つかっている。アムールハリネズミについては 1 個体が拾得されたのみで繁殖は確認されていない。カイウサギについては庄内川の河川敷で繁殖も確認されているが、その後、定着はしていないようである。

名古屋港（沿岸海域）

名古屋港では海生哺乳類であるスナメリが確認されている。名古屋港は大型の船舶が行き来する日本の主要な貿易港の一つであり、都市河川が流入する地域である。沿岸性が強い本種への人間活動の影響が懸念される。

②　名古屋市における絶滅危惧種の概況

名古屋市版レッドリスト 2025 には、6 目 13 科 20 種を掲載した。掲載種の内訳は、絶滅（EX）1 種、絶滅危惧 IA 類（CR）12 種、絶滅危惧 IB 類（EN）4 種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）2 種、準絶滅危惧（NT）1 種であった。

以下、名古屋市版レッドリスト 2020 と比較して変更があった種について述べる。

レッドリスト 2020 で絶滅危惧 IB（EN）としたカモシカは、東谷山とその周辺でのみ確認されているが、市内での生息適地が狭いことやニホンジカ、イノシシの増加による影響が懸念されるため、絶滅危惧 IA 類（CR）と評価した。

レッドリスト 2020 ではじめて掲載したヒナコウモリは、都市域である中区栄のビル街で確認されて以降、千種区東山動植物園敷地内で 1 個体、中区千代田で 1 個体、中川区吉良町で 1 個体が確認されている。レッドリスト 2020 では情報不足（DD）としていたが、今回の改定では、生体が市内各地で見つかっていること、音声調査でも市内の広範囲で活動していることが示唆されることから、絶滅危惧 IB 類（EN）と評価した。

（野呂達哉）

③　レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各哺乳類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（哺乳類）に関する凡例 】

分類群名等

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目、科、種の配列は原則として「世界哺乳類標準和名リスト 2021 年度版」（日本哺乳類学会分類群名・標本検討委員会, 2021）に準拠した。

和名・学名

対象種の和名および学名を各頁上の枠内に記述した。和名および学名は、原則として「世界哺乳類標準和名リスト 2021 年度版」（日本哺乳類学会分類群名・標本検討委員会, 2021）に準拠した。

評価区分

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右上の枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち 2025」（愛知県, 2025）の愛知県での評価区分、および「環境省レッドリスト 2020」（環境省, 2020）の全国での評価区分も併記した。

評価理由

対象種が名古屋市版レッドリスト掲載種として評価された理由について記述した。

形態

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した。

分布の概要

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査および文献調査によって確認された地域について、区ごとに着色して市内分布図として掲載した。ただし、絶滅と判断された区域は ⋰⋰⋰⋰ で示した。

生息地の環境／生態的特性

対象種の生息環境および生態的特性について記述した。

現在の生息状況／減少の要因

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

絶滅種については【過去の生息状況／絶滅の要因】として、対象種の名古屋市における過去の生息状況、絶滅の主な要因について文献に基づき記述した。

保全上の留意点

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

特記事項

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

引用文献

記述中に引用した文献を著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

関連文献

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

哺乳類　＜食肉目（ネコ目）イヌ科＞

オオカミ　*Canis lupus* Linnaeus, 1758

評価理由

北海道産は 1800 年代末の毛皮取引記録以降、本州以南産は 1905 年に奈良県で捕獲されて以降、ともに生息記録がない。市内では少なくとも明治以降に生息記録はない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅

形態

標本から測定された頭胴長は、本州産で 95～115cm、北海道産で 120～130cm であり、体重は不明である。ほぼ大型のイヌの大きさに近い。オオカミ生息当時のイヌよりも大型で、頭骨の額部分のへこみが少なく、裂肉歯が大きいことからイヌとは区別される。

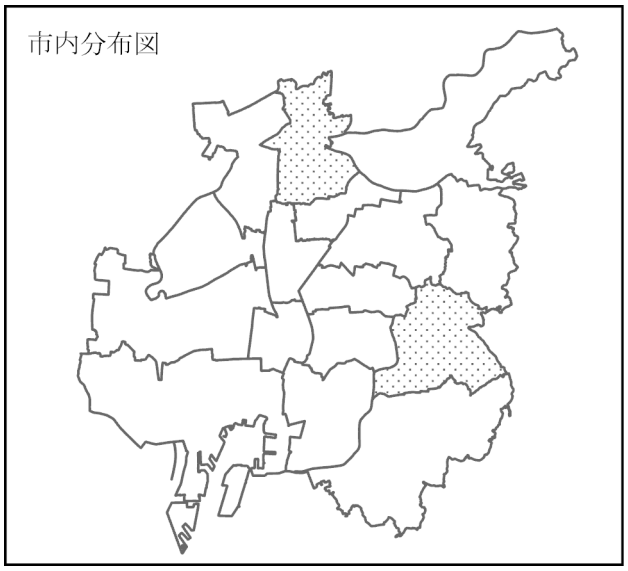
分布の概要

市内：朝日重章（1718 年没）の「鸚鵡籠中記」（名古屋市教育委員会（編），1965～1969）には、1693 年頃に現在の天白区平針付近、1709 年頃に現在の北区味鋺、1717 年頃に市内での生息を示唆する記述が残されているが、明治以降の生息記録はない。

県内：遺骨化石が縄文時代の伊川津貝塚（豊川市小坂井町）などから出土している（西本，1988）。近世でも 1695 年頃の知多半島（ヤマノイヌ）、1709 年頃の江南市（鉄砲文書）のほか、犬山市、旧春日井郡、額田郡などで文献史料が残されている（「鸚鵡籠中記」（名古屋市教育委員会編，1965～1969）ほか）。

国内：北海道産は 1800 年代末以降、本州以南産は 1905 年以降、生息記録がない（平岩，1981）。

世界：ユーラシア大陸や北米大陸など、おもに北半球に生息する。



生息地の環境／生態的特性

家族単位で群れを作り、数十 km^2 の行動圏を持つ。

過去の生息状況／絶滅の要因

北海道産は毛皮や肉を得る目的や害獣として捕獲され、イヌとの共通感染症の流行や豪雪によりエゾシカなどが減少し、食物が不足したことから絶滅したと考えられている。本州以南でも同様に狩猟や害獣駆除、さらに感染症などにより絶滅したと考えられている（平岩，1981；千葉，1995）。

保全上の留意点

絶滅種であり、生息を維持できる広範な生息地は保証されていない。

引用文献

千葉徳爾，1995．オオカミはなぜ消えたか –日本人と獣の話–，279pp．新人物往来社，東京．
平岩米吉，1981．狼 –その生態と歴史–，308pp．池田書店，東京．
名古屋市教育委員会（編），1965～1969．名古屋叢書続編 9～12 巻．名古屋市教育委員会．
西本豊弘，1988．動物遺体．伊川津遺跡–渥美町埋蔵文化財調査報告書 4–，pp.269-272．　渥美町教育委員会．

関連文献

Endo, H.，2009．*Canis lupus* Linnaeus, 1758. In：　S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.)，The Wild Mammals of Japan，pp.218-219．SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
子安和弘・織田銑一，2009．オオカミ．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，pp.65．愛知県環境部自然環境課．
名和　明，2008．哺乳類．新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），pp.315-322．名古屋市．
名和　明・野呂達哉，2017．江戸時代尾張国における哺乳類の文献記録．なごやの生物多様性，4: 71-81.

（名和　明、野呂達哉）

哺乳類　＜齧歯目（ネズミ目）リス科＞

ニホンリス　*Sciurus lis* Temminck, 1844

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	地域個体群

評価理由

市内では市街化にともない森林が減少し、生息地が孤立している。さらに食物となる堅果などを供給するナラ類やマツ類の枯死が続き、生息状況が悪化している。

形態

本種の毛色は、背面が褐色で腹面が白色。全面が灰から赤褐色のクリハラリスや、背面に黒色の縞模様のあるシマリスと区別できる。体重は 250～310g、頭胴長は 160～220mm、尾長は 130～170mm。



守山区東谷山、2010 年 8 月 18 日、名和　明　撮影

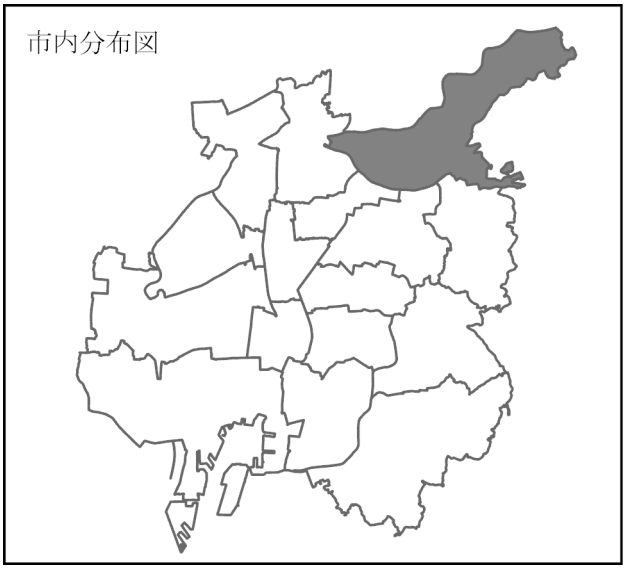
分布の概要

市内：守山区の東谷山や森林公園、小幡緑地、八竜緑地など限られた地域に生息している。

県内：尾張東部や三河地域の山間地域に分布する。

国内：本州・四国に分布しているが、中国地方以西の本州では生息地が限定的になっている。狩猟など生息記録のあった九州では、過去 100 年間にわたり生息が確認されていない。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

低地から亜高山帯までの広葉樹林、針広混交林やマツ林などに生息する。樹上に球形の巣を作る。主に果実、堅果、花、キノコ類などを食べるが、昆虫なども採食する。春から夏にかけて年に 1～2 回の繁殖を行う。1 回の産仔数は 2～6 頭である。

現在の生息状況／減少の要因

森林が残る守山区のわずかな地域で生息しているが、その範囲は狭く、道路網などにより分断されつつある。ナラ枯れやマツ枯れに起因する食物量の減少も生息状況を悪化させる要因となっている。

保全上の留意点

現在の生息地の保全はもちろんのこと、生息地の連続性を維持する必要がある。道路網の整備にはその分断を回避するか、代償となる施設（アニマルパスウェイ）が必要である。現在、著しく減少しているナラ類やマツ類の更新が可能な森づくりも必要である。

特記事項

かつて緑区などにも生息の情報があったが、現在は確実な生息記録がない。ペット等が由来のクリハラリスなど近縁の外来種の放逐がないように注意が必要である。

関連文献

環境省（編），2014．レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 1 哺乳類，132pp．ぎょうせい，東京．
名和　明，2008．哺乳類．新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），pp.315-322．名古屋市．
Tamura, N.，2009．*Sciurus lis Temminck*, 1844．In： S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.)，The Wild Mammals of Japan，pp.186-187．SHOUKADOH Book Sellers，Kyoto．
田村典子，2011．リスの生態学，211pp．東京大学出版会，東京．

（名和　明）

哺乳類　＜齧歯目（ネズミ目）リス科＞

ムササビ　*Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827)

評価理由

市内では市街化にともない森林面積が縮小し、生息地が孤立している。巣穴を作るための大径木の減少や食物となる堅果などを供給するナラ類やマツ類の枯死が続き、生息状況が悪化している。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	－

形態

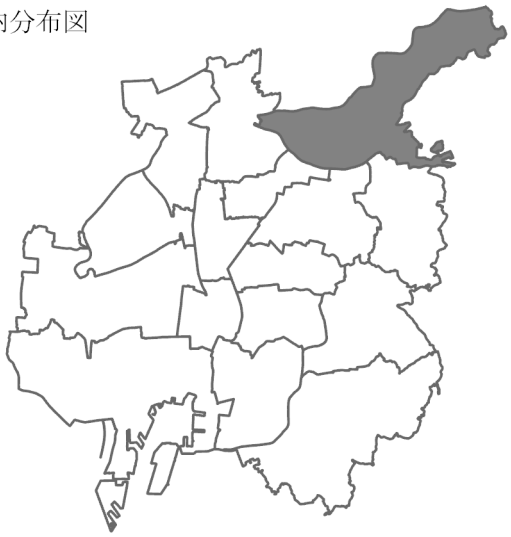
毛色は背面が褐色で、腹面が白色。顔面の目と耳の間から頬にかけて白色のラインがある。前後肢間に、滑空ができる飛膜を持つ。頭胴長は 27～49cm、尾長は 28～41cm、体重は 495～1250g。国内の齧歯類としては最大級である。



守山区東谷山、2003 年 12 月 30 日、名和　明　撮影

分布の概要

市内：守山区（東谷山）。
県内：尾張東部や三河地域の山間地域に分布。
国内：本州、四国、九州。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

常緑樹林や針広混交林を主な生息地とする。植物食性で主に葉、果実や種子などを採食する。大径木の樹洞などを利用し巣穴とする。夜行性で夕刻以降に巣を出て採食する。生活のほとんどを樹上で行う。年 2 回発情し、1 回の産仔数はふつう 1～2 頭である。

現在の生息状況／減少の要因

大径木のわずかに残る東谷山の森林に生息しているが、その範囲は狭く道路網などにより分断されつつある。ナラ枯れやマツ枯れに起因する食物量の減少も生息状況を悪化させる要因である。県内ではスギなどの大径木が残る社寺林で見られる事が多いが、市内では連続した森林に連なる社寺林がなくなっている。2019 年 10 月、東谷山にある尾張戸神社の参道で死体が拾得された。

保全上の留意点

現在の生息地の保全はもちろんのこと、生息地の連続性を維持する必要がある。特に生息地での伐採は、たとえば本種の巣穴がない樹木でも控える必要がある。

特記事項

過去には優良な毛皮のため狩猟獣となっていたが、現在は非狩猟獣である。

熱田区玉の井町の玉ノ井遺跡（縄文～弥生）からは、本種の歯が出土している（新美，2003)。

引用文献

新美倫子，2003．玉ノ井遺跡第 3 次調査出土の動物遺体．埋蔵文化財調査報告 44，pp.157-158．名古屋市教育委員会．

関連文献

環境省（編），2014．レッドデータブック 2014　–1　哺乳類–，132pp．ぎょうせい，東京．
子安和弘・織田銑一，2009．ムササビ．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，p.81．愛知県環境部自然環境課．
Oshida, M.，2009．*Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827). In：　S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.)，The Wild Mammals of Japan，pp.192-193．SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.

（名和　明、曽根啓子）

哺乳類　＜齧歯目（ネズミ目）キヌゲネズミ科＞

ハタネズミ　*Alexandromys montebelli* (Milne-Edwards, 1872)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

評価理由

市街化によって農地や河川敷周辺に残された生息地が消失、減少した。これまでに市内で確認された場所は局所的で、小地域に偏在するため、小規模の開発でも生息場所が消失するおそれがある。最近 20 年間の市内での記録は確認できなかった。

形態

背面は茶褐色、腹面は灰白色。鼻先は丸くずんぐりとした体形で尾は短い。頭胴長 95～136mm、尾長 29～50mm、後足長 16.5～20.4mm、体重 22～62g、乳頭式は 2+0+2=8。



豊田市榑俣町、2011 年 10 月 7 日、野呂達哉　撮影

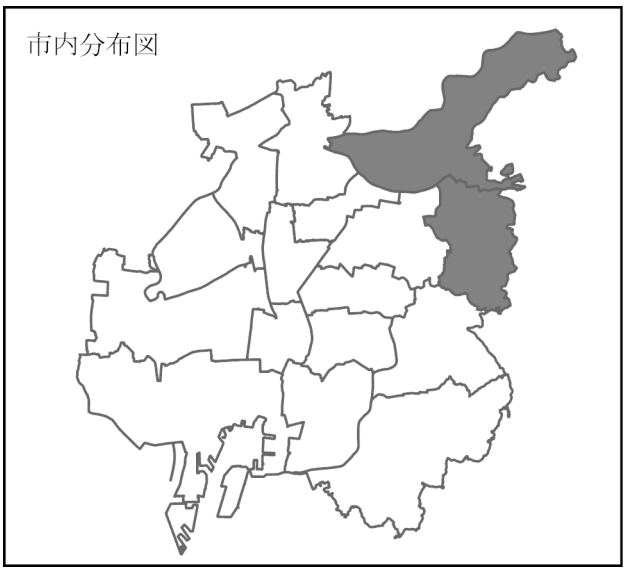
分布の概要

市内：守山区庄内川河川敷（吉根、川、幸心）と矢田川河川敷（大森）、名東区（猪高町猪子石）。

県内：豊根村、豊田市、設楽町、田原市、みよし市、幸田町、西尾市、犬山市、名古屋市、知多市、江南市、北名古屋市、愛西市、春日井市、豊川市、稲沢市、東浦町、安城市。

国内：本州、九州、佐渡島、能登島。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

地下に入り組んだトンネルシステムを作り生活している。農地や河川敷などの草地的環境を主な生息場所としている。土壌層の豊かな草地で優占し、森林化とともに生息数が減少する（宮尾ほか，1974）。草食性が強く、野生の草本だけではなく、農作物も採食する。

現在の生息状況／減少の要因

東日本では決して稀な種ではないが、中部以西では減少傾向にある。河川敷や農地周辺に残された生息適地が減少したため、分布は局所的である。

保全上の留意点

河川敷や農地周辺に残された草地のように攪乱されやすい環境に生息するため、そのような環境を残していく配慮が必要である。

引用文献

宮尾嶽雄・両角徹郎・両角源美，1974．霧ヶ峰・白樺湖高原の小哺乳類相．哺乳動物学雑誌，6(1): 33-38.

関連文献

愛知学院大学歯学部第二解剖学教室，1985．小哺乳類の採集記録 第 1 集（1978～1984 年），67p．愛知学院大学歯学部第二解剖学教室.

金子之史，1975．日本の哺乳類（12） げっ歯目　ハタネズミ属．哺乳類科学，30: 3-26.

子安和弘・織田銑一，2009．ハタネズミ．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，p.35．愛知県環境部自然環境課.

宮尾嶽雄・花村　肇・高田靖司・酒井英一，1984．7. ハタネズミ．愛知の動物（佐藤正孝・安藤尚編），pp.296-297．愛知県郷土資料刊行会，名古屋.

（野呂達哉）

哺乳類　＜兎形目（ウサギ目）ウサギ科＞

ニホンノウサギ　*Lepus brachyurus* Temminck, 1844

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	－

評価理由

市内でも 1940 年代までは東部丘陵地などで普通に生息していたが、近年は個体数が急激に減少している。生息分布もきわめて限られている。2000 年代に入ってからは守山区（東谷山）で確認されているにすぎない。

形態

積雪地域では、毛色は無積雪期が茶色、積雪期は白色に変化するが、市内産は一年を通して茶色のようである。頭胴長は 45～54cm、尾長は 2～5cm、体重は 2.1～2.6kg。市内には人為的に放逐されたカイウサギ（アナウサギの家畜品種）がみられることがあるが、大きさや毛色などが異なる。



守山区東谷山、2007 年 8 月、名和　明　撮影

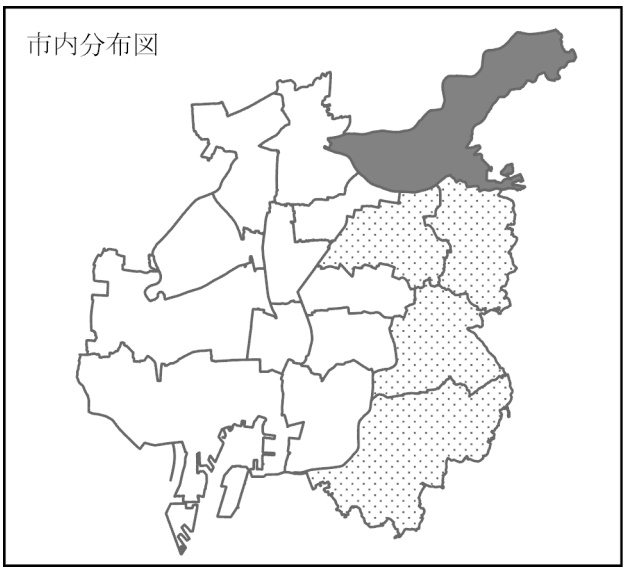
分布の概要

市内：最近の確実な記録は守山区（東谷山）のみである。かつては、名東区、千種区、天白区、緑区でも確認されているが、最近の生息情報はまったくない。

県内：三河地区や市に接する春日井市や瀬戸市など尾張東部。

国内：本州、四国、九州およびその周辺の島嶼。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

低地から亜高山帯、森林から草原まで様々な環境に生息する。植物食で春から夏にかけて出産し、1 回で 1～4 頭の子を出産する。

現在の生息状況／減少の要因

宅地化や道路建設などが要因で生息地が分断され、個体数が減少した可能性がある。東部丘陵に残存している可能性もあるが、その生息地は孤立・隔離されていると推測される。

保全上の留意点

少なくとも現在生息する環境を保全し、分布を分断しないようにする必要がある。

特記事項

1940～1970 年代には千種区名古屋大学周辺でウサギ狩りが行われていた。1980 年代には名東区（明徳池、塚ノ杁池）、守山区（中志段味、吉根、竜泉寺）、緑区（滝ノ水）、天白区（島田緑地）での生息が確認されている（高田，2002）。

引用文献

高田靖司，2002．守山と春日井の哺乳類．私たちの博物館 - 志段味の自然と歴史を訪ねて - ，62：1-5.

関連文献

石井信夫，2008．ニホンノウサギ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），p.151．東海大学出版会，神奈川．
名和　明，2008．哺乳類．新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），pp.315-322．名古屋市．
Yamada, F.，2009．*Lepus brachyurus* Temminck. In：　S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.)，The Wild Mammals of Japan，pp.208-209．SHOUKADOH Book Sellers，Kyoto.

（名和　明、野呂達哉）

哺乳類　＜トガリネズミ形目トガリネズミ科＞

ニホンジネズミ　*Crocidura dsinezumi* (Temminck. 1842)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	地域個体群
全国 2020	－

評価理由

市内での確認例は極めて少なく、確認場所も局所的で、攪乱されやすい環境であるため、小規模の開発でも個体群消失のおそれがある。

形態

体毛の色は灰色。尾には全面を覆う短毛と基半部にまばらな長毛がある。頭胴長 61～84mm、尾長 39～60mm、体重 5～12.5g。

分布の概要

市内：守山区（吉根、川、中志段味）、名東区（牧野ヶ池緑地）、緑区（大高町中之瀬）。

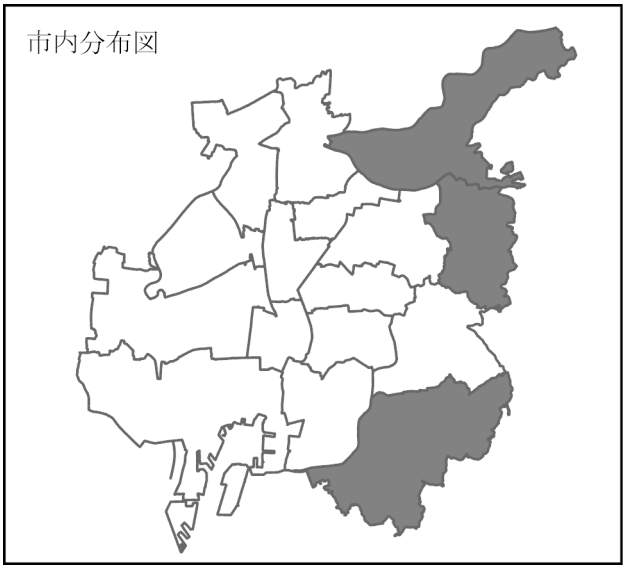
県内：豊根村、設楽町、豊田市、新城市、豊川市、一色町佐久島、みよし市、犬山市、春日井市、瀬戸市、日進市、豊明市、名古屋市、知多市、安城市。

国内：北海道（移入分布の可能性がある）、本州、四国、九州、隠岐諸島、佐渡島、伊豆諸島（新島）、種子島、屋久島、福岡県沖の島、トカラ列島（中之島）など。

世界：韓国済州島（移入分布の可能性がある）。



守山区、2018 年 3 月 10 日、深田　仁　撮影



生息地の環境／生態的特性

地表面や落葉層で活動し、下層植生が密に生える藪など、餌となるクモ類やジムカデ類が豊富で湿潤な場所を好む。ネコが捕えるが食べることは少ない（宮尾ほか，1984）。

現在の生息状況／減少の要因

過去に確認された場所の一部は開発によって消失した（緑区大高町中之瀬）。2013 年には緑区との境に近い豊明市沓掛町切山台でも生息が確認されている。最近の市内での確実な記録はなかったが、2018 年に守山区中志段味の才井戸流で本種の死体が確認された（中志段味の自然を次世代に伝える会，2018）。

保全上の留意点

河川敷や農地周辺に残された草地のように攪乱されやすい環境に生息するため、そのような環境を残していく配慮が必要である。また、生息地でのイエネコによる被害を防ぐために、イエネコの徹底的な管理が必要である。

特記事項

最近確認された守山区中志段味の才井戸流では、隣接して大型商業施設が開業し、生息地の孤立や乾燥化といった影響が懸念される。愛知県のレッドリストでは、佐久島の個体群が保全のために配慮が必要と考えられる特徴的な個体群（地域個体群）として記載されている（子安・織田，2009）。

引用文献

宮尾嶽雄・花村　肇・高田靖司・酒井英一，1984．1．ジネズミ．愛知の動物（佐藤正孝・安藤尚編），pp.287-288．愛知県郷土資料刊行会，名古屋．

子安和弘・織田銑一，2009．ニホンジネズミ．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，p.90．愛知県環境部自然環境課．

中志段味の自然を次世代に伝える会，2018．才井戸流生き物通信　第 16 号，中志段味の自然を次世代に伝える会．

関連文献

阿部　永，2008．ニホンジネズミ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（財団法人自然環境研究センター編），p.14．東海大学出版会，神奈川．

Motokawa, M.，2009．*Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842)．In： S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.)，The Wild Mammals of Japan，pp.22-23．SHOUKADOH Book Sellers，Kyoto．

（野呂達哉）

哺乳類　＜翼手目（コウモリ目）キクガシラコウモリ科＞

ニホンキクガシラコウモリ　*Rhinolophus nippon* Temminck, 1835

評価理由

市内では洞穴性の本種が利用できる自然洞穴は見られず、廃坑、防空壕跡といった人工洞穴も、近年、入口が塞がれる傾向にある。本種が利用できる環境は減少する一方であり、回復は見込めない。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

鼻の周囲に鼻葉と呼ばれる葉状の突起を持つ。幅が広く短い翼を持ち、森林内での採餌に適している。体色は褐色。前腕長 52～65mm、頭胴長 55～82mm、尾長 28～45mm、体重 16～35g。



守山区中志段味、2022 年 11 月 14 日、野呂達哉　撮影

分布の概要

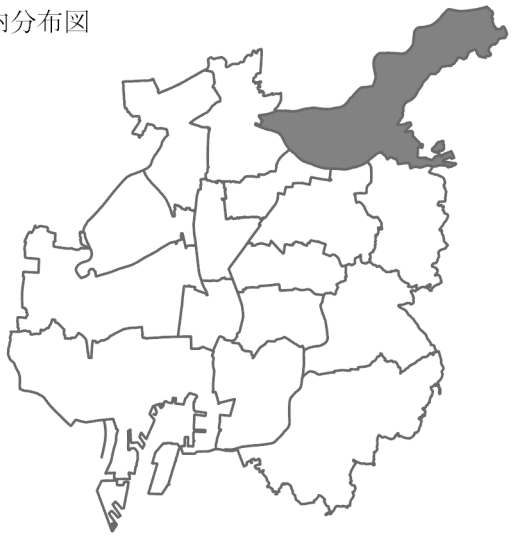
市内：守山区（竜泉寺、中志段味、上志段味）

県内：犬山市、春日井市、津島市、名古屋市、瀬戸市、長久手市、日進市、豊田市、幸田町、西尾市、設楽町、豊根村、東栄町、新城市、豊橋市、田原市、知多市、南知多町。

国内：北海道、本州、四国、九州、伊豆大島、三宅島、新島、佐渡、隠岐、対馬、壱岐、五島列島、屋久島、甑島列島、口之島、中之島。

世界：インド北部からネパール、ブータン、中国、朝鮮半島、日本。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

ねぐらは主に洞穴だが、自然洞穴だけではなく、廃坑、防空壕跡、廃屋といった人工的環境も利用する。採餌活動は河川、平地、小丘陵、森林や草原などで行われる。

現在の生息状況／減少の要因

守山区竜泉寺の壕跡は入口が土砂で埋まり、現在では利用されていない。中志段味才井戸流の壕跡では本種のねぐらを確認した。音声調査では上志段味東谷の大村池周辺で確認した。また、瀬戸市と守山区の境に位置する愛知用水のトンネルをねぐらとして利用している可能性がある。

保全上の留意点

ねぐらが見つかった場合、その保全に留意する必要がある。人の出入りの制限、コウモリ類が通過可能な柵（バット・ゲート）を設置することが有効である。愛知用水のトンネルをねぐらとして利用している可能性があり、今後、調査を進める必要がある。

特記事項

中志段味才井戸流の壕跡で新たに本種のねぐらを確認したが、隣接して大型商業施設が開業し、光害などの影響によるねぐらの放棄が懸念される。

関連文献

子安和弘・織田銑一，2020．キクガシラコウモリ．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2020 動物編，p.80．愛知県環境部自然環境課．

黒川 景・野呂達哉・熊澤慶伯，2023．環境 DNA を用いた才井戸流周辺の動物種の予察的分析．なごやの生物多様性，10: 1-12.

前田喜四雄，2008．キクガシラコウモリ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），p.30．東海大学出版会，秦野．

野呂達哉，2020．都市域名古屋には何種類のコウモリが生息しているのか？ - 音声による種同定の試み - ．第 23 回 自然系調査研究機関連絡会議 調査研究・活動事例集，p14-18．自然系調査研究機関連絡会議(NORNAC).

佐野 明，2023．ニホンキクガシラコウモリ．識別図鑑日本のコウモリ（コウモリの会編），p.48-49．文一総合出版，東京．

（野呂達哉）

哺乳類　＜翼手目（コウモリ目）オヒキコウモリ科＞

オヒキコウモリ　*Tadarida insignis* (Blyth, 1862)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	情報不足
全　　国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

市内では 2011 年 10 月に中区丸の内ではじめて確認された。その後、名古屋城敷地内や東谷山地域のため池やゴルフ場周辺、名東区山香町で本種のエコーロケーションコールを確認したが、確認場所は著しく少ない。市内でのねぐらの情報はない。

形態

体色は黒色。尾が長いのが特徴。前腕長 57～65mm。頭胴長 84～94mm。尾長 48～56mm、体重 30～40g。細長い翼を持ち、高速・長距離飛翔に適応している。



中区丸の内、2011 年 10 月 7 日、野呂達哉　撮影

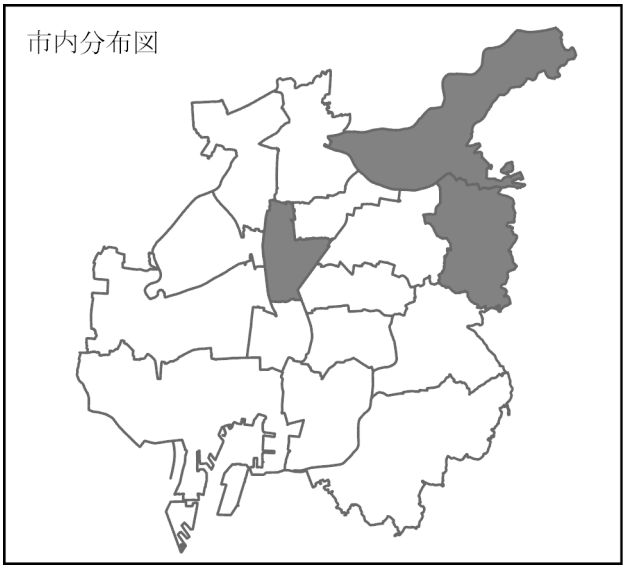
分布の概要

市内：中区（丸の内、名古屋城）、守山区（上志段味東谷）、名東区（山香町）。

県内：尾張旭市、瀬戸市、名古屋市、豊田市。

国内：北海道（焼尻島）、埼玉県、神奈川県、三重県、京都府、兵庫県、広島県、愛媛県、高知県、熊本県、宮崎県、福岡県（沖ノ島付近）などで確認されている。

世界：中国、台湾、韓国など。



生息地の環境／生態的特性

開けた空間を高速で飛翔してガ類などを捕える。岩盤の割れ目や人工の建物をねぐらとした例がある。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋城敷地内や守山区上志段味東谷のゴルフ場周辺では、本種が採餌時に発するエコーロケーションコールのバズ音を確認した。夜間照明用のライトに誘引されるガ類などを捕食していると考えられる。名古屋城の石垣隙間をねぐらとしている可能性もあるが、本種は長距離飛行が可能であり、市外にねぐらを持つことも十分に考えられる。名東区山香町で確認したエコーロケーションコールは単発的であり、移動飛行中の偶発的事例と考えられる。

保全上の留意点

名古屋城では石垣修復のための解体と積み直しが実施されており、本種のねぐらがないか確認が必要である。本種に独特の可聴域のエコーロケーションコールは市内の広範囲で確認される可能性がある。

特記事項

宮崎県枇榔島では乾燥した岩盤の割れ目内をねぐらとしていた（船越ほか，1999）。また、広島市では 4 階建ての校舎で 400 頭を超えるコロニーが見つかっている（畑瀬，2000）。

引用文献

船越公威・前田史和・佐藤美穂子・小野宏治，1999．宮崎県枇榔島に生息するオヒキコウモリ *Tadarida insignis* のねぐら場所，個体群構成および活動について．哺乳類科学，39(1): 23-33.

畑瀬　淳，2000．広島のオヒキコウモリ．広島市の生物ーまもりたい生命の営みー，p.158．広島市環境局環境企画課.

関連文献

船越公威，2010．九州産食虫性コウモリ類の超音波音声による種判別の試み．哺乳類科学，50: 165-175.

前田喜四雄，2008．オヒキコウモリ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），p.62．東海大学出版会，神奈川.

野呂達哉，2014．愛知県名古屋市におけるオヒキコウモリ *Tadarida insignis* の初記録．なごやの生物多様性，1: 65-69.

野呂達哉，2019．名古屋城におけるオヒキコウモリ *Tadarida insignis* のエコーロケーションコールによる確認．なごやの生物多様性，6: 67-72.

Sano, A.，2009．*Tadarida insignis* (Blyth, 1861). In： S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.)，The Wild Mammals of Japan，pp.124-125．SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.

（野呂達哉）

哺乳類　＜食肉目（ネコ目）イタチ科＞

ニホンテン　*Martes melampus* (Wagner, 1840)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	－

評価理由

2013 年 5 月に市境である東谷山の瀬戸市側で生息が確認された。行動圏が市内に達していることは確実なので、評価対象とした。生息密度は低いものと考えられ、隣接する地域からの個体の流入がない限り、市内で個体群を維持することは難しいであろう。

形態

体色はあざやかな黄色から褐色のものまで変異に富む。四肢は通常、黒い。頭胴長 41～49cm。尾長 17～23.3cm。体重 1.1～1.5kg。

分布の概要

市内：守山区（東谷山地域）。

県内：豊根村、設楽町、東栄町、豊田市、新城市、豊川市、岡崎市、幸田町、瀬戸市、尾張旭市。

国内：本州、四国、九州、淡路島、対馬。佐渡島、北海道に移入。

世界：国外では朝鮮半島南部に分布するという報告がある。

生息地の環境／生態的特性

本種は樹上空間を積極的に利用し（Tatara and Doi，1994）、河畔林，境界林および林縁部への依存度が高いことが示唆されている（新井ほか，2003）。雑食性でネズミ類などの小哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、果実類などを採食する。

現在の生息状況／減少の要因

最近の市内での確認例は皆無であるが、2013 年 5 月に東谷山の瀬戸市側（瀬戸市十軒町）で生息が確認された。確認場所は市境であるため、名古屋市内も行動圏に含まれると考えられる。この地域は落葉広葉樹と常緑広葉樹、ヒノキの植林が混在し、大径木が多く、本種の生息に好適な環境であると推測される。本種が市内の他の緑地に分布を拡大できるか今後注視が必要である。

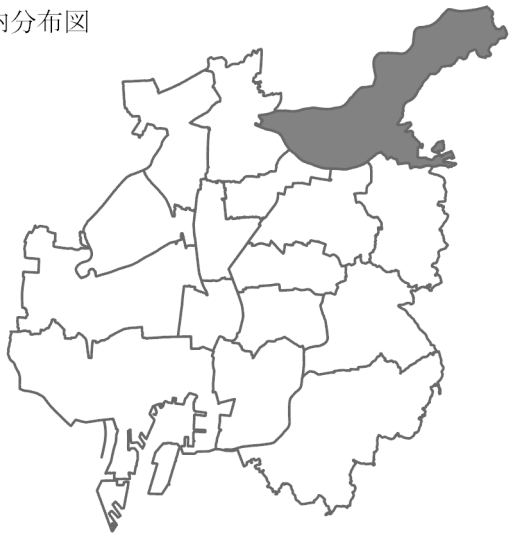
保全上の留意点

生息適地の樹林地を残していくとともに、隣接する地域との繋がりを保つための緑地帯を確保する必要がある。



瀬戸市十軒町、2013 年 5 月、
なごや市民生きもの調査員　撮影

市内分布図



引用文献

荒井秋晴, 2003. 久住高原におけるテン *Martes melampus* の食性．哺乳類科学，43: 19-28.

Tatara, M. and T. Doi, 1994. Comparative analyses on food habits of Japanese marten, Siberian weasel, and leopard cat in the Tsushima Islands, Japan. Ecological Research，9：99-107.

関連文献

阿部　永，2007．テン．増補版日本産哺乳類頭骨図説，pp.246-247．北海道大学出版会，札幌.

子安和弘・織田銑一，2009．テン．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，p.87．愛知県環境部自然環境課.

（野呂達哉）

哺乳類　＜食肉目（ネコ目）イタチ科＞

アナグマ　*Meles anakuma* Temminck, 1842

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

評価理由

最近の市内での確実な記録は三例のみであり、生息密度は低いものと推測される。生息適地である緑地や農地の減少が著しい市内では、隣接する地域からの個体の流入がない限り、個体群を維持することは難しいと考えられる。

形態

体色は背面が暗黄褐色で、腹面は暗褐色。四肢は黒い。両眼周辺は暗褐色。体は頑丈で、四肢は太短く、手の爪は強大。頭胴長 44～68cm、尾長 11.6～18.0cm。体重は 4～9kg。



緑区鳴海町大清水、2013 年 9 月 28 日、小島盛夫　撮影

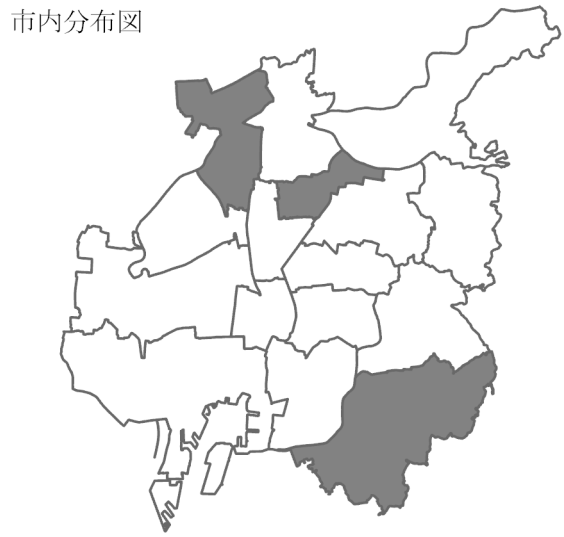
分布の概要

市内：緑区（鳴海町）、西区（歌里町）、東区（白壁）。

県内：豊根村、東栄町、設楽町、新城市、豊川市、豊田市、岡崎市、田原市、知多市、犬山市、小牧市、春日井市、名古屋市。

国内：本州、四国、九州。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

森林、低木林に生息する。地中にトンネルを掘り、血縁の家族群で生活する。雑食性でミミズ類、昆虫類、両生類、果実類などを採食する。

現在の生息状況／減少の要因

2013 年 9 月、市内では 31 年ぶりに緑区鳴海町大清水のブドウ畑で確認された（野呂，2014）。2022 年 7 月、西区歌里町の整備工場に幼獣の迷い込みがあった（曽根・野呂，2023）。また、2023 年 9 月、名古屋城外堀の東端で撮影された（鈴木ほか，2024）。確認場所付近には緑地が残されているものの、周辺にまで市街化が進んでおり、生息地としては孤立している。

保全上の留意点

生息適地の樹林地や農地を残していくとともに、隣接する地域との繋がりを保つための緑地帯を確保する必要がある。

特記事項

1982 年に中区千代田三丁目のマンション 11 階ベランダで発見された記録がある（朝日新聞名古屋版 1982 年 1 月 3 日）が、野生個体と判断できなかったため、市内分布図には示さなかった。

知多半島では絶滅したとされていたが（宮尾ほか，1984）、最近、知多市で生息が確認された（藤井ほか，2016）。

引用文献

藤井太一ほか，2016．愛知県知多市臨海工業地帯企業緑地におけるカメラトラップ法による哺乳類調査．日本緑化工学会誌，42: 320-329.

野呂達哉，2014．緑区のブドウ畑で確認されたニホンアナグマ．生きものシンフォニー13 号，なごや生物多様性センター．

曽根啓子・野呂達哉，2023．名古屋市内で 9 年ぶりに再確認されたアナグマ *Meles anakuma*．なごやの生物多様性，10: 77-80.

鈴木優美ほか，2024．明和高校 SSH 部生物班における活動紹介．なごやの生物多様性，11: 123-135.

関連文献

阿部　永，2007．アナグマ．増補版日本産哺乳類頭骨図説，p.251．北海道大学出版会，札幌．

Kaneko, Y.，2009．*Meles anakuma* Temminck, 1844. In： S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.)， The Wild Mammals of Japan，pp.258-260．SHOUKADOH Book Sellers，Kyoto.

子安和弘・織田銑一，2009．アナグマ．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，p.90．愛知県環境部自然環境課．

（曽根啓子、野呂達哉）

哺乳類　＜食肉目（ネコ目）イタチ科＞

ニホンイタチ　*Mustela itatsi* Temminck, 1844

評価理由

市内での本種の分布はすでに局所的であるのに加え、外来種のシベリアイタチが市街地だけではなく、緑地や山地にまで分布を拡大しており、今後、市内における本種の個体数回復や分布の拡大は見込めない。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

雌は雄より小型で性的二型がはっきりしている。頭胴長：雄 27.8～36.9cm、雌 22.9～26.5cm、尾長：雄 11.2～15.1cm、雌 9.0～10.5cm、体重：雄 270～600g、雌 110～180g。成獣の尾率は 50%を超えないとされる。ただし、尾率だけでの判定ではシベリアイタチとの誤同定を引き起こす（川口，2006）。特に幼獣期には適用できない（佐々木，2011）。



守山区上志段味東谷、2012 年 5 月 1 日、野呂達哉　撮影

分布の概要

市内：守山区（上志段味東谷、中志段味天白、中志段味沢田、中志段味宮前）。

県内：県内全域（ただし、平地についてはシベリアイタチと置き換わっている可能性がある）。

国内：本州、四国、九州といくつかの周辺島嶼。北海道、伊豆諸島、五島列島などに移入による分布がみられる。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

雌は一定の行動圏を持ち、雄はいくつかの雌と重なるような行動圏を持つ。水辺の環境を好み、甲殻類、昆虫類、魚類、カエル、鳥類、ネズミ類などを採食する。

現在の生息状況／減少の要因

従来の市内における本種の生息情報はシベリアイタチとの区別が困難な例もある。計測値から確実にニホンイタチと同定できたのは、高田（2002）が 1990 年代に中志段味で記録した 2 個体であった。2012 年より市内各所で得られたイタチ類を同定した結果、本種と同定されたのは、東谷山地域の農地で捕獲された雄 1 個体のみであった。また、2021 年に中志段味宮前の才井戸流において行った環境 DNA による調査では本種が複数回検出された（黒川・野呂・熊澤，2023）。庄内川流域では上流部からの流入もあり、少数個体が生存していると考えられる。減少の要因として、市街化で生息適地が減少したのに加え、すでに市内の山地や緑地にも進出したシベリアイタチの影響があげられる。

保全上の留意点

本種の生息域では、これ以上の人為的攪乱やシベリアイタチの侵入を防ぐ必要がある。

引用文献

川口　敏，2006．香川県産 Mustela 属 2 種の事故死体の同定と分布．哺乳類科学，46: 35-39.
黒川 景・野呂達哉・熊澤慶伯，2023．環境 DNA を用いた才井戸流周辺の動物種の予察的分析．なごやの生物多様性，10: 1-12.
佐々木浩，2011．シベリアイタチ国内外来種とはなにか．日本の外来哺乳類–管理戦略と生態系保全–（山田文雄・池田　透・小倉　剛編），pp.259-283．東京大学出版会，東京．
高田靖司，2002．守山と春日井の哺乳類．私たちの博物館–志段味の自然と歴史を訪ねて–，62: 1-5.

関連文献

Masuda, R. and S. Watanabe，2009．*Mustela itatsi Temminck*, 1844. In： S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan，pp.240-241．SHOUKADOH Book Sellers，Kyoto.
米田政明，2008．イタチ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），p.82．東海大学出版会，神奈川.

（野呂達哉）

哺乳類　＜偶蹄（ウシ）目　ウシ科＞

カモシカ　*Capricornis crispus* (Temminck, 1836)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

わずかに生息する守山区東谷山周辺での生息可能面積は小さい。生息環境の推移から見て圧迫が強まっているのに加え、最近になって東谷山へ侵入したニホンジカとの競合が危惧される。

形態

形態に性差はなく雌雄ともに、頭胴長は 70～85cm、体重は 30～45kg で 13cm ほどの角を持つ。市内に生息する個体の毛色は、茶褐色が多い。

分布の概要

市内：守山区（東谷山）。

県内：豊橋市、岡崎市、瀬戸市、名古屋市、豊川市、豊田市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村など。市東部近くの愛知郡東郷町（中日新聞 2013 年 5 月 21 日）、日進市米野木町（中日新聞 2014 年 10 月 12 日）、尾張旭市井田町（中日新聞 2017 年 5 月 13 日）でも目撃されている。

国内：本州、四国、九州。

世界：日本固有種。

生息地の環境／生態的特性

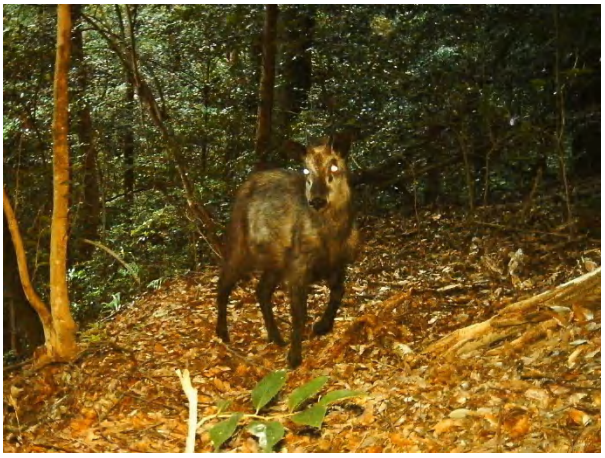
本来の生息地は低山から亜高山帯の落葉広葉樹や針葉樹林帯である。植物食性で主に樹木の葉などを採食する。春から初夏に 1 頭の子を出産する。1 ペアで 1km² ほどのなわばりを持つ。

現在の生息状況／減少の要因

1997 年以降、守山区と瀬戸市の市境付近で目撃されている（中日新聞 2003 年 5 月 22 日など）。その後、2006～2010 年にかけて東谷山周辺で複数の生息を確認している。2020 年に名東区富が丘の住宅街に出没したが（中日新聞 2020 年 4 月 18 日）、偶発的な事例であろう。なわばりを持つ本種では、一定面積に少数の個体しか生息できない。市内では生息可能な面積が小さく、分布を広げても道路網の発達や宅地造成などにより分断化され消滅することが予想される。最近、東谷山でニホンジカが再発見され（野呂・名和, 2018）、本種との競合が危惧される。

保全上の留意点

農作物被害や交通事故の要因となることがあり、今後の動向に注意して情報収集する必要がある。



東谷山、2017 年 8 月 6 日、野呂達哉・名和　明　撮影



特記事項

国の特別天然記念物である。愛知県では特定鳥獣保護管理計画の対象種となっており、県東部で捕獲が継続されている。

引用文献

野呂達哉・名和　明，2018．名古屋市内で再発見されたニホンジカ *Cervus nippon* Temnick, 1838．なごやの生物多様性，5: 117-118.

関連文献

愛知県環境部自然環境課，2012．特定鳥獣保護管理計画（カモシカ），36pp．愛知県環境部自然環境課.

三浦慎吾，2008．カモシカ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），p.113．東海大学出版会，秦野.

名和　明，2008．哺乳類．新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），pp.315-322．名古屋市.

名和　明，2009．名古屋市におけるカモシカの記録．マンモ・ス特別号，11: 69-75.

名和　明，2009．森の賢者カモシカ－鈴鹿山地の定点観察記－，185pp．サンライズ出版，彦根.

（名和　明、野呂達哉、曽根啓子）

哺乳類　＜鯨目ネズミイルカ科＞

スナメリ　*Neophocaena asiaeorientalis* (Pilleri et Gihr, 1972)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	－

評価理由

国内に存在する 5 つの地域個体群のうち、名古屋港に来遊するものは伊勢･三河湾系群のものである。本個体群の個体数は 2002～2014 年にかけて大きな変動がなく、4000 頭程度で安定していたことが報告されているが（小川ら，2017）、ここ数年の個体数推定値はなく、個体群の現状は不明である。本種は沿岸性が強く、人間活動の影響を強く受けることが懸念される。

形態

吻の突出がなく、頭部は丸い。背鰭の代わりに背部に小突起を伴った狭い隆起をもつ（Jefferson and Wang, 2011）。成体の体長は 1.8~2.0 m 程度であり、体色は明灰色である。



鳥羽水族館、2019 年 8 月 1 日、古山　歩　撮影

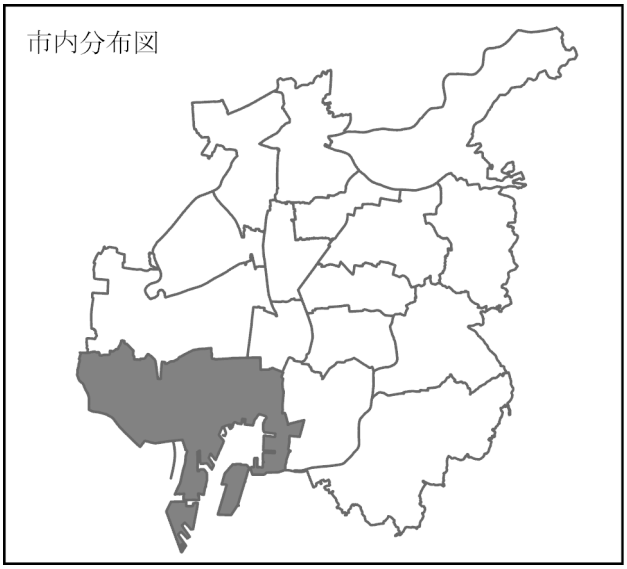
分布の概要

市内：港区（名古屋港）。

県内：伊勢湾、三河湾。

国内：主に有明海～橘湾、大村湾、瀬戸内海・響灘、伊勢・三河湾、東京湾～仙台湾沿岸の 5 水域。

世界：台湾海峡以北の中国、韓国および日本の沿岸域。



生息地の環境／生態的特性

浅い沿岸域に生息する。主に 50m 以浅の砂質・砂泥質の水域に出現する。魚類、頭足類、甲殻類を日和見的に採食する。

現在の生息状況／減少の要因

主に冬季に名古屋港に来遊する（斎藤ら，2014）。まれに市内の河川にも迷入する（神田ら，2024）。港内では採餌行動がみられており、温排水に集まる魚類の捕食のために来遊すると考えられている（斎藤ら，2014）。

保全上の留意点

本種が来遊する名古屋港は船舶の往来が激しく、工業・生活排水も多量に流れ込むため、その影響を強く受けることが懸念される。本種の名古屋港へ来遊は摂餌目的であることが考えられ（斎藤ら，2014）、魚類資源を含む港内の摂餌環境の維持・保全が必要とされる

特記事項

名古屋港を含む伊勢･三河湾全域において、海岸への死亡漂着が毎年確認されている（加古ら，2024；神田ら，2021；栗原ら，2013）。

引用文献

Jefferson, T. A. and Wang, J. Y, 2011. Revision of the taxonomy of finless porpoises (genus *Neophocaena*): The existence of two species. Journal of Marine Animals and Their Ecology, 4(1): 3-15.

加古智哉・小林清重・阿久根雄一郎・神田幸司・森　朋子・福本洋平・大友　航・大島由貴・春日井隆，名古屋港における 1999 年～ 2021 年のスナメリの死亡漂着．なごやの生物多様性，11: 29-34.

神田育子・古山　歩・若林郁夫・若井嘉人・船坂徳子・吉岡　基，2021．伊勢湾西岸における 2011～2020 年のスナメリのストランディングに関する記録．三重大学大学院生物資源学研究科紀要，47: 13-23.

神田幸司･堂崎正博･森　朋子･漁野真弘･春日井隆, 2024. 名古屋市内の河川で目撃されたスナメリ *Neophocaena asiaeorientalis*. なごやの生物多様性，11: 23-28.

栗原　望・大池辰也・川田伸一郎・子安和弘・織田銑一，2013．三河湾におけるスナメリ（*Neophocaena phocaenoides*）の漂着ならびに混獲に関する記録．哺乳類科学，53(1): 99-106.

小川奈津子・吉田英可・中村　玄・ 加藤秀弘，2017．伊勢湾・三河湾におけるスナメリの個体数と分布．水産海洋研究，81(1): 29-35.

斎藤　豊・堂崎正博・祖一　誠，2014．名古屋港に生息するスナメリの調査．海洋と生物，36(1): 29-35.

（古山　歩）

哺乳類　＜齧歯目（ネズミ目）ネズミ科＞

カヤネズミ　*Micromys minutus* (Pallas, 1771)

評価理由

本種の生息場所である高茎草地は、市街化や河川改修に伴う整備によってその多くが消失した。現在残っている場所は極めて局所的であり、小規模の開発でも個体群消失のおそれがある。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

形態

日本に生息するネズミ類の中では最も小型。体色は背面が赤褐色か暗褐色で腹面は白色。尾の先端の毛の一部はない。頭胴長 54～78.5mm、尾長 47～91mm、体重 5.3～14g。



北区成願寺町北野、2013 年 3 月 31 日、宇地原永吉　撮影

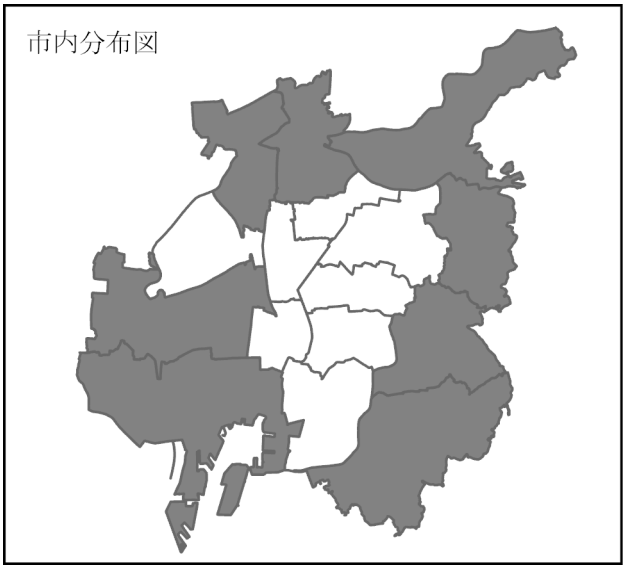
分布の概要

市内：守山区（東谷山、小幡緑地本園、八竜緑地、大森、瀬古、幸心、川、吉根、中志段味字宮裏、下志段味真光寺、川西）名東区（明徳公園、猪高緑地、牧野ヶ池緑地）、天白区（荒池緑地）、緑区（鳴海町笹塚、大高町）、北区（成願寺町北野）、西区（庄内緑地、中小田井）、中川区（富田町万場、富田町長須賀）港区（当地町草野、南陽町藤前）。

県内：設楽町、豊田市、新城市、豊川市、豊橋市、田原市、岡崎市、安城市、幸田町、みよし市、日進市、尾張旭市、名古屋市、北名古屋市、春日井市、知多市、美浜町、南知多町、弥富市。

国内：本州の宮城県以南 、四国、九州、対馬、隠岐諸島、淡路島など。

世界：ユーラシアに広く分布する。



生息地の環境／生態的特性

低地の草地に多く、イネ科草本などで球状の巣を作る。草本の茎葉、種子、果実、昆虫などを採食する。春から秋にかけて繁殖し、1 回に 2～8 仔を産む。

現在の生息状況／減少の要因

市内では緑地内の湿地や河川沿い、水田周辺の草本群落で球巣が確認されている。局所的で、攪乱されやすい環境に営巣しているため、小規模の開発でも影響を受けると考えられる。市内の主要な生息場所である庄内川沿いでは、開発により徐々に生息地が減少し、孤立化が進行している。

保全上の留意点

繁殖期の草刈りは避ける。草刈りを行う場合は何度かに分け、避難できるスペースを残すといった配慮が必要である（畠，2014）。また、生息地でのイエネコによる被害を防ぐために、イエネコの徹底的な管理が必要である。

引用文献

畠佐代子，2014．草刈りとカヤネズミのくらしを両立させるには．カヤネズミの本，pp.93-95．世界思想社，京都市．

関連文献

阿部　永，2007．カヤネズミ．増補版日本産哺乳類頭骨図説，p.251．北海道大学出版会，札幌．

子安和弘，2009．カヤネズミ．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，p.77．愛知県環境部自然環境課．

宮尾嶽雄・花村　肇・高田靖司・酒井英一，1984．8．カヤネズミ．愛知の動物（佐藤正孝・安藤尚編），pp.297-298．愛知県郷土資料刊行会，名古屋．

（野呂達哉）

哺乳類　＜トガリネズミ形目モグラ科＞

ヒミズ　*Urotrichus talpoides* Temminck, 1841

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

市内では東部地域の緑地に分布するが、生息地は局所的で孤立が著しい。落葉層や腐葉層が豊かで湿潤な土壌環境を好むが、緑地の公園化などによって生息適地が消失または劣化した。市内での生息密度は低いと推測される。

形態

半地下性の小型のモグラ類で、前肢は地下性のモグラ類ほど発達していない。尾は棍棒状で太く、ブラシ状の長毛が生える。頭胴長 89～104mm、尾長 27～38mm、後足長 13.8～16mm、体重 14.5～25.5g。



名東区明徳公園、2009 年 10 月 4 日、野呂達哉　撮影

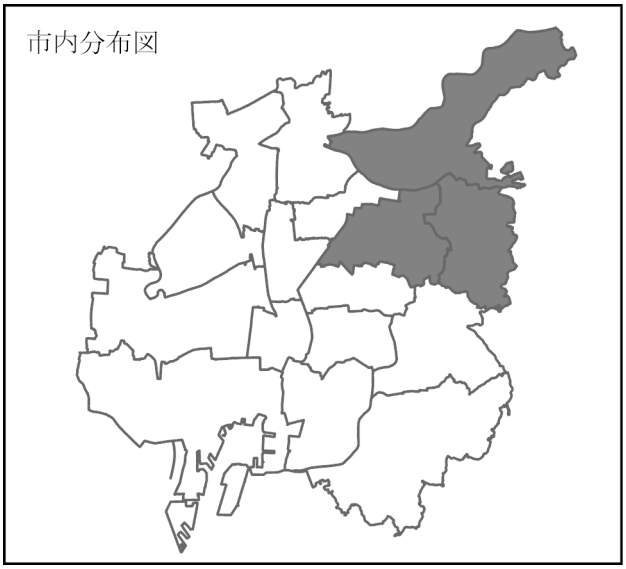
分布の概要

市内：守山区（東谷山、小幡緑地本園、吉根階子田、吉根大鼓ヶ根、川東山）、名東区（明徳公園、猪高緑地）、千種区（東山公園）。

県内：知多半島を除く県内全域の樹林地など。

国内：本州、四国、九州、淡路島、小豆島、隠岐諸島、対馬など。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

半地下性で、落葉層や腐植層に網目状のトンネルを掘り生活している。樹林地の湿った土壌環境を好み、乾燥に弱い。河畔林にも生息するが、樹林地と繋がっている場所に多く、礫や砂の堆積した河川敷ではあまりみられない（野呂，2009）。ミミズ類やクモ類、ジムカデ類、昆虫類、種子などを採食する。

現在の生息状況／減少の要因

愛知県内の山地では普通種であるが、市内での確認例は少なく、分布は局所的である。開発や植生の伐採等により土壌の乾燥化が進むと生息適地が減少する。確認されている緑地内でも生息適地は少なく、生息密度は低いと考えられる。

本種が生息する緑地では、定着したイエネコによる咬傷被害が懸念される。実際に 2009 年に拾得した本種の死体には、犬歯による咬傷があり、近くにはイエネコの餌場があった。また、2023 年には、実際に本種がイエネコによって咥えられている様子が撮影された（野呂・伊藤，未発表）。

保全上の留意点

生息地付近では新たな開発を避ける、落葉の踏み荒らしを防ぐ、側溝に落ちると脱出できないため、脱出用スロープ付の U 字溝を取り付けるといった配慮が必要である。また、生息地でのイエネコによる被害を防ぐために、イエネコの徹底的な管理が必要である。

引用文献

野呂達哉，2009．矢作川河畔林における哺乳類の基礎調査報告．矢作川研究，(13): 105-112.

関連文献

阿部　永，2008．ヒミズ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），p.18．東海大学出版会，神奈川．
宮尾嶽雄・花村　肇・高田靖司・酒井英一，1984．3. ヒミズ．愛知の動物（佐藤正孝・安藤尚編），pp. 288-289．愛知県郷土資料刊行会，名古屋．
名古屋ため池生物多様性保全協議会，2010．2009 年度なごやため池生きもの生き生き事業報告書，207pp．名古屋ため池生物多様性保全協議会．
名和　明，2008．哺乳類．新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），pp.77-81．名古屋市．

（野呂達哉）

哺乳類　＜翼手目（コウモリ目）ヒナコウモリ科＞

ヒナコウモリ　*Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	－

評価理由

市内では中区栄のビル街ではじめて確認されたが確認事例は少ない。現在までに、市内でのねぐらの情報はない。

形態

黒褐色の体毛に先端の白い毛が混ざるため、霜降り状に見える。前腕長 47～54mm。頭胴長 78～80mm。尾長 35～50mm、体重 14～30g。

分布の概要

市内：中区（栄、千代田）、千種区東山動植物園、中川区吉良町で確認されている。

県内：北設楽郡設楽町東納庫大桑（川田，2004）。安城市日の出町（小鹿･子安，2007）。北設楽郡豊根村富山（佐藤ほか，2008）。

国内：北海道、青森県、岩手県、山形県、福島県、栃木県、東京都、新潟県、福井県、長野県、岐阜県、愛知県、大阪府、和歌山県、岡山県、広島県、愛媛県、福岡県、熊本県。

世界：中国、モンゴル、朝鮮半島、台湾など。



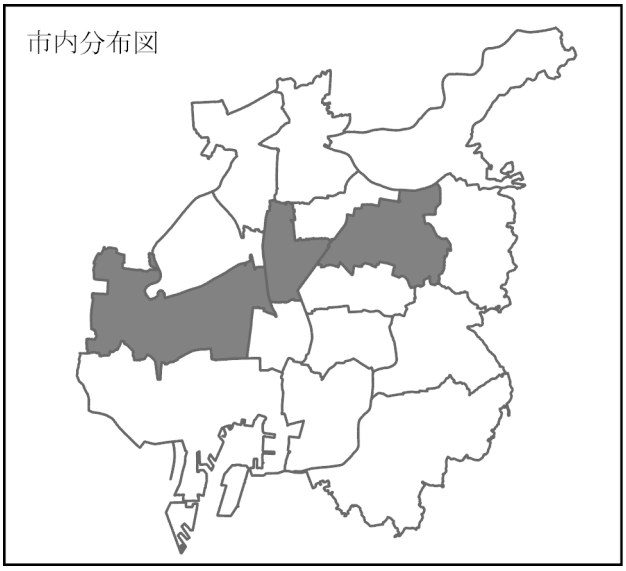
中区栄、2016 年 1 月 14 日、野呂達哉　撮影

生息地の環境／生態的特性

ねぐらとして樹洞や洞窟、岩盤の割れ目、人工の建物を利用し、周辺環境も市街地から森林と多様である。

現在の生息状況／減少の要因

2016 年に中区栄のビル街で 1 個体（野呂，2017）、2019 年に東山動植物園で 1 個体（野呂・加藤，2021）が拾得された。その後、中区鶴舞、中川区吉良町でも確認されている。音声調査では、ヒナコウモリの発する音声と類似した 20 kHz 台の音声が、市内各地で確認されており、市内の広範囲で活動していることが示唆される。



保全上の留意点

全国的に見ても市街地での確認事例が増えている（青木ほか，2006；重昆ほか，2013；大沢ほか，2014）。今後，名古屋市内でもねぐらや越冬場所が見つかる可能性もある。

特記事項

埼玉県や群馬県では新幹線の高架下をねぐらとしていた事例がある（重昆ほか，2013；大沢ほか，2014）。

引用文献

青木雄司・秋山幸也，2006．相模原市の住宅地におけるヒナコウモリの保護記録．神奈川自然誌資料，27: 41-43.

小鹿登美･子安和弘, 2007. 愛知県安城市におけるヒナコウモリの記録．マンモ･ス特別号, (9): 17-22.

重昆達也・大沢夕志・大沢啓子・峰下　耕・清水孝頼・向山　満，2013．群馬県の新幹線高架橋で見つかったヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の出産哺育コロニーおよび冬季集団．群馬県立自然史博物館研究報告，17: 131-146.

川田伸一郎, 2004. 愛知県で記録された特筆すべき小哺乳類 2 種．マンモ･ス特別号, (6): 3-5.

野呂達哉，2017．名古屋市におけるヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880) の初記録．なごやの生物多様性，4: 109-112.

野呂達哉・加藤俊紀，2021．名古屋市東山動植物園で確認されたヒナコウモリ *Vespertilio sinensis*（Peters, 1880） の記録．なごやの生物多様性，8: 109-111.

大沢啓子・佐藤顕義・勝田節子・大沢夕志，2014．埼玉県の新幹線高架におけるヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の越冬期と出産哺育期の分布．埼玉県立自然の博物館研究報告，8: 49-52.

佐藤顕義･勝田節子･山本輝正, 2008. 愛知県におけるチチブコウモリとヒナコウモリの記録．マンモ･ス特別号, (10)： 25-28.

関連文献

Fukui, D.，2009．*Vespertilio sinensis* (Peters, 1880). In： S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.)，The Wild Mammals of Japan，pp.91-92．SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.

前田喜四雄，2008．ヒナコウモリ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），p.52．東海大学出版会，神奈川.

（野呂達哉）

哺乳類　＜食肉目（ネコ目）イヌ科＞

アカギツネ　*Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

かつては市北東部が分布の中心であったが、近年、東部地域の孤立した緑地や市西部でも確認されるようになり、徐々に分布を広げている。最近では市中心部にも出現しているが、死体の拾得事例も増えており、都市域での繁殖・定着は未だ困難であると考えられる。

形態

背面は赤褐色で、顎の下から腹部にかけては白色。足先前面には黒い毛が混じる。耳は大きく先が尖る。頭胴長 60～75cm、尾長 40cm、体重 4～7kg。



北区成願寺町北野、2013 年 6 月 10 日、野呂達哉　撮影

分布の概要

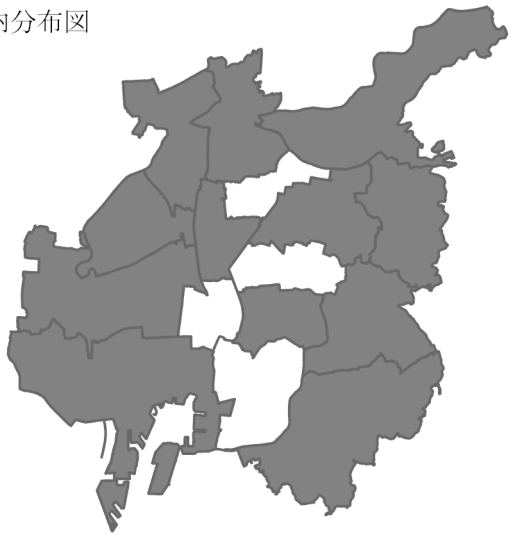
市内：守山区（東谷山、小幡緑地本園、才井戸流、上志段味、中志段味、吉根、川東山、大森、川西など）、千種区（東山公園、平和公園、京命、竹越、千代田橋など）、名東区（明徳公園、猪高緑地、牧野ヶ池緑地、藤巻など）、天白区（東山公園南部、天白公園、荒池緑地、野並、菅田、天白町など）、緑区（大高緑地、鳴海町）、瑞穂区（彌富町）、北区（成願寺町）、西区（庄内緑地公園）、中区（大須、二の丸）、中村区（比津町）、中川区（万場大橋緑地、富田町、戸田など）。港区（稲永公園、当知町、藤高）。

県内：東三河北部から南部にかけては全域で確認されている。尾張地域では北部から東部にかけて確認されているが、西部においては未確認の地域もある。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：ユーラシアの大部分と北アメリカに分布。オーストラリアには移入個体群が生息する。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

田畑や草地、森林、集落地域などがモザイク状に分布する多様な環境を選択的に利用する（中園，1989）。生息条件として、餌となるネズミ類や昆虫などが豊富で、巣作り、子育てのできる環境があることが重要である。

現在の生息状況／減少の要因

市街化に伴う樹林地や草地、農地の縮小によって、本種の繁殖・定着できる場所は著しく減少した。最近、東部地域の孤立した緑地や都市域の市西部に進出する個体が見つかっている（野呂，2014）。今後、都市化に向かうのか注目する必要がある（名和，2008；小野・野呂，2018）。

保全上の留意点

生息適地の保全とともに河川沿いの樹林地や草地、緑地帯といった生息地間の繋がりを支える環境を保全していく必要がある。

引用文献

中園敏之，1989．九州におけるホンドキツネのハビタット利用パターン，哺乳類科学　29(1): 51-62.

名和　明，2008．キツネ．新修名古屋市史資料編編集委員会（編），新修名古屋市史資料編自然，p.318．名古屋市.

野呂達哉，2014．名古屋市のアカギツネその後．生きものシンフォニー12 号．なごや生物多様性センター.

小野知洋・野呂達哉，2018．小幡緑地公園東縁における野生哺乳動物のセンサーカメラによる記録．なごやの生物多様性，5:75-80.

関連文献

阿部　永，2007．キツネ．増補版日本産哺乳類頭骨図説，p. 243．北海道大学出版会，札幌.

名和　明，2008．哺乳類．新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），222p．名古屋市.

野呂達哉，2013．小幡緑地と金城学院大学で確認されたアカギツネ．生きものシンフォニー7 号．なごや生物多様性センター.

（野呂達哉）

哺乳類　＜齧歯目（ネズミ目）ネズミ科＞

アカネズミ　*Apodemus speciosus* (Temminck, 1844)

評価理由

本種は、樹林地や草地、河畔林、農地といった緑被をともなう多様な環境に生息するが、市内では市街化により緑被の面積が年々減少しており、生息地の消失や縮小、分断化は未だ進行中である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体色は背面が褐色から橙褐色で腹面は白色。頭胴長 83～140mm、尾長 69～129mm で、体重 20～72.5g。



千種区平和公園、2011 年 10 月 7 日、野呂達哉　撮影

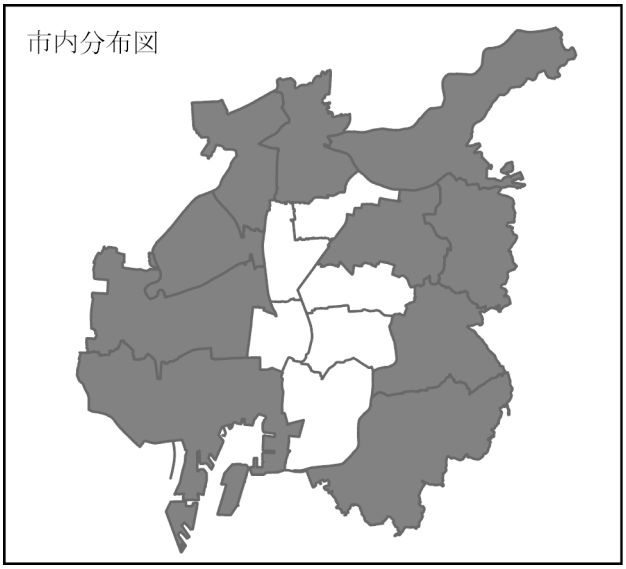
分布の概要

市内：守山区（東谷山、小幡緑地本園、八竜緑地、竜泉寺、吉根など）、名東区（猪高緑地、牧野ヶ池緑地、高針など）、千種区（平和公園、東山公園など）、天白区（相生山緑地、荒池緑地など）、緑区（鳴海町笹塚、大高町中之瀬など）、北区（成願寺町北野など）、西区（中小田井、庄内緑地）、中村区（岩塚町）、中川区（富田町万場、中須町）、港区（当地町、南陽町藤前）。

県内：県内全域（尾張地域、西三河地域、東三河地域、知多半島）で確認されている。

国内：北海道、本州、四国、九州、利尻島、佐渡島、隠岐諸島、伊豆諸島、五島列島、対馬、屋久島など。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

低地から高山帯、草原から森林まで広範囲に分布している。また、樹林地や草地、河畔林、農地といった多様な環境を生息場所としている。雑食で根茎類、種子、果実、昆虫類を採食する。

現在の生息状況／減少の要因

市内では、主に東部地域と西部地域の広い範囲に分布しており、緑地やため池、河川、農地周辺の樹林地や草地が生息場所となっている。生息地である緑被の面積は市全域で年々減少している（名古屋市，2010）。

保全上の留意点

河川敷や農地周辺に残された草地は、一見荒地に見えるため、開発の手が入りやすい。しかし、このような環境も本種にとっては重要な生息場所であり、保全に配慮していく必要がある。また、生息地でのイエネコによる被害を防ぐために、イエネコの徹底的な管理が必要である。

引用文献

名古屋市，2010 年．名古屋のみどり– 緑の現況調査報告書 –ディジタルマッピング手法による緑被調査．名古屋市緑政土木局緑地部緑化推進課．

関連文献

阿部　永，2007．アカネズミ．増補版日本産哺乳類頭骨図説，p.231．北海道大学出版会，札幌市．
名古屋ため池生物多様性保全協議会編，2010．2009 年度なごやため池生きもの生き生き事業報告書，207p．名古屋ため池生物多様性保全協議会．
名和　明，2008．哺乳類．新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），pp.222．名古屋市．

（野呂達哉）

哺乳類　＜トガリネズミ形目モグラ科＞

コウベモグラ　*Mogera wogura* (Temminck, 1842)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	地域個体群
全国 2020	－

評価理由

本州中部以南では普通種であり、市内での分布も広範囲に及ぶが、攪乱の起こりやすい環境に生息し、さらに小個体群に分断されていることから、小規模の開発でも個体群消失に繋がるおそれがある。

形態

地下生活に適応し、前肢の幅が広く、尾は短い。頭胴長 125～185mm、体重 48.5～175g。体サイズの変異は大きく、山間部に比較して平地部の個体群は大型化する。



中区名古屋城外堀、2010 年 3 月 24 日、野呂達哉　撮影

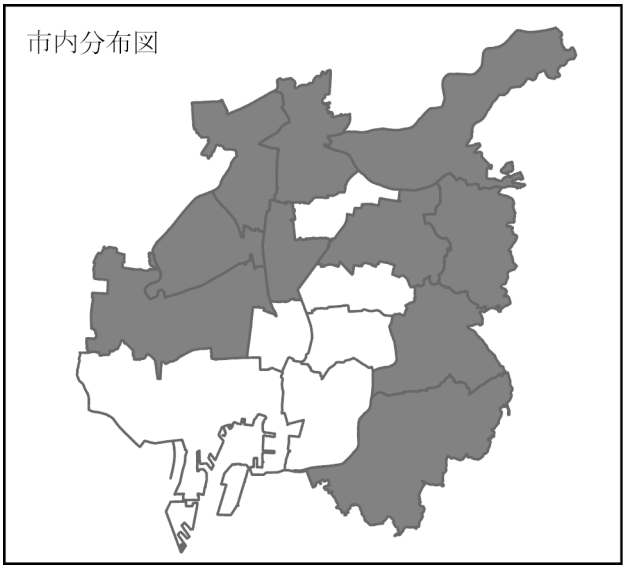
分布の概要

市内：守山区（東谷山、小幡緑地本園、上志段味、中志段味、大森、川西など）、名東区（牧野ヶ池緑地、猪高緑地など）、千種区（平和公園、東山公園など）、天白区（相生山緑地、荒池緑地など）、緑区（大高緑地、鳴海町笹塚など）、北区（福徳町、成願寺町など）、中区（名古屋城外堀など）、西区（庄内緑地など）、中村区（稲葉地町など）、中川区（富田町万場など）。

県内：県内全域の森林内、農地、河川敷など。

国内：本州中部以南、四国、九州、隠岐諸島、対馬、五島列島、種子島、屋久島など。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

完全な地下性で、土壌層が厚く、主食となるミミズ類が多い場所を選好する。森林内、農地、水田の畦、河川沿いに発達した土壌堆積地などを生息場所としている。

現在の生息状況／減少の要因

市街化や道路建設、河川の改修工事等で減少した。現在、公園緑地などに孤立して生息するが、庄内川などの河川沿いにはさらに孤立した小個体群が残存する。

保全上の留意点

これ以上の生息地の消失、縮小、分断化を防ぐとともに、人による生息地の踏み荒らしや車両等の侵入を防ぐ必要がある。また、生息地でのイエネコによる被害を防ぐために、イエネコの徹底的な管理が必要である。

特記事項

愛知県のレッドリストでは、体サイズの大きい名古屋城の個体群が特徴的な地域個体群に指定されている。名古屋城の個体群は二の丸側と三の丸側の二つの外堀とその周辺に生息する。

関連文献

阿部　永，2008．コウベモグラ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），p.24．東海大学出版会，神奈川．

子安和弘・織田銑一，2009．コウベモグラ（名古屋城外堀の個体群）．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，p.90．愛知県環境部自然環境課．

名古屋ため池生物多様性保全協議会，2011．平成 22 年度生物多様性保全推進支援事業 名古屋ため池生き物いきいき計画事業報告書，81pp．名古屋ため池生物多様性保全協議会．

織田銑一，2010．名古屋城のお堀のコウベモグラ．生き物から見た名古屋の自然–なごやの環境指標種 100（改訂版）–，pp.16-17．財団法人三菱 UFJ 環境財団，東京．

（野呂達哉）

哺乳類　＜食肉目（ネコ目）イヌ科＞

タヌキ　*Nyctereutes viverrinus* (Temminck, 1839)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

市内では急激な市街化で生息地が失われ、一時は減少したと考えられるが、近年、市街地や都市域での確認例も増え、個体数は回復に向かっていると推測される。ただし、疥癬や交通事故が原因で死亡する個体も多く、未だ予断は許されない状況である。

形態

体毛は全体的に灰黒色に見えるが、目の周りや四肢の毛は濃い黒色。尾は太く見える。イヌやキツネに比較して四肢が短い。頭胴長 51.5～68.0cm、尾長 13～19.5cm、体重 3～5kg。



中区名古屋城外堀、2014 年 7 月 12 日、酒井正二郎　撮影

分布の概要

市内：市内全区。

県内：県内全域（尾張地域、西三河地域、東三河地域、知多半島）。

国内：北海道、本州、四国、九州、佐渡島、瀬戸内諸島など。

世界：中国から北の東アジア。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

生息範囲は、樹林地から草地、農地、市街地、都市域と広範囲に及ぶ。夜行性で日中は泊り場で過ごす。泊り場は自然のものだけではなく、排水管などの人工物も利用する（吉野，2010）。雑食性で種子や果実、昆虫類、ミミズ類、鳥類、両生類、爬虫類、小型哺乳類などを食べる。植栽された果樹の果実や生ゴミを食べていた事例もある（曽根，2023）。

現在の生息状況／減少の要因

2012～2013 年の市内におけるへい死個体の回収記録から、すでに市内全区に分布することが明らかとなった。緑地や河川沿いの樹林地、草地などを泊り場や採食場所として利用しており、これらの消失や劣化が本種の減少につながると考えられる。また、疥癬や交通事故で死亡する個体も多いと推測され、緑区鳴海町（2020 年 1 月・7 月）、中川区下之一色（2020 年 12 月）、緑区大高町（2021 年 11 月・2022 年 3 月）、名東区猪高町（2022 年 3 月・12 月）、熱田区須賀町（2024 年 1 月）で疥癬個体の記録、守山区小幡（2020 年 10 月）、中区二の丸（2021 年 2 月）、中区三の丸（2022 年 2 月）でへい獣の記録がある。

保全上の留意点

市内に残された緑地や河川沿いの樹林地、草地は、巣穴や泊り場、採食場所として重要な生息環境であり、これらの消失や減少を防ぐ必要がある。

引用文献

曽根啓子，2023．分析試料としての標本の価値－哺乳類標本を例に－．生きものシンフォニー40 号．なごや生物多様性センター．

吉野　勲，2010．新宿御苑におけるタヌキの生息環境．Animate，8: 33-36.

関連文献

阿部　永，2007．タヌキ．増補版日本産哺乳類頭骨図説，pp.242-243．北海道大学出版会，札幌．

千々岩哲，2006．川辺林と残存林がホンドタヌキ（*Nyctereutes procynoides viverrinus*）の行動圏利用に果たす役割．矢作川研究，(10): 85-96.

名和　明，2008．哺乳類．新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），p.78．名古屋市．

自然環境研究センター（編），2004．第 6 回自然環境基礎調査－種の多様性調査 哺乳類分布調査報告書－，p.213 環境省自然環境局生物多様性センター．

米田政明，2008．タヌキ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編）p.74．東海大学出版会，神奈川．

（曽根啓子、野呂達哉）

鳥類

①　名古屋市における鳥類の概況

「レッドデータブックなごや 2015　動物編　鳥類」の調査、執筆を行った小笠原昭夫氏（故人）から 2016 年に名古屋市のレッドリスト・レッドデータブック改訂に係る鳥類の取りまとめのバトンを受け、金澤　智（日本野鳥の会愛知県支部、名古屋市立大学・大学院医学研究科）が「名古屋市版レッドリスト 2020」を編集した。その後も引き続き鳥類調査データ取得、解析を続け、今回「レッドデータブックなごや 2025　動物編　鳥類」をまとめるに至った。

この間、市内の環境も大きく変貌し、名古屋駅前に新たな高層ビルが建ち、ビル屋上付近にハヤブサが現れることもあった。ハヤブサに限らず市中では、多くの猛禽類が観察される。例えば、名古屋城付近でオオタカの営巣が成功するなど環境の変化に巧みに対応するたくましい野鳥の姿を観察することもできる。一方、異常気象による線状降水帯の停滞による急激な増水に対応するための「大規模な河川整備計画」も、市内では着々と進んでいる。護岸改修に伴う河川敷ヨシ原部の消失により、多くの鳥類が観察され難くなるなどの弊害も見られる。工事終了後の環境回復がどの程度速やかに進み、野鳥が無事に戻ってくるのか、今後モニタリングしていく必要があると考えられる。

②　名古屋市における絶滅危惧種の概況等

「レッドデータブックなごや 2015」では、絶滅の恐れのある 45 種と情報不足 3 種の計 48 種に、国のレッドリストで情報不足とされているケリを加えた、合計 49 種が掲載されている。今回の「名古屋市版レッドリスト 2025」では、コアジサシを除き、カテゴリーに変更はなかった。このため、前回のレッドデータブックにおいて掲載された種の解説をベースとし、金澤が改訂を加えている。改訂にあたっては、2025 年時点で得られた新たな情報をできるだけ盛り込むこととした。

今回カテゴリーの変更があるコアジサシは渡り鳥であり、名古屋市を訪れ、この地で営巣を行う代表的な夏鳥である。2015 年から 2025 年にかけての、市内におけるコアジサシ飛来数の急激な減少は看過できない状況にあり、特に営巣に適した荒れ地などの営巣環境はほぼ失われてしまった。この営巣環境の喪失のインパクトは大きく、市内における飛来そのものも、ごくわずかしか確認できなくなってしまった。このため、今回のレッドリストでは、絶滅危惧Ⅱ類（VU）から絶滅危惧 IB（EN）にカテゴリーを上げざるをえない状況となった。

なお、データ解析の際に用いた鳥名、記載順は、日本鳥類目録第 8 版での分類体系の改訂を考慮し、これを反映させた。

以下に評価方法の詳細等について記載する。

レッドリスト掲載種の評価方法

「名古屋市版レッドリスト 2020」にて今後の解析に関してより定量的な要素を導入することとした。今回の解析では、「解析に用いたデータの概要」（表 5）にある、名古屋市野鳥生息状況調査、日

本野鳥の会愛知県支部での過去のデータ、および Cornell Laboratory of Ornithology at Cornell University が主催する eBird の愛知県内のデータを入手し、そこから市内のデータを再抽出し、デジタル情報として解析した。このため、当初目標であった定量的な評価システムの基本的なデータ処理の方向性はある程度完成させることができた。

表５　解析に用いたデータの概要

データ	出典等	データの抽出	データ期間／データ解析期間	抽出データ数	位置情報
鳥だより 鳥類データ	日本野鳥の会愛知県支部ウェブサイト公開データ	愛知県他のデータから名古屋市内を抽出	2010 年 12 月 ～2024 年 8 月	1,472	記録データが市名、区名等大まかすぎる場合は集計対象外とした。 町名が記録されている場合は Google の衛星画像を用いて「らしき場所」（鳥の種名から居そうな公園、池、河川など）を推察し、緯度経度を取得した。 ランドマーク（橋名、池名、公園名など）が記録されている場合は、Google を用いてその場所の緯度経度を取得した。
			2014 年 1 月 ～2024 年 8 月		
eBird	Aichi prefecture, Japan	愛知県内データから名古屋市内を抽出	2015 年 1 月 ～2024 年 7 月	822	調査開始点を位置情報とした。
			2015 年 1 月 ～2024 年 7 月		
名古屋市 野鳥生息状況 調査報告 2014	名古屋市	名古屋市内	2014 年 4 月 ～2015 年 3 月	858	調査地の代表点となる緯度経度を決め、調査地名からその座標とメッシュを求めた。
			2014 年 4 月 ～2015 年 3 月		
名古屋市 野鳥生息状況 調査報告 2022	名古屋市	名古屋市内	2019 年 11 月 ～2020 年 10 月	790	同上
			2019 年 11 月 ～2020 年 10 月		

注１）eBird データの入手にあたっては、（公財）日本野鳥の会からの協力を得た。データは、eBird へ使用許可のリクエスト（愛知県内データとして入手）を行い、許可されたデータをダウンロードし、使用した。なお、eBird への投稿データを用いた鳥類分布の把握等鳥類調査分析について、（公財）日本野鳥の会より報告があり、“全国鳥類越冬分布調査報告　2016-2022 年”と比較検討した結果を示していて、両データ間に強い相関がみられることがわかっている。

注２）eBird は、アメリカコーネル大学鳥類学研究室運営する市民参加型の野鳥観察データベースである。世界規模で展開されている鳥類情報記録アプリで、探鳥しながら、探鳥開始時間、経路、鳥の出現、羽数、特記事項を記録することができる。また観察時に録音した野鳥の鳴き声、写真等を紐づけすることもできる。（公財）日本野鳥の会でも、eBird を利用した探鳥記録のデータ入力を後押ししている。2021 年 10 月時点で、利用者は 71 万 1148 人。

注３）今回の解析に使用した、野鳥情報に関するエクセルデータは、執筆責任者である金澤、および（株）テクノ中部が保存している。

市内分布図

市内分布図の作成は、新實　豊（日本野鳥の会愛知県支部　支部長）が担当した。解説のページには、GIS ツール（QGIS）により新たに作成した市内分布図を掲載している。今回のレッドデータブックでは、鳥類データを 16 区ではなく、名古屋市内 3 次メッシュ（1 キロメッシュ：およそ 1km^2）に落とし込むこととした。名古屋市概況図（図 2）には、主要な河川、緑地、公園およびその名称を付記したので、市内分布図を見る際の参考として利用されたい（57 頁参照）。

市内分布図は、以下の手順で作成した。

１．4 つの鳥類調査データを合算（マージ）する。

２．確認した所在地又は経度・緯度から 3 次メッシュを求める。

３．調査期間を元に 2 つのグループに仕分けする。

　グループ１：2014 年～2019 年末、グループ２：2020 年～2024 年

４．グループ毎に、同一種で同じ 3 次メッシュのデータがあれば 1 つを残して削除する。

５．分布図に 2014-2019 年のデータを ●（黒丸小）、2020-2024 年のデータを○（白丸大）で示す。

今後の評価方法

今回の解析では、出現情報（総羽数ではなく、見つかるか否か）を市内分布図に反映させた。今後の方向性としては、“鳥類生息数、出現率”×“市内の環境データ（河川、公園、森林等）”の変化等を組み合わせ、“より的確なレッドリスト評価システム”を作る必要がある。この新たな評価システムでは、例えば、ある鳥の出現頻度が一時的に上昇したとしても、市内における生息環境の改善が見られない場合、レッドリストの分類の変更が行われない事を意味する。今後この様な考え方の対象となる野鳥は、“クロツラヘラサギ”、“トモエガモ”、“オオタカ”等になると推定される。現在これら 3 種に関しては、日本全体でみると生息数の増加がみられていて、市内で観察できる可能性も上がってきている。一方、市内におけるこれら 3 種に対する生息環境（それぞれ海浜、湖沼、森林）は、改善されているわけではない。このため、今回のレッドリストにおいても、これら 3 種に対する絶滅危惧の分類カテゴリーに変更は行われていない。今後の解析では、個体ごとのレッドリスト評価に加え、市内の生息環境がより改善されているのか否かについても現状分析し、評価の根拠としていく必要がある。

また、今後は、環境省によるデータ、調査協力者（日本野鳥の会愛知県支部）のデータ等をデジタル情報として蓄積し、分析する体制を整えることで、誰しもが様々な解析を行う事ができる様にすることを目標とする。このような体制作りには、データ保管を行うシステム構築も必要となるため、例えばデジタル情報保管を担うアーカイブが必要になると考えられる。

今後の課題等

鳥類データは、他の動植物調査と大きく異なり、市民一人一人が日常的に調査に参加し、データを積み上げていくことが可能な状況にある。調査を通じ、自分たちが住む町の環境の変化を鳥の存在を通し感じることもできる。現在、市内に生息する、あるいは、生息した全ての野鳥をリスト化する「グリーンデータブックなごや」の作成が検討されている。引き続きこのような事業が推進できるよう、皆様のご支援をお願いする。

今回のレッドデータブックなごや 2025 の作成にあたり使用した鳥類の調査データは、多くの方々による膨大な観察記録の蓄積によるものであり、この場を借りて、これらのデータ収集に協力して下さった多くのバードウォッチャーや、野鳥調査専門の方々に深く御礼申し上げる。特に日本野鳥の会愛知県支部および（公財）日本野鳥の会の皆様に深く御礼申し上げる。

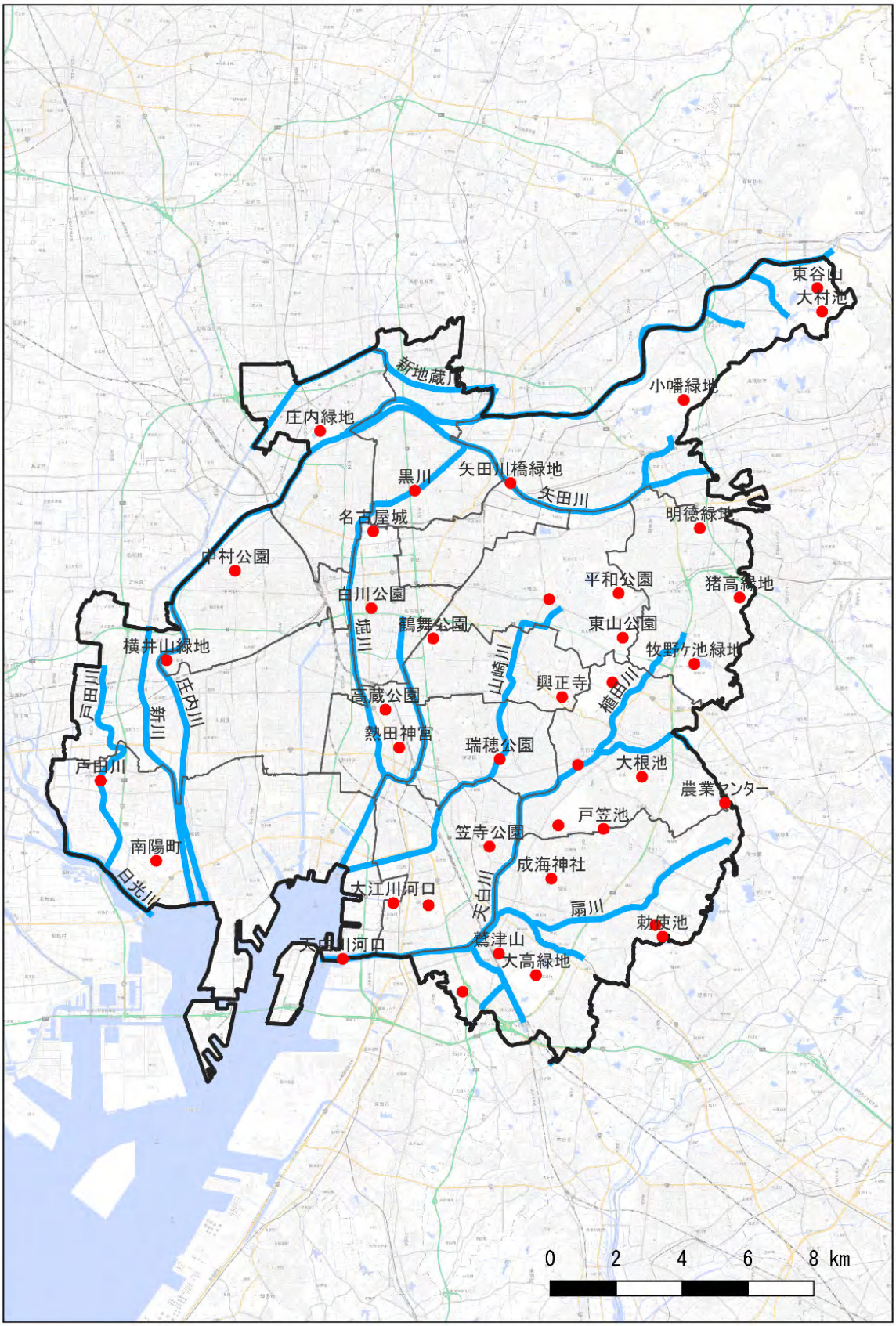

東谷山
大村池
新地蔵川
小幡緑地
庄内緑地
黒川
矢田川橋緑地
矢田川
名古屋城
明徳緑地
中村公園
平和公園
猪高緑地
白川公園
鶴舞公園
東山公園
横井山緑地
庄内川
牧野ヶ池緑地
興正寺
高蔵公園
熱田神宮
瑞穂公園
大根池
農業センター
戸笠池
笠寺公園
南陽町
成海神社
大江川河口
扇川
勅使池
鷲津山
大高緑地
0 2 4 6 8 km

図２　名古屋市概況図

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各鳥類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（鳥類）に関する凡例】

分類群名等

対象種の分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は「日本鳥類目録　改訂第 8 版」（日本鳥学会，2024）に準拠した。

和名・学名

対象種の和名および学名を各頁上の枠内に記述した。和名および学名は「日本鳥類目録　改訂第 8 版」（日本鳥学会，2024）に準拠した。

評価区分

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右上の枠内に記述した。参考として「第五次レッドリスト　レッドリストあいち 2025」（愛知県，2025）の愛知県での評価区分、および「環境省レッドリスト 2020」（環境省，2020）の全国での評価区分も併記した。

評価理由

対象種を名古屋市版レッドリスト掲載種として評価された理由について記述した。

形態

対象種の形態の概要を記述し写真を掲載した。写真は名古屋市内、愛知県内、もしくは国内で撮られたものを選んだ。

分布の概要

対象種の名古屋市内分布状況を 3 次メッシュ区分上で示した。なお、2014-2019 年のデータは●（黒丸小）、2020-2024 年のデータは○（白丸大）で示した。

生息地の環境／生態的特性

対象種の生息環境および生態的特性について記述した。

現在の生息状況／減少の要因

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

保全上の留意点

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

特記事項

以上の項目で記述しなかった事項を記述した。また項目により、IUCN レッドリストカテゴリーにおける最新の絶滅危惧カテゴリー分類を記載している。

引用文献

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁、雑誌名または発行機関の順に掲載した。

関連文献

対象種の関連する文献を掲載した。文献名には以下の略号を用い、対象種の掲載頁を示した。

以下「レッドデータブックなごや 2015」から引き続き掲載されている関連文献

愛知 83：愛知県，1983．愛知の野鳥．愛知県農地林務部.
愛知 95：愛知県，1995．愛知の野鳥．愛知県農地林務部.
愛知 02：愛知県，2002．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブックあいち－動物編，愛知県環境部自然環境課.
愛知 06：愛知県，2006．愛知の野鳥 2006．愛知県環境部自然環境課.

愛知 09：愛知県，2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブックあいち－
動物編，愛知県環境部自然環境課．
繁殖 78：（公財）日本野鳥の会，1980．鳥類繁殖地図調査．（公財）日本野鳥の会．
分布 88：（公財）日本野鳥の会，1980．動植物分布調査報告書（鳥類）．（公財）日本野鳥の会．
HBE1：Cramp, S. et al. (ed.)，1977．Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 1．Oxford University Press.
HBE2：Cramp, S. et al. (ed.)，1980．Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 2．Oxford University Press.
HBE3：Cramp, S. et al. (ed.)，1983．Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 3．Oxford University Press.
HBE4：Cramp, S. et al. (ed.)，1985．Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 4．Oxford University Press.
HBE8：Cramp, S. et al. (ed.)，1994．Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 8．Oxford University Press.
HBW1：del Hoyo, J. et al. (ed.)，1992．Handbook of the Birds of the World vol. 1. Lynx Edicions.
HBW2：del Hoyo, J. et al. (ed.)，1994．Handbook of the Birds of the World vol. 1. Lynx Edicions.
HBW3：del Hoyo, J. et al. (ed.)，1996．Handbook of the Birds of the World vol. 3. Lynx Edicions.
HBW4：del Hoyo, J. et al. (ed.)，1997．Handbook of the Birds of the World vol. 4. Lynx Edicions.
HBW5：del Hoyo, J. et al. (ed.)，1999．Handbook of the Birds of the World vol. 5. Lynx Edicions.
HBW9：del Hoyo, J. et al. (ed.)，2004．Handbook of the Birds of the World vol. 9. Lynx Edicions.
HBW10：del Hoyo, J. et al. (ed.)，2005．Handbook of the Birds of the World vol. 10. Lynx Edicions.
HBW15：del Hoyo, J. et al. (ed.)，2010．Handbook of the Birds of the World vol. 15. Lynx Edicions.
HBW16：del Hoyo, J.et al. (ed.)，2011．Handbook of the Birds of the World vol. 16. Lynx Edicions.
CBW1 : del Hoyo, J. et al. (ed.)，2014．Illustrated Checklist of the Birds of the World vol. 1. Lynx Edicions.

以下「レッドデータブックなごや 2025」において使用した関連文献であるが、全体の解析に関する部分である。このため、簡単な説明と共にここに示す。

eBird に関する文献:
Sullivan, B.L., C.L. Wood, M.J. Iliff, R.E. Bonney, D. Fink, and S. Kelling. 2009. eBird: a citizen-based bird observation network in the biological sciences. Biological Conservation 142: 2282-2292.
eBird web site: https://ebird.org/region/JP

eBird のデータから見た越冬状況 2021～2023　(eBird で行う鳥類越冬調査の可能性を探る)
https://ebird.org/region/JP/post/maps_created_from_ebird

本報告に使用した eBird 解析データ情報　((公財)日本野鳥の会　葉山政治、岡本裕子）:
eBird Basic Dataset. Version: EBD_relApr-2023. Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, New York. Apr 2023.
eBird Basic Dataset. Version: EBD_relApr-2024. Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, New York. Apr 2024.

eBird 等を用いた情報データベースの位置づけについて：　宮崎 佑介，市民科学と生物多様性情報データベースの関わり 日本生態学会誌 66：237 - 246（2016）

「レッドデータブックなごや 2025　動物編、鳥類」で用いた eBird 情報：
eBird Basic Dataset. Version: EBD_relJul-2024. Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, New York. Jul 2024.

鳥類分類に関する情報：
日本鳥学会（2024）　日本鳥類目録改訂第 8 版（2024 年 9 月発行）

鳥類　＜ヨタカ目ヨタカ科＞

ヨタカ　*Caprimulgus jotaka* Temminck & Schlegel, 1844

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025 繁殖	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025 通過	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

かつては夏期、市内各地に渡来し、鳴き声を聞く機会も少なくなかった。特に市東部（守山区～緑区）では夏期を通じて生息する地域も稀ではなく、繁殖の記録も散見されたが、近年著しく数が減り、市内で観察される機会は極めて稀になった。林縁を好む傾向があるが、生息地の都市化と餌となる飛翔性昆虫の減少のため、観察機会が急激に減少していると考えられる。

形態

全長 28～30cm。体は黒褐色～灰褐色の虫食い模様で、雄には外側尾羽の先端部に小さな白斑がある。翼は細長く先端が尖り気味で、尾は長め。嘴は外見上小さく扁平だが幅が広く、大きく口を開くことができる。脚は短く歩行には適さない。滑空、羽ばたき、ホバリングを組み合わせたフライトディスプレイを行う。



昭和区鶴舞公園　2010 年 5 月 9 日　林　正直

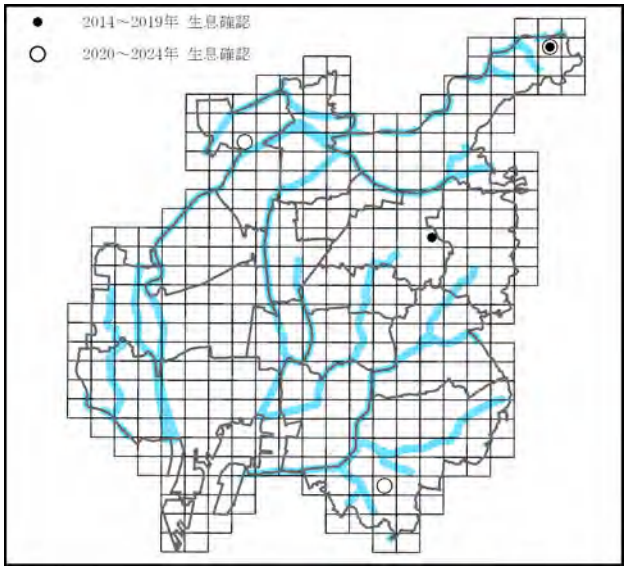
分布の概要

市内：夏鳥として東部に広く渡来していたが、近年著しく減少した。

県内：夏期、平野部～低山の林に生息し繁殖しているが、近年平野部では減少している。

国内：九州以北に夏鳥として渡来し繁殖するが、各地で減少が伝えられる。

世界：インド～中国～ウスリー地方などで繁殖し、高緯度のものは南下して越冬する。世界では特に減少の報告はない。



生息地の環境／生態的特性

平野部から低山帯の明るい林に生息する。県内での記録は 4 月～10 月が主だが、11 月の記録もある。日没後や夜明け前に林縁や草原上を飛び回り、大口をあけて昆虫類を捕食する。林内の地上に直接卵を産んで抱卵し、育雛する。細枝を趾でつかんで止まることは稀で、通常は横枝上に平行に、腹ばい姿勢で止まる。夜間キョキョキョキョキョ‥‥ときゅうりを刻むような声で鳴く。巣材を使わず地上に直接産卵するが、上空は林冠等で覆われていない場所を利用する。

現在の生息状況／減少の要因

1970 年代頃までは守山区、千種区、昭和区、天白区、緑区など市東部で広く繁殖の報告があり、1979 年には少なくとも市内 3 か所で繁殖していた。その後 1994 年に天白区で繁殖が確認され、守山区、緑区、熱田区で生息が確認されたのを最後に、1999 年には、1975 年以来の一連の調査で生息の記録が消えた。その後 2002 年 7 月相生山、2003 年 5 月東山植物園探鳥会、それぞれ 1 羽観察された。レッドブック 2025 調査対象期間で、特記事項としては、渡りの途中の個体と考えられる 2024 年 5 月庄内緑地公園の記録がある。

保全上の留意点

生息状況等の現状把握には、夜間調査が必須である。広く市民の方々にも興味を持って頂き、簡便に生息状況を把握するためのアプリ開発を進めることも有効な手段となるのではないかと考えられる。

引用文献

多田英行，2018．生態図鑑ヨタカ，Bird Research News 2018 年 4 月号

引用文献

愛知 83:149，愛知 95:85，愛知 02:140，愛知 06:86，愛知 09:135，繁殖 78:218，HBW5:359，CBW1:234.

（金澤　智）

鳥類　＜ペリカン目トキ科＞

クロツラヘラサギ　*Platalea minor* Temminck & Schlegel, 1849

評　価　区　分

名古屋市 2025		絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2　0　2　5	越冬	絶滅危惧Ⅱ類
全　　国 2020		絶滅危惧 IB 類

評価理由

かつて九州以外では迷鳥であったが、2008～2011 年に毎年続けて渡来しており、定着性も示しているので、評価対象とした。名古屋市藤前干潟には、越冬のために訪れる。1980 年代の深刻な個体数減少から、回復しつつあるが、引き続き世界的な協力体制で保全に臨む必要がある。

形態

全長 60～70cm。体は白く、しゃもじ形の嘴と脚は黒い。後頭部に冠羽があり、繁殖期には冠羽と胸が黄色になる。若鳥は翼端が黒く、冠羽が短い。首と脚を伸ばして飛ぶ。



港区藤前干潟（越夏個体）　2024 年 9 月 8 日　竹田　恵一郎

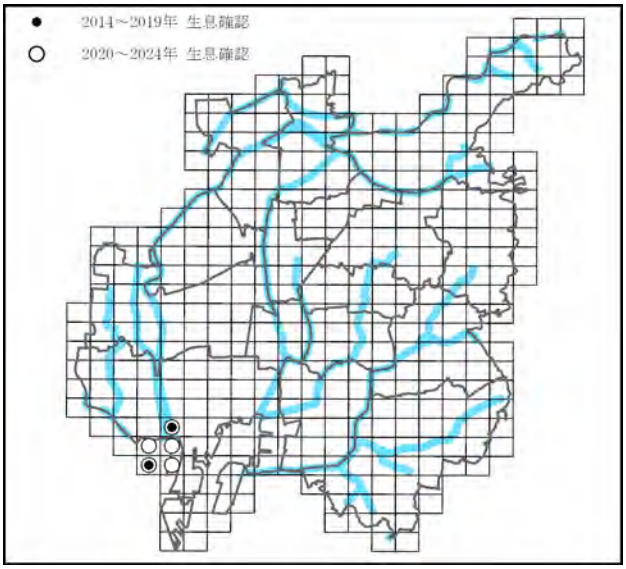
分布の概要

市内：南西部に 1～2 羽が渡来している。

県内：弥富市、矢作川河口部、豊川河口部、汐川河口部に稀に渡来している。

国内：毎冬、九州西部に複数渡来するほか、北海道、本州、四国、五島列島、奄美諸島、琉球諸島、南大東島にそれぞれ稀な渡来記録がある。

世界：朝鮮半島北部、中国東部・東北部（推定）、のごく限られた地域で繁殖し、日本、中国南部、台湾、ベトナム北部などで東アジア地域が主要な越冬地である。2022 年度世界一斉個体調査（越冬個体数、分布調査）によると世界に 6162 羽（前年より 18.9%増）確認された。最大は、台湾の 3824 羽で、日本では 683 羽、このうち熊本県で 223 羽確認された。



生息地の環境／生態的特性

7 月頃、海沿いの小島の岩壁で繁殖し、越冬地では干潟、河口、湿地、水田等に生息する。浅い水中で、少し開いた嘴を振子のように左右に振りながら、魚、貝、甲殻類、昆虫などを捕食する。ウブー、ウブーと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

2008 年 5～8 月 2→1 羽、2009 年 4～12 月 1 羽、2010 年 4～9 月 1 羽、2011 年 4～5 月、9 月 1 羽と庄内川河口部に渡来・生息した。

2020 年以降も不定期ではあるが、最大 2 羽の飛来が続いている。韓国・仁川では繁殖や保全の活動が進んでいる。山口県でも同様の取り組みがある。個体数の回復が見られているものの、充分な数とは言えない。日本国内においても繁殖保全に加え、越冬個体保全めざした取り組みなど、きめ細かな対策を講じる必要性がある。

保全上の留意点

大陸では食用として卵採取や、湿地の減少・環境汚染が生息を脅かしていると言われる。当地では夏期を中心に記録されているが、現在のところ繁殖は考えられないので、採餌場やねぐらの安全性の確保と、河口部を中心とした地形改変防止、湿地の縮小防止に尽力する必要がある。

特記事項

世界のレッドリスト（IUCN2017）で絶滅危惧（EN）に指定されている。

引用文献

日本クロツラヘラサギネットワーク・（公財）日本野鳥の会，2022．世界一斉個体数調査

関連文献

愛知 83:243，愛知 95:139，愛知 06:19，分布 88:65，HBW1:505，CBW1:394.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目タマシギ科＞

タマシギ　*Rostratula benghalensis* Linnaeus, 1758

評 価 区 分

名古屋市 2025		絶滅危惧 IB 類
愛 知 県 2025	繁殖	絶滅危惧 IB 類
	越冬	絶滅危惧 IB 類
全　　国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

1960 年代まで市内周辺部のあちこちで観察された本種が、現在極めて稀な種になり、市内では絶滅も懸念される。水田や淡水湿地を好むが、この様な環境の減少や乾田化が進んでいる影響も大きい。

形態

全長雄約 22cm、雌約 26cm。先端が少し下に曲がった長い嘴を持つ。目の周囲の白、胸側の白帯と、背の前後に伸びた 2 本の黄色い線が目立つ。雄の方が地味な色をしており、上面は濃淡褐色の斑模様、喉～胸は灰褐色、腹は白色。雌の上面は黒褐色で細かな横縞模様があり、胸は赤褐色、腹は白色。若鳥は雄に似ている。



タマシギ♂（左）、♀（右）
弥富市鍋田干拓　2018 年 4 月 30 日　金澤　智

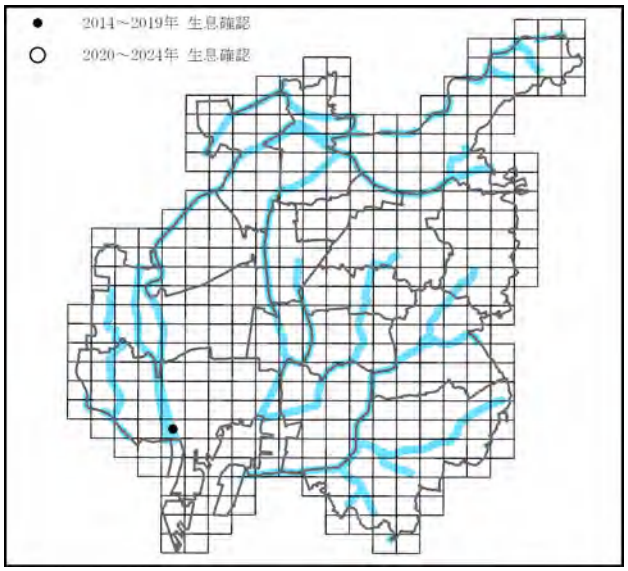
分布の概要

市内：近年の記録は南西部だけにある。

県内：平野部に広く留鳥として生息し、繁殖しているが、都市近郊では目立って減少している。

国内：本州中部～南西諸島でほぼ留鳥とされるが、関東のものは冬期暖地へ移動する。

世界：アジア南・東南部からオーストラリア、アフリカ、マダガスカル等で繁殖し、大きな季節移動はしない。世界での個体数に関する情報は不足している。



生息地の環境／生態的特性

平野部の水田、休耕田、蓮田、湿地等で主にミミズや昆虫類のほか草の種子等も食べている。通常草蔭に隠れているが、クイナ類よりは開けた場所で見る機会が多い。4～7 月頃、草むらや稲株のくぼみ等に草の茎や葉で皿形の巣を作り、3～6 卵（通常は 4 卵）を産んで繁殖する。雌が背を丸めてウウウ、ウウウと鳴いた後、両翼を上げて雄を誘う求愛の動作は独特。雌はコーコーコー･･･とも鳴く。一妻多夫で抱卵・育雛は雄が行う。

現在の生息状況／減少の要因

ここ 40 年間の名古屋市の調査結果では、1999 年、2004 年、2008 年に港区で観察された記録だけ。40 年以上前の組織的な調査記録はないが、過去には現在よりは多数の本種が市内に生息していたと考えられ、近年における水田や湿地などの縮小・消滅が減少の原因と考えられる。レッドブック 2025 調査対象期間では 2016 年 7 月藤前干潟付近のみ記録がある。2018 年 4 月弥富市鍋田干拓（掲載写真）では、交尾も観察できた。

保全上の留意点

都市化による湿地環境の減少をくい止め、本種の生息しうる環境を計画的に育成・保全していくことが必要である。潅水休耕田は、タマシギの様な湿地性鳥類が生息する上で重要であると考えられる。田んぼに計画的に水を入れ、なつみずたんぼを人工的に管理することで、ツルシギ、エリマキシギ、タマシギなどは、恩恵を受けることが期待される。生息数の把握には、夕暮れから夜間にかけての鳴き声を利用した調査が効果的とみられる。今後生息状況をより正確に把握する為にも、調査方法の改善も必須だと考えられる。

引用文献

小田谷嘉弥，2020．生態図鑑タマシギ，Bird Research News Vol.17 No.11
NPO 法人バードリサーチ，2016．シギ・チドリの生息地をつくる なつみずたんぼ 2016．シンポジウム資料

関連文献

愛知 83:84，愛知 95:47，愛知 02:99，愛知 06:47，愛知 09:125，繁殖 78:150，分布 88:143，HBE3:10，HBW3:300，CBW1:434.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

オオジシギ　*Gallinago hardwickii* Gray, 1831

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧 IB 類
愛知県	繁殖	絶滅
2025	通過	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		準絶滅危惧

評価理由

北海道を中心に、世界でもごく狭い地域で繁殖する種で、名古屋市は渡りの中継地にあたる。越冬期、オーストラリア東部で過ごすが、2019 年秋から 2020 年春にかけての異常気象による大規模森林火災、乾燥化により、世界全体でも 3.5 万羽から 2 万羽に減少したと推定されている。名古屋市内ではほとんど記録が途絶えて、絶滅の危険度がより高まっていると考えられる。

形態

全長 28～32cm。体の上面は褐色地に多数の黒い斑紋があり、頭部は淡褐色（頭央線、眉線、目の下の線、のど）と黒（頭側線、過眼線、頬の線）の縞模様をなす。胸、脇は淡褐色地に上胸部は黒褐色の細かな縦縞、下胸～脇には黒褐色の横縞があり、腹は白い。尾羽の先端近くに赤褐色の帯がある。嘴はまっすぐで 7～8cm と長く、淡褐色で先が黒い。脚は灰緑色。



丹波郡大口町　2024 年 8 月 23 日　村上　修

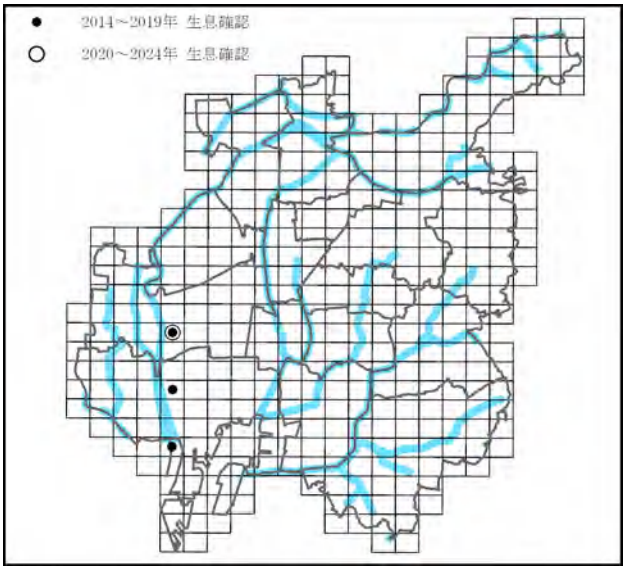
分布の概要

市内：北東部と南西部で記録されている。

県内：春・秋の渡り期に低地で少数観察され、1982 年には南設楽郡作手村で繁殖が確認された。その後の繁殖記録はない。

国内：本州中部以北に夏鳥として渡来し繁殖する（北海道に多い）ほか、四国、九州にも稀な繁殖記録があるが、近年減少している。

世界：サハリン南部、千島列島、ウスリー地方東南部で繁殖し、ニューギニア、オーストラリア東部、タスマニアで越冬する。世界的に減少していると考えられる。



生息地の環境／生態的特性

本州では山地、北海道では低地～山地の草原へ夏鳥として渡来し繁殖する。春・秋の渡り期には低地の水田や湿地に滞在し、ミミズのほか昆虫類やイネ科の種子等を食べる。繁殖期には空を飛び回りつつズビーズビー、ズビーヤク、ズビーヤクと鳴き立て、そのあと翼をすぼめ尾羽を開いて急降下しながらザーザザザザザという音（尾羽が風を切る音）を出す。この独特なディスプレイから、雷シギの別名を持つ。

現在の生息状況／減少の要因

市内では 1975 年 8 月の守山区大久手池、同年 9 月の庄内川河口付近での記録以後、1990 年 9 月港区南陽町で 1 羽、2014 年 9 月庄内川河口で 1 羽など、ごく限られた記録しかない。県内での繁殖記録は途絶えたままだが、渡り期の記録も多くない。淡水湿地の減少が本種の生息域を狭めている可能性が高い。

保全上の留意点

市内では、専ら渡り期の滞在だが、水田等淡水湿地の保全が必要と考えられる。

特記事項

繁殖地が日本を中心にごく狭い区域に限られているため、日本での繁殖適地の縮小がそのまま種の衰亡につながっている可能性が高い。

引用文献

（公財）日本野鳥の会，2020．オーストラリアで大規模森林火災を引き起こした異常気象により北海道内のオオジシギの繁殖数が推定で 42%減少したことを確認（3.5 万羽→2 万羽に！？），2020 年 7 月 3 日プレスリリース

環境省自然環境局生物多様性センター，2023．モニタリングサイト 1000 陸生鳥類調査情報，Vol.14 No.2

関連文献

愛知 83:123，愛知 95:70，愛知 02:76，愛知 06:71，愛知 09:159，繁殖 78:170，HBW3:492，CBW1:442.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

ツルシギ　*Tringa erythropus* Pallas, 1764

評価理由

池畔や水田等で普通に見られた種類だが、近年急速に減少してきた。県全体でも 1980 年代半ば以降の顕著な減少が報告されている。

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	通過	絶滅危惧 IB 類
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

形態

全長 31～34cm。夏羽は上下面とも黒く、上面には白い小斑が密布している。目の周りは白い。冬羽の上面は淡灰褐色で下面は白く、胸側と腋に灰褐色の横縞模様があり、暗褐色の過眼線と淡色の眉線がある。

夏冬とも飛ぶと背中に白い部分が出るが、翼には目立つ模様は出ない。若鳥は成鳥の冬羽に似るがより濃色で、下面全体に灰褐色の横縞がある。



愛西市石田町岩手　2007 年 4 月 21 日　林　正直

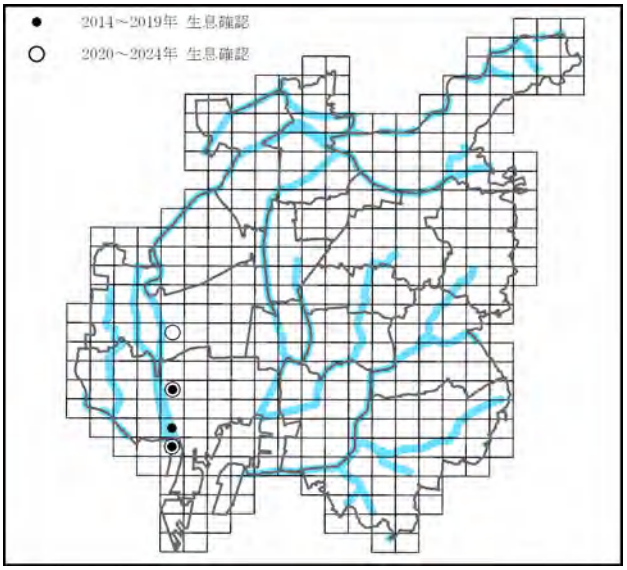
分布の概要

市内：西部でのみ記録されている。

県内：平野部で広く記録されているが、数は顕著に減っている。

国内：主要四島を始め、小笠原を除くほとんどの離島で旅鳥として記録され、本州中部以西では少数が越冬する。

世界：ユーラシア北部で繁殖し、ヨーロッパ中緯度域～アフリカ中部、アジア南部～インドネシアで越冬する。世界での個体数はほぼ安定している。1980 年～2013 年におけるフランスでの調査結果では、継続的で、顕著な増加傾向がみられている。



生息地の環境／生態的特性

海岸や河口部の干潟、海に近い水田、池沼畔等に旅鳥として渡来するが、南下は大陸沿いが主らしく、日本では春に多い。

春の渡りは他の旅鳥たちより早く、3 月上旬に渡来し始める。海水域、淡水域どちらにも生息し、昆虫類、小エビ、小貝、オタマジャクシ等を捕食する。チュイッと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

おもに庄内川下流・河口付近で記録されているが、近年急速に減少しており、1972 年 4 月庄内川河口で 320 羽、1975 年 4 月県内で 910 羽記録されていたものが、1998 年春には全国でも 468 羽と激減し、最近の市内では極めて稀になった。2006 年以降の記録は 2006 年 2 月 2 羽、2009 年 4 月 1 羽、2010 年 11 月 2 羽、2011 年 10 月 4 羽と、毎年 2 桁に届いていない。湿地環境の悪化がこの顕著な減少の主原因と考えられる。

保全上の留意点

名古屋市内の圃場は港区に約 50%が集中し、その中心は田んぼである。稲の収穫のための落水後、乾燥した田んぼが残ることになる。港区は、藤前干潟の後背地として機能できる価値ある地域である。この田んぼに計画的に水を入れ、なつみずたんぼ、冬場のあまみずたんぼを人工的に管理することでシギ・チドリ類の旅鳥、夏鳥、冬場のカモ類の等の貴重な餌場や休息の場を提供できる。今後このような保全のための提案を進めていきたいと考える。ツルシギ、エリマキシギ、タマシギなどは、特にこの恩恵を受けることが期待される。

引用文献

菊池有子・守屋年史，2015．フランスで越冬する沿岸性シギの動向，Bird Research News Vol.12 No.8

NPO 法人バードリサーチ，2016．シギ・チドリの生息地をつくる なつみずたんぼ 2016．シンポジウム資料

関連文献

愛知 83:107，愛知 95:61，愛知 02:102，愛知 06:61，愛知 09:129，分布 88:167，HBE3:517，HBW3:509，CBW1:446.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目カモメ科＞

コアジサシ　*Sternula albifrons* Pallas, 1764

評価理由

夏鳥として渡来し、砂礫地において集団で地上営巣する。藤前干潟近郊稲永町に 400 羽を超える集団営巣地があったが消滅した。工場跡地、ショッピングモール予定地など更地ができると、一過的な営巣地が形成される。市内では飛来数そのものが急激に減少している。

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧 IB 類
	通過	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

形態

全長 21～31cm。先の尖った長い翼と深く切れ込んだ尾が特徴。背と翼の上面は淡青灰色で、上尾筒と尾と下面は純白。夏羽では頭上～後頭は黒く、嘴は黄色で先端が黒く、脚は橙黄色。冬羽では頭頂が白、嘴は黒、脚は褐色に変わる。若鳥は頭頂、後頭、背、翼の上面は淡褐色と暗褐色の斑模様で翼端は黒い。額と下面は白い。



港区稲永町　2007 年 7 月 29 日　金澤 智

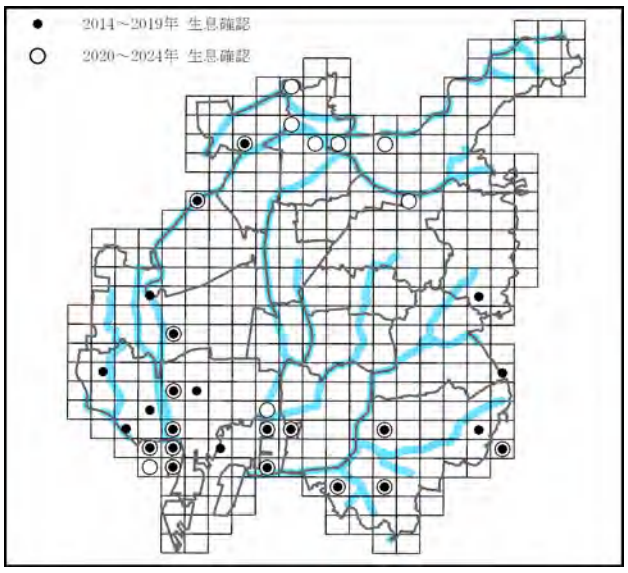
分布の概要

市内：海沿いの南部地域のほか、多くの区で記録されていたが、現在は確認できない。

県内：平野部に広く分布し各地で繁殖していたが、減少幅が激しい。

国内：本州、四国、九州、南西諸島に夏鳥として渡来し、各地で繁殖している。2024 年度鳥学会、自由集会での参加者からの聞き取りからは、関西では、横ばい傾向だが、関東以北での減少が目立つことが分かった。

世界：ユーラシア、アフリカ、東南アジア、オーストラリア東岸等で繁殖し、北方のものは南下して越冬する。



生息地の環境／生態的特性

4 月中旬～10 月上旬、南方から渡来し、海岸や河川、池沼等で小魚を捕食して生活する。5～7 月頃、水辺に近い砂礫地で集団繁殖する。犬や人などの外敵が巣に近づくと、集団で威嚇攻撃をする習性がある。飛びながらクリックリッと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

港区稲永ふ頭では、2002、2003 年それぞれ約 250 つがいが繁殖した（弥富市では 1998 年 7 月に、巣立った幼鳥を加え約 1,600 羽が記録された）。市内主要生息地、庄内川河口では、1888 年 3,000 羽以上、2009～2014 年程度までは 300~500 羽前後、営巣も確認されていた。今回の調査結果では、出現頻度は高いものの、繁殖地が消失した影響も大きく、飛来個体数が急激に減少した。

保全上の留意点

集団営巣に適する広い砂礫地が近年急速に減少している。また餌となるカタクチイワシの減少が影響している可能性が指摘されている。水場が確保された 1ha 以上の営巣地を確保することが望ましい。カラスや猛禽対策およびハクビシン等小型哺乳類などの侵入も解決すべき課題である。

特記事項

東京都水処理センターでは、ビルの屋上への誘致に成功したが、年により営巣数の増減が激しく、近年では、巣立ち雛が 0 の年もある。2024 年現在、国内最大の繁殖地は、大阪湾内にあるが、恒久的な保護区ではない。全国鳥類繁殖分布調査報告でも繁殖記録地点数の減少が指摘されている。

引用文献

NPO 法人リトルターン・プロジェクト，2011．10 年の歩み
鳥類繁殖調査会，2021．全国鳥類繁殖分布調査報告　日本の鳥の今を描こう　2016-2021 年，175pp.

関連文献

愛知 83:136，愛知 95:78，愛知 02:136，愛知 06:79，愛知 09:163，繁殖 78:182，分布 88:203，HB4:120，HBW3:657，CBW1:464.

（金澤　智）

鳥類　＜ペリカン目サギ科＞

ヨシゴイ　*Ixobrychus sinensis* Gmelin, 1789

評価区分		
名古屋市 2025		絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧 IA 類
	通過	絶滅危惧 IA 類
全国 2020		準絶滅危惧

評価理由

ヨシなどの生えた平地の水辺に普通に生息する夏鳥であったが、代表的な生息地であった庄内川、日光川河口付近でほとんど見られなくなったほか、近年市内ほぼ全域で急速に減少している。

形態

全長 34～37cm。日本産では最小型のサギ。体は黄褐色で下面は上面より淡色。雌の下面には褐色の縦斑がある。頭上は雄が黒、雌が赤褐色。風切羽が黒く、飛ぶと雨覆羽の黄褐色との対比が鮮やか。幼鳥は下面が白く、黒褐色の縦斑がある。脚は黄色で、飛翔時尾端から後方にやや長く出る。



緑区相川法螺貝池公園　2010 年 5 月 9 日　林　正直

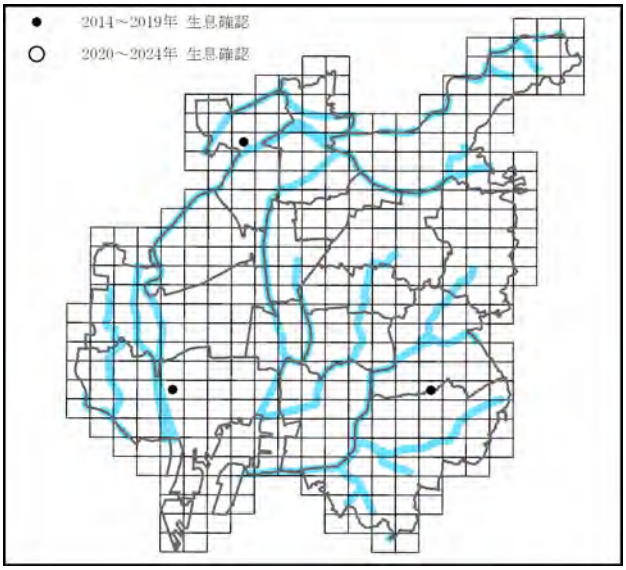
分布の概要

市内：東部、北部、南西部等おもに周辺部で記録されているが、1990 年代後半からは南西部での記録が減少している。2014 年以降記録がない。

県内：鍋田干拓地、衣浦湾周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺等での記録があるが、いずれも減少の傾向にある。

国内：主に夏鳥として渡来し、九州以北で繁殖するが近年減少が伝えられている。西日本では越冬するものもある。

世界：アジア東部の熱帯～温帯、ミクロネシア、ニューギニア等で繁殖し、北部のものは南下して越冬する。世界で特に減少しているとの報告はない。。



生息地の環境／生態的特性

低地のヨシ原、水田、湿地の草原等に雌雄または単独で生活し、群れることは稀。通常丈の高い草の中にひそみ、開けた所に出ることはほとんど無い。魚、カエル、ザリガニ、昆虫等を捕食する。5～8 月頃ヨシやマコモの茎の間に草の葉や茎を用いて浅い椀形の巣を作り、5～6 個の卵を産んで繁殖する。外敵が近づくと首を伸ばし、嘴を上に向けて周囲にまぎれる姿勢をとる。草の上を低く直線状に飛ぶ。低い声でオーオーと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

1990 年代前半までは庄内川や日光川の下流部でもよく見られた。名城公園や市東部のため池ではその後も記録が続き、特に緑区では毎年繁殖が確認されるほか、2001 年、2002 年、2003 年、2004 年、2005 年、2006 年と越冬も記録されたが、市全体としての個体数は減少している。本調査期間内では、地内全域でほぼ観察されなくなっている。一方、例えば、庄内川や日光川の下流部領域のヨシ原は 2024 年現在でも広範囲で保全されている。この為、夏季における生息環境が消滅している訳でもない。個体数そのものの減少と夏季における急激な気温上昇等による生息域の変化など、複合的な要因により減少している可能性もある。

保全上の留意点

水辺の丈の高い草原が生息地であるため、近年、市内でも減少傾向にあるヨシ原の保全、さらに創出することが望ましい。

関連文献

愛知 83:27，愛知 95:18，愛知 02:82，愛知 06:13，愛知 09:105，繁殖 78:58，分布 88:49，HBW1:426，CBW1:400.

（金澤　智）

鳥類　＜ペリカン目サギ科＞

ミゾゴイ　*Gorsachius goisagi* Temminck, 1836

評価区分		
名古屋市 2025		絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	通過	準絶滅危惧
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

世界でも日本だけでしか繁殖しない種で、詳しい情報はないが、個体数は漸減し、1960 年頃からは減少が加速している模様。沖縄や小笠原等離島特産の種に次いで、絶滅が懸念される。

形態

全長 46～52cm。頭は茶褐色。体の上面は暗い茶褐色。下面は淡い黄褐色地に茶褐色の縦縞があり、中央に黒褐色の縦斑がある。翼の風切羽は黒く、各羽の先端は茶褐色。嘴（サギ類にしては短い）は上嘴が黒く、下嘴は黄色。脚は暗緑色。



西区庄内緑地公園　2019 年 4 月 19 日　村上　修

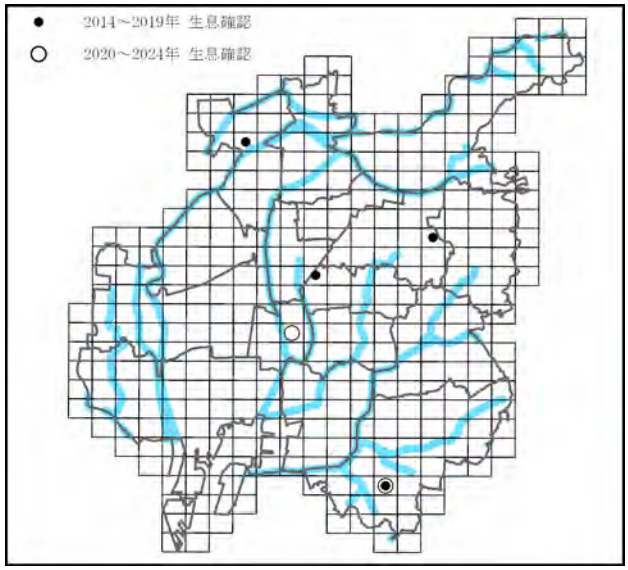
分布の概要

市内：散発的に記録され、千種区では繁殖記録もある。

県内：夏期、山地での観察記録があり、瀬戸市での繁殖記録もあるが、情報は乏しい。

国内：主要四島のほか松前小島（北海道）、佐渡、隠岐、伊豆諸島で夏鳥として繁殖記録があり、南西諸島等には冬鳥として少数が渡来する。

世界：日本で繁殖したものが、中国南部、台湾、フィリピン等で越冬する。日本での減少がそのまま世界での減少につながる稀少種である。



生息地の環境／生態的特性

繁殖期には沢沿いの山地の森に生息し、サワガニ、ミミズ等を捕食する。5～7 月頃、杉等の樹上に巣を作り、通常 3 個の卵を産んで繁殖する。危険を感じると体を垂直に伸ばし、嘴を上に向けて静止する擬態を行う。群れることはない。日没直後、日の出前 2 時間程度、ウシガエルに似た声でボォー、ボォーと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

図に示した千種区（平和公園 1984 年 5 月繁殖、同所 2005 年 5 月 1 羽）、熱田区（熱田神宮 1989 年 6 月）のほか、天白区（相生山 1988 年 10 月 1 羽）、昭和区（鶴舞公園 2001 年 5 月成鳥、若鳥各 1 羽、2002 年 5 月成鳥 1 羽）、緑区（若田橋 2005 年 10 月 1 羽）などの記録もある。2020 年以降記録がない。繁殖地が日本に限られ、世界での総個体数が 5,000－9,999 羽（IUCN より）と推定されるため、国外に繁殖個体群が存在するトキやコウノトリと同様に将来が危ぶまれる。

保全上の留意点

夏期、沢沿いの薄暗い森で繁殖し、渡りの際もおそらく森伝いに移動するので、そのような環境の保全が必要である。

特記事項

世界のレッドリスト（IUCN2020）では、絶滅危惧（VU）に指定されている。ミゾゴイは、Japanese Night Heron と英語で呼ばれ、夜行性の鳥と捉えられそうだが、通常薄暗い森林の中などで昼間採餌している。実際夜間採餌の報告もなく、単に夜に鳴く鳥と考えるのが良さそうだ。また採餌に関して、「レッドデータブックなごや 2015」では、魚を捕食すると記載していたが、“嘴の形からは魚の捕獲に適していない為、実際に魚を食べる頻度は極めて低いだろう”との記載があることから今回は“魚の捕食”部分を削除した。いずれにしてもなかなか観察しにくい謎の多い絶滅危惧種の 1 種と言える。

引用文献

川上和人，2009．生態図鑑ミゾゴイ，Bird Research News Vol.6 No.12

関連文献

愛知 83:28，愛知 95:18，愛知 02:83，愛知 06:14，愛知 09:105，繁殖 78:64，分布 88:51，HBW1:420，CBW1:400.

（金澤　智）

鳥類　＜フクロウ目フクロウ科＞

コノハズク　*Otus sunia* Hodgson, 1836

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧 IA 類
	通過	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		－

評価理由

愛知県の県鳥に指定される等、かつては県内で比較的観察されやすい鳥であったが、近年県内、市内とも顕著に数が減ってきている。

形態

全長 19～22cm。日本産では最小のフクロウ類。体は灰褐色で上面には黒褐色や黄褐色の虫食い状の斑があり、下面には黒褐色の縦斑がある（全体が赤褐色の赤色型もいる）。翼の下面は灰白色で、風切羽と尾羽には黒褐色の横縞がある。頭に短い羽角があり、目は黄色。嘴は黒い。



鳥取県八頭町ふるさとの森　2011 年 7 月 23 日　林　正直

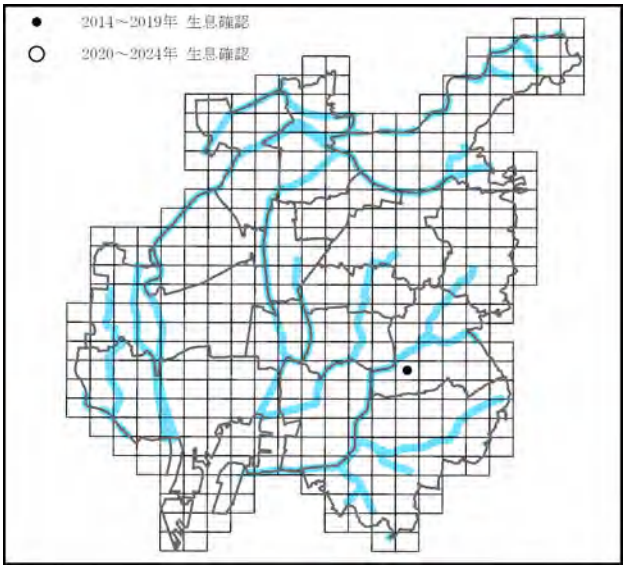
分布の概要

市内：秋期、渡り途中のものが稀に記録される。2014 年以降記録が無い。

県内：春・秋に平野部で散見されるほか、夏期、東三河の山地に生息し、ごく少数だが繁殖の可能性がある。

国内：主要四島に夏鳥として渡来し繁殖するほか、佐渡、隠岐、対馬、南西諸島、伊豆諸島で渡り途中のものが記録されている。

世界：ユーラシアの中緯度以南とアフリカで繁殖し、北部のものは南下して低緯度地域で越冬する。各地で減少しているというが、世界的に目立って減少はしていない。



生息地の環境／生態的特性

夏期、山地の深い森に生息し、夜間活動して主にミズスマシ、コガネムシ、蛾、バッタ、トビケラ等の昆虫を捕食する。5 月上旬～6 月中旬頃、スギ・ヒノキ等の林中の樹洞に産卵して繁殖する。日没後ブッキョッコウ（仏法僧）と聞こえる声で鳴くが、曇天時には昼間鳴くこともある。渡り期には市中の森等でも観察されるが、夜行性で秋には鳴かないので、記録は極稀にしか得られない。人家や倉庫に飛び込んで保護されることもある。

現在の生息状況／減少の要因

1972 年 10 月港区白水町で 1 羽、1973 年 10 月港区船見町で 1 羽、天白区相生山では 1974 年 10 月に 1 羽、1977 年 10 月に 1 羽、1994 年 10 月に 1 羽、2004 年 5 月に緑区大高緑地で 1 羽、2014 年 10 月に天白区相生山で 2 羽等と散発的に観察されているほかに、記録は無い。周辺一帯の開発が主原因と考えられる。

保全上の留意点

市内に繁殖地はなく、渡り期の通過のみが記録されているが、このような森林性の種には、飛び石状にでも森が存在することが渡りを続ける条件といえる。市内外の緑地を維持・管理することが、渡り中継地としてこの鳥の保全に不可欠である。

特記事項

従来、ヨーロッパ、アフリカ、アジア産のものをまとめて *O. scops* としてきたが、日本鳥類目録改訂第 7 版において、*O. sunia* とされた。これ以降 DNA を用いた分子系統学的研究により鳥類分類体系は大きく変化してきている。

関連文献

愛知 83:145，愛知 95:83，愛知 02:77，愛知 06:84，愛知 09:100，繁殖 78:212，分布 88:220，HBE4:454，HBW5:164，CBW1:498.

（金澤　智）

鳥類　＜フクロウ目フクロウ科＞

フクロウ　*Strix uralensis* Pallas, 1771

評価理由

大木が残る広い森と、それに隣接する耕地さえあれば、人家周辺にも生息できる種類だが、都市化が進む中でそのような環境は減少し続け、市内では本種に接する機会は近年特に減少している。夜行性である事から生息数調査は、日の出前後に調査を行っているかによるところが大きい。全体像が把握できていない為、市内における生息数把握には、フクロウに特化した調査も必要と考えられる。

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	繁殖	準絶滅危惧
	越冬	準絶滅危惧
全国 2020		－

形態

全長 48～52cm。上面は灰褐色で褐色や黒褐色の縦斑がある。下面は白地に黒褐色の縦斑がある。翼の下面は淡褐色地に黒褐色の横縞がある。尾には上下面とも黒褐色の横縞がある。頭は大きく、フクロウ類独特の平たい顔盤がある。目は黒っぽい。



西区庄内緑地公園　2007 年 12 月 23 日　金澤　智

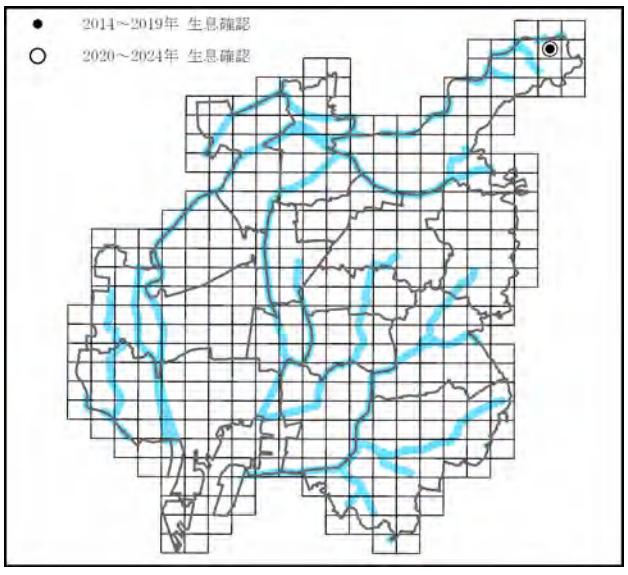
分布の概要

市内：近年は東北部にのみ記録がある。

県内：低地から標高 1200m ぐらいまでの山地に生息するが、数は多くない。

国内：主要四島のほか南千島、淡路島に留鳥として生息している。全国鳥類繁殖分布調査報告では、記録メッシュ数も増加傾向にある事から分布は拡大傾向にあるとの事である。

世界：ユーラシア大陸の中北部で繁殖し、目立った季節移動はしない。世界で特に減少しているとは見なされていない。



生息地の環境／生態的特性

大木のある低地～山地の森に周年生息し、夜間活動して主にネズミを捕食するが、時に小～中型の鳥や大型昆虫も食べる。老木の樹洞に営巣し、3～5 月頃、2～4 個の卵を産んで繁殖する。樹上に作られたタカ類の古巣を利用することもある。ホーホー、ゴロスケホーホーと低い声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

守山区の東谷山で 5、6、8 月に記録されていて繁殖の可能性があるが、近年他地域では散発的な記録もない。大型の樹洞営巣種だけに、大木のある森林の減少と、都市化に伴う採餌場（耕地、林縁部等）の縮小が本種の生息を困難にしつつある。

保全上の留意点

生息環境の確保が第一だが、ここまで開発が進んでは困難なことと言わざるを得ない。せめて現存する緑地や社寺林を保全するとともに林内に巣箱を架設することで、回復を図ることができるかもしれない。

引用文献

鳥類繁殖調査会，2021．全国鳥類繁殖分布調査報告　日本の鳥の今を描こう　2016-2021 年，175pp.

関連文献

愛知 83:148，愛知 95:85，愛知 02:139，愛知 06:86，愛知 09:167，分布 88:223，HBE4:550，HBW5:203，CBW1:510.

（金澤　智）

鳥類　＜カモ目カモ科＞

トモエガモ　*Sibirionetta formosa* (Georgi, 1775)

評　価　区　分

名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	越冬	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

世界でもアジア東部に分布が限られた稀少種で、世界的に減少しており、名古屋市周辺でもかつて記録されたような大群は見られなくなった（レッドデータブックなごや 2015 より）。この状況は、2019 年辺りから、劇的に変化した。一方名古屋市内の生息域の保全環境が改善しているとは言えないことから、今回ランクの変更は行わなかった。

形態

全長雄約 43cm、雌約 38cm。雄の顔には緑・淡黄・黒・白の独特な巴形の模様がある。胸は紫褐色で胸側に白線がある。背は灰褐色で、白・黒・茶色からなる数枚の長い肩羽が目立つ。雌は全身褐色の濃淡模様で、嘴の基部に小さく丸い白斑がある。雄のエクリプス（繁殖期後の換羽で生じるカモ類独特の羽毛）は雌に似ている。



清須市五条川　2023 年 2 月 1 日　村上　修

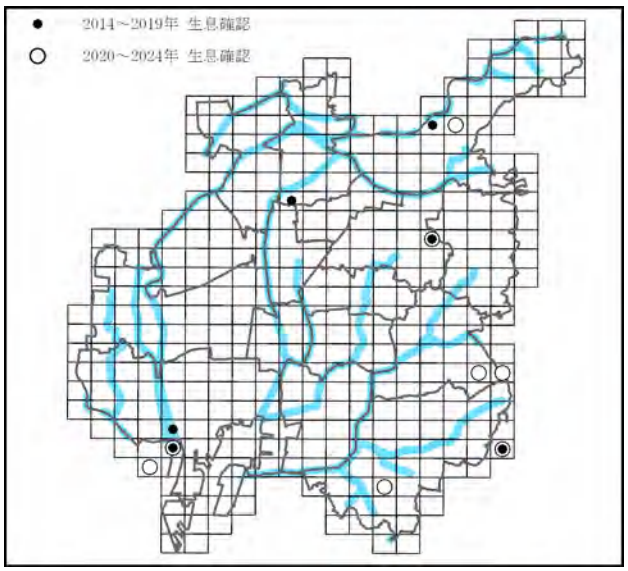
分布の概要

市内：主に西部に記録がある冬鳥。地域、年により数に変動があるが近年減少している。

県内：東郷町愛知池で 1975 年 1 月に約 2 千羽、1976 年 2 月に約 5 千羽が記録され、木曽川下流部で 2 万羽以上記録されたことがある。

国内：本州の東北地方中部以南（日本海側に多い）、四国・九州等に渡来する。全国規模での越冬個体数調査（バードリサーチまとめ）によると 2023/24 年の最大個体数は 1 月の 387,856 羽で、2022/23 年の最大数 167,757 羽から倍以上に増加している。トモエガモの代表的な飛来地は、鹿児島市の有明海沿岸部、長崎県諫早湾、不知火干潟、印旛沼等で 10 万羽を超える飛来数が記録されている。世界的にみると、主要な越冬地である韓国では、2020 年調査でも 406,351 羽がカウントされている。

世界：アジア東部の高緯度域で繁殖し、南下して越冬するが、狩猟や生息環境の破壊により急激に減少したとされていたが、現在はデータ不足である。



生息地の環境／生態的特性

冬期、河川の中・下流や湖沼、ダム湖などに生息する。他の水面採餌ガモと同じく、餌は草本の種子など植物質が主だが、水生昆虫やエビなどに加え林内のドングリなども食べる。夜行性であるため、夜間の餌場の特定も難しい。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川河口で 1998 年冬に 500 羽を越す群れが記録されたが、市内では 2007 年 2 月 6 羽、2007 年 12 月 50 羽、2010 年 1 月 87 羽、2011 年 1 月 8 羽、2013 年 12 月 5 羽（以上いずれも藤前干潟周辺）と、少数渡来するのみの稀少種。一方ここ数年の市内での観察数増加は、国内での飛来数増加が影響していると考えられる。韓国の越冬地での個体数変動が無いため、国内における急激な飛来数増加の原因は明らかでない。

保全上の留意点

増加傾向がみられる現状を最大限活用するため庄内川下流～河口部の環境保全は喫緊の課題である。

引用文献

桜井住明・神山和夫，2024．トモエガモ全国調査 2023／2024 年の報告，Bird Research News 2024 年 10 月号

関連文献

愛知 83:42，愛知 95:26，愛知 02:94，愛知 06:25，愛知 09:118，分布 88:80，HBE1:494，HBW1:602，CBW1:142.

（金澤　智）

鳥類　＜ツル目クイナ科＞

ヒクイナ　*Zapornia fusca* (Linnaeus, 1766)

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	通過	準絶滅危惧
全国 2020		準絶滅危惧

評価理由

1960 年代まで市内周辺部の各地で繁殖していたが、都市化、特に水田・池沼の消失により、著しく減少した。水田や淡水湿地を好むが、このような環境の減少、および田んぼでの乾田化が進んでいる影響が大きいとみられる。人目につかないわけではないが、正確な生息数の把握には、タマシギと同じく夕暮れから夜間にかけての鳴き声を利用した調査が効果的とみられる。今後市内における生息状況をより正確に把握する為に、夜間調査を取り入れるなど、調査方法の改善も必要である。

形態

全長 22～24cm。上面は暗緑褐色、下面は顔から腹まで暗い赤褐色で、下尾筒は黒褐色に白い横縞模様がある。尾は短め、脚は長めで赤い。飛んだとき、翼に模様は出ない。



犬山市新郷瀬川　2023 年 11 月 19 日　村上　修

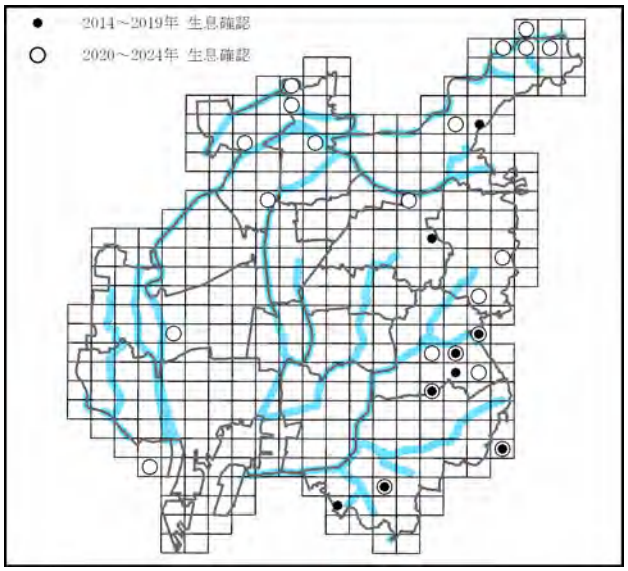
分布の概要

市内：主として東部の水辺に生息する。

県内：平野部に広く生息し繁殖しているが、三河部が中心で、尾張部での記録は比較的少ない。

国内：九州から北海道までほぼ全域に夏期渡来し繁殖しているが、北日本には少ない。対馬、伊豆諸島等では冬鳥。

世界：アジア南部・南東部～インドネシア、フィリピン、台湾等で繁殖し、北部のものは南下して越冬する。世界で特に減少しているとの報告はない。



生息地の環境／生態的特性

夏期、河川、池沼、水田、ヨシ原などの淡水性の湿地に生息し、昆虫類、魚類、甲殻類のほか草の種子などを食べている。岸辺の草むらのような狭い場所でも繁殖するが、草蔭に隠れて行動するので、人目に止まる機会は多くない。6～7 月頃、草むらや稲株の間に草の茎や葉で皿形の巣を作り、5～9 卵を産んで繁殖する。夕方から夜にかけ、キョッキョッキョキョキョ‥‥と次第に早口になる声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

市内東部のため池等に広く分布していたが、近年急速に減少した。湿地環境の減少が本種の生息域を狭めていると考えられる。

保全上の留意点

宅地を水田に戻すことはできないが、現在残っている水田やため池を保存し、特に草の生えた湿地環境を保全することが必要である。異常気象による線状降水帯の停滞による急激な増水に対応するための「大規模な河川整備計画」が名古屋市内では進んでいる。護岸修理に伴う汽水域の環境悪化は、ヒクイナの様なニッチを好む野鳥に対する影響が大きいことが推察される。工事終了後、迅速な現状復帰ができているか等モニタリングも必要である。またそのデータを次の改修工事に生かすなどの努力を行う事が肝要と言える。

特記事項

2004 年 2 月、天白区の天白公園でクイナ 2 羽と共に越冬中の本種 1 羽が確認された。本州中部以東での越冬は珍しい。

関連文献

愛知 83:81，愛知 95:46，愛知 02:98，愛知 06:45，愛知 09:124，繁殖 78:144，分布 88:138，HBW3:187，CBW1:348.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

ホウロクシギ　*Numenius madagascariensis* (Linnaeus, 1766)

評価理由

名古屋市南西部を渡りの中継地として利用しているが、1980 年代に比べ 1990 年代以後は明らかに減少している。

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	通過	絶滅危惧 IB 類
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

形態

全長 54～68cm。上・下面とも淡褐色地に黒褐色の斑点があり、ダイシャクシギに酷似するが、腰、下腹部、翼下面が白くない点で異なる。嘴が平均 16.5cm と非常に長く、大きく下に曲がっているところは、ダイシャクシギと似ている。



西尾市一色町　2022 年 4 月 22 日　村上　修

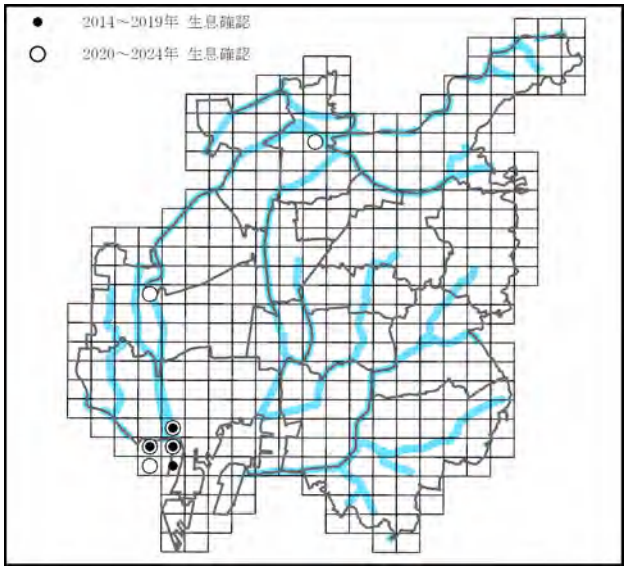
分布の概要

市内：南西部でのみ記録されている。

県内：伊勢湾奥部、三河湾沿岸部に渡来する。

国内：ほぼ全国に旅鳥として渡来し、本州、九州の一部、琉球等に少数越冬記録がある。

世界：中国東北部、沿海州、カムチャツカ等で繁殖し、台湾、ボルネオ南東部、セレベス、ニューギニア、オーストラリアで越冬する。（繁殖・越冬地ともほとんどダイシャクシギとは重ならない）。世界的に減少していると見なされている。



生息地の環境／生態的特性

主として 4～5 月と 8～10 月頃渡来し、広い干潟で甲殻類、貝、ゴカイ、小魚、昆虫類等を捕食する（内陸の湿地へ入ることも多く、満潮時には農地で見ることもある）。12 月、1 月、3 月にも観察されているが、名古屋市での越冬記録はない。カーリュー、ホーイーン、クーヒー等と聞こえるよく通る声で鳴き、ダイシャクシギと聞き分けることは難しい。

現在の生息状況／減少の要因

ダイシャクシギとともに、庄内川河口～木曽川河口付近が県内でも有数の渡来地で、1980 年代には毎年 25～30 羽（1987 年 5 月に 28 羽など）が飛来していたが、1990 年 8 月 9 羽、2003 年 5 月 7 羽と近年は 1 桁になった。名古屋市だけでなく周辺を含めた広い干潟の減少と後背地の環境悪化が減少の要因であろうと推測される。

保全上の留意点

広い干潟の保全と沿岸部での湿地を保全・創出することが望ましい。

特記事項

世界のレッドリスト（IUCN2024）で絶滅危惧種（EN）に指定されている。“衛星用送信機を用いた調査から、春の渡りでは、オーストラリアから中国東海岸や日本、台湾まで、秋の渡りでは中国東海岸からインドネシアまで、太平洋を一機の超えて渡りを行っている”ことが判明している。このことからも飛翔能力が高く、5000km 以上を数日間で渡ることが示唆されている。

引用文献

植田睦之，2004，生態図鑑ホウロクシギ，Bird Research News Vol.1 No.3

関連文献

愛知 83:119，愛知 95:67，愛知 02:105，愛知 06:68，愛知 09:132，分布 88:181，HBW3:505，CBW1:436.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

オグロシギ　*Limosa limosa* (Linnaeus, 1758)

評価理由

海水域、淡水域の両方で採餌する種だが、近年渡来数が減少している。

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	通過	絶滅危惧 IB 類
全国 2020		－

形態

全長 34～42cm。雄の夏羽では頭部～胸が赤褐色で、体の上面は赤褐色と黒と白の斑、上尾筒と尾の基半部は白く先端は黒い。翼を広げると黒い風切羽に白い帯が出る。胸側～脇には黒い横斑があり腹は白い。嘴は平均 9cm と長くまっすぐで、先は黒く基部は淡紅色。脚は長く黒い。雌の夏羽は雄に似るが、赤みが薄い。冬羽の上面は雄・雌とも灰褐色で淡色の羽縁があり、眉斑と喉は白く首～胸は灰褐色。若鳥は成鳥の冬羽に似るが褐色味を帯び、上面に黒褐色の小班がある。



港区藤前干潟　2022 年 9 月 11 日　村上　修

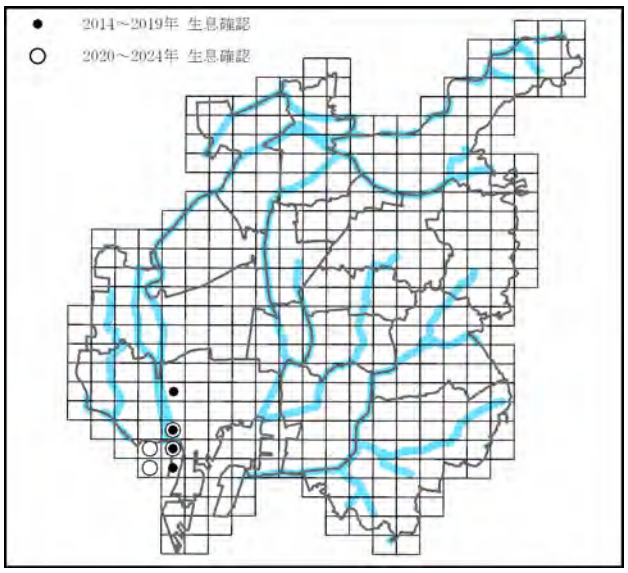
分布の概要

市内：南部特に南西部に記録が集中している。

県内：鍋田地区、矢作川河口部周辺、汐川干潟周辺に渡来する。

国内：小笠原諸島、伊豆諸島、大東諸島を除くほぼ全国に旅鳥として渡来し、九州では越冬するものもある。

世界：ユーラシア中緯度域、イギリス、アイスランドで繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ中・北部、アジア南部、東南アジア、ニューギニア、オーストラリアへ渡って越冬する。1980 年～2013 年におけるフランスでの調査結果では、ダイシャクシギと共に継続的で、顕著な増加傾向がみられている。またスウェーデンでは、バルチック海沿岸沖の Öland 島における卵やヒナの捕食動物であるキツネなどの数を管理することで、オグロシギの繁殖数の増加に寄与したこと報告されている。



生息地の環境／生態的特性

4～5 月と 8～10 月に海岸や河口の干潟、海に近い水田等に渡来するが、春より秋に多い。昆虫類、クモ類、貝類、ゴカイ、ミミズ、小魚等を捕食する。キッキッと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

中川区、港区、南区、緑区に渡来しているが、1980 年代半ば以降、個体数は、2010 年の例外を除いて下記のように減少している。1983 年 9 月 95 羽、1986 年 10 月 31 羽、2003 年 9 月 57 羽、2010 年 9 月 106 羽（この年の多さは'83 年以来）2014 年 9 月 12 羽。水田等淡水環境の縮小が主原因で数が減ったのではないかと考えられる。

保全上の留意点

近年の個体数減少の詳しい理由は解っていないが、当面湿地環境の保全を図りながら、他地域とも連携して渡来及び生息状況の綿密な解析を続ける必要がある。

特記事項

世界のレッドリスト（IUCN2016）で、準絶滅危惧（NT）に指定されている。

引用文献

菊池有子・守屋年史，2015．フランスで越冬する沿岸性シギの動向，Bird Research News Vol.12 No.8
守屋年史，2018．極北で繁殖するシギ・チドリに与える気候変動の影響，Bird Research News 2018 年 11 月号
Daniel Bengtsson，2018．スエーデンでオグロシギが復活，一般社団法人バードライフ・インターナショナル東京

関連文献

愛知 83:116，愛知 95:66，愛知 02:104，愛知 06:67，愛知 09:131，分布 88:178，HBE3:458，HBW3:501，CBW1:436.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

ウズラシギ　*Calidris acuminata* (Horsfield, 1821)

評　価　区　分

名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2　0　2　5	通過	絶滅危惧 IB 類
全　　国 2020		－

評価理由

原因はまだ解明されていないが、近年渡来数が顕著に減少している。

形態

全長 20～23cm。夏羽では頭上は茶褐色に黒い縦斑、体の上面は褐色に黒褐色の小斑、胸は淡褐色地に黒褐色の縦斑、腹は白く脇に黒褐色の小斑がある。冬羽では茶褐色味が淡くなる。若鳥の体の上下面は成鳥より黄褐色味が強い。やや下に曲がった嘴は黒っぽく、脚は黄緑色。



弥富市鍋田干拓　2018 年 5 月 1 日　金澤　智

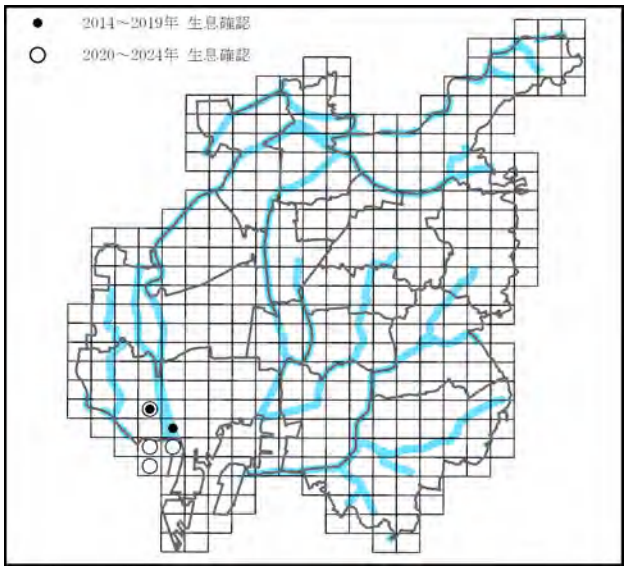
分布の概要

市内：南西部で記録されているが数は少ない。

県内：鍋田地区、矢作川河口付近、汐川河口部周辺等で記録されているが、やはり数は少ない。

国内：ほぼ全国に旅鳥として渡来するが、近年数が減っている。

世界：シベリア極北部のごく限られた地域で繁殖し、ニューギニア、トンガ、ニューカレドニア、オーストラリア、ニュージーランド等へ渡って越冬する。世界で特に減少しているとの情報は無い。



生息地の環境／生態的特性

春・秋に水田や休耕田など、主として淡水の湿地を訪れ、昆虫類、トビムシ等のほか、草の種子等の植物質も摂る。干潟にも出るが、農地で見ることが多い。比較的多く渡来していた 1970 年代には春、雄の求愛ディスプレイが見られたこともある。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川河口部を中心に記録され、似た環境に生息するツルシギとともに近年激減した種の一つ。1978～82 年の県内での記録は 60～100 羽であったが、最近では数羽の記録しかない（庄内川河口部周辺での近年の観察例：2007 年 5 月 3 羽、2010 年 8 月 1 羽、2013 年 9 月 1 羽）。減少の要因は明確でないが、生息環境（本種やツルシギの場合は特に水田、休耕田等の淡水域）の改変や質の低下が生息に重大な影響を及ぼしている可能性がある。2013 年春期の全国調査では前年度比 50%の減少が確認された。モニタリングサイト 1000 まとめ報告書では、2000 年から 2017 年における春期増減率が 10%減少と報告されている。

保全上の留意点

まず淡水環境の保全を図りながら、本種を始めとする水辺鳥類の個体数変動を詳しく解析することが必要である。エリマキシギ、タカブシギの項で記載しているが、ウズラシギも同様の状況にある。実際に乾田化が進む圃場の約 50%は港区にあり、その中心は田んぼである。港区は、藤前干潟の後背地として機能できる価値ある地域である。この田んぼに計画的に水を入れ、後背地の環境を改善し、保全していくことは重要である。

引用文献

環境省自然環境局生物多様性センター，2013-2014．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査ニュースレター2013 年春季概要・秋季概要

NPO 法人バードリサーチ，2016．シギ・チドリの生息地をつくる なつみずたんぼ 2016．シンポジウム資料

環境省自然環境局生物多様性センター，2020．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書，79pp+資料 109pp

関連文献

愛知 83:97，愛知 95:56，愛知 02:100，愛知 06:56，愛知 09:127，HBE3:336，HBW3:524，CBW1:438.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

タカブシギ　*Tringa glareola* Linnaeus, 1758

評　価　区　分

名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2　0　2　5	通過	絶滅危惧 IB 類
全　　国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

かつて春・秋に普通に見られた種であるが、1980 年代半ば以降著しく減少している。

形態

全長 20～23cm。夏羽の上面はほぼ黒褐色で白い斑点が散在する。上尾筒は白く、尾には白地に黒い横縞がある。下面は白く、顔～胸に黒褐色の縦斑がある。翼の下面は白く、上面に白帯などの目立つ模様はない。冬羽は全体にやや色が薄れてコントラストの弱い色あいになる。脚は緑がかった黄色で長い。



愛西市小茂井町　2021 年 5 月 4 日　西村　祐輝

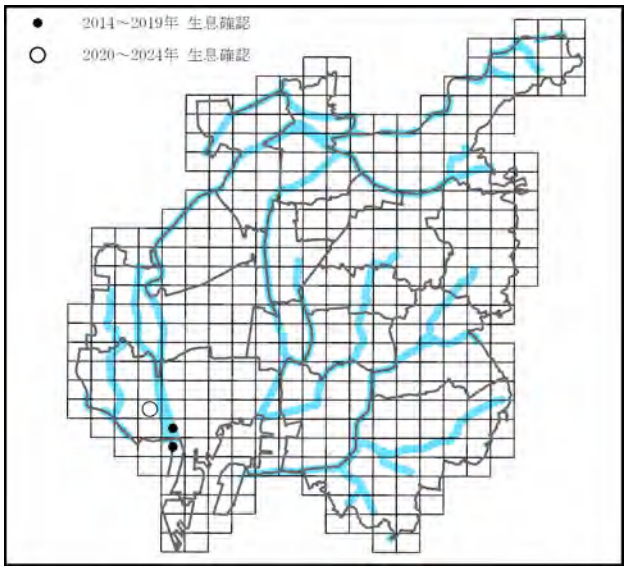
分布の概要

市内：春と秋、南西部を中心に東部、北部等にも記録がある。

県内：平野部で広く記録され、渡り途中の春・秋のほか少数越冬もする。

国内：北海道・南千島～南西諸島を始めほぼ全域で記録があり、本州中部以西（南）では越冬するものもある。

世界：ユーラシア北部（極北部は含まない）で繁殖し、アフリカ、アジア南部～オーストラリアに渡って越冬する。世界での個体数はほぼ安定していると見なされている。



生息地の環境／生態的特性

春・秋に、水田、休耕田、池沼畔等淡水性湿地に渡来する。単独または小群で生活し、昆虫類、クモ類、小貝等を捕食する。ピッピッピッピッピッと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

1980 年代までは 4～5 月、8～9 月に、港区、南区、緑区、天白区、名東区、守山区でよく観察されたが、近年市内では 2012 年 4 月 1 羽、2013 年 9 月 2 羽（いずれも港区藤高）などの記録が散見される程度に減少した。淡水湿地の減少が原因である可能性が高い。2012 年での全国調査では増加が確認された一方、その後減少傾向にある。モニタリングサイト 1000 まとめ報告書では、2000 年から 2017 年における秋期増減率がマイナス 59%と明らかな減少を示している。

保全上の留意点

専ら淡水域に生息する種なので、水田、休耕田等の淡水性湿地を保全することが必要である。エリマキシギ、ウズラシギの項で記載しているが、タカブシギも同様の状況にある。例えば、なつみずたんぼ、冬場のあまみずたんぼを人工的に管理することでシギ・チドリ類の旅鳥、夏鳥、冬場のカモ類の等の貴重な餌場や休息の場を提供できる。実際に乾田化が進む圃場の約 50%は港区にあり、その中心は田んぼである。港区は、藤前干潟の後背地として機能できる価値ある地域である。この田んぼに計画的に水を入れ、後背地の環境を改善し、保全していくことは重要である。

引用文献

環境省自然環境局生物多様性センター，2013-2014．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査ニュースレター2013 年春季概要・秋季概要

NPO 法人バードリサーチ，2016．シギ・チドリの生息地をつくる なつみずたんぼ 2016．シンポジウム資料

環境省自然環境局生物多様性センター，2020．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書，79pp+資料 109pp

関連文献

愛知 83:112，愛知 95:63，愛知 02:103，愛知 06:64，愛知 09:130，分布 88:173，HBE3:577，HBW3:512，CBW1:448.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目カモメ科＞

ズグロカモメ　*Saundersilarus saundersi* (Swinhoe, 1871)

評価区分		
名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	越冬	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

名古屋市近辺では近年漸増の傾向にあるが、繁殖地がアジア東部のごく限られた地域であるため、一旦衰亡に向かうと絶滅の危険性が高い。ユリカモメとの判別が比較的難しいことから調査データそのものが得られ難い可能性もあり、全体像を把握しきれていないと考えられる。

形態

全長 29～33cm。背と翼の上面は淡い青灰色。初列風切の前側は白く、先端に黒斑がある。胸～腹と尾は白い。嘴は短めで黒く、脚は赤い。頭部は冬羽では白く、目の後ろに黒斑があるが、夏羽では頭全体がまっ黒になる。若鳥は翼に黒斑、尾の先端には黒帯があり、脚は褐色。ユリカモメに似るが小型で、嘴の長さと色が異なるほか、翼端の黒斑の並びの模様等も異なる。



港区藤前干潟　2024 年 1 月 19　村上　修

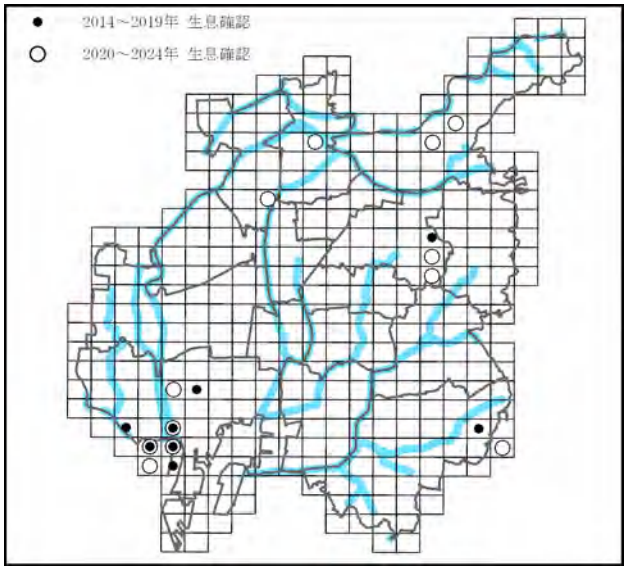
分布の概要

市内：南西部で冬期記録されている。

県内：伊勢湾奥部と汐川干潟で 1980 年代半ばから少数が定期的に越冬している。

国内：北海道～南西諸島、伊豆諸島に渡来しているが、九州以外では少ない。

世界：中国東部のごく狭い地域で繁殖し、ロシア極東部、朝鮮半島、中国等で越冬する。世界での総個体数は 14,400 羽と推測されている（IUCN より）。



生息地の環境／生態的特性

冬期海浜に渡来し、干潟の上を飛翔しながら、舞い降りて甲殻類を捕食する。ユリカモメの群中にいることもある。

現在の生息状況／減少の要因

市内では 1985 年 2 月庄内川河口での記録以来、滞在期間、個体数とも漸増し、近年は毎冬 10 羽以上が越冬するようになった（2008 年 11 月 10 羽、2010 年 3 月 12 羽、2011 年 2 月 15 羽、2012 年 2 月 23 羽、2012 年 12 月 21 羽、2013 年 3 月 22 羽、2014 年 1 月 25 羽）。2015 年モニタリングサイト 1000 では、一斉調査期間に前年度冬期と比較して 853 羽減少（マイナス 34%）の 1619 羽との報告がある。一方全国鳥類越冬分布調査での記録メッシュ数は増加傾向にある。

保全上の留意点

上述のように、記録は近年増加しているが、繁殖地が限られた狭い区域であり、越冬地、繁殖地連繋しての保全が求められる。

特記事項

1984 年に中国東部で初めて繁殖が確認された。繁殖地周辺が農地やエビ養殖池として開発されつつあり、このまま進めば近い将来絶滅するとの警告も出されている。世界のレッドリスト(IUCN2018)で絶滅危惧（VU）に指定されている。

引用文献

環境省自然環境局生物多様性センター，2016．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査平成 27 年度冬期調査報告，68pp.
環境省自然環境局生物多様性センター，2020．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書，79pp+資料 109pp
植田睦之ほか，2022．全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年，NPO 法人バードリサーチ・（公財）日本野鳥の会，169pp.

関連文献

愛知 83:252，愛知 95:75，愛知 02:89，愛知 09:112，分布 88:197，HBW3:617，CBW1:456.

（金澤　智）

鳥類　＜タカ目タカ科＞

ハチクマ　*Pernis ptilorhynchus* (Temminck, 1821)

評価理由

名古屋市は主に秋（9～10 月）の渡りの通過点だが、市内東部にはわずかに繁殖環境も残っている。全国的に数が減っているとされる種なので、保全対策を積極的に考えていく必要があるが、個体あたりの 1 日の行動範囲（数百~千 ha 規模、数 10 ㎞程度離れたハチの巣を狩りに出かけるなどの報告もある）が極めて広く、有効な対策を打つには、行動範囲に関する情報など、ハチクマに関する生息環境情報が不足している感がある。

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	通過	－
全国 2020		準絶滅危惧

形態

全長雄約 57cm、雌約 61cm。トビよりやや小型で、首が長く見えるのが特徴。色彩は淡色型から暗色型まで変化に富む。飛翔時、雄では翼と尾に太い横縞模様が目立つが、雌や若鳥にも雄ほどには目立たない細い横縞模様がある。



田原市渥美の森　2023 年 10 月 5 日　村上　修

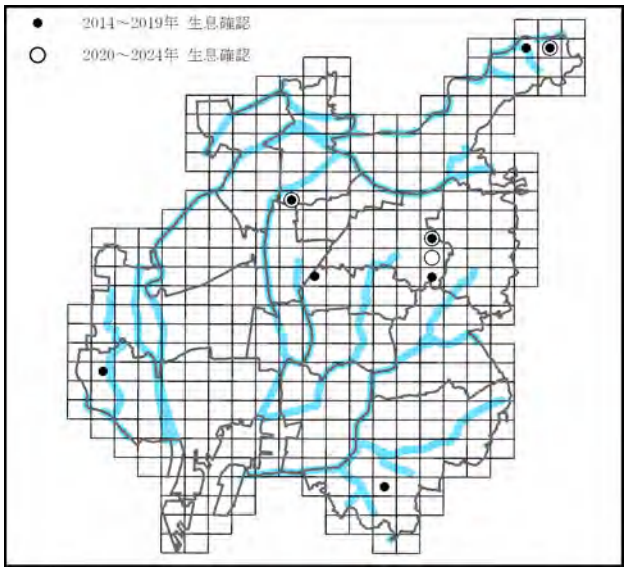
分布の概要

市内：おもに東部で秋の渡り期に観察されるが、1994 年には猪高緑地で繁殖が確認された。

県内：秋の渡り期に各地で観察され、特に渥美半島伊良湖岬での渡りは良く知られている。茶臼山等での繁殖記録もある。

国内：夏鳥として 5～10 月頃滞在し、主要四島および佐渡で繁殖する。

世界：アジア中・東部の中緯度域で繁殖し、南～東南アジアで越冬する。



生息地の環境／生態的特性

低山、丘陵地のアカマツや広葉樹の林に生息し、樹上に営巣する。クロスズメバチやアシナガバチ類を主食とするため、採餌も林内で行うことが多いが、林縁部でカエル、ヘビなどを捕食することもある。ナラ類やアカマツの樹上に巣を作り、6 月頃、通常 2 卵を産んで繁殖する。飛翔中、両翼を背の上で打ち合わせるような独特な求愛行動をする。鳴き声はピーウー、ピーウーと鳴くほか、タァー、タァーとコジュケイに似た声も出す。

現在の生息状況／減少の要因

市内東部での記録が主だが、守山区の東谷山、小幡緑地や名東区の猪高緑地ではほぼ毎年 9～10 月に観察されているほか、上記のように稀な繁殖記録もある。山林の伐採などによる生息環境の悪化が全国的な本種減少の原因と推測される。

保全上の留意点

オオタカに比べて、繁殖を含む生息状況に不明の点が多い。名古屋市は主として渡りの通過点であるが、今後生息状況をより正確に把握して、繁殖環境をも保全・創出することが望まれる。

関連文献

愛知 83:61，愛知 95:35，愛知 02:96，愛知 06:34，愛知 09:121，HBE2:13，HBW2:111，CBW1:520.

（金澤　智）

鳥類　＜タカ目タカ科＞

チュウヒ　*Circus spilonotus* Kaup,1847

評　価　区　分

名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県	繁殖	絶滅危惧 IA 類
2　0　2　5	越冬	絶滅危惧Ⅱ類
全　　国 2020		絶滅危惧 IB 類

評価理由

冬鳥として少数定着しているが、広いヨシ原という特殊な環境に適応した野鳥である。ヨシ原は、ソーラーパネル設置に適した場所であるため、チュウヒ保全と開発の間で軋轢が生じやすい。愛知県下では、木曽岬干拓地、矢作川浄化センターでの開発工事が典型的な例である。日本での繁殖地は北部（北海道、南千島、青森県、秋田県）以外では石川県、伊勢湾岸北部ほか数か所に限られている。木曽岬干拓地では、開発工事後、数年を経過して営巣が確認できなくなり、2020 年以降は越冬個体数の減少も顕著である。

形態

全長雄約 48cm、雌約 58cm。トビよりやや小さいタカで、雄には色の変異が多く、頭～背は灰色、黒色、灰褐色等。腰が白く、中央の尾羽は灰色。下面には白地に暗褐色の縦斑があり、翼の下面は白っぽい。雌は頭部が淡褐色、体の上面は褐色、下面は茶褐色のものが多い。若鳥は上下面とも黒褐色で下面に縦縞があり、翼には横縞があるが、変異も多い。滑翔時両翼を V 字形に保つ。



名古屋市港区　2024 年 1 月 7 日　西村祐輝

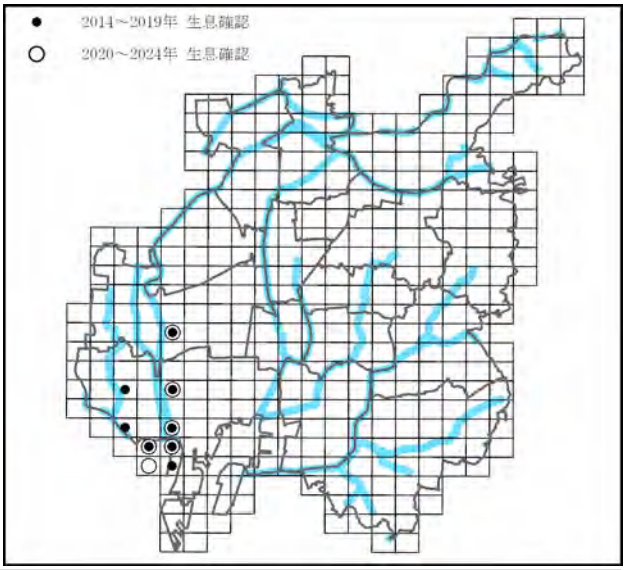
分布の概要

市内：主に南西部で記録されている。

県内：ヨシ原のある川の下流部や沿岸部に主に冬鳥として渡来するほか、伊勢湾奥部のヨシ原では少数が繁殖している。

国内：北海道、南千島、東北地方北部で夏鳥として繁殖し、本州以南や洋上の島々では主として冬鳥（石川県、滋賀県、愛知県、三重県及び四国東北部、九州東北部には少数留鳥もいる）。

世界：アジア東部の中緯度域、ニューギニア等で繁殖し、北方産のものは温帯～熱帯へ南下して越冬する。世界での個体数に関する情報は少ないが、特に減少していない模様。



生息地の環境／生態的特性

沿岸部のヨシ原（営巣地、ねぐら）と周辺に農地（餌場）のある環境に生息し、ネズミ、小型～中型の鳥類、魚類等を捕食する。4～7 月頃、ヨシ原の地面にヨシやススキの茎を積み重ねて巣を作り、5～7 卵を産んで繁殖する。ヨシ原の上空を低く飛び、ダイビングして、獲物を狙う。

現在の生息状況／減少の要因

市内での分布の中心は庄内川、新川、日光川の下流部～河口部一帯。2003 年には庄内川河口近くで 2 番（つがい）が営巣していたが、特にヨシ原環境の劇的な変化の影響もあり、繁殖はほぼ観察されなくなり、非繁殖期が中心となった。

保全上の留意点

かつて冬鳥であった本種が一旦繁殖種となり、再び冬鳥に戻ってしまった。ヨシ原の保全とともに、繁殖期におけるカメラマン等による過剰な人の接近を抑える必要がある。

特記事項

不定期ではあるが、「チュウヒサミット」が開催され、国内におけるチュウヒに関する情報共有が行われている。“チュウヒサミット 2024”では生息環境保全の必要性が議論され、保全に向けた提言が採択された。2020 年全国調査で 136 つがいの繁殖が確認されている（公財　日本野鳥の会しらべ）。

引用文献

チュウヒサミット 2017 抄録、チュウヒサミット 2024 抄録,
（公財）日本野鳥の会，2020. 絶滅危惧鳥類「チュウヒ」の全国繁殖つがい数が明らかに ～全 136 つがいで、国内最少のタカ科鳥類であることが判明～，2020 年 12 月 10 日プレスリリース

関連文献

愛知 83:71，愛知 95:41，愛知 02:86，愛知 06:40，愛知 09:109，分布 88:118，HBE2:105，HBW2:137，CBW1:536.

（金澤　智）

鳥類　＜タカ目タカ科＞

サシバ　*Butastur indicus* (Gmelin, 1788)

評価理由

かつては都市周辺でも普通に繁殖していたが、近年減少傾向が目立つ。水田脇の山林などに営巣し、カエルやヘビを捕食していた生活様式が、田畑の減少とともに維持されにくくなったためかと考えられる。沖縄県自然保護課からのサシバ飛来数調査報告書によると、1973 年調査開始以来一貫して減少傾向にある。

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧 IB 類
	通過	準絶滅危惧
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

形態

全長 47～51cm。背面は褐色。成鳥の腹面には白地に褐色の横縞（若鳥は褐色の縦縞）模様がある。ほおは灰色でその上に白い眉線がある。のどは中央が縦に黒く、左右は白い。尾は灰褐色で数本の黒帯がある。脚は黄色。



田原市浦町　2022 年 4 月 17 日　西村祐輝

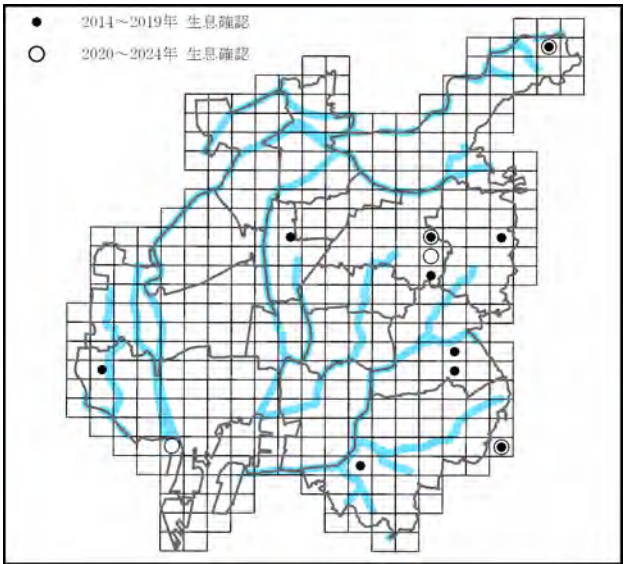
分布の概要

市内：主に周辺部（特に東部）で春と秋に記録されているが、数は多くない。

県内：ほぼ全県下に記録があり、低地～低山で繁殖記録も多かったが、近年減少の傾向にある。

国内：北海道と東北地方北部を除くほぼ全国に夏鳥として渡来し、本州、佐渡、隠岐、四国、九州、伊豆諸島では繁殖している。奄美以南では越冬するものもいる。2024 年秋、沖縄伊良部島通過個体は、7771 羽と昨年度より 5000 羽少なかったとのことである。一方宮崎県金御岳での渡り情報からは、約 3 万羽の通過個体がカウントされた。このため“2024 年度の日本本土（北海道を除く）の繁殖は概ね成功したと推定している”とのことである。

世界：日本の他、中国東北部、アムール南部、ウスリー、北朝鮮などで繁殖し、中国東南部、台湾、インドシナ半島、マレーシア、フィリピン、インドネシアなどへ渡って越冬する。



生息地の環境／生態的特性

3 月下旬～5 月頃渡来し、低地～低山地のアカマツ林や雑木林で繁殖する。林縁部や水田でカエル、ヘビ、昆虫などを捕食する。9 月下旬～10 月中旬頃、南方（当地方では西方）への渡りの最盛期を迎え、渥美半島での大群の渡りが有名だが、市内でも少数の移動を見ることがある。繁殖期にピックイーまたはキンミーと聞こえる声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋市は元来通過地点だが（繁殖情報もある）、近年見る機会が漸減している。近郊の農地（特にサシバが好む谷戸）の休耕田化が進み、餌生物が少なくなったためではないかと指摘されている。

保全上の留意点

1970 代頃、農薬の大量使用による餌生物の減少があったが、現在は上述のように、全く別の原因で、地域的に田畑の動物が減少している。日本の産業構造が以前と変わり、容易に復活できる状態ではないが、里山の原風景、谷戸の水田の復活が、減少に歯止めをかける有力な手段であると考えられる。

引用文献

環境省自然環境局野生生物課，2013．サシバ保護の進め方（平成 25 年 12 月），27pp.
沖縄県自然保護課，2024．2024 年サシバ飛来調査まとめ（2024 年 10 月 31 日）

関連文献

愛知 83:68，愛知 95:39，愛知 02:97，愛知 06:38，愛知 09:122，繁殖 80:122，HBW2:167，CBW1:548.

（金澤　智）

鳥類　＜フクロウ目フクロウ科＞

アオバズク　*Ninox japonica* (Temminck & Schlegel, 1845)

評価区分		
名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧 IB 類
	通過	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		－

評価理由

かつて市内でも寺社林等で普通に繁殖していたが、現在繁殖記録は激減している。今後、夜間調査も取り入れた実態把握により、より正確な実情をつかみ、どのように保全していくのかを検討すべきだと考えられる。

形態

全長 27～31cm。頭部～体の上面は黒褐色で尾には黒帯がある。体の下面は白地に黒褐色の縦斑がある。翼の下面は白と暗褐色の横縞模様。ズクと名が付くが頭上に羽角はなく、尾は長く脚も長めで、顔に目立つ顔盤がないのでフクロウ類にしてはタカに似た体形といえる。目は黄色、嘴は黒、脚指には羽毛が無く黄色。



三重県いなべ市猪名部神社　2017 年 7 月 17 日　林　正直

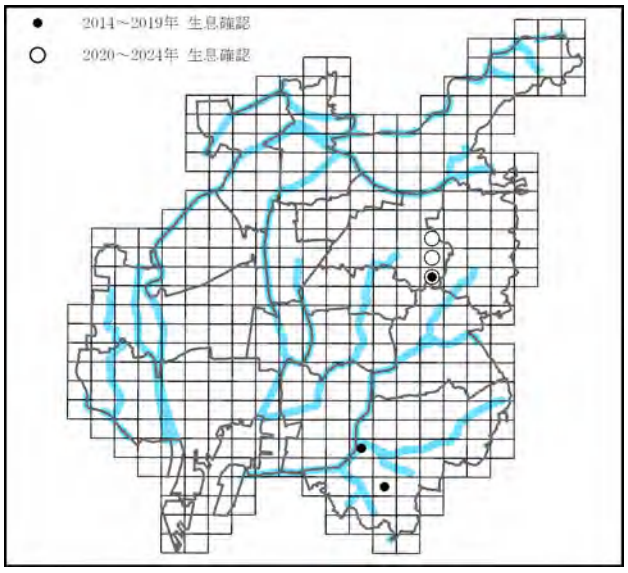
分布の概要

市内：主に初夏と秋、老木の多い地域で観察されている。東山公園を例に考えると、アオバズクは、広大な丘陵地と夜間ヒトの活動がほとんどない開けた空間（動植物園内）を利用していることが分かる。一方ヒトとの接触をさける傾向が強まっている為か、昼間姿を見かける機会が減ってきている様に感じられる。

県内：低地～山地の森で観察され、各地で繁殖もしている。

国内：ほぼ全国に夏鳥として渡来し、離島以外のほとんどの地域で繁殖しているが、本州北部と北海道では少ない。

世界：アジア南部～東部、東南アジアの島々で繁殖し、北のものは南へ渡って越冬する。世界で特に減少しているとの報告はない。



生息地の環境／生態的特性

4 月下旬から 10 月末頃にかけて標高約 1000m 以下の森に渡来し、森の中や林縁部などで夜間ヤママユガ、タガメ、シオカラトンボ、トノサマバッタ、ミンミンゼミ等比較的大型の昆虫を捕食して生活する。小鳥やコウモリを捕ることもある。5～7 月頃、老木の樹洞に産卵して繁殖する。巣箱を利用することもある。ホッホ、ホッホと高い声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

熱田神宮、名古屋城、東山公園等老木がある地域に渡来しているが、近年繁殖記録があるのは熱田区高座結御子神社（1989）、東山公園付近等数か所だけで、市内各地で繁殖していた 1960 年代とは隔世の感がある（2003 年 7 月南区星崎町で 1 羽、2004 年 5 月庄内川河口部で 1 羽などの散発的な記録はある）。繁殖が激減した主な原因は、大木の伐採による営巣場所の消失と、主食とする大型昆虫の減少だと考えられる。本種はフクロウ科の中では比較的人家の近くや都会でも繁殖できる鳥である。東山公園では、レッドブック 2025 調査期間中も繁殖が成功した可能性がある。

保全上の留意点

緑地の積極的な造成・保全を図ると共に、巣箱をかけて樹洞の不足を補うことも、有効な手段の一つと考えられる。

関連文献

愛知 83:147，愛知 95:84，愛知 02:138，愛知 06:85，愛知 09:166，繁殖 78:216，分布 88:222，HBW5:233，CBW1:480.

（金澤　智）

鳥類　＜ハヤブサ目ハヤブサ科＞

ハヤブサ　*Falco peregrinus* Tunstall, 1771

評価理由

市内各地で少数が観察されている。近年は、市の南西部では秋・冬だけでなく繁殖期にも散見されるようになったが、まだ安定した個体群とは言い難い。

評価区分

名古屋市 2025		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	越冬	準絶滅危惧
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

形態

全長雄約 42cm、雌約 49cm。翼端が尖っている。雌雄同色で、成鳥は上面青黒色。下面は白地に黒く細かい横縞がある。若鳥は上面暗褐色、下面は淡褐色地に暗褐色の縦縞がある。成・幼鳥とも両ほおに目の下から連なるひげ状の斑がある。



西区庄内緑地公園　2021 年 10 月 7 日　村上　修

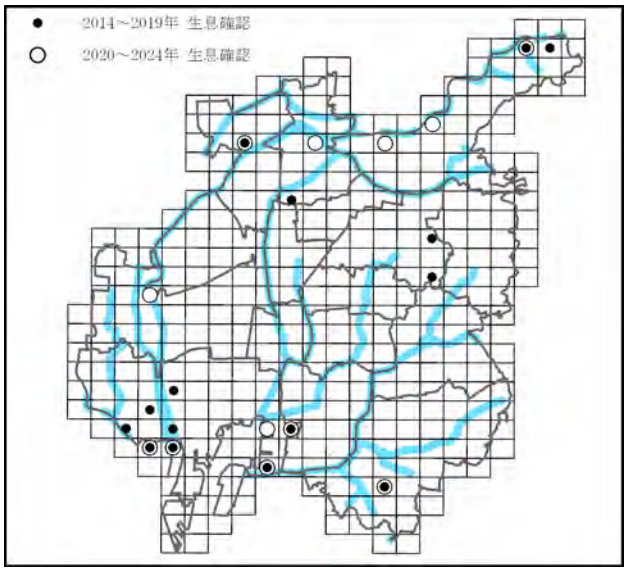
分布の概要

市内：南西部で冬期を中心に多く観察されるほか、北部で春・秋の移動期に観察される。

県内：海岸、池沼、河川周辺等の開けた土地に冬期の記録があり、三河湾北岸で 1996 年県内初繁殖が確認された。渥美半島伊良湖岬におけるタカ類、小鳥類の渡りの時期に、ハヤブサも現れヒヨドリなどを狙う様子は良く知れている。

国内：北海道、本州、佐渡、九州等の主として海岸沿いで繁殖し、冬期の記録はほぼ全国に広がっている。

世界：ニュージーランド、ハワイ諸島、南極大陸など一部の諸島を除く、全世界に生息し、繁殖している。世界では個体数はほぼ安定している。



生息地の環境／生態的特性

国内では特に北海道や東北地方の沿岸部に多く、地上性天敵が近寄れない岩場で繁殖する。多くは留鳥だが、北海道東北部や本州の内陸部で繁殖するものは冬期暖地へ移動する。ヒヨドリ等中型以上の鳥を主に、ウサギやネズミを狙うこともあり、相手が鳥の場合は空中で体当たりして蹴り落とす攻撃法をとる。キッキッキッとかケーケーケーと聞こえる鋭い声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋市へは旅鳥または冬鳥として渡来し、藤前干潟周辺では見る機会が多いが、近年、冬期以外にも観察されるようになった。営巣の記録はないものの、2003 年 5 月には繁殖行動の兆しも認められた。2007 年 3 月～4 月西区牛島町ルーセントタワービルで 1 羽（3 月 30 日以降は 2 羽）が観察された。

保全上の留意点

名古屋市内の鉄塔や名古屋駅高層ビルで観察されるなど、多様な生息環境に適合する能力を持つ。近年各地で本種がビルに営巣する例も増えてきたので、今後ビル屋上付近の繁殖用の環境を整えることで建築物における営巣が期待される。

特記事項

1960 年代生物濃縮による DDT の体内蓄積が原因でアメリカ合衆国を中心にカッショクペリカン（*Pelecanus occidentalis*）、ハクトウワシ（*Haliaeetus leucocephalus*）、ハヤブサ等での顕著な卵殻薄化が見られたが、日本では DDT の使用量が少なかったためか、類似の現象は認められていない。

引用文献

Ratcliff, D.A. 1993. The Peregrine Falcon. T & AD Poyser. London.

関連文献

愛知 83:72，愛知 95:41，愛知 02:87，愛知 06:40，愛知 09:110，分布 88:120，HBE2:361，HBW2:274，CBW1:698.

（金澤　智）

鳥類　＜スズメ目ツバメ科＞

コシアカツバメ　*Cecropis daurica* (Laxmann, 1769)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

ツバメに比べて繁殖地の分布に偏りがある種類だが、近年都市部での減少が著しい。安定して採餌・営巣できる環境を確保する必要がある。実際に、多くのアマツバメ類・ツバメ類の減少が確認されていて、営巣環境だけでなく、（ヨタカの項でも指摘したが）林縁の減少や餌となる飛翔性昆虫の減少も影響しているとみられる。このため飛翔性昆虫類の生息状況を改善するなど、多様な生息環境保全活動が必要と考えられる。

形態

全長 17～20cm。上面は藍色光沢のある黒で、腰は赤褐色。目の後ろから頭側にかけても赤褐色。下面は淡褐色で、黒褐色の細い縦斑がある。尾は中央が深く切れこんだ燕尾でツバメより長め。



静岡県静岡市駿河　2022 年 7 月 14 日　西村祐輝

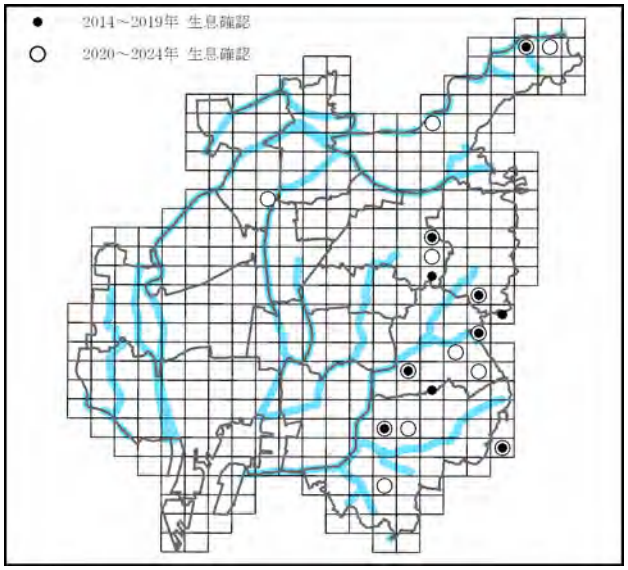
分布の概要

市内：記録は南西部に少なく、中心部から東部、北部へ向かって多くなる。

県内：低地～山裾に渡来するが、分布には偏りがある。

国内：主要四島のほか佐渡や隠岐、対馬へ夏鳥として渡来するが、東北地方以北では少ない。九州では越冬するものもいる。1990 年代と比較して分布域がマイナス 30.2%（2020 年）と大きく減少している。この様な減少は、身近なツバメにおいても同様である。

世界：ユーラシア南部～ウスリー地方と熱帯アフリカで繁殖し、ヨーロッパのものは熱帯アフリカへ、アジアのものは中国南部～インド方面へ渡って冬を越す。



生息地の環境／生態的特性

夏期、低地～山地の村落や市街地に渡来する。カメムシ、ハムシ、カ、ハエ等の昆虫類を空中で捕食する。羽ばたきと滑翔を交えて直線的に飛ぶが、ツバメより滑翔が多く、羽ばたきはやや緩慢。5～7 月、建物の水平な庇の下面に泥で徳利形の巣を作り、4～5 卵を産んで繁殖する。チュリー、チュリー、ジルジルジルと、声はツバメに似るが少し濁って聞こえる。

現在の生息状況／減少の要因

1960 年代までは名古屋駅前や栄周辺のビルなど市内各地に営巣していたが、その後まもなく都市中心部から姿を消し、市の辺縁部でも営巣は少なくなった。最近の市内での記録は繁殖より通過時のものに偏ってきている。都会では餌や巣材の泥が得にくくなったことが、減少の主要因と考えられる。

保全上の留意点

市街地では今後、餌も巣材も得やすくなることは予想されない。郊外で営巣場所となる水平な軒下をもつ建築物が減らないことが期待される。また音声装置や人工巣の設置など多様な試みを行う価値があると考えられる。特に人工巣は巣そのものがデコイとしての誘因効果があるとみられる（ツバメにて確認されている）。

引用文献

植田睦之，2020．空中採食性の鳥が減っている　全国鳥類繁殖分布調査の結果から，Bird Research News 2020 年 6 月号
全国鳥類繁殖分布調査，2022．全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2021 年，169pp.

関連文献

愛知 83:165，愛知 95:94，愛知 06:94，繁殖 78:258，分布 88:240，HBE5:278，HBW9:677.

（金澤　智）

鳥類　＜スズメ目アトリ科＞

コイカル　*Eophona migratoria* Hartert, 1903

評価理由

かつて稀だった本種は市内で一度増えて、また減少している。個体数増減の原因は明らかではないが、現在の不安定な状況からは衰亡の危険性も拭いきれない。名古屋市内は勿論だが、愛知県下でも、観察記録が得られていない。当面は増減の実態を把握し、その原因を究明することが必要である。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

全長約 18.5cm。雄は頭が黒く、首～背は灰褐色。腰は灰白色で尾は黒い。翼は青色光沢のある黒で、風切羽、初列雨覆の先端が白い。胸～腹は淡褐色で脇は赤褐色。太い嘴は橙黄色だが、繁殖期には縁や基部が青黒色になる。雌は頭部・胴ともに灰褐色で、脇の赤褐色は雄より淡く、中央の尾羽は灰褐色（他の尾羽は黒い）。尾は長めで先端は凹形。近似種イカルの体は褐色味の少ない灰色で、頭の黒（雌、雄とも）がほおまで届かず、嘴は黄色。



コイカル（雄）
西区庄内緑地公園　1995 年 2 月 5 日　林　正直

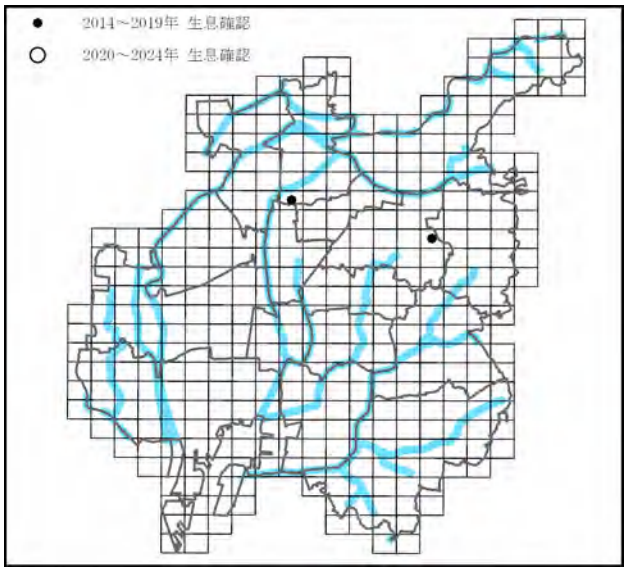
分布の概要

市内：主に冬鳥として市の中心部や北部を訪れるが西区には周年生息した記録もある。2015 年以降名古屋市内における観察記録がない。

県内：低地～低山の限られた地域に毎冬訪れる傾向がある。

国内：北海道、伊豆諸島、小笠原諸島を除くほぼ全域に冬鳥として訪れるが、全般に数は少なく、北・東日本ではさらに少ない（熊本県、島根県には繁殖記録がある）。国内における観察記録からは、夏期を除き観察されているが、記録数は少ない。

世界：揚子江沿岸、中国東北部、朝鮮半島等で繁殖し、日本以外では中国南部、台湾等で越冬する。世界での個体数増減の情報はない。



生息地の環境／生態的特性

主に冬鳥として渡来し、低地～山地の落葉広葉樹林に群棲して、ムク、エノキ、センダン、イヌシデ等の木の実を好んで食べる。イカルの群れに混じることもある。囀り(さえずり)はキョキーコキーコーキキョーとイカルに似るが、イカルと違って声に濁りが入る。地鳴きはキュッキュッと聞こえる。

現在の生息状況／減少の要因

市内では主として冬期、鶴舞公園、名古屋城、庄内緑地、東谷山で記録されている。庄内緑地では 1994 年～1999 年の間、周年観察され、春、囀り（さえずり）も聞かれたが、その後繁殖期には見られなくなり、冬期の個体数も減った。1970 年頃まではほとんどいなかったものが一旦増え、現在また減っている理由は解っていない。

保全上の留意点

ICUN では、現状は低懸念であるが、全体数の把握は難しいとしている。一方減少傾向にあるとの報告（Global Forest Watch 2022）も引用している。

関連文献

愛知 83:231，愛知 95:129，愛知 06:133，分布 88:321，HBE8:832，HBW15:613.

（金澤　智）

鳥類　＜カッコウ目カッコウ科＞

カッコウ　*Cuculus canorus* Linnaeus, 1758

評　価　区　分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛　知　県	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
2　0　2　5	通過	準絶滅危惧
全　　国 2020		－

評価理由

地図上では特に顕著な減少傾向は認められないが、2000 年頃まであった繁殖期間中の連続滞在記録が途絶えた。名古屋市内におけるカッコウの減少は顕著で、今回の解析データ上でも 2020 年以降観察記録が無い。

形態

全長 32～37cm。頭部～上胸部と背は青灰色、長めの尾は灰黒色で横縞状に多数の白点がある。下胸部と腹は白く、灰黒色の細い横縞があり（ツツドリ、ホトトギスより細かく密）、飛翔中の翼（先が尖る）下面にも横縞が見える。目は黄色。若鳥は頭部～上面茶褐色気味で後頭部に白斑があり、ほぼ全身に黒い横縞がある。雌には稀に赤色型がいる。



岐阜県海津市木曽長良背割り堤　2016 年 6 月 30 日　林　正直

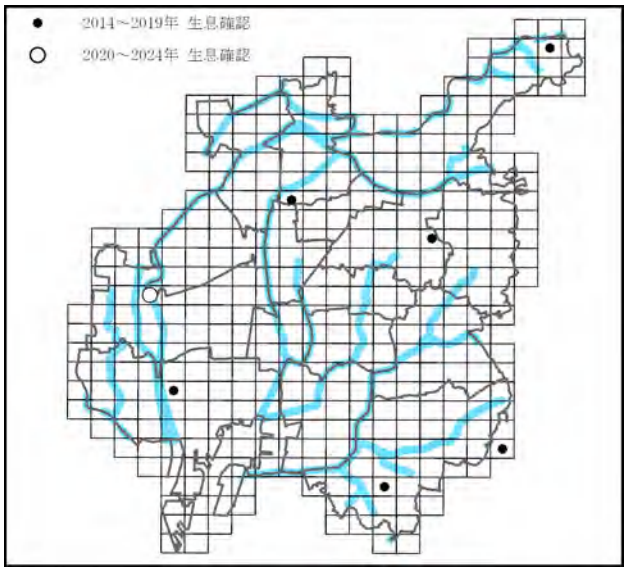
分布の概要

市内：市内では 5、6 月頃東部を中心に中部、北部にも記録があり、東部では近年まで繁殖期を通しての記録もあった。

県内：平野部から山地にかけて各地で観察され、三河山地では繁殖の記録もある。

国内：ほぼ全域に夏鳥または旅鳥として渡来し、主要四島と南千島、佐渡、対馬では繁殖している。大阪府吹田市における 1995~2003 年のデータだが、98 年以降激減しカッコウ科全体でもみてもほとんど観察されなくなっている。

世界：極北部とインド等を除くユーラシアほぼ全域及びアフリカ北部で繁殖し、アジアのものはインド～ニューギニアで越冬する。ヨーロッパ西部では 20 世紀に入ってから減少したとされるが、世界的には特に減少の情報は無い。



生息地の環境／生態的特性

繁殖期には林縁部や林に接する草原に生息し、5 月下旬～8 月上旬頃モズ、オオヨシキリ等の巣に托卵して繁殖する。渡り期には公園や堤防上のサクラ並木等でおもに蛾の幼虫を捕食しながら移動していく。雄はカッコウ、カッコウと鳴き、雌はピピピピピ･･･と鳴く。飛翔中にも鳴くが、ホトトギス、ジュウイチと異なり、日没後は鳴かない。

現在の生息状況／減少の要因

市内各地で比較的多く記録されている。記録の多くは 5～6 月または 9～10 月の渡り期のものだが、守山区と天白区では 2000 年頃まで夏期を通して生息し、繁殖の可能性を感じさせた（卵、ひなは見つかっていない）。2010 年以降、繁殖期中の記録はない。その理由は不明だが、宅地や道路の建設が生息地周辺の環境を悪化させた可能性が高い。

保全上の留意点

生息環境の保全が大切である。托卵性の鳥なので、仮親になりうる鳥（モズ、オオヨシキリ、ホオジロ、セグロセキレイ等）の動静にも注目する必要がある。

引用文献

中埜，2007．レポート（カッコウ），バードリサーチニュース，Vol.4 No.11

関連文献

愛知 83:148，愛知 95:81，愛知 06:82，繁殖 78:204，HBE4:402，HBW4:554，CBW1:332.

（金澤　智）

鳥類　＜ツル目クイナ科＞

クイナ　*Rallus indicus* Blyth, 1849

評価理由

かつては市内の水田や池沼の岸辺に、相当数生息していたと考えられるが、近年見る機会が稀になった。市街化に伴う水辺植生の激減は、本種の生存を厳しくしている。

評価区分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	越冬	準絶滅危惧
全国 2020		－

形態

全長 27～31cm。尾が短く脚は長い。上面は暗褐色で黒い縦斑があり、下面は顔～胸が青みを帯びた灰色、脇腹に白と黒の横斑がある。長めの嘴は春夏にはほぼ赤く、秋冬には下嘴基部が赤いほか黒褐色。脚は黄褐色。飛んだ時、翼に模様は出ない。



西区庄内緑地公園　2016 年 1 月 12 日　林　正直

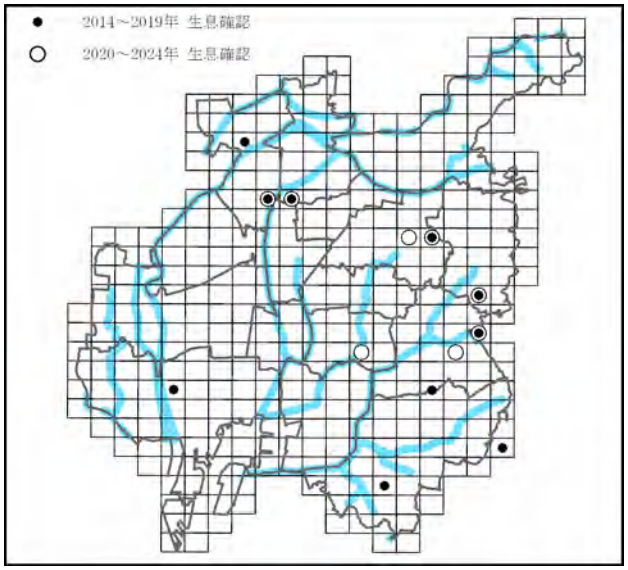
分布の概要

市内：冬期、北部・東部・南部で記録されているが数は少ない。

県内：平野部に広く分布しているが、数は多くない。一般に冬鳥だが、1975 年、犬山市で巣と卵が発見された。

国内：北海道と本州北部等で少数が繁殖するほか、本州以南に冬鳥として渡来する。

世界：ユーラシアの中緯度域とアフリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ東部以東のものは南下して越冬する。世界で特に減少しているとは見なされていない。



生息地の環境／生態的特性

北海道では夏鳥、本州以南ではおもに冬鳥として、平地～山麓の水田、池沼、河川の岸辺等の草の生えた湿地（淡水域ばかりでなく汽水域にも）に生息する。昆虫類、甲殻類、魚類、両生類などの動物質のほか、イネ科やタデ科の草の種子等植物質も食べる。通常草蔭を歩行移動し、長く高く飛ぶことはほとんどない。6～7 月頃ヨシ等の根元に草の茎や葉を積んで皿形の巣を作り、6～8 卵を産んで繁殖する。キュイキュイと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

市の北部、東部および南部で少数記録されている。水田やため池、河川の草つきの湿地が本種の生息環境なので、それらの減少が本種の生息を制限していること考えられる。

保全上の留意点

生息季節の別はあるが、ヒクイナの場合と同様、湿地、河川部の保全が望まれる。コンクリート護岸は治水を妨げない範囲で最小限に止めることが望ましい。実際に、異常気象による線状降水帯の停滞による急激な増水に対応するための「大規模な河川整備計画」も名古屋市内では進んでいる。護岸修理に伴う汽水域の環境悪化は、イカルチドリ同様ニッチな生息環境を好む野鳥に対して大きな影響を持つことが推察される。迅速な原状復帰や工事終了後の環境復帰に関する適切なモニタリングが必要だと考えられる。またそのデータを次の改修工事に生かすなどの努力を行う事も肝要である。

関連文献

愛知 83:80，愛知 95:45，愛知 02:125，愛知 06:45，愛知 09:149，繁殖 78:140，分布 88:135，HBE2:537，HBW3:169，CBW1:340.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目セイタカシギ科＞

セイタカシギ　*Himantopus himantopus* (Linnaeus, 1758)

評　価　区　分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛　知　県	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
2　0　2　5	越冬	準絶滅危惧
全　　国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

1960 年頃までは全国的に迷鳥に類別される程の稀種だったが、その後、愛知県や首都圏に定期的に出現するようになり、1975 年以降県内および千葉県・東京都・大阪府でごく少数が繁殖している。

形態

全長約 32～40cm。黒い嘴はまっすぐで細長く、淡紅色の脚は非常に長い（体との比率上ここまで長い鳥は世界でもフラミンゴ以外にいない）。雄の上面は緑色光沢を帯びた黒で、下面は白い。雌の体の上面には雄より褐色味がある。頭部は頭上～後頭が黒いものから全体が白いものまで変異が多い。若鳥の上面は灰褐色、下面は白色。成鳥、若鳥とも腰と尾は白い。翼は長めで翼端は尖っている。



セイタカシギ♀（夏羽、冬羽共に頭部が白い）
港区藤高　2024 年 6 月 9 日　西村祐輝

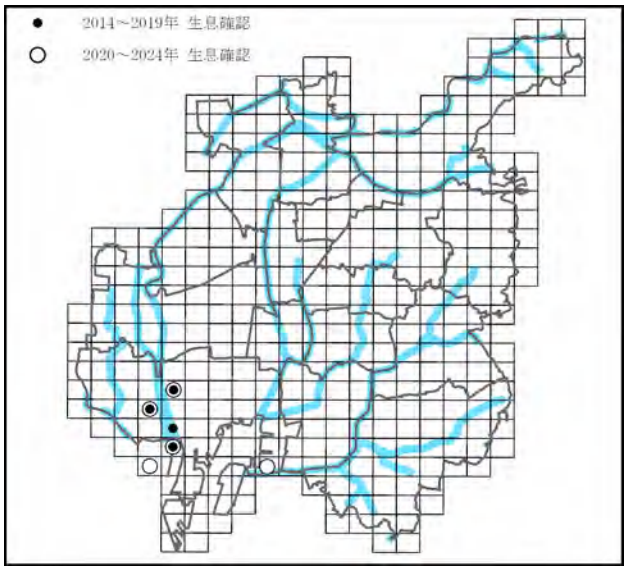
分布の概要

市内：南西部に少数生息する。

県内：海部郡鍋田地区、矢作川河口部、汐川干潟周辺等（いずれも繁殖記録あり）に生息するが数は少ない。

国内：北海道～沖縄のほか小笠原諸島、硫黄列島、大東諸島等に飛石状に記録はあるが、数は多くない。

世界：ユーラシア、アフリカ、南・北アメリカ、オーストラリア等に広く分布する。



生息地の環境／生態的特性

海岸近い水田、池沼、埋立地等に生息し、脚の長さを活かして、かなり深くまで踏みこみ、水生昆虫、小貝、小魚、オタマジャクシ等の小動物を捕食する。地面を浅くくぼめて、ヨシの茎や貝等の巣材を敷いた上に、通常 4 個産卵して繁殖する。ピュイッ、ピュイッまたはキッキッキッと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

港区庄内川河口付近で秋～春に観察されている。近くの鍋田干拓地では繁殖の記録があるが、名古屋市内には繁殖記録はない。元来数の少ない鳥で、現在特に減少はしていないが、存続の基盤は脆弱である。通常は数羽の小群で観察されるが、個体数の多い記録としては、2009 年 4 月 20 羽（港区藤高）がある。2013 年での全国調査では春期、秋期共に増加が確認されている。さらにモニタリングサイト 1000 まとめ報告書では、2000 年から 2017 年における秋期増減率がプラス 274%と明らかな増加傾向を示している。

保全上の留意点

プロポーションの利点を生かし、干潟だけでなく港湾部の貯木場跡を利用するなど、干潟だけに頼らない柔軟な側面も観察される。名古屋市内における状況を考えると、藤前干潟を中心とし、後背地を含めた保全環境を充実させ、より安定的な生息環境を創出することが必須である。

引用文献

環境省自然環境局生物多様性センター，2013-2014．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査ニュースレター2013 年春季概要・秋季概要

環境省自然環境局生物多様性センター，2020．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書，79pp+資料 109pp

関連文献

愛知 83:124，愛知 95:70，愛知 02:107，愛知 06:72，愛知 09:133，分布 88:189，HBE4:36，HBW3:345，CBW1:422.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目チドリ科＞

イカルチドリ　*Charadrius placidus* Gray & Gray, 1863

評 価 区 分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛 知 県 2025	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	越冬	準絶滅危惧
全　　国 2020		－

評価理由

市内に広く生息しているが個体数は減少している。生息環境の縮小の他、繁殖の成否に関しては営巣する砂礫地の保全が関与している可能性が高い。

形態

全長 19～21cm。背面は灰褐色で腹は白く、胸に黒帯がある。顔には額につながる黒く太い過眼線がある。嘴は黒く、脚は淡黄色。飛翔時、翼に淡色の線が出る。



港区藤高　2022 年 1 月 31 日　西村祐輝

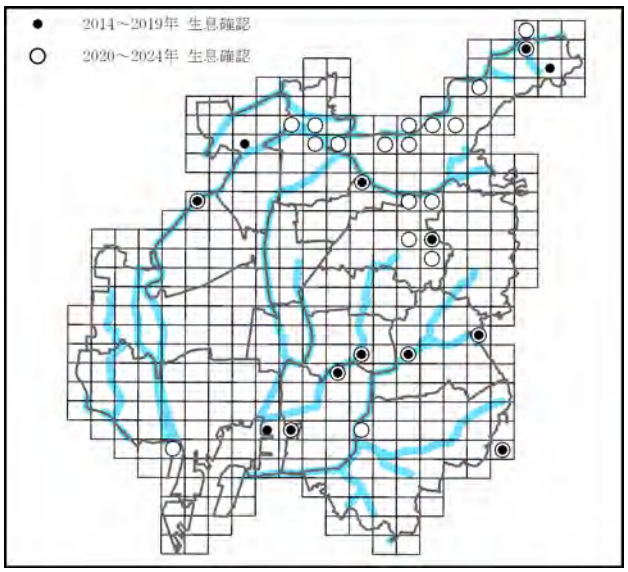
分布の概要

市内：市の中心部を除いて広く記録されてきたが、個体数は少ない。守山区では 2004 年まで続いていた繁殖が、2008 年以降確認されていない。

県内：三河地方の東北部を除くほぼ全域に留鳥として生息する。

国内：ほぼ全国に留鳥として生息し、北海道と本州北部のものは南下して越冬する。

世界：アジア大陸東部と日本で繁殖し、大陸のものは中国南部・インドシナ半島北部へ南下して越冬する。



生息地の環境／生態的特性

主として河川の上・中流域や湖畔に周年生息し、3 月中旬～7 月中旬に、河原の砂礫地や草の疎生する地面に産卵して繁殖する。ヒナは早成性で、孵化後まもなく歩き始める。抱卵中や孵化直後に、親鳥は接近する外敵に対して擬傷行動を示すことが多い。非繁殖期にはイネの刈跡など水辺から離れたところにも見られる。昆虫の成・幼虫を主食としている。ピヨ　ピヨ　ピヨと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

近年記録個体数が減少している。減少の主な原因は、おそらく開発や河川改修などによる生息環境の変化だと推測されるが、それとは別に、河原への頻繁な車の乗り入れによる繁殖妨害が増加しているのではないかと懸念される。

保全上の留意点

鳥たちの餌場やねぐらを奪う開発・土木工事のあり方を検討し、より環境保全に配慮する姿勢や方法を確立することが必要。実際に、異常気象による線状降水帯の停滞による急激な増水に対応するための「大規模な河川整備計画」も名古屋市内では進んでいる。護岸修理に伴う汽水域の環境悪化は、イカルチドリの様なニッチを好む野鳥に対する影響が大きいことが推察される。工事終了後、迅速な現状復帰ができているか等モニタリングも必要である。またそのデータを次の改修工事に生かすなどの努力を行う事が肝要である。

関連文献

愛知 83:88，愛知 95:49，愛知 06:49，愛知 09:126，繁殖 80:154，HBW3:426，CBW1:424.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目チドリ科＞

シロチドリ　*Charadrius alexandrinus* Linnaeus, 1758

評 価 区 分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛 知 県 2025	繁殖	絶滅危惧 IB 類
	越冬	絶滅危惧Ⅱ類
全　　国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

名古屋市では、繁殖地としてよりは秋冬の採餌地としてより多く記録されてきた。従来数多く生息していた水辺性鳥類の中で、減少が目立つ種類の一つである。減少率は著しく、より急激な衰亡も懸念される。

形態

全長 17～19cm。上面は灰褐色で、下面は白色。雄の夏羽では過眼線と胸側の斑が黒く、冬羽や雌ではこれらが褐色。雄の夏羽の頭頂は橙褐色だが、これも冬羽と雌では灰褐色と地味な色合い。飛ぶと翼に白い線が出る。嘴と脚は黒い。



田原市赤羽根町　2021 年 9 月 5 日　西村祐輝

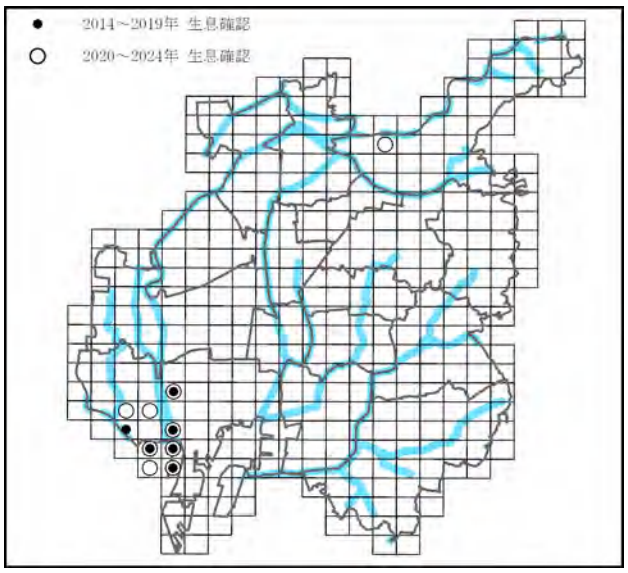
分布の概要

市内：南部と北部の水辺に生息している。市内では繁殖地となる砂地が減少し、コアジサシが営巣する砂礫地での営巣が主となる。ヒトやペットなどによる生息地のかく乱などの影響も大きい為、草本の少ない砂礫地を安定的に確保する必要がある。

県内：平野部。特に海沿いに周年広く生息している。

国内：ほぼ全国に分布し、繁殖するが、北海道、南千島では夏鳥、本州以南で留鳥。

世界：北半球の低緯度から中緯度域で繁殖し、熱帯、亜熱帯、暖帯で越冬するものが多い。世界的に個体数は多いが、ヨーロッパやアメリカでは減少している。



生息地の環境／生態的特性

海岸や河川の下流部に生息し、浜辺に打ち上げられた海藻などを英語でラック（wrack)と言うが、この磯臭さの原因となるラックに集まる小さなハエ、昆虫類、クモ類、ゴカイ、トビムシ、小貝等の動物質を食べている。砂浜や河岸の砂礫地を少しくぼめて目立たぬ巣を作り、通常 3 卵（時に 4 卵）を産んで繁殖する。卵の孵化前後に外敵が近づくと、親鳥は翼を傷めたような動作、擬傷をする習性がある。ピルッ、ピルッと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

市の南部と北部に分布するが、分布の中心である庄内川河口付近で記録された数は、1975 年 9 月 2,280 羽、1979 年 9 月 1,210 羽、1980 年 9 月 955 羽、1998 年 10 月 354 羽、2000 年 10 月 110 羽、2002 年 11 月 146 羽、2004 年 11 月 310 羽、2005 年 2 月 192 羽、2007 年 10 月 155 羽、2008 年 11 月 137 羽、2010 年 1 月 205 羽、2012 年 12 月 171 羽、2014 年 1 月 98 羽と顕著に減少している。市内には砂礫地が少ないため、市外で繁殖して秋冬に訪れるものが元来多かったが、名古屋市周辺での砂浜の減少と一時的に砂地だった造成地の状況変化により、繁殖適地が激減したことが市内での減少の原因の一つと考えられる。

保全上の留意点

コアジサシと同様、採餌地としての干潟の保全のほか、恒久的な繁殖地としての砂礫地を保全（造成を含む）することが必要である。

関連文献

愛知 83:87，愛知 95:50，愛知 06:49，愛知 09:150，繁殖 78:156，分布 88:148，HBE3:153，HBW3:432，CBW1:426.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目チドリ科＞

メダイチドリ　*Charadrius mongolus* Pallas, 1776

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

春と秋、普通に訪れる旅鳥で、激減してはいないが、往時に比べて渡来数が減少している。名古屋市内における干潟および後背地に関して、特段の環境改善が見られない為、リストの変更は行わなかった。

形態

全長 18～21cm。背面は褐色で腹は白い。夏羽では過眼線が黒く、のどが白く、胸～頚側が赤褐色（雌はやや淡色）。冬羽では赤褐色が消える。若鳥は冬羽に似るが、背面に淡色の羽縁がある。嘴は黒く、脚は暗い緑褐色。飛翔時、翼に白線が出る。



メダイチドリ（夏羽）
西尾市一色町　2018 年 5 月 2 日　村上　修

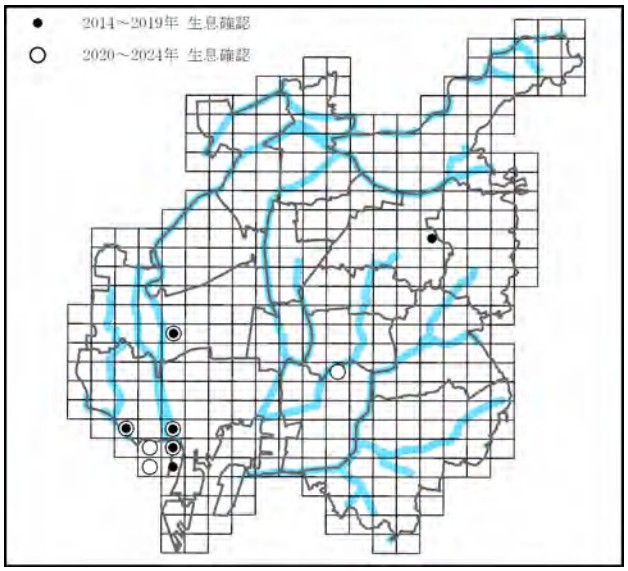
分布の概要

市内：主として南部 3（港・南・緑）区に、旅鳥として渡来している。

県内：伊勢湾奥部、衣浦湾・三河湾沿岸部、知多半島、渥美半島などに旅鳥として渡来し、少数越冬するものがある。

国内：ほぼ日本全土の沿岸域に旅鳥として渡来し、本州、九州、伊豆諸島、小笠原諸島、琉球諸島などでは越冬するものがある。2013 年モニタリングサイト 1000 では、春期、秋期ともに増加傾向を示していた。

世界：シベリア、カムチャツカ、中国東北部・西部などで繁殖し、アジア南部、台湾、フィリピン、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、アフリカ東部などの沿岸域で越冬する。世界的に特に減少しているとの報告はない。



生息地の環境／生態的特性

繁殖期には高山のツンドラ・草原や、高緯度地方の低地の砂丘などに生息する。非繁殖期には海岸の干潟や砂洲に群生し、時に水田や池沼を訪れることもある。ゴカイ、二枚貝、甲殻類、昆虫などを捕食する。クリリリッと聞こえる声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

1981 年庄内川河口部で 89 羽、1983 年天白川河口部で 48 羽、1992 年藤前干潟で 60 羽、2005 年 5 月港区稲永ふ頭で 82 羽などが記録されたが、以後は 2007 年 4 月 19 羽、2010 年 4 月 33 羽、2013 年 4 月 6 羽、2014 年 5 月 14 羽（以上いずれも庄内川河口部）と、それまでの数を超える記録はない。減少の直接原因は不明だが、他の多くのシギ・チドリ類の減少と同じく、生息環境の縮小・悪化が関係していると推測される。2014 年以降も藤前干潟での飛来数は限定的であるものの、観察されている。

保全上の留意点

モニタリングサイト 1000 での増加傾向のデータが得られた理由は明確ではないが、引き続き藤前干潟、周辺の湿地域、および後背地の環境保全が重要である。

引用文献

モニタリングサイト 1000　シギ・チドリ類調査　ニュースレター（2013 年　春期概要）および（2013 年　秋期概要）（いずれも環境省自然環境局生物多様性センター）

関連文献

愛知 83:88，愛知 95:50，愛知 06:50，分布 88:149，HBE3:166，HBW3:437，CBW1:428.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

ダイシャクシギ　*Numenius arquata* (Linnaeus, 1758)

評価理由

名古屋市南西部を渡りの中継地、越冬地として利用しているが、近年渡来数、越冬数ともに減少している。

評価区分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	越冬	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		－

形態

全長 52～66cm。上・下面とも淡褐色地に黒い斑点があるが下腹部は白い。翼の下面と腰が白く、近縁種ホウロクシギとの識別のポイントになる。尾には白地に黒褐色の細い横縞がある。嘴が平均 16cm と非常に長く、大きく下に曲っているのが、ホウロクシギとともに最大の特徴。



西尾市一色町　2022 年 6 月 13 日　村上　修

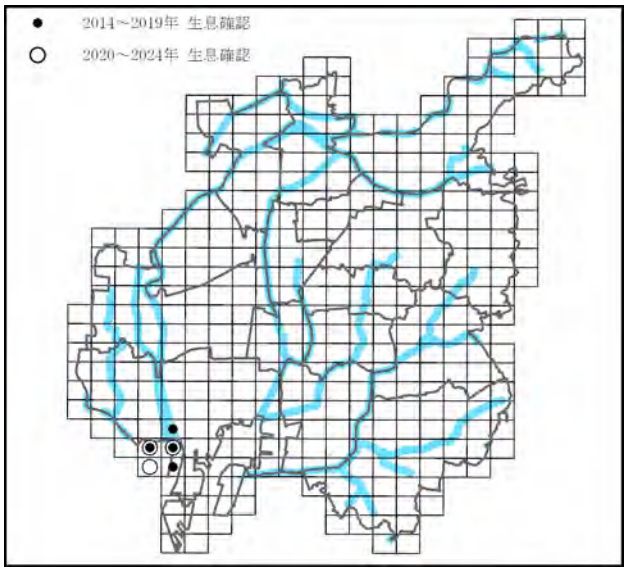
分布の概要

市内：南西部でのみ記録されている。

県内：伊勢湾奥部、三河湾沿岸部に渡来する。

国内：全国に旅鳥として渡来し、本州中部以西では越冬もする。2013 年モニタリングサイト 1000（秋期）では、北海道東北部での減少が報告されている。

世界：アイスランド、ヨーロッパほぼ全域～アジア中部で繁殖し、ヨーロッパ中・南部、アフリカ～東南アジア等で越冬する。1980 年～2013 年におけるフランスでの調査結果では、オグロシギと共に継続的で、顕著な増加傾向がみられている。



生息地の環境／生態的特性

主として 4～5 月と 8～9 月頃渡来し、広い干潟で甲殻類を主に、貝、ゴカイ、小魚、昆虫類等も捕食する（舌が短いためゴカイ等を吸い上げることは不得意）。越冬するものもある。カーリュー（英名 Curlew の語源、ホーイーンともクーヒーとも聞える。）とよく通る声で鳴くほか、ホーイ、ホーイとも鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋市の庄内川河口付近は県内でも有数の生息地で、1970 年代には周辺を含めて 20 羽以上越冬していたが、1985 年以降の記録は減少している（1985 年 12 月 7 羽、1993 年 3 月 7 羽、2003 年 2 月 9 羽、2007 年 2 月 6 羽、2007 年 2 月 6 羽、2007 年 8 月 12 羽（越夏）、2013 年 12 月 6 羽、2014 年 3 月 6 羽）。最大型のシギで警戒性も強いため、生息には広大な干潟を必要とする。各地での干潟の消滅・縮小が本種の渡来数を減少させていると推測される。

保全上の留意点

広い干潟の保全、更にはその沿岸部での湿地の保全・創出が望ましい。

特記事項

世界のレッドリスト（IUCN2017）で準絶滅危惧（NT）に指定されている。

引用文献

環境省自然環境局生物多様性センター，2014．モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査ニュースレター2013 年秋季概要
菊池有子・守屋年史，2015．フランスで越冬する沿岸性シギ類の動向，Bird Research News Vol.12 No.8

関連文献

愛知 83:118，愛知 95:67，愛知 02:135，愛知 06:68，愛知 09:160，分布 88:180，HBE3:500，HBW3:504，CBW1:436.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

オオソリハシシギ　*Limosa lapponica* (Linnaeus, 1758)

評価理由

名古屋市の南西部を渡りの中継地として利用しているが、渡来数は年を追って減少しつつある。ただし、庄内川の河口部には現在まだそれなりの数が飛来しているので、準絶滅危惧と評価した。

評価区分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	通過	絶滅危惧 IB 類
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

形態

全長 36～44cm。夏羽は体の上下面とも赤褐色で、背には黒い小斑が散在する。腰は白く、尾は白地に黒褐色の細い縞模様がある。冬羽の上面は灰褐色地に黒褐色の斑点があり、下面は淡い灰褐色で胸や脇に褐色の斑がある。

若鳥は冬羽に似るが、上面の斑の形に特徴がある。嘴は平均 10cm と長く、わずかに上に反っており、基部は肉色で先端部は黒い。脚は長いが体形が似てやや小型のオグロシギより短い。



三重県明和町　2023 年 9 月 30 日　西村祐輝

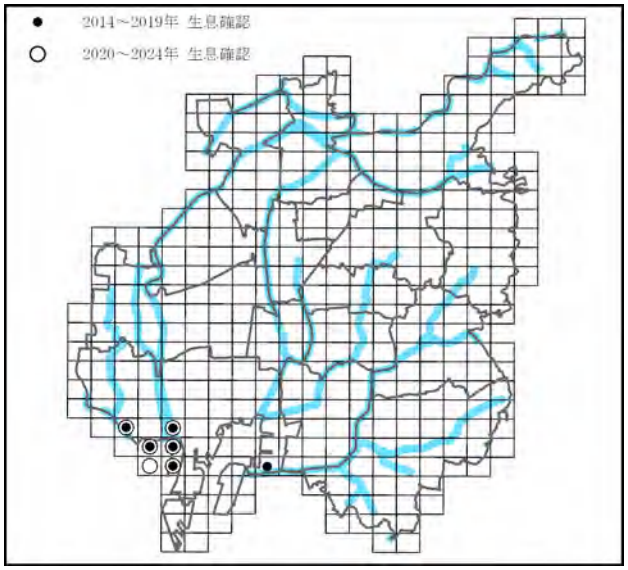
分布の概要

市内：南西部でのみ記録されている。

県内：伊勢湾奥部、三河湾北部・東部の干潟に渡来する。

国内：ほぼ全国に旅鳥として渡来し、少数は越冬する。2016~2022 年全国鳥類越冬分布調査での記録メッシュ数は増加傾向にある。

世界：スカンジナビア～シベリアの極北部、アラスカ西部等で繁殖し、ヨーロッパ中・南部、アフリカ～インド西部、東南アジア～オーストラリア、ニュージーランド等に渡って越冬する。世界で特に減少しているとは見なされていない。また 1980 年～2013 年におけるフランスでの調査結果では、オグロシギと共に継続的な増加傾向がみられている。



生息地の環境／生態的特性

4～5 月と 7～10 月頃渡来し、主に干潟で甲殻類、ゴカイ、貝、トビムシ、昆虫類等を捕食する（近縁のオグロシギのように水田に入ることはほとんど無い）。春・秋の渡来数もオグロシギとは逆で、本種は春に多い。ケッケッと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

1979 年 4 月、庄内川河口付近で 315 羽が記録され、その後も 300 羽を超える記録はあったが漸減して、1998 年春 164 羽、2003 年春 70 羽になり、近年は 2012 年 4 月 38 羽、2013 年 4 月 81 羽、2014 年 4 月 67 羽と、1980 年代の 1/5～1/4 に減少している。大型の鳥が必要とする広く安全性の高い湿地と、満潮時に休息できる後背地が周辺部から消えつつあることが、減少の要因ではないかと推測される。

保全上の留意点

名古屋市だけでなく、周辺部にかけての広い干潟の保全が必要と考えられる。WWF が規定する「東アジア・オーストラリア地域フライウェイ」を利用する中心的な野鳥で、世界規模でみると著しい減少がみられている。名古屋市の藤前干潟は、この渡りのルートの重要な中継地であるため、後背地を含め、一層の保全活動が必須である。

引用文献

菊池有子・守屋年史，2015．フランスで越冬する沿岸性シギ類の動向，Bird Research News Vol.12 No.8
植田睦之ほか，2022．全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年，NPO 法人バードリサーチ・（公財）日本野鳥の会，169pp.

関連文献

愛知 83:117，愛知 95:66，愛知 02:134，愛知 06:67，愛知 09:159，分布 88:179，HBE3:473，HBW3:502，CBW1:436.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

オバシギ　*Calidris tenuirostris* (Horsfield, 1821)

評価区分		
名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	通過	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		－

評価理由

今世紀初頭までは名古屋市南東部で 100 羽以上の群れを見ることもあったが、その後そのような大群の渡来はなくなった。名古屋市だけでなく、国内各地での減少が目立っている。

形態

全長 26～28cm。夏羽では頭上から体の背面は黒っぽく、肩羽は赤褐色で、胸が黒い。冬羽では肩羽の赤褐色と胸の黒が消え、全体がやや淡色になる。若鳥は冬羽に似る。嘴と脚は黒い。飛翔時、翼に白線が出る他、腰が白く見える。



西尾市一色町　2023 年 9 月 5 日　村上　修

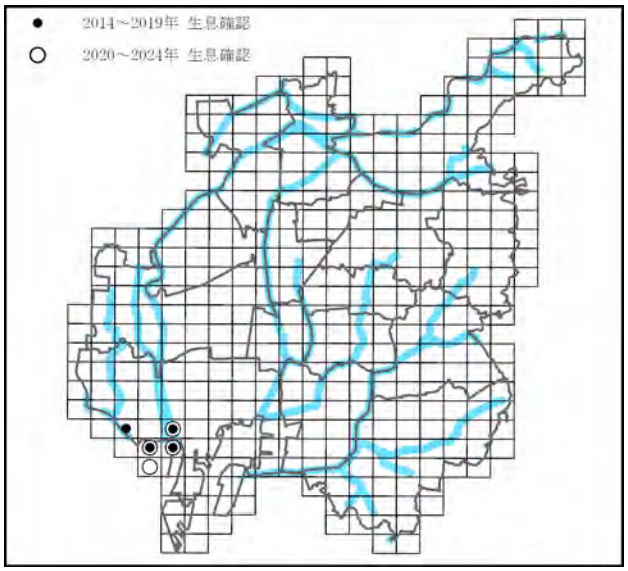
分布の概要

市内：南部 3 区に旅鳥をして渡来するが、南区と緑区では記録されない年もある。

県内：伊勢湾奥部、矢作川河口部、豊川河口部、汐川河口部の他、渥美半島の太平洋岸や知多半島にも、旅鳥として渡来している。

国内：北海道、南千鳥、本州、隠岐、四国、九州、対馬、奄美諸島、琉球諸島に旅鳥として渡来している。繁殖が終わった秋の渡り時期（８～９月）における個体数が減少傾向にあるとデータが得られている。

世界：シベリア東部で繁殖し、アジア南部、フィリピン、マレーシア、インドネシア、ニューギニア、オーストラリアへ渡って冬を越す。世界的に個体数は減少している。



生息地の環境／生態的特性

5 月下旬～6 月下旬頃、亜寒帯のアルパイン・ツンドラで繁殖し、渡り途中（4～5 月、8～10 月）の日本では海岸や河口の干潟に生息する他、海岸に近い水田や池沼で見ることもある。キッキッまたはケッ　ケッと聞こえる声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川河口付近での年間最多観測数は、2003 年 9 月 158 羽だったものが、2004 年 10 月 15 羽、2005 年 10 月 39 羽、2006 年 9 月 32 羽、2007 年 9 月 36 羽、2008 年 8 月 25 羽、2009 年 9 月 76 羽、2012 年 10 月 33 羽、2014 年 10 月 30 羽と、2 桁に減少している。繁殖地では、幼いヒナに昆虫（アブ・ハエの幼虫など）を与える他は、主として漿果・堅果などの植物質を食べ、渡り期・越冬期には干潟で二枚貝を中心に、巻貝・甲殻類・環形動物などを、更に水際を離れた砂礫地でヨコエビなどを食べる。中国では渡り中継地での狩猟と生息環境の縮小が、本種の生存への脅威になっているとの説があるが、わが国でも開発による生息環境の悪化が減少の主要因ではないか、と懸念される。

保全上の留意点

減少の原因は明確ではないが、干潟や湿地の保全がまず重要と考えられる。

特記事項

世界のレッドリスト（IUCN2016）で絶滅危惧（EN）に指定されている。

引用文献

植田睦之, 2018. ベランダバードウォッチから明らかになった住宅地の鳥類相，Bird Research News 2018 年 11 月号

関連文献

愛知 83:101，愛知 95:58，愛知 02:129，愛知 06:58，愛知 09:153，HBE3:268，HBW3:519，CBW1:438.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

コオバシギ　*Calidris canutus* (Linnaeus, 1758)

評価理由

1970 年代には伊勢湾奥部で 50 羽同時に記録されたこともあるが、その後渡来数が減少し、近年、名古屋市内では毎年一桁台の記録しかない。国内ではかなり厳しい状況にある。

評価区分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	通過	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		－

形態

全長 23～25cm。夏羽は全体に茶色っぽく、背面には黒と白の細かな斑紋模様がある。冬羽の背面は灰黒色で各羽縁が細かく白い。冬羽の腹面は白く、頭から胸・脇にかけて灰褐色の縦紋がある。若鳥は冬羽に似る。嘴は黒く、脚は暗いオリーブ色。飛翔時、翼に細い白線が出る。



西尾市一色町　2022 年 6 月 13 日　村上　修

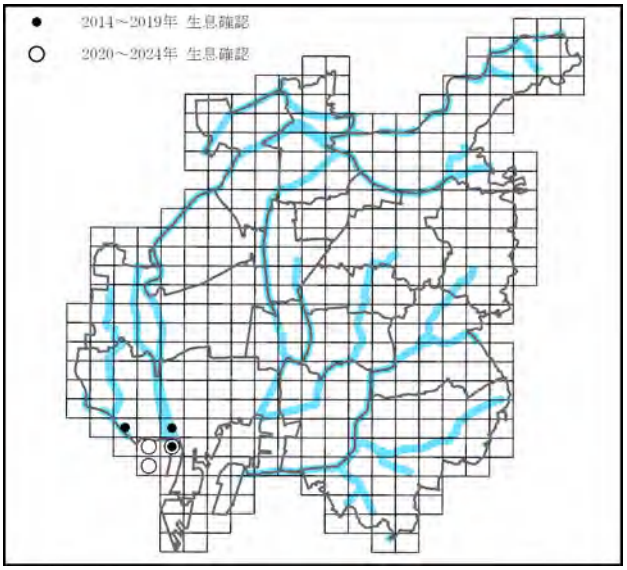
分布の概要

市内：庄内川河口部付近でのみ、旅鳥としてごく少数が記録されている。

県内：伊勢湾奥部、矢作川河口部、豊川河口部、汐川河口部で、旅鳥として少数が記録されている。

国内：海道、南千島、本州、四国、九州、奄美諸島、琉球諸島で、旅鳥として少数が記録されている。

世界：シベリア北部および東部、アラスカ、カナダ北部、グリーンランドなどの北極圏で繁殖し、南へ渡って冬を越す。越冬地はスコットランド～アルゼンチン、チリ、アフリカ西・南岸、フィリピン、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランドと広範囲にわたる。1980 年～2013 年におけるフランスでの調査結果では、継続的な増加傾向がみられている。



生息地の環境／生態的特性

6 月頃、北極圏のツンドラで繁殖し、渡り途中（4～5 月、8～10 月）の日本では海岸や河口の干潟に生息する他、海岸に近い水田や池沼で見ることもある。他のシギ類、特にオバシギの群中にいることが多い。旅鳥だが、春には少ない。ノッと聞こえる声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

1973 年、隣接する飛島村飛島干潟で 50 羽の記録があるが、以後そのような多数の渡来はなく、1983.10/ 2 羽（1983 年 10 月を表記、以下同様）、1988.4/ 1 羽、2004.10/ 3 羽、2007.5/ 4 羽、2010.9/ 8 羽、2014.10/ 2 羽（全て庄内川河口部）など、渡来記録は極めて少ない。双翅目・鱗翅目・毛翅（トビケラ）目などの昆虫も食べるが、干潟では二枚貝や巻貝を多く捕食する。減少の原因は不明だが、他のシギ・チドリ類が好むゴカイや甲殻類を比較的好まない習性については、詳しい調査が必要である。

保全上の留意点

減少の直接原因が不明なので対策は難しいが、干潟と沿岸部の湿地の保全が不可欠と考えられる。

特記事項

北極圏で繁殖するコオバシギについて、温暖化により年々雪解けが早まり、繁殖時期と餌の発生のピークが合わず、生まれてくる幼鳥が小型化しているという報告がある(Van Gils et al.)。

引用文献

菊池有子・守屋年史，2015．フランスで越冬する沿岸性シギ類の動向，Bird Research News Vol.12 No.8
Van Gils et al.,2016.　Science, 352(6287), 819-821
菊池有子・守屋年史，2015．フランスで越冬する沿岸性シギ類の動向，Bird Research News Vol.12 No.8

関連文献

愛知 83:100，愛知 95:58，愛知 02:128，愛知 06:57，愛知 09:152，HBE3:271，HBW3:519，CBW1:438.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

エリマキシギ　*Calidris pugnax* (Linnaeus, 1758)

評　価　区　分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛　知　県 2　0　2　5	通過	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020		－

評価理由

元来数少ない旅鳥だったが、ウズラシギやタカブシギと同じく、干潟よりは後背の水田や湿地を好む鳥だけに、そのような淡水湿地が激減している名古屋市内では、深刻な減少が懸念される。

形態

全長雄 26～32cm、雌 20～25cm。雄の夏羽には頭上や首のまわりに栗色・赤褐色・暗紫色・白色・白黒の横縞模様などの派手な飾り羽があり、胸～腹は白く、胸側に暗色の斑点がある。雌の夏羽は上面と胸が淡褐色に黒斑、腹は白い。冬羽は雌雄とも上面は淡灰褐色に黒っぽい斑があり、顔、胸は淡灰褐色で腹は白い。



エリマキシギ（冬羽）
港区藤高　2022 年 10 月 22 日　西村祐輝

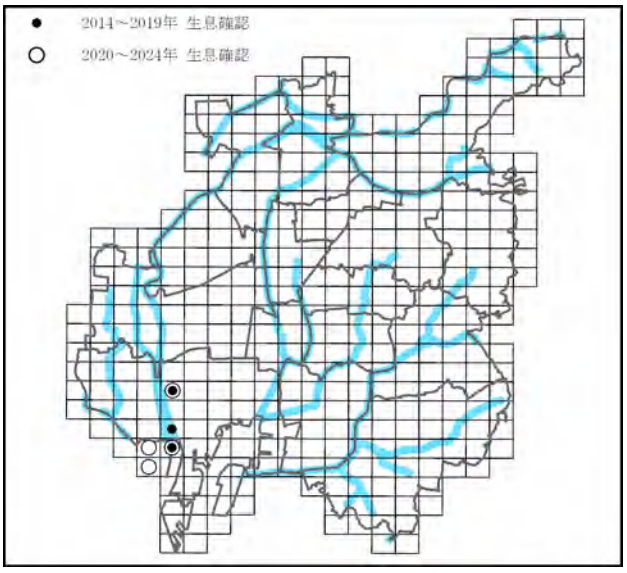
分布の概要

市内：南西部に旅鳥として少数飛来するが、越冬することもある。

県内：おもに伊勢湾・三河湾の沿岸部（稀に内陸部）の湿地に旅鳥として渡来し、越冬する。

国内：離島も含め、ほぼ全国に旅鳥として渡来する、春より秋の記録が多い。

世界：ユーラシア北部で繁殖し、アフリカ・インド・東南アジアへ渡って越冬する。ロシア東部やイギリスでは、近年繁殖域や繁殖個体数が拡大・増加の傾向にあるという。1980 年～2013 年におけるフランスでの調査結果では、1990 年以降徐々にだが増加傾向がみられている。



生息地の環境／生態的特性

繁殖地（寒帯～亜寒帯のツンドラ、ヨーロッパでは冷温帯の湿地・湿性草原でも）では複数の雄が集まって lek と呼ばれる求愛集団を作り、首まわりの羽を拡げてダンスする。当市でも春に見られる夏羽の個体の中には、稀にその動作の片鱗を見せるものもある。渡り期を含む非繁殖期には、干潟より耕地や淡水性の湿地で、昆虫・クモ・小型甲殻類・貝・小魚等の動物を主に、草の種子や植物も食べている。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋市による 5 年ごとの一連の調査では、毎回港区で少数が記録されている。他に 2004.11/ 2 羽（2004 年 11 月を表記、以下同様）、2005.2/ 7 羽、2006.9/ 1 羽、2007.8/ 1 羽、2010.9/ 5 羽、2011.9/ 1 羽、2012.9/ 1 羽、2013.4/ 2 羽、2013.12/ 3 羽、2014. 4/ 1 羽（いずれも港区庄内川河口付近）の記録がある。アジア東部は本種の分布域の東端に近いことのほか、主要な生息環境である水田・池畔など淡水湿地の著しい減少が、渡来数の少ない理由の一つと考えられる。

保全上の留意点

上述のように、水田等淡水性湿地の減少が本種の生息を制限している可能性がある。名古屋市内の圃場は港区に約 50%が集中し、その中心は田んぼである。稲の収穫のための落水後、乾燥した田んぼが残ることになる。港区は、藤前干潟の後背地として機能できる価値ある地域である。この田んぼに計画的に水を入れ、なつみずたんぼ、冬場のあまみずたんぼを人工的に管理することでシギ・チドリ類の旅鳥、夏鳥、冬場のカモ類の等の貴重な餌場や休息の場を提供できる。

引用文献

菊池有子・守屋年史，2015．フランスで越冬する沿岸性シギ類の動向，Bird Research News Vol.12 No.8
バードリサーチ，2016．シギ・チドリの生息地をつくる　なつみずたんぼ 2016，シンポジウム資料

関連文献

愛知 83:104，愛知 95:59，愛知 02:131，愛知 06:59，愛知 09:155，HBE3:385，HBW3:530，CBW1:438.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

ハマシギ　*Calidris alpina* (Linnaeus, 1758)

評 価 区 分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛 知 県 2 0 2 5	越冬	絶滅危惧Ⅱ類
全　　国 2020		準絶滅危惧

評価理由

冬の干潟の主役。かつては庄内川河口部で 1 万羽を超す群れが観察され、国内最多の記録となったが、その後漸減し、2015 年 3 月現在の総数は 1,000 羽に達していない。保全が手遅れとならないよう海外との連携を含めた対応が喫緊の課題である。

形態

全長 19～23cm。嘴は黒く長めで、やや下に曲がっている。足も黒い。夏羽の上面は赤褐色地に黒褐色の斑点があり、下面は腹の大きな黒斑以外は白っぽい。冬羽の上面は灰褐色で下面は汚白色（黒斑は無い）。飛翔時、翼に細い白線が出る。



千葉県船橋市潮見町　2022 年 1 月 2 日　西村 祐輝

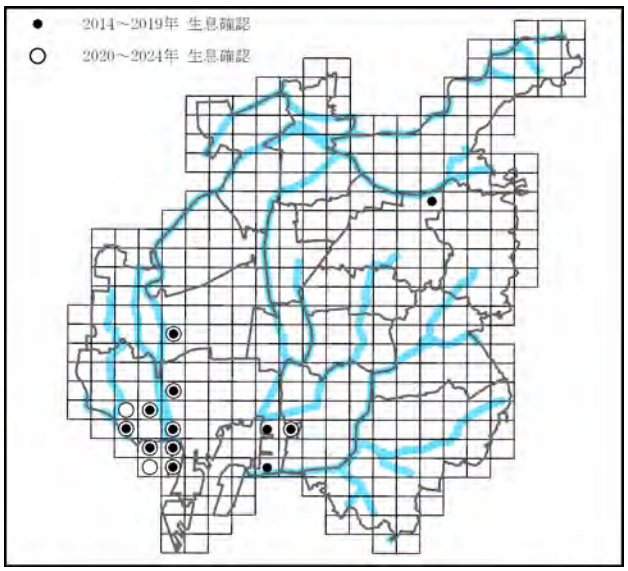
分布の概要

市内：秋期、主として南西部の干潟に群れて渡来し、翌春まで居残るものと、さらに暖地に渡って冬を越すものがいる。

県内：河口部に広がる干潟に、冬鳥または旅鳥として渡来するが、近年減少している。

国内：北海道、南千島、佐渡に旅鳥、本州、四国、九州以南に冬鳥または旅鳥、琉球諸島には冬鳥として渡来する。モニタリングサイト 1000 の個体数調査結果から推定されるデータでは、近年減少傾向にある（約 1/3~1/2 程度の減少）。

世界：北半球の北部で繁殖し、温帯～熱帯に渡って越冬する。日本を含む東アジアには 4 つの亜種が存在する。1980 年～2013 年におけるフランスでの調査結果では、2000 年以降継続的な減少傾向がみられている。



生息地の環境／生態的特性

主として海岸や河口の干潟に群れ、ゴカイや二枚貝、巻貝、トビムシ等の小動物を捕食する。小群で内陸の淡水環境を訪れることもある。干潟等で群飛する際は一斉に方向を転換するので、冬羽の白い腹をこちらに向けた時はきらめいて美しい。トウネンやシロチドリと群れて採餌することもある。ジュリーと聞こえる声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川河口付近での年ごとの最多記録数の概略は、1987.3/ 3,445 羽（1987 年 3 月を表記、以下同様）、1992.4/ 9,188 羽、1993.5/ 10,491 羽、1994.4/ 1,636 羽、1997.3/ 2,144 羽、1998.5/ 8,210 羽、1999.11/ 5,050 羽、（2000 年 9 月 11 日～12 日の東海豪雨で多大な被害が出た模様）、2000. 12/ 3,177 羽、2002.2/ 2,563 羽、2005.5/ 2,160 羽、2009.11/ 2,807 羽、2010.11/ 3,200 羽、2011.5/ 2,660 羽、2012.11/ 1,807 羽、2013.11/ 1,392 羽、2014. 3/ 1,735 羽、2015.2/　874 羽と、1993 年と比べると 2015 年は 1 割以下に減っている。その減少の要因は不明だが、巨大な台風や河川工事が、干潟の自然な姿を破壊した可能性が考えられる。

保全上の留意点

自然災害や河川改修工事が、生息減少の原因になっている可能性がある。工事の際には治水のほか干潟の生物多様性に留意し、シギたちが休む後背地の創出・保全にも配慮することが望ましい。

引用文献

菊池有子・守屋年史，2015．フランスで越冬する沿岸性シギ類の動向．Bird Research News Vol.12 No.8,
守屋年史，2018．極北のハマシギ訪ねて三千里ハマシギの現状と保全のためにできること，Bird Research News 2018 年 11 月号.

関連文献

愛知 83:98，愛知 95:57，愛知 02:156，愛知 06:56，愛知 09:177，分布 88:160，HBE3:356，HBW3:526，CBW1:440.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

ヤマシギ　*Scolopax rusticola* Linnaeus, 1758

評価理由

夜行性で観察されにくい鳥であるが、往時に比べ近年確認例が減ってきている。生息数の把握には、タマシギ同様、ヤマシギに特化した夜間における調査が効果的とみられる。今後生息状況をより正確に把握する為にも、調査方法の改善も必須である。

評価区分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	越冬	準絶滅危惧
全国 2020		－

形態

全長 31～38cm。体の上面は赤褐色に黒と灰白色の細かな斑模様。頭上に赤褐色と黒の横縞がある。下面は淡褐色に黒褐色の細かな横縞模様。ハトより大きい太ったシギで、長さ約 8cm のまっすぐな嘴と短い頚、脚をもつ。尾羽は基部が黒く先端部が灰色。飛ぶと翼端が丸い。



西区庄内緑地公園　2024 年 4 月 8 日　村上　修

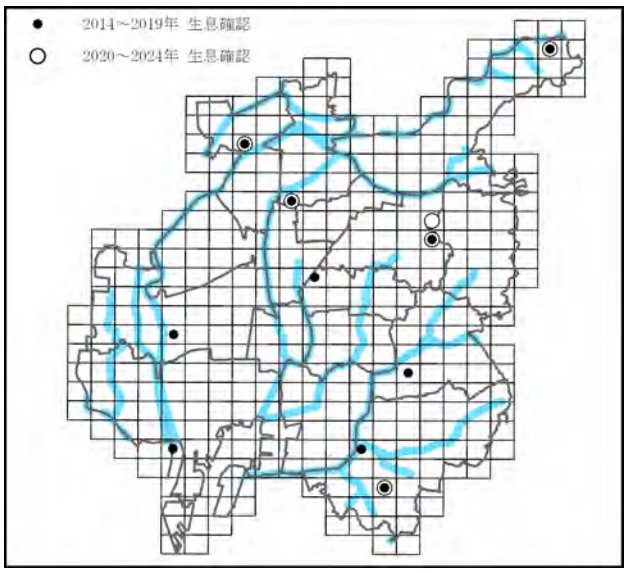
分布の概要

市内：北部、東部、西部等、おもに周辺部に散発的な記録がある。

県内：平野部に記録は散在している。

国内：本州以北、北海道、伊豆諸島で繁殖し、本州中部以南で越冬するが、繁殖密度は北海道で最も高い。

世界：ヨーロッパからアジア東部の中高緯度域、ヒマラヤ、サハリン等で繁殖し、多くは南下してヨーロッパ南部、アフリカ北部～アジア東南部で越冬する。狩猟や生息環境の破壊により、世界各地で減少しているとされる。



生息地の環境／生態的特性

低山の林内で繁殖するが、市内では（県内でも）繁殖の記録はない。名古屋市へは冬鳥として渡来し、夜間、林内や林縁で、土や堆肥の中からミミズをつつき出して食べるほか、昆虫類、多足類、甲殻類や植物の種子等も食べる。繁殖期の夕方、林の上を飛びながらチキッ、チキッと鳴くが、秋冬にはほとんど鳴かない。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋市では 10 月～4 月に記録されているが、夜行性で秋冬はほとんど鳴かないため、記録洩れもあると思われる。干潟や水田にすむ多くのシギ類と違って林内に生息する種類なので、宅地開発などで林が拓かれれば姿を消す。近年観察例は少なくなっているが、2003 年秋には緑区と千種区で各 1 羽観察されている。

保全上の留意点

雑木林と林縁部をより自然な姿で保全することが必要である。

特記事項

琉球列島で観察されるアマミヤマシギは別種で、絶滅危惧 II 類（VU）である。ヤマシギは、タシギとともに狩猟鳥獣（アマミヤマシギは別種のため含まれない）とされていて、捕獲制限数はタシギと合計して 1 日 5 羽である。2005 年から 2009 年は、1000~2000 羽の間で推移している。現状の観察数の減少を鑑みると、今後狩猟対象から除外するなどの措置を早急に講ずるべきであると考えられる。

引用文献

一般社団法人 大日本猟友会　http://j-hunters.com/intro/target.php

関連文献

愛知 83:121，愛知 95:68，愛知 02:150，愛知 06:70，愛知 09:161，繁殖 78:166，分布 88:183，HBW3:489，CBW1:442.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

アカアシシギ　*Tringa totanus* (Linnaeus, 1758)

評価理由

名古屋市では急速に減ってきた種類ではないが、元来数の少ない鳥なので、渡り中継地としての採餌環境や安全性が低下すれば、以降姿を見せなくなる恐れもある。

評価区分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	通過	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

形態

全長 25～29cm。夏羽の上面は褐色地に、下面は白地に、上下面とも黒い縦斑が目立つ。翼の基半部後縁（初列風切の一部と次列風切）と腰は白く、飛翔時明瞭な識別点となる。尾には白地に暗褐色の横縞がある。冬羽の上面は灰色がかり、上下面とも黒い縦斑は消えて胸に灰褐色の縦斑が残る。嘴は先が黒く基部が赤。脚は赤い。体との比例上、嘴も脚も近似種のツルシギより短い。



港区藤前干潟　2022 年 9 月 11 日　村上　修

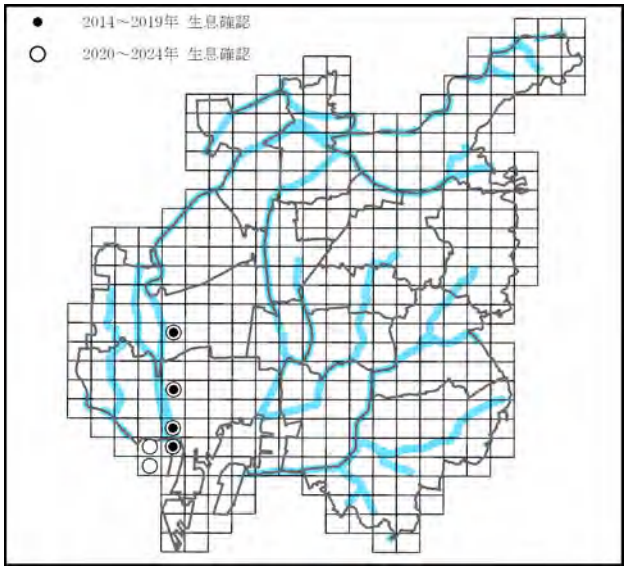
分布の概要

市内：南西部で記録されているが数は少ない。

県内：鍋田地区、矢作川河口付近、汐川河口付近等で記録されているが、数は少ない。

国内：数は多くないが広く旅鳥としての記録があり（春より秋に多い）、南西諸島では冬鳥。北海道東部では少数繁殖している。関東と九州を中心に確認が増加し、分布も拡大している。モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査結果では、旅鳥として日本を訪れる越冬個体数が増加しているデータが得られている。

世界：アイスランド、イギリス、スカンジナビアからヨーロッパ、アジアの中緯度域で繁殖し、アフリカ～東南アジアへ渡って越冬する。1980 年～2013 年におけるフランスでの調査結果では、継続的な増加傾向がみられている。



生息地の環境／生態的特性

ツルシギと同じく、海岸や河口部の干潟、海に近い水田、湿地等に単独または数羽で渡来し、昆虫類、小ガニ、小貝、ミミズ等を捕食する。ツルシギの群れに混じることもある。ピーチョイチョイとややアオアシシギに似た声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川河口部で記録（2010 年 9 月 2 羽、2013 年 4 月 10 羽、2013 年 9 月 4 羽、2014 年 9 月 3 羽など）があるが、いずれも数は少なく、稀な旅鳥と言える。周辺一帯での湿地環境（汽水域よりは淡水域）の減少が本種の生息に負に作用している可能性が高い。

保全上の留意点

本種の個体数の少なさが何に起因しているかは明確でないが、沿岸部の湿地を保全することが、今後の本種の減少を抑制する必要条件の一つだと考えられる。

引用文献

菊池有子・守屋年史，2015．フランスで越冬する沿岸性シギ類の動向．Bird Research News Vol.12 No.8

植田睦之ほか，2022．全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022 年，NPO 法人バードリサーチ・（公財）日本野鳥の会 169pp.

関連文献

愛知 83:108，愛知 95:61，愛知 02:133，愛知 06:62，愛知 09:157，繁殖 78:162，分布 88:168，HBE3:525，HBW3:509, CBW1:448.

（金澤　智）

鳥類　＜ペリカン目サギ科＞

チュウサギ　*Ardea intermedia* Wagler, 1829

評価理由

国内における 3 種のシラサギ類の中で、優占種であったが、1960～70 年代以降、宅地化、農薬汚染等により特に減少が目立つ種類とされ、準絶滅危惧種に指定された。2000 年代に入り、緩やかだが増加傾向にある。

評価区分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	繁殖	準絶滅危惧
	通過	準絶滅危惧
全国 2020		準絶滅危惧

形態

全長 63～72cm。頭から尾まで全身白色で脚は黒い。嘴は白サギ 3 種中最短で、夏黒く、冬黄色（先端のみ黒い）。目先は黄色く、夏には胸と背に長い飾羽を生じる。



チュウサギ（繁殖期ディスプレイ）
2018 年 5 月 26 日　海部郡蟹江町　金澤　智

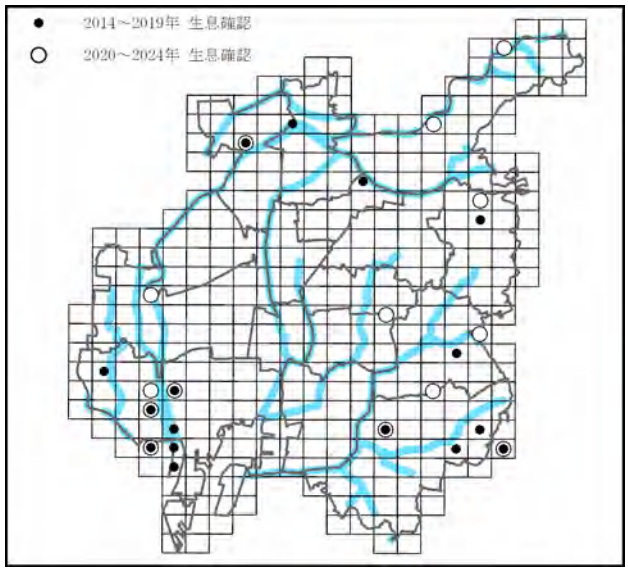
分布の概要

市内：比較的広く記録されているが、1980 年代以後減少していたが、その後増加傾向にあるとみられる。

県内：平野部で広く記録され、いくつかの地域では他のサギ類とともに繁殖している。

国内：夏鳥として東北地方南部以南で繁殖する。関東以西では越冬するものもある。

世界：旧世界の熱帯～温帯に広く分布する。世界で特に減少しているとは見なされていない。



生息地の環境／生態的特性

低地の水辺やそれに続く草地に生息し、魚類のほかカエル、トカゲ、ザリガニ、昆虫類等を捕食する。干潟など海へ出ることは少ない。

飛翔時、休息時には首を S 字形に縮めている。4～8 月頃、他のサギ類（ダイサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギ等）と集団で林の樹上に巣を作り、3～5 個の卵を産んで繁殖する。しわがれた声でグァー（グェーとも聞こえる）と鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

主に守山区、名東区、天白区、緑区、南区、港区など市の周辺部で観察される。港区藤高で 2010 年 9 月に 200 羽観測されたのが目立つ記録だが、ダイサギ・コサギと違って河口部の干潟へはほとんど出ない種類なので、内陸の淡水性湿地が減少した市内では衰退が著しい。市の西に隣接する東名阪蟹江 IC、弥富 IC 内が大規模な繁殖地となっていたが、2013 年以降蟹江 IC へ繁殖コロニーが集中し、弥富 IC での営巣は観察されなくなった。2025 年時点で、蟹江 IC 内の営巣地は、国内最大規模の繁殖コロニーとみられる。

保全上の留意点

他のシラサギ類に比べて国内で特に減少が著しいとされる理由の一つとして、圃場整備による餌となる生物の減少が考えられている。ハス田や水田がある程度保たれたとしても、安定して営巣できる樹林、竹林が減少傾向にある。特に住宅地近くの場合、糞や騒音について過剰に対応することで、結果的に新たな場所への営巣を誘引する（問題の先送りとなるだけ）ことになる。地域ぐるみで安定的な営巣環境を保全するなど、長期的な目線で対応することが必要な時期にあると考えられる。特に、蟹江 IC 内繁殖コロニーは、一企業による努力に頼るところが大きい。車との接触による交通事故発生の可能性等を鑑みると、名古屋市を含む周辺自治体が連携して生息環境創出に努めるべきである。

引用文献

益子美由希，2014．生態図鑑チョウサギ，Bird Research News Vol.11 No.3

関連文献

愛知 83:33，愛知 95:21，愛知 06:16，繁殖 78:74，分布 88:58，HBE1:296，HBW1:410.

（金澤　智）

鳥類　＜タカ目ミサゴ科＞

ミサゴ　*Pandion haliaetus* (Linnaeus, 1758)

評価理由

市域の南西部では近年、特に冬期において増加の傾向にある。全国的に見ても 1970 年代以降、繁殖地点の増加、調査地点数の増加も確認されている。また北海道から九州にかけて繁殖も確認されていることから、全体的にみても増加傾向にある事は明らかである。しかしながら市内の生息環境が改善されているとは言い難く、ランクの変更は行わなかった。

評価区分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	越冬	－
全国 2020		準絶滅危惧

形態

全長雄約 55cm、雌約 64cm。ほぼトビ大だが、翼は細長く尾は短め。頭は白く、過眼線が黒い。体の上面は黒褐色。下面は白く、胸に黒褐色の帯がある。若鳥の上面には淡褐色のうろこ模様がある。魚食鳥として進化し、前後に 2 本ずつ向く脚指を持つ。



港区西蟹田　2024 年 6 月 9 日　西村祐輝

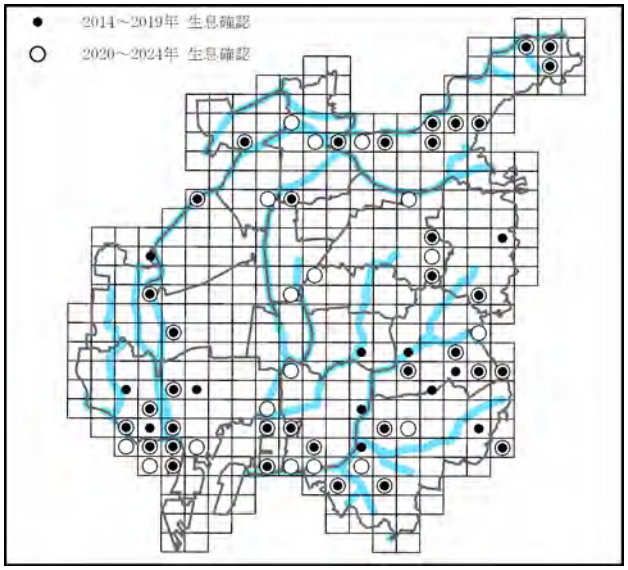
分布の概要

市内：近年広く記録されている。

県内：平野部で広く観察されるが、数は多くない。主として冬鳥・旅鳥だが、夏期の記録もある。

国内：北海道、本州、南千島で夏鳥、本州以南では留鳥。

世界：ユーラシア、北アメリカ、東南アジア、ニューギニア、オーストラリアなどで繁殖し、北部のものは南アメリカ、南アジア、アフリカなど南へ渡って冬を越す。世界での個体数はほぼ安定していると見なされている。



生息地の環境／生態的特性

海岸や湖沼に生息し、岩棚上や大木の樹上等で（近年は人工的な鉄塔の上でも）営巣する。内陸で繁殖するものも増えてきている。水面上で停空飛翔をしてねらいを定め、急降下して中・大型の魚をつかみ取る。キョッキョッとかキッキッと聞こえる高い声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

市内では、近年熱田区を除く全区で記録があり、その多くは通過個体だが、港区の庄内川、新川、日光川河口付近には周年生息し、1998 年 11 月 3 羽、1999 年 10 月 4 羽、2000 年 1 月 7 羽、2002 年 7 月 6 羽、2002 年 10 月 19 羽、2003 年 10 月 16 羽、2004 年 12 月 15 羽、2006 年 10 月 15 羽、2007 年 10 月 34 羽、2008 年 10 月 35 羽、2010 年 9 月 34 羽、2011 年 10 月 38 羽、2012 年 11 月 42 羽、2013 年 12 月 41 羽と、年を追って増加している。近隣地での繁殖の可能性も示唆される。2014 年以降も藤前干潟を中心に安定して観察することができていて、活発な魚の狩のシーンも容易に見かけることができる。

保全上の留意点

専ら魚を餌とし、特殊な進化を遂げた鳥だけに、激変する環境への適応性は高くないと思われる。現在の主生息地である庄内川河口部一帯の餌場としての保全がまず必要である。またハシボソガラスなどからモビング(mobbing; 擬攻撃　タカ類、フクロウ類、カラス類等が小鳥に追われる)を受けるシーンも多く観察されるため、カラス類の生息環境の管理も保全として必要だと考えられる。

引用文献

鳥類繁殖調査会，2021．全国鳥類繁殖分布調査報告　日本の鳥の今を描こう　2016-2021 年,175pp
榊原貴之ほか，2021．生態図鑑ミサゴ，Bird Research News 2021 年 5 月号

関連文献

愛知 83:60，愛知 95:35，愛知 02:120，愛知 06:34，愛知 09:145，分布 88:103，HBE2:265，HBW2:51，CBW1:518.

（金澤　智）

鳥類　＜タカ目タカ科＞

ツミ　*Accipiter gularis* (Temminck et Schlegel, 1845)

評価区分		
名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	繁殖	準絶滅危惧
	通過	－
全国 2020		－

評価理由

小型ながら食物連鎖の上位に立ち、健全な生態系を指標する種の一つである。市内で繁殖の例もあるので、生息環境の保全に努めて、更に安定した個体群にすることが望まれる。

形態

全長雄約 27cm、雌約 30cm。日本産では最小型のタカ。成鳥の上面は暗青灰色。雄の下面は白っぽく、胸側～脇が淡い赤褐色。雌の下面は白地に黒褐色の横斑がある。若鳥は上面黒褐色で、下面は白地に黒褐色の縦斑（胸）と横斑（腹）がある。翼が短めで翼端が丸みを帯び、尾羽が長い点など体形はオオタカ、ハイタカに似るが、大きさの差は顕著。



ツミ（幼鳥　胸に縦縞、胸から下側に横斑がみられる）
西区庄内緑地　2011 年 8 月 28 日　林　正直

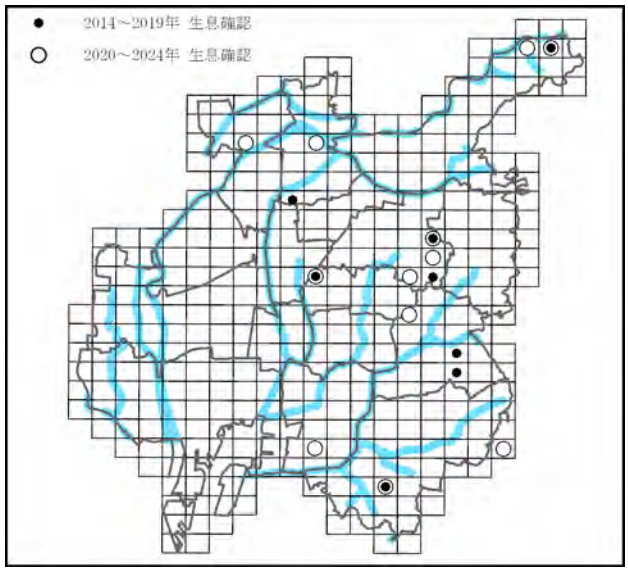
分布の概要

市内：主に東部、北部に記録が多い。

県内：平野～山麓にかけて広く記録されているが、繁殖記録は新城市作手地区などの少例のみ。秋、伊良湖岬を渡る数は 1 シーズンに 1,000 羽程度。

国内：広く分布し、繁殖地も北海道、南千島から沖縄に渡るが記録は比較的少ない。

世界：アジア東部の中緯度域で繁殖し、その多くは東南アジアで越冬している。世界での個体数に関する情報は十分でない。



生息地の環境／生態的特性

低山帯の雑木林に生息し、林内や周辺の農地等で小鳥や小型の哺乳類、昆虫類等を捕食する。攻撃的な習性が強く、自分より大きい他鳥を擬攻撃する姿がよく見られる。5～8 月頃、樹上に小枝を積み重ねて皿形の巣を作り、3～4 卵を産んで繁殖する。キーキーキキキキと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

市内では秋の通過と越冬例が主だが、守山区、名東区、天白区などでは繁殖例がある。2003 年春、昭和区鶴舞公園でも繁殖の徴候があったが、恐らく人による妨害で失敗に終わった。

保全上の留意点

生息・営巣環境としての緑地の保全や街路樹の育成がまず望まれる。また前項でも触れたように、人の接近が繁殖を失敗させる可能性も低くないので、撮影目的などでの長時間に及ぶ接近は慎みたい。更に他の多くの種についても言えることだが、カラスによる繁殖障害が懸念される。近年は名古屋市でも生ごみを食べるカラスが増えてきたため、本種等への影響にも注目する必要がある。

特記事項

近年、首都圏を中心に人家周辺で営巣する例が増えてきている。営巣に適したアカマツが多い点、また市街地では獲物となるスズメなどの小鳥類が多いことが一因と考えられている。一方市街地を好むハシブトガラスとの競合があるため、必ずしも繁殖が成功しない例なども知られている。

引用文献

平野敏明，2005．生態図鑑ツミ，Bird Research News Vol.2 No.2

関連文献

愛知 83:65，愛知 95:38，愛知 02:121，愛知 06:36，愛知 09:147，分布 88:107，HBE2:148，HBW2:155，CBW1:542.

（金澤　智）

鳥類　＜タカ目タカ科＞

ハイタカ　*Accipiter nisus* (Linnaeus, 1758)

評価理由

名古屋市では緑地に富む東部に記録が集中している。記録漏れもあると思われるが、現状を見る限り準絶滅危惧から外すにはやや安定さに欠けると判断される。

評価区分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	越冬	準絶滅危惧
全国 2020		準絶滅危惧

形態

全長雄約 32cm、雌約 39cm。先に丸みがある短めの翼と長めの尾をもつ。雄の上面は暗青灰色で、黒い過眼線とその上に白い眉線がある（雌にも）。下面は白地に赤褐色の横斑がある。雌の上面は灰褐色で、下面は白地に褐色の横斑がある。若鳥の上面は褐色で、下面は白地に黒褐色の縦斑（のど）、横斑（胸、腹）がある。尾にはいずれも 4 本の黒っぽい帯がある。雌の大型個体はオオタカ雄の小型個体と混同しやすい。



港区戸田川緑地　2023 年 3 月 27 日　西村祐輝

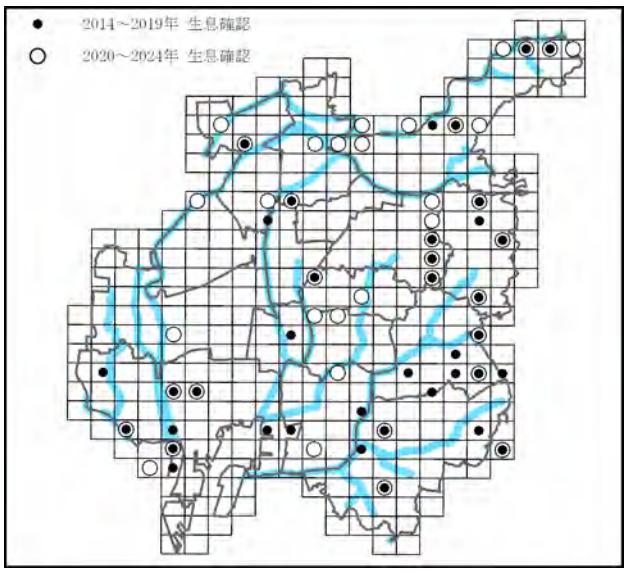
分布の概要

市内：近年記録地は広がっているが、個体数は少ない。東部には繁殖の記録もある。

県内：おもに秋～春、平地から低山で広く記録されているが数は少ない。

国内：本州以北で繁殖し、ほぼ全国で越冬する。

世界：ユーラシアとアフリカ北西部で繁殖し、北部のものは南下して越冬する。1950～60 年代有機塩素系殺虫剤によって激減し、その後回復してきたとされる。



生息地の環境／生態的特性

春夏は山地の林、秋冬は低地～低山の林に生息し、小鳥類を主に、小型哺乳類、昆虫類等も捕食する。5～6 月頃、アカマツ等の樹枝上に小枝を積んで皿形の巣を作り、4～5 卵を産んで繁殖する。キキキキキキキと鳴く声はオオタカに似るが、ややテンポが速い。

現在の生息状況／減少の要因

市内でかなり広く記録されている。守山区、名東区、千種区、天白区、緑区の東部 5 区ではほぼ調査年ごとに記録され続け、天白区では繁殖の記録もある。現時点では特に著しい減少の傾向は認められない。オオタカはハイタカの主要な捕食者であるが、生息環境が重なる。ハイタカは、より高い樹林密度を利用し、小型鳥類（オオタカは中型鳥類）を捕食するなど、ある程度の食性の重複が考えられるため、オオタカとの間で棲み分けしていると考えられる。

保全上の留意点

市内で（県内でも）繁殖の記録は少ないが、林にすみ、その周辺で採餌する種類であるため、緑地の保全が必要である。

引用文献

平井克亥，2013．生態図鑑ハイタカ，Bird Research News Vol.10 No.6

関連文献

愛知 83:66，愛知 95:38，愛知 02:123，愛知 06:37，繁殖 78:118，分布 88:109，HBE2:158，HBW2:158，CBW1:542.

（金澤　智）

鳥類　＜タカ目タカ科＞

オオタカ　*Accipiter gentilis* (Linnaeus, 1758)

評価区分		
名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	越冬	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020		準絶滅危惧

評価理由

オオタカは、絶滅危惧II類(VU)にあてはまるような急激な減少はしていない等の理由により 2017 年 9 月 21 日に種の保存法に基づく国内希少種から解除された（環境省 online 発表）。レッドリストなごや 2025 では、名古屋市内における里山環境の改善が見られないことから、ランクの変更は行わなかった。

形態

全長雄約 50cm、雌約 56cm。ほぼカラス大のタカで、先に丸みがある短めの翼と長めの尾をもつ。成鳥の上面は暗灰色で、目から後方が黒く、白い眉線が目立つ。下面は白地に黒く細い横縞模様がある。尾には 4 本の黒っぽい横帯がある。若鳥は上面褐色で下面に暗褐色の縦斑がある。



港区稲永　2024 年 8 月 25 日　西村祐輝

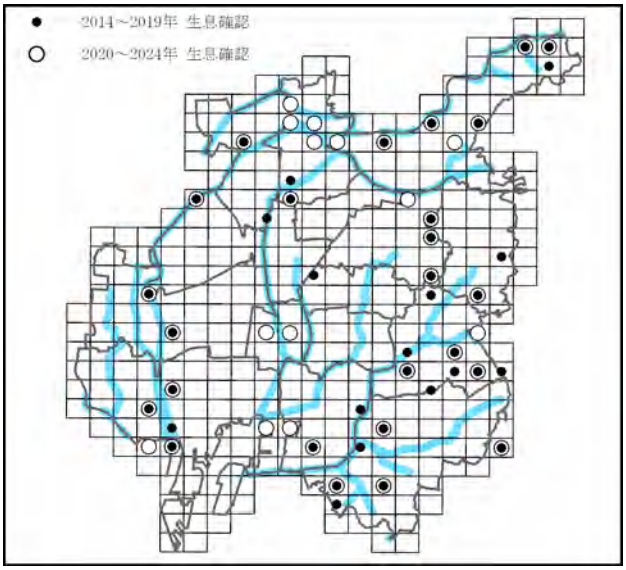
分布の概要

市内：ほぼ全域で観察され、近年記録は増す傾向にある。

県内：里山を中心に広く分布し繁殖している。

国内：本州以北で繁殖し、季節による大きな移動はしない。

世界：北半球の温帯から亜寒帯にかけて広く繁殖し、やや南下して越冬するものもある。19 世紀から 20 世紀にかけて世界的に減少したが、現在、減少は止まったと考えられている。



生息地の環境／生態的特性

営巣環境である高木を含む林と、採餌環境である林縁部や農耕地とが混在する里山に生息し、中・小型の鳥やヘビ、リスなどを捕食する。より山地を好むクマタカ、イヌワシと異なり、生息環境が人の生活域と接するため、開発事業で話題になることが多い。マツなどの高木に営巣し、4～5 月頃 3～4 卵を産んで繁殖する。キッキッキッと鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

図からは読めないが、市の東部では 1980 年代後半からの記録が多く、繁殖の報告もある。市の中部、西部の記録はほとんどが 1990 年代以降のもので、しかも 2 ヶ月、3 ヶ月と連続記録されている地域もあることから、現実に増加している可能性がある。この近年の増加傾向は、現実に数が増えたのか、発見される機会が増えただけなのか不明である。

保全上の留意点

前項記述のように、今後継続して動静を調査・分析するとともに、営巣環境の保全措置（林や大木の保全、場合によっては飛翔空間を確保するための林内整備等）を講ずる必要がある。

特記事項

里山の食物連鎖の頂点に位置する代表的な種類として、本種は健全な生態系の指標とされる。このため里山の環境変化の目安としても、本種の動静に注目する必要がある。「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」により、国内希少野生動物種に指定されているが、近年指定解除への動きもある。

引用文献

植田睦之ほか，2022.オオタカの繁殖状況と国内希少野生動植物種からの解除の影響，Bird Research Vol.18，pp.A99-A107

関連文献

愛知 83:64，愛知 95:37，愛知 02:121，愛知 06:35，愛知 09:146，分布 88:107，HBF2:148，HBW2:162，CBW1:544.

（金澤　智）

鳥類　＜フクロウ目フクロウ科＞

オオコノハズク　*Otus semitorques* Temminck & Schlegel, 1844

評価理由

目立たない鳥のため記録は少ないが、その僅かな記録からも、名古屋市が越冬地または移動時の通過地として利用されていることが推測される。

評価区分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛知県 2025	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	越冬	準絶滅危惧
全国 2020		－

形態

全長 23～26cm。体は褐色で、上面には黒褐色や黄褐色の虫食い状の斑があり、後頚に淡い灰褐色の斑がある（この斑はコノハズクにはない）。下面には黒褐色の縦斑がある。翼の下面は淡褐色で、風切羽と尾には黒褐色の横縞がある。頭に羽角があり、目は赤橙色（コノハズクは黄色）。嘴は黒い。



西尾市歴史公園 2013 年 1 月 26 日　林　正直

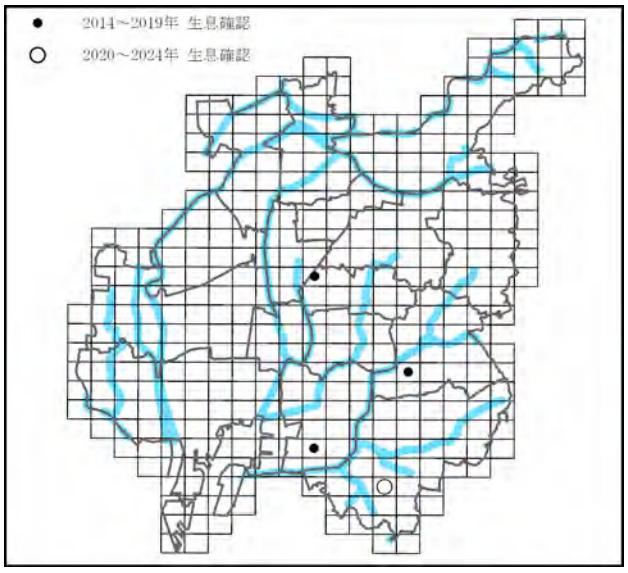
分布の概要

市内：東部に僅かな記録がある。

県内：低地から山地まで記録は散在するが、夜行性で鳴き声も目立たないため、情報は十分でない（三河山地での繁殖記録がある）。

国内：主要四島のほか南千島、佐渡、隠岐、対馬、五島列島、琉球諸島、伊豆諸島に留鳥または漂鳥として繁殖しているが数は多くない。

世界：アジア南部～東部に留鳥として生息し、世界で特に減少しているとは見なされていない。



生息地の環境／生態的特性

低地～山地の林に生息し、夜間活動して小鳥類、ネズミ、モグラ、カエル、甲殻類、昆虫類、クモ等を捕食する。5～6 月頃、樹洞に 4～5 卵を産んで繁殖する。コノハズクのような移動性はなく、ほぼ留鳥とされるが、冬には暖地に漂行するものもある。雄はホッホッホッとかウォッウォッと聞える声で鳴き、雌はミャーミャーと猫に似た声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

記録は、千種区東山公園で 1985 年 3 月、天白区相生山緑地で 1979 年 10 月・11 月、1994 年 12 月、1999 年 11 月、南区大江川緑地で 2004 年 11 月、それぞれ 1 羽と乏しいが、記録洩れもあると思われ実態はつかみにくい。しかし、森林性の種だけに今も都市化が進んでいる名古屋市で、減少傾向にあることは否定できない。2020 年大高緑地における観察記録以降観察されていない。

保全上の留意点

実態は十分把握できないが、林地の保全を第一に、巣箱の仮設も試みる価値がある。

特記事項

従来アジア南～南東部及び周辺のものをまとめてオオコノハズク（*O. bakkamoena*）としてきたが、羽色、眼の色、鳴き声等の違いから細分化され、日本産の個体は *O. lempiji* とされた。

関連文献

愛知 83:146，愛知 95:84，愛知 02:152，愛知 06:85，愛知 09:165，繁殖 78:214，分布 88:221，HBW5:158，CBW1:494.

（金澤　智）

鳥類　＜スズメ目サンショウクイ科＞

サンショウクイ　*Pericrocotus divaricatus* (Raffles, 1822)

評価理由

4 月頃渡来し、9～10 月頃渡去する夏鳥だが、国内各地で減少が報告され、名古屋市でも近年減少している。

評 価 区 分

名古屋市 2025		準絶滅危惧
愛 知 県	繁殖	－
2 0 2 5	通過	－
全　　国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

形態

全長 19～21cm。雄は額が白く、頭頂から後頭と過眼線は黒い。背～腰は灰青色で、長めの尾羽は中央が黒く左右は白い。下面は白。翼は黒く、開くと上下面とも白い線が出る。雌は額の白が狭く、頭上～後頭は灰色。嘴と脚は黒い。



瀬戸市定光寺町　2023 年 4 月 25 日　西村祐輝

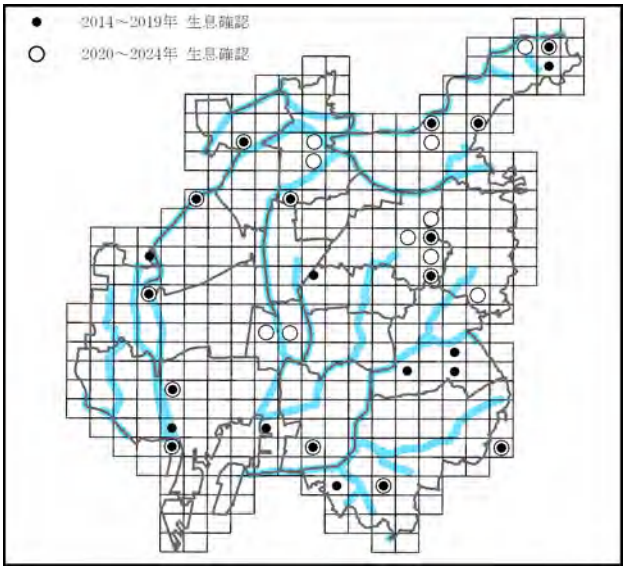
分布の概要

市内：春と秋の渡り期に、主に市の東半部で見られるが、記録は秋の渡去期に多い。

県内：夏鳥として渡来し、山地の広葉樹林で繁殖するが、1980 年代以降個体数は減少している。

国内：主要四島のほか佐渡、南西諸島で繁殖する夏鳥で、九州南部以南では越冬するものもある。個体数は各地で減少している。

世界：中国東北部、ウスリー地方等で繁殖し、東南アジア、台湾、インドネシアで越冬する。世界的に減少していると考えられる。



生息地の環境／生態的特性

夏期、低山の広葉樹林に渡来する。高木の梢近くで、トンボ、アブ、カメムシ、ガ、コガネムシ等の昆虫類を捕食する。巣も通常高枝上に作り、5～6 月頃、4～5 卵を産んで繁殖する。緩い波形を描いて飛び、ジーリジリまたはヒリヒリヒリ（名の由来）と聞こえる声で鳴く。渡去期には群れて低地の林を通過していく。

現在の生息状況／減少の要因

地図上の記録は多そうに見えるが、個体数は近年著しく減っている。1996 年 9 月東山植物園 14 羽、2003 年 8 月天白区荒池 18 羽、2006 年 9 月東山植物園 16 羽、2014 年 8 月天白区相生山緑地 30 羽等のまとまった数の記録は最近では珍しい。顕著な減少の原因は明らかでないが、低地～低山帯の広葉樹林の減少が原因の一つではないかと考えられる。

保全上の留意点

市内では緑地や公園の林を保全することが必要である。

特記事項

サンショウクイは、これまでリュウキュウサンショウクイを亜種と、区別されていなかったが、日本鳥類目録の変更（2023 年）により、サンショウクイとリュウキュウサンショウクイの 2 種に分類された。近年冬場に確認されるサンショウクイがリュウキュウサンショウクイとみられることから、今後記録時に注意を要する必要がある。

引用文献

三上 かつら・植田 睦之，2016. 日本のサンショウクイ 2 亜種の音声の違いと簡便な判別法，Bird Research Vol.12，pp.T1-T8

関連文献

愛知 83:172, 愛知 95:97, 愛知 02:112, 愛知 06:98, 愛知 09:168, 繁殖 78:272, 分布 88:252, HBW10:113.

（金澤　智）

鳥類　＜キジ目キジ科＞

ウズラ　*Coturnix japonica* Temminck & Schlegel, 1849

評価理由

観察記録が極めて稀な上、その僅かな記録中に飼育群からの脱出個体も混入している可能性があるため、野生種の現状把握はむずかしい。環境省自然環境局の判断では近年減少しているとされる。一方私信ではあるが、北海道ではチュウヒの餌として、よく観察される等の情報もある。今後は観察だけではなく、音声を頼りにすることで、生息状況を把握していく必要がある。

評価区分

名古屋市 2025		情報不足
愛知県 2025	越冬	絶滅危惧 IB 類
全国 2020		絶滅危惧Ⅱ類

形態

全長 19～22cm。上面は褐色で、白と黒の縦斑、横斑がある。下面は淡い黄褐色で、胸～脇に茶褐色と黒の縦斑がある。雄の夏羽の喉～頬は赤褐色。雌の喉、上胸には 2 本の黒褐色の横帯がある。開いた翼の上面は黄褐色地に黒褐色の横縞がある。



千種区平和公園　2015 年 10 月 24 日　村上　修

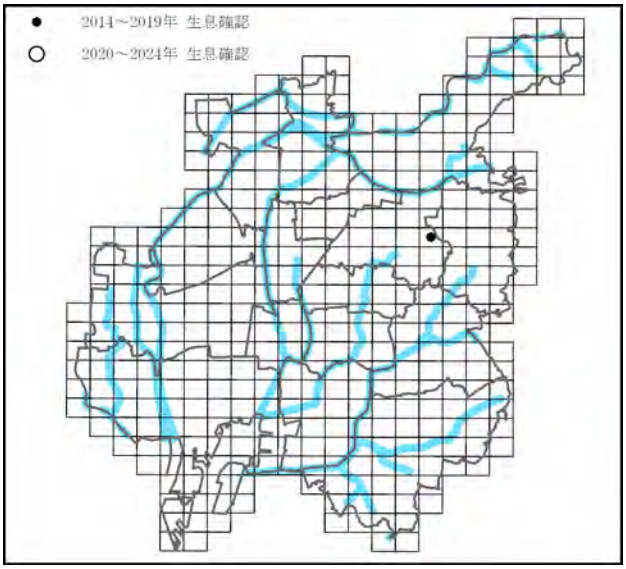
分布の概要

市内：確実な記録は 1969 年 4 月天白区野並 1 羽、1974 年 3 月千種区覚王山 3 羽等ごく僅かで、名古屋市の生息状況調査には一度も出現していない。

県内：海部郡弥富町、幡豆郡一色町、宝飯郡一宮町、北設楽郡稲武町等に散発的な記録があるだけで、特に近年は報告が少ない。

国内：本州中部以北で夏鳥として繁殖し、本州中部以西（南）で越冬するが報告は少ない。

世界：モンゴル東部、中国東北部、ウスリー、サハリン等で繁殖し、韓国、中国南部等に渡って越冬する。世界での個体数に関する情報は不足している。



生息地の環境／生態的特性

耕地、草原、河原等に生息し、草の種子のほか昆虫類、クモ類等を捕食する。5～9 月頃（時に 10 月にも）草の根元に少量の枯草を敷いて巣を作り、7～12 個（時に 18 個も）の卵を産んで繁殖する。通常草蔭にひそんでいて滅多に姿を見せないが、繁殖期にはジュジュグーイッとかジョッビッグルル等と聞える声で存在を知ることが多い。

現在の生息状況／減少の要因

記録はごく僅かしかなく、特に近年の情報は少ない。草に隠れるようにして生活する鳥なので、草原が刈られたり、圃場整備が進んで草むらがなくなったりすると棲めなくなる。情報不足で現状の正しい把握ができず、近年減少している（らしい）原因も詳しくは解っていない。

保全上の留意点

当面は草原を維持することぐらいしか考えられないが、飼育から抜け出た個体のことも考慮に入れて、保全策を検討していく必要がある。

特記事項

豊橋市を中心に多数飼育され、卵の出荷量は全国の 70%を占める。ニワトリやアヒルと異なり 1 個体当たりの産卵数が多い」以外は、野生種との変異が少ないため、両者の識別は困難である。世界のレッドリスト（IUCN2016）で準絶滅危惧（NT）に指定されている。

関連文献

愛知 83:76，愛知 95:43，愛知 02:148，愛知 06:42，愛知 09:123，繁殖 78:130，分布 88:125，HBW2:509，CBW1:94.

（金澤　智）

鳥類　＜チドリ目シギ科＞

シベリアオオハシシギ　*Limnodromus semipalmatus* (Blyth, 1848)

評価理由

春・秋の渡り期に干潟や沿岸部の湿地を訪れるが、渡来数が極めて少なく、安定した生息状況とは言えない。県内には湿地の埋立てによって、近年渡来が途絶えた地域もある。

評価区分

名古屋市 2025		情報不足
愛知県 2025	通過	絶滅危惧 IA 類
全国 2020		情報不足

形態

全長 33～36cm。夏羽は上・下面とも赤褐色で、黒褐色の斑と白い羽縁が目立つ。冬羽の頭上は灰褐色に黒い縦斑。体の上面は黒褐色で白い羽縁がある。冬羽の下面は白く、頸や胸側に灰褐色の縦斑がある。若鳥は冬羽に似るが上・下面とも黄褐色味が強い。嘴と脚はともに長くて黒い。ややオオソリハシシギに似るが、体の大きさ、嘴の形と色、脚の長さ、静止時の後頭部が突き出たような形等で識別する。



名古屋市港区　2021 年 5 月 9 日　西村祐輝

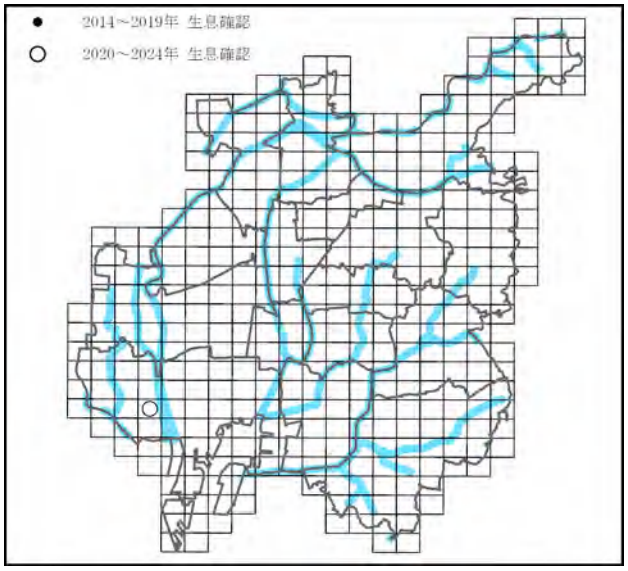
分布の概要

市内：春と秋に南西部で観察された記録があるが数は極めて少ない。

県内：矢作川河口付近と汐川干潟に僅かな記録がある。

国内：稀な旅鳥として主要四島と琉球諸島に渡来している。

世界：アジア中・東部で飛石状に繁殖し、アジア東南部～オーストラリアで不連続に越冬するが、ロシアのレッドデータブックに登載されるなど、世界的にも減少の傾向にある。



生息地の環境／生態的特性

ごく稀な旅鳥として渡来し、干潟や沿岸部の湿地でゴカイ・貝・甲殻類・ミミズ・昆虫類等を捕食するが、詳しい生態は解っていない。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川河口付近で 1978 年 8 月 20 日 1 羽、1986 年 9 月 7 日 1 羽、1999 年 5 月 9～10 日 1 羽、2009 年 8 月 1 羽の記録があるだけで、県内、国内でも極めて稀にしか記録されていない。かつて毎年のように渡来していた西尾市一色町で、湿地の埋立てとともに渡来が途絶えた経緯がある。

保全上の留意点

世界的な稀少種で、情報が極めて乏しいが、干潟とその周辺の湿地を主な採餌地・休息地としているので、そのような環境を保全することが必要と考えられる。

特記事項

世界のレッドリスト（IUCN2016）で準絶滅危惧（NT）に指定されている。一方環境省レッドリストでは、情報不足（DD）とされている。

関連文献

愛知 83:249，愛知 95:151，愛知 02:148，愛知 06:61，愛知 09:96，HBW3:498，CBW1:440.

（金澤　智）

鳥類　＜スズメ目ホオジロ科＞

ノジコ　*Emberiza sulphurata* Temminck & Schlegel, 1848

評　価　区　分

名古屋市 2025		情報不足
愛　知　県	繁殖	絶滅
2　0　2　5	通過	絶滅危惧 IB 類
全　　国 2020		準絶滅危惧

評価理由

繁殖地が日本だけで、しかも繁殖が局地的という不安定な種。情報不足だが、気付いた時には減少が加速して絶滅に向かっていたということになる可能性がある。

形態

全長 13.5～14.8cm。雄の頭部は灰緑色で、目の周囲が細く白い。目先は黒っぽく、背は灰色がかった黄緑色に黒褐色の縦縞がある。下面は褐色がかった黄色で、脇に僅かに灰緑色縦斑がある。雌は雄に似るが、頭部の色が淡く、目先が黒くない。アオジの下面は本種よりやや緑がかり、脇の縦斑が目立ち、目の周囲が白くない。



長野県大町市居谷里湿原　2019 年 6 月 15 日　村上　修

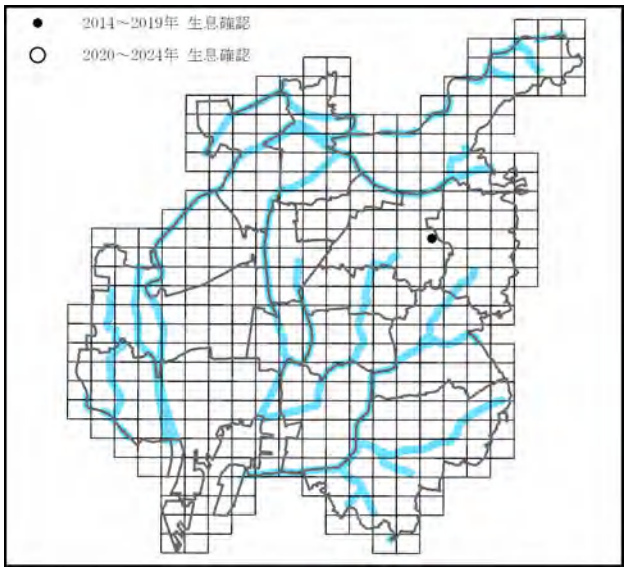
分布の概要

市内：春と秋に東部での記録がある。

県内：春と秋に平野部で観察されているほか、三河山地では繁殖記録もあるが、市内、県内とも情報は少ない。

国内：夏、本州中部、北部の比較的限られた地域で繁殖し、西日本を旅鳥として通過する。2012 年富士山麓での研究では、生息域ではカラマツが生育し、繁殖域の標高は 1090 - 1470ｍであった。考察において、カラマツ人工林は鳥類の多様性が低いが、ノジコはこの様な場所を上手く利用している可能性があると指摘している。

世界：日本以外に繁殖地はなく、中国南東部の狭い区域、台湾、フィリピン等で越冬する。20 世紀を通じて減少してきたと見なされている。



生息地の環境／生態的特性

夏期、本州中部、北部の山地の林に生息し、昆虫類、クモ類、草の種子等を食べている。5～7 月頃、樹枝上に作った巣に 3～5 卵を産んで繁殖する。春・秋の渡り期には低地の河川敷の藪や耕地等、繁殖期より開けた所にも出る。チチーチチヨチチヨチチチとアオジより早口につややかな声でさえずる。地鳴きはチッ、チッと一声ずつ。

現在の生息状況／減少の要因

市内では、1984 年 10 月千種区平和公園 1 羽、1989 年 5 月天白区大根池 1 羽、同年 9 月平和公園 1 羽の記録のほかは、2001 年 4 月緑区氷上姉子神社 2 羽（雄雌）、同年 10 月千種区平和公園 1 羽、2014 年 5 月同所で 1 羽（雄）など散発的な記録があるだけで、極めて情報に乏しい。

保全上の留意点

局地的分布を示す理由等、未知の分野が多い種なので、より精度の高い調査結果の蓄積が望まれる。

特記事項

世界のレッドリスト(IUCN2021)で低危険種 LC に指定されている。環境省レッドリストでは、準絶滅危惧種（NT）とされ、説明では、“第 6 回自然環境保全基礎調査の確認サブメッシュ数 115 と、生息分布状況に大きな変化は見られないが、生息数の減少が起こると種の絶滅に直結する。生態についてわかっていない鳥であるので、越冬地も含めて調査、研究が必要である。”と記載されている。

引用文献

環境省自然環境局生物多様性センター，2004．第 6 回自然環境保全基礎調査　種の多様性調査　鳥類繁殖分布調査報告書，343pp.

西　教生，2013．富士山北麓でのノジコの繁殖環境，富士山研究 Vol.7 ，pp.25-27.

関連文献

愛知 83:222，愛知 95:124，愛知 02:153，愛知 06:126，愛知 09:142，繁殖 78:380，分布 88:303，HBW16:533.

（金澤　智）

【国リストの掲載種ケリ（DD）について】
ケリ（DD）について、名古屋市では絶滅危惧種と判断されなかった理由を以下に記述した。

鳥類　<チドリ目　チドリ科>（国：情報不足）

ケリ　*Vanellus cinereus* (Blyth, 1842)

評価理由

市内では、ある程度の数が観察され、周辺特に西部に比較的安定した個体群が生息するので絶滅危惧の対象種とは判定せず、DD としている。

生息地の環境／生態的特性

ケリの繁殖環境は、一般的には文献にある様に河川、湖沼に近接する水田等の耕作地を利用するものが主だとみられる。一方名古屋市内では、コアジサシ、コチドリ等が繁殖する荒れ地（敷地内に多少の水たまりができる程度）でも繁殖をおこなっている。この様な営巣地では、ケリがカラス、タカから営巣地を守る現象も観察できる。

保全上の留意点

名古屋市を含む愛知県下では、ケリはごく普通に観察される野鳥であるが、全国レベルで見ると、多くの都道府県で絶滅危惧種、準絶滅危惧種に指定されている。このため名古屋市内は、特異な状態にあると言える。今後は、より積極的な湿地等の生息環境保全を進めるべきだと考えられる。

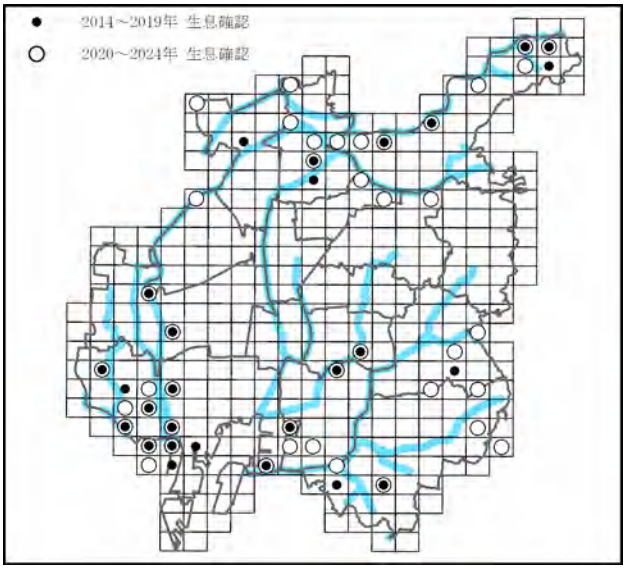
引用文献

永井和哉・高橋佑亮, 2024. 伊豆沼・内沼研究報告 Vol.18, pp.107-114

（金澤　智）



港区藤高　2021 年 5 月 30 日　西村祐輝



爬虫類

①　名古屋市における爬虫類の概況

これまでに名古屋市内で繁殖、定着が確認されている在来の爬虫類は 2 目 9 科である。市内に *Pelodiscus* 属のスッポンが在来種ニホンスッポン *P. japonicus* か外来種チュウゴクスッポン *P. sinensis* かのどちらかしか生息していないのであれば爬虫類の種数は 15 種であるし、両種が定着しているのであれば 16 種と言える。この混乱については後述する。

市内に定着している爬虫類のうち、ミシシッピアカミミガメは明らかな外来種である。チュウゴクスッポンが市内に生息しているのであればこの種は外来種である。東海・北陸地方以東に分布するクサガメは外来種である可能性がある。ニホンヤモリは近年の分子系統学研究により、日本に分布するものは外来種であるとみなされるようになった。

ミシシッピアカミミガメ、チュウゴクスッポン、クサガメ、ニホンヤモリを外来種と考え、かつニホンスッポンが市内に現生していると考えれば、名古屋市の爬虫類で在来種は 2 目 7 科 12 種ということになる。

他の生物の分類群と同様に爬虫類においても、近年の DNA を使った分子系統学的研究の進展により、新種や隠蔽種が発見されたり、遺伝的な多様性が明らかになったり、外来の個体群が見つかったりしている。そのため名古屋市のそれぞれの爬虫類の評価は確定し難いのである。

日本爬虫両棲類学会の日本産爬虫両生類標準和名リスト（2024 年 3 月 11 日版）に準拠して列挙すると下のとおりである。ただし当学会の標準和名一覧では *Pelodiscus* 属を「スッポン属」としているが、ここでは「キョクトウスッポン属」とする。

爬虫綱 Reptilia Laurenti, 1768
　カメ目 Testudines Linnaeus, 1758
　　イシガメ科 Geoemydidae Theobald, 1868
　　　イシガメ属 *Mauremys* Gray, 1869
　　　　クサガメ *Mauremys reevesii* (Gray, 1831)
　　　　ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel, 1838)
　　ヌマガメ科 Emydidae Rafinesque, 1815
　　　アカミミガメ属 *Trachemys* Agassiz, 1857
　　　　アカミミガメ *Trachemys scripta* (Schoepff, 1792)
　　　　　ミシシッピアカミミガメ *Trachemys scripta elegans* (Wied, 1839)
　　スッポン科 TrionychidaeGray, 1825
　　　キョクトウスッポン属 *Pelodiscus* Fitzinger, 1835
　　　　チュウゴクスッポン *Pelodiscus sinensis* (Wiegmann, 1834)
　　　　ニホンスッポン *Pelodiscus japonicus* (Temminck et Schlegel, 1838)

有鱗目 Squamata Oppel, 1811
トカゲ亜目 Lacertilia Owen, 1842
ヤモリ科 Gekkonidae Oppel, 1811
ヤモリ属 *Gekko* Laurenti, 1768
ニホンヤモリ *Gekko japonicus* (Schlegel in Duméril et Bibron, 1836)
トカゲ科 Scincidae Oppel, 1811
トカゲ属 *Plestiodon* Duméril et Bibron, 1839
ヒガシニホントカゲ *Plestiodon finitimus* Okamoto et Hikida, 2012
カナヘビ科 Lacertidae Oppel, 1811
カナヘビ属 *Takydromus* Daudin, 1802
ニホンカナヘビ *Takydromus tachydromoides* (Schlegel, 1838)
ヘビ亜目 Serpentes Linnaeus, 1758
タカチホヘビ科 Xenodermidae Gray,1849
タカチホヘビ属 *Achalinus* Peters, 1869
タカチホヘビ *Achalinus spinalis* Peters, 1869
ナミヘビ科 Colubridae Oppel, 1811
ナミヘビ亜科 Colubrinae Oppel, 1811
オオカミヘビ属 *Lycodon* H. Boie in Fitzinger, 1826
シロマダラ Lycodon orientalis (Hilgendorf, 1880)
ジムグリ属 *Euprepiophis* Fitzinger, 1843
ジムグリ *Euprepiophis conspicillatus* (Boie, 1826)
ナメラ属 *Elaphe* Fitzinger, 1833
アオダイショウ *Elaphe climacophora* (Boie, 1826)
シマヘビ *Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)
ユウダ亜科 Natricinae Bonaparte, 1838
ヒバカリ属 *Hebius* Thompson, 1913
ヒバカリ *Hebius vibakari* (Boie, 1826)
ヒバカリ *Hebius vibakari vibakari* (Boie, 1826)
ヤマカガシ属 *Rhabdophis* Fitzinger, 1843
ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus* (Boie, 1826)
クサリヘビ科 Viperidae Laurenti, 1768
マムシ亜科 Crotalinae Oppel, 1811
マムシ属 *Gloydius* Hoge et Romano-Hoge, 1981
ニホンマムシ *Gloydius blomhoffii* (Boie, 1826)

②　名古屋市における絶滅危惧種の概況

収集した情報を分析し、名古屋市に生息する爬虫類の絶滅危惧の程度を次のようにカテゴリー分けした。

絶滅危惧 IB 類（EN）：ジムグリ、シロマダラ

絶滅危惧 II 類（VU）：ニホンイシガメ、ヒバカリ、ヤマカガシ、ニホンマムシ

準絶滅危惧（NT）：シマヘビ

情報不足（DD）：クサガメ、ニホンスッポン、タカチホヘビ

以下、カメ類、ヘビ類、トカゲ類に分けて絶滅危惧の状況を説明する。

ア　カメ類

市内に定着しているカメはクサガメ、ニホンイシガメ、キョクトウスッポン属の 1 種か 2 種、ミシシッピアカミミガメの 4 種類である。

このうち北米原産のミシシッピアカミミガメは明らかな外来種であり、2023 年 6 月 1 日から条件付特定外来生物に指定された。市内のミシシッピアカミミガメは、ペットとして流通され飼育されていたものの一部が野外に放逐されたものか、親となったそれらの個体の子孫である。環境への順応性が高く、原産地ほど天敵もいないミシシッピアカミミガメは市内の池沼や河川で急増している。しかし在来のカメの方は、次の項で種ごとに詳しく述べるように、個体数が減少傾向にある。

名古屋市におけるカメの減少のおもな原因は、次の 3 点にまとめられよう。

1 点目は、ハビタット（habitat、生息場所）の状態の悪化である。市内では次のような開発行為、つまり

（1）水田や池沼などの湿地が、宅地化などで埋め立てられる

（2）ため池や川の水辺エコトーンがコンクリートやブロックで護岸される

（3）道路や河川の堰堤、ため池の余水吐のような、カメの移動を阻害する構造物が敷設されるといった、水辺環境の人為的な改変が進んでいる。その結果、

（イ）生活空間の消失

（ロ）越冬場所と夏の活動場所との間の季節的移動の経路の遮断

（ハ）遺伝的集団の細分化や分断化あるいは孤立化

（ニ）餌資源の減少

（ホ）個体の病気や怪我あるいは死亡の多発

といった、カメの生活への障害が生じている。

2 点目は、カメを捕食したり傷つけたりする外来生物の出現である。近年市内では、四肢や尾が切断される大けがを負ったり、頭部が切断されて死亡したりしたカメ、特にニホンイシガメが見つかるようになった。これは北アメリカから持ち込まれたアライグマの仕業である可能性が高く、実際にはかなり食害されている恐れがある。また大型のアメリカザリガニ、大陸型のコイ、カムルチー、ブラックバス、アリゲーターガー、ウシガエル、ミシシッピアカミミガメ、ホクベイカミツキガメ、ワニガメ、シベリアイタチといった市内で見つかる外来動物は、幼体、あるいは場合によっては成体の在来ガメを補食している可能性がある。

3 点目は外来のカメによる在来のカメへの圧迫である。外来ガメによる捕食についてはすでに上述したが、その他に種間競合を通しての種の置換、および遺伝子汚染（遺伝子移入、遺伝子浸透）の

被害が市内で生じている。小型～中型の水棲カメ類のいくつか、特にミシシッピアカミミガメは、ニホンイシガメなど在来のカメと食物、あるいは日光浴や産卵、越冬、採餌の場所が共通しており、生態的地位（ニッチ）が似ている。そうすると競争排除の効果が働き、在来のカメが本来のハビタットから追い出されてしまい、ミシシッピアカミミガメが優占するようになる。また同じ科であるカメが野外放逐されると，種間で交雑し、カメの場合繁殖能力を持つ子孫を生み出すことがある。市内ではニホンイシガメとクサガメとの交雑個体が市内各地で確認されている。ニホンイシガメとクサガメは棲み分けるのがふつうである。にもかかわらず交雑が起こっているのは、ペットとして流通したクサガメの野外放逐によって、両種が同所的に生息する機会と場所が増えたからである。また市内では全国で初めて、台湾に分布するハナガメとニホンイシガメ、およびハナガメとクサガメの交雑個体が野外で確認されている。ハナガメおよびこの種と他種との間の交雑個体は、名古屋市での発見、採集、研究が契機となり、2016 年 10 月に特定外来生物に指定された。

ニホンイシガメ

本州、四国、九州に分布する日本列島の固有種である。市内の池沼、河川といったニホンイシガメの生息環境は悪化の一途を辿っている。アライグマのような捕食性の外来動物やアカミミガメのような外来のカメの悪影響は増す一方である。またニホンイシガメの生息地に人為的に持ち込まれたと思われるクサガメによる遺伝子汚染の危険性は全く減っていない。分布域はそれほど減っているわけではないが、個体群密度は下がっていると推定され、繁殖も順調であるとは考えにくい。今回は 2015 年、2020 年のカテゴリーVU（絶滅危惧 II 類）を踏襲した。

クサガメ

クサガメは錯綜した外来生物問題を抱えている。第 1 に DNA の分子系統学的研究および本草学の検討から、日本列島に生息するクサガメは自然分布ではなく、江戸時代後期以降に朝鮮半島および中国から人為的に移入された外来種であるという説が 2010 年から 2011 年にかけて提出された。しかしこの説に対しては中世後期弥生時代の遺跡から遺体が出土したとの反例や異論もあり、クサガメが外来種であることが結論づけられているわけではない。第２に動物地理学的な考察から、近畿地方以西のクサガメは在来種であるが、東海～北陸地方以東のクサガメは人為的に移動させられたという考え方がある。第３は、古くから生息しているクサガメとは別に、西日本や中国で養殖されたクサガメの稚ガメが愛玩動物として流通し、飼育者に野外放逐されて野生化しているという問題である。第１、第２の問題はまだ十分に検証されていない仮説であるが、第 3 の問題は実際に発生している事案である。

クサガメは、2004 年と 2010 年の段階では単に確認される個体数をもとにして NT（純絶滅危惧）にカテゴリー分けされていた。しかしその後、名古屋市内で確認されたクサガメの一部は、分布や生息状況が不自然であることが分かってきた。またそれぞれのクサガメの個体あるいは個体群が名古屋市在来なのか、人為的に持ち込まれた外来動物なのかはよくわからない。そのためクサガメについては 2015 年と 2020 年のカテゴリーDD（情報不足）を踏襲した。

ニホンスッポン

日本列島産の在来のスッポンはニホンスッポン *Pelodiscus japonicus* であることが 2023 年 11 月に日本爬虫両棲類学会の公式見解として公表された。現在ニホンスッポンは日本列島の固有種である。それまで極東アジアには中国南部から東部、台湾、日本の本州、四国、九州に P. sinensis（標準和名はそれまではニホンスッポン、現在ではチュウゴクスッポン）が分布し、ロシア沿海州から中国北部、朝鮮半島にかけて *P. maackii*（アムールスッポン）が分布するとされていた。しかし近年の分子系統学的研究から日本産の在来のスッポンは *P. sinensis* とは遺伝的に分化しており、*P. maackii* と一つの遺伝的系統をなすことが明らかになったのである。ニホンスッポンとアムールスッポンはシノニムなので、今後これらのスッポンは、新種記載が早かった *P. japonicus* に統一されるはずである。そうするとニホンスッポンは日本列島の固有種とは言えなくなる。

ニホンスッポンやアムールスッポンと比べてチュウゴクスッポンは体が小さい傾向がある。またニホンスッポンやアムールスッポンの背甲は円く、チュウゴクスッポンの方は細長い傾向がある。しかし実際にはこの外部形質だけで種を同定することは困難である。種を分ける決定的な形態的相違は、頭骨の一部位である蝶形骨がチュウゴクスッポンでは幅が広く、ニホンスッポンやアムールスッポンでは細長いことである。しかし蝶形骨の幅は頭骨を骨格標本にしないと測ることができない。すなわち野外で採集したり観察したりするスッポンの生体の種同定はほぼ不可能なのである。

スッポンは古くから現在に至るまで食用や養殖のために国内で移動させられたり、大陸から移入されたりした。また近年では愛玩動物としても商取引されており、商業流通した一部の個体は飼育者によって野外放逐されていると考えられる。実際に 2013 年には千種区のため池で、飼育個体の放逐である可能性が高いアルビノの個体が見つかっている。そのようなことから外来種としてのキョクトウスッポンのなかまが名古屋市在来のニホンスッポンと共存している可能性がある。あるいは在来ニホンスッポンと種間競合して在来スッポンから外来スッポンへの種の置換が起こっている場合もありうる。市内にはまだ外来スッポンが侵入していない可能性もある。

種の同定が困難であるので在来スッポンの保護や外来スッポンの防除をうまく進めることができない。そのような状況を鑑みて、ニホンスッポンについて次のようにカテゴリー分けした。2004 年には DD（情報不足）であったが、捕獲調査において他種のカメよりも捕獲地点も捕獲数も少ないことから 2010 年には VU（絶滅危惧 II 類）にカテゴリーを変更した。しかしその後ニホンスッポンに関する様々な生物学的情報が出てきたので、2015 年に DD（情報不足）のカテゴリーに戻し、2020 年と今回はそれを踏襲した。

イ　ヘビ類

ヘビ類は 8 種すべてが日本列島の固有種であり、近縁種が大陸に分布している。市内で記録のあるヘビ類はタカチホヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリ、シロマダラ、ヤマカガシ、ニホンマムシの 8 種である。これら 8 種はすべて日本列島の固有種である。また、ツシママムシやアカマダラ、ダンジョヒバカリといった島嶼部に局地的に分布する種を除けば、これら 8 種は日本列島に広く分布する種であり、名古屋市には日本列島産の 8 種類のヘビが全て分布している。ただし市内では、程度の差はあれ、8 種とも個体数が減少傾向にある。

個体数減少の原因の第 1 は、食物であるカエルの減少である。1980 年代以降、世界的に両生類が減少していることが知られており、名古屋市でも同様の傾向がある。毒性の強いヒキガエルを含めてカエルを専門に補食するヤマカガシ、魚食性でカエルの幼生、つまりオタマジャクシもよく食べるヒバカリ、多様な動物を補食するが、カエルへの依存度が高いシマヘビとニホンマムシについては、カエルの減少が個体数の現象の一因になっていることは間違いない。一方、小型の哺乳類や鳥類といった恒温動物を食べるアオダイショウや小型哺乳類を専門的に捕食するジムグリ、爬虫類食であるシロマダラ、土壌動物を食べるタカチホヘビには、この危惧は当てはまらない。

第 2 はハビタットの環境の悪化である。市内で活発に行なわれている土地の造成や区画整理によって、ヘビたちのねぐらである地面の穴や割れ目、すき間が無くなってきている。多くのヘビにとって好適な活動場所である草むらは減少している。また市の東部の里山が間伐などの手入れをされていないために、繁茂した枝の葉が太陽光を遮り、林床の温度が低下したり日だまりが無くなって日光浴ができなくなったりして、ヘビが棲みづらくなっている。

ジムグリ

ジムグリは、2004 年および 2010 年の名古屋市版レッドリストでは NT に指定されていたが、論拠であった報告（愛知県，1996）を精査したところ、名古屋市に分布しているという記述はなかったので、2015 年版レッドリストから外した。しかし 2015 年から 2019 年までの間に守山区、名東区、千種区において生息が確認された。確認数は少なく、市内での分布は局所的で、この種に適した生息地が急速に減少していることから、2020 年版で EN（絶滅危惧 IB 類）と評価され、今回はそれを踏襲した。

シロマダラ

シロマダラは、2004 年に名古屋市内で最初に確認されて以来、確認事例はわずかであるものの 2008 年に 1 例、2014 年に 2 例見つかっている。ところが 2015 年以降は確認されておらず、急激に減少している可能性が高い。またヒガシニホントカゲやニホンカナヘビは市内では多く生息しており、爬虫類食のこのヘビが食物不足に陥っているとは思えないが、里山や森林の環境の悪化が続いていて、活動領域やねぐらが失われていることから、2010 年と 2015 年の VU から、2020 年には EN（絶滅危惧 IB 類）に危機レベルが上げられ、今回も同じ評価をした。

ヒバカリ

名古屋市でカエルの個体数が減っているために、ヒバカリの餌となるカエルの幼生も減り続けている。また、河川や池沼の水辺（岸）のハビタットがコンクリートやブロックで固められたり、水辺の植生が失われたりして、生活空間も減り続けている。日本列島では普通種であるはずのこの種の確認事例も、市内では大変少ない。2015 年に VU（絶滅危惧 II 類）と評価され、今回もそれを踏襲した。

ヤマカガシ

ヤマカガシはもともと個体数が多く、田園や草地で最もふつうに見られるヘビであったが、近年市内では異常なほど見られなくなった。この種にとって最も大きな影響は、専門に補食しているカエル類の激減である。ヒキガエルは非常に有毒で、他のヘビはこのカエルをふつう補食しないが、ヤマカガシだけはむしろ積極的に補食する。市内ではアズマヒキガエルが激減しており、このこともヤマカガシの激減に拍車をかけていると考えられる。他のヘビと同様に、ハビタットの環境の悪化も急減の原因の一つであろう。今回は 2010 年、2015 年、2020 年に続き、VU（絶滅危惧 II 類）と評価した。

ニホンマムシ

ニホンマムシは、2012 年に守山区で初めて確認されたが、その後は名東区や守山区で見つかっているにすぎず、市内での個体数は少なく、分布は局所的であると考えられる。市内ではこのヘビの生息環境も悪化している。2015 年には DD（情報不足）のカテゴリーに入ったが、2020 年には VU（絶滅危惧 II 類）に評価が変更され、今回も VU を踏襲した。

シマヘビ

シマヘビは日本列島においてはヤマカガシと同様に最もふつうに見られるはずのヘビであるが、近年名古屋市内ではほとんど見られない。原因は，食物として大きく依存しているカエルが減ったことと、ハビタットの環境の悪化であろう。ただしこのヘビは哺乳類、鳥類、爬虫類から節足動物まで多様なものを捕食するので、カエルが減ってもヤマカガシよりもその影響は少ないと期待できる。2004 年、2010 年、2015 年、2020 年の評価を踏襲し、今回も NT（準絶滅危惧）とした。

タカチホヘビ

タカチホヘビは、2008 年に名古屋市内で発見されたが、市内における生息状況はまだ分かっていないので、DD（情報不足）と評価した。

ウ　トカゲ類

トカゲ類としてはニホンカナヘビ、ヒガシニホントカゲ、ニホンヤモリの 3 種が市内に分布している。名古屋市では 3 種とも現在までレッドリストに挙げられたことはない。

ニホンカナヘビとヒガシニホントカゲは昼行性で地上性であり、市内では里山や農地や市街地でふつうに見られ、急激な減少や絶滅の危険は感じられない。これら 2 種は同所的に分布しているが、マイクロハビタット（微小生息域）を棲み分けている。ニホンカナヘビは草むらや灌木といった植生のある場所を好み、ヒガシニホントカゲはそれよりも開けた場所でもふつうに見られる。ニホンヤモリは夜行性であり、住家性で家屋や建物に棲む完全なシナントロープ（人類依存型野生動物）である。近年の住宅は木造部分が少なく、ニホンヤモリにとって多少棲みづらくなったが、絶滅や減少の心配はないと思われる。

ニホンカナヘビは北海道、本州、四国、九州に分布する日本列島の固有種である。

ヒガシニホントカゲはかつてニホントカゲとみなされていたが、2012 に新種記載された。日本列島の東部から極東ロシア沿海州にかけて分布する。ニホントカゲとの分布の境界は、若狭湾から琵琶湖を経て南下する線で、和歌山県では中央構造線上の紀ノ川である。したがって名古屋市産もしくは東海地方産のヒガシニホントカゲは、分布の西限に近い集団とみなせる。なお、ニホントカゲは日本列島の固有種である。

ニホンヤモリは本州、四国、九州から朝鮮半島、中国東部に分布している。近年の DNA を使った分子系統学的研究によれば、日本産のニホンヤモリは中国か朝鮮から移入された外来種である可能性が高い。平安時代末期以前の和歌や随筆にニホンヤモリを指す記述が見当たらないことなどから、日本には平安時代以降に移入してきたと考えられている。

（矢部　隆）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各爬虫類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（爬虫類）に関する凡例 】

分類群名等

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2024）に準拠した。

和名・学名

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2024）に準拠した。

評価区分

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右の上枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち 2025」（愛知県，2025）の愛知県での評価区分、及び「環境省レッドリスト 2020」（環境省，2020）の全国での評価区分も併記した。

評価理由

対象種が名古屋市版レッドリスト掲載種として評価された理由について記述した。

形態

対象種の形態の概要を記述し写真を掲載した。

分布の概要

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査よって確認された地域について、区ごとに着色して市内分布図として掲載した。なお、確実な生息記録が確認されたものを濃色、情報はあるものの裏付けとなる標本等が入手できなかったものを淡色で示した。

生息地の環境／生態的特性

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

現在の生息状況／減少の要因

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

保全上の留意点

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

特記事項

以上の項目で記述しなかった事項を記述した。

関連文献

対象種に関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

なお、爬虫類の概要部分や多くの種の解説において参照した文献及びウェブサイトについては、以下にまとめて挙げる。

愛知県両生類・は虫類研究会，1996．愛知県の両生類・は虫類，117pp．愛知県農地林務部自然保護課，名古屋．

内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎，2002．決定版日本の両生爬虫類，336pp．平凡社，東京．

千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏（編），1996．日本動物大百科第 5 巻，189pp．平凡社，東京．

鈴木　大，2019．九州地方のクサガメ．九州・奄美・沖縄の両生爬虫類，pp.100-101．九州両生爬虫類研究会編，東海大学出版部発行，平塚市．
中村健二･上野俊一，1953．原色日本両生類爬虫類図鑑，214pp．保育社，東京．
日本カメ自然誌研究会（監），2014．ミシシッピアカミミガメ防除マニュアル−名古屋市内の活動を事例として−，34pp．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．
日本爬虫両生類学会（編），2021．新　日本両生爬虫類図鑑，232pp．サンライズ出版，彦根．
野呂達哉，2007．爬虫類．名古屋・東山新池ため池調査報告書 2007，pp.30-33．名古屋ため池調査実行委員会，名古屋．
野呂達哉・矢部隆，2009．爬虫類．2009 年度なごやため池生きもの生き生き事業報告書，pp.102-106．名古屋ため池生物多様性保全協議会事務局，名古屋市．
疋田　努・鈴木　大，2010．江戸本草書から推定される日本産クサガメの移入．爬虫両棲類学会報第 2010 巻第 1 号，pp.41-46．
矢部　隆，2008．名古屋の生物　動物　爬虫類．新修名古屋市史　資料編　自然，pp.271-279．名古屋市，名古屋．
矢部　隆，2008．爬虫類．新修名古屋市史　資料編　自然　目録，pp.271-279．名古屋市，名古屋．
矢部　隆，2010．淡水棲・陸棲カメ類．野生動物保護の事典，pp.569-577．朝倉書店，東京．
矢部　隆，2010．愛知の自然のなりたち　愛知の生物　愛知の脊椎動物．愛知県史　別編　自然，pp.162-207．愛知県，名古屋．
矢部　隆，2010．愛知の自然と人々　残したい貴重な動植物　愛知の脊椎動物．愛知県史　別編　自然，pp.597-618．愛知県，名古屋．
矢部　隆．2021．クサガメ・ニホンスッポン．ブルーデータブックあいち 2021，pp.189-190．愛知県，名古屋．
Chiba M., Takahiro Hirano T., Daishi Yamazaki D., Ye B., Ito S., Kagawa O., Endo K., Nishida S., Hara S., Aratake K., and S. Chiba. 2022. The mutual history of Schlegel’s Japanese gecko Reptilia: Squamata: Gekkonidae and humans inscribed in genes and ancient literature. PNAS Nexus 1: 1–10.
Kim j., Park J., Fong j., Zhang y., Li S., Ota H., Min S., Min M., and D. Park. 2020. Genetic diversity and inferred dispersal history of the Schlegel’s Japanese Gecko (*Gekko japonicus*) in Northeast Asia based on population genetic analyses and paleo-species distribution modelling. Mitochond DNA Part A DNA Mapping, Sequencing, and Analysis 31: 120–130.
Oh, H., S. Park, and S. Han, 2017. Mitochondrial haplotype distribution and phylogenetic relationship of an endangered species Reeve’s turtle (*Mauremys reevesii*) in East Asia. *Journal of Asia-Pacific Biodiversity*, 10 (2017): 27-31.
Okada, Y., T. Yabe and S. Oda, 2011. Interpopulation variation in sex ratio of the Japanese pond turtle *Mauremys japonica* (Reptilia: Geoemydidae). *Current Herpetology*, 30(1): 53-61.
Suzuki, D., H. Ota, H. Oh and T. Hikida, 2011. Origin of Japanese Populations of Reeves' Pond Turtle, *Mauremys reevesii* (Reptilia: Geoemydidae), as Inferred by a Molecular Approach. *Chelonian Conservation and Biology*, 10(2): 237‑249.
Suzuki, D., T. Yabe, and T. Hikida, 2013. Hybridization between Mauremys japonica and *Mauremys reevesii* Inferred by Nuclear and Mitochondrial DNA Analyses. Journal of Herpetology, 48(4): 445-454.
Suzuki, D. and Hikida, T. 2014. Taxonomic status of the soft-shell turtle populations in Japan: a molecular approach. *Current Herpetology*. 33(2): 171–179.
Takahashi, A., A. Kusaka, and N. Kamezaki, 2019. Skeletal Remains of *Mauremys reevesii* (Testudines: Geoemydidae) from a Late Medieval Archeological Site in Fukuyama City, Hiroshima Prefecture, Western Japan. *Current Herpetology*, 38(2): 160-168.
RepFocus - A Survey of the Reptiles of the World (https://www.repfocus.dk)

爬虫類　＜有鱗目ナミヘビ科＞

シロマダラ　*Lycodon orientalis* (Hilgendorf, 1880)

評価理由

市内において、シロマダラの主たる生息場所である林や森の林床の環境が急速に悪化し、それに伴って個体数が激減している可能性が高い。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛 知 県 2025	情報不足
全　　国 2020	－

形態

全長 30～70cm ほどの小型のヘビである。背面の地色は淡灰褐色で、胴に 40 個前後、尾に 15～20 個くらいの黒褐色の横帯がある。幼蛇には、頸部に左右 1 対の白い斑紋がある。瞳孔は縦に細長い楕円形であるが、虹彩が黒っぽいので、注意しないと瞳孔の形は分かりにくい。アオダイショウの幼蛇は背面の地色が淡褐色で、褐色のはしご状の横斑が並び、模様が似ているのでシロマダラと誤認されることがあるが、アオダイショウの瞳孔は円いので、区別することができる。



豊田市足助町、2012 年 1 月 13 日、矢部　隆　撮影

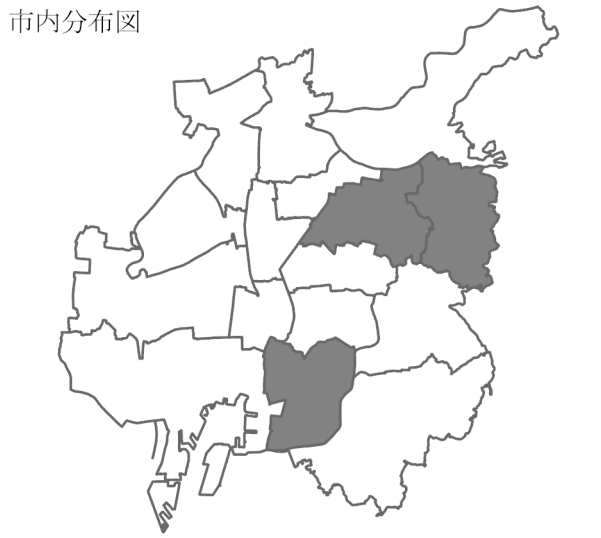
分布の概要

市内：名東区（2004 年）、千種区（2008 年）、南区の近接する 2 か所（2 例とも 2014 年）で見つかっている。

県内：丘陵地や台地、山地の森や林に分布している。西三河や尾張よりも東三河において、よりしばしば目撃情報を耳にする。

国内：**北海道、**本州、四国、九州および周辺の島嶼に分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

丘陵地から山地にかけての森や林、河畔林に生息する。ガレ場など地面の乾いたところで見かけることがよくある。爬虫類食で、小型のヘビ類やトカゲ類を捕食するが、甲虫や蛾を捕食していたという記録もある。夜行性で、日中は倒木や石の下、石垣の中などに隠れているため、人目に触れる機会は比較的少ない。卵生で、一度に 1-9 個ほどの卵を産む。

現在の生息状況／減少の要因

2004 年以降市内で 4 頭見つかっているが、生息状況はよく分かっていない。市内ではトカゲ類は少ないとは言えないが、ヘビ類が急減しているので、食物不足により、シロマダラの個体数が減っている可能性がある。また、林のような棲み家が減少し続けていることも、このヘビに悪影響を与えているに違いない。

保全上の留意点

夜行性で、小型なので、観察しにくいヘビである。今後注意深く種の分布様式や生息状況を明らかにし、市内でこの種がおかれている実態を充分に把握しなければならない。

特記事項

かつてはマダラヘビ属（*Dinodon*）とされていたが、近年の分子系統学の結果マダラヘビ属はオオカミヘビ属（*Lycodon*）に内包されることが明らかとなり、本種もオオカミヘビ属に含まれるようになった。

関連文献

竹内寛彦，2021．シロマダラ．新日本両生爬虫類図鑑，p.165-166．日本爬虫両棲類学会．
野呂達哉，2016．名古屋市南区におけるシロマダラ *Dinodon orientale* の確認記録．なごやの生物多様性 3: 69-71

（矢部　隆）

爬虫類　＜有鱗目ナミヘビ科＞

ジムグリ　*Euprepiophis conspicillatus* (Boie, 1826)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

市内で採集、確認され始めたのは 2015 年以降であり、この数年で 3 箇所でしか見つかっていないので、個体数は極めて少ないと考えられる。また里山や山地の開発、あるいは手入れの放棄によって、ジムグリの生息地は狭められており、現在個体数が減少している可能性が高い。したがって絶滅危惧 IB 類（EN）と評価した。

形態

全長 70～100cm。背面は淡黄褐色あるいは緑がかった淡褐色で、小さい黒点が散在しており、腹面には黒い角張った市松模様が見られる。山地で土中に潜って生活するので、口に土が入らないように上顎が下顎に覆いかぶさっている。幼体の背面は鮮やかな朱色で、黒斑が横帯を成すように並び、頭部には V 字型の黒い帯模様が入る。



ジムグリ（幼体）
豊田市旧藤岡町、2012 年 6 月 18 日、矢部　隆　撮影

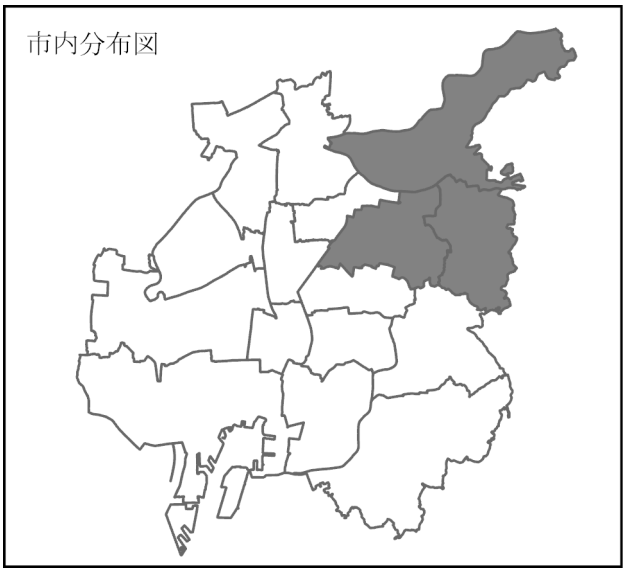
分布の概要

市内：これまで守山区、名東区、千種区で確認されており、里山や雑木林が広がっている市の東部に分布は限られているようである。

県内：名古屋東部丘陵、知多半島、渥美半島、三河地域の台地や山地の里山林や森林に比較的多く生息している。

国内：北海道、本州、四国、九州および周辺の島嶼に分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

主に山地に生息し、耕作地や草地にも見られるが特に森林に多い。和名は「地潜り」が由来とされ、その名の通りよく地中に潜る。自力で掘削もできるが、獲物となる動物の巣穴を追跡して潜り、小型哺乳類（ネズミ類、モグラ類）を捕食する。5～6 月に交尾を行い、6～8 月に 2～8 個の卵を産む。無毒。

現在の生息状況／減少の要因

市内にはジムグリの生息に適した場所が少ないので、生息数も少ないのであろう。ただしまだ名古屋市ではジムグリの生態の調査研究が十分ではなく、生息の実態が把握できていない。

保全上の留意点

市内では、丘陵地や山地におけるジムグリの生息地を確保すること、つまり生物相が豊かな林床を持った里山林や森林を残すことが重要であろう。

関連文献

竹内寛彦，2021．ジムグリ．新日本両生爬虫類図鑑，p.167-169．日本爬虫両棲類学会．

（矢部　隆）

爬虫類　＜カメ目イシガメ科＞

ニホンイシガメ　*Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel, 1838)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

市内の池や川で分布、生息調査が行われており、比較的多くの生息地が確認されている。しかし生息場所の環境の悪化、および外来動物による捕食や生活への圧迫、近縁種の導入による遺伝子汚染により、危機的な個体群が増えており、個体数はかなり減っている。

形態

背甲長はオス約 12cm、メス約 20cm。背甲後部の縁が鋸歯状であるが、老齢個体では摩耗することが多い。背甲は黄色ないし黄土色で、黒色か黒褐色の点模様が雲状に広がる。各椎甲板の前方中央部に、黒色の斑紋を持つ個体が多い。腹甲は一面黒色だが、肛甲板の後端が橙色を呈する個体もある。前腸部と脛部の後縁および尾の背面の左右に、橙色の縦条がある。



豊田市、2008 年 9 月 19 日、矢部　隆　撮影

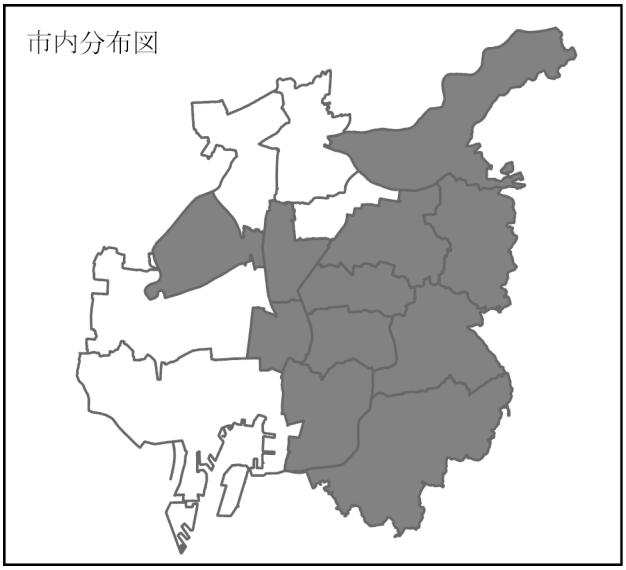
分布の概要

市内：2005 年以降の調査では、熱田、昭和、千種、天白、中、中村、瑞穂、緑、南、名東、守山の各区で確認されている。

県内：尾張東部丘陵から三河地方、渥美半島、知多半島に多く分布している。濃尾平野の低地部には、保護すべき小さな孤立個体群がいくつかある。

国内：本州中央部以西、四国、九州に自然分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

同属のクサガメが、低地の止水あるいは緩やかな流れの水系に主に生息するのに対して、ニホンイシガメは丘陵地から山地にかけての地域、河川で言えば上流部を中心に棲む。秋と春に求愛、交尾する。産卵期は 6〜7 月ごろで、年 2 回産卵する個体が多い。1 回に 6〜7 個前後産卵する。川の水底の落ち葉などの堆積物や岩の下、川の岸辺の浸食穴、池沼の水底で越冬する。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋市では、生息地である水辺エコトーンの環境が劣悪になり、日光浴、産卵、採餌、越冬、季節的移動に障害が生じている。また市内ではアライグマやウシガエル、アリゲーターガーやカムルチーやコイなどの外来動物が、幼体や、場合によっては成体を捕食したり負傷させたりしている。生態的地位が似ている外来のミシシッピアカミミガメの増加による生活の圧迫も深刻である。

保全上の留意点

性染色体を持たず、孵卵温度が高いとメス、低いとオスになる。したがって産卵場所の温度環境が好ましくないと、孵化個体の性比が偏り、長期的に見て個体群が維持できなくなる。貯精、遅延受精の能力があり、クサガメなど人為的に導入された近縁な他種のカメと交尾する機会が極めてわずかであっても、繁殖能力のある子孫を多数産み続け、遺伝子汚染が進行する恐れがある。本種の自然分布地で、人為的に移入されたクサガメとの交雑が確認された地域からは、クサガメを防除せざるを得ないであろう。

関連文献

鈴木　大，2021．ニホンイシガメ．新日本両生爬虫類図鑑，p.94．日本爬虫両棲類学会．

（矢部　隆）

爬虫類　＜有鱗目ナミヘビ科＞

ヒバカリ　*Hebius vibakari vibakari* (Boie, 1826)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

水辺を好むヘビであるが、水辺の環境の悪化により著しく個体数を減らしている。餌である小魚やカエルの幼生が減少しており、成育や繁殖が抑えられている。また、水辺の自然の植生が失われ、生活場所が奪われて、個体数が減少している。

形態

小型で、全長 40～60cm である。体の背面は褐色または暗灰褐色。口角から後背方向に淡黄色の帯状の斑紋が走るが、この斑紋は頸部の背面で連結することはない。幼蛇も成蛇も模様は変わらない。



岐阜市、2010 年 9 月 28 日、矢部　隆　撮影

分布の概要

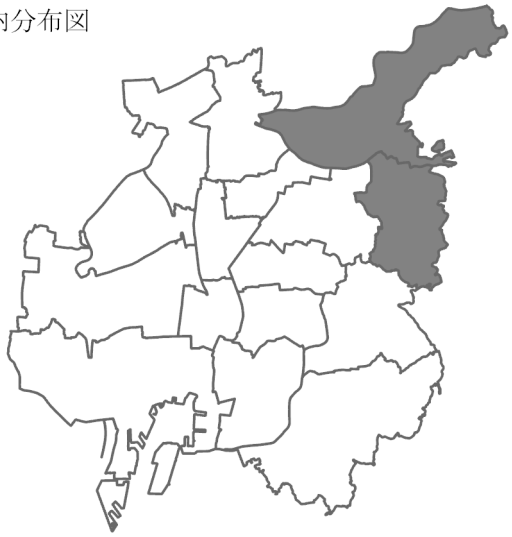
市内：名東区（2009 年）、守山区の 2 か所（2009 年、2012 年）で確認されている。

県内：深い山地を除き、県内に広く分布している。

国内：本州、四国、九州および周辺の島嶼に分布する。なお、同種別亜種のダンジョヒバカリ *H. vibakari danjoensis* が長崎県男女群島の男島に固有亜種として分布しており、朝鮮半島、中国北部、ロシア沿海州にはタイリクヒバカリ *H. vibakari ruthveni* が分布している。

世界：日本固有亜種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

山地から草地、水田や畑まで幅広い環境に生息している。水によく入り、小魚、カエルの幼生（オタマジャクシ）や小型の幼体を専門に食べるが、ミミズもしばしば食べる。昼行性とされるが、実際には朝や夕方、日没後に活動することが多い。5～6 月に交尾し、7～8 月に 4～10 個の卵を産む。

現在の生息状況／減少の要因

水棲動物をよく補食するヒバカリにとっては、好適な水辺環境が必須である。しかし市内では、河川や用水、ため池などの岸がコンクリートやブロックでおおわれて移動が困難になったり水生植物群落が喪失したりしていて、水辺エコトーンの環境が悪化しており、ヒバカリの個体数の減少の第 1 の原因となっている。また近年市内では両生類が急速に減少しており、食物が減少していることもヒバカリの減少の要因の一つである。

保全上の留意点

昼行性で様々なハビタットに生息する種ではあるが、シマヘビやヤマカガシよりもかなり小型なので、やや観察しにくい面がある。今後注意深く種の分布生息を確認し、市内でこの種がおかれている実態を充分に把握しなければならない。

特記事項

かつては *Amphiesma* とされてきたが、近年の分子系統的解析の結果、*Amphiesma*、*Herpetoreas*、*Hebius*（ヒバカリ属）の 3 属に分割され、本種は *Hebius* に含まれることとなった。

関連文献

竹内寛彦，2021．ヒバカリ．新日本両生爬虫類図鑑，p.178．日本爬虫両棲類学会．

（矢部　隆）

爬虫類　＜有鱗目ナミヘビ科＞

ヤマカガシ　*Rhabdophis tigrinus* (Boie, 1826)

評価理由

アズマヒキガエルやナゴヤダルマガエルなど、専門的に補食するカエル類の激減、およびヤマカガシの重要な生息場所である水辺や山地の植生の荒廃が、ヤマカガシに深刻な影響を与えている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	－

形態

全長 70～140cm。体の色や模様には変異が大きい。愛知県では背面の地色は緑が飼った褐色か暗褐色で、黒斑が並び、黄色や赤色がその斑紋の間に混じる個体が多い。後頭部に、口角の後ろから背面に回る黄色い横帯があるが、幼体ではこれらの模様が顕著である。2 種の毒腺を持っている。1 つは頸腺で、頸部の背面の皮膚の下に 2 列に並ぶ毒腺であり、強くつかまれたり噛まれたりすると、毒が染み出したり場合によっては飛散したりして、天敵を痛い目に合わせる。もう 1 つの毒腺はデュベルノイ腺で、ここから分泌される毒は上顎の奥歯を伝わって、獲物や天敵に注入される。



ヤマカガシ（左：成体、右下：幼体）
左：豊田市藤岡町、2009 年 4 月 19 日、矢部　隆　撮影
右下：　2006 年 6 月 3 日、矢部　隆　撮影

分布の概要

市内：守山区（2009 年）、名東区（2009 年）、千種区（2009 年）で確認されている。

県内：県内に広く分布する。

国内：本州、四国、九州および周辺の島嶼に分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

昼行性である。主食はカエルであり、水に入ってカエルの幼生（オタマジャクシ）や魚も食べる。そのため、平地や丘陵地の水田や小川、湿地に好んで生息する。耳腺に毒があるので他のヘビは食べないヒキガエルも食べることができる。大型のカエルであるヒキガエルを捕食できる生息地に棲むヤマカガシは、大きく成長するようである。秋に交尾し、翌年の 6 月～8 月に 2～30 個の卵を産む。大きなメスほど多産で、40 個以上産卵することもある。

現在の生息状況／減少の要因

近年名古屋市では両生類が急速に減少しており、ヤマカガシにとって主食がいなくなっていることが、このヘビの激減の第 1 の原因であろう。市内では、河川や用水、ため池などの岸がコンクリートやブロックでおおわれて移動が困難になったり水生植物群落が喪失したりしていて、水辺エコトーンの環境が悪化しており、好適なハビタットが失われていることも、ヤマカガシの個体数の減少の主要な原因である。

保全上の留意点

かつてヤマカガシは、シマヘビやアオダイショウと共に平地で最もよく見られるヘビであった。そのような普通種が近年急にいなくなった事態を重く受け止め、ヤマカガシの生息の実態調査と保全に力を注ぐべきである。

特記事項

性質は基本的におとなしいものの、咬傷による死亡例があるため注意が必要である。

関連文献

竹内寛彦，2021．ヤマカガシ．新日本両生爬虫類図鑑，p.182-184．日本爬虫両棲類学会．

（矢部　隆）

爬虫類　＜有鱗目クサリヘビ科＞

ニホンマムシ　*Gloydius blomhoffii* (Boie, 1826)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

2012 年に初めて市内で確認されており、市内での十分な生息情報は得られていない。ニホンマムシにとって好適な生息地が市内ではそれほど見当たらず、個体数が多いとは考えられない。

形態

全長 40～65cm くらいで比較的短いが、胴は太めである。背面の色には変異が多いが、ふつうは地色が灰褐色あるいは暗褐色で、黒い縁取りのある黒褐色の大きな斑紋がある。この斑紋は、前後に少しずつずれた対になって背面の左右に、約 20 対並んでいる。斑紋の左右の対が背面中央で融合していることも、ふつうにある。上顎前部に 1 対の管状の長大な毒牙を持つ。目と鼻孔の間には 1 対のピット器官があり、赤外線の像を見ることができる。瞳孔は縦に細長い楕円形である。アオダイショウの幼蛇は背面の地色が淡褐色で、褐色のはしご状の横斑が並び、模様が似ているので、マムシと誤認されることがあるが、よく観察すれば斑紋のパターンは異なっているし、アオダイショウの瞳孔は円いので、区別することができる。幼蛇では、尾の先の方が目立つ黄色あるいは淡い橙色である。



岡崎市、2007 年 8 月 29 日、矢部　隆　撮影

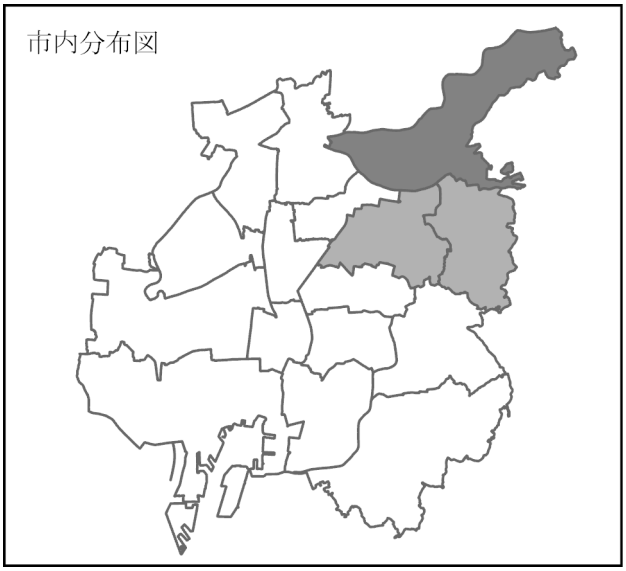
分布の概要

市内：守山区（2012 年）で確認されている。名東区、千種区の情報もあるが、標本や写真は入手できていない。

県内：丘陵地や台地、山地の森や林に分布している。

国内：北海道、本州、四国、九州およびその周辺の島嶼に分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

森林やその周辺の田畑に多く、きれいな水のあるところを好む。基本的に夜行性であるが、妊娠中の雌や冬眠前後には日光浴のため昼間に出現することがある。背中の模様は林床の落ち葉の上や木漏れ日の下では見事な保護色になっている。カエルやネズミを中心として、トカゲやヘビといった爬虫類から鳥類、魚類まで小型脊椎動物を幅広く捕食する。またムカデなどの節足動物を食べることもある。8 月下旬～9 月に交尾し、胎生であるので翌年の 8 月～10 月に 5～6 頭の幼蛇を産む。有毒である。

現在の生息状況／減少の要因

2012 年に初めて市内で確認されており、生息の実態は分かっていない。ただし、ニホンマムシにとって好適な生息地が市内ではそれほど見当たらず、個体数も多いとは考えられない。カエルが市内で減少していることも、ニホンマムシの生息を困難にしている。

保全上の留意点

夜行性で、小型なので、観察しにくいヘビである。市内ではまだ 1 例しか記録されていないので、今後注意深く種の分布様式や生息状況を明らかにし、市内でこの種がおかれている実態を充分に把握しなければならない。

特記事項

性質は基本的におとなしいものの、咬傷による死亡例があるため注意が必要である。

関連文献

竹内寛彦，2021．ニホンマムシ．新日本両生爬虫類図鑑，p.195-196．日本爬虫両棲類学会．

（矢部　隆）

爬虫類　＜有鱗目ナミヘビ科＞

シマヘビ　*Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)

評価理由

市内において、シマヘビの主たる生息場所である林や森の林床の環境が急速に悪化し、それに伴って個体数が激減している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

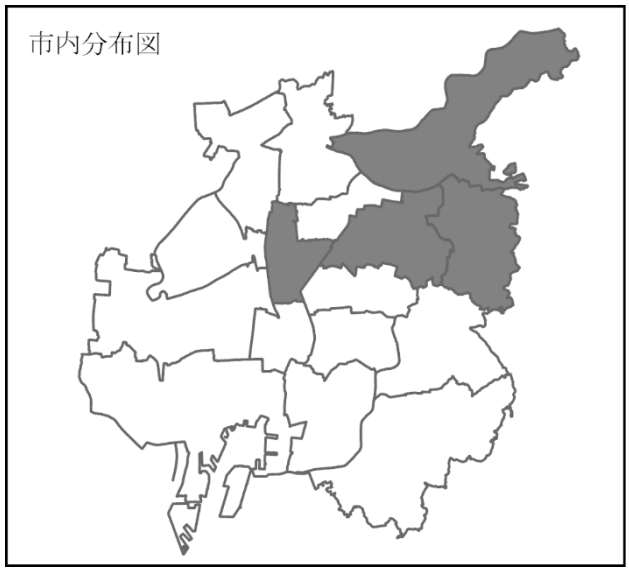
全長は 80～150cm。体の背面は黄褐色または褐色で、胴背に 4 本、尾背に 2 本の黒褐色の縦条がある。瞳孔は縦長の楕円形で、虹彩は赤い。特定の頻度で、カラスヘビと呼ばれる全身が真っ黒の個体が現れるが、黒色個体では虹彩も黒色である。幼蛇は成蛇とはまったく異なった色や模様である。背面の地色は赤みがかった淡褐色で、褐色の横縞が並ぶ。瞳孔が縦長の楕円形で、虹彩が赤いのは成蛇と同様である。同属のアオダイショウにも縦条模様の個体がいるためしばしば誤認されることがあるが、頭の形が尖っていること、胴体の大部分で体鱗が 19 列であること等から識別できる。



上　：成体　　岡崎市、2008 年 5 月 17 日、矢部　隆　撮影
左下：幼体　　岐阜市、2009 年 9 月 24 日、矢部　隆　撮影
右下：黒化型　豊田市、2008 年 5 月 15 日、矢部　隆　撮影

分布の概要

市内：守山区（2009 年）、名東区（2009 年）、千種区（2009 年）、中区（2009 年）で確認されている。
県内：県内に広く分布する。
国内：北海道、本州、四国、九州。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

昼行性である。平地から山地まで広い範囲で生息するが、ある程度開けた太陽の光が当たる環境を好む。食物の範囲は広く、食虫類やネズミ類などの哺乳類、鳥類の卵や雛、トカゲやヘビ、ヘビの卵、カメの卵といった爬虫類、カエルの成体や卵、サンショウウオといった両生類など、広範囲な脊椎動物を捕食する。ただし、最もよく食べるのはカエルの成体である。4 月～6 月に交尾し、夏に 4～16 個の卵を産む。

現在の生息状況／減少の要因

市内では、河川や用水、ため池などの岸がコンクリートやブロックでおおわれて移動が困難になったり、草地が喪失したりしていて、シマヘビが補食したりねぐらとしたりするような場所がなくなっている。このような生息地の環境の悪化がシマヘビの減少を引き起こしている。ヤマカガシやヒバカリの場合ほど深刻ではないと思われるが、よく補食しているカエルの減少も、シマヘビの減少の原因の 1 つであろう。

保全上の留意点

シマヘビは、アオダイショウやヤマカガシと共に里地で最もふつうに見られるヘビであった。そのような普通種が近年急にいなくなった事態を重く受け止め、市内でのシマヘビの生息の実態調査と保全に力を注ぐべきである。

関連文献

森　哲，2021．シマヘビ．新日本両生爬虫類図鑑，p.171-173．日本爬虫両棲類学会．

（矢部　隆）

爬虫類　＜カメ目イシガメ科＞

クサガメ　*Mauremys reevesii* (Gray, 1831)

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

市内の池や川で比較的多くの生息地が確認されている。しかしこの種については、愛玩動物として養殖され、県外あるいは国外から移入されたと考えられる場合があり、その場所のクサガメの個体、あるいは個体群の由来がはっきりしない場合が多い。

形態

背甲長は、オス 15～20cm、メス 20～25cm。背甲に 3 本の発達した隆条を持つ。頭部の側面や咽頭部から頸部にかけて、黒く縁取られた黄色の模様が多数ある。若齢の個体では、背甲の甲板は細く黄色に縁取られる。しかし高齢なオスではそれらの模様が消え、全身が完全に黒化する。腋下甲板と鼠蹊甲板のラスケ孔から、独特の香りがする澄んだ橙色の液を分泌する。



クサガメ（右下：黒化した頭部）
矢部　隆　撮影

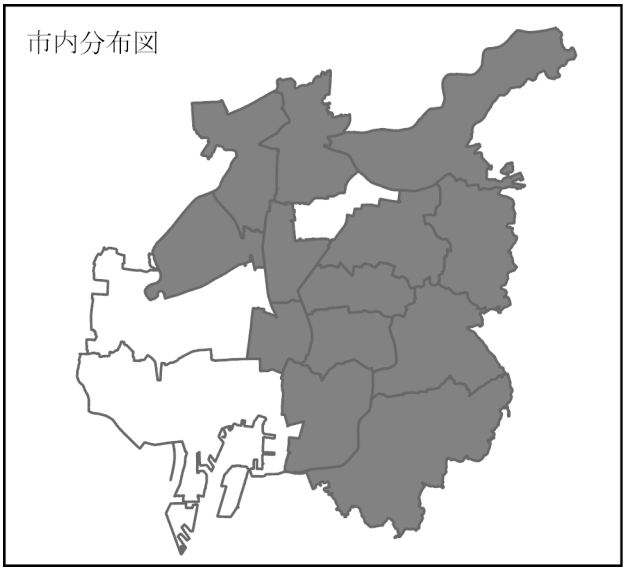
分布の概要

市内：2005 年以降の調査では、熱田、北、昭和、千種、天白、中、中村、西、瑞穂、緑、南、名東、守山の各区で確認されている。

県内：県内に広く分布し、濃尾平野に多い。ただし北部の山地には分布しない。

国内：本州中央部以西、四国、九州に自然分布する。

世界：中国東部、朝鮮半島、台湾。



生息地の環境／生態的特性

同属のニホンイシガメが丘陵地から山地にかけての領域におもに棲むのに対して、クサガメは低地の止水、あるいは流れの緩やかな、川の下流域から中流域にかけての平地を中心に生息する。秋と春に求愛、交尾する。産卵期は 6 月下旬から 8 月上旬で、年 2 回産卵する個体が多い。1 回に 10 個前後産卵する。池沼や河川の水底で、落ち葉などの堆積物の下に潜んだり、泥に潜ったりして越冬する。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋市では、ハビタットの環境の劣悪化、アライグマやウシガエル、アリゲーターガーやカムルチーやコイなどの捕食精外来動物による負傷や死亡の増加、生態的地位が似ている外来のミシシッピアカミミガメの増加による生活の圧迫により、数が減り続けている個体群が多い。

市内のクサガメの個体や個体群においては、市外から持ち込まれた外来のクサガメである可能性がある場合があるので、在来のものを保護し、外来のものを防除する管理を本来はすべきである。ただし外来か在来かを判別する生物学的法方は確立されておらず、今後詳細な研究を進める必要がある。

保全上の留意点

性染色体を持たず、孵卵温度が高いとメス、低いとオスになる。したがって産卵場所の温度環境が好ましくないと、孵化個体の性比が偏り、長期的に見て個体群が維持できなくなる。

貯精、遅延受精の能力があり、在来のニホンイシガメと交尾する機会が極めてわずかであっても、繁殖能力のある子孫が多数生まれ続け、遺伝子汚染が進行する恐れがある。市内のニホンイシガメの自然分布地で、人為的に移入されたクサガメとの交雑が確認された地域からは、クサガメを防除せざるを得ないであろう。

関連文献

鈴木　大，2021．クサガメ．新日本両生爬虫類図鑑，p.93-94．日本爬虫両棲類学会．

（矢部　隆）

爬虫類　＜カメ目スッポン科＞

ニホンスッポン　*Pelodiscus japonicus* (Temminck et Schlegel, 1838)

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	情報不足

評価理由

市内の池や川で比較的多くの生息地が確認されている。しかしこの種については、食用もしくは愛玩動物として養殖され、市外、県外あるいは国外から移入されたと考えられる場合があり、その場所のニホンスッポンの個体、あるいは個体群の由来がはっきりしない場合が多い。

形態

雌雄とも背甲長 20～25cm、体重 1～2kg であるが、まれに 35cm から 40cm 弱、体重が 7kg を超えることがある。背甲は灰褐色で、甲板がなく、後部には骨版が伸びておらず、手で曲げることができるくらい柔らかい。背甲の表面は柔らかく、短い隆条や粒上の特記がある。前趾後肢とも水かきが発達しており、指は 5 本であるが、爪は 3 本しかない。首は非常に長い。頭部は細長く、突出した吻端に鼻孔がある。



矢部　隆　撮影

分布の概要

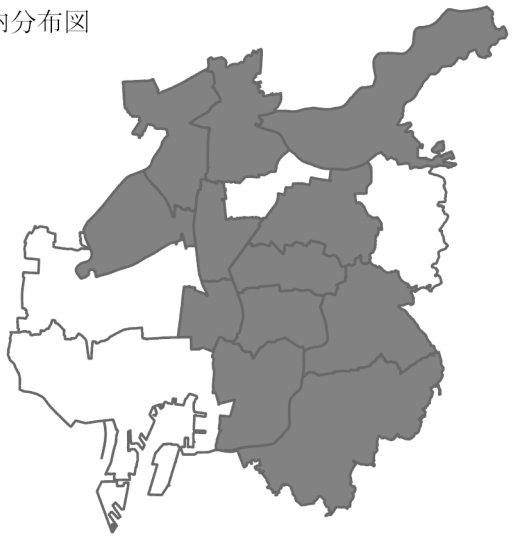
市内：2005 年以降の調査では、熱田、北、昭和、千種、天白、中、中村、西、瑞穂、緑、南、守山の各区で確認されている。

県内：県内に広く分布する。ただし北部の山地には分布しない。

国内：本州中央部以西、四国、九州に自然分布する。

世界：中国東部、朝鮮半島、台湾。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

低地から丘陵地にかけての池沼、河川では下流域から中流域の流れが比較的緩やかな水系に棲む。臆病で、日中は水底の砂に身を隠して、ときおり長い首を伸ばして吻端の鼻孔を水面に上げ、呼吸をする。人をはじめとする天敵に襲われないことが分かっていたり、人に馴れたりしていれば、岸に上がって日光浴をする。6 月～8 月に、メスの体の大きさに応じ、1 回に 10～40 個の卵を陸地に産む。性染色体によって性が決定される。水底で越冬する。肉食性の強い雑食性で、おもに薄明薄暮に、水底の貝類やエビ類、弱ったり死んだりしている魚類、水生植物などを採餌する。

現在の生息状況／減少の要因

上で述べたような生活様式を支えるハビタット、特に幼体成体とも、水生植物の群落や砂質の水底といった身を潜める場所が急速に失われており、個体数の減少に拍車をかけている。

保全上の留意点

遺跡から出土した遺体などから、ニホンスッポンは本州、四国、九州の在来種であることは分かっているので、愛玩動物や食用で移入された移入個体と区別して在来のニホンスッポンを保全するようにすべきである。ただし、この種の種内変異、個体群間変異についての形態学的あるいは分子生物学的手法はまだ確立されていない。

特記事項

近年、在来種であるニホンスッポンと移入種のチュウゴクスッポンとの学名および和名が整理され、*Pelodiscus japonicus* が在来種ニホンスッポンとなった。

関連文献

鈴木　大，2021．ニホンスッポン．新日本両生爬虫類図鑑，p.99-100．日本爬虫両棲類学会．

（矢部　隆）

爬虫類　＜有鱗目タカチホヘビ科＞

タカチホヘビ　*Achalinus spinalis* Peters, 1869

評価理由

これまで市内では 2008 年に 1 度確認されただけにすぎず、市内の個体数が極めて少ないことは予測できるが、生息の実態は全くわからないので、情報不足 DD と判定した。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	－

形態

全長 30～60cm の小型のヘビである。背面の地色は褐色、黄褐色、あるいは灰褐色で変異があり、黒い背正中線がある。光にかざすと真珠光沢が見られる。目が非常に小さい。他のヘビとは異なり、背中の鱗が重なっておらず、鱗と鱗の間に隙間があり、乾燥に弱い。上顎が下顎に覆い被さっており、地中を這い回る時に口に土が入らないようになっていると思われる。多くのヘビでは、尾の腹面の尾下板、つまり総排出腔よりも後ろの鱗板は 2 列に並んでいるが、タカチホヘビでは 1 列で、腹部と同じ蛇腹構造になっている。



豊田市、2013 年 8 月 10 日、矢部　隆　撮影

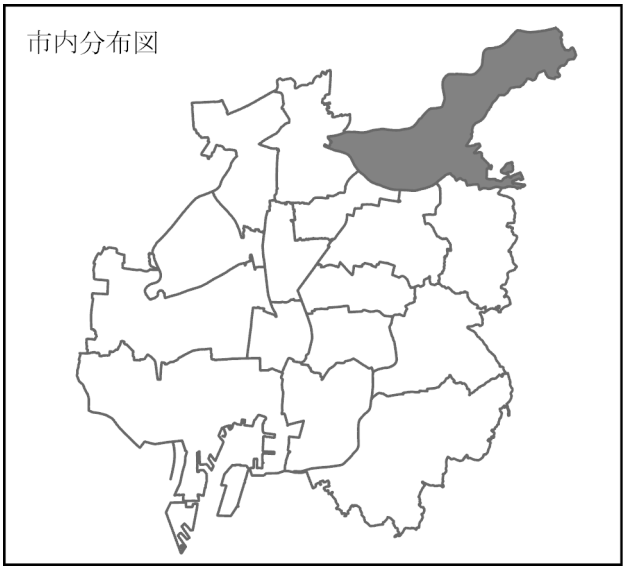
分布の概要

市内：2008 年に守山区の広葉樹林で 1 例確認されているのみで、市内での分布状況は不明。

県内：愛知県版レッドリストによれば、県内では東三河の山間部から西三河北部を経て尾張部の北側の丘陵地や山地にかけて発見場所が点在している。また知多半島の先端部でも確認例がある。詳細な分布域はよくわかっていない。

国内：本州、四国、九州とその周辺の島嶼部に分布する。

世界：中国南東部にも分布しているとされる。



生息地の環境／生態的特性

夜行性で地中性なので、人の目に触れる機会が少なく、生態はよくわかっていない。林床の湿った落ち葉の堆積や朽ちかけた倒木、あるいは石の下にいることが多い。ミミズなど土壌動物を捕食している。ヤマビルやトウキョウサンショウウオの変態直後の幼体の捕食記録もある。広葉樹あるいは広葉樹と針葉樹の混合林で見つかることが多い。針葉樹林の落葉層は富栄養ではないので、あまり生息していないようである。

現在の生息状況／減少の要因

市内での確認例が 1 例しかなく、生息状況はよくわかっていない。

保全上の留意点

市内での生息数が少ないことは予測できる。しかしまず市内での分布や生息状況、食性などの生態を明らかにすべきである。

特記事項

和名の「タカチホ」は地名由来ではなく、昆虫学者の高千穂宣麿氏への献名である。

関連文献

竹内寛彦，2021．タカチホヘビ．新日本両生爬虫類図鑑，p.156-157．日本爬虫両棲類学会．

西尾和久・川瀬基弘，2017．東海地方におけるタカチホヘビ *Achalinus spinalis* の確認記録と生息環境，なごやの生物多様性 4: 31-41.

（矢部　隆）

両生類

①　名古屋市における両生類の概況

名古屋市で記録されている移入種以外の両生類は 2 目 6 科 11 種であるが、2020 年の改訂時に絶滅危惧種に指定された 8 種中 7 種が絶滅危惧 IA 類と評価された。今回の改訂ではレッドリスト 2020 からカテゴリーの変更は行わなかったが、特筆事項を以下に記す。

オワリサンショウウオへの種名変更

Matsui et al. (2019) によるカスミサンショウウオの細分化が行われ、カスミサンショウウオが 9 種類に再分類された。この結果、本地域の個体群は 1923 年に記載されたヤマトサンショウウオに分類されたため、一旦消失したヤマトサンショウウオが復活した形となり、レッドリスト 2020 ではヤマトサンショウウオと表記した。今回の改定では、2022 年に本地域のヤマトサンショウウオが新種オワリサンショウウオとして記載されたため（Sugawara et, al., 2022）、本種を採用した。本レッドリストの種名は「日本爬虫両生類学会　日本産爬虫両生類標準和名リスト」を参考にしているものの、当リストにはオワリサンショウウオの表記はない。本来ヤマトサンショウウオと表記すべきところであるが、本地域におけるオワリサンショウウオの核ゲノム解析により、ヤマトサンショウウオとは独立した種としての妥当性を強く示唆される研究結果が得られていることから、オワリサンショウウオを支持することとする。科学的要素以外にも、オワリサンショウウオの種名を用いる事で、市民への認知度を高める効果を期待し、本種の保全に繋げていく事も狙いの一つでもある。

ニホンアマガエルの DD への追加とヒガシニホンアマガエルへの種名変更

ニホンアマガエルは日本列島に広く分布する種で、県内でもくまなく分布している（島田, 2018）。しかし、近年市内において、生息場所の減少が原因で生息数が危ぶまれているのではないかという懸念が持たれること、国内移入が安易に起こりうることなどから、市内の生息現状を把握し今後の保全に繋げる必要性があると判断し、DD に追加した。実際に東山動植物園では、動物飼料用の青草にニホンアマガエルが付着して来る事例が確認されており、園内で人的移入を疑われる個体群が繁殖している。

ニホンアマガエルは日本国内で 2 つに分けられる事が遺伝的な研究で解っており（Dufresnes et al., 2016）、2 つに分かれる境界線は曖昧であったものの、広島大学の研究チームによって、その詳細が明らかになっていた。その後、詳細な遺伝情報と形態学的な研究により、Shimada et al. (2025) により本地域を含む東日本のニホンアマガエルが新種ヒガシニホンアマガエルとして記載された。新種として記載されたのがごく最近なため、種名の参考にしている「日本爬虫両生類学会　日本産爬虫両生類標準和名リスト」には掲載されていないが（2025 年 3 月現在）、今回の改訂に記載が間に合ったため本種を採用した。ニホンアマガエルが 2 種に分化する境界線は近畿地方あたりに存在し、交雑帯も存在している事が明らかになっている。2 種の形態的な差は大きくないが、大腿部の後ろ面に

ある模様に大きな違いがあるという。東日本の個体は大腿部の後ろ面に黒い大きな模様か小さな模様、もしくは白い模様が入るのに対し、西日本の個体にはこれらの模様を欠く個体がほとんどである。交雑帯付近ではこれらの形態がはっきりと分かれていないことも明らかとなった（Shimada et al., 2025）。

アズマヒキガエルの種への格上げ

アズマヒキガエルは西日本に広く分布するニホンヒキガエル *Bufo japonicus japonicus* の亜種 *Bufo japonicus formosus* であったが、「日本爬虫両生類学会　日本産爬虫両生類標準和名リスト」において、Fukutani et al, (2023) を反映させ種へと格上げしたため、今回の改訂もそれに従った。

タゴガエルの表記

2019 年に初めて守山区東谷山の渓流中でタゴガエルが確認され、レッドリスト 2020 にて DD に追加された。愛知教育大学の島田知彦准教授に遺伝的解析を委ねた結果、染色体の本数やミトコンドリア DNA の塩基配列が周辺地域と一致していることが判明したということは、レッドリスト 2020 でも述べた。また、島田准教授からは、ネバタゴガエルと染色体の本数およびミトコンドリア DNA の塩基配列が同等なため、種としてはネバタゴガエルと表記しても問題がないとのご教示を賜ったが、分類体系が複雑なタゴガエル類であるため、今回の改訂時では混乱を避けるためタゴガエルと表記した。今後本地域の種名に関しては、愛知県のレッドリストやさらなる研究に期待し委ねることとする。

②　名古屋市における両生類の絶滅危惧種の概況

先に述べたように、絶滅危惧種に指定された 8 種中 7 種が絶滅危惧 IA 類と評価されている。しかし、絶滅危惧 IA 類に評価したものについては危急度が非常に高いのは間違いないが、定量化が難しいために IA 類中でも危惧度に差が生じている事も否めない。この内容で特筆が必要な種のみ下記に内容を記す。

アズマヒキガエル

現在市内では丘陵地を中心に限られた場所で生息するが、かつては市内で広く分布していたことがアンケートの調査で明らかとなっている（浅香ら，2017）。アズマヒキガエルやニホンヒキガエルは、国内移入された場所などでは繁栄していることはあっても、全国各地で減っているという情報が聞かれる事が多い印象である。2010 年以降市内でも著しく減少傾向にあり、ここ数年は市内全域で 10 卵塊ほどの産卵数しか確認できていない。本市の中でも近年最も急激に数を減らしている種といえ、現在市内から姿を消す可能性の一番高い両生類といえよう。

ニホンアカガエル

市内の丘陵地には満遍なく生息しており、名古屋市近郊の市町村でも普通に生息している。しかし、市内で 100 卵塊ほど産卵が確認された繁殖地において、2、3 年ほどで完全に消失した繁殖集団もあることから、絶滅危惧 IA 類に評価されている。一方で近年遷移と思われる新たな繁殖場所が確認されたこともある。本種は個体群動態が激しく、生息場所が森林に依存していることから、丘陵地の多少の環境悪化であっても個体の減少を急激に招く恐れがある。

ナゴヤダルマガエル

市内では水田の減少に伴い生息域が減ってきていると思われるが、2023 年に東区の徳川園の園庭内に生息している事が確認された。この場所の個体群が市内由来で近隣からの個体群であるかどうかは明らかではないが、古地図で確認する限り、周辺からの個体群が徳川園のみに残されたとは考えにくい状況である。今後移入か否かについて、詳細な遺伝情報をもとに検証していきたい。

今回のレッドデータブック作成にあたり、愛知教育大学の島田知彦准教授にはタゴガエルやアカハライモリの遺伝的解析や情報提供にご協力頂いた。広島大学両生類研究センターの三浦郁夫教授にはオワリサンショウウオの研究に関する情報提供にご協力頂いた。なごや生物多様性センター内なごや生物多様性保全活動協議会（なごビオ）両生類部会の部会員の方々には、多大な調査や保全情報の提供にご協力頂いた。ここに記してお礼申し上げる。

（藤谷武史）

③　レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各両生類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（両生類）に関する凡例 】

分類群名等

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目および科の範囲、名称、配列は、「日本爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2024）等を基本として、最新の情報を踏まえて整理した。

和名・学名

対象種の和名および学名を各頁上の枠内に記述した。和名および学名は、「日本爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2024）等を基本として、最新の情報を踏まえて整理した。

評価区分

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右上の枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち 2025」（愛知県，2025）の愛知県での評価区分、および「環境省レッドリスト 2020　その他無脊椎動物」（環境省，2020）の全国での評価区分も併記した。

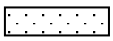
評価理由

対象種が名古屋市版レッドリスト掲載種として評価された理由について記述した。

形態

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した。

分布の概要

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査および文献調査によって確認された地域について、区ごとに着色して市内分布図として掲載した。なお、絶滅と判断された区域は  で示し、移入と考えられる区域は  で示した。

生息地の環境／生態的特性

対象種の生息環境および生態的特性について記述した。

現在の生息状況／減少の要因

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

保全上の留意点

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

特記事項

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

引用文献

記述中に引用した文献を著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

関連文献

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

両生類　＜有尾目サンショウウオ科＞

オワリサンショウウオ　*Hynobius owariensis* Sugawara, Fujitani, Seguchi, Sawahata et Nagano, 2022

評価理由

生息地の環境の悪化により、個体数が減少している箇所が多く見られる。また、個体群が孤立し、遺伝的交流が途絶えており、個体群内の遺伝的多様度も減少している。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

市内の個体群では、繁殖期に観察された成体の全長が 73～112.5mm（藤谷，2000）。雌の方が大きくなる傾向にある。体色は淡い黒褐色。まれに尾の上縁に明瞭でない黄色い筋がある個体もいる。幼体時や若い個体では白い細かな斑点が入る事もある。卵嚢はバナナ状で、透明度が高くない。



千種区　2010 年 2 月 27 日　藤谷武史　撮影

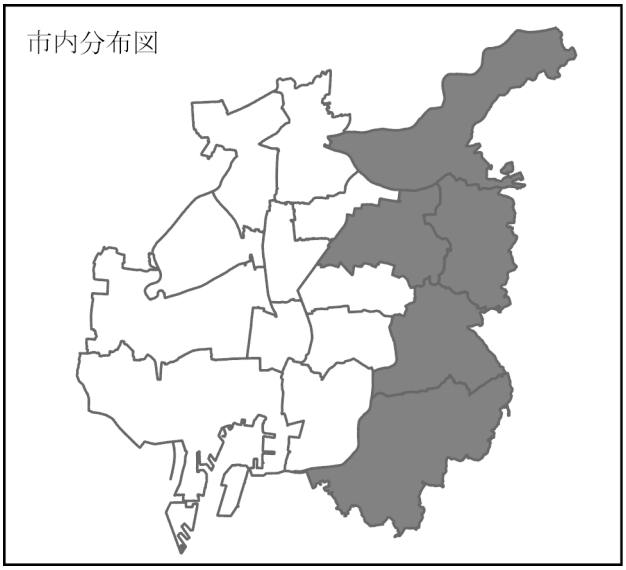
分布の概要

市内：東部の丘陵地にパッチ状に生息。

県内：名古屋東部及び周辺の丘陵地から知多半島にかけて分布。愛知県西部の固有種。

国内：上記のとおり。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

主に平野部の丘陵地に生息する。産卵は水たまりや小さな池の淵、水田の用水路や浅い緩やかな流れのある流水域に産卵する。産卵期は 2 月下旬～4 月上旬。産卵数は地域によって多少異なるが、本地域では 36～111 卵で平均約 70 卵。産卵期は長いが、まとまった雨量に起因して産卵が集中する傾向にあり、産卵期間中 3～4 回ほど確認される。

現在の生息状況／減少の要因

市内の東部にある丘陵地帯に生息するが、繁殖集団の数は極めて少なく、産卵場所となる水辺の水源が不十分な場所も存在する。また、開発に伴い大量に死亡した例もある事から、今後生息地の環境保全は不可欠である。

保全上の留意点

生息地の分断化が起こっており遺伝的交流も行われない事から、遺伝的多様度の低下に伴う近交弱勢が懸念される（藤谷ら，2016）。今後生息域外保全などの検討も必要だと思われる。

特記事項

本地域の個体群は種の変遷が著しく、トウキョウサンショウウオからカスミサンショウウオ、後にヤマトサンショウウオに分類され、2022 年に新種記載された（Sugawara et al., 2022）。基準産地は公有地である東山公園南部であり、公的保全が期待される。核ゲノムの詳細な解析により、オワリサンショウウオは独立種である事が強く示唆されている（三浦，未発表）。

引用文献

藤谷武史，2000．名古屋市東山公園におけるトウキョウサンショウウオの調査．両生類誌，4: 9-12.

藤谷武史・能登原盛弘・熊澤慶伯，2016．ミトコンドリア DNA 塩基配列を用いた名古屋市及び周辺地域におけるカスミサンショウウオの遺伝的多様性の研究．爬虫両棲類学会報, 2016(1): 1-12.

Sugawara H, Fujitani T, Seguchi S, Sawahata T and Nagano M. 2022. Taxonomic Re-examination of the Yamato Salamander *Hynobius vandenburghi*: Description of a New Species from Central Honshu, Japan. Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum, (Natural Science) (51): 47-59.

関連文献

Ihara S, Fujitani T, 2005. Prey items salamander *Hynobius nebulosus* in Nagoya and its inferred position in the soil food web. Edaphologia. 75: 7-10.

Matsui M, Okawa H, Nishikawa K, Aoki G, Eto K, Yoshikawa N, Tanabe S, Misawa Y and Tominaga A, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese Clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Current Herpetology 38(1): 32-90.

（藤谷武史）

両生類　＜有尾目イモリ科＞

アカハライモリ　*Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)

評価理由

生息域が極めて狭く、現在の生息域も健全とはいえず、市内から消失してしまう恐れが著しく懸念されるため。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

形態

全長 70～130mm で、雌の方が大きい。背面は黒色か暗褐色。腹部は赤かオレンジの斑紋や不規則な模様がある。繁殖期の雄は尾を中心に婚姻色が現れ、背面に黒い水玉模様が現れることがあり、尾が垂直方向に肥大する。遺伝的や形態的に地域変異があり、腹部の模様や大きさに違いがある。背面に赤いストライプが入る個体も存在する。



千種区、2020 年 2 月 18 日、藤谷武史　撮影

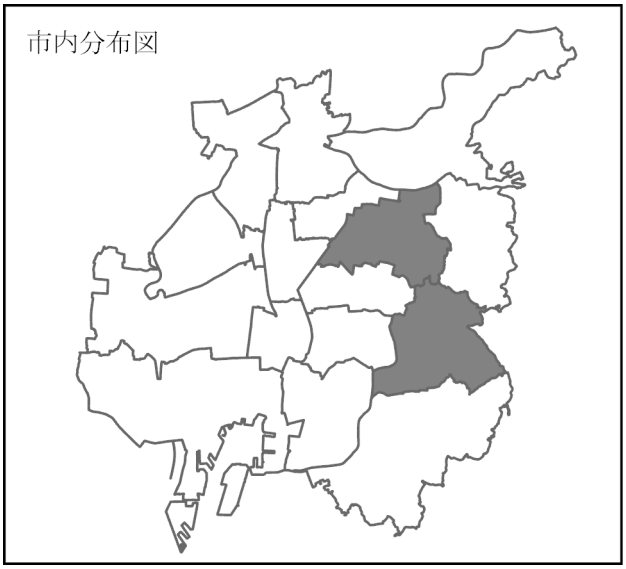
分布の概要

市内：東部丘陵地のごく限られた地域にのみ生息。

県内：尾張丘陵部、三河丘陵部から山地。知多半島。県レッドリストでは、渥美種族とそれ以外を中間種族に分け、渥美種族はCRにランクに、中間種族をNTにランク付けされている（島田，2020）。知多半島に生息する個体群は渥美種族とされる（Shimada et al., 2016）。

国内：本州、四国、九州、佐渡島、隠岐島、壱岐島、五島列島、大隈諸島など。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

池、湿地、水田などの水中で多く見られる。山間部などの林道脇の水たまりや河川などでも観察される。繁殖期の雄は、地域で多少異なるが、尾を雌の顔の前でくねらせながら震わせ求愛する。その際、雄はソデフリンといわれるホルモンを放出し、雌を誘発させることが知られている。産卵は水中に一卵ずつ水草などに巻きつける。

現在の生息状況／減少の要因

市内東部丘陵地のごく限られた場所にのみ生息し、以前は東部丘陵に広く分布していた可能性がある。天白区平針の住宅街の間に流れる用水路で生息が確認されているが、遺伝的に人為移入であることがわかっている（島田，未発表）。

保全上の留意点

生息域内の生息数の少なさから、生息地保全と並行して生息域外保全の検討も必要である。

特記事項

遺伝的にも変異があることや、移入定着も確認されていることから、個体群としての維持は非常に重要と思われる。本地域の個体群は、中間種族の遺伝的特性を持ち（島田ら，2024）、形態的にも渥美種族と中間種族の形質がモザイク状に出現していることから、渥美種族に近縁であると思われる（島田，未発表）。

引用文献

島田知彦, 2020. レッドデータブックあいち 2020 動物編（4）両生類. pp195-211. 愛知県.

Shimada T, Maeda S and Sakakibara M, 2016. A morphological study of *Cynops pyrrhogaster* from the Chita Peninsula: Rediscovery of the "Extinct" Atsumi Race endemic to peninsular regions of Aichi Prefecture, Central Japan. Current Herpetology 35(1): 38-52.

島田知彦・富永　篤・長谷川道明・白井雅之・榎本諒太・萩原孝泰・高見一利・大谷忠興, 2024. アカハライモリ「渥美種族」の分布範囲について. 爬虫両棲類学会報（発表要旨） 2024: 100-101.

関連文献

林　光武，1993. ダンスを踊って求愛　アカハライモリ. 両生類・爬虫類 1　アシナシイモリ、サンショウウオ　週刊朝日百科動物たちの地球，(97): 20-22. 朝日新聞社，東京.

（藤谷武史）

両生類　＜無尾目ヒキガエル科＞

アズマヒキガエル　*Bufo formosus* Boulenger, 1883

評価理由

25 年ほど前までは市内でも丘陵地を中心に多く生息しており、産卵シーズンになると多くの「ガマ合戦」が見られていた。しかし、近年市内各地で産卵数が激減し、繁殖集団の消失が止まらないため。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

頭胴長は 43～162mm と変異が大きいが、多くは 70～130mm。小さな個体は東北地方と中部地方の山岳部などで見られる。背面は茶褐色、黄褐色、赤褐色とバリエーションがあり、腹部側面には白や黒、茶褐色のまだら模様が入る。オスは繁殖期になると体表が滑らかになり、黄褐色がより強くなる傾向がある。



中川区、2024 年 2 月 20 日、藤谷武史　撮影

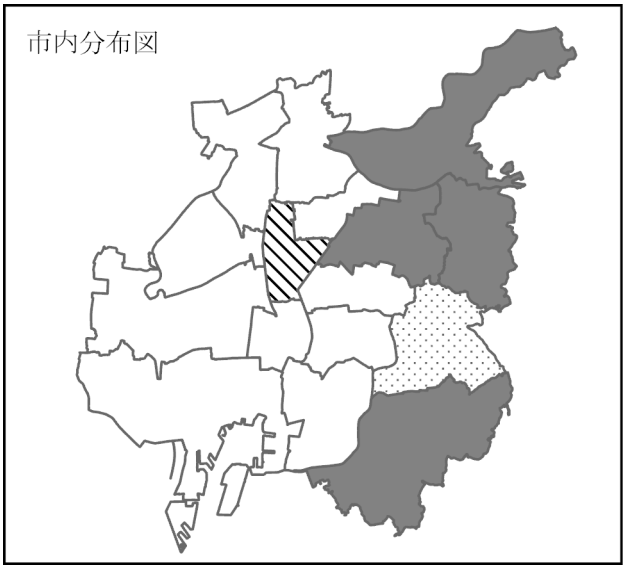
分布の概要

市内：主に東部の丘陵地に生息。公園や庭先などでも見られる。中区白川公園に人為分布。

県内：尾張東部、三河地方、知多半島、渥美半島に広く分布

国内：本州近畿及び山陰以北、北海道と佐渡島及び伊豆大島は人為移入。

世界：日本固有種



生息地の環境／生態的特性

平野部の丘陵地や畑、公園。山地の森林や渓流沿いにも生息する。繁殖期は 2～7 月だが、平野部では 2～3 月に産卵するのが一般的。通常成体は産卵後に一か月ほど春眠する。産卵数は 1500～8000 個で、紐状の卵塊を産む。幼生は 30mm ほどで変態する。変態後の幼体は成長が早く、オスで一年後の秋に性成熟し、メスではその一年後に性成熟をする。市内では通常 3 月中旬頃に産卵する。

現在の生息状況／減少の要因

丘陵地を中心に生息するが、近年急激に個体数が減少しており、産卵が見られなくなった場所も数か所存在する。繁殖期になると、オスが繁殖場所に現れ、メスが完全に現れなくなる現象が数か所で確認される事があり、繁殖集団が消失寸前である事が推察される。名古屋市市内の総産卵数は 10 卵塊ほどと極めて少なく、絶滅危惧度が極めて高い。中区の白川公園に生息する繁殖個体群は、近くで飼育繁殖した個体が逃げ出し、定着した個体群であるが、近年は減少した様子である。

保全上の留意点

市内の個体群が激減した理由は不明だが、今後各繁殖集団の個体群動態を観察する必要がある。生息地である丘陵地などの開発や変遷にも注意が必要である。

特記事項

白川公園に定着している繁殖集団は、平和公園の個体群であることが明らかとなっている。平和公園、猪高緑地、東山公園南部の個体群は、ここ数年産卵が確認されなくなった。平和公園ではニホンヒキガエルとの交雑個体である幼生が確認されている（島田，2018）。

引用文献

島田知彦, 2018. グリーンデータブック 2018 両生類編； アズマヒキガエル． B-5. 愛知県.

関連文献

浅香智也・寺本匡寛・島田知彦．2017．アンケート調査に基づく名古屋市内のアズマヒキガエルの分布変遷．爬虫両棲類学会報，（2）：164-171.
前田憲男・松井正文，1999． アズマヒキガエル．改訂版日本カエル図鑑，pp.18-21．文一総合出版，東京．
浦野明央・石原勝敏　編，1987． ヒキガエルの生物学． 289 p． 裳華房，東京.

（藤谷武史）

両生類　＜無尾目アカガエル科＞

ニホンアカガエル　*Rana japonica* Boulenger, 1879

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

開発などによる生息地の縮小や生息地の環境悪化に伴い個体数が減少している。また、近年繁殖集団が消失した場所は、短い年月に消失していることから、産卵数が多い繁殖集団でも絶滅の危機が極めて高いことが窺えるため。

形態

頭胴長が 34～64mm で、メスの方が明らかに大きい。体色は赤褐色や灰褐色で、背面はほぼなめらかである。背側線は明瞭でほとんど折れ曲がらず、ヤマアカガエルと異なる。幼生は背面に一対の黒点があり、これもヤマアカガエルと異なる。オスは鳴嚢を持たない。



知多郡美浜町、2022 年 2 月 22 日　藤谷武史　撮影

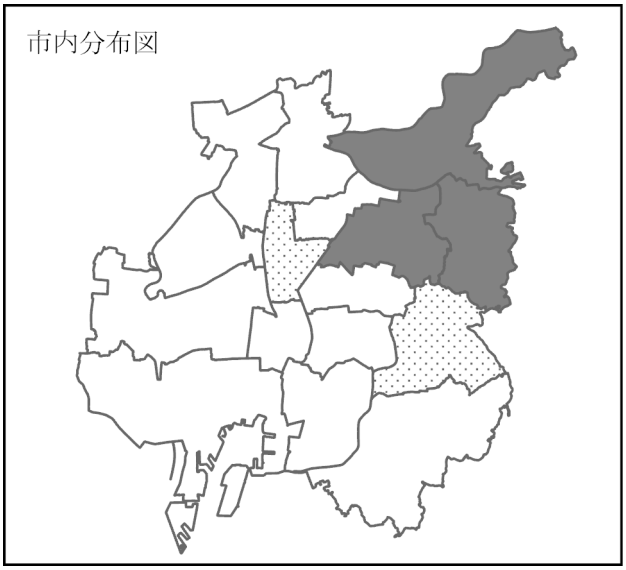
分布の概要

市内：東部丘陵地の一部。中区の一部

県内：尾張地方、三河地方、知多半島、渥美半島。

国内：本州、四国、九州、隠岐、大隈諸島。八丈島に人為分布

世界：日本固有種



生息地の環境／生態的特性

主に平地の水田や丘陵地に生息し、山地では少ない。繁殖期は普通 1～3 月で、市内では 2 月下旬～3 月上旬である。ヤマアカガエルと同所的に生息する場所もあるが、市内では本種しか確認されていない。

現在の生息状況／減少の要因

丘陵地の限られた場所のみに生息する。繁殖集団の個体数変動が激しく、生息地の環境が影響している可能性が考えられる。現在は減少傾向にあり、産卵数が激減している個体群や消失した地域も存在する。一方では、遷移と思われる繁殖集団の移動も確認されている箇所も存在する。

保全上の留意点

丘陵地に依存しているため、丘陵地の環境保全を含めた永続的な保護が重要。

特記事項

中区に生息している個体群は、丸の内中学校に作られたビオトープに 2001 年より産卵する集団である。この集団は名古屋城の外堀に生息していた集団と考えられる。しかし、2018 年の調査以降産卵が確認できず、近年は消失したと思われる。

関連文献

前田憲男・松井正文，1999. ニホンアカガエル．改訂版日本カエル図鑑，pp. 44-47．文一総合出版，東京．
比婆科学教育振興会，1996．広島県の両生・爬虫類．163p. 中国新聞社，広島．

（藤谷武史）

両生類　＜無尾目アカガエル科＞

ツチガエル　*Glandirana rugosa* (Temminck et Schlegel, 1838)

評価理由

生息の確認できている場所が極めて少なく、市内の生息環境も本種にとって十分ではない。また、近年生息している水田の減少が著しく、少ない生息域がより狭くなっているため。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体表にはイボ状の突起が多く存在し、ヌメヌメしていない。頭胴長は 37～53mm でメスの方が大きい。捕獲をすると悪臭を放つ。「イボガエル」とも呼ばれる。



北区、2014 年 10 月 3 日、藤谷武史　撮影

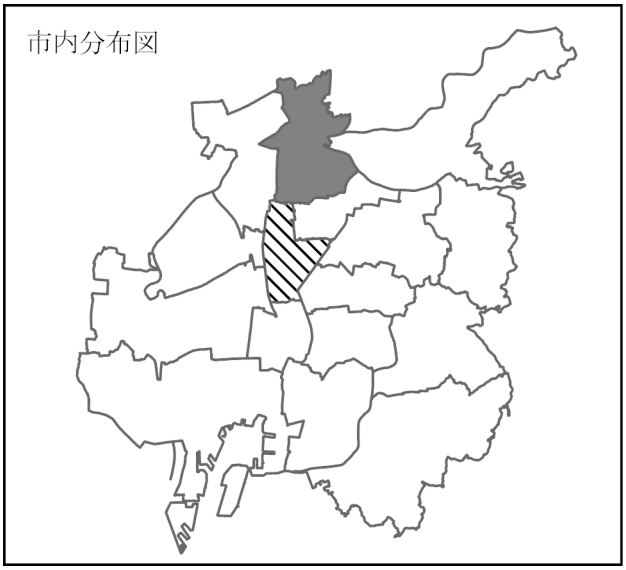
分布の概要

市内：北区の一部にのみ分布。ただし、中区白川公園に人為移入と思われる繁殖集団が存在する。

県内：尾張東部、三河地方、知多半島、渥美半島に局所的に分布するが、濃尾平野にはあまり生息しない。

国内：本州（関東から東北太平洋岸側を除く）、四国、九州、佐渡島、隠岐島、壱岐島、五島列島など。北海道西部と伊豆大島は人為移入。

世界：朝鮮半島、中国東北部。



生息地の環境／生態的特性

平地から低山地に生息し、水田、池、沼、用水路、湿地、広い河川の河原の水たまりやゆるい流れのある淵で産卵する。繁殖期は長く、5 月から 9 月。市内では、6 月頃に繁殖する。幼生は普通一度越冬する。

現在の生息状況／減少の要因

北区の限られた場所に生息する。水田の減少や乾田化が原因で幼生の越冬場所が確保されないため、衰退していると思われる。2015 年の評価時に比べてさらに開発が進んでいる傾向にある。

保全上の留意点

生息場所の水田や回りの用水路などの持続。稲作の農薬散布の軽減に留意が必要。遺伝的多様度の低下や繁殖集団間の遺伝的分化が近距離にも関わらず著しい事が解っている（寺本 2022）ことから、遺伝的要素も留意しながら保全が必要である。

特記事項

染色体の形態が異なる 4 つのグループが存在し、ZW 型と XY 型の性決定様式が同種内で存在する。中部地方は XY 型（Ogata et al., 2002）。2022 年に関東から東北太平洋側集団をムカシツチガエル *Glandirana reliquia* として新種記載された（Shimada et al., 2022）。

引用文献

Ogata M, Lee JY, Kim S, Ohtani H, Sekiya K, Igarashi T, Hasegawa Y, Ichikawa Y, Miura I, 2002. The prototype of sex chromosomes found in Korean populations of *Rana rugosa*. Cytogenet Genome Res, 99: 185-193.

Shimada T, Matsui M, Ogata M, Miura I, Tange M, Min MS, Eto K, 2022. Genetic and morphological variation analyses of Glandirana rugosa with description of a new species (Anura, Ranidae). Zootaxa 5174(1): 25-45.

寺本匡寛 横山悠理 熊澤慶伯 島田知彦, 2022. ミトコンドリア DNA 塩基配列を用いた名古屋圏のツチガエルの遺伝的解析：近年の生息地分断と遺伝的分化度の上昇. 爬虫両棲類学会報, (2): 161–175

関連文献

愛知県，1996．愛知県の両生類・爬虫類，117p. 愛知県.

島田知彦・坂部あい，2014. 知多半島におけるツチガエルの生息地の一例. 豊橋市自然史博物館研報, 24: 33-35

前田憲男・松井正文，1999. ツチガエル．改訂版日本カエル図鑑，pp.96-99．文一総合出版，東京.

（藤谷武史）

両生類　＜無尾目アカガエル科＞

ナゴヤダルマガエル　*Pelophylax porosus brevipodus* (Ito, 1941)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全　　国 2020	絶滅危惧 IB 類

評価理由

濃尾平野は西日本に比べて比較的多く生息するが、市内では生息できる水田の減少が原因で、ごく限られた生息地しか存在しない。“ナゴヤ”の地名を持つカエルにも関わらず、遠からず絶えてしまう恐れがある。

形態

頭胴長が 35～73mm で、雌の方が大きい。形態や体色はトノサマガエルと類似するが、背中に背中線を持たない個体が多いことや、後肢がトノサマガエルに比べてやや短く体が丸みを帯びてずんぐりしているのが本種の特徴。その他、黒い斑紋が丸く独立していることが多く、雌雄の体色による二型は殆ど認められない。



中川区、2023 年 7 月 6 日、藤谷武史　撮影

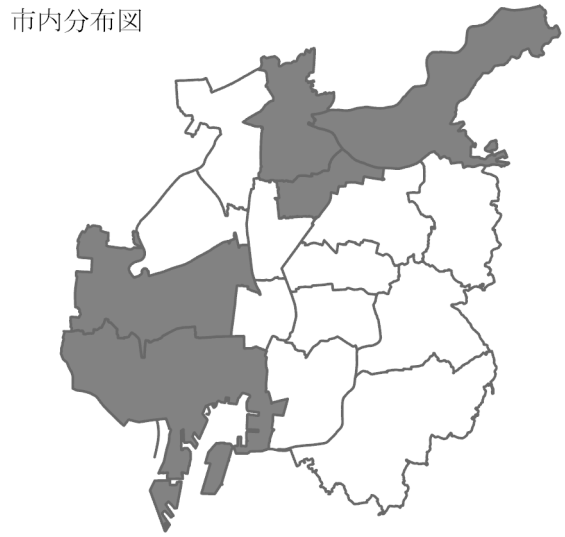
分布の概要

市内：南西部の水田地帯及び北部の一部。徳川園内にも生息が確認。

県内：尾張地方、西三河地方、知多半島、渥美半島。

国内：長野県伊那谷、東海地方、近畿地方中部、山陽地方東部、四国香川。名古屋集団と岡山集団とに大きく分かれ、遺伝的にも差が見られる。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

低地の水田の周りが本来の生息域で、その他、湿地や沼などの周りにも生息し、水辺からあまり離れることはない。産卵期間は長く、4～7 月におよび、一繁殖集団でも期間が長い。雌は一年に 2 回産卵することがある。産卵は少数の卵を何回かに分けて行う。

現在の生息状況／減少の要因

南部の生息地では水田地帯が広がり比較的多くの個体が存在するが、北部の生息地は水田が住宅街と混在しているため、悪影響を受けやすい。水田の減少が最大の減少理由である。

保全上の留意点

水田の開発は大きく本種の個体群に影響を及ぼすことから、稲作圃場の継続が重要。

特記事項

トノサマガエルとの自然交雑が懸念されている。守山区で本種が確認されたとの情報があるが、トノサマガエルの誤認の可能性が高い。

関連文献

長井悠佳里・土井敏男・湯浅義明・藤谷武史・伊藤邦夫・小泉雄紀・三浦郁夫，2011．ナゴヤダルマガエルの遺伝的地域分化 –とくに岡山集団とナゴヤ集団が接する境界領域について–．爬虫両棲類学会報，2011(1): 55．日本爬虫両生類学会第 49 回大会発表要旨．

前田憲男・松井正文，1999．ダルマガエル．改訂版日本カエル図鑑，pp.92-95．文一総合出版，東京．

松井正文，2003．野生動物の保全遺伝学　14 両生類．小池裕子・松井正文（編），保全遺伝学，pp.214-226．東京大学出版会，東京．

光田佳代・原　直之・高木雅紀・山崎裕治・宮川修一・岩澤　淳，2011．PCR と制限酵素を利用したトノサマガエルとナゴヤダルマガエルの母親系統の簡易な判別法．両生類誌，(21): 17-22．

（藤谷武史）

両生類　＜無尾目アオガエル科＞

シュレーゲルアオガエル　*Rhacophorus schlegelii* (Günther, 1858)

評価理由

市内では過去の記録が少ないが、東部に局所的に生息していたとみられる。しかし、現在では開発による影響で安定的な繁殖場所がほぼ壊滅状態となっている。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

頭胴長は 32～53mm で、メスの方が極めて大きい。体表は平滑で、黄緑色から緑色であるが、体色変化で暗褐色にもなる。時折背面に黄色い斑点模様が現れる個体も存在する。吸盤が発達し、ニホンアマガエルと似ているが、本種は鼻から頭側面にかけて黒い条線が入らない。



名東区、2024 年 4 月 29 日、森川初美　撮影

分布の概要

市内：東部の丘陵地のごく一部に生息。

県内：尾張東部、三河地方、知多半島の一部、渥美半島。

国内：本州、四国、九州、五島列島。

世界：日本固有種



生息地の環境／生態的特性

平野部から低山地帯では水田周辺に、標高 1600m までの高地では主に湿地周辺に生息。産卵は 4～6 月が主な時期で、オスが水田の畦などに浅い窪みを作り、その中に泡状の卵塊で産卵される。オスは隠れて鳴くことが多く、繁殖期でも鳴き声が聞かれるものの、姿を確認する事は容易ではない。

現在の生息状況／減少の要因

名東区の市境の緑地と守山区の市境の限られた場所のみに生息。本種は濃尾平野ではあまり見ることができないが、田植え時期が遅く、産卵期には水田に水が溜まっていない状態のため、個体群維持が出来ないためと推測される。中村区で 1 個体メスが確認され、天白区では数年間鳴き声が聞かれた場所もある。おそらく人為的な分布。

保全上の留意点

生息地である水田や周りの水路の確保が重要で、且つ産卵期に合わせた水の確保。

特記事項

かつては、名東区の東境から長久手市にかけて生息していた。しかし近年の開発に伴い、名古屋市に隣接する長久手市内の生息地は消失した。

関連文献

愛知県，1996．愛知県の両生類・爬虫類．117p．愛知県．
島田知彦・坂部あい，2014．西三河平野部におけるツチガエルの分布．豊橋自然史博物館研報，24: 7-15.
前田憲男・松井正文，1999．シュレーゲルアオガエル．改訂版日本カエル図鑑，pp.158-161．文一総合出版，東京．
島田知彦・田上正隆・楠田哲士・藤谷武史・高木雅紀・河合敏雅・堀江真子・堀江俊介・波多野　順・廣瀬直人・池谷幸樹　国崎　亮・須田暁世・坂部あい，2015．　濃尾平野に生息する水田棲カエル類の分布状況．豊橋市自然史博物館研報 25: 1-11.

（藤谷武史）

両生類　＜無尾目アカガエル科＞

トノサマガエル　*Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)

評価理由

都市化による水田の減少や、繁殖可能な湿地などの減少によって、個体群に影響が出ていると思われる。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	準絶滅危惧

形態

頭胴長が 38～94mm で、雌の方が大きくなる。背中には背中線を持ち、体色は緑や暗褐色、黒い不規則な斑紋がある。成熟した雌は、黒い斑紋が広がり、黒い部分が目立ち、繁殖期の成熟した雄は、時に鮮やかな黄褐色になり、黒い斑紋がほとんど無い個体も見受けられる。雄は一対の外鳴嚢が鼓膜の下方でたたみ込まれている。



中川区、2014 年 9 月 16 日、藤谷武史　撮影

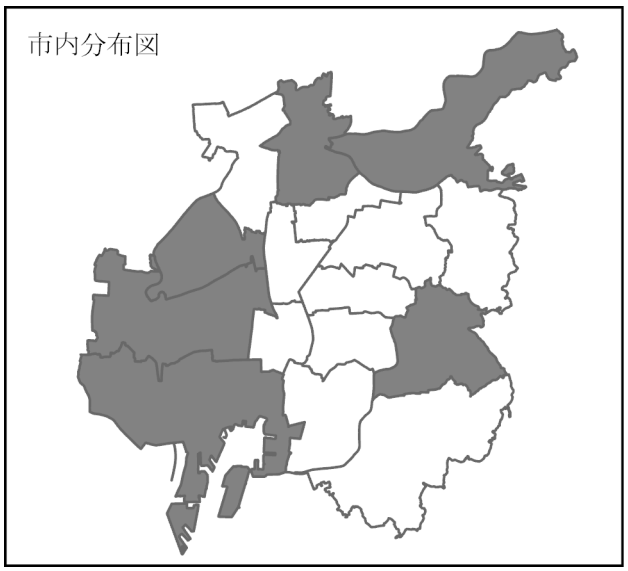
分布の概要

市内：東部と西部、及び北部の水田や緑地に生息。

県内：尾張地方、三河地方、知多半島、渥美半島のほぼ全域。

国内：本州（関東地方から仙台平野を除く）、四国、九州、五島列島。北海道は人為分布。

世界：朝鮮半島、中国、ロシア沿海州。



生息地の環境／生態的特性

生息地は平野部から低山地に及び、主に水田が大きな繁殖場所であるが、河川敷の水たまりや小さな池などでも産卵する。繁殖期は 4～6 月だが、一繁殖集団による繁殖ピークは非常に短く、一週間ほどでほぼ終了する。雄は繁殖期に 1.6m ほどの縄張りを持つことが知られている。非繁殖期は水辺から離れる。

現在の生息状況／減少の要因

主に水田に依存しているが、生息や繁殖のできる水田の減少が原因と思われる。中川区や中村区の西部では、残された水田で比較的多くの本種を確認することができる。名東区猪高緑地内の市民水田にて 2015 年から新たに生息が確認されている。人為的分布か否かは不明。

保全上の留意点

水田の開発は大きく本種の個体群に影響を及ぼすことから、稲作圃場の継続が重要。

特記事項

ダルマガエルとの自然交雑が懸念されている。

関連文献

前田憲男・松井正文，1999．トノサマガエル．改訂版日本カエル図鑑，pp.84-87．文一総合出版，東京．
松井正文，2003．野生動物の保全遺伝学　14 両生類．小池裕子・松井正文（編），保全遺伝学，pp.214-226．東京大学出版会，東京．

（藤谷武史）

両生類　＜無尾目アマガエル科＞

ヒガシニホンアマガエル　*Dryophytes leopardus* Shimada, Matsui et Tanaka, 2025

評価理由

東日本に広く分布する本種であるが、市内では近年生息数が減少しているのではと懸念され、情報の集積が必要とされることから。

評 価 区 分

名古屋市 2025	情報不足
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

形態

全長が 2.2～4.5 ㎝の小型で、体色変化を頻繁に起こす。メスはオスより大きくなる傾向があり、オスは繁殖期になると喉の下が黒くなる。手足に吸盤を持ち、壁やガラスを容易に登る。

分布の概要

市内：全域に生息していると思われるが、不明。

県内：全域に生息していると思われる。

国内：福井県、京都府、大阪府、和歌山県、奈良県、三重県を結ぶラインより東日本

世界：ロシア・サハリン南部。



一宮市、2016 年 5 月 31 日、藤谷武史撮影

生息地の環境／生態的特性

主に樹上性である。山間部から海岸近くの平地まで生息し、水田や公園、市街地と幅広い環境で観察される。産卵は地域で異なるが、3 月から 9 月に行われ、小さな卵塊を何回にも分けて産卵する。



現在の生息状況／減少の要因

全国的にほとんど絶滅危惧種に指定されていないが、東京都は 2020 年のレッドリスト（4 つの区域に分けて評価）で準絶滅危惧種か絶滅危惧種に指定している。北海道は 2015 年のレッドリストで利尻島や焼尻島の本種を「地域個体群」として評価している。

保全上の留意点

稲藁や人工物に付着して簡単に移動できることから、反意図的に国内移入が懸念される。

特記事項

遺伝的に 2 つの集団に分かれることがわかっており、滋賀県から広島県あたりに境目が存在し、境目から東日本側と国後島やサハリンを含む集団と、境目から西日本と九州や四国、韓国、中国、沿海州までの集団に分かれる（Dufresnes et al., 2016）。2025 年にニホンアマガエルの東日本集団が核ゲノムや形態の違いにより新種記載された（Shimada et al. 2025）。

引用文献

Dufresnes C, Spartak N. Litvinchuk, Amael Borzée, Yikweon Jang, Jia-tang Li, Ikuo Miura, Nicolas Perrin,Matthias Stöck, 2016. Phylogeography reveals an ancient cryptic radiation in East-Asian tree frogs (*Hyla* japonica group) and complex relationships between continental and island lineages. BMC Evolutionary Biology. 16: 253.

Shimada T, Matsui M, Tanaka K, 2025. Genetic and morphological variation analyses of *Dryophytes japonicus* (Aruna, Hylidae) with description of a new species from northeastern Japan, Zootaxa, 5590(1): 061-084

関連文献

藤谷武史・AZ Relief・関慎太郎, 2021,日本のいきものビジュアルガイド「はっけん！ニホンアマガエル」,151p. 緑書房, 東京.

（藤谷武史）

両生類　＜無尾目アカガエル科＞

タゴガエル　*Rana tagoi* Okada, 1928

評価理由

2019 年に市内で初めて生息や繁殖が確認されたが、詳細が不明で今後調査を必要とするため。

評 価 区 分

名古屋市 2025	情報不足
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

形態

褐色の体色をし、背側線はヤマアカガエル同様鼓膜の後ろの辺りから外側へ曲がっている。顎の下に細かい斑点があることやヤマアカガエルに比べて頭部が短く幅広いことから見分けがつく。背側はほぼ平滑で、繁殖期のオスは体側面がたるむ。頭胴長は 30～58mm だが、県内の個体群は 40～50mm 内外の個体が多い（島田，2018）。

分布の概要

市内：守山区東谷山のみに生息。

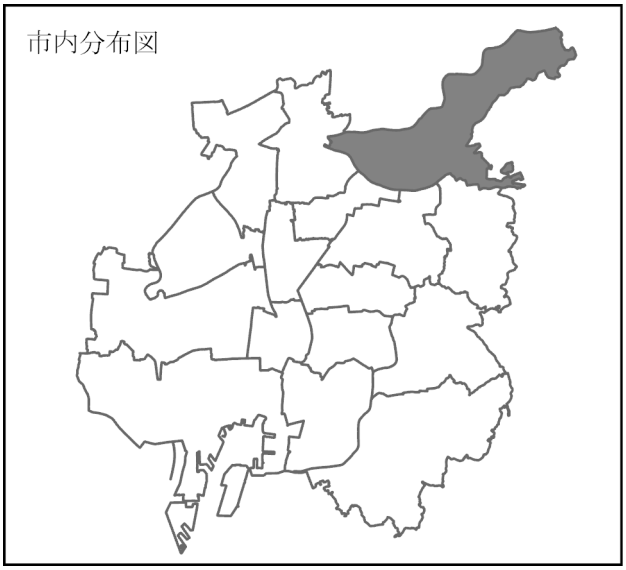
県内：中部から東部にかけての丘陵地や山地にかけて生息。知多半島、渥美半島には記録がない。

国内：本州、四国、九州、そのほか島嶼に分布。

世界：日本固有種



瀬戸市下半田町、　2024 年 8 月 16 日、藤谷武史　撮影



生息地の環境／生態的特性

産卵は渓流中の伏流水の中で行われ、幼生は孵化したのち餌を採食せずに変態する。産卵は一般的には 4 月から 5 月であるが、名古屋市の個体群は 4 月下旬から 5 月上旬とみられる。繁殖期以外は渓流から離れ、山林中で生活する。

現在の生息状況／減少の要因

数年前から鳴き声が確認されているらしく、近年になって定住し、繁殖がなされるようになったと思われる。

保全上の留意点

自然に分布域が拡大されたとすると、移入先の探索も行う必要がある。それを含めて個体群としての保全が重要になると思われる。

特記事項

名古屋市の個体群は、ミトコンドリア DNA 及び染色体数の解析、鳴き声による解析などから近隣に生息している個体群と一致し、これらはネバタゴガエルとも一致する（島田，未発表）。今後、愛知県のタゴガエルに関する種の見直しなどの検討が必要であるとされている（島田，2018）。

引用文献

島田知彦, 2018. グリーンデータブック 2018 両生類編；タゴガエル. B-7. 愛知県.

関連文献

Ryuzaki M, Hasegawa Y, Kuramoto M, 2014. A new brown frog of the genus *Rana* from Japan (Anura: Ranidae) revealed by cytological and bioacoustic studies. Alytes 31: 49-58.

島田知彦・山田哲也・江頭幸士郎, 2016. 愛知県産タゴガエル類の種帰属について. 爬虫両棲類学会報 2016(1): 89.

（藤谷武史）

魚類

①　名古屋市における水域環境および魚類の概況

市内には庄内川、天白川、山崎川、新川、堀川を含む 5 水系 49 河川が流れている。このうち全長 96 ㎞の庄内川は岐阜県恵那市に源を発し、流域面積全体（1,010 ㎢）の規模としては愛知県内では矢作川に次いで大きい。本河川に名古屋市内で流入する支流も多く、それらは瀬戸市や長久手市など比較的良好な自然が残されている地域を流れる。庄内川が名古屋市という大都市を流れながらも比較的豊かな生物相を擁する理由は、本流および支流の上流域にある自然の豊かさにあると言える。一方、庄内川に次いで規模が大きい天白川水系は、その上流域を名古屋市のベッドタウンとして急速に都市化が進んでいる日進市に有し、扇川、植田川をはじめとする支流の多くが名古屋市内の住宅密集地域を流れること等により、流域の自然度は低い。

天白川の流域を含む名古屋市東部地域は丘陵地形であったために河川からの用水取水が困難であり、多くの農業用ため池が存在していた。しかし、かつて市内に 360 箇所以上あったため池の多くが埋め立て等で消失し、現在までに 3 分の 1 程度までその数を減らしている。これらのため池の多くは農業利用が減り、池干し等のメンテナンス頻度も下がり、ブルーギル、オオクチバス等の外来魚類が生息しやすい、自然環境撹乱の少ない安定した環境条件を整えてしまっている。

1957 年に出された名古屋市環境白書によれば、市内には 21 種の魚類が確認されていた。その後、1970 年代にいったん 18 種に減じたが、2000 年代にかけて 44 種にまで増加した。庄内川、矢田川、野添川、長戸川、天神川、香流川、扇川、荒子川を含む 13 河川では現在までに外来魚類を含めれば計 63 種を数えることができる。累積出現魚種数がもっとも多いのは庄内川であり 34 種に上る。このことからも本河川の生態系の豊かさがうかがい知れる。市内の河川にほぼ共通して出現する魚種は、オイカワ、タモロコ、モツゴ、フナ類、カマツカ、ドジョウ、ヨシノボリ類、マハゼである。しかし 2009 年を境に、外来魚類がこれらすべての河川で認められるようになった。たとえば、10 河川以上でカダヤシ、ブルーギル、オオクチバスの 3 種がセットで生息している。カムルチー、ナイルティラピアの定着も確認されている。加えて、特筆すべきは庄内川水系におけるコクチバスの侵入であり、自然繁殖している恐れが高い。

②　名古屋市における絶滅危惧種の概況

2015 年に愛知県産魚類目録（全種リスト）が刊行され、県内で過去に生息が認められた魚類について文献、現地、標本や聞き取り等による調査が行われた結果（古いものでは 1925 年に遡る）、170 種以上がリストに掲載された。これらには汽水域および河口域（干潟等）に生息する魚類も含まれる。これらのうち外来種、偶産種と考えられるものを除外すると、県内にはおおよそ 70 種程度の在来魚類が生息するものと考えられた。さらに名古屋市の絶滅のおそれのある種を評価するにあたり、ネコギギ、タニガワナマズ、イワナなど、市内にこれらの生息しうる環境が無い魚種を除き、やや幅はあるものの 55～60 種程度の魚類が歴史的に本市の淡水・汽水域に生息してきたものと考え、これらをレッドリストの評価対象母集団とした。

2020 年版には合計 34 種が掲載され、2025 年版ではキタドジョウが新たに追加され、合計 35 種となった。なお、カテゴリーの決定には、一般市民や研究者らからパブリックコメント等を通じて寄せられた貴重な意見を参考にさせて頂いたことを付記し、あわせてここに御礼申し上げたい。

2025 年版では前版と比べてカテゴリーに大きな変更は生じていない。多くの種において、個体群サイズがきわめて小さく、生息場所が局在し、河川工事、ため池の埋め立て、水田地帯・里地里山の消失、河口干潟の埋め立て等による生息場所の悪化や喪失、生息環境（餌生物量、産卵基質、水草などの隠れ場所等）の悪化、外来魚による捕食や競争、マニアによる乱獲等によって危機的な状況にある。

絶滅危惧 IA 類と評価された 9 種は、いずれも純淡水魚類（海と行き来しない）であり、分布地点がきわめて限られ、個体数も著しく少ない。なかでも、2025 年版で初めて選定されたキタドジョウは、近年ドジョウとは別種とされた種であり、市内では 1 地点でのみ生息が確認され、環境の悪化、ドジョウとの交雑により絶滅寸前の状態である。キタドジョウはドジョウに似るが全体的に細長く見える。伏流水が湧出する抽水植物帯が発達する湿地に生息するが、市内唯一のそのような生息地で開発が進行している。

絶滅危惧 IB 類と評価された 8 種のうち、カワムツとニシシマドジョウを除く 6 種は川と海を行き来する両側回遊型の魚類である。トビハゼ、エドハゼ、マサゴハゼは、いずれも県内複数の河口域・干潟域に生息するが、市内ではこれらの環境が悪化しており、個体数が減少している。また、ニホンウナギは個体数や分布に関して現在の状態と比較が可能な古いデータが存在しないため、実際には推定以上に少なくなっている可能性があり、大都市であり生息環境が劣悪な名古屋市の河川においては今後個体数がさらに減少していく危険性もある。本種に限らず、8 種は予防原則の観点からＩB 類を維持することが妥当と考えられた。

絶滅危惧Ⅱ類と評価された 6 種のうち、ドジョウは県内大部分で個体群が小さくなりつつあり、市内でも守山区等の一部の環境が比較的良好な地域を除けば確認することが難しくなってきている。さらにその守山区さえ水田環境の荒廃が著しく、予断を許さない。アユは両側回遊魚であり、周辺個体群からの移入により「絶滅」が容易に起こりにくいと考える向きもあるが、庄内川等においては遡上阻害や寄生虫の蔓延により十分に再生産していない可能性があり、Ⅱ類の維持が妥当と考えられた。汽水魚のシラウオは、産卵場所である河口域の砂底の減少、赤潮などの水質悪化で個体数が減少している。準絶滅危惧と評価された 5 種のうち、タモロコは市内の都市化が進んだエリアを流れる河川でも頻繁に見られるが、河川改修や圃場整備事業に伴う水路等のコンクリート護岸化により、隠れ家や産卵基質となる水草や抽水植物が少ないために、今後も個体群の動向に注意が必要

である。スミウキゴリは、転石等の生息に必要な河床材料が減少したことにより、数を減らしていると考えられる。最後に、情報不足と評価された 6 種については、いずれもカテゴリー判定に足る情報が十分に得られておらず、今後の知見の集積が望まれる。コイ（在来型）については、生息の可能性はほぼ無いものと考えられるが、決定的な証拠に欠ける状況である。

市内に残された水辺の生息環境の多くは、様々な人為的影響により悪化の一途を辿っている。これにオオクチバス、コクチバスなど肉食性外来魚の定着が拍車をかけている。外来魚類は、在来魚の卵から成魚に至る成長段階すべてにおいて捕食・競争圧をかけるため、特にため池などの閉鎖水域および水路などの空間分化に乏しい水域において負の影響が著しい。加えて、コイ（飼育型）の放流や餌づけは在来魚類の生息に百害あって一利無しであり、厳に慎むべきである。

2025 年版に掲載された魚類のなかには比較的水質の汚濁に強い種もいる。しかし今後、地球温暖化に伴うさらなる気温上昇は水温の上昇を招き、温度生理限界を超えることが予想される。加えて、気候変動は、魚類に必要な餌生物の減少等、生態系撹乱を引き起こす危険性が高い。自明ながら、生息状況への配慮に欠けた河川改修および海浜工事等が続けば、個体数の減少が続く。そのため河畔林や川岸の草本帯の維持や復元による水温、陸上から魚類の餌生物となる昆虫類の落下供給といった生息環境の保全が今後いっそう重要となる。

（谷口義則）

③　レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各魚類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（魚類）に関する凡例 】

分類群名等

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目および科の範囲と種の配列は原則として「日本産魚類検索　全種の同定　第三版」（中坊徹次（編），2013）に準拠した。

和名・学名

対象種の和名および学名を各頁上の枠内に記述した。和名および学名（目、科、種名）については、「日本産魚類検索全種の同定第３版」中坊編（2013）によった。

評価区分

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右上の枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち 2025」（愛知県，2025）の愛知県での評価区分、および「【汽水・淡水魚類】環境省レッドリスト 2020」（環境省，2020）の全国での評価区分も併記した。

評価理由

対象種が名古屋市版レッドリスト掲載種として評価された理由について記述した。

形態

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した。

分布の概要

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査および文献調査によって確認された地域について、区ごとに着色して市内分布図として掲載した。ただし、一部の種は生息地保護のため、地図を掲載しなかった。

生息地の環境／生態的特性

対象種の生息環境および生態的特性について記述した。

現在の生息状況／減少の要因

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

保全上の留意点

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

特記事項

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

引用文献

記述中に引用した文献を著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

関連文献

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

魚類　＜ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科＞

スナヤツメ類　*Lethenteron* sp.

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

本種の減少には歯止めがかかっておらず、絶滅リスクがきわめて高い。本種の主要な生息場所である湧水環境が市内では緑地の減少と共に激減しており、残された数少ない生息場所も圃場整備および水質汚染の危機にさらされている。

形態

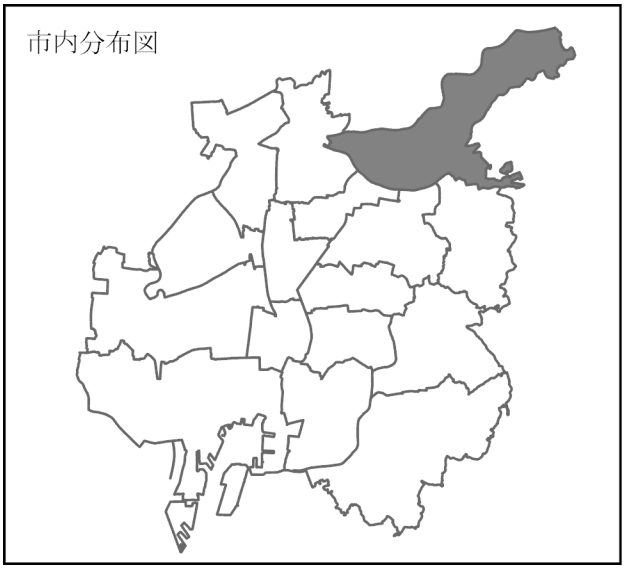
体長 20cm。体側に 7 つのエラ穴が開き、目と合わせて 8 つの目（ヤツメ）があるように見える。幼生（アンモシーテス幼生）には目が無い。ウナギに似るが、口には顎が無く、2 万種以上の魚類の中でもきわめて原始的な姿を留めた化石時代の生き残りの種である。



岐阜県木曽川水系、2006 年 5 月 9 日、荒尾一樹　撮影

分布の概要

市内：守山区。
県内：五条川水系、矢作川水系、豊川水系など。
国内：北海道、本州、四国および九州北部。
世界：日本、朝鮮半島、中国。



生息地の環境／生態的特性

幼生期は、河床や川岸に溜まった砂泥に潜り、分解された落ち葉などの有機物や藻類を食べる。生まれてから数年間のアンモシーテス幼生期を経て、変態する（成魚になる）。その後は消化管が機能を失い、まったく餌を採らず、翌春に産卵して死ぬ。一生を河川で過ごす。非寄生性である。

現在の生息状況／減少の要因

繁殖場となる湧水や伏流水の消失により個体数が激減している。特に大きな河川では伏流水のあるワンドや細流が生息環境となるため、護岸工事などにより消失しやすい。本種は水質汚染に弱く、護岸工事等で淀みなどが消失したり、落ち葉等の有機物の滞留場所（緩流部）が失われると生息できなくなる。市内では、著しい緑地の減少に伴う湧き水の枯渇や水温上昇により、ほぼ絶滅に近い状態にあると推測される。

保全上の留意点

湧水が出る農業用排水路も幼生にとって重要な生育場となる。コンクリート張りでも泥底なら可能性があるが、市内では絶滅状態に近く、緊急の保全策が必要である。

特記事項

2024 年に本州のスナヤツメは、キタスナヤツメとミナミスナヤツメの 2 種に分けられた。愛知県内では南方種しか確認されていないが、名古屋市内に生息する個体群が種不明のため、両種を含めたスナヤツメ類とした。

関連文献

岩田明久，1987．スナヤツメ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚，pp.38-40．山と渓谷社，東京．
中坊徹次・甲斐嘉晃，2013．ヤツメウナギ科．日本産魚類検索　全種の同定　第三版，pp.144-145,1753-1755．東海大学出版会，神奈川．
鈴木誉士・浅香智也・中川雅博，2006．琵琶湖につながる護岸された農業用水路におけるスナヤツメ *Lethenteron reissneri* 個体数の経月および経年変動．関西自然保護機構会報，28(1): 49-57．
山崎裕治，2005．スナヤツメ－湧水にひそむ生きた化石－．片野修・森誠一（編），希少淡水魚の現在と未来：積極的保全のシナリオ．pp.37-48．信山社，東京．

（谷口義則）

魚類　＜コイ目コイ科＞

ヤリタナゴ　*Tanakia lanceolata* (Temminck et Schlegel, 1846)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

市内各地で個体群の著しい減少が認められる。開発による生息地の破壊、産卵母貝である二枚貝類の減少、オオクチバス等の魚食性外来魚による捕食による生息数の激減にくわえて、飼育愛好家による過剰採集も脅威である。

形態

体長 8cm。比較的大型個体では 10cm 以上になる。体は側扁するが、体高はあまり高くない。本種に近縁なアブラボテも含め、背鰭の条間膜に紡錘形の暗色斑紋があり、やや長い 1 対の口ひげを持つ。婚姻色の出た雄は背部が蒼褐色で、体側は銀白色。頬部と腹部が朱色になり、背鰭と臀鰭に朱色の幅広い縦帯が出て縁辺には細い黒縁が出る。



愛知県内、2024 年 8 月 15 日、下山淳二　撮影

分布の概要

市内：庄内川、天白川水系。

県内：矢作川、豊川を含む県内の主要な水系。知多半島にも分布情報があるが、移入個体群である可能性がある。

国内：北海道、南九州、沖縄を除く全国各地。

世界：日本、朝鮮半島西岸。



生息地の環境／生態的特性

日本産タナゴ類のなかではもっとも広く分布する。平野部の河川、用水路を主たる生息の場とするが、これらと連絡する浅い溜池、池沼などにも生息する。タナゴ類の中でも比較的流れのある場所を好み、砂礫底によく見られる。雑食性で、付着藻類・底生植物などを食べる。産卵期は 4～8 月で、雄がマツカサガイやニセマツカサガイなど二枚貝に縄張りを作り、これらの鰓に雌が産卵する。孵化した仔魚はそのまま母貝内で成長し、1 ヶ月ほどで母貝から浮出する。1 年で成熟し、寿命は 2～3 年である。

現在の生息状況／減少の要因

宅地・工業用地開発、河川改修等による生息地の破壊、二枚貝類の減少、オオクチバス等の魚食性外来魚による捕食により生息数が激減したものと推測される。名古屋市では生息地の保護対策は特に行っていない。飼育愛好家による過剰採集も脅威となっている。

保全上の留意点

生息場所と淡水二枚貝の保全、魚食性外来魚の侵入防止およびこれらの駆除が必要である。近縁種による競争的な排除（例：霞ヶ浦のオオタナゴ）や交雑（例：三重県のアブラボテ）に注意が必要である。

特記事項

保全対象水域を決定し、保全策を講じる必要がある。

関連文献

河北　均・河北陽二，1998．ヤリタナゴとアブラボテの種間雑種と考えられる 1 個体について．三重自然誌，5: 93-95.

長田芳和，1987．ヤリタナゴ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚，pp.354-355．山と渓谷社，東京．

（谷口義則）

魚類　＜コイ目コイ科＞

カワバタモロコ　*Hemigrammocypris rasborella* Fowler, 1910

評価理由

市内における生息地はきわめて局所的であり、開発および外来魚の侵入による絶滅リスクがきわめて高い。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

体長 6cm。タモロコに似るが、口ひげは無い。また、腹縁がキール状になっている。側線は不完全で胸鰭上方までしか達しない。縦列鱗数は 30～35 枚である（細谷，2013）。体側には黒色の縦帯がある。産卵期の雄は色鮮やかな黄金色になる。雌は、雄より大型になる（前畑，2001）。



港区、2018 年 11 月 25 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：非公表。

県内：尾張地方（犬山市、瀬戸市、長久手町、津島市など）、三河地方（豊田市、刈谷市、岡崎市、新城市など）。

国内：本州中部以西から九州北西部。

世界：日本固有種。

生息地保護のため
分布図は示さない。

生息地の環境／生態的特性

平野部の浅い池沼、溜池、小川、水路などに生息し、群れを作り表層付近を遊泳する。産卵期は、5 月中旬から 7 月下旬で地域により若干差がある。付着藻類から水生小動物など幅広く食う雑食性である（前畑，2001）。

現在の生息状況／減少の要因

個体数は比較的多いが、きわめて限られた地域で確認されるにすぎない。都市化にともなう河川整備、圃場整備による水田用水路の劣化や消失、水質汚濁を含む生息環境の悪化が進行したことが、減少の主たる要因である。加えて、オオクチバスなどの肉食性外来生物による捕食の影響も大きいと推測される。

保全上の留意点

水質改善、コンクリート護岸の回避が必要である。ワンドや浅場、抽水植物帯の確保、肉食性外来生物の捕食圧の低減も効果的である。また、施設内での系統保存を行うことが望ましい。

特記事項

黄金色に輝く雄の婚姻色が観賞魚として価値があり、かつ希少魚であるため、乱獲の対象となる。また、増殖目的で他地域の個体を放す、「善意の放流」が行われることもあり、遺伝子汚染が生じる危険性がある。行政、専門家、地域住民など多様な主体が連携して、本種と生息環境を保全することが緊急の課題である。豊田市や西尾市では、天然記念物に指定されている。

引用文献

細谷和海，2013．コイ科．中坊徹次編，日本産魚類検索　第三版　全種の同定，pp.308-327,1813-1819．東海大学出版会，神奈川．

前畑政善，2001．カワバタモロコ．川那部浩哉・水野信彦・細谷和海編，日本の淡水魚，pp.256-257．山と渓谷社，東京．

関連文献

Watanabe, K. and S. Mori，2008．Comparison of genetic population structure between two cyprinids, *Hemigrammocypris rasborella* and *Pseudorasbora pumila* subsp., in the Ise Bay basin, central Honshu, Japan．Ichthyological Research，55:309-320.

（浅香智也）

魚類　＜コイ目ドジョウ科＞

キタドジョウ　*Misgurnus* sp.　（Clade A）

評価理由

近年ドジョウとは別種とされた種であり、市内では１地点しか生息が確認されていない。生息地面積の減少や環境悪化、狭義のドジョウとの交雑が進んでおり、絶滅寸前の状態にある。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	情報不足

形態

全体的な形態はドジョウと同様だが、尾鰭基部における尾柄高が小さく、尾鰭以外の各鰭がドジョウより小さいため、全体的に細長く見える。また、胸鰭分枝軟条数と総脊椎骨数の最頻値がドジョウより多い。成熟したキタドジョウの雄の胸鰭骨質板はドジョウに比べて未発達で、背鰭後部の体側にのみ瘤状隆起を持つ。

分布の概要

市内：庄内川水系の湧水湿地。

県内：三河地方に分布した記録がある（現状不明）。

国内：北海道から福井県（北海道は人為分布）。

世界：日本、ロシア（サハリン）。

生息地の環境／生態的特性

伏流水が湧出し、抽水植物帯が広く発達する湿地に生息する。福井県における調査研究においても、良質な環境を有する湿地帯とその周辺に分布が限定されている。

現在の生息状況／減少の要因

市内にキタドジョウが分布することは、2023 年に明らかになった。当初は人為分布が疑われたが、その後の研究で在来系統であることが明らかになった。しかし、唯一の生息地周辺は開発が進行しており、ドジョウとの交雑も進んでいる。

保全上の留意点

生息地となる湿地の規模を維持する必要がある。飼育下での系統保存も必要と考えられる。なお、本種は分類学的な混乱があり、他の和名・学名が用いられることもある。



名古屋市内、2023 年 10 月 22 日、向井貴彦　撮影

生息地保護のため
分布図は示さない。

関連文献

木村正雄・尾庭きよ子，1981．各地のドジョウ集団の蛋白質多型．動物血液型研究情報，9: 32–36.

向井貴彦・浅香智也・鳥居亮一・宇地原永吉，2023．名古屋市におけるドジョウの mtDNA の系統と分布．なごやの生物多様性，10: 81–86.

中島　淳・内山りゅう，2017．日本のドジョウ，224pp. 山と渓谷社，東京.

Okada, R., T. Inui, Y. Iguchi, T. Kitagawa, K. Takata and T. Kitagawa, 2017. Molecular and morphological analyses revealed a cryptic species of dojo loach *Misgurnus anguillicaudatus* (Cypriniformes: Cobitidae) in Japan. J. Fish Biol., 91: 989–996.

Okada, R., K. Morita, T. Toyama, Y. Yashima, H. Onozato, K. Takata and T. Kitagawa, 2024. Reconstruction of the native distribution range of a Japanese cryptic dojo loach species (*Misgurnus* sp. Type I sensu Okada et al. 2017): has the Type I loach dispersed beyond the Blakiston's Line? Ichthyol. Res., 71: 337-352.

八嶋勇気・岡田龍也・北川忠生，2021．福井県三方湖に流入する水路から得られた西限記録となるドジョウ隠蔽種 *Misgurnus* sp. Type I sensu Okada et al., 2017．Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 8: 1–4.

Yashima, Y., R. Okada and T. Kitagawa, 2023. Differences in sexual morphological dimorphisms between two loach species of the genus *Misgurnus* (Cypriniformes: Cobitidae) in the River Shono system, Fukui Prefecture, Japan. J. Vertebr. Biol., 72: 1–15.

八嶋勇気・浅香智也・鳥居亮一・宇地原永吉・岡田龍也・向井貴彦・北川忠生，2025．愛知県名古屋市のドジョウ属集団から検出された Type I の mtDNA の在来性および遺伝的集団構成．魚類学雑誌，72: 19-30.

（向井貴彦）

魚類　＜コイ目ドジョウ科＞

トウカイコガタスジシマドジョウ　*Cobitis minamorii tokaiensis* Nakajima, 2012

評価理由

過去に知られていた分布域が著しく縮小しており、市内に現存する個体数もきわめて少なく、絶滅の危険性がきわめて高いと推測される。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

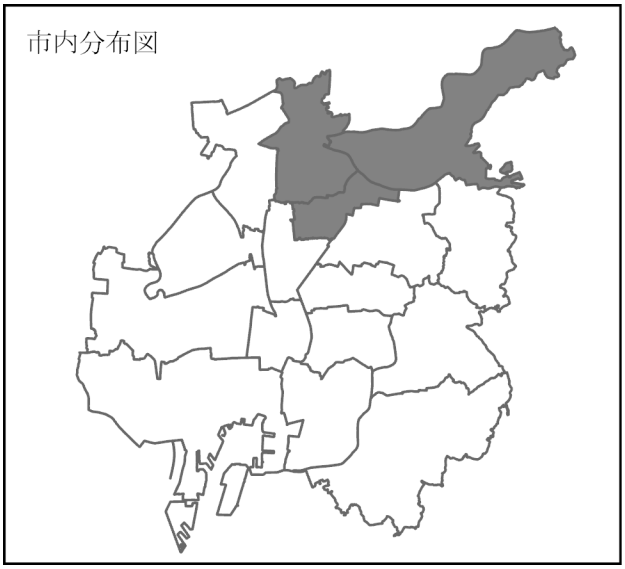
体長 12cm。体は細長く、やや側扁した円筒形。スジシマドジョウ属の中では小型で、最大体長は雄で約 10cm、雌で 12cm、一般に 7cm 以下の個体が多い。他のシマドジョウ属魚類とは、体が小さく、雄の第二次特徴である胸鰭基部の骨質盤が丸く、体側に縦帯があることで識別できる。



東区、2024 年 8 月 12 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：庄内川水系の 1 支流など。
県内：矢作川、豊川を含む県内の主要な水系およびこれらの支流。
国内：静岡県太田川から三重県宮川まで。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

流れの緩やかな砂泥底の農業水路、河川本流等を主な生息場所としている。産卵期は 5～7 月で、一般に、雌雄とも 1 年で成熟するが、雌では 2 年目に成熟するものもいる。

現在の生息状況／減少の要因

かつての生息地の多くは、圃場整備をはじめとする農業用水路のコンクリート化、農業形態の変化にともなう乾田化や水路の水涸れにより消滅している。最近、生物に優しい農法を取り入れる試みがなされているが、生息場所の復元は難しい。

保全上の留意点

本種の存続には、河床に一定量の土砂（砂泥）が継続して供給され、三面コンクリート化されていないことが不可欠である。水田と農業用水路を往復できる構造を復元することも重要である。

特記事項

スジシマドジョウ小型種東海型とされてきたが、2012 年、トウカイコガタスジシマドジョウの標準和名が提唱され、使われている。他のスジシマドジョウ類についても全国的に分布域が縮小している。

関連文献

細谷和海，1997．日本の希少淡水魚．長田芳和・細谷和海（編），日本の希少淡水魚の現状と系統保存，pp.3-21．緑書房，東京．
環境省自然環境局野生生物課，2003．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物　–レッドデータブック–　4　汽水・淡水魚類，pp.102-103．財団法人自然環境研究センター，東京．
Nakajima, J.，2012．Taxonomic study of the *Cobitis striata* complex (Cypriniformes, Cobitidae) in Japan. Zootaxa,　3586: 103-130.
齊藤憲治，1993．スジシマドジョウ小型種と大型種の急減．魚類学雑誌，40: 394-397.
齊藤憲治，2001．スジシマドジョウ亜群．川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），日本の淡水魚，pp.386-391．山と渓谷社，東京．

（谷口義則）

魚類　＜コイ目フクドジョウ科＞

ホトケドジョウ　*Lefua echigonia* Jordan et Richardson, 1907

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IB 類
全　　国 2020	絶滅危惧 IB 類

評価理由

県内各地において、湧水の枯渇、圃場整備、過度の農薬散布、宅地化により激減している。市内では水田の急減のほかに、緑地の激減による湧水箇所数および湧水量の減少に伴う湿地の喪失により本種の絶滅リスクは著しく高まっている。

形態

体長 8cm。体は細長く円筒形で、背鰭は腹鰭と対在するか後方にある。吻は短く、目は大きい。ひげの数は 4 対、体と鰭は茶褐色で暗色斑点が散在する。同属のナガレホトケドジョウやトウカイナガレホトケドジョウとは、体型や斑紋のパターン、生息場所の違いにより識別できる。



守山区、2024 年 7 月 14 日、鳥居亮一　撮影

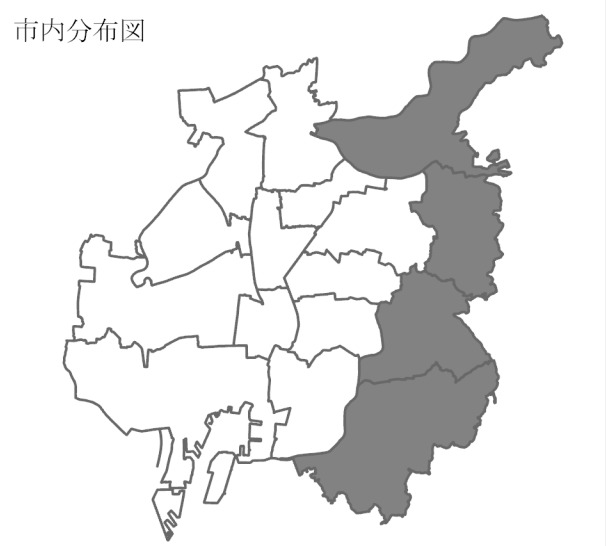
分布の概要

市内：庄内川水系の小河川、周辺の小水路、緑地内の湿原、水田周りの水路。

県内：矢作川、豊川を含む県内の主要な河川のほか、丘陵地域にある水田周辺水路、湿原、湧水起源のため池。

国内：青森県と山口県西部を除く本州、四国東部。

世界：日本、中国、朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

湧水を水源とする細流、湿原や水田周りの小溝に生息する。準冷水性の底生魚で、水温が 27°C を越えると弱る。特に、やや開けた流れの緩やかな場所の砂泥底に多い。一般に、成長は 1 年で 3～4cm、2 年で 4～7cm に達する。産卵期は 3～7 月で、水草に産卵する。仔魚は孵化後すぐに着底せず、全長約 20mm になるまで底近くを浮遊している。底生小動物を中心とする雑食性。多くが 1 年で成熟するが、個体によっては 2 年目に成熟するものもいる。

現在の生息状況／減少の要因

地方分化が進んでいるが、地方個体群別の個体数の動向は不明である。生息地の減少から判断して個体数も減少していることは間違いない。かつての生息地の多くは宅地化や圃場整備により消失している。

保全上の留意点

湧水の消失や、水田周りの小溝のU字溝化に伴い、全国的に減少している。1970 年代に農薬生産量の増大と共に本種が減少していることから、農薬の過度散布が要因であると推測される。本種の生息地復元を目的とするビオトープの造成がなされてきた場所もある。

特記事項

遺伝的にも形態的にも区別されるいくつかの地方個体群に細分され、それぞれが亜種に相当するものと思われる。本種を指標とする水田の生物多様性保全も可能である。

関連文献

藤田　光・大川賢治，1975．日本産ホトケドジョウの地理的変異について（予報）．魚類学雑誌，22: 179-182.
細谷和海，2013．ドジョウ科．日本産魚類検索　全種の同定　第三版，pp.328-334．東海大学出版会，神奈川.
澤田幸雄，1987．ホトケドジョウ．川那部浩哉・水野信彦編，山渓カラー名鑑　日本の淡水魚，p.400．山と渓谷社，東京.
勝呂尚之，2002．ホトケドジョウの初期飼育条件．SUISANZOUSHOKU，50(1):55-62.

（谷口義則）

魚類　＜ナマズ目アカザ科＞

アカザ　*Liobagrus reini* Hilgendorf, 1878

評価理由

本種は清流に生息し、河川の高い自然度の指標生物の 1 種である。愛知県内の河川における生息数も多くなく、市内においては局所的に分布するのみであり、絶滅に近いと推定される。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

形態

体長 10cm。体は赤褐色で腹部はやや白身を帯び、細長い。頭部は縦扁し、体の後部は側偏する。鱗は無く、側線は不完全。胸鰭と背鰭の第 1 鰭条は肥大して硬く、鋭い棘になっている。尾鰭の後縁はやや丸い。脂鰭は尾鰭に連続する。口ひげは前鼻孔部 1 対、上顎に 1 対、下顎に 2 対、計 4 対ある。



扶桑町、2024 年 5 月 3 日、下山淳二　撮影

分布の概要

市内：庄内川水系。
県内：矢作川、豊川を含む県内の主要な水系。
国内：宮城県、秋田県以南の本州、四国、九州。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

河川の中・上流部の比較的水のきれいな流水域で、礫の多い河川に生息する。従来は自然環境が比較的豊かだった九州、四国、中国地方でも河川中流域から姿を消しつつあり、分布域の減少や分断化は全国に及んでいる。本種は比較的小さく、夜行性で水底を滑るように泳ぐ。昼間は比較的大きい浮き石の下に潜む。水生昆虫を捕食する。産卵期は 5〜6 月で、石の下に生みつけられた卵塊を雄が保護する。

現在の生息状況／減少の要因

過去に調査が行われた地域では、河川の中流域の生息地が消滅している。本来、群れをなすような種ではなく、個体数はもともと多くないが、近年いっそう減少したと指摘されている。

保全上の留意点

河川の中・上流域の 30cm 以浅の平瀬や早瀬でよく見られる。隠れ場所や産卵場所として適度な大きさの礫を必要とする。しかし、河川改修（流路の直線化、床固めなど）や砂礫の採取などによって環境が破壊されてきたために、生息場所の減少は深刻である。

特記事項

河床掘削で隠れ場所や産卵場所が消失してしまう。たとえば、河川工事で土砂が堆積すると礫間の空隙のみならず、餌生物も失われてしまう。

関連文献

広島県（監），1995．広島県の自然と野生生物，204pp．中国新聞社，広島．
星野和夫・松尾敏生・細谷和海，1996．九州におけるアカザの分布．魚類学雑誌，43(2): 105-108．
森　誠一・名越　誠，1987．アカザ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚．p.410．山と渓谷社，東京．
Watanabe, K.，1994．A note on the reproductive ecology of the torrent catfish，*Liobagrus reini* (Siluriformes: Amblycipitidae)．Japanese Journal of Ichthyology，41: 219-221.

（谷口義則）

魚類　＜スズキ目ドンコ科＞

ドンコ　*Odontobutis obscura* (Temminck et Schlegel, 1845)

評価理由

市内における本種の生息域は依然限られており、現存する個体群も決して大きくないと推測され、今後実効性のある保全対策を実施しない限り、本種の絶滅リスクは小さくないと考えられる。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	－

形態

体長 20cm。ハゼ類の中では大型で、頭部が大きく横幅があり、胴が短い。口は大きく、唇が厚い。うちわのような形の胸鰭が大きく発達し、腹鰭は左右に分離し、吸盤状にはなっていない。褐色の体色で、背鰭と尾鰭の基底に黒い斑紋がある。全身に大柄な暗斑がある。繁殖期の雄は全身が黒っぽくなる。



犬山市、2024 年 5 月 24 日、下山淳二　撮影

分布の概要

市内：庄内川水系。

県内：矢作川、豊川を含む県内の主要な水系で確認されているが、個体数は少ない。

国内：愛知県・新潟県以西の本州、四国、九州。

世界：日本、韓国。



生息地の環境／生態的特性

砂礫底のある中小規模河川の緩流部を好む。湖沼、水田周辺の用排水路にも生息する。純淡水魚であり、海との行き来はしない。大きめの礫や水草等を隠れ場所とし、強い縄張りを持つ。主に夜行性で、魚類、水生昆虫の他に、甲殻類等を捕食する。4〜7 月に産卵する。雄が石の下に巣を作り、誘引された雌は巣の天井に卵を産み、立ち去る。雄はその後も卵を孵化するまで保護する。孵化後の仔魚は他のハゼ類と異なり、浮遊生活期を経ずに、即座に底生生活に入る。

現在の生息状況／減少の要因

愛知県では 1960 年代には広範囲に分布する普通種だったが、現在ではほとんど姿を見なくなってしまった。河川工事により礫河床が失われ、産卵環境が損なわれてしまったことが本種減少の最大要因であろう。

保全上の留意点

市内における本種の生息水域は非常に限られているものと推測される。まずは、これらの生息場所をこれ以上損なわないこと、産卵に必要な適度な大きさの礫を主体とする河床を復元することが重要である。

特記事項

ドンコに限らず、ネット販売で入手した個体を意図的・非意図的に野外に放逐する行為が横行しているものと推測される。現に関東地方にも本種の分布が拡大しており、問題視されている。

関連文献

岩田明久，2001．ドンコ．川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚　改訂版，pp.558-560．山と渓谷社，東京．

向井貴彦・西田　睦，2003．日本産ドンコにおけるミトコンドリア DNA の系統と関東地方への人為移植の分子的証拠．魚類学雑誌，50(1): 71-76.

（谷口義則）

魚類　＜スズキ目ハゼ科＞

トウカイヨシノボリ　*Rhinogobius telma* Suzuki, Kimura and Shibukawa, 2019

評価理由

市内における生息地は非常に限られており、いずれの個体群も、開発による生息地の消滅、外来魚による捕食、近縁種の侵入による交雑といったリスクにさらされている。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	準絶滅危惧

形態

体長 4cm。小型のハゼ科魚類で、前鰓蓋管が無いことで他の日本産ヨシノボリ属魚類と区別される。体色は褐色でやや不定型な斑紋があり、雄の喉部は橙色になる。成熟した雄の第 1 背鰭は伸張しない（鈴木・坂本，2005）。



名古屋市内、2012 年 11 月 15 日、古橋 芽　撮影

分布の概要

市内：非公表。

県内：犬山市、長久手市、日進市、岡崎市、豊田市、刈谷市、西尾市、豊川市。

国内：伊勢湾周辺地域のみ。

世界：日本固有種。

生息地の環境／生態的特性

主に丘陵地に作られたため池に生息する。繁殖期は 4～6 月頃と推定される。仔稚魚は流れの無い場所で浮遊生活を送り、海に降ることはない（Tsunagawa et al., 2010）。

現在の生息状況／減少の要因

本種は濃尾平野から岡崎平野を中心に分布し、豊川市のため池を分布東限としていたが、豊川市の生息地は 2000 年代に埋め立てられて消失した。また、オオクチバスの生息するため池では激減もしくは絶滅するため、オオクチバスの放流によって多くの生息地が失われたと考えられる。形態と mtDNA の比較から、侵入した近縁種（他地域産のトウヨシノボリ、シマヒレヨシノボリ、ビワヨシノボリ）と雑種化して絶滅したと考えられる地点が犬山市、名古屋市、豊田市に見られることから、アユやコイ、ヘラブナの放流に混じって侵入したヨシノボリ類との交雑も減少要因になっている。名古屋市内にも生息地があるために、都市化しても生き残ると誤解されている可能性がある。しかし、いずれの生息地も孤立しており、周辺は宅地開発が進み、オオクチバスや近畿地方から侵入したヨシノボリ類の生息地が周辺に広がるため、現在残された生息地は危機的状況にさらされている。

生息地保護のため
分布図は示さない。

保全上の留意点

溜池の埋立てによる生息地全体の改変は避ける。その上で、捕食性外来魚（オオクチバス・ブルーギル）、交雑可能な近縁種（トウヨシノボリ等）の侵入を避けるため、そうした外来種の混入する可能性のあるアユ、コイ、フナなどの放流を防止する必要がある。

特記事項

東海地方の里山環境を特徴づける淡水魚である。

引用文献

鈴木寿之・坂本勝一，2005．岐阜県と愛知県で採集されたトウカイヨシノボリ（新称）．日本生物地理学会会報，60: 13-20.

Tsunagawa, T., T. Suzuki and T. Arai，2010．Otolith Sr: Ca ratios of freshwater goby *Rhinogobius* sp. TO indicating absence of sea migrating traits. Ichthyological Research，57: 319-322.

関連文献

向井貴彦・平嶋健太郎・古橋　芽・古田莉奈・淀　太我・中西尚文，2012．三重県鈴鹿市南部のため池群におけるヨシノボリ類の分布と種間交雑．日本生物地理学会会報，67: 15-24.

鈴木寿之・向井貴彦，2010．シマヒレヨシノボリとトウカイヨシノボリ：池沼性ヨシノボリ類の特徴と生息状況．魚類学雑誌，57: 176-179.

（向井貴彦）

魚類　＜ウナギ目ウナギ科＞

ニホンウナギ　*Anguilla japonica* Temminck et Schlegel, 1847

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 IB 類
全　　国 2020	絶滅危惧 IB 類

評価理由

市内の分布地点は少なくないが、個体数の減少が著しいと考えられる。降河回遊魚である本種の移動の妨げとなる河川横断工作物が多数の河川に構築され、幼魚に必要な下流域の砂地環境およびコンクリート護岸化による成魚の隠れ場が減少している。

形態

体長 1m。成魚の背中側は黒く、腹側は白や黄色。レプトケファルス幼生（海を浮遊移動しやすい扁平な葉状形）期を経て変態し、円筒形の稚魚シラスウナギ（無色透明、体長 5cm 程度）となる。産卵のために降河する成魚個体は、背側と鰭が黒化し、腹面は銀白色を呈する。県内には移入種であるヨーロッパウナギも生息するが、外見から両種を識別することは困難とされている。



西区、2016 年 5 月 28 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：庄内川水系および天白川水系など。
県内：県内全域。矢作川水系に多い。
国内：北海道から琉球列島にいたる全国各地。
世界：日本、朝鮮半島、中国、ベトナム、台湾、フィリピン。



生息地の環境／生態的特性

成魚は河川中・下流、河口のほかため池、海（内湾）にも生息する。降海した成魚はマリアナ諸島沖で産卵、2～3 日で孵化し、幼生は河口に到達後、遡河して小動物を捕食して成長し、5 年から 10 数年ほどで成熟する。

現在の生息状況／減少の要因

市内の河川における個体数密度は市外の河川の平均値のおよそ半分程度である。仔魚は海からなんとか遡上するものの、河川工事によって餌となる小魚やエビ類、隠れ場となる土砂や石の隙間などが減っている。幼魚は下流部の砂地で、成魚は河川内構造物の隙間や水際植物の影に潜むが、これらの環境が著しく損なわれている。

保全上の留意点

食物ピラミッドの頂点に立つ捕食者ウナギが生息できる川を再生していくことができれば、他の多くの淡水生物にとっても居心地の良い川が復元されることにつながる。

特記事項

幼魚は下流部の砂地に、成魚は河川内構造物の隙間や水際植物の陰に潜んでいる。

関連文献

広正　義，1975．魚類．庄内川の水生生物，pp.125-139．建設省庄内川工事事務所，愛知．
多部田修，2002．ウナギ．川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚（第 3 版），pp.47-49．山と渓谷社，東京．
荒尾一樹，2008．庄内川で採集された魚類．豊橋市自然史博物館研報，(18): 25-27.

（谷口義則）

魚類　＜コイ目コイ科＞

カワムツ　*Candidia temminckii* (Temminck et Schlegel, 1846)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

県内全域でみれば普通種であるが、本来比較的水のきれいな自然度の高い河川に生息する。かつては市内の主たる河川の上流部に豊富に生息していたと推察されるが、現在では確認される生息地点、生息数ともにきわめて限られている。

形態

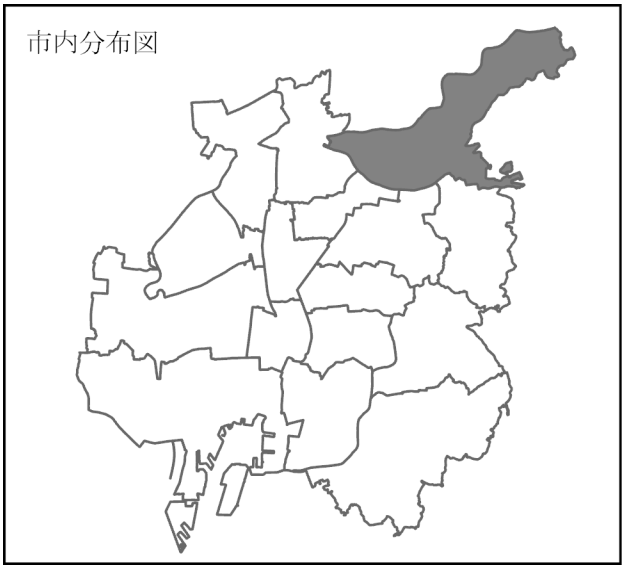
体長 20cm。主鰭条数が臀鰭 10 条、側線鱗数 43～51 枚、側線上部鱗数 10～11 枚。体側中央に暗藍色の幅広い縦帯があり、腹部は白っぽい。臀鰭が大きく特に雄は明瞭な婚姻色を現し、頭部の下面や腹面が朱色や暗赤色となり、胸鰭・腹鰭の前縁も黄色～オレンジ色を現す。雌雄共に繁殖期に頭部、体表、臀鰭などに追星を現すが、近縁なヌマムツと異なり、鰓蓋には出現しない。



守山区、2024 年 7 月 14 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：庄内川支流。
県内：五条川、矢作川水系、豊川水系、他。
国内：東海地方以西の本州瀬戸内海沿岸、九州北部。ただし、関東、東北地方にも侵入。
世界：日本、朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

河川上流から中流などに生息する。流れの緩やかな淵に多く生息している。オイカワよりも上流部に生息する。河床に大きい礫が多く、河畔林によるうっ閉度が高い場所を好む。雑食性で、水草、付着藻類、水生・陸生昆虫類を利用する。繁殖期に雄間に順位関係が現れ、雌をめぐる競争がある（Katano，1994）。産卵期は 5 月中旬～8 月下旬頃で砂礫を好む。野生個体の体長頻度分布から寿命は 3 年程度であると考えられる。

現在の生息状況／減少の要因

本来、河川上流部で夏季の水温が比較的低く保たれ、水質の良い場所に生息するため、都市化によるこれらの環境悪化が個体数減少の原因であると考えられる。河畔林から供給される餌となる陸生動物の減少も主たる要因である。産卵に必要な河床材料となる土砂の減少も拍車をかけている。

保全上の留意点

不用意な河川改修を慎むこと。河畔林の修復、復元により、隠れ場所、餌としての陸生動物を確保すること。夏季の水温上昇を抑制することも重要である。

特記事項

本種は雑魚の代名詞であり、どこにでも見られた魚がいつの間にか激減していたことを示す好例であろう。

引用文献

Katano, O.　1994.　Aggressive interactions between the dark chub, *Zacco temmincki*, and the pale chub, Z. platypus, in relation to their feeding behaviour.　Japanese Journal of Ichthyology，40: 441-449.

関連文献

片野　修，2002．カワムツ．山渓カラー名鑑　日本の淡水魚　第三版，pp.239-243．山と渓谷社，東京．
細谷和海，2013．コイ科．日本産魚類検索　第三版　全種の同定，p.318．東海大学出版会，神奈川．
Hosoya, K., H. Ashiwa, M. Watanabe, K. Mizuguchi and T. Okazaki，2003.　*Zacco sieboldii*, a species distinct from *Zacco temminckii* (Cyprinidae).　Ichthyological Research，50: 1-8.

（谷口義則）

魚類　＜コイ目ドジョウ科＞

ニシシマドジョウ　*Cobitis* sp. BIWAE type B

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全　　国 2020	－

評価理由

県内には矢作川水系をはじめ、本種の生息する河川は多い。しかし、市内では、河川の直線化、コンクリート護岸化等による緩流部の喪失、砂礫底の減少、移動を妨げる落差工の構築、産卵適地となる細流の消失により生息数が著しく減少している。

形態

体長 15cm。口ひげは 6 本。体側の斑紋は点列のものが多いが、直線状の斑紋をもつ個体もいる。雄の二次性徴として胸鰭基部の骨質板が細長いくちばし状になり、この点でスジシマドジョウ類との識別が可能である。尾鰭基部の斑紋なども区別点となる。また、雄の胸鰭は雌よりも長い。

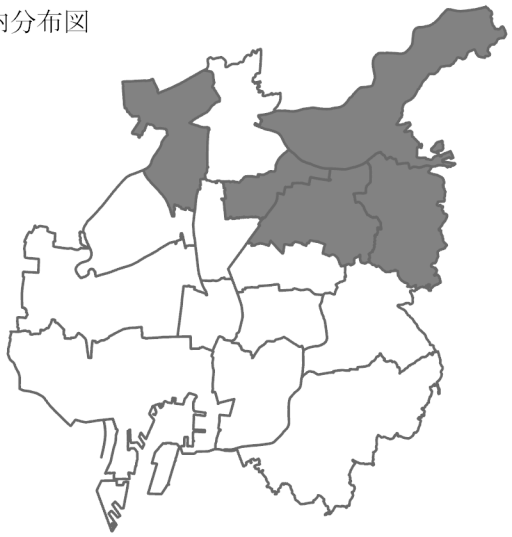


幸田町、2024 年 8 月 12 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：庄内川水系。
県内：矢作川、豊川を含む県内の主要な水系およびこれらの支流。
国内：東海、北陸、山陰地方。
世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

河川の中・下流部の砂質底に普通に見ることができるが、水の澄んだ池等にも見られる。河川では、特に平瀬から淵の砂底を好む。砂によく潜り、砂中で越冬する。砂を吸い込み、含まれる底生藻類やその半分解物、小型の水生昆虫等をこし取るように食べる。仔稚魚は浅い砂泥底の場所にすみ、原生動物や藻類などを食べる。産卵期は 4～6 月で、砂礫底に生える水生植物の根や茎に 1 個ずつ産着される。卵の直径は約 2mm で、卵黄は白色、卵膜は薄く粘着性がある。受精後 2～3 日でふ化する。ふ化後 2 日で全長 5mm 程度となり、外鰓が長く伸びる。体長 6cm 以上で成熟する。

現在の生息状況／減少の要因

河川の直線化による緩流部の喪失による砂底あるいは砂礫底の減少、水質悪化、本流から産卵のために遡上できる細流の消失等により生息適地が奪われ減少している。

保全上の留意点

本種の生息に必要な砂礫の河床を保全する必要がある。河川工事においては、事後に砂礫が河床に滞留するよう緩流部を設けること、産卵時期の上流への移動を可能にするよう落差工等を無くすことが重要である。

特記事項

2012 年、シマドジョウ類は細分され、中部地方の種にはニシシマドジョウの和名が提唱され、使われている。

関連文献

君塚芳輝，1989．シマドジョウ．川那部浩哉・水野信彦（編），日本の淡水魚，pp.392-393，山と渓谷社，東京．
北川えみ・星野和夫・岡崎登志夫・北川忠生，2004．大分県大分川水系から得られたシマドジョウとその生物地理学的起源．魚類学雑誌，51: 117-122.
北川えみ・中島　淳・星野和夫・北川忠生，2009．九州北東部におけるシマドジョウ属の分布パターンとその成立過程に関する考察．魚類学雑誌，56: 7-19.

（谷口義則）

魚類　＜スズキ目カジカ科＞

カマキリ（アユカケ）　*Rheopresbe kazika* (Jordan et Starks, 1904)

評価理由

海と川を行き来する降河回遊魚である本種は、県下全域でも減少しているが、市内の河川においては、特に横断構造物（落差工、堰堤等）の影響により、仮に魚道が付いていても遡上が困難であり、個体数が著しく減少していると推定される。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

体長 20cm。灰褐色で黒い帯が 4 本、背鰭の後方と尾鰭近くにある。鰓蓋の上方に 4 本の棘があり、アユなどの魚を引っかけて捕らえるという伝説がアユカケの名の由来である。

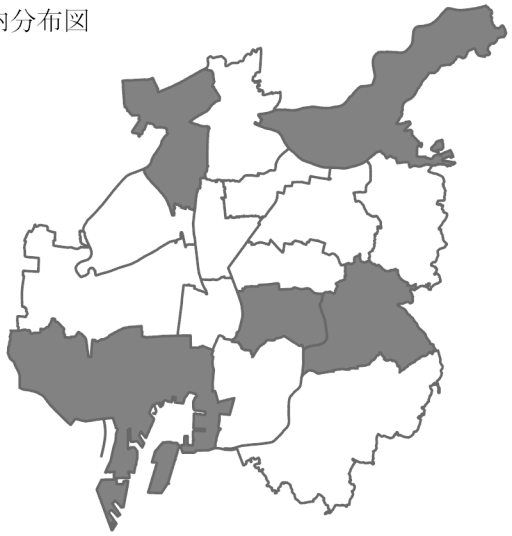


扶桑町、2023 年 11 月 4 日、下山淳二　撮影

分布の概要

市内：庄内川、天白川水系。
県内：矢作川水系、豊川水系を含む県内の主要な水系。
国内：秋田県・茨城県以南の本州、四国、九州。
世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

親魚は秋に川を降り、河口域や沿岸域で産卵する。ふ化した稚魚は海で成長し、初夏に河川を遡上する。稚魚は水生昆虫を主体に食べるが、成長すると魚食性が強まる。夜行性で、昼間は礫の間隙などに潜み、夜になると浅い瀬や淵に出てくる。

現在の生息状況／減少の要因

本種は河川の遡上能力が低いことから、落差工（堰）や階段式魚道の落差が非常に小さくてもこれを越えて上流に行くことが困難である。

保全上の留意点

市内の主要な河川には横断構造物（落差工）が多数あることから、生息域が縮小しているものと推定され、魚道の設置等の早急な整備が望まれる。

特記事項

福井県、熊本県では天然記念物に指定されている。

関連文献

後藤　晃，1987．アユカケ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑．日本の淡水魚，p.655．山と渓谷社，東京．
高木基裕・谷口順彦，1992．高知県におけるカマキリ，*Cottus kazika* の分布．水産増殖，40(3): 329-333.

（谷口義則）

魚類　＜スズキ目カジカ科＞

ウツセミカジカ　*Cottus reinii* Hilgendorf, 1879

評価理由

生息条件が悪化しており、全国的にもきわめて危険な状態にあり、絶滅が危惧されている。市内では河川の直線化およびコンクリート護岸化に起因する土砂堆積量の激減および隠れ場所の消失等により、生息個体数が著しく減少していると推定される。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

体長 15cm。体色は淡褐色から暗褐色まで様々で、体側に暗色斑紋が 4～5 個ある。カマキリなど他のカジカ科魚類と比較して、鰓蓋にある棘が 1 本、胸鰭の軟条数が 13～17 軟条、眼から前鰓蓋骨棘へ向かって 2 本の暗色帯があること、腹鰭には顕著な斑紋がないことなどが特徴である。本種は近縁種のカジカと混同されることが多いが、カジカに比べて尾柄部分が細長い。



岡崎市矢作川水系、2012 年 4 月 29 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

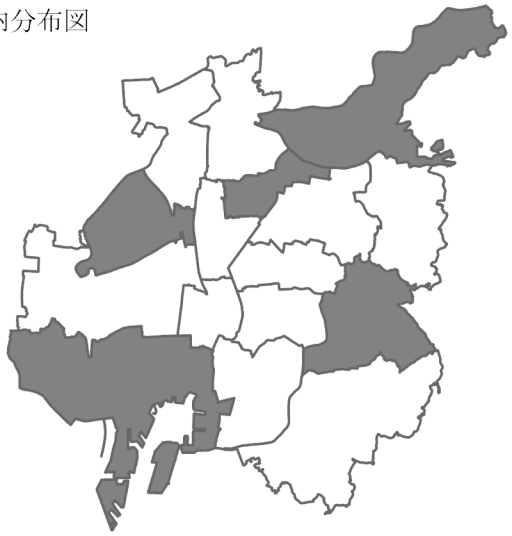
市内：庄内川水系、天白川水系など。

県内：矢作川、豊川を含む県内の主要な河川で広範囲だが少数が確認されている。

国内：北海道南部の日本海側、本州、四国および九州西部。

世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

本種は肉食性で、水生昆虫や魚類を主な餌とする。一般的に卵径 1.8～2.4mm、一腹卵数は 600～1500 個程度とされる。指標種とされることも多く、カジカ類を復元する活動が行われている地域もある。

現在の生息状況／減少の要因

ウツセミカジカは、河川工事に伴う人工構築物や堰堤の影響で上下移動に制約を受けている。本種は水質の悪化にも弱い。砂礫底を回復するための復元工事も必要である。今後、市内および県内における生息状況を明らかにする必要があるが、本種は形態による明確な分類が困難で、分子生物学的手法を取り入れる必要もある。

保全上の留意点

元々は市内の広範囲に分布していたものと推測される。下流域の堰堤による海からの遡上阻害を軽減し、生息水域の河床環境を復元する等を行う必要がある。産卵環境の復元も鍵となる。

関連文献

後藤　晃，1987．ウツセミカジカ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚，p.668．山と渓谷社，東京．
木村清志・岡田　誠・山下剛司他，1999．長良川河口域に出現する魚卵・仔稚魚．三重大学生物資源学部紀要，23: 37-62．

（谷口義則）

魚類　＜スズキ目ハゼ科＞

トビハゼ　*Periophthalmus modestus* Cantor, 1842

評価理由

名古屋市内における分布は局地的で、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事などの開発の影響を受け、生息地が大幅に減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長約 8cm。頭と体は円筒形で、後方はやや側扁する。眼は上方に突出し、両眼の間隔は狭い。第 1 背鰭は丸い。腹鰭は吸盤状で、後縁はくぼむ。胸鰭基部の筋肉は発達し、これを腕のように使って泥干潟上を這い回る。体側に小さな黒色点が散在する。



港区、2012 年 9 月 14 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：日光川・新川・庄内川河口、藤前干潟。
県内：伊勢湾、三河湾の河口干潟。
国内：千葉県から沖縄島。
世界：日本、朝鮮半島、中国、台湾。



生息地の環境／生態的特性

内湾の湾奥や河川の河口域の泥底が発達した干潟に生息する。日中の干出時に泥干潟上で活動し、索餌や求愛行動を行う。陸上では主に皮膚を用いて空気呼吸を行う。尾部を使って泥面や水面を飛び跳ねて移動する。潮が満ちてくると水から逃げるように岸際の石や杭、湿生植物などに這い上がって休息し、干潮を待つ。産卵期は 6～8 月。雄は泥中に産卵巣をつくり、求愛ジャンプで雌を呼ぶ。11～3 月の休止期には終日、泥底に掘った巣穴で過ごし、餌も食べない（岩田，2001）。名古屋市内でも泥質の河口干潟で採集されている（荒尾ほか，2007；荒尾，2019）。

現在の生息状況／減少の要因

市内における分布は局地的である。コンクリート護岸化に伴う岸辺の転石帯や植物帯の消失は生息場所・休息場所の減少の要因となっている。

保全上の留意点

名古屋港に流入する河川の河口域の泥干潟に広く分布していたと考えられるが、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事、河川改修による生息環境悪化に伴って生息地が減少した。生息場所となる泥干潟の保全、休息場所となる岸辺の転石帯やヨシなどの植物帯の保全が必要である。

引用文献

荒尾一樹，2019．名古屋市で採集された淡水魚類．なごやの生物多様性，6: 109-111.
荒尾一樹・山上将史・大仲知樹，2007．愛知県の河口域魚類．豊橋市自然史博研報，(17): 29-40.
岩田勝哉，2001．トビハゼ．川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚　改訂版，pp.642-643. 山と渓谷社，東京.

関連文献

春日井隆・中嶋清徳，2024．伊勢湾最湾奥に位置する名古屋港ガーデンふ頭で採集された魚類．なごやの生物多様性，11: 47-61.
鈴木寿之，2010．トビハゼ．環境省自然環境局野生生物課（編），改訂レッドリスト　付属説明資料　汽水・淡水魚類，p.53. 環境省自然環境局野生生物課，東京.
山川宇宙・内田大貴・津田吉晃，2022．千葉県房総半島東岸で採集された東限記録のトビハゼ．南紀生物，64（1）: 81-84.

（荒尾一樹）

魚類　＜スズキ目ハゼ科＞

マサゴハゼ　*Pseudogobius masago* (Tomiyama, 1936)

評価理由

名古屋市内における分布は局地的で、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事などの開発の影響を受け、生息地が大幅に減少している。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

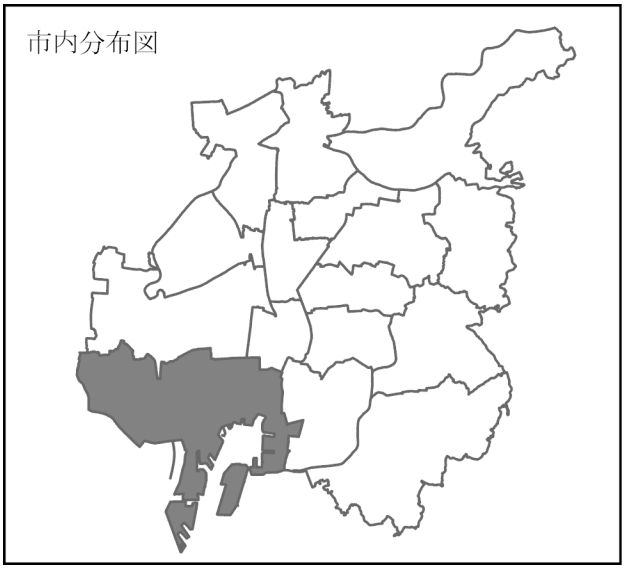
体長 3cm。体は細長く、体高は低い。吻端は丸く突出し、上唇をわずかに被う。尾鰭後縁は丸い。尾鰭基部にくさび形の黒色斑がある。



三重県津市、2004 年 12 月 11 日、荒尾一樹　撮影

分布の概要

市内：日光川、庄内川の河口干潟。
県内：伊勢湾、三河湾の河口干潟、前浜干潟。
国内：宮城県から沖縄島。
世界：日本、鮮半島、台湾。



生息地の環境／生態的特性

河口干潟や塩水湿地の軟泥底や砂泥底に生息する。市内でも泥質の河口干潟、それに連なる前浜干潟を流れる水路や浅い水たまりで採集されている（荒尾ほか，2007；荒尾，2019）。産卵期は九州西岸で 5～6 月（道津，2014）、三重県揖斐川で 6～8 月（伊藤・向井，2007）と考えられている。産卵はアナジャコなどの小型甲殻類の生息孔内で行うと示唆されている（伊藤・向井，2007）。7～9 月には成魚が生息する河口汽水域で着底した稚魚がみられる（道津，2014）。

現在の生息状況／減少の要因

市内における分布は局地的である。干潟の埋め立てや護岸工事、河川改修、土砂流入、水質汚染、底質汚濁などにより生息地が減少している。

保全上の留意点

干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事は直接的に生息環境を消滅させる原因となる。護岸工事や河川改修を行う際には、水質汚染、底質の有機汚染、土砂の流入による底質の変化などに留意する必要がある。また、汽水域の保全、小型甲殻類の保全も重要である。

引用文献

荒尾一樹，2019．名古屋市で採集された淡水魚類．なごやの生物多様性，6: 109-111.
荒尾一樹・山上将史・大仲知樹，2007．愛知県の河口域魚類．豊橋市自然史博研報，(17): 29-40.
道津喜衛，2014．マサゴハゼ．沖山宗雄編，日本産　稚魚図鑑　第二版，p.1301．東海大学出版会，秦野．
伊藤　亮・向井貴彦，2007．三重県揖斐川下流域におけるマサゴハゼの生活史．南紀生物，49(2): 103-107.

関連文献

鈴木寿之，2010．マサゴハゼ．環境省自然環境局野生生物課（編），改訂レッドリスト　付属説明資料　汽水・淡水魚類，p.48．環境省自然環境局野生生物課，東京．

（荒尾一樹）

魚類　＜スズキ目ハゼ科＞

エドハゼ　*Gymnogobius macrognathos* Bleeker, 1860

評価理由

市内における分布は局地的で、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事などの開発の影響により生息地が大幅に減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

体長 5cm。頭は縦扁、体後部は側扁する。上顎後端は眼の後縁を大きく越え、上顎より下顎がやや突出する。生時の頭と体は褐色で、腹部は白色。体側には下部を除き、数本の不明瞭な暗色斑がある。背鰭と尾鰭上部の鰭条に斑点がある。



西尾市、2012 年 1 月 20 日、荒尾一樹　撮影

分布の概要

市内：日光川河口から藤前干潟のみ。

県内：伊勢湾、三河湾の河口干潟、前浜干潟。

国内：北海道、宮城県から宮崎県にかけての太平洋、瀬戸内海、兵庫県から佐賀県にかけての日本海、有明海。

世界：日本、ロシア沿岸州、渤海、黄海。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

河口干潟や前浜干潟、塩水湿地に生息する。砂泥底に掘られたニホンスナモグリやアナジャコなどの小型甲殻類の生息孔内に生息する。名古屋市内でもアナジャコのものと思われる生息孔がみられる砂泥底で採集されている（荒尾ほか，2007）。産卵も小型甲殻類の生息孔内で行うと考えられている（鈴木，2003）。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋市内の分布は局地的である。生息地では釣り餌用にアナジャコなどの小型甲殻類が採集されている。ポンプを使った小型甲殻類の採集は生息孔をも破壊することになり、生息に与える悪影響は大きい。

保全上の留意点

干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事は直接的に生息環境を消滅する原因となる。本種は還元層が形成されていない砂泥底に生息するため（鈴木，2003）、底質の有機汚染、土砂の流入による底質の変化などに留意する必要がある。また、生息・産卵に必要な小型甲殻類の保全も重要である。

引用文献

荒尾一樹・山上将史・大仲知樹，2007．愛知県の河口域魚類．豊橋市自然史博研報，(17): 29-40.

鈴木寿之，2003．環境省自然保護局野生生物課（編），エドハゼ．改訂・絶滅のおそれのある野生生物　–レッドデータブック　– 4　汽水・淡水魚類，pp.136-137．自然環境研究センター，東京．

関連文献

邉見由美・乾　隆帝・後藤龍太郎・伊谷　行，2018．北海道厚岸郡におけるエドハゼ *Gymnogobius macrognathos* の記録およびアナジャコの巣穴利用．魚類学雑誌，65(2) : 199-203.

Stevenson, D. E., 2002. Systematics and distribution of fishes of the Asian goby genera *Chaenogobius* and *Gymnogobius* (Osteichthyes: Perciformes: Gobiidae), with the description of a new species. Species Diversity, 7: 251-312.

鈴木寿之・増田　修，1993．兵庫県で再発見されたキセルハゼと分布上興味あるハゼ科魚類 4 種．伊豆海洋公園通信，4(11): 2-6.

（荒尾一樹）

魚類　＜コイ目コイ科＞

ゼゼラ　*Biwia zezera* (Ishikawa, 1895)

評価理由

生息に適する砂および泥底の淀み、産卵基質となる水生植物根、仔稚魚の生育に必要な河原の一時的水域等の環境が激減しており、個体群が減少傾向にある。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

体長 10cm。細長く、前部がやや縦扁し後部が側扁する灰白色の体色の底生魚。体側には完全な側線を持ち、瞳と同大程度の円形の暗色斑が縦に並ぶ。口は小さく、吻端の下方に開き、吻は全体的に短く丸い。口ひげは無く、唇はなめらか。眼は高い位置にある。雄は紫黒色の婚姻色が全身に現れ、胸鰭前縁に追い星が出る。



西尾市矢作川水系、2009 年 4 月 12 日、荒尾一樹　撮影

分布の概要

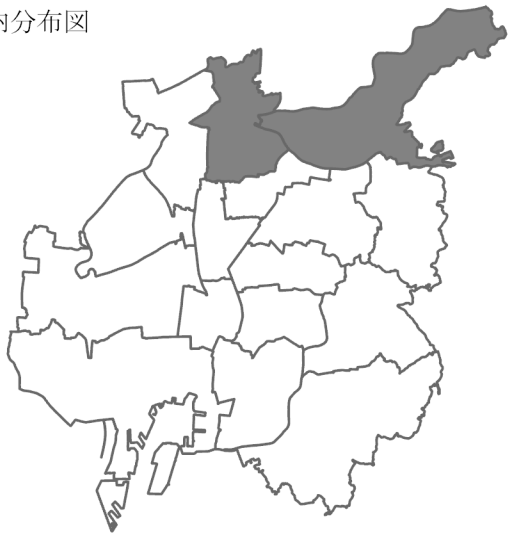
市内：庄内川水系。

県内：木曽川、庄内川、矢作川水系など。

国内：琵琶湖・淀川水系および濃尾平野の水系、山陽地方および九州北部に自然分布する。

北陸、関東地方および新潟県にも移殖による分布が見られる。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

河川下流域、平野部の湖沼の流れの少ない淀みにある砂および泥底を主に生活の場とする。口が小さい本種は、底生藻類、小型の底生動物プランクトン、沈殿した有機物などを摂食する。4～7 月に産卵し、川岸の水生植物根に粘着卵を固着させる。卵塊を雄親が保護する。雌雄ともに 1 歳で成熟し産卵後死ぬ。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川水系に生息するが、個体群サイズは小さく、環境悪化や破壊により減少傾向にあると見られる。

特記事項

琵琶湖水系からの個体の移入による遺伝的撹乱が生じている可能性がある。

関連文献

細谷和海，2002．ゼゼラ．山渓カラー名鑑　日本の淡水魚（第 3 版），p.317．山と渓谷社，東京．

堀川まりな・向井貴彦，2007．濃尾平野におけるゼゼラのミトコンドリア DNA 二型の分布．日本生物地理学会会報，62: 29-34.

（谷口義則）

魚類　＜コイ目ドジョウ科＞

ドジョウ　*Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor, 1842)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

水路のコンクリート護岸化を含む農業形態の変化、外来のドジョウ類による競争や置き換わりなどの影響などにより、大部分の個体群で個体数が大きく減少している。

形態

体長 20cm。雌は雄よりも大きくなる。体形は細長い円筒形。口には上顎に 3 対、下顎に 2 対の計 5 対 10 本のひげがある。体色は灰褐色で、背面に不明瞭な斑紋を持つ。腹面は淡色で斑紋がない。尾鰭と背鰭に褐色の小斑が散在し、尾鰭基部上角に小さな黒色斑がある。



名古屋市内、2024 年 5 月 26 日、鳥居亮一　撮影

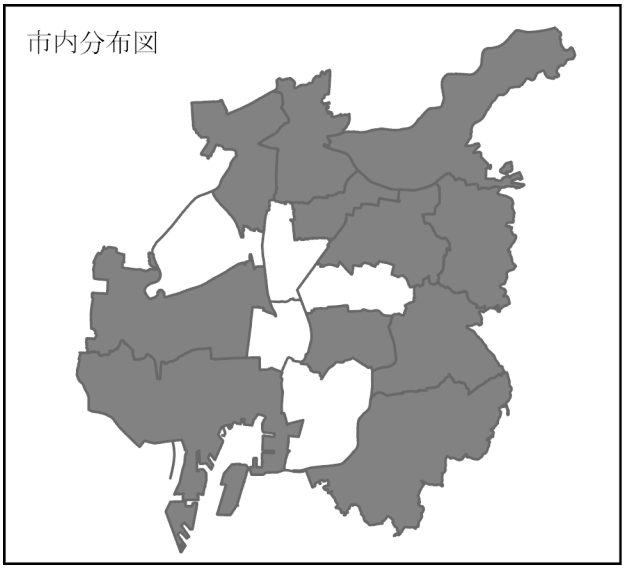
分布の概要

市内：天白川水系、庄内川水系など。

県内：県内各地。

国内：北海道から九州。北海道は移入の可能性が高い。

世界：日本、朝鮮半島、中国中南部からベトナム北部、台湾、海南島。ただし、自然分布域の詳細は不明。



生息地の環境／生態的特性

平野部を中心に、河川緩流域やワンド、水路、浅い池沼の泥底または砂泥底、水田、湿地に生息する。冬季には水が無い湿った土中で越冬する個体もある。雑食性で、主にユスリカ幼虫などの水生昆虫を捕食する。産卵期は 4～8 月。夜間、雄が雌に巻き付き、産卵・放精し、卵は泥上にばらまかれる。

現在の生息状況／減少の要因

市内の平野部に広く生息していたが、都市化、河川改修、圃場整備事業に伴う水路のコンクリート護岸化、乾田化や転作に伴う水路の干上がり、農薬散布により激減。落差工など構造物による繁殖に伴う移動の阻害も大きく影響していると考えられる。また、名古屋市内においては、カラドジョウや中国系統の外来ドジョウの分布が広がっており、競争や置き換わりなどの影響が深刻である。

保全上の留意点

水田地帯における水路の干上がり防止策ならびに河川と水路、水田の水域のつながりを復元させ、生息・繁殖に伴う移動を妨げない対策が必要である。また、釣具店やペットショップ等でカラドジョウや他地域産のドジョウ類が販売されており、それらの野外への放流防止が課題である。

関連文献

細谷和海，2013．ドジョウ科．日本産魚類検索　第三版　全種の同定，pp.328-334．東海大学出版会，神奈川．
向井貴彦・浅香智也・鳥居 亮一・宇地原永吉，2023．名古屋市におけるドジョウの mtDNA の系統と分布．なごやの生物多様性,10: 81-86.
中島　淳・内山りゅう，2017．ドジョウ．日本のドジョウ 形態・生態・文化と図鑑，pp.58-63．山と渓谷社．東京．
清水孝昭，2014．ドジョウ：資源利用と撹乱．シリーズ・日本の希少魚類の現状と課題．魚類学雑誌，61(1): 36-40.
谷口義則，2012．カラドジョウ．STOP!移入種 守ろう！あいちの生態系～愛知県移入種対策ハンドブック～，p.81．愛知県環境部自然環境課．

（鳥居亮一）

魚類　＜サケ目アユ科＞

アユ　*Plecoglossus altivelis altivelis* (Temminck et Schlegel, 1846)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

名古屋港周辺および伊勢湾の海洋環境の悪化、遡上河川の水質汚濁、河川横断構造物による稚魚の遡上阻害により、市内における本種の出現河川数は少なく、回復の糸口はつかめていない。

形態

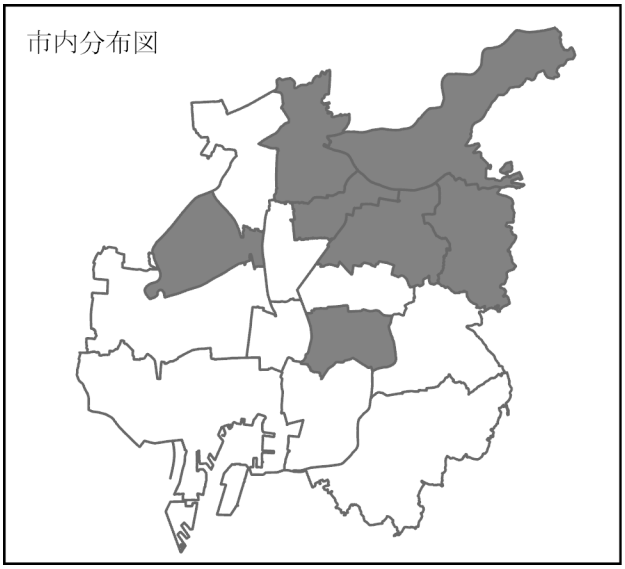
1 年で全長 20～30 cm に成長する。背鰭と尾鰭の間に脂鰭があり、先端が橙色になる。背側は青みがかったオリーブ色で腹側は銀白色、胸鰭後方に楕円形の黄色斑が出る。性成熟すると体色は黒ずみ、橙色の婚姻色が現れる。



西区、2017 年 5 月 20 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：庄内川水系、天白川水系、山崎川。
県内：矢作川水系、豊川水系、その他主要河川。
国内：北海道、本州、四国、九州。
世界：日本、朝鮮半島、ベトナム北部。



生息地の環境／生態的特性

1 年のうちに海と川を回遊する両側回遊の生活史を持つ。河川では本種特有の櫛状の歯を使って河床に付着した珪藻やラン藻をこそげ取るようにして摂餌する。餌場を占有するための縄張りを作る習性があり、縄張りを持つ個体はより大きく成長する。秋には川を下り、河川中下流の礫が浮石状になった瀬で産卵し、一生を終える。孵化した仔魚は卵黄を吸収しながら降海し、冬は沿岸海域の浅海地で動物プランクトンを食べて成長する。春には群れで河川を遡上する。

現在の生息状況／減少の要因

本種の河川遡上量は年変動が大きく、川での産卵量や流下仔魚量、減耗の激しい海域での生残量などが影響するとされている。市内では庄内川水系、天白川水系、山崎川に遡上しているのが確認されている。一方で、遡上量が最も多いと思われる庄内川でも産着卵や流下仔魚がほとんど確認されておらず、河川中下流の劣悪な水質、平坦化された河道、横断構造物による移動阻害などにより、秋まで生き残って産卵する親魚は極めて少ないと思われる。また、孵化した仔魚も複数ある堰堤の上流側にできた湛水域で流下が遅滞し、海域にたどり着く前に卵黄が尽きて餓死している可能性が高い。さらに、降海する名古屋港も港湾整備が進み、本種が冬を過ごす適地に乏しい。これらのことから、市内河川では資源が再生産せず、春に遡上してくる個体の主たる供給源は木曽三川である可能性も否定できない。

保全上の留意点

河川の水質改善、横断構造物の魚道整備、産卵場の保全あるいは造成が必要である。また、名古屋港内の河口干潟など、わずかに残る浅海地の保全も資源回復にとって重要である。

特記事項

内水面漁業の重要魚種とされ、全国で盛んに種苗放流が行われている。庄内川上流の土岐川（岐阜県）でも漁業協同組合が毎年種苗放流を行っている。

関連文献

間野静雄・鵜飼　普，2019．愛知県天白川に遡上するアユ．なごやの生物多様性，6: 89-90.
間野静雄・淀　太我・吉岡　基，2018．庄内川において堰堤がアユの遡上に与える影響．水産増殖，66: 185-192.
名古屋市，2016．市内河川の生き物と水環境．26 pp．名古屋市緑政土木局河川部河川計画課，　名古屋.
高橋勇夫・東　健作，2016．天然アユの本．築地書館，東京，279 pp.

（谷口義則）

魚類　＜サケ目シラウオ科＞

シラウオ　*Salangichthys microdon* (Bleeker, 1860)

評価理由

汽水域の水質悪化、河口干潟の埋め立てや浚渫といった開発により、個体数が減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

形態

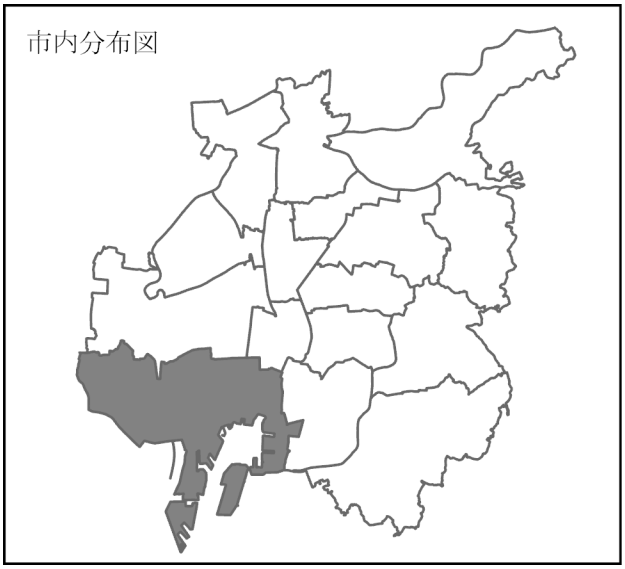
体長 8cm。脂鰭があり、体は細長い。体の大部分に鱗が無い（雌：無鱗、雄：臀鰭基底のみに 16～18 枚の鱗がある）。吻が長く口蓋骨歯があり、下顎は上顎より前に出る。下顎歯数 16～25。胸鰭の条数は 13～19 で、胸鰭は大きく胸鰭基底上端は目に達する（細谷，2013）。生時の体色は透明で、小黒点が咽から排泄口にかけての腹面に 2 列ある。また、小黒点が、両顎の先端、鰓孔の後縁、尾鰭の鰭条、胸鰭第 1 鰭条に沿ってある。死後は白色になる（宮内・千田，2001）。



矢作川、2014 年 2 月 4 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：庄内川。
県内：境川、矢作川、豊川などの河口。油ヶ淵。
国内：北海道から九州。
世界：日本、朝鮮半島、サハリン。



生息地の環境／生態的特性

生まれて 1 年以内に（産卵して）死ぬ「年魚」である。主に汽水域に生息し、産卵期の 2～5 月に河川に遡上し、砂底で 1 回産卵する。遡上期には、雌雄の離合集散が非常に顕著で、10～15 日の短期間で行われている（堀田・田村，1954）。動物プランクトンやイサザアミなどを食べる（宮内・千田，2001）。

現在の生息状況／減少の要因

産卵場所である河口域の砂底の減少や、赤潮や青潮などの水質悪化で、個体数が減少している。また、集中豪雨などの自然災害による影響も大きい。

保全上の留意点

産卵環境として砂底を好むことから、産卵期前後に河川干潟の埋め立てや浚渫などの撹乱を避けることや、砂底を泥底に変化させない工夫が必要である。また、生息地の水質を改善する必要がある。

特記事項

シラウオは名前のよく似ているシロウオと混同されるが、シロウオはスズキ目ハゼ科の魚類である。愛知県ではシロウオは確認されていない。

関連文献

宮内康子・千田哲資，2001．シラウオ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑改訂版　日本の淡水魚，pp.82-83．山と溪谷社，東京．
堀田秀行・田村　正，1954．シラウオ（*Salangichthys microdon* Bleeker）の生態について．北海道大學水産學部研究彙報，5(1): 41-46.
細谷和海，2013．シラウオ科．中坊徹次（編），日本産魚類検索　第三版　全種の同定，p.361．東海大学出版会，秦野．

（浅香智也）

魚類　＜メダカ目メダカ科＞

ミナミメダカ　*Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel, 1846)

評価理由

元来全国に生息していた普通種である本種は、市内でも目に見えて減少してきた。水田周辺の自然破壊による生息数の減少に歯止めがかからない状態である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

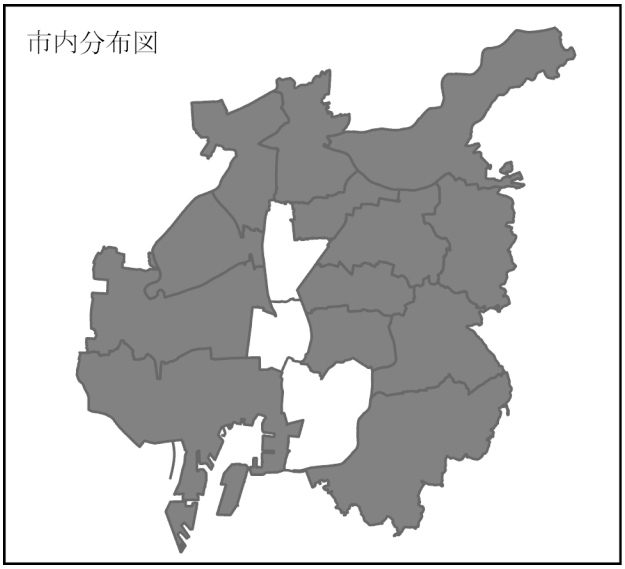
体長 40mm。頭部が縦に扁平し、体の後部は側扁している。側線は無く、全身がやや大きい円形の鱗に覆われる。背鰭は体の後方にある。頭部から背面中央に黒褐色の線がある。カダヤシに似るが、尾鰭が角ばっている点で見分けられる。



名東区、2021 年 11 月 14 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：市内のほぼ全水系、ため池など。
県内：県内全域。
国内：本州から琉球列島。北海道にも移植されている。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

群れを作り、水田やため池周辺の細流に生息する。海水が多少入る場所でも生息（繁殖）できる。餌として、珪藻、動物プランクトン、微小な陸生動物（トビムシ）などを利用する。4～9 月に繁殖する。巣は作らないが、産卵後繁殖ペアは縄張りを形成し、侵入個体に対して防衛する。雌は 1 腹 20 卵程度を産むが、体外に放出した受精卵を体に付けたまま泳ぎ、その後水草などに固着させる。産卵後は保護しない。自然条件下の寿命はおよそ 1～2 年。

現在の生息状況／減少の要因

市内では中小の河川、細流、ため池などに広範囲に生息する。川幅 2m 程度の小規模な水路に限って言えば、平成 20 年度に調査をした 120 か所中 21 か所で本種の生息を確認した。本来、水田と連絡のある用排水路に多く生息し、水田をも主要な生息場所とする。しかし、農薬の影響に加えて、市内の水田面積の減少（現在市全域の 2%程度に過ぎない）、圃場整備（排水路の底面・側面のコンクリート張りを含む）による水草等の産卵基質の消失が本種の減少に拍車をかけてきた。

保全上の留意点

水田周辺の水路内の水の枯渇が問題である。冬季湛水（冬水田んぼ）も有効だが、同時に水路と水田を簡易な魚道で連絡するなどの工夫を要する。底面がコンクリートでも泥が堆積している排水路は本種の生息場所として機能する。

関連文献

佐原雄二，2002．メダカ．山渓カラー名鑑．日本の淡水魚（第 3 版），pp.428-431．山と渓谷社，東京．
宮崎智博・谷口義則，2009．都市近郊農業排水路におけるカダヤシとメダカの個体群密度と微生息環境．野生生物保護，12(1): 13-20.

（谷口義則）

魚類　＜スズキ目カワアナゴ科＞

カワアナゴ　*Eleotris oxycephala* Temminck et Schlegel, 1845

評価理由

市内河川における分布の詳細は十分に解明されていないものの、現時点では分布が局所的で、生息数も少ないと推定される。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

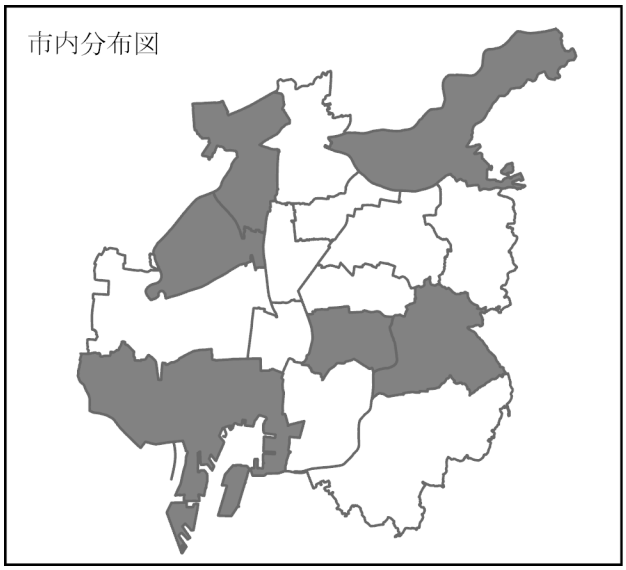
体長 25cm。アナゴとは名ばかりで、ハゼの仲間であり、体形も一般的なハゼ類に類似する。多くのハゼ類と異なり、腹鰭は 2 つあり吸盤状になっていない。個体間で体色変異が大きく、また同一個体でも状況によって変化することがある。通常の体色は灰色、もしくは暗色で、背面が明色になる。明色時には頭部下面に小白色斑が見られる。



西尾市矢作川水系、2013 年 7 月 20 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：庄内川水系、天白川水系、山崎川。
県内：矢作川、豊川を含む県内の主要な河川。
国内：栃木県以南の本州、四国、九州。
世界：日本、中国。



生息地の環境／生態的特性

夏季に産卵するとされているが、繁殖生態を含む生活史全般について詳しくはわかっていない。仔魚は沿岸域で浮遊生活期を過ごし、体長 20mm 前後に成長して河川を遡上する。昼間は石やヨシの根塊等の間に潜み、夜間に甲殻類や小型の魚類を捕食する。下流域の砂礫底に生息し、昼間は流木や石の下、植物の陰などに隠れている。

現在の生息状況／減少の要因

天白川水系、庄内川水系、山崎川において生息が確認されている。

保全上の留意点

上記河川群における産卵場所や稚魚の育成場等を含む生活史全般について解明したうえで、個体群保全に必要な対策を講じていく必要がある。

特記事項

河川下流域に特徴的なヨシ帯や転石等、身を隠すことの出来る物理環境と豊富な餌生物を保全していくことも重要である。

関連文献

安藤重敏，1999．鳥取県産カワアナゴの採集と飼育の記録．郷土と博物館，44(2): 1-5.
岩田明久，1987．カワアナゴ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚，p.553．山と渓谷社，東京．
松尾敏生・高濱秀樹，2001．飼育条件下で観察されたカワアナゴの求愛産卵行動．魚類学雑誌，48(1): 53-57.

（谷口義則）

魚類　＜コイ目コイ科＞

ウグイ　*Tribolodon hakonensis* (Gunther, 1877)

評価理由

かつては庄内川に多く生息していたと考えられるが、現状では個体数が少なく、生息環境が悪化していると考えられる。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

2～3 年で 20cm 程度に成長し、大きい個体は 40cm 以上にもなる。未成熟期は銀白色であるが、繁殖期になると雌雄ともに 3 本の赤色縦条が婚姻色となって鮮やかに現れる。



西区庄内川、2016 年 11 月 16 日、間野静雄　撮影

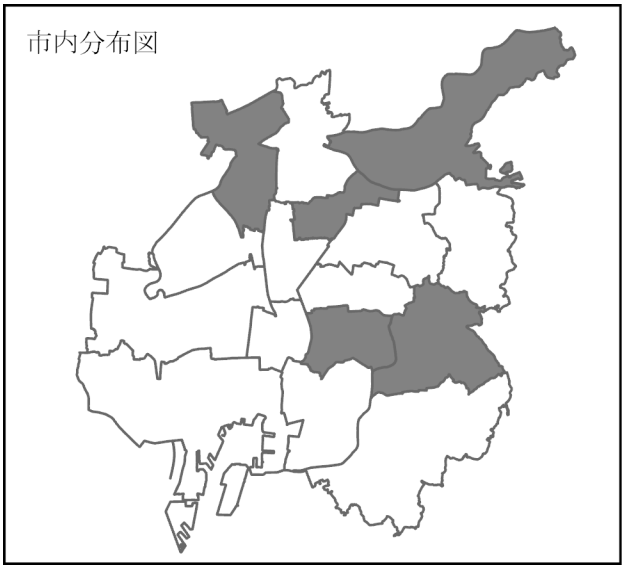
分布の概要

市内：庄内川水系、天白川、山崎川。

県内：木曽川水系、矢作川水系、豊川水系。

国内：北海道、本州、四国（瀬戸内側の一部を除く）、九州。

世界：南千島、サハリン、アムール川流域、沿海州から朝鮮半島東部。



生息地の環境／生態的特性

雑食性であり、付着藻類、昆虫、魚卵などを食べる。日本産コイ科魚類では珍しく、河川で一生を過ごす個体以外に降海する個体もおり、河川の上流から下流、湖沼、汽水域から内湾など、広範囲に生息する。降海した個体は大型になり、春に河川に遡上して産卵する。産卵期は春から初夏で、浮石が多い瀬に集まり、産卵する。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川ではかつて目視できるほど生息し（広, 1975）、食用にもなったとされている。しかし、1970 年代以降、市内の中流域ではほとんど確認されておらず、近年急激に個体数が減ったと思われる。庄内川上流（春日井市や岐阜県土岐川）に生息する個体群と感潮域で見られる降海型の個体群は複数ある堰堤により交流が分断されている可能性がある。天白川と山崎川でも採捕された記録があるが、極めて少ない。個体数減少には河川の水質悪化、堰堤による移動阻害や産卵適地の消失が大きく影響していると考えられる。

保全上の留意点

河川内での移動阻害を軽減するために堰堤の魚道整備が急務である。また、浚渫などの河道工事においては浮石状になった瀬を残すなどの配慮が必要である。

引用文献

広　正義，1975．魚類．庄内川の水生生物，pp. 125-139．建設省庄内川工事事務所，名古屋．

関連文献

石崎大介・大竹二雄・佐藤達也・淀　太我・吉岡　基・柏木正章，2009．耳石微量元素分析を用いた三重県加茂川におけるウグイの回遊履歴の推定．日本水産学会誌，75: 419-424．
駒田格知，2000．庄内川水系の魚類相．庄内川流域の生活と環境，pp. 449-465．名古屋女子大学生活科学研究所，愛知．
名古屋市，2015．名古屋市環境白書（資料編），名古屋市，愛知．
名古屋市，2017．名古屋市環境白書（資料編），名古屋市，愛知．
酒井治己，1996．ウグイ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚（第 2 版），pp. 259-264．山と溪谷社，東京．

（間野静雄）

魚類　＜コイ目コイ科＞

タモロコ　*Gnathopogon elongatus elongatus* (Temminck et Schlegel, 1846)

評価理由

市内ではいくつかの主要な水系の中・下流域ならびに水路において生息が見られるが、圃場整備事業に伴う水路のコンクリート護岸化や河川改修、肉食性外来魚による捕食などにより、生息環境が悪化している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長 7cm。体形はやや太い紡錘形。モツゴに似るが、吻は丸く、1 対の口ひげがある。体色は灰白色で、背面は緑がかる。体側中央には 1 本の太い縦条が、側線より下の体側には 2～3 本の暗色線が走る。移入個体として県内に分布する琵琶湖の固有種であるホンモロコに似るが、体形はずんぐりし、口ひげはより長い。

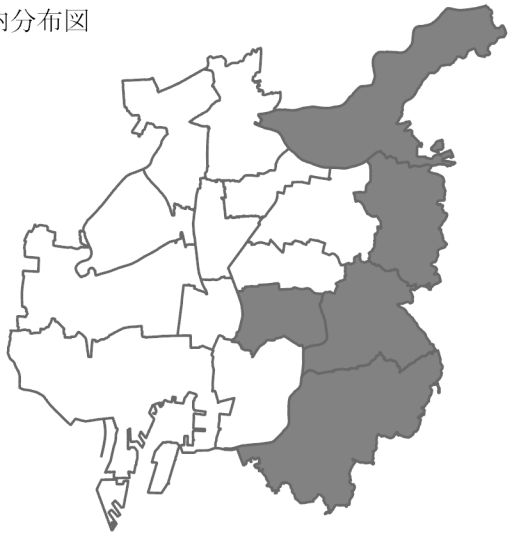


名古屋市内、2024 年 8 月 12 日、鳥居亮一　撮影

分布の概要

市内：天白川水系、庄内川水系など。
県内：県内各地。
国内：関東以西の本州、四国。東北地方や九州の一部に移植。
世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

主に平野部の河川中・下流の緩流域や水路、池などに生息する。動物食にかたよった雑食性で、主にユスリカ幼虫、イトミミズ、水草などのほか、動物プランクトンを食べる。産卵期は 4～7 月。卵は沈性粘着卵で、水草の根元等に産み付ける。

現在の生息状況／減少の要因

河川改修や圃場整備事業に伴う水路等のコンクリート護岸化による、隠れ場所ならびに産卵基質である水草等の激減。水質悪化も影響を与えている。また、本種の生息水域の多くにはオオクチバス、ブルーギルなどの肉食性外来魚の定着が見られ、卵から成魚まで各成長段階すべてにおける捕食圧が大きく影響し、生息環境が悪化している。

保全上の留意点

水草等を含む、身を隠すことのできる多様な物理的環境ならびに産卵に適した環境の保全、肉食性外来魚の駆除を進めることが重要である。

特記事項

県内には、タモロコに近縁で形態が酷似する琵琶湖の固有種であるホンモロコが分布しており、本種の生息地への侵入など、今後の動向に注意を要する。

関連文献

細谷和海，1989．タモロコ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚，pp.298-299．山と渓谷社，東京．
細谷和海，2013．コイ科．日本産魚類検索　第三版　全種の同定，pp.328-334．東海大学出版会，秦野．

（鳥居亮一）

魚類　＜ナマズ目ナマズ科＞

ナマズ　*Silurus asotus* Linnaeus, 1758

評価理由

水質汚濁に比較的強いものの、河川工事によるコンクリート護岸化、大粒径の河床材料の消失、繁殖場所の減少と消失、餌生物となる小動物の減少により、生息数が減少しているものと推測される。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長 60cm。大きく扁平な頭部、幅広い口、長いひげを持つ。鱗が無く、体表は粘液で覆われる。目は小さく背側寄りで、腹側からは見えない。体色や斑紋は個体間で変異が大きい。下顎が上顎よりもわずかに長く突き出す。背鰭は小さいが、尻鰭の基底が長く、尾鰭と連続する。



港区、2018 年 11 月 25 日、鳥居亮一　撮影

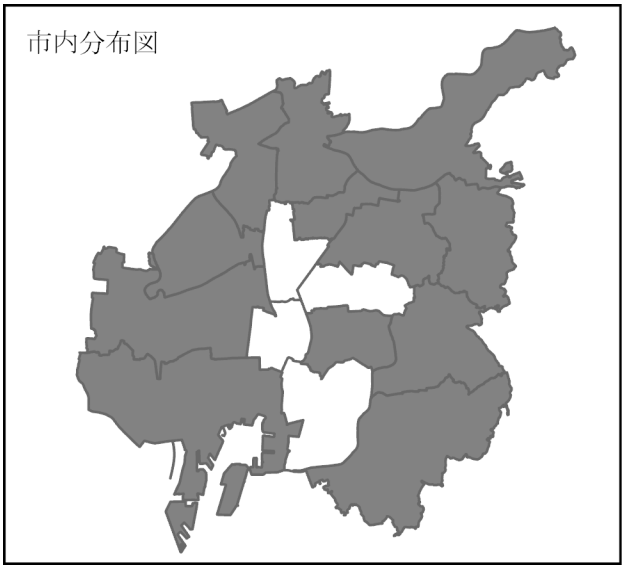
分布の概要

市内：ほぼ全域。

県内：矢作川水系、豊川水系のほか、数多くの中小規模河川。

国内：北海道から九州。

世界：日本、中国大陸東部、朝鮮半島、台湾。



生息地の環境／生態的特性

河川の緩流部、湖沼、水田の用排水路などに生息する。基本的に夜行性で、昼間は水底の岩や水草の物陰に潜む。食物連鎖の上位に位置する捕食者で、主に口ひげで索餌し、ドジョウ、カエルなどの小型魚類・両生類、甲殻類、水生昆虫などを捕食する。冬季は泥の中や岩の間に隠れ、ほとんど動かない。繁殖期は 5～6 月で、浅い水域に集まり、雄が雌の体に巻きつくという独特の繁殖行動の後、水草や水底に産卵する。雄は 2 年、雌は 3 年程度で性成熟に達する。

現在の生息状況／減少の要因

水質汚濁に比較的強いが、河川工事によるコンクリート護岸化により繁殖場所の減少と消失、餌生物となる小動物の減少により、生息数は減少しているものと推測される。

保全上の留意点

河川工事による大粒径の河床材料を取り除くと本種の隠れ場所が消失する。環境配慮型の河川工事を行う場合は、人頭大の礫の投入（捨て石工法など）が奏功する場合がある。

特記事項

ナマズはブルーギル等の外来魚を捕食することが知られるため、本種を増やすことにより外来魚個体群をある程度抑制できる可能性もある。

関連文献

小早川みどり，1989．ナマズ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑．日本の淡水魚，pp.412-415．山と渓谷社，東京．

片野　修・中村智幸・山本祥一郎・阿部信一郎，2004．長野県浦野川における魚類の種組成と食物関係．日本水産学会誌，70(6): 902-909.

片野　修・坂野博之・V. Boris，2008．設置型魚類自動捕獲器のブルーギルに対する捕獲効果．日本水産学会誌，74(1): 14-19.

（谷口義則）

魚類　＜スズキ目ハゼ科＞

スミウキゴリ　*Gymnogobius petschiliensis* (Rendahl, 1924)

評価理由

両側回遊魚である本種の移動を妨げる堰などの河川横断障害物の設置や、河川のコンクリート護岸化による生息場所・産卵場所の減少などにより個体数が減少していると推察される。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

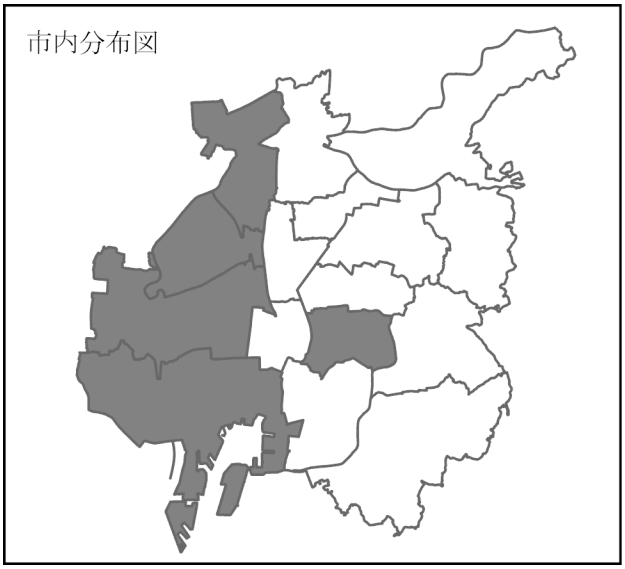
体長 15cm。体側には 7～8 本の横帯がある。側線上に黒色の縦列斑は無い。産卵期には雌雄ともに腹鰭と臀鰭が黒ずみ、雌の腹部は黄色みを増す（石野，2001）。同属のウキゴリ、シマウキゴリに似るが、第 1 背鰭後部に黒色斑がない、尾鰭基底の黒色斑はくさび形であることから区別できる。



北区、2024 年 2 月 24 日、下山淳二　撮影

分布の概要

市内：庄内川水系、天白川水系、山崎川。
県内：県内全域。
国内：北海道から屋久島まで。
世界：日本、朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

河川下流域～河口域、汽水域の河岸の植物帯や礫底に生息する。礫の下面に卵を産み付ける。ウキゴリやシマウキゴリに比べて下流で産卵する（石野，2001）。孵化仔魚は河川を流下する。浮遊期仔稚魚は初春から初夏にかけて浅海域に出現し、その後河川を遡上する（原田，2014）。

現在の生息状況／減少の要因

市内では 5 月頃に河川を遡上する多数の個体が採集されている（荒尾，2008）。成魚はウキゴリの成魚とともに採集されることも多い。堰などの河川横断障害物は本種の移動を妨げ、河川のコンクリート護岸化は生息場所・産卵場所の減少の要因となっている。

保全上の留意点

堰に設置される魚道はアユなどの産業重要種を対象に設計されることが多く、ハゼ科魚類も遡上可能な魚道の設置が望まれる。また、河川のコンクリート護岸化が必要な場合は生息場所となる河岸植物帯や礫底の保全が必要である。

引用文献

荒尾一樹，2008．庄内川で採集された魚類．豊橋市自然史博研報，(18): 25-27.
原田滋雄，2014．スミウキゴリ．沖山宗雄（編），日本産稚魚図鑑 第二版，p.1271．東海大学出版会，秦野．
石野健吾，2001．スミウキゴリ．川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚　改訂版，pp.622-623．山と渓谷社，東京．

関連文献

明仁・坂本勝一・池田祐二・藍澤正宏, 2013. ハゼ亜目. 中坊徹次（編）, 日本産魚類検索　第三版　全種の同定, pp.1347-1608,2109-2211．東海大学出版会，秦野．
荒尾一樹，2019．名古屋市で採集された淡水魚類．なごやの生物多様性，6: 109-111.
荒尾一樹・山上将史・大仲知樹，2007．愛知県の河口域魚類．豊橋市自然史博研報，(17): 29-40.

（荒尾一樹）

魚類　＜スズキ目ハゼ科＞

ウキゴリ　*Gymnogobius urotaenia* (Hilgendorf, 1879)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

市内では出現頻度の低い魚種であり、減少傾向にあると考えられる。市内で見られる本種の多くは陸封された個体群であると考えられることから、よりいっそう河川環境への依存度が高いにもかかわらず、保全に有効な手立てが講じられていない。

形態

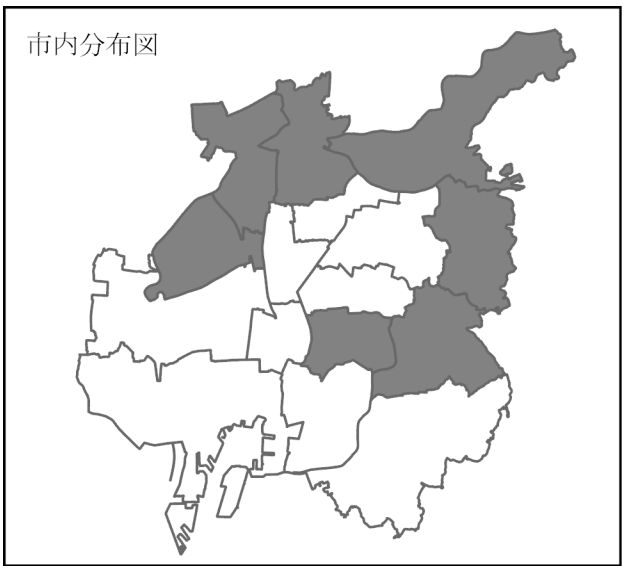
体長 13cm。ハゼ類のなかでは大型の部類である。体は円筒形だが頭部は縦扁し、逆に尾部は側扁する。体色は半透明の黄褐色で、全身に黒褐色の斑点がある。第一背鰭の後半部と尾鰭の付け根に明瞭な黒斑点が一つずつあり、第二背鰭と尾鰭は白黒の縞模様となる。なお、近縁なスミウキゴリには第一背鰭に黒斑が無い点でウキゴリおよびシマウキゴリ両種と区別できる。また、シマウキゴリは第一背鰭後半部に黒斑があるが、ウキゴリほど大きくない。



小牧市、2024 年 12 月 5 日、下山淳二　撮影

分布の概要

市内：庄内川水系、天白川水系、山崎川。
県内：矢作川、豊川を含む県内の主要な水系。
国内：北海道、本州、九州の河川。
世界：日本、サハリン、朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

幼魚期を海で過ごす個体が多いが、河川に陸封化されるものもあり、中流、下流域、汽水域で見られる。水底から離れて中層を漂うように泳ぐこともあるため、ウキゴリが命名されている（ゴリはハゼ類の地方名）。口が大きく、食性は肉食性で、昆虫、甲殻類、小魚などの小動物を捕食する。産卵期は春で、雄が川底の石の下に産卵室を造り、雌は産卵室の天井に産卵する。雄は巣に残りふ化まで卵を保護する。仔魚は湖沼や海に降り、翌年成長した若魚が春から夏にかけて群れをなして川を遡上する。

現在の生息状況／減少の要因

本来は、緩流部と転石などが多い河川に見られるが、市内ではコンクリート護岸された河川にも生息している。しかし、緑地の減少、夏季の水温上昇、土砂流入量の減少、緩流部と水草域の減少等により生息数が減少している。

保全上の留意点

繁殖環境の保全、すなわち適切な河床材料の供給が重要である。そのため、環境配慮型の河川工事を行う際には、土砂が堆積しやすいように緩流部を設けることが重要である。

特記事項

捕食者である本種にとって、餌となる小型の水生動物の生息条件を整えることも重要である。

関連文献

石野健吾，1987．ウキゴリ．川那部浩哉・水野信彦（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚，pp.618-620．山と渓谷社，東京．
鶴田哲也・小池亮人・武島弘彦他，2010．明・暗条件下におけるオイカワ,ウグイおよびスミウキゴリのアユ仔魚捕食．魚類学雑誌，57(1): 51-55.

（谷口義則）

魚類　＜コイ目コイ科＞

コイ（在来型）　*Cyprinus carpio* Linnaeus, 1758

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	地域個体群

評価理由

主に養殖・放流されてきたコイ（飼育型）との交雑・競争により減少したものと推察される。市内における確実な採集記録・情報が少ないため現段階でのランク評価は困難である。

形態

体長 60～100cm。外見は、やや側扁した紡錘形で吻部がとがり、口ひげが 2 対ある。また、背鰭棘状軟条が 4 本、分枝軟条数が 19～21 本で背鰭基底が長い。コイ（在来型）は、コイ（飼育型）に比べると体高が低く、赤みが強い。

分布の概要

市内：不明（情報不足）。

県内：不明（情報不足）。

国内：滋賀県琵琶湖北部地域のみ（松崎, 2013）。他の地域は不明。

世界：コイ（在来型）は日本固有（亜）種。コイ（飼育型）はユーラシア大陸に自然分布し、世界各地に産業目的で移殖されてきた。



コイ（在来型）
琵琶湖、2010 年 4 月 1 日、瀬能　宏　撮影

生息地の環境／生態的特性

緩やかな流れの河川中・下流部や湖、池沼に生息する。雑食性で、貝類、水生昆虫、ミミズ類等の底生動物や、藻類、水草等の植物を摂餌する。産卵期は 4～7 月で水草などに卵を産みつける。

現在の生息状況／減少の要因

コイ（在来型）の詳しい生息状況は不明である。朝日遺跡（名古屋市西区～清須市）から、コイ（在来型）の咽頭歯と見られる骨が確認されている（山崎・宮腰, 2005）。このため、かつては名古屋市周辺にもコイ（在来型）が生息していたと考えられる。しかし、現在の生息状況は不明である。コイ（在来型）が減少した原因は、養殖・放流されてきたコイ（飼育型）との交雑・競争と推測される。また、コイ（在来型）が好むとされる大きく深い河川や池沼等の生息場の消失も減少要因と考えられる。



保全上の留意点

コイ（在来型）の生息状況を調べ、効果的な保全対策の基礎となる生態学的知見の蓄積が必要である。

特記事項

近年、我が国に生息するいわゆる「コイ」は、コイ（在来型）とコイ（飼育型）という遺伝的に異なる 2 系統に分けられた（松崎，2013）。コイ（在来型）は、かつてコイ（野生型）と呼ばれていたが、ユーラシア大陸原産のコイ（飼育型）と遺伝的に異なり、日本在来であることが判明したため、現在の名称となった。瀬能（2009）は *Cyprinus melanotus* の学名を提案しているが、未だ幅広く認知されていない。

引用文献

松崎慎一郎，2013．池沼におけるコイの水質や生物群集に与える生態的影響．日本魚類学会自然保護委員会（編），見えない脅威“国内外来魚”，pp.39-50．東海大学出版会，神奈川．

瀬能　宏，2009．日本産コイ（コイ目コイ科）のルーツ解明と保全へのシナリオ．科学研究費補助金成果報告書．

山崎　健・宮腰健司，2005．朝日遺跡出土の魚類遺存体．愛知県埋蔵文化財センター　研究紀要，(6): 34-45．（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター，愛知．

関連文献

細谷和海，2001．コイ．川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山渓カラー名鑑改訂版　日本の淡水魚．pp.334-338．山と渓谷社，東京．

馬渕浩司・瀬能　宏・武島弘彦・中井克樹・西田　睦，2010．琵琶湖におけるコイの日本在来 mtDNA ハプロタイプの分布．魚類学雑誌，57: 1-12．

（浅香智也）

魚類　＜コイ目コイ科＞

ヌマムツ　*Candidia sieboldii* (Temminck et Schlegel, 1846)

評価理由

本種は比較的水のきれいな自然度の高い河川に生息し、かつては市内の主たる河川の上流部に多く生息していた可能性があるが、現在分布状況が不明であり、情報が不足している。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

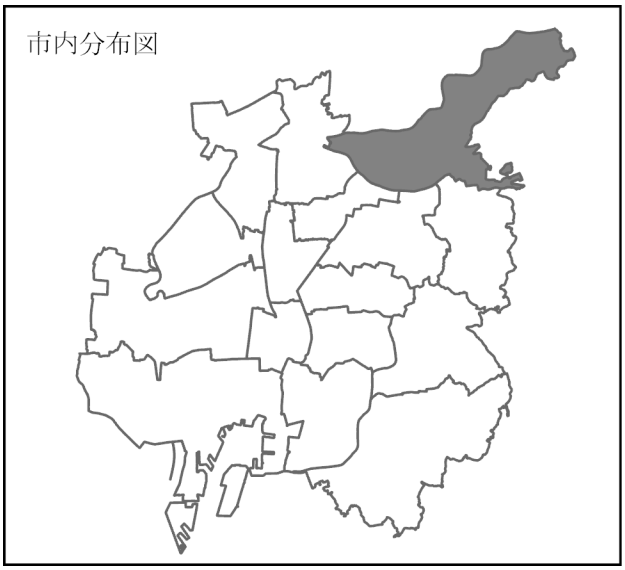
体長 20cm。主鰭条数は臀鰭 9 条、側線鱗数 53～60 枚、側線上部鱗数 12～13 枚（細谷，2013）。側線は完全で口ひげはない。体側中央に暗藍色の幅広い縦帯があり、腹部は白っぽい。臀鰭が大きく特に雄で著しい。産卵期に雄は明瞭な婚姻色を現し、頭部の下面や腹面が朱色や暗赤色となり、胸鰭、腹鰭の前縁もオレンジ色～赤色を現す。雌雄共に繁殖期に頭部、体表、臀鰭などに追星を現し、近縁なカワムツと異なり、鰓蓋にも出現する。



みよし市、2010 年 12 月 5 日、荒尾一樹　撮影

分布の概要

市内：庄内川支流、香流川。
県内：矢作川水系、豊川水系、他。
国内：東海地方以西の本州瀬戸内海沿岸、九州北部。ただし、関東、東北地方にも侵入。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵地の流れの緩やかな河川に生息している。雑食性で、水草、付着藻類、水生・陸生昆虫類を利用する。産卵期は 5 月中旬～8 月下旬頃とされる。

現在の生息状況／減少の要因

詳しい分布域や個体数は明らかになっていない。過度の河川改修によって減少したものと推察される。夏季の水温が比較的低く保たれている場所に生息するため、都市化によるこれらの環境悪化も個体数減少の一因と考えられる。

保全上の留意点

不用意な河川改修を慎み、河畔林の修復・復元により、隠れ場所、餌としての陸生動物、夏季の好適な水温条件を整えることが重要である。

関連文献

細谷和海，2013．コイ科．日本産魚類検索　第三版　全種の同定，p.318．東海大学出版会，秦野．
Hosoya, K., H. Ashiwa, M. Watanabe, K. Mizuguchi and T. Okazaki，2003．*Zacco sieboldii*, a species distinct from *Zacco temminckii* (Cyprinidae). Ichthyological Research，50: 1–8.

（谷口義則）

魚類　＜コイ目コイ科＞

ウシモツゴ　*Pseudorasbora pumila* subsp.

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 IA 類

評価理由

1950 年代に市内で生息が確認されていた。2000 年代に入り、かつての生息記録がある他の自治体で再発見されている例もあることから、詳細な調査が必要と考えられる。愛知県指定希少野生動植物種である。

形態

体長 50mm。大型個体は体長 80mm を超える。雄は雌に比べ大きい。体は円筒形だが、近縁種のモツゴに比べると体高や尾柄が高く、ずんぐりした印象を受ける。側線鱗は不完全で 1 枚から 5 枚。縦帯はあるが、モツゴやシナイモツゴと比べ、不明瞭で、それを欠く個体も多い。繁殖期に雄は黒くなる。追星も出るが、モツゴに比べるとかなり小さい。



碧南市 2003 年 2 月 25 日、碧南海浜水族館　撮影

分布の概要

市内：1959 年に旧鳴海町（現緑区）で記録がある。そのほか名古屋市の市境である豊明市の勅使ヶ池、若王子池でも記録があり、かつては緑区の扇川や天白川周辺に生息していたものと思われる。

県内：豊田市、岡崎市（野生絶滅）、日進市、長久手市、西尾市（野生絶滅）、小牧市（絶滅）、春日井市（絶滅）、犬山市（野生絶滅）。

国内：三重県、岐阜県、愛知県。

世界：日本固有亜種。



生息地の環境／生態的特性

現在確認されている他の自治体の生息地は、湧水を水源とする山間のため池に限定されている。カワバタモロコ、トウカイヨシノボリ、ミナミメダカ以外の魚類がほとんど生息しない場所で発見されることが多い。

現在の生息状況／減少の要因

ため池の埋め立てや護岸の改修、オオクチバスやブルーギルなどの外来魚の侵入により減少したものと思われる。モツゴと共存していた例（岐阜県養老町）もあるが、小牧市や春日井市ではモツゴが侵入して 2 年ほどで本亜種が確認できなくなった。飼育愛好家の過剰採集も脅威である。

保全上の留意点

魚食性外来魚とモツゴの侵入に注意する。産卵基質として比較的大きな沈石を好むため、池内にこのような沈石が多くあることも重要条件である。岐阜県で復元放流が成功している。かつて、シナイモツゴと同種もしくは別亜種とされていたが、2015 年に独立種として分類された。

関連文献

小林久雄・川口和美・広瀬初彦・大脇英男，1959．名古屋市外東部及び北部の淡水魚類．名古屋・尾張北部の自然，pp.18-20.

鹿野雄一・北村淳一・河村功一，2010．絶滅危惧種ウシモツゴの繁殖生態と保全策，および近縁種モツゴとの比較．魚類学雑誌，57(1): 43-50.

Kawase, S., Hosoya, K., 2015. *Pseudorasbora pugnax*, a new species of minnow from Japan, and redescription of *P. pumila* (Teleostei: Cyprinidae). Ichthyological Exploration of Freshwaters, 25: 289-298.

（大仲知樹）

魚類　＜コイ目コイ科＞

カワヒガイ　*Saucocheilichthys variegatus variegatus* (Temminck et Schlegel, 1846)

評価理由

河川やそれに続く用水路のコンクリート護岸化による生息場所の減少や産卵母貝の減少などにより分布域が縮小し、個体数が減少していると推察されるが、市内での生息情報は少ない。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長 12cm。体は細長く、吻は短く丸い。体側全体に不規則な雲状斑がある。同属のビワヒガイに似るが、尾柄高は頭長の 49%以上であることから区別できる。



三重県松阪市、2007 年 3 月 6 日、荒尾一樹　撮影

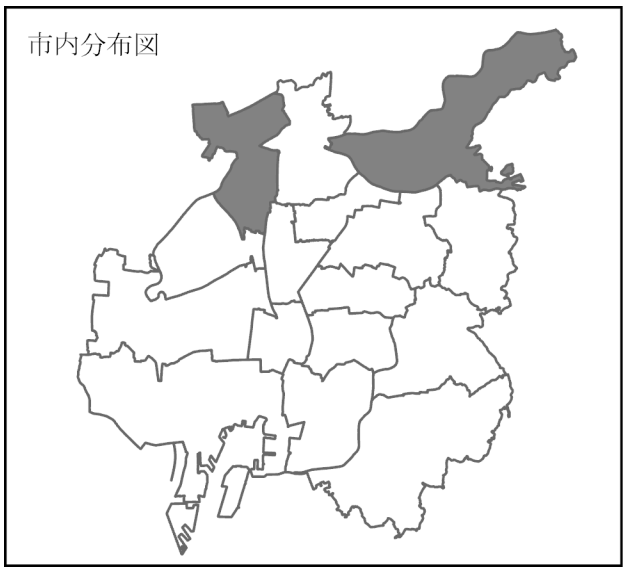
分布の概要

市内：庄内川水系。

県内：木曽川・庄内川・矢作川・豊川水系など。

国内：濃尾平野、琵琶湖流入河川、京都盆地、山口県を除く山陽地方、九州北西部、長崎県壱岐島。

世界：日本固有亜種。



生息地の環境／生態的特性

河川の中～下流の緩流域とそれに続く用水路に生息する。砂～砂礫底の中～底層を遊泳する。5～7 月に二枚貝の外套腔内に産卵する（細谷，2013）。雑食性で水生昆虫や小型巻貝、付着藻類などを食べる（細谷，2001）。

現在の生息状況／減少の要因

市内の生息情報は少ない。庄内川水系で採集されているが、個体数も少なく、市外の上流域から出水などにより流下した個体が偶発的に採集された可能性も考えられる。河川や用水路のコンクリート護岸化は生息場所を減少させ、産卵母貝の減少要因ともなっている。

保全上の留意点

河川や水路等における砂底～砂礫底の緩流域やワンドの保全が必要である。また、産卵母貝の保全も重要である。

特記事項

東海地方では非在来のヒガイ属魚類が広く侵入しており、在来個体との交雑の可能性も示されている（鈴木ほか，2016）。愛知県内でも矢作川水系などでビワヒガイの移入が確認されており（梅村ほか，2015）、競争や交雑の恐れもある。

引用文献

細谷和海，2001．カワヒガイ．川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山渓カラー名鑑　日本の淡水魚　改訂版，pp.310-311．山と渓谷社，東京．

細谷和海，2013．コイ科．中坊徹次（編），日本産魚類検索　第三版　全種の同定，pp.308-327,1813-1819．東海大学出版会，秦野．

鈴木美優・北西　滋・淀　太我・向井貴彦，2016．東海地方におけるヒガイ属魚類の遺伝的集団構造と撹乱．魚類学雑誌，63(2)：107-118．

梅村錞二・酒井博嗣・内田良平・山本敏哉，2015．阿摺ダム直下の淵のかいぼり調査結果．矢作川研究，(19): 75-84．

関連文献

駒田格知，2010．カワヒガイ．愛知県環境調査センター編，p.213．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータあいち 2009　–動物編–，愛知県環境部自然環境課，愛知．

前畑政善，2010．カワヒガイ．環境省自然環境局野生生物課（編），p.50．改訂レッドリスト　付属説明資料　汽水・淡水魚類，環境省自然環境局野生生物課，東京．

（荒尾一樹）

魚類　＜サケ目サケ科＞

サツキマス・アマゴ　*Oncorhynchus masou ishikawae* Jordan et McGregor, 1925

評価理由

かつては庄内川水系に遡上したが、水質の悪化、ダムや堰堤等の横断構造物設置により生息域が分断され、降海、遡上が困難となり、安定的な個体群は存在しないものと推定される。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	準絶滅危惧

形態

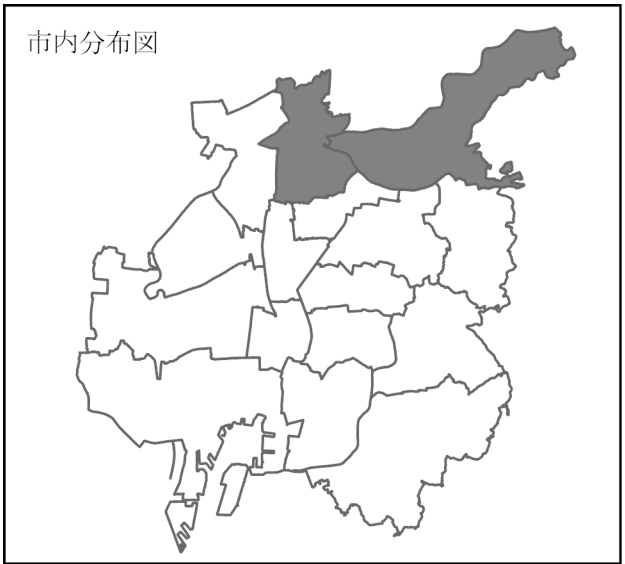
体長 40cm（サツキマス）。成魚の体側は銀白色でパーマークは消失するが、朱点は残る。降海途中の若い個体（シラメ）は背鰭の先端が黒化し、体側が銀白色で鱗が剥がれやすい銀化状態となる。降海するとパーマーク（楕円形の斑紋）が消失して全体が銀白色となる。



アマゴ
設楽町豊川水系、2011 年 9 月 27 日、荒尾一樹　撮影

分布の概要

市内：庄内川水系ほか。
県内：矢作川、豊川を含む県内の主要な水系およびこれらの支流。ただし、水産放流個体を含む。
国内：本州、四国、九州の太平洋岸および瀬戸内海に注ぐ河川。
世界：日本、台湾。



生息地の環境／生態的特性

生まれてから 1 年目の春に降海するものが多い。11 月～翌年 3 月にかけて降海するが、完全に降らず河川下流域に留まる個体もいる。降海後は伊勢湾および近海で甲殻類や小魚などを食べ、翌年の春に 40cm 程度に育ち河川を遡上し、その秋にアマゴと混じって 10～11 月に産卵して死ぬ。ふ化した仔魚は産卵床内で過ごし、3～5 月に浮出する。

現在の生息状況／減少の要因

森林伐採や砂防ダムおよび河川改修工事による上流域におけるアマゴの生息環境が悪化している。さらに、流域に設けられた魚道の十分に機能しない各種のダムや堰堤によって、海とのつながりが断ち切られている。県内では、種苗放流による遺伝子汚染、ニジマス、ブラウントラウトなどの近縁な外来サケ科魚類の放流による競争・捕食の影響も懸念される。

保全上の留意点

降海する前の河川生活期は、年間を通じて水温が 20°C 以下の主に渓流域に生息するため、河川水温の上昇を防ぐ必要がある。水生や陸生の昆虫等を餌にするため、これらの餌となる付着藻類や河畔林が欠かせない。

関連文献

愛媛県，2003．愛媛県レッドデータブック，447pp．愛媛県自然保護課，愛媛．
加藤文男，1973．伊勢湾へ降海するアマゴ（*Oncorhynchus rhodurus*）の生態について．魚類学雑誌，20(4): 225-234.
中野　繁・谷口義則，1996．淡水性サケ科魚類における種間競争と異種共存機構．魚類学雑誌，43(2): 59-78.

（谷口義則）

魚類　＜ダツ目サヨリ科＞

クルメサヨリ　*Hyporhamphus intermedius* (Cantor, 1842)

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

生息環境の悪化等により、近年は激減しているものと推察される。市内における確実な採集記録・情報が少ないため現段階でのランク評価は困難である。

形態

体長 15cm。体は細長い円筒形で近縁種のサヨリに似る。体色は、背部が銀青色で、体側、腹部は銀白色である。下顎は長く突出し、その先端の下面が黒色であることでサヨリ（下顎下面の色は朱紅色）と識別可能である。汽水性の魚で、サヨリほど海域と河川を広範囲に回遊することはない。



清須市西枇杷島町、2014 年 8 月 15 日、間野静雄　撮影

分布の概要

市内：庄内川。
県内：木曽川の感潮域、油ヶ淵（碧南市）。
国内：青森県から九州北部まで。
世界：日本、朝鮮半島、中国、台湾、ベトナム。



生息地の環境／生態的特性

河川の汽水域から下流域に生息し、表層付近で浮遊性の動植物を食べる。繁殖期は春～夏で、水草や抽水植物帯に纏絡糸のついた粘着性の卵を付着させる。ふ化後、動物プランクトンなどを摂食しながら急速に成長し、翌年の産卵期には成熟して繁殖に参加する。寿命は 1 年と考えられている。

現在の生息状況／減少の要因

本種の生態から類推する限り、河口や汽水湖を中心に分布していたと考えられる。生息環境の水質悪化、河川水や流下する土砂の減少等による下流域の環境変化、埋め立てや護岸工事による抽水植物帯の消失、河口堰等による河川の分断は、成魚だけでなく卵や稚幼魚の生育場の喪失にもつながっている。

保全上の留意点

産卵場となる抽水植物帯の保全や創出、汽水湖など閉鎖的環境においては水質改善が必要である。また、河川改修や人工構造物の設置を検討する際には、本種の生活史や他の地域における減少事例を充分に調査した上で計画を立てることが重要である。遊泳性が強く飼育には広いスペースが必要であることから、生息域外保全は困難である。

特記事項

碧南海浜水族館には、1937 年に油ヶ淵（碧南市）で採集された個体が当時の標本ラベルとともに保管されている（増田ほか, 1996）。現時点では、県内における最も古い標本記録であると考えられる。

引用文献

増田元保・寺川　裕・島　達也，1996．碧南市立西端小学校所蔵　油ヶ淵産魚介類標本．碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館年報，9: 25-32.

関連文献

藍澤正宏・土居内龍，2013．サヨリ科．日本産魚類検索　第三版　全種の同定，pp.651-654,1927-1928．東海大学出版会，秦野．
松井誠一，2002．日本産サヨリ科魚類 2 種の生活史と増殖に関する研究（1999～2001 年度）．科学研究費助成事業・研究実績報告書.
瀬能　宏，2001．クルメサヨリ．山渓カラー名鑑　日本の淡水魚　第三版，p.424．山と渓谷社，東京.

（地村佳純）

魚類　＜コイ目コイ科＞

オイカワ（庄内川個体群）　*Opsariichthys platypus* (Temminck et Schlegel, 1846)

評価区分	
名古屋市 2025	地域個体群
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

ほとんどの水系で他地域産の移入が著しく進行しており、比較的大きな水系で他地域からの移入の影響が少ないのは庄内川の個体群だけである。

形態

体長 10～15cm。背部は淡褐色で腹部と体側は銀白色をしているが、繁殖期の雄の婚姻色は鮮やかで、体側は鮮やかな青緑色に桃色の横線が不規則に入り、尾柄に黄色みがかった横帯が入る。幼魚や雌、非繁殖期の雄はカワムツやヌマムツに似るが側線鱗数が 41～48 と少なく、銀白色の光沢が強いことなどで見分けられる。



西区、2019 年 8 月 26 日、向井貴彦　撮影

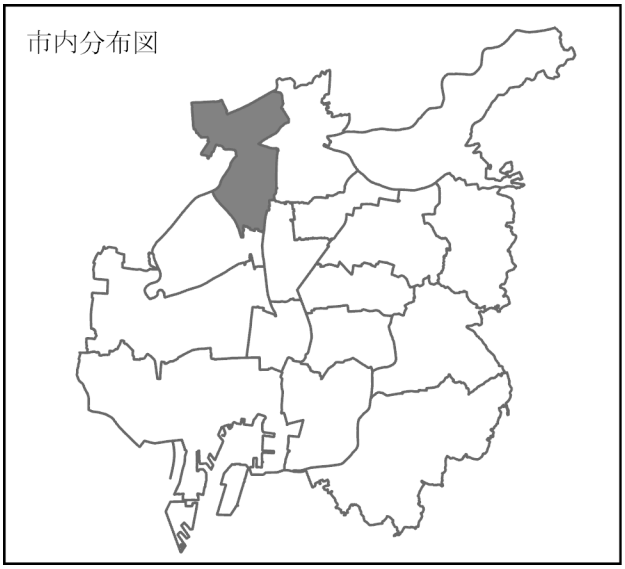
分布の概要

市内：庄内川（西区の個体について遺伝子解析を実施。種としての分布は市内各地。

県内：県内各地（種として）。

国内：関東地方以西の本州、四国、九州（種として）。

世界：日本、朝鮮半島、中国（種として）。



生息地の環境／生態的特性

河川の中流域から下流域、湖沼などに生息し、水生昆虫や動物プランクトン、付着藻類などを食べる。繁殖期は春～夏で、比較的流れの緩い砂礫底に産卵する。夏季は川の支流や水田地帯の水路にも広く生息しているが、水温が低下すると河川本流や大きめの支流に集まる。幼魚は冬季も日当たりの良い浅所で群れている。

現在の生息状況／減少の要因

種としてのオイカワは日本列島に広く分布するが、mtDNA の系統地理学的な研究の結果、日本産オイカワは東日本系統、西日本系統、九州系統の 3 系統に分けられ、愛知県は東日本系統の分布域であることが明らかとなった（Kitanishi et al., 2016）。しかし、愛知県や岐阜県では琵琶湖産アユ種苗への混入と思われる西日本系統のオイカワの mtDNA が広く見つかっており、庄内川水系のみ西日本系統の mtDNA がほとんど侵入していなかった（向井，2012 ; Kitanishi et al., 2018）。ただし、庄内川水系でも一部の支流に西日本系統の侵入がすでに生じている。

保全上の留意点

庄内川個体群の遺伝的な固有性を保全するためには、他地域のオイカワの混入する可能性のある放流行為を水系全体で避ける必要がある。近隣の水系（木曽三川等）はすでに西日本系統の侵入が進んでいるため、そうした水系からの導水や水産生物の意図的・非意図的な移殖を避けるよう対策をすることが望ましい。

引用文献

Kitanishi, S., A. Hayakawa, K. Takamura, J. Nakajima, Y. Kawaguchi, N. Onikura and T. Mukai, 2016. Phylogeography of *Opsariichthys platypus* in Japan based on mitochondrial DNA sequences. Ichthyological Research, 63: 506-518.

Kitanishi, S., N. Onikura and T. Mukai, 2018. A simple SNP genotyping method reveals extreme invasions of non-native haplotypes in pale chub *Opsariichthys platypus*, a common cyprinid fish in Japan. PLoS ONE, 13(1): e0191731.

向井貴彦，2012．長良川の魚たちは今？：河川における生物多様性の現状．岐阜から生物多様性を考える，pp.42-57．岐阜新聞社，岐阜市．

関連文献

向井貴彦・北西　滋・鬼倉徳雄，2017．オイカワの地域在来系統の現状：普通種に迫る危機．魚類学雑誌，64(2): 218-223.

（向井貴彦）

昆虫類

①　名古屋市における昆虫類の概況

名古屋市の市域は、木曽・長良・揖斐の木曽三川により形成された、濃尾平野の中央部やや東寄りに位置し、沖積平野と丘陵地からなるが、最高点は守山区東谷山の標高 198.3m に過ぎない。本来なら照葉樹林が発達する地域であるが、長い間の人の営為により生態系は攪乱され、極相に近い植生は東谷山の一部に残っているに過ぎない。市の東部には、1960 年頃まで田畑と二次林からなる里山的な景観が広がっていたが、市街化の波に押され、今日そのような景観は、守山区や名東区・天白区の一部に残るのみとなっている。市の西南部は海抜ゼロメートル地帯で、広く水田と畑が残っていたが、現在ではここも都市化が進んでいる。

生態系がどちらかといえば貧相に見える市域であるが、よく調べてみると、注目すべき昆虫が、狭い範囲に現在も幾つも命脈を保っていることが分かる。開発の波にさらされ、よりシビアな条件で生きているだけに、生息地の保全など、生態的価値の大きさによってはただちに対処すべき事例が出てくる。子どもたちにとって身近な学習のフィールドとして、保全したい自然を的確に把握しその重要性を指摘するためには、残された自然の継続的な調査とその公表が必要である。レッドリストにも県レベルよりも地域に密着した、より逼迫した意味合いが生じてくる。

現在、昆虫相の観点から市内で特に注目すべき自然として、守山区上志段味の東谷山一帯、千種区から天白区にかけての東山総合公園・守山区小幡緑地・名東区猪高緑地などの緑地公園、東部丘陵地などに散在する塚ノ杁池や大根池・猫ヶ洞池などのため池、熱田神宮などの寺社の鎮守の森、名古屋城周辺、そして庄内川の河川敷と河口のヨシ原などをあげることができる。この中で東谷山については、2010 年 4 月に、愛知県の自然環境保全地域に指定され、野生動植物保護地区を定めて湿地や照葉樹林などが保護されている。

名古屋市のレッドデータブックは 2004 年に初版が刊行され、2010 年に内容を補完した補遺版が刊行された。その際には、ため池と周辺環境の調査や、庄内川河口ヨシ原の調査結果が加味されたが、前回改訂の 2015 年版では、熱田神宮社叢の調査と、東谷山の自然環境保全地域の調査結果を加味することができた。熱田神宮調査におけるオオゴキブリの現認、東谷山におけるオオシモフリスズメやアヤコバネナミシャクの名古屋市初記録などの成果があり、今回の調査では、庄内川中流域から河口にかけての河川敷において、新たに愛知県初記録や名古屋市初記録のコウチュウも見つかっている。

名古屋市の地史については、2004 年版に概略が述べられているが、特に古東海湖に由来するシラタマホシクサやシデコブシなどの「東海丘陵要素」をはぐくむ、湧水に涵養された貧栄養の小湿地には、現在でも見るべき生物が多い。しかし市内に散在するこれらの小湿地は、植生の遷移が進み、ササの進入も著しく乾燥化の一途をたどっている。水脈の確保やササ刈リ・上木切りなど、保全のための人為が与えられなければ、小湿地は早晩消滅の運命にあるであろう。

名古屋市では、このような湿地と周辺の環境に依存しているハッチョウトンボ、ニホンアカジマ

ウンカ、ハウチワウンカ、ウラナミジャノメ、ウラギンスジヒョウモンなどの生存はまさに風前の灯といえる。これら湿地に生息する種の多くが、環境省の絶滅危惧種と評価されている種である。

かつて市内に生息していたヒメヒカゲやコバネアオイトトンボは既に絶滅している。また市内の湿地の昆虫の調査はすべての目（もく）について十分とはいえず、重要な種が人知れず消えていくこともありうる。そういった意味で、1996 年 6 月に名古屋市のビオトープ公園第 1 号としてスタートした天白区島田湿地や、それに続く守山区八竜湿地のようにフェンスで囲い、時期を決めて一般公開するような徹底した保全は、重要な行政施策といえる。

湿地とその周辺には、ハンノキ林を伴うことが多い。ハンノキ林にも特有の昆虫が生息するが、特に 2012 年の環境省のレッドリスト改訂で、新たにガ類のオナガミズアオとウスミミモンキリガが準絶滅危惧と評価された。里山のハンノキ林のある環境が全国的に減少しているからであろう。両種とも狭食性で、市内でもハンノキ林のある環境に限って見られる。緑地のため池周辺に多いハンノキ林は、公園整備などで不注意に伐採しないように、特に注意が必要である。

ため池の昆虫については、2009 年に名古屋城のお堀を含む、市内 10 か所のため池について、名古屋市環境局と市民団体の協働で、名古屋昆虫同好会の支援を受け市民調査員を募り、年 3 回の調査が行われ、それぞれのため池の概況が明らかになった、ベニイトトンボの分布拡大や、エサキアメンボの名古屋市初記録などの成果が得られたが、タガメや大型ゲンゴロウ類の絶滅、タイコウチなど大型の水生カメムシの減少などマイナスデータも得られている。また、ベニイトトンボについても、その後の調査では定着を確認できていない。

地域別にみると、守山区東谷山ではウラクロシジミ、クロヒカゲ、ウスグロクチバ、トウカイツマキリアツバなどが、現在市内でこの周辺だけに生息していて、コウチュウやカメムシにも他では見られない種がいる。近年山麓の湿地の細流で自然状態のゲンジボタルが確認された。ミヤマセセリは名古屋市では絶滅寸前であり、東谷山ではたとえ姿を見たとしても、瀬戸市側からの移動個体の可能性がある。ミヤマセセリは猪高緑地でもわずかに現認できる。

千種区平和公園南部と東山公園周辺は、市の中心部に近いが自然の残された緑地であり、2006 年より「なごや環境大学」の事業の一環として始まった、名古屋の棲息生物調査実行委員会による児童や市民対象の夜間採集体験で、集光性昆虫のデータが得られ公表されている。ガ類では全国的な希少種マダラウスズミケンモンや湿地性で環境省の絶滅危惧と評価されているガマヨトウなどの重要な記録が出ている。守山区小幡緑地・名東区猪高緑地などの緑地も、それぞれ市民団体による保全・調査活動がなされ興味深い種の現況が得られる。アベマキやコナラ主体の雑木林にはコシロシタバが局所的に多く、近年フシキキシタバも見られる。名東区猪高緑地にある塚ノ杁池ではハイイロボクトウやクロフキオオメイガなどの湿地性種も見られる。

熱田神宮社叢には、オオゴキブリなど極相に近い古い森に生息する種が残っている。名古屋城周辺では堀の石塁にウマノスズクサが多く、市内での発生が不安定なジャコウアゲハの安定した供給地となっている。以前と変わらずエノキやサクラの古木にヤマトタマムシがかなり発生し、ヒラタクワガタやコカブトムシも比較的近年の記録がある。堀の一部ではアサヒナカワトンボが、市中心部であるが遺存的に発生している。また堀の一部にヒメボタルが毎年発生をしているのは周知の通りである。

庄内川河口のヨシ原では、絶滅したと思われるヒヌマイトトンボは再確認されていないが、ガ類ではハイイロボクトウ、ヌマベウスキヨトウなどの、環境省のレッドリストに掲載されている種が

生息する。河口付近には汽水域に産し、幼虫は水中生活しフジマツモ科やコノハノリ科の藻を食べることが知られるエンスイミズメイガが多産し、コウチュウ類では、オオツノハネカクシや、全国的にも珍しいハマベゴミムシがみられる。

以上はこの地域の在来の昆虫相の中での注目種であるが、近年の温暖化現象による南方系の種の北上・東進や、海外から移入された帰化種の多発により、新たな競争が生じて今日的な昆虫相が形成されつつある。

名古屋市の位置は、以前は年平均気温 14°C ラインにあるとされ、1950 年代までは大体その位の平均気温であったが、名古屋気象台測定の平成元年から平成 10 年までの 10 年間の年平均気温の平均値では、年 15.9°C であり、平均気温が 1950 年代以前より 2°C 近く上昇している。今世紀に入るより少し前から、南方系の昆虫の北上が目立ち始め、以前は関西以西に分布し名古屋市ではほとんど見られなかったツマグロヒョウモン、クロコノマチョウ、ナガサキアゲハ、ハマオモトヨトウ、ニジオビベニアツバ、タイワンクツワムシなどが市内で定着している。市街地でクマゼミが増加していることも、表土の乾燥化とともに温暖化が競合関係に影響している可能性がある。

帰化した外来種では、戦後早く帰化したアオマツムシなどはどこでも見られ、初秋には街路樹の樹上でリーリーと甲高い声で鳴いている。緑地の樹上でよく見かけるヨコヅナサシガメも近年よく見かける。外来昆虫の中には天敵が少なく大発生して人間に様々な害を及ぼすものもある。

日本生態学会が外来の動植物の中から「日本の侵略的外来種ワースト 100」を定めているが、昆虫類は 22 種を占める。その中で名古屋市に発生が認められる主な種には次のようなものがある。

チャバネゴキブリ、オンシツコナジラミ、ヤノネカイガラムシ、マメハモグリバエ、イエシロアリ、イネミズゾウムシ、アルファルファタコゾウムシ、ヒロヘリアオイラガ、アメリカシロヒトリ

これらの中には在来種と競合し影響をあたえるものもいるであろう。また、天敵の多寡は、昆虫の発生に直接的な影響をもっている。

また近年、名古屋市東部に残る雑木林にコナラなどの成木のナラ枯れ現象が多発した結果、愛知県でほとんど採集例のない、ルイスホソカタムシやタイショウオオキノコなどが発生した。しかし現在は、ナラ枯れの終息に伴い、発生は減ってきている。また、2019 年には、バラ科樹木に多大な影響を及ぼすと全国で問題になっている、特定外来生物のクビアカツヤカミキリが市内でも見つかり、被害地域ではサクラが枯死するという影響が出ており、2024 年にはバラ科果樹への農業被害も出始めている。また 2021 年には、同じく特定外来生物のツヤハダコマダラカミキリも確認された。この地方ではおもにアキニレを食害するが、ヤナギ、トチノキ、カツラなど多種の樹木を加害し枯死させるので、公園や街路樹に影響がでている。また、フェモラータオオモモブトハムシも河川敷などのクズの群落で多く見つかっている。

チョウ目では、分布拡大していると思われるホシミスジが、2012 年に名東区牧野ケ池緑地や猪高緑地でも記録され拡がっている。また、2013 年に西区の新川堤防で発見されたムシャクロツバメシジミ、また、2010 年より記録のある特定外来生物のアカボシゴマダラが市内各地に定着し多く目にするようになった。

ホシミスジは、かつては見られなかったが、現在尾張地域には 2 系統の亜種が進出してきており、市内にも広く拡がってきている。

このようにある地域の昆虫相は、恒久的なものではなく、様々な要因によりダイナミックに変化しているので、各分野での継続的な調査が必須である。

②　名古屋市における絶滅危惧種の概況

名古屋市で過去に記録された昆虫類は令和 2（2020）年現在、3,751 種である。その中から今回の改訂で絶滅 34 種（+12）、絶滅危惧 IA 類 26 種（±0）、絶滅危惧 IB 類 20 種（＋1）、絶滅危惧Ⅱ類 25 種（＋3）、準絶滅危惧 59 種（+2）、情報不足 13 種（－5）と評価した。評価した種数の合計は 177 種（＋13）で、名古屋市産の昆虫の約 4.7%であった。種類数のあとの括弧内の数字は「レッドデータブックなごや 2015」からの増減である。またカテゴリーの上下したものもある。

今回の名古屋市レッドリストの改訂では、身近な里山やため池などに生息する種が評価され、全体で+11 とレッドリスト掲載種がわずかに増加した。

レッドリスト掲載種の評価には統一した観点が必要である。今回の改定に当たっては、専門研究者や同好者の意見をまとめ、名古屋市の現在の自然の実態を正確に表すように努めた。また、名古屋市のレッドリスト改訂のために 5 名の専門家調査員により 2 年間、様々な採集方法で現地調査が行われ、絶滅種は確実に絶滅と判定され、また「名古屋市版レッドリスト 2020」で絶滅危惧とされたものの幾つかは、新たに産地が発見されたり、採集条件によっては少なくないなどの新知見が出たりして、カテゴリーを下げた。

名古屋市には、市内で最初に発見され、名古屋市が模式産地となり、市の標本が完模式標本（ホロタイプ）となっている昆虫が次の 9 種ある。

キイロヤマトンボ、ナゴヤサナエ、ニホンアカジマウンカ、ヒメシジミガムシ、シワムネマルドロムシ、オオサワタマキノコ、ヒメアサギナガタマムシ、ヤマトヒメメダカカッコウムシ、ヒメカバナミシャク

このうち、オオサワタマキノコ、ヒメアサギナガタマムシ、ヒメカバナミシャク以外の種は、幾つかの県でレッドリストに挙げられ、水域の環境をよく表す種で、市内でも減少している種なので名古屋市のレッドリストにあげている。

研究が不十分な目（もく）や調査が不十分な目は、今回は除外した。またクツワムシ、タイコウチ、オオクワガタ、ガムシのような一般に良く知られた種や身近に生息している種、市民が関心を持っている種で、減少が明らかな種はなるべくとりあげた。

過去に記録があっても、実際に市域に発生したかどうか疑わしい種は除外した。例えば戦前にオオムラサキの記録があるが、市外からの飛来種の可能性があり、掲載しなかった。

名古屋市の絶滅危惧種を概観すると、多くがため池や湿地などの水域に関係するものであることが分かる。また草地環境に生息するものも比較的多く、堤防や原野などの草地環境の消滅がシルビアシジミを絶滅させ、草原性のチョウ目やバッタ目・コウチュウ目を減少させている。1960 年代に市東部で大発生したドクガ駆除の為に東部丘陵に農薬の空中散布がなされたが、その後のマツ枯れ対策の農薬散布とともにやむを得ない措置とはいえ、大きな影響を受けた昆虫は多いであろう。

（戸田尚希）

③　レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各昆虫類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（昆虫類）に関する凡例 】

分類群名等

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目および科の範囲と種の配列は原則として「日本昆虫目録 Catalogue of the Insects of Japan」（日本昆虫学会）を基に、既刊の図鑑等から新しい知見を加え整理した。

和名・学名

対象種の和名および学名を各頁上の枠内に記述した。和名および学名は、原則として「日本昆虫目録 Catalogue of the Insects of Japan」（日本昆虫学会）を基に、既刊の図鑑等から新しい知見を加え整理した

評価区分

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右上の枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち 2025」（愛知県, 2025）の愛知県での評価区分、および「環境省レッドリスト 2020」（環境省, 2020）の全国での評価区分も併記した。

評価理由

対象種が名古屋市版レッドリスト掲載種として評価された理由について記述した。

形態】

対象種の形態の概要を記述し、一部の種については写真を掲載した。

分布の概要

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査および文献調査によって確認された地域について、区ごとに着色して市内分布図として掲載した。なお、絶滅と判断された区域は ⋰⋰⋰⋰ で示した。トンボ類については、確認時期に応じて塗分けた。

生息地の環境／生態的特性

対象種の生息環境および生態的特性について記述した。

現在の生息状況／減少の要因

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

絶滅種については、【過去の生息状況／絶滅の要因】として、対象種の名古屋市における過去の生息状況、絶滅の主な要因について文献に基づき記述した。

保全上の留意点

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

特記事項

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

引用文献

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

関連文献

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

昆虫類　＜トンボ目アオイトトンボ科＞

コバネアオイトトンボ　*Lestes japonicus* Selys, 1883

評価理由

もともと産地は局地的で個体数も多くなかった。愛知県では 1980 年代から記録が絶えている。

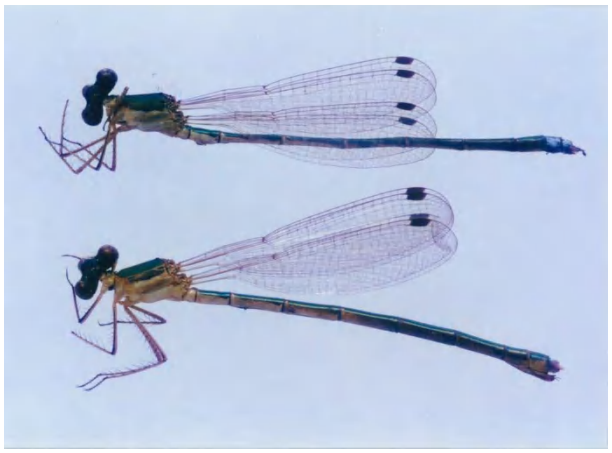
評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

成虫は体長 40mm 内外。金属緑色の同属 4 種の中では最も小型。本属はイトトンボ類の中では大型で体も太く頑丈である。本種は同属他種との区別がやや困難であるが、尾部下付属器で識別するのが一番良い。

幼虫の尾鰓の先端は丸みがあり、不鮮明な斑紋を有する。



コバネアオイトトンボ　上雄　下雌
千種区東山公園付近、1951 年 10 月 6 日、髙崎保郎　採集

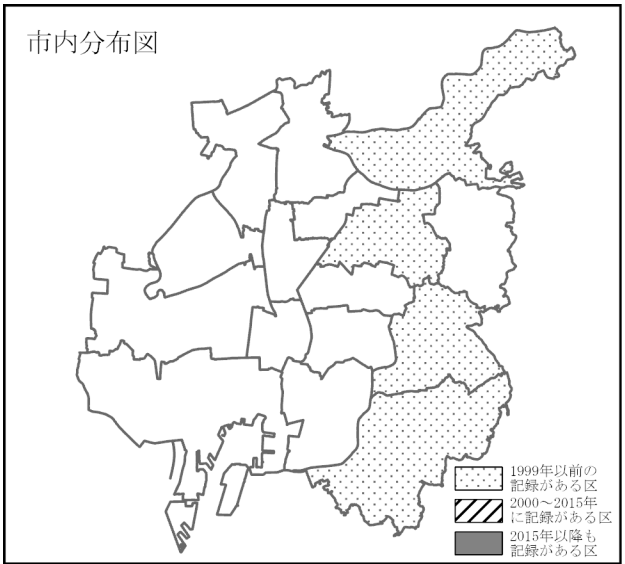
分布の概要

市内：千種区、守山区、緑区、天白区で局地的に記録されている。

県内：平地、丘陵に広く分布したが局地的である。

国内：本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国、ロシア沿海州。



生息地の環境／生態的特性

平地、丘陵地の抽水植物に富む水質の良い古い池沼に生息する。生息場所が局限される理由として、同属他種に較べ産卵管が脆弱なため産卵可能な抽水植物が限られることによるとする見方もある。成虫の出現期は 6～11 月である。

過去の生息状況／減少の要因

県内では 1980 年代以降確実な記録はない。市内ではより早期に姿を消している。全国的にも減少が著しい。

もともと僅かしかない生息可能な池沼の潰廃や改修等による環境変化、池沼周辺の環境悪化が減少要因である。

保全上の留意点

生息地の発見は不可能と断じてよい。一般論としては、本種の限られた生息可能な池沼の現状保全が必要である。

特記事項

未熟の同属他種を本種と誤認する例、写真のみの提示による不確実な報告例を見るので注意を要する。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目カワトンボ科＞

アオハダトンボ　*Calopteryx japonica* Selys, 1869

評価理由

1960 年代以降市内では確実な生息の記録がない。生息可能な河川環境がなく絶滅したと見られる。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	準絶滅危惧

形態

成虫は体長 57mm 内外。雄の体色は金属緑色。翅は雄では青藍色に輝き美しい。雌ではやや透き通り白色の偽緑紋を有する。

幼虫は 3 本の尾鰓が長く、普通種ハグロトンボの幼虫に酷似する。



アオハダトンボ　雌
守山区竜泉寺、1951 年 5 月 26 日、髙崎保郎　採集

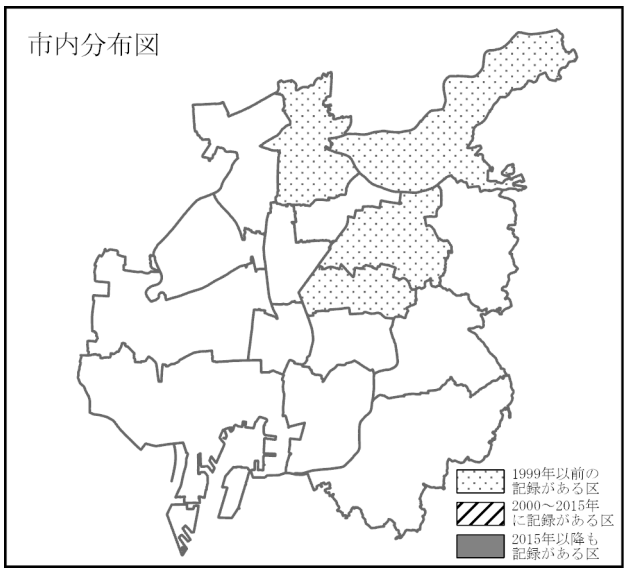
分布の概要

市内：千種区、北区、昭和区、守山区。

県内：主として西三河以東の丘陵、低山地に分布する。

国内：本州、九州。

世界：朝鮮半島、中国東北部、ロシアシベリア。



生息地の環境／生態的特性

丘陵から低山地にかけての、流水面にエビモなどの水生植物の葉が浮かび岸に抽水植物が生育する清澄な中小河川や、時に矢作川のような大河の緩流部に生息する。

局所的に産するが、産地では群をなして生殖活動を行う。

過去の生息状況／減少の要因

市内でもかつては清流であった山崎川や千種区内の水路、北区の庄内川畔などに生息していた。現在では市内で本種が生息可能な流水域は皆無である。

市街地やその近傍における清澄であった流水の顕著な水質悪化と、河川の人工排水路化により生息困難となり絶滅した。

保全上の留意点

市内では絶滅しているが、一般的には清澄な水質と植生豊かな流路の保全が必要である。

特記事項

多産する近似種ハグロトンボとは、雄の翅が青藍色に輝くこと、雌では目立つ白色の偽縁紋を有することで容易に区別できる。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目モノサシトンボ科＞

グンバイトンボ　*Platycnemis sasakii* Asahina, 1949

評価理由

本種の記録は 1936 年瑞穂区山崎川の記録のみである。市内ではそれ以降長期にわたり発見されず、飛来の見込みも全くない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

成虫の体長は約 40mm。体色は淡い黄緑色で腹部体節は環状の黒色。雄の中後脚が相撲の軍配のように白く広がる。

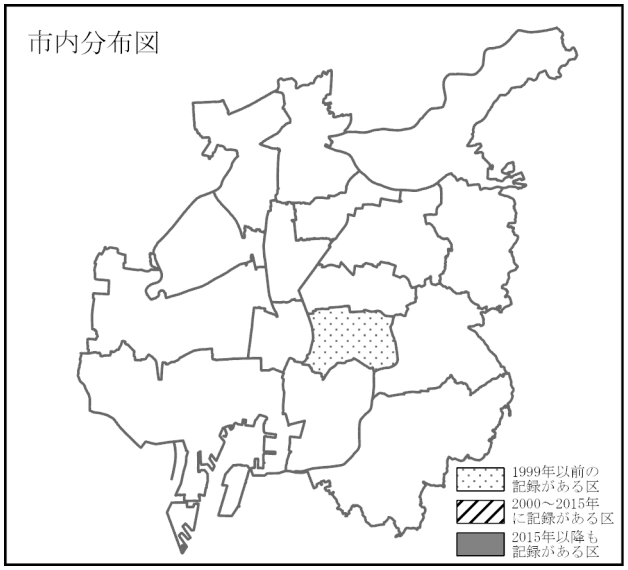
分布の概要

市内：瑞穂区に記録がある。

県内：木曽川、庄内川、矢作川流域に局所的に分布。

国内：宮城、福島、栃木、東京、静岡、愛知、岐阜、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫から西日本に広く分布。東日本での現存産地は数えるほど。

世界：中国北部。



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵地や低山地の、水質が良好で植生が豊かな河川中下流域、湧水や細流に生息する。

成虫の出現期は 4 月下旬から 9 月中旬。雄の中・後脚の軍配状の広がりが特徴で、雄同士の縄張り行動や配偶行動の際に大きく広げて威嚇や誇示をする。

過去の生息状況／減少の要因

市内での記録が一例のみで、先人に聞いても当時の生息状況は不明。山崎川は千種区の名古屋大学内鏡ヶ池から流れるが、都市化が進み水質も悪化している。堤防も整備され、本種が生息する見込みはない。

保全上の留意点

市では絶滅したが県内、全国の生息地も急速に減少している。河川整備に伴うコンクリート堤防造成が本種には大ダメージである。生息地では現状の環境を維持したい。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫 ・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫(上)，pp.9-78．愛知県．

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目イトトンボ科＞

ヒヌマイトトンボ　*Mortonagrion hirosei* Asahina, 1972

評価理由

極めて特殊な環境にしか生息しないため産地は局限される。市内生息地は消滅し絶滅した。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

成虫の体長 28mm 内外。雄の胸部は黒色の地に黄緑斑紋を有する。若い雌の胸部は橙色で、成熟すると汚褐色になる。雄胸部前面の 4 個の黄緑色の円紋は目立ち本種の特徴である。



ヒヌマイトトンボ　雄
愛知県愛西市葛木町（旧立田村）、1985 年 7 月 21 日、
髙崎保郎　撮影

分布の概要

市内：港区と南区の近接した場所で記録された。

県内：愛西市（旧立田村）に分布し、刈谷市で近年記録された。飛鳥村では消滅した。

国内：本州の東北地方南部以南、九州北東部に極めて局地的に分布する。

世界：台湾、中国。



生息地の環境／生態的特性

河川下流の汽水域のヨシ原の中の湿地状部に限って生息する。成虫はヨシ群落内に潜み、余り外部に出ず体駆も小型細身で見付けにくい。年 1 化で成虫の出現期は 6～8 月である。

過去の生息状況／減少の要因

市内唯一の堀川下流左岸の狭隘な産地は埋立てにより消滅し、本種は絶滅した。刈谷市の新産地は環境の変化により生息が確認できなくなっている。

汽水域で伏流水などのきれいな水で涵養された湿地という極めて特異な環境は、河川堤防の改修や堰の造成を始めとする環境変化で容易に失われ本種は生息できなくなる。

保全上の留意点

本市では絶滅したが、一般的には河川の汽水域のヨシ原中の湿地の保全が必要である。

特記事項

刈谷市の新産地は 2008 年に発見された。河川汽水域の丹念な調査により県内でも他の産地が見つかる可能性はないとは言えない。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
清水典之・鵜殿清文・鵜殿　茂，1972．名古屋市南区のトンボ 5 種の新産地と種類追加．佳香蝶，24(93): 73.
鵜殿清文，2009．愛知県でヒヌマイトトンボの新産地を発見．佳香蝶，61(237): 7.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目ヤマトンボ科＞

キイロヤマトンボ　*Macromia daimoji* Okumura, 1949

評価理由

かつては市内の庄内川水系に生息していたが、河川の汚濁と水辺環境の悪化により姿を消してから久しい。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	準絶滅危惧

形態

成虫は 78mm 内外。大型種。体は細身の黒色で鮮やかな黄斑を有する。普通種のコヤマトンボに似るが、腹部第 3 節の黄斑が背側と腹側に分断されることにより区別される。

幼虫は大型扁平で肢が長い。その先端の爪が明らかに長いことでコヤマトンボ幼虫と区別できる。



キイロヤマトンボ　雌
愛知県豊田市香嵐渓、1986 年 6 月 14 日、鵜殿清文　撮影

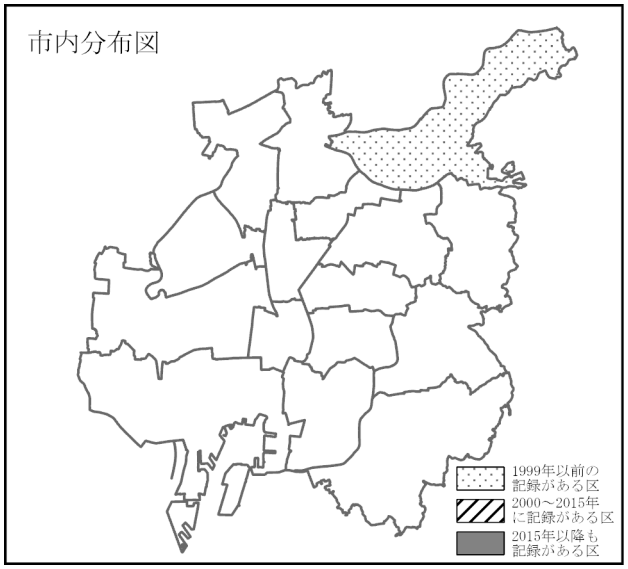
分布の概要

市内：守山区。

県内：主に三河の丘陵地、低山地に局所的に分布する。

国内：茨城県以西の本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、台湾、中国、極東ロシア、東南アジア。



生息地の環境／生態的特性

幼虫は丘陵、低山地の清冽な中河川の砂泥底に生息する。矢作川のような大河からも羽化する。若い個体は発生河川近くの開けた場所の中空を飛翔する。産地は局所的である。成虫の出現期は 6～9 月上旬である。

過去の生息状況／減少の要因

市内では砂泥底の清流という河川環境はなくなり、絶滅したと考えられる。近隣からの飛来も殆ど期待できない。中河川の水質悪化と人工化が著しい尾張平野では生息は望み得ないが、三河では矢作川水系、豊川水系の流域から何か所か生息地が知られている。

砂泥底の浅い緩やかな清流という幼虫のやや特殊な生息環境の衰失が絶滅の要因である。

保全上の留意点

市内では絶滅したと見られるが、一般的には中河川の中、下流域の砂泥底の清流という環境の維持が必要である。

特記事項

本種は故松井一郎氏により現守山区で採集された個体により 1949 年新種記載された。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目トンボ科＞

オオキトンボ　*Sympetrum uniforme* (Selys, 1883)

評価理由

もともと少なかった種であり、限られた産卵適地の衰退により、著しく減少した。市内での最終記録は 1973 年である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

成虫体長は 49mm 内外。本邦最大のアカトンボ。体は斑紋がなく橙黄色一色で翅は前後翅共淡橙色を呈し美しい。

幼虫は背棘を第 9 節にも有することが特徴。



オオキトンボ　雌
千種区東山、1950 年 7 月 9 日、髙崎保郎　採集

分布の概要

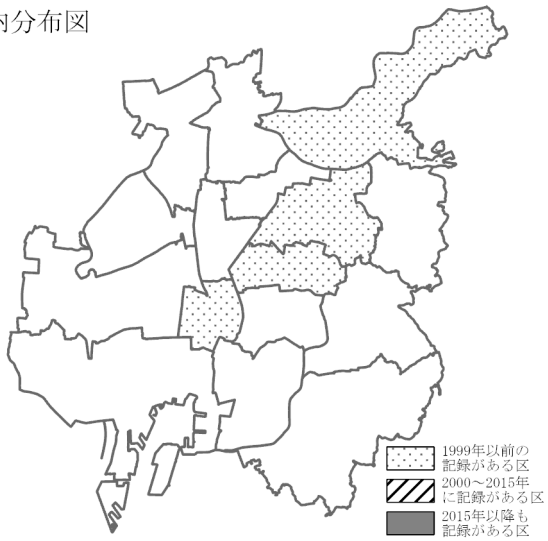
市内：千種区、昭和区、熱田区、守山区。

県内：尾張、三河平野部に分布した。東三河山地の記録もある。

国内：本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国、ロシア。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

開けた遠浅の大きな池で、池畔に草原を伴い、汀線内外に水生植物や丈の低い湿性植物が存在するような場所を好んで産卵する。

雄は汀線に沿ってパトロールし縄張りを形成する。移動分散性が強いと考えられる。

過去の生息状況／減少の要因

もともと生息地が限られ個体数も少なかった。県内での最後の安定的発生地は日進市の機織池であったが 1988 年を最後に没姿した。全国的にも産地は少ない。移動分散性が強いと考えられるので飛来の可能性はわずかにある。

保全上の留意点

産卵に適する環境を有する池沼の保全。現在は不在でも、生息可能な環境を有する池は飛来に備え現状を維持しておくことが必要である。

特記事項

ショウジョウトンボの雌や未熟雄が本種と誤認されることがあるので注意を要する。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp.350-361．同　目録，pp.94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
髙崎保郎，1987．名古屋市名東区及び日進町のため池の注目すべきトンボ 2 種．ため池の自然，(5): 3.

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目トンボ科＞

マダラナニワトンボ　*Sympetrum maculatum* Oguma, 1915

評価理由

もともと局地的に分布する本種は、近年全国的に急減してきた。市内では絶滅した。近隣からの供給も期待できない。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

成虫は体長 33mm 内外の小型種。アカトンボでありながら体は赤くならず黒化して、雄は黄から暗緑斑、雌は黄斑を有し翅の基部が橙黄色を呈する。

幼虫は小型で腹部側棘が長い。



マダラナニワトンボ　雄
守山区竜泉寺、1958 年 8 月 10 日、髙崎保郎　採集

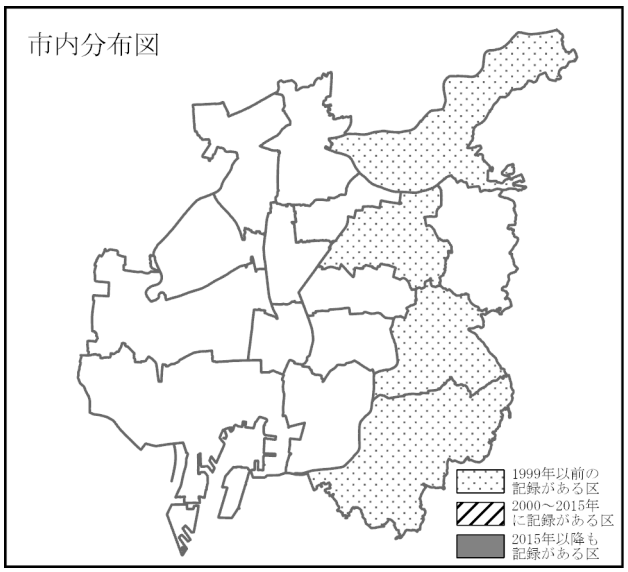
分布の概要

市内：千種区、守山区、緑区、天白区。

県内：尾張東部丘陵を主とし、三河の刈谷市、作手村でも記録されている。

国内：東北の日本海側秋田県以西、中部・関西を中心に広島県まで記録されている。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

丘陵のアカマツを主とする二次林内、林縁に所在する池沼を主な生息場所とする。遠浅で岸にはある程度の空間があり、日当りよく水生植物が繁茂し、汀線には丈の低い湿生植物が生育し、湿地状をなす条件の池沼を好む。中部、関西では池に、東北では湿地に生息する。

産卵は浅い水面又は岸の植生上か裸地に連結飛翔しながら卵を落下させる。晩秋全く干上がった池底へも産卵する。或る程度の移動分散力が認められる。成虫出現期は 7～11 月である。

過去の生息状況／減少の要因

市内では千種区赤坂町のような街に近い所でも生息していたが、1970 年代前半頃までに主として市街化により姿を消した。隣接する長久手市丘陵の安定した産地でも 1990 年代に見られなくなった。近年県内での産地は犬山市、豊田市西端丘陵の 2 か所しか知られていない。全国的に衰退が著しく、近年生息するとされるのは東北から関西までの 8 県 20 か所足らずに過ぎない。

生育に適する池沼の消滅、植生遷移などの生息環境変化などが減少要因である。

保全上の留意点

本市では絶滅しているし、保全対象となる良好な生息適地も見当たらない。一般的には本種が残存する生息地の現状維持が必要である。草刈りによる湿地草本の高茎化防止は有効とされている。

特記事項

本種は既に 100 年以上前、尾張藩士吉田平九郎（雀巣庵、1895 年没）により現千種区で発見されている。

関連文献

安藤　尚，2009．アカトンボ愛知と岐阜の記録．pp.96-99．自刊．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
二橋　亮，2013．マダラナニワトンボ部会 2012 年度活動報告．Pterobosca，(18B): 38.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目トンボ科＞

ベッコウトンボ　*Libellula angelina* Selys, 1883

評価理由

市内での最終記録は 1991 年、愛知県では 2004 年以来長期にわたり発見されず、近県からの飛来定着の可能性もまずない。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 IA 類

形態

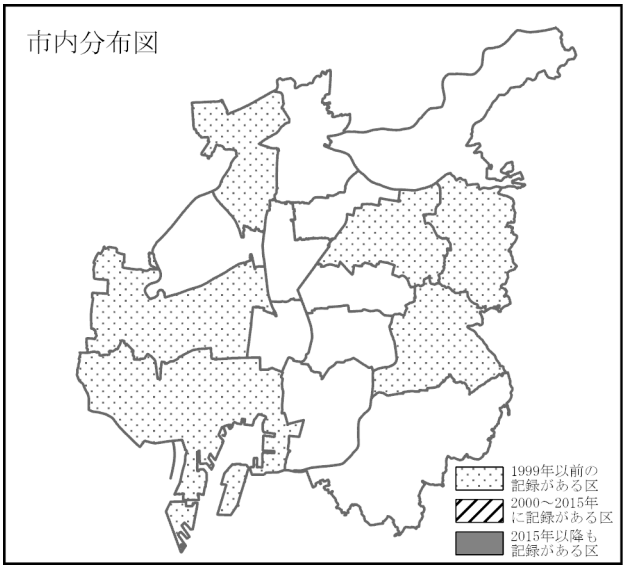
成虫の体長は 42mm 内外。未熟雄と雌は黄褐色であるが、成熟雄は濃黒褐色になる。ずんぐりした体躯。前後翅の基部、結節部、縁紋付近に黒褐色斑と前縁に沿う淡橙黄色条を有する。



ベッコウトンボ　雌
名東区猪高町上社猪高緑地、1987 年 5 月 21 日、
髙崎保郎　採集

分布の概要

市内：千種区、西区、中川区、港区、名東区、天白区。
県内：尾張、三河の平野部から丘陵にかけて局地的であるが広く分布した。
国内：静岡県、山口県、福岡県、大分県、鹿児島県。
世界：朝鮮半島、中国。



生息地の環境／生態的特性

海岸近くのヨシ原を含む低地から丘陵地に所在する池沼に生息する。共通する環境は、透視度 50cm 以上の比較的良好な水質と泥底であること、水深の浅い部分がある程度の面積を有し、そこには生長過程の丈の低い疎なヨシ、ヒメガマ、マコモ等の抽水植物群落が存在すること、池の周りに草地を伴うことなどである。

成虫の出現期は 4 月下旬から 5 月一杯の短期間。移動分散力は標準的には 300m～2km、長い場合は 8～10km 程度と推定される。マーキングにより確認された最長距離は 17km である。一時的な定着はこのような移動分散に起因するとみられる。

過去の生息状況／減少の要因

名古屋における最終飛来と推定されるのは千種区茶屋ヶ坂公園の 1991 年、一時的定着地からの最後の発生は名東区猪高緑地の 1988 年である。愛知県では知多半島常滑市での 2004 年の生息が最後である。1980 年代末の本市や日進市における一時的定着の飛来源と推定された同半島方面の多産地での発生もなくなり、本市への供給も全く期待できなくなった。全国的にみても、本州 2 県、九州 3 県内で局地的に残存するのみである。

もともと数少ない生息適地たる池沼の消滅が主因であろうが、全国的に絶滅がほぼ同時進行した原因は定かではない。

保全上の留意点

市内では絶滅しているが、一般的には生息に適する限られた条件の池沼の法的強制力も伴う保全が望まれる。また、アメリカザリガニの幼虫捕食圧も看過し得ない原因と見られている。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
髙崎保郎，1997．ため池の衰退を反映するベッコウトンボの滅亡．ため池の自然，(26): 1-6.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜カメムシ目コオイムシ科＞

タガメ　*Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy, 1864)

評価理由

各地で普通に見られたが、水田における農薬使用で個体数が激減した。さらに、ため池などの生息水域が埋め立てられ、生息地そのものが消滅し、都市化が進む平野部から姿を消した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

体長 48～65mm と本州産水生半翅類では最大の種である。体色は、灰褐色～褐色をしており、前脚は強大な捕獲脚となっている。



矢崎充彦　撮影

分布の概要

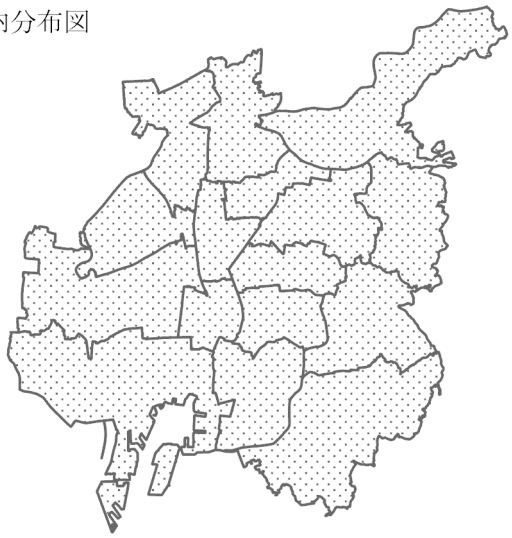
市内：かつてはどこにでも見られた普通種であったため、正式な記録が残されていない。

県内：新城市、豊川市、豊田市、岡崎市、西尾市、瀬戸市、尾張旭市、春日井市、犬山市など。

国内：北海道、本州、隠岐、四国、九州、対馬、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。

世界：ロシア極東（沿海州、サハリン）、中国、朝鮮半島、台湾。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

主として抽水植物の豊富なため池などに生息し、水田地帯の水路や休耕田で泥が堆積した水たまりなどでも見られる。

雌は水面上の植物体などに産卵し、雄は孵化するまで卵塊を保護する。しばしば灯火に飛来する。

過去の生息状況／減少の要因

平野部から丘陵地にかけて普通に見られた種であるが、名古屋市付近では絶滅して久しい。近年は、西三河および東三河地域の丘陵帯で確認されている。

水田では農薬の使用、池沼では水質の悪化や埋め立てによって減少した。最近では、ペット業者による乱獲も心配される。

保全上の留意点

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復・復元を待つ必要がある。

特記事項

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律により特定第二種国内希少野生動植物種に指定されている。

関連文献

浅岡孝知・家城　司，1990．愛知県の異翅目．愛知県の昆虫（上），pp.123-162．愛知県．

Perez Goodwyn, P. J., 2006. Taxonomic revision of the subfamily Lethocerinae Lauck & Menke (Heteroptera: Belostomatidae). Stuttgarter Beiträge zur Naturkunde Serie A (Biologie), 695:1-71.

矢崎充彦・石田和男，2008．東海地方の水生半翅類．佳香蝶，60(234): 165-200.

（矢崎充彦、澤田宗一郎）

昆虫類　＜カメムシ目ナベブタムシ科＞

トゲナベブタムシ　*Aphelocheirus nawae* Nawa, 1905

評価理由

全国的にも生息地が限定され、主に平野部の河川に生息するため、水質悪化や河川改修などで激減した。県内では 1940 年代の古い記録しか存在せず、市内では昭和区山崎川における記録しかない。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅
愛 知 県 2025	絶滅
全　　国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

体長 9～10mm の偏平な体型で、前胸背と腹節の側縁は、顕著に後方に突出する。

通常は短翅型であるが、稀に長翅型が出現する。



矢崎充彦　撮影

分布の概要

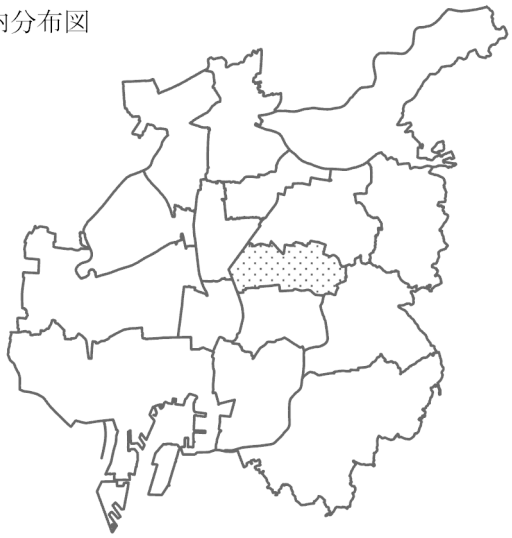
市内：昭和区石川橋付近（山崎川）が唯一。

県内：西尾市八面、春日井市勝川橋付近（庄内川）のみである。

国内：本州、九州。

世界：ロシア（極東、東シベリア）、カザフスタン、朝鮮半島。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

平野部から丘陵地の河川で、底質が砂や細かい礫の早瀬に生息する。

プラストロン呼吸により、終生水中で生活する。

過去の生息状況／減少の要因

かつて山崎川に多産したとされるが、生息地はコンクリート護岸の単調な都市河川と化し、1940 年代の報告を最後に、県内から発見されていない。

主として平野部の河川に生息するため、水質悪化や河川改修の影響を受け、激減したものである。

保全上の留意点

現在残された自然状況に近い平野部の河川環境をそのまま維持し、自然状態での回復・復元を待つ必要がある。

関連文献

長谷川道明，2006. 穂積俊文博士から寄贈された名古屋市産トゲナベブタムシの標本について．豊橋市自然史博研報，(16): 55-57.

（矢崎充彦）

昆虫類　＜コウチュウ目ミズスマシ科＞

ミズスマシ　*Gyrinus* (*Gyrinus*) *japonicus* Sharp, 1873

評価理由

かつて北海道から九州にかけて普通に見られた種であるが、近年水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が無くなり絶滅した。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 II 類

形態

体長 6.0～7.0mm。体型は長卵形で黒色。背面はにぶい光沢がある。



豊田市足助町、1993 年 11 月 1 日、戸田尚希　採集

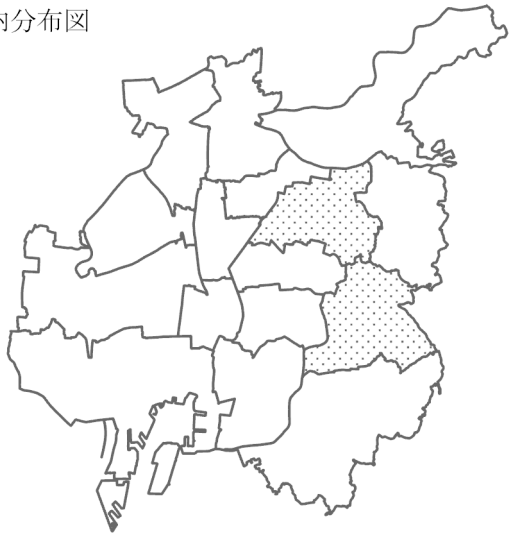
分布の概要

市内：天白区、庄内川、東山公園（すべて吉鶴ほか，2008）。

県内：豊田市、設楽町、瀬戸市、犬山市（佐藤，1990）。

国内：北海道、本州、四国、九州、千島。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

ある程度の水深があるため池などの場所で、開放水面のある水域に生息する。

過去の生息状況／減少の要因

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。

保全上の留意点

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

引用文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上）, pp.204-231. 愛知県.

吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編　自然　目録，pp.102-156. 名古屋市.

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑 Ⅱ，pl.37,pp.202-203. 保育社，大阪.

戸田尚希・長谷川道明・市川靖浩・池竹弘旭・蟹江　昇，2020. 愛知県の甲虫目録 6. 佳香蝶，72(282): 54-60.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ミズスマシ科＞

コミズスマシ　*Gyrinus* (*Gyrinus*) *curtus* Motschulsky, 1866

評価理由

かつて北海道から九州にかけて普通に見られた種であるが、近年水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が無くなり絶滅した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

体長 4.9～5.6mm。成虫は水面の上下を同時に見られるように複眼が分かれ、脚は扁平で水面を高速で泳ぎ回れるようになっている。比較的小型。



豊田市足助町、1993 年 11 月 1 日、戸田尚希　採集

分布の概要

市内：緑区（佐藤，1990）。

県内：豊田市（足助町）。

国内：北海道、本州、四国、九州、千島。

世界：サハリン。



生息地の環境／生態的特性

ある程度の水深があるため池などの場所で、開放水面のある水域に生息する。

過去の生息状況／減少の要因

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。

保全上の留意点

市内のため池では、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

特記事項

ミズスマシと似ているが、体長は少し小さく、区別には慎重を要する。

引用文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上）, pp.204-231. 愛知県.

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑 Ⅱ，pl.37,pp.202-203. 保育社，大阪.
新修名古屋市史資料編編集委員会（編），2008. 昆虫類. 新修名古屋市史資料編　自然，pp.102-156. 名古屋市.
戸田尚希・長谷川道明・市川靖浩・池竹弘旭・蟹江　昇，2020. 愛知県の甲虫目録 6. 佳香蝶，72(282) : 54-60.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

ルイスツブゲンゴロウ　*Laccophilus lewisius* Sharp, 1873

評価理由

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が無くなり、絶滅したと考えられる

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。



豊田市上高町、2012 年 6 月 30 日、戸田尚希　採集

分布の概要

市内：港区、中区、北区、名東区（すべて吉鶴ほか，2008）。

県内：豊田市、美浜町（佐藤，1990）。

国内：本州、四国、九州。

世界：中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。局地的な分布をする種である。

過去の生息状況／減少の要因

全国的にも減少傾向であり、局地的に分布することから発見されにくく、近年の記録は見当たらず、絶滅したと考えられる。

保全上の留意点

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

特記事項

多くの池ではクロホシコガシラミズムシと共に見つかる。

引用文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上）, pp.204-231. 愛知県.
吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編　自然　目録，pp.102-156. 名古屋市.

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.34,p.190. 保育社，大阪.
森　正人・北山　昭，2002. 改訂版　図説　日本のゲンゴロウ. 文一総合出版，東京.
戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024. 愛知県の甲虫目録 11(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科). 佳香蝶，76(300):54-99.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

シマゲンゴロウ　*Hydaticus* (*Guignotites*) *bowringii* Clark, 1864

評価理由

平野部では普通に見られた種であるが、水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が無くなり絶滅した。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長 13～14mm。体は卵形でよく膨張し、光沢がある。頭・前胸背は淡黄褐色で、それらの後縁中央は黒色。上翅は黒色で、中央と側縁部近くに淡黄縦状があり後方で合一し、基部に円紋がある。体下面は黄～赤褐色。



豊田市川下町、1995 年 9 月 4 日、戸田尚希　撮影

分布の概要

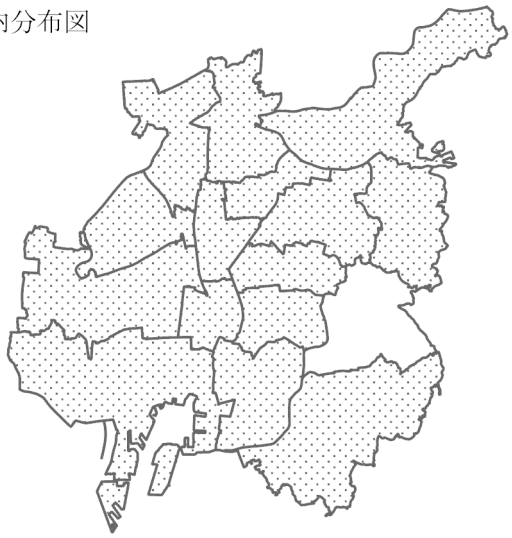
市内：守山区吉根（蟹江・長谷川，2001）、港区土古町（蟹江・長谷川，2001）、千種区東山公園。

県内：豊田市ほか、平野部の池を主体に広く分布していたが、現在では丘陵部に残された池や水田に生息しているにすぎない。

国内：北海道、本州、四国、九州、トカラ列島。

世界：中国、台湾、朝鮮半島。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

各種の池、水田などの比較的いろいろな水域に生息していた。夏期にはよく灯火へも飛来する。

過去の生息状況／減少の要因

平野部からは姿を消し、丘陵地でも水田の放棄、池の消失、汚水の流入などによって絶滅したと考えられる。

保全上の留意点

残っている自然度の高い池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。

引用文献

蟹江　昇・長谷川道明，2001．甲虫類–東海地方を例に–．ため池の自然–生き物たちと風景，pp.15-164．信山社サイテック．

関連文献

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生動物　–レッドデータブックあいち 2009–　動物編，p.298．同県環境部自然保護課．
森　正人・北山　昭，1993．日本のゲンゴロウ，p.143．文一総合出版，東京．
佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ），愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．
戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024．愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科)．佳香蝶，76(300): 54-99.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

クロゲンゴロウ　*Cybister* (*Melanectes*) *brevis* Aubé, 1838

評価理由

平野部では普通に見られた種であるが、水田が減り小さなため池もなくなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息地も無くなり絶滅した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 II 類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長 20～25mm。体は卵形。背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で光沢がある。体下面は暗赤褐色で、腹部第 3～4 節の両端に黄褐小粒を具える。上翅には 3 点刻裂があり、翅端近くに小さな黄褐紋がある。



豊田市上切町、1999 年 4 月 18 日、戸田尚希　撮影

分布の概要

市内：千種区茶屋ヶ坂（蟹江・長谷川，2001）、港区土古町（蟹江・長谷川，2001）。

県内：豊田市、設楽町。かつては平野部の水域に多く見られたが、現在では山間部に残された僅かな池にのみ生息する。

国内：本州、四国、九州。

世界：中国、朝鮮半島。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

水生植物の生えた池沼、水田などかなり広い水域に適応している。幼虫は 5～8 月に見られ、成虫は 8～9 月に出現し、成虫で越冬する。

過去の生息状況／減少の要因

平野部での自然度の高い池の亡失、水田の圃場整備によって絶滅したと考える。

保全上の留意点

残っている自然度の高い池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水域環境を作ることが望まれる。

引用文献

蟹江　昇・長谷川道明，2001．甲虫類–東海地方を例に–．ため池の自然－生き物たちと風景，pp.15-164．信山社サイテック，東京．

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231，愛知県農地林務部自然保護課．

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　–レッドデータブックあいち 2009–　動物編，p.293．同県環境部自然保護課．

戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024．愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科)．佳香蝶，76(300): 54-99.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

ゲンゴロウ　*Cybister* (*Scaphinectes*) *chinensis* Motschulsky, 1854

評価理由

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 II 類

かつて人里で普通にみられた種でありながら、高度経済成長期を境に全国的に急速に減少した。市内でも少なくとも 1950 年代までは各地にみられ、標本も残されている。しかし 40 年以上にわたって生息情報はなく、生息環境もほとんど残されていない。また、県内に数えるほどしか残されていない生息地からも遠く離れており、自力で分布を回復できる可能性は極めて低いことから市内では絶滅したと考えられる。

形態

扁平な卵型。背面は緑がかった黒色で、側縁は黄色に縁取られる。脚、腹部は黄色。

体長は 34～42mm。



採集地等不明

分布の概要

市内：千種区茶屋ヶ坂、港区土古町の記録があるが、いずれも 1960 年以前のものである。

県内：少なくとも 1950 年代までは、広く分布していたものと推測されるが、現在は三河地方に数か所の生息地が残るのみ。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、台湾、中国、シベリア。



生息地の環境／生態的特性

ヒルムシロ、オモダカなどの水草の多い池や沼に生息し、かつては水田でも見られた。

過去の生息状況／減少の要因

大型で目立つ種でありながら 40 年以上にわたって生息情報がなく、市内では絶滅したものと考えられる。

絶滅の要因としては、生息地である池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅および農薬、生活汚水などによる水質の悪化が考えられる。

保全上の留意点

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

関連文献

長谷川道明，2001．穂積先生のコレクション．穂積俊文博士記念論文集，pp.365-368.

穂積俊文・佐藤正孝，1957．東海甲虫誌（第 3 報）．佳香蝶，9(31):1-10.

戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024．愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科)．佳香蝶，76(300):54-99.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

コガタノゲンゴロウ　*Cybister* (*Cybister*) *tripunctatus lateralis* Fabricius, 1798

評価理由

かつて人里で普通にみられた種でありながら、高度経済成長期を境に全国的に急速に減少した。市内でも少なくとも 1950 年代までは各地で見ることができ、標本も残されている。しかし県内を含む中部地方全域を見渡しても近年の生息情報はない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

ゲンゴロウとよく似るが、一回り小型で、腹面は暗赤褐色となる。

体長は 24～29mm。



採集地等不明

分布の概要

市内：西区、港区土古町、守山区の記録があるが、いずれも 1970 年以前のものである。少なくとも 1960 年代までは、市内に広く分布していた。

県内：平野部～低山地の温暖な地域を中心に分布していたものと推測されるが、低温に弱い南方系の種であるため、はたして県内で越冬していたかについては疑問がある。

国内：本州、四国、九州、南西諸島、小笠原諸島。

世界：アジア、アフリカ、オーストラリアにかけて広く分布する種で、7 亜種に分類されている。このうち台湾、朝鮮半島、中国に日本産と同じ亜種が分布するとされる。



生息地の環境／生態的特性

平地から低山地の水生植物の生えた池、沼、水田など生息する。

過去の生息状況／減少の要因

東海地方では絶滅したと考えられるが、九州では分布の拡大が確認され、数年前では三重県でも見つかっている。

沿岸域を中心に東南アジア～アフリカに広く分布する南方系の種であるため、今後再侵入の可能性もある。

保全上の留意点

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

関連文献

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12): 49-53.

穂積俊文・佐藤正孝，1957．東海甲虫誌（第 3 報）．佳香蝶，9(31):1-10.

戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024．愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科)．佳香蝶，76(300): 54-99.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

マルガタゲンゴロウ　*Graphoderus adamsii* (Clark, 1864)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

平野部を中心に分布する中型のゲンゴロウで、かつては比較的普通種であったが、高度経済成長期あたりを境に全国的に減少している。市内からも記録があり、標本も残されていることからかつて生息していたことは間違いないが、長らく生息情報が途絶えている。

形態

卵形、前胸背は黄褐色で、前後縁に黒帯がある。上翅は、黄色地に黒色の細かい網目模様がある。

体長は 12～14.5mm。



採集地等不明

分布の概要

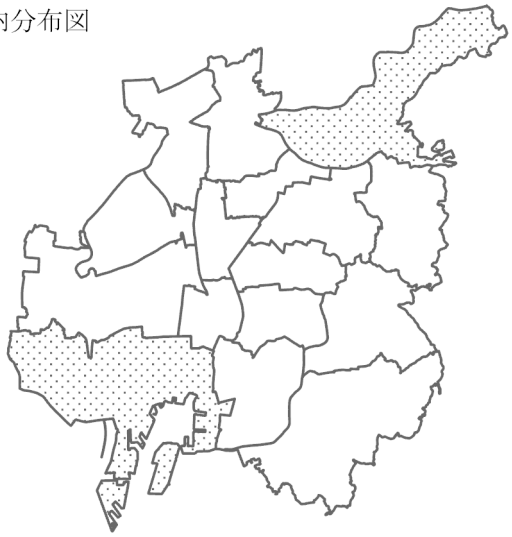
市内：港区土古町（穂積・佐藤，1957）、守山区（長谷川，2002, 採集年は 1959 年）の記録がある。

県内：豊田市。

国内：北海道、本州、四国、九州。

近隣地域では、三重県内にまだ生存している。

世界：朝鮮半島、中国など。



生息地の環境／生態的特性

平地や丘陵地の水田、湿地、池、沼などに生息する。

過去の生息状況／減少の要因

市内の記録は、1960 年以前のもので、現在は絶滅している可能性が高い。絶滅の要因としては、生息地である池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅および農薬、生活汚水などによる水質の悪化が考えられる。

保全上の留意点

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

関連文献

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12):49-53.

穂積俊文・佐藤正孝，1957．東海甲虫誌（第 3 報）．佳香蝶，9(31):1-10.

戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024．愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科)．佳香蝶，76(300): 54-99.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

スジゲンゴロウ　*Hydaticus bipunctatus* WEHNCKE, 1876

評価理由

かつては比較的普通にみられた種であったとされるが、おそらく高度経済成長期を境に急速に減少し、現在では全国的に生息情報が得られなくなっている。市内では、1950 年代以前にはしばしば採集され記録や標本が残っているが、1960 年代以降の生息情報がない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅

形態

体型は長めの卵型。黒色で、頭部前半部と前胸側部は黄色、上翅の両側には 2 条の黄色の縦条があり、中央後方で融合する。

体長は 12～14.5mm。



採集地等不明

分布の概要

市内：西区名城公園、港区土古町（穂積・佐藤, 1957）、守山区（穂積・佐藤, 1957 ; 長谷川，2002）の記録がある。

県内：瀬戸市、安城市の記録がある。

国内：関東以西の本州、四国、九州、トカラ列島（中之島）。

世界：台湾、中国、フィリピン、東南アジアに広く分布する。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

水草の繁茂した池や沼。かつては水田にも生息していた。

過去の生息状況／減少の要因

市内に残る最も新しい記録ならびに標本が 1959 年に守山区で採集されたものである。この年、同地では 7 月から 8 月にかけて採集された 6 個体の標本が残されている。それ以降の採集記録など生息情報に関する記録は途絶えている。この守山区での記録は、灯火に飛来したもので、生息していた水域を特定することはできないが、1959 年当時と現在では採集地周辺の環境は激変しており、現在も生息環境が残されている可能性は極めて低い。また、県全体をみわたしても本種の生息情報はなく、市内では絶滅したと判断せざるを得ない。池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅および農薬、生活汚水などによる水質の悪化が市内での絶滅の原因であると考えられる。また、東南アジアに広く分布する南方系の種であることから、特に沿岸部において生息可能な池・沼が消失したことが、本種の分布拡散、回復を阻害している可能性がある。

保全上の留意点

生息環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

関連文献

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類，豊橋自然史博物館研報，(12):49-53.

穂積俊文・佐藤正孝，1957．東海甲虫誌（第 3 報）．佳香蝶，9(31):1-10.

戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024．愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科). 佳香蝶，76(300): 54-99.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

マダラシマゲンゴロウ　*Hydaticus* (*Guignotites*) *thermonectoides* Sharp, 1884

評価理由

全国的にも生息域が限定された種で、現在までに知られる生息地のほとんどは愛知県と近畿地方に偏っている。市内からも記録があり、標本も現存しているが、50 年以上にわたって生息に関する情報が得られず、また生息環境も残されていない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧 IA 類

形態

卵型。淡い黄褐色で、現在でも普通に生息するコシマゲンゴロウに似るが、背面の模様はスジ状にならず、中央下方付近に黒帯状の紋が出現する。

体長は 9～10mm。



採集地等不明

分布の概要

市内：守山区（長谷川, 2002, 採集年は 1959 年）の記録がある。

県内：もともと稀な種で、美浜町（佐藤, 1971）が知られるのみである。

国内：本州にのみ分布する。基準産地は長野県であるが、その後の記録は、愛知県および近畿地方に限られている。

世界：中国、朝鮮半島。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

水がきれいで、冷たい貧栄養な止水域が生息環境と考えられている。

過去の生息状況／減少の要因

守山区の記録は、灯火に飛来したもので、生息していた水域を特定することはできない。ただし、採集された 1959 年当時と現在では採集地周辺の環境は激変しており、現在も生息環境が残されている可能性は極めて低い。もともと生息水域が限定される少ない種であったことに加え、池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅および農薬、生活汚水などによる水質の悪化が市内での絶滅の原因であると考えられる。

保全上の留意点

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

関連文献

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12):49-53.

佐藤正孝，1971．知多半島の水生甲虫類．日本昆虫学会東海支部報，24:2-3.

戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024．愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科). 佳香蝶，76(300): 54-99.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

カワラハンミョウ　*Chaetodera laetescripta laetescripta* (Motschulsky, 1860)

評価理由

河川や海岸の砂地を生息地とする種であることから、生息環境の消滅により全国的に減少している。市内では守山区庄内川河川敷に生息していた。比較的目立つ種でありながら、40 年以上にわたって生息情報が途絶えており、また生息環境も残されていないことから、絶滅したものと考えられる。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

暗緑色で、上翅には白紋があり、互いの白紋は外縁に沿って融合する。白紋の発達程度は、個体、地域によって変異が多い。

体長は 14～17mm。



矢崎充彦　撮影

分布の概要

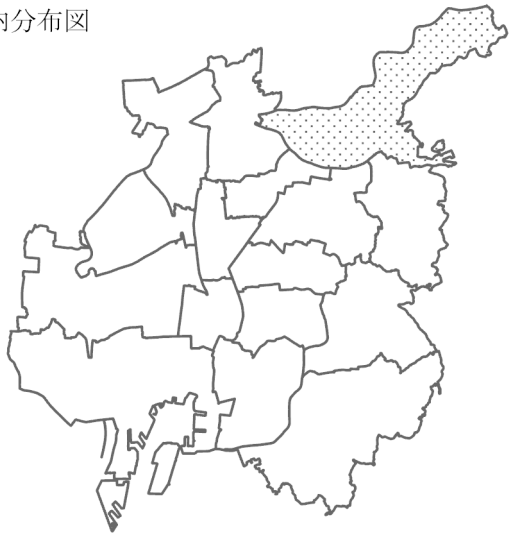
市内：守山区竜泉寺下の庄内川河川敷で採集されたという記録がある（穂積，1955）。

県内：他に尾西市～八開村にかけての木曽川河川敷、内海海岸、伊良湖岬から記録があるが、いずれも現在生息確認ができなくなっている。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、済州島、中国、サハリン、モンゴル、シベリア南東部。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

河川、海岸の砂浜に生息する。

過去の生息状況／減少の要因

市内で採集記録が残されている竜泉寺下付近の庄内川河川敷はかつて良好な砂地が広範囲に存在しており、1950 年代には少ないながら生息していた。しかしその後長く生息に関する情報がなく、同地の環境も悪化した。市内に本種が生息しうるような環境は他に残されていないため、絶滅したと考えられる。絶滅の要因としては、砂防堤などの設置による砂地の減少、河川敷の公園、緑地化による生息地の消滅があげられる。

保全上の留意点

生息環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

関連文献

長谷川道明，2001．穂積先生のコレクション．穂積俊文博記念論文集，pp.365-368.
穂積俊文，1955．東海甲虫誌（1）．佳香蝶，7(26): 24-26.
戸田尚希・長谷川道明・蟹江　昇，2019．愛知県の甲虫目録 3．佳香蝶，71(277) : 1-11.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

ヒトツメアオゴミムシ　*Callistoides deliciolus* (Bates, 1873)

評価理由

市内では平野部の草地や河川敷などに生息していたが、宅地化や河川敷の改修などにより生息地が無くなり、見られなくなった。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

10-11.5mm。前胸，脚は赤く、上翅側縁の黄色部は翅端に達しない。



採集地等不明

分布の概要

市内：西区矢田川（戸田，2022）。

県内：春日井市篠木，春日井市坂下町，小牧市小牧山，瀬戸市定光寺（岩崎・蟹江，1990）

国内：本州、四国、九州（上野ほか，1985）



生息地の環境／生態的特性

平地から低山地の草地、河川敷や河畔林の林縁などに生息する。

過去の生息状況／減少の要因

市内からの記録は、いずれも古いもので、かつて生息確認がされていた場所に現在も生息する可能性は極めて低いと思われる。

減少の要因としては、河川の汚れ、改修によって生息環境の草地が消失したことが大きいと推定される。

保全上の留意点

林から続くある程度面積のある草地環境の保全が必要で、市内の緑地公園でも草地を増やす必要がある。

引用文献

岩崎　博・蟹江　昇，1990．愛知県のオサムシ類．愛知県の昆虫．309：338．愛知県農地林務部自然保護課．

戸田尚希，2022．桂川 基久男氏の蒐集したゴミムシ類．佳香蝶，74(290): 44-45.

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編著，1985．原色日本甲虫図鑑（Ⅱ）．保育社，大阪．

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

カワラゴミムシ　*Omophron* (*Omophron*) *aequale aequale* Morawitz, 1863

評価理由

汚れのない河川の砂地に生息する種で、かつては市内にも生息していたが、河川の汚れ、河川敷の改修により生息地が壊滅状態にあり、市内から絶滅しているものと考えるのが妥当である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

形態

体型は円形で、鮮やかなオレンジ色、頭部は広く緑色を帯びた金属色。前胸中央部に長円形、上翅にはやや複雑な 3 条の緑色を帯びた金属色の紋がある。

体長は 5.5～6.5m



採集地等不明

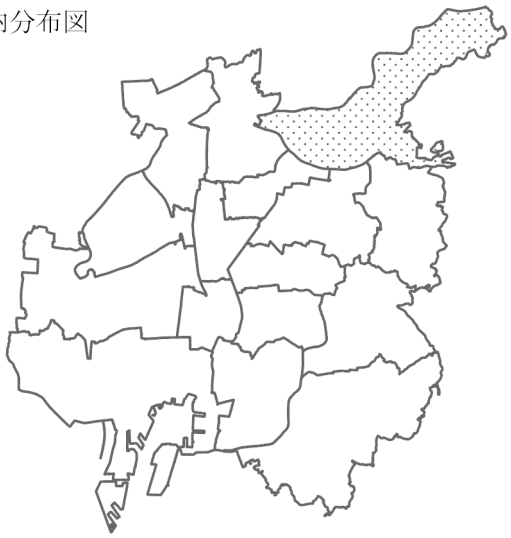
分布の概要

市内：守山区吉根、竜泉寺、瑞穂区雁道、東区の矢田川で記録がある。

県内：旧弥富町、旧足助町、旧旭町で記録がある。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、ロシア沿海州、中国。



生息地の環境／生態的特性

河川や湖などの砂地に生息する。県内での生息地は、河川の中流域から下流域（庄内川、矢田川、矢作川）、河口部（弥富市）であるが、上流域のごく狭い砂地にも生息する。

過去の生息状況／減少の要因

市内からの記録は、いずれも古いもので、河路（1981）の守山区吉根から記録が最後であり、かつて生息確認がされていた矢田川でも絶滅したと判断した。減少の要因としては、河川の汚れ、改修によって生息環境である砂地が消失したことが大きいと推定される。

保全上の留意点

生息環境の確保が最小限必要である。現在最も生息の可能性が高い守山区内の庄内川においては特に河川敷環境の保全が必要である。

引用文献

河路圭吾，1981．庄内川で採集したカワラゴミムシ．佳香蝶，33(126): 31.

関連文献

穂積俊文，1955．尾張地方の甲虫相．新昆虫，8(11): 36-38.
戸田尚希・長谷川道明・蟹江　昇，2018．愛知県の甲虫目録 2．佳香蝶，70(273) : 1-3.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

フタモンマルクビゴミムシ　*Nebria* (*Eunebria*) *pulcherrima pulcherrima* Bates, 1873

評価理由

河川の中下流域の礫と砂が混じるような環境に生息する種で、市内では庄内川に確実に生息していた。しかし 1975 年に採集されたという情報を最後に生息情報が途絶えてしまっていることから、絶滅と判断した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

赤褐色で上翅中央下部に一対の特徴的な大きな黒紋がある。前胸は心臓形で側縁は基方で強く湾曲し、上翅の第 3 間室には背面に剛毛孔点がない。

体長は 11～12.5mm。



採集地等不明

分布の概要

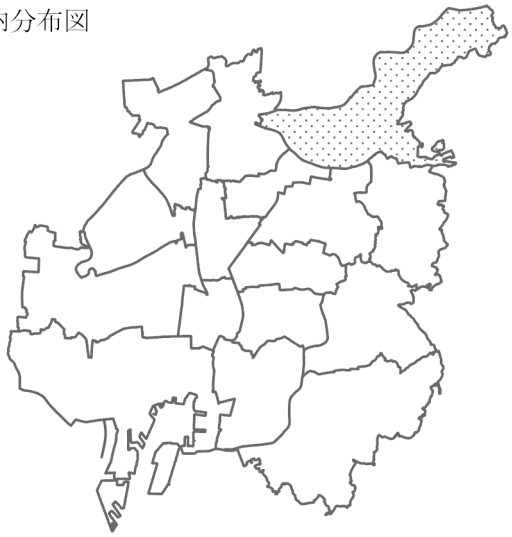
市内：守山区竜泉寺付近の庄内川河川敷で採集記録があるほか、西区の庄内川河川敷でも採集されたという情報が寄せられている。

県内：この外に記録は知られていない。

国内：本州、四国、九州。

世界：中国、台湾。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

河川敷に生息する。礫と砂が混じるような環境を好む。

過去の生息状況／減少の要因

市内からの記録は、いずれも古いものである。現在は河川改修により、生息環境は悪化しているが、庄内川には砂礫環境も残されている。

保全上の留意点

生息環境の確保が最小限必要である。また同時に生活史の解明など本種についての詳細な調査研究を進め、減少の要因と保護の方法について模索する必要がある。

関連文献

長谷川道明，2001．穂積先生のコレクション．穂積俊文博記念論文集，pp.365-368.
穂積俊文，1960．東海甲虫誌（9）．佳香蝶，12(41): 17-23.
穂積俊文ほか，1975．庄内川の昆虫，40pp,12pls．建設省庄内川工事事務所.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

キベリマルクビゴミムシ　*Nebria* (*Paranebria*) *livida angulata* Bänninger, 1949

評価理由

平野部を中心に分布する種で、市内からは守山区竜泉寺、天白区八事付近で採集された記録があるが、いずれも古いもので、近年その生息が確認できなくなっている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

頭部は黒色、前胸背は前後縁部を除いて黄褐色、上翅は黒色で縁部が黄褐色で縁取られる。同属のカワチマルクビゴミムシに似るが、上翅の第 3 間室に剛毛孔点があり、複眼の間に 1 対の赤紋がある。

体長は 13～16.5mm。



採集地等不明

分布の概要

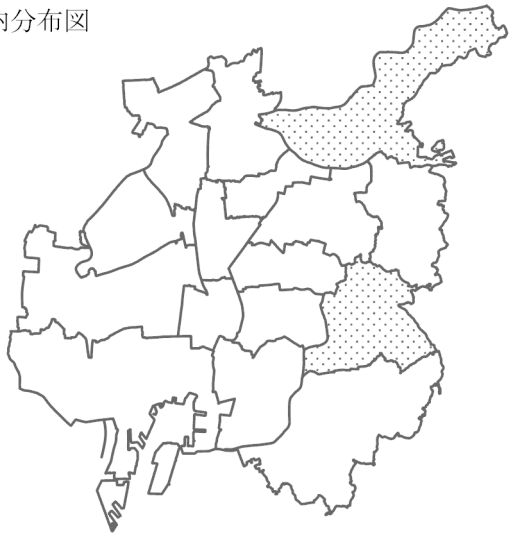
市内：守山区竜泉寺、天白区八事付近で採集記録がある。

県内：他に春日井市高蔵寺の庄内川河川敷で知られるが現在は見ることができない。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、シベリア東部、中国。基準亜種はヨーロッパからアルタイあたりまで分布する。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

平野部に多い種で、河川敷などに生息する。

過去の生息状況／減少の要因

市内からの記録は、いずれも古いもので、かつて生息確認がされていた場所に現在も生息する可能性は極めて低いと思われる。

減少の要因としては、河川の汚れ、改修によって生息環境である砂地が消失したことが大きいと推定される。

保全上の留意点

生息環境の確保が最小限必要である。また同時に生活史の解明など本種についての詳細な調査研究を進め、減少の要因と保護の方法について模索する必要がある。

関連文献

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12): 49-53.

穂積俊文，1960．東海甲虫誌（9）．佳香蝶，12(41): 17-23.

穂積俊文ほか，1975．庄内川の昆虫，40pp,12pls．建設省庄内川工事事務所.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

エチゴトックリゴミムシ　*Oodes echigonus* Habu & Baba, 1960

評価理由

沿岸部の水辺に生息するが、過去に採集された場所は環境が変わり、絶滅したと考えられる。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長 14.0～15.2mm。体型は上翅が方形に近く、特に雌において著しい。前胸背板の陥没は認められない。



エチゴトックリゴミムシ　雌
港区、1942 年 4 月 24 日、長谷川道明　撮影

分布の概要

市内：港区（穂積，1961）。

県内：名古屋市。

国内：本州。

世界：日本固有種。

生息地の環境／生態的特性

分布は、内陸部よりも沿岸部に偏り，生息環境は日陰の閉鎖的な水域を好む。

過去の生息状況／減少の要因

穂積により港区からオオトックリゴミムシと記録された個体は、再検討（長谷川ほか，2014）により、エチゴトックリゴミムシであることが判明した。しかし、その当時採集された場所は、環境が変わり生息は不可能であると考えられる。

市内分布図



保全上の留意点

市内のため池などの止水環境を埋め立てず残し、護岸の一部でも土にしておく事が重要である。

特記事項

オオトックリゴミムシに類似するが，下唇中央歯の先端が陥入しないこと、前胸腹板突起が縁取られることによって区別できる。トックリゴミムシ類は良好な水辺環境の指標として有用な存在であり、全国的に減少が指摘されている。

引用文献

穂積俊文，1961．東海甲虫誌（10）．佳香蝶，13(46):61-82.
長谷川道明・蟹江　昇・戸田尚希，　2015. 愛知県のトックリゴミムシ類. 豊橋市自然史博研報，　(25): 21-24

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.29,p.160．保育社，大阪.
吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編　自然　目録，pp.102-156．名古屋市.
佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目マルドロムシ科＞

シワムネマルドロムシ　*Georissus* (*Neogeorissus*) *kurosawai* Nakane, 1963

評価理由

砂粒大の甲虫で、水辺の砂の中に棲むと思われる。近年は河川の整備により、絶滅したと考える。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長 1.6mm。頭部前半の顆粒を欠き、前胸背板の顆粒は明瞭でない。上翅には浅い粗大な点刻列があり、間室には顆粒を欠く。

分布の概要

市内：千種区名古屋大学内で 1948 年 6 月に採れた個体が新種の記載に使われた。

県内：上記のみ。

国内：北海道、本州。

世界：現状では国外からは未知。



生息地の環境／生態的特性

河川などの水辺の砂の中から見つかるが、灯火にも飛来することがある。同じグループの種は、水辺の落葉下から見つかった例もある。

過去の生息状況／減少の要因

千種区名古屋大学の鏡池に生息していたと想定されている（佐藤，1982）が、現在この池は環境が悪化し、再発見される可能性は無いと考えられる。

保全上の留意点

河川敷内の遊水地の設置や、残っている自然の砂地などを保全し、多様性に富んだ水辺環境を作ることが望まれる。

引用文献

佐藤正孝，1982．愛知県から記録された甲虫類．昆虫と自然，17(12):8-9.

関連文献

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編），1985．原色日本甲虫図鑑（Ⅱ）．p.206．保育社，大阪．

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ガムシ科＞

ガムシ　*Hydrophilus* (*Hydrophilus*) *acuminatus* Motschulsky, 1854

評価理由

平野から山間部まで普通に見られた種であるが、水田が減り小さなため池も無くなり、その他生育に適した水域が開発によって失われ、生息地が極端に少なくなった。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長 33～44mm。後胸突起は腹部第 2 節に達する、腹部は無毛。



採集地等不明

分布の概要

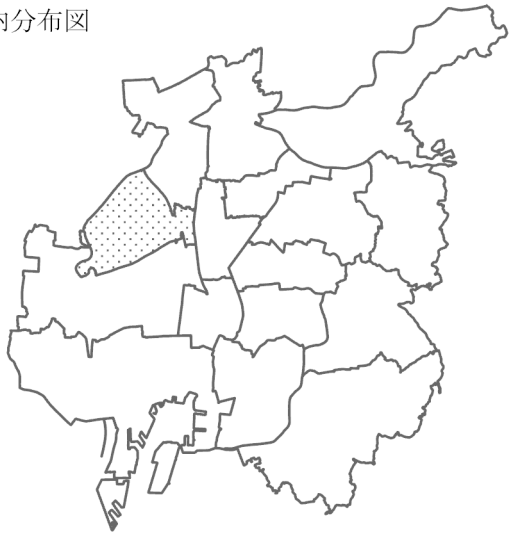
市内：中村区中村公園（森・吉田，2006，採集は 1954 年）。

県内：弥富市鍋田干拓、犬山市池野、春日井市、尾張旭市森林公園、豊根村三沢、豊川市一宮町日吉原、岡崎市秦梨、安城市池浦町。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国、台湾。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

各種の池、水田などの比較的いろいろな水域に生息していた。夏期にはよく灯火へも飛来した。

過去の生息状況／減少の要因

水田の放棄、ため池の消失、汚水の流入などによって絶滅したと思われる。

保全上の留意点

残っている自然池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。

引用文献

森　功一・吉田拓朗，2006．名古屋市内で採れた甲虫の古い記録．佳香蝶，58(225):21-23.

関連文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上），pp. 204-231．愛知県農地林務部自然保護課.
上野俊一・黒沢吉彦・佐藤正孝（編），1985．原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p. 215．保育社，大阪.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目コガネムシ科＞

クロモンマグソコガネ　*Aphodius* (*Aphodaulacus*) *variabilis* Waterhouse, 1875

評価理由

全国的に減少が指摘されている種で、市内では 1957 年の西区庄内川河川敷での 1 個体の標本を最後に見つかっていない。近年の衛生環境の改善により絶滅したと考える。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長 4.9～7.3mm。上翅に黒紋を持つが斑紋の変異も大きい。背部は扁平。頭部は前縁が裁断状でわずかに湾入し、小点刻を散布する。前胸背板は点刻をやや密に密布する。上翅は外縁部や後方に毛を装い、小点刻を散布する。



採集地等不明

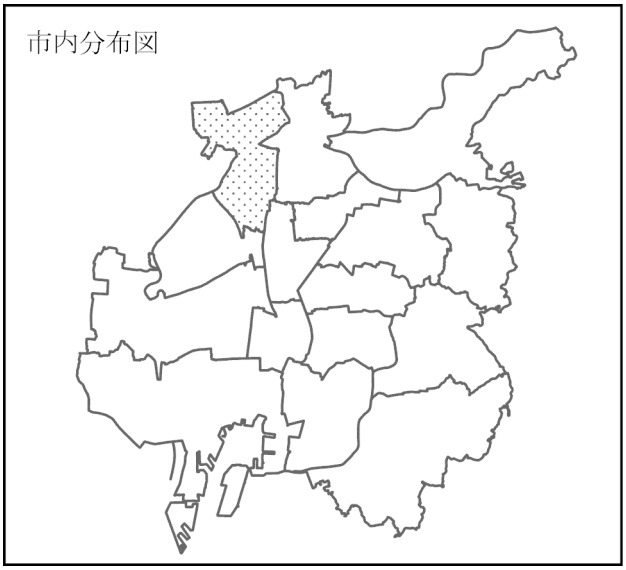
分布の概要

市内：西区

県内：春日井市、豊田市越戸町矢作川河川敷（戸田ほか，2022）

国内：北海道、本州、四国、九州、対馬（川井ほか，2005）

世界：朝鮮半島、シベリア、中国、トルキスタン（佐藤ほか，1985）



生息地の環境／生態的特性

糞虫とよばれるコガネムシの仲間で、幼虫成虫とも主に馬糞や犬糞、人糞を食べる。平地の馬牧場や河川敷で見つかっている。

過去の生息状況／減少の要因

主に平地の牛馬糞や犬糞、人糞に依存している。近年の衛生環境の改善により、平野部の牧場は減り、公園等でも放置された犬糞が減ってきていることより市内では絶滅したと考える。

引用文献

川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志，2005．日本産コガネムシ上科図説，第 1 巻食糞群．昆虫文献六本脚．東京．

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑 II．保育社．東京．

戸田尚希・長谷川道明・春田祥博・安居義高・中村俊雄・大野友豪・蟹江 昇, 2022. 愛知県の甲虫目録(コガネムシ科；ニセマグソコガネ亜科，マグソコガネ亜科). 佳香蝶, 74(289)：1-19.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目カミキリムシ科＞

ヨツボシカミキリ　*Stenygrinum quadrinotatum* Bates, 1873

評価理由

1970 年代までは平地から低山地にかけて普通の種で、灯火に誘引されて室内にもよく飛来したが、1980 年代になって減少傾向が指摘されるようになり、少なくとも 40 年以上市内から生息情報が途絶えている事から、絶滅したと考える。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

黄褐色～赤褐色で、上翅中央に 4 つの顕著な明色の紋がある。

体長は 8.5～13.5mm。



採集地等不明

分布の概要

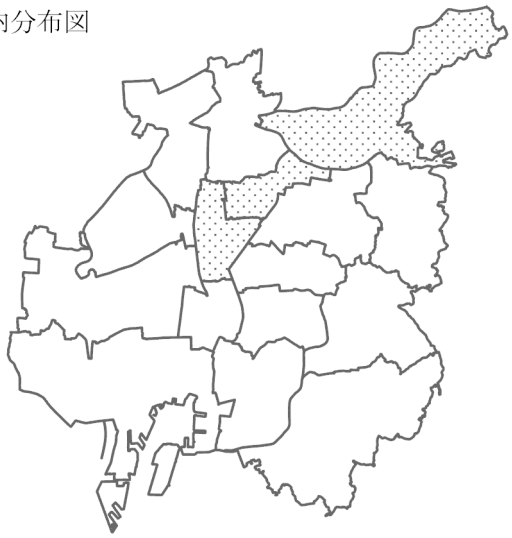
市内：東区山口町、守山区志段味で採集記録がある。1950 年代には、中区でも灯火に飛来した。

県内：奥三河から尾張まで記録がある。

国内：沖縄県を除くほぼ日本全土。

世界：台湾、朝鮮半島～インドシナにかけて分布する。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

平地から山地の広葉樹林（おそらくコナラやアベマキなどの雑木林）に生息する。

過去の生息状況／減少の要因

市内での採集記録は、いずれも古いもので、1980 年代以降の公表された情報はない。1990 年以降の記録は、県下では旧旭町から知られるのみ。

減少の要因としては、燃料としての需要がなくなったため、重要な繁殖の場であった薪が無くなったこと、平行して薪の生産地である雑木林が消失、荒廃したことが考えられる。

保全上の留意点

現在残されている里山の雑木林の管理、保全。

なぜ急激に少なくなったかよく判らないので、減少の要因と保護の方法について模索する必要がある。

引用文献

湯沢宣久・蟹江　昇・河路掛吾・竹内克豊，1990．愛知県のカミキリムシ科．愛知の昆虫（上），pp.389-433．愛知県自然保護課．

関連文献

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報．(12): 49-53.

穂積俊文，1972．東海甲虫誌（第 18 報）．佳香蝶，24(92): 37-56.

（長谷川道明）

昆虫類　＜チョウ目アゲハチョウ科＞

ギフチョウ　*Luehdorfia japonica* Leech, 1889

評価理由

市の都心部に近い産地は開発等により絶滅し、唯一残された産地である守山区東部の丘陵地も、生息に好適な明るい雑木林が減少し、食草のカンアオイ類とともに生息環境が悪化して、1970 年代以降はほとんど確認されていない。東谷山に散発的に記録はあるが発生源は瀬戸市と考える。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

開張 56～62mm。雌はやや大きく前胸背に赤褐色毛がある。前・後翅とも黄と黒の目立つ縦縞模様がある。後翅尾状突起の基部に赤い斑紋がある。交尾した後の雌には腹部に交尾付属物がつく。

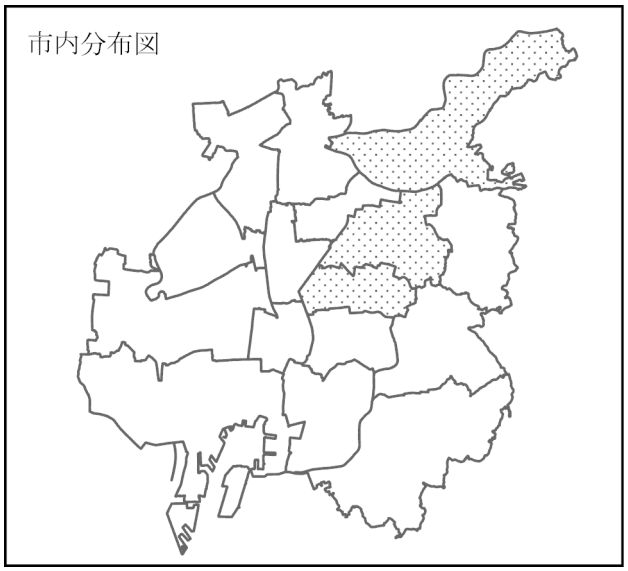
分布の概要

市内：1950 年代に千種区、昭和区、守山区で発生地が確認されていた。最近、1999 年に守山区で再び記録されたが、ほとんど市内での記録はない。

県内：尾張東部の丘陵地から三河山地にかけて分布していて、標高 400m 以下の山地に多い。

国内：本州の特産種。北限は秋田県由利本庄市、西は山口県まで分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

明るい落葉広葉樹を主とした雑木林の林縁や林間の開けた場所でみられる。年 1 回、3 月下旬から発生し、ソメイヨシノの開花期と本種の発生期がほぼ一致する。雄は山頂占有性がある。晴天時に活動し、名古屋市近郊ではショウジョウバカマ、スミレ類、ツツジ類、サクラ類の花で吸蜜する。幼虫の食草は、名古屋市周辺ではヒメカンアオイとスズカカンアオイであり、蛹で越冬する。

過去の生息状況／減少の要因

都心部に近い千種区と昭和区の丘陵地の個体群は絶滅したが、守山区と瀬戸市、尾張旭市との境界付近で 1998 年の記録がある。東谷山では瀬戸市側からの飛来も考えられる。

開発による雑木林の消失・孤立化が減少の主因であるが、雑木林の放置により遷移が進行し、照葉樹が繁茂した結果、林床の照度低下がカンアオイ類の生育に悪影響を及ぼしていること、都市周辺の緑地では剪定や下草刈りなどの過度な管理、害虫駆除目的の薬剤散布等も減少に拍車をかけていると思われる。なお、本種に関しては、チョウ愛好者による採集圧も無視できない。

保全上の留意点

里山的な、適度に管理された雑木林環境の維持継続が第一と考えられる。また衛生・樹木害虫駆除目的の薬剤散布を、必要以上にかつ広域に行わないことも大切である。

引用文献

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp.21-95．愛知県．
石塚三郎，1999．名古屋市守山区におけるギフチョウの採集記録．佳香蝶，51(197):11-12．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然，pp.464-475．同　目録，pp.194-202．名古屋市．
愛知県，2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータブックあいち 2009　–動物編–．愛知県環境部自然環境課．

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl.1,p.4．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1982．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅰ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（江田信豊）

昆虫類　＜チョウ目シジミチョウ科＞

シルビアシジミ　*Zizina emelina emelina* (de I'Orza, 1869)

評価理由

市内では西区新福寺町の庄内川堤防から 1951 年に記録されたが、その後の確認報告がない。愛知県下では多産した木曽川堤防でも 1963 年を最後に記録がなく、河川の補強改修工事等による何らかの生態系の変化により、県下の本種は絶滅したと考えられる。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

開張 22～28mm。ヤマトシジミに似るが、前翅裏面の中室には黒斑がない。雄の翅表は青藍色で、より紫色を帯びる。雌の翅表は全体に暗褐色で、一部に青藍色が現れることがある。

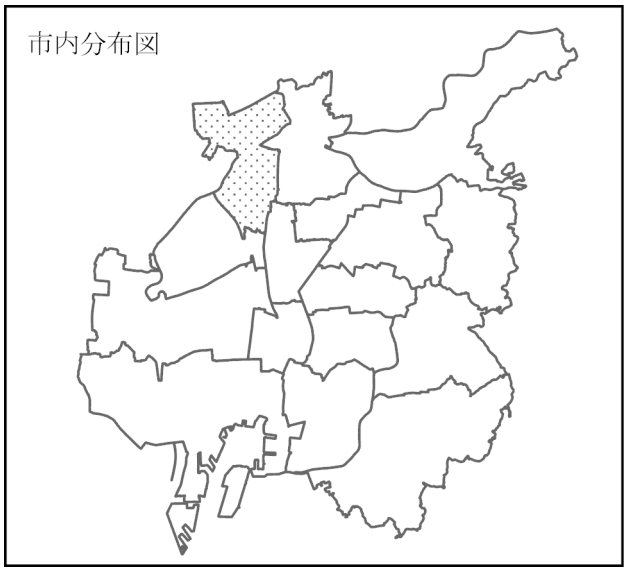
分布の概要

市内：1951 年 6 月 24 日に、西区新福寺町の庄内川堤防で 1 雄 1 雌が採集されているのみ。

県内：木曽川、矢作川等の堤防が主産地。他に知多半島、瀬戸市、三河川合などの記録が散発的にあるが、40 年以上前の古い記録である。

国内：関東地方以南の本州、四国、九州、南西諸島。

世界：朝鮮半島南部より台湾、中国、西はインド、南はマレー半島、東はニューギニア島からフィジーまで、広域に分布する。



生息地の環境／生態的特性

河川敷、田畑の周囲等の明るい草地に生息し、4 月から 11 月まで、年 5～6 回発生する。幼虫はマメ科のミヤコグサを主食草とするが、他県ではシロツメクサで発生した地域もある。愛知県下でコマツナギを食草としている例も報告されている。九州南部以南ではヤハズソウ・メドハギなど各種のマメ科の草本や低木を食べている。

過去の生息状況／減少の要因

この地域の個体群の食草がミヤコグサに限定されると仮定すれば、ミヤコグサ群落のあった堤防や河川敷が従来の採草地としての利用が廃れ、環境の多様性を失った結果、ミヤコグサ群落が激減したことが絶滅の主因といえる。今日、30 以上の府県で本種が絶滅または絶滅危惧種にあげられているが、本土域における本種の急激な減少の要因には、尚不明な点が多い。

保全上の留意点

旧来の河川敷の生態系を維持するには、草刈りには極力機械を使用せず、計画的にトラ刈りにするのも一つの方法であろう。ミヤコグサ群落が再生すれば、本種が復活する可能性は少ないながらある。なお近縁の帰化種セイヨウミヤコグサが市内でも港区などで見られるようになり、他県で発生例も知られているので、今後注意する必要がある。

引用文献

各務晃司，1952．シルビヤシジミ名古屋市内に産する．佳香蝶，4(18):45.
高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp.21-95．愛知県.
安藤　尚，2003．愛知県木曽川堤防最後（？）のシルビアシジミ．佳香蝶，55(216):74.
愛知県，2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータブックあいち 2009　–動物編–．愛知県環境部自然環境課.

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl.31,p.141．保育社，大阪.
福田晴夫ほか，1984．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）．保育社，大阪.
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑，学習研究社，東京.

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目タテハチョウ科＞

オオウラギンヒョウモン　*Fabriciana nerippe* (C.Felder et R.Felder, 1862)

評価理由

本種はかつて、本州以南の山地草原や低地の河川敷等の草地に広く分布していたが、1960 年代以降全国的に急減し、今日確実な産地は中国地方と九州にわずかに知られるのみとなった。市内では北区の矢田川河原の古い記録があるのみである。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧 IA 類

形態

開張 60～80mm。雌は雄より大型で日本産ヒョウモンチョウ類の中では最大、特に温暖地の個体は大型。裏面後翅の外縁の銀白色斑の内側の縁取りは、ウラギンヒョウモンでは単純な山型であるが、本種では中央の凹んだ山型で M の字のように見える。

分布の概要

市内：1937 年頃北区の矢田川堤防に多産した。

県内：上記以外には名古屋市近郊（平手，1937）、南知多（神谷，1956）の文献記録があるだけである。

国内：本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国に分布し、東アジア型分布の代表種の一つである。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

低地では河川敷や堤防などの明るい草原が生息地となる。快活に飛び、アザミ類、ヒメジョオンなど各種の花に集まる。幼虫の主食草はスミレ科のスミレで、タチツボスミレなどの有茎種はほとんど食べないという。低地では 6 月に発生し交尾、7 月中旬頃に夏眠、秋に再び活動し産卵する。

過去の生息状況／減少の要因

1937 年の記録（加藤，1942）では、「大曽根付近の矢田川堤防に多産、半径百米位の範囲で一日数十頭採集」という状況であった。かつて多産した本種が、1950 年代には市内でも県下でも絶滅したと考えられる。絶滅の原因は定かではないが、食草群落の減少を主因とした生息環境の悪化であろう。

大型で群棲する傾向にある本種は、安定した発生を続けるには、単位面積当たり他種より多量のスミレを必要とする。戦前は刈草等の需要もあり、田畑や堤防の草刈り、里山の手入れが行き届き、スミレ群落が均質に維持されてきた。今日、確実に発生が見られるのは、山口県の秋吉台、阿蘇外輪山、九州の自衛隊演習場内などに過ぎないが、これらの生息地は定期的な草刈りや火入れ等で、一定の広さの草地環境が維持され、本種が生息できる環境が保たれていると考えられる。

保全上の留意点

全国的な減少・絶滅の原因が必ずしも明らかでなく、積極的な保全対策は困難である。しかしスミレ類を食草とする草原性のヒョウモンチョウ類の多くが、やはり全国的に減少しているので、残された良好な草地環境の維持・保全への配慮が望まれる。

引用文献

平手雅二，1937．名古屋市近郊の蝶目録．昆虫研究，1(1):10-12.
加藤一三，1942．学林，(117):61-66.
神谷一男，1956．南知多・渥美・蒲郡地方に産する昆虫類．三河湾自然公園調査報告書，pp.50-61．愛知県.
高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp.21-95．愛知県.

関連文献

福田晴夫ほか，1984．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）．保育社，大阪.
川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl.46,p.217．保育社，大阪.
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京.

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目タテハチョウ科＞

ヒメヒカゲ　*Coenonympha oedippus* (Fabricius, 1787)

評価理由

市内では、この地方に多い丘陵の湧水湿地に限って見られた。開発により湿地が減少し、産地が孤立化するとともに、遠距離の移動性を欠くため、生息地間の遺伝子交流も困難になり、種個体群の衰弱が著しく、1990 年ごろに絶滅した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

開張 32～38mm。雄の翅表は暗褐色、雌はやや淡い褐色で斑紋等はない。翅の裏面は明るい橙褐色で、その外縁に沿ってはっきりした黒い眼状紋が、前・後翅とも数個ずつある。眼状紋の中心には小さい白点があり、眼状紋の周囲には黄色の環をもちよく目立つ。

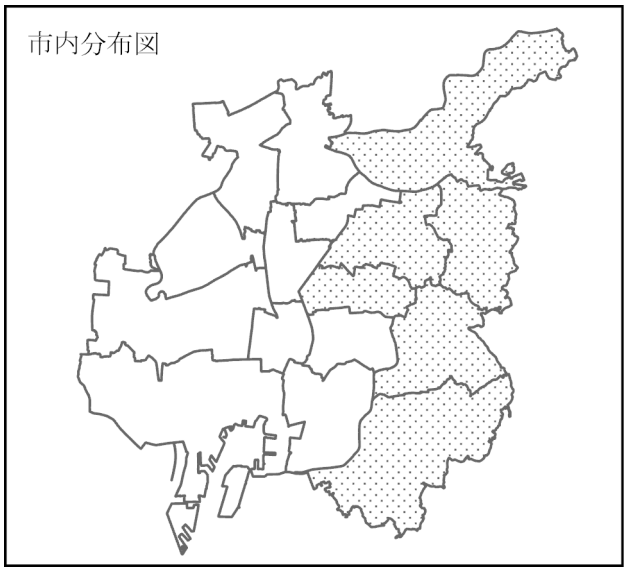
分布の概要

市内：1960 年代まで守山区、名東区、天白区、千種区、昭和区、緑区の湿地に生息したが、1980 年代末には、守山区を最後に絶滅した。

県内：ほぼ庄内川と矢作川の間の丘陵地や山間の湿地にかつては多産し、岡崎市周辺や豊橋市（葦毛）、新城市（作手）などにも知られていたが、大部分絶滅し、今日では保護されている葦毛や作手の湿原を除いて見ることはできない。

国内：本州の特産で、中部地方以西の本州。長野・群馬県の山地草原、東海地方と近畿・中国地方の湿地や草原に局地的に分布する。

世界：朝鮮半島・中国からヨーロッパ中部にかけユーラシア北部に広く分布する。



生息地の環境／生態的特性

名古屋市とその周辺の生息地は、シデコブシやシラタマホシクサなど東海丘陵要素と呼ばれる植物の生える、比較的小規模の明るい湧水湿地であった。湿地のイネ科・カヤツリグサ科の草本の葉に止まっていて、晴天時にゆるく飛翔し、時にヒメジョオンなどの花で吸蜜した。年 1 回の発生で、6 月上旬から 7 月上旬にかけてみられた。幼虫はショウジョウスゲ、ヒメカンスゲ等のカヤツリグサ科を主食草とし、越冬態は 3 齢幼虫である。

過去の生息状況／減少の要因

本種の生息地は、大部分が都市部に近い丘陵の湿地で、開発の好適地であり、短期間に宅地・工場・廃棄物処分場等となり、それに伴う区画整理・道路建設等により水脈が絶えて、壊滅的な打撃を受け消滅した。残された湿地も遷移が進み、周辺の林からササの侵入や樹木の被覆による日照低下などで、生息環境が悪化した。

本種の場合、小湿地に発生する全個体を採集することは容易であったことから、減少時の乱獲が、絶滅に拍車をかけたことは確実であり、チョウ愛好者は反省しなければならない。

保全上の留意点

尾張地方では絶滅し、積極的な保全対策は困難である。湧水湿地は特異な生態系を有し、他の目（もく）では未知の種が発見される可能性もあるので、特に市内に残存する湿地は、進入するササを刈るなど人為により遷移を遅らせるとともに、水脈を保存し、周辺の環境も含め永く保全したい。

引用文献

高橋　昭，1984．チョウ類．愛知の動物．愛知県郷土資料刊行会，名古屋．
高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp.21-95．愛知県．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然，pp.464-475．同　目録，pp.194-202．名古屋市．
愛知県，2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータブックあいち 2009–動物編–．愛知県環境部自然環境課．

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl.65,p.296．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1984．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅳ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜トンボ目イトトンボ科＞

オオイトトンボ　*Paracercion sieboldii* (Selys, 1876)

評価理由

かつては平地から丘陵の植生豊かな池に普通のイトトンボの一種であったが、減少が著しく近年市内での記録がない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	－

形態

成虫の体長 33mm 内外、雄は水色と黒、雌は黄緑色に黒の色調。眼後斑が大きく洋なし型をしている点で同属 3 種と区別できる。



オオイトトンボ　雄
愛知県長久手市阿畑、1985 年 5 月 28 日、髙﨑保郎　撮影

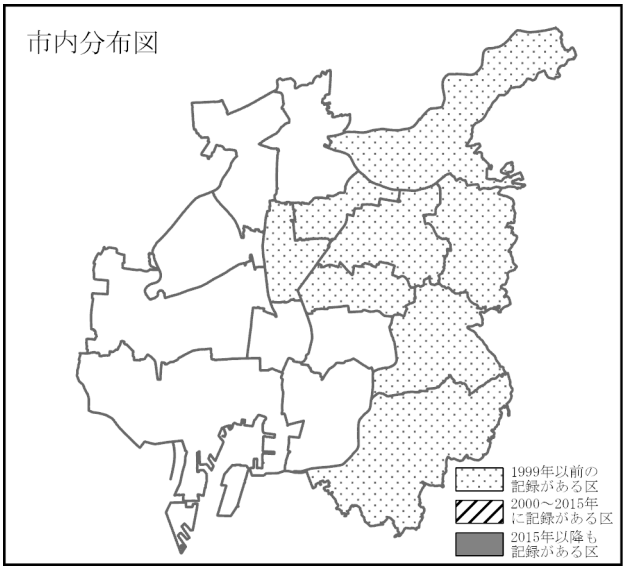
分布の概要

市内：千種区、東区、中区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区。

県内：平野から丘陵地、山地にも分布する。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

平地から山地にかけて植生豊かなで清明の水の池に生息する。
時に潜水産卵を行う。

現在の生息状況／減少の要因

市内にとどまらず愛知県全域での生息地の減少が著しい。安定的生息地は県内の丘陵、山地の一部に限られる。同属の４種の中では、生息水域の水質や環境の影響を最も受け易い。西日本広域に減少傾向が見られるが、その要因は明らかでない。

保全上の留意点

市内では残存の可能性は低いが、一般的には植生豊かな池沼の保全、ため池の人工的改変の阻止、ブラックバスなどの外来種の移入阻止が必要である。

特記事項

同属のセスジイトトンボに最も似るので同定に注意を要する。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目ヤンマ科＞

アオヤンマ　*Brachytron longistigma* (Selys, 1883)

評価理由

生息適地の衰失や水辺の環境悪化を主因とする減少が著しい。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	準絶滅危惧

形態

成虫は体長 72mm 内外、太めの体躯で鮮やかな緑色に黒条がある。雌は翅が黄色がかることが多い。

幼虫は頭部が角張った逆三角形で、目が突出した印象を受けるのが特徴。



アオヤンマ　雌
中区錦一丁目、1969 年 6 月 22 日、髙﨑保郎　採集

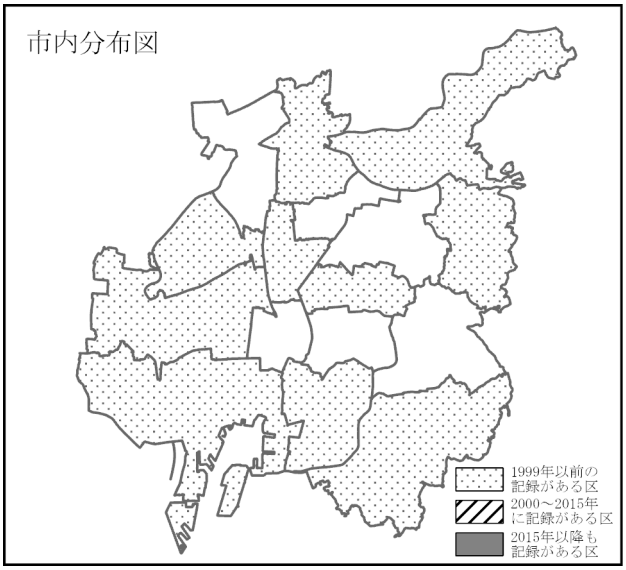
分布の概要

市内：北区、中村区、中区、昭和区、中川区、港区、南区、守山区、緑区、名東区で記録されている。

県内：平野から丘陵にかけて分布する。

国内：北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

世界：朝鮮半島、中国、極東ロシアに分布する。



生息地の環境／生態的特性

幼虫は主として平地のヨシ、ガマなどの高茎抽水植物が繁茂する池沼に生息する。成虫はヨシ帯の間を縫うように、或いはその上空を比較的緩慢に飛ぶ。かつては県南西部の水郷地帯に多産した。

かなり移動分散力があるようで、市街地を 15km 移動した例もある。比較的近年の名東区の記録も飛来である。成虫の出現期は 5～8 月。

現在の生息状況／減少の要因

1970 年代には名古屋城堀にも定着していた程であったが、都市化の影響を受け易い平地の池沼や、人工化が進む水田地帯の側溝などを主たる生息場所としていたため減少が著しく、現在市内で確実な生息は確認できないが飛来は考えられる。国リストでも 2012 年改訂で収録されるに至った。

高茎抽水植物が豊富な良好な池沼、水田耕作地帯の減少や、生息環境の悪化が減少の主要因である。

保全上の留意点

市内では残存の可能性は低いが、一般的には抽水植物に富む池沼や水郷地帯の保全が必要である。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．
髙崎保郎，1969．アオヤンマを市街地で採る．佳香蝶，21(80): 203.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目サナエトンボ科＞

メガネサナエ　*Stylurus oculatus* (Asahina, 1949)

評価理由

市内で発見される個体の発生源は必ずしも明らかでないが、中河川の水質、水辺環境の悪化により減少した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	絶滅危惧 II 類

形態

成虫は体長 65mm 内外。黒字に黄斑を有し、腹部第 7〜9 節が著しく広がった中型のサナエトンボ。近似種ナゴヤサナエに酷似するが、やや大型であること、腹部第 4〜7 節の黄斑が塊状で腹部上面に止まり腹部下方に筋状に続かないことで区別できる。

幼虫はナゴヤサナエに酷似するが、腹部第 9〜10 節がより細長く全体的に細長い印象が強いことで区別できる。



メガネサナエ　雄
瑞穂区弥富町天白川、1970 年 9 月 6 日、髙﨑保郎　採集

分布の概要

市内：中村区、瑞穂区、南区、守山区、緑区、天白区で記録されている。

県内：尾張平野を中心に、西三河の矢作川水系で記録されている。

国内：本州の青森県から近畿まで局地的に分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

幼虫は平野或いは丘陵を主として中河川の中・下流域、時に大河川の砂泥底に生息する。ナゴヤサナエが主として大河川に拠るのとは異なる。大河川から取水する用水（例：愛知用水）の下流や調整池に流下し、そこでかなりの量が羽化することもある。波のある大湖（例：琵琶湖・諏訪湖）からも発生する。

成虫は 7〜8 月を中心に比較的長期にわたり羽化し、成熟成虫は 8〜9 月に多い。未熟成虫はかなり移動分散することがある。

現在の生息状況／減少の要因

県内では愛知用水とその調整池で羽化と成虫が、矢作川水系で産卵と成虫が記録されている。1990 年代初頭には緑区内の愛知用水で多数が羽化した。かつては市内や市周辺の丘陵地帯の中河川に定着していたと考えられ、例えば瑞穂区内天白川では比較的多数の成虫が認められた。現在市内に確実な発生源が存在する可能性は低いが、飛来の可能性はあろう。

中河川の水質悪化、河川改修等による水辺環境の劣化、河川周辺の緑被率の低下が減少の要因と考えられる。

保全上の留意点

市内での定着は不明であるが、一般的には大・中河川の水質汚濁防止、良好な水辺と水辺林の保全である。

特記事項

本種は成虫よりも幼虫又は羽化殻による方が生息確認しやすい。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．
鵜殿清文，1994．愛知県のメガネサナエおよびナゴヤサナエの産地追加．佳香蝶，46(179): 38.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目サナエトンボ科＞

キイロサナエ　*Asiagomphus pryeri* (Selys, 1883)

評価理由

かつては平地から丘陵地にかけての緩流に広く生息していた普通種であったが、近年生息地、個体数の減少が著しい。

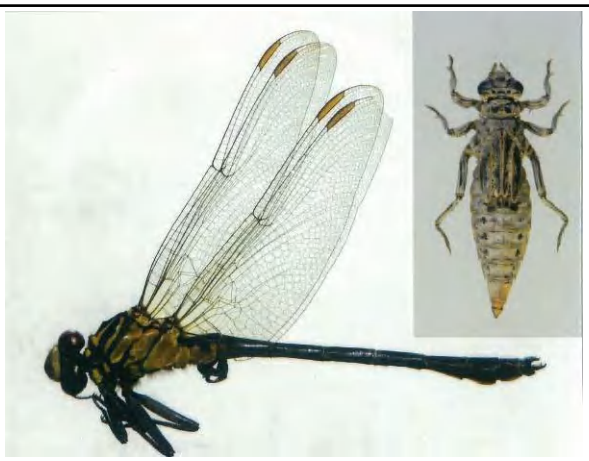
評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

成虫は体長 65mm 内外、やや大型のサナエトンボ。黒地に未熟時黄斑、成熟時は灰緑色斑を有する。近似種ヤマサナエに較べ胸部 2 本の黒条は細い。雌の産卵弁が下方に突出している。

幼虫の腹部後半はヤマサナエより細い。



キイロサナエ　雄成虫　千種区東山公園、1951 年 5 月 30 日、
幼虫　守山区上志段味、2013 年 4 月 29 日、
いずれも髙﨑保郎　採集

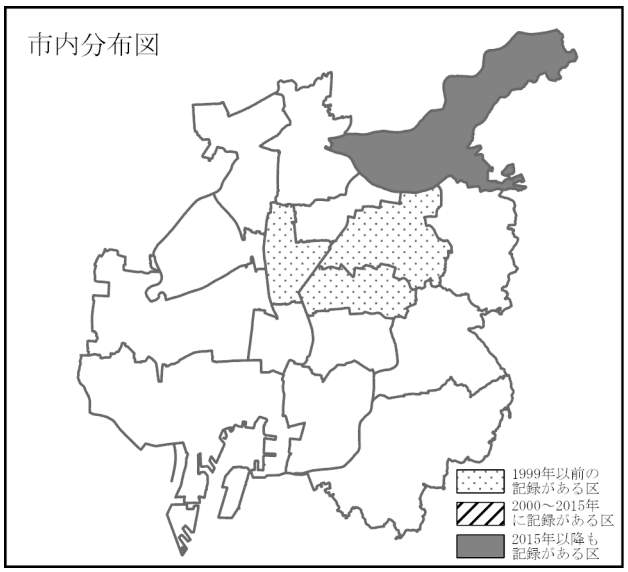
分布の概要

市内：千種区、中区、昭和区、守山区。

県内：尾張東部丘陵から三河丘陵、低山地にかけて分布。

国内：新潟、関東以西の本州、四国、九州。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

丘陵から平地の砂泥底の緩やかな河川に生息する。泥が多く植物質の薄く堆積している場所を好む。

雌は浅い砂泥に打泥産卵する。成虫の出現期は 5～6 月。

現在の生息状況／減少の要因

市内で生息するのは守山区の庄内川畔付近に限られる。県内でも稀になってきた。

河川開発で平地の中小緩流の衰失、周辺環境や水質の悪化が減少要因である。

保全上の留意点

市内では生息地が限られたが、一般的には平地、丘陵地の中小河川の水質や河川周辺環境の保全が必要である。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990，愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目ムカシヤンマ科＞

ムカシヤンマ　*Tanypteryx pryeri* (Selys, 1889)

評価理由

守山区で記録されてきたが、個体数も生息可能な湿地も極めて稀である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

成虫は体長 70mm 内外。太めの体駆で黒色地に黄斑を有する。複眼は離れかつ小さい。翅の緑斑が長い。

幼虫は頑丈でごつごつした感じ。腹部背面に毛束が 2 列に並ぶのが特徴で大型である。



ムカシヤンマ　雄
守山区上志段味東谷、2013 年 6 月 5 日、髙﨑保郎　撮影

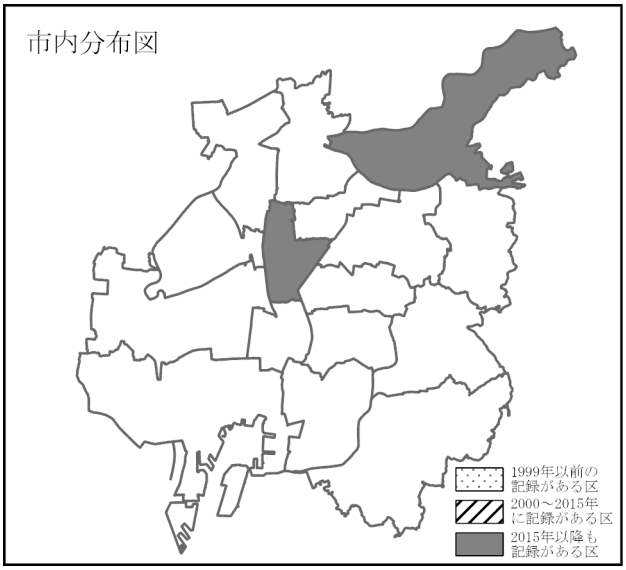
分布の概要

市内：守山区で記録されている。

県内：尾張東部丘陵以東から三河の丘陵、低山地、山地に分布する。

国内：本州、九州に分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

幼虫の生息地は一般には山地の日当りのよいコケが生え水がしたたり落ちる崖とされているが、尾張東部丘陵では東海丘陵要素のシデコブシ、準要素のミズギボウシなどが生育する湿地林内の谷底湿地、斜面湿地が主たる生息場所である。

若齢幼虫は湿地の落葉、落枝下の平な部分に、中令・成熟幼虫は湿地のヘリの斜面に穴をうがって棲む。水中でなく湿泥中が生活の場であることが特徴で、羽化までに 2～3 年から数年を要すると見られる。

成虫の動作は緩慢で、白シャツや帽子に止まりたがる。成虫の出現期は 5～6 月である。

現在の生息状況／減少の要因

守山区で若干の採集例が知られる。かつては竜泉寺辺りでも得られたが、現存するのは上志段味東谷の東谷山南麓付近だけである。

この他非常に珍しい事例として、2006 年に中区名古屋城付近で 1 頭の飛来が記録されている。市近傍では尾張東部丘陵の一角である瀬戸市海上の森に多産する。

もともと稀であるが、守山区では生息場所が著しく減少したと考えられる。

保全上の留意点

守山区上志段味方面の数少ない湿地の現状保全が重要である。

特記事項

本種の移動分散能力は、成虫の緩慢な行動から低いと見られているが、上記事例はその考え方を改めなければならない可能性を示唆するものである。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp350-361 同　目録，pp94-98，名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．
髙崎保郎，2002．愛知万博会場予定地におけるムカシヤンマの生息環境と羽化生態．月刊むし，(377): 36-41．
横地鋭典，2013．名古屋市中区三の丸周辺の 2006～2007 年のチョウ等の記録．佳香蝶，65(255): 43-47．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目エゾトンボ科＞

エゾトンボ　*Somatochlora viridiaenea* (Uhler, 1858)

評価理由

市内での記録は極く僅かしかない。生息に適する湿地も限られる。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	－

形態

成虫は体長 60mm 内外、金属緑色の中型種、同属他種に似るが、尾部付属器、腹部黄斑で識別できる。



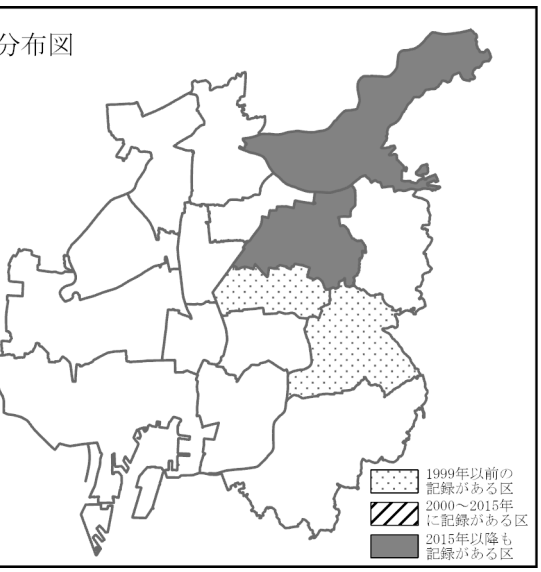
エゾトンボ　雌
千種区田代町、2010 年 9 月 18 日、安藤泰樹　採集、
横地鋭典　撮影

分布の概要

市内：千種区、昭和区、守山区、天白区。
県内：尾張東部の丘陵地から三河山地にかけて局所的に分布する。
国内：北海道全域、本州、四国、九州の一部。
世界：朝鮮半島、中国、ロシア。

生息地の環境／生態的特性

丘陵から山地の明るい湿地に生息する。雄は開けた湿地、林間の空地、水田上周辺の路上をゆっくり往復飛翔して縄張りをもつ。
成虫の出現期は 6～9 月。



現在の生息状況／減少の要因

県全体でも現在確認されている産地は少ない。市内での記録も少なく、近年の記録は守山区大森八竜湿地（2010 年）、千種区平和公園（2010 年）で現在では生息したであろう湿地も小さくなり、乾燥化が進んでいる。
都市周辺の丘陵地開発による湿地の消失、近年の気象の温暖化による乾燥化が減少要因である。

保全上の留意点

湿地および周辺の林も含めの保全が必要である。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp350-361 同　目録，pp94-98，名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78 愛知県．
安藤泰樹，2011．名古屋市千種区のエゾトンボの記録．佳香蝶，63(247): 79.

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目エゾトンボ科＞

ハネビロエゾトンボ　*Somatochlora clavata* Oguma, 1913

評価理由

1980 年代守山区での 1 成虫採集例が公にされた唯一の記録である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	絶滅危惧 II 類

形態

成虫の体長 61mm 内外。金属緑色の中型種。エゾトンボに似るが雄は副性器、尾部付属器、雌は腹部の黄斑を欠くこと、産卵弁の形状等で区別できる。

幼虫は肢が長く環状斑が目立つ。



ハネビロエゾトンボ　雄
愛知県長久手市一ノ井、1991 年 9 月 23 日、髙﨑保郎　撮影

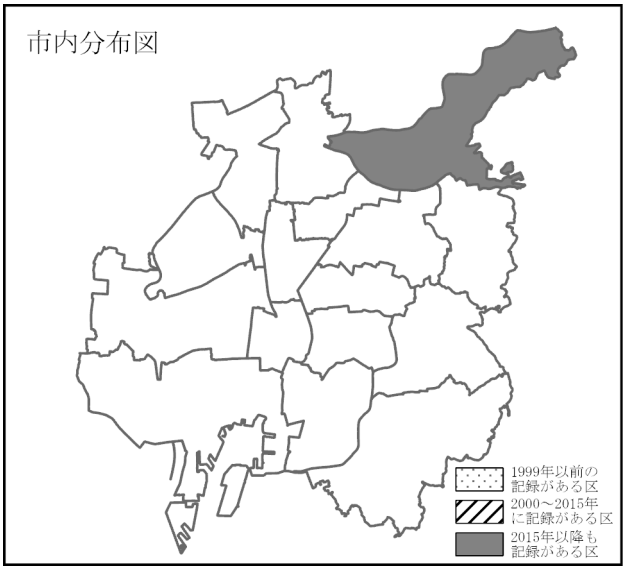
分布の概要

市内：成虫は 1983 年守山区上志段味東谷山南麓で 1 雄が採集されただけである。同所で過去に複数の幼虫採集記録がある。

県内：主に尾張東部丘陵の他東三河にも分布する。

国内：北海道、本州、四国、九州に点在的に分布する。

世界：朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

幼虫は丘陵林内の清冽な細流や湿地脇の流れに生息する。水中に落葉が留まったやや流れが緩い部分を好む。盛夏干上がるような小流でも雨水により流れが回復すると直後に複数の若令幼虫が見られ耐乾燥性に富むように見受けられる。未熟雄は林内の空間や路上を飛翔するが、エゾトンボも同所的に見られるので採集確認の要がある。成熟雄は林内細流上を探雌飛翔する。

幼虫の大きさは同時に 4 段階程見られ、幼虫期間は 3～4 年と考えられる。成虫の出現期は 7～9 月。

現在の生息状況／減少の要因

県内の分布も局所的で個体数も多くない。隣接する丘陵地の長久手市では安定した 3 か所の生息地がある。市内で唯一 1 成虫が記録された東谷山南麓では、一時流れで複数の幼虫が認められたこともあり生息していたことは確かであるが、現在では本種の生息ははっきりしない。精査の続行を要する。

保全上の留意点

市内では本種の現存は不明であるが、一般的には幼虫の生息に適する緩やかな細流を擁する適度に鬱閉されない二次林の保全である。

特記事項

エゾトンボ科（狭義）の幼虫では唯一流れに生息する。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp350-361 同　目録，pp94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜バッタ目クツワムシ科＞

クツワムシ　*Mecopoda niponensis* (de Haan, 1843)

評価理由

‘鳴く虫’の代表的種類。林縁のマント群落や河川敷のクズの繁茂するような草地に見られる。こうした環境は開発や整備のため減少しつつあり本種の存続が懸念される。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

有翅。雌腹端の産卵器は直刀状で 27～31mm ほど。県内産直翅類の内では最大級の種類。体色は緑色のものと褐色のものとがある。雄の翅は幅広く短め、雌では幅は狭く長め。

体長（翅端まで）は雄 49～55mm、雌 51～67mm。



知多郡美浜町、1999 年 10 月、岡田正哉　撮影

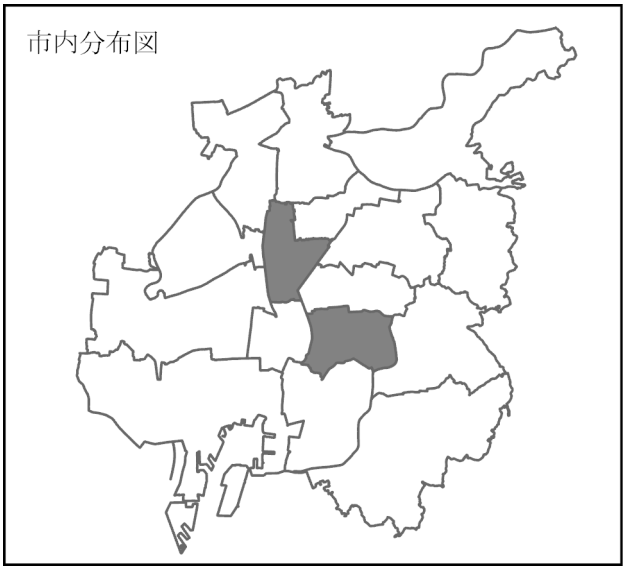
分布の概要

市内：瑞穂区、中区。

県内：知多半島、渥美半島を含め広く分布する。岡崎市、西尾市、犬山市、瀬戸市、豊田市（足助町、猿投町，笹戸町など）南知多町、武豊町、美浜町、渥美町、作手村（豊根地区）など。

国内：本州、四国、九州（対馬を含む）など。

世界：中国、韓国、台湾。



生息地の環境／生態的特性

広葉樹林林縁のマント群落や河川敷・堤防のり面などのクズが繁茂するような草地などに見られる。夜間は草上に出て“ガチャガチャ‥‥”と大きな声で鳴く。

現在の生息状況／減少の要因

既知産地の一つは瑞穂区山崎川。この場所はコンクリートブロックで護岸されてしまったため、本種の最近の生息は確認できていない。中区の記録は、人為的な移動を含め、全くの偶産と考えられる。

保全上の留意点

河川敷や堤防法面などの草本の過度の刈り込みを控え、クズやその他の丈の高い草も適度に刈り残すこと。また、広葉樹林のマント群落の刈り込みを控え、適度に残すこと。

特記事項

天白区の天白川河川敷には、別種タイワンクツワムシが生息している。

この種も河川敷の草刈りにより生息数が減少傾向にあるため、保護対策を考慮する必要があるかもしれない。

関連文献

岡田正哉，1991 愛知県の直翅目（2）愛知県の昆虫（下），pp5-20．愛知県．
日浦　勇，1993 クツワムシ原色日本昆虫図鑑（下），p65．保育社，大阪．
水野利彦，2008 新修 名古屋市史 資料編 自然 目録，p99．名古屋市．
日本直翅学会（編），2006．バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑，p130,p440．北海道大学出版会，北海道．

（岡田正哉、水野利彦）

昆虫類　＜カメムシ目コバンムシ科＞

コバンムシ　*Ilyocoris cimicoides exclamationis* (Scott, 1874)

評価理由

全国的にも産地が限定され、主として沿岸部の低地に生息するため、開発の影響を受けやすい。市内では水草が豊富であった古い時代の記録があるのみで、水質の悪化などで確認されなくなった。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

体長は 11～13mm。体型は扁平な小判型をしており、生時は緑がかった光沢があるが、死後は黄変する。

前脚は鎌状を呈し、捕獲脚となっており、腿節は非常に太い。

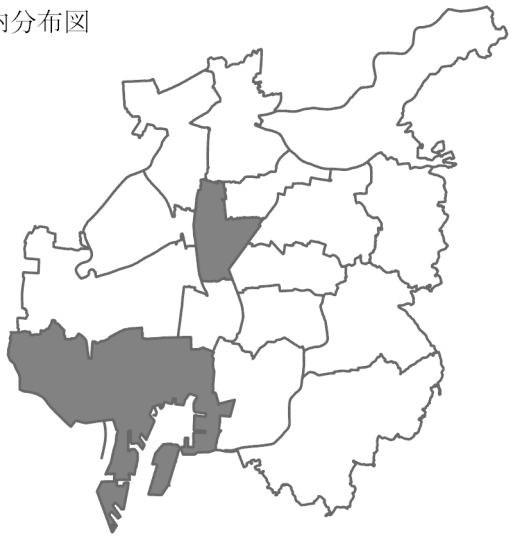


矢崎充彦　撮影

分布の概要

市内：中区名古屋城、港区土古町の 2 か所。
県内：瀬戸市、刈谷市などから記録がある。
国内：本州、九州。
世界：朝鮮半島、中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

生息地は極めて局所的で、ヒシ、ヒルムシロなど、特に浮葉植物が繁茂するため池に生息する。

ヒシの浮嚢など水草の組織内に産卵するとされる。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋城濠では、水質の悪化によってかつて生育していたヒシなどの浮葉植物が消滅し、その後の調査でも確認されていない。港区土古町は、本種を始め、現在ではほとんど見られなくなった貴重な水生昆虫類が得られていた産地であったが、住宅地と化した。既知産地での再発見は、絶望視せざるをえない。

水質悪化のほか、産卵基質となる浮葉植物の消失が減少要因となっている。

保全上の留意点

特に平野部から丘陵地に残されたため池では、浮葉植物を保護し、水質悪化を防ぎ、オオクチバス（ブラックバス）などの外来種が入り込まないよう留意する必要がある。

特記事項

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律により特定第二種国内希少野生動植物種に指定されている。

関連文献

広　正義ほか，1983．名古屋城外堀生物調査報告書，59pp．名古屋城管理事務所．
矢崎充彦・石田和男，2008．東海地方の水生半翅類．佳香蝶，60(234): 165-200

（矢崎充彦、澤田宗一郎）

昆虫類　＜カメムシ目イトアメンボ科＞

イトアメンボ　*Hydrometra albolineata* (Scott, 1874)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

かつてはため池や河川などに普通に見られたとされるが、1960 年代にはすでに稀な種となっており、現在確実な産地は全国的にもごくわずかである。

形態

体長は 11～14mm とイトアメンボ科では非常に大型である。体は細長く、触角第 2 節と第 4 節がほぼ同じ長さである。

雄の腹部第 7 節腹面には長毛を密生し、雌の腹部第 7 節腹面には後縁に微小な突起がある。



矢崎充彦　撮影

分布の概要

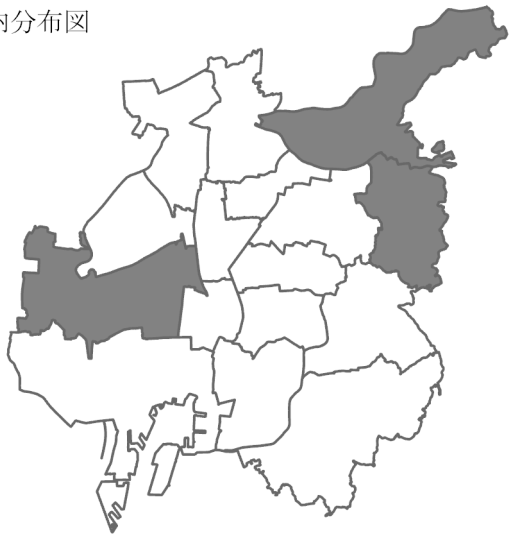
市内：守山区、名東区、中川区の記録があるが、再検討が必要。

県内：豊田市、岡崎市、春日井市、犬山市などの記録があるが、ほぼすべて誤同定と考えられる。

国内：本州、隠岐、四国、九州、対馬、トカラ列島（中之島、宝島）、奄美大島。

世界：朝鮮半島、中国、台湾。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

生息地は極めて局所的で、まばらに草本類が生育する休耕田など、開放的な水面が広がる環境で見られる。

灯火に飛来することがある。

現在の生息状況／減少の要因

近年の記録は皆無である。従来の記録もほぼすべてが誤同定と考えられ、県内における生息の可能性は低い。

水質悪化のほか、ため池や低湿地の埋め立てなどによる生息地の消失が減少要因となっている。

保全上の留意点

主として低地に生息するため、平野部のため池や湿地、休耕田などの環境維持と水源となる周辺の後背林を保全する必要がある。

特記事項

県内からいくつかの記録があるが、ほぼすべてがヒメイトアメンボ *H. procera* Horváth の誤認と判断される。

関連文献

堀　義宏・横井寛昭，1991．都市環境下の昆虫相について（2）名古屋市の異翅目．名古屋市衛生研究所報，(37): 93-100.
矢崎充彦・石田和男，2008．東海地方の水生半翅類．佳香蝶，60(234): 165-200.

（矢崎充彦）

昆虫類　＜コウチュウ目コガシラミズムシ科＞

クロホシコガシラミズムシ　*Haliplus* (*Liaphlus*) *basinotatus latiusculus* Nakane, 1985

評価理由

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

形態

体長 35mm 前後。ヒメコガシラミズムシに似るが、上翅基部の黒斑は明瞭であることで区別できる（中根，1985）。



豊田市上高町、2012 年 6 月 30 日、戸田尚希　採集

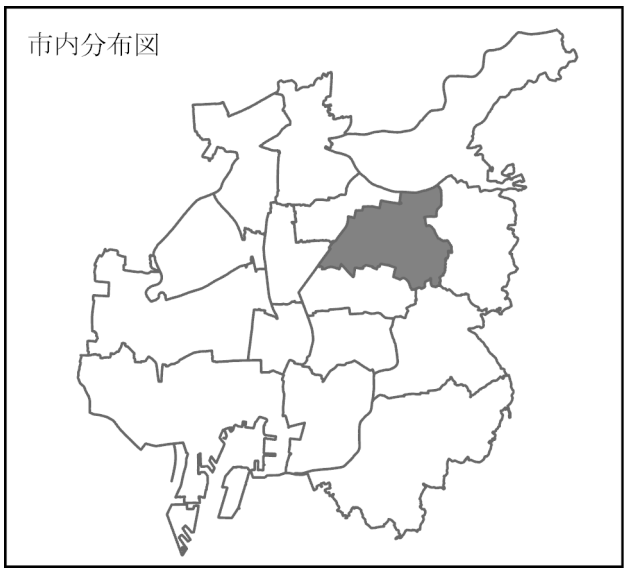
分布の概要

市内：千種区東山（吉鶴ほか，2008）。

県内：豊田市、瀬戸市、田原市。

国内：本州。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。局地的な分布をする種である。

現在の生息状況／減少の要因

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でもほぼ見ることは難しい。

保全上の留意点

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

特記事項

多くの池では、ルイスツブゲンゴロウと共に見つかる。

引用文献

吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008 コウチュウ目新修名古屋市史資料編　自然　目録，pp102-156 名古屋市
中根猛彦，1985 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討北九州の昆蟲，32(2):61-67

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑 II，pl33,pp180-181．保育社，大阪．
佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（ I ）．愛知県の昆虫（上），pp 204-231．愛知県．
戸田尚希・長谷川道明・市川靖浩・池竹弘旭・蟹江　昇，2020．愛知県の甲虫目録 6．佳香蝶，72(282) : 54-60.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ミズスマシ科＞

オオミズスマシ　*Dineutus* (*Ciclous*) *orientalis* (Modeer, 1776)

評価理由

かつて北海道から琉球にかけて普通に見られた種であるが、近年水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が極端に少なくなった。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

70～120mm。体型は長卵形で黒色。背面はにぶい光沢がある。上翅側縁後方に顕著な突起がある。前胸背板と上翅の側縁は黄褐色。



長久手市前熊、1993 年 9 月 1 日、戸田尚希　採集

分布の概要

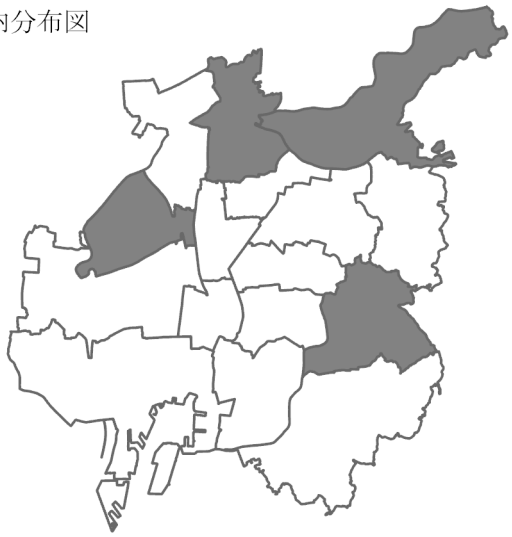
市内：天白区、守山区、北区、中村区、庄内川（すべて吉鶴ほか，2008）。

県内：豊田市、犬山市、田原市、佐久島。

国内：北海道、本州、四国、九州、琉球。

世界：サハリン、シベリア、朝鮮半島、中国大陸、ベトナム。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

ある程度の水深があるため池などの場所で、開放水面のある止水域に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。ここ数年、市内での記録は見当たらない。

保全上の留意点

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

引用文献

佐藤正孝，1990 愛知県の甲虫類（Ⅰ）愛知県の昆虫（上），pp204-231 愛知県

吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008 コウチュウ目新修名古屋市史資料編　自然　目録，pp102-156 名古屋市

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl37,p201．保育社，大阪

戸田尚希・長谷川道明・市川靖浩・池竹弘旭・蟹江　昇，2020．愛知県の甲虫目録 6．佳香蝶，72(282): 54-60.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ミズスマシ科＞

コオナガミズスマシ　*Orectochilus* (*Orectochilus*) *punctipennis* Sharp, 1884

評価理由

河川の中流域に生息するミズスマシで、かつて市内にも生息していたが、河川の汚濁などで県内では絶滅状態にあった。最近になって庄内川などで再発見されたが、県内での生息地は限られている。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	絶滅危惧 II 類

形態

長楕円形で、やや金属光沢を帯びた黒色。脚は赤褐色。上翅の点刻は密で、会合部は、雄ではほぼ直角で先が丸まり、雌ではやや斜めで会合端が少し後方に張り出す。

体長は 55～6mm。



採集地等不明

分布の概要

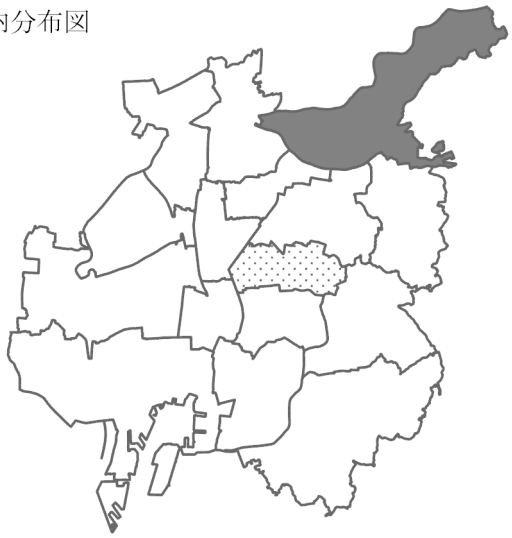
市内：守山区庄内川に生息する。また市内からは昭和区山崎川石川橋での古い記録がある。

県内：庄内川、豊川の中流域から知られている。

国内：本州、四国、九州に分布する。

世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

大きな河川の中流域で、岸辺が水で覆われているような環境に生息する。夜間活動性。

現在の生息状況／減少の要因

市内では守山区の庄内川にまだ生息しているが、危険な状況にある。減少の要因としては、河川改修による生息環境の消失、汚水の流入による河川の汚濁が挙げられる。

保全上の留意点

現在残る生息地周辺での自然河岸の保全と、水質の保全が必要である。

関連文献

穂積俊文・佐藤正孝，1957．東海甲虫誌（第 3 報）．佳香蝶，9(32): 1-7

吉富博之，1994．愛知県産甲虫類分布資料（1）．佳香蝶，46(178): 21-22

戸田尚希・長谷川道明・市川靖浩・池竹弘旭・蟹江　昇，2020．愛知県の甲虫目録 6．佳香蝶，72(282): 54-60.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

コウベツブゲンゴロウ　*Laccophilus kobensis* Sharp, 1873

評価理由

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	国リスト
全　　国 2020	準絶滅危惧

形態

34～38mm。体型は卵形で背面は密な網状刻印がある。頭部、前胸背板は黄土色。上翅は淡褐色から茶褐色で緑がかるものもいる。



弥富市上野町、2009 年 6 月 19 日、戸田尚希　採集

分布の概要

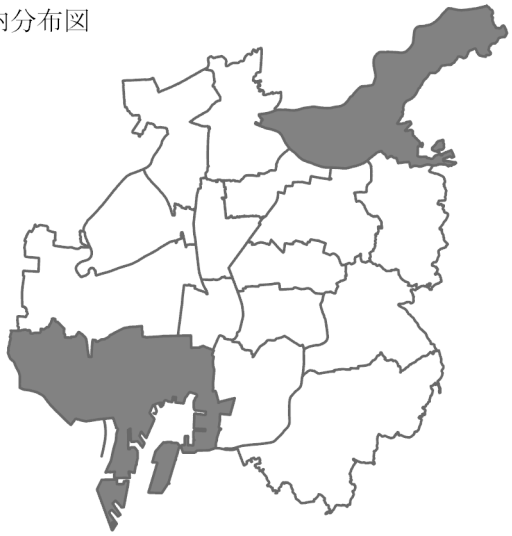
市内：港区、守山区（すべて吉鶴ほか，2008）。

県内：弥富市、美浜町（佐藤，1990）。

国内：本州、四国、九州、南西諸島。

世界：中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

低地の池、沼、放棄水田などに生息する。産地はやや局所的であるが、庄内川河川敷からは纏まって得られたことがある（森・北山，2002）という。

現在の生息状況／減少の要因

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でもほぼ見ることは難しい。

保全上の留意点

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

引用文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上）, pp204-231. 愛知県.

吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編　自然　目録, pp102-156. 名古屋市.

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝, 1985 原色日本甲虫図鑑Ⅱ, pl34p190, 保育社, 大阪.

森　正人・北山　昭，2002. 改訂版　図説　日本のゲンゴロウ文一総合出版，東京.

戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024. 愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科). 佳香蝶，76(300): 54-99.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

トダセスジゲンゴロウ　*Copelatus nakamurai* V. B. Guéorguiev, 1970

評価理由

全国的にも生息域が限定される。市内では 1990 年に守山区庄内川の河川敷で発見され、その後数年間継続して生息が確認されたが、現在では生息確認ができなくなっている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	絶滅危惧 II 類

形態

扁平な長楕円形。頭部～前胸背は褐色から暗褐色、上翅は黒色で、基部と翅端部は黄色、さらに両側と第 3 間室は黄色で基部と翅端部をつなぐ黄色の縦条を形成する。上翅には 7 条溝と 1 亜外縁溝がある。

体長は 39～46mm。



採集地等不明

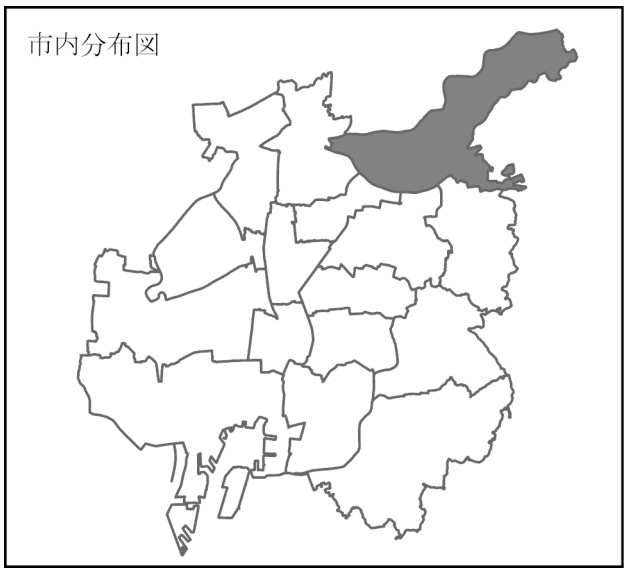
分布の概要

市内：守山区の庄内川河川敷で確認されている。

県内：上記の記録である庄内川河川敷が知られるのみである。

国内：本州に分布するが、これまでに確認された生息地は、栃木県、埼玉県、東京都、千葉県、茨城県、愛知県の 1 都 5 県のみ。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

これまでに確認された生息環境はいずれも河川敷にできた水溜りで、湧き水を伴っていることが多い。生息する水域は一時的で不安定な場所が多く、渇水時に消滅してしまうと、その後確認できなくなる場合が多い。

現在の生息状況／減少の要因

守山区庄内川河川敷の生息地では、数年間継続して生息が確認されたが、生息地である水溜りが消滅してからは確認されていない。本種は、生息環境が不安定な水域であることを考慮すると、生息には常に湧き水による水溜りがどこかに存在し、ある程度広範囲におよぶ氾濫原をもつ河川敷が必要であることが予想される。しかし現在の市内の河川敷は主に公園、緑地として整備されており、そのような場所が失われている。

保全上の留意点

河川敷、河川の氾濫原は、都市部では数少ない自然環境を残している。河川の整備にあたっては、こうした場所に多くの生物が生息していることを考慮にいれて、極力温存するように配慮する必要がある。また、四輪駆動車、モトクロスバイクなどの河川敷への乗り入れは、河川敷に生息する生物の保護の観点から慎むべきである。

引用文献

河路掛吾，1991．愛知県におけるトダセスジゲンゴロウの記録．月刊むし，(246): 36.

戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024．愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科). 佳香蝶，76(300): 54-99.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

キベリクロヒメゲンゴロウ　*Ilybius apicalis* Sharp, 1873

評価理由

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	国リスト
全　　国 2020	準絶滅危惧

形態

80～100mm。体型は長楕円形で、全体に弱い金属光沢を帯びた黒褐色。前胸背板の両側は幅広く黄褐色。上翅も肩部から後方へ徐々に広がる黄褐色の帯紋がある。



岐阜県恵那市岩村町、2009 年 4 月 29 日、戸田尚希　採集

分布の概要

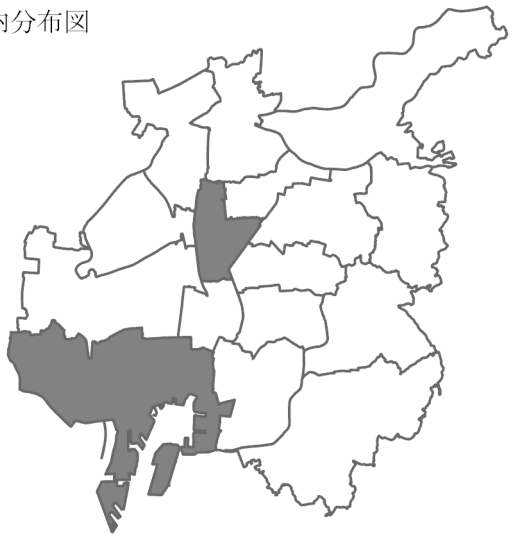
市内：中区、港区（すべて吉鶴ほか，2008）。

県内：美浜町（佐藤，1990）。

国内：北海道、本州、四国、九州、琉球。

世界：朝鮮、中国など。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

ヨシなどが生えている比較的大きな池沼や河川敷にできた池などに生息している。やや局地的。

現在の生息状況／減少の要因

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でも激減している。

保全上の留意点

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

引用文献

佐藤正孝，1990 愛知県の甲虫類（Ⅰ）愛知県の昆虫（上），pp204-231 愛知県

吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008 コウチュウ目新修名古屋市史資料編　自然　目録，pp102-156 名古屋市

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl35,p194．保育社，大阪．

森　正人・北山　昭，2002．改訂版　図説　日本のゲンゴロウ．文一総合出版，東京．

戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024．愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科)．佳香蝶，76(300)：54-99．

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

オオヒョウタンゴミムシ　*Scarites* (*Scarites*) *sulcatus sulcatus* Olivier, 1795

評価理由

守山区吉根から記録があり、かつては市内の庄内川の河川敷に生息していた。しかしその後生息情報がなく、また生息環境も悪化しているため、絶滅の危険性が高い。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

細長く大きな黒色の甲虫で、大あごがクワガタムシのように発達している。前脚はちょうどモグラやケラの前脚のように発達し、地中に潜るのに適応した形態をしている。前頸節の外縁には 2 本の棘がある。

体長は 28～38mm。



採集地等不明

分布の概要

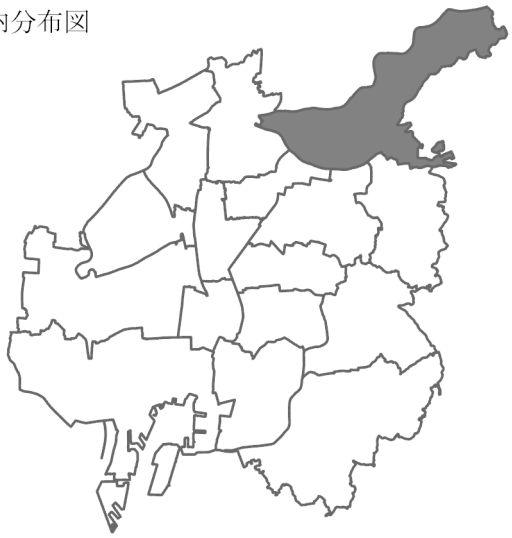
市内：1975 年に発刊された「庄内川の昆虫」の中で、「10 年ほど前に吉根橋で死体をみたことがある」という記述がある（穂積，1975）。

県内：木曽川河川敷、渥美半島沿岸部の砂浜に生息している。

国内：本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国、台湾、東南アジア、インド。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

河川、海岸などの砂浜に生息し、砂中に深い坑道を掘る。

現在の生息状況／減少の要因

吉根橋周辺から勝川橋あたりには本種の生息が可能な良好な砂浜があったことから、少なくとも 1960 年代までは本種が生息していたと思われる。しかし 40 年にわたって生息に関する情報が途絶え、現在では同地の環境も、砂防堤などの設置による砂地の減少、河川敷の公園、緑地化により生息環境の悪化が進んでいる。

保全上の留意点

生息環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

引用文献

穂積俊文ほか，1975．庄内川の昆虫，40pp,12pls．建設省庄内川工事事務所刊．

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

ホソハンミョウ　*Cylindera* (*Cylindera*) *gracilis* Pallas, 1773

評価理由

もともと多い種ではない上に、主要な生息地が耕作地や河川敷であるため、人為的な影響を受けやすい。かつては尾張地方の平野部各地に生息していたと考えられるが、都市化や河川整備による生息地の消失のため、現在では発見が困難になっている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 II 類

形態

後翅が退化して肩が丸まった細型の種。光沢のない黒色で、上翅後半部側部に 2 対の黄色の紋がある。また上翅後方に赤色の紋をもつ型もある。

体長は 10～12mm。



採集地等不明

分布の概要

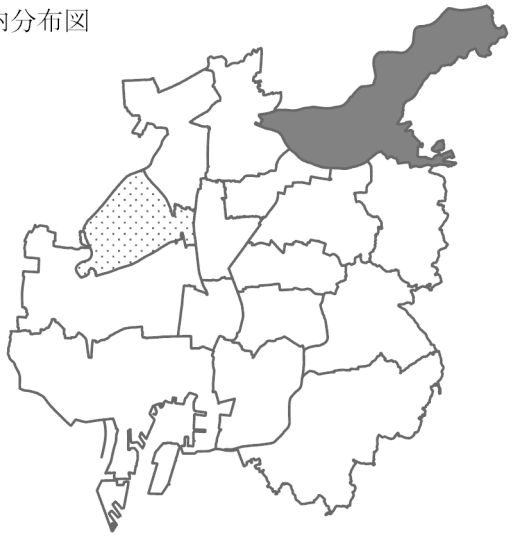
市内：守山区小幡、庄内川勝川橋、中村区日比野町（河路，1986）。

県内：尾張地方の平野部のみ知られる。

国内：本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国東北部、シベリア。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

桑畑、果樹園などの耕作地や、河川敷の草地と裸地が混在するような環境に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

守山区内の庄内川河川敷では 1980 年代までは生息情報がある。庄内川河川敷には、わずかながら生息可能な環境が残っているので、現在も生息している可能性は高いが、個体数はかなり少ないものと推測される。

減少の要因としては、宅地造成、耕作地の消失、河川改修などによって生息環境が失われたこと、生息地であった耕作地での農薬使用などが考えられる。

保全上の留意点

現在の生息地である河川敷をむやみに開発しないこと。また、生息地周辺では、農薬の使用を制限するなどの配慮が必要である。

引用文献

河路掛吾，1986．ホソハンミョウの記録．佳香蝶，38(148): 60.
戸田尚希・長谷川道明・蟹江　昇，2019．愛知県の甲虫目録 3．佳香蝶，71(277): 1-11.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ホソガムシ科＞

ヤマトホソガムシ　*Hydrochus japonicus* Sharp, 1873

評価理由

富栄養化した池に普通に見られ、用水路にも生息していた。都市化によりため池などが著しく少なくなったことによる。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長は 26～31mm。黒褐色で、肢は黄褐色。背面は緑ないし藍色の金属光沢を有する。全体に強い点刻があり、前胸背のくぼみは顕著。上翅の第 3、7、9 間室が明瞭に隆起する。



採集地等不明

分布の概要

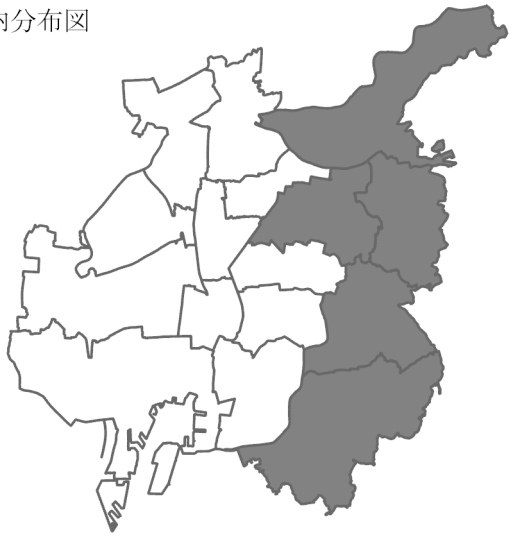
市内：東部丘陵地の残された池に僅かに生息している。

県内：平野部の池、沼に見られるが少ない。

国内：本州、四国、九州。

世界：台湾、中国、東南アジア。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

池、沼などに生息するが、富栄養化した水域に多いとはいうものの、汚濁水の流入する水質では生活できない。

現在の生息状況／減少の要因

池の分断化、孤立化している現状であるところへ、汚水の流入によってこの種を始めとする様々な種が生息できなくなっている。

保全上の留意点

現在ある池の保全と植物豊かな水辺環境の整備が必要である。

関連文献

穂積俊文・佐藤正孝，1957. 東海甲虫誌（第 3 報）. 佳香蝶, 9(32): 1-7.

（佐藤正孝）

昆虫類　＜コウチュウ目クワガタムシ科＞

オオクワガタ　*Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse, 1874

評価理由

平野部から低山地に生息する日本最大のクワガタムシであり、各地で減少傾向が甚だしい。近年の飼育ブームにより本種の外国産を含む多くの飼育個体が増加しており、放虫や逃走個体による遺伝子汚染の恐れも高まっている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 II 類

形態

体長 25～65mm。雄では大あごを含めると 70mm を超える個体もいる。黒色でよく発達した大あごは中央より前方に斜め上方へ向く内歯を持つ。



瀬戸市（飼育）、2003 年 9 月 18 日、戸田尚樹　撮影

分布の概要

市内：守山区竜泉寺（長谷川，1998）、昭和区八事（佐藤ほか，1990）、千種区東山（佐藤ほか，1990）。

県内：瀬戸市、春日井市、小牧市、津島市など。

国内：北海道、本州、四国、九州、対馬。

世界：中国、朝鮮半島、タイ、インド。



生息地の環境／生態的特性

平野部の河畔林や低山地の雑木林などに生息する。成虫は夜行性で 6～9 月に活動し、コナラやヤナギの樹液に集まる。幼虫はアベマキ、ポプラ、エノキなど広葉樹の枯れ木の白色腐朽した部分を食べる。

現在の生息状況／減少の要因

里山の減少や河畔の整備により、本種が棲める様な太い大木が減ったことが、最大の原因であろう。

保全上の留意点

河畔林の整備や雑木林の開発と共に、飼育ブームに伴う放虫や逃亡が危惧される。

特記事項

ペット業者などによる過度の採集を防止する必要がある。

引用文献

長谷川道明，1998．昆虫類 I　豊橋市自然史博物館子所蔵クワガタムシ科標本目録．豊橋市自然史博物館資料集（6）．
佐藤正孝，1990，愛知県の甲虫類（ I ）．愛知県の昆虫（上），pp204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

関連文献

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　–レッドデータブックあいち 2009–　動物編，p293．同県環境部自然保護課．

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ハネカクシ科＞

ヤマトモンシデムシ　*Nicrophorus japonicus* Harold, 1877

評価理由

平野部に生息する代表的なシデムシとして知られていた種であるが、小動物の死骸を埋葬して産卵する習性のため、良好な自然環境が必要であり、減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

黒色で、各上翅には 2 帯の鮮やかな赤色の帯状紋がある。帯状紋は、会合線に達することはなく、中に黒点を含まない。後脚頸節は強く湾曲する。

体長は 14～20mm。



採集地等不明

分布の概要

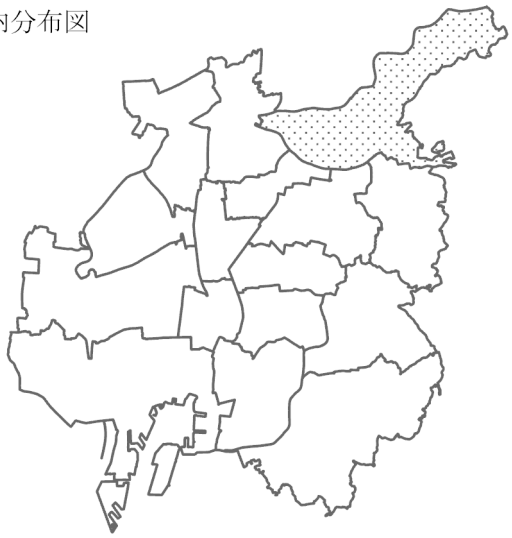
市内：守山区で記録がある。

県内：尾張地方～西三河平野部で記録がある。

国内：本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国、モンゴル、台湾。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

平野部に生息し、小動物の死体に集まる。

現在の生息状況／減少の要因

最近の生息情報はほとんど得られていない。残されている記録、標本はいずれも 1950 年代のものである。減少の要因としては、都市化とともに生息環境が失われたこと。野生動物の減少や衛生環境の改善により、餌である動物の死体等がなくなったことが考えられる。

保全上の留意点

減少の背景に衛生環境の改善による影響も少ながらず考えられるので、保全対策は簡単ではない。河川敷など比較的自然環境が残された地域を維持することが必要である。

関連文献

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12): 49-53.

穂積俊文，1956．東海甲虫誌（2）．佳香蝶，8(28): 1-8.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ツチハンミョウ科＞

マメハンミョウ　*Epicauta* (*Epicauta*) *gorhami* (Marseul, 1873)

評価理由

かつては、マメ類の害虫として知られた種であるが、幼虫が寄生するイナゴ類の数が減少し、近年発見が困難になった。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

形態

艶のない黒色で、頭部は赤色。この地方に産するものは、前胸背正中線上、上翅両縁、会合部、中央に灰白色の縦条が現れる。

体長は 12～18mm。



採集地等不明

分布の概要

市内：市内に残されている採集記録は、港区寛政町（穂積, 1957）が知れられるに過ぎない。記録はないが、戦後しばらくは中区でも普通に見られた。

県内：残されている記録は他に旧一宮町、春日井市、小牧市からあるのみ。

国内：本州、四国、九州。

世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

幼虫が寄生するイナゴ類が生息する草地、河川敷など。

現在の生息状況／減少の要因

かつてマメ類の害虫として著名であったが、現在発見は困難な状況にある。減少の要因としては、農薬の普及と、自然環境の変化よりも耕作地に害虫として繁栄し、ヒトへの依存度が高かったことも急に減少した要因として考えられる。

保全上の留意点

本種の野生状態での生息地となりうる河川敷の草地の環境を確保することが必要である。

引用文献

穂積俊文，1957．東海甲虫誌（第 5 報）．佳香蝶，9(33): 3-8.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゴミムシダマシ科＞

ヤマトオサムシダマシ　*Blaps* (*Blaps*) *japonensis japonensis* Marseul, 1879

評価理由

農家の近代化が進み、家畜も集約され飼育されることから、納屋などで藁束を保管することがなくなり、生息地が減った事により見ることができなくなった。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	国リスト
全　　国 2020	準絶滅危惧

形態

220mm 前後。全体に黒色で細かい点刻に覆われる。触角先端 4 節は数珠玉状で、赤褐色の短軟毛に覆われる。上翅端部は急に細くなりやや上反する。



豊橋市北島町、1994 年 10 月 31 日、戸田尚希　採集

分布の概要

市内：緑区（吉鶴ほか，2008）。

県内：豊橋市、新城市、蒲郡市、岡崎市、春日井市。

国内：本州、四国、九州。

世界：台湾、中国大陸北部。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

昔ながらの農家の軒下や納屋の、乾燥した藁くずなどの下にいる。

現在の生息状況／減少の要因

市内の農家は、そのほとんどが移転や廃業で姿を消し、生息環境自体を見ることは難しくなっている。

特記事項

古くからの貿易港の周囲に多いことから、その昔、食料と共に大陸から侵入したとされる。

引用文献

吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008 コウチュウ目新修名古屋市史資料編　自然　目録，pp102-156 名古屋市.

関連文献

黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之（編），1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅲ. 保育社，大阪.

穂積俊文, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅱ）. 愛知県の昆虫（上），pp232-308. 愛知県.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目カミキリムシ科＞

オオシロカミキリ　*Olenecamptus cretaceus cretaceus* Bates, 1873

評価理由

ケヤキやムクノキの大木に依存する珍しい種で、県内でこれまで知られる生息地は、豊根村分地、豊橋市豊橋公園、名古屋市熱田神宮など数か所に過ぎない。熱田神宮は尾張地方唯一の生息地であるが、都市中心部に孤立した環境で、面積は狭く、他の生息地とは孤立している。さらに、近年は乾燥化によって樹林内の環境は必ずしも安心できるものではなくなっている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

橙黄色～赤褐色で、表面は白色の鱗毛に覆われている。側面は複眼の後方から前胸上翅にかけて地色が露出し、橙黄色の帯が縦走する。上翅には側面の縦帯に接したやや角ばった円紋が各 3 対、中央後方には独立した一対の小円紋がある。触角と脚は橙黄色～赤褐色。

体長は 16～23mm。



採集地等不明

分布の概要

市内：熱田区（熱田神宮）、東区東新町で記録がある。正式な記録にはなっていないが、中区の神社でも戦後しばらくは毎年採集されていた。

県内：他に豊根村、豊橋市など数か所で確認されているに過ぎない。

国内：本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、台湾。台湾産は別亜種とされる。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

ケヤキ、ムクノキなど寄主植物の大木を有する森林に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

東区東新町の記録は 1950 年代のもので、現在も生息環境が残されている可能性は低い。

熱田神宮は調査の機会が限られるため、1971 年に記録されて以来情報がないが、生息環境は保護されているので、現在も生息している可能性が高い。しかし、熱田神宮は都市部に孤立した自然で、他の生息地とは遠く離れていること、樹林内の乾燥化など生物にとっての環境は必ずしも将来にわたって安心できるものではない。

保全上の留意点

現在の生息地である熱田神宮の森の保護保全。幼虫は、ケヤキ類の枯れ枝につくため、枯れた下枝や林内に落ちた枯れ枝などを除去しない。また林内の乾燥を少しでも防ぎ、森内の生物多様性を確保するためにも、落ち葉や枯れ木、枯れ枝は放置しておく必要がある。

関連文献

佐藤正孝，1978．熱田神宮林の昆虫類．熱田神宮林苑保護委員会調査報告書，pp93-110.
成瀬善一朗，1957．オオシロカミキリ東区で採集．Napi News，(22): 8.
深田雅之，1971．名古屋市内で採集したオオシロカミキリ．月刊むし，(7): 36.
湯沢宣久・蟹江　昇・河路掛吾・竹内克豊，1990．愛知県のカミキリムシ科．愛知の昆虫（上），pp389-433．愛知県自然保護課.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目セセリチョウ科＞

ミヤマチャバネセセリ　*Pelopidas jansonis* (Butler, 1878)

評価理由

名古屋市とその近郊では、疎林の間のススキ草原や、丘陵間の小湿地の周りに見られたが、近年本種の生息に適した環境が開発等により激減し、本種の姿を見ることができなくなっている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	－

形態

開張 32～36mm。雄雌の色彩斑紋はほとんど同じだが雌はやや大型。雄の前翅表面には斜走する弱い性標がある。後翅裏面中央の中室部に明瞭な銀白紋をもつ。



田中多喜彦　採集・撮影

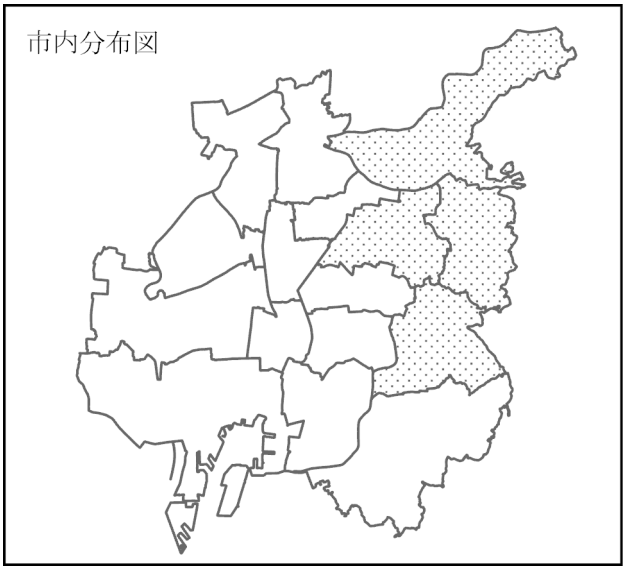
分布の概要

市内：千種区平和公園、天白区八事裏山、名東区猪高、守山区上志段味などに記録がある。

県内：尾張丘陵から三河山地まで広く分布するが、局地的で近年産出量は少ない。

国内：本州、四国、九州に分布するが、最新の学研日本産蝶類標準図鑑では「まれ」とある。

世界：朝鮮半島、中国東北部。



生息地の環境／生態的特性

温帯性のセセリチョウで、丘陵や山地の渓谷沿いや林縁の比較的小規模な明るい草地に多く、愛知県では丘陵の小湿地の周辺の草地で見ることが多い。幼虫はススキやチガヤを主食草とし、高茎イネ科草本群落を好む。蛹で越冬し、成虫は 4 月中旬～5 月と 7 月下旬～8 月の年 2 回出現し、ツツジ類、アザミ類、ヒメジョオンなど各種の花に集まる。

現在の生息状況／減少の要因

1980 年頃までは、市内でも東部丘陵に散見され住宅の庭にも飛来し、まれな種ではなかった。減少の原因は、目下のところ不明であり、より詳細な全国的な調査が望まれる。

保全上の留意点

全国的に減少傾向にあることが分かったのは最近のことである。食草は普遍的な種であり、他の原因による何らかの生態的な脆弱性があると思われる。当面、極力残された湿地を含む草地環境を保全するとともに、遊興施設等での広範囲な農薬散布には十分な配慮が望ましい。

引用文献

大曽根剛，1975．名古屋市内におけるミヤマチャバネセセリとアサマイチモンジの記録．佳香蝶，27(103): 40.
高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp21-95．愛知県.
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然，pp464-475 同　目録，pp194-202．名古屋市.
愛知県，2009 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータブックあいち 2009　–動物編–愛知県環境部自然環境課.

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl71,p323．保育社，大阪.
福田晴夫ほか，1984．原色日本蝶類生態図鑑（IV）．保育社，大阪.
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京.

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目タテハチョウ科＞

ウラナミジャノメ　*Ypthima multistriata* Butler, 1883

評価理由

市内では守山区竜泉寺周辺に生息地があったが、著しく減少している。西南日本に分布する種で、本州の太平洋側は神奈川県小田原市以南、日本海側は福井県南部以西に分布しているが、分布の北の境界に近い地域では、個体数の減少や生息地の消滅が近年明らかになってきている。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

開張 38～42mm。翅表は全体に暗褐色で、前翅端と後翅端に小さい眼状紋がある。翅の裏面には細かいさざ波状の紋があり、前翅面に 1 個、後翅に 3 個の黄色の環で縁取られている大きい眼状紋が目立つ。



左ウラナミジャノメ（裏面）、右ヒメヒカゲ（裏面）
ともに守山区小幡緑地、田中多喜彦　採集・撮影

分布の概要

市内：守山区竜泉寺、大森に記録がある。大森の八竜湿地では 1985 年まで記録がある。

県内：犬山市、瀬戸市などの尾張丘陵から三河山地にかけ、低標高地に局地的に分布する。

国内：本州、四国、九州、対馬。

世界：朝鮮半島、台湾、中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

生息地の多くは、ヒメヒカゲの生息地である湿原やその周辺の低木の生える疎林である。湿地への執着はヒメヒカゲほど強くはなく、田畑周辺の草地にも発生することがある。

市内では 6 月～7 月に第 1 化がみられ、9 月に第 2 化が少数発生する。幼虫は各種のイネ科やカヤツリグサ科植物を食べる。

現在の生息状況／減少の要因

かつては守山区の湿地周辺に比較的多く見られたが、最近では湿地を含む周辺の植生の遷移が進み、本種も減少している。

田畑への農薬散布の余波を被ったこと、ドクガの駆除や松枯れ防止のための広域的な薬剤空散の影響もあるであろう。

保全上の留意点

市内に残された、かつての発生地の湿地および周辺の草地環境が、今後も継続的に維持されるならば、再発見される可能性も少ないながらある。害虫防除のための薬剤散布は、最小限とすることが必要である。

引用文献

高橋　昭，1984．チョウ類．愛知の動物．愛知県郷土資料刊行会，名古屋．
高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp21-95．愛知県．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然，pp464-475 同　目録，pp194-202．名古屋市．
愛知県，2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータブックあいち 2009　–動物編–愛知県環境部自然環境課．

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑．pl59,p270．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1984．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅳ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜トンボ目アオイトトンボ科＞

オツネントンボ　*Sympecma paedisca* (Brauer, 1877)

評価理由

本種の記録は 1999 年以前の記録のみである。市内ではそれ以降長期にわたり発見されていない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

成虫の体長は約 40mm。体色は淡褐色で成熟しても変わらない。近縁のホソミオツネントンボとは翅の縁紋が重ならないことで容易に判別できる。

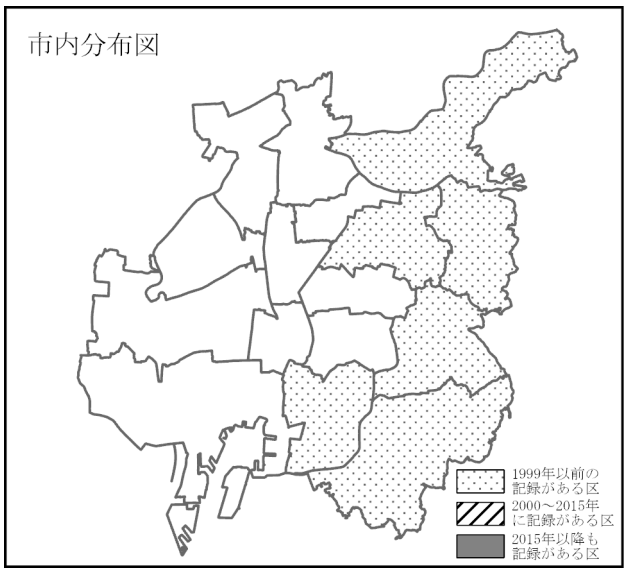
分布の概要

市内：千種区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区。

県内：低山地のため池を中心に局所的に分布する。

国内：北海道、本州、四国、九州、広く分布しているが減少が著しい。特に北陸、関東地方の現存産地で激減している。

世界：朝鮮半島、中国、ロシア、ヨーロッパ。



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵、低山地の植生豊かなため池に生息する。

本種はその名の通り、成虫で越冬する。冬季は樹皮下や建物の隙間に入り風雨を防ぐ。暖かい日には日光浴する。

現在の生息状況／減少の要因

市内丘陵地の植生豊かなため池に生息していた。市内では 30 年近く姿を見ていない。県内や全国の生息地も急速に減少しており、近々環境省レッドリストでも評価区分が上がる見込みである。

池の土手を改修すると一気にいなくなる。また、環境は変わらなくても姿を消している場所も多数あり、農薬が原因ではないかと考えられている。

保全上の留意点

ため池整備に伴うコンクリート堤防造成が本種には大ダメージである。生息地では現状の環境を維持したい。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫 ・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫(上)，pp.9-78．愛知県．

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目イトトンボ科＞

モートンイトトンボ　*Mortonagrion selenion* (Ris, 1916)

評価理由

湿地の開発による衰失、湿性植物の伸長等による湿地の状態の変化により、特に平野や平野に接する丘陵部で著しく減少した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

成虫は体長 27mm 内外の華奢なイトトンボ。雄は黄緑色で腹端のオレンジ色が目立つ。雌は未熟時はオレンジ色であるが成熟すると緑色に変わり腹部背面に黒条が現れる。

幼虫の尾鰓は柳葉状で先端は尖り無斑である。



モートンイトトンボ　雄
愛知県長久手市東山、1995 年 6 月 24 日、髙崎保郎　撮影

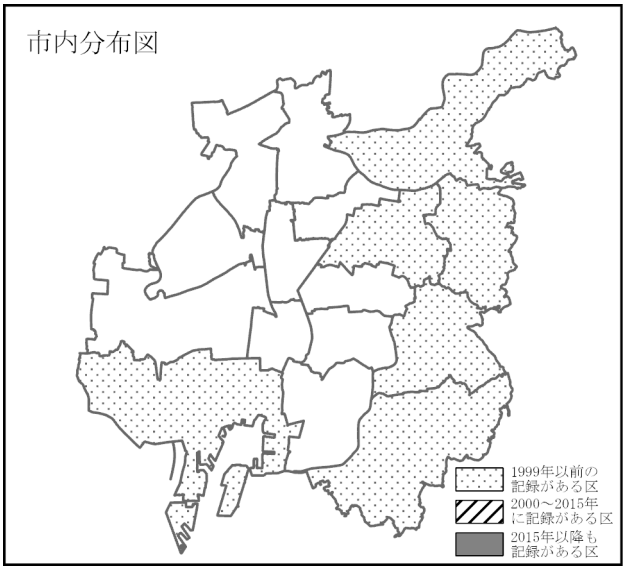
分布の概要

市内：千種区、守山区、緑区、名東区、天白区と港区の 1 か所で記録がある。

県内：平野や丘陵から山地にかけて、局所的ではあるが広く分布する。

国内：本州、四国、九州に分布する。北海道は絶滅と見られる。

世界：朝鮮半島、中国、極東ロシア。



生息地の環境／生態的特性

平地、丘陵、低山地の湿地や池畔の湿地状部、時として廃田や山峡の水田でも見られる。生息できる湿地は水深が浅く、湿生植物の丈が低い状態の時に限られ、湿地の状態に変化はなくても草丈が高くなっただけで消滅する。

イトトンボの中では小型脆弱で発生場所に固執すると見られているが、市街地の公園や学校ビオトープに飛来した例も観察されており、かなり移動分散力を有するのではないかと思われる。成虫は 6～7 月に出現する。

現在の生息状況／減少の要因

比較的近年市東部の丘陵地帯と南西部の低地 1 か所で記録があった。隣接する尾張東部丘陵でも減少しており、長久手市では 1 か所の産地しか現存しない。

主として平野や隣接丘陵の湿地の衰失や、湿地が存在しても植生の状態の変化により生息可能でなくなることにより減少した。

保全上の留意点

湿生植物が適度に生育する浅い湿地の保持が必要である。

特記事項

和名、学名のモートンはイギリスのトンボ研究者 K Morton に由来する。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp350-361．同　目録，pp94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．
髙崎保郎，2010．名古屋市名東区の明徳公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔．ため池の自然，(49): 12-18．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目ヤンマ科＞

ミルンヤンマ　*Aeschnophlebia milnei* (Selys, 1883)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

本種の記録は 2010 年守山区吉根の幼虫の記録のみである。

形態

全長 63mm～78mm。黒地に黄色の細身のヤンマ。

分布の概要

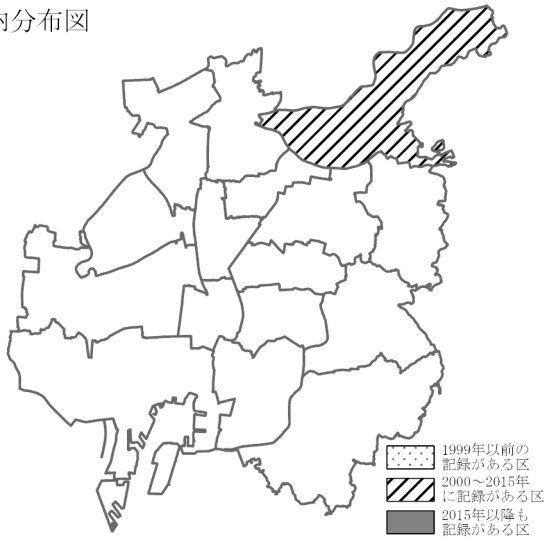
市内：守山区。

県内：丘陵地帯から山地の小河川に分布。

国内：北海道南部から鹿児島まで広く分布。

世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

丘陵から山地の樹林に囲まれた河川域に生息する。

成虫の出現期は 7 月中旬から 11 月中旬。山地で最も遅くまで見られるヤンマである。

現在の生息状況／減少の要因

市内での記録は一例のみである。

保全上の留意点

本種の記録は庄内川沿いに上流から訪れた個体からのものであり、本来の生息環境ではないと考えられる。

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目ヤンマ科＞

オオルリボシヤンマ　*Aeshna crenata* Hagen, 1856

評価理由

本種の記録は 1983 年名東区猪高で 2 例の記録のみである。市内ではそれ以降長期にわたり発見されていない。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

形態

体長 76mm～94mm の大型のヤンマ。複眼から腹部にかけての水色模様が美しい。近縁のルリボシヤンマとは胸部の青斑が鉤状に出ることで判別できる。

分布の概要

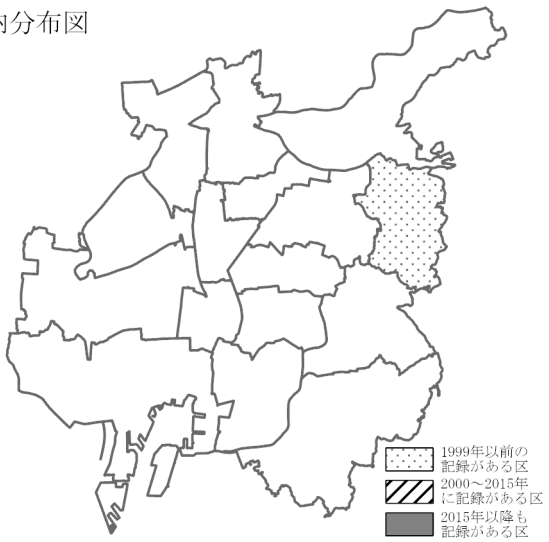
市内：名東区。

県内：北部の山間の池に広く分布。

国内：北海道、本州、九州の山地。

世界：朝鮮半島、ロシア、ヨーロッパ。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

山間の池の開放水面に生息する。

成虫の出現期は 7 月下旬から 11 月中旬。8 月中旬からは池での最優位種であり、雄の雄大な縄張り飛翔をよく見る。

現在の生息状況／減少の要因

市内での記録が名東区の 2 例のみである。

もともと山地性のトンボなので、低標高の名古屋には少なかったと考えられる。

保全上の留意点

市では長年姿を見ていないが、県内や全国では今でも普通に見られる。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫 ・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫(上)，pp.9-78．愛知県．

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目サナエトンボ科＞

ナゴヤサナエ　*Stylurus nagoyanus* (Asahina, 1951)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

市内で発見される個体の発生源は必ずしも明らかでないが、大・中河川の水質、水辺環境の悪化により減少した。名古屋を基産地とする。

形態

成虫は体長 62mm 内外。黒地に黄斑を有し、腹部第 7～9 節が著しく広がった中型のサナエトンボ。近似種メガネサナエに酷似するが、やや小型であること、腹部第 4～7 節の黄斑が環状に腹部側面に続くことで区別できる。

幼虫は細長い。メガネサナエに酷似するが腹部第 9 節がやや太短いことで区別できる。



ナゴヤサナエ　雄
西区堀越町、2013 年 8 月 18 日、清水典之　撮影

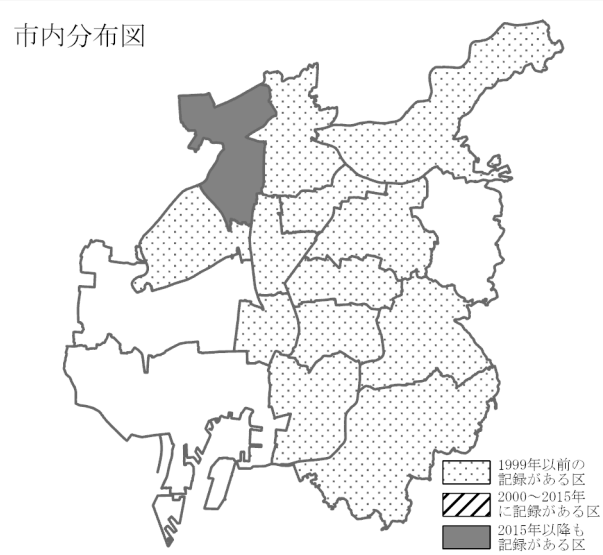
分布の概要

市内：千種区、東区、北区、西区、中村区、中区、昭和区、瑞穂区、熱田区、南区、守山区、緑区、天白区で記録されている。

県内：尾張平野を中心に尾張に接する西三河の一部で記録されている。

国内：宮城県、山形県以西の本州、四国、九州に局地的に分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

幼虫は平野の大・中河川の下流域に生息する。往時はその支流にも生息していたと考えられる。少数ではあるが愛知用水を流下し、下流の調整池で羽化することもある。幼虫期は複数年で砂泥底の深みに棲み、盛夏の候に泳いで深みから岸に達し羽化する。

成虫は極めて強い移動分散性を有し、市街地でしばしば発見される。名古屋市でも発見される区が多いのはそのためである。成虫は 8～9 月を中心に見られる。

現在の生息状況／減少の要因

愛知県で確実に産卵、羽化が認められているのは木曽川であり、そこから導水している愛知用水水路とその調整池では僅かながら羽化が確認されている。緑区の記録はその一例である。瑞穂区天白川では、かつては定着していたと思われる。本種は強い移動分散性を有することにより、市内でも中区、東区始め広範囲に間々飛来採集例がある。近年では西区の庄内川畔で定着を思わせる観察例がある。

大・中河川の水質悪化、河川改修等による水辺環境の劣化、河川周辺の緑被率の低下が減少の要因と考えられる。

保全上の留意点

市内での定着ははっきりしないが、一般的には大・中河川の水質汚濁防止、自然状態が良好な水辺と水辺林の保持が必要である。

関連文献

相田正人，1989-1990．濃尾平野のナゴヤサナエ（1）～（7）．月刊むし，pp.221-226 ．
安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp350-361．同　目録，pp94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．
鵜殿清文，1994．愛知県のメガネサナエおよびナゴヤサナエの産地追加．佳香蝶，46(179): 38.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目サナエトンボ科＞

ホンサナエ　*Shaogomphus postocularis* (Selys, 1869)

評価理由

平野の緩流を主な発生源としているため、特に尾張平野では激しい開発の影響を受け絶滅状態になっている。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

成虫は体長 51mm 内外、体形が太短い中型のサナエトンボ。黒色地に未熟時は黄色、成熟すると灰緑色の斑紋を有する。

幼虫はサナエトンボとしては中型。やや細長い紡錘状。触角は細長い。



ホンサナエ　雄成虫　守山区竜泉寺、1951 年 5 月 3 日、幼虫　守山区中志段味、2013 年 4 月 15 日、いずれも髙崎保郎　採集

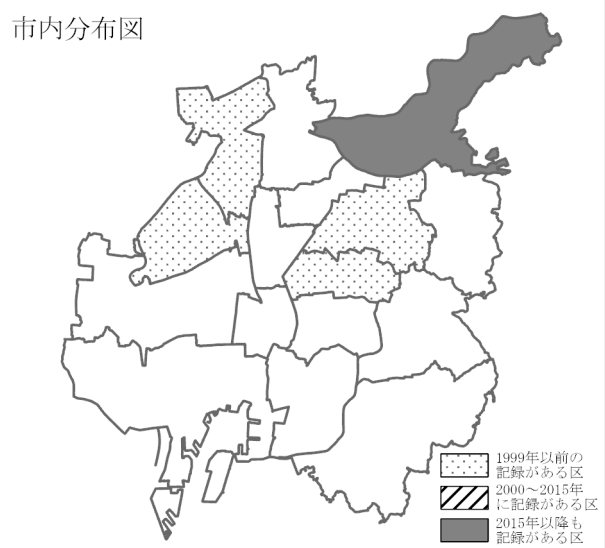
分布の概要

市内：千種区、西区、中村区、昭和区、守山区で記録されている。

県内：現在は主として三河の丘陵、低山地に分布する。稀に尾張部で偶発的発見例がある。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、極東ロシア。



生息地の環境／生態的特性

平野や丘陵の泥底中小河川を主たる発生源とし、庄内川、矢作川などからも発生する。琵琶湖のような波のある大湖にも生息する。

成熟成虫は河床の石やコンクリート河岸に静止し縄張を張り、時々水面を敏速に飛翔する。丘陵の灌木帯にも飛来する。成虫の出現期は 4 月下旬～5 月。

現在の生息状況／減少の要因

三河の矢作川水系、豊川水系では現在でも比較的普通に産する所があるので県のレッドリストの対象になっていないが、かつては東山公園や守山区竜泉寺などにも普通であった。尾張部では典型的な絶滅種である。稀に尾張平野の低地や瀬戸市内尾張東部丘陵で発見されることがあるが、木曽川や庄内川又はその支流からの飛来であろう。現在幼虫の生息が確認されているのは守山区の庄内川畔だけである。

都市化の影響を強く受ける市近郊田園地帯や隣接丘陵地を主生息地としたため著しく減少した。

保全上の留意点

市内では既に絶滅状態であるが、一般的には水田地帯、隣接丘陵地の小流の水質、自然的な河川環境の保全が必要である。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目トンボ科＞

キトンボ　*Sympetrum croceolum* (Selys, 1883)

評価理由

発生源が限られもともと個体数は多くなかったが、近年は市内で見ることがなくなった。県内でも著しく減少した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	－

形態

成虫の体長は 42mm 内外。体に斑紋はなく橙黄色一色で、翅は前後翅共基部と前縁が鮮やかな橙黄色を呈し、アカトンボでは最も美しい。

幼虫は背棘を第 9 節に有することが特徴。



キトンボ　雄
名東区猪高町上社猪高緑地、1986 年 10 月 18 日、
髙崎保郎　採集

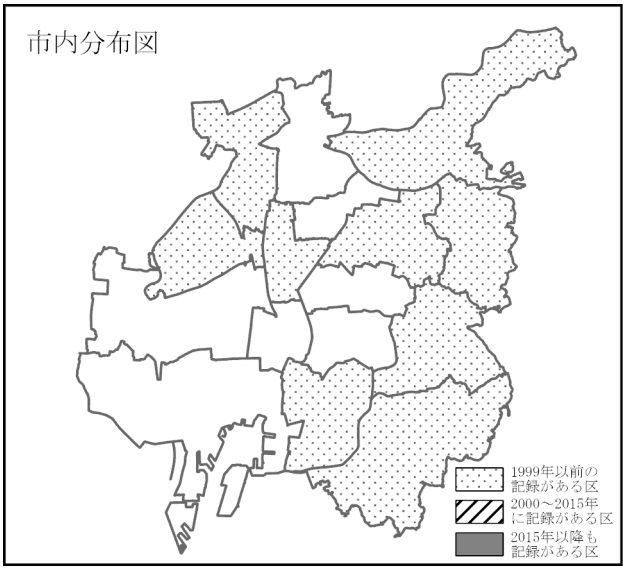
分布の概要

市内：千種区、西区、中村区、中区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

県内：現在は主として丘陵から低山地にかけて局所的に分布する。

国内：**北海道**、本州、四国、九州。

世界：**朝鮮半**島、中国、ロシア。



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵地、低山地に所在する水生植物が豊富で樹林を伴う池沼で見られるが、散発的で個体数も少なく多産地以外ではたまたま飛来したという印象が強い。安定的多個体の発生源は、水が清澄で遠浅の岸にタヌキモ類が繁茂するような産卵に適する環境を有する池である。

岸に沿って沈水植物が存在する水面上空を連結して飛び産卵する。成虫出現期は 6～11 月であるが、羽化は秋まで続き多産地にあっては翌年 1 月初・中旬積雪上に静止する個体を見、かなり耐寒性を有する。

現在の生息状況／減少の要因

かつては名古屋城水堀や南区の池など平地でも見られた。現在市内では発見できないが、飛来の可能性もなくはない。隣接する尾張東部丘陵で極く稀に飛来個体を見ることがあり、どこかに発生源が存在するのであろうが、県全体でも近年安定的な発生地は知られていない。平地から低山地にかけての産卵に適する池が減ったことが減少要因と考えられる。

保全上の留意点

市内では絶滅状態であるが、一般的には水生植物が豊富で産卵の適地となる池沼の保全が必要である。

特記事項

近傍では 1980 年代末まで、瀬戸市海上の森篠田砂防地に多産した。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜バッタ目バッタ科＞

セグロイナゴ　*Shirakiacris shirakii* (Bolívar, 1914)

評価理由

草地性。湿地や河川周辺の湿った草地に生息する。こうした環境は排水工事などにより造成地とされやすく、湿地そのものの存続と共に本種の生息が懸念される。分布域は広いが、全国的にも個体数が少ない希少種である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

有翅。前胸背面は濃いチョコレート色で淡色条に縁どられる。後脚脛節の中央付近から跗節にかけては赤紅色。



守山区東谷山、1986 年 8 月、岡田正哉　撮影

分布の概要

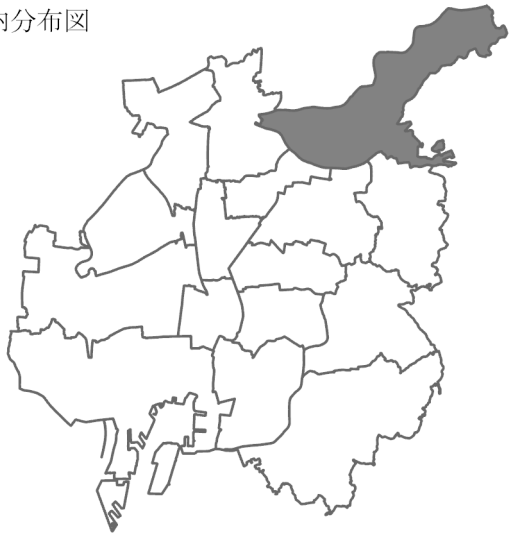
市内：守山区。

県内：おもに三河平野部～尾張地方に見られる。岡崎市、犬山市、日進市、長久手市、春日井市、瀬戸市、武豊町、南知多町（日間賀島）など。

国内：本州、四国、九州（対馬を含む）などに分布する。

世界：ロシア沿海州南部、中国東部～東北部、台湾、カシミール、パキスタン。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

湿地周辺や河川沿いの湿った草地に生息。排水工事等による人為的な乾燥化と共に、最近は各地の湿地で自然的な乾燥も進んでいるようで全体的には環境悪化の傾向にある。

現在の生息状況／減少の要因

既知産地は守山区東谷山山麓の湿地。ここは近くの用水路の整備工事や宅地開発のため乾燥化が進み環境は悪化した。本種の生息が懸念される。

保全上の留意点

湿地そのものの保護と同時に、その湿地への水源・水脈を断たないよう注意すること。

関連文献

岡田正哉，1990．愛知県の直翅目（1）．愛知県の昆虫（上），pp87-93．愛知県．
日浦　勇，1993．セグロイナゴ．原色日本昆虫図鑑（下），p80．保育社，大阪．
日本直翅学会（編），2006．バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑，p270,p531．北海道大学出版会，北海道．

（岡田正哉、水野利彦）

昆虫類　＜カメムシ目アカジマウンカ科＞

ニホンアカジマウンカ　*Ommatidiotus japonicus* Y.Hori, 1977

評価理由

これまで生息が確認された産地は、シラタマホシクサなど湿性植物が生育する都市近郊の低湿地である。植生遷移、埋め立てなどによって生息地そのものが消滅する危険が極めて大きい。

名古屋市がタイプ産地となっており、学術的にも重要である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長は翅端まで、雄は約 42mm、雌は約 52mm。体色は灰緑色で、背面は頭頂から小楯板の先端まで赤色の条線がある

分布の概要

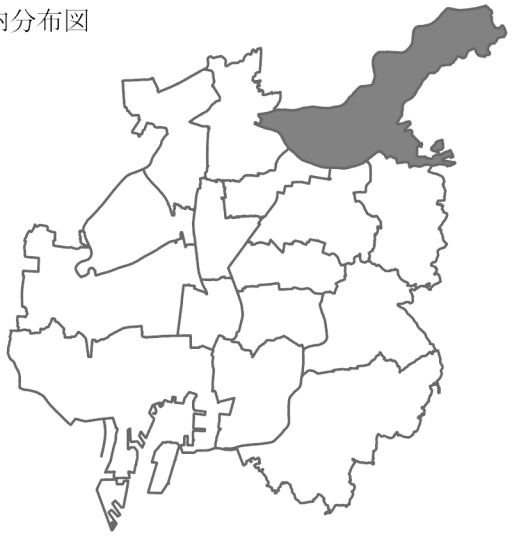
市内：守山区から唯一の記録がある。

県内：新城市、豊田市、みよし市。

国内：本州（東海地方）。

世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

名古屋市東部丘陵帯に点在するシラタマホシクサなどが生育する湿地に限って生息する。

成虫は 6 月～9 月にかけて得られるが、元々得難い種で、詳しい生態は不明である。

現在の生息状況／減少の要因

東谷山における近年の調査では確認されていない。県内でも最近の生息情報は得られておらず、既知産地のいくつかも消滅した。

湿地に生息するため、宅地造成などの埋め立てにより、生息地そのものが消滅した。

関連文献

Hori, Y，1977．A new species of the genus *Ommatidiotus* (Homoptera, Issidae) from Japan．Annotations Zoologicae Japonenses，50(2):127-130.

堀　義宏，1982．愛知県の半翅目．昆虫と自然，17(12): 22-25.

堀　義宏，1989．都市環境下の昆虫相について（1）．名古屋市の頚吻類．名古屋市衛生研究所報，(35): 118-123.

堀　義宏・佐藤正孝，1984．半翅類．愛知の動物，pp99-107．愛知県郷土資料刊行会，名古屋.

堀　義宏・浅岡孝知・原田猪津夫，1990．愛知県の頚吻亜目．愛知県の昆虫（上），pp105-122．愛知県.

（矢崎充彦）

昆虫類　＜カメムシ目グンバイウンカ科＞

ハウチワウンカ　*Trypetimorpha japonica* Ishihara, 1954

評価理由

全国的にも産地が限定され、特に低地の湿地環境に生息するため、開発などで生息環境が減少している。

市内では守山区東谷山における古い記録しか存在しない。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

体長約 3mm の非常に小型のグンバイウンカの一種である。

後脚脛節の側棘は 2 本。前翅中央部が黒色で、そこから外縁に向かって放射状に黒色帯が見られる。



矢崎充彦　撮影

分布の概要

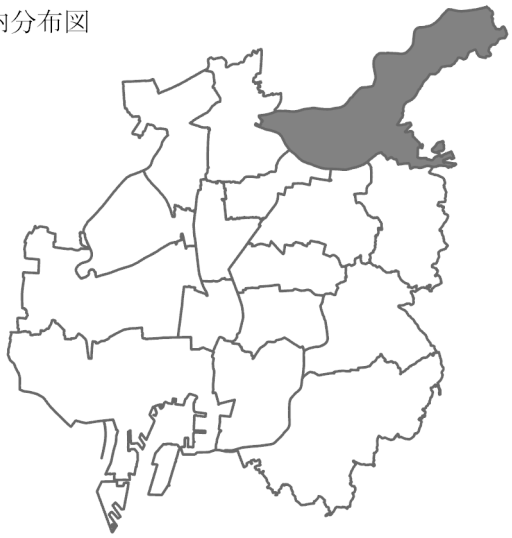
市内：守山区東谷山から唯一の記録がある。

県内：豊田市、みよし市、大府市、春日井市、日進市など。

国内：本州（関東以西）、九州。

世界：朝鮮半島。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵地にかけて、ススキ・チガヤなどが点在して生育する湿地帯に生息する。草本類が繁茂する湿地よりも、砂礫地が広がる比較的明るい環境で見られる。

成虫は 8 月～9 月にかけて出現し、長翅型と短翅型が知られるが、長翅型は稀である。

現在の生息状況／減少の要因

近年の生息情報はほとんど得られていない。東谷山山麓の湿地は宅地造成などで大部分消失したとされ、生息環境は悪化している。東谷山における最近の調査でも発見できていない。

主として平野部の湿地環境に生息するため、宅地造成などで生息地そのものが消滅した。

保全上の留意点

特に平野部における湿地環境の保全および水源地である後背林を維持し、乾燥化を防ぐ必要がある。

特記事項

近年の調査で、県内では新たな産地が見つかっている。

関連文献

堀　義宏，1989．都市環境下の昆虫相について（1）．名古屋市の頸吻類．名古屋市衛生研究所報，35: 118-123.
堀　義宏・浅岡孝知・原田猪津夫，1990．愛知県の頸吻亜目．愛知県の昆虫（上），pp105-122．愛知県.

（矢崎充彦）

昆虫類　＜カメムシ目アメンボ科＞

エサキアメンボ　*Limnoporus esakii* (Miyamoto, 1958)

評価理由

全国的にも生息地が限定され、ため池環境の悪化により、生息適地が年々少なくなっていると考えられる。
市内では近年になって生息地が明らかになった。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長 8～10mm の小型で細身のアメンボである。体色は暗赤褐色～赤褐色で、体側に銀白色の毛による縦帯をもつ。
触角は第 4 節が最も長い。



西尾市、2021 年 4 月 11 日、澤田宗一郎　撮影

分布の概要

市内：中区（名古屋城濠）、名東区（塚ノ杁池）の 2 か所。

県内：新城市、豊橋市、田原市、豊田市、安城市、春日井市、日進市、一宮市、東浦町、常滑市など。

国内：北海道、本州、四国、九州、対馬。

世界：中国、朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵地にかけて、ヨシやガマなど抽水植物が繁茂するため池に生息する。
抽水植物帯の中に生息し、春先や秋季を除くと開けた水面上にはほとんど出てこない。
越冬は、ヨシなどの抽水植物の枯れ株やリターなどで行うことが知られる（中尾，2019A）。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋城の濠では抽水植物が減少傾向にあり、生息環境の悪化が見られたが、2014 年の調査では、多くの個体を確認できた。塚ノ杁池は安定した産地と考えられるが、オオクチバス（ブラックバス）などの外来種が入り込んでおり、注意が必要である。
ため池の改修や埋め立て、水質悪化などによる生息環境悪化で減少している。

保全上の留意点

生活排水の流入などによる水質悪化を防ぎ、現存する抽水植物帯を保全する。特に抽水植物帯は本種の生息に必須の条件であるため、ため池の改修作業などではこれが失われないよう十分に注意する必要がある。また、幼虫期間に長日条件下で発育した個体は、飛翔筋の発達が少ないことが知られ、夏季の落水には注意する必要がある（中尾，2019B）。

引用文献

中尾史郎，2019 A．第 14 章絶滅危惧アメンボ類の保全．絶滅危惧種の生態工学，pp165-177．地人書館，東京．
中尾史郎，2019 B．陸水アメンボ類の保全生物学と生態工学．昆虫と自然，54(7): 5-9.
矢崎充彦，2010．名古屋市で得られた分布上特記すべき半翅類．佳香蝶，62(243): 51-55.

（矢崎充彦、澤田宗一郎）

昆虫類　＜コウチュウ目タマムシ科＞

クロマダラタマムシ　*Nipponobuprestis* (*Nipponobuprestisia*) *querceti* (E. Saunders, 1873)

評価理由

エノキなどの大木に見られるが個体数は少ない。生息地は平野部に偏る傾向があるが、平野部に残存する大木は少なく、都市化や乾燥化に伴い生息できる環境は縮小している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

形態

体長 17～28mm。黒色で、赤銅あるいは青緑色の光沢を帯び、上翅には多数の黄白色の小円紋を持つ。近似のアオマダラタマムシとは、体色の他、上翅の陥凹紋を欠くことなどで区別できる。



岡崎市矢作町、1998 年 7 月 26 日、戸田尚希　撮影

分布の概要

市内：熱田区、名古屋城（長谷川，2002，採集は 1950 年採集）。

県内：稲沢市（穂積，1965）、岡崎市（大平，1985）、豊橋市（穂積，1990）。

国内：本州（関東以西）、四国、九州。

世界：中国中部。



生息地の環境／生態的特性

平野部および丘陵部のエノキ等の大径木のある雑木林に生息。成虫は 5～7 月に出現し、樹幹部に見られ、幼虫はウロの周囲や枯死部で見つかることが多い。

現在の生息状況／減少の要因

近年の記録は聞かれないが、私信によると熱田神宮から採集例がある。

保全上の留意点

大径木が寺社林や河畔林に多い為、現存する発生木並びに周辺環境の保全が急務と思われる。

引用文献

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵　森部一男コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12): 49-53.
穂積俊文，1965．船越俊平氏の標本箱より．ナピニュース，55:550.
穂積俊文，1990．愛知県の甲虫類（Ⅱ）．愛知県の昆虫（上），pp232-308．愛知県農地林務部自然保護課.
大平仁夫，1985．岡崎市の昆虫類．岡崎市史．自然，pp1024-1096

関連文献

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生動物　–レッドデータブックあいち 2009–　動物編，p298．同県環境部自然保護課.
蟹江昇・戸田尚樹，2008．愛知県のタマムシ．佳香蝶，60(234): 207-230.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ホタル科＞

ゲンジボタル　*Luciola* (*Luciola*) *cruciata cruciata* Motschulsky, 1854

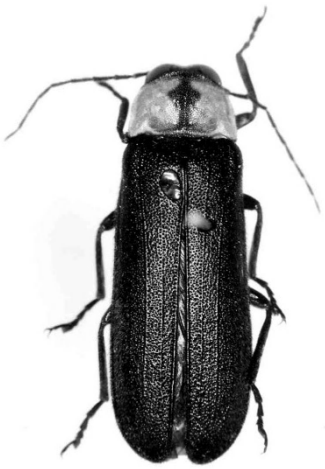
評価理由

清流に生息する種で、戦前には瑞穂区の石川橋周辺（山崎川）にも生息していた。河川の汚れや河川改修などによって減少した他、「保護」の名の下で行われる放流事業や他個体群の移入による遺伝子汚染の脅威も拡大している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

黒色。前胸背は赤色で、十字の黒紋がある。
体長は 10～16mm。



採集地等不明

分布の概要

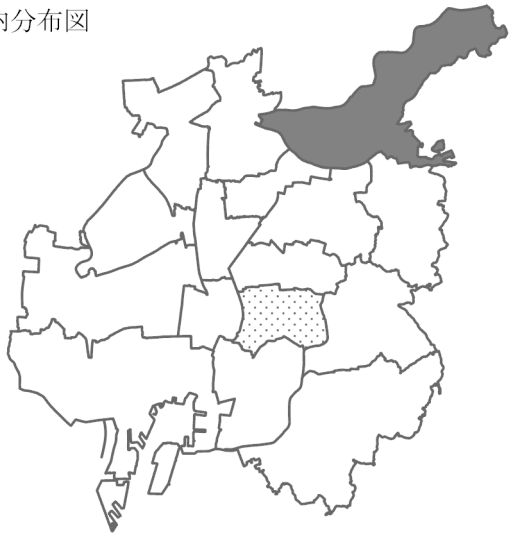
市内：戦前までは市内各地に見られた。現在見られる生息地には少なからず人の手が加わっており、どこまで自然個体群と判断していいのか難しい。市内での自然分布域は、守山区に 1 か所だけ残存している。

県内：丘陵地～山地にかけて広く分布する。

国内：本州、四国、九州。

世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

幼虫の餌であるカワニナ類が生息する清流に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

放流事業が盛んに行われているため、天然の個体群の生息状況については把握しにくくなっているが、守山区には自然個体群と思われるものが生息している。減少の要因としては、河川の汚れや改修による生息地の消失が主要因として考えられる。また目には見えないが、放流事業による遺伝子汚染がかなり進行していると見るべきであろう。

保全上の留意点

ホタル保護の名目の下、各地で放流事業が盛んに行われているが、安易な放流は、生態系の攪乱や遺伝子汚染を招き、わずかに生き残った自然個体群を絶滅させかねない危険な行為であることを認識する必要がある。

関連文献

名古屋市環境保全局，1994．なごやのほたる，24pp．名古屋市．

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ホタル科＞

ヘイケボタル　*Luciola* (*Luciola*) *lateralis* Motschulsky, 1860

評価理由

水田や池、湿地などに生息するホタルで、かつては市内各地に生息していたと考えられるが、非常に少なくなった。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	－

形態

ゲンジボタルに似るが小型で前胸背中央の黒条は十字にならない。

体長は 7～10mm。



撮影地等不明

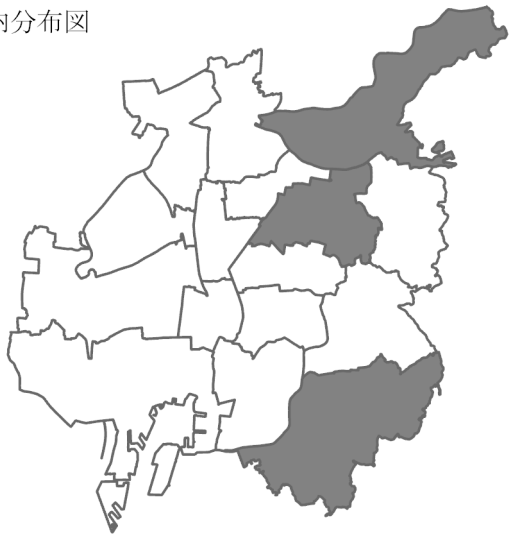
分布の概要

市内：確実な採集記録として残されているのは千種区東山のみであるが、少なくとも戦前は各地に生息していたものと思われる。

県内：平地から山地にかけて広く記録がある。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、シベリア。



生息地の環境／生態的特性

水田、湿地、池などに生息する。

現在の生息状況／減少の要因

市街化によって水田は宅地に変わり、ため池は埋め立てられ、生息できる場がほとんど失われた。また、畦をコンクリートで固める農業の構造改善による蛹化場所の亡失や農業による水質悪化とともに水田は、ホタルの生息できる場所ではなくなった。

人間生活の影響で、ごく普通であった種が激減した例のひとつである。

保全上の留意点

生息環境としての水辺環境の回復が第一の条件である。その後に自然での定着を待つことが本来の方法である。しかし、生息域の分断から、市内での回復は見込めないと思われるので、一時的には近隣からの移入も必要であろう。

引用文献

高橋　敬，1975．甲虫雑記（1），名古屋市東山の甲虫．佳香蝶，27(101): 9-10.

関連文献

名古屋市環境保全局，1994．なごやのほたる，24pp．名古屋市.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ガムシ科＞

マルヒラタガムシ　*Enochrus* (*Lumetus*) *subsignatus* (Harold, 1877)

評価理由

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	国リスト
全　　国 2020	準絶滅危惧

形態

48～50mm。体型は長楕円形で、黄褐色。上翅は密に点刻され、不鮮明な縦の紋がある。



港区、2011 年 9 月 28 日、池竹弘旭　採集

分布の概要

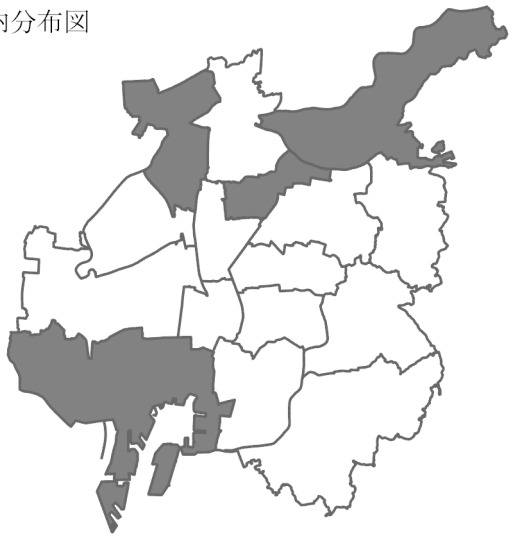
市内：守山区、西区、港区、東区（すべて吉鶴ほか，2008）。

県内：小牧市（佐藤，1990）。

国内：本州、四国、九州、琉球。

世界：台湾、中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。局地的な分布をする種である。

現在の生息状況／減少の要因

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。

保全上の留意点

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

引用文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上）, pp204-231. 愛知県.

吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編　自然　目録, pp102-156. 名古屋市.

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl39,p214. 保育社，大阪.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目コガネムシ科＞

アカマダラハナムグリ　*Anthracophora rusticola* Burmeister, 1842

評価理由

幼虫は、猛禽類やサギ類などの巣材の中で成育し、成虫は樹液に集まる。よって猛禽類の減少が、本種の減少に深く関与している。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	情報不足

形態

背面は全体に赤褐色で小黒点が散在する。腹面は赤褐色の中胸突起を除いて黒色。生きている時は鮮やかなオレンジ色をしているが、死ぬと暗赤色になってしまう。前脚頸節には 2 個の外歯がある。

体長は 14～20mm。



採集地等不明

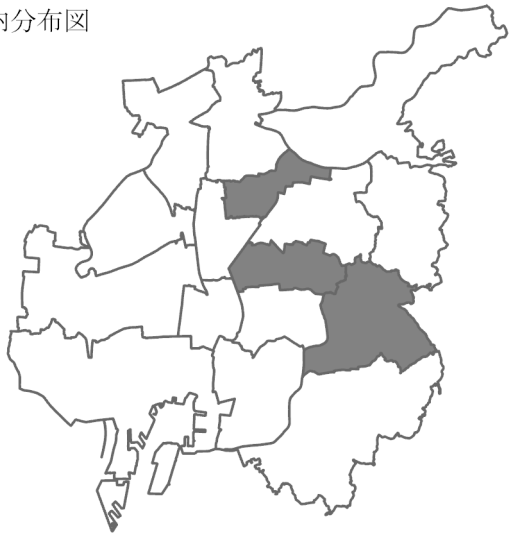
分布の概要

市内：昭和区八事、東区で古い記録（穂積, 1958）があり、天白区でも得られている。

県内：三河地方の丘陵地に記録が多い。

国内：本州、四国、九州。

世界：済州島、朝鮮半島、シベリア東部、中国、モンゴル。



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵地の雑木林に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

市内の記録は 1950 年代のもので、少なくとも近年同好会誌などに掲載された採集報告はない。豊田市、長久手市では生息している。

保全上の留意点

猛禽類の営巣する里山などを保全する必要がある。

引用文献

穂積俊文，1958．東海甲虫誌（第 6 報）．佳香蝶，10(34): 1-14.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目タテハチョウ科＞

ウラギンスジヒョウモン　*Argyronome laodice japonica* (Ménétriès, 1857)

評価理由

明るい湿性草原に多いヒョウモンチョウ類の 1 種であるが、近年、県内の草地で観察される個体数が減少し、市内でも同様に観察されることが少なくなっている。

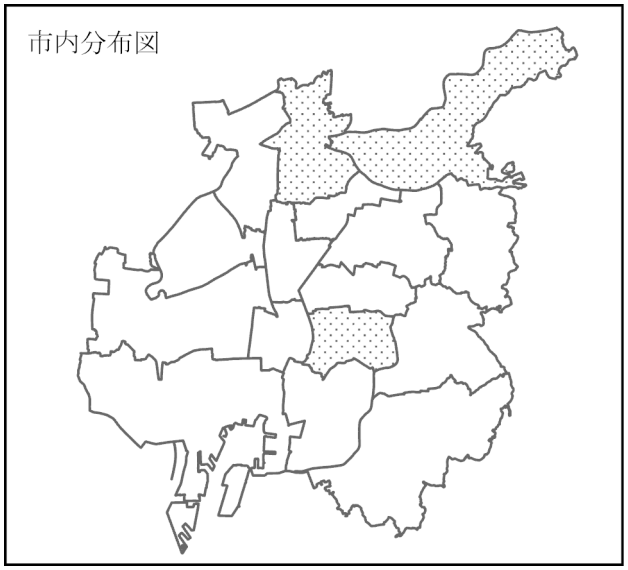
評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

開張 58～66mm。雌は大型で翅型は丸味をおび、前縁の前翅端近くに三角形の白紋がある。雄には前翅の表面の後縁近くに翅脈に沿って 2 本の黒色発香鱗条がある。

分布の概要

市内：瑞穂区、北区、守山区で確認されている。
県内：丘陵地から山地まで、また半島部に至るまで広範囲に記録されている。
国内：北海道、本州、四国、九州に分布する。
世界：サハリン、朝鮮、中国からヨーロッパまで、ユーラシア北部に広く分布する。



生息地の環境／生態的特性

林縁や湿地周辺の草地に生息し、愛知県では「湿地のヒョウモンチョウ」といわれるほど、ヒメヒカゲを産したような湿性草原に多い。年 1 化で 6 月に現れ、盛夏には夏眠のため一時姿を消し、秋に活動を再開しアザミ類、ヒヨドリバナ等の花に吸蜜に訪れる。県下での自然状態での食草は不明であるが、タチツボスミレ、フモトスミレなど各種のスミレ類を食べるという。

現在の生息状況／減少の要因

近年、名古屋市内を始め周辺の尾張平野、知多半島などの低地での観察例が著しく少なくなり、以前比較的多くみられた三河の低山地から奥三河の山地でも個体数が減少している。自然状態での食草の好みなど、生態の主要部分の多くが不明なため、減少の理由は明らかではない。

保全上の留意点

全国的な本種の減少により、環境省は 2012 年のレッドリスト第 4 次改訂で、本種を準絶滅危惧から絶滅危惧II類にランクアップしている。今日、草原性のチョウが全国的に減少傾向にあるが、本種の場合は生態に不明な点が多く、具体的な保全対策の提案が困難である。

しかし市内に残存する湿地や湿性草原は、他にも多くのレッドリスト掲載種が生息するなど、生態的価値が高いので、周辺の二次林環境も含めた永続的な保全が必要である。

引用文献

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp21-95．愛知県．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然，pp464-475．同　目録，pp194-202．名古屋市．
愛知県，2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータブックあいち 2009　–動物編–愛知県環境部自然環境課．

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl44,p209．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1983．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目タテハチョウ科＞

ウラギンヒョウモン　*Fabriciana adippe pallescens* (Butler, 1873)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

代表的な草原性のヒョウモンの一つで、北海道から九州にかけて広く分布しているが、山地草原に多く、平地～低山地ではむしろ少ない種である。近年全国的に個体数の減少がみられ、市内でも減少している。

形態

開張 58～68mm。雌は雄より大型で翅形は幅広く、地色は濃色。後翅裏面の銀白紋は大きく明瞭、亜外縁の銀白斑紋列の形は山型。雄の前翅の表面には 2 本の発香鱗条がある。

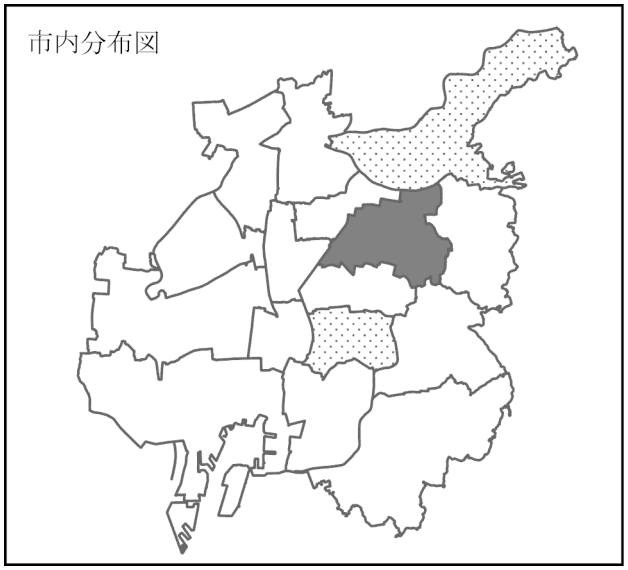
分布の概要

市内：瑞穂区、千種区平和公園、守山区小幡、庄内川畔で古い記録がある。平和公園南部では 2005 年にも 1 雌が採集された。

県内：尾張丘陵から三河山地まで広く記録されている。近年、個体数の減少が著しい。

国内：北海道、本州、四国、九州に分布する。

世界：朝鮮半島、中国東北部からヨーロッパまで、ユーラシア北部に広く分布する。



生息地の環境／生態的特性

広々とした明るい草原を好み、アザミ類など草花の多く咲いている山地の草原では、群棲することがある。年に 1 回発生し、平地では 6 月上旬から現れ、盛夏には夏眠のため一時姿を消すが、秋に再び現れる。幼虫はタチツボスミレ等のスミレ類を食草としている。

現在の生息状況／減少の要因

近年尾張平野と丘陵地で本種を観察した報告がほとんどなく、愛知県内でかつて多産した山間盆地の周囲にある草原でも、花を訪れる個体が著しく減少している。近年の減少の要因は正確にはわからないが、草原性ヒョウモンチョウ類の減少傾向の中で、本種は最も顕著な例である。

保全上の留意点

ウラギンスジヒョウモンと同様、自然状態での食草の好みや周年経過など、生態の主要部分が必ずしも明らかでなく、保全対策が難しい。しかし市内に残存する自然の草地環境は貴重であり、生態的価値が高いので、できる限り永続的な保全が必要であろう。極力農薬の散布等の化学的汚染をしないように配慮したい。

特記事項

本種は、DNA の知見や翅形、発香鱗条の形状、交尾器の形状等から、系統の異なる複数の別種が含まれていることが示されている（新川・石川，2005）。中部地方ではサトウラギンヒョウモンとヤマウラギンヒョウモンが混じっている可能性がある。名古屋市内に産するものは前者の可能性が高いが、市内産の古い標本が過去に図示されていないので、本書では学研日本産蝶類標準図鑑（白水，2006）に従い、ウラギンヒョウモンとして表示する。

引用文献

白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．
新川　勉・石川　統，2005．分子系統によるウラギンヒョウモン 3 種と形態．昆虫と自然，40(13): 4-7.

関連文献

愛知県，2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータブックあいち 2009　–動物編–．愛知県環境部自然環境課，名古屋．
川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl46,p217．保育社，大阪．
高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp21-95．愛知県．
中島悦雄，2005．名古屋市千種区でウラギンヒョウモンを採集．佳香蝶，58(225): 24.
福田晴夫ほか，1983．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）．保育社，大阪．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然，pp464-475．同　目録，pp194-202．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ツトガ科＞

マエジロツトガ　*Pseudocatharylla infixella* (Walker, 1863)

評価理由

全国的に既知産地が局限されている。愛知県では名古屋市の庄内川河口に産するほか、旧弥富町鍋田でも記録されている。汽水域に近い河口付近のヨシ群落を生息地とするため、環境の改変により容易に産地が消滅する恐れがある。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

形態

開張雄 17～20mm、雌 23～28mm。年 2 化で、1 化目の個体は翅の地色は淡黒褐色、2 化目の個体は全体に銀白色、前縁部側に顕著な白帯～淡褐色帯を現す。1・2 化とも雄雌で翅型と大きさが異なり、雌は大型で前翅が長く翅頂は突出する。



港区南陽町流作場、2009 年 9 月 20 日、田中多喜彦　採集

分布の概要

市内：港区南陽町七島新田流作場～珍寿野の、庄内川河口付近のヨシ原に限って生息する。

県内：上記の他に旧弥富町鍋田に記録がある。

国内：千葉県、神奈川県、三重県、徳島県、佐賀県の河口部から記録されている。

世界：朝鮮半島、台湾、中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

低湿地性の蛾で、いずれの産地も河川の河口のヨシ原から記録されている。昼間はヨシの桿上に静止しているが、夜間灯火に飛来する。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川河口部のヨシ原のうち河口から約 1km までに多い。環境は大雨による出水・水没、港湾の浚渫等から必ずしも安定した状況ではない。ゴミの漂着も著しく、生息環境は悪化している。成虫は水銀灯に誘引され、分布が撹乱される恐れがある。

保全上の留意点

庄内川の河口部には、大都市としては珍しく広大なヨシ原が残っている。汽水域を含め特異な生態系であり、希少な生物が多く生息している。護岸改修工事の際は、生態系への影響を極力減らすなど、十全な配慮が望まれる。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp422-464．名古屋市．
田中多喜彦，2011．名古屋市庄内川河口の蛾類．佳香蝶，63(247): 63-67.

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p226,pl109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

オオチャバネヨトウ　*Nonagria puengeleri* (Schawerda, 1923)

評価理由

低地・丘陵地のため池や河川敷などに生育する、ガマなどの大型の挺水植物を食草とする低湿地の蛾であるが、今日埋め立てや河川改修などにより、本種の生息環境は全国的に悪化の一途をたどり、レッドリストにあげる県が多い。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

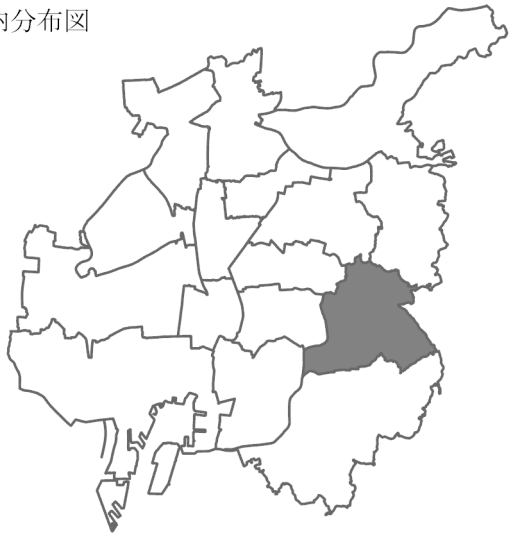
開張 35～52mm。雌は雄に比べ大型で、腹部はきわめて長い。前翅は全面濃赤褐色で、外横線はわずかに黒点列が現れる。中室下縁に沿って黒色条があり、中室端に白点をもつ。後翅は淡い黄白色で、外縁部が暗化する個体もある。



天白区中平、2003 年 6 月 30 日、福住和也　採集

分布の概要

市内：天白区中平（2003）が唯一の記録。
県内：田原市蔵王山（1981）の記録がある。
国内：北海道、本州、九州、対馬に分布するが、湿性環境に産し、産地は局限される。
世界：中国（黒龍江省）、ロシア南東部。



生息地の環境／生態的特性

ヨシ・ガマなどの群生する沼沢地が本種の住みかであるが、都市部のこのような環境は十分な調査がなされずに埋め立てられる場合も多い。年 1 化で 7～8 月に出現。一般に灯火採集では雄が得がたいという。

大型の湿性単子葉植物の茎に入り込んで食害するシンクイムシ（borer）で、ガマの茎の中から幼虫が発見されている。

現在の生息状況／減少の要因

市街地である天白区中平の記録は、おそらく近くの天白区島田の大根池あたりで発生した個体が飛来したものであろう。成虫に移動性のある可能性がある。

減少の要因は、湿性環境の喪失である。

保全上の留意点

現存する湿性環境をできるだけ保存したい。特に公園緑地内にあるため池や小河川などの湿性環境は、過度な整備や池畔の改修などを避け、多機能的な自然を温存したい。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp96-416．愛知県
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp422-464．名古屋市．
小木広行，1982．オオチャバネヨトウとキスジウスキヨトウの幼虫．誘蛾灯，87: 11-13

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p226,pl109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、間野隆裕）

昆虫類　＜トンボ目ヤンマ科＞

ネアカヨシヤンマ　*Brachytron anisopterum* (Selys, 1883)

評価理由

樹林内外の限られた湿地や矮小な水溜りを発生場所とするもともと稀な種で、かかる生息地の消滅が著しい。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	準絶滅危惧

形態

成虫は体長 80mm 内外。体は太目で黒色地に黄緑斑を有する。特に未熟時翅の基部が顕著に褐色を呈するのが名前の由来である。

幼虫は腹部 5～9 節の側棘が顕著なこと、8～9 節にヤンマ科では本種だけ背棘を有することが特徴である。



ネアカヨシヤンマ　雄
名東区猪高町上社猪高緑地、2004 年 7 月 30 日、
髙﨑保郎　採集

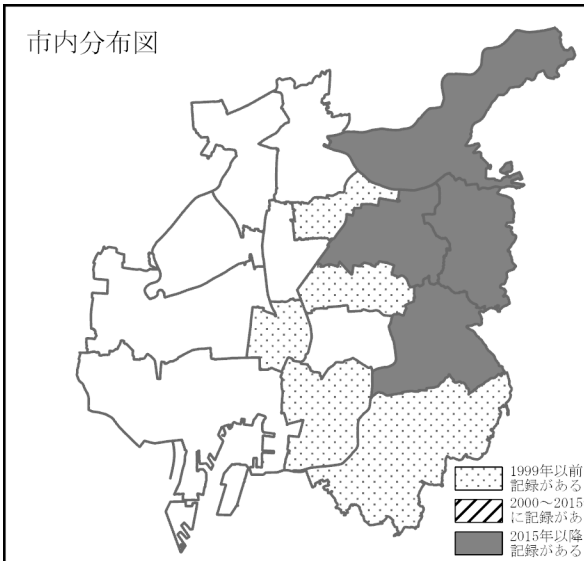
分布の概要

市内：千種区、東区、昭和区、熱田区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

県内：平野から丘陵地にかけて分布する。

国内：宮城、新潟以西の本州、四国、九州に分布する。

世界：朝鮮半島、中国に分布する。



生息地の環境／生態的特性

幼虫は平地、丘陵地の明るい湿地や、林縁、林内の小湿地、小池、水溜りに生息する。

成虫は昼間、林縁や林内で行動するのを見ることがあるが、黄昏時水田、湿地上を他の黄昏飛翔性ヤンマと共に飛翔し、多産地では群飛する。餌として巣を張っているクモを狩ることもある。成虫出現期は 6～9 月。

現在の生息状況／減少の要因

マルタンヤンマと同様、その生態から確実な生息の把握は困難である。1970 年代までは市内各区の公園、社寺林、林地などに生息していた。比較的近年まで記録があった守山区吉根大鼓ヶ根（2005）や天白区黒石（2010）の生息地は宅地造成で失われた。現在では東部各区に残存する規模が大きい緑地内の水系に拠っていると考えられる。県全体でも稀である。

幼虫の生息水域を含む緑地の開発による消滅が減少の主要因である。

保全上の留意点

市内に残存する生息可能な水域が存在する緑地の保全が重要である。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp350-361．同　目録，pp94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．
鵜殿清文･鵜殿　茂・清水典元，1974．黄昏活動性ヤンマ 3 種．佳香蝶，26(100): 95-98．
山内博美･北原誠治，1992．名古屋市内でネアカヨシヤンマを採集．月刊むし，(256): 36．
髙崎保郎，2004．名古屋市におけるネアカヨシヤンマの 2003 年の記録．佳香蝶，56(218): 31．
松沢孝晋，2011．名古屋市天白区平針の里山のトンボ相と里山の消失．佳香蝶，63(248): 93-98．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目ヤンマ科＞

カトリヤンマ　*Gynacantha japonica* Bartenev, 1910

評価理由

1999 年以前は市内で普通に見られた。しかし 2000 年以降は急激に姿を消し近年では珍しい種となっている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

成虫の体長は約 70mm 細身のヤンマ。未熟時の頭、胸の体色は淡い褐色。成熟すると頭は青緑色。胸は黄緑色。腹部基部は青白斑がでて美しい。雄の付属器、雌の尾毛が共に長くもろい。

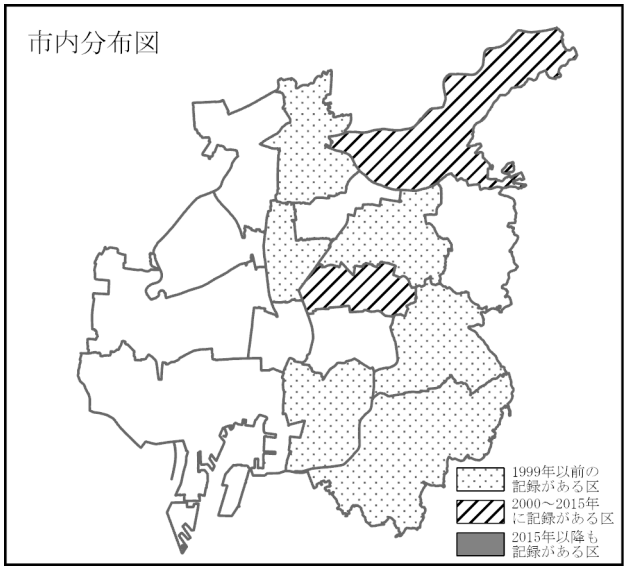
分布の概要

市内：千種区、昭和区、中区、南区、緑区、守山区、北区、天白区。

県内：平地から丘陵地、山間地まで広く分布する。

国内：本州以南に広く分布する。

世界：中国北部。



生息地の環境／生態的特性

盛夏のころは、日中は暗い樹林帯で休み黄昏時から日没後しばらくにかけて地を這うように多数飛んでいる。秋になると雌の産卵が水田の周りの泥地でよく見られる。

現在の生息状況／減少の要因

本種は 1980 年までは水田や湿地と暗い樹林がセットで存在すれば市内のどこにでもいる普通種であった。

宅地開発など都市化が進み、このような環境が減少したことが最も大きな減少原因である。また、本種が一般のトンボと違い目に触れにくい時期、時間に活動するため、丹念に調査を行う必要がある。

保全上の留意点

全国の生息地も都市化の波で急速に減少している。保全に際しては水田や湿地を残すのはもちろん、暗い樹林が必ず必要である。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫(上)，pp.9-78．愛知県．

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目サナエトンボ科＞

タベサナエ　*Trigomphus citimus* (Needham, 1931)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	国リスト
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

自然環境の悪化の影響を平地程受けない低山地に近い所にも生息する傾向があることから、絶滅の危険性が同属他種より少ないと見られて来たが、市内の残存生息が 2013 年以降確認されなくなったことにより評価した。

形態

成虫の体長 45mm 内外。黒色地に未熟時は黄色、成熟すると灰緑色斑を有する。胸側の黒条は 1 本。前肩の細い黄色（灰緑色）条を欠くことで、これがあるオグマサナエと区別できる。副性器は大きく丸味があることも特徴。

幼虫の腹端第 10 節が長く筒状であることが本属の特徴であるが、本種だけは短く筒状を呈しない。



タベサナエ　雄
守山区下志段味吉田、2005 年 5 月 8 日、安藤　尚　撮影

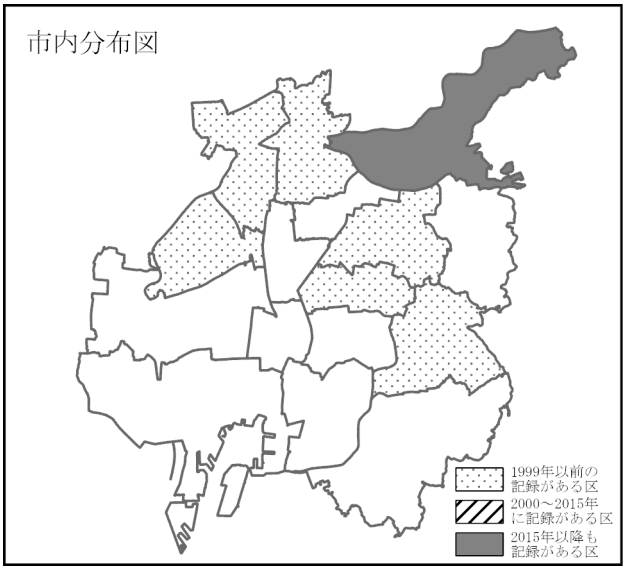
分布の概要

市内：千種区、北区、西区、中村区、昭和区、守山区、天白区で記録されている。

県内：尾張、三河の平地では絶滅状態で、丘陵から低山帯にかけては、局地的に多産する所もある。東三河山地でも稀な記録がある。

国内：福井県、静岡県以西の本州、四国、九州に分布する。

世界：原名亜種タイリクタベサナエが朝鮮半島、中国、極東ロシアに分布する。



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵地、低山地の池沼、緩流に生息する。近似種オグマサナエ、フタスジサナエよりも多少標高が高い所に生息する傾向が認められる。やや局所的に生息する傾向があるが、前記 2 種と混棲することも多い。羽化は水面の浮遊物上や汀の地面で行われる。成虫の出現期は 4～6 月上旬。

現在の生息状況／減少の要因

県内ではかつて平野から丘陵、低山帯まで広く産したが、現在では平地では絶滅状態である。都市から離れた丘陵では局地的に多産する所もある。名古屋市内では、1940、1950 年代には 7 区で記録され、守山区竜泉寺（現在の小幡緑地本園辺りを指す）には多産したが、2010 年代初頭では同区下志段味での若干の記録があるのみである。市東部に接する丘陵地帯の長久手市、日進市、東郷町方面では以前から記録がない。

開発、改修が著しい平野部での生息池沼の水質悪化、水田側溝の人工化、周辺を含む自然環境の悪化、産地自体の消滅が減少の主要因である。

保全上の留意点

本市では近年絶滅状態であるが、一般的には、岸に多少なりとも平らな陸地部分がある泥底の池沼の水質保全と環境保全、水田地帯の小緩流の自然状態の保持などが必要である。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp350-361．同　目録，pp94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目サナエトンボ科＞

オグマサナエ　*Trigomphus ogumai* (Asahina, 1949)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

平地から丘陵にかけて最も普通のサナエトンボであったが、平野では絶滅状態、丘陵では減少している。

形態

成虫の体長は 50mm 内外，邦産本属 4 種のうち最も大きい。黒色地に未熟時は黄色成熟すると灰緑色斑を有する。胸側の黒条は 1 本。

幼虫は腹端第 10 節が筒状を呈する本属 3 種のうち、本種が最も長く、第 9 節も細長で全体として腹部が細長い印象が一番強い。

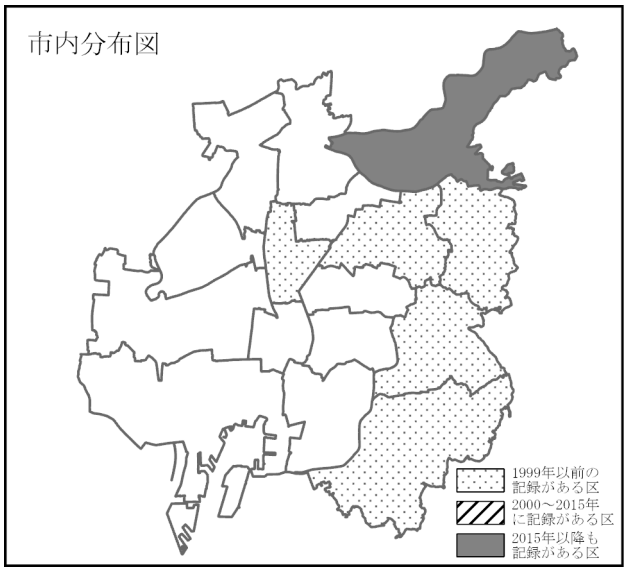
分布の概要

市内：千種区、中区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録された。

県内：尾張から三河の平地、丘陵に分布するが、平地では絶滅状態である。

国内：石川県、長野県、愛知県以西の本州、四国の一部、九州。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵、低山地の池沼に生息する。水生植物の存在は必ずしも必要条件ではないが、泥底で汀に多少なりとも平坦な地面が続くか、低い岸であることが必要である。

羽化は水面の浮遊物上か汀の地面や低い杭上などで行われる。羽化はこの地方では通常 4 月第 2 週頃始まる。未熟成虫は周辺の林内空地や樹上で過ごす。成虫出現期は 4～5 月、主に池畔で見られる。

現在の生息状況／減少の要因

かつては平野から丘陵地、低山地まで広く産したが、現在では平地では絶滅状態、丘陵でも産地は減少している。1940 年代末には名古屋城で、1950～1960 年代には千種区東山公園でも見られ、1970 年代には天白区、現名東区に産し、名東区の最終と思われる記録は 1986 年である。守山区東縁の丘陵では 2014 年現在極く限られた一、二の池に生息しているがこれは隣接する尾張旭市の森林公園の広大な二次林帯に負うところが大きい。本市東部に接する尾張東部丘陵（瀬戸市、長久手市、日進市）では現在も比較的普通に見られる。

開発が著しい平野部での生息池沼の水質悪化や周辺を含む自然環境の悪化が減少の主要因である。

保全上の留意点

本市では絶滅状態であるが、一般的には岸に多少なりとも平らな陸地部分がある泥底の池沼の水質保持と環境保全、改修による水位上昇の抑制、周辺林の保全が必要である。

特記事項

本種幼虫は名古屋のトンボ研究の先覚である故松井一郎氏、故山本悠紀夫氏により発見された。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp350-361．同　目録，pp94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．
安藤　尚，2008．愛知と岐阜のトンボ分布資料(10)．佳香蝶．60(記念号): 23-36.
髙崎保郎，2010．名古屋市名東区の明徳公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔．ため池の自然，(49): 12-18.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目サナエトンボ科＞

フタスジサナエ　*Trigomphus interruptus* (Selys, 1854)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

平野から丘陵にかけて最も普通のサナエトンボであったが、平野では絶滅状態、丘陵でも減少している。

形態

成虫の体長は 47mm 内外。黒色地に未熟時黄色、成熟すると灰緑色斑を有する。胸側の黒条は 2 本であることが、オグマサナエと見分け易い識別点。

幼虫はオグマサナエに比較し腹部第 9 節は幅広く、円筒状の第 10 節はやや短いことで区別できる。



フタスジサナエ　雄
守山区下志段味、2014 年 4 月 27 日、髙﨑保郎　撮影

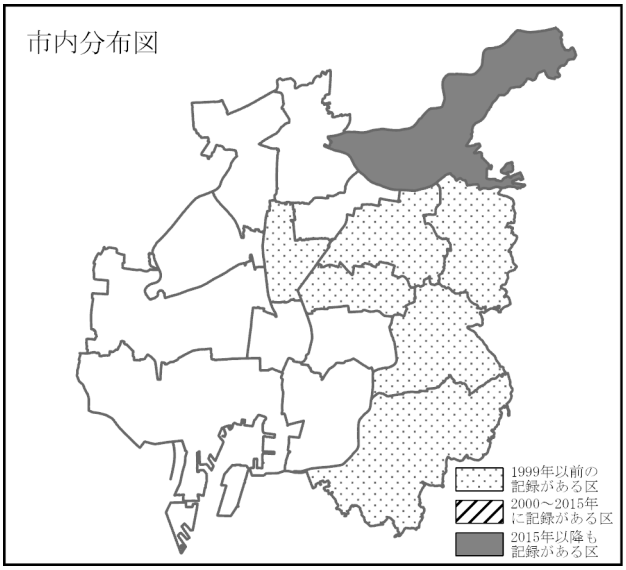
分布の概要

市内：千種区、中区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

県内：尾張から三河の平地、丘陵に分布するが、平地では絶滅状態である。

国内：福井県、静岡県以西の本州、四国、九州。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵、低山地の池沼に生息する。水生植物の存在は必ずしも生息条件ではないが、泥底で汀には多少なりとも平坦な地面が続くか低い岸であることが必要である。

羽化は水面の浮遊物上か汀の地面や低い杭上などで行われる。羽化はこの地方では常にオグマサナエの羽化の一週間遅れで始まる。未熟成虫は周辺の林内の空き地や樹上で過ごす。成虫出現期は 4～6 月上旬。主に池畔で見られる。

現在の生息状況／減少の要因

かつては平野から丘陵、低山地に広く産したが、現在では平地では絶滅状態、丘陵でも産地は減少している。1940 年代末には名古屋城で、1950 年から 60 年代には千種区東山公園などでも見られ、1970 年代には天白区、緑区、現名東区に産した。守山区東縁の丘陵では 2014 年現在一つの池に生息している。オグマサナエと同様隣接する二次林帯に負うところが大きい。本市東部に接する尾張東部丘陵（瀬戸市、長久手市、日進市）では現在も比較的普通に見られる。

開発が著しい平野部での生息池沼の水質悪化や周辺を含む自然環境の悪化が減少の主要因である。全国的にも地域により減少している。

保全上の留意点

本市では絶滅状態であるが、一般的には岸に多少なりとも平らな陸地部分がある泥底の池沼の水質保持と環境保全、改修等による水位上昇の抑制、周辺林の保存が必要である。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp350-361．同　目録，pp94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．
安藤　尚，2008．愛知と岐阜のトンボ分布資料(10)．佳香蝶，60(記念号): 23-36．
髙崎保郎，2010．名古屋市名東区の明徳公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔．ため池の自然，(49): 12-18．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目エゾトンボ科＞

トラフトンボ　*Epitheca marginata* (Selys, 1883)

評価理由

平野の植生豊かな池沼に生息するが、そのような場所の消滅、環境悪化により減少した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

形態

体長は 53mm 内外。狭義のエゾトンボ科に属するが、体は金属緑色でなく黒地に橙褐色斑を有する。雌の前後翅前縁に黒褐色帯を有する。

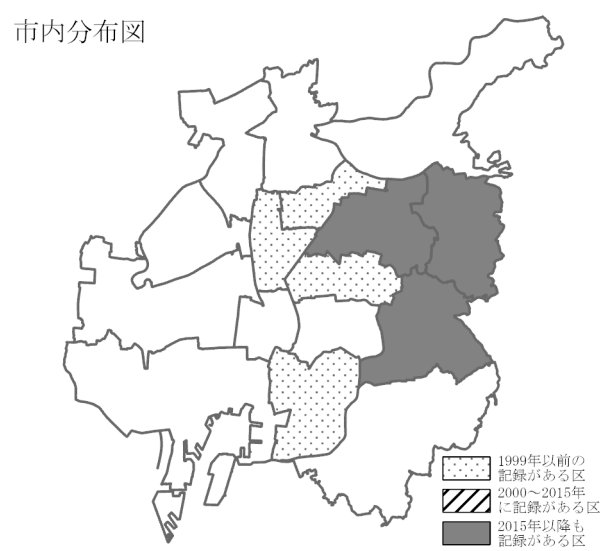
幼虫はややゴツゴツした感じで肢が長い。背棘は 2～9 節にある。側棘は顕著でない。



トラフトンボ　雌
名東区猪高町高針牧野ヶ池緑地、2013 年 5 月 9 日、
髙﨑保郎　採集

分布の概要

市内：千種区、東区、中区、昭和区、南区、名東区、天白区で記録されている。
県内：平野、丘陵に分布する。
国内：本州、四国、九州。
世界：朝鮮半島、中国。



生息地の環境／生態的特性

幼虫は平地、丘陵の浮葉、沈水植物が豊富な池沼に生息する。未熟成虫は林間空地の上空をゆっくり旋回飛翔する。成熟雄は岸に沿い巡回飛翔する。雌は卵塊を腹端につくり、接水放卵すると卵塊はゼラチン様紐状になり沈水植物にからみつく。出現期は 4 月下旬～5 月。

現在の生息状況／減少の要因

かつては中区の市街地路上でも飛翔するのが見られたが、水生植物に富む良好な池沼の消失や環境悪化により減少した。現在市内市街地でも或る程度自然状態の良い天白区天白公園大根池、同区大堤池、千種区平和公園猫ヶ洞池、名東区牧野ヶ池緑地牧野池では引続き生息している。市内の樹林を伴う水生植物が豊富な池を精査すれば、産地は増える可能性はある。隣接する長久手市でも安定的に発生している。

植生豊かな池沼と林地の消失が減少要因である。

保全上の留意点

枕水・浮葉植物が生育する池の水質と周辺林地の保全。分布する公園の池では外来魚、鯉等の補食性魚類の排除。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．
なごや生物多様性保全活動協議会，2013．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書，P260．名古屋．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目トンボ科＞

ノシメトンボ　*Sympetrum infuscatum* (Selys, 1883)

評価理由

2010 以降急激に減少した。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長 40mm～50mm の大きめのアカトンボ。翅先端に濃茶色班があり、胸部の黒班が上部までのびる。雄は成熟すると赤黒くなる。



刈谷市小堤西池、2023 年 10 月 29 日、成田茂生　撮影

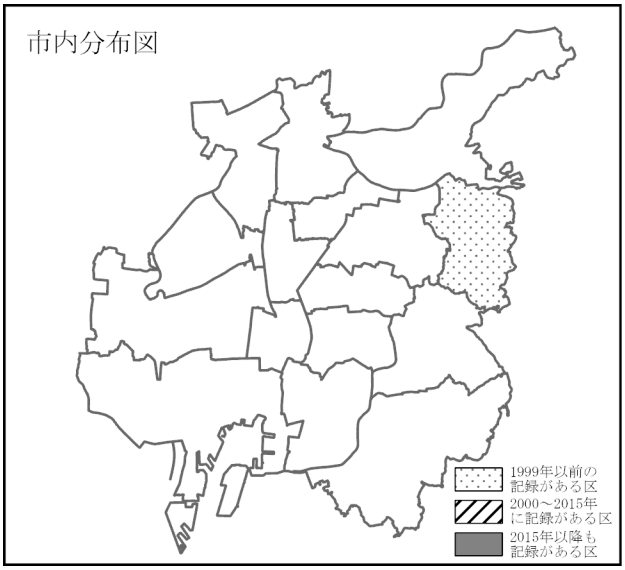
分布の概要

市内：千種区、南区、緑区、名東区、天白区、守山区。

県内：県内の平地から山地にかけて広く分布。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国、ロシア。



生息地の環境／生態的特性

平地から山地にかけての池、湿地、水田に生息する。

6 月上旬～7 月に羽化し、9 月に成熟して水域に戻り配偶行動を行う。交尾は午前中に行われ、連結産卵に移る。ゆっくりと飛び、雌は腹端を小刻みに打ちながら卵をばらまく。

現在の生息状況／減少の要因

2010 年ごろまでは、秋になればどこにでもいると思っていて気にもとめなかった。ところがアカトンボが激減していることを受けデータを調べたところ本種の記録が急激に減少していることが判明した。それ以後気をつけて観察している。

ネオニコチノイド系の農薬使用が減少の原因である。

保全上の留意点

ネオニコチノイド系の農薬の使用を中止する。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫(上)，pp.9-78．愛知県．

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目トンボ科＞

ミヤマアカネ　*Sympetrum pedemontanum* (Müller in Allioni, 1766)

評価理由

元々市内では多くなかったが、近年報告を見ない。確実な最期の記録は 2014 年である。全国的にも減少が激しい。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

成虫の体長 35mm 内外。前後翅に幅広の褐色班を有する。、成熟雄の縁紋や翅脈は紅色になりアカネ属の中では最も美しい。識別は容易である。

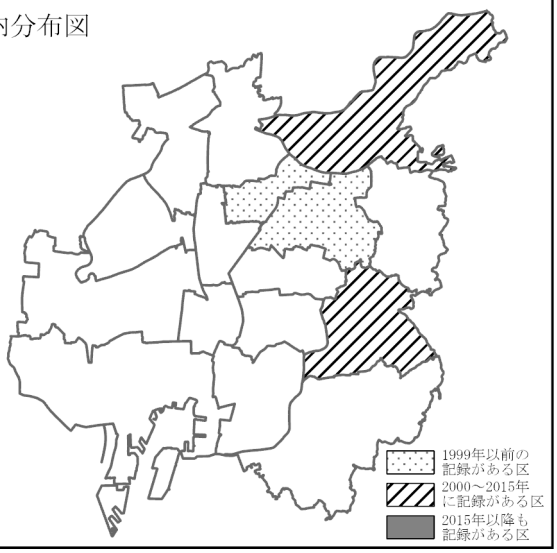


守山区上志段味東谷愛知用水周辺、2014 年 9 月 7 日
横地　悦典　撮影

分布の概要

市内：千種区、東区、守山区、緑区、天白区。
県内：平地から低山帯にかけて分布する。
国内：北海道、本州、四国、九州に分布する。
世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

幼虫が平地から山地にかけての小河川、水田の側溝、河川敷の水場など緩やかな清流に生息する。止水に生息する他のアカネ属に比べ特異である。羽化後の成虫は群れることがある。成虫の出現期は 7 月～10 月である。

本種は水質に非常に敏感で、農薬などで汚染されると姿を消す。

現在の生息状況／減少の要因

市内の記録は、1940 年代後半頃が多く、1970 年代まであるが記録された区は、東部丘陵地寄りで少ない。最後の記録は 2013 年である。隣接する長久手市は絶滅し、みよし市で局地的に残存する。低山地から丘陵部の小流の早期の哀失が減少の主因である。本種は水質に非常に敏感で、農薬などで少しでも汚染されると姿を消す。

保全上の留意点

東部丘陵地の流水系は元来乏しい。具体的な保全策は考え難い。守山区北部の現自然状態を極力残すように努める。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp9-78．愛知県．
松沢孝晋，2011．名古屋市天白区平針の里山のトンボ相と里山の消失．佳香蝶，63(248): 93-98.
名古屋ため池生物多様性協議会，2011．平成 22 年度生物多様性保全推進支援事業 名古屋ため池生き物いきいき計画事業報告書，名古屋ため池生物多様性協議会，pp81．名古屋.
髙崎保郎，2014．レッドリスト種調査(2014)に伴う名古屋の蜻蛉分布知見若干．ため池の自然，(55): 7-13.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜カメムシ目セミ科＞

チッチゼミ　*Kosemia radiator* (Uhler, 1896)

評価理由

主として平地から丘陵地のマツ林や低灌木帯に生息するため、宅地造成など開発の影響を受けやすい。以前と比べかなり個体数が減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長は 18～24mm と小型のセミで、体色は黒みが強く、銀灰色の鱗毛が密生する。

中胸背には、一対の黄褐色三角紋を有する。



矢崎充彦　撮影

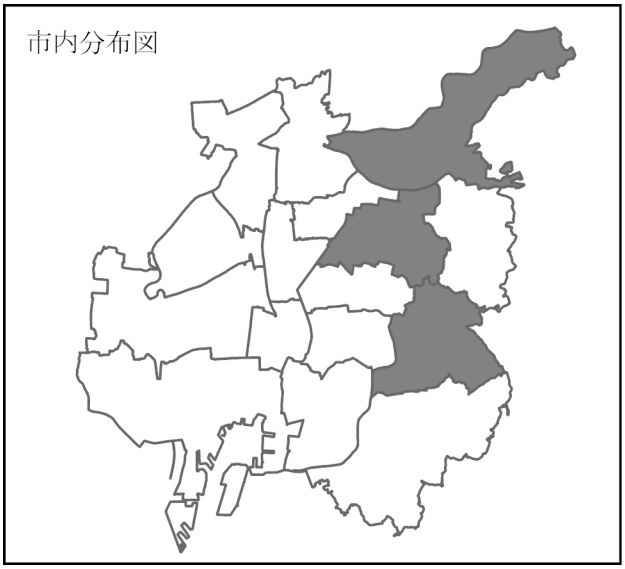
分布の概要

市内：主として東部丘陵帯であるが、正式な記録は非常に少ない。

県内：豊根村、新城市、豊橋市、豊田市、岡崎市、瀬戸市、春日井市、小牧市、日進市など。

国内：北海道（渡島半島）、本州、四国、九州。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

平地から丘陵地にかけて、主としてマツ類の多い樹林帯に生息する。

雌はマツ林の林床に生育するツツジ類の生枝中に産卵する。秋季に個体数が多くなる。

現在の生息状況／減少の要因

市内東部の丘陵帯が主な生息地であったが、以前と比べかなり減少している。

宅地造成など樹林地の伐採による生息地の消失が大きな減少要因である。

保全上の留意点

丘陵地帯のマツ林の環境維持に努めるとともに、間伐等で下草を手入れする場合は、産卵木となるツツジ類を残すよう留意する必要がある。

関連文献

林　正美，1992．日本産セミの分布調査報告（4）日本セミの会会報，11(1-2): 1-32.

林　正美・税所康正，2011．日本産セミ科図鑑．221pp．誠文堂新光社，東京．

新修名古屋市史資料編編集委員会（編），2008．第 8 節昆虫類　5 カメムシ目．新修名古屋市史資料編　自然　目録，pp161-165．名古屋市．

（矢崎充彦、戸田尚希）

昆虫類　＜カメムシ目タイコウチ科＞

ヒメタイコウチ　*Nepa hoffmanni* Esaki, 1925

評価理由

東海地方の湿地を代表する種として知られ、県内では比較的産地・個体数とも多いが、全国的には生息地が限定され、特に都市近郊では、開発による埋め立てなどで生息地が減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長は 18～22mm。体型は長卵形を呈する。体色は暗褐色で、前脚は鎌状の捕獲脚となっている。

呼吸管は非常に短い。



矢崎充彦　撮影

分布の概要

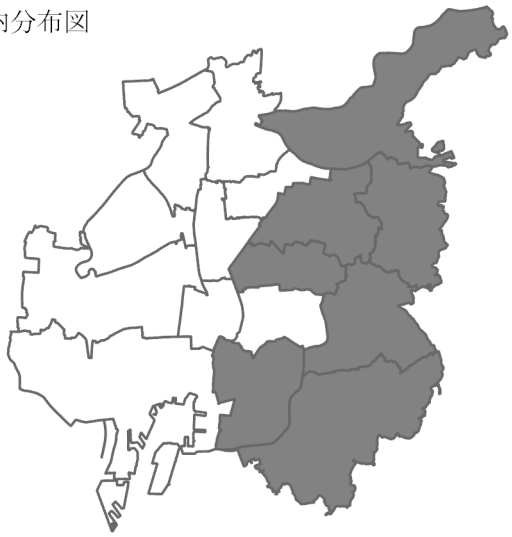
市内：市内東部に広く分布するが、守山区からの記録が多い。

県内：平地から低山地にかけて、県内ほぼ全域（東三河北東部を除く）。

国内：本州（東海地方、奈良、和歌山、兵庫）、四国（香川）。

世界：ロシア極東（沿海州）、中国、朝鮮半島。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

湧水湿地、流入のあるため池の縁、休耕田、水田地帯の素堀の水路など、常に湿り気のある湿地帯に生息する。

成虫で越冬後、5 月頃産卵し、新成虫が 8 月～9 月頃出現する。後翅が退化し、飛翔できない。

現在の生息状況／減少の要因

県内では様々な湿地環境に生息し、河川敷でも見られる場合がある。市内では守山区に比較的多くの産地が残されているが、それ以外は局地的である。

都市近郊における湿地は、宅地造成などで多くが埋め立てられ、ほとんどの場合、生息地そのものが消滅した。

保全上の留意点

湿地環境の保全および水源地である周辺の後背林を維持し、乾燥化を防ぐ必要がある。

引用文献

浅岡孝知・家城　司，1990．愛知県の異翅目．愛知県の昆虫（上），pp123-162．愛知県．
長谷川道明・佐藤正孝・浅香智也，2005．ヒメタイコウチの分布．付関連文献目録．豊橋市自然史博研報，(15): 15-27.
堀　義宏・横井寛昭，1991．都市環境下の昆虫相について（2）名古屋市の異翅目．名古屋市衛生研究所報，(37): 93-100.
矢崎充彦，2010．名古屋市で得られた分布上特記すべき半翅類，佳香蝶，62(243): 51-55.

（矢崎充彦）

昆虫類　＜カメムシ目アメンボ科＞

オオアメンボ　*Aquarius elongatus* (Uhler, 1896)

評価理由

平野部における確認例が少なく、生息地における確認個体数も少ない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長 20～27mm で、本州産アメンボ類では、最大種である。通常、雄の方が雌よりも大型で、雄の大型個体では、中脚が顕著に長い。

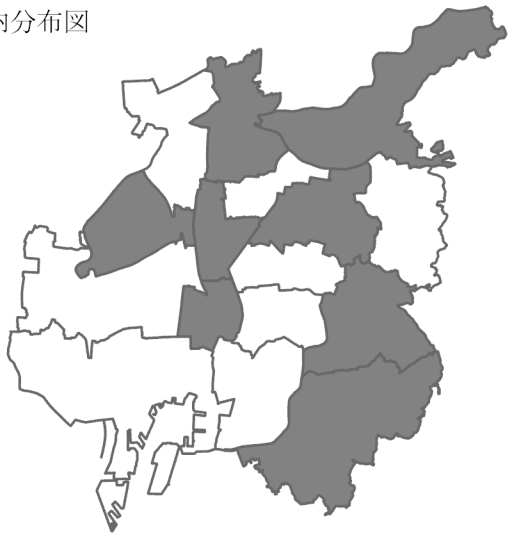


緑区水広公園、2018 年 8 月 12 日、澤田宗一郎　撮影

分布の概要

市内：千種区、北区、中村区、中区、熱田区、守山区、緑区、天白区。
県内：新城市、豊田市、岡崎市、西尾市、瀬戸市、春日井市、日進市、犬山市など。
国内：本州、四国、九州、対馬。
世界：中国、韓国（済州島）、台湾。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

平地から山地にかけての樹林に囲まれた薄暗いため池に生息するが、谷筋の砂防堰堤の水たまりや河川上流部の緩流部などで見られることもある。

現在の生息状況／減少の要因

複数の産地が確認されているが、局地的な分布であり、いずれも確認個体数は少ない。平野部での減少の大きな要因としては、ため池の改修や埋め立て、水質の悪化、生息地周囲の樹林の伐採が考えられる。

保全上の留意点

樹林に囲まれた薄暗いため池を好むため、現存するため池と池周辺の樹林の維持。採餌や繁殖に解放水面を必要とするため、スイレンやホテイアオイなど観賞用水草を軽々しく投入しないよう留意する必要がある。

特記事項

千種区東山公園における生息が示唆されていたが（吉富・長谷川，1997）、その後の調査により同所を含む、複数の産地が確認された（澤田，2019）。

引用文献

堀　義宏・横井寛昭，1991．都市環境下の昆虫相について（2）．名古屋市の異翅目．名古屋市衛生研究所報，(37): 93-100.
澤田宗一郎，2019．名古屋市内におけるオオアメンボ（カメムシ目アメンボ科）の記録について．なごやの生物多様性，6: 33-39.
吉富博之・長谷川道明，1997．愛知県のアメンボ，豊橋市博研報，(7): 35-39.

（矢崎充彦、澤田宗一郎）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

ナミハンミョウ　*Cicindela* (*Sophiodela*) *japonica* Thunberg, 1781

評価理由

平地から山地に普通の種であるが、市内では生息環境の消失とともに減少しているものと思われ、発見が困難になっている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

赤～緑色の金属色をもつ美しい種で、色彩には変異があるが、本州に間違えるような似た種はいない。上唇は、前方へ突出し中央が縦に強く隆起、前縁に 5 つの歯をそなえる。

体長は 18～20mm。



採集地等不明

分布の概要

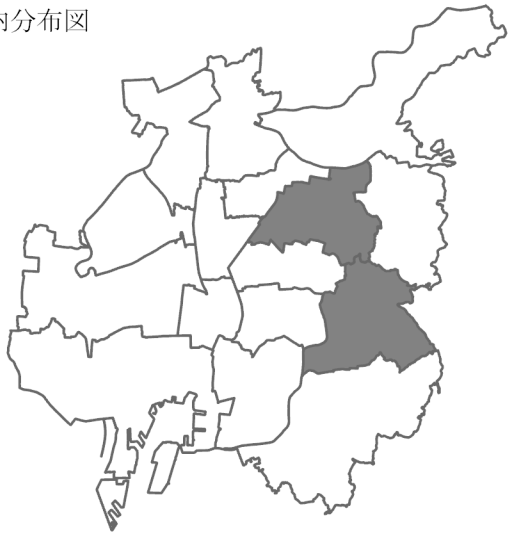
市内：千種区東山（高橋, 1975）、庄内川（穂積ほか, 1975）、天白区。

県内：山間部から平野部にかけて広く分布している。

国内：本州、四国、九州、種子島、屋久島。沖縄には別亜種が分布する。

世界：基準亜種は、中国、朝鮮半島。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

林間の裸地や、林道、石の多い河川敷などに生息する。

現在の生息状況／減少の要因

市内での生息状況については、引き続き調査が必要であるが、守山区、名東区、天白区、緑区などの郊外には生息している可能性が高い。

減少の要因としては、生息環境の減少、農薬や除草剤等の使用が考えられる。

保全上の留意点

緑地や林道など、本種の生息地となりうる地域での舗装は最小限にとどめるとともに、こうした地域での農薬、除草剤の散布に注意する必要がある。

特記事項

従来、ハンミョウ日本亜種 *Cicindela chinensis japonica* とされていたが亜種から種に昇格し、和名は変更されたものが使われている。

引用文献

高橋　敬，1975．甲虫雑記（1），名古屋市東山の甲虫．佳香蝶，27(101): 9-10.
穂積俊文ほか，1975．庄内川の昆虫，40pp,12pls．建設省庄内川工事事務所，名古屋．
戸田尚希・長谷川道明・蟹江　昇，2019．愛知県の甲虫目録 3．佳香蝶，71(277)：1-11.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目コガネムシ科＞

ミツノエンマコガネ　*Parascatonomus* (*Necramator*) *toricornis* (Wiedemann, 1823)

評価理由

名古屋市では河川敷に生息している。東海豪雨による洪水で極端に減少したが、現在少しずつではあるが回復傾向にある。

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

形態

体長 12～18mm。体は黒色で光沢はにぶい。頭部前縁中央は歯状に突出、中央部と両端に角状の隆起がある。前胸背中央前縁にたい角状突起がある。上翅間室は平坦で微細な鮫肌状となる。



採集地等不明

分布の概要

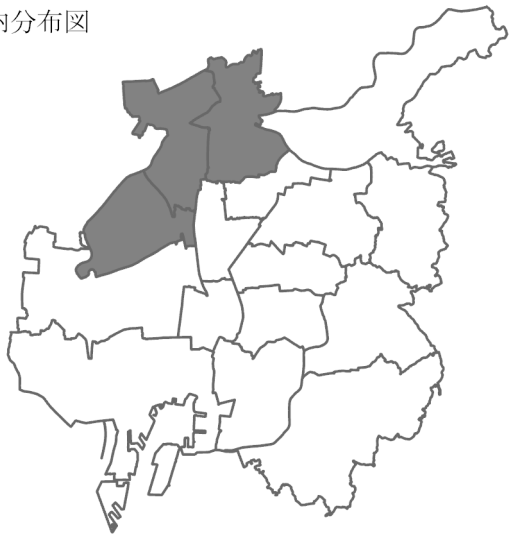
市内：中村区、西区、北区の河川敷で見られる。

県内：豊田市、田原市など。

国内：本州、四国、九州。

世界：中国、台湾、インドシナ半島、ミャンマー、インド、マレー半島、ジャワ。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

海浜から河川中流域にかけての、自然植生が残された河川敷が主たる生息地である。糞虫といわれる仲間であるが、この種は腐敗した魚類や野菜くずに集まる習性がある。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川の河川敷沿いに少ないが、生息を確認できる。

保全上の留意点

河川敷と治水を考慮すれば、現在の環境を維持することが最低の選択となろう。

関連文献

伊藤芳教，1992．ミツノエンマコガネの外部形態による雌雄の区別法について．月刊むし，262 :23-24.

名城大学付属高校自然科学クラブ，1992．名古屋市中村区内のミツノエンマコガネの個体数について．佳香蝶，44(172): 63.

清水清市，1990．愛知県尾張平野部のミツノエンマコガネ．月刊むし，230: 40.

（佐藤正孝、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ハネカクシ科＞

オオツノハネカクシ　*Bledius* (*Bledius*) *salsus* Miyatake, 1963

評価理由

河口部の泥状湿地に生息するが、近年全国的にこのような湿地が土地開発等により減少し、生息地が狭められている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	情報不足

形態

62-73mm。オスは頭部に 1 対のツノ、前胸部に前方へ向かって 1 本のツノを持つ。メスでは頭部前方に 1 対のツノが有る。前胸背板は中央に縦溝をもつ。

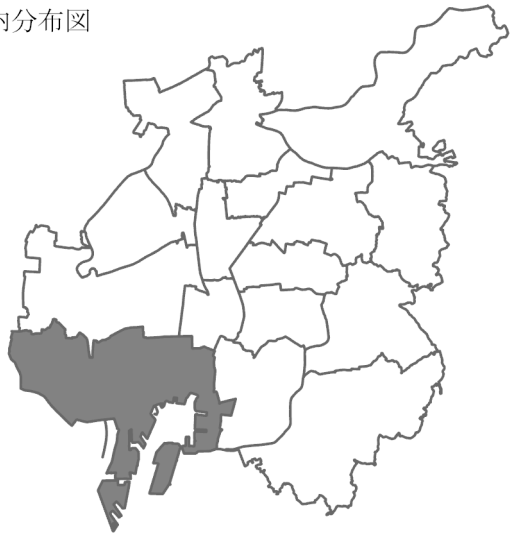


港区、2023 年 7 月 10 日、戸田尚希　撮影

分布の概要

市内：港区庄内川。
県内：弥富市鍋田、蒲郡市（穂積，1990）。
国内：本州・四国（上野ほか，1985）。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

ヨシの生える河口部の湿地に生息している。

現在の生息状況／減少の要因

河川下流域，河口部に生息している護岸やヨシ原の浚渫などにより生息地自体が減少する事による。

保全上の留意点

河川河口部の開発や浚渫では，広くヨシ原を残すような配慮が必要である。

引用文献

穂積俊文，1990．オオツノハネカクシの新産地．月刊むし，(235) : 38.
上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編著，1985．原色日本甲虫図鑑（Ⅱ）．保育社，大阪.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目カミキリムシ科＞

ベーツヒラタカミキリ　*Eurypoda* (*Neoprion*) *batesi* Gahan, 1894

評価理由

シイの大木に依存する種で、自然度の高い常緑林の指標ともなる種である。本種が生息できるような樹林は市内には限られ、またその環境は年々悪化している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

赤褐色で扁平なカミキリムシ。雄では大あごが発達する。

体長は 36～34mm。



採集地等不明

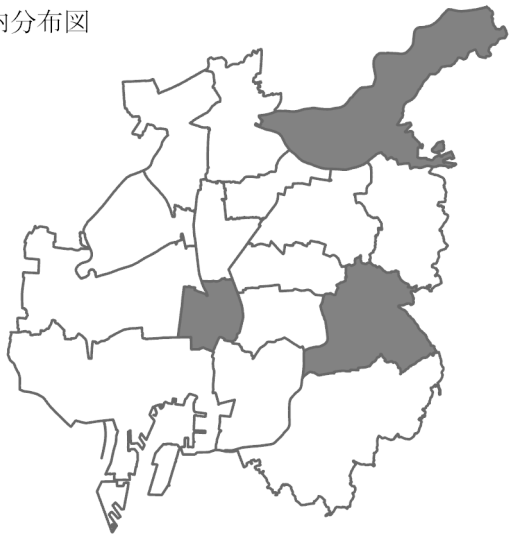
分布の概要

市内：熱田区の熱田神宮（井野川，1973）。守山区、天白区。

県内：豊橋市、豊川市、刈谷市など温暖な地域に分布する。

国内：本州、伊豆諸島、四国、九州、対馬、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島。

世界：朝鮮半島、中国南西部、ベトナム、ラオス。



生息地の環境／生態的特性

シイなどの大木が存在する森林に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

熱田神宮の環境は保護されているので、現在も生息している可能性が高い。しかし、熱田神宮は都市部に孤立した自然で、他の生息地とは遠く離れていること、樹林内の乾燥化など生物にとっての環境は必ずしも将来にわたって安心できるものではない。

減少の原因としては、本種の生息できる大木を含む森林の消失と、乾燥化による環境の悪化が考えられる。

保全上の留意点

熱田神宮をはじめ、寺社林など大木の残る林の保全が必要である。

引用文献

井野川重則，1973．熱田神宮にてベーツヒラタカミキリを採集．佳香蝶，25(96): 55.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目セセリチョウ科＞

ミヤマセセリ　*Erynnis montana montana* (Bremer, 1861)

評価理由

かつては市東部丘陵の各所に早春、本種の姿が認められたが、生息場所である丘陵地のコナラやアベマキの雑木林が、土地開発等により減少し産地が孤立化し、生息条件が急速に悪化した結果、今日では市東部の数地点に認められるに過ぎない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 36～40mm。翅の地色は茶褐色で、後翅亜外縁から外縁にかけ黄色の小点列がある。前翅の翅表には紫灰褐色鱗粉を散布するが、雌では密度が高く、中央部で灰白帯のようになる。

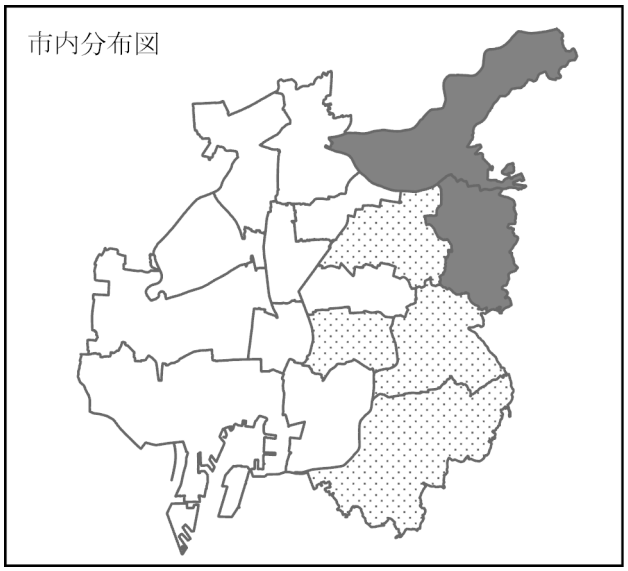
分布の概要

市内：主に市東部丘陵（瑞穂区、千種区、名東区、天白区、緑区、守山区）で 1970 年代まで記録があるが、1980 年代以降に急に減少した。

県内：尾張丘陵から三河地方の丘陵・山地にかけて広く分布するが、尾張地方の平野部では、ほとんど確認されていない。

国内：北海道、本州、四国、九州に分布する。

世界：朝鮮半島、中国、ロシア南東部。



生息地の環境／生態的特性

年 1 化で 3 月下旬から現れ、4 月上・中旬に最も多くなる。雑木林やその周辺にみられ、地表や枯れ葉の上に翅を開いて止まる。タンポポ類など各種の花で吸蜜する。母蝶はコナラやアベマキ等の新芽に産卵し、幼虫はこれらの食樹の葉を食べ、秋に終齢幼虫に達して落葉とともに地表へ落下、地上の落葉層で幼虫で越冬後早春に蛹化、次いで羽化する。

現在の生息状況／減少の要因

1960 年代には、平和公園・東山公園より東部の丘陵地では、春の風物詩として各所に多産したが、2000 年以後は、名東区猪高緑地と守山区東谷山周辺のみに発生している。

主な生息場所であるコナラやアベマキのある二次林が工場・宅地造成、道路建設等により減少し、産卵に適した林縁の勢いの良い萌芽が減少したこと、林床の落葉層が薄くなって好適な越冬場所がなくなったこと、ドクガ駆除やマツ枯れ対策等で薬剤を空散したことなどが、本種の減少の要因と考えられる。産地が孤立化し遺伝子交流もなく、個体群の弱体化が起きている可能性もある。

関東地方でも、大都市周辺で本種の減少が著しく、東京都では絶滅としている。

保全上の留意点

現存するコナラやアベマキを主要樹種とする二次林を極力保全する。このような雑木林は多くの場合公園緑地となっているので、過剰な管理たとえば外来園芸樹種との植え替え、下枝切り、落葉除去などをしない。害虫防除のための農薬散布は必要最小限とするなど、配慮事項は多い。

引用文献

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類愛知県の昆虫（下），pp21-95 愛知県
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）新修名古屋市史資料編　自然．名古屋市

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl67,p305．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1984．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅳ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目シジミチョウ科＞

ウラクロシジミ　*Iratsume orsedice orsedice* (Butler, 1882)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

評価理由

愛知県では尾張丘陵から三河山地にかけて分布する、マンサクを食樹とする比較的珍しい山地性のシジミチョウである。名古屋市内のマンサクの野生は限られ、さらに成木で近年葉枯れ病のため枯死する木が多く、生息条件が悪化している。

形態

開張 32～35mm。裏面の色彩斑紋は独特で雄雌ほとんど差はないが、翅表は全く異なる。雄は銀白色で外縁部が細く黒褐色のほか斑紋を欠き、雌は外縁部は広く黒褐色で、翅長の三分の二程度まで灰白鱗をもつので、一見して区別される。



田中多喜彦　撮影

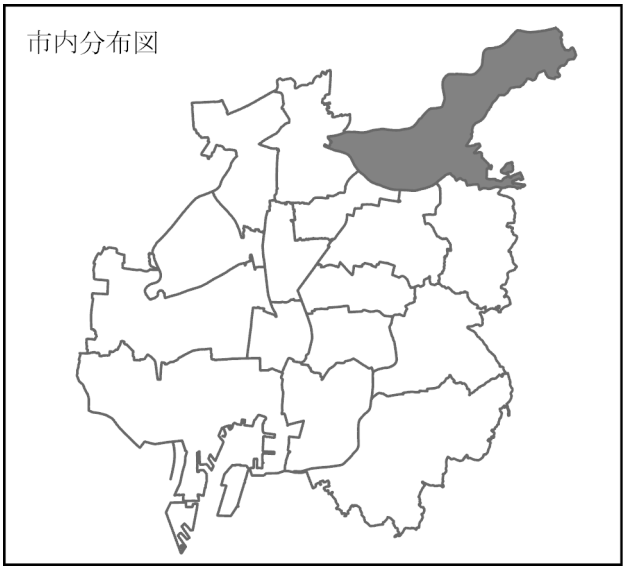
分布の概要

市内：守山区吉根と東谷山頂上の記録がある。

県内：犬山市、春日井市、瀬戸市などの尾張丘陵から三河山地にかけ分布は広い。

国内：北海道渡島半島南端部以南、本州、四国、九州。四国、九州では高地帯に生息。

世界：台湾、中国西部。



生息地の環境／生態的特性

全国的に山地性の種であるが、名古屋市近郊では犬山市奥入鹿、春日井市廻間町、瀬戸市定光寺、名古屋市守山区などの海抜 100～300m 程度の低山地でも生息している。5 月下旬に羽化し 6 月上旬が最盛期となり、夕刻樹上をキラキラと銀白色の翅を輝かせて飛ぶ。

現在の生息状況／減少の要因

1990 年代に入って、名古屋市近郊のマンサクは葉枯れ病のため茶褐色に変色するものが目立ち、数年のうちに樹勢が衰え成木の多くが枯死してしまった。現在は残った木や若木によって、ウラクロシジミはようやく命脈をつないでいる状態である。

守山区吉根にわずかに自生していたマンサクも、大規模な造成によって雑木林自体が縮小し、本種の生息環境が悪化している。

保全上の留意点

市内に残されたマンサクの自生しているような身近な里山の二次林の生態的価値を認識して、現存する二次林をできる限り緑地として温存すること。また公園整備のための雑木の間伐や下枝切り、農薬散布などには十全な配慮が望まれる。

引用文献

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp21-95．愛知県．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然．名古屋市．
山田芳郎，2008．名古屋市でウラクロシジミを採集．佳香蝶，58(227): 54
大曽根剛，2008．名古屋市守山区吉根のウラゴマダラシジミの衰亡．佳香蝶，60(234): 73-76
(この中に同地で大曽根によるマンサクよりウラクロシジミ 2 卵採集 1987 年 1 月 1 日の記録がある)

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl22,p78．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1984．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目タテハチョウ科＞

イチモンジチョウ　*Limenitis camilla japonica* Ménétriès, 1857

評価理由

食草を同じくするアサマイチモンジは、市内で安定した発生を続けているが、本種は名古屋市内で過去に確実な記録があるものの、現在注意してもほとんどその姿をみることができない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 52～62mm。雌はやや大型。和名のイチモンジとは黒地の前後翅を貫く一文字様の白帯にもとづく。雌は一般に大型で翅形は丸味を帯びる。雌は前翅中室内に不明瞭な白斑をあらわすが、アサマイチモンジほど常に明瞭ではない。アサマイチモンジでは前翅第 3 室の白斑（白帯の一部をなす）は大きく明瞭であるが、本種では白斑はその前後の白斑に比べて著しく小さく、時には消失する。

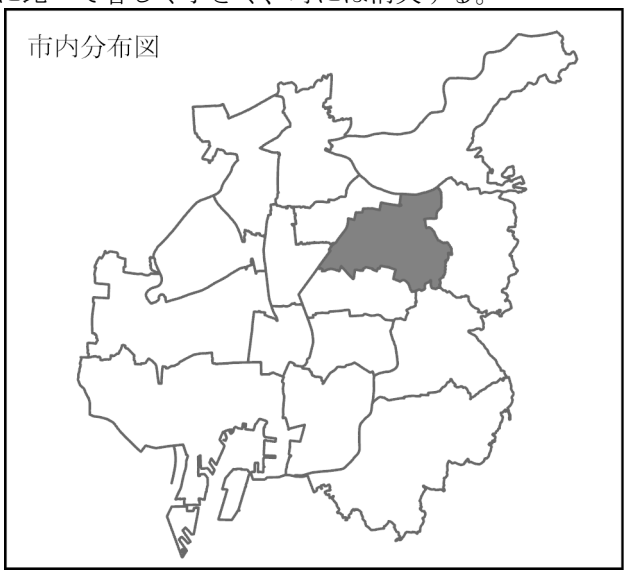
分布の概要

市内：千種区東山公園の古い記録と、平和公園（1973 年）の目撃記録があるのみである。

県内：アサマイチモンジに比べ、やや山地に多い。美浜町野間の記録があるが例外的。

国内：日本全国に産するが、西南部の暖地では一般に山地に多く、平地にはまれ。

世界：朝鮮半島、中国からヨーロッパに至るユーラシア北部の広域分布種。



生息地の環境／生態的特性

近縁種のアサマイチモンジがより陽性で明るく開けた環境を好むのに対して、本種は森林周辺や渓谷に多い。木曽川堤防では、アサマイチモンジのみが見られる。食樹は両種とも主にスイカズラで、ハコネウツギも食べる。

現在の生息状況／減少の要因

市内にはよく似たアサマイチモンジが多くないが生息しており、混同されていたイチモンジチョウは明らかに減少している。

長野県軽井沢では、アサマイチモンジはより開けた河原や明るい林縁に見られ、イチモンジチョウは渓谷沿いの路傍でよく見られ住み分けているという。環境への耐性に差異があるかもしれない。九州でも減少が指摘されているが、近年温暖地でイチモンジチョウに衰微傾向があるとしても、その要因について明確に調べられたことはない。

保全上の留意点

市内では、イチモンジチョウもアサマイチモンジも、比較的大規模な緑地公園に多く自生する、ツル性のスイカズラを主な食樹としていると思われる。公園整備等で林縁と草地の間を覆っているマント群落を除去してしまうと、スイカズラも除去されてしまう。過剰な整備や伐採をしないこと、また害虫駆除のための農薬散布には十分な配慮が望ましい。

引用文献

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類愛知県の昆虫（下），pp21-95．愛知県．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）新修名古屋市史資料編　自然．名古屋市．

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl48,p226．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1983．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ツトガ科＞

ゴマフツトガ　*Chilo pulveratus* (Wileman & South, 1917)

評価理由

河川敷や沼沢地、そして山間の小湿地が生息場所と考えられる。湿地性の蛾で、全国的に産地は限定され、個体数も少ない。都市周辺では自然な湿性環境は狭められ、生息条件が悪化している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	準絶滅危惧

形態

開張 17～19mm。前翅は淡灰褐色に暗灰色鱗を散布し、弱い中横線がある。横脈上に 2 つの小点、細い亜外縁線があり、外縁には黒点列がある。前翅翅頂は鋭くとがる。



千種区星が丘元町、1991 年 7 月 9 日　田中多喜彦　採集

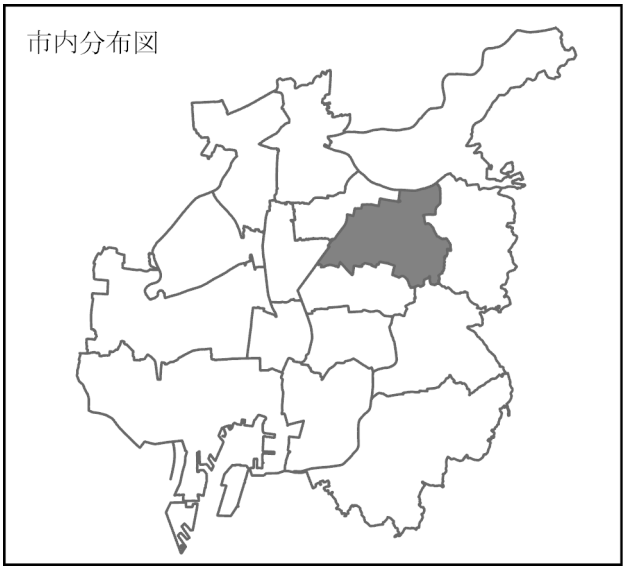
分布の概要

市内：1991 年の千種区星が丘元町が唯一の記録。

県内：上記の他岡崎市青柳町、旧弥富町鍋田、南知多町岩屋、音羽町宮路山に単発的な記録がある。近年日進市で複数個体が採集されている。

国内：群馬県を最北とし、神奈川県、静岡県（伊豆半島）、愛知・岐阜・三重の東海三県、高知県、長崎県、沖縄島に記録があるが少ない。

世界：台湾に分布、台湾が原産地である。



生息地の環境／生態的特性

全国的な分布状況から「低湿地」の蛾といわれているが、必ずしも低平な広い面積の湿地だけでなく、山間の小湿地等にも生息する「好湿地性」の蛾と考えられる。

7 月上・中旬に比較的短期間発生する。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋市の採集地の近傍には、大規模な緑地である東山公園と平和公園があり、おそらくその中の小湿地で発生したものであろう。

都市近郊の湿性環境は、宅地造成や埋め立て、河川改修等により減少し、本種の生息条件は悪化している。

保全上の留意点

現存する湿性環境の生態系をよく調査し、開発・改修の際に十全な配慮が必要である。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991. 愛知県のガ類愛知県の昆虫（下），pp96-416 愛知県.

間野隆裕，1989 木曽川河口の湿地の蛾．蛾類通信，(143): 283-287.

田中多喜彦, 2008 チョウ目ガ類新修名古屋市史資料編　自然，pp422-464. 名古屋市.

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑．講談社，東京.

岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京.

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ツトガ科＞

エンスイミズメイガ　*Eristena argentata* Yoshiyasu, 1988

評価理由

和名の「塩水」が示すように、河口など海水が混じる汽水域に生息する珍しいガであり、名古屋市内では、港区の庄内川・新川河口に生息するが、環境の悪化で生息地が狭められている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

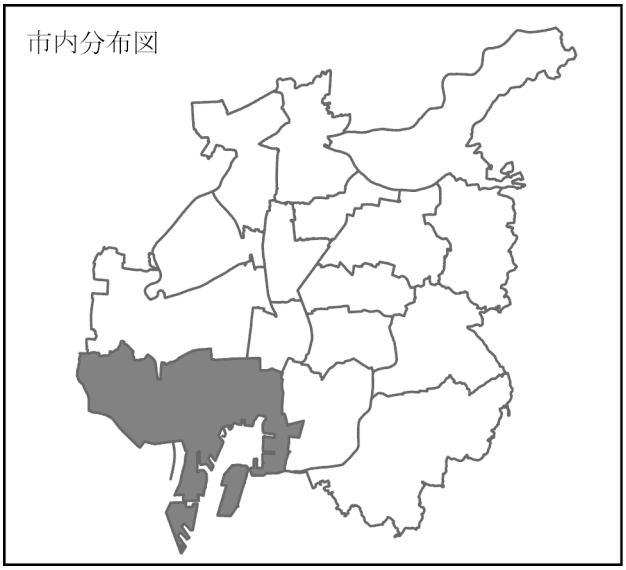
開張 12～16mm、小型のミズメイガで、翅は細長く、前後翅とも地色は橙色。白色～銀白色で黒に縁取られた縦線が、前後翅とも翅底から翅頂付近に向かって走り、前翅には同様な横線も見られる。後翅外縁に明瞭な 2 黒紋をもつ。



港区南陽町珍寿野、2009 年 8 月 18 日、田中多喜彦　採集

分布の概要

市内：庄内川・新川河口の、港区南陽町七島新田珍寿野に多産することが 2009 年に分かった。
県内：旧弥富町鍋田の標本がパラタイプとなっていて、鍋田が唯一の既知産地。
国内：中部地方以西に分布し、愛知県、三重県、愛媛県、熊本県、対馬、奄美大島から記録がある。現状では日本の特産種である。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

幼虫はミズメイガの名が示すように、気管の入り込んだエラで呼吸をする水中生活者である。幼虫は食草である汽水域の藻をつづって巣をつくり、中に隠れて生活するという特異な生態をもつ。寄主植物としては、タニコケモドキ（フジマツモ科）、ホソアヤギヌ（コノハノリ科）が知られている。

成虫は 5 月から 10 月にかけて見られ、本州では年 3 化。発生地を遠く離れることはなく、昼間は汽水域のヨシに静止している。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川・新川河口は著名な藤前干潟が拡がり、環境保全への一定の配慮がなされている。しかしヨシ原に多量のゴミが流れつくなど、水質環境は良好とはいえない。

保全上の留意点

新川は上流の漁協への航路となっている。将来、庄内川河口の砂泥地も含め、過度の川底の浚渫（しゅんせつ）などが行われると、簡単に生息地が破壊されてしまう。河口付近の環境の改変には、生態的見地からも十分な配慮が必要である。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下）．pp96-416．愛知県．
間野隆裕，1989．木曽川河口の湿地の蛾．蛾類通信，(143): 283-287
田中多喜彦，2011．名古屋市庄内川河口の蛾類．佳香蝶，63(247): 63-67

関連文献

Yoshiyasu, H，1988．A New Estuarine and an Unrecorded Species of the *Nymphulinae* (Lepidoptera, Pyralidae)Kontyu，56(1): 35-44.
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目シャクガ科＞

アヤコバネナミシャク　*Acasis bellaria* (Leech, 1891)

評価理由

最新の日本産蛾類標準図鑑では、「全国的に分布するが、局地的で非常にまれ」とある。愛知県では平地～丘陵の植生の比較的安定した自然林に産し、極相林周辺で採集されることが多い。都市周辺ではそのような良好な自然環境が減少している。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 18mm 内外。前翅の中・外横帯は灰褐色、両帯の間は灰色で、黒色の横脈点が目立ち、後縁部に大きな白紋がある。



守山区東谷山、2013 年 4 月 29 日、田中多喜彦　採集

分布の概要

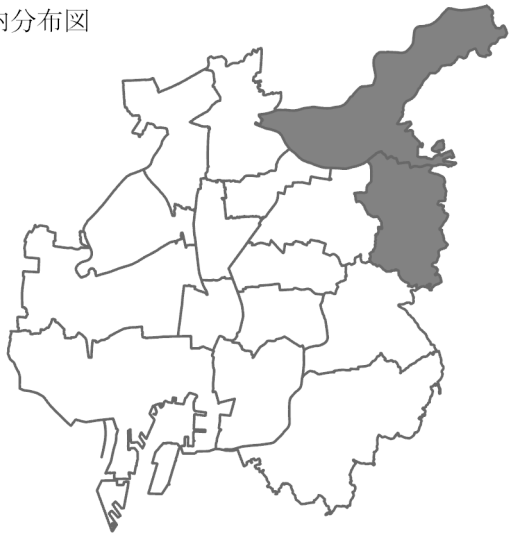
市内：守山区東谷山の照葉樹林に生息する。近年名東区明徳公園でも採集された。

県内：蒲郡市相楽山、豊田市猿投山に古い記録がある。近年日進市御嶽山でも複数個体が採集されている。

国内：北海道、本州、四国、九州に分布するが非常にまれ。

世界：ロシア南東部。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

極相林周辺で採集されることが多く、本種が生息することは、植生が長期にわたり安定している指標ともなりうる。

若い二次林ではほとんど採集されない。

現在の生息状況／減少の要因

守山区東谷山北斜面の生息地は、愛知県の自然環境保全地域として環境が保全され、動植物保護地区として採集が禁じられている。

しかし他の市内の自然林の多くは、開発により減少し分断されているので、孤立化し本種の生存は危ぶまれる。

保全上の留意点

名古屋市に残された自然林や鎮守の森の生態的価値を再認識して、一定範囲をできる限り将来にわたって温存することが望ましい。また公園緑地の整備のための伐採や農薬散布には十分な配慮が望まれる。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp422-464．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

ヌマベウスキヨトウ　*Chilodes pacificus* Sugi, 1982

評価理由

名古屋市内では港区の庄内川河口のヨシ原で発見されたが、市内では、丘陵地のため池や河川などの小規模なヨシ群落には見出されていない。生息範囲が狭く、改修などで容易に絶滅する恐れがある。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

開張 17～19mm。小型のヤガで触角は微毛状、前翅、頭部および胸背は淡い灰褐色を呈する。前翅は幅狭く翅頂は突出するが、全体として長楕円形の特異な翅型を示す。翅脈は外縁部で暗色を呈し、中室内に 1 黒点がある。後翅は淡い灰色で前翅より淡色。



港区南陽町七島新田、2009 年 8 月 18 日、田中多喜彦　採集

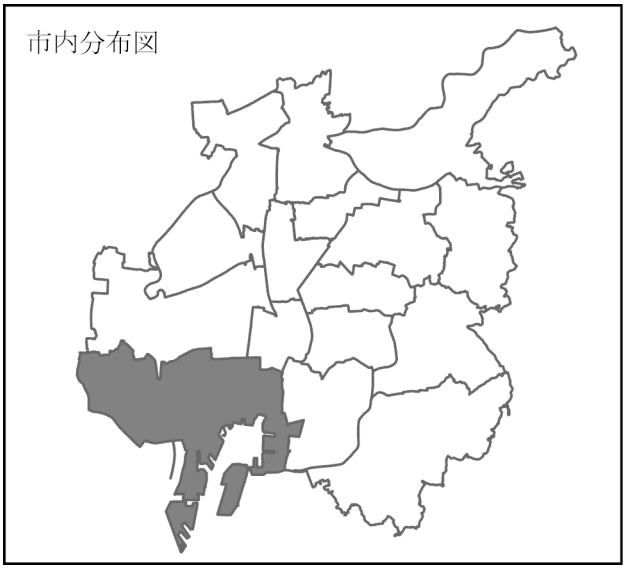
分布の概要

市内：庄内川河口の港区南陽町七島新田流作場～珍寿野のヨシ原から 2009 年に記録された。

県内：旧弥富町鍋田、蟹江町鍋蓋新田に記録がある。

国内：北海道、本州（青森、秋田、群馬、茨城、埼玉、石川、愛知、三重の各県）に記録がある。

世界：現状では日本の固有種である。



生息地の環境／生態的特性

1982 年に新種記載に用いられたホロタイプの産地は茨城県菅生沼、パラタイプは群馬県板倉町や秋田県金浦町など典型的な低湿地のヨシ原であり、本種は低湿地を代表する蛾の一つである。

生態や食草は未知であるが、庄内川河口の広大なヨシの単一群落で夜間採集をすると多数飛来するので、おそらくヨシにつくものと思われる。5 月から 9 月にかけて発生する。

現在の生息状況／減少の要因

現在の市内の生息地である、庄内川河口のヨシ原の環境は、比較的安定している。

過去には、市内の他の河川の河口のヨシ原にも生息していた可能性があるが、すべてコンクリート護岸による単なる水路と化し、本種の生息環境は消滅した。

保全上の留意点

庄内川の河口部には、大都市としては珍しく広大なヨシ原が残っている。ヨシの純群落は汽水域を含め特異な生態系であり、希少な生物が多く生息している。護岸改修工事の際は、生態系への影響を極力減らすなど、十全な配慮が望まれる。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp96-416．愛知県．
間野隆裕，1989．木曽川河口の湿地の蛾．蛾類通信，143: 283-287
田中多喜彦，2011．名古屋市庄内川河口の蛾類．佳香蝶，63(247): 63-67

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p226,pl109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

トビイロアカガネヨトウ　*Euplexia albilineola* (Wileman & South, 1918)

評価理由

湿地環境で得られることが多い。全国的に既知産地が少なく、個体数も少ないいわゆる希少種である。本種の記録された守山区の里山的環境は土地開発により減少し、生息環境が悪化している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 30mm 内外。前翅は暗い紫褐色、横線は紫白色で明瞭。環・腎状紋態の輪郭は白色で鮮明である。後翅は外半は淡褐色で内半は淡黄褐色、外横線と横脈点があらわれる。



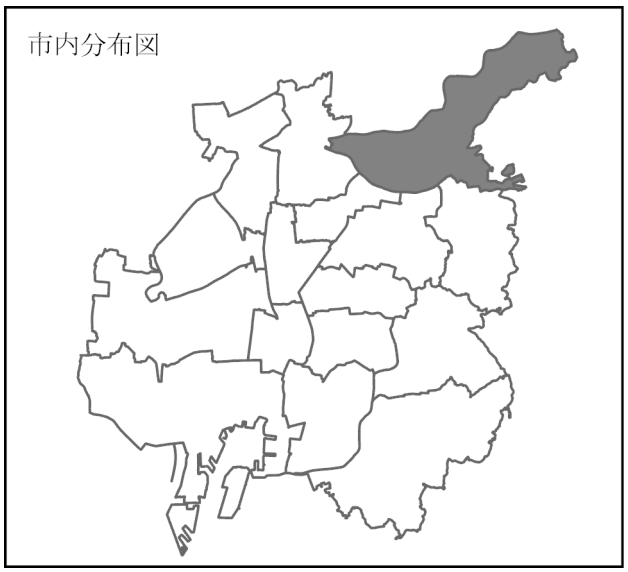
守山区中志段味、1992 年 10 月 3 日、水野利彦　採集

分布の概要

市内：守山区中志段味（1992）の記録がある。

県内：上記の他に旧稲武町井山、旧設楽町裏谷、豊田市自然観察の森の記録があるが、まれな種である。近年日進市の湿地で記録されている。

国内：模式産地の奈良県吉野の他、福井県鳩ケ湯、兵庫県氷ノ山、広島県豊平町、香川県高松市、福岡県北九州市から記録されるが産地は局限される。近年大阪府や福島県でも記録されている。



生息地の環境／生態的特性

平地にも山地にも記録がある。産出量は少なく、香川県高松市のように追加記録が出ず、県のレッドリストにあげられた産地もある。

成虫は秋季 10～11 月に、湿性環境で採集されることが多く、湿地との結びつきが強い。

現在の生息状況／減少の要因

記録された守山区中志段味一帯は、以前は里山的景観の二次林が残り、ネスジシャチホコやオオヤママイマイが記録された。小湿地も散在していたが、その後、土地造成が急速に進み、生息環境は悪化している。

保全上の留意点

市東部に残る里山的環境は、コナラやアベマキの雑木林と小湿地、ハンノキ林や細流を含み、尾張丘陵の動植物相のモデルであり、そのまま生きた博物館として一定区画を残せれば理想的である。特に都市近郊に現存する小湿地は、遷移がすすみ消滅しやすいので、侵入するササ刈りや上木切りなど、人の手を加えてでもできる限り保全することが望ましい。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p226,pl109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp422-464．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

キスジウスキヨトウ　*Capsula sparganii* (Esper, 1790)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

ガマを主な食草とする本種は、ガマ属やミクリ属の群生するような沼沢地の湿地に限って発生する。このような湿地は、都市周辺では埋め立てや河川改修等により狭められ、生息条件は年々悪化している。ガマヨトウとともに湿地環境の指標種としてレッドリストに抽出している県が多い。

形態

開張 29～44mm。雌は一般に大型。ガマヨトウに似るが、前翅地色は淡灰褐色でやや黄色味を帯び、ガマヨトウのように強く橙褐色を帯びることはない。腎状紋の下端は上に開く黒色の半環となる。雌の産卵管は強壮、第 8 節腹面に尾方へ向かう一対の突起がある。

分布の概要

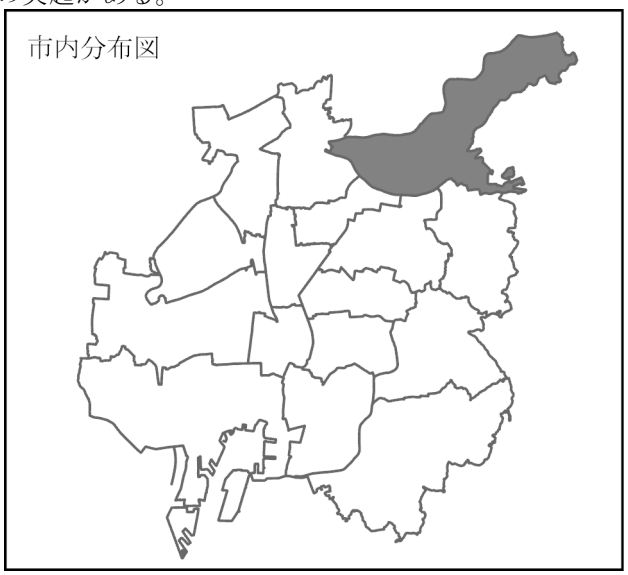
市内：守山区大森の八竜緑地で記録されている。

県内：瀬戸市定光寺、日進市、豊田市、旧田原町蔵王山などから記録されている。

国内：日本全国に産する。

世界：朝鮮半島、中国（黒龍江省)、モンゴル、シベリアからヨーロッパにわたり分布。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

食草であるガマ属などの生育する沼沢地や湿地に限って生息する。海岸近くの低層湿地から内陸盆地まで、垂直分布は比較的幅広く、年 1 化で成虫は 7～9 月に出現する。幼虫はガマやミクリの茎中に棲み、その中で越冬するという。

現在の生息状況／減少の要因

記録された守山区大森の八竜緑地は、湿地部分が名古屋市のビオトープ公園としてフェンスで囲われ、日時を限って公開されている。また周辺の自然林は緑地として保全されている。しかし周辺は宅地開発され、発生地は孤立化し遺伝子交流も少なく、長期にわたる生存がおびやかされている。

かつては市内の各所に本種の生息に適した低湿地があったと思われるが、今日では開発や埋め立てによりわずかしか残されていない。

保全上の留意点

都市近郊の低湿地が生息地であるため、都市開発や河川改修などの影響を受けやすい。開発する場合は、生態系について十分な事前調査した上で、完全な人工的環境にせず多機能型の自然とするなど、できるだけ自然を温存する配慮が望まれる。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp96-416．愛知県．
小木広行，1982．オオチャバネヨトウとキスジウスキヨトウの幼虫．誘蛾灯，87: 11-13
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp422-464，名古屋市．

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p226,pl109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

ガマヨトウ　*Capsula aerata* (Butler, 1878)

評価理由

ガマを主な食草とする本種は、ガマの群生するような沼地や河川敷の湿地に限って発生する。このような湿地は低地では埋め立てや河川改修等により狭められ、生息条件は年々悪化している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

開張 17～19mm。前翅は黄褐色ないし橙褐色を呈し、個体差はあるが同属他種（キスジウスキヨトウなど）より色彩は濃色である。中室下縁に沿い羽底から外縁に至る暗色条は明瞭である。中室付近は橙色をおび、環・腎状紋は通常判然としないか弱い黒点となる。雌の産卵管は強壮。後翅も同属他種に比べ全体に濃色である。

分布の概要

市内: 千種区平和公園で 2008 年に記録された。

県内：西尾市若松町、旧美和町篠田、豊田市古瀬間町に記録がある。

国内：北海道の十勝・釧路地方、東北各県、関東の群馬・栃木・千葉・神奈川の諸県、中部の新潟・富山・石川・静岡・愛知・岐阜の諸県、三重県、滋賀県、京都府に記録がある。

世界：ロシア南東部。



生息地の環境／生態的特性

本種は現状では日本の特産種であるが、分布はやや北に偏り、ほぼ東海地方以北に産し、京都府と滋賀県にわずかに記録がある低湿地の蛾である。

幼虫はガマのような大型の湿性単子葉植物を食害するシンクイムシ（borer）である。年 1 化で 7～8 月に出現する。

本種の生息するヨシ・マコモ・ガマの生育する低湿地は環境改変の影響を受けやすく、全国的に多くの都道府県がガマヨトウや、同様な生態的特性をもつオオチャバネヨトウをレッドデータブックに掲載している。

現在の生息状況／減少の要因

記録された平和公園南部の湿地は、丘陵の狭間の休耕田に、生育したヨシ原にガマをまじえる比較的小面積の湿地である。現在は緑地公園として保全されている。

かつては市内の各所に、本種の生息に適した低湿地があったと思われるが、今日では開発や埋め立てによりほとんど残されていない。そのため産地が孤立化し、遺伝子交流が困難となっていて生存条件が悪化している。

保全上の留意点

都市近郊の低湿地が生息地であるため、都市開発や河川改修などの影響を受けやすい。開発する場合は、生態系について十分な事前調査をした上で、完全な人工的環境にせず多機能型の自然とするなど、できるだけ自然を温存する配慮が望まれる。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp96-416. 愛知県.

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京.
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p226，pl109．講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京.

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜トンボ目カワトンボ科＞

ニホンカワトンボ　*Mnais costalis* Selys, 1869

評価理由

生息する河川の消滅、改修、水質の悪化などにより著しく衰退した。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

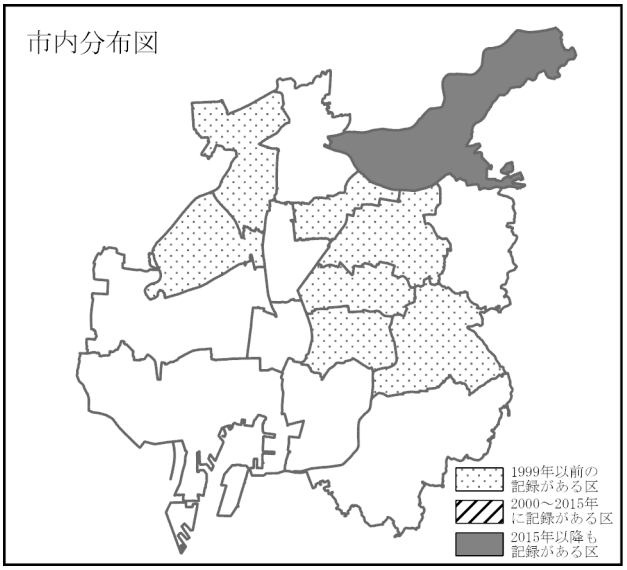
成虫の体長 56mm 内外。雌雄別、地域別」で翅色を異にする。東海地方では、雄は橙色翅で翅前縁に不透明斑を有し、雌は淡橙色翅である。



守山区上志段味東谷、2019 年 5 月 7 日、髙﨑　保郎　撮影

分布の概要

市内：千種区、東区、中村区、西区、昭和区、瑞穂区、守山区、天白区。
県内：平地から低山帯にかけて広く分布する。
国内：北海道、本州、四国、九州。
世界：ロシア（千島列島）。



生息地の環境／生態的特性

丘陵に近い平地から低山帯の比較的緩い流れの小、中河川に生息する。飛翔は緩慢である。
成虫の出現期は 4 月～6 月である。

現在の生息状況／減少の要因

1940 年代末頃までは、市中央部の山崎川などにも生息し、自然が残る天白区では 1970 年代まで見られたが、経済活動、市街化の進行に伴う市内小・中河川の改修、潰廃と水質の著しい悪化により絶滅し、現在では比較的河川の自然状態が保たれている守山区北端だけが僅かながら残存する。
守山区の庄内川河畔とその近傍では、幼虫の流下羽化によると推定される成虫を稀に見ることがある。

保全上の留意点

知られる生息場所は、守山区内の 1 箇所だけで、今のところ川の状態は良好であるが、その一側は今後開発される危険性も考えられる。市始め関係者には留意が望まれる。

特記事項

本種の分類上の扱いが一応確立したのは近年のことで、以前は、オオカワトンボ、ヒガシカワトンボと呼ばれていたので注意が必要である。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
髙崎保郎，2019．名古屋市守山区の *Mnais* 属カワトンボと才井戸流．なごやの生物多様性，6: 77-81.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目イトトンボ科＞

ベニイトトンボ　*Ceriagrion nipponicum* Asahina, 1967

評価理由

平地から丘陵地にかけて局地的ながら広く産したが、生息地の消滅や環境悪化により産地が減少した。近年に限れば、多少増加傾向があるが、過去の状況には及ばない。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

成虫は体長 38mm 内外。雄は全体赤色、雌は赤みがかった黄色、無斑。体は太くイトトンボとしては大型である。目立つし識別容易なので指標種に適する。

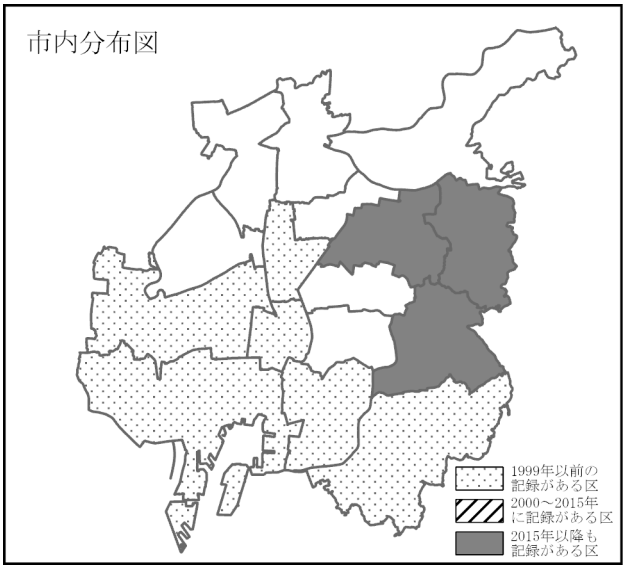
幼虫は体が太く頭部が大きい。尾鰓は幅広で丸味がある。



ベニイトトンボ　雄
千種区星ヶ丘山手、2013 年 7 月 10 日、髙﨑保郎　撮影

分布の概要

市内：千種区、中区、熱田区、中川区、港区、緑区、名東区、天白区に記録がある。
県内：平野、丘陵に分布する。
国内：関東以西の本州、四国、九州。
世界：朝鮮半島、中国。



生息地の環境／生態的特性

水郷の側溝緩流、平地丘陵の浮葉植物と適度な密度の抽水植物が存在する池沼に好んで生息する。湿生植物が密生する開水面が乏しい環境や廃田、新設人工池にも生息することがある。山地には分布しない。

依存する池沼の環境が限られる傾向があるためか、産地は局地的であるが、移動分散力に富むと推定される調査データがある。成虫の出現期は 6～10 月。

現在の生息状況／減少の要因

1940 年代から 2000 年代初頭の間に、県全体では 63 か所の生息地が記録された。調査の進展による新産地の増加に並行し、生息地である池沼の潰廃や環境悪化による消滅も進行し、2003 年に残存する生息地は市内推定 0 か所、県全体で 10 か所に激減した。生息地の潰廃、環境悪化が減少の要因である。ところがその後名古屋市東部と尾張東部丘陵地帯を中心に生息地が増加に転じ、2012 年までに市内で生息が確認された場所は 5 か所になった。但し一時的定着の場所もある。

保全上の留意点

現生息地の良好な環境を保全すると共に、移動分散による飛来を受け入れられる水生植物に富む良好な池の保全にも留意する。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然．pp.350-361．同　目録．pp.94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上）．pp.9-78．愛知県．
髙崎保郎，2003．愛知県のベニイトトンボ（第 2 報）．ため池の自然，(38): 1-8.
髙崎保郎、2012．愛知県のベニイトトンボ（第 3 報）．ため池の自然，(52): 13-17.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目イトトンボ科＞

セスジイトトンボ　*Paracercion hieroglyphicum* (Brauer, 1865)

評価理由

かつては平地池沼に最も普通の種であったが、市内では極く一部の緩流、池しか安定的産地は無くなった。最普通種の激減は市内全域の自然環境の悪化を意味し、その象徴として取り上げた。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

成虫は 32mm 内外。雄は青色の地に、雌は黄緑色の地に黒斑を有する。肩の黒条に淡色の筋が明らかに走り、これが名前の由来になっている。

幼虫の尾鰓の形状、斑紋は同属他種に似て区別は困難である。



セスジイトトンボ　雄
天白区天白町平針、2013 年 5 月 16 日、髙﨑保郎　撮影

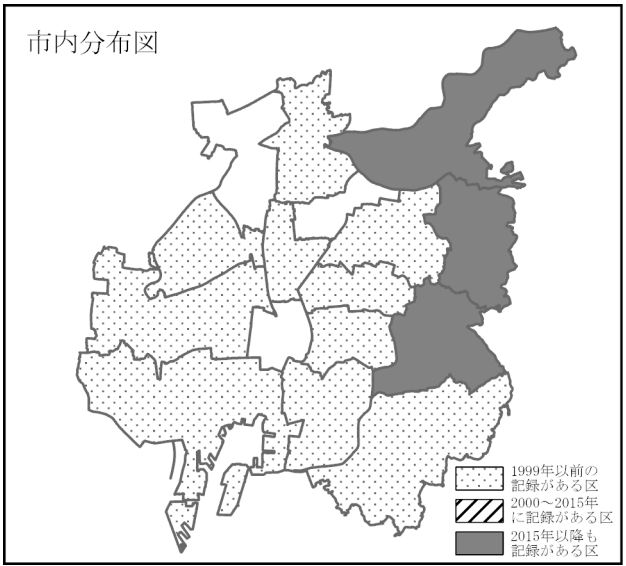
分布の概要

市内：千種区、北区、中村区、中区、昭和区、瑞穂区、中川区、港区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

県内：平地、丘陵に分布する。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国、極東ロシア。



生息地の環境／生態的特性

平地、丘陵地の浮葉・沈水植物が豊富な池や渓流に生息する。条件が良ければ多産するが、若干の飛来とも考えられる個体しか見られない池もある。出現期は 5 月末から 10 月。

現在の生息状況／減少の要因

市内では、安定的産地は守山区志段味の庄内川水系の緩流部、天白区大堤池など極く一部に限られる。天白区の荒池、名東区の塚ノ杁池で比較的近年の記録は有るが、極く少数個体で飛来の可能性もある。塚ノ杁池ではその後発見されていない。全国的にも減少傾向にある。隣接する長久手市では絶滅した。

生息地の開発による消滅、水質と池沼自然度の悪化、生息地の減少に伴う生息地間の距離の増大による交流の断絶等諸々の減少要因が考えられる。

保全上の留意点

本種が残存する生息場所では水生植物の保全が重要である。長久手市の杁ヶ池では住民苦情により水草を一掃し、本種を絶滅に至らしめた。

特記事項

本種を始め池沼性普通種イトトンボは全面的な減少が著しく、多くの池沼で残存するのは、比較的悪環境に対する適応性が強いと見られるクロイトトンボだけとなった。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp.350-361．同　目録，pp.94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
髙崎保郎，2013．塚ノ杁池水抜き後のトンボ．ため池の自然，(54): 19-20．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目イトトンボ科＞

ムスジイトトンボ　*Paracercion melanotum* (Selys, 1876)

評価理由

平地池沼に普遍的な数種のイトトンボの中では、生息する池沼が限られる傾向があること、定着に不安定な面があることなど、やや異質なところがあり、かつ、近年かなり減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

成虫の体長 35mm 内外。雄は鮮やかな青色地に黒斑、雌は黄緑色で前胸後縁がえぐられることが特徴。

幼虫の尾鰓はやや幅広で先端は丸味がある。



ムスジイトトンボ　雄
千種区星ヶ丘山手、2008 年 8 月 1 日、髙﨑保郎　撮影

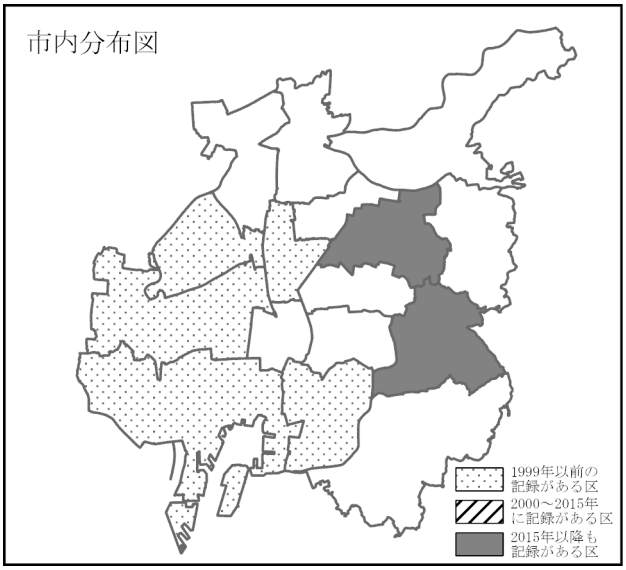
分布の概要

市内：千種区、中村区、中区、中川区、港区、南区、天白区で記録がある。

県内：局在的であるが平野に広く分布する。

国内：宮城県以西の本州、四国、九州、南西諸島。

世界：朝鮮半島、台湾、中国、ベトナム。



生息地の環境／生態的特性

平地の池沼を主とするが、寺院の小池、コンクリート貯水槽のような植生が貧弱な水域からも発生する。沿海部に多いことも特徴的。突然消え、突然現れる不安定な面がある。このため移動分散性は比較的強いと考えられる。混棲する同属のセスジイトトンボを生息地から駆逐する力がある。成虫の出現期は 5～10 月。

現在の生息状況／減少の要因

市内でも時に新産地の発見もあるが、既産地の多くから姿を消している。隣接する長久手市の平地、丘陵でも減少している。1950 年代には名古屋城堀にも多産し、中区東別院にも産した程であった。比較的近年の記録があるのは千種区星ヶ丘山手、天白区天白町平針所在の池位であるが、その生息状況は必ずしも安定的なものではない。

生息する池の水質汚濁と環境の変化、外部からの供給交流の衰退などが減少の要因と見られる。

保全上の留意点

多数の産地で多産していた頃なら、自然度の低い水域でも生息し得たと思われるが、産地が減った現在では、基本的には植生豊かな自然度の高い池沼の確保が必要であろう。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp.350-361．同　目録，pp.94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
髙崎保郎，1968．愛知県のムスジイトトンボ．佳香蝶，20(60): 101-104.
髙崎保郎，2009．名古屋城及び周囲の動植物誌．ため池の自然，(47): 8-18.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目ヤンマ科＞

サラサヤンマ　*Sarasaeschna pryeri* (Martin, 1909)

評価理由

樹林中の小湿地や水溜りの存在の指標となる種である。市域では母体となる東部の丘陵の樹林の減少が著しく、存続が危ぶまれる。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

成虫の体長 62mm 内外。黒色の地に黄緑色斑を点在する。ヤンマとしては細身で小型。

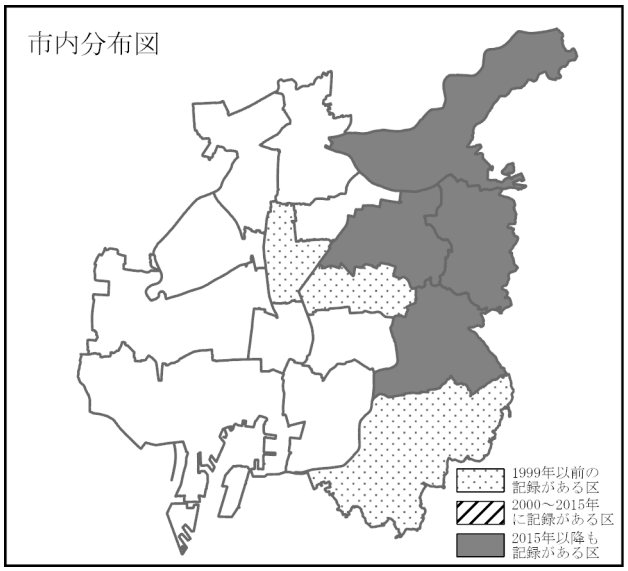
幼虫はヤンマとしては小型で、頭部は角張り、腹部の側棘や凹凸が顕著で全体としてゴツゴツした印象が特徴。



サラサヤンマ　雄
名東区猪高町上社猪高緑地、1987 年 5 月 30 日、
高崎保郎　撮影

分布の概要

市内：千種区、中区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。
県内：丘陵地から低山地に広く分布する。
国内：北海道、本州、四国、九州。
世界：済州島。



生息地の環境／生態的特性

丘陵から低山地にかけて広く分布する。幼虫は落葉樹林の林内、林縁の小湿地や水溜り、時に明るい湿地に生息する。雄は林内の空間や池沼・湿地の縁で縄張を形成し、低くホバリングや往復飛行を繰り返す。条件の良い縄張場所には次々と雄が飛来する。

現在の生息状況／減少の要因

市内でも東部の丘陵地帯の樹林内に小規模な湿地や水溜りが存在する場所では、現在も安定的に生息している。例えばまとまった二次林が現在も残存する名東区猪高緑地、千種区平和公園、天白区島田緑地、守山区の東端丘陵地などである。

平地に接する丘陵地の開発破壊が続き、小水域を涵養する二次林の衰失が減少要因である。

保全上の留意点

発生源である小水域を内在する或る程度まとまった丘陵地の二次林や、独立又は池畔の湿地の保全が必要である。

特記事項

中区栄の地上や地下街での目撃、採集記録があり、かなりの移動分散力を発揮することもあることが伺われる。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp.350-361．同　目録，pp.94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
髙崎保郎，1994．名古屋市中心部地下街でサラサヤンマを採集．月刊むし，(286): 12.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目ヤンマ科＞

コシボソヤンマ　*Boyeria maclachlani* (Selys, 1883)

評価理由

もともと本市では稀で、近隣の平野部では絶滅状態。東部丘陵地帯からの供給も期待し難しい。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

成虫は体長 85mm 内外。黒褐色の地に黄斑を有する。腹部第 3 節が強くくびれる（細まる）ことが特徴で名の由来である。

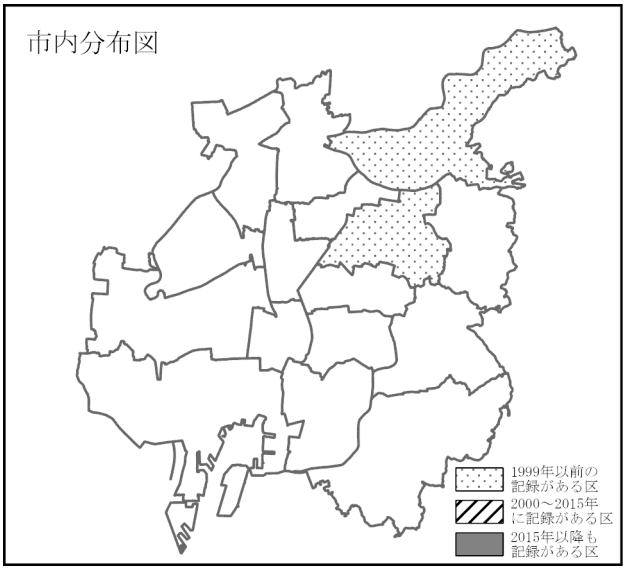
幼虫は頭部後角に顕著な突起があり、腹部第 4～9 節の側棘が発達し、全体にトゲトゲしい印象と、触れると腹部を大きくそらし擬死行動をとるのが特徴である。



コシボソヤンマ　雄
千種区東山、1954 年 8 月 14 日、髙﨑保郎　採集

分布の概要

市内：千種区、守山区で記録されている。
県内：かつては平地でも産したが、現在は丘陵から低山地に局所的に産する。
国内：北海道、本州、四国、九州。
世界：朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

平地の中小河川、丘陵、低山地の林間の小流に局所的に産する。幼虫は流下し終令幼虫は下流に多い。成虫は樹陰を好むが開けた川の岸に沿って飛翔することも多い。樹陰の流れの朽木等に産卵する。産卵は夜間も行われる。成虫の出現期は 6～9 月。

現在の生息状況／減少の要因

多くの所では 1950 年代初期までは、平地の水路や中小河川でも見られたが、現在では丘陵から低山地の清流に局在する。三河地方には比較的広く分布する。瀬戸市南西部の丘陵地では多産する所もあり、守山区には生息の可能性もある。

特に平地中小河川の水質と改修による環境の悪化、川自体の消滅により、平地、平地に接する丘陵では著しく減少又は絶滅した。

保全上の留意点

平地、平地に接する丘陵地の中小河川の水質汚濁の防止と産卵適所となる水辺環境の保全が必要である。

特記事項

やや生息の有無が把握しにくい種である。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目ヤンマ科＞

マルタンヤンマ　*Anaciaeschna martini* (Selys, 1897)

評価理由

かつては市街地でもよく見られたが、生息できる止水域の減少により明らかに衰退した。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

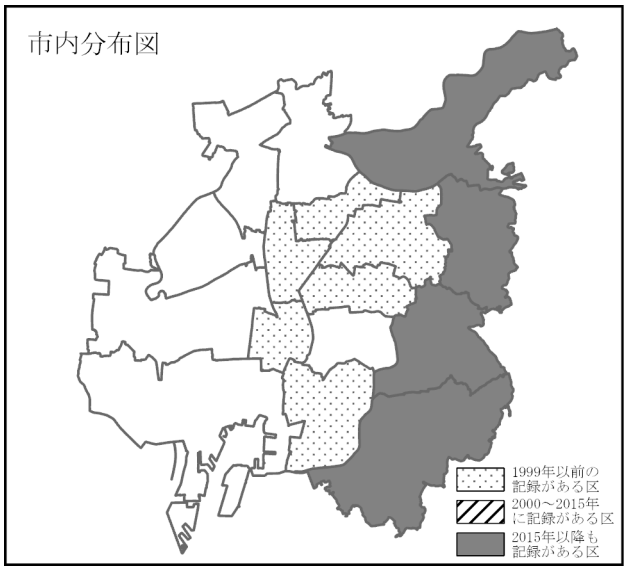
成虫は体長 75mm 内外。雄は濃褐色地にすこぶる美しいコバルトブルーの複眼と胸斑を有する。雌は濃褐色地に黄緑斑を有し、成熟すると翅は濃い褐色になり高飛していても判別し易い。



マルタンヤンマ　雄
南区呼続四丁目呼続公園、1971 年 8 月 1 日、清水典之　採集

分布の概要

市内：千種区、東区、中区、昭和区、熱田区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。
県内：平地から丘陵地に広く分布する。
国内：宮城県以西の本州、四国、九州。
世界：朝鮮半島、台湾、中国、東南アジア、インド。



生息地の環境／生態的特性

幼虫は平地から丘陵地にかけての水生植物が豊富な池沼や、林内、林縁の水溜り的な小池に生息する。
成虫は昼間は林内に潜み、夜明けや夕方薄暮時に池沼、水田や空き地を高飛、或いは低空を敏速に飛翔する。成虫出現期は 6～10 月。

現在の生息状況／減少の要因

成虫は昼間は殆ど行動しないので見付け難いこと、高飛又は敏速に飛翔するので採集し難いこと、発生源の小水域が発見しにくいことなどから、広く分布する割には確実な生息の把握は困難である。近年では守山区、名東区、天白区など市東部寄りの丘陵地形に所在する緑地で成虫又は幼虫が知られている。
生息水域を含む緑地や良好な池の宅地開発等や環境整備による消滅が減少の主要因である。

保全上の留意点

市内に残存する生息可能水域のある緑地の保全が重要である。

特記事項

本種は成虫よりも幼虫又は羽化殻による方が生息確認し易い。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp.350-361．同　目録，pp.94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
鵜殿清文・鵜殿　茂・清水典之，1974．黄昏活動性のヤンマ 3 種．佳香蝶，26(100): 95-98．
なごや生物多様性保全活動協議会，2013．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書．P.260．名古屋．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目サナエトンボ科＞

ヤマサナエ　*Asiagomphus melaenops* (Selys, 1854)

評価理由

本種は2010年までは守山区の丘陵地の中小河川や用水路に時期に行けば普通に見られた。2020 年以降はめっきり数を減じ、市内ではそれ以降見られていない。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長 63mm～72mm 大型のサナエ。

キイロサナエと似るが雄は副性器の先端が曲がり、上下尾部付属期の長さが同じである。雌は産卵弁が目立たない。写真では判別できないため注意が必要。

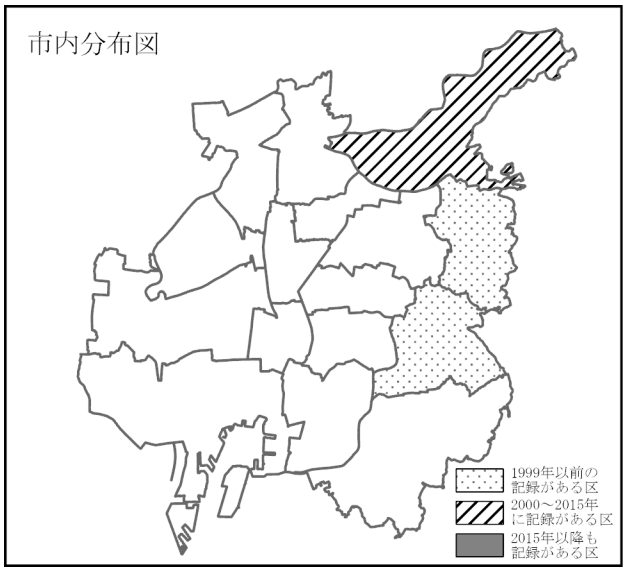
分布の概要

市内：守山区、名東区、天白区。

県内：丘陵地、低山帯から山間の中小河川用水路に広く分布。

国内：本州、四国、九州。東北地方では産地が限られる。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

河川中下流域が主な生息域で、用水路のように細い流れにも適応している。

現在の生息状況／減少の要因

ゴールデンウィークに守山区の滝水池に行くと羽化したての個体が多数池沿いの林道にとまっていた。

都市化に伴い、用水路のコンクリート三面張り等の河川改修の影響でめっきり減った。

保全上の留意点

市内では少なくなったが、県内や全国では今でも普通に見られる。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫 ・高崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫(上)，pp.9-78．愛知県．

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目ヤマトンボ科＞

コヤマトンボ　*Macromia amphigena* Selys, 1871

評価理由

過去の本種の記録は山崎川、天白川水系からもあったが現在では庄内川本流だけであり、個体数もさほど多くない。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長 68mm～78mm。細身のスマートな体型。複眼は美しい緑色。胸部から腹部にかけ濃い緑地に黄色の縞がある。野外で見ると黒と黄色の虎模様である。近縁のキイロヤマトンボとは腹部第 3 節の黄斑で判別し、本種は連続している。

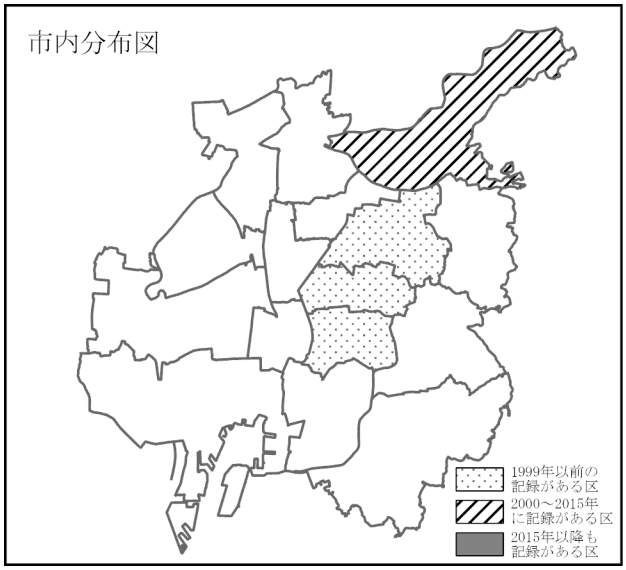
分布の概要

市内：千種区、昭和区、瑞穂区、守山区。

県内：矢作川水系、豊川水系に広く分布。

国内：北海道南部、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国、ロシア。



生息地の環境／生態的特性

河川中流から下流かけて広く生息。5～6 月、周囲に樹林が多く流れが穏やかな場所で羽化する。未熟成虫は河川周辺の緑に囲まれた開放空間で、夕方に摂食行動が見られる。また日中山間の林道を次々と飛来する姿を観察している。成熟雄は羽化場所に近いところで縄張りを作り、配偶行動は 8 月中旬まで見られる。

現在の生息状況／減少の要因

評価理由にも述べたが山崎川、天白川水系にもいた。

保全上の留意点

市では庄内川本流のみであるが、県内や全国では普通に見られる。生息地では現状の環境を維持したい。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫(上)，pp.9-78．愛知県．

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目エゾトンボ科＞

タカネトンボ　*Somatochlora uchidai* Förster, 1909

評価理由

本種は 2020 年以降千種区東山で見たと報告を受けたのみである。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

全長 53～65mm。体色は緑金色で光沢がある。近縁種のエゾトンボ、ハネビロエゾトンボとは尾部付属器、産卵弁で判別する。写真では区別できない。

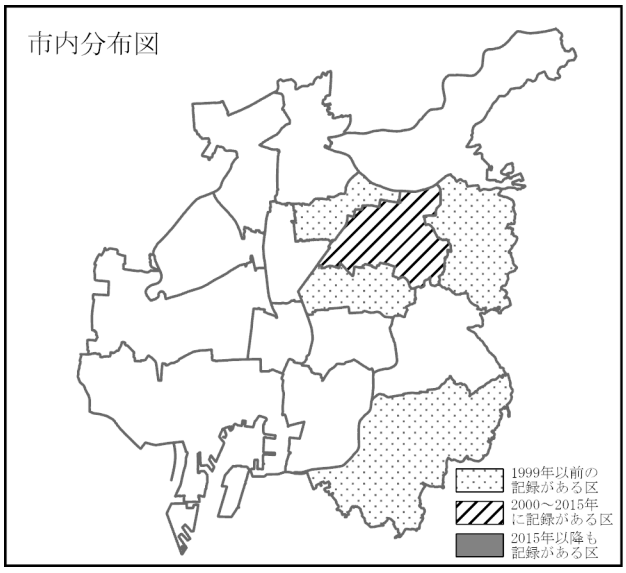
分布の概要

市内：千種区、昭和区、名東区、東区、緑区。

県内：県内の丘陵地から山間の樹林に囲まれた池に分布。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：中国、ロシア。



生息地の環境／生態的特性

主な生息地は山間の樹林に囲まれた暗めの池。

成虫の出現期は 7 月上旬から 10 月中旬。8 月からは池の岸に沿って一定範囲を往復し、縄張りを占有する。

現在の生息状況／減少の要因

社叢林などの樹林の多い暗い池で見られた。都市化の波で暗い池の価値がなくなり、周辺の樹林と共に開発された。平地では全国的に減っている。

保全上の留意点

市では珍しいが県内や全国の山間では今でも見られる。生息地では現状の環境を維持したい。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人．1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫(上)，pp.9-78．愛知県．

（成田茂生）

昆虫類　＜トンボ目トンボ科＞

ナツアカネ　*Sympetrum darwinianum* (Selys, 1883)

評価理由

2000 年以前は普通種であった。国内各地で減少し、本市も例外ではない。最普通種が著しく衰亡した例である。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

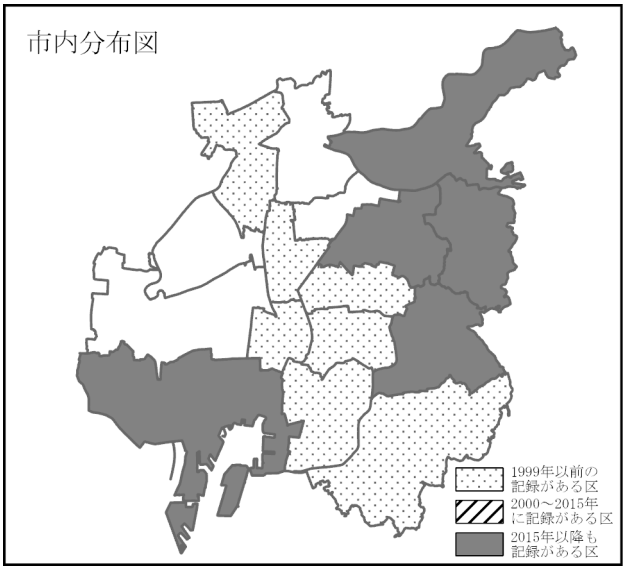
体長は 37mm 内外。中型のアカトンボ。成熟した雄は全身が真っ赤になり「アカトンボ」と呼ぶのにふさわしい種である。



ナツアカネ
千種区平和公園、2019 年 11 月 15 日、髙﨑保郎　採集

分布の概要

市内：千種区、西区、中区、熱田区、昭和区、南区、守山区、名東区、天白区、緑区。
県内：平野から丘陵、低山地に広く分布する。
国内：北海道、本州、四国、九州。
世界：中国、朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

幼虫は平地から丘陵・低山帯の水田を中心に池沼、湿地に生息する。未成熟個体は移動分散性があり市街地のビルの屋上、鉄道の駅のホームの樹木など意外な場所でも散見される。産卵は、飛翔しながらの打空産卵で、アキアカネの打水、打泥産卵とは異なる。。
成虫は 7 月～12 月初旬まで見られる。

現在の生息状況／減少の要因

広域で極めて減少したアカトンボの代表的な種である。2000 年以前市内では、秋になればどこでも見られた最普通種であった。それが減少著しく今では年に数えるほどしか見られない。全国的な水田の減少、水稲栽培法の変化、自然状態の劣化新規農薬の使用の相乗が減少の要因と考えられる。

保全上の留意点

市内および周辺地域の水田、池沼への新規農薬の使用抑制。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
松沢孝晋，2011．名古屋市天白区平針のトンボ類と里山の消失．佳香蝶，63(208): 93-98.
髙崎保郎，2017．名古屋市猪高緑地の蜻蛉と蝶．なごやの生物多様性，4: 89-126.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目トンボ科＞

マイコアカネ　*Sympetrum kunckeli* (Selys, 1884)

評価理由

2000 年以降減少が顕著になり、ほとんど見られなくなった。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

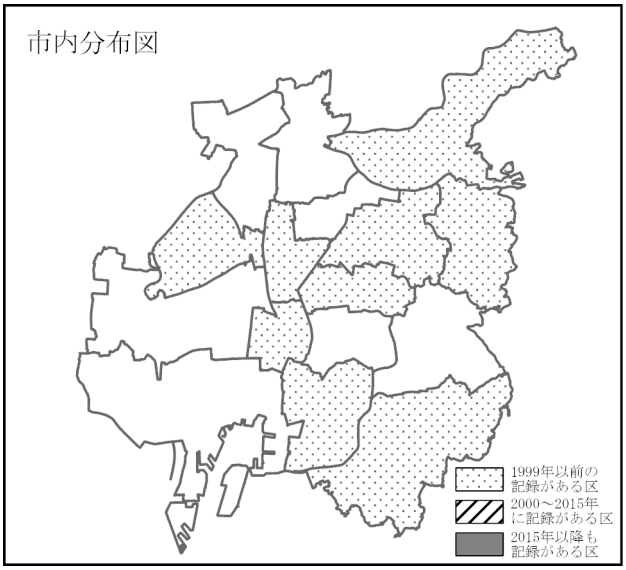
体長は 34mm 内外。小型のアカトンボ。成熟した雄の顔面は青くなる。近似種のマユタテアカネ、ヒメアカネとは胸部の斑紋、雄の尾部付属器、雌の産卵弁で区別する。



マイコアカネ　雌
弥冨市上野町日光川下流浄水センター、2018 年 8 月 17 日、
横地悦典　撮影

分布の概要

市内：千種区、中村区、中区、熱田区、昭和区、南区、守山区、名東区、緑区で記録されている。
県内：平野から丘陵に分布する。
国内：北海道、本州、四国、九州。
世界：朝鮮半島、中国、ロシア（極東）。



生息地の環境／生態的特性

幼虫は平地から丘陵の植生の豊かな池沼に生息する。生息環境の変化に敏感で、周囲の樹林の伐採で姿を消してしまうこともある。人間に対する警戒心も強い。
出現期は 7 月～10 月。

現在の生息状況／減少の要因

1970 年代までは多産した。1990 年代までは比較的よく見られたが、2000 年以降は急激に減少した。池沼の人工化、水質悪化に伴う水草の消失等確たる原因は明らかではないが、減少は各地で見られる。

保全上の留意点

池沼環境と周辺の二次林の保全。

特記事項

本種の、名称の由来は、雄の顔面が白地に青く美しく舞妓のうなじの白さと化粧の青白さに例えたもの。

関連文献

安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．
安藤　尚，2017．愛知・岐阜両県のマイコアカネ（トンボ目）衰退の記録．佳香蝶，69(269): 1-9.
髙崎保郎，2017．名古屋市猪高緑地の蜻蛉と蝶．なごやの生物多様性，4: 89-126.

（髙崎保郎）

昆虫類　＜トンボ目トンボ科＞

ハッチョウトンボ　*Nannophya pygmaea* Rambur, 1842

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

種としてはむしろ普通種で、明るい湿地依存の指標としての意義が大きい。然し市内に限っていえば、本種の残存している湿地は極く僅かでその存続が危ぶまれる。

形態

体長は 19mm 内外。雄は成熟すると真赤になる。雌は黄色、茶色、黒色の斑模様。極く稀に黒化傾向を示す個体が発見される。幼虫は終令で 9mm 前後の極く小型で太短い体形。



ハッチョウトンボ　雄
守山区上志段味東谷、2013 年 6 月 5 日、髙﨑保郎　撮影

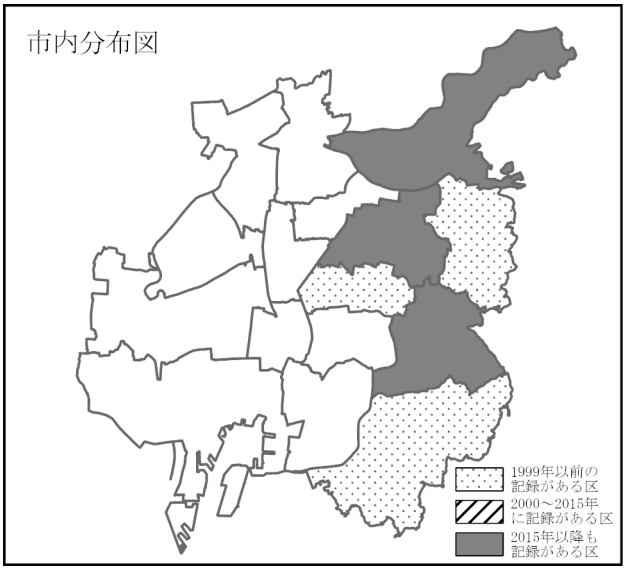
分布の概要

市内：千種区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

県内：県内全域の主に丘陵から低山地にかけて。

国内：本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、台湾、中国、東南アジア、オセアニアに分布する。



生息地の環境／生態的特性

平地から低山地にかけ広く分布するが、市周辺では尾張東部丘陵地帯特有の地層により生じた湧水湿地（低湿地）群に多産する。平らな大きい湿地、池頭流入部の湿地、斜面崩壊型湿地やその下部に生じた湿地、初期の廃田などいろいろな形の湿地に生息するが、水深が極く浅く、水域に生ずる湿性植物の丈が低く、日当たりが良いことが条件である。

成虫は常に湿地上や周囲の草むらで見られることから、発生場所から遠く離れないと一般に解説されることが多いが、かなりの移動分散力を有し、最大 1.5km 程移動したことがマーキングにより確認されている。成虫の出現期は 5 月下旬～9 月上旬。

現在の生息状況／減少の要因

市東部に隣接する尾張東部丘陵地帯西端に位置する長久手市や瀬戸市海上の森などには多産するが、市内で自然状態で残存するのは、守山区上志段味東谷の一、二の湿地位になったと見られる。同区大森八竜湿地は近年姿を消していたが、2013 年少数が再確認されている。人為管理下では千種区名古屋大学博物館野外観察園、天白区島田緑地などで見られる。これらは自然由来の個体である。名東区明徳公園の湿地は無為に埋め立てられ、同区猪高緑地では水田放棄や植生遷移により本種は消滅した。造成による湿地の消滅と、高茎草本の繁茂等環境変化などによる、生息可能な湿地自体の衰失が減少の主要因である。

保全上の留意点

湿地本体とそれを涵養する周辺林地の保全である。生息可能な状態を維持するためのある程度の人為管理も場合により必要であろう。

特記事項

千種区東山植物園に造成された斜面湿地で見られる本種は、出自不明の移入由来であり、真の東山公園産ではない。

関連文献

安藤　尚，2008．トンボ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp.350-361．同　目録，pp.94-98．名古屋市．
安藤　尚・山本悠紀夫・髙崎保郎・相田正人，1990．愛知県のトンボ目．愛知県の昆虫（上），pp.9-78．愛知県．

（髙崎保郎）

昆虫類　＜ナナフシ目ナナフシモドキ科＞

ナナフシモドキ　*Ramulus mikado* (Rehn, 1904)

評価理由

樹上性。市内の雑木林が急速に失われつつあり、本種の生息地も減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

無翅。単為生殖。触角は短く前脚腿節の半分ほど。体は細い枝状。全体に黒褐色～灰褐色あるいは緑色。複眼間には黒色条がありその両端には角状の突起がある。

体長雌 74～100mm。



瀬戸市大松、1991 年 8 月 1 日、岡田正哉　撮影

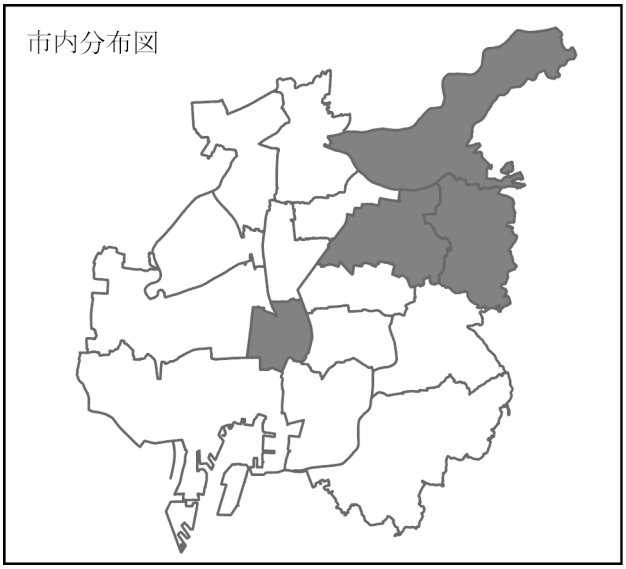
分布の概要

市内：千種区、熱田区、守山区。

県内：平地から山地に広く分布する。豊根村、稲武町、豊田市（旭町、足助町、藤岡町）、岡崎市（額田町）、作手村、犬山市、瀬戸市、長久手市、豊橋市、小牧市。

国内：本州、四国、九州（対馬を含む）など。

世界：韓国、中国。



生息地の環境／生態的特性

樹上性。広葉樹林とその周縁で見られる。局所的に生息密度の高い所がある。食性は広いが、主にサクラ類のほか、カシ・コナラ類を好む。社寺林など比較的小規模な樹林でも生息できる。

現在の生息状況／減少の要因

既知産地の千種区月ヶ丘（住宅地にある）、熱田区熱田神宮は孤立した生息地となっている。本種は無翅で移動能力は乏しく、他所から自発的な移入は望めない。このような分断された生息地での存続は困難と思われる。千種区東山公園での生息も確認された。今回の調査で、守山区東谷山麓（2013.6.3）における本種の生息が確認された。

保全上の留意点

樹林の伐採を最小限に止めて、マント群落や低木を残すこと。また、更なる土地造成を控えること。

関連文献

岡田正哉，1993．ナナフシモドキ名古屋で採集される．佳香蝶，45(176): 58.
岡田正哉，1990．愛知県のナナフシ目．愛知県の昆虫（上），pp.95-96．愛知県.
岡田正哉，1999．ナナフシのすべて．トンボ出版，大阪.
日浦　勇，1993．ナナフシモドキ．原色日本昆虫図鑑（下），p.54．保育社，大阪.
市川顕彦，2014．日本産直翅類のカタログ Ver. 10．日本直翅学会，大阪.

（岡田正哉、水野利彦、戸田尚希）

昆虫類　＜ナナフシ目トビナナフシ科＞

トゲナナフシ　*Neohirasea japonica* (de Haan, 1842)

評価理由

広葉樹林林床やその周辺の下草の多い湿った環境を好む。市内でのこうした環境は開発や過度の整備のため乾燥化が進み、本種の生存が困難になりつつある。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

無翅。単為生殖。触角は前脚より長い。体は太い棒状で全体に淡黄褐色～黒褐色で稀に白化の強い個体もある。全身に鋭い刺状突起がある。

体長は雌 57～75mm。



守山区大森、1989 年 11 月、岡田正哉　撮影

分布の概要

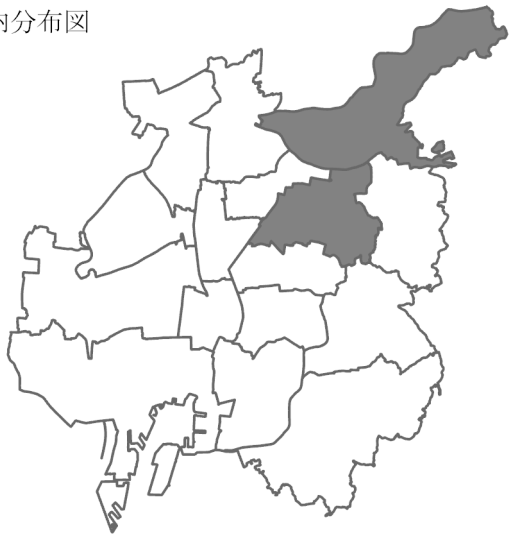
市内：千種区，守山区。

県内：瀬戸市、豊田市、長久手市、東栄町。

国内：本州、四国、九州、伊豆諸島、奄美大島、沖縄本島など。

世界：台湾北部、中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

地上徘徊性。広葉樹林林床やその周縁の下草の多い日陰気味の湿潤な環境を好む。若令の幼虫ほど 1 か所あたりの生息密度が高い傾向にある。秋期にはひなたに出ている個体がよく見られるようになる。

食性は広く 59 種類以上の広葉樹や草が食植物として知られている。

現在の生息状況／減少の要因

既知産地の守山区大森周辺は、開発が進み生息環境は狭められつつある。ただし一部には湿潤な雑木林が残されており、また近くには神社や寺の林も残されているので、少なくとも当分の間は本種の存続は可能であろう。

保全上の留意点

広葉樹林とその周縁の湿潤なマント群落や草地を保持すること。過度の草刈りや整備は林床やマント群落の乾燥が進むことになるので注意が必要。

関連文献

岡田正哉，1990．トゲナナフシ名古屋市に産す．佳香蝶，41(161): 59.
岡田正哉，1990．愛知県のナナフシ目．愛知県の昆虫（上），pp.95-96．愛知県.
岡田正哉，1999．ナナフシのすべて．トンボ出版，大阪市.
日浦　勇，1993．トゲナナフシ．原色日本昆虫図鑑（下），p.55．保育社，大阪.
市川顕彦，2014．日本産直翅類のカタログ Ver. 10．日本直翅学会，大阪.

（岡田正哉、水野利彦、戸田尚希）

昆虫類　＜カマキリ目ハナカマキリ科＞

ヒメカマキリ　*Acromantis japonica* Westwood, 1889

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

樹上性。開発などによる雑木林の減少と共に生息環境は悪化しつつある。

本種は環境変化に対して適応性が低いためか、住宅地や公園など人間の生活環境に近い生息地の記録は少ない。今後、ますます雑木林が減少していくと生息数の減少が懸念される。

形態

小型種。有翅。他のカマキリ類からは、前脚脛節の外縁刺が横向きに伏して相互に密着していること、後脚腿節には葉片状の付属物があることなどから区別できる。

体長（翅端まで）雄、雌とも 25～32mm。



守山区東谷山、1989 年 10 月、岡田正哉　撮影

分布の概要

市内：守山区。

県内：知多半島を含む平地～山地に広く分布する。豊根村、旧額田町、豊田市（木瀬町、足助町、旭町など）、瀬戸市、春日井市、犬山市、南知多町、美浜町など。

国内：本州、四国、九州、南西諸島など。

世界：台湾。



生息地の環境／生態的特性

樹上性。広葉樹林やそのマント群落に見られる。成虫の走光性は比較的強く、店頭の灯火や自販機のあかりなどにもよく飛来する。その際上位の捕食者（ヤモリやカエルなど）に二次的に捕食されることがある。本種保護の際の考慮すべき点の一つと思われる。

卵（卵鞘）は樹幹のほか、林床の石や倒木の下側などに産みつけられることが多い。

現在の生息状況／減少の要因

既知産地の守山区東谷山はその中腹～山頂にかけ雑木林が残されており、この状況が続く限り本種の存続は可能であろう。

保全上の留意点

生息環境である雑木林を残すこと。林床の過度の清掃・整備は産卵場所を奪うことにもなるので適当に控えること。産地周辺の夜間の道路照明は、昆虫が光源の存在を感じにくい LED を使用することが望ましい。

特記事項

近似種サツマヒメカマキリとの区別点が明確になり、本種は夏から秋に出現し卵越冬することの他、頭部や後腿節の突起の形状、前翅の翅脈の違いが指摘されている。名古屋市には両種が生息する可能性がある。

関連文献

岡田正哉，2000．カマキリのすべて．トンボ出版，大阪．
岡田正哉，1990．愛知県のカマキリ目．愛知県の昆虫（上），pp.82-83．愛知県．
日浦　勇，1993．ヒメカマキリ科．原色日本昆虫図鑑（下），p.48．保育社，大阪．
吉鶴靖則，2012．豊田市のヒナカマキリの 2 つの記録とサツマヒメカマキリの記録について．佳香蝶，64(251): 57-60.
市川顕彦，2014．日本産直翅類のカタログ Ver. 10．日本直翅学会，大阪．

（岡田正哉、水野利彦）

昆虫類　＜ゴキブリ目オオゴキブリ科＞

オオゴキブリ　*Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki, 1906)

評価理由

主として、平野部の遷移の進んだ照葉樹林の太い朽ち木中に生息している。朽ち木の木質部を食い、ほぼ一生を朽ち木の中で過ごす。そのため、移動力が弱く分布域の拡大が困難であるため，開発による生息環境の変化や消失が個体数の減少につながる可能性が高い。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長は 40～45mm で、体は太く厚く、体色は光沢のある漆黒色である。



熱田区熱田神宮、2013 年 12 月 8 日、水野利彦　撮影

分布の概要

市内：熱田区熱田神宮と千種区東山公園に記録がある。

県内：全体に分布しているが、三河地方を中心に多く、河川に沿って内陸部に広がっている。

国内：照葉樹林が分布する本州（関東以西）、四国、九州のほか、佐渡島、隠岐島、対馬、屋久島から沖縄県に分布する。八重山諸島には亜種ヤエヤマオオゴキブリが分布する。

世界：台湾、中国。



生息地の環境／生態的特性

市内に残された照葉樹林内の林床にある太い朽ち木に生息している。胎生である。朽ち木中に坑道を作って成虫と幼虫が群生している。

現在の生息状況／減少の要因

熱田神宮の神域では生息を確認しているが、かつて記録された千種区の東山公園・平和公園ではもう見られなくなった。施設の建設や林床の乾燥などが原因と考えられる。県内では温暖化の影響か、森林育成の結果かは不明であるが、分布域が拡大している。

保全上の留意点

現在残されている照葉樹林を保存し、太く湿潤な朽ち木の残る林床の環境を維持することが必要である。森林育成も有効な手段の一つと考えられる。

関連文献

朝比奈正二郎，1988．日本産ゴキブリ分類ノート，XⅦ．オオゴキブリ族の種類．衛生動物，39(1): 53-62.
佐藤正孝，1978．熱田神宮林の昆虫類．熱田神宮林苑保護委員会調査報告書，pp.93-110.
日浦　勇ほか，1977．原色日本昆虫図鑑（下），p.52.
市川顕彦，2014．日本産直翅類のカタログ Ver. 10．日本直翅学会，大阪.

（佐藤正孝、水野利彦）

昆虫類　＜バッタ目コロギス科＞

コロギス　*Prosopogryllacris japonica* (Matsumura et Shiraki, 1908)

評価理由

本種は雑木林に生息する大型捕食性昆虫として、市内ではハネナシコロギスを凌ぐ最上位の昆虫である。食物連鎖上位の昆虫であるが、個体数は少なく雑木林の環境変化の影響を受けやすい。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

有翅。頭は大きく体はズングリとしており一種の威圧感がある。体と脚は淡緑色で、畳んだ翅の背面は褐色。雌の腹端には 20～25mm の刀状の産卵器がある。

体長（翅端まで）は雄、雌とも 27～33mm。



豊田市猿投山、1985 年 7 月、岡田正哉　撮影

分布の概要

市内：千種区、守山区。

県内：渥美半島、知多半島を含む各地に広く分布する。犬山市、瀬戸市、蒲郡市、豊田市（足助町、稲武町、旭町、藤岡町、小原町）、岡崎市、田原市（渥美町）、設楽町、美浜町など。

国内：本州、四国、九州。

世界：韓国。



生息地の環境／生態的特性

樹上性。広葉樹林に生息。昆虫の内ではカマキリ類と並ぶ上位捕食者の内の 1 種。近似種のハネナシコロギスよりは大型だが個体数は少ない。大型であるため、環境の変化に敏感であると思われる。夜行性であり、昼間は適当な植物の葉を綴って造った‘巣’に隠れている。主に昆虫類を捕食するが、果実や樹液なども食する。脅すと翅を広げて威嚇してくる。

現在の生息状況／減少の要因

守山区の生息地は松坂町と東谷山である。松阪町は小幡緑地に隣接。同緑地の一部には豊かな雑木林が残されている。東谷山もその中腹～山頂にかけては、県有林として良好な雑木林が見られる。両所とも過度の整備が行われない限り本種の存続は問題ないであろう。

千種区の生息地は平和公園。雑木林は豊かであるが、最近一部に広い芝地が造成され本種にとっては生息地が分断されることになった。しかしこれ以上の伐採・造成がない限り本種の存続は可能であろう。千種区東山公園でも生息が確認されている。

保全上の留意点

雑木林の保存と共に本種の餌となる各種昆虫類も繁殖できるよう、下草などは適当に残し、林床や林縁の過度の整備・清掃は控えること。また、本種に限らず、雑木林は道や芝地などで寸断することなく、樹上性の種類が自由に渡り歩けるよう配慮すること。

関連文献

岡田正哉，1991．愛知県の直翅目（2）．愛知県の昆虫（下），pp.5-20．愛知県．
日浦　勇，1993．コロギス．原色日本昆虫図鑑（下），p.58．保育社，大阪．
日本直翅学会（編），2006．バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑，p.5,p.358．北海道大学出版会，北海道．

（岡田正哉、水野利彦）

昆虫類　＜バッタ目コロギス科＞

ハネナシコロギス　*Nippancistroger testaceus* (Matsumura et Shiraki, 1908)

評価理由

本種は雑木林に生息する昆虫類の中での上位捕食者。市内での雑木林の減少に伴い本種の生息環境は狭められつつあり、生息地によっては個体数も減少に向かっている。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

無翅。ずんぐりした体型。全体にツヤのある黒褐色で頭・胸部背面と脚は黄褐色。まれに黒褐色部がほとんど消失した個体もある。雌の腹端には 7～8mm のナギナタ状の産卵器がある。

体長（腹部まで）は雄、雌とも 13～18mm。



豊田市猿投山鈴ヶ滝、1982 年 6 月、岡田正哉　撮影

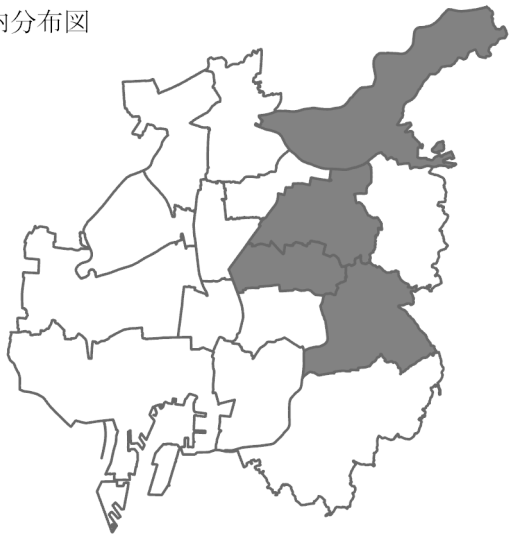
分布の概要

市内：昭和区、千種区、天白区、守山区。

県内：渥美半島、知多半島を含め各地に広く分布する。犬山市、瀬戸市、常滑市、蒲郡市、田原市（渥美町）、知多市、美浜町、南知多町、設楽町、豊田市（稲武町、藤岡町、小原町、足助町、旭町、下山町、御作町など）旧作手村（作手地区、豊根地区）など。

国内：北海道、本州、四国、九州、南西諸島など。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

広葉樹林に生息する捕食性の種類。樹上性。昼間は各種植物の葉を綴った巣に潜み、夜間に活動する。複数の幼虫が個々に巣を形成し、集まって生活することがある。行動は敏捷で鱗翅類の幼虫をはじめとする小型の昆虫類を捕食する。樹液や果実などにも来る。

現在の生息状況／減少の要因

昭和区（八事）の生息地は宅地開発が進み樹林が減少しつつあり環境は悪化している。守山区（東谷山）は生息地の山の中腹～山頂にかけては雑木林が十分に残されており、この状態が維持されるかぎり本種の存続は可能であろう。

保全上の留意点

雑木林の保存と共に本種の餌となる各種昆虫類も繁殖できるよう、下草の過度の刈り込みや樹木の過度な間引き・枝打ちは控えること。

関連文献

岡田正哉，1991．愛知県の直翅目（2）．愛知県の昆虫（下），pp.5-20．愛知県．
日浦　勇，1993．ハネナシコロギス．原色日本昆虫図鑑（下），p.58．保育社，大阪．
日本直翅学会（編），2006．バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑，p.10,pp.359-360．北海道大学出版会，北海道．

（岡田正哉、水野利彦）

昆虫類　＜バッタ目バッタ科＞

ヤマトフキバッタ　*Parapodisma setouchiensis* Inoue, 1979

評価理由

翅が短く飛べないため生息地間の交流は多少とも乏しいと思われる。県内に点々と分布するが翅の長さなどに地域差が見られる。市内の分布は限られており、個体数も少ない。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

中型種。短翅。翅頂は雄 7～8mm、雌 11～12mm。全体に草緑色。翅は褐色で、腹部背面で左右が接する。翅の長さなどは生息地により差がある。後脚下内側は赤紅色。

体長（腹端まで）は、雄 24～27mm、雌 32～36mm。



守山区東谷山、1994 年 8 月 3 日、岡田正哉　撮影

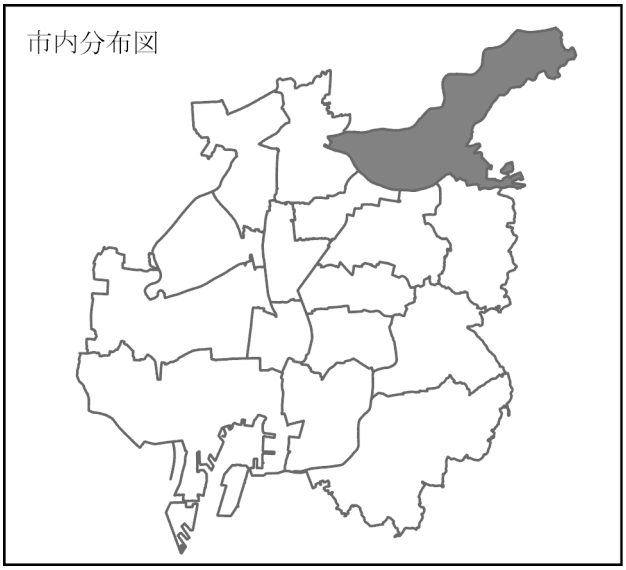
分布の概要

市内：守山区。

県内：知多半島を含む平地～山地に分布する。豊田市（稲武町、足助町、旭町、下山町、小原町）、瀬戸市、南知多町・美浜町など。

国内：本州、伊豆諸島など。

世界：韓国（済州島）、中国？



生息地の環境／生態的特性

樹林性。広葉樹林周縁やそのマント群落に見られる。地中や倒木に産卵するが、湿った立枯木にも産卵することがある。

現在の生息状況／減少の要因

既知産地は守山区東谷山。山麓の用水路工事や公園化などはあるが、本種の発見された中腹～山頂部の生息環境は残されている。一応本種の存続は可能であろう。ただし現在の生息密度は低い。

保全上の留意点

現在ある広葉樹林を残すこと。クズのような大型の葉の上で休んでいることが多いのでこうした植物も適度に残すこと。

関連文献

岡田正哉，1990．愛知県の直翅目（1）．愛知県の昆虫（上）．pp.87-93．愛知県．

Tominaga, O., S. Y. Storozhenko and Y. Kano, 1996. Two new species and a new subspecies of the genus *Parapodisma* (Orthoptera, Acrididae) from Japan. Tettigonia, 1(1): 1-23.

日本直翅学会（編），2006．バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑，pp.248-249,p.522．北海道大学出版会，北海道．

（岡田正哉、水野利彦）

昆虫類　＜カメムシ目セミ科＞

ハルゼミ　*Terpnosia vacua* (Olivier, 1790)

評価理由

主として平地から丘陵地のマツ林に発生することから、宅地造成により生息地が減少し、それとともに個体数も少なくなっている。また、マツ枯れによる影響も見られる。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長は雄で 26～31mm、雌で 22～26mm と雄の方がやや大型である。

体色は黒みが強く、灰白色の鱗毛が密生する。雄の腹部は袋状に細長いが、雌では短く、産卵管が突出する。



矢崎充彦　撮影

分布の概要

市内：主として東部丘陵帯であるが、正式な記録は非常に少ない。

県内：県内ほぼ全域。

国内：本州（関東以西）、四国、九州。

世界：中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

主として平地から丘陵地にかけて、マツ林に限って生息する。

県内のセミ類ではもっとも早く、4 月下旬頃から出現し、6 月上旬頃まで見られる。1 頭が鳴き始めると、他の個体も同調して合唱する習性がある。

現在の生息状況／減少の要因

市内東部の丘陵帯が主な生息地であったが、以前と比べかなり減少している。

宅地造成など樹林地の伐採による生息地の消失が大きな減少要因である。

保全上の留意点

現存するマツ林の環境維持と、マツ枯れで荒廃した樹林で、マツ類の植樹を進め植生回復に努めることが必要である。

関連文献

林　正美，1990．日本産セミの分布調査報告（2）．日本セミの会会報，9(1-3): 1-45.

新修名古屋市史資料編編集委員会編，2008．第 8 節昆虫類 5 カメムシ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.161-165．名古屋市.

（矢崎充彦）

昆虫類　＜カメムシ目タイコウチ科＞

タイコウチ　*Laccotrephes japonensis* Scott, 1874

評価理由

県内に広く分布するが、ため池の埋め立てなど止水環境の悪化により、特に平野部では個体数が減少していると考えられる。

市内における正式な記録も非常に少ない。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長は 30～38mm、体色は濃褐色で、前脚が鎌状を呈し、腿節基部付近に棘を有する。

呼吸管が長く、体長と同じくらいの長さがある。



矢崎充彦　撮影

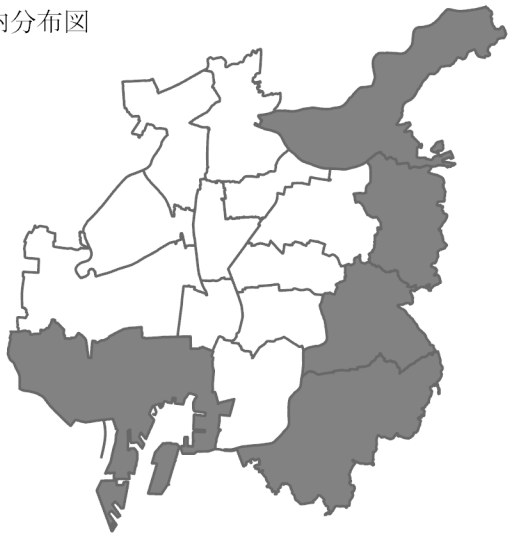
分布の概要

市内：港区、守山区、緑区、名東区、天白区に記録がある。

県内：全域に分布するが、西三河・尾張地方における記録が多い。

国内：本州、隠岐、四国、九州、対馬、奄美大島、徳之島、沖縄島。

世界：中国、朝鮮半島、台湾、マレーシア。



生息地の環境／生態的特性

水草の豊富なため池、休耕田などの浅い水たまりなどに生息するが、河川の淀みにも見られる。

鎌状を呈した前脚でヤゴやオタマジャクシなどを捕らえ、体液を吸う。

現在の生息状況／減少の要因

正式な記録は非常に少なく、近年の確実な生息情報は得られていない。県内でも最近見られる機会が減っている。

ため池の改修や埋め立て、水質悪化などによる生息環境悪化で減少している。

保全上の留意点

ヤゴやオタマジャクシなど他の水生動物を餌とする捕食者であるため、これら水生動物が豊富に生息する環境を維持する必要がある。

現存するため池の水質悪化を防ぐと共に、水生動物の天敵であるオオクチバス（ブラックバス）などの外来種を駆除することも重要である。

引用文献

堀　義宏・横井寛昭，1991．都市環境下の昆虫相について（2）　名古屋市の異翅目．名古屋市衛生研究所報，(37): 93-100.

（矢崎充彦）

昆虫類　＜カメムシ目タイコウチ科＞

ミズカマキリ　*Ranatra chinensis* Mayr, 1865

評価理由

県内に広く分布するが、ため池の埋め立てなど止水環境の悪化により、特に平野部では個体数が減少していると考えられる。

市内における正式な記録は非常に少ないが、近年の調査で港区、南区で確認された（なごや生物多様性保全活動協議会，2019）。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長は 40～45mm、体は細長く前脚が鎌状を呈し、腿節中央付近に棘を有する。

呼吸管が長く、体長と同じくらいの長さがある。



矢崎充彦　撮影

分布の概要

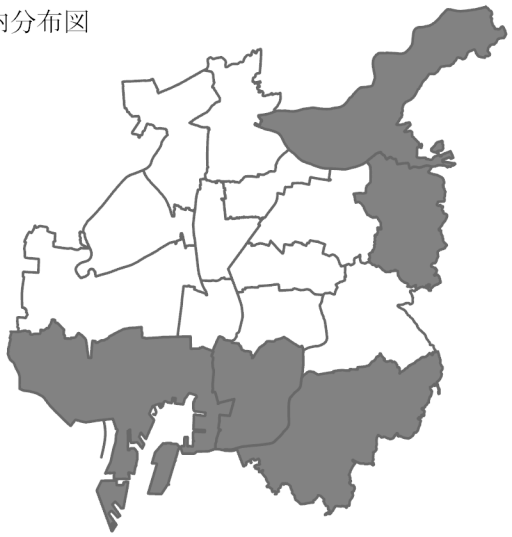
市内：港区、南区、守山区、緑区、名東区に記録がある。

県内：新城市、豊橋市、豊川市、豊田市、岡崎市、安城市、西尾市など。

国内：北海道、本州、四国、九州、対馬、沖縄島。

世界：ロシア極東（沿海州）、中国、朝鮮半島。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

水草の豊富なため池、休耕田などの浅い水たまりなどでよく見られるが、増水後の河川敷に形成された一時的な水たまりでも見られる。

鎌状を呈した前脚でヤゴやオタマジャクシなどを捕らえ、体液を吸う。

現在の生息状況／減少の要因

タイコウチと同様、平野部では近年確認されることが少なくなっている。

ため池の改修や埋め立て、水質悪化などによる生息環境悪化で減少している。

保全上の留意点

ヤゴやオタマジャクシなど他の水生動物を餌とする捕食者であるため、これら水生動物が豊富に生息する環境を維持する必要がある。

現存するため池の水質悪化を防ぐと共に、水生動物の天敵であるオオクチバス（ブラックバス）などの外来種を駆除することも重要である。

引用文献

堀　義宏・横井寛昭，1991．都市環境下の昆虫相について（2）　名古屋市の異翅目．名古屋市衛生研究所報，(37): 93-100.

なごや生物多様性保全活動協議会，2019．平成 30 年度なごや生物多様性保全活動協議会活動報告書，74pp．なごや生物多様性保全活動協議会.

（矢崎充彦、澤田宗一郎）

昆虫類　＜カメムシ目ツチカメムシ科＞

シロヘリツチカメムシ　*Canthophorus niveimarginatus* Scott, 1874

評価理由

全国的にも産地が限定され、草原環境の減少により、個体数が少なくなっていると考えられる。

市内では名古屋城で確認された古い記録があるほか、守山区、北区などで確認された。ただし分布は局所的である。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長は 6～8mm の中型のツチカメムシである。体背面は密に点刻されるが、前胸背中央より前方に平滑部がある。

体色は光沢のある藍色で、側縁が狭く白色を呈する。



矢崎充彦　撮影

分布の概要

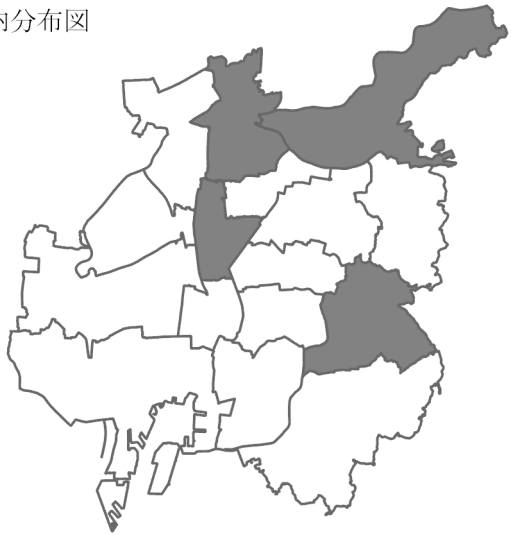
市内：中区、守山区、北区、天白区で確認されている。

県内：豊田市、日進市、豊明市など。

国内：本州、四国、九州。

世界：ロシア、カザフスタン、モンゴル、中国、朝鮮半島、インド、ベトナム。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

定期的な草刈りで適度に維持管理された河川敷の堤防、農業用ため池の堰堤付近などに生息する。

チガヤやススキなどイネ科植物に半寄生するカナビキソウが寄主植物として知られ、雌成虫が卵塊を保護する習性がある。

現在の生息状況／減少の要因

庄内川・矢田川・植田川の河川敷に生息することが確認されたが、分布は局地的。

河川改修、宅地造成などによる草原環境の消失で、本種の生息に適した草地環境が減少している。

保全上の留意点

寄主植物であるカナビキソウは、一般に日当たりの良い草地に生育する植物であるため、定期的に草刈りを実施し、明るい草原環境を維持する必要がある。

特記事項

ツチカメムシ科の種は、死後に脂が出やすく、このため近縁種であるミツボシツチカメムシ *Adomerus triguttulus* (Motschulsky) と誤認されることが非常に多い（ミツボシツチカメムシの小楯板や前翅の白紋が無いように見えるため）。豊田市から多数の記録があるが、矢作川の記録以外はすべて誤同定である。

引用文献

荻野欣三・友松和義，1954．名古屋附近のカメムシ目録，36pp．　東海生物研究会．

（矢崎充彦）

昆虫類　＜コウチュウ目コガシラミズムシ科＞

マダラコガシラミズムシ　*Haliplus* (*Liaphlus*) *sharpi* Wehncke, 1880

評価理由

平野部から丘陵地にかけて生息したと推測されるが、平野部の多様な水域の減少で生息地が激減したと考えられ、近年の生息情報を持たない。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

体長 3.3～3.8mm。上翅の黒紋は明瞭で、基部には横紋がある。側方の円紋および中央紋より斜め前方の紋が明瞭である。



三重県鳥羽市、2010 年 4 月 18 日、戸田尚希　撮影

分布の概要

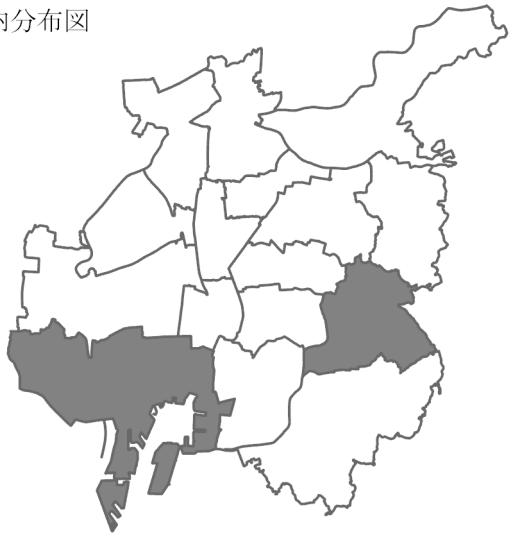
市内：天白区、港区福田川（名古屋市環境保全局，1996）。

県内：1961 年に安城市から記録されている。現在は、豊明市、豊橋市で生息が確認されている。

国内：本州、四国、九州。

世界：中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

平野部の止水域に生息し、成長は 5 月～8 月にかけて見られる。

現在の生息状況／減少の要因

宅地開発、水田の減少、圃場整備などにより生息地が減少、また農薬散布や生活汚水により環境を受けたと考えられる。

保全上の留意点

現在ある自然環境に近い池や水辺環境を保全することが、将来的な回復の可能性を残すことになると思われる。

引用文献

名古屋市環境保全局，1996．平成 8 年版　名古屋市環境白書（資料編）．名古屋市，名古屋．

関連文献

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　–レッドデータブックあいち 2009–　動物編，p.293．同県環境部自然保護課．
神谷一男，1961．東海地方の珍しい昆虫．名古屋鉄道刊，名古屋．
中根猛彦，1985．日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討．北九州の昆虫，32(2): 61-67.
佐藤正孝，1984．日本産水棲甲虫の分類学的覚え書き，Ⅰ．甲虫ニュース，(65): 1-4.
佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），愛知県，pp.200-477.
戸田尚希・長谷川道明・市川靖浩・池竹弘旭・蟹江　昇，2020．愛知県の甲虫目録 6．佳香蝶，72(282): 54-60.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目コツブゲンゴロウ科＞

ムツボシツヤコブゲンゴロウ　*Canthydrus politus* (Sharp, 1873)

評価理由

水草の繁った良好な自然環境に生息する種であるが、生息場所の消失とともに姿を消し、長らく市内からの生息情報が途絶えていたが，近年確認が相次いでいる。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

形態

体型は逆卵形。背面は黄～オレンジ色で強い光沢があり、上翅の肩から下方に 1 紋、その内方に中央前まで広がる 1 紋、中央後ろ会合部に横長の 1 紋があるが、変化がある。体面下は赤黄色。

体長は 2.4～2.6mm。



採集地等不明

分布の概要

市内：港区土古町（穂積・佐藤，1957）。

県内：他に知多市、美浜町、豊橋市で記録されている。

国内：本州、四国、九州。

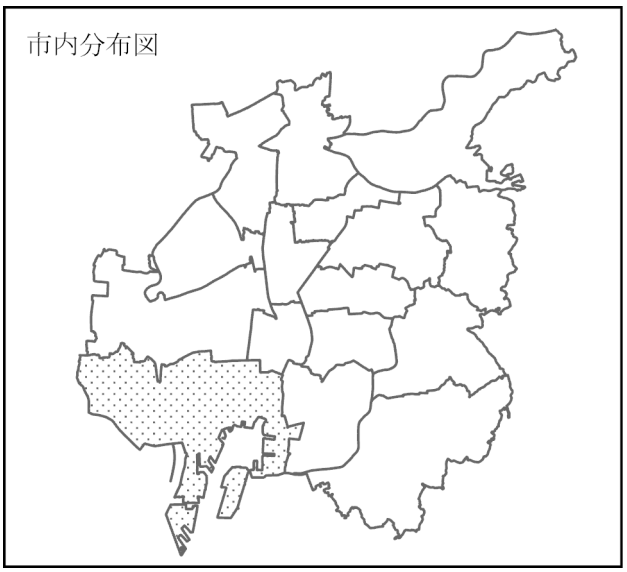
世界：中国。

生息地の環境／生態的特性

水草の茂る池、沼に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

市内の記録は、いずれも古いもので、かつて生息確認がされていた場所に現在も生息する可能性は極めて低いと思われる。しかし、県下にはまだ生息している地域も残されていることから、再発見の可能性がないわけではない。池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅および農薬、生活汚水などによる水質の悪化が市内での減少の原因であると考えられる。



保全上の留意点

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

引用文献

穂積俊文・佐藤正孝，1957. 東海甲虫誌（第 3 報）. 佳香蝶，9(31): 1-10.

戸田 尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024. 愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科). 佳香蝶，76(300): 54-99.

（長谷川道明、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目コツブゲンゴロウ科＞

キボシチビコツブゲンゴロウ　*Neohydrocoptus bivittis* (Motschulsky, 1859)

評価理由

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

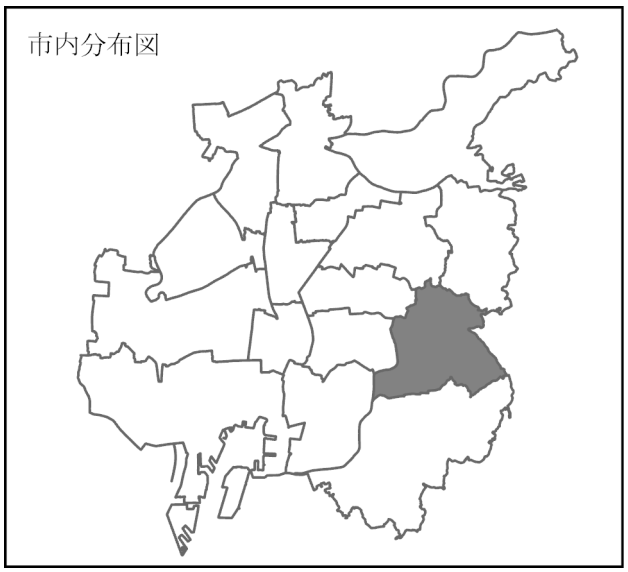
体長 3.0～3.4mm。体型はやや長い逆卵形。背面は微細印刻を持ち強い光沢がある。頭部、前胸は淡赤褐色。



天白区、2011 年 9 月 26 日、戸田尚希　採集

分布の概要

市内：天白区（池竹，2012）。
県内：日進市（戸田ほか，2013）、長久手町（戸田ほか，2013）、美浜町（佐藤，1990）。
国内：本州、九州。
世界：台湾、中国、タイ、ミャンマー、ベトナム、インド。



生息地の環境／生態的特性

本種は、ヨシやガマなどの抽水植物が豊富な池に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

現在、発見された溜池は、池干しが行われた後、開放水面が減少し簡単には本種の確認ができない状態にある。安易な池干しは、本種などの昆虫の極端な減少を招く。

保全上の留意点

市内のため池では、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

特記事項

佐藤（1984）によって 1962 年と 1963 年に知多半島の Gonodo-ike から得られた個体が日本初記録として報告された。その後の記録が無かったが、愛知県からは 48 年ぶりに名古屋市で確認された（池竹，2012）。

引用文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上）. pp.204-231. 愛知県.
池竹弘旭，2012. キボシチビコツブゲンゴロウを愛知県名古屋市で採集. ホシザキグリーン財団研究報告，(15): 10.
戸田尚希・蟹江　昇，2013. 愛知県から採集された甲虫Ⅱ. 佳香蝶，65(256): 53-56.

関連文献

佐藤正孝，1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書Ⅰ. 甲虫ニュース，(65): 1-4.
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編），1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.33,p.182. 保育社，大阪.
森　正人・北山　昭，2002. 改訂版　図説　日本のゲンゴロウ. 文一総合出版，東京.
戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024. 愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科). 佳香蝶，76(300): 54-99.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

サメハダマルケシゲンゴロウ　*Hydrovatus stridulus* Biström, 1997

評価理由

ヨシの生える良好なため池等に生息するが、近年は水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が少なくなっている。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

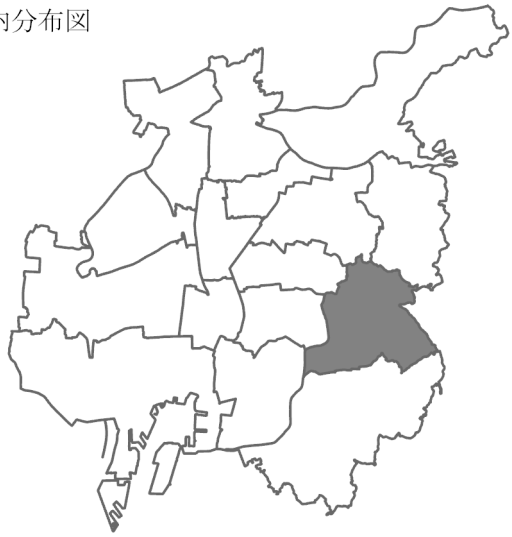
体長 2 mm 内外。体型は卵形で、上翅の先端部は少し尖る。背面の膨隆は強く、光沢は同所的に生息する可能性の高い近似種のコマルケシゲンゴロウやマルケシゲンゴロウよりも鈍い。同定には注意が必要である。



天白区、2017 年 8 月 3 日、戸田尚希　採集

分布の概要

市内：天白区。
県内：日進市。
国内：福井県、 石川県、岡山県、埼玉県、奄美大島，沖縄島、石垣島、西表島、小浜島， 与那国島に分布する。
世界：台湾、マレーシア、シンガポール、ラオス。



生息地の環境／生態的特性

ため池など。ヨシの茂った深い場所を好む。生息する池でも、浅く水草の繁茂した場所には近似のコマルケシゲンゴロウが生息している。

現在の生息状況／減少の要因

市内で生息が確認されている池は 1 か所のみである。ため池の改修により，護岸や植物の除去が致命的になる。

保全上の留意点

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類駆除を積極的に行うとともに、浸透移行性殺虫剤の使用について規制するなどの生息を圧迫する要因を排除する必要がある。

引用文献

稲畑憲昭，2016．サメハダマルケシゲンゴロウの日本からの初記録．さやばね N.S. No21: 46-47.
渡部晃平・富沢　章・稲畑憲昭，2016．本州におけるサメハダマルケシゲンゴロウの初記録．さやばね N. S. No. 23:　15-16.
渡部晃平・保科英人，2016．福井県におけるサメハダマルケシゲンゴロウの記録と生息地保全に向けた対応．さやばね N.S. No. 24: 33-35. 戸田尚希，2017．サメハダマルケシゲンゴウが愛知県にも分布，佳香蝶，69(271): 47
末長晴輝・渡部晃平・山地治，2017．岡山県におけるサメハダマルケシゲンゴロウとオオマルケシゲンゴロウの初記録，さやばね N. S. No. 28: 51-52.
亀澤　洋・渡部晃平，2018．埼玉県からのサメハダマルケシゲンゴロウの記録とマルケシゲンゴロウの記録抹消，寄せ蛾記 No.170: 39-40.
戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江 昇，2024．愛知県の甲虫目録 1 1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科)．佳香蝶，76(300): 54-99.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゲンゴロウ科＞

マルチビゲンゴロウ　*Leiodytes frontalis* (Sharp, 1884)

評価理由

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	準絶滅危惧

形態

1.5～2.0mm。体型は短卵形で強く膨隆し、特に腹側で顕著。背面は黄赤褐色で強い光沢がある。触覚は基部 3～4 節が黄褐色で先端に向かい暗色になる。上翅は不規則で不明瞭な暗色紋を有する。



守山区、2012 年 6 月 9 日、戸田尚希　採集

分布の概要

市内：守山区（吉鶴ほか，2008）。
県内：日進市、瀬戸市（佐藤，1990）。
国内：本州、四国、九州。
世界：日本固有種。

生息地の環境／生態的特性

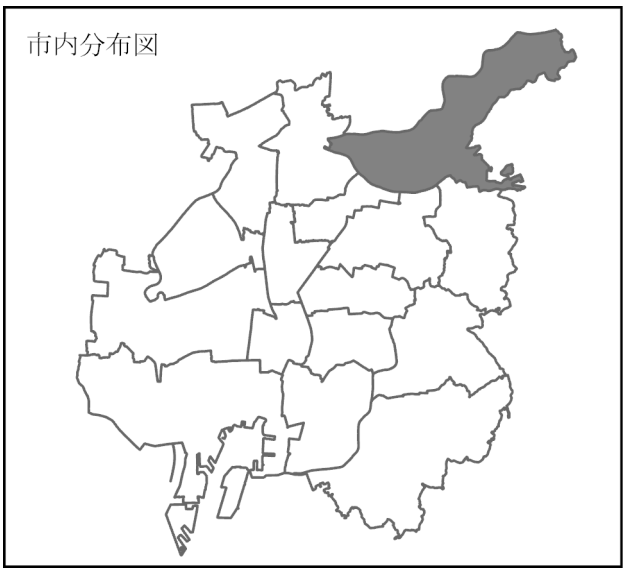
池、沼、放棄水田などの浅瀬に生息する。生息池での個体数は多い。

現在の生息状況／減少の要因

守山区では、ため池の浅瀬に生息しており安定しているが、池干しや池の改修などが行われれば危険である。

保全上の留意点

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。



引用文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上）. pp.204-231. 愛知県，名古屋.
吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編　自然　目録. pp.102-156. 名古屋市，名古屋.
森　正人・北山　昭，2002. 改訂版　図説　日本のゲンゴロウ. 文一総合出版，東京.

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.33,p.186. 保育社，大阪.
戸田尚希・長谷川道明・池竹弘旭・大野友豪・蟹江　昇，2024. 愛知県の甲虫目録１1(コツブゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科). 佳香蝶，76(300): 54-99.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

イグチケブカゴミムシ　*Peronomerus auripilis* Bates, 1883

評価理由

河川敷や池沼では護岸が進み、湿地状の草地が極端に減っている。この様な環境に生息する本種は、近年急速に個体数を減らしている。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	準絶滅危惧

形態

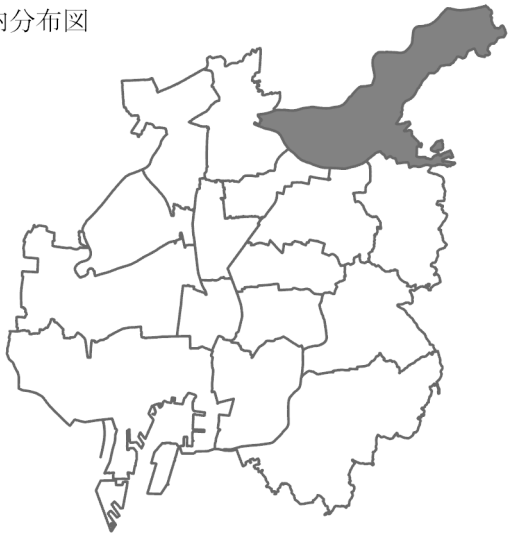
体長 9.0～9.5mm。背面は金色の細毛に覆われ、前胸背板は強く点刻され後角は小刺状。上翅の金属光沢は強く、条溝は深く強い点刻状で、間室は横しわ状に点刻される。



豊田市荒井町、1996 年 7 月 9 日、戸田尚希　採集

分布の概要

市内：守山区（吉鶴ほか，2008）。
県内：愛西市、犬山市、岡崎市、豊田市。
国内：北海道、本州、四国、九州。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

平地の河川敷や湿地、湿度の高い草地や休耕田に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

2010 年に行われた守山区の湿地調査では発見できなかった。

保全上の留意点

本種の生息する湿地は流出入水量の変化や植物の遷移により消失しやすい環境である。氾濫原を残すなど、湿地自体を壊さないことが必要である。

特記事項

似た環境には、他に同属のクロケブカゴミムシも生息する。

引用文献

岩崎　博・蟹江　昇，1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫（上），pp.309-338. 愛知県.
吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編　自然　目録，pp.102-156. 名古屋市.

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.28,p.155. 保育社，大阪.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目オサムシ科＞

マイマイカブリ　*Carabus* (*Damaster*) *blaptoides oxuroides* (Schaum, 1862)

評価理由

かつては平野部でも普通に見られたが、宅地化や公園整備、林の乾燥化で姿が見られる場所は限定的になった。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

29-50mm。体は非常に細長く、頭部と前胸は上翅と同じツヤの無い黒色をしているが、まれに青藍色のものがいる。名古屋市内は関東・中部地方亜種とされ、基亜種よりも上翅端の突出は少ない。



名東区猪高町、2024 年 5 月 6 日、伊藤健太郎　撮影

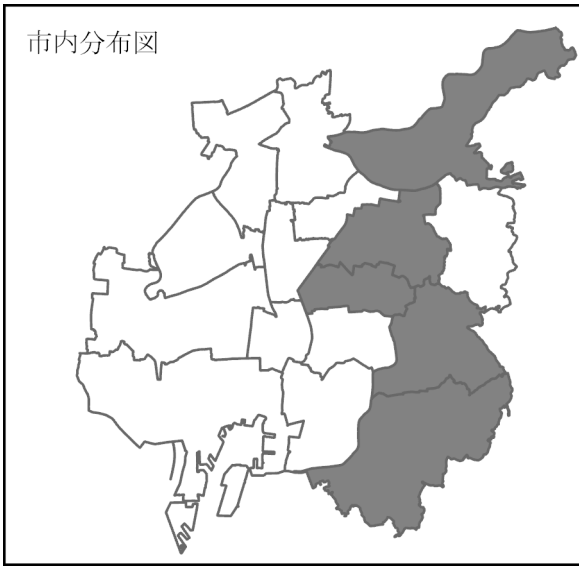
分布の概要

市内：守山区、千種区、天白区、緑区、昭和区。

県内：県内にほぼ分布している。

国内：名古屋市に分布する亜種は、関東から中部地方に分布する。

世界：国内のみ。



生息地の環境／生態的特性

カタツムリ類を餌にするため、湿潤な林や河川敷に生息する。後翅は退化し上翅は左右が癒着しているため、飛ぶことはできない。よって分布の拡散傾向は弱い。

現在の生息状況／減少の要因

湿潤な環境を保つ緑地公園などには、少ないながら生息しているが。生息地は分断されている。また、河川敷は河畔林の伐採やグラウンドにするなどの影響で、本種も極端に減っている。

保全上の留意点

河川敷の樹木の伐採やグラウンドとしての造成は、生息地を壊滅させている。湿潤な草地や樹林を残す必要がある。

関連文献

井村有希・水沢清行，2013. 日本産オサムシ図説．昆虫文献六本脚.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目マルハナノミ科＞

オオチビマルハナノミ　*Yoshitomia beattyi* (Pic, 1918)

評価理由

1946 年に採集されて以降、長らく市内では確認できていなかったが、2022 年に千種区田代町にて 76 年ぶりに再発見された。本種の生息環境と考えられる平野部の湿地は宅地造成や都市開発の影響で市内では激減しており、再発見されたものの市内の生息状況は危機的と考える。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長 4.8～6.4 mm。体型は長楕円形で触角第 2 節および第 3 節が他の節より明らかに短い。マルハナノミ科の特に本種を含む旧 Cyphon 属は形態的によく似た種が多く、同定が難しい種も少なくないが、本種は明らかに体長が大きいことや上述した触角の形態から比較的同定は容易である。



千種区、2022 年 4 月 20 日、大野友豪　採集

分布の概要

市内：千種区（大野，2022）。
県内：愛西市、豊橋市（白井，2003；Yoshitomi，2005）。
国内：愛知県、岐阜県、三重県、京都府、滋賀県に分布する。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

本種の生態はほとんど分かっていないが、これまで確認されている国内の産地はいずれも平野部の河川や池などの湿地環境であり 4 月下旬から 5 月上旬の短い期間に限って灌木や下草にとまっている。

現在の生息状況／減少の要因

現在市内で知られる産地は千種区の 1 か所のみである。産地では早春に池から少し離れた場所に茂る草本類を叩くことで複数個体を観察している。都市開発により本種の生息する湿地環境そのものが激減している。

保全上の留意点

生態の詳細は不明ながらも、報告されている情報を総合すると、池や河川敷の過度な開発を行わないことや、湿地やその周辺のエコトーンを意識した環境整備が本種の保全に有効と考える。

特記事項

本種の成虫の発生期間は極めて短く一般に注目されにくい種であるため、発見されていない産地が存在する可能性があるため、既知産地の継続調査に加えて新産地の発見を念頭に置いた調査も並行して行う必要があると考える。

引用文献

大野友豪，2022．岐阜県および愛知県におけるオオチビマルハナノミの採集記録．佳香蝶，74(291): 72.
白井勝巳，2003．愛知県でマルハナノミ科 5 種の記録．月刊むし，394: 27-28.
Yoshitomi, H.,2005. Systematic revision of the family Scirtidae of Japan, with phylogeny, morphology and bionomics (Insecta: Coleoptera, Scirtoidea). Japanese Journal of Systematic Entomology, Monographic series, (3), pp.1-212, The Japanese Society of Systematic Entomology, Matsuyama.

（大野友豪）

昆虫類　＜コウチュウ目ヒメドロムシ科＞

アヤスジミゾドロムシ　*Graphelmis shirahatai* (Nomura, 1958)

評価理由

現在確認されている生息地は少なく、保全の必要がある。市内では河川よりも水田脇のような環境で見られ、このような環境は少しの環境改変により消滅してしまう。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

形態

体長 3.4-3.7mm。背面は黒褐色で上翅には黄色~黄白色の途切れ気味の不規則な縦縞模様がある。(中島，2020)



名東区猪高町、2023 年 7 月 12 日、戸田尚希　採集

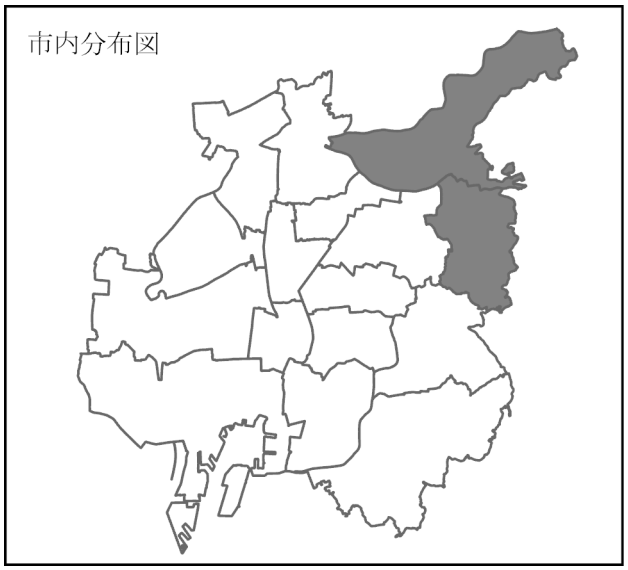
分布の概要

市内：名東区、守山区（戸田・蟹江，2013)。

県内：日進市、豊田市（愛知県，2018)。

国内：本州。

世界：国内のみ。



生息地の環境／生態的特性

平地の水田側溝や河川中流~下流域の流木上や岸際植生帯に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

水田では農薬の影響や整備によりコンクリート化され、土の溝が無くなって小石や流木が無くなったことにより、生息環境がなくなっている。

保全上の留意点

側溝をコンクリート化せず、土の側溝を残したり、農薬の使用を中止することが望まれる。

引用文献

愛知県, 2018. グリーンデータブックあいち 2018. 昆虫編. 愛知県環境部自然環境課.

中島　淳・林　成多・石田和男・北野　忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド 日本の水生昆虫. 文一総合出版. 東京.

市川靖浩，2019. 豊川水系で確認されたアヤスジミゾドロムシ. 三河の昆虫，66: 951-952.

戸田尚希・蟹江　昇，2013. 愛知県から採集された甲虫 II. 佳香蝶，65(256): 53-56.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ホタル科＞

ヒメボタル　*Luciola* (*Hotaria*) *parvula* (Kiesenwetter, 1874)

評価理由

自然度の高い林～草地に発生する陸生のホタルで、市内には広く分布し、名古屋城の外堀の発生地は有名である。しかし生息環境の悪化などによって、生息地も個体数も少なくなってきている。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体は黒色、胸部は淡赤色で前方に大きな黒紋を有する。体長は 9mm 位。



天白区相生山緑地、2001 年 6 月 3 日、岡田正哉　撮影

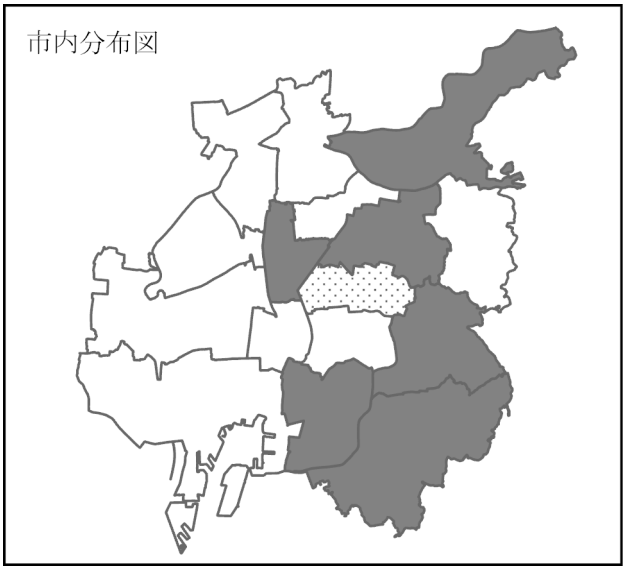
分布の概要

市内：中区、千種区、天白区、南区など。

県内：平野部から丘陵地にかけて分布する。

国内：本州、四国、九州の海岸近くから山地にかけて分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

雑木林とそれに連なる湿度のある林床と草地があることが好条件ではあるが、その変形でも問題はない。名古屋城では石垣と草地の組み合わせで、餌となるオカチョウジガイの生息できる場所が確保されている。

現在の生息状況／減少の要因

ほとんどの生息地が失われた中、名古屋城は公園域として生息地は保全されている。天白区は、公園の整備により減少傾向にある。

保全上の留意点

雑木林の保全と農薬散布に留意する必要がある。

関連文献

安藤　尚，1977．名古屋市のヒメボタル．佳香蝶，29(111): 29-31.
安藤　尚，1982．尾張平野のヒメボタル．佳香蝶，34(130): 34.
竹内重信，1985．名古屋城外堀，ヒメボタル．86pp．エフエー出版，名古屋.
名古屋市環境保全局，1994．なごやのほたる．24pp．名古屋市.

（佐藤正孝、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目エンマムシ科＞

ヤマトエンマムシ　*Hister japonicus* Marseul, 1854

評価理由

大型のエンマムシ類のうち特に平野部に生息する種は、牧場の閉鎖や衛生環境の整備に伴い生息が困難になってきている。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長 8.9～11.5mm。上翅の第 1～2 背条は完全で、第 3 背条は二分され、第 4～5 背条は翅端にあり、第 6 背条は欠如する。



長久手市、2006 年 9 月 25 日、戸田尚希　撮影

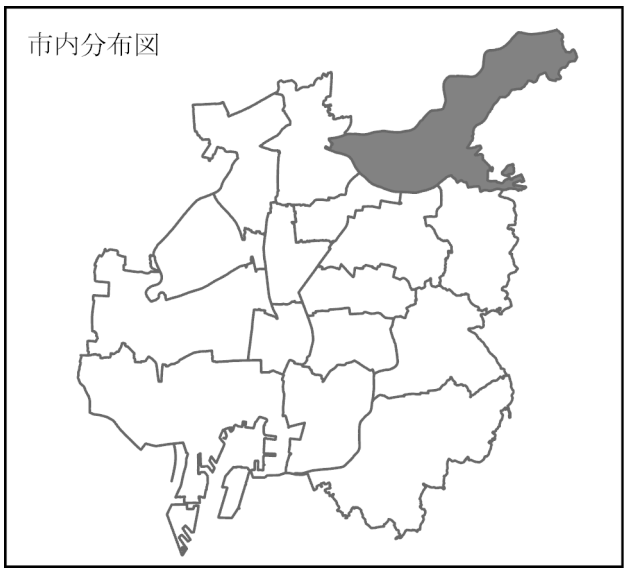
分布の概要

市内：守山区東谷山（森・吉鶴・田中，2008）。

県内：豊田市。

国内：本州、四国、九州、対馬、伊豆諸島、隠岐。

世界：アムール、中国、韓国、ベトナム。



生息地の環境／生態的特性

牛糞に集まる。

現在の生息状況／減少の要因

本種を含め大型のエンマムシ類は、近年いずれも発見が困難になってきている。生息環境の減少に影響されているものと思われる。

保全上の留意点

ウジ類を捕食するエンマムシ類の減少の背景には、野生動物の減少や衛生環境の整備による影響が少なからずあるため、本種の保全は単純ではない。

引用文献

森　雄一・吉鶴清則・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編　自然，pp.373-410．同目録，pp.102-156．名古屋市．

関連文献

大原昌宏，1996．日本産エンマムシ上科概説Ⅳ．甲虫ニュース:7-10．
佐藤正孝ほか，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．
上野俊一ほか，1985．原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.227．保育社，大阪．

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目クワガタムシ科＞

ヒラタクワガタ　*Dorcus titanus pilifer* (Snellen van Vollenhoven, 1861)

評価理由

平野部から低山地に生息する大型のクワガタムシである、各地で減少傾向にある。近年の飼育ブームにより本種の外国産を含む多くの飼育個体が野外に放たれており、放虫や逃走個体による遺伝子汚染の恐れも高まっている。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長 20～50mm。大あご 4～23mm。黒色でわずかに紫褐色をおびる。大あごは強大で、先端で急に内側に湾曲する。内歯は第 1 歯のみが顕著。先端に内方へ向く不明瞭な小歯がある。



守山区、1999 年 8 月 29 日、戸田尚希　撮影

分布の概要

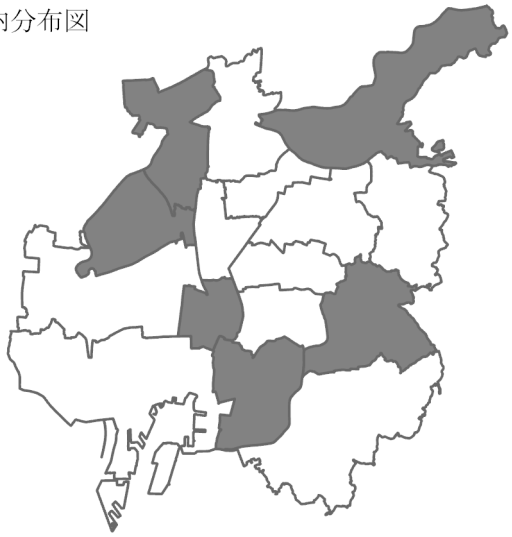
市内：西区、中村区、熱田区、南区、千種区、天白区、守山区（以上、佐藤，1990）。

県内：岡崎市、豊橋市、蒲郡市、安城市、新城市、豊川市、豊田市、西尾市、みよし市（以上、佐藤，1990）。

国内：本州（東北南部以南）、四国、九州。

世界：インドネシア、マレーシア、台湾、中国、ベトナムなど東南アジアに広く分布する。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

都市部でも、昔からの大径木が残っている林には生息していることがある。一般にウロを好み、数年に渡る寿命をもつ。

現在の生息状況／減少の要因

里山的環境の消失により、急激に減少しているものと思われる。

保全上の留意点

大径木が寺社林や河畔林に多い為、現存する発生木並びに周辺環境の保全が急務であろう。

特記事項

地方変異が著しく、日本産は現在 12 亜種に分けられている。飼育放虫や逃走などにより、遺伝子撹乱が心配な種である。

引用文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上）, pp.204-231. 愛知県農地林務部自然保護課.

関連文献

上野俊一ほか，1985. 原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.343. 保育社，大阪.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目コガネムシ科＞

コカブト　*Eophileurus* (*Eophileurus*) *chinensis chinensis*　(Faldermann, 1835)

評価理由

良好な林を背景とした肥沃な腐葉土に生属する。それらが減少すると共に本種は著しく少なくなっている。

評 価 区 分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

形態

体長 18～24mm。黒色でやや光沢がある。雄では頭部に短い角があり、前胸背中央に円形のくぼみがある。雌の角は短く、前胸のくぼみは狭く縦に長い。



採集地等不明

分布の概要

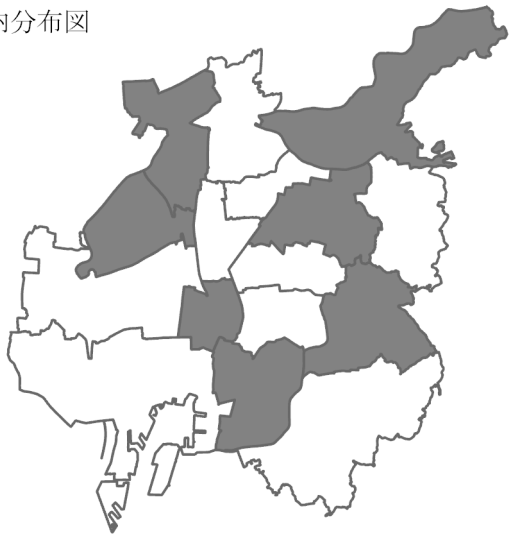
市内：熱田区（佐藤，1978）、天白区，名東区，昭和区。

県内：三河地方の平野部を中心として少なからず見られる。

国内：北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島。琉球列島産は別亜種である。

世界：朝鮮半島、中国、台湾に分布しているが、亜種は異なる。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

照葉樹林を中心として、大きな木を有する林で、樹洞の中に溜まった腐植質の中で幼虫が生育する。

現在の生息状況／減少の要因

市街化による照葉樹林の衰退と共に生息できる環境が少なくなった。しかし、辛うじて残された公園、社寺林などに細々と生息している。

保全上の留意点

大きな木の保全と、それらの背景となっている照葉樹林の育成を見守ることが必要である。

引用文献

佐藤正孝，1978．熱田神宮林の昆虫類．熱田神宮林苑保護委員会調査報告書，pp.93-110.

関連文献

髙崎保郎，2001.「名古屋北部の蝶類（中野栄三）」と穂積先生．穂積俊文博士記念論文集，pp.358-362.

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12): 49-53.

（佐藤正孝、戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゾウムシ科＞

バッキンガムカギアシゾウムシ　*Bagous buckinghami* O'Brien & Morimoto, 1994

評価理由

ガガブタをホストとすることが分かっておりため池などに生息するが、近年カガブタが減少し、本種も危険度が増していると考えられる。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

3-3.5mm。脛節後半部で非常に強く内湾しカギ状を呈し、この形質は茎などにしがみつくのに適しているのではないかと考えられる。カギアシゾウムシ類はよく似た種が多く、同定は難しいが、本種は他種と比べて体形が細長く容易に判別できる。



名東区猪高町、2016 年 9 月 30 日、戸田尚希　採集

分布の概要

市内：天白区。名東区。
県内：常滑市。
国内：本州・九州。



生息地の環境／生態的特性

カギアシゾウムシ類は水辺の環境に特化したグループで、ミツガシワ科のガガブタ *Nymphoides indica* (L.) Kuntze の生えるため池などに生息する水生・半水生ゾウムシで、水中でもカガブタの上を歩いているところが観察される。

現在の生息状況／減少の要因

ガガブタが姿を消したため池からは見つかっていない。ホスト植物であるカガブタの保全が必要である。アメリカザリガニなどによるカガブタへのダメージは深刻である。

保全上の留意点

ため池などで、アメリカザリガニによるカガブタへのダメージを減らさなければならない。

また、周辺の池にもカガブタが生えるような環境作りが大切である。

引用文献

林　成多，2012．フタホシカギアシゾウムシの関連植物，さやばねニューシリーズ，No.8：19-20.

関連文献

C.O'Breien,I.Askevold & K.Morimoto,1994.ESAKIA,(34): 1-74.
村上哲夫，1986．猪高緑地内の池の魚類と底生生物．ため池の自然，(4): 7-8.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ハムシ科＞

ツヤネクイハムシ　*Donacia* (*Donaciomima*) *nitidior* (Nakane, 1963)

評価理由

湿地環境に生息する。市内東部のスゲの生えた湿地には生息していたが、現在姿を見ることは無くなった。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長：雄 5.0-6.2 mm、雌 6.0-6.5 mm。色彩は銅色が多く金属光沢がある。まれに青色の個体が見られる。



天白区天白町、戸田尚希　採集

分布の概要

市内：天白区。

県内：日進市、豊田市。

国内：本州。

生息地の環境／生態的特性

日当たりの良い湿地環境に生息し、幼虫は水中で植物の茎から栄養や酸素をもらい、成虫は春にスゲ類の花に集まる。

成虫は５月～６月に出現する。スゲ類に訪花する（野尻湖昆虫グループ，1985）。



現在の生息状況／減少の要因

市内の湿地環境はほぼ失われている。名古屋市周辺部でも減ってきており、湿地環境の回復が急がれる。

保全上の留意点

スゲ類の生える常に水のたまった浅いため池や湿地環境を残すことが必要である。

引用文献

野尻湖昆虫グループ，1985. アトラス・日本のネクイハムシ－化石同定への手びきー．野尻湖昆虫グループ，大阪.

（戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目セセリチョウ科＞

ホソバセセリ　*Isoteinon lamprospilus* C.Felder et R.Felder, 1862

評価理由

以前から多い種ではなかったが、市内に広く分布していて、守山区などで記録がある。樹林の管理放などで激減しつつある。全国的にも減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

形態

開張 33mm 前後。雌雄の斑紋はほとんど同じ。雌の翅形はやや幅広い。雌の腹部は太い。裏面が特徴的で同定は容易。



採集地等不明

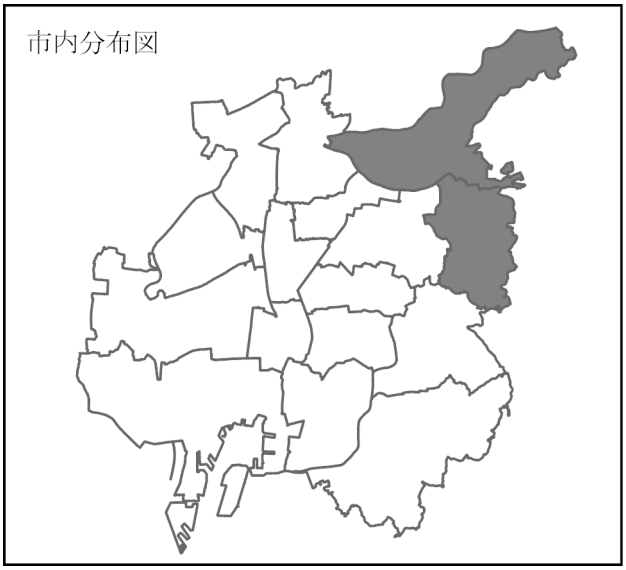
分布の概要

市内：守山区竜泉寺（1950）、守山区中志段味（1977）名東区牧野ケ池緑地（1978）など。

県内：尾張平野部から三河山間部まで分布は広いが、個体数は多くない。

国内：九州、四国、本州に分布するが、必ずしも普遍的ではない。

世界：朝鮮半島、中国（中・南・西部）、台湾、ベトナムに分布する。



生息地の環境／生態的特性

平地から低山地の森林に接した草地や疎林、林縁部。規模の大きい明るい草原には見られず、森林と接したやや日当たりの悪い草地やススキの生える荒れ地に見られる。年 1 回 6～8 月頃出現する。幼虫はススキ、カリヤス、オオアブラスキ等のイネ科を食草としている。

現在の生息状況／減少の要因

減少の要因は、市内での草地環境の減少・分断に伴う、生息条件の悪化である。都市近郊では里山の管理放棄によって減少している。

保全上の留意点

本種のような草原性の昆虫は、近年全国的に減少傾向が指摘されている。種の保全には、ススキ草原のような日本の旧来型の草地を、適地に大切に育成し維持することが必要である。

引用文献

野田正一, 1977. 名古屋市守山区にみられる蝶. 佳香蝶　29（111）: 31－33

高橋　昭・葛谷　健, 1950. 中部東海地方産蝶類目録. 佳香蝶, 2(4): 1-20.

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫（下）, pp.21-95. 愛知県.

中野善敏, 1978. 名古屋市の蝶（第 3 報）　1977 年の記録. 佳香蝶, 30(115): 39-42.

関連文献

白水　隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

日本チョウ類保全協会, 2019. フィールドガイド　増補改訂版　日本のチョウ, p343. 東京.

（江田信豊）

昆虫類　＜チョウ目アゲハチョウ科＞

ジャコウアゲハ　*Atrophaneura alcinous alcinous* (Klug, 1836)

評価理由

黒色のアゲハの中では飛翔が最も緩慢で、食草のウマノスズクサのある路傍や草地をゆるやかに飛ぶ。食草の自生する土手や堤防では、機械による草刈りがあまり頻繁に行われると、ウマノスズクサを絶滅状態にしてしまう懸念がある。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張は春型 80mm 内外、夏型 90～110mm。尾状突起が長く、雄の翅の地色は絹糸状の光沢のある黒色で、後翅の亜外縁に弦月状の赤色斑が特に裏面に顕著に現れる。雌の翅の地色は黄灰色で、後翅亜外縁の黒色部に弦月状の黄色斑が表裏とも明瞭に現れる。体の側面にも赤～黄色毛がある。

分布の概要

市内：市内のほぼ全域で記録されているが、守山区の矢田川堤防と中区名古屋城の堀を除いて、安定した生息地は見られない。

県内：県内全域に分布しているが、食草の分布が限られるので、比較的局地的な分布を示す。

国内：秋田県、岩手県以南の本州、四国、九州、南西諸島。

世界：朝鮮半島、台湾、中国。



生息地の環境／生態的特性

4 月下旬から年 3～4 回発生する。食草の近くの草地や林縁、竹林の周囲などを、あまり羽ばたかずゆっくりと飛翔し、ツツジ類、アザミ類などの花で吸蜜する。幼虫は名古屋市内では草地に生えるウマノスズクサ、猿投山などの山間部では樹林下に生えるオオバウマノスズクサを食草とする。成虫はかなり放浪性があり、食草のない市街地に姿をみせることもある。

現在の生息状況／減少の要因

土手や堤防、鉄道線路沿いなど、ウマノスズクサの生育地が比較的限られており、それに合わせて本種も集中的に生息している。堤防に繁茂するものは、草刈り機で刈られてしまい時期が悪いと絶滅状態になってしまう。また、多数発生すると多くの幼虫が食草を茎まで食い尽くし、自ら一時的な絶滅状態に陥ることもある。近年守山区の矢田川堤防のウマノスズクサ群落の一部に、放蝶と思われる移入種ホソオチョウが局地的に多発し、食草が同じなので競合している場合がある。

保全上の留意点

本種の維持存続のためにウマノスズクサを刈り取らないことが必要である。名古屋城の堀の石垣にはウマノスズクサが多く、刈り取らないので比較的安定した発生を繰り返している。市内でビオトープなどで、フェンスに食草を植栽すれば、侵入した個体によって発生する可能性が高い。

引用文献

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp.21-95．愛知県．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然．名古屋市．

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl.3,p.12．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1982．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅰ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目シロチョウ科＞

ツマグロキチョウ　*Eurema laeta betheseba* (Janson, 1878)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	絶滅危惧 IB 類

評価理由

河川敷などに生えるカワラケツメイを食草とする極めて狭食性のチョウで、全国的に減少していて、現在 30 近くの県が本種をレッドリストに抽出している。名古屋市とその周辺では、近年カワラケツメイにごく近縁のアレチケツメイが、帰化植物として造成地に侵入し、その群落に本種の発生が多く見られるので、全国レベルほど逼迫していない。しかしアレチケツメイも高茎雑草やクズの被覆には弱く、本種の安定した発生環境には程遠いと考えられる。

形態

開張は夏型 34～36mm、秋型 37～40mm。夏型は小型。雄の地色は黄色、雌は全体に黒色鱗粉があらく散布され淡い灰黄色。秋型は雄雌で大差なく、翅頂はとがり、後翅に褐色条がある。前翅端は常に黒色を呈する。



ツマグロキチョウ（左夏型雄、右秋型雄）
名古屋市、田中多喜彦　採集

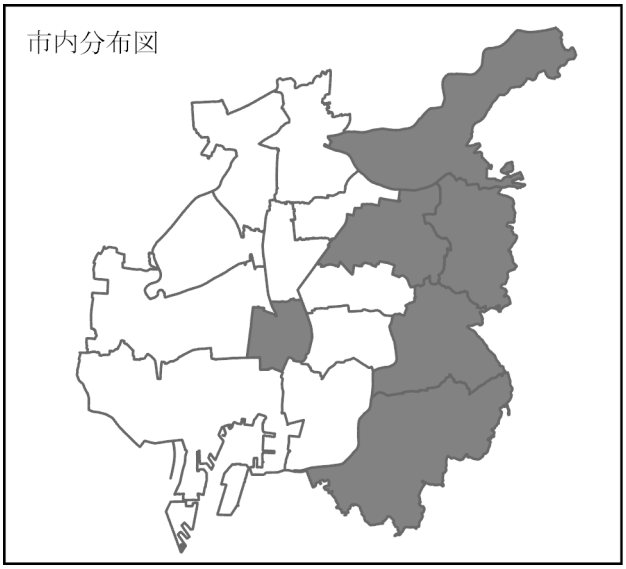
分布の概要

市内：千種区、名東区、熱田区、天白区、緑区、守山区などに記録がある。

県内：県下全域に分布は広い。

国内：本州（福島県以南）、四国、九州。

世界：台湾、中国から西はインドまで、南はオーストラリアにかけて分布する。



生息地の環境／生態的特性

千種区平和公園では、1970 年頃ススキ原の路傍に生えるカワラケツメイに発生していた。今世紀に入り、守山区や名東区の宅地造成地に帰化植物のアレチケツメイが群生するようになり、これに本種が多発したことがある。

年数回の発生、6 月以降夏季に発生する個体（夏型）は雄雌とも食草群落の近くを離れないが、9 月中旬以降の秋型はかなり移動性があり、市街地でも飛翔を見る。成虫越冬した雌は春に食草の芽生えに産卵する。

現在の生息状況／減少の要因

守山区や名東区の宅地開発に伴うアレチケツメイの群落は、過去 10 年の間に他の高茎雑草に被覆され減少した。ツマグロキチョウの発生も減少してきている。本種の存続には食草群落の維持が必須条件であり、群落の移動と共に、常に彷徨する運命にある蝶である。

保全上の留意点

アレチケツメイやカワラケツメイは、今後も造成地や河川の堤防、河川敷等に残存して行くであろう。河川敷等の一定区画を、ビオトープとして河原の自然状態を温存することも考えられる。

堤防のコンクリート化、除草機による徹底した除草、広範囲の農薬散布は本種の生存を脅かす。

引用文献

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp.21-95．愛知県．
須賀瑛文ほか，2007．帰化植物アレチケツメイ（*Chamaecrista nictitans*）の新たな分布地．岐阜県植物研究会誌，23: 89-91．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然．名古屋市．

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl.14,p.45．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1982．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅰ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目シジミチョウ科＞

ウラゴマダラシジミ　*Artopoetes pryeri pryeri* (Murray, 1873)

評価理由

名古屋市内では守山区の雑木林に局所的に生息する。発生地は主に落葉広葉樹林内の低木層や林縁部である。これらの環境は森林の放置によって林内の中・低木密度が上がり、日照量が低下し生息環境が悪化している。また、開発により雑木林が減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 36～46mm。雌はやや大型で丸味をおびる。翅の裏面の斑紋は雄雌ほとんど同じで、白色地に亜外縁部に黒点列がある。翅の表面は、外縁に幅広く黒帯があり、内側は青紫色。雌は青色部外側の白色部が増大する傾向かある。

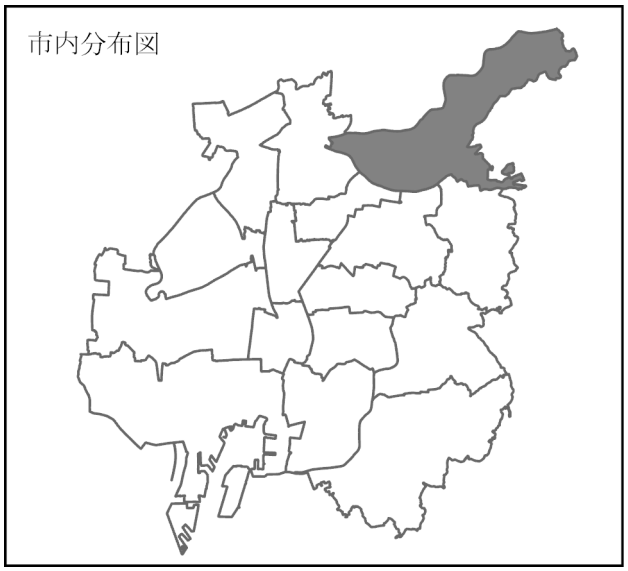
分布の概要

市内：市内では 1978 年に守山区で記録されたが、守山区の各所で 2000 年以降もかなり採集されている。市東部丘陵地にはまだ生息地が存在する可能性がある。

県内：犬山市、瀬戸市などの尾張丘陵から三河山地まで広く分布している。

国内：北海道、本州、四国、九州に分布する。九州では山地性となる。

世界：朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部。



生息地の環境／生態的特性

主な生息地は雑木林内の低木層や林縁で、食樹イボタノキの豊富な場所である。渓畔林、湿地内の低木層等に発生することが多い。年 1 回、5 月中・下旬から羽化が始まり 6 月中みられる。ミドリシジミ亜族としては訪花性が強く、イボタノキ、クリなどの花で吸蜜する。雄は午後 1 時ごろから飛び始め、夕方には活発に飛翔し、移動距離は広汎に及ぶ。雌はあまり活発ではないが日中食樹の周辺をゆるやかに飛翔し、イボタノキに産卵する。1 回の産卵数は 4～10 個のことが多い。

現在の生息状況／減少の要因

守山区のみで確認されており、局所的であるが、個体数は少なくなかった。隣接する尾張旭市森林公園や瀬戸市の個体群との遺伝子交流もあると思われる。しかし、守山区は現在、宅地造成、道路建設が各所で行われていて雑木林が分断され、公園緑地化のための過剰管理、小規模な雑木林の放任による鬱閉など、生息環境が悪化しているので、生息数が減少している。

保全上の留意点

産地の一つ守山区東谷山は、2010 年に愛知県の自然環境保全地域に指定され、環境が保全されているが、守山区の中・西部に点在する雑木林の産地も、可能な限り環境を保全したい。防犯等のための下枝刈りや低木の除去、害虫防除のための広域農薬散布などには配慮が必要である。

引用文献

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp.21-95．愛知県．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然．名古屋市．

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl.21,p.76．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1984．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目タテハチョウ科＞

オオウラギンスジヒョウモン　*Argyronome ruslana* (Motschulsky, 1866)

評価理由

ウラギンスジヒョウモンと比べて森林性である。都市部で森林が減少しているため少なくなっている。平野部でも記録があるが個体数は少ない。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

開張 65mm 前後。色彩斑紋は雌雄で大差はない。雌は前縁の前翅端近くに三角形の白紋がある。雄にはウラギンスジヒョウモンにみられるような前翅の表面の後縁近くの黒色発香鱗条はない。



採集地等不明

分布の概要

市内：北区（1937）、守山区竜泉寺（1956）。
県内：県内では産地が局限され、個体数も少ない種類である。
国内：北海道、本州、四国、九州。
世界：朝鮮半島、中国北東部、ロシア南東部。



生息地の環境／生態的特性

年 1 化で 6 月から 7 月下旬に現れ、盛夏には夏眠のため一時姿を消し、秋に活動を再開しアザミ類、ヒヨドリバナ等の花に吸蜜に訪れる。食草はスミレ、ツボスミレ、タチツボスミレ、フモトスミレ、エイザンスミレなど各種のスミレ類を食べる。あたえればビオラ、パンジーも食べる。雌は卵を食草に産み付けずに、近くの植物に乱雑に産み付ける。越冬態は卵。

現在の生息状況／減少の要因

近年、名古屋市内を始め周辺の尾張平野などの低地での観察例が少なくなり、以前比較的多くみられた三河の低山地から奥三河の山地でも個体数が減少している。秋には低地部に移動する個体も多く都市近郊でみかけることもある。都市化によって森林が減少することによって本種の生息場所も減少している。

保全上の留意点

今日、ヒョウモンチョウ類のチョウが全国的に減少傾向にあるが、本種の場合は森林性のために里山などの保全が必要だと考える。

引用文献

中野榮三，1937．名古屋市北郊の蝶類．昆虫研究．1(2): 40-44
高橋　昭・葛谷　健，1956．中部東海地方産蝶類目録　第 3 報．佳香蝶，3(3/4): 1-123

関連文献

白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．
日本チョウ類保全協会，2019．フィールドガイド　増補改訂版　日本のチョウ，p343．東京．

（江田信豊）

昆虫類　＜チョウ目タテハチョウ科＞

ヒオドシチョウ　*Nymphalis xanthomelas japonica* (Stichel, 1902)

評価理由

1970 年代には市西部を含め市内各地で記録されているが、今日では東谷山や猪高緑地など、市東部丘陵の数箇所を除いて見ることができない。全国的に大都市周辺での減少傾向が指摘されている。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 66～76mm。雌はやや大型。翅の表面は橙赤色で、外縁に青色の縁取りがある。翅の裏面は基半部が黒褐色で、その外側は茶褐色である。



田中多喜彦　撮影

分布の概要

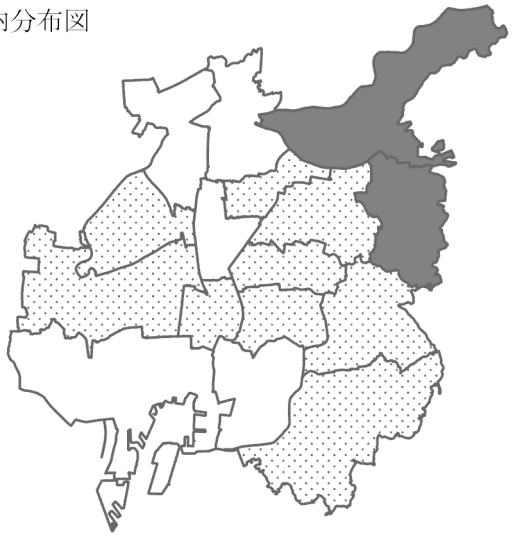
市内：千種区、名東区、熱田区、中村区、中川区、東区、昭和区、瑞穂区、天白区、緑区、守山区などに記録がある。

県内：平野部から山地まで県下全域に分布は広い。

国内：全国。低地から高山帯まで生息域は広い。

世界：朝鮮半島、台湾（高地）、中国からヒマラヤを経てヨーロッパ南東部まで分布する。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

食樹のエノキのある雑木林の林縁に生活する。年 1 回 5 月下旬から 6 月上旬に羽化。しばらく周辺で活動するが、夏季には姿を消す。翌春まで休眠するものとみられる。

休眠前は敏速に飛翔し、アベマキやヤナギ等の樹液を好み、腐果や獣糞にも集まる。時にクリやネズミモチの花で吸蜜する。越冬後はサクラ類、タンポポ類等で吸蜜する。

幼虫は群棲し、エノキの若木を丸裸にすることがある。ヤナギ類にもつく。

現在の生息状況／減少の要因

都市部では、エノキの生える雑木林が減少していることが直接の原因であり、成虫の好む樹液や腐果などの食餌の減少等、好適な生息環境が失われたことも要因であろう。

エノキにつく幼虫群集は、毛虫の群れとして嫌われ、薬剤で駆除されることが多く、都市部での減少に拍車をかけていると思われる。

保全上の留意点

現存する緑地公園には現在でも発生地があるので、極力生息環境を維持することが望ましい。河畔林内のエノキ、ヤナギ類も利用されるので、河川敷の改修にも配慮が必要である。緑地における衛生・森林害虫駆除のための農薬散布にはとくに配慮が必要である。

引用文献

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp.21-95．愛知県．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然．名古屋市．

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl.52,p.241．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1983．原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目タテハチョウ科＞

ジャノメチョウ　*Minois dryas bipunctata* (Motschulsky, 1861)

評価理由

ススキ草原を標徴するチョウで、戦前の名古屋市内では、鉄道の線路脇の草地などにも生息し、1970 年代までは、市東部丘陵の草原に見られた。今日では開発により草原が激減し、千種区東山公園周辺と守山区東谷山周辺に生息が現認できるに過ぎない。

全国的に、特に都市周辺では減少し、東京都では絶滅としている。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 56～66mm。雌は大型。雄は翅の地色が黒褐色で眼状紋は小型、雌は黄褐色で雄より淡色、眼状紋も大型でよく目立つ。



田中多喜彦　撮影

分布の概要

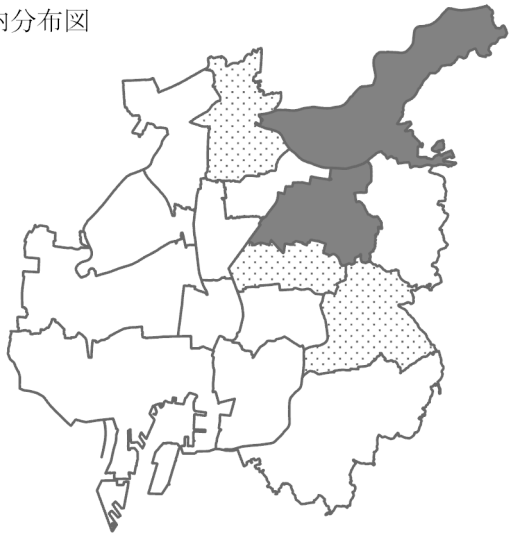
市内：北区（1937）、昭和区、千種区、天白区、守山区などに記録がある。

県内：尾張平野部、知多半島から三河山間部まで分布は広いが、平野部で減少傾向が著しい。

国内：全国。草原に限られ局地的。

世界：朝鮮半島、中国東北部からヨーロッパまで、ユーラシア北部に広く分布する。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

平地の河川敷や堤防の草原、山間地の田畑周辺の草原に多く生息する。年 1 回 7～8 月頃出現し、草上をゆるやかに飛翔し、アザミ類、ヒメジョオン等の花で吸蜜する。母蝶は食草に産卵せず、地上に放卵する。幼虫はススキ、ノガリヤス等のイネ科、ショウジョウスゲ等のカヤツリグサ科を食草としている。

現在の生息状況／減少の要因

東山公園周辺では、ようやく目撃できる程度に減少した。東谷山南麓では愛知用水の土手が発生源となっていて、発生は比較的安定している。減少の要因は、市内での草地環境の減少・分断に伴う、生息条件の悪化である。

保全上の留意点

本種のような草原性の昆虫は、近年全国的に減少傾向が指摘されている。種の保全には、ススキ草原のような日本の旧来型の草地を、適地に大切に育成し維持することが必要である。

引用文献

高橋　昭・葛谷　健・阿江　茂ほか，1991．愛知県のチョウ類．愛知県の昆虫（下），pp.21-95．愛知県．
山田芳郎，2008．チョウ目（チョウ類）．新修名古屋市史資料編　自然．名古屋市．

関連文献

川副昭人・若林守男，1976．原色日本蝶類図鑑，pl.61,p.279．保育社，大阪．
福田晴夫ほか，1984．原色日本蝶類生態図鑑（IV）．保育社，大阪．
白水　隆，2006．日本産蝶類標準図鑑．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ボクトウガ科＞

ハイイロボクトウ　*Phragmataecia castaneae* (Hübner, 1790)

評価理由

幼虫の食草であるヨシの生えている湿地に生息するが、近年全国的にこのような湿地が土地開発等により減少し、生息地が狭められている。そのため環境省は、2012 年の第 4 次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に抽出している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	準絶滅危惧

形態

開張 30mm～40mm。前後翅ともやや褐色を帯びた灰色で、脈間に暗灰色鱗を散布する。雌の腹部は長い。



港区当知町草野、2009 年 7 月 11 日、田中多喜彦　採集

分布の概要

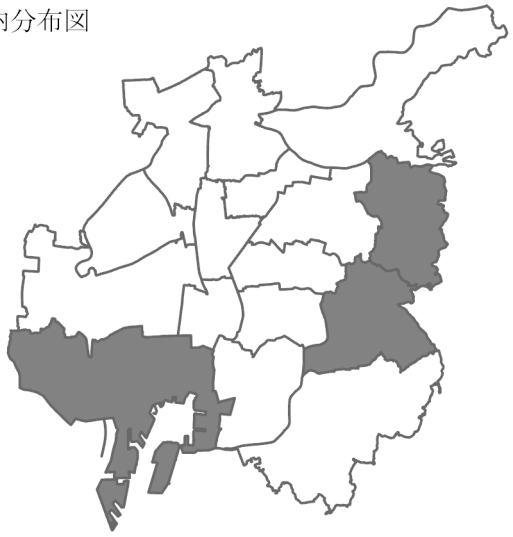
市内：名東区塚ノ杁池、天白区荒池、港区南陽町庄内川河口などから記録がある。

県内：尾張部・三河部の平地から丘陵にかけての低湿地に、広く産地が点在する。

国内：全国。

世界：国外では朝鮮半島からヨーロッパまでのユーラシア、アフリカに広域に分布する

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

ヨシ群落のある河口や河川敷、ため池などに限って見られる。年 1 化で、成虫は名古屋市では 5 月下旬から 7 月に出現し、夜間灯火によく飛来する。

現在の生息状況／減少の要因

名東区塚ノ杁池の産地は猪高緑地として整備され、港区南陽町の庄内川河口のヨシ原は現在のところ安定している。しかし市内のヨシ原は、土地開発や埋め立てにより激減していて産地が孤立化し、遺伝子交流が困難となっていて、生息環境が悪化している。

保全上の留意点

庄内川の河口部には、大都市としては珍しく広大なヨシ原が残っている。名古屋市内に残るヨシ原は特異な生態系をもち、希少な生物が多く生息している。安易なヨシの刈り取りをしないこと、改修工事の際は、生態系への影響を極力減らすなど、十全な配慮が望まれる。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．
田中多喜彦，2011．名古屋市庄内川河口の蛾類．佳香蝶，63(247): 63-67.

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目シャクガ科＞

クワトゲエダシャク　*Apochima excavata* (Dyar, 1905)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

クワを主食樹とする本種は、かつては著名なクワの害虫であったが、養蚕業の衰退によるクワ園の激減により全国的に減少している。そのため環境省は、2012 年の第 4 次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に抽出している。

形態

開張雄 40～45mm、雌 50～55mm。近縁のオカモトトゲエダシャクに似るが、全体に赤みが弱く、前翅の内横線は中央部で強く外曲し、外横線は中央付近から下縁までの間ゆるやかに内曲する。後翅の外横線はより細い。



名東区八前、2014 年 2 月 23 日、田中多喜彦　採集

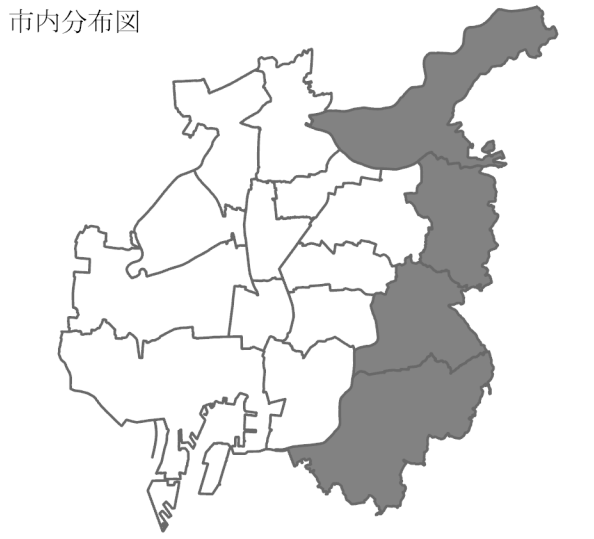
分布の概要

市内：天白区、守山区、名東区、緑区などで採集されている。

県内：犬山市、豊田市、岡崎市、西尾市、田原市などの記録があるが、近年の記録は少ない。

国内：北海道、本州、九州。1990 年以降は福島、群馬、埼玉・、長野・岐阜・愛知の各県から少数の個体が報告されているに過ぎない。

世界：朝鮮半島、中国。



生息地の環境／生態的特性

早春の蛾で、年 1 回 2 月下旬～3 月に出現する。成虫は静止する時、前翅を頭の方へ後翅を腹部に沿って折りたたみ、独特の姿勢をとる。

現在の生息状況／減少の要因

名東区八前では 2014 年灯火で 2 頭同時に飛来し、明徳公園のクワの若木で幼虫が見出されている。2020 年代に入り各所で記録されるようになり、特に西尾市の河川敷では多数の個体が数年にわたって得られた。また最近本種の食餌植物について, クワ（クワ科）以外にモッコウバラ、ベニカナメモチ（バラ科）、セイヨウイボタ（モクセイ科）、ウメモドキ （モチノキ科）, カラタチ（ミカン科）、スイカズラ（スイカズラ科）など 11 科 15 種の記録が報告されたが（間野, 2023; 間野ほか, 2023）、いずれも単発的な記録である。これらを踏まえて、今後の発生動向について注意を要する。

保全上の留意点

まずは、荒地や河川敷などにみられる逸出または自生のクワを安易に伐採しないことが望まれる。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑．p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
西原かよ子，2006．クワトゲエダシャクの幼虫と新食草．誘蛾灯，184: 41-43.
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422464．名古屋市.
間野隆裕，2023．クワトゲエダシャクの新記録寄主と既寄主のまとめ，及び分布に関する一考察．誘蛾燈，(252) : 87-88.
間野隆裕・寺澤明子・大脇雅久，2023．クワトゲエダシャクの新食餌植物．佳香蝶，75(294): 155.

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤママユガ科＞

オナガミズアオ　*Actias gnoma gnoma* (Butler, 1877)

評価理由

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	準絶滅危惧

大型で尾状突起の目立つ美しい蛾であるが、近縁のオオミズアオとよく似ていて、同定に注意が必要である。オオミズアオがいろいろな樹木を食べる広食性であるのに対して、本種はハンノキ属(Alunus)を食べる狭食性であり、平地のハンノキ林が今日減少しているので、やや局地的な分布となっている。そのため環境省は、2012 年の第 4 次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧と評価している。

形態

開張雄 80mm～90mm、雌 90mm～100mm。近縁のオオミズアオに似るが、やや小型、雄の翅頂はとがり、外横線は直線的で波状に屈曲しない。後翅の横脈紋は大きく円形に近い。年 2 化で、春型と夏型が出る。夏型はより白っぽく外横線がやや目立つ。



日進市、2012 年 5 月、田中多喜彦　撮影

分布の概要

市内：守山区志段味、千種区平和公園、緑区水広下池で採集されている。
県内：県下全域に広く分布する。
国内：全国。
世界：朝鮮半島、中国。



生息地の環境／生態的特性

5 月～9 月に出現する。平地にも山地にも記録があり、ハンノキ林のある雑木林に生息する。老熟幼虫は樹から降り、落葉の中で繭をつくり蛹で越冬する。

現在の生息状況／減少の要因

記録された守山区志段味、千種区平和公園南部は里山的景観がわずかに残り、いずれもハンノキ林が近くにある。

本種の減少は、ハンノキ林を含む低湿地が埋め立てや土地開発により減少し、分断されたことによる。

保全上の留意点

市東部丘陵にわずかに残るハンノキ林を含む里山的環境は、極力残すこと。過度な伐採や、害虫防除のための薬剤散布を極力避けることが必要である。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目イボタガ科＞

イボタガ　*Brahmaea japonica* Butler, 1873

評価理由

大型の日本固有種で、かつては都心部にも生息していたが、近年まったく見られなくなり、郊外でも個体数が減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 90mm～95mm。前翅頂は丸みを持ち、地色は多少緑色を帯びた黄褐色。前後翅とも黒褐色の波状線を密布する。前翅の内横線と外横線の間は、翅脈に沿い黒褐色の小円紋を連ねる。雌は前翅の丸みがやや強い。



守山区東谷山、2014 年 4 月 3 日、田中多喜彦　採集

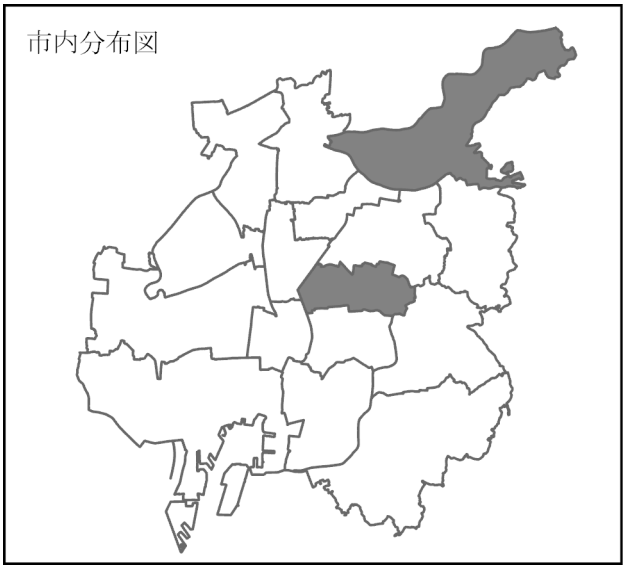
分布の概要

市内：昭和区五軒家町（1975）の古い記録のほか、近年守山区東谷山で複数個体が採集された。

県内：県下全域に分布は広い。設楽町裏谷など 1000m 級の奥三河山地でも得られている。

国内：北海道から屋久島まで、全国に分布する。

世界：現状では日本の固有種である。



生息地の環境／生態的特性

平地にも山地にも記録があるが、近年全国的に都市部では減少傾向にあるという。

成虫は年 1 回 3 月下旬から 4 月に出現する。幼虫の食樹はモクセイ科のイボタ・ネズミモチ・キンモクセイ・ヒイラギ・トネリコなどであり、庭園樹として植栽されるものが多い。

1960 年頃に都心部の名古屋城内で、特異な形態の幼虫を見た記憶がある。

現在の生息状況／減少の要因

都市部では雑木林が整備され都市公園化され、イボタやネズミモチが伐採されている。害虫駆除のための薬剤散布等により、本種の継続的な生息が困難な状況になっている。

保全上の留意点

市内に残存する、イボタが自生するような自然林を極力残すこと、過度な伐採や、害虫防除のための薬剤散布を極力避けることが必要である。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヒトリガ科＞

ヤネホソバ　*Eilema fuscodorsalis* (Matsumura, 1930)

評価理由

かつては人家のカヤ葺き屋根などに発生し、幼虫のケムシの毒刺毛で刺されることから人的被害が多かったが、人家の多くが近代建築となり、発生に好適な環境が減少したため各地で激減している。

そのため環境省は、2012 年の第 4 次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧と評価している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	準絶滅危惧

形態

開張 22mm～32mm。雌は雄より大型。夏生は小型で翅は橙黄色～淡黄色。春生と秋に出現する個体はやや大きく、前縁部を除く前翅と後翅の前半は灰色を帯びる。前翅の外縁は同属他種より多少丸味をもつ。

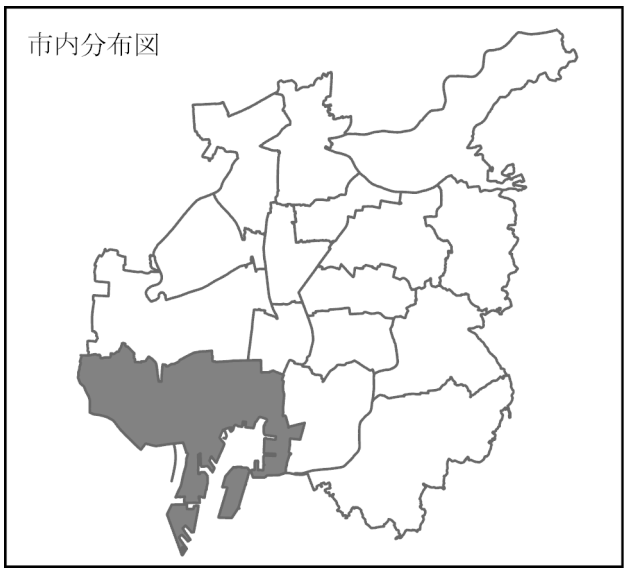
分布の概要

市内：港区の庄内川河口で 2009 年に記録された。

県内：瀬戸市定光寺、旧美和町篠田、豊田市青木町、西尾市米津町などで記録がある。

国内：東北地方南部以南の本州、四国、九州と奄美大島、西表島。

世界：中国。



生息地の環境／生態的特性

幼虫はケムシで体色は地表によく似る。カヤやワラ葺きの屋根、板屋根、屋根瓦、板塀などに生えたコケや地衣類を食べ、大発生すると糸をたらして人家内に垂下してくる。幼虫の刺毛により皮膚炎を起こす。

幼虫は「ヤネムシ」、「イタヤムシ」、「自皓坊（ジコウボウ）」などと呼ぶ地方がある。本来天然材の屋根によく発生したが、近年は壁や樋の隙間、ベランダ等のコケに発生する例がある。

成虫はふつう年 3 化、4 月下旬～5 月中旬、7 月、8 月下旬～9 月中旬に出現する。

現在の生息状況／減少の要因

元来平地や里山の人家付近に生息していた種であり、生活様式の近代化に伴って、屋根や板塀などのコケや地衣類の生じる場所が減少したため、生息環境を奪われ、減少している。

保全上の留意点

本種は環境省レッドリストにおける準絶滅危惧種であるが、人家に多発すると人に危害を与える衛生害虫でもあるので、害虫駆除と種の保存という背反する課題を持っている。人家以外にも石垣や古木の樹幹のコケ類からも幼虫が発見されるので、この様な環境はできるだけ保全するよう努めるしかない。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．
田中多喜彦，2011．名古屋市庄内川河口の蛾類．佳香蝶，63(247): 63-67.

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

キシタアツバ　*Hypena claripennis* (Butler, 1878)

評価理由

平地から低山地の里山的な環境に生息する蛾で、幼虫はイラクサ科のヤブマオを食べる。元来それほど発生量が多い蛾ではないが、近年このような人里的環境が減少し、本種も見られなくなった。

そのため環境省は、2012 年の第 4 次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧と評価している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	準絶滅危惧

形態

開張 30mm 内外。前翅は基部から外横線まで黄褐色を帯び、前縁部と外半部は紫灰色を帯びる。後翅は淡黄色、外縁の暗色部は細く近似種に比べ発達しない。

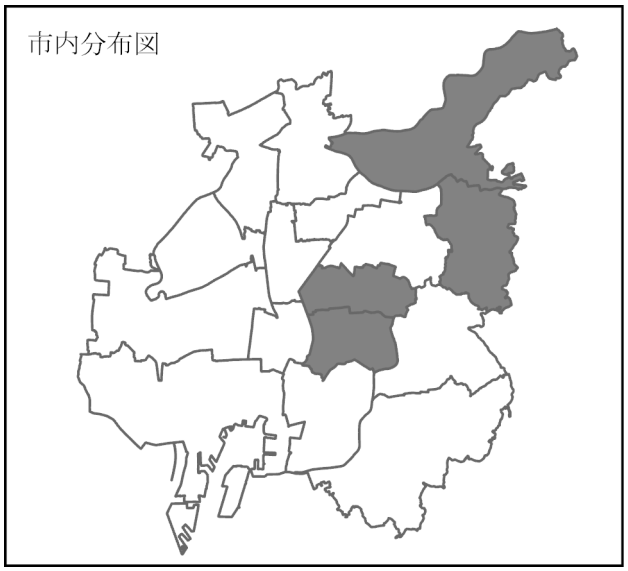
分布の概要

市内：瑞穂区雁道、昭和区檀渓通の古い記録があり、近年守山区東谷山、名東区明徳公園でも発見された。

県内：県下の平地～低山地に記録されている。

国内：本州、四国、九州、対馬。

世界：朝鮮半島、中国。



生息地の環境／生態的特性

本種は森林環境には見出されず、むしろ人里的な明るい環境を好むが、全国的に産出は局地的である。成虫は 4 月～9 月に出現する。

幼虫はイラクサ科のヤブマオなど Boehmeria 属を食べ、前蛹で越冬することが知られている。

現在の生息状況／減少の要因

過去に記録された瑞穂区や昭和区の産地は都市開発が著しく、ヤブマオなどイラクサの仲間は既になく、本種の発生は見られない。東谷山と明徳公園の記録は 2010 年代のものであり、現認可能な発生地と思われる。

都市部のイラクサは、以前は堤防や未整備の空き地に自生していたが、機械による除草が徹底し都市部ではほとんど見られなくなった。ヤブマオの生える明るい雑木林も都市部では激減している。キシタアツバとほぼ同じ食草で発生するアカタテハ（蝶）が、市街地で減少していることと同様に、キシタアツバも都市周辺では生息条件が悪化している。

保全上の留意点

残存する里山的環境における雑木林の保全が第一と考えられる。保全する緑地では、林内の衛生・森林害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限に、かつ広い面積の薬剤散布は極力避ける。また下草刈りや剪定を必要以上に行わないようにしたい。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

フシキキシタバ　*Catocala separans* Leech, 1889

評価理由

本種はコナラやアベマキを主要な構成樹種とする、低地や丘陵の雑木林に局地的に生息するが、都市近郊では開発により雑木林が失われたり、小規模化、孤立化したりして生息条件が悪化している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 50～60mm。前翅の色彩斑紋は個体差があり、黒味の強い個体もかなり白化した個体もある。基部は広く黒色を帯び、内横線は著しく太く明瞭、その外方はとくに前半で白味を帯びる。中央部は紫灰色を帯び外縁は黒褐色である。後翅の地色は濃く、他種よりいくぶん橙色を帯びて見える。後翅の中央の黒帯と外縁黒帯はつながらず、翅頂に黄斑がある。

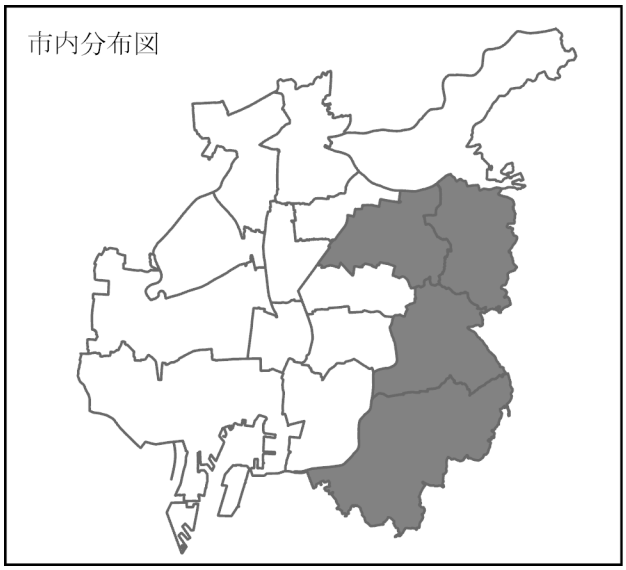
分布の概要

市内：名東区明徳公園、緑区水広下池、千種区田代町、天白区天白町で記録され、2013 年には名東区八前でも記録された。

県内：蒲郡市柏原のほか豊田市各所（大内町、松嶺町、芳友町、古瀬間町等）で記録された。近年日進市でもかなり多くの個体が採集されている。

国内：本州、四国、対馬。

世界：朝鮮、中国、ロシア南東部。



生息地の環境／生態的特性

コナラやアベマキの多い雑木林に生息する。名古屋市内では、丘陵緑地の雑木林に、カトカラ類としてコシロシタバ・マメキシタバ・アサマキシタバ・オニベニシタバなどが見られたが、2009 年にはじめて本種が市内 2 箇所で記録された。

食樹はクヌギが知られ、年 1 化で 6 月から 8 月にかけて見られ、コナラやアベマキの樹液に集まる。当地では自然植生としてのクヌギはなく、近縁のアベマキが主食樹であろう。

現在の生息状況／減少の要因

近年、市内の平和公園や猪高緑地などの大規模緑地で、カシノナガキクイムシによるナラ枯れの伝播が早く、樹液を豊富に出すようなコナラやアベマキの大径木が、次々に枯死している。本種などの平地産カトカラ類の生息条件が悪化し、憂慮される事態となっている。

保全上の留意点

現存する雑木林の適切な管理・保全が必要である。特に都市公園としての緑地の場合、往々にして過剰な整備、例えば自然林を伐採し園芸樹種を植えたり、過度の下枝刈りや除草などによる森林環境の単調化が、生物相に大きな影響を与えている例が多い。害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限とし、広範囲の薬剤散布を行わないことも大切である。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中　蕃・間野隆裕・蟹江　昇ほか，2005．豊田市自然環境基礎調査報告書（昆虫編抜粋）．豊田市．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

コシロシタバ　*Catocala actaea* Felder & Rogenhofer, 1874

評価理由

本種はクヌギやアベマキを混ずる暖温帯落葉広葉樹林の代表的な蛾であるが、開発により多くの雑木林が消滅し、都市周辺では減少の一途をたどっている。そのため環境省は、2012 年の第 4 次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧と評価している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	準絶滅危惧

形態

開張 50～60mm。前翅は一様に暗色化し、斑紋は明瞭でないが、亜腎状紋は白く明瞭。後翅は黒く大きな白斑があり、縁毛は白い。



守山区東谷山、2014 年 8 月 28 日、田中多喜彦　採集

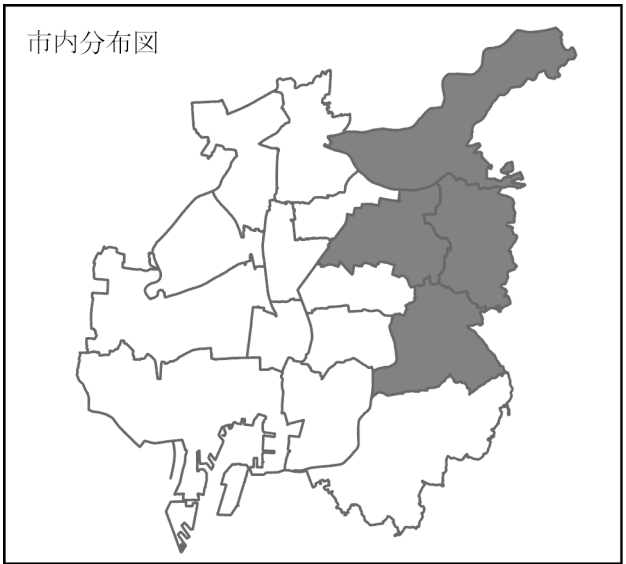
分布の概要

市内：千種区平和公園、千種区新池町などの他、近年名東区明徳公園、名東区猪高緑地、名東区塚ノ杁池、天白区相生山緑地、天白区天白町、守山区東谷山に記録がある。

県内：瀬戸市、豊田市、岡崎市、旧宝飯郡一ノ宮町など低地・丘陵地の二次林に記録が多い。

国内：全国。

世界：朝鮮、中国、ロシア南東部。



生息地の環境／生態的特性

クヌギやアベマキを混ずる暖温帯二次林の指標種となる蛾で、7～9 月に出現する。発生地では多くの個体が昼間はアベマキなどの樹幹に静止していて、近づくと逃げるが、すぐ近くの樹幹に止まる。幼虫は樹皮に擬態する。

現在の生息状況／減少の要因

かつては尾張丘陵の各所に雑木林が多くあり、コシロシタバの生息に好適な条件があったと思われるが、今日都市部では市街地に島のように残された緑地に、ようやく命脈を保っている。

保全上の留意点

現存する雑木林の適切な管理・保全が必要である。特に都市公園としての緑地の場合、往々にして過剰な整備、例えば自然林を伐採し園芸樹種を植えたり、過度の下枝刈りや除草などによる森林環境の単調化が、生物相に大きな影響を与えている例が多い。害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限とし、広範囲の薬剤散布を行わないことも大切である。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑．p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

マダラウスズミケンモン　*Acronicta subornata* (Leech, 1889)

評価理由

産出は非常に局地的で個体数も少ない、いわゆる希少種である。いままでに確認された記録から見ると、クヌギやアベマキを食樹とする低地～丘陵地の暖温帯二次林の蛾と思われる。このような環境は全国的に開発により減少し、生息条件が悪化している。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	－

形態

開張 41～46mm。前翅地色は暗灰褐色、環状紋は大きく、黒環を有し内部に暗色の核がある。前翅全体に白色鱗片を混ずる。後翅は灰黄色、暗色の横線のほか外縁部に暗色部を有する。



天白区八事裏山、2010 年 9 月 4 日、田中多喜彦　撮影

分布の概要

市内：2010 年以降に天白区八事裏山、千種区平和公園、名東区明徳公園から記録された。

県内：1970 年の小原村永太郎（現豊田市）の記録があるのみである。

国内：本州（栃木県から兵庫県まで）と九州（宮崎県）に記録があるが、産地は少なくまれ。

世界：朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

低地～丘陵地のクヌギやアベマキのある雑木林に生息する。千種区平和公園でアベマキから幼虫が確認されている。年 2 化で成虫は 4～5 月と 8～9 月に出現する。秋 10 月に見られる幼虫は蛹で越冬し、春に羽化する。

現在の生息状況／減少の要因

名古屋市内で記録された 3 地点は、現状では公園緑地区画内にあり、環境は保全されている。しかし本種は、平地・丘陵地の二次林の蛾であり、かつては連続的に生息していたものが、開発により分断され、遺伝子交流も困難になっていて、生存基盤は脆弱である。

保全上の留意点

緑地の雑木林の適切な管理・保全が必要である。過剰な整備、例えば園芸樹種に替えたり、過度の下枝刈りや落葉除去等をしない。害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限とし、広範囲の薬剤散布を行わないことも大切である。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中多喜彦，2011．名古屋市東部の丘陵 2 箇所で 9 月に採集されたマダラウスズミケンモン．佳香蝶，64(249): 11.

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

ホソバオビキリガ　*Dryobotodes angusta angusta* Sugi, 1980

評価理由

全国的に産地が局限され個体数も少ない、いわゆる希少種であるが、過去の採集例から、平地や盆地などの雑木林（二次林）に生息していると思われる。このような都市近郊の二次林は開発の波にさらされ、本種の産地も、人知れず減少の一途をたどっていると思われる。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 30～34mm。前翅は同属他種より幅狭く、灰黒褐色。内・外横線とも二重で、外横線は鋸歯状。環状紋は斜傾する小楕円形で黒色環を有し中心は淡色、腎状紋も淡色で環を持たず外側の輪郭はぼやける。後翅は淡黒褐色で、より濃色の外横線と横脈紋がある。



日進市御嶽山、2012 年 11 月、田中多喜彦　採集

分布の概要

市内：名東区明徳公園、千種区田代町で記録がある。

県内：日進市岩崎町御嶽山で記録されている。

国内：全国に分布するがまれな種。兵庫県黒田庄町（ホロタイプ）の他、岩手県岩泉町、香川県高松市、小豆島、福岡県福岡市、大牟田市などに記録がある。

世界：朝鮮半島、中国の一部。



生息地の環境／生態的特性

暖温帯落葉樹林の蛾と思われ、比較的植生の安定した二次林に発生する。幼虫期を含め生態が明らかでないが、成虫は年 1 回晩秋 11 月から 12 月にかけて出現し、成虫越冬しない。

灯火に飛来し、糖蜜にも来る。

現在の生息状況／減少の要因

産地である名東区明徳公園は、市の緑地としての公園整備がなされている。

最新の学研の日本産蛾類標準図鑑では、「全国的に産出は非常に局所的で得がたい種」とある。元々平地産で産出量が少ない上に、都市近郊の雑木林の開発による消滅が、減少に拍車をかけている。

東海三県では今回が初記録と思われる。

保全上の留意点

緑地に松枯れのほか、近年ナラ枯れ被害が急速に進行しているが、安易に広面積に害虫駆除の薬剤散布を行わないことが望ましい。現存する名古屋市内の二次林環境は、可能な限り現状を維持し、保全することが望ましい。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

ウスミミモンキリガ　*Eupsilia contracta* (Butler, 1878)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

ハンノキ林に固有の種で、比較的産地は局限される。近年里山のハンノキ林が開発等で減少しているため、特に関東地方でレッドリストに抽出する県が多い。環境省は、2012 年の第 4 次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧と評価している。

形態

開張 40～45mm。前翅はやや細長く、地色は褐色～黄褐色。内横線と外横線は淡色で明瞭、環・腎状紋も淡色で縁取られる。



千種区平和公園、2013 年 2 月 14 日、田中多喜彦　採集

分布の概要

市内：千種区平和公園のハンノキ林から記録され、同地で 2013 年にも発生を確認している。

県内：犬山市、豊田市から記録され、近年日進市の天白川上流部に豊産することが知られた。

国内：全国に分布するが局地的。

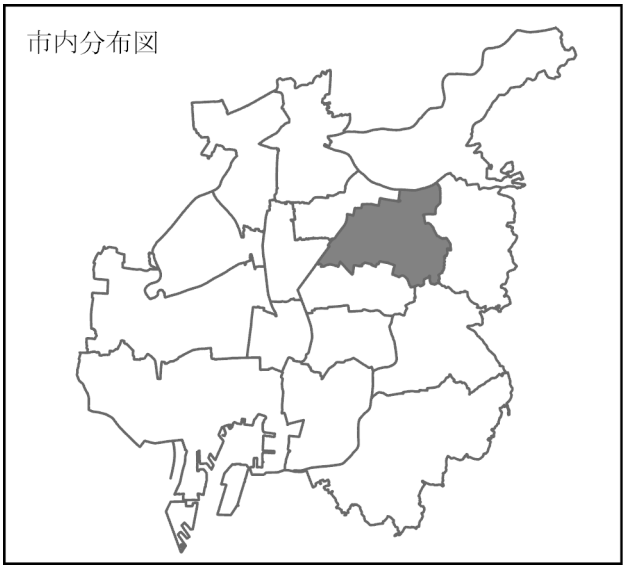
世界：朝鮮半島とロシア南東部。

生息地の環境／生態的特性

食樹のハンノキは、池畔や湿地などに自生し、狭食性であるため、本種を確認するためにはハンノキ林を探索する必要がある。

近距離なら灯火に飛来するが、一般に灯火採集では得がたく、糖蜜採集で得られる。

年 1 化で 10 月に羽化、越冬し 4 月まで見られる。



現在の生息状況／減少の要因

ハンノキの群生する湿地は、都市部では多くが土地造成で埋め立てられ激減している。名古屋市内では、緑地として保全された場所に、本種はようやく命脈を保っている状況である。

保全上の留意点

現存するため池の池畔や湿地などに自生する、ハンノキ林の保全が必要である。ハンノキ林は他にもオナガミズアオやミドリシジミなどのよく知られた昆虫が発生し、固有の生態系をもっているので、そのまま生態的な生きた博物館として、一定区画を残せれば理想的である。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．

杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．

岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～ IV．学習研究社，東京．

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．

田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

ミスジキリガ　*Jodia sericea* (Butler, 1878)

評価理由

コナラやアベマキを主要な構成樹種とし、カシ類を交える低地や丘陵の雑木林に生息するが、都市近郊では開発により雑木林が失われたり、小規模化、孤立化したりして生息条件が悪化している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	準絶滅危惧

形態

開張 32～35mm。前翅は明るい橙赤色、3 本の横線は褐色でやや不明瞭。環・腎状紋は淡色で縁取られるが不明瞭。後翅は白色で僅かに橙赤色を帯びる。

分布の概要

市内：千種区平和公園（南部）で、2001 年 12 月 14 日に 1 雄が記録されている（福住和也）。
県内：犬山市富士、小原村永太郎（現豊田市）、豊田市猿投山、同六所山から記録されている。
国内：全国に分布するが、産出はやや局所的。
世界：朝鮮半島、中国、ロシア南東部。



生息地の環境／生態的特性

平地～低山地の二次林の蛾で、幼虫はクヌギ、アラカシ、カシワから得られている。
成虫は一般に灯火採集では得がたく、糖蜜採集で得られる。年 1 化で 10～11 月に羽化、越冬し 4 月まで見られる。

現在の生息状況／減少の要因

本種は元来、産出量が少なく、産地も比較的限定されている種である。都市部の雑木林は、開発により分断・縮小され生存条件は悪化している。近年市内では平和公園や猪高緑地などの大規模緑地で、カシノナガキクイムシによるナラ枯れの伝播が早く、本種等アベマキやコナラなどのコナラ属 Quercus に依存すると思われる種の生息条件が悪化し、憂慮される事態となっている。
環境省は、2012 年の第 4 次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧と評価している。

保全上の留意点

現存する雑木林の適切な管理・保全が必要である。特に都市部の緑地公園では自然林を伐採し園芸樹種を植えたりしないこと。また、過度の下枝刈りや除草、害虫駆除目的の薬剤散布等には十分な配慮が必要である。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

アトジロキリガ　*Dioszeghyana mirabilis* (Sugi, 1955)

評価理由

愛知県では都市近郊の丘陵の、カシ類をまじえた二次林から記録されているが、このような環境は公園としての整備や土地開発のための改変を受け易く、生息条件が安定していない。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 30～33mm。前翅は淡い茶褐色ないし紫灰色、暗色鱗を密布する。腎状紋は常に暗色に染められる。後翅はほとんど白色で、外縁部が少し淡褐色を帯びる。



守山区東谷山、2003 年 4 月 13 日、福住和也　採集

分布の概要

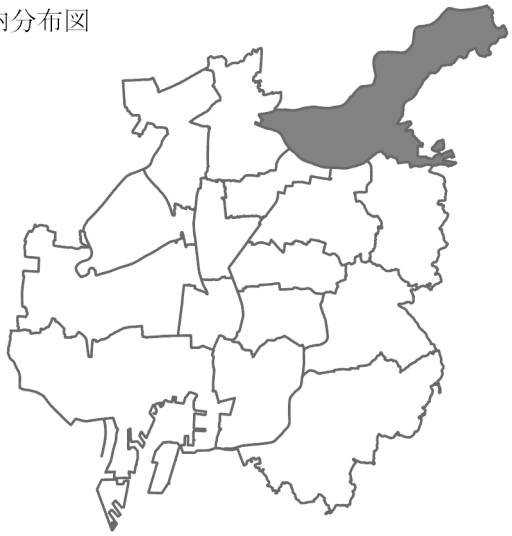
市内：守山区東谷山に記録がある。

県内：瀬戸市定光寺、春日井市等の愛岐丘陵に記録があり、産地は局限される。

国内：北海道、東北、関東から東海地方までと九州の鹿児島県に記録があるが局地的でまれ。

世界：朝鮮、ロシア南東部。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

名古屋市内で唯一の産地東谷山は、シイ、カシ類の古木の茂る照葉樹林を残し、コナラ、アベマキなどの生育する二次林が混交する、市内では特別に樹相の豊かなところである。

岐阜県では岐阜市金華山で発見され、近年高山市野麦峠や飛騨市宮川町などの山間地で記録されている。年 1 回春 4 月中・下旬に出現し、幼虫はカシ、サクラで飼育が可能である。

現在の生息状況／減少の要因

愛知県下では東谷山、定光寺、古虎渓（岐阜県）などの観光地を含む愛知・岐阜県境の愛岐丘陵に限って分布しているが個体数は少ない。分布が局限される要因が定かでなく、分析が困難である。

保全上の留意点

東谷山の 27.7ha ほどが、2010 年 4 月 1 日に愛知県の自然環境保全地域に指定され開発が制限された。しかしこの周辺の二次林の調査は不十分であり、広い範囲で生態系を温存したい。ナラ枯れ対策等で農薬を使うときには生態系への十分な配慮が必要である。

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
岡田正哉，1966．アトジロキリガの幼虫．蛾類通信，41: 371-372．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．
田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜バッタ目クツワムシ科＞

タイワンクツワムシ　*Mecopoda elongate* (Linnaeus, 1758)

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

評価理由

河川敷きや空き地などの草原に生息するため、人為的な環境変化に影響を受けやすい。成虫は飛翔力が強く、生息地を広げやすいが、幼虫時に生息地で除草が行われると生息が困難になる。河川改修や宅地造成などの影響が懸念される。

形態

翅端までの体長は、雄雌共に 50mm～65mm である。体色は茶褐色で、♀では前翅に黒色や濃褐色の斑紋が見られる。幼虫では緑色の個体が生じる。丸みのある体型のクツワムシに比べると、本種では体が細長く翅も長い。また、♀の産卵管はクツワムシは直線状であるのに対し、本種では上方に湾曲する。



タイワンクツワムシ　雌
天白区平針、2023 年 10 月、内藤遊多　撮影

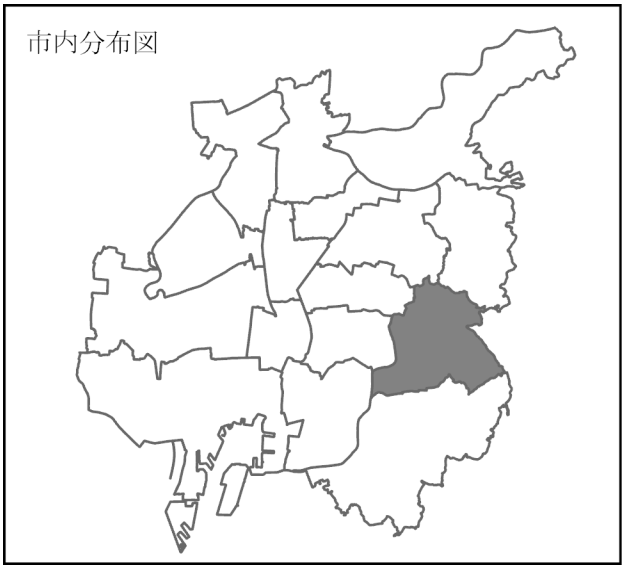
分布の概要

市内：現在の記録は天白区平針の天白川河畔だけで、他地域からは未記録である。

県内：名古屋市以外では、岡崎市、常滑市、西尾市、知多郡阿久比町など局所的ではあるが広く分布する。

国内：神奈川県、長野県から、静岡県、愛知県、三重県などの本州の太平洋沿岸部、瀬戸内海沿岸部、四国、九州のほか、伊豆諸島や南西諸島に分布する。

世界：東南アジアに広く分布する。



生息地の環境／生態的特性

タイワンクツワムシの生息地は天白川流域にある草原であるが、時には隣接するマント群落やソデ群落にも生息する。これは、草食性の幼虫や成虫が天敵から身を守りつつ、安定的に多様な餌が供給される環境に生息するためである。

現在の生息状況／減少の要因

都市周辺の河川敷は、景観や娯楽・防犯など人間が快適に利用するため、繰り返し草刈りが行われる。その影響は、タイワンクツワムシだけでなく草原に生息する昆虫の幼虫や成虫が鳥やクモなどの天敵の目に晒されたり、直射日光による極端な乾燥で個体や草や低木の生息が困難になったりするため、生息を困難にしている。

保全上の留意点

生息地では、多様な草本や低木が生える腰の高さくらいの広い草原を維持しておく必要がある。景観や安全上、広域に草原を維持することが困難であれば、生息地に直径 10m くらいの円形の草地を 5 か所以上残すとか、幅 5m くらいの横長の帯状の草地を生息地全体に残すなどの対策が必要である。また、発生時期が初夏から秋頃までなので、草刈りを 10 月中旬以降に実施できれば個体の生息に支障が生じにくいと考えられる。隣接する日進市浅田町付近にも本種が生息しているので、天白区内の生息環境が維持されれば、日進市からの個体の流入が生じる可能性もあり、天白川河畔の生息数がふえるかもしれない。

特記事項

鳴き声はクツワムシと同様で「ガチャ、ガチャ」連続しているが、クツワムシほど大きな鳴き声ではない。また、鳴き始めは、「ギュル、ギュル」とか「ギー、ギー」とか違った鳴き方をする。また本種は、羽化した直後に鳴くことができず、時間が経過して成熟すると鳴き始める。長い翅を持つ本種は、クツワムシと比べると飛翔力が強く、灯火にも飛来するため、生息条件が整えば分布域を広げやすいと思われる。

関連文献

日本直翅学会（編），2006．バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑，p.139,p.446-447．北海道大学出版会，北海道．

（水野利彦）

昆虫類　＜バッタ目ツユムシ科＞

ホソクビツユムシ　*Shirakisotima japonica* (Matsumura et Shiraki, 1908)

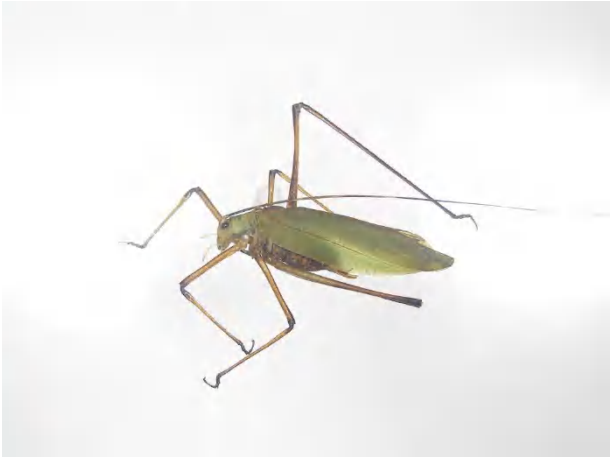
評価理由

本種は、山地性の種で、一般に標高 1,000m 以上の山地帯に生息し、7 月下旬以降に羽化する。今回の調査で、標高 70m の丘陵地で 6 月上旬に終令幼虫が発見された。本種としては、過去に記録されていない分布域と発生期の特異な個体群と考えられる。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

翅端までの体長は、雄雌共に 19mm～26mm である。体色は緑色で、前胸背や脚部は茶褐色である。前胸背の茶褐色部が、中央部で細くなっていることが和名の由来であると思われる。また、長い黒褐色の触角の所々に、黄白色部が規則的に見られることも本種の特徴である。



守山区東谷山、水野利彦　撮影

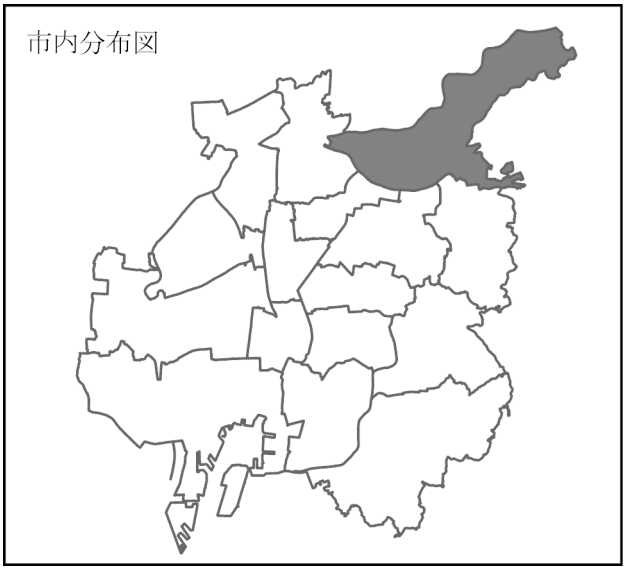
分布の概要

市内：現在の記録は守山区東谷山南側の湿地内だけで、他地域からは未記録である。

県内：名古屋市以外では、豊田市稲武町から長野県県境の標高 1,000m 付近に広く分布する。

国内：本州、四国、九州、佐渡島、屋久島。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

本種の生息地は、東谷山の湿地で、常に湧水があり湿地の半分以上が水に覆われた状態である。本種の幼虫は、湿地内の灌木上に生息している。一般に本種は、山地帯の樹林のマント群落や周辺の草原に生息しており、湿地との関係はないと思われる。東谷山周辺には、本種を含めて県内山間部に分布する種が残存していることがある。この事実は、過去の広い分布域が人間によって分断された事を示していると考えられる。

現在の生息状況／減少の要因

豊田市猿投山からも、少数の記録はあるが詳細な生息環境は不詳である。現状では、東谷山が最も標高が低く早い出現期の産地である。また、狭小で孤立した産地であるため、個体数も少ないと思われる。

保全上の留意点

狭小で孤立した産地であるため、現在の環境を変更することなく、かつ、周囲の環境の保全にも努め、個体数の減少がないよう保護するべきである。

特記事項

今回の調査では確認できなかったが、山地帯では年一化とされているものの、このような低標高地では年二化の可能性も考えられる。

関連文献

日本直翅学会（編），2006．バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑，p.139,p.446-447．北海道大学出版会，北海道．

（水野利彦）

昆虫類　＜バッタ目バッタ科＞

ハネナガイナゴ　*Oxya japonica* (Thunberg, 1824)

評価理由

稲作の害虫として知られる。1950 年代の農薬の大量使用で本種は近似種のコバネイナゴと共に壊滅的打撃を受けたという。その後の農薬の規制でコバネイナゴの勢力は回復したが、本種は回復が遅れているという。その原因や今後の動向に興味がもたれる。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

有翅。全体に緑色だが背面が淡色あるいは褐色～赤褐色のものもいる。複眼から後方にかけ暗褐色条が明瞭。翅は後脚腿節より長い。なお近似種コバネイナゴにも同程度に長い翅を持つ個体がおり、同定には両種の翅の長さだけではなく、外部生殖器の構造の比較も必要である。



守山区東谷山、1986 年 8 月、岡田正哉　撮影

分布の概要

市内：守山区。

県内：三河～尾張地方に点々と分布する。また伊勢湾内の島にも生息している。豊田市、犬山市、豊橋市、南知多町（篠島）、一色町（佐久島）など。

国内：本州、四国、九州、南西諸島など。

世界：韓国、台湾、中国、東南アジア？。



生息地の環境／生態的特性

湿地や水田、また河川沿いのよく湿った草地に見られる。生息地での個体密度は比較的高い。驚くとよく飛ぶ。灯火にも集まる。多くの場合コバネイナゴと混棲する。

現在の生息状況／減少の要因

既知産地は守山区東谷山山麓の湿地。この湿地は宅地造成のため広い範囲が消失した。残った草地も乾燥化が進み生息環境は悪化した。

保全上の留意点

既知産地周辺の湿地・草地はこれ以上の開発・整備を控えること。水脈を確保し乾燥化を防ぐこと。

関連文献

岡田正哉，1990．愛知県の直翅目（1）．愛知県の昆虫（上），pp.87-93．愛知県．
日浦　勇，1993．ハネナガイナゴ．原色日本昆虫図鑑（下），p.81．保育社，大阪．
福原楢男，1982．水田に見られる直翅目害虫の見分け方（1）．植物防疫，36(11): 34-38．
日本直翅学会（編），2006．バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑，p.265,p.529．北海道大学出版会，北海道．

（岡田正哉、水野利彦）

昆虫類　＜カメムシ目コオイムシ科＞

コオイムシ　*Appasus japonicus* Vuillefroy, 1864

評価理由

県内に広く分布するが、ため池の埋め立てなど止水環境の悪化により、平野部では個体数が減少していると考えられる。

市内における正式な記録は少ない。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長は 17～20mm で、体型は偏平な卵形を呈する。体色は黄褐色～褐色で、前脚は鎌状の捕獲脚となっている。



南区、2019 年 4 月 6 日、澤田宗一郎　撮影

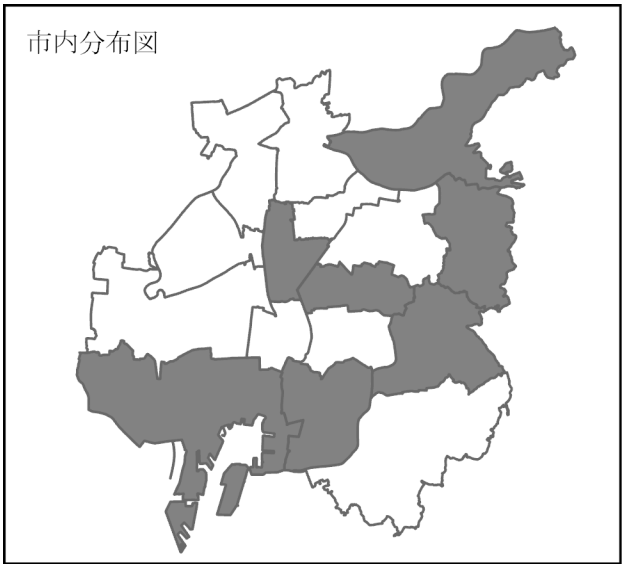
分布の概要

市内：比較的広く生息していたとされるが、正式な記録は少ない。守山区、昭和区などで確認されている。

県内：新城市、豊橋市、豊川市、豊田市、瀬戸市、春日井市、日進市、東海市、常滑市など。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：中国、朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

水草の多いため池、水田地帯の素堀の水路、湿地や休耕田の浅い水たまり、河川のワンドなど比較的様々な環境に生息する。

雌が雄の前翅背面上に卵塊を産み付ける習性がある。

現在の生息状況／減少の要因

県内における生息地は、産地・個体数とも比較的多いが、市内では水草の豊富なため池などに限られる。

平野部では、水質の悪化のほか、特にため池や湿地などの埋め立てによる生息地そのものの消失が減少要因となっている。

保全上の留意点

ヤゴやオタマジャクシなど他の水生動物を餌とする捕食者であるため、これら水生動物が豊富に生息する環境を維持する必要がある。

現存するため池の水質悪化を防ぐと共に、水生動物の天敵であるオオクチバス（ブラックバス）などの外来種を駆除することも重要である。

引用文献

広　正義ほか，1983．名古屋城外堀生物調査報告書．59pp．名古屋城管理事務所．
矢崎充彦，2010．名古屋市で得られた分布上特記すべき半翅類．佳香蝶，62(243): 51-55.

（矢崎充彦、澤田宗一郎）

昆虫類　＜コウチュウ目エンマムシ科＞

クロエンマムシ　*Hister concolor* Lewis, 1884

評価理由

近年の記録は途絶えており，大型のエンマムシ類のうち特に平野部に生息する種は、牧場の閉鎖や衛生環境の整備に伴い生息が困難になってきている。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	－

形態

体長 6.8～9.0mm。黒色で光沢がある。上翅の第 1～3 背条は完全、第 4～6 背条は基半部を欠く。前尾節板はやや密に、尾節板はやや密に、尾節板はきわめて密に粗大点刻を装う。

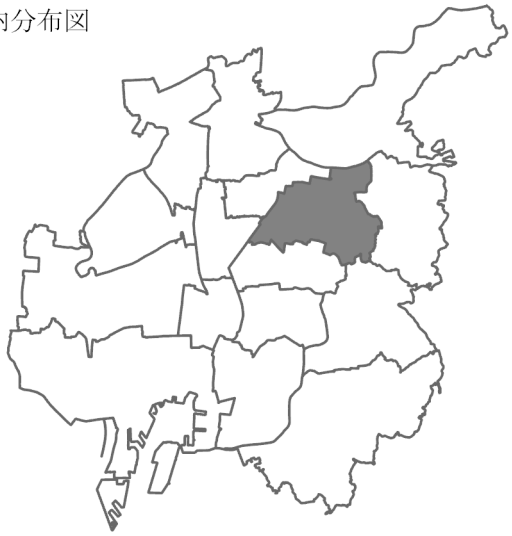


豊田市大野瀬町、2009 年 10 月 25 日、戸田尚希　撮影

分布の概要

市内：千種区（佐藤，1990）。
県内：旧長久手町、豊田市。
国内：北海道、本州。
世界：千島列島、中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

やや新しい牛糞などに集まる。

現在の生息状況／減少の要因

本種を含め大型のエンマムシ類は、近年いずれも発見が困難になってきている。平野部の衛生環境の整備が、生息環境に影響しているものと思われる。

保全上の留意点

ウジ類を捕食するエンマムシ類の減少の背景には、野生動物の減少や衛生環境の整備が、生息環境に影響していると思われる。

引用文献

佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県農地林務部自然保護課.

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編），1985. 原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.227. 保育社，大阪.
愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　–レッドデータブックあいち 2009–　動物編，p.396. 同県環境部自然環境課，名古屋.
大原昌宏，1996. 日本産エンマムシ上科概説Ⅳ. 甲虫ニュース，(116): 7-10.
戸田尚希・長谷川道明・大野友豪・蟹江昇，2021. 愛知県の甲虫目録 7(2)(エンマムシ科－エンマムシ亜科，アリヅカエンマムシ亜科). 佳香蝶，73(286): 33-46

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ガムシ科＞

ヒメシジミガムシ　*Laccobius* (*Microlaccobius*) *fragilis* Nakane, 1966

評価理由

河川の流水につながる様な水溜りが主な生息地であるが、この様な環境は昨今の河川整備により減少していている。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長 2.3～2.9mm。上翅には 10 点刻列をそなえ、間室の点刻は密で点刻列のそれとほぼ同じ。近似のコモンシジミガムシとは、上翅亜外縁の点刻が無いことで分けられる。



採集地等不明

分布の概要

市内：守山区松河橋（Nakane, 1966）。
県内：豊田市、弥富市。
国内：本州、四国、九州。
世界：現状では国外から未知。

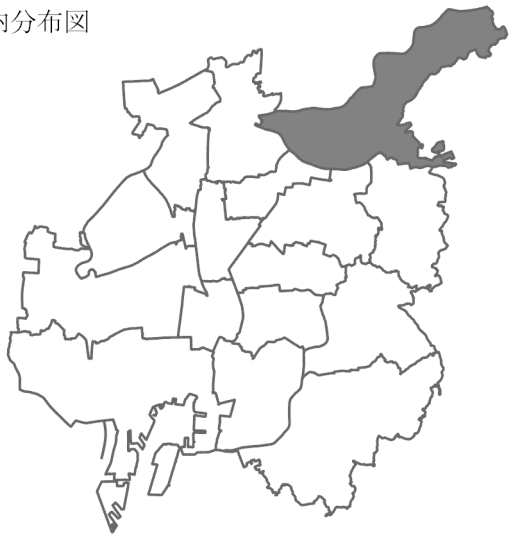
生息地の環境／生態的特性

河川敷等の流水につながる様な水溜りに生息する。

現在の生息状況／減少の要因

河川整備が進み、河川敷の様な更新地の水域を好む種には、大変厳しい状況になってきている。

市内分布図



保全上の留意点

残っている自然池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。

特記事項

守山区松河橋付近の庄内川で 1957 年に採集された個体が、新種の記載に使われた。

引用文献

Nakane, T., 1966. New or little-known Coleoptera from japan and its adjacent regions. XXXIII . Fragmenta Coleopterologica, (13/15):51-59.

関連文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上）, pp.204-231. 愛知県の農地林務部自然保護課.
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編）, 1985. 原色日本甲虫図鑑（Ⅱ）, p.214. 保育社, 大阪.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ガムシ科＞

コガムシ　*Hydrochara affinis* (Sharp, 1873)

評価理由

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	情報不足

形態

16.0～18.0mm。体型は長卵形で、表面には光沢がある。後胸棘突起は先端が尖るがやや鈍り、後基節間で終わる。



守山区中志段味、2010 年 7 月 18 日、戸田尚希　採集

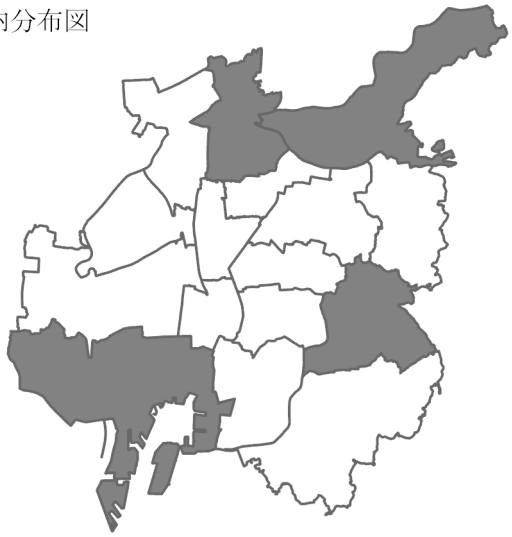
分布の概要

市内：守山区、北区、港区、庄内川（以上すべて吉鶴ほか，2008）、天白区。

県内：愛西市、安城市、稲沢市、犬山市、岡崎市、春日井市、蒲郡市、刈谷市、小牧市、新城市、田原市、津島市、知立市、豊田市、日進市、東浦町、弥富市。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島、中国大陸、モンゴル。



生息地の環境／生態的特性

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。流れのよどんだ小河川でも見つかる。また街灯などの光にも寄ってくる。

現在の生息状況／減少の要因

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。

保全上の留意点

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

特記事項

東部丘陵には、よく似たエゾコガムシが生息している。

引用文献

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上）, pp.204-231. 愛知県.

吉鶴靖則・森　勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編　自然　目録，pp.102-156. 名古屋市.

戸田尚希，2010. 愛知県と岐阜県におけるエゾコガムシの記録. 佳香蝶，62(241): 12.

関連文献

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編），1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.39,p.216. 保育社，大阪.

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目カッコウムシ科＞

ヤマトヒメメダカカッコウムシ　*Neohydnus hozumii* Nakane, 1981

評価理由

河川敷や沼地、河口部の芦原より得られている。この様な所は河川やため池の改修により整備が進みやすく、本種の生息地も減少していくと思われる。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長 5.5mm 内外。頭部は横皺と点刻を密に具える。触角第 9 節はやや幅広く、第 10 節と球悍をつくる。前胸背板は滑らかな正中部を除き、不規則に皺状に点刻され、側瘤の上に斜めの窪みがある。上翅の斑紋には変化があり、前胸の黒いものもある。



守山区、2009 年 7 月 25 日、戸田尚希　撮影

分布の概要

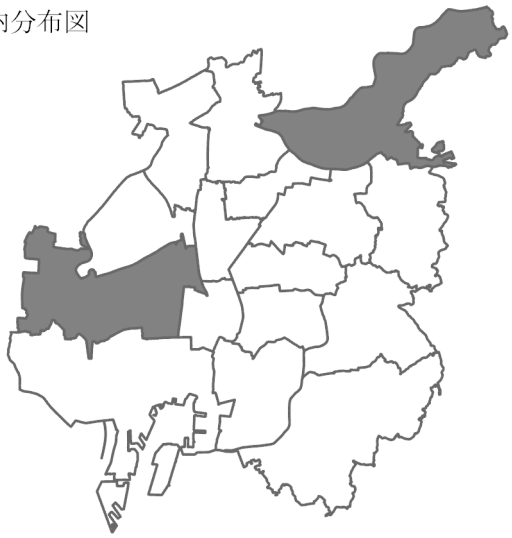
市内：中川区庄内川（Nakane, 1981）、守山区。
県内：知多市（穂積，1990）。
国内：本州。
世界：現状では国外からは未知。

生息地の環境／生態的特性

河川敷や河口部、沼地などの芦原に生息している。

現在の生息状況／減少の要因

河川敷や沼地などの芦原は、整備が進み本種の生息には向かなくなりつつある。



保全上の留意点

残っている自然池の保全や河川敷の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。

特記事項

庄内川等の市内で採れた個体が、新種の記載に使われた。

引用文献

Nakane, T.，1981．New or little-known Coleoptera from japan and its adjacent regions. XXXIII . *Fragmenta Coleopterologica*，(29/32): 125-130.
穂積俊文，1990．愛知県の甲虫類（Ⅱ）．愛知県の昆虫（上），pp.232-308．愛知県農地林務部自然保護課．

関連文献

黒沢良彦ほか，1985．原色日本甲虫図鑑（Ⅲ），p.154．保育社，大阪．

（戸田尚希）

昆虫類　＜コウチュウ目ゾウムシ科＞

カギアシゾウムシ　*Bagous bipunctatus* (Kôno, 1934)

評価理由

カギアシゾウムシ類はいずれも全国的に少ない種で散発的に採集されるにすぎない。その生態については水辺環境に生息する事くらいしか解っていない。水辺環境の悪化は急速に進行しており、生態も分からないうちに姿を消してしまう事も懸念される。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	－

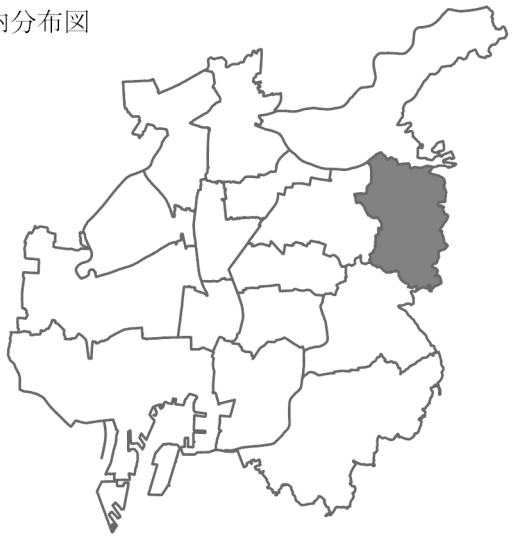
形態

著しい特徴は、後脛節が湾曲しカギ状になっていることである。カギアシゾウムシの他にきわめて近似の数種が隣接する市地域に分布することから、同定には注意が必要であり，本記録もバッキンガムカギアシゾウムシの誤認と考えられる。

分布の概要

市内：名東区猪高緑地（村上，1986）。
県内：岡崎市、豊田市、常滑市、弥富市。
国内：北海道、本州、四国、九州。
世界：朝鮮半島。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

カギアシゾウムシは灯火やスィーピングにより、田畑の周囲で散発的に捕らえられているが、ホストはため池の水草類や岸辺の植物などが推定される。

現在の生息状況／減少の要因

採集例が少なすぎて減少しているかどうか全く解らないが、水辺の環境が悪化している現状では、絶滅の危険性はかなり高いと思われる。

保全上の留意点

現状ではまったく偶然に得られるのみであるため基礎的な情報がないが、水辺環境の悪化を止め水域を保全することが望まれる。

引用文献

村上哲生，1986．猪高緑地内の池の魚類と底棲生物．ため池の自然（名古屋ため池の自然研究会会誌），(4):7-8.

関連文献

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物　–レッドデータブックあいち 2009–　動物編，p.396．同県環境部自然環境課.

（戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目マダラガ科＞

ヤホシホソマダラ　*Balataea octomaculata* (Bremer, 1861)

評価理由

昼飛性の蛾で、明るい草原を飛び花に集まる。本州では湿性草原でよく採集される。今日、草地環境が全国的に減少していて、本種の見られなくなった場所も多い。そのため環境省は、2012 年の第 4 次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧と評価している。名古屋市では古い記録があるのみで分布の実態がつかめていない。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	準絶滅危惧

形態

開張 16～21mm。触角は雄では両櫛歯状、雌では糸状。東海地方の草地にはよく似たキスジホソマダラが同時に産するので、同定には注意が必要である。前翅は暗褐色で、黄色班はキスジホソマダラに比べ短く明瞭。後翅は半透明で透明部が広く外縁の黒色部は細い。

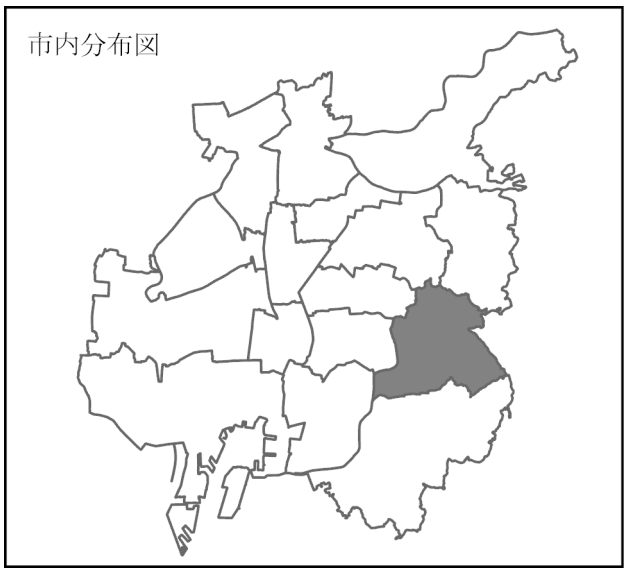
分布の概要

市内：1972 年 6 月に天白区平針で、有田豊氏により同時に 11 雄が記録されたのが唯一の記録。

県内：近縁のキスジホソマダラは各所で得られているが、本種は上記の記録のみである。

国内：全国に分布する。

世界：朝鮮半島南部、中国北部、ロシア南東部。



生息地の環境／生態的特性

成虫は 6 月と 8～9 月に出現し、昼間活動しハルジョオン・ヨメナなどの花に吸蜜する。明るい草地を好み、本州では特にハッチョウトンボの産するような湿地を好むという。幼虫はササ類やヌマガヤなどイネ科を食べる。

現在の生息状況／減少の要因

1972 年の古い天白区平針の記録以外になく、現在の生息状況は不明である。岐阜県では 2009 年に、中津川市苗木・瑞浪市日吉町の 2 箇所からはじめて記録された。減少の要因は明らかでないが、本種が湿地に生息するとすれば、埋め立て等による湿地の減少が理由となる。いずれにせよ名古屋市周辺の湿地の昼間の積極的な調査が必要である。

保全上の留意点

現存する湿地環境の生態系をよく調査し、保全の措置をとる。上部の水脈を保持するとともに、周辺の開発・改修には十全な配慮が必要である。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
笠井初志ほか，2013．岐阜県蛾類採集記録（2013 年編纂）．岐阜県昆虫分布研究会．

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目スズメガ科＞

オオシモフリスズメ　*Langia zenzeroides nawai* Rothschild & Jordan, 1903

評価理由

日本最大のスズメガであるが、産地は比較的局地的である。東海地方以西の人里的環境に生息する。名古屋市内では 2014 年に 1 頭記録されたのみであり、分布実態を把握するには情報不足である。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 140～160mm。雌は雄よりやや大きい。口吻は退化してごく短い。前翅頂は鋭くとがり、外縁は鋸歯状。胴は太く胸部から腹部にかけ毛状鱗が密生し、肩板に黒条がある。



守山区東谷山、2014 年 4 月 3 日、田中多喜彦　採集

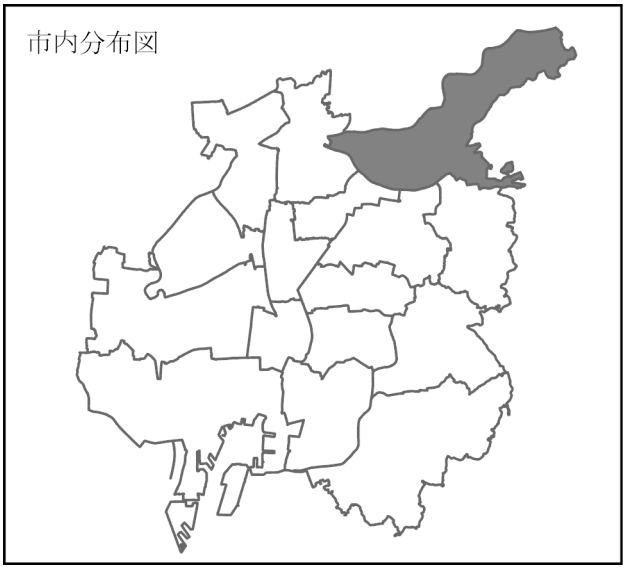
分布の概要

市内：守山区東谷山南麓で、2014 年春に 1 雌が採集された。

県内：尾張丘陵から三河山間部にかけて広く分布する。近年減少傾向にある。

国内：本州（東海地方以西）、四国、九州に分布する。

世界：朝鮮半島南部、台湾、中国南部、インドシナ半島北部からネパール。



生息地の環境／生態的特性

成虫は春 3 月下旬～4 月に出現する。食樹がサクラ類、ウメ、アンズ、スモモ、モモなどのバラ科の栽培種のため、低山地の人里近くに発生する。

現在の生息状況／減少の要因

守山区東谷山はサクラの古木があり、近くに果樹園もあり生息環境は整っている。既知産地の瀬戸市定光寺とは山続きであり、同一個体群に属すると思われる。

減少要因としては、生息地が開発されやすい里山であることのほか、水銀灯などの灯火による分布の撹乱もあるであろう。水銀灯に飛来した本種が、フクロウ類の餌になっているのを目撃したことがある。

保全上の留意点

市東部にわずかに残る里山的環境は、サクラや梅林、コナラやアベマキの二次林や小湿地と小流など、名古屋市の動植物相をはぐくむモデルとして、そのまま生態的な生きた博物館として一定区画を残せれば理想的である。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．:愛知県．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

トウカイツマキリアツバ　*Tamba roseopurpurea* Sugi, 1982

評価理由

岐阜県でアラカシから幼虫が採集されていて、和名のように東海地方のカシ類の多い照葉樹林を標徴する蛾の一つと考えられるが、市内では安定した照葉樹林が少なくなっている。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

開張 26～33mm。地色は淡黄褐色、前・後翅とも淡い紫紅色を帯びる。各横線は淡色で明瞭、紫褐色に縁取られる。腎状紋は大きく淡色の環をなし、その中に 2 個の小暗色点がある。前翅の内横線は直線状で斜走する。



守山区東谷山、2006 年 11 月 10 日、田中多喜彦　採集

分布の概要

市内：守山区東谷山で 2006 年に記録された。
県内：設楽町、新城市、旭町、足助町、額田町、音羽町、豊田市などで採集されている。
国内：東海地方以西の本州と四国（高知県）、九州（大分・宮崎県）に記録がある。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

東海地方の照葉樹林やカシ類を交えた雑木林に生息する。6 月から 9 月にかけて採集されているが、名古屋市東谷山では 11 月中旬に比較的新鮮な個体が採集されている。化性や発生の周年経過はよく分かっていない。

愛知県では、豊田市では近年新しい産地が多く見つかっている。しかし全国的にみると局地的でまれな種である。

現在の生息状況／減少の要因

産地である東谷山の照葉樹林は、2010 年に愛知県の自然環境保全地域に指定された。

都市近郊では、本種の生息するカシ類を含む雑木林が、開発で減少している。

保全上の留意点

緑地にナラ枯れ被害が急速に進行しているが、安易に広面積に害虫駆除の薬剤散布を行わないことが望ましい。現存する名古屋市内の照葉樹林は、可能な限り保存することが望ましい。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．
田中番・間野隆裕・蟹江　昇ほか，2005．豊田市自然環境基礎調査報告書（昆虫編抜粋）．豊田市．
田中多喜彦，2008．チョウ目ガ類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.422-464．名古屋市．

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

昆虫類　＜チョウ目ヤガ科＞

カギモンハナオイアツバ　*Cidariplura signata* (Butler, 1879)

評価理由

平地から低山地の明るい草地に生息する蛾で、草地環境の衰退に伴い本種も減少傾向にあることから、環境省は、2012 年の第 4 次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧と評価した。市内では近年記録されたのみで、分布の実態がつかめていない。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	国リスト
全国 2020	準絶滅危惧

形態

開張 28～33mm。前翅は淡黄褐色で、淡色の横線は明瞭、外横線と亜外縁線の内側は前縁近くで濃色、横脈紋は濃くかぎ状に L 字型に屈曲しよく目立つ。

分布の概要

市内：名東区明徳公園で 2009 年 8 月 15 日に 1 雄が採集されている（白谷美代子・白谷由紀子）。

県内：岡崎市、豊田市などの平地・低山地で記録されている。

国内：本州、四国、九州、屋久島。

世界：朝鮮半島、中国。



生息地の環境／生態的特性

明るい雑木林の林縁草地や河川敷などで発生するが、産出量は少ない。群馬県渡良瀬遊水地のような湿性草原のほか、水田周辺の草原、関西では湧水湿地からも発見されている。

5 月から 10 月にかけ年 2 回発生する。幼虫の寄主植物は未知である。

現在の生息状況／減少の要因

明徳公園以外に記録がなく、市全体での現在の生息状況は不明である。全国的な減少の要因は必ずしも明らかでないが、本種が湿性環境に生息するとすれば、埋め立て等による湿地や湿性草原の減少が理由となる。いずれにせよ名古屋市の湿地とその周辺の継続的調査が必要である。

保全上の留意点

湿地やため池、河川敷など水系環境は、一見平凡に見えても保護されるべき珍しい種類が生息している場合もあるので、十全な調査を実施するとともに、極力残された自然を生かした造成計画を立てる。また、農薬等の散布には十分な配慮が必要である。

引用文献

田中　蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田　豊ほか，1991．愛知県のガ類．愛知県の昆虫（下），pp.96-416．愛知県．

関連文献

井上　寛・杉　繁郎ほか，1982．日本産蛾類大図鑑．講談社，東京．
杉　繁郎（編），1987．日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109．講談社，東京．
岸田泰則ほか（編），2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I ～IV．学習研究社，東京．

（田中多喜彦、戸田尚希）

クモ類

①　名古屋市におけるクモ類の概況

現在まで名古屋市で記録されたクモ類は、今回の調査の分を含めると、45 科 388 種になる。日本産のクモ類は、およそ 1,700 種（谷川明男，2025）、日本産の約 22.8%にあたるクモ類が名古屋市に生息していることになる。

以下に、市内の地域ごとに、それぞれの状況を記述する。

東部地域（東部丘陵地）のクモ

市内はほとんどの地域が都市化され、クモの住む環境は狭められてしまった。その中にあって、この東部地域は北には東谷山を中心とした守山区志段味地区や小幡緑地、南には緑区の大高緑地など、丘陵地やそれに付随する湿地・ため池が残されていて、二次林から成る樹木も多い。そのため、生息するクモの種も比較的豊かであり、カトウツゲオグモなど市内では貴重なクモも見られる。なお、千種区では 2020 年に全国的に希なムロズミソレグモ雄が採集され、続いて 2023 年には雌が採集された。これは 1977 年に天白区で記録されて以来である。

その一部を例示すると、キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ナルトミダニグモ、オオセンショウグモ、キヨヒメグモ、コンピラヒメグモ、ツノナガイソウロウグモ、ハラナガヒシガタヒメグモ、アシヨレグモ、ツメケシグモ、ジョロウグモ、マメズメオニグモ、シロオビトリノフンダマシ、アカイロトリノフンダマシ、スズミグモ、アオオニグモ、コガネグモ、ムツトゲイセキグモ、ゲホウグモ、ヤマシロオニグモ、サツマノミダマシ、クリチャササグモ、ウスイロヤチグモ、ヒゲナガツヤグモ、ヤドカリグモ、コハナグモ、ネオンハエトリ、ムツバハエトリ、マツモトハエトリなどである。

この地域は、現在まで確認されていないキジロオヒキグモなどの稀種が発見される可能性を残す地区である。

中央部地域（中央台地）のクモ

この地域のほとんどは市街化されている。そのため生息するクモ類の数も種数も年々少なくなっている。僅かに、市街化の波を逃れて残された名古屋城*1、高蔵神社、熱田神宮の林*2などは熱田台地の面影を残しており、都市部でのクモの安息場所となっている。（*1名古屋城内に住むクモ：25 科 107 種（加藤・熊田，萩野，2022～2023 調査）、*2熱田神宮域内に住むクモ：26 科 106 種（加藤・熊田・萩野，2022～2023 調査））これらの林には、ドウシグモ、キシノウエトタテグモ、ヤギヌマフクログモ、チビクロドヨウグモなど希少種や分布の限られた種などが多く生息しているが、いずれも個体数は少ないか、一部は減少の一途をたどっている。

更に、昭和区にある興正寺の社寺林もクモ類の生息にとって重要な樹林であり、キシノウエトタテグモの住居は、ここを中心として昭和区・瑞穂区の一部に多く見られる。ただ、これらの地区も

年々生息環境の悪化が進み、クモ類の個体数は減少の一途をたどっている。

この地域で記録されたクモの一部を例示すると、ジグモ、ワスレナグモ、ダニグモ、サトヒメグモ、ゴマダラヒメグモ、ナナメケシグモ、ヨツボシサラグモ、ビジョオニグモ、ムツボシオニグモ、コガネグモ、スズミグモ、サガオニグモ、ナガズキンコモリグモ、カチドキナミハグモ、ヤマヤチグモ、ムナアカフクログモ、ヤギヌマフクログモ、ホンジロトンビグモ、ニッポンオチバカニグモ、オビボソカニグモ、コガタネオンハエトリ、タイリクアリグモなどである。

西部地域（沖積地）のクモ

この地域では、枇杷島緑地などの庄内川の河川敷に、草地なども残されていて、重要なクモの生息地となっている。そのほか、河口付近の少ない葦原は廃棄物や流木が散乱しているが、その中にカコウコモリグモが見られる。市内で唯一の産地であり、貴重である。また、名古屋港に近い公園の溝の中などには、移入種のマダラヒメグモやオダカユウレイグモなどが多く生息している。

なお、1995 年大阪府高石市や三重県四日市市で発見され、話題になったセアカゴケグモは名古屋市内では一般的に確認されるようになった。これは自動車や工事現場の建築部材（バリケードや三角コーンなど）に付着して分散した可能性が大きい。過去に一頭だけ採集されたことがあるハイイロゴケグモは、その後、見つかっていない。

この地域に生息するクモの一部を列記すると、ジグモ、ワスレナグモ、オダカユウレイグモ、ヒラタグモ、コガネヒメグモ、マダラヒメグモ、クロケシグモ、ノコギリヒザグモ、ヨツコブヒメグモ、マルムネヒザグモ、セスジアカムネグモ、コガネグモ、ナガコガネグモ、イエオニグモ、カコウコモリグモ、フジイコモリグモ、ネコハグモ、ヤマトガケジグモ、ウラシマグモ、ムナアカフクログモ、ヤドカリグモ、ヨコフカニグモ、ネコハエトリ、シラヒゲハエトリなどである。

②　名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回、名古屋市として、絶滅危惧種のリストに挙げたクモ類は、絶滅危惧 IA 類（CR）6 種、絶滅危惧 IB 類（EN）4 種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）8 種、準絶滅危惧（NT）9 種、それに情報不足（DD）5 種である。名古屋市産のクモ類は、現在分っているものだけで 388 種（2025 年現在）であるから、CR・EN・VU・NT・DD の合計 32 種は全体の約 8.2%にあたる。

環境省レッドリスト 2020 には、絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）1 種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）13 種、準絶滅危惧類（NT）5 種、情報不足（DD）5 種、合わせて 24 種のクモ類が掲載されている（NT には名古屋市のリスト中のカネコトタテグモ、キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ワスレナグモが含まれている）。これは日本産クモ類全体（約 1,700 種）の約 1.41%にあたり、名古屋市の割合に比べると極端に少ない。現実には、全国的に見て危機に瀕しているクモ類は、この 24 種以外にまだまだ数多くあり、また、自然破壊の著しい大都市としての環境を考慮に入れれば、名古屋市の 8.2%は妥当な数値だと考える。

名古屋市の絶滅危惧種のリストに取り上げた種の主な選定理由は次の三つに大別することができる。

その一つは、工事・開発・除草剤・農薬・殺虫剤などの影響により減少した（または減少しつつある）と思われるもので、次の種が該当する。

ワスレナグモ、カネコトタテグモ、キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、コガネグモ、ト

リノフンダマシ、オオトリノフンダマシ、カコウコモリグモ、テジロハリゲコモリグモ、ミナミコモリグモ、ヒゲナガツヤグモ、オビボソカニグモなど。

次に、全国的に、あるいは県内・市内において、広い範囲に分布する割には生息する個体数が少ないと考えられる種である。これらの種は、微妙な環境の変化で生息できなくなってしまうようである。言い換えれば、似たような環境でも微妙な違いで、生息可、不可が決定すると考えられる次のような種である。

アカイロトリノフンダマシ、シロオビトリノフンダマシ、ゲホウグモ、ヤギヌマフクログモ、ムツトゲイセキグモ、エビチャコモリグモ、ハヤテグモ、ハマキフクログモ、ギボシヒメグモ、ビジョオニグモ、トゲグモ、チビクロドヨウグモなど。

さらに、限定された特殊な環境にしか生息できず、そこの環境が悪化したため減少した（またはその恐れがある）と考えられる種である。たとえば、湿地・ため池や河川河口部のヨシ原などは限定された環境であり、そこには生息域の限られたテジロハリゲコモリグモ（湿地）、ミナミコモリグモ（湿地）、カコウコモリグモ（河口部のヨシ原）など生活している。市内に点在する湿地・ため池・河口部の環境は、年々悪化しているし、湿地・ため池においては埋め立てによりなくなってしまった場所も多く、前記のクモの生息場所は狭められている。

なお、クリチャササグモは、もともと山地性のクモであり、高度 1,000m 前後の場所では、近縁のササグモよりも多くなるといわれる（新海・高野，1987）。高地では普通であるが、低地の名古屋市内では、個体数も生息地も極めて少ないため取り上げた。

また、ムロズミソレグモ（スオウグモ科）は、現在まで山口県、京都府、大阪府、奈良県、高知県、島根県、鳥取県で採集されただけの珍種であり、名古屋市では 1977 年に採集されていたが 2020 年（雄）、2023 年（雌）に約半世紀ぶりに採集された。家屋内に住むとされているが、今回市内で採集された 2 頭は屋外で採集されたものであった。本種は生態的に不明の点が多いので情報不足にランクした。

（加藤修朗）

③　レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各クモ類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（クモ類）に関する凡例 】

分類群名等

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目および科の範囲と種の配列は原則として「日本産クモ類目録　Ver.2025R1」（谷川明男，2025：インターネット上にて公表）に準拠した。

和名・学名

対象種の和名および学名を各頁上の枠内に記述した。和名および学名は、原則として「日本産クモ類目録 Ver.2025R1」（谷川明男，2025：インターネット上にて公表）に準拠した。

評価区分

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右上の枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち 2025」（愛知県，2025）の愛知県での評価区分、および「環境省レッドリスト 2020」（環境省，2020）の全国での評価区分も併記した。

評価理由

対象種が名古屋市版レッドリスト掲載種として評価された理由について記述した。

形態】

対象種の形態の概要を記述し、一部の種については写真を掲載した。

分布の概要

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査および文献調査によって確認された地域について、区ごとに着色して市内分布図として掲載した。なお、絶滅と判断された区域は ⋯⋯ で示した。

生息地の環境／生態的特性

対象種の生息環境および生態的特性について記述した。

現在の生息状況／減少の要因

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

保全上の留意点

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

特記事項

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

引用文献

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

関連文献

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

クモ類　＜クモ目カネコトタテグモ科＞

カネコトタテグモ　*Antrodiaetus roretzi* (L. Koch, 1878)

評価理由

崖地に多い地中性のクモである。崖地（法面）の改修によるコンクリート化や人為的な土地の攪乱、崩壊によって生息場所を失うことが多く、市内では激減している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長雌 12～18mm、雄 9～13mm。背甲の中窩は縦向き。上顎の牙は上下に可動。胸板は長さと幅がほぼ同じ、有毛だが前方に無毛の部分がある。



カネコトタテグモ（雌）、および　住居
住居：日進市、2010 年 12 月 2 日、緒方清人　撮影

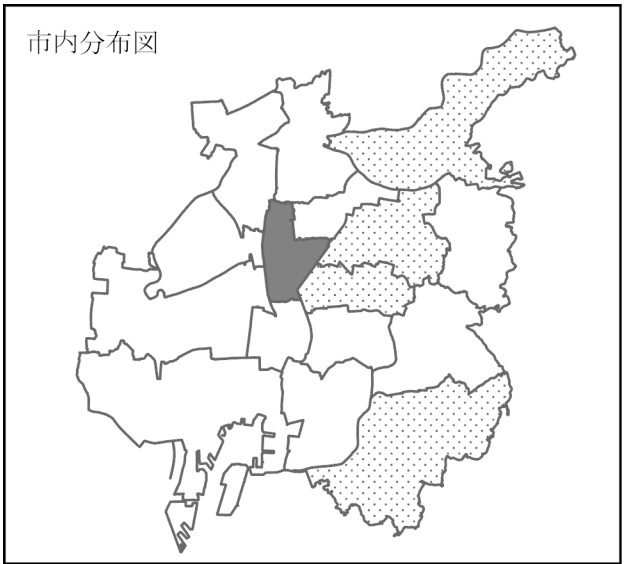
分布の概要

市内：以前は守山区、千種区、昭和区、中区、緑区に生息していたが現在では名古屋城敷地内だけになった。

県内：海辺近く（海抜 1m）から高所（茶臼山：海抜 1200m）まで広範囲に分布するが、個体数は減少している。瀬戸市、犬山市、日進市、長久手市、岡崎市、豊田市、西尾市、豊橋市、豊川市、新城市、田原市、設楽町。

国内：本州の岩手県から岡山県まで局地的に分布する。特に関東地方に多い。

世界：北米。



生息地の環境／生態的特性

林床、草むら、崖地、人家や社寺の庭などの地中に管状住居を造り入り口には両開きの扉を付け、その中で生活する。扉の周辺にはコケや土を付けてカムフラージュしている。

現在の生息状況／減少の要因

公園整備、住宅建設、道路工事等に伴う崖地の人為的な改変ならびに石垣、コンクリート化により生息場所の消失が大きな要因である。また、除草剤、農薬散布の影響も考えられ市内では激減していて、一度消滅すると元の場所に戻ることはまずない。

保全上の留意点

崖地を工事する際の注意が肝要であり生息地での除草剤、農薬等の散布には特に注意する必要がある。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.87.　東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.18,p.162．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.2．保育社，大阪．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目トタテグモ科＞

キノボリトタテグモ　*Conothele fragaria* (Dönitz, 1887)

評価理由

特に神社仏閣などの大木の樹皮などに生息。どこでも個体数が少なく減少しつつある。特に地表に近いところに住居を造った個体は除草剤の被害に遭うことも多い。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長雌 10～12mm、雄 8～10mm。背面の中窩は大型で、体も太く頑丈である。

同属他種との区別はやや困難。体長 40mm 内外。



キノボリトタテグモ（雌）、住居扉
千種区東山公園、2015 年 1 月 25 日、柴田良成　撮影
住居扉：熱田区熱田神宮、2012 年 1 月 23 日、柴田良成撮影

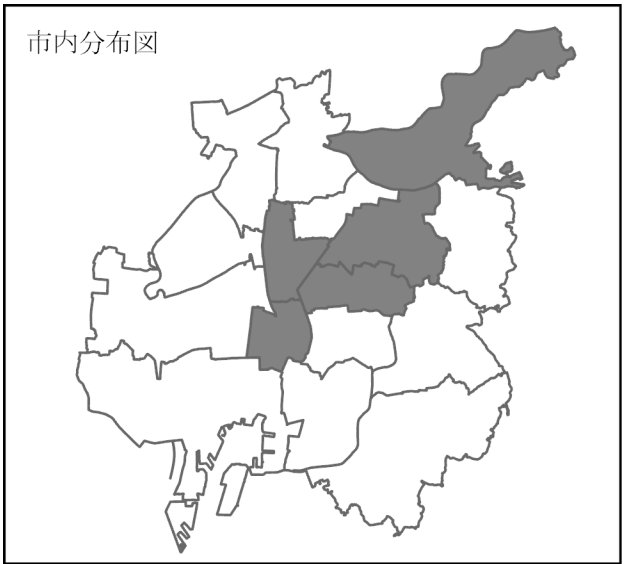
分布の概要

市内：守山区、中区、昭和区（八事興正寺）、熱田区（熱田神宮）、千種区（東山公園）。

県内：低地から海抜 600m の山地まで広く分布しているが、各生息地とも個体数は少ない。瀬戸市、犬山市、日進市、南知多町、岡崎市、豊田市、安城市、西尾市、豊橋市、豊川市、新城市、田原市、設楽町、豊根村。

国内：本州（新潟以南）、四国、九州、南西諸島、伊豆諸島、小笠原父島。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

主に大木の樹皮上、樹皮下、岩上、塀、石灯籠や記念碑などの表面に長さ 2～3cm の袋状の住居を造り、下を向いた出入口に片開きの扉を付ける。扉の上を通る獲物を住居内に引きずり込む。扉や袋には付近のコケ、樹皮、土などを運んできて付けている。

現在の生息状況／減少の要因

市内では、本種の住みかである神社仏閣で、古木、古い墓石、灯籠などが少なくなった。ほかに、照度、通風、湿度なども微妙に影響するようである。

保全上の留意点

社寺林等の保全が必要である。また、生息地では、農薬、除草剤の散布には要注意。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.91．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.19, p.163．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.4．保育社，大阪．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目トタテグモ科＞

キシノウエトタテグモ　*Latouchia typica* (Kishida, 1913)

評価理由

片扉を付けた地中性のクモ。市内では、ほとんどが崖地に棲むため、崖地の破壊、コンクリートなどによる補強などの影響を受けて激減、絶滅の恐れが大である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長雌 12～20mm、雄 10～15mm。背甲の中窩は横向き。頭胸部には疎らな毛がある。胸板にくぼみがある。



キシノウエトタテグモ（雌）、および　住居扉
昭和区鶴舞公園、2015 年 1 月 26 日、柴田良成　撮影
住居扉：同上、2014 年 11 月 11 日、柴田良成　撮影

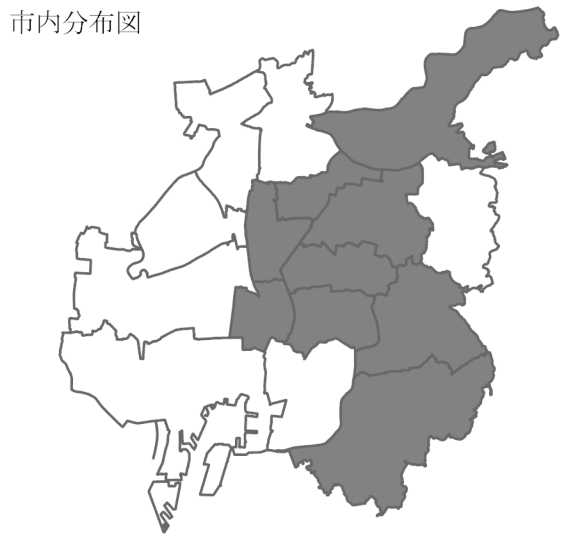
分布の概要

市内：名古屋市昭和区（八事興正寺境内、鶴舞公園）、千種区（覚王山）、瑞穂区（民家など）、天白区、中区（名古屋城敷地内）、熱田区（寺院など）、守山区、東区、緑区に生息しているが、いずれの生息地においても個体数が少なくなった。

県内：岡崎市、犬山市、瀬戸市、豊田市、日進市、常滑市、安城市、豊橋市。

国内：本州（山形県以南）、四国、九州。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

神社、仏閣、城、古い屋敷の敷地内によく生息している。崖地に横穴の管状住居を造り入口に片開きの扉を付ける。縦穴でも造られるが、その巣を目視で発見するのは困難である。市内ではほとんどが横穴に棲む。都市またはその周辺部に棲み、人里離れた山中に生息しない。扉に周辺のコケや土を運んで付着させる。

現在の生息状況／減少の要因

造成整備工事や道路の改修等による崖地での掘削工事やコンクリート化が激しく、急速に生息場所が狭められ、激減している。特に、八事興正寺境内の減少は驚くばかりである。

また、除草剤や農薬散布等が影響を及ぼし減少に拍車をかけていると思われる。クモタケの寄生による被害も多少は考えられる。

保全上の留意点

崖地改修の際、工事の方法に注意すること。生息区域での農薬、除草剤等の散布に注意する必要がある。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.91．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.19, p.163．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.3．保育社，大阪．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コガネグモ科＞

ムツトゲイセキグモ　*Ordgarius sexspinosus* (Thorell, 1894)

評価理由

市内の確認できた生息地は 1 か所で、個体数は少ない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	－

形態

体長雌 8～10mm。頭部背甲は濃褐色で 2 本の尖った突起が縦に並び、後方にも 4 突起が横に並ぶ。腹部背面は黒褐色で白い網目模様がある。その両肩は隆起、その上に小突起がいくつか見られる。後端にも 4 個の突起がある。雄は小さくて 2mm。



ムツトゲイセキグモ（雌）　守山区大森
1998 年 9 月 26 日緒方清人撮影（小笠原幸恵採集）

分布の概要

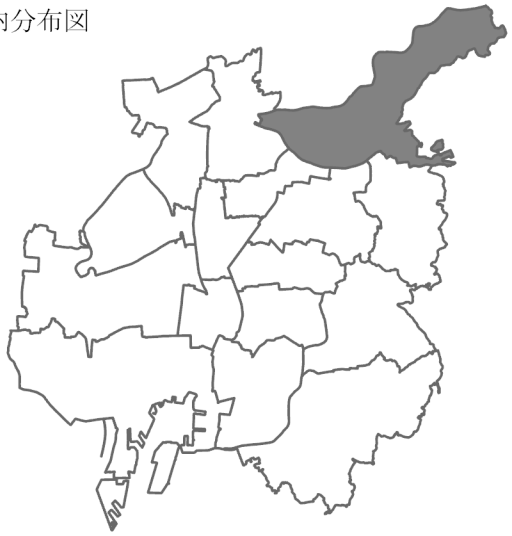
市内：守山区。

県内：県内でも確認された分布地は僅かである。個体数は少ないためか、見つけにくいが、まだ発見される可能性はある。幼体での同定が困難なのも発見例が少ない要因と考えられる。常滑市、豊田市、知立市、豊川市、新城市。

国内：本州（関東以南）、四国、九州、南西諸島。

世界：ビルマ、インドネシア、インド、韓国、中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

昼は広葉樹の葉の裏に潜んでいる。夜、枝や葉に簡単な糸を引き張り、そこから第 2 脚の先端に粘球を糸で釣り下げ、それを投げ縄のように回転させ、蛾の仲間を捕らえる。

現在の生息状況／減少の要因

もともと個体数の少ない希産種であるが、生息適地の開発による減少も考えられる。

保全上の留意点

生息環境（二次林）の確保。特に市内分布確認地の環境を変えないような努力が必要である。

関連文献

千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.83, p.217．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.112．保育社，大阪．
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類．東海大学出版会，秦野．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コモリグモ科＞

カコウコモリグモ　*Pardosa nojimai* Tanaka, 1998

評価理由

河口付近の内海に面した塩性ヨシ原に生息するため、護岸工事や環境の悪化によって激減、絶滅の恐れが大である。市内での生息地は少ない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

形態

体長雌雄 5～7mm。雄の頭胸部は黒褐色。腹部背面は茶褐色で、褐色の心臓斑が顕著である。雌は背甲、腹部とも茶褐色。雌雄とも歩脚は褐色で各節に長い刺を要する。



カコウコモリグモ（雌）
港区野跡、2013 年 6 月 10 日、緒方清人　撮影

分布の概要

市内：港区で記録された。

県内：田原市汐川河口、豊橋市紙田川河口で記録されている。刈谷市境川河口にも生息していたが、ここでは近年確認されていない。

国内：岡山県岡山市の標本を模式とし新種記載された（田中，1998）。現在は静岡県、三重県、大阪府、島根県、熊本県、東京都、千葉県、香川県、高知県等で記録されている（新海ほか，2012）。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

海岸や河口付近の塩性ヨシ原に限って棲む。同じヨシ原でも海岸以外には生息していない。成体は 5～8 月にかけて見られ、ヨシ原内を素早く動き回る。雌は卵のうを糸器に着けて徘徊する。同じ環境にはクロベンケイガニなどカニ類も多数生息している。

現在の生息状況／減少の要因

市内では、港区稲永の庄内川左岸の河口部の塩性ヨシ原に棲むが、生息地域は狭く限られている。同じ環境でも河口の上流部には生息していない。近年、護岸補強工事の影響でヨシ原が減少した。また、発泡スチロール、ビニール、プラスチックなど多量のゴミが蓄積し、環境悪化が著しい。その影響で個体数は激減している。

保全上の留意点

護岸補強工事の際には、十分な配慮が必要である。塩性ヨシ原を保全すると同時に、環境美化に努める必要がある。

引用文献

Tanaka, H.，1998．A New Species of the Genus *Pardosa* (Araneae: Lycosidae) from Japan．Acta Arachnologica，47(2): 101-103.
新海　明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生，2012．CD 日本のクモ．自刊.

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.245．東海大学出版会，秦野.

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コモリグモ科＞

テジロハリゲコモリグモ　*Pardosa yamanoi* Tanaka & Suwa, 1986

評価理由

徘徊性のクモで、開発にともなう湿原の減少や環境悪化で、近年激減した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	－

形態

体長雌雄とも 5～7mm。雄の頭胸部は濃茶褐色で中央と縁は白い毛で覆われる。腹部背面は濃茶褐色で中央に白色の縦斑があり、第 1 脚の脛節に多数の白毛を生じる。雌は背甲・腹部とも茶褐色で、腹部に多数の白斑がある。



デジロハリゲコモリグモ（雄）
守山区上志段味、2009 年 4 月 16 日、緒方清人　撮影

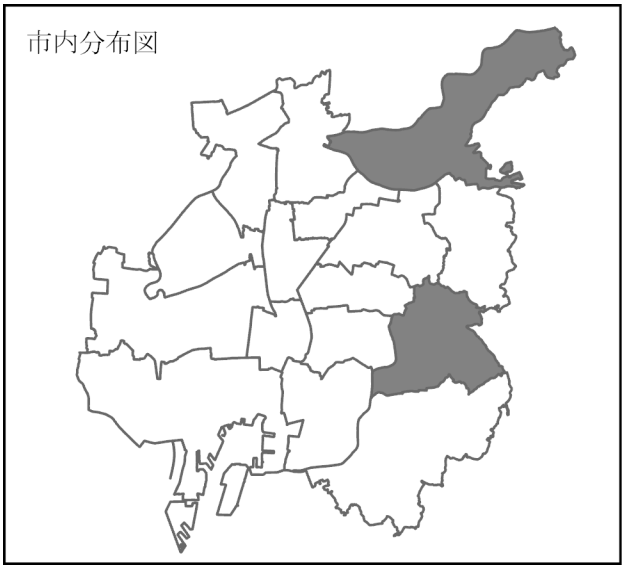
分布の概要

市内：守山区上志段味と天白区島田のごく限られた湿地に生息する。天白区八事天白峡湿地では、1978 年 5 月 3 日に永井均氏により雌雄各 1 頭が採集された。この記録が県内初記録である（田中，1986）。その後、1990 年代までは生息していたが，湿地の環境悪化とともに個体数は減少し，現在は生息していない。

県内：日進市、岡崎市、新城市に分布する。豊川市では土地開発により湿地が消滅し、絶滅したと思われる。

国内：岡山県鹿久居島の標本を模式とし新種記載された（Tanaka，1986）。現在は秋田県、東京都、神奈川県、長野県、岐阜県、三重県、大阪府、岡山県、徳島県、長崎県、兵庫県で記録されている（新海ほか，2012）。

国内：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

湿原に生息する。5～7 月にかけて成体になり、雌は 7～8 月にかけて卵のうを糸器につけて徘徊する。幼体で越冬する。

現在の生息状況／減少の要因

市内では、守山区上志段味（東谷湿地）と天白区島田（島田湿地）に生息する。天白区八事天白渓湿地は、湿地周辺の樹木や草本が繁茂し、環境が著しく悪化したことにより湿地は消滅した。2008 年 6 月 15 日と 2014 年 7 月 22 日での調査でも発見できず、絶滅したと思われる。

保全上の留意点

周辺部の環境保全と管理が望まれる。また、日当りの良い湿地を好む傾向が強いので、周辺からの木本類や草本類を速やかに取り除く等多方面の対策が急務である。

引用文献

Tanaka, H.，1986．Descriptions of Three New Spiders of the *Pardosa laura* Complex (Araneae: Lycosidae) based on their Morphology and Ecology．Acta Arachnologica，34(2): 49-60.
新海　明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生，2012．CD 日本のクモ．自刊．関連文献
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.241, pl.610．東海大学出版会，秦野．
新海栄一，2010．日本のクモ，p.67，文一総合出版，東京．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目ジグモ科＞

ワスレナグモ　*Calommata signata* Karsch, 1879

評価理由

地中に縦穴の管状住居で生活するクモ。30 数年前までは、市内の神社仏閣、公園、古い民家などに、ごく普通に見られた種であったが、生息環境の悪化により急速に減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	準絶滅危惧

形態

体長雌 13～18mm、雄 5～8mm。雌の背甲にある中窩は点状で深く黄褐色～淡褐色、第 1 脚は 2～3 脚に比べ極細。雄の体色は褐色～黒褐色ですべての脚が細く著しく小さい。



ワスレナグモ（雌）
安城市、2011 年 11 月 26 日、中根　翼　撮影
巣穴：西区庄内緑地、2014 年 8 月 30 日、柴田良成　撮影

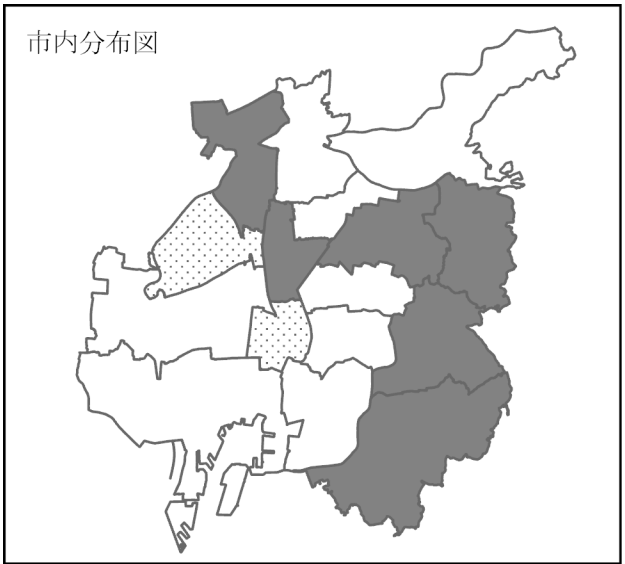
分布の概要

市内：絶滅が危惧されていた種であるが、今回の調査で千種区、緑区、名東区、天白区でも発見された。これは、2023 年 9 月に、なごや生物多様性センターで行われたハエトリグモの一斉調査で偶然発見されたものであり、全て徘徊中の雄であった。

県内：愛知県内でも減少傾向にあり、採集例も少なくなった。豊明市、日進市、岡崎市、豊田市、安城市、知立市。

国内：本州、四国、九州。

世界：韓国、中国。



生息地の環境／生態的特性

日光の当たる比較的明るい草むら、芝生などに地中に縦穴を掘り、内部を糸で綴った管状の住居を造る。出入口は露出するか糸で閉じる。住居の内側はきわめて細くて丈夫な糸で裏打ちされ、穴を中心として放射状に受信糸（触糸）を出すこともある。

現在の生息状況／減少の要因

本種は、地中に縦穴を掘り生活するため、地表面の掘削やコンクリート化により生息場所の消失が大きな減少の原因であると考えられる。加えて、トタテグモ類同様、除草剤や農薬の影響も考えられる。最近、公園や神社などでジグモの生息数が減少傾向にある現象も同じ原因ではないかと考えられる。

保全上の留意点

公園整備による樹木、芝生等には配慮し、少なくとも除草剤などの散布には注意する必要がある。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.86．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.20, p.164．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.6．保育社，大阪．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目アシナガグモ科＞

チビクロドヨウグモ　*Meta nigridorsalis* Tanikawa, 1994

評価理由

全国的に見ても確認された県は少ない。

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	－
全　　国 2020	－

形態

体長雌約 5.5 mm、雄約 4.5mm。全体に艶があり、頭胸部は黒褐色で頭部は黒色。腹部背面は黒褐色で縁に 3～4 対の瘤がり、波打っているように見える。4 脚とも黒褐色で腿節に茶褐色の環がある。



チビクロドヨウグモ（雌）
熱田区熱田神宮、2012 年 7 月 23 日、緒方清人　撮影

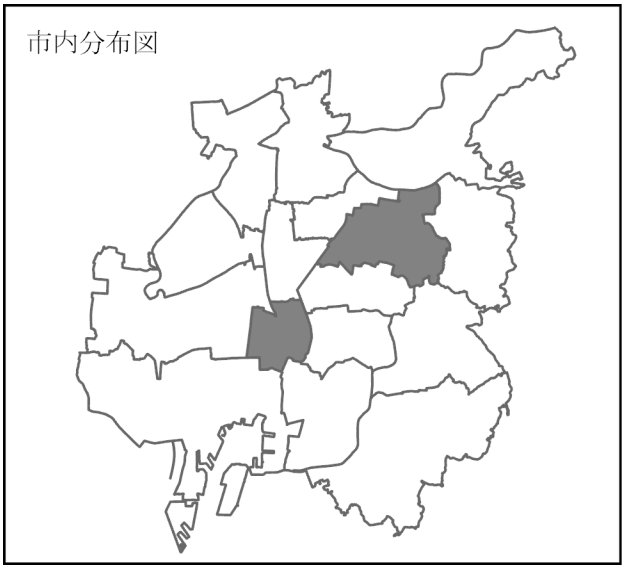
分布の概要

市内：千種区で 2022 年 8 月 19 日に雌が採集された。

県内：名古屋市内以外では未確認

国内：三重県熊野市の標本を模式とし、1994 年に新種記載された（Tanikawa，1994）。現在は和歌山県、岡山県、広島県、島根県、島根県、香川県、徳島県、佐賀県、熊本県、鹿児島県、静岡県、三重県、大阪府、鳥取県、高知県、長崎県、宮崎県、八丈島で記録されている（新海ほか，2012）。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

筆者の観察では暗部を好み、三重県では石垣や崖地の窪み、和歌山県では朽ち木の空洞部に生息していた。水平円網の直径は 9～13cm で本属では小型である。

現在の生息状況／減少の要因

きわめて狭い範囲に 10 頭前後が生息していると思われる。

保全上の留意点

伐採木が山積みされたすき間に棲んでいるので、今後もその環境が保全されることが望まれる。

引用文献

Tanikawa, A.，1994．A New Species of Spider Genus *Meta* C. L. Koch, 1836 (Araneae: Tetragnathidae) from Japan．Acta Arachnologica，43(1): 65-69.
新海　明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生，2012．CD 日本のクモ．自刊．
緒方清人，2012．愛知県のクモ目録追加種（Ⅳ）．蜘蛛，45: 14-16．中部蜘蛛懇談会．

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.407．東海大学出版会，秦野．
新海栄一，2010．日本のクモ，p.173，文一総合出版，東京．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目キシダグモ科＞

スジブトハシリグモ　*Dolomedes saganus* Bösenberg et Strand, 1906

評価理由

全国各地に分布するが、大型のクモのため生息条件として自然度が高く豊富な餌（昆虫など）が供給される必要がある。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長雌 14～19mm、雄約 10～14mm。同じキシダグモ科のスジアカハシリグモに似るが、腹部背面の濃色の縦斑がスジアカハシリグモでは後方 4 分の 1 ほどに 1 か所だけくびれが見られるが、当種では後方の縁で波打つ。

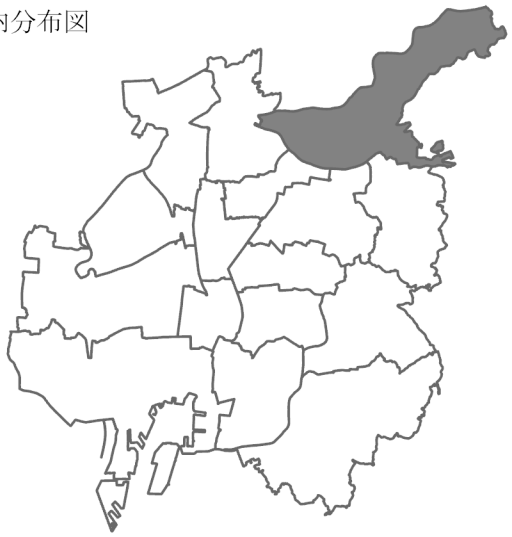


スジブトハシリグモ（雄）
小幡緑地、2014 年 3 月 12 日、緒方清人　撮影

分布の概要

市内：守山区で採集（2014 年 3 月 12 日）された。
県内：犬山市。
国内：北海道から九州までの全都道府県。
世界：中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

平地から山地に生息。池や沼の周囲、水田、河川、湿度の高い草地など水辺に多く見られる。主に水辺の草の上、水草の上で獲物を待っている。危険を感じると、水面を走って逃げ水中に潜る。昆虫以外に、オタマジャクシや小さな魚を捕えることがある。

現在の生息状況／減少の要因

人の気配を感じると水中に潜って身を隠すため、実態把握が困難である。

保全上の留意点

生息地としての池や川などの保全が必要である。

引用文献

新海　明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生，2024. CD 日本のクモ．自刊．
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.218.　東海大学出版会，秦野．

関連文献

新海栄一，2017．日本のクモ　増補改訂版，p.145，文一総合出版，東京．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目キシダグモ科＞

ハヤテグモ　*Perenethis fascigera* (Bösenberg & Strand, 1906)

評価理由

徘徊性のクモで、河川敷や草原などに生息し、まれに公園や人家の庭などからも発見される。近年、生息域の環境悪化により激減した。2000 年の記録が最後である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長雌 10～12mm、雄 9～11mm。頭胸部は淡褐色で中央部は濃茶褐色で両縁は白色。腹部背面は淡褐色で中央部は赤褐色もしくは黄褐色で両縁は白色。中央から後方にかけて波形模様となる。胸板は黄褐色で両則は淡黒色。歩脚は各節黄褐色だが蹠節や跗節は濃い黄褐色となる。



ハヤテグモ（雄）
緑区鳴海町、2000 年 7 月 3 日、緒方清人　撮影

分布の概要

市内：今回の調査において、緑区で再確認された。

県内：常滑市、日進市、豊橋市、田原市で記録されている。

国内：本州、四国、九州（新海ほか，2012）。

世界：中国、韓国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

市街地の林縁部や草地に生息する。6～8 月にかけて成体になる。雄は捕獲した獲物を雌にプレゼントする（板倉，1999）。雌は 7～8 月ごろに産卵し、卵のうを口器にくわえて保護する。幼体で越冬する。

現在の生息状況／減少の要因

唯一、緑区の生息地は住宅地になり消滅した。その後、本市からは記録されていない。徘徊性で見付けにくいが今後、河川敷や草地など本種に適した環境が残されていたら、発見される可能性はある。

保全上の留意点

宅地や工場などの土地開発の際、生息域の環境保全が必要である。

引用文献

板倉泰弘，1999．苦節 9 年，ハヤテグモの生息環境と婚姻給餌発見まで．Kishidaia,76: 30-33.
新海　明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生，2012．CD 日本のクモ．自刊.

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.220, pl.606．東海大学出版会，秦野.
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.106, p.273．偕成社，東京.
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.175．保育社，大阪.
新海栄一，2010．日本のクモ，p.81，文一総合出版，東京.

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コガネグモ科＞

アカイロトリノフンダマシ　*Cyrtarachne yunoharuensis* Strand, 1918

評価理由

もともと個体数が少ない種である。その上、市内では開発等に伴い生息適地が減少、個体数もますます減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長雌 4.5～7.0mm、雄 1.5～2.0mm。頭胸部背甲は黄褐色。腹部背面は赤褐色に白斑、その最広部の左右に 1 対の黒点がある。また、腹部背面が黒色の個体（アカイロ型）、黒色で後方部が暗赤色の個体（ソメワケ型）なども見られる。いずれにしても腹部の色彩には変異が多い。



アカイロトリノフンダマシ（雌）
千種区平和公園、2014 年 7 月 29 日、柴田良成　撮影

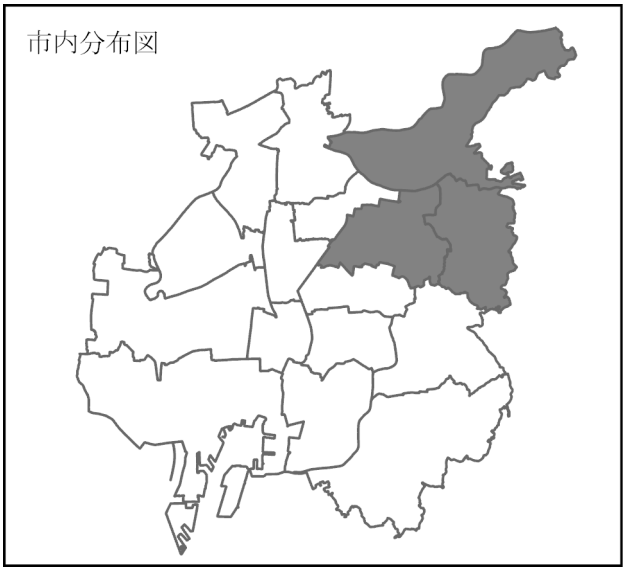
分布の概要

市内：守山区、名東区、千種区に生息する。個体数が少ないため観察、採集記録は数例である。

県内：犬山市、瀬戸市、豊田市（旧稲武町）等県北部での記録が多い。県南部の記録は少ない。日進市、長久手市、岡崎市、豊川市、新城市、設楽町、田原市。

国内：本州、四国、九州、薩南諸島。

世界：中国。



生息地の環境／生態的特性

ススキ草原、広葉樹林に棲み、昼はそれらの葉裏に静止している。夕方から活動を始め、同心円状の水平円網を張り、主として蛾の仲間を捕らえる。

現在の生息状況／減少の要因

もともと個体数の少ない種であるが、開発による生息適地の減少や農薬等の使用が減少に拍車を掛けている。

保全上の留意点

開発に際しては、ススキ草原（周辺部の環境も含め広く）など生息場所を残すこと。また、管理地などでの除草剤や農薬などの散布に注意する必要がある。

特記事項

従来ソメワケトリノフンダマシ（*C. induta* Yaginuma)と呼ばれていたものは、本種の色彩変異の一つである（Tanikawa，2001）。

引用文献

Tanikawa, A.，2001．Two new synonymies of the spider genus *Cyrtarachne* (Araneae: Araneidae)．Acta Arachnologica，50(1): 87-89.

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.428．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.82, p.216．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.110．保育社，大阪．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コガネグモ科＞

トゲグモ　*Gasteracantha kuhli* C. L. Koch, 1837

評価理由

市内では初めて観察された大変珍しいクモ。分布は限られている。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

形態

体長雌 6.0～8.0mm、雄 3.0～4.0mm。雌の腹部はキチン化していて硬く、3 対の黒色の刺がある。腹部背面は白色で黒い斑紋がある。腹部には 3 対の刺はなく、1 対の突起があり頭部と胸部の幅はほぼ等しい。腹部背面の体色や模様は雄に類似。垂直円網を張り周囲の糸には小さな糸の塊が点々と付けられることが多い。



トゲグモ（雌）
昭和区八事、2014 年 7 月 22 日、筒井朋子　撮影

分布の概要

市内：昭和区八事山散策路で観察、採集（2014 年 7 月 22 日）。市内初記録。

県内：三河部の山地、豊田市（旧足助町、旧稲武町）、北設楽郡設楽町、新城市（旧新城市）、豊橋市、岡崎市等に僅かな記録がある。

国内：本州、四国、九州、伊豆諸島、奄美諸島。

世界：インド、フィリピン、台湾、韓国、中国。



生息地の環境／生態的特性

もともと山地の樹間に垂直円網を張るクモ。市街地の社寺林では珍しい。

現在の生息状況／減少の要因

市内における観察例・採取例はなく、2014 年 7 月 22 に発見されたのは、偶産種と思われる。

保全上の留意点

緑地公園内の樹林帯、主に落葉広葉樹林の保全、保護に努める必要がある。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.429．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.83, p.217．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.111．保育社，大阪．
新海栄一，2006．日本のクモ，p.228．文一総合出版，東京．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コガネグモ科＞

ゲホウグモ　*Poltys illepidus* C. L. Koch, 1843

評価理由

市内での分布は局地的で、個体数も少ない。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

雌体長 12～18mm。背甲は赤褐色、腹部背面は黒色で両肩に 1 個ずつの大きな隆起があり、ほかに多くの小突起がある。腹部の形態は個体によって変異が大きい。雄は、4～6mm。

分布の概要

市内：千種区、中区、守山区、名東区、天白区。
県内：豊田市、豊川市、豊明市、日進市、常滑市、岡崎市、安城市、西尾市、知立市、豊橋市新城市。
国内：本州、四国、九州、南西諸島。
世界：インド、フィリピン、中国、オーストラリア。

生息地の環境／生態的特性

昼は脚を縮めて枯れ枝などの先端に止まっていることが多い。この場合、枯れた木の芽に似ていて見つけにくい。夜は樹間などに円網を張り活動する。

現在の生息状況／減少の要因

夜行性のため成体の観察例は少ないがビーティングで幼体が、しばしば採集される。生息地は局地的で、生態的にも不明の点が多い。

保全上の留意点

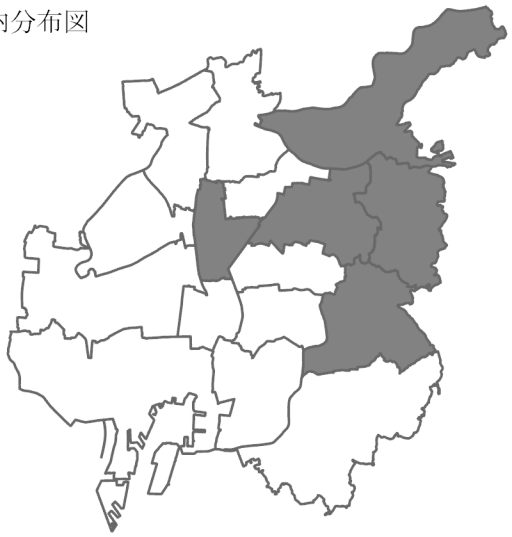
都市公園等における殺虫剤、除草剤の散布に注意する必要がある。

関連文献

千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.81, p.215．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.117．保育社，大阪．
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類．東海大学出版会，秦野．



ゲホウグモ（雌）
左：名東区猪高町、2003 年 8 月 31 日、家股幸子　撮影
右下：知多郡武豊町壱町田湿地、1999 年 8 月 8 日、原穣撮影



（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目ササグモ科＞

クリチャササグモ　*Oxyopes licenti* Schenkel, 1953

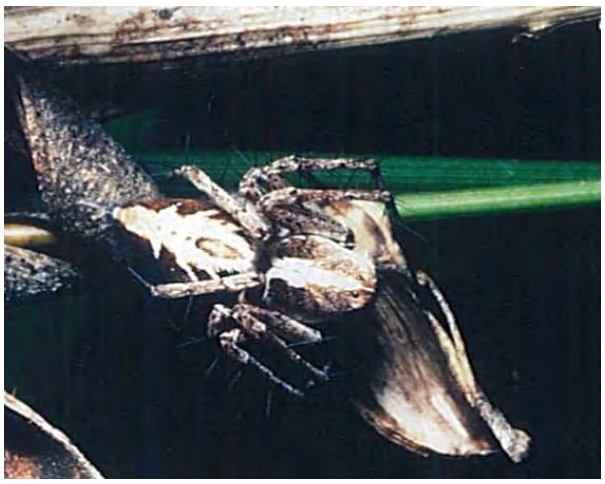
評価理由

山地に多いクモ。県内には広く分布するが、市内では生息適地が少なく注目に値する。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

ササグモに似ているが、それよりも小型で全体が黒っぽく、外雌器は明らかに違う。雌の体長7～9mm、雄は 6～8mm。背甲は黒褐色で中央に正中条斑がある。



クリチャササグモ（雌）
名東区猪高町、1988 年 5 月 18 日、緒方清人　撮影

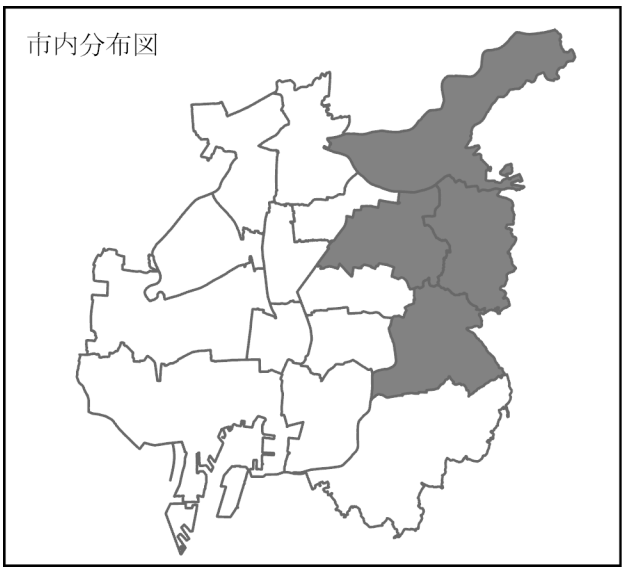
分布の概要

市内：千種区、天白区、名東区、守山区。

県内：豊明市、豊田市、岡崎市、豊川市、瀬戸市、日進市、長久手市、西尾市、知立市、新城市、設楽町、豊根村。

国内：本州、九州、四国、北海道。

世界：韓国、中国、ロシア。



生息地の環境／生態的特性

二次林やスギの植林地の中や周辺に棲み、ピョンピョンと飛び跳ねる。

現在の生息状況／減少の要因

市内東部地域の一部に僅かに分布する。もともと、都市部には生息適地は少ない。

保全上の留意点

生息地付近の環境を保全する。また、殺虫剤や除草剤の散布に注意する必要がある。

関連文献

千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.117, p.247．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.157．保育社，大阪．
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類．東海大学出版会，秦野．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コモリグモ科＞

エビチャコモリグモ　*Arctosa ebicha* Yaginuma, 1960

評価理由

徘徊性のクモで、大型のコモリグモである。河川敷、湿原、草原などに生息するが個体数は少ない。市内での記録は 2 か所である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	－

形態

体長雌 11～13mm、雄 9～12mm。頭胸部と歩脚は濃茶褐色。腹部背面は茶褐色で心斑は褐色。全身に黒毛を生じる。第 1 跗節には長毛が 2 本あり、脛節下面には短い刺が 3 対ある。



エビチャコモリグモ（雌）
天白区八事天白渓、1986 年 6 月 28 日、緒方清人　撮影

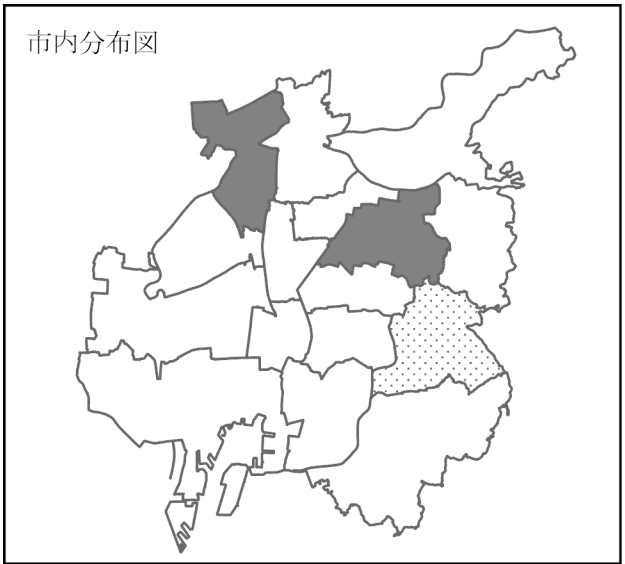
分布の概要

市内：天白区八事天白渓湿地に生息していたが、環境悪化で湿地が消滅し絶滅した。現在は西区庄内川河川敷、千種区で確認されている。

県内：豊田市、刈谷市、知立市、岡崎市、安城市、一宮市、豊明市から記録されているが、土地開発で絶滅した地域が多い。また、生息地においても個体数は非常に少ない。

国内：本州、四国、九州。

世界：韓国、中国。



生息地の環境／生態的特性

主に草原を徘徊しているが、石の下や土の窪みなどに潜んでいることもある。9～11 月にかけて成体になる。多くのコモリグモの雌は、卵のうを糸器につけて徘徊するが、本種は卵のうを糸器につけてはいるが、地中に穴を掘って潜む。

現在の生息状況／減少の要因

1990 年ごろまでは、天白区八事天白峡湿地に生息していたが、周辺の木本類や草本類が茂り、湿地は消滅した。2008 年と 2014 年の調査でも発見されず、絶滅したと思われる。今後、生息地に適した環境が残されていたら、発見される可能性はある。

保全上の留意点

河川工事や土地開等による生息域での環境悪化や、農薬、除草剤等の散布にも注意する必要がある。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.234, pl.609．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.111, p.240．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.158．保育社，大阪．
新海栄一，2010．日本のクモ，p.61．文一総合出版，東京．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コモリグモ科＞

ミナミコモリグモ　*Piratula meridionalis* (Tanaka, 1974)

評価理由

徘徊性のクモで、湿原や池沼など湿潤地に生息する。開発にともなう生息地の減少や環境悪化で近年激減した。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長雌雄とも 4～6mm、頭胸部は茶褐色で中央に本属特有の Y 字型の斑がある。腹部背面は濃茶褐色で 3～4 対の白斑がある。4 脚の各節に濃茶褐色の環がある。



ミナミコモリグモ（雌）
天白区島田湿地 2014 年 6 月 17 日 緒方清人 撮影

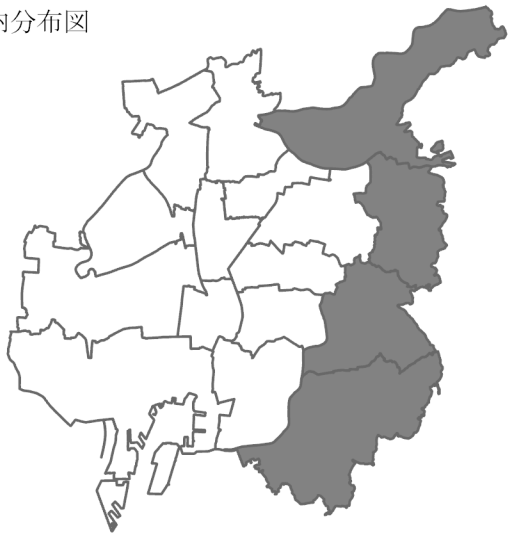
分布の概要

市内：守山区上志段味、天白区島田、緑区大高、名東区のごく限られた湿地や湿潤地に生息する。

県内：弥富市、東海市、日進市、長久手市、豊明市、知立市、豊田市、岡崎市、豊橋市、新城市、北設楽郡設楽町、瀬戸市、半田市、豊川市等。

国内：本州、四国、九州（Tanaka，1988）、沖縄。

世界：韓国、中国。



生息地の環境／生態的特性

湿原や湿潤地を徘徊している。5～7 月ごろに成体になる。雌は 8～10 月ごろに白色の卵のうを糸器につけて徘徊する。ふ化した子グモは 1 週間ほど親の背中にしがみつき、その後、分散し独り立ちし、幼体で越冬する。

現在の生息状況／減少の要因

守山区上志段味の湿地は、周辺から植物が侵入し、年々環境が悪化している。天白区島田湿地は保全区域に指定されているので、個体数は維持されると思われる。緑区大高緑地は湿潤地である。しかし、どの生息地においても個体数はきわめて少ない。天白区八事天白渓湿地にも生息していたが周辺の樹木類や草本類が繁茂し、湿地は消滅した。2008 年 6 月 15 日と 2014 年 7 月 22 日に調査したが、発見できずテジロハリゲコモリグモと同じく絶滅したと思われる。

保全上の留意点

湿地と後背地の環境を保全し、乾燥化しないように水資源を確保する。同時にゴミ対策や湿地性以外の植物の侵入を防ぐなど、多方面の対策が必要である。

引用文献

Tanaka, H.，1988. Lycosid spiders of Japan I. The genus *Pirata* Sundevall. Acta arachnologica，36(1): 33-77.

関連文献

小野展嗣（編），2009. 日本産クモ類，p225, pl.608. 東海大学出版会，秦野.
千国安之輔，1989. 写真日本クモ類大図鑑，p.19, p.163. 偕成社，東京.
八木沼健夫，1986. 原色日本クモ類図鑑，p.3. 保育社，大阪.
新海栄一，2010. 日本のクモ，p.67. 文一総合出版，東京.

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目カニグモ科＞

オビボソカニグモ　*Xysticus trizonatus* Ono, 1988

評価理由

徘徊性のクモで、主に山林から都市周辺の神社、仏閣、城などの樹幹に棲む。普段は樹皮のすき間に潜んでいるので発見されにくく、採集、観察例の少ない種である。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

形態

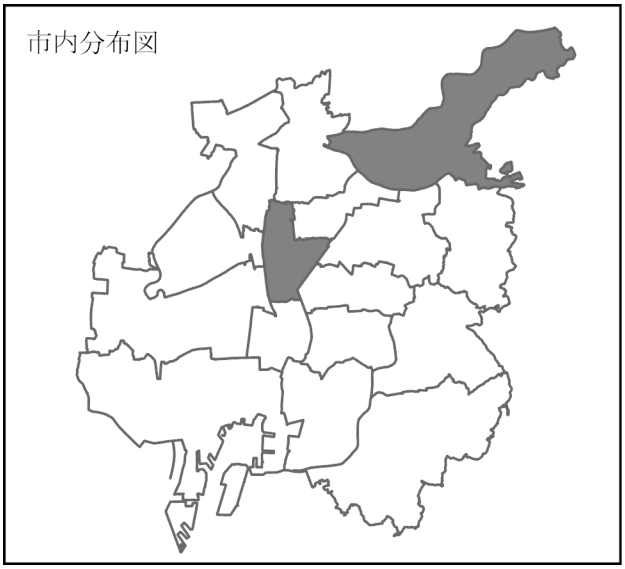
体長雌 7～8mm、雄 5～6mm。頭胸部の中窩は淡褐色、両縁は茶褐色。後方に 1 対の頃色斑がある。腹部背面は赤褐色で中央に数対の淡褐色の斑があり、中央から末端にかけて 3～4 本の黒筋がある。第 1・2 脚の脛節と蹠節に太い刺を生じる。胸板にくぼみがある。



オビボソカニグモ（雌）
中区名古屋城、1998 年 9 月 23 日、緒方清人　撮影

分布の概要

市内：守山区、中区。
県内：豊田市、岡崎市、安城市、豊橋市、豊根村、西尾市、新城市、設楽町。
国内：北海道、本州、四国、九州。青森県陸奥市の標本を模式とし、1988 年に新種記載された（小野，1988）。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

主に松を好み、樹幹の窪みや樹皮下に潜んでいるので見つけにくく、観察記録は非常に少ない。松のコモ巻きはマツカレハの幼虫を駆除する目的で、立冬のころに樹幹に巻かれ，翌春に取り外す。取り外す際に、越冬個体がしばしば発見される。落葉層からも、幼体が時々発見される。

現在の生息状況／減少の要因

もともと個体数の少ない種と思われる。松の葉を害するマツカレハの駆除を目的とするコモ巻きは、取り外した後に焼却される。その際に、越冬個体が被害を受けている可能性が考えられる。

保全上の留意点

農薬散布は極力避けるべきである。また、松のコモ巻き内からも越冬個体が発見されるので、取り外しの際は害虫と益虫を区別することが望ましい。

引用文献

Ono, H., 1988. A Revisional study of the spider family Thomisidae (Arachnida, Araneae) of Japan. National Science Museum monographs, 5: 1-252.

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.515, pl.635．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.145, p.273．偕成社，東京．
新海栄一，2010．日本のクモ，p.258，文一総合出版，東京．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目ハチグモ科＞

オビジガバチグモ　*Castianeira shaxianensis* Gong, 1983

評価理由

徘徊性のクモで、河川敷や草地などに生息する。本市では緑区で記録された。その後は記録されていないが、市内の河川には生息地が残されている可能性が高いので、確認に努めたい。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長雌 7～8.7 mm、雄 6.5～7mm。頭胸部は灰黒色。腹部背面は灰色地に黒色の太い条がある。上顎の前牙堤に 3 歯、後牙堤に 2 歯がある。4 脚の各節は淡褐色で腿節に黒色の縦条がある。



オビジガバチグモ（雌）
常滑市常滑 2011 年 6 月 15 日、緒方清人　撮影

分布の概要

市内：緑区鳴海町の記録が唯一のもので、1999 年 5 月 25 日の記録である。その後、記録されていない。
県内：常滑市、半田市、豊明市、知立市、豊田市、岡崎市、豊川市、豊橋市、西尾市、田原市。
国内：本州、四国、九州。
世界：中国・韓国。



生息地の環境／生態的特性

草地の地上を徘徊し、一見するとアリに見間違う。6～8 月にかけて成体になる。和名の由来は昆虫のジガバチに似ているので付いた。

現在の生息状況／減少の要因

緑区鳴海町の唯一の生息地は住宅地になり、絶滅した。本種に適した生息環境が確認されれば発見される可能性が高い。例えば天白川や日光川などの河川敷は適した環境といえる。

保全上の留意点

生息環境を保全し、農薬や除草剤等の散布には注意する必要がある。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.234, pl.609．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.111, p.240．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.158．保育社，大阪．
新海栄一，2010．日本のクモ，p.61，文一総合出版，東京．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目ヒメグモ科＞

ギボシヒメグモ　*Chikunia albipes* (S.Saito, 1935)

評価理由

造網性のクモで山林に棲む。県内での分布は主に三河地方なので、名古屋市での生息は注目に値する。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長雌 2.5～3.5mm、雄 1.5～2.0mm。頭胸部は橙で眼域は黒褐色。腹部は角のとれた三角形をし、橙色で両肩と末端が黒い。色彩変異があり、全身が黒色の個体もある。



キボシヒメグモ（雌）
北設楽郡設楽町、1988 年 8 月 10 日、緒方清人　撮影

分布の概要

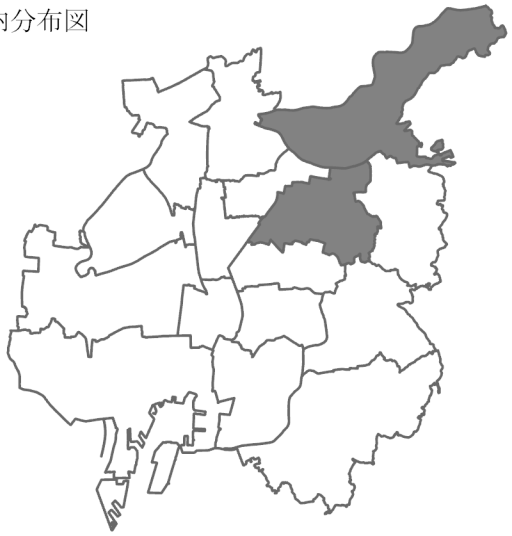
市内：守山区、千種区。

県内：設楽町、豊田市、瀬戸市、豊根村。

国内：北海道、本州、四国、九州、南西諸島。

世界：ロシア、中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

広葉樹の葉裏に不規則網をはる。夜行性で網は早朝とりこわし、昼間は葉裏に潜んでいる。卵のうは白色球形で雌が保護する習性がある。

現在の生息状況／減少の要因

丘陵地の開発による林の伐採等で減少している。個体数の少ない種と思われるが、東部地域の自然度の高い環境においては、今後、発見される可能性がある。

保全上の留意点

山林などの生息環境を保全する。

関連文献

千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.42, p.185．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.35．保育社，大阪．
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類．東海大学出版会，神奈川．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コガネグモ科＞

コガネグモ　*Argiope amoena* L. Koch, 1878

評価理由

草や木の間に円網を張り生息する全国的にもっとも普通なクモであったが、市内では特に減少傾向にある。生息適地である草地環境の減少が主な要因であろう。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長雌 20.0～30.0mm、雄 5.0～7.0mm。背甲は暗褐色で銀色の毛が多数生えている。腹部上面には黄色と褐色の幅の広い横縞模様が美しい。鹿児島県加治木町のクモ合戦で有名。



コガネグモ（雌）
中川区戸田川、2014 年 7 月 2 日、柴田良成　撮影

分布の概要

市内：近年急速に減少しているが、守山区、中村区、港区、西区、中川区、緑区に見られる。

県内：広く分布し、良好な環境があれば多産することがあるが、一般に減少傾向にある。

国内：本州、四国、九州、南西諸島、薩南諸島、伊豆諸島。

世界：台湾、韓国、中国。



生息地の環境／生態的特性

主に河原や草木の枝の間や軒下などに垂直円網を張り、X 字状の白帯（一部省略されることもある）を付け、その中央に止まる。一般に、日当たりのよいところに多い。網の近くに不規則に糸を引き、淡緑色の卵のうを吊す。

現在の生息状況／減少の要因

主に公園や林に生息するが、個体数は少ない種で、もともと採集や観察例が少なく、一度確認された生息地においても毎年見られるわけではない。流動的な分布を示すようである。

保全上の留意点

河川改修の整備工事などにより生息できる草地環境の減少が主な要因であろうが、他にも原因があるように思われる。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.425．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.79, p.213．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.113．保育社，大阪．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コガネグモ科＞

ビジョオニグモ　*Bijoaraneus komachi* Tanikawa, Yamasaki & Petcharad, 2021

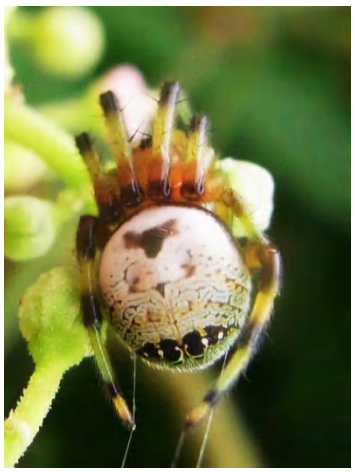
評価理由

造網性のクモで、山林や林に棲む。もともと愛知県では個体数が少なく、特に市内では採集、観察例の少ない種であり注目に値する。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長雌 8.0～10.0mm、雄 5.0～6.0mm。背甲は明褐色、腹部上部は緑白色で前縁は黒色、前方には横向きの暗色の斑紋があり、中央付近には 1 対の黒点、後端には横一列に 4 黒点が並ぶ。歩脚は橙色で各節の末端に黒色環斑がある。



ビジョオニグモ（雌）
千種区平和公園、2014 年 8 月 17 日、柴田良成　撮影

分布の概要

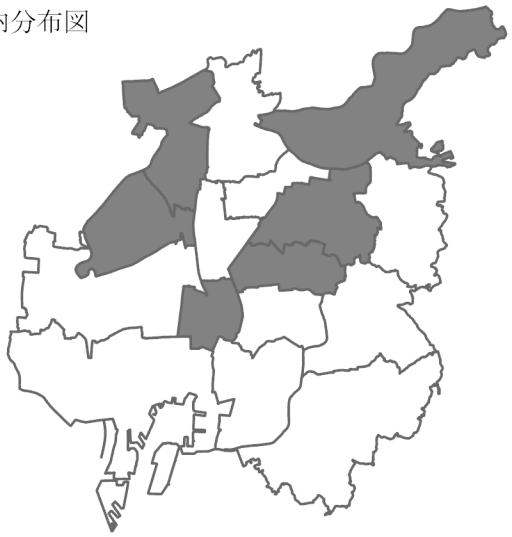
市内：千種区、守山区、昭和区、熱田区、西区、中村区。

県内：豊明市、豊田市（旧足助町）、知立市、瀬戸市、日進市、岡崎市、安城市で記録されている。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：インド、マレーシア、フィリピン、台湾、韓国、中国、ニューギニア。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

多くは広葉樹の枝葉間に黄色の垂直円網のキレ網を張り、網の中央から呼び糸を引き先にある葉を丸めた住居に潜む。餌の昆虫などが網にかかると、呼び糸を伝わって捕獲する。捕らえた獲物は住居内で食べる。

現在の生息状況／減少の要因

主に公園や林に生息するが、個体数は少ない。もともと採集や観察例が少なく、一度確認された生息地においても毎年見られるわけではない。流動的な分布を示すようである。

保全上の留意点

公園整備作業には樹木管理に配慮し農薬、除草剤等の散布には特に要注意。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.457．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.66, p.205．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.100．保育社，大阪．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コガネグモ科＞

オオトリノフンダマシ　*Cyrtarachne akirai* Tanikawa, 2013

評価理由

市内における生育適地の減少に伴い、分布地、個体数ともに急激に減少傾向にある。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

雌は体長 10～13mm、雄 2～2.5mm。背甲は褐色、腹部上部は黄色で前方両側には褐色の丸い斑紋が 1 対あり長さと幅がほぼ同長。雄はきわめて小さい。



オオトリノフンダマシ（雌）
千種区東山、2011 年 9 月 23 日、柴田良成　撮影

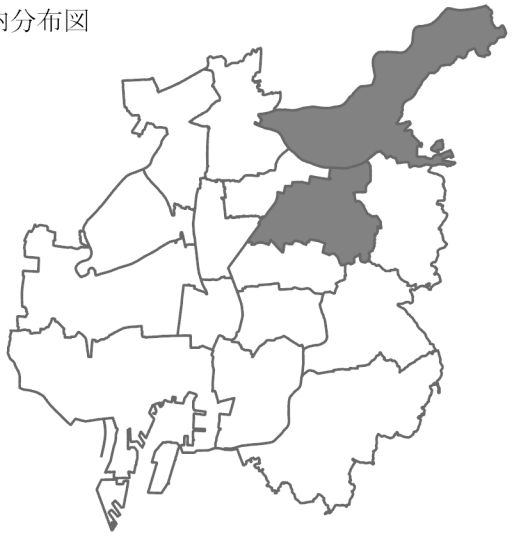
分布の概要

市内：守山区、千種区に僅かに生息している。

県内：豊田市（旧豊田市、旧稲武町、旧下山村）、東浦町、瀬戸市、犬山市、豊明市、日進市、常滑市、西尾市、豊川市、新城市、田原市、設楽町と広く分布するが減少傾向にある。

国内：北海道、本州、四国、九州、薩南諸島、沖縄諸島、奄美諸島。

世界：インド、台湾、韓国、中国。



生息地の環境／生態的特性

主に山間部、丘陵地の道沿い、ススキや広葉樹の葉裏に脚を縮めて止まっている。夜になると、大型の荒い同心円状の水平円網を垂れて張り、餌としては主に蛾の仲間を捕らえる。

現在の生息状況／減少の要因

主に公園整備等により樹木の生息場所が失われることが大きな要因である。他に農薬の影響も考えられる。

保全上の留意点

整備工事や山林開発の際、ススキの原や疎林を残し生息環境の確保に配慮。千種区の平和公園に生息しているのは、僅かな疎林が残されているからである。ほかに農薬等の散布に注意する必要がある。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.427．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.82, p.216．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.109．保育社，大阪．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コガネグモ科＞

トリノフンダマシ　*Cyrtarachne bufo* (Bösenberg & Strand, 1906)

評価理由

市内における生息適地の減少に伴って、個体数も減少傾向にある。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

体長雌 8.0～10.0mm、雄 1.0～2.5mm。腹部は前方は灰褐色、後方は黄白色。前方両肩は灰褐色で隆起、その周辺は白い線で囲まれる。雄の腹部は扁平で黄褐色、褐色の斑紋がある。



トリノフンダマシ（雌）
千種区平和公園、2014 年 8 月 15 日、柴田良成　撮影

分布の概要

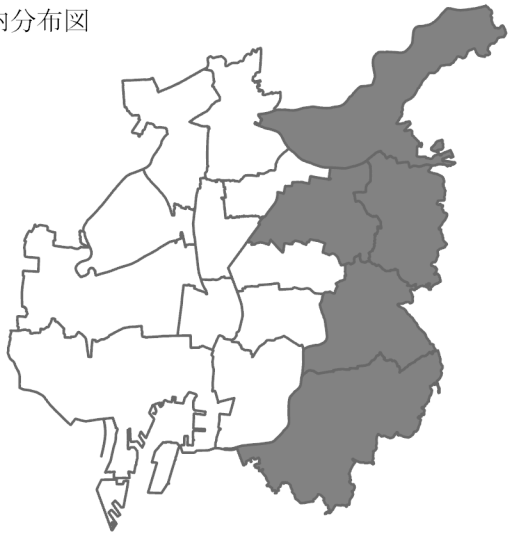
市内：東部に残された二次林を中心に生息しており、守山区、千種区、名東区、天白区、緑区で確認している。

県内：豊田市、岡崎市、瀬戸市、豊明市、日進市、半田市、常滑市、西尾市、豊川市、新城市、田原市に広く分布するが、個体数は少ない。

国内：本州、四国、九州、南西諸島。

世界：台湾、韓国、中国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

昼間はススキや広葉樹の葉の裏に静止、夜間に荒い同心円状の垂れた水平円網を張り、餌としては主に蛾の仲間を捕らえる。

現在の生息状況／減少の要因

公園整備や開発に伴い生息適地の減少、ならびに農薬散布の影響などが主な要因と思われる。

保全上の留意点

主に公園整備工事などの際、生息に適した林地、草原を残す必要がある。農薬散布にも注意が必要である。

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.427．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.82, p.215．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.109．保育社，大阪．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コガネグモ科＞

シロオビトリノフンダマシ　*Cyrtarachne nagasakiensis* Strand, 1918

評価理由

もともと個体数の少ない種である。さらに、近年、開発等により生息適地が狭められ急激に減少している。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

形態

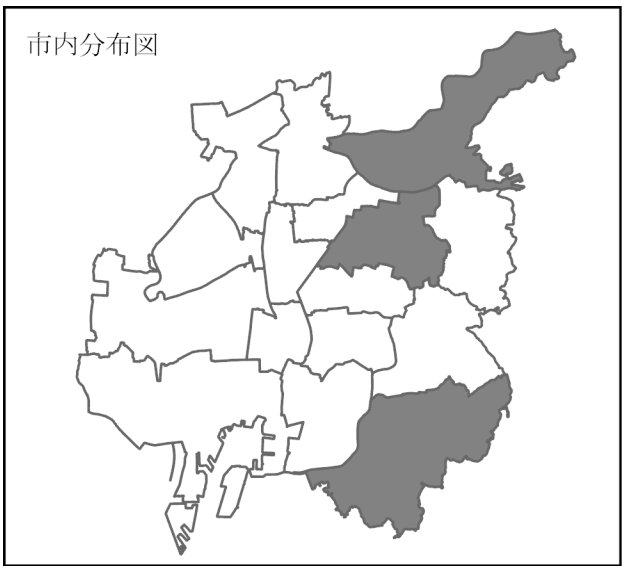
雌、体長 5～8mm、雄、1～2mm。頭胸部は赤褐色、腹部背面の地色は黒褐色～茶褐色、その最広部付近を横に黄白色～白色の帯があり、最後部は淡黄色となる。また、頭胸部は赤褐色であるが、腹部は灰褐色の個体（nigra type）もあり、色彩にはいくつかの色彩変異がありシロオビ型、クロ型などがある。



シロオビトリノフンダマシ（雌）
千種区平和公園、2014 年 7 月 29 日、柴田良成　撮影

分布の概要

市内：守山区、千種区、緑区で記録がある。
県内：豊田市、岡崎市の記録が多い。瀬戸市、豊明市、日進市、常滑市、西尾市、豊川市、新城市、田原市、設楽町。
国内：本州、四国、九州、伊豆諸島、薩南諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、八重山諸島。
世界：韓国、中国。



生息地の環境／生態的特性

昼は、ススキや広葉樹の葉の裏に脚を縮めて止まっている。夜間、草間や樹間に同心円状の水平円網を張り活動する。

現在の生息状況／減少の要因

もともと個体数の少ない種である上、市内では、草原等生息適地の減少が拍車を掛けている。また、管理地等での農薬等の散布の影響も大きい。

保全上の留意点

開発時、ススキ草地や疎林を残すなどの配慮が必要である。また、農薬、除草剤等の散布には注意する必要がある。

特記事項

従来、クロトリノフンダマシ（*C. nigra* Yaginuma）と呼ばれていたものは本種の色彩変異（nigra type）で syn.とされた（Tanikawa，2001）。

引用文献

Tanikawa, A.，2001．Two new synonymies of the spider genus *Cyrtarachne* (Araneae: Araneidae)．Acta Arachnologica，50(1): 87-89.

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.428．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.82, p.216．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.110．保育社，大阪．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目コガネグモ科＞

スズミグモ　*Cyrtophora ikomosanensis* (Bösenberg & Strand, 1906)

評価理由

二次林などの樹木の枝や葉の間にドーム形の網を張る種である。市内では、このような生息環境が少なくなり、減少傾向にある。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

雌の体長は 18～23mm、雄は小さく 3～5mm ある。腹部の前方（両肩）に円錐状の突起があり、その前方は白い。後方はイナズマ状の美しい斑紋がある。斑紋の色は個体によって違い、褐色、緑色、黒色、赤色などまちまちである。また、斑紋の形も少しずつ違っている。第 4 脚の腿節が赤い。



スズミグモ（雌）
緑区大高緑地、2000 年 7 月 30 日、緒方清人　撮影

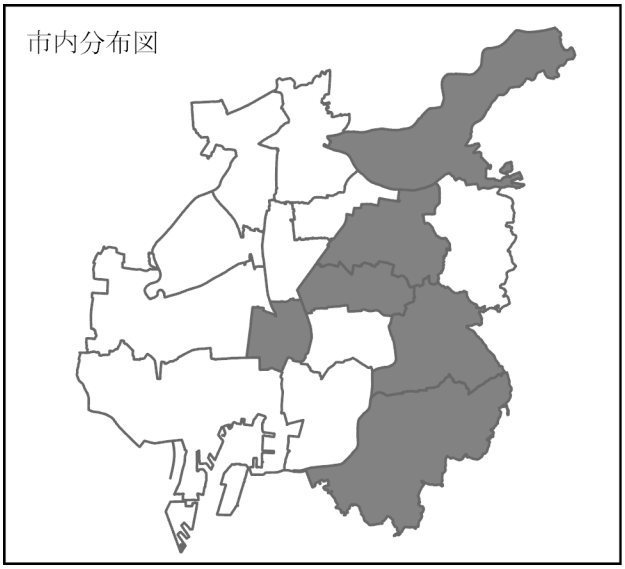
分布の概要

市内：東部の守山区、千種区、昭和区、緑区、天白区の森林が多く残っている地域や熱田区の熱田神宮林内に生息している。

県内：刈谷市、豊明市、豊橋市、東浦町、瀬戸市、日進市、半田市、常滑市、岡崎市、豊田市、西尾市、豊川市、新城市、田原市、豊根村に広く分布するが、局地的な傾向がある。

国内：本州（新潟県以南）、四国、九州、南西諸島。

世界：インド、台湾、オーストラリア、中国。



生息地の環境／生態的特性

樹間に、直径 30～80cm ほどの特徴のあるドーム状絹網を張り、上下に不規則な糸を引く。雄の網もドーム状であるが小さく 5cm ほど、雌の網の中や葉の裏などに張る。

現在の生息状況／減少の要因

市内に点在した二次林などが開発によって減少し、生息に適した場が失われたことが減少の主原因と考えられる。

保全上の留意点

開発に際して、二次林を残す工夫が必要である。また、公園などでは、殺虫剤の散布に注意する必要がある。

関連文献

千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.81, p.214．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.117．保育社，大阪．
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類．東海大学出版会，秦野．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目フクログモ科＞

ハマキフクログモ　*Clubiona japonicola* Bösenberg & Strand, 1906

評価理由

徘徊性のクモで、主に、池沼やその周辺の草原に棲む。そのため、開発の影響をうけやすく、生息環境の悪化により激減した。フクログモ属で水辺に依存する種は少なく、本種は注目に値する。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長雌 8～9mm、雄 5～6mm。背甲は黄褐色で頭部前方にいくにしたがい黒褐色となる。腹部は黄褐色で白色の短毛におおわれる。歩脚は黄褐色。



ハマキフクログモ（雌）
豊明市沓掛町、2002 年 5 月 5 日、緒方清人　撮影

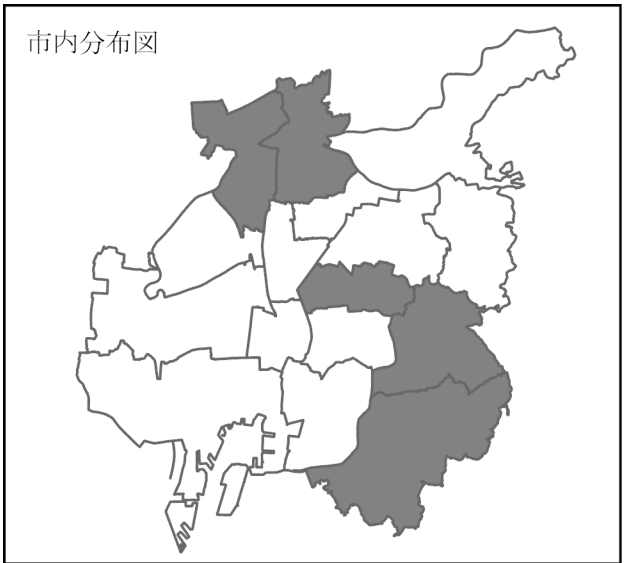
分布の概要

市内：西区、天白区、昭和区、北区、緑区。

県内：旧豊田市、岡崎市、豊明市、瀬戸市、新城市、田原市、設楽町に分布する。

国内：北海道、本州、四国、九州。

世界：東アジア一帯。



生息地の環境／生態的特性

主に池沼、湿地帯、河川などの水辺に生息する。雌は大型草本類のマコモ、ガマなどの葉先を三つ折りに曲げて産室をつくり、その中で産卵し卵のうを保護する。

現在の生息状況／減少の要因

市内では局地的に分布しているにすぎない。開発等により池、湿地などが減少し生息場所が失われたことが大きな要因である。

保全上の留意点

水辺の環境を保全し、生息区域での農薬、除草剤等の散布には注意する必要がある。

関連文献

千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.123, p.257．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.179．保育社，大阪．
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類．東海大学出版会，秦野．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目ワシグモ科＞

ヒゲナガツヤグモ　*Micaria dives* (Lucas, 1846)

評価理由

徘徊性のクモで、河川敷や草地などに棲む。市内では観察、採集例も少なく、もともと個体数の少ない種と思われる。近年、開発等の影響で生息地が狭められている。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

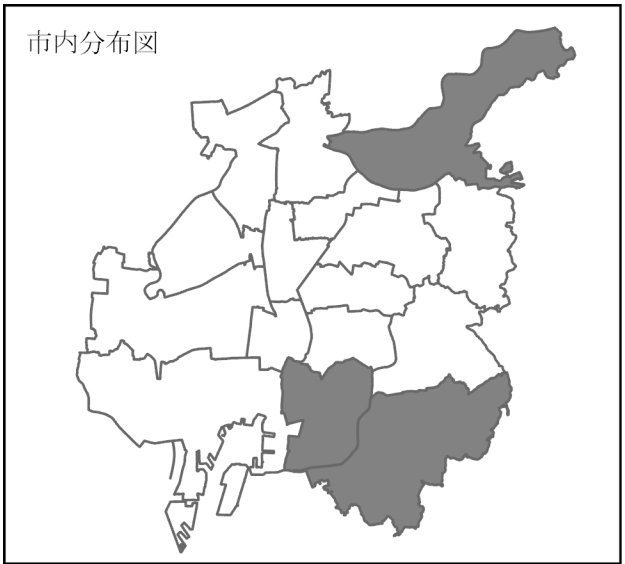
体長雌 2.5～4mm、雄 2～3.5mm。背甲は濃紫色で頭部前方にいくにしたがい紫色や藍色に輝く。腹部上面は艶のある濃紫色で、光線の角度によっては、一部が黄金色、藍色、紫色、赤色等に輝く。



ヒゲナガツヤグモ（雌）
緑区鳴海町、2000 年 7 月 3 日、緒方清人　撮影

分布の概要

市内：緑区、南区、守山区。
県内：豊田市（旧豊田市）、知立市、安城市、日進市、豊橋市、豊明市、常滑市、岡崎市、西尾市。
国内：本州、四国、九州に分布するが、個体数は少ない。
世界：旧北亜区。



生息地の環境／生態的特性

主に、草地の地上を徘徊する。動きが俊敏で、一見するとアリに見間違う。5～8 月にかけて成体になり、雌は石や土のすき間などに、直径 3mm ほどの卵のうを数個産みつける。

現在の生息状況／減少の要因

市内では緑区で確認されただけである。現在、発見された生息地は住宅地になり、その後の生息は不明である。微小で動きが速いために観察、確認されにくいが、他の場所で発見される可能性はある。

保全上の留意点

河川敷、草原などの生息環境の保全をする。生息区域での農薬、除草剤等の散布には注意する必要がある。

引用文献

加村隆英，2002．ワシグモ科 Gnaphosidae（その 5）．くものいと，32: 23-25.

関連文献

八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.17．保育社，大阪．
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類．東海大学出版会，秦野．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目ユウレイグモ科＞

ヒゴユウレイグモ　*Pholcus higoensis* Irie & Ono, 2008

評価理由

岡山県以南で採集される。近年は三重県でも報告例があるが発見箇所は少ない。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

雌 3～4mm，雄 3mm。背甲はほぼ円形で乳白色。眼の前端線は前曲。腹部は円筒形で乳白色。雄触肢跗節の鉤状突起は褐色で、先端部は幅広くなっている。転節は、靴の形になって先端部が尖っている。歩脚は淡黄褐色。

分布の概要

市内：千種区で 2023 年 4 月 1 日に雌を採集。
県内：長久手市、常滑市、豊田市、西尾市。
国内：広島以南九州までに分布。近畿地方を飛ばして三重県、愛知県で採集されている。
世界：今のところ日本固有種であるが不明な点が多い。



ヒゴユウレイグモ（雌）
平和公園くらしの森、2023 年 4 月 1 日、加藤修朗　撮影



生息地の環境／生態的特性

竹林で伐採されて野済みされた竹の中に生息。腐食してひび割れた竹の中を好むが新しい竹でも切り口から節の間に 10ｃｍ程の空間があれば生息可能である。

現在の生息状況／減少の要因

不明なところが多いが、伐採された竹の中に生息することから、見つかりづらいだけで本当は広範囲で生息している可能性もある。

保全上の留意点

竹林を保全管理する必要がある。今後も注意して情報収集に努める必要がある。

引用文献

新海　明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生，2024. CD 日本のクモ．自刊.
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.108.　東海大学出版会，秦野.

関連文献

入江照雄, 2016. ヒゴユウレイグモの生息環境と分布. Kishidaia, 108: 23-28.

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目スオウグモ科＞

ムロズミソレグモ　*Takeoa nishimurai* (Yaginuma, 1963)

評価理由

全国的に見てもたいへん珍しいクモであるが、不明な点が多いので情報不足と判断した。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	－

形態

体長雌雄ともに 11mm。腹部は長く一見コモリグモのようである。体全体、やや赤味を帯びた黄褐色である。頭胸部は中央と側縁の間に黒色の不規則な 2 縦条がある。胸板は周縁が赤褐色で中央部が淡色になり黒や白い毛が混生している。腹部背面は黒や褐色や白い毛が混生し、中央に淡色の不明瞭な矢筈斑がある。第 4 脚蹠節の上方位のところに、群集した毛櫛（群）があるのが特徴である。



ムロズミソレグモ（雌）
平和公園くらしの森、
2023 年 12 月 10 日、加藤修朗　撮影

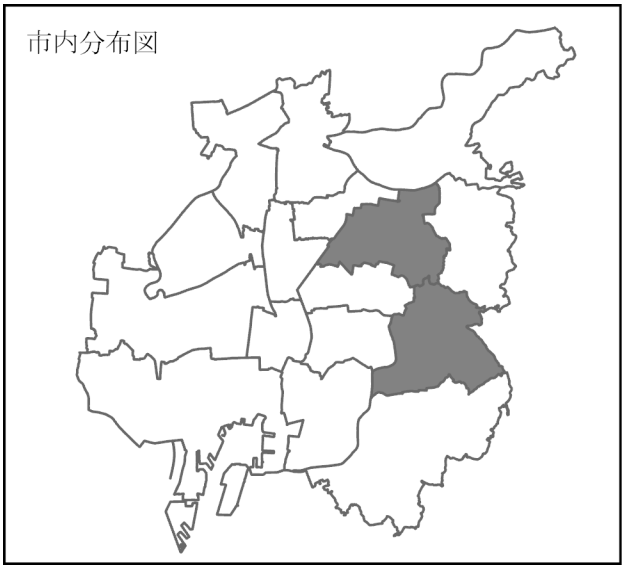
分布の概要

市内：天白区で採集（1977 年 5 月 1 日）されたほか、千種区で新たに 2020 年、2023 年に採集された。

県内：上記の名古屋市天白区および千種区。

国内：1962 年山口県光市室積町で雌が、同年京都市伏見区で雄がそれぞれ 1 頭ずつ記録された。大阪府、奈良県、高知県、島根県、鳥取県。

世界：不明な点が多い。



生息地の環境／生態的特性

山口県の雌は放置されたレインシューズ上に産み付けられた孵化した子グモ近くで、京都市の雄は座敷上、名古屋市の雌はアパートの便所で採集されている。生態は不明。屋内での発見が多いが体型からみて野外の地上徘徊性ないし狩猟性と想像される（小野，2009）。

今回は屋外で発見された。飼育下の観察では迷網を張って獲物を捕獲するが、非常に強い粘性で掛かった獲物は身動きがとれなくなる。

現在の生息状況／減少の要因

まったく不明である。

保全上の留意点

情報が十分でないので、今後も注意して情報収集に努める必要がある。

引用文献

八木沼健夫，1963．Zoropsidae のクモ日本の Fauna に入る．Acta Arachnologica，18(1): 1-6.
八木沼健夫，1977．分布資料．Atypus，69: 39.
須賀瑛文，1984．真正蜘蛛類 愛知の動物，pp.41-62．㈱愛知県郷土資料刊行会，名古屋.
荒川真，2011．奈良県産のムロズミソレグモとマダラヒメグモ．くものいと，45: 14-17.
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.141．　東海大学出版会，秦野.

関連文献

八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.17．保育社，大阪.

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目カニグモ科＞

カトウツケオグモ　*Phrynarachne katoi* Tikuni, 1955

評価理由

関東以南で採集されているが、採集数は少なく希少種として認識されている。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	－

形態

雌 8～13mm，雄 2～3mm。雌の背甲は褐色で、明暗の縁取りはなく、前端のみ白色。腹部は淡褐色か淡黒色で、場所によって濃淡はあるが、明瞭な斑紋はない。雄の背甲は濃黄褐色ないし褐色で、中央部に一対の縦条がある。腹部は濃黄褐色で疣条の突起は白色。

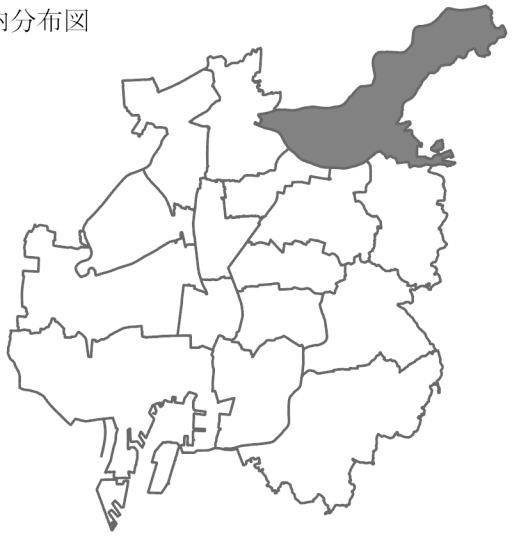


カトウツケオグモ（雌）
愛知県森林公園　篭池
2023 年 8 月 21 日、加藤修朗　撮影

分布の概要

市内：守山区で 2023 年 8 月 21 日に雌が採集された。
県内：尾張旭市、犬山市、豊田市、新城市
国内：関東以南から沖縄県までのほぼ全ての都道府県で採集されている。
世界：中国，韓国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

里山や山地の木本や草本の葉上に静止し、獲物を待ち伏せる。昆虫類が近づくと、第 1 脚を小刻みに動かして捕らえる。本種が飛んできたハエを捕えて食べていると、別のハエが後ろから近づき、腹部の突起を舐めているような行動をしていた（杉山・大原，2003）。

現在の生息状況／減少の要因

もともと個体数はきわめて少ないものと思われる。生息状況は不明の点が多い。

保全上の留意点

確認された生息地での環境保全が必要である。

引用文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.504．東海大学出版会，秦野．
杉山時雄・大原満枝，2003．カトウツケオグモの捕食行動の観察．蜘蛛，36: 7-9．中部蜘蛛懇談会．
新海　明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生，2024．CD 日本のクモ．自刊．

関連文献

新海栄一，2017．日本のクモ　増補改訂版，p.322，文一総合出版，東京．

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目カニグモ科＞

シロスジグモ　*Runcinia insecta* (L.Koch, 1875)

評価理由

関東以南の太平洋側で採取されている。分布域や生態など不明な点が多く情報不足と判断した。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

体長雌 4.5～6mm、雄約 2.9～3.5mm。頭胸部は淡黄褐色で両側に 1 対の濃褐色の縦条がある。また、背甲中央に淡色の縦条がある。腹部背面は黄褐色で側縁は濃褐色で 4～5 対の細い縦筋がある。雄もほとんど雌と同様だが、眼域に白色の横条がある。また、第 1・2 脚が体長の約 2.5 倍と非常に長い。



シロスジグモ（雄）
千種区平和公園、2008 年 7 月 12 日、緒方清人　撮影

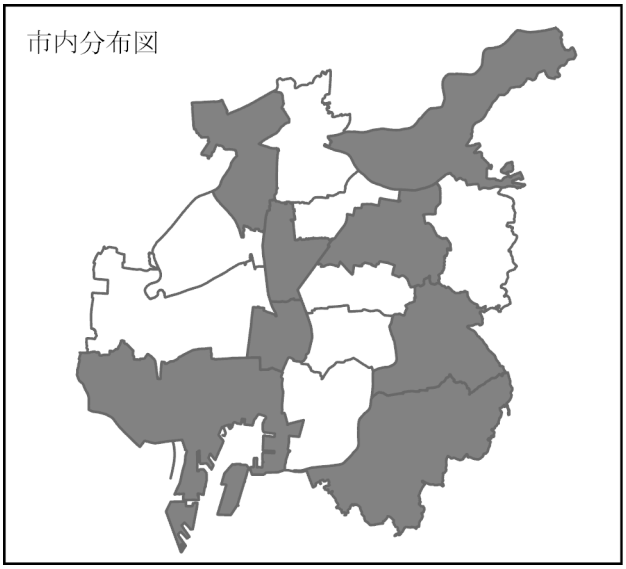
分布の概要

市内：熱田区、西区、千種区、中区、港区、緑区、天白区、守山区で採集。

県内：沿岸部から平野部に分布する。常滑市、日進市、知立市、豊橋市、西尾市、田原市で記録されている。県内では、近年採集記録が増えている。

国内：本州（千葉県以南）、四国、九州、南西諸島。

世界：アフリカからアジアにかけて広く分布する。



生息地の環境／生態的特性

河川敷や荒れ地などの草地に生息する。網は張らず、花や葉の上に静止して獲物を待ち伏せする。6～8 月に成体になる。

現在の生息状況／減少の要因

8 区で確認されているが、個体数は少ない。

保全上の留意点

河川敷や草地に生息する。本市では適当な草地が土地開発によって減少傾向にある。今後、注意深い調査と、環境保全が望まれる。

引用文献

Ono, H.，1988．A revisional study of the spider family Thomisidae (Arachnida, Araneae) of Japan．National Science Museum monographs，5: 1-252.
新海　明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生，2012．CD 日本のクモ．自刊.
緒方清人，2012．愛知県のクモ目録追加種（Ⅳ）．蜘蛛，45: 14-16．中部蜘蛛懇談会.

関連文献

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.407．東海大学出版会，秦野.
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.158．保育社，大阪.
新海栄一，2010．日本のクモ，p.173．文一総合出版，東京.

（加藤修朗）

クモ類　＜クモ目フクログモ科＞

ヤギヌマフクログモ　*Clubiona yaginumai* Hayashi, 1989

評価理由

愛知県内では豊田市などで記録はあるが、いずれも雄であり、名古屋市内での雌の記録は注目に値する。特に、市内での生息適地は少ないので貴重である。

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

形態

雌の体長は 5mm、雄は 4.5mm である。雌、雄ともに淡黄色で斑紋もなく特徴のないフクログモである。雌の外雌器周辺の模様（写真左下）と雄の触肢の大きな生殖球が特徴である。



ヤギヌマフクログモ（雌）　左下：外雌器と周辺の模様
熱田区熱田神宮、2001 年 8 月 5 日、須賀瑛文　撮影

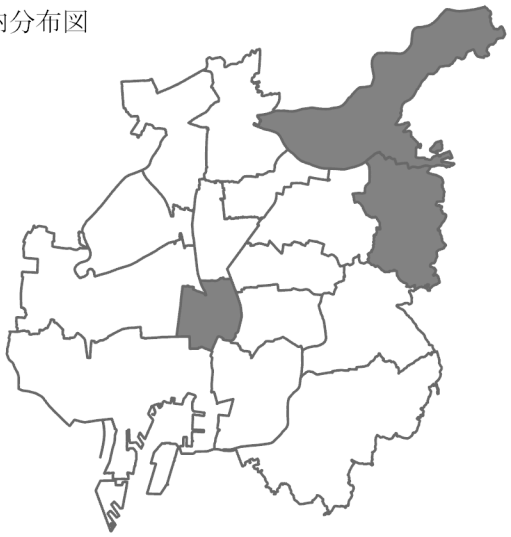
分布の概要

市内：熱田区、守山区、名東区。

県内：豊田市、新城市、常滑市、岡崎市、西尾市、豊橋市、設楽町。今回尾張旭市（小幡緑地東園）で雌雄多数が確認された。

国内：全国的に見ても少ないクモである。

世界：台湾。



生息地の環境／生態的特性

平地の草間に生息するといわれている。市内での生息場所は二次林内の下草付近である。

現在の生息状況／減少の要因

熱田神宮の立ち入り禁止区域に生息しているため、将来にわたって生息できる可能性が残されている。

元来個体数の少ない種ではないかと考えられているが、雌の外雌器が不鮮明なために見逃されている可能性がある。

保全上の留意点

二次林やその下草の保護、ならびに生息場所付近での除草剤や殺虫剤の使用に注意する必要がある。

関連文献

千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.126, p.257. 偕成社，東京．
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類．東海大学出版会，秦野．

（加藤修朗）

エビ・カニ類

①　名古屋市におけるエビ・カニ類の概況

名古屋市版レッドリスト 2020 まではカニ類のみが評価対象であったが、今回のレッドデータブックなごや 2025 よりエビ類を含めエビ目（十脚目）全体を評価対象とした。市内に生息する在来のエビ・カニ類は淡水域に 4 科 6 種、汽水・海水域に 27 科 72 種が確認されている。

淡水域

市内では開発に伴い湧水域は減少し、小さな水の流れまで 3 面コンクリート化され、エビ・カニ類が生息できる環境は減少している。河川の水質は多くの市民や関係機関の努力の結果、改善傾向にある河川も少なくないが、河道改変や護岸化が進み川本来の多様な環境が失われてしまっている。両側回遊型の種は生活史を完結するために川と海（河口域）のつながりが必須であるが、往来の障害となる堰や排水機場などが構築されている河川が多い。ため池などの止水域においては水辺の護岸化、水質悪化、外来魚類の増加などによりエビ類が減少している池もある。市内淡水域では 2023 年 6 月より条件付特定外来生物に指定されたアメリカザリガニをはじめとして外来のエビ類が 4 種確認されている。カワリヌマエビ類は近年急速に増加しており、分布状況を把握するとともに拡散を防止するなど早急な対策が必要と思われる。

汽水・海水域

かつて名古屋市の海辺には、年魚市潟（あゆち潟）とよばれる広大な干潟が広がっていたが、開発に伴い埋め立てられ、ラムサール条約湿地に登録されている藤前干潟や、河川の河口周辺に小規模な干潟が残る程度である。干潟は多種多様な生物が生息する特別な環境であるが、市内において高・中潮域まで残る干潟はさらに少なく、重ねて堤防の改修工事などにより本来の環境は失われつつある。工事の際は最低限の礫や土砂の搬入に留め、工事後もヨシ原や、砂干潟、泥干潟を有する潮間帯の健全な状態を維持するよう配慮すべきである。また廃棄物や草、流木などの漂着物により干潟が覆われ、泥面、砂面で活動するカニ類の障害となっていることも推測される。河口域周辺においても近年の気候変動の影響を大きく受けていることが懸念され、詳細な調査が必要と思われる。名古屋港内においてエビ・カニ類はふ頭周辺に僅かに残る潮間帯とふ頭間の海域に生息する。この海域は大都市に隣接するゆえに富栄養化が進み、赤潮やにが潮（青潮）が発生し、多くの生物に負担を与えている。名古屋港は 2023 年まで 22 年連続総取扱貨物量日本一の国際貿易港であり、国内外と多くの船舶が往来している。港内ではこれまでに外来のカニ類 4 種が確認されており、他の生物へ与える影響が憂慮される。今後も新たな外来種の侵入に注意する必要がある。

②　名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回の改訂で、絶滅危惧IA 類（CR）1 種、絶滅危惧IB 類（EN）1 種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）5 種、準絶滅危惧（NT）6 種、計 13 種がリストに掲載された。

サワガニは水質階級 I の指標生物とされており、清澄な川や湧水域に生息する。前述のように市内において生息可能な場所は減少し、残された各生息地も分断されているため、今回の改訂において絶滅危惧IB 類から絶滅危惧IA 類へ変更された。現状の生息域を確実に保全し、種の保護と生息環境の維持に努めることが重要と思われる。

チゴガニは全域で、コメツキガニは西部地域での減少が著しいため今回の改定にて準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類へ変更された。以前は干潮時の干潟で大群のチゴガニのウェービングが見られたが、近年は小規模な集団しか見ることができない。チゴガニとコメツキガニの減少は河口域の生息場所が漂着物で埋め尽くされることや水質や底質などの環境変化が原因と推測され、今後の詳しい調査が望まれる。

今回新たに準絶滅危惧としてミゾレヌマエビ、マキトラノオガニ、マメコブシガニの 3 種が追加された。河川に生息するミゾレヌマエビは両側回遊型の生活史を持ち、河川内においては河岸植生に強く依存しているため河川改修工事の影響を受けやすい。現時点では本種に対する影響は不明だが、同所的に生息する外来種のカワリヌマエビ類が増加しているため注視していく必要があると思われる。

干潟に生息するマメコブシガニは市内の干潟では近年個体数が激減している。生息可能な環境は限られているため、生息状況に留意する必要がある。

マキトラノオガニは内湾域や河口域において潮間帯のマガキ群落の隙間や転石下などに生息するが、このような環境の多くは埋め立てられ生息域が減少すると共に、残された生息域においても個体数が減少している。同所には外来のカニ類が多くみられ本種への影響が懸念される。

クシテガニについては干潟周辺や河口域の潮間帯において、近年個体数の増加がみられることから絶滅危惧Ⅱ類から準絶滅危惧に変更された。

ハクセンシオマネキ、ウモレベンケイガニ、ユビアカベンケイガニの 3 種は調査期間内において市内での生息を確認できなかった。今回の改定ではカテゴリー変更を見送ったが、今後も継続的に調査を行い、生息状況を把握する必要がある。

（中嶋清徳）

③　レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各エビ・カニ類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。レッドデータブック 2015 までに使用されていた「鋏脚」は「はさみ脚」に統一した。

【 掲載種の解説（エビ・カニ類）に関する凡例 】

分類群名等

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目および科の範囲、名称、配列は、WoRMS Editorial Board (2024). World Register of Marine Species.（インターネット上にて公表）等に準拠した。

和名・学名

対象種の和名および学名を各頁上の枠内に記述した。和名および学名は、WoRMS Editorial Board (2024). World Register of Marine Species.（インターネット上にて公表）等に準拠した。

評価区分

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右上の枠内に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2020　その他無脊椎動物」（環境省，2020）の全国での評価区分を併記した。

評価理由

対象種が名古屋市版レッドリスト掲載種として評価された理由について記述した。

形態

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した。

分布の概要

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査および文献調査によって確認された地域について、区ごとに着色して市内分布図として掲載した。

生息地の環境／生態的特性

対象種の生息環境および生態的特性について記述した。

現在の生息状況／減少の要因

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

保全上の留意点

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

特記事項

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

引用文献

記述中に引用した文献を著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

関連文献

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　サワガニ科＞

サワガニ　*Geothelphusa dehaani* (White, 1847)

評価理由

山間の渓流や平地の清流に生息し、池や沼には生息せず、産卵で海に下ることもない。本種の生息地は限られており分散能力が低いので地域的に絶滅しやすい。市内では守山区などで生息が確認されているが、丘陵地の開発、登山道工事などにより、サワガニは減少した。個体数が少なく発見が難しい。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	調査対象外
全国 2020	－

形態

雄は甲長 20mm 位、甲幅 25mm 位、甲の色彩に変異あり。東北地方は青色が多く、東海・三重は暗褐色である。二次性徴は、雄のはさみ脚は、左右一方が大きくなる。第二腹肢が伸び、剛毛は長く密である。

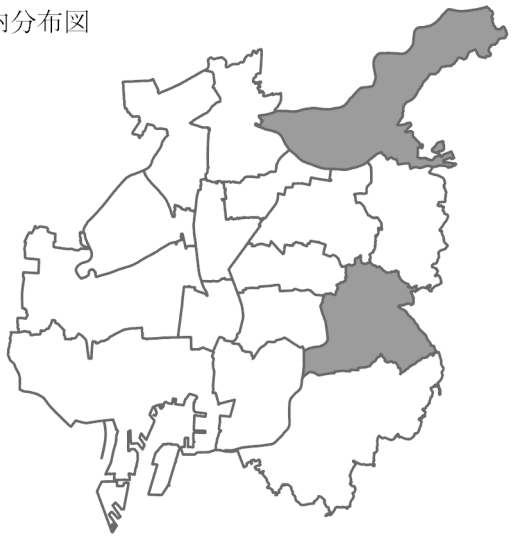


守山区、1984 年 10 月 21 日、天野　勲

分布の概要

市内：守山区、天白区の丘陵地。
県内：山間の渓谷や平地の清流に広く生息。
国内：青森下北半島（北限）から本州、四国、九州、屋久島（南限）まで生息。
世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

渓流・清流に生息し、池沼には生息しない。繁殖期は 6 月～10 月で、雌は腹部に卵を抱いて、15～20 日間孵化するまで保護する。寿命は 3 年から 4 年。食性は、藻類、ミミズ、ヨコエビ類、陸貝類（カワニナ）、水生昆虫、死んだセミなど。

現在の生息状況／減少の原因

宅地造成・道路工事などにより渓流・渓谷が土砂で埋まり、サワガニの生息環境が荒廃したと考えられる。天敵はイノシシ、アカショウビン、ヤマショウビン、ヤマメ、ドンコ。

保全上の留意点

山間の渓流の自然植生・水理の保全。平地の清流の河岸や川底をコンクリート化しないことや、川の上流から農薬、化学物質、有機物の流入を防ぐことなどに留意が必要である。

特記事項

サワガニは渓谷毎に遺伝的分化があるといわれている。肺吸虫の中間宿主として知られている。

関連文献

天野　勲，2008．代表的な自然と生物 4　東谷山　カニ．新修名古屋市史資料編　自然，p.507．名古屋市．
嶺井久勝ほか，1992．週刊朝日百科　動物たちの地球　69　無脊椎動物　9　サワガニ・コメツキガニほか，pp.260-261．朝日新聞社，東京．

（天野　勲、中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　スナガニ科＞

ハクセンシオマネキ　*Austruca lactea* (De Haan, 1835)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	調査対象外
全　　国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

市内では、庄内川河口干潟・背割堤干潟や天白川河口干潟に生息していた。庄内川の河口は、稲永ふ頭（空見ふ頭）ができて干潟の面積が狭くなったことにより、個体数が減少したが、さらに砂底・砂泥底干潟の減少で現在はハクセンシオマネキの生息を確認できない。天白川の河口干潟は、潮見ふ頭ができ、干潟・ヨシ原が減少したことや、上・中流域の水源となっていた丘陵地・池の多くが宅地となり、水質の汚濁などによりハクセンシオマネキの姿は見られなくなった。

形態

雄・雌ともに甲長 12mm 位、甲幅 18mm 位。はさみ脚は、雄は左右著しい相違。大はさみの掌部はやや扁平し、表面白色（白扇）。雌は左右とも小型で相称である。



港区、2009 年 9 月 6 日、天野　勲

分布の概要

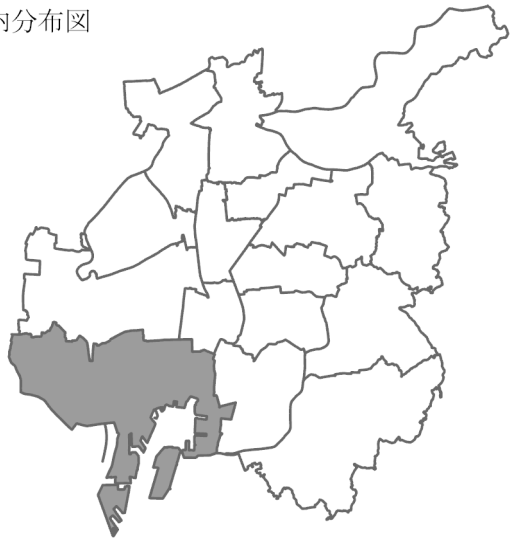
市内：庄内川河口・背割堤の干潟では 2002 年と 2008 年～2012 年まで生息を確認した。天白川河口は 2000 年に生息を確認したが、現在は絶滅したものと思われる。

県内：知多半島伊勢湾側にある南知多町内海、知多市日長の干潟に生息していた。

国内：伊勢湾が北限とされているが、下田市の大賀茂川河口、三浦半島にも生息。南は九州まで生息。

世界：韓国、台湾、香港。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

砂泥底のやや硬い干潟を好み、深さ 5～20cm 巣穴を掘って生活している。干潮時に巣穴から出て集団で活動するウェービング行動は、6 月中旬から 8 月下旬の繁殖期に見られる。

現在の生息状況／減少の原因

庄内川河口・背割堤の砂底・砂泥底干潟に生息していたが、干潟面積が狭くなり、個体数が減少し 2013 年以後、生息を確認していない。河川により運ばれる砂土量が減少し、生息場所が消失した天白川河口は、2001 年以後生息を確認していない。

保全上の留意点

河川の上流に横断構造物を建設すると、川水によって運ばれる土砂量が減少し、ハクセンシオマネキの生息場所が減少する。河口干潟・ヨシ原は稚ガニの生育場所となっていることから、庄内川では現状の自然環境が維持管理されることが必要である。

特記事項

藤前干潟は大都市に残された貴重な自然としてラムサール条約に登録され、保全が図られている。学名は Shih et al. (2016) に従った。

引用文献

Shih, H. T., Ng, P. K., Davie, P. J., Schubart, C. D., Türkay, M., Naderloo, R., Jones, D. & Liu, M. Y. (2016). Systematics of the family Ocypodidae Rafinesque, 1815 (Crustacea: Brachyura), based on phylogenetic relationships, with a reorganization of subfamily rankings and a review of the taxonomic status of Uca Leach, 1814, sensu lato and its subgenera. Raffles Bulletin of Zoology, 64.

関連文献

天野　勲，2010．生物から見た名古屋の自然，p.98．名古屋市．
伊東　円，2004．静岡県下田市大賀茂川に生息するシオマネキ類について．日本甲殻類学会第 42 回全国大会報，p.36．
伊東　円，2011．静岡県内でのシオマネキ類の生息状況．日本甲殻類学会第 49 回大会報，p.44．
大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター（編），2008．干潟を考える　干潟を遊ぶ，p.91．東海大学出版会，秦野．
水産庁（編），1998．日本の希少な野生水生生物に関するデータブック，pp.3-23．（社）日本水産資源保護協会，東京．
和田恵次，2000．干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち，pp.18-19,21,59,64,66,96,102-103．京都大学学術出版会，京都．

（天野　勲、中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　ベンケイガニ科＞

アカテガニ　*Chiromantes haematocheir* (De Haan, 1833)

評価理由

市内では、庄内川河口から 5km～6km 上流までの、潮上帯から後背の草むらや土手などに生息する。市内の河川堤防は、コンクリートの垂直壁で、這い上がることが難しいため、個体数が減少した。河口付近の干潟やヨシ原に生息するものもあるが、個体密度は低く、河口域・下流域の生育環境が悪化すれば絶滅するものと思われる。

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	調査対象外
全国 2020	－

形態

雄の甲長 35mm 位、甲幅 40mm 位で、甲は四角形。雄のはさみ脚は強大で鮮紅色。



港区、2005 年 8 月 20 日、天野　勲

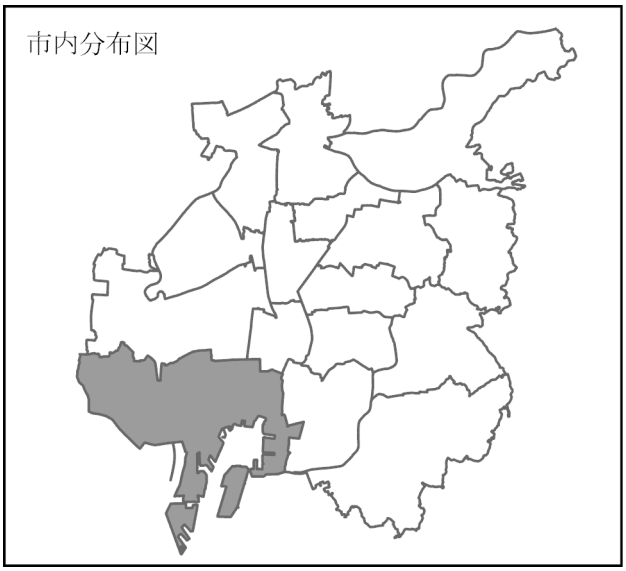
分布の概要

市内：庄内川の河口から河川沿いに 5km～6km 上流まで生息しているが、個体数は多くない。

県内：伊勢湾の木曽三川や三河湾の矢作川・豊川など大きい河川の河口部・下流域。

国内：岩手県以南（太平洋側）と秋田県以南（日本海側）。

世界：韓国、中国、台湾。



生息地の環境／生態的特性

堤防の土手斜面や陸上の自然林に巣穴をつくり生息する。抱卵盛期は 7 月～8 月で、雌は水辺に移動し、幼生を放出する。幼ガニまではヨシ原の中で生育する。

現在の生息状況／減少の原因

都市化が進み、堤防がコンクリート化されたことや、陸上の自然林がなくなったことにより、堤防内のヨシ原の周辺を生息場所としている。

保全上の留意点

河川改修の際、土の岸とその付近の植生を残すことや、河口のヨシ原を消失しないよう留意する。コンクリートの垂直堤防はカニが陸上へ登ることができないため、堤防の傾斜を考えるべきである。

特記事項

赤いカニとして目立つので捕獲され易い。

関連文献

馬場敬次，1976．アニマ特集　カニの世界・海に育つ河口のカニ，pp.16-19．平凡社，東京．

小島太一，2008．アカテガニの産卵における 3 年サイクル．日本甲殻類学会第 46 回大会報，p.78.

（天野　勲、中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　ベンケイガニ科＞

ウモレベンケイガニ　*Clistocoeloma sinense* Shen, 1933

評価理由

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	調査対象外
全　　国 2020	－

かつて、市内で生息が確認された産地は、庄内川河口両岸・背割堤のヨシ原と天白川河口右岸のヨシ原の 2 か所であった。その後、庄内川左岸の堤防工事やふ頭埋め立て工事により、河口の干潟やヨシ原が減少した。2009 年 6 月に禁止されていた背割堤の立ち入りが許可されウモレベンケイガニの生息が確認された。天白川は上・中流域の丘陵が宅地となり、川によって運ばれる土砂量が減少し、水質が変化したことや、河口にふ頭ができたことで、右岸の干潟・ヨシ原が激減し、ウモレベンケイガニは生息できなくなった。

形態

雄の甲長 12mm 位、甲幅 20mm 位で甲は長方形。全身黒色で、短毛で覆われている。完全な保護色である。はさみ脚の先が赤い。



港区、2009 年 6 月 10 日、天野　勲

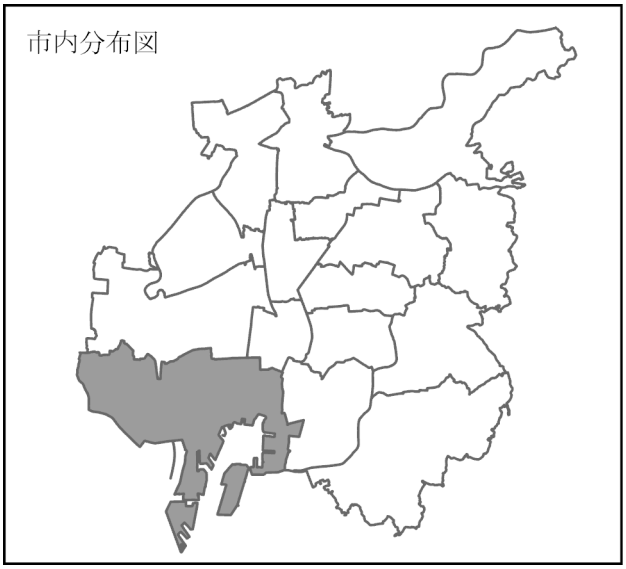
分布の概要

市内：庄内川河口右岸の背割堤ヨシ原などに生息。

県内：伊勢湾では、知多市新舞子鍛冶屋川河口干潟・ヨシ原などに生息していた。三河湾の田原市汐川の河口干潟・ヨシ原にも生息していた。

国内：東京湾以南に分布。紀伊半島、四国（土佐清水）、山口湾周辺の干潟。福岡、佐賀にも生息。

世界：台湾、中国。



生息地の環境／生態的特性

河口・ヨシ原周辺の石・漂着物の下の湿り気のある場所に生息する。半分位土にうずもれているので発見しにくい。指で触っても動かない。小動物を捕食する。

現在の生息状況／減少の原因

河口開発が進み、干潟・ヨシ原が減少したため生息場所が縮小し、個体数が減少した。

保全上の留意点

河川全域と河口域の自然環境の維持・管理が必要である。個体数が減少しているので現在の生息場所を保護する必要もある。

特記事項

環境省海洋生物レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に評価されている（環境省，2017）。

引用文献

環境省．2017．環境省版海洋生物レッドリスト 2017（甲殻類）．https://www.env.go.jp/content/000037629.pdf．2025 年 1 月 18 日確認

関連文献

天野　勲，2010．生物から見た名古屋の自然，p.98．名古屋市．
市川市・東邦大（編），2007．干潟ウォッチングフィールドガイド，pp.37,136．誠文堂新光社，東京．
中島徳男，1997．三河湾・遠州灘産海産蟹類目録，p.32．自費出版，愛知
大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター（編），2008．干潟を考える　干潟を遊ぶ，p.91．東海大学出版，秦野．
酒井　恒，1976．日本産蟹類，pp.419-420．講談社，東京．
和田恵次，2000．干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち，pp. 158-162．京都大学学術出版会，京都．

（天野　勲、中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　ベンケイガニ科＞

ユビアカベンケイガニ　*Parasesarma tripectinis* (Shen, 1940)

評価理由

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	調査対象外
全　　国 2020	－

市内で生息が確認された産地は、庄内川河口の両岸・背割堤のヨシ原である。その後、庄内川左岸は護岸工事と埋め立て工事で干潟やヨシ原は減少した。2009 年 6 月に禁止されていた背割堤の立ち入りが許可されユビアカベンケイガニの生息を確認したが、個体数が減少していた。天白川は、上・中流域の丘陵が宅地となり、川によって運ばれる土砂量が減少し、水質も変化したことや、河口にふ頭ができ、右岸の干潟・ヨシ原が激減したことにより、ユビアカベンケイガニは生息できなくなった。

形態

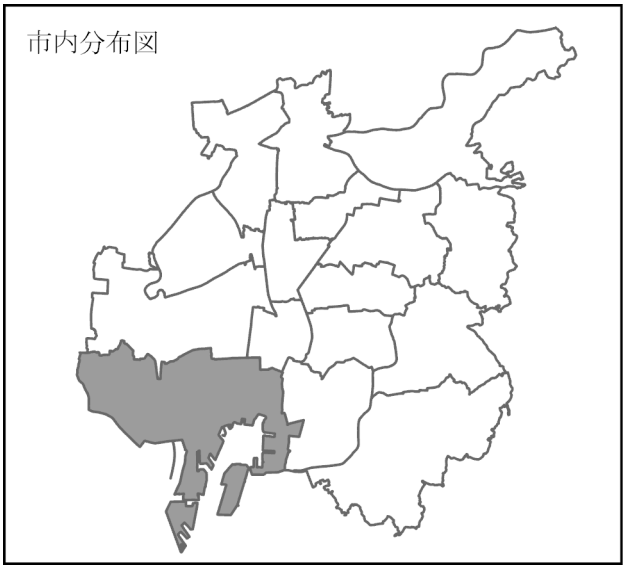
雄の甲長 12.4mm、甲幅 15.2mm。クシテガニに似ている。小形種。はさみ脚の可動指の上縁に 24～26 個の顆粒が密に列生している。はさみ脚の先が赤い。



港区、2009 年 6 月 10 日、天野　勲

分布の概要

市内：庄内川右岸の背割堤に生息。
県内：三河湾の田原市汐川河口干潟、ヨシ原などにも生息していた。
国内：相模湾、三浦半島、土佐湾、福岡市多々良川水系、与論島。
世界：韓国から中国沿岸、台湾。



生息地の環境／生態的特性

汽水域上限まで見られ、ヨシ原の中で生息する。干潟の高い場所や川堤に穴居する。

現在の生息状況／減少の原因

河口開発が進み、干潟・ヨシ原が減少したため生息場所が縮小し、個体数の減少となった。

保全上の留意点

河川全域と河口域の自然環境の維持・管理が必要である。個体数が減少しているので現在の生息場所を保護する必要もある。

特記事項

学名は Rahayu & Ng（2005）により *P. acis* Davie, 1993 から *P. tripectinis* （Shen, 1940）に改められている。環境省海洋生物レッドリストでは準絶滅危惧に評価されている（環境省，2017）。

引用文献

環境省．2017．環境省版海洋生物レッドリスト 2017（甲殻類）．https://www.env.go.jp/content/000037629.pdf．2025 年 1 月 15 日確認

Rahayu, D.L. & P.K.L. Ng, 2005. On two new species of the genera *Haberma* and *Parasesarma* (Crustacea: Decapoda: Brachyura:Sesarmidae) from Papua, Indonesia.Zoologische Mededelingen, 79: 167–178

関連文献

中島徳男，1997．三河湾・遠州灘産海産蟹類目録．40pp．自費出版，愛知

大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター（編），2008．干潟を考える　干潟を遊ぶ，pp.33,46．東海大学出版会，秦野．

三宅貞祥，1998．日本産かに類の分類目録．原色日本大型甲殻類図鑑Ⅱ，p.181．保育社，大阪．

（天野　勲、中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　コメツキガニ科＞

チゴガニ　*Ilyoplax pusilla* (De Haan, 1835)

評価理由

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	調査対象外
全　　国 2020	－

干潟に見られる普通種であるが、市内では個体数が減少している。かつて、庄内川・天白川に広い河口干潟があり、砂泥底干潟には、チゴガニの大きい集団を見ることができたが、その後、両河川の河口にふ頭ができ、個体数が激減した。庄内川河口干潟には、幾つかの集団を観察することができる。天白川河口干潟に生息するチゴガニの個体数は少なく、河口の自然環境悪化が進めば、絶滅すると考えられる。

形態

雄の甲長 6mm 位、甲幅 9mm 位で、甲は横長で、六角形の小型のカニ。はさみ脚は左右同大。はさみ脚の長脚に鼓膜を有する。



港区、2020 年 6 月 24 日、中嶋清徳

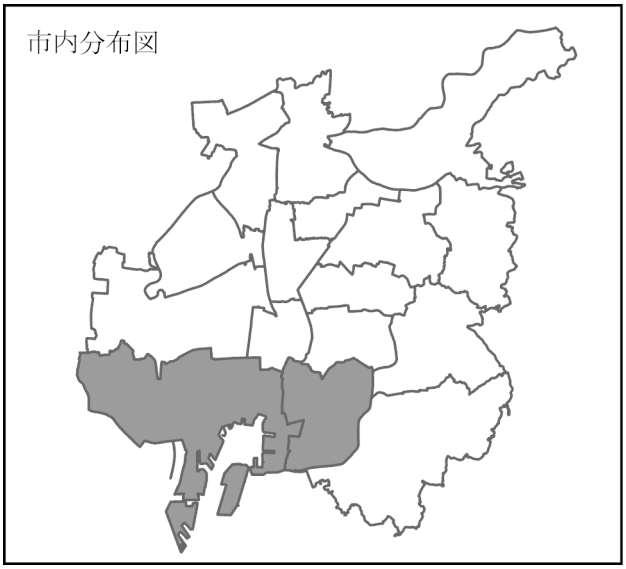
分布の概要

市内：庄内川と天白川の河口砂泥底干潟に生息。

県内：知多半島南知多町内海川の河口干潟に分布。三河湾に流入する矢作川、豊川、汐川の河口干潟と一色海岸の干潟にも生息。

国内：東京湾から九州沿岸まで分布。近年、宮城県まで分布していることが分かった。

世界：韓国の沿岸。



生息地の環境／生態的特性

河口の砂泥底干潟に生息する。干潮時には砂泥底上のケイ藻類を砂とともに摂取し、砂団子にして出す。抱卵盛期は 6 月から 7 月である。

現在の生息状況／減少の原因

河川環境が悪化し、河口の砂泥底干潟やヨシ原が減少するとチゴガニは産卵・稚ガニの生育ができなくなり、個体数が減少する。

保全上の留意点

河川の途中に横断構造物ができると、河口に運ばれる土砂が少なくなり砂泥干潟やヨシ原が減少する。庄内川河口の環境保全が必要である。

関連文献

天野　勲，2008．代表的な自然環境と生物 2・庄内川河口．新修名古屋市史資料編　自然，pp.496-497．名古屋市．

嶺井久勝ほか，1992．週刊朝日百科　動物たちの地球　69　無脊椎動物　9　サワガニ・コメツキガニほか，pp.270-271．朝日新聞社，東京．

和田恵次，2000．干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち，pp. 21,22,58-59,93-95．京都大学学術出版会，京都．

（天野　勲、中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　コメツキガニ科＞

コメツキガニ　*Scopimera globosa* (De Haan, 1835)

評価理由

干潟に見られる普通種であるが、市内では個体数が減少している。かつて、庄内川・天白川の河口には広い干潟があり、砂底干潟にはコメツキガニの大きい集団が見られたが、その後、両河川の河口にふ頭ができ、個体数が減少した。庄内川河口には稲永ふ頭（空見ふ頭）がつくられ、干潟が狭くなったが、残された砂底干潟でコメツキガニの集団が観察できる。しかし川により運ばれる土砂量が減少したり、水質が変化すると更に減少が懸念される。天白川河口には、潮見ふ頭がつくられ、河口干潟は狭くなったことや、上・中流の丘陵地の森林がなくなり、池が埋まり宅地となったことで、河口に運ばれる土砂量が減少し、水質も汚濁し、個体数が激減した。

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	調査対象外
全　　国 2020	－

形態

雄は甲長 7mm 位、甲幅 9mm 位の小型のカニ。はさみ脚は左右同じ大きさ。指部は内側に曲がりスプーン状である。はさみ脚・歩脚の長節に鼓膜がある。



港区、2023 年 10 月 13 日、中嶋清徳

分布の概要

市内：庄内川河口の砂底干潟に多く生息。天白川の河口干潟は河口の自然環境が悪く、カニの個体数が減少している。

県内：知多半島伊勢湾側内海の干潟に生息。三河湾に流れこむ矢作川、豊川、汐川などの河口干潟、一色海岸の干潟にも生息。

国内：北海道から九州、沖縄、八重山まで生息。

世界：台湾、韓国の沿岸。



生息地の環境／生態的特性

内湾や河口の砂底干潟に群生する。干潮時に摂食活動が見られる。干潟の表面に繁殖するケイ藻類を砂土とともにはさみ脚ですくって口に入れ、砂土を団子にして外に捨てる。抱卵盛期は 6 月から 7 月である。

現在の生息状況／減少の原因

天白川河口は砂底干潟やヨシ原が減少し、コメツキガニは激減した。

保全上の留意点

庄内川河口の砂底干潟が現状のままに存続するためには、河口に運ばれる土砂が減少しないことである。そのためには、河川の途中に横断構造物を建設しないことが必要である。

関連文献

天野　勲，2008．代表的な自然環境と生物・庄内川河口．新修名古屋市史　資料編　自然，pp.496-497．名古屋市．

嶺井久勝ほか，1992．週刊朝日百科　動物たちの地球　69　無脊椎動物　9　サワガニ・コメツキガニほか，pp.270-271．朝日新聞社，東京．

和田恵次，2000．干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち，pp. 21,23,58-59,98．京都大学学術出版会，京都．

（天野　勲、中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　ヌマエビ科＞

ミゾレヌマエビ　*Caridina leucosticta* Stimpson, 1860

評価理由

市内の河川において、生息可能な環境は限られており、河川ごとに生息状況には大きな違いがある。また同所的に生息する外来種のカワリヌマエビ類が増加しており、本種への影響が懸念される。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	調査対象外
全国 2020	－

形態

雌は雄より大きく体長 3cm を越える。額角はやや長く、上縁に 12～30 歯（通常 18～21 歯）が先端約 1/4 を除く位置に密に並び、先端部に 1～4 歯（通常 2 歯）ある。淡褐色の地に白色、赤褐色、黄色などの小班が散在。雌は腹部側面に暗褐色の斑紋があり、背面の正中線上に白色縦帯や褐色の横縞があるものもいる（林，2007；豊田ほか 2019）。



ミゾレヌマエビ（雌）、天白区、2023 年 8 月 23 日、中嶋清徳

分布の概要

市内：庄内川、山崎川、天白川（中嶋，2025）など。

県内：矢作川（白金・浜崎，2018），豊川（浅香ほか，2019），渥美半島周辺河川（尾山ほか，2021）など。

国内:本州中部以南、四国、九州、南西諸島（林，2007）。

世界：韓国（林，2007）。



生息地の環境／生態的特性

河川の中・下流域や用水路などに生息。抱卵期は 2～10 月、小卵を多産。ふ化した幼生は川を下り、河口から沿岸域で成長、稚エビに変態後、川を上り成長・成熟する両側回遊型（Yatsuya et al., 2013）。

現在の生息状況／減少の原因

本種の河川内での分布域や生息環境は河岸植生に強く依存しているため（Saito et.al.,2012）、河川改修工事などの影響を受けやすい。本種に対する影響は不明だが市内では外来種と考えられるカワリヌマエビ類が広く生息しており（中嶋ほか，2025）、注視していく必要がある。

保全上の留意点

河川内の生息場所となる水際の植生帯を保全する（中田ほか，2011）。淡水から汽水、沿岸域まで幅広い生息地を利用するため、各発達段階に対応する各生息地の保全を検討すると同時にこれらの生息地間のつながりを維持することが不可欠である（Yatsuya et al., 2013）。

引用文献

浅香智也・鈴木誉士・中川雅博，2019．愛知県豊川のエビ類相．伊豆沼・内沼研究報告 13: 57–65.

林　健一，2007．日本産エビ類の分類と生態Ⅱ．コエビ下目（1）．（ヒオドシエビ上科・イトアシエビ上科・ヌマエビ上科・サンゴエビ上科・オキエビ上科・イガグリエビ上科）．292 pp．生物研究社，東京．

中嶋清徳，2025. 名古屋市内の河川に生息する淡水性十脚目甲殻類．なごやの生物多様性，12:187-193.

中嶋清徳・福岡将之・大畑史江・岡村祐里子，2025．名古屋市内の河川に生息するカワリヌマエビ類．なごやの生物多様性，12:25-35.

中田和義・浜野龍夫・天野邦彦・三輪準二，2011，淡水性エビ類の生態と保全．エビ・カニ・ザリガニ．川井唯史・中田和義編．淡水甲殻類の保全と生物学，pp.148-166．生物研究社，東京．

尾山大知・加藤柊也・丸山智朗・乾　直人，2021. 渥美半島周辺の河川で採集された注目すべき水生動物 14 種．水生動物，AA2021-2　DOI https://doi.org/10.34394/aquaticanimals.AA2021.0_AA2021-2_2

Saito，M.，Yamashiro，T.，Hamano，T.，and Nakata，K.，2012. Factors affecting distribution of freshwater shrimps and prawns in the Hiwasa River，southern central Japan. Crustacean Research, 41:27-46.

白金晶子・浜崎健児，2018. 矢作川中流における淡水産エビ・カニ類の生息状況．矢作川研究，22: 45-50.

豊田幸詞・関慎太郎・駒井智幸，2019．日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑．339 pp．緑書房，東京．

Yatsuya, M., Ueno, M., & Yamashita, Y., 2013. Life history of the amphidromous shrimp *Caridina leucosticta* (Decapoda: Caridea: Atyidae) in the Isazu River, Japan. Journal of Crustacean Biology, 33(4): 488-502.

（中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　ヘイケガニ科＞

サメハダヘイケガニ　*Paradorippe granulata* (De Haan, 1841)

評価理由

伊勢湾の知多半島沿岸に多く生息しているカニで、水質汚染や埋め立てなどの影響を受けやすい沿岸の砂泥底に生息している。しかし、近年は減少傾向にある。市内では、名古屋港南部の潮見ふ頭や金城ふ頭南海岸の海底に生息しているが、年々個体数が減少している。ふ頭海岸では、埋め立てや浚渫による生息域の縮小、海底の貧酸素化、および水質汚染が減少の原因ではないかと考えられる。

評価区分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	調査対象外
全国 2020	－

形態

雄の甲長 24mm 位、甲幅 25mm 位、人の顔に似た甲面は、小さな顆粒に覆われ、さめ肌になっている。四対の歩脚のうち、前方の 2 対は長く、歩いたり泳いだりするが、後方の 2 対は縮小して、その先端の爪で二枚貝の殻などを背中にのせて歩く、変わった形態・習性をもつ。



港区、2001 年 9 月 5 日、天野　勲

分布の概要

市内：伊勢湾北部エリア内の埋め立て地である名古屋港の潮見・金城ふ頭南海岸の海底に生息。

県内：伊勢湾の知多半島側に特に多く分布。三河湾・遠州灘にも生息しているが、減少傾向にある。

国内：北海道南部から九州までの太平洋および日本海の両沿岸に生息。

世界：韓国、中国、台湾。



生息地の環境／生態的特性

伊勢湾には、古くから見られるカニ。水深 10～150m の砂泥底で貝殻の多い場所に生息する。抱卵盛期は 7 月から 9 月で、繁殖時期になると砂底の場所を求めて、活発に移動する。冬になると深い場所に戻る。

現在の生息状況／減少の原因

水質や海底の汚れの影響を受けやすい沿岸の砂泥底に生息しているため、減少傾向にあると思われる。大型船舶の出入りが多い名古屋港のふ頭付近では、水質や海底環境の悪化が進んでいると考えられる。

保全上の留意点

清掃活動などにより、ゴミ、油を回収し、海・港の水質浄化をしていくことが必要である。

特記事項

相模湾では、サメハダヘイケガニが激減している（池田ほか，2006）。

名古屋港一帯の埋立地（ふ頭）でサメハダヘイケガニの化石が採集された。

関連文献

天野　勲，2008．甲殻類．新修名古屋市史資料編　自然，pp.337-342．名古屋市．
池田　等ほか，2006．相模湾葉山沖の短尾類相．国立科学博物館専報，(41):173-182．
三輪龍之，1977．郷土の化石と貝　－名古屋港及びその周辺を中心としてー，pp.24-25．
中島徳男，1992．愛知県三谷港に水揚げされたカニ類の目録とその分布，pp.35-45．三河生物同好会．
水産庁（編），1998．日本の希少な野生水生生物に関するデータブック，（社）日本水産資源保護協会，東京．
富山　実，1993．小型底びき網漁から見た伊勢湾内底生生物相．愛知水試研報，(1):41-47．

（天野　勲、中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　コブシガニ科＞

マメコブシガニ　*Pyrhila pisum* (De Haan, 1841)

評価理由

干潟に普通の種ではあるが、市内に残された干潟では近年個体数が減少している。生息可能な環境は限られているため、生息域の拡大も望めない。

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	調査対象外
全国 2020	－

形態

甲長 2cm 程度。甲は半球状で胃域・鰓域を中心に顆粒が散在する。甲の周縁は小さい顆粒で縁どられる。額は突出せずに中央が僅かにくぼむ。はさみ脚は顆粒で覆われ、各節の縁では列に並ぶ。体色や模様の個体差が大きい（酒井, 1976；武田，1982）。



港区、2024 年 6 月 11 日、中嶋清徳

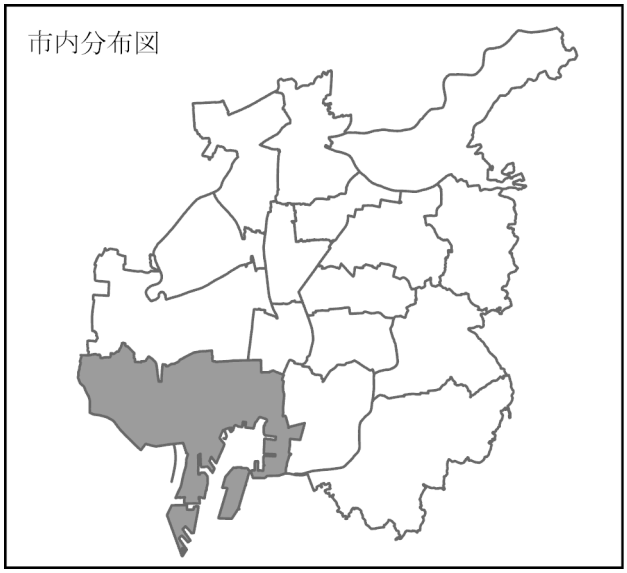
分布の概要

市内：藤前干潟

県内：矢作川河口域（川瀬, 2002）汐川干潟（藤岡・木村，2000）

国内：岩手県から九州、奄美諸島の内湾沿岸（酒井，1976）

世界：韓国、中国、台湾の沿岸（酒井，1976）



生息地の環境／生態的特性

内湾の砂泥潮間帯に生息する。縦方向にも歩行が可能。初夏の頃に雄が雌を抱えて移動する様子が見られる（酒井，1976）。

現在の生息状況／減少の原因

本種が生息可能な干潟は名古屋港内では限られ、生息数が減少している。生息地消滅以外の具体的な減少理由は不明だが、生息可能な範囲が狭まり個体数を安定させることが難しい状態と推測される。

保全上の留意点

生息地の砂泥域を減少させない。水質維持、生体の保護が必要である。朝倉（2011）は河口域においては河岸がコンクリートなどで護岸されず，干潟の面積がある程度の広さをもつことを本種の保護対策として挙げている。

特記事項

日本ベントス学会（2012）の「干潟の絶滅危惧動物図鑑―海岸ベントスのレッドデータブック」では準絶滅危惧に評価されている.

引用文献

朝倉　彰, 2011. 十脚甲殻類. 千葉県の保護上重要な野生生物―千葉県レッドデータブック―動物編, 2011 年改訂版 : 381-396, 千葉県環境生活部自然保護課.

藤岡エリ子・木村妙子，2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告，No. 10 : 31-39.

川瀬基弘，2002. 矢作川河口域における干潟の底生生物相. 矢作川研究，6: 81-98.

日本ベントス学会（編）, 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑―海岸ベントスのレッドデータブック. 東海大学出版会, 秦野. 285pp.

武田正倫，1982. 原色甲殻類検索図鑑. pp 284. 北隆館，東京.

酒井　恒，1976. 日本産蟹類（Crabs of Japan and the Adjacent Seas）. 773pp.（英語版），251pp.（図版），461pp.（日本語版）. 講談社，東京.

（中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　ケブカガニ科＞

マキトラノオガニ　*Pilumnopeus makianus* (Rathbun, 1931)

評価理由

本種は河口域や干潟のマガキ群落の隙間や転石下などに生息するが、このような環境の多くは埋め立てられ生息域が縮小すると共に個体数が減少している。同所に外来種のカニ類が多くみられ、本種への影響が懸念される。

評 価 区 分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛 知 県 2025	調査対象外
全　　国 2020	－

形態

甲幅 2cm 前後。甲面や歩脚に軟毛が粗生。前側縁は顆粒で縁どられ 4 葉に分かれる。はさみ脚の腕節と掌節の外面は顆粒で覆われる（和田, 1995）。



港区、2023 年 4 月 22 日、中嶋清徳

分布の概要

市内：名古屋港（伊勢田ほか，2007）
県内：不明
国内：和歌山県、瀬戸内海、九州沿岸（和田, 1995）、島根県（大澤, 2022）
世界：中国北部・台湾（酒井，1976）



生息地の環境／生態的特性

内湾潮間帯の転石の下、岩の割れ目、カキ殻などの間に生息。

現在の生息状況／減少の原因

名古屋港ガーデンふ頭では 2007 年以降確認されていない（伊勢田ほか，2007；中嶋・春日井 2022）。名古屋港内の潮間帯域で稀に確認される。個体数減少の原因として埋め立てなどによる生息地の減少や外来種ミナトオウギガニの生息環境への侵入が考えられる（伊勢田ほか, 2007）。さらに近年は外来種のハクライオウギガニも生息域に多く見られ、本種への影響が危惧される。

保全上の留意点

内湾潮間帯のマガキ群集や転石地を保全し、過度の富栄養化を防ぐことが必要である。

特記事項

本種ははさみ脚の先端が茶褐色または黒褐色だが、形態が似る外来種のミナトオウギガニやハクライオウギガニは白色のため見分けられる。

引用文献

伊勢田真嗣・大谷道夫・木村妙子，2007. 外来種 *Rhithropanopeus harrisii* ミナトオウギガニ（和名新称）（甲殻亜門: カニ下目: Panopeidae 科）の日本における初記録. 日本ベントス学会誌, 62: 39-44.
大澤正幸，2022. 島根県の汽水域の短尾甲殻類 日本海西部の汽水域のカニたち.エスチュアリー研究センター特別出版物第２号・Laguna (汽水域研究) 特別出版物第２号. 島根大学研究・学術情報本部 エスチュアリー研究センター, 85pp.
中嶋清徳・春日井隆, 2022. 伊勢湾最湾奥に位置する名古屋港ガーデンふ頭で採集された十脚目甲殻類. なごやの生物多様性, 9：49-59.
酒井　恒，1976. 日本産蟹類（Crabs of Japan and the Adjacent Seas）. 講談社，東京. 773pp.（英語版），251pp.（図版），461pp.（日本語版）.
和田恵次，1995. 短尾下目. 西村三郎（編著）. 原色検索日本海岸動物図鑑 2，pp.379-418. 保育社，大阪.

（中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　ベンケイガニ科＞

クシテガニ　*Parasesarma affine* (De Haan, 1837)

評価理由

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	調査対象外
全国 2020	－

かつて、市内で生息が確認された産地は、庄内川河口の両岸・背割堤のヨシ原と天白川の右岸のヨシ原である。その後、庄内川左岸は大規模護岸工事と埋め立て工事で干潟やヨシ原は減少したが、河口に残されたヨシ原の中で生息を確認している。右岸の背割堤は禁止されていた立ち入りが 2009 年 6 月に許可され、クシテガニの生息を確認したが、個体数が減少していた。天白川は上・中流域の丘陵が宅地となり、川によって運ばれる土砂量が減少し、水質も変化した。また河口近くにふ頭ができ干潟・ヨシ原が激減し本種の生息地は減少した。

形態

雄の甲長 21mm 位、甲幅 30mm 位で四角形のカニ。はさみ脚の可動指の上縁に米粒のような顆粒が 6～8 個並びクシのように見える。



港区、2009 年 6 月 10 日　天野　勲

分布の概要

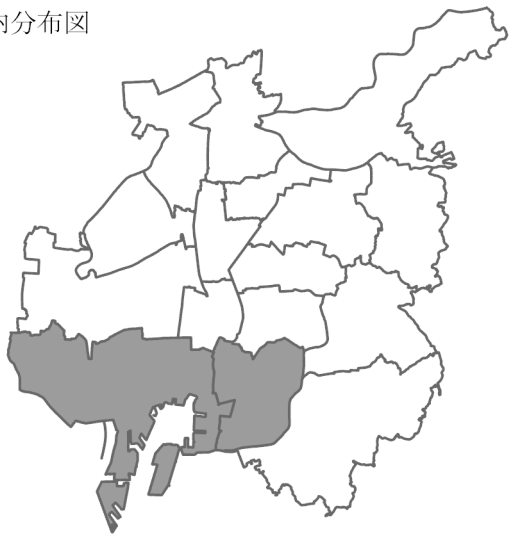
市内：庄内川河口左岸に残された干潟・ヨシ原と右岸の背割堤、天白川、山崎川河口域。

県内：伊勢湾では、知多市新舞子鍛冶屋川河口の干潟・ヨシ原などに生息していた。三河湾の田原氏汐川河口干潟・ヨシ原などにも生息していた。

国内：東京湾、相模湾、岡山、熊本、長崎方面。

世界：香港までの中国沿岸および台湾。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

汽水域上限まで見られ、ヨシ原の中で生息する。干潟の高い場所や川堤に穴居する。

現在の生息状況／減少の原因

護岸工事など開発が進み干潟・ヨシ原が減少したため、個体数が減少した。

保全上の留意点

河川全域と河口域の自然環境の維持・管理が必要。個体数が減少しているので現在の生息場所を保護する必要もある。

特記事項

学名は Rahayu & Ng（2010）により *P. plicatum*（Latreille, 1806）から *P. affine*（De Haan, 1837）に改められている．環境省海洋生物レッドリストでは準絶滅危惧に評価されている（環境省, 2017）。

引用文献

環境省．2017．環境省版海洋生物レッドリスト 2017（甲殻類）．https://www.env.go.jp/content/000037629.pdf．2025 年 1 月 15 日確認

Rahayu, Dwi Listyo & Ng, Peter K. L., 2010, Revision of the *Parasesarma plicatum* (Latreille, 1803) species-group (Crustacea: Decapoda: Brachyura: Sesarmidae), Zootaxa 2327, pp. 1-22

関連文献

中島徳男，1997．三河湾・遠州灘産海産蟹類目録，p.32．自費出版、愛知

大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター（編），2008．干潟を考える　干潟を遊ぶ，pp.33,45,105．東海大学出版会，秦野．

三宅貞祥，1998．日本産かに類の分類目録．原色日本大型甲殻類図鑑Ⅱ，p.181．保育社，大阪．

（天野　勲、中嶋清徳）

エビ・カニ類　＜エビ目（十脚目）　モクズガニ科＞

モクズガニ　*Eriocheir japonica* (De Haan, 1835)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛　知　県 2025	調査対象外
全　　国 2020	－

評価理由

生活史の大部分を淡水域で生息するが産卵のため海（河口）に降りる。幼生期は河口で生育し、稚ガニから、幼ガニ・親ガニになると川を遡上する回遊性のカニである。庄内川では、上流・支流に広く生息している。

天白川では、個体数が減少しているが、河口の干潟・ヨシ原の減少・水質の変化が原因と考えられる。市街地を流れる堀川・山崎川の上流域にモクズガニの生息が確認されているが、両川の水質がある程度改善されたことによるものと考えられる。全国的に食用に供されるカニであり、近年、生息環境悪化などにより、減少が指摘されている。

形態

雄の甲長 50mm 位、甲幅 80mm 位に達する淡水最大のカニ。はさみ脚掌部の外面は軟毛でおおわれ、雄は雌より著しい。チュウゴクモクズガニは日本のモクズガニに比べ、甲がやや凸凹で脚が細長い。脚の爪は細く尖っている。



中川区、1999 年 5 月 16 日、天野　勲

分布の概要

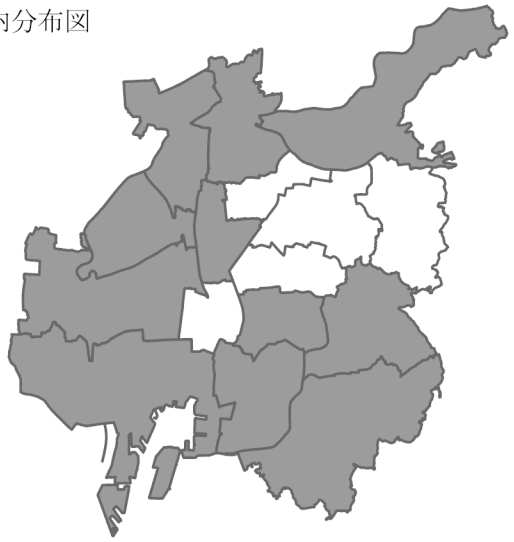
市内：庄内川の上流と矢田川など支流に多く生息。天白川では減少傾向にある。

県内：伊勢湾東側にある知多半島の各河川や三河湾に流れ込む矢作川・豊川などの上流にまで生息。

国内：北海道以南、本州、四国、九州、沖縄。小笠原のモクズガニは別種。

世界：サハリン、韓国、台湾。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

成体は各地の河川に生息する。年間通し放卵するが、抱卵盛期は 9 月から翌年 6 月、特に 9 月から 10 月は、海（河口）に下り放卵する数が多い。（12 月に放卵するカニは 5 月上旬に川を上る。淡水で越冬するカニは、5 月上旬に川を下る。）

現在の生息状況／減少の原因

水質汚濁に強いが、水質の富栄養化が進むと生息困難となる。河口の干潟・ヨシ原の環境が悪化すると個体数が減少する。

保全上の留意点

庄内川の途中に堰や横断構造物を建設しない。また、河川全域と河口の自然環境を維持・管理していくことが必要である。

特記事項

9 月に海に降りる親ガニをトラップを仕掛けて捕獲し食用にしている。肺吸虫の中間宿主として有名。2014 年 4 月に庄内川の最も下流にある堰堤に階段状の魚道ができ、モクズガニの通過が容易になった。

関連文献

天野　勲，2008．甲殻類（カニ類）．新修名古屋市史資料編　自然，pp.340-341．名古屋市．
岡本一利，2004．モクズガニの種苗生産の現状．日本甲殻類学会第 42 回大会報，p.14.
小林　哲，2014．モクズガニの形態の変異と奇形．CANCER，(23):36.
水産庁（編），1998．日本の希少な野生水生生物に関するデータブック．（社）日本水産資源保護協会．
渡辺精一ほか，2006．モクズガニの種内分化．CANCER，(15):9-12.
渡辺精一ほか，2007．モクズガニ異所的集団の遺伝的分化．日本甲殻類学会第 42 回大会報，p.13.
山崎いづみほか，2006．モクズガニ属カニ類の遺伝的類縁関係．日本甲殻類学会第 42 回大会報，p.59.

（天野　勲、中嶋清徳）

貝類

①　名古屋市における貝類の概況

名古屋市に生息している（していた）貝類は、レッドデータブックなごや 2004 の名古屋市産貝類目録に 73 種が掲載されている。同様にレッドデータブックなごや 2010 の名古屋市産貝類目録には、外来種、国内移入種を含め 92 種が掲載されている。レッドリストに掲載されており目録に掲載されていない種が 18 種存在するため、これをあわせるとレッドデータブックなごや 2010 では 110 種が掲載されたことになる。レッドデータブックなごや 2015 では、現地調査（文献調査を含む）により 40 種が目録に新たに追加された。この当時、ドブガイについてはヌマガイとタガイに分けられた（計算上はヌマガイとタガイが追加されドブガイが削除された）。これにより名古屋市産貝類目録は 149 種となった。さらに名古屋市版レッドリスト 2020 作成のための現地調査（文献調査と博物館収蔵標本調査を含む）により 12 種（絶滅種を含む）が目録に新たに追加され、名古屋市産貝類目録の更新されたリストは 161 種となった。このうち、レッドリスト 2020 掲載種は 94 種であり、その内訳は、海産（汽水性種を含む）57 種、淡水産 20 種、陸産 17 種であった。

今回のレッドデータブックなごや 2025 では、レッドリスト 2020 から、外来種と判断されたミジンマイマイと個体数および棲息地が多いと判断されたオキシジミを除外した。一方、「なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編」が実施されたことにより、イボイボナメクジ、ウラウズタカキビ、カタマメマイマイの合計 3 種が新たに追加された。これに汽水域のタケノコカワニナと淡水域のタブネドブガイ属の未定種を加えて、レッドデータブックなごや 2025 の掲載種数は 97 種となった。

海産（汽水性を含む）種については、河口域から潮間帯を中心とした現地調査に加えて、2023 年 6 月 9 日に名古屋港ポートアイランド周辺海域においてソリネット調査を実施した。これによりイソチドリやアズマニシキの生貝を得ることができた。

市内で部分的に自然海岸が残されているのは、庄内川河口・新川河口から藤前干潟のみであり、潮下帯に生息する種を除けば海産種のほとんどはこれらの地域に生息している。特に庄内川河口域には大規模なヨシ原湿地（塩性湿地）が残っており、このような特異な環境にのみ生息する稀少種が多く見られる。ヨシ原湿地周辺には砂泥干潟が広範囲に露出し、砂泥底に生息する種をあわせれば、庄内川河口域の貝類相は比較的豊かである。一方、藤前干潟では庄内川、新川や日光川から流入する淡水の影響を強く受け、低い塩分濃度でも棲息できる広塩性の種しか生息できないと考えられる。また、砂質部分は少なく強熱減量の値の高い泥質が優占することから、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難であり貝類相を貧弱にしている。

一方で、これまでほとんど調査がなされていなかった大江川河口、天白川河口、野跡町・潮凪町（鴨浦地区）が新たに調査されたことにより、タケノコカワニナやウミニナの生貝を確認するなどの新知見が得られた。

淡水産種については、ミトコンドリア COI 遺伝子分析の実施により、タブネドブガイ属の未定種が新たに発見された。同様の遺伝子分析により、タガイとされていた種については、ミナミタガイ

であることが判明した。

陸産種（陸産貝類）については、「なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編」が実施されたことにより、新たな稀少種や外来種が発見される一方で、10 年前の一斉調査の結果に比べて市内の陸産貝類の多様性が小さくなっていることも明らかになった。

②　名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回のレッドリスト掲載種は、絶滅 10 種、絶滅危惧 IA 類 24 種、絶滅危惧 IB 類 10 種、絶滅危惧Ⅱ類 26 種、準絶滅危惧 20 種、情報不足 7 種の全 97 種である。海産（汽水性を含む）種では、絶滅 3 種、絶滅危惧 IA 類 21 種、絶滅危惧 IB 類 5 種、絶滅危惧Ⅱ類 10 種、準絶滅危惧 16 種、情報不足 2 種、淡水産種では、絶滅 7 種、絶滅危惧 IA 類 3 種、絶滅危惧 IB 類 2 種、絶滅危惧Ⅱ類 4 種、準絶滅危惧 1 種、情報不足 5 種、陸産種（陸産貝類）では、絶滅危惧 IB 類 3 種、絶滅危惧Ⅱ類 12 種、準絶滅危惧 3 種である。

絶滅種は淡水産種、絶滅危惧Ⅰ類と準絶滅危惧は海産種、絶滅危惧Ⅱ類は陸産種の種数が多い。レッドリスト 2020 に比べて、マルタニシとウミニナは新たな棲息地が発見されたことにより、IA 類（CR）から IB 類（EN）にランクダウンした。マシジミは在来種か外来種かの判別ができないため IA 類（CR）から情報不足（DD）に変更された。ヌマガイは棲息地点数・棲息個体数ともに激減し、危機的な状況であるため IB 類（EN）から IA 類（CR）にランクアップした。ヤマタニシ、ミジンヤマタニシ、セキモリ、クレハガイ、カキウラクチキレモドキ、タワラガイ、ウメムラシタラ、ヒラベッコウ、コベソマイマイ、ニッポンマイマイは、棲息地や棲息個体数のデータ量が増加したことにより、カテゴリーの見直しがなされ、NT からⅡ類（VU）にランクアップした。

海産種、淡水産種、陸産種ともに環境の変化によりカテゴリーのランクアップが目立つ。海産種に対しては、河口域の護岸工事による棲息地そのものの減少やヨシ帯の破壊などが進行している。淡水産種に対しては、ため池でのヘドロの堆積、外来魚の捕食圧の増大、水路の暗渠化などが棲息地点数や個体数の減少に拍車をかけている。陸産種に対しては、リター層や腐葉土層の減少や極度の乾燥化、雑木林の伐採などが悪影響を及ぼしている。一部の種あるいは一部の環境を除いて、棲息状況や棲息環境は 5 年前、10 年前に比べて悪化していると考えられる。さらに、陸産貝類では、オキナワヤマタニシ、ソメワケダワラ、アジアベッコウなどの外来種が新たに発見されており、これらを含めた外来種の分布拡大にも注目する必要がある。

（川瀬基弘）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各貝類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（貝類）に関する凡例 】

分類群名等

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として「Biology and Evolution of the Mollusca, Volume 1,2」（Winston Frank Ponder, David R. Lindberg, Juliet Mary Ponder）を参考に、名称は WoRMS 等を参考に最新の知見を元に整理した。

和名・学名

対象種の和名および学名を各頁上の枠内に記述した。和名および学名は、原則として「日本産野生生物目録-本邦産野生動植物の種の現状-（無脊椎動物編Ⅲ）」（環境庁編、1998）に準拠した。

評価区分

対象種の名古屋市における評価区分を各頁右の上枠内に記述した。参考として「レッドリストあいち 2025」（愛知県、2025）の愛知県での評価区分、および「環境省レッドリスト 2020」（環境省、2020）の全国での評価区分も併記した。

評価理由

対象種が名古屋市版レッドリスト掲載種として評価された理由について記述した。

形態

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した。

分布の概要

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査および文献調査によって確認された地域について、区ごとに着色して市内分布図として掲載した。なお、絶滅と判断された区域は ⋯⋯ で示した。

生息地の環境／生態的特性

対象種の生息環境および生態的特性について記述した。

現在の生息状況／減少の要因

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

絶滅種については【過去の生息状況／絶滅の要因】として、対象種の名古屋市における過去の生息状況、絶滅の主な要因について文献、および標本調査結果に基づき記述した。

保全上の留意点

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

特記事項

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

引用文献

記述中に引用した文献を著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

関連文献

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

貝類　＜フネガイ目フネガイ科＞

ハイガイ　*Tegillarca granosa* (Linnaeus, 1758)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

本種は内湾奥部・河口域の干潟泥底に生息する種で、かつて東京湾以南の閉鎖性の内湾に広く分布していたが、現在では淡路島と有明海・八代海北部・伊万里湾でのみ生息が確認されている（和田ほか, 1996 : 山下, 2012）。また、本種は 1960 年代には衣浦湾（知多湾奥）、汐川干潟などの内湾奥で比較的普通に生息していた（愛知県科学教育センター, 1967）が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、近年では汐川干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される程度で、愛知県下では絶滅した。和田ほか（1996）では絶滅寸前にランクされている。

形態

殻長 5～6cm、殻高 4cm 程度で殻は厚く、よく膨らむ。殻表にはまばらに強い結節を備えた強い肋が 20 本ほどある。肋間は肋より幅広い。殻は白色であるが生時には灰褐色の殻皮で覆われる。



愛知県三河一色、市原 俊　撮影

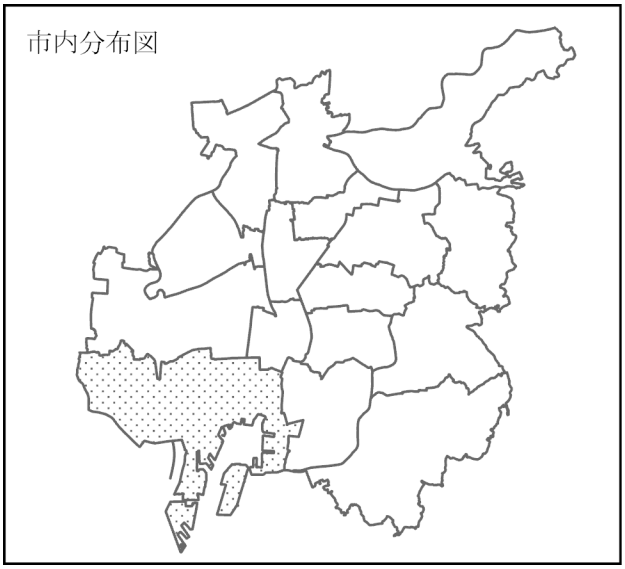
分布の概要

市内：港区藤前干潟や庄内川河口干潟で古い死殻が稀に確認される。

県内：汐川干潟や名古屋市港区で古い死殻が確認されたのみであり、県内からは絶滅した。

国内：国内では、現在上述の通りの限られた水域にのみ分布する。

世界：朝鮮半島以南、インド・太平洋。



生息地の環境／生態的特性

内湾奥部・河口域の干潟泥底に棲息する。潮間帯から水深 10m に浅く潜ってすむ。

過去の生息状況／絶滅の要因

上述したような棲息環境が激減し、絶滅に至ったと考えられる。

特記事項

日本本土には、9500～7500 年前の温暖期に分布を広げたが、関東以北では 1000 年前までに消滅した。伊勢湾・三河湾・高知県浦戸湾では 1930～60 年代に消滅した（山下, 2012）。名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中, 1998）、名古屋港浚渫地の半化石（河合・千葉, 1996）や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬, 2013）からは、本種の化石記録がある。

引用文献

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp, 愛知県科学教育センター, 名古屋.

蜂矢喜一郎・田中利雄, 1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45) : 20-25.

河合秀高・千葉正己, 1996. 名古屋港 13 号地浚渫地より産出した貝類化石(1)二枚貝・角貝. 化石の友, (43) : 21-25.

川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7) : 38-48.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会, 東京.

山下博由, 2012. ハイガイ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑. p. 110, 東海大学出版会, 神奈川.

関連文献

福田　宏, 2020. ハイガイ. 岡山県野生動植物調査検討会(編). 岡山県版レッドデータブック 2020 動物編. P. 547, 岡山県環境文化部自然環境課, 岡山.

（川瀬基弘）

貝類　＜イシガイ目イシガイ科＞

オバエボシガイ　*Inversidens brandtii* (Kobelt, 1879)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

愛知県では 1950 年代に、岩倉、大府、今村、桝塚の 4 か所から記録されており（田中，1959）、1970 年頃の豊川市の牟呂用水での生貝の確認記録を最後に、既に絶滅していているが（愛知県環境調査センター，2009）、1960 年代まで名古屋市（鳴海・天白）に棲息していたことを示す資料（田中，1964）が見つかった。鳳来寺山自然科学博物には庄内川で 1930～50 年代に採集されたと考えられる図示した標本が所蔵されている。

自然度が高く水質の良い小川や用水路に棲息するが、市内では本種の生息できる良好な環境は改修や汚染が進み壊滅的である。

2017 年に市内 61 地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査が実施されたが（川瀬，2018a）、本種は発見されていない。

形態

殻は前後に短い歪んだ台形で膨らむ。後端は斜めに裁断状。後背部はやや肩が張る。殻長 42mm。殻表は褐色～黒色で殻頂周辺で漣状の彫刻に覆われるが、図示した標本は殻頂付近が溶食される。内面は橙色を帯びた真珠光沢をもつ。左右両殻にヘラ状の擬主歯が 1 つある。後側歯は強く刻み目彫刻が顕著。



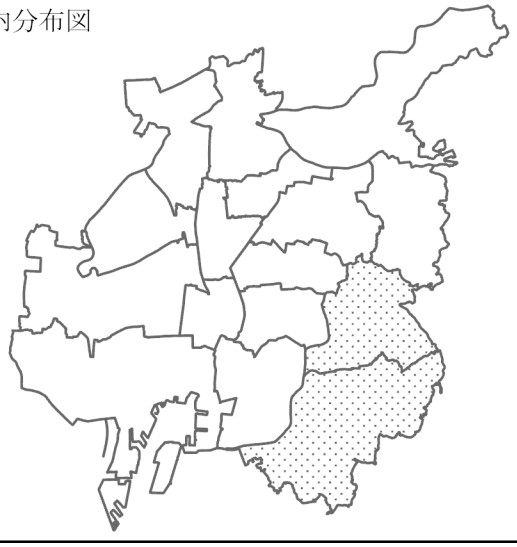
庄内川、採集日不明
鳳来寺山自然科学博物館所蔵（川瀬，2018b）

分布の概要

市内：鳴海・天白に棲息していた（田中, 1964）。

県内：1960 年代中頃までの木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系（愛知県教育センター, 1967）。

国内：伊勢湾流入河川以西の本州と九州（増田・内山，2004）。ただし愛知県では絶滅。



生息地の環境／生態的特性

上述したように、自然度が高く水質の良い小川や用水路の砂泥底に棲息する。グロキディウム幼生の寄主となるヨシノボリの仲間の棲息が必要である。

過去の生息状況／絶滅の要因

本種の生息できる小川や用水路は改修や汚染が進み壊滅的である。用水路の 3 面コンクリート張りや冬季の断水、さらにはブラックバスなどの外来魚によるヨシノボリ類の捕食による個体数減少が影響する。

引用文献

愛知県環境調査センター, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009―動物編―, 651 pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222 pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.

川瀬基弘, 2018a. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘, 2018b. 滅びゆく愛知県の淡水産貝類－鳳来寺山自然科学博物館所蔵の淡水貝標本－. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 47: 41-46.

増田　修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.

田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録, 14pp, (謄写).

田中守彦, 1964. 名古屋市産淡水貝類の研究, 20pp. (謄写).

関連文献

川瀬基弘・市原　俊・寺本匡寛・鵜飼　普, 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, 33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

近藤高貴, 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第 3 号, 69 pp, 日本貝類学会, 東京.

（川瀬基弘）

貝類　＜イシガイ目イシガイ科＞

ササノハイガイ（トンガリササノハガイ）　*Lanceolaria oxyrhyncha* (E. von Martens, 1861)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

愛知県内では 1950 年代に、犬山、岩倉、須ヶ口、神領、鳴海、豊明、大府、今村、桝塚、国府から記録されている（田中，1959）。愛知県では絶滅危惧 IA 類と評価されており（愛知県環境調査センター，2009）、市内では、尾張岩塚村［名古屋市中村区岩塚町］（岩川, 1919）、瑞穂区山崎川水系［昭和 30～40 年代］（川瀬ほか，2016）、1950～60 年代に鳴海・白山、鳴海・天白、味鋺市営住宅（田中，1964）に棲息していた記録がある。鳳来寺山自然科学博物には西春 師勝 五条川で昭和 12 年に採集された標本が所蔵されている。しかし、近年の調査により本種が市内に生き残っている可能性はないと考えられる。2017 年に市内 61 地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査が実施されたが（川瀬，2018）、本種は発見されていない。

形態

殻は笹の葉状に極端に細長く、前縁は丸く、後部は細まり後端は尖る。殻長 10～20 cm。殻表は褐色～黒色で、不明瞭な皺状彫刻がある。内面は真珠光沢をもつ。右殻の擬主歯は三角形状で強い。



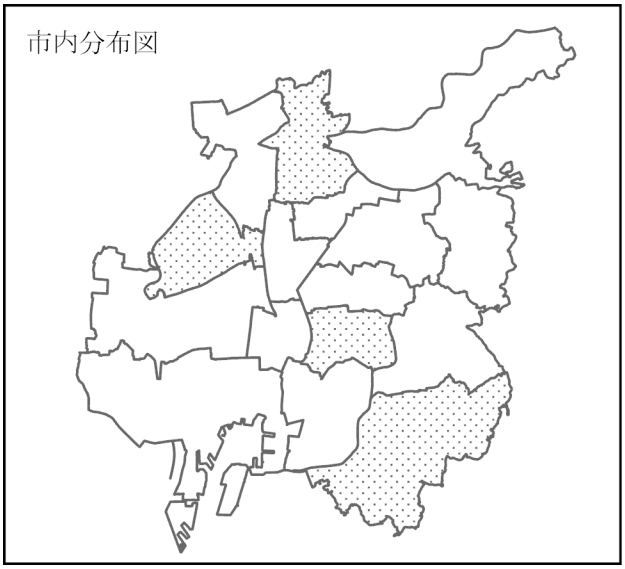
上：西春 野崎川、1936 年 8 月採集
下：師勝 五条川、1937 年 8 月採集
鳳来寺山自然科学博物館所蔵、川瀬基弘　撮影

分布の概要

市内：上述のとおり中村区、北区、瑞穂区、緑区に棲息していた。

県内：豊田市、西尾市、豊橋市などに棲息するが地点数は極めて少ない。

国内：三河湾流入河川以西の本州、四国、九州。



生息地の環境／生態的特性

自然度が高く水質の良い小川や用水路の砂礫～砂泥底に棲息する。グロキディウム幼生の寄主となるヨシノボリの仲間の棲息が必要である。

過去の生息状況／絶滅の要因

本種の生息できる小川や用水路は改修や汚染が進み壊滅的である。用水路の 3 面コンクリート張りや冬季の断水、さらにはブラックバスなどの外来魚によるヨシノボリ類の捕食による個体数減少が影響する。

特記事項

九州の個体群は本州の個体群とは遺伝的に異なるため、別種キュウシュウササノハガイとして記載された（Kondo and Hattori, 2019）。

引用文献

岩川友太郎, 1919. 日本産貝類標本目録. 東京帝室博物館, 東京. 318, 95, 39 pp.

川瀬基弘, 2018. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘・大矢美紀・松原美恵子・森山昭彦, 2016. 名古屋市瑞穂区に生息していたトンガリササノハガイ. なごやの生物多様性. 3: 55-60.

Kondo, T. and A. Hattori, 2019. A New Species of the Genus *Lanceolaria* (Bivalvia: Unionidae) from Japan. Venus, 78(1-2): 27-31.

田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録(謄写版). 14 pp.

田中守彦, 1964. 名古屋市産淡水貝類の研究(謄写版). 20 pp.

関連文献

川瀬基弘, 2018. 滅びゆく愛知県の淡水産貝類. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 47: 41-46.

川瀬基弘・市原　俊・寺本匡寛・鵜飼　普，2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性，5: 33-45.

川瀬基弘・柴田哲兵・浅香　智，2024. 新城市初記録のササノハガイ（速報）. 鳳来寺山自然科学博物館館報, (53): 135-136.

（川瀬基弘）

貝類　＜イシガイ目イシガイ科＞

マツカサガイ　*Pronodularia japanensis* (I. Lea, 1859)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

愛知県内では 1950 年代に、犬山、岩倉、須ヶ口、神領、鳴海、豊明、大府、今村、桝塚、国府から記録されている（田中，1959）。愛知県では絶滅危惧 IA 類と評価されており（愛知県環境調査センター，2009）、市内では、1950～60 年代に島田橋、中根、植田橋、鳴海・白山、鳴海・天白、汁谷・竹越、味鋺市営住宅に棲息していた記録がある（田中，1964）。鳳来寺山自然科学博物には名古屋で 1930～50 年代に採集されたと考えられる標本が所蔵されている。しかし、近年の調査により本種が市内に生き残っている可能性はないと考えられる。2017 年に市内 61 地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査が実施されたが（川瀬，2018a）、本種は発見されていない。

形態

殻は卵円形、膨らみは弱くて平たい。殻長 40～60mm で大型個体では 80mm を超える。図示した標本は殻長 35mm 程度の幼貝。殻表は褐色～黒色で V 字状の彫刻がある。老成すると殻頂付近が溶食されることがある。内面は真珠光沢をもつ。右殻の擬主歯は三角状で強く、後側歯も強く長い。



名古屋、採集日不明
鳳来寺山自然科学博物館所蔵（川瀬，2018b）

分布の概要

市内：島田橋、中根、植田橋、鳴海・白山、鳴海・天白、汁谷・竹越、味鋺市営住宅に棲息していた（田中，1964）。

県内：新城市、西尾市、岡崎市、豊川市などに分布するが地点数は減少している。

国内：本州、四国、九州（近藤，2008）。



生息地の環境／生態的特性

自然度が高く水質の良い小川や用水路の砂泥底に棲息する。グロキディウム幼生の寄主となるヨシノボリの仲間の棲息が必要である。

過去の生息状況／絶滅の要因

本種の生息できる小川や用水路は改修や汚染が進み壊滅的である。用水路の 3 面コンクリート張りや冬季の断水、さらにはブラックバスなどの外来魚によるヨシノボリ類の捕食による個体数減少が影響する。

引用文献

愛知県環境調査センター, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009―動物編―, 651 pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
川瀬基弘, 2018a. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
近藤高貴, 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第 3 号, 69 pp, 日本貝類学会, 東京.
田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録(謄写版). 14 pp.
田中守彦, 1964. 名古屋市産淡水貝類の研究(謄写版). 20 pp.

関連文献

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
川瀬基弘, 2018b. 滅びゆく愛知県の淡水産貝類. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 47: 41-46.
川瀬基弘, 2019. 愛知県に棲息していたニセマツカサガイ. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 48: 53-55.
川瀬基弘・市原　俊, 2018. 瑞浪市に棲息する陸産貝類と淡水産貝類. 瑞浪市化石博物館研究報告, 44: 69-81, 3 pls.
川瀬基弘・市原　俊・寺本匡寛・鵜飼　普, 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.
増田　修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, 33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

（川瀬基弘）

貝類　＜イシガイ目イシガイ科＞

カタハガイ　*Obovalis omiensis* (Heimburg, 1884)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

愛知県では 1950 年代に、犬山、岩倉、神領、東山、鳴海、豊明、今村、桝塚、国府から記録されているが（田中，1959）、1970 年頃を最後に、既に絶滅していている（愛知県環境調査センター，2009）。市内では 1960 年代まで、植田橋、鳴海・天白、汁谷・竹越、猪高弘山、味鋺市営住宅、鶴舞公園に棲息していたことを示す資料（田中，1964）が見つかった。鳳来寺山自然科学博物には五条川や新川で 1930～50 年代に採集されたと考えられる標本が所蔵されている。

自然度が高く水質の良い小川や用水路に棲息するが、市内では本種の生息できる良好な環境は改修や汚染が進み壊滅的である。2017 年に市内 61 地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査が実施されたが（川瀬，2018）、本種は発見されていない。

形態

殻は長卵形で膨らみは弱く平たい。後背部はやや肩が張る。殻長 44 mm。殻表は褐色～黒色で後側部に分岐した肋状の彫刻がある。殻頂付近が多少溶食される。内面は真珠光沢をもつ。擬主歯はヘラ状で、後側歯は弱く不明瞭である。



五条川、採集日不明、鳳来寺山自然科学博物館所蔵

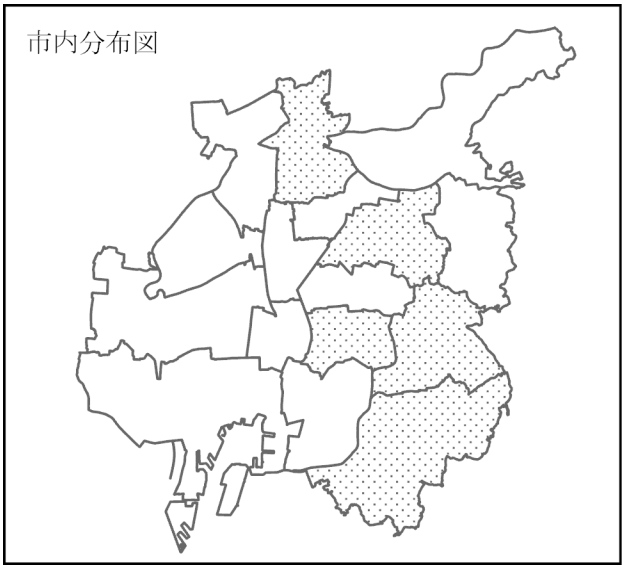
分布の概要

市内：植田橋、鳴海・天白、汁谷・竹越、猪高弘山、味鋺市営住宅、鶴舞公園に棲息していた（田中，1964）。

県内：1960 年代中頃までの木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系（愛知県教育センター, 1967）。

愛知県で絶滅したカタハガイが、2022 年 1 月 22 日に豊橋市東部山地を水源とする細流で発見された（木村・西村，2022）。

国内：愛知県以西の本州から九州北部（増田・内山，2004）。



生息地の環境／生態的特性

自然度が高く水質の良い小川や用水路の砂泥底に棲息する。グロキディウム幼生の寄主となるヨシノボリの仲間の棲息が必要である。

過去の生息状況／絶滅の要因

上述の棲息環境は改修や汚染が進み壊滅的である。用水路の 3 面コンクリート張りや冬季の断水、さらにはブラックバスなどの外来魚によるヨシノボリ類の捕食による個体数減少が影響する。

引用文献

愛知県環境調査センター, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009―動物編―, 651 pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.

川瀬基弘, 2018. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

木村昭一・西村俊明, 2022. 愛知県絶滅(EX)評価種，カタハガイの生息地確認. かきつばた，47: 23-27.

増田　修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ，東京.

田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録(謄写版). 14 pp.

田中守彦, 1964. 名古屋市産淡水貝類の研究(謄写版). 20 pp.

関連文献

川瀬基弘, 2018. 滅びゆく愛知県の淡水産貝類. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 47: 41-46.

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, 33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目ナタマメガイ科＞

アゲマキ　*Sinonovacula constricta* (Lamarck, 1818)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧Ⅰ類

評価理由

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、三河湾、瀬戸内海、有明海、八代海に分布していたが、三河湾・瀬戸内海では消滅し、有明海、八代海も危機的な状況である（山下，2012：和田ほか，1996）。近年では汐川干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される程度で、愛知県下では絶滅した。和田ほか（1996）では危険にランクされている。

形態

殻長 10cm、殻は前後に長い長方形で、殻はやや薄い。殻の前後端は丸みがあり両殻の間は開口している。生時の殻表は殻頂部を除いて灰褐色の殻皮で覆われる。



福岡県有明海、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：庄内川河口干潟で棲息姿勢を維持したまま死滅した個体群が、靱帯や殻皮が保存されたまま半化石としてシルト層から大量に見つかる（早瀬ほか，2014）。

県内：汐川干潟と名古屋市港区藤前干潟で死殻のみが確認された。愛知県内からは絶滅した。

国内：国内では三河湾，児島湾，有明海，八代海からのみ知られる（福田，2020）。

世界：朝鮮半島、中国、台湾、ベトナム。



生息地の環境／生態的特性

内湾の河口域や干潟の泥底に棲息し、大型個体は 1m もの棲息孔を掘る。

過去の生息状況／絶滅の要因

1960 年代には衣浦湾（知多湾奥）、汐川干潟などの内湾奥で生息が確認されていた（愛知県科学教育センター，1967）が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、汐川干潟では三河大橋の建設と前後して絶滅した。潮間帯の棲息環境は失われているので、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅したと考えられる。

特記事項

本種に使われてきた *Sinonovacula constrictus* Lamarck,1818 は、*Sinonovacula constrictus* Bruguière, 1792 の一次同名となるので、Huber（2010）によって新名が与えられた（山下, 2012）。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．

福田　宏，2020．アゲマキ．岡山県野生動植物調査検討会(編). 岡山県版レッドデータブック 2020 動物編. P. 583, 岡山県環境文化部自然環境課，岡山．

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一，2014．庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種．かきつばた，(39): 31-36.

Huber, M., 2010. Compendium of Bivalves, 901pp, Conch Books, Hackenheim.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

山下博由，2012．アゲマキ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 172，東海大学出版会，神奈川．

関連文献

佐藤正典（編著），2000．有明海の生きものたち．396pp，海游舎，東京．

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目ニッコウガイ科＞

イチョウシラトリ　*Serratina diaphana* (Deshayes, 1855)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧Ⅰ類

評価理由

日本では、北海道以南から記録があるが、過去 50 年ほどの確実な生息地の北限は相模湾である（山下・木村，2012）。相模湾では 1960～70 年代に消滅した（池田ほか，2001）。本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種である。近年の詳細な調査の結果、かつて日本の広い範囲に分布していたが、現在では三重県英虞湾、瀬戸内海、宮崎県、福岡県、熊本県などにある程度の個体群が生き残っている（山下・木村，2012：Yamashita et al, 1997）。本種は 1960 年代には衣浦湾や汐川干潟でも生息が確認されていたが（愛知県科学教育センター, 1967）、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、近年では汐川干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される程度で、愛知県下では絶滅した。和田ほか（1996）では絶滅寸前にランクされている。

形態

殻長 4cm、殻は丸みを帯びた三角形で膨らみが弱い。殻はやや厚く白色、規則的な板状の成長脈で覆われる。



熊本県松島町、2002 年 3 月 30 日、市原 俊　撮影

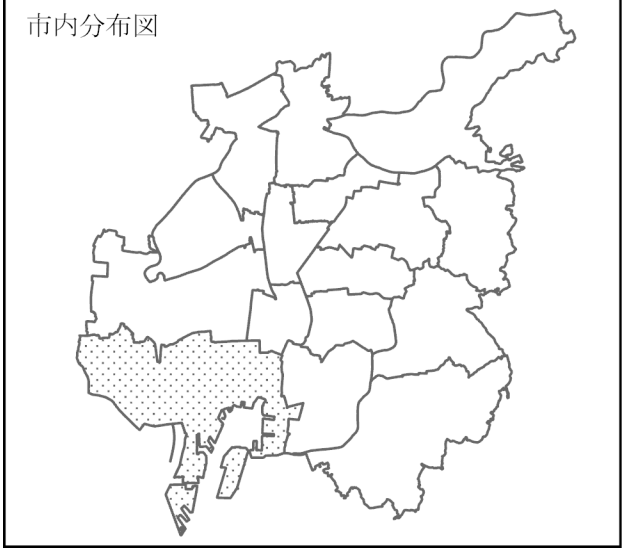
分布の概要

市内：港区藤前干潟で古い死殻がごく稀に確認されたに過ぎない。

県内：汐川干潟（愛知県からは絶滅した）。

国内：国内では、現在上述の通りの限られた水域にのみ分布する。

世界：朝鮮半島、中国南部（福田，2020）。



生息地の環境／生態的特性

評価理由を参照。

過去の生息状況／絶滅の要因

泥干潟の自然消滅や埋め立てにより潮間帯の棲息環境は失われており、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅したと考えられる。

特記事項

名古屋市南区鶴里周辺の完新統からは本種の化石記録があり、クイチガイサルボウ、ハイガイ、イセシラガイ、ウラカガミ、カニモリ、ヘナタリ、ウミニナ、イボウミニナなどと共産している（蜂矢・田中，1998）。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．

蜂矢喜一郎・田中利雄，1998．名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石．化石の友，(45): 20-25.

池田　等・倉持卓司・渡辺政美，2001．相模湾レッドデーター貝類－，104 pp. 葉山しおさい博物館.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

山下博由・木村昭一，2012．イチョウシラトリ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 129．東海大学出版会，神奈川.

Yamasita, H., Okamoto, M., Harato, M. and Fukuda, H., 1997. The present status and conservation values of endangered mollusks in tidal flats and estuaries of Japan -1. The Yuriyagai, 5(1/2): 101-116.

福田　宏，2020．イチョウシラトリ．岡山県野生動植物調査検討会(編)．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 597，岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

（川瀬基弘）

貝類　＜クビキレガイ目エゾマメタニシ科＞

マメタニシ　*Parafossarulus manchouricus japonicus* (Pilsbry, 1901)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 IA 類

評価理由

本種は、平野部の水田や用水路から丘陵地のため池などに広く分布しているが、生息場所は狭く限定されている。小型種のためか生息情報は少ない。木村（1994）では、愛知県下の 1 地点のみで生息が確認されたにすぎないが、元々生息地が少なかった可能性も否定できない。市内では中区名城濠、昭和区鶴舞公園、中川区松葉公園で多産したが（愛知県科学教育センター, 1967）、現在これらの地点では棲息を確認できず市内から絶滅した。鳳来寺山自然科学博物館に庄内川（西春日井郡）の標本が保管されている（川瀬，2018）。

形態

成貝は殻高 10mm に達する。殻は細長く、各螺層はやや膨れ、数条の強い螺肋がある。縫合はくびれる。殻質は薄く半透明な黄白色。蓋は石灰質で表面は白色。



西春日井郡 庄内川、採集年月日不明
鳳来寺山自然科学博物館所蔵（川瀬，2018）

分布の概要

市内：名城濠、鶴舞公園、松葉公園（愛知県科学教育センター，1967）での記録があるが、現在これらの 3 地点では棲息を確認できない。

県内：豊橋市牛川町の豊川水系用水路（木村, 1994）、須ヶ口、立田、弥富（田中，1959）。

国内：日本固有亜種で、北関東以西の本州、四国、九州。

世界：朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

本種は平野部の水田や用水路、小河川などに広く分布するが、生息場所は狭く限定的である。水の流れのほとんどない水草のよく茂った場所に生息する場合が多い。近年の水質汚濁、農薬散布、用水路の改修などのため、生息地、生息数とも著しく減少したと考えられるが、元々生息地が少なかった可能性も否定できない。

過去の生息状況／絶滅の要因

2012～2024 年の市内の水田やため池調査では本種を確認できなかった。

保全上の留意点

護岸工事、用水路の改修、農薬散布には注意が必要である。小河川、用水路とその水質の保全が必要である。

引用文献

愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222 pp，愛知県科学教育センター，名古屋.
川瀬基弘，2018. 滅びゆく愛知県の淡水産貝類－鳳来寺山自然科学博物館所蔵の淡水貝標本－. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 47: 41-46.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, 33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
田中守彦，1959. 愛知県産淡水産貝類目録，14 pp，（謄写）.

関連文献

福田　宏，2020. 軟体動物. 岡山県環境文化部自然環境課（編）. 岡山県レッドデータブック 2020 動物編，pp. 309-707. 岡山県環境文化部自然環境課，岡山.
紀平　肇，1990. 琵琶湖淀川淡水貝類，131pp. たたら書房，鳥取.
紀平　肇・松田征也・内山りゅう，2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類. 159 pp，ピーシーズ，東京.
増田　修，2005. マメタニシ. 環境省(編). 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－6 陸・淡水産貝類. p. 317. 自然環境研究センター，東京.
増田　修・内山りゅう，2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240 pp，ピーシーズ，東京.

（川瀬基弘）

貝類　＜モノアラガイ目モノアラガイ科＞

モノアラガイ　*Radix japonica* (Jay, 1857)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅
愛 知 県 2025	情報不足
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は平野部の池沼や水田、川の淀みなどの水草や礫に付着している（紀平，1990）。水質汚濁、農薬散布、用水路の改修のため生息地、生息数とも著しく減少した。木村（1994）では愛知県の 4 か所のみで生息が確認されたにすぎず、そのいずれでも生息数が少ない。

形態

殻高 20mm 程度で、殻口が著しく広がり殻口高は殻高の 7～8 割程度を占める。軸唇は多少ねじれる。殻は薄く、殻表面には細かい成長脈がみられる。蓋はない。



菅生川（岡崎市 乙川），川瀬（2018）より
採集日不明（昭和初期？）

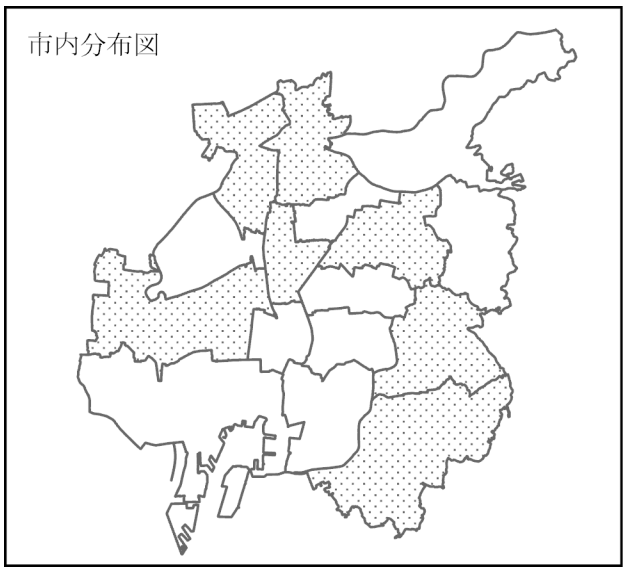
分布の概要

市内：鳴海・天白、覚王山・法生池、中小田井､名城濠など 1960 年代の記録があるが（田中，1964）いずれも絶滅した。

県内：県下での生息場所は著しく減少し、生息数も少ない（木村，1994）。

国内：北海道～九州（似て非なる種類の場合あり）。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

過去の生息状況／絶滅の要因

評価理由の項参照。

保全上の留意点

護岸工事、用水路の改修、農薬散布には注意が必要である。平野部の湖沼や河川下流域の水質の保全が必要である。

特記事項

今日見られる個体群は、最近分布を広げている外来種の可能性もある。似て非なる種類の場合、殻形態だけでの識別は困難である。増田（2005）は、近似した外来種との置換や交雑の危険性を指摘している。例えば大量に見つかる岐阜市では外来種の可能性がある（岐阜市役所自然共生部自然環境課，2014）。また、豊田市では 2008～2012 年に棲息していなかった水路で 2013 年に本種が突然大量発生した。岐阜市や豊田市のこれらの個体群は後にナデガタモノアラガイに同定された。

引用文献

岐阜市役所自然共生部自然環境課，2014．岐阜市の自然情報，238pp，岐阜市役所．
川瀬基弘，2018．滅びゆく愛知県の淡水産貝類－鳳来寺山自然科学博物館所蔵の淡水貝標本－．鳳来寺山自然科学博物館館報，47: 41-46.
紀平　肇，1990．琵琶湖淀川淡水貝類，131pp．たたら書房，鳥取．
木村昭一，1994．東海地方の淡水貝類相．研究彙報，(33) : 14-34．全国高等学校水産教育研究会．
増田　修，2005．モノアラガイ．環境省(編)．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－6 陸・淡水産貝類．p. 320．自然環境研究センター，東京．
田中守彦，1964．名古屋市産淡水貝類の研究，20pp.（謄写）．

関連文献

福田　宏，2020．軟体動物．岡山県環境文化部自然環境課（編）．岡山県レッドデータブック 2020 動物編，pp. 309-707．岡山県環境文化部自然環境課，岡山．
齊藤　匠・福田　宏，2020．モノアラガイ近似種．岡山県野生動植物調査検討会(編)．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．p. 470，岡山県環境文化部自然環境課，岡山．

（川瀬基弘）

貝類　＜モノアラガイ目ヒラマキガイ科＞

カワネジガイ　*Camptoceras hirasei* Walker, 1919

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅
愛知県 2025	絶滅
全国 2020	絶滅危惧 IA 類

評価理由

本種は、日本産淡水棲貝類の中で絶滅を最も危惧されている種の一つである。愛知県では河川下流域の環境がよく保全されていた 1960 年代にすでに本種は、生息地が少なく珍しい種と認識されていた（愛知県科学教育センター，1967）。1970 年後半より本種の記録された場所を再調査した例があるが（中山，1978：木村，1994）、再発見されていない。レッドデータブックなごや 2004 で絶滅と評価され、その後も発見されないことから絶滅と判断した。

形態

殻は著しく細長く、左巻きで螺管は外れて巻く。殻高 10mm、殻径 3mm 程度。殻は薄い。殻表は細かい成長脈を刻み、半透明な汚白色である。生時は付着物で薄く覆われる。



西区児玉町、1930 年 3 月（川瀬，2018）

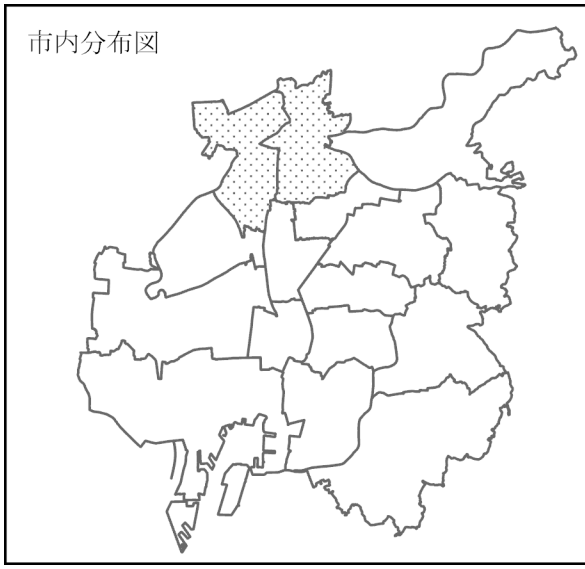
分布の概要

市内：1929 年に北区浄心での生息記録（原田一夫氏私信）がある。1930 年（昭和 5 年）に西区児玉町で採集された標本が鳳来寺山自然科学博物館に保管されている（川瀬，2018）。

県内：木曽川水系五条川の須ヶ口付近（絶滅）、豊川水系豊橋市蒲池（絶滅）。

国内：本州、四国。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

河川の下流域や平野部など低地の池沼や潟湖など止水環境の水面から水深 1m 程度まで棲息し、沈水植物の茎や落葉などに付着する（紀平ほか，2003：増田・内山，2004）。

過去の生息状況／絶滅の要因

現生市内の棲息地はない。全国的な減少要因として、池沼や河川・用水路・湿地等の開発、水質汚濁、標本業者・収集家による乱獲等があげられる（阿部・福田，2010）。

保全上の留意点

池沼や河川・用水路・湿地等の原形をとどめない改修や水の汚濁をなくし、県外の数少ない生息地においては、現状を維持することが望ましい。

特記事項

インドには形態が著しく類似した *C. terebra* が分布する（増田，2005）。

引用文献

阿部　司・福田　宏，2010．絶滅危惧種カワネジガイの岡山県における新産地．Molluscan Diversity，2(2)：37-41.
愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋.
川瀬基弘，2018．滅びゆく愛知県の淡水産貝類－鳳来寺山自然科学博物館所蔵の淡水貝標本－．鳳来寺山自然科学博物館館報，47: 41-46.
紀平　肇・松田征也・内山りゅう，2003．日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類．159 pp，ピーシーズ，東京.
木村昭一，1994．東海地方の淡水貝類相．研究彙報，(33)：14-34．全国高等学校水産教育研究会.
増田　修，2005．カワネジガイ．環境省(編)．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－6 陸・淡水産貝類．p. 79．自然環境研究センター，東京.
増田　修・内山りゅう，2004．日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類．240 pp，ピーシーズ，東京.
中山修一，1978．名古屋貝類談話会第 7 回淡水貝観察調査会の記．かきつばた，(4)：4-5.

関連文献

福田　宏，2020．軟体動物．岡山県環境文化部自然環境課（編）．岡山県レッドデータブック 2020 動物編，pp. 309-707．岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

（川瀬基弘）

貝類　＜イシガイ目イシガイ科＞

ヌマガイ　*Sinanodonta lauta* (Martens, 1877)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

本種を含むイシガイ科二枚貝は、河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で、比較的水質の良い場所を生息場所としている。市内ではこのような環境の改修や汚染が進み、グロキジウムの寄主となるヨシノボリなどが外来魚に捕食されるなど、本種は激減した。遺伝子分析および殻形態の情報からヌマガイと判断できる個体群は、Lopes-Lima et al.（2020）の結果も考慮すると、千種区平和公園のため池のみに生き残っている（川瀬ほか，2023）.

形態

殻は卵形で膨らみ、大型個体の殻長は 20cm を超える。殻表は緑褐色で、殻頂付近には同心円状の皺がある。



千種区平和公園、2021 年 11 月 28 日、川瀬基弘　撮影

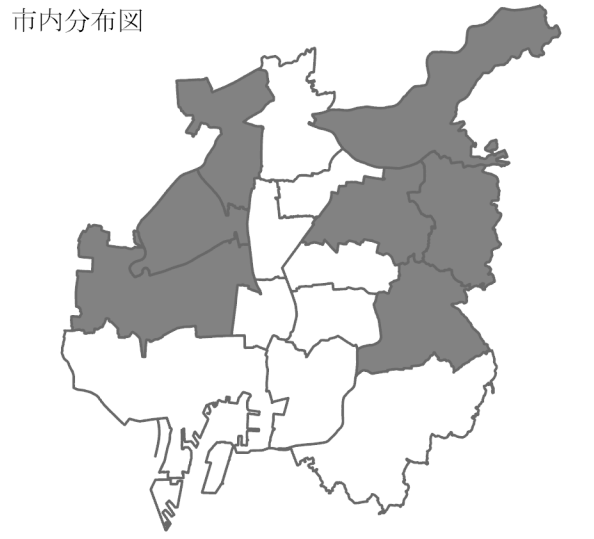
分布の概要

市内：遺伝子分析および殻形態の情報からヌマガイと判断できる個体群は、千種区平和公園のため池のみに生き残っている。

県内：豊田市（川瀬ほか，2011）や新城市。

国内：北海道から九州の河川下流域や湖沼。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

河川下流域や平野部の用水路など、流れが緩やかな水質の良い砂泥底や平野部のため池。

現在の生息状況／減少の要因

評価理由および分布の概要の項参照。

保全上の留意点

外来魚の侵入防止、水質の保全、農薬使用の制限に加え、水路においては堆積した底質の確保と一年を通しての一定水位の確保が不可欠である。

特記事項

Sano et al.（2022）では、*Sinanodonta* 属におけるミトコンドリア DNA と核 DNA における種境界認識や系統関係の不一致が指摘され、ミトコンドリア DNA による系統解析が遺伝子浸透などの現象により誤った結論を導く危険性が指摘されている。

引用文献

川瀬基弘・早瀬善正・市原　俊，2011．豊田市に生息する淡水産貝類．陸の水，48: 9-16.

川瀬基弘・横山悠理・横井敦史・熊澤慶伯，2023．名古屋市に棲息する Cristariini カラスガイ族（ドブガイ類）の種多様性．なごやの生物多様性，10: 125-133.

Lopes-Lima, M., A. Hattori, T. Kondo, J. H. Lee, S. K. Kim, A. Shirai, H. Hayashi, T. Usui, K. Sakuma, T. Toriya, Y. Sunamura, H. Ishikawa, N. Hoshino, Y. Kusano, H. Kumaki, Y. Utsugi, S. Yabe, Y. Yoshinari, H. Hiruma, A. Tanaka, K. Sao, T. Ueda, I. Sano, J. Miyazaki, D. V. Gonçalves, O. K. Klishko, E. S. Konopleva, I. V. Vikhrev, A. V. Kondakov, M. Y. Gofarov, I. N. Bolotov, E. M. Sayenko, M. Soroka, A. Zieritz, A. E. Bogan and E. Froufe（2020）Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): Phylogenery, systematics, and distribution. Molecular Phylogenetics and Evolution, 146, 106755. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755

Sano, I., T. Saito, S. Ito, B. Ye, T. Uechi, T. Seo, V. T. Do, K. Kimura, T. Hirano, D. Yamazaki, A. Shirai, T. Kondo, O. Miura, J. Miyazaki, and S. Chiba. 2022. Resolving species-level diversity of Beringiana and Sinanodonta mussels（Bivalvia: Unionidae）in the Japanese archipelago using genome-wide data. Molecular Phylogenetics and Evolution, 175: 107563.

関連文献

近藤高貴，2008．日本産イシガイ目貝類図譜．日本貝類学会特別出版物第 3 号．69 pp，日本貝類学会，東京.

田中守彦，1959．愛知県産淡水産貝類目録，14pp，（謄写）.

田中守彦，1964．名古屋市産淡水貝類の研究，20pp.（謄写）.

（川瀬基弘）

貝類　＜イシガイ目イシガイ科＞

ミナミタガイ　*Beringiana fukuharai* Sano, Hattori and T. Kondo, 2020

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

従来の“タガイ”*Sinanodonta japonica* (Clessin, 1874)は、Lopes-Lima et al.（2020）によって、遺伝子情報および形態的特徴から *Beringiana* Starobogatov, 1983 チシマドブガイ属に変更され、*B. beringiana* (Middendorff, 1851) チシマドブガイ、*B. japonica* (Clessin, 1847) タガイ、*B. gosannensis* Sano, Hattori & Kondo, 2020 キタノタガイ、*B. fukuharai* Sano, Hattori & Kondo, 2020 ミナミタガイの 4 種に細分された。名古屋市にわずかに生き残るタガイ類の遺伝子分析を実施したところ、守山区小幡緑地公園のため池に棲息する個体群がミナミタガイであることが判った（川瀬ほか, 2023）。

なお、殻形態のみの同定による古い情報として、天白区野並橋、緑区鳴子池、千種区東山新池、千種区法生池、西区中小田井、中区名城濠、昭和区鶴舞公園、中川区富田町伏屋などに記録があった（愛知県教育センター，1967）。

形態

殻が長卵形で膨らみが弱く、中型で通常の殻長は 10 cm を超えない。殻表は黒褐色で、殻頂付近には同心円状の皺がある。



守山区小幡緑地公園、2012 年 9 月 3 日、川瀬基弘　撮影

分布の概要

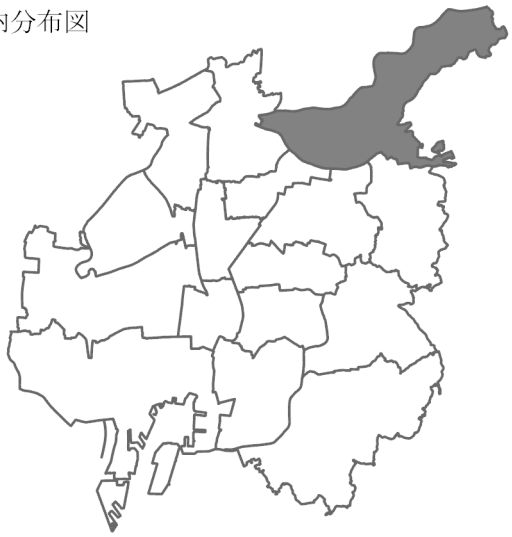
市内：守山区小幡緑地公園

県内：豊田市（川瀬ほか，2023）や新城市のため池や水路。

国内：北海道、本州、四国、九州に分布し、ため池や用水路の砂泥～泥底に生息する。

世界：日本固有種

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

ため池や用水路の砂泥～泥底に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

現在の棲息状況は危機的であり、棲息環境の破壊や消滅、水質汚濁、外来魚による宿主魚類の捕食などにより激減した。

保全上の留意点

本種が生き残っている可能性のあるため池や水路を保全することが不可欠。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋.

川瀬基弘・横山悠理・山本大輔・熊澤慶伯，2023．矢作第二ダム湛水池のミナミタガイ．矢作川研究，27：43-48.

川瀬基弘・横山悠理・横井敦史・熊澤慶伯，2023．名古屋市に棲息する Cristariini カラスガイ族（ドブガイ類）の種多様性．なごやの生物多様性，10：125-133.

Lopes-Lima, M., A. Hattori, T. Kondo, J. H. Lee, S. K. Kim, A. Shirai, H. Hayashi, T. Usui, K. Sakuma, T. Toriya, Y. Sunamura, H. Ishikawa, N. Hoshino, Y. Kusano, H. Kumaki, Y. Utsugi, S. Yabe, Y. Yoshinari, H. Hiruma, A. Tanaka, K. Sao, T. Ueda, I. Sano, J. Miyazaki, D. V. Gonçalves, O. K. Klishko, E. S. Konopleva, I. V. Vikhrev, A. V. Kondakov, M. Y. Gofarov, I. N. Bolotov, E. M. Sayenko, M. Soroka, A. Zieritz, A. E. Bogan and E. Froufe, 2020. Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): Phylogenery, systematics, and distribution. Molecular Phylogenetics and Evolution, 146, 106755. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755

関連文献

田中守彦，1959．愛知県産淡水産貝類目録，14pp，（謄写）.

田中守彦，1964．名古屋市産淡水貝類の研究，20pp.（謄写）.

（川瀬基弘）

貝類　＜イシガイ目イシガイ科＞

イシガイ　*Nodularia douglasiae* (J. E. Gray, 1833)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	－

評価理由

本種を含むイシガイ科二枚貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで、底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。名古屋市ではこのような場所はほとんど失われてしまったため、1960 年代には広い分布をもち多産したイシガイ科二枚貝類の多くは絶滅または危機的状況にある。

形態

中型で通常、殻長 6cm 程度であるが、湖沼産の個体は大型になる傾向がある。殻長に比べて殻高が小さく輪郭は細長い方形。殻長部分には弱いさざ波状の彫刻がある。



港区日光川，2024 年 7 月 21 日
採集：川瀬竣大、撮影：川瀬基弘

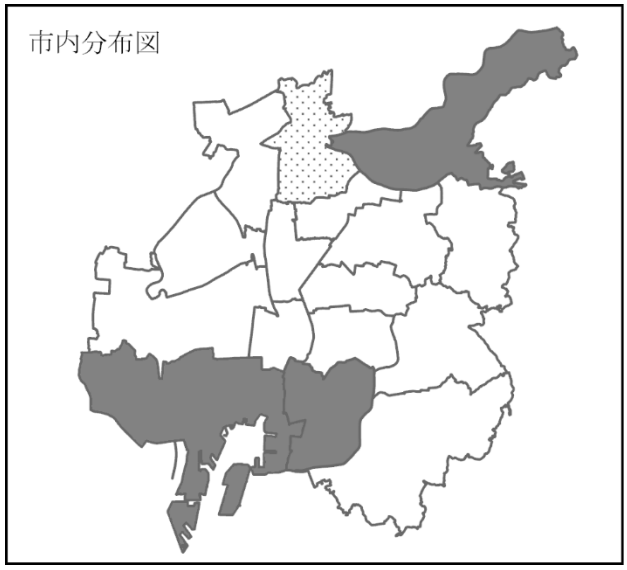
分布の概要

市内：守山区の滝ノ水池[海老蔓池]（川瀬ほか，2020）および港区の日光川に生息する。

県内：1960 年代中頃までは日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで広く生息が確認されている（愛知県科学教育センター，1967）。木村（1994）や川瀬ほか（2011）には矢作川水系や豊田市内のため池での確認記録がある。

国内：北海道、本州、九州の河川下流域、湖沼に分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで、底質が砂泥底で水質の良い環境を生息場所としている。

現在の生息状況／減少の要因

県内の河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は失われており絶滅が危惧される。

保全上の留意点

水質を保全し、護岸工事には注意が必要である。イシガイ科貝類は、グロキディウム幼生の時期にヨシノボリなどの底生魚類に寄生しなければ成長できないため、他の淡水生物を含む生息環境全体の保全が必要である。

特記事項

上地ほか（2024）は、日本産のイシガイ属 *Nodularia* はミトコンドリア遺伝子分析により *N. douglasiae* と *N. nipponensis* が有効名であるものの、両種間の形態的特徴が検討されていないことから *N.* sp.としている。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．
川瀬基弘・早瀬善正・市原　俊，2011．豊田市に生息する淡水産貝類．陸の水，48: 9-16.
川瀬基弘・村松正雄・横井敦史・市原　俊，2020．名古屋市守山区～尾張旭市北部に分布する溜池群の淡水産貝類．なごやの生物多様性，7: 39-44.
木村昭一，1994．東海地方の淡水貝類相．研究彙報，33: 14-34．全国高等学校水産教育研究会．
上地健琉・児嶋　格・馬場雄司・山田浩二・柏尾　翔，2024．大阪府泉州地域産陸・淡水棲軟体動物チェックリスト．きしわだ自然資料館研究報告，9: 31-57.

関連文献

酒井　類，2002．名古屋市守山区の淡水産貝類．かきつばた，28: 15-17.
田中守彦，1959．愛知県産淡水産貝類目録，14pp，（謄写）．
田中守彦，1964．名古屋市産淡水貝類の研究，20pp.（謄写）．

（川瀬基弘）

貝類　＜ツキガイ目ツキガイ科＞

イセシラガイ　*Pegophysema bialata* (Pilsbry, 1895)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 I 類

評価理由

本種は内湾の潮下帯の泥底に深く潜って生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では死殻が少数採集されるものの、近年生貝の採集記録がなかったが（中山，1980：木村，1996：木村，2000）、2008 年に名古屋港沖で行ったドレッジ調査で生貝 2 個体が採集された。和田ほか（1996）では絶滅寸前にランクされている。

形態

殻長約 5cm で球形に両殻共によく膨れる。殻は薄く脆い。殻は黄白色であるが、生きている時や新鮮な死殻には茶褐色の薄い殻皮がある。



熊本県天草市、2009 年 4 月、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約 6ｍの泥底より幼貝ではあるが生きた個体が 2 個体採集された。

県内：上述したように、名古屋港以外では現在生息が確認できない。

国内：北海道南部～沖縄。

世界：朝鮮半島、中国、アンダマン海、インド。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中，1998）、愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

引用文献

蜂矢喜一郎・田中利雄，1998．名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石．化石の友，(45): 20-25.

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7): 38-48.

木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会．

木村昭一，2000．伊勢湾･三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26): 18-20.

中山　清，1980．知多湾南部海域の貝類相．かきつばた，(6): 10-12.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

福田　宏，2020．イセシラガイ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 576，岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

奥谷喬司 編著，2000．日本近海産貝類図鑑．東海大学出版会，東京．1173pp.

山下博由，2012．イセシラガイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 116．東海大学出版会，神奈川.

（川瀬基弘）

貝類　＜ウロコガイ目チリハギ科＞

マゴコロガイ　*Peregrinamor ohshimai* Shôji, 1938

評 価 区 分

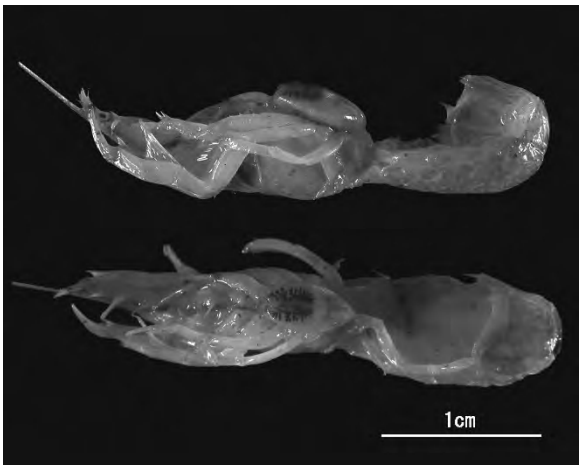
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は河口域の干潟から潮下帯の砂泥底に生息するアナジャコ類の頭胸部腹面に足糸で付着する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。このような状況から本種も明らかに生息場所、生息数とも激減していると考えられる。本種はすでに三重県側の伊勢湾からは生息記録があるが（木村・山本, 1990）、愛知県ではレッドデータブックなごや 2010 が初記録である。和田ほか（1996）では、絶滅寸前とランクされている。

形態

貝殻は両殻を合わせて背面から見るとハート型で、和名はその外形および付着部位にちなむ（庄司，1938）



名古屋港沖水深６ｍ、2008 年 10 月 9 日、木村昭一　撮影

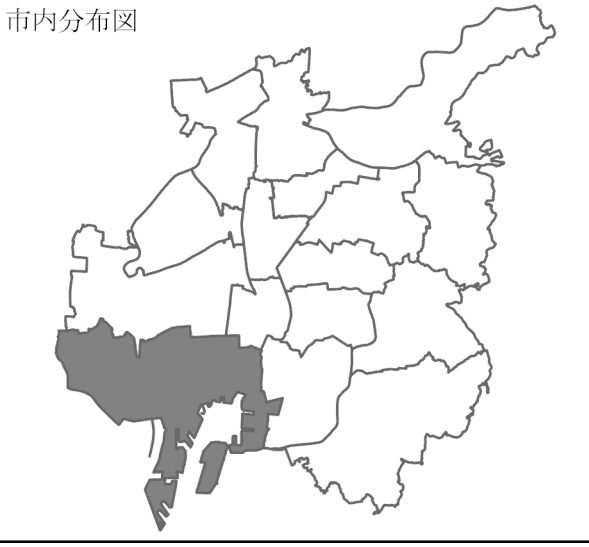
分布の概要

市内：2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約 6ｍの泥底に生息していたアナジャコ類の頭胸部腹面に付着した 1 個体のみが採集された。藤前干潟にもアナジャコ類は多産するが、今まで本種が採集された記録はない。

県内：上述の市内の記録のみである。

国内：模式産地は東京湾で（庄司，1938）、伊勢湾、瀬戸内海、九州の内湾域に分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

評価理由の項参照。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

東京湾からは原記載（庄司，1938）以来採集記録はなく、名古屋市が現在知られている分布の東限である。

引用文献

木村昭一・山本妙子, 1990. マゴコロガイを伊勢湾で採集. ちりぼたん，21(1-2): 12-13.

庄司幸八，1938．珍しい共棲二枚貝マゴコロ貝．Venus, 8(3-4): 119-127.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

木村昭一・山下博由，2012．マゴコロガイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 162, 東海大学出版会，神奈川.

奥谷喬司（編著），2000．日本近海産貝類図鑑，1173pp，東海大学出版会，東京.

佐藤正典（編著），2000．有明海の生きものたち．396pp，海游舎，東京.

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森　敬介・多留聖典，2013．干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～．269pp，日本国際湿地保全連合，東京.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目ニッコウガイ科＞

アオサギガイ　*Psammacoma gubernaculum* (Hanley, 1844)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	－

評価理由

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も明らかに生息場所、生息数とも激減している。本種は知多湾南部で底引き網によりわずかな死殻が採集されて以来（中山，1980）、採集記録がない。近年、三河湾湾口部、知多半島伊勢湾側をドレッジにより調査したが、死殻も採集できなかった（木村，1996：木村，2000）。名古屋港沖から 2008、2009 年に殻皮の残った合弁の新鮮な死殻が少数ではあるが採集された。和田ら（1996）では危険とランクされている。

形態

殻長約 4cm、殻は長い卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、白色で殻頂部はわずかに青みを帯びる。後背縁は短く直線的。



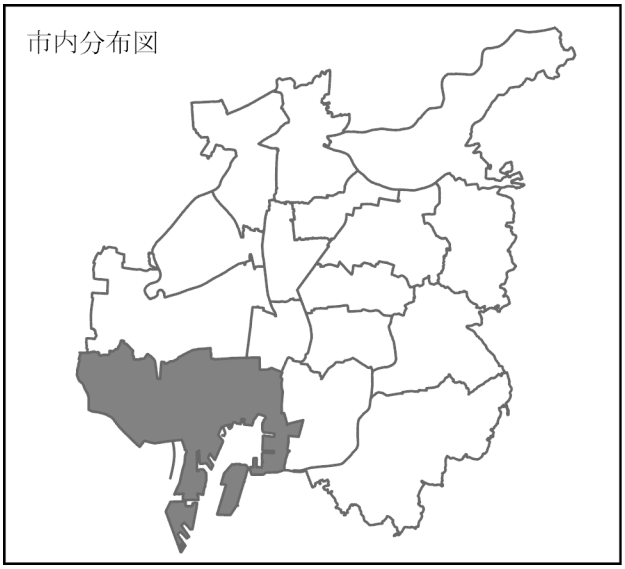
産地不詳、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合から新鮮な死殻がわずかに採集された。

県内：上述したように、生息場所、生息数が減少し、近年では名古屋港沖以外では死殻すら採集されていない。

世界および国内：日本、東南アジア。国内では房総半島から九州まで分布する。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。近年名古屋港沖以外では死殻さえ採集されず、危機的生息状況である。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

引用文献

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7): 38-48.

木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一，2000．伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26): 18-20.

中山　清，1980．知多湾南部海域の貝類相．かきつばた，(6)：10-12.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

奥谷喬司 編著，2000．日本近海産貝類図鑑．東海大学出版会，東京．1173pp.

佐藤正典（編著），2000．有明海の生きものたち．396pp，海游舎，東京.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目バカガイ科＞

ヤチヨノハナガイ　*Raeta pellicula* (Reeve, 1854)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 I 類

評価理由

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖で死殻が採集されたが、生貝は採集されない（中山，1980：木村，1996：木村，2000）。和田ほか（1996）では絶滅寸前にランクされている。

形態

殻長約 4cm で殻は白色で薄くやや膨らみ、殻皮は光沢が強い。前縁は丸く、後縁は狭く裁断状。内湾の貧酸素層の発達する海底に多産するチヨノハナガイと近似するが、本種は殻が大型で、輪肋が多く密で、光沢が強いので、区別は明確である。



愛知県三河一色、市原 俊　撮影

分布の概要

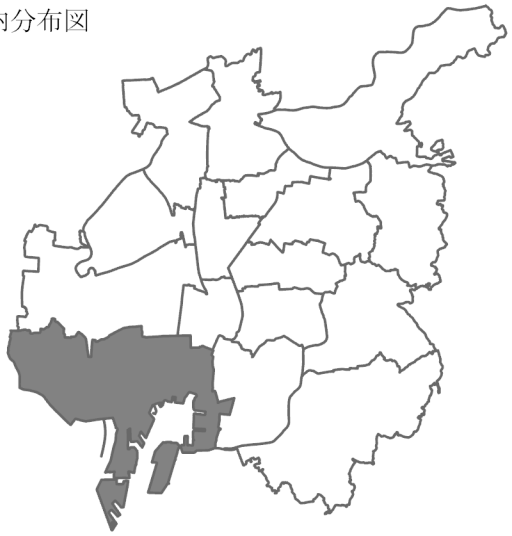
市内：2008、2009 年のドレッジと潜水調査で名古屋港沖合からも死殻がわずかに採集された。

県内：2010 年に南知多町千鳥ヶ浜で離弁状態の複数の死殻を確認している。

国内：兵庫県～九州。

世界：中国、フィリピン、東南アジア、紅海など。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。生貝が採集されないので、危機的な生息状況である。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

前述のとおり、2010 年前後に南知多町千鳥ヶ浜において離弁状態ではあるが比較的状態の良い死殻が複数打ち上がったことから、この周辺海域に少なからず本種が棲息している可能性がある。

引用文献

木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会．

木村昭一，2000．伊勢湾･三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26): 18-20.

中山　清，1980．知多湾南部海域の貝類相．かきつばた，(6): 10-12.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

福田　宏，2012．ヤチヨノハナガイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 143，東海大学出版会，神奈川.

福田　宏，2020．ヤチヨノハナガイ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 323，岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

奥谷喬司 編著，2000．日本近海産貝類図鑑，1173pp，東海大学出版会，東京.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目マルスダレガイ科＞

ウラカガミ　*Dosinia corrugata* (Reeve, 1850)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 I 類

評価理由

本種は内湾の潮下帯の泥底に深く潜って生息する。愛知県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化しており、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では死殻が少数採集されるが、近年生貝の採集記録がなかった（中山, 1980 : 木村, 1996 : 木村, 2000）。2008 年の名古屋港沖のドレッジ調査で生貝 2 個体が採集されたが，2018 年のドレッジ調査と 2023 年にソリネット調査では死殻のみが発見された。和田ほか（1996）では絶滅寸前にランクされている。

形態

殻長 6cm、殻はやや角張った円形で殻質は厚いが、膨らみは弱い。殻は白色から淡褐色で殻表には、密な輪肋がある。



名古屋港ポートアイランド周辺（ソリネット採集）
死殻標本、2023 年 6 月 9 日採集、川瀬基弘　撮影

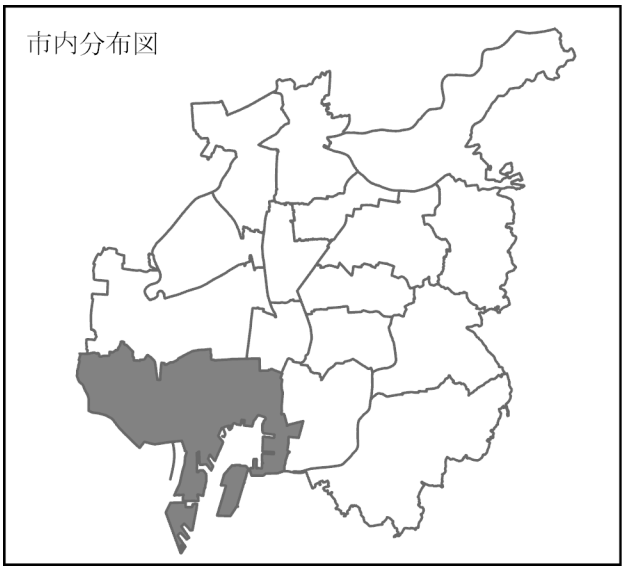
分布の概要

市内：2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約 6m の泥底より生貝（幼貝）2 個体が採集された。2009 年の潜水調査では新鮮な合弁の死殻が多数採集された(生貝の記録無し)。

県内：上述のとおり名古屋港のみ。

国内：陸奥湾以南～九州。

世界：朝鮮半島、中国大陸。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような潮下帯の環境は破壊されており、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。現在名古屋港以外では古い死殻が少数得られるのみで、危機的生息状況である。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境や干潟の保全、内湾域の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中, 1998）、名古屋港浚渫地（河合・千葉, 1996）や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬, 2013）からは、本種の化石記録がある。

引用文献

蜂矢喜一郎・田中利雄，1998．名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石．化石の友，(45): 20-25.

河合秀高・千葉正己，1996．名古屋港 13 号地浚渫地より産出した貝類化石(1)二枚貝・角貝．化石の友, (43) : 21-25.

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要, (7) : 38-48.

木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一，2000．伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26): 18-20.

中山　清，1980．知多湾南部海域の貝類相．かきつばた，(6): 10-12.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋港ポートアイランド周辺海域においてソリネット調査で得られた貝類．なごやの生物多様性，11: 85-91.

瀬尾友樹・福田　宏，2020．ウラカガミ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 632, 岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目ハナグモリガイ科＞

ハナグモリ　*Glauconome angulata* Reeve, 1844

評 価 区 分

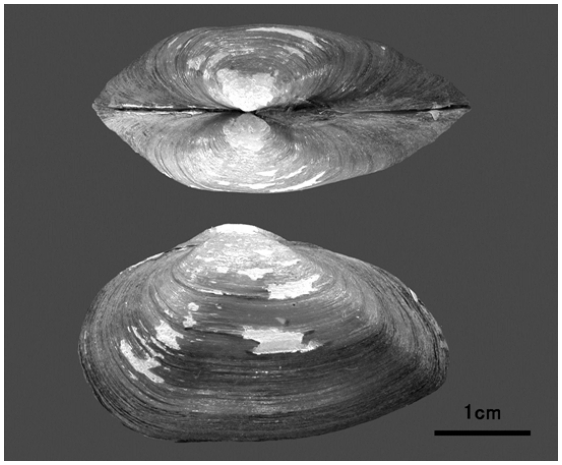
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、近年東京湾や瀬戸内海沿岸の都市近郊では激減している（和田ほか，1996）。本種は県内内湾域に広く分布していたと思われるが、地味で小型種のためか、生息状況に関する記録はない（愛知科学教育センター，1967）。伊勢湾奥の金城埠頭（現在）が埋め立て地であった頃、殻皮の残った死殻が採集されたが（河合，2009）、現在県内では死殻が採集される場所も確認されていない。和田ほか（1996）では危険にランクされている。

形態

殻長 2cm、殻は前後に長い楕円形で、膨らみはやや強い。殻はやや薄く、黄褐色の厚い殻皮を被る。



名古屋港全域埠頭、1970 年代、木村 昭一　撮影

分布の概要

市内：金城埠頭造成時（1970 年代）にサンドポンプによって新鮮な死殻が 1 個体のみ採集されたが（河合，2009）、その後死殻すら採集されていない。

県内：上述したように、現在生息が確認できない。

国内：房総半島～瀬戸内海～有明海・八代海、沖縄島、西表島に分布するが生貝が確認できない地域も多い。

世界：朝鮮半島、中国大陸、フィリピン。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような内湾奥部の干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。現在死殻さえ採集できないので、危機的生息状況といえる。

保全上の留意点

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

山下（2012）によれば、銚子、相模湾、三河湾、伊勢湾、浦戸湾では、消滅または現状不明となっている。東京湾には 2 か所の生息地がある。瀬戸内海東部では現存生息地は少なく、西部の周防灘に生息地が多い。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．

河合秀高，2009．名古屋港のサンドポンプで得られた貝．かきつばた，(34): 20.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

山下博由，2012．ハナグモリ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 139，東海大学出版会，神奈川．

関連文献

福田　宏，2020．ハナグモリ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 649，岡山県環境文化部自然環境課，岡山．

奥谷喬司（編），2017．日本近海産貝類図鑑［第二版］．1375 pp. 東海大学出版会，平塚．

（川瀬基弘）

貝類　＜オオノガイ目ニオガイ科＞

ウミタケ　*Barnea dilatata* (Souleyet, 1843)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IA 類
全国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

本種は内湾の潮下帯の泥底に生息する。かつては房総半島以南の内湾から記録されていたが､有明海以外での最近の記録はきわめて少ない（和田ほか，1996)。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は伊勢湾では 1997 年 3 月に三重大学実習船勢水丸のベントス調査によって湾口部（水深 12m）で死殻の破片が 1 個体採集されたにすぎない。三河湾では近年、生貝が 2 個体採集された（西，2010)。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻長約 8cm、殻は極めて薄く膨らみは強い。殻は白色で生きている時はやや厚い殻皮を被る。殻の前端は丸みを帯び、後端は斜めに裁断状で両端とも大きく開く。後域にはやや長く強い棘が並ぶ。



中部更新統渥美層群産の化石、市原 俊　撮影

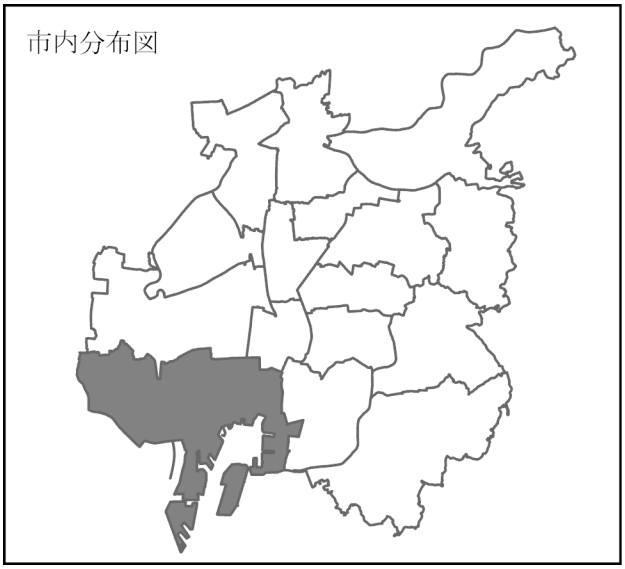
分布の概要

市内：2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合から殻皮の残った比較的新鮮な死殻片がわずかに採集された。

県内：上述したように、近年三河湾で 2 個体生貝が採集されたが、殻皮の残った死殻が採集される場所は名古屋港沖だけである。

国内：日本各地。

世界：ロシア、朝鮮半島、中国大陸。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような干潟から潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも著しく減少したと考えられる。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは本種の化石記録がある（川瀬，2013)。

引用文献

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7) 38-48.

西　浩孝，2010．三河湾で絶滅危惧種の二枚貝ウミタケの生息を確認．豊橋市自然史博物館研究報告，(20)：15-17.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

佐藤正典（編著)，2000．有明海の生きものたち．396pp，海游舎，東京.

山下博由・木村昭一，2012．ウミタケ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 166．東海大学出版会，神奈川.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜オオノガイ目オオノガイ科＞

ヒメマスオガイ　*Cryptomya busoensis* Yokoyama, 1922

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 II 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

本種は内湾から湾口部にかけての干潟から潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖（木村，1996：木村，2000）、蒲郡市三谷地先人工干潟（木村，2004）で死殻が少数採集されたが、生貝は確認されていない。2008 年に名古屋港沖で行ったドレッジ調査で生貝が少数採集された。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻長約 2cm で、殻は卵形で膨らみはやや強い。殻は白色で薄く脆い。殻の後端は裁断状で開く。殻頂下にさじ状の弾帯受けがある。外套線はほとんど湾入しない。



中部更新統渥美層群産の化石、市原 俊　撮影

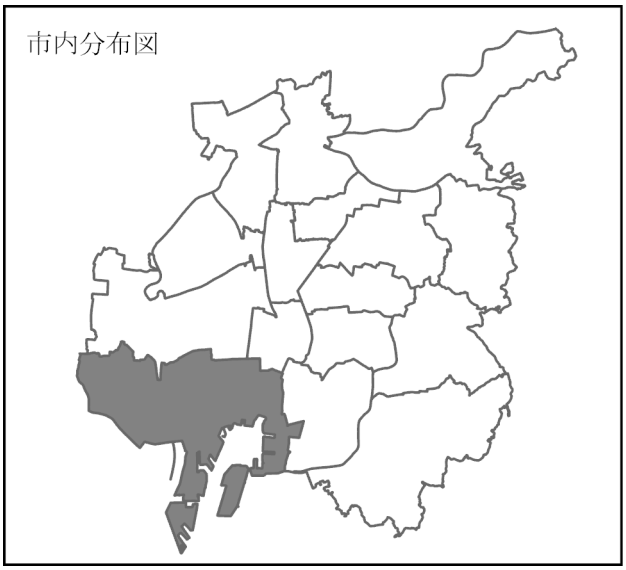
分布の概要

市内：2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約 2-6m の砂泥底より生きた個体が少数採集された。

県内：上述したように、名古屋港沖合以外では近年全く生貝が採集されていない。

国内：北海道～九州。

世界：朝鮮半島、中国大陸。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような干潟から潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。名古屋港沖以外では死殻も少ないので危機的生息状況である。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

引用文献

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要, (7) : 38-48.

木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会．

木村昭一，2000．伊勢湾･三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26): 18-20.

木村昭一，2004．蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相．かきつばた，(30): 14-20.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

木村昭一，2012．ヒメマスオガイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 166, 東海大学出版会，神奈川.

奥谷喬司（編），2017．日本近海産貝類図鑑［第二版］．1375 pp. 東海大学出版会，平塚.

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子，2009．干潟生物調査ガイドブック～東日本編～．120pp，日本国際湿地保全連合，東京.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜オオノガイ目オオノガイ科＞

クシケマスオガイ　*Cryptomya elliptica* (A. Adams, 1851)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 II 類
全　　国 2020	準絶滅危惧

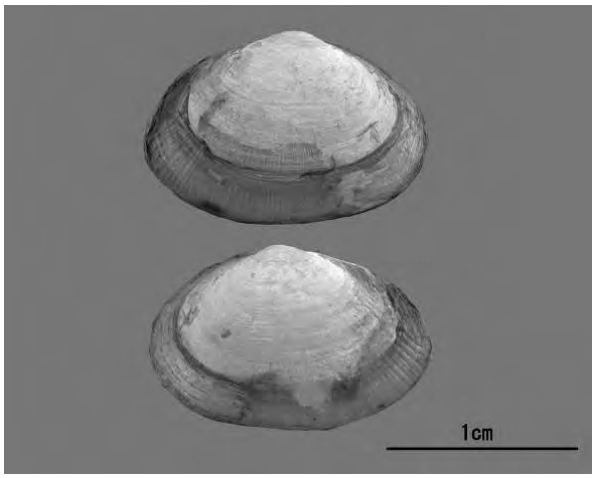
評価理由

本種は内湾の砂泥干潟に生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種はかつて伊勢湾周辺の海岸に死殻が多く打ち上げられ、生貝も普通に棲息していたが、近年 20 年間でその生息場所、生息数とも激減した。本県側の伊勢湾や三河湾では生貝はおろか、死殻すら採集できる場所もほとんどない。

2008 年 2 月知多半島内海海岸で軟体部の入った本種が寒波で打ち上げられた。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻長約 2cm で、殻は卵形で膨らみは弱い。殻は白色で薄く、殻表には細い放射肋が密に走る。弾帯受は小さく、外套線湾入はない。



名古屋港沖水深 6 m、2008 年 10 月 9 日、木村昭一　撮影

分布の概要

市内：2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約 2-6m の砂泥底より殻皮の保存された合弁の死殻が少数採集された。

県内：多半島南部の伊勢湾側では数か所で生貝が継続して確認されている（佐藤ほか, 2019）。

国内：伊勢湾～九州、南西諸島。

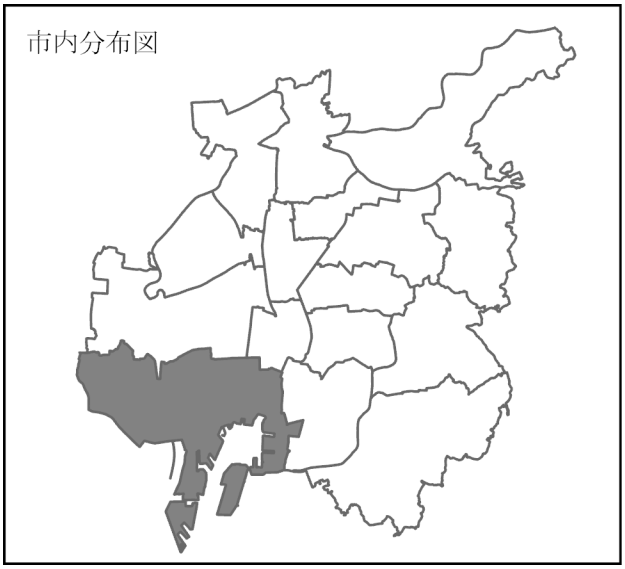
世界：インド・太平洋、紅海。

生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。現在ほとんど生息が確認されず、危機的な生息状況である。



保全上の留意点

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

引用文献

佐藤大義・浅田　要・永井 僚, 2019. 南知多町内海海岸（伊勢湾）の貝類相. かきつばた,(44): 20–30.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

愛知県環境調査センター，2020. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020―動物編―. 愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋. 768 pp.

愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋.

木村昭一，2012. クシケマスオガイ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑. p. 166, 東海大学出版会，神奈川.

奥谷喬司 編著，2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp，東海大学出版会，東京.

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子，2009. 干潟生物調査ガイドブック～東日本編～. 120pp，日本国際湿地保全連合，東京.

佐藤達也，2023. 鳥羽市 海のレッドデータブック 2023. 297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜ニシキウズ目ニシキウズ科＞

イボキサゴ　*Umbonium moniliferum* (Lamarck, 1822)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾奥の砂泥干潟にかつては多産した種で、伊勢・三河湾でも 1960 年代には広い範囲で多産した（愛知県科学教育センター，1967）。愛知県でも干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋立で著しく減少しており、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。また汐川干潟のように広大な干潟が残っている場所でも、生貝が見られなくなっている（藤岡・木村，2000）。三浦半島では絶滅し、三河湾・伊勢湾でもほぼ絶滅状態である（木村・山下，2012）。一方、2017 年以降、三河湾［佐久島（早瀬・木村，2020）、幡豆海岸］で多産している。

形態

殻径約 1.5cm の低いそろばん玉型で､殻は厚く周辺は丸い。外洋の砂浜に生息するキサゴと酷似するが殻は小さく、臍部の滑層が大きい点で区別できる。



愛知県西尾市佐久島（筒島）、2018 年 7 月 15 日
採集・撮影：川瀬基弘

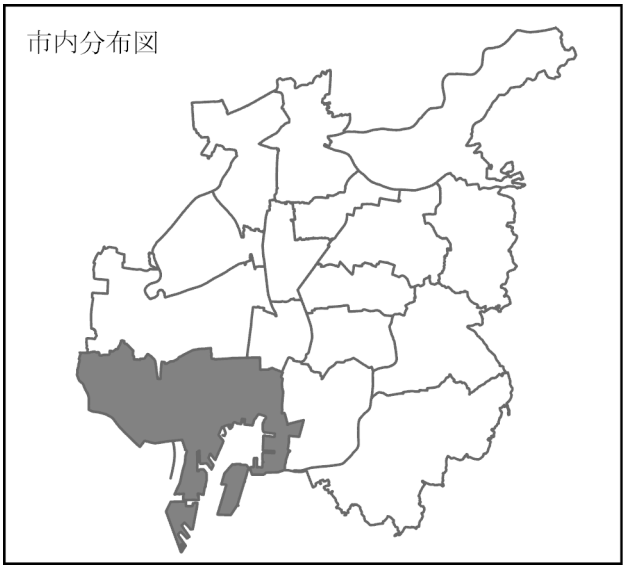
分布の概要

市内：庄内川河口干潟や藤前干潟（古い死殻のみ）。

県内：絶滅寸前であったが、2017 年以降、三河湾（佐久島、幡豆海岸）で多産している。

国内：東北地方から九州まで分布する。浜名湖や瀬戸内海には健全な個体群が残っている。

世界：朝鮮半島南部（福田，2020）



生息地の環境／生態的特性

藤前干潟では古い死殻が採集されたが、生きた個体はまったく採集されていない。市内では絶滅した可能性が高い。

現在の生息状況／減少の要因

上述したように県下では近年生貝を採集できない。死殻さえ多くないので、危機的な生息状況といえる。

保全上の留意点

上述したような干潟環境を破壊しないことはいうまでもなく、周辺水域の水質を保全する必要がある。

特記事項

東京湾の盤州、富津干潟では健全な個体群が維持されているが、元々の個体群であるか否かは検討を要する（木村・山下，2012）。

名古屋港浚渫地の半化石（河合・蜂矢，1999）や愛知県田原市高松の更新統（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．
藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(10) : 31-39.
福田　宏，2020．イボキサゴ．岡山県野生動植物調査検討会(編)．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 337，岡山県環境文化部自然環境課，岡山.
早瀬善正・木村昭一，2020．佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相．ちりぼたん, 50(1): 33-79.
河合秀高・蜂矢喜一郎，1999．名古屋港浚渫地(金城埠頭)産貝類化石(2)巻貝(その 1)．化石の友，(46): 20-25.
川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要, (7): 38-48.
木村昭一・山下博由，2012．イボキサゴ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 17，東海大学出版会，神奈川.

関連文献

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜オニノツノガイ目（タケノコカニモリ目）ウミニナ科＞

イボウミニナ　*Batillaria zonalis* (Bruguière, 1792)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IB 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

かつて日本各地の内湾域にごく普通に棲息していたが、浜名湖、伊勢湾では少数の死殻は見られるが現在棲息が確認できず、三河湾でも汐川干潟の狭い範囲に棲息が確認されていたに過ぎない（木村・福田，2012）。本種はウミニナと比べても著しく生息地が少なく、近年生息数が減少している。和田ほか（1996）では、絶滅寸前（日本本土）とランクされている。名古屋市では藤前干潟や庄内川河口で古い死殻が稀に採集されるに過ぎない。

形態

殻高約 4cm、殻径約 1cm の高い塔型で殻は厚く、螺層にやや強い肋を持つ。殻口外唇が湾入する。



三重県紀伊長島町、市原 俊　撮影

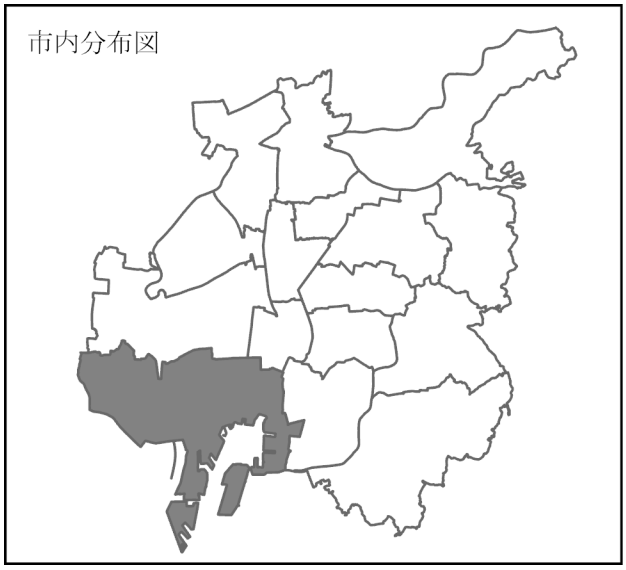
分布の概要

市内：藤前干潟で古い死殻が稀に採集されるに過ぎない。近年、市内では生貝が全く採集されず、絶滅した可能性が高い。

県内：愛知県での生息場所は激減し、2019 年には死殻を確認できる場所も少なくなった（愛知県環境調査センター，2020）。

国内：北海道南部～琉球列島

世界：朝鮮半島、中国大陸、インド・太平洋。



生息地の環境／生態的特性

上述したように泥干潟の表面に生息するが、ウミニナ科 3 種（ウミニナ、イボウミニナ、ホソウミニナ）の中では干潟の最も沖合の部分に分布し、ヨシ原湿地周辺の干潟の陸地に近い部分には生息しない（木村・木村，1999）。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような泥干潟が、護岸工事などで失われ生息地が減少している。また、生息場所が直接改変されない場合でも、生貝が見られなくなってしまった場所も多い。

保全上の留意点

泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

引用文献

愛知県環境調査センター，2020．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020―動物編―, 768 pp. 愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋.

木村昭一・福田　宏，2012．イボウミニナ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 31，東海大学出版会，神奈川.

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

藤岡えり子･木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10): 31-39.

福田　宏，2020．イボウミニナ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 360，岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

奥谷喬司 編著，2000．日本近海産貝類図鑑．東海大学出版会，東京．1173pp.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006．伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化．名古屋大学博物館報告，(22): 31-64.

（川瀬基弘）

貝類　＜オニノツノガイ目（タケノコカニモリ目）キバウミニナ科＞

ヘナタリ　*Pirenella nipponica* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。愛知県ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村, 1999）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。市内では、藤前干潟で打ち上げられた古い死殻が少数採集されるに過ぎない。

形態

殻高約 3cm の塔型で、体層は幅広く、強い縦張肋がある。よく成長した個体の殻口は肥厚し、外唇は下部が水管部へのびる。



産地不詳、市原 俊　撮影

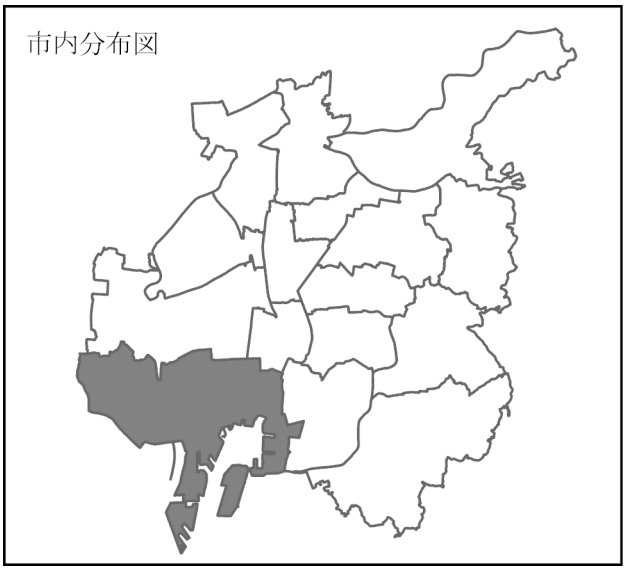
分布の概要

市内：藤前干潟で打ち上げられた古い死殻が少数採集されるに過ぎない。生息が確認できなく、絶滅した可能性も高い。

県内：汐川干潟では大きな個体群が残されている。県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村（1999）を含めて現在 7 か所である。生息場所では群生し、個体数は多い。

国内：房総半島・北長門海岸～南西諸島

世界：朝鮮半島、中国大陸、インド・西太平洋。



生息地の環境／生態的特性

内湾奥部の河口汽水域砂泥底の中・低潮帯表層を匍匐する（福田・木村，2012）。

現在の生息状況／減少の要因

内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地やそれより下部の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

保全上の留意点

ヨシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

特記事項

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中, 1998）、愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

引用文献

福田　宏・木村昭一，2012．ヘナタリ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 29，東海大学出版会，神奈川．

蜂矢喜一郎・田中利雄，1998．名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石．化石の友，(45): 20-25.

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7)：38-48.

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

関連文献

福田　宏，2020．ヘナタリ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 363，岡山県環境文化部自然環境課，岡山．

鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006．伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化．名古屋大学博物館報告，(22): 31-64.

鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘，2012．矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録．三河生物(西三河野生生物研究会)，3: 9-49.

（川瀬基弘）

貝類　＜オニノツノガイ目（タケノコカニモリ目）キバウミニナ科＞

カワアイ　*Pirenella pupiformis* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

かつて各地の内湾域にごく普通に棲息していたが、各地で激減し、三河湾では汐川干潟の狭い範囲で棲息が確認できるに過ぎない（木村・福田，2012）。愛知県下で最も干潟環境が保全されている汐川干潟でも個体数の著しい減少がみられる（藤岡・木村，2000）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。市内では藤前干潟で古い死殻が稀に見つかる。

形態

殻高約 3cm の塔型で、よく成長した個体の殻口は肥厚し、ヘナタリと近似しているが、外唇の下部は水管部へ延びることはない。



岡山県、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：藤前干潟で古い死殻が稀に採集されるに過ぎず、絶滅している可能性が高い。

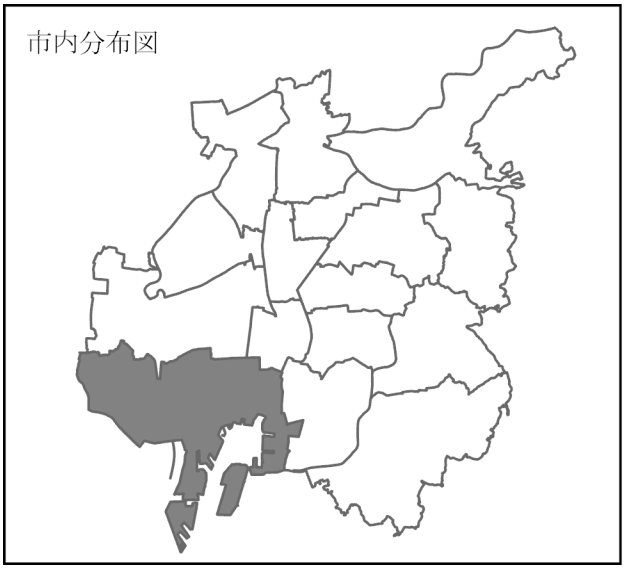
県内：木村・木村（1999）では 7 か所の生息地があったが、汐川干潟でも激減しており、近年は生貝の確認ができない（愛知県環境調査センター，2020）。愛知県でも絶滅している可能性がある。

国内：東京湾（絶滅）以南～琉球列島

世界：朝鮮半島、中国大陸、インド・太平洋

生息地の環境／生態的特性

県下では、ヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息していた。ヘナタリと同所的に分布していた。



現在の生息状況／減少の要因

ヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が、護岸工事などで失われ生息地が減少している。生息場所が新たに改変されていない場所でも個体数が著しく減少しているが、原因は不明である。

保全上の留意点

アシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、ホソウミニナ、イボウミニナ、ヘナタリなどとともに、本種の化石が発見されている（川瀬，2013）。

引用文献

愛知県環境調査センター，2020．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020―動物編―．愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋．768 pp.

藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10): 31-39.

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要, (7): 38-48.

木村昭一・福田　宏，2012．カワアイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 30，東海大学出版会，神奈川．

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

関連文献

福田　宏，2020．カワアイ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 364，岡山県環境文化部自然環境課，岡山．

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽．

鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006．伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化．名古屋大学博物館報告，(22): 31-64.

（川瀬基弘）

貝類　＜クビキレガイ目カワザンショウガイ科＞

ヨシダカワザンショウ　*Assiminea yoshidayukioi* Kuroda, 1959

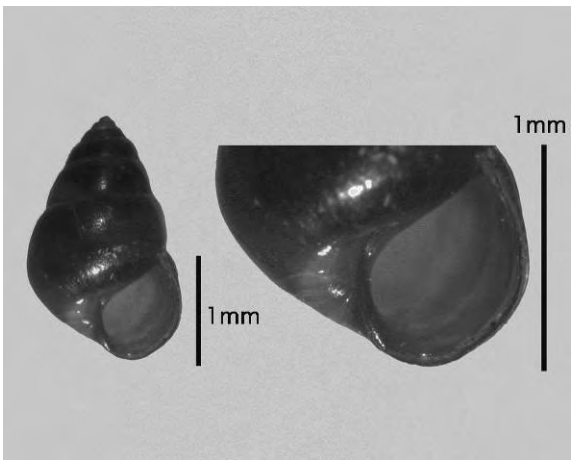
評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 II 類
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地とそれより上部の陸上植生にかけて分布する。ヨシ原湿地やその上部へ連続する陸上植生は護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村，1999）。市内でも特にヨシ原湿地の陸上に近い部分は堤防工事などによる生息地の破壊が進行しており、庄内川河口域の非常に狭い範囲でわずかに本種の生息が確認されたにすぎない。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻高約 3mm の微小種。カワザンショウガイ科は小型種が多く形態的にも近似していて同定は難しい。本種は貝殻の光沢が強いこと、肉眼ではわかりにくいが、臍孔が狭いが明らかに開いている点で、市内に生息するカワザンショウガイ科他種と区別できる。



庄内川河口域、2009 年 9 月 18 日、木村昭一　撮影

分布の概要

市内：庄内川河口域のヨシ原湿地に分布する。

県内：上述したように県内での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村･木村（1999）では 7 か所生息地があった。カワザンショウガイ科貝類は生息地には群生する場合が多いが、本種の個体数はどの生息地でも少ない。

世界および国内：日本固有種。東京湾から九州にかけて分布する。



生息地の環境／生態的特性

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生にかけての落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

保全上の留意点

もはや市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまった庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟（ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟（庄内川河口干潟の一部）の範囲より外れる上流部分）の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考える（早瀬ほか，2014）。

引用文献

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一，2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた，(39) : 31-36.

木村昭一・木村妙子，1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌，54: 44-56.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

福田　宏，2012. ヨシダカワザンショウ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑. p. 46，東海大学出版会，神奈川.

奥谷喬司 編著，2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp，東海大学出版会，東京.

佐藤達也，2023. 鳥羽市 海のレッドデータブック 2023. 297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜クビキレガイ目ワカウラツボ科＞

サザナミツボ　*Nozeba ziczac* (H. Fukuda & Ekawa, 1997)

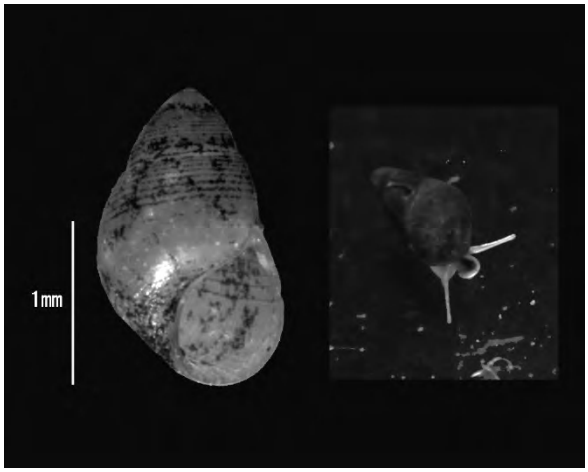
評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛知県 2025	絶滅危惧 IB 類
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は最近記載された微小種で内湾奥に生息することが知られている（Fukuda and Ekawa，1997）。軟体部の残った個体が海岸に打ち上げられて、三河湾、伊勢湾の 4 か所から複数採集されていたが（田中・河合，1998：河合，1998）、愛知県内で生きた個体が採集された記録はなかった。今回、市内の庄内川河口域より少数ながら生きた個体が採集された。泥質干潟上の転石の下面に生息していた。生息範囲も非常に狭く、護岸工事等の改変で容易に生息場所が消失してしまう可能性が高い。本種は微小種で最近記載されたことなどから、打ち上げられた死殻に関する情報も非常に少ない（田中・河合，1998：河合，1998）。和田ほか（1996）では、希少とランクされている。

形態

殻長約 2mm 微小な卵型の貝。殻は光沢のあるガラス質。殻表にジグザグの螺溝を多数めぐらすことが特徴である。



庄内川河口域、2008 年 7 月 13 日、木村昭一　撮影

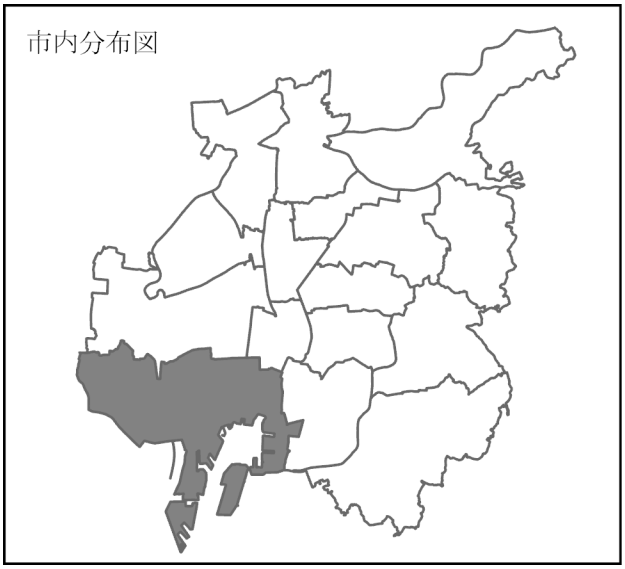
分布の概要

市内：庄内川河口域

県内：南知多町内海、美浜町布土

国内：宮城県亘理郡鳥の海（鈴木ほか, 2009）、浜名湖、三河湾、伊勢湾、的矢湾、瀬戸内海、玄界灘など、陸奥湾・男鹿半島～南西諸島（奄美大島、沖縄島）。

世界：朝鮮半島



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

本種は河口域の特殊な生息環境に生息し、生息場所も限定的で狭い。生息場所自体も護岸工事や埋め立てなどで容易に改変もしくは消失する可能性の高い場所である。

保全上の留意点

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、河口域の護岸工事では河口側の改変を伴わないように留意することが必要である。また内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

レッドデータブックなごや 2010 が本種の愛知県初の生きた個体の採集記録である。

引用文献

Fukuda, H. and Ekawa, K., 1997. Description and anatomy of a new species of the Elachisinidae (Caenogastropoda : Rissooidea) from Japan. The Yuriyagai，5(1/2): 69-88.

河合秀高，1998．内湾性稀少種サザナミツボの新産地．かきつばた，(24): 16-17.

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子，2009．干潟生物調査ガイドブック～東日本編～．120pp，日本国際湿地保全連合，東京.

田中利雄・河合秀高，1998．愛知県渥美半島西ノ浜の打上げ貝．豊橋市自然史博物館研究報告，(8): 33-36.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

福田　宏，2012．サザナミツボ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 40，東海大学出版会，神奈川.

（川瀬基弘）

貝類　＜タクミニナ目タクミニナ科＞

タクミニナ　*Mathilda sinensis* P. Fischer, 1867

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 IA 類

評価理由

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。県内で本種は日間賀島南沖水深 2m から 10m の砂泥底より、死殻がわずかに採集されているが、生貝は採集されていない（木村，1996）。今回行った調査で名古屋港沖合の泥底より新鮮な死殻が少数採集された。和田ほか（1996）では、現状不明（絶滅寸前）とランクされている。

形態

殻高約 1cm、淡褐色、細長い円錐型の貝。螺層の周辺には強く角張った螺肋が 4 本並ぶ。縫合部分は深くくびれる。肋間には規則的な縦肋が並ぶ。



豊後水道、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：金城埠頭造成時（1970 年代）にサンドポンプによって新鮮な死殻が採集され（河合，2009）、2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合からも死殻がわずかに採集された。

県内：上述したように県内では近年生貝が採集されておらず、死殻も稀産。

世界および国内：日本、中国大陸沿岸、熱帯インド、西太平洋。国内では房総半島以南に分布する。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したように県内では、近年生貝を採集できない。死殻でさえ稀であり、危機的な生息状況といえる。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

名古屋港浚渫地の半化石（河合，2000）や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

引用文献

河合秀高，2000．名古屋港浚渫地（金城埠頭）産貝類化石(3)巻貝(その 2)．化石の友，(47): 46-49.

河合秀高，2009．名古屋港のサンドポンプで得られた貝．かきつばた，(34): 20.

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要, (7): 38-48.

木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会．

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

関連文献

福田　宏，2020．タクミニナ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 443, 岡山県環境文化部自然環境課，岡山．

奥谷喬司 編著，2000．日本近海産貝類図鑑，1173pp，東海大学出版会，東京．

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽．

（川瀬基弘）

貝類　＜トウガタガイ目トウガタガイ科＞

イソチドリ　*Amathina tricarinata* (Linnaeus, 1767)

評 価 区 分

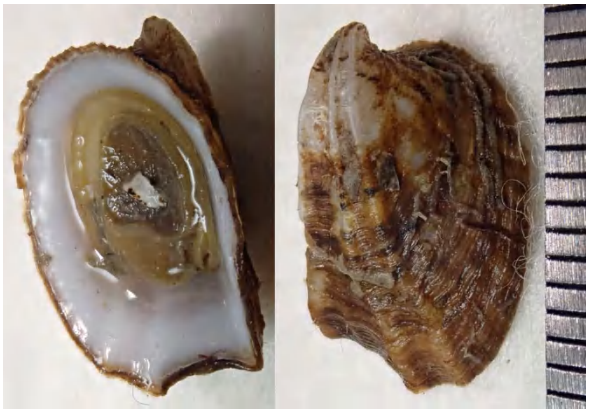
名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 I 類

評価理由

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむタイラギやイタボガキなどの二枚貝類に外部寄生する。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化しており、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。愛知県では本種は、日間賀島南沖から死殻がわずかに採集されているが、生貝は採集されていなかった（木村，1996）。2023 年 6 月のポートアイランド周辺海域のソリネット調査で 1 個体のみ名古屋市で初めて生貝が発見された（川瀬ほか，2024）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻長約 1.5cm。殻頂の巻いた笠型の貝。殻頂部から前縁部にかけて 3 本の強い明瞭な肋が走る。殻は白色であるが、黄褐色の厚い殻皮に覆われる。



ポートアイランド周辺海域、2023 年 6 月 9 日
川瀬基弘　撮影

分布の概要

市内：2023 年 6 月のポートアイランド周辺海域でマガキ礁に付着した生貝が 1 個体発見された。

県内：知多半島内海海岸（伊勢湾）で生貝が確認された（佐藤ほか，2019）。

世界および国内：日本、インド、西太平洋。国内では房総半島以南に分布する。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

宿主のタイラギやイタボガキも著しく減少しており、本種も危機的な生息状況である。近年、タイラギの殻上には移入種のシマメノウフネガイが多数付着しているため、種間競争の結果、同じ様な場所を生息場所とするイソチドリが減少した可能性がある。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

フィリピンなど南方に生息する個体と日本産個体は殻形態が異なり、同種か否か検討を要する。愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群から本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

引用文献

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7): 38-48.

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋港ポートアイランド周辺海域においてソリネット調査で得られた貝類．なごやの生物多様性，11: 85-91.

木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物．研究彙報(第 35 報): 3-19．全国高等学校水産教育研究会.

佐藤大義・浅田　要・永井　僚, 2019. 南知多町内海海岸（伊勢湾）の貝類相. かきつばた, 44: 20–30.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

関連文献

奥谷喬司 編著，2000．日本近海産貝類図鑑．東海大学出版会，東京．1173pp.

福田　宏・木村昭一，2012．イソチドリ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 83．東海大学出版会，秦野．

福田　宏，2020．イソチドリ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 456，岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

（川瀬基弘）

貝類　＜オカミミガイ目オカミミガイ科＞

ナラビオカミミガイ　*Auriculastra duplicata* (L. Pfeiffer, 1854)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

2013 年に名古屋市から初めて発見された種で（早瀬ほか，2014）、市内でオカミミガイの生息地として唯一知られている狭い範囲のヨシ原湿地内で発見された。本種は三河湾を分布の東限域とし、三河湾、伊勢湾ではオカミミガイより生息地、個体数ともに著しく少ない。2024 年 4 月 24 日の調査において，有機質砂泥に埋もれた 1 点の朽ち木の裏面に複数個体が付着している状態で再発見された。国内全域においても本種が定着できる環境は減少傾向にあり、都市化の進んだ市内に本種の定着可能な環境がかろうじて残されている。

形態

殻長 9mm 前後。螺層はドーム状。縫合は波打ったようになる。殻皮は光沢のある緑褐色で、平滑。外唇はほとんど肥厚しない。内唇に 1 歯、軸唇に強い 2 歯をもつ。オカミミガイの幼貝に似るが、本種の縫合下は成長線だけで平滑であるのに対して、オカミミガイの幼貝では小顆粒列がある。



港区庄内川河口，2024 年 4 月 24 日
採集：横井敦史、撮影：川瀬基弘

分布の概要

市内：庄内川河口（ヨシ原湿地の転石または朽ち木や流木の下面）。
県内：矢作川河口域、汐川河口域。
国内：三河湾～九州。
世界：中国大陸。



生息地の環境／生態的特性

庄内川河口部に見られるヨシ原湿地の埋もれ石や朽ち木の下より確認された。埋没石の周囲に地下茎が伸び僅かな空間を形成するマイクロハビタットにおいて生息が確認された。

現在の生息状況／減少の要因

2013 年に初めて発見されて以来，2024 年に再発見されたことから，定着している可能性が示唆された。市内のヨシ原湿地は堤防工事により減少しており、本種の生息地の破壊が減少の要因である。

保全上の留意点

市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまった庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟（ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟（庄内川河口干潟の一部）の範囲より外れる上流部分）の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考える（早瀬ほか，2014）。

引用文献

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一，2014．庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種．かきつばた，(39): 31-36.

関連文献

木村昭一，2010．コラム：庄内川河口のヨシ原湿地の貝類とその保全，102-103．生き物から見た名古屋の自然 なごやの環境指標種 100（改訂版），三菱 UFJ 環境財団，東京.
木村昭一，2012．ナラビオカミミガイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 92，東海大学出版会，神奈川.

（川瀬基弘）

貝類　＜オカミミガイ目オカミミガイ科＞

オカミミガイ　*Ellobium chinense* (L. Pfeiffer, 1854)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IB 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地に棲息する。本県では、ヨシ原湿地が護岸工事や埋め立て等で著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村，1999）。名古屋市で本種の棲息する環境は庄内川河口だけである。野々部ほか（1984）によれば、熱田区の記録があるが現在棲息を確認することはできない。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻高約 35mm、殻径約 15mm。殻は卵形、螺塔は小さい。殻表は褐色の殻皮で覆われる。殻口は白く肥厚し、耳状を呈する。



港区庄内川河口，2013 年 6 月 23 日
採集・撮影：川瀬基弘

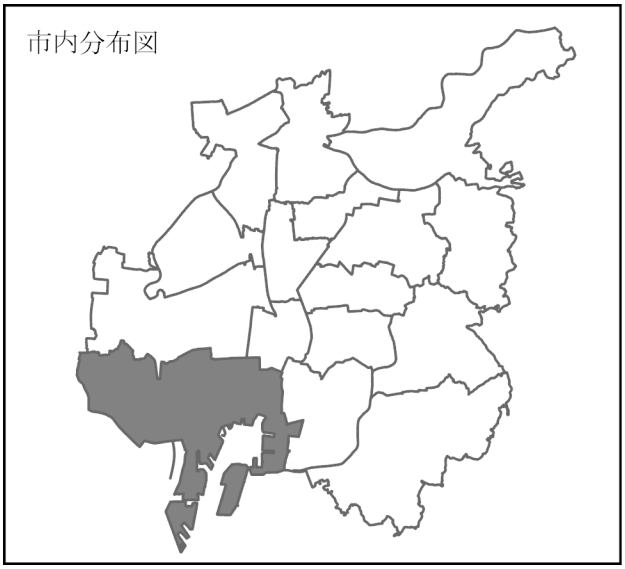
分布の概要

市内：庄内川河口域のヨシ原湿地。

県内：木村・木村（1999）では 3 か所で生息が確認され、その後新たに 2 か所で確認された（木村，1999）。しかし、汐川干潟以外では絶滅が危惧される。2002 年に渥美半島三河湾流入河川河口部で生息地が確認されたが、生息数は非常に少ない（木村・木村，2002）。

国内：三河湾～九州（東京湾～三浦半島では絶滅）。

世界：朝鮮半島、中国大陸。



生息地の環境／生態的特性

上述したようなヨシ原湿地内の朽ち木や落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

保全上の留意点

上述したようなヨシ原湿地と連続する上部の陸上植生を破壊しない。

特記事項

東京湾から三浦半島の個体群は絶滅し、本県は現在の分布の東限である。

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ433-14

登録標本の採集地：庄内川河口ヨシ原湿地

引用文献

木村昭一，1999．佐奈川河口域観察会報告．かきつばた，(25): 14-17.

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.

木村昭一・木村妙子，2002．新堀川河口塩性湿地の貝類相，かきつばた，(28): 13-14.

野々部良一・高桑　弘・原田一夫，1984．陸産貝類．佐藤正孝・安藤　尚(編)．愛知の動物，pp.23-40．愛知県郷土資料刊行会，名古屋市.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一，2014．庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種．かきつばた，(39): 31-36.

木村昭一，2012．オカミミガイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 95，東海大学出版会，神奈川.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜オカミミガイ目オカミミガイ科＞

クリイロコミミガイ　*Laemodonta siamensis* (Morelet, 1875)

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

本種は、伊勢湾から南西諸島に分布するが、九州以北では生息地は少なく、湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地に生息する。本種の分布の東限かつ北限は伊勢湾であるが、愛知県内では生息が確認されたことがなかった。2016 年 4 月 7 日、初めて愛知県側の伊勢湾沿岸で本種の生息地が発見された（木村ほか，2019）ので、詳細な生息状況を報告する。

本種の生息環境である湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地自体が護岸工事や埋め立てによって著しく減少しており、本種の生息基盤は脆弱である。現在県下（名古屋市下）に 1 か所の生息場所しか確認されていないこと、その生息場所の面積が著しく小さいことから非常に絶滅の危険性が高い種と評価された。

形態

本種は殻長約 7 mm の小型のオカミミガイ科貝類である。殻は卵形、殻表は強い螺肋で覆われ、殻口外唇に 1 個の歯状突起、内唇側に 2 個の歯状突起､殻軸に 1 個の歯状突起が発達する。クリイロコミミガイは殻頂が欠損することが多い（本土産個体に顕著)。



港区庄内川河口、2016 年 4 月 7 日、木村昭一

分布の概要

県内および市内：名古屋市庄内川河口の塩性湿地（伊勢湾沿岸）の 1 か所で、その面積も著しく小さい。

国内：本州（愛知県；伊勢湾）から三重県側伊勢湾、五ヶ所湾、瀬戸内海、吉野川河口、博多湾、伊万里湾、九州西岸、有明海、八代海、八重山諸島に分布するが南西諸島と九州以北では生息環境、生息状況、殻の形態に違いがある（福田・木村，2012)。

世界：東南アジア（福田・木村，2012)。



生息地の環境／生態的特性

湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地に生息し、オカミミガイ科としてはやや低い地盤高に生息し、庄内川河口域の生息地では最高が 2.38 m、最低が 2.09 m であった（木村・他，2019)。泥分の多い砂泥底に半ば埋もれた直径約 30 cm の砂岩の裏面に、泥と共に 2 個体が寄り添って付着していた。同砂岩裏面には直径約 3 cm の螺旋状に巻いた泥紐状卵塊が生み付けられていた（2016 年 4 月 7 日；木村・他，2019)。

現在の生息状況／減少の要因

評価理由の項参照。

保全上の留意点

本種の生息環境である湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地（下流に堰が出来ると消失する）のこれ以上の破壊、埋め立てを行わないことが保全の第 1 歩である。

特記事項

名古屋市（愛知県）における生息地は、2016 年に初めて 1 か所だけで確認された。この生息地は、本種の現在の分布域の北限かつ東限である。なお、本種は三河湾には分布しない。

引用文献

福田　宏・木村昭一，2012. クリイロコミミガイ. 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑. p. 97. 東海大学出版会，秦野.

木村昭一・木村妙子・村山　椋, 2019. 愛知県(伊勢湾)で初めて生息が確認されたクリイロコミミガイ. かきつばた, 44: 40–43.

佐藤達也，2023. 鳥羽市 海のレッドデータブック 2023. 297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（木村昭一）

貝類　＜オカミミガイ目オカミミガイ科＞

キヌカツギハマシイノミ　*Melampus* cf. *sincaporensis* L. Pfeiffer, 1855

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IA 類
愛 知 県 2025	絶滅危惧 IA 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地内に分布する。愛知県ではヨシ原湿地が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村，1999）。健全な個体群は汐川干潟と新堀川河口でのみ保存されている（木村・木村，2002）。市内では庄内川河口域で早瀬（1998）によって生息が確認されたが、それ以後生息が確認できない。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻高約 1cm。殻は卵形で殻表は褐色の殻皮で覆われる。殻には褐色から黒色の色帯があり、その幅や本数は個体によって異なる。



田原市汐川左岸塩性湿地，2020 年 6 月 17 日
採集：横井敦史、撮影：川瀬基弘

分布の概要

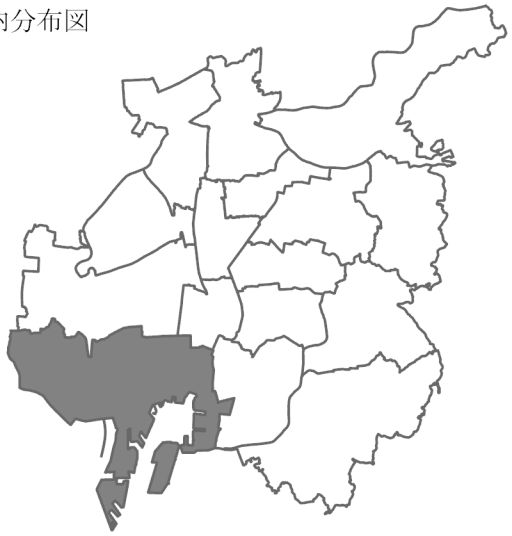
市内：庄内川河口域で早瀬（1998）により 2 個体生息が確認されたが、それ以後生息が確認できない。この生息地での絶滅が危惧される。

県内：三河湾の汐川干潟と新堀川河口の 2 か所で確認された（木村・木村，2002）。愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられるが、矢作川河口域から新たに記録されている（木村，2012）。

国内：三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、玄界灘、有明海、八代海（日本ベントス学会，2012）。

世界：朝鮮半島、中国大陸、シンガポール。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

内湾奥部の河口域に発達したヨシ原湿地内の高潮帯の泥上、朽ち木表面や落葉の下に生息する。健全な個体群の生息地はヨシ原から連続する陸上植物も残されている場合が多い（日本ベントス学会，2012）。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

保全上の留意点

ヨシ原湿地と上部の陸上植生を保全する必要がある。

特記事項

三浦半島で絶滅したため、現在では三河湾が本種の分布域の東限である（日本ベントス学会，2012）。

引用文献

早瀬善正，1998．キヌカツギハマシイノミガイ庄内川河口に生息．かきつばた，(24): 12.

木村昭一，2012．矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相．三河生物，三河生物(西三河野生生物研究会)，3: 1-8, 2pls.

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.

木村昭一・木村妙子，2002．新堀川河口塩性湿地の貝類相，かきつばた，(28)：13-14.

日本ベントス学会（編），2012．干潟の絶滅危惧動物図鑑－海岸ベントスのレッドデータブック，284pp．東海大学出版会，秦野．

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

関連文献

福田　宏，2020．キヌカツギハマシイノミ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 478, 岡山県環境文化部自然環境課，岡山．

（川瀬基弘）

貝類　＜スエモノガイ目オキナガイ科＞

オキナガイ　*Laternula anatine* (Linnaeus, 1758)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	－

評価理由

2018 年 10 月 20 日に実施した名古屋港ポートアイランド附近のドレッジ調査によって生貝が 1 個体のみ得られた。本種は、内湾から湾口部にかけての干潟から潮下帯の砂泥底に棲息する。また、外洋の潮下帯～水深 60m の砂泥底にも棲息する。

愛知県内では内湾域の潮下帯の環境は、上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで悪化している（愛知県環境調査センター，2020）。特に名古屋市港区では、埋め立てや水質汚濁、ヘドロの堆積が著しい。このように本種の棲息環境は著しく悪化しており、名古屋市においては棲息環境も限局的である。さらに、名古屋港ポートアイランド附近の複数地点でドレッジ調査を各地点 2 回ずつ実施したが 1 個体のみしか発見できなかった。

形態

殻は長楕円形、薄質、銀白色半透明で比較的よく膨らむ。図示した個体の殻長は約 36mm。表面には微小な顆粒があり、ざらざらしている。後部は細まり吻状に突出し、後端は開く。内面は真珠光沢をもつ。殻帯を欠く。外套線湾入は浅い。



2018 年 10 月 20 日採集
名古屋港ポートアイランド附近

分布の概要

市内：名古屋港ポートアイランド附近。

県内：三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖、渥美潮下帯（愛知県環境調査センター, 2009）。

国内：房総・男鹿半島以南、日本海、四国、九州（肥後・後藤，1993）。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

内湾から湾口部にかけての干潟から潮下帯の砂泥底に棲息する。

現在の生息状況／減少の要因

愛知県下の状況（愛知県環境調査センター, 2009）と同様に、本種の棲息する干潟から潮下帯の環境は破壊されており、生息場所、棲息個体数ともに減少したと考えられる。

保全上の留意点

干潟から潮下帯の環境を保全する。

引用文献

愛知県環境調査センター, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009―動物編―, 651 pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

愛知県環境調査センター，2020. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020―動物編―. 愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋. 768 pp.

肥後俊一・後藤芳央, 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録, 3+22+693+13+148 pp. エル貝類出版局, 八尾.

関連文献

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, 35: 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, 26: 18-20.

西條八束・八木明彦・梅村麻希・寺井久慈・川瀬基弘・松川康夫・佐々木克之, 2004. 中部空港島周辺における底質・底生動物を中心とした水域環境変化に関する研究. プロ・ナトゥーラ・ファンド第 13 期助成成果報告書. pp. 3-16.

佐藤達也，2023. 鳥羽市 海のレッドデータブック 2023. 297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏, 1996.日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目サルガイ科＞

サビシラトリ　*Macoma contabulata* (Deshayes, 1855)

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 IB 類
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾の奥部や河口部の砂泥干潟に生息する。愛知県では干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は、1995 年に矢作川河口域で比較的多くの個体の生息が確認されたが、2001 年の調査では死殻も稀であった。もともと伊勢湾の愛知県側、三河湾での記録は多くないが、近年明らかに本種の個体数が減少している。名古屋市では、藤前干潟に古い死殻が打ち上げられて採集されるが個体数は少ない（木村，2004）。

形態

殻長約 7cm、殻は卵形、ニッコウガイ科としては膨らみが強い。殻はやや薄く、白色、生きている時には縁辺部に薄い殻皮を被る。



藤前干潟、2004 年 7 月 4 日、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：藤前干潟（川瀬ほか，2009）、天白川河口。
県内：汐川干潟、三河一色、矢作川河口干潟。
国内：北海道南西部～九州。
世界：中国大陸。

生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

評価理由の項参照。

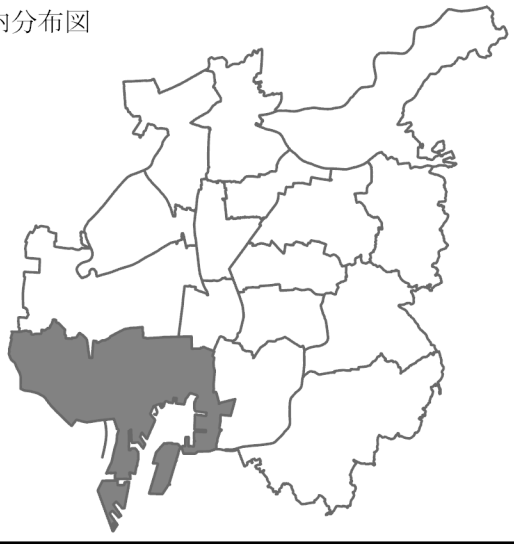
保全上の留意点

内湾奥の干潟環境を保全する必要がある。

特記事項

名古屋市港区の藤前干潟では、泥底の 60～80 cm 程度まで潜っているので、生貝を発見するのは困難である。ただし夏の干潮時のタイドプールでは、捕食のために動き回る本種の水管を複数確認できる。この水管の下を 60～80 cm 程度まで掘り下げると本種を発見することができる。また、庄内川河口では、靭帯と殻皮が保存された新鮮な本種の死殻を多数確認できたので、藤前干潟の泥底と同様にある程度の個体数が生き残っていると考えられる（川瀬ほか，2009）。

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬ほか，2015）からは、本種の化石記録がある。



引用文献

川瀬基弘・市原　俊・河合秀高，2015．中部更新統渥美層群の軟体動物化石．瑞浪市化石博物館研究報告，(41) : 51-131, 34 pls., 1 fig., 2 tables.
川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.
木村昭一，2004．⑧貝類．名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物, レッドデータブックなごや 2004－動物編－. pp. 263-292．名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室, 名古屋.

関連文献

藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10): 31-39.
福田　宏，2020．サビシラトリ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 589，岡山県環境文化部自然環境課，岡山.
川瀬基弘，2002．矢作川河口域における干潟の底生生物相．矢作川研究，(6): 81-98.
佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.
鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006．伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化．名古屋大学博物館報告，(22): 31-64.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目マルスダレガイ科＞

ハマグリ　*Meretrix lusoria* (Röding, 1798)

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

本種は内湾の河口域の干潟から潮下帯に生息する貝類として最も顕著に姿を消した代表的な種である。本種は分布全域で著しい減少が報告されており、現在瀬戸内海、有明海の極一部や天草などに健全な生息場所が残されているが、その他では非常に稀な種となってしまった（和田ほか，1996）。県内でも本種は 1960 年代には三河湾奥部の前芝付近、福江湾で多産し、食用にされていたが（愛知県科学教育センター，1967）、近年では死殻すらほとんど採集できない。和田ほか（1996）では危険にランクされている。このように絶滅が危惧されたが最近では県内のいくつかの干潟で時々生貝が発見されるようになった。全国的にも回復しているようである。

形態

殻長 8cm に達するやや大型な種。殻は丸みを帯びた三角形で、殻はよく膨れるが薄い。殻の色彩は濃い褐色から灰褐色まで個体変異が多く、模様も変異する。シナハマグリ（中国・韓国からの輸入品）は殻全体に丸みが強く、殻の模様は褐色の稲妻模様のある個体が大部分で色彩の変異も少ない。



庄内川河口、2008 年 12 月 11 日、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：2023 および 2024 年には、庄内川河口、天白川河口、港区鴨浦地区で確認した。

県内：2020 年代前半に、矢作川河口、南知多町、東幡豆、佐久島などで生貝を確認した。

国内：陸奥湾～九州。

世界：朝鮮半島南部。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したように県内の干潟から潮下帯は環境が著しく悪化しているので、かつて多産し食用にされていた本種の生息場所は、現在ほとんど確認できない。大型種であるのに、死殻の確認できる場所すら非常に少ない。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

各地で個体数が増えている。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

関連文献

福田　宏，2020．ハマグリ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 637，岡山県環境文化部自然環境課，岡山．

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.

川瀬基弘・横井敦史，2024. 名古屋市港区野跡町・潮凪町（鴨浦地区）の港湾で発見されたウミニナ *Batillaria multiformis*（Lischke, 1869）なごやの生物多様性，11: 123-127.

木村昭一，2000．伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26): 18-20.

木村昭一，2004．蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相．かきつばた，(30): 14-20.

木村昭一，2005．蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報．かきつばた，(31): 29-31.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目シジミ科＞

ウエジマメシジミ　*Odhneripisidium uejii* (Mori, 1938)

評 価 区 分

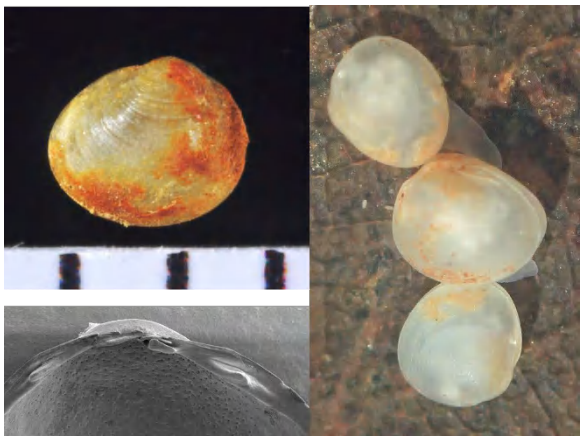
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

本属は日本国内から 20 種程度が報告されているが（Mori, 1938：黒田，1963）、非常に微小な種が多いため、各地の詳細な分布・生息状況は充分に調べられていない。豊田市や岐阜市の平野部の水田を調査したところ比較的多くの地点で見つかったが（川瀬ほか，2012：川瀬，2014）、汚濁の進んだ水質の悪い水田ではほとんど見つからなかった。市内全域の主要な水田を調査したが、生貝は天白区の 1 つの水田以外では発見できなかった。発見された水田においても個体数はやや少なく、隣接する水田では本種を発見できなかった。その後、南区呼続長楽寺付近で死殻を 1 個体のみ発見したが生貝を確認できなかった。

形態

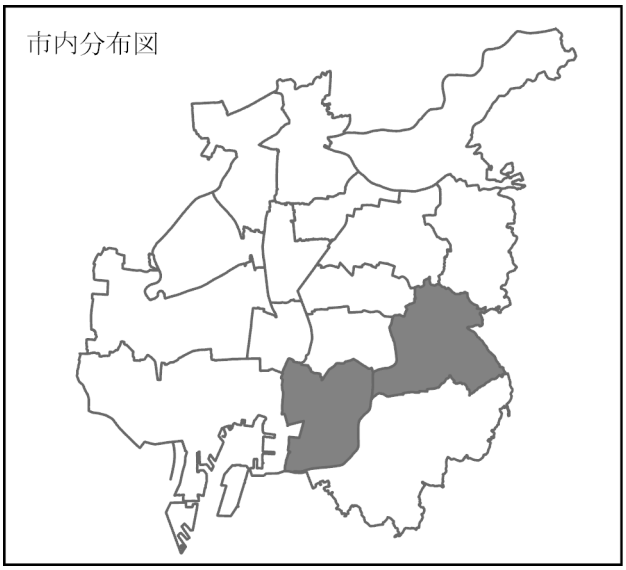
殻は非常に小さく、殻長 1〜2 mm 程度。殻は薄質の白色半透明から灰褐色で、微細な成長脈がある。殻頂は後方に位置する。鉸板が殻頂部で非常に狭くなり靭帯が殻内面に裸出する。本属は日本国内から 20 種程度が報告されているが（Mori, 1938：黒田，1963）、非常に微小な種が多いため、各地の詳細な分布・生息状況は充分に調べられていない。



左上黒背景：標本写真
天白区梅が丘、2012 年 8 月 16 日、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：天白区梅が丘、南区呼続長楽寺。
県内：豊田市、新城市、西尾市など県内各地。
国内：各地に分布すると思われるが調査不充分。



生息地の環境／生態的特性

比較的水質の良い水田の泥底に棲息する。唯一生貝が発見された天白区梅が丘の水田では、他にヒラマキミズマイマイやヒメモノアラガイが見つかった。

現在の生息状況／減少の要因

市内の多くの水田では汚濁耐性種のヒメタニシやスクミリンゴガイが優占し水質が悪く、このような水田には棲息できないと考えられる。農薬の影響もあると考えられる。

保全上の留意点

水田の水質・底質の汚濁防止。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ427-14，採集地：天白区梅が丘 5
DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

引用文献

川瀬基弘，2014．11 貝類．岐阜市の自然情報〜岐阜市自然環境基礎調査〜．pp. 197-209．岐阜市役所自然共生部自然環境課．
川瀬基弘・鳥居亮一・市原　俊，2012．愛知県矢並湿地に生息するマメシジミ類．平成 23 年度豊田市自然観察の森年次報告書．pp. 223-225，豊田市自然観察の森，豊田．
黒田徳米，1963．日本非海産貝類目録，71pp，日本貝類学会，東京．
Mori, S., 1938. Classification of Japanese Pisidium. Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Ser.B, 14(2) :254-278, pls.7-11.

関連文献

川瀬基弘，2018．なごや生きもの一斉調査〜淡水貝編〜．平成 29 年度なごや生物多様性保全活動協議会活動報告書，pp. 22-25．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．

（川瀬基弘）

貝類　＜タニシ目タニシ科＞

マルタニシ　*Cipangopaludina* cf. *laeta* (Martens, 1861)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

本種は、海に近い平野部の水田や用水路などにかつては食用にするほど多産し、最も親しみのある淡水貝であった（紀平，1990）。近年では水質汚濁、農薬散布、用水路の改修、水田の乾田化のため生息地、生息数とも著しく減少した。木村（1994）では、5 地点のみで生息が確認されたにすぎず、そのいずれでも生息数が少ない。市内では守山区志段味地区で 1990 年頃まで生息記録があるが（酒井，2002）、その後は生貝を確認できず絶滅した可能性が高かった。しかし、2013 年に中川区から再発見された（川瀬・石黒，2015）。

形態

成貝では殻高 6cm に達するが、通常 3～4cm 程度。各螺層は丸く膨れ、縫合は深くくびれる。殻は薄く壊れやすい。殻の表面に縫い跡のような微小なくぼみの列がある。蓋は革質で赤褐色。



中川区江松西町、2014 年 5 月 10 日、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：期待された北区・守山区の水田（酒井，2002）では確認できず、中川区の水田から発見された（川瀬・石黒，2015）。

県内：知多半島先端部の休耕田、西尾市、新城市や豊田市の特定地域の水田や水路に棲息している。

国内：北海道南部～九州、沖縄諸島。

世界：朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

水質汚濁、農薬散布、用水路の改修、水田の乾田化などの影響の少ない水田を含む市外の低湿地には、現在も比較的多くの個体が生息する。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような生息地がほとんど残されていない。

保全上の留意点

護岸工事、用水路の改修、農薬散布には注意が必要である。水田などの低湿地の保全とその水質の保全が必要である。

特記事項

市内では 10 年あるいは 20 年ぶりにマルタニシが再発見されたことになるが（川瀬・石黒，2015）、発見された中川区江松西町・富田町では個体数が極めて少なく、大量のヒメタニシと混生していた。

引用文献

川瀬基弘・石黒鐐三，2015．名古屋市内で再発見されたマルタニシ．なごやの生物多様性，2: 33-34.

紀平　肇，1990．琵琶湖淀川淡水貝類，131pp．たたら書房，鳥取.

木村昭一，1994．東海地方の淡水貝類相．研究彙報，(33): 14-34．全国高等学校水産教育研究会.

酒井　類，2002．名古屋市守山区の淡水産貝類．かきつばた，(28): 15-17.

関連文献

川瀬基弘，2014．新城市の軟体動物．加藤貞亨ほか(編)．新城市の自然誌－昆虫・動物編－．pp. 1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.

川瀬基弘, 2018. なごや生きもの一斉調査･2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋.

野呂達哉・川瀬基弘，2018．名古屋大学構内の水田におけるマルタニシ *Cipangopaludina chinensis laeta* (Martens, 1860)の確認事例．なごやの生物多様性，5: 119-120.

高柳茉友子，2014．矢作川上中流域に生息する淡水産貝類．矢作川研究，(18): 5-11.

（川瀬基弘）

貝類　＜オニノツノガイ目（タケノコカニモリ目）ウミニナ科＞

ウミニナ　*Batillaria multiformis* (Lischke, 1869)

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種の属するウミニナ科貝類は、愛知県にホソウミニナ、ウミニナ、イボウミニナの 3 種があり、ともに内湾の泥干潟の表面に生息している。東京湾や三浦半島では、ホソウミニナ以外の 2 種に著しい減少傾向が認められる（木村・福田，2012 : 黒住耐二，2000 : 池田ほか，2001）。愛知県でも干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村，1999）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。愛知県下では、まだ健全な個体群が残されている場所があるが、市内では藤前干潟で死殻がわずかに採集されるに過ぎない。

形態

殻高 3 cm 殻径 1 cm 程度の塔型で殻は厚く、よく成長した個体の殻口は肥厚し、内唇の滑層は肥厚する。ホソウミニナに似るが殻が太く、内唇の滑層が肥厚する点で区別できる。



港区野跡町・潮凪町（鴨浦地区）の港湾の潮間帯
2023 年 7 月 26 日、川瀬基弘　撮影

分布の概要

市内：2023 年 7 月 26 日，港区野跡町・潮凪町（鴨浦地区）の港湾の潮間帯でまとまった個体群が発見された（川瀬・横井，2024）。

県内：汐川干潟、東幡豆、福江、吉良、矢作川河口など 10 か所程度。

国内：北海道南部から九州まで。

世界：朝鮮半島、中国大陸。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。また、生息場所が直接改変されなくても減少する例が確認されており（黒住，2000：池田ほか，2001）注意を要する。

保全上の留意点

泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

引用文献

池田　等・倉持卓司・渡辺政美，2001．相模湾レッドデーター貝類ー，104pp，葉山しおさい博物館．

川瀬基弘・横井敦史，2024．名古屋市港区野跡町・潮凪町（鴨浦地区）の港湾で発見されたウミニナ *Batillaria multiformis* (Lischke, 1869) なごやの生物多様性，11: 123-127.

木村昭一・福田　宏，2012．ウミニナ．日本ベントス学会編，干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.31．東海大学出版会，秦野．

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相，日本ベントス学会誌 54: 44-56.

水産資源保護協会，1995．軟体動物．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅱ)，131pp.

黒住耐二，2000．貝類．千葉県の保護上重要な野生生物ー千葉県レッドデータブックー動物編．pp. 359-399．千葉県環境部自然保護課．

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3，182pp.

関連文献

福田　宏，2020．ウミニナ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 359，岡山県環境文化部自然環境課，岡山．

（川瀬基弘）

貝類　＜コモロガイ目コモロガイ科＞

オリイレボラ　*Trigonaphera bocageana* (Crosse & Debeaux, 1863)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	絶滅危惧 IB 類
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底に棲息する。名古屋市を含む愛知県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化しており、この棲息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集されていなかった（中山，1980 : 木村，1996 : 木村，2000）。2006、2007 年に知多半島先端部の数地点でドレッジ調査の結果、少数の生貝と比較的多くの新鮮な死殻が採集された。2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深 2～6 m の砂泥底から生貝が少数個体ではあるが採集された。しかし、生息範囲は狭く、個体数は少ないので予断を許さない。名古屋港ポートアイランド附近において，2018 年にドレッジ調査を，2023 年にソリネット調査を実施した際には本種を確認できなかった。和田ほか（1996）では、現状不明（絶滅寸前？）とランクされている。

形態

殻はこの属としては大型でやや細く、臍孔は狭く開くが、軸唇の滑層によって部分的にふさがれる。縦肋は強いが、肋間は平滑で螺肋は弱い糸状か不明瞭。蓋はない。



西尾市佐久島(筒島)、2017 年 7 月 26 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：名古屋港沖合の水深 2～6m の砂泥底。

県内：知多半島先端部の数地点、西尾市佐久島。

国内：房総半島～九州西岸。

世界：黄海、インド・太平洋。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような生息環境悪化のため、本種の生息場所、生息数ともに減少し、生貝が採集されることは稀である。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

引用文献

木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会．

木村昭一，2000．伊勢湾･三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報)．かきつばた，(26): 18-20.

中山　清，1980．知多湾南部海域の貝類相．かきつばた，(6): 10-12.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

福田　宏，2020．オリイレボラ．岡山県野生動植物調査検討会(編)．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 408, 岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

木村昭一・福田　宏，2012．オリイレボラ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 74, 東海大学出版会，神奈川.

奥谷喬司（編），2017．日本近海産貝類図鑑［第二版］．1375 pp. 東海大学出版会，平塚.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子，2009．干潟生物調査ガイドブック～東日本編～．120pp，日本国際湿地保全連合，東京.

（川瀬基弘）

貝類　＜オカモノアラガイ目オカモノアラガイ科＞

ナガオカモノアラガイ　*Oxyloma hirasei* (Pilsbry, 1901)

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

平野部から丘陵地の安定した水田、湿地周辺のマコモなどの挺水植物の茎や葉に付着している。近年、このような生息環境自体が激減しているので、本種の生息地、生息数は減少している。名古屋市では西区の小水路周辺の湿地で採集された標本が保存されている（豊橋市自然史博物館所蔵）が、近年、西区ではその生息が確認されていない。2013 年に北区喜惣治新田で生貝が発見された。

形態

殻はとても薄く、やや光沢のある黄褐色の半透明。卵形～紡錘形で体層は長い。殻高 10～13mm 程度。殻口が著しく長く広がり殻口高は殻高の 8 割程度を占める。淡水産のモノアラガイなどに似ているが、眼が触角の先端についていることで区別できる。



東区徳川園、2022 年 10 月 15 日、川瀬基弘　撮影

分布の概要

市内：北区喜惣治新田および東区徳川園。

県内：川瀬（2012）の報告後に豊田市各地から発見されているが個体数は少ない。新城市からも発見された（川瀬，2014）。

国内：関東地方～九州。

世界：日本固有種。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

平野部から丘陵地の安定した水田、湿地周辺のマコモなどの挺水植物の茎や葉に付着している。陸産貝類であるが、水辺に最も近い位置に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

野々部ほか（1984）によれば、当時は市内の水田にも普通に見られた。しかし近年は、上述したような安定した環境自体が減少し、本種は激減している。

保全上の留意点

生息環境全体の保全が必要である。

特記事項

早瀬（2008）は、静岡市清水区において本種個体群の連続的な観察・計測を行い、本種の生活史には、春型と夏型があり、それぞれに寿命が異なることを解明し以下のように考察をしている。一見、無意味な発育状態の差が、湿地という不安定な環境において、突然の増水や渇水など環境の急激な変化に対して、卵や稚貝に対する被害を一部に食い止める生存戦略ではないかと考えられている。

引用文献

早瀬善正，2008．静岡市清水区能島遊水地におけるナガオカモノアラガイの生活史．兵庫陸水生物，(60): 151-157.
川瀬基弘，2012．愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物．豊田市史研究，(3): 57-80.
川瀬基弘，2014．新城市の軟体動物．加藤貞亨ほか(編)．新城市の自然誌．pp. 1-24．新城市立鳳来寺山自然科学博物館．
野々部良一・高桑　弘・原田一夫，1984．陸産貝類．佐藤正孝・安藤　尚(編)．愛知の動物，23-40．愛知県郷土資料刊行会，名古屋市.

関連文献

川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.
川瀬基弘・早瀬善正・市原　俊，2011．愛知県豊田市に生息する陸産貝類．豊橋市自然史博研報, 21: 31-43.

（川瀬基弘）

貝類　＜キセルガイ目キセルガイ科＞

ナミギセル　*Stereophaedusa japonica* (Crosse, 1871)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

本種は本州、四国、九州北部に広く分布するキセルガイで、各地に地域変異個体群があり、多くの亜種が記載されている。標準和名の通り普通種とされているが、愛知県内では分布は限定的で（野々部ほか，1984）、生息地点数は少なく、生息範囲も狭い。特に市内では八事丘陵の南西部に位置する瑞穂区内のごく一部の自然林のみに生息が確認されていた（守谷，2004）が、宅地開発等によりその生息が危ぶまれる。

形態

殻は中形で、殻高 26mm、殻径 7mm、12 層。やや棍棒型で淡黄～紫褐色。殻口は卵形で全縁、白色。外唇は厚くひろがり反転する。上板は斜位で内唇にいたる。下板は顕著に発達し、弓状に湾曲し、上板に近づいている。下軸板は弱く唇縁に現れる。主襞は長く、その下に上腔襞が少し斜めにあり、それより短い下腔襞がある。



瑞穂区松園町（山崎川川岸）、2019 年 10 月 23 日、川瀬基弘

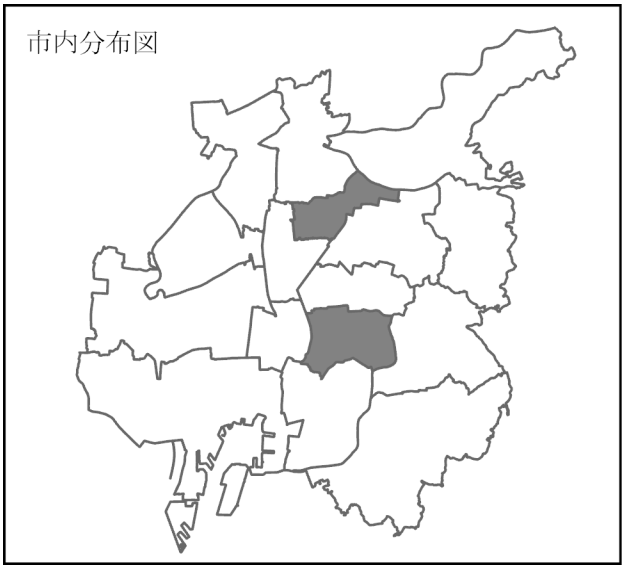
分布の概要

市内：瑞穂区（守谷，2004）および東区木ヶ崎（矢田川左岸）。

県内：上述したように、東三河部を中心に生息地があるが、生息地点数は少なく、生息範囲も狭い。例えば近年全域的な調査が行われた豊田市や新城市では、棲息域が極めて限られている。

国内：本州・四国（北部）・北九州に分布する。多くの地方型や異名がある。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

評価理由の項参照。

保全上の留意点

古い自然林の保全が望まれる。

特記事項

遺伝子分析の結果、瑞穂区と東区に棲息するナミギセルの個体間では，異なるサブクレードに分かれたため，両地点のナミギセルは異なる系統のものと判断された（川瀬ほか，2018）。

引用文献

川瀬基弘・西尾和久・松原美恵子・市原　俊・森山昭彦・熊澤慶伯，2018．遺伝子解析に基づく中部・西日本産ナミギセル *Stereophaedusa japonica* 個体群の種内多様性と名古屋市の個体群の系統的位置づけ．なごやの生物多様性，5: 11-22.

守谷茂樹，2004．名古屋市内の陸貝の現況，かきつばた，(29):25-31.

野々部良一・高桑　弘・原田一夫，1984．陸産貝類．佐藤正孝・安藤　尚（編），愛知の動物，pp.23-40．愛知県郷土資料刊行会，名古屋.

関連文献

川瀬基弘，2012．愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物．豊田市史研究，(3): 57-80.

川瀬基弘，2014．新城市の軟体動物．加藤貞亨ほか（編）．新城市の自然誌－昆虫・動物編－，pp.1-24．新城市立鳳来寺山自然科学博物館.

川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.

川瀬基弘・西尾和久・市原　俊・村瀬文好，2013．名古屋市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(7): 12-17.

川瀬基弘・鵜飼　普・大矢美紀，2017．山崎川川岸（名古屋市瑞穂区）で発見されたナミギセル．なごやの生物多様性，4: 43-45.

川瀬基弘・横山悠理・松原和純・市原 俊・松原美恵子・横井敦史・森山昭彦，2021．愛知県に棲息するキセルガイ類．なごやの生物多様性，8: 113-125.

（川瀬基弘）

貝類　＜マイマイ目ナンバンマイマイ科＞

ヒルゲンドルフマイマイ　*Aegista hilgendorfi* (Kobelt, 1879)

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧 IB 類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

名古屋市の熱田神宮が古くから著名な産地である（愛知県科学教育センター，1967）。その他、愛知県内では定光寺、石巻山、嵩山などに分布するが、石巻山、嵩山に分布する個体群はオオヒルゲンドルフマイマイとして区別されることがある。チャイロオトメマイマイなどとの区別も難しく、分類学的な問題のある種である。典型的な個体は、伊吹山系、鈴鹿山系の石灰岩地に生息しているが、市内では非石灰岩地に分布し、知多半島でも非石灰岩地で生息が確認され（早瀬、2001）、分布上興味深い。著名な産地であった熱田神宮では採集困難となり、木村（2002）によって久々に生息が確認された。2013 年の本調査でも神宮内から発見された。

形態

殻高約 1 cm、殻径約 1.5 cm の低円錐形で、体層は丸く膨らみ、周辺に弱い角がある。殻の色彩は淡黄色から黄褐色で、殻質は薄く、殻表に薄い殻皮を持つ。産地によって殻の色彩、周辺角の強さなど殻の形態は変異する。



天白区荒池、2011 年 6 月 17 日、川瀬基弘　撮影

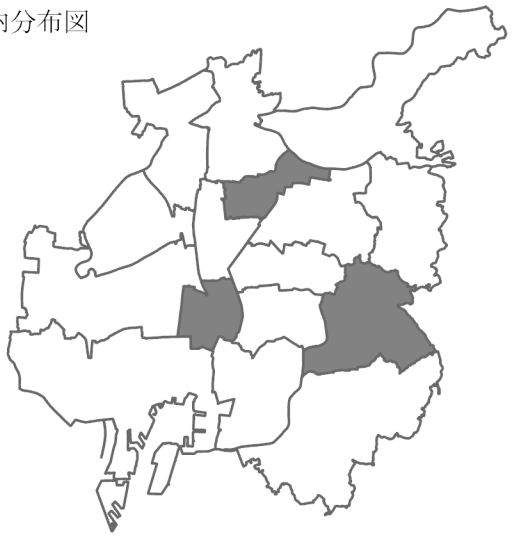
分布の概要

市内：熱田神宮の他に、熱田神宮公園（熱田区）、木ヶ崎公園周辺（東区）、荒池（天白区）からも発見された（川瀬，2012：川瀬，2013）。

県内：定光寺、石巻山、嵩山などに分布する。近年、知多半島南部の非石灰岩地でも生息が確認された（早瀬、2001）。

国内：伊吹山系、鈴鹿山系の石灰岩地に分布する。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

よく茂った二次林内の低木の樹上（活動期）に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような安定した二次林の減少が原因と思われる。

保全上の留意点

分布域の二次林の保全に留意する。

特記事項

名古屋市一斉調査などにより、木ヶ崎公園周辺（東区）、荒池（天白区）ほか新たな生息地が確認されたが、いずれの地点においても棲息個体数は少ない（川瀬，2012：川瀬，2013）。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．
早瀬善正，2001．知多半島に生息するヒルゲンドルフマイマイ．かきつばた，(27)：10-11.
川瀬基弘，2012．名古屋市内で確認されたシリオレギセルとヒルゲンドルフマイマイ．かきつばた，(37): 52.
川瀬基弘，2013．なごやで探そう！カタツムリ．29 pp，名古屋生物多様性保全活動協議会．
木村昭一，2002．熱田神宮の貝類相．かきつばた，(28): 24-25.

関連文献

川瀬基弘，2013．Ⅱ－7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成 24 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業），pp. 178-213，なごや生物多様性保全活動協議会．
川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.

（川瀬基弘）

貝類　＜イガイ目イガイ科＞

ツヤガラス　*Jolya rhomboidea* (Reeve, 1857)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	－

評価理由

2018 年 10 月 20 日に実施した名古屋港ポートアイランド附近のドレッジ調査によって生貝が数個体得られた。

本種は、内湾から湾口部にかけての潮下帯の砂泥底に棲息する。愛知県内では内湾域の潮下帯の環境は、上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで悪化している（愛知県環境調査センター, 2009）。特に名古屋市港区では、埋め立てや水質汚濁、ヘドロの堆積が著しい。このように本種の棲息環境は著しく悪化しており、名古屋市においては棲息環境も限局的である。

さらに、名古屋港ポートアイランド附近の複数地点でドレッジ調査を各地点 2 回ずつ実施したが、殻長 25mm 程度の小型個体のみを数個体発見できたに過ぎない。2023 年 6 月 9 日の名古屋港ポートアイランド周辺海域においてのソリネット調査では発見されなかった。

形態

殻は細長く、やや薄質。殻長は 80mm を超えるが、名古屋市で発見された個体はいずれも 25mm 程度の小型個体ばかりである。殻皮は黄土～栗色で強い光沢がある。殻頂は前方に位置し、後背縁は長く、角をもつ。後端は斜めに裁断状。内面の真珠光沢は強い。繭状の巣をつくる。



名古屋港ポートアイランド附近、2018 年 10 月 20 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：名古屋港ポートアイランド附近。

県内：三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖の潮下帯（愛知県環境調査センター, 2009）。

国内：北海道函館湾・能登半島以南、紀伊、九州（肥後・後藤，1993）。



生息地の環境／生態的特性

内湾から湾口部にかけての潮下帯の砂泥底に棲息する。生時には泥を被った繭状の巣に入っている（愛知県環境調査センター, 2009）。

現在の生息状況／減少の要因

愛知県下の状況（愛知県環境調査センター, 2009）と同様に、本種の棲息する潮下帯の環境は破壊されており、生息場所、棲息個体数ともに減少したと考えられる。

保全上の留意点

潮下帯の環境を保全する。内湾域の富栄養化の防止、潮下帯から連続する干潟などの潮間帯の環境保全が不可欠である。

特記事項

別名は、カラスノマクラ、ツキヨガラス。

引用文献

愛知県環境調査センター, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009―動物編―, 651 pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

肥後俊一・後藤芳央, 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録, 3+22+693+13+148 pp. エル貝類出版局, 八尾.

関連文献

福田　宏，2020. ツヤガラス. 岡山県野生動植物調査検討会（編）. 岡山県版レッドデータブック 2020 動物編. P. 537, 岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, 35:3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた, 26: 18-20.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏, 1996.日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

（川瀬基弘）

貝類　＜ドブシジミ目ドブシジミ科＞

ドブシジミ　*Sphaerium japonicum* (Westerlund, 1883)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

本種は、富栄養化した流れの緩やかな水路に多産するとされる（木村，1994）。しかし、2017 年の市内 61 地点に及ぶ淡水産貝類の一斉調査では、千種区名古屋大学敷地内、千種区東山動植物園ビオトープ、港区東茶屋の水田、守山区中志段味沢田の水田の 4 地点でしか発見されず、棲息地点数・個体数ともに少なかった（川瀬，2018a）。また、1950～60 年代に汁谷・竹越、守山瀬古、平田橋・神明、鶴舞公園に棲息していた記録がある（田中，1964）。鳳来寺山自然科学博物には東春日井郡守山町瀬古（現名古屋市）で昭和 13 年 5 月 27 日に採集された標本が所蔵されている（川瀬，2018b）。

愛知県（名古屋市を除く）では 1950 年代に 4 地点からの報告がある（田中，1959）。

形態

殻は小さく、殻長 5～10 mm 程度、薄質で膨らみ、白色～灰黄色の半透明。殻表には細かい成長線があり光沢をもつ。殻の前後はほぼ相同で、殻頂は中央に位置する。本種はツノイロドブシジミ属 *Sphaerium* ではなくドブシジミ属 *Musculium* の種であることが指摘されている（栗原，2011）。



鳳来寺山自然科学博物館所蔵、昭和 13 年 5 月 27 日採集、東春日井郡守山町瀬古（現名古屋市）

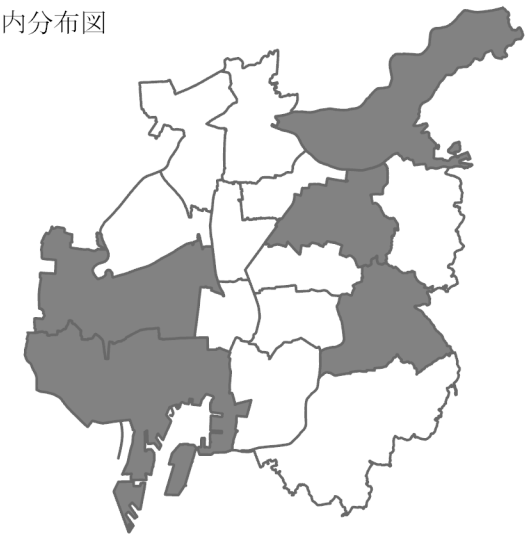
分布の概要

市内：上述した 3 区 4 地点のほか、中川区と天白区の各 1 地点からも発見されているが個体数は極めて少ない。

県内：豊田市、新城市、西尾市など県内各地。

国内：全国各地。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

流れの緩やかな水路や水田、ため池などの泥底に棲息するが、小型種であるため全国的に調査不充分な地域が多いと考えられる。

現在の生息状況／減少の要因

市内 6 地点で確認されているが、多くの地点では個体数が極めて少ない。水田においては農薬の影響があると考えられるが詳細な減少要因は不明である。もともと市内の生息地点と個体数が少なかった可能性もある。

保全上の留意点

水田の水質・底質の汚濁防止。

引用文献

川瀬基弘, 2018a. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘, 2018b. 滅びゆく愛知県の淡水産貝類－鳳来寺山自然科学博物館所蔵の淡水貝標本－. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 47: 41-46.

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, 33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

栗原康裕, 2011. 北海道東部におけるドブシジミ科貝類相. 日本貝類学会平成 23 年度福岡大会研究発表要旨集: 18-19.

田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録(謄写版). 14 pp.

田中守彦, 1964. 名古屋市産淡水貝類の研究(謄写版). 20 pp.

関連文献

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.

川瀬基弘・市原　俊・寺本匡寛・鵜飼　普, 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.

紀平　肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159 pp. ピーシーズ, 東京.

増田　修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目マルスダレガイ科＞

イヨスダレガイ　*Paratapes undulatus* (Born, 1778)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	－

評価理由

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県でも潮下帯の環境は著しく悪化しており、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は三河湾や伊勢湾で操業する底引き網漁船（トリガイ桁網）によって近年でも生貝が採集されるが、個体数は少ない。近年三河湾湾口部、知多半島伊勢湾側をドレッジにより調査したが、生貝は採集されなかった（木村，2000）。2008 年名古屋港沖合で生貝が採集された。西條ほか（2008）に関わるセントレア中部国際空港周辺海域調査において、本種のまとまった個体群を 2012 年頃まで潜水調査で確認している。

形態

殻長約 4cm で殻は前後に長い楕円形。殻はやや薄く、膨らみは弱い。殻表には光沢があり、殻頂部以外には赤紫褐色の放射状の網目模様がある。



名古屋港ポートアイランド周辺（ソリネット採集）
2023 年 6 月 9 日採集、撮影：川瀬基弘

分布の概要

市内：2023 年の名古屋港ポートアイランド周辺でのソリネット調査では、比較的多数の生貝が採集された（川瀬ほか，2024）。

県内：名古屋港沖合のほか、西條ほか（2008）に関わるセントレア中部国際空港周辺海域調査において、本種のまとまった個体群を 2012 年頃まで潜水調査で確認している。

国内：房総半島・能登半島以南～琉球列島。

世界：太平洋、インド洋。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したように潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。現在でも生貝は採集されているが、名古屋港沖合をのぞいて個体数は少ない。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

引用文献

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7): 38-48.

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋港ポートアイランド周辺海域においてソリネット調査で得られた貝類．なごやの生物多様性，11: 85-91.

木村昭一，2000．伊勢湾･三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26): 18-20.

西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008．中部国際空港島建設による水質，底質，底生生物群集の劣化．海の研究，17(4): 281-295.

関連文献

西條八束・八木明彦・梅村麻希・寺井久慈・川瀬基弘・松川康夫・佐々木克之，2004．中部空港島周辺における底質・底生動物を中心とした水域環境変化に関する研究．プロ・ナトゥーラ・ファンド第 13 期助成成果報告書，3-16.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜アマオブネ目アマオブネ科＞

ヒロクチカノコ　*Neripteron* sp.

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に生息する。愛知県ではヨシ原湿地という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村，1999）。和田ほか（1996）では、絶滅寸前（日本本土）とランクされている。名古屋市では、庄内川河口域にまとまった個体群の生息が確認されているが、その生息範囲は狭い（木村，2001；川瀬ほか，2009）。

形態

殻径約2cmの半球型平巻きで螺塔が現れない。殻表は平滑で褐色。殻口は広がる。蓋は半円形で、石灰質である。



藤前干潟、2005年4月24日、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：藤前干潟の干潟上部の転石地、庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内に健全な個体群が分布している。2023年には天白川河口と港区鴨浦地区でも確認した。

県内：庄内川河口、矢作川河口域。

国内：東京湾（絶滅）、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海、琉球列島に分布する。

世界：中国大陸南部から東南アジア、オーストラリア北部にかけて分布するが、日本本土産と同一種かどうかは注意を要する（水産資源保護協会，1996）。



生息地の環境／生態的特性

上述したようにヨシ原湿地周辺の塩沼やアシ原内の水たまりなど直接河川水の当らない淀んだ泥干潟を好む。泥上にも生息するが、朽ち木や転石があればその下面に集まる。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

保全上の留意点

アシ原湿地の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ417-14

登録標本の採集地：名古屋市港区藤前干潟

分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

引用文献

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.
木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.
木村昭一，2001．藤前干潟で採集されたワカウラツボ．かきつばた，(27): 14-16.
水産資源保護協会，1996．軟体動物．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（Ⅲ），90pp.
和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋市大江川感潮域に棲息する貝類．なごやの生物多様性，11: 105-113.
川瀬基弘･横井敦史, 2024. 名古屋市港区野跡町･潮凪町（鴨浦地区）の港湾で発見されたウミニナ Batillaria multiformis (Lischke, 1869）なごやの生物多様性，11: 123-127.
木村昭一，2012．矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相．三河生物，三河生物(西三河野生生物研究会)，3: 1-8, 2pls.

（川瀬基弘）

貝類　＜ヤマタニシ目ヤマタニシ科＞

ヤマタニシ　*Cyclophorus herklotsi* E. von Martens, 1861

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

本種は、山地性種であり（川瀬ほか，2012）、山地の落葉の下や小石の下などに生息する。2013 年 7 月 30 日、守山区竜泉寺一丁目の雑木林（庄内川左岸）で名古屋市から初めて本種が発見された（川瀬・村瀬，2014）。個体数も非常に少ない。

形態

殻高 10mm、殻径 13.5mm。濃い茶褐色で光沢があり、螺塔は低平な円錐形。螺管は急に太くなる。大層の周縁は円い。殻口は広い円形、その口縁はやや厚く、堅く、ひろがり反転する。臍孔は広大で、前面から各螺層の一部がみられる。蓋は多旋型の革質で、円く厚く、核は中央にある。軟体部は不規則な黒い縞模様があり、触覚は漆黒色。



守山区竜泉寺、2022 年 10 月 10 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：守山区竜泉寺一丁目。
県内：瀬戸市、田原市、三河地方の山地。
国内：関東地方以西日本各地。
世界：朝鮮半島南部。

生息地の環境／生態的特性

山地の落葉の下や小石の下などに生息する。湿度の高いこのような環境に棲息するが、やや乾燥しがちな場所からも発見されている。

現在の生息状況／減少の要因

志段味地区や吉根地区など守山区は、都市基盤の整備が遅く農地と山林が広がっていたが、2000 年頃から宅地化が急速に進み自然が激減した。これにより生息環境が急激に減少した。

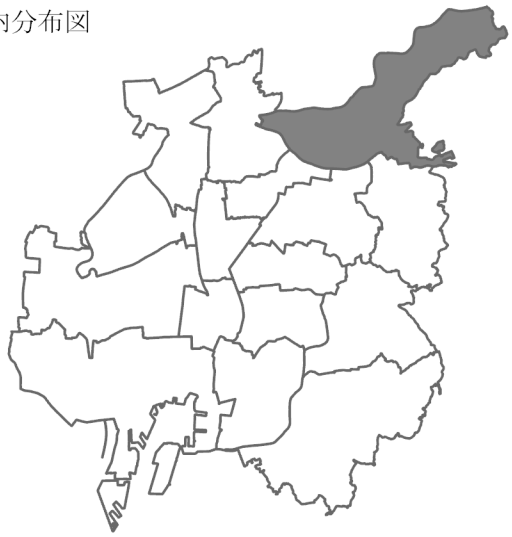
保全上の留意点

現在本種が生息している環境を改変しないように保全することが大切である。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ437-14、採集地：守山区竜泉寺
DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

市内分布図



引用文献

川瀬基弘・村瀬文好，2014．名古屋市初記録のヤマタニシとコベソマイマイ．かきつばた，(39):51.
川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則，2012．岐阜市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(6):19-36.

関連文献

東　正雄，1982．原色日本陸産貝類図鑑．343 pp，保育社，大阪府．
川瀬基弘，2013．なごやで探そう！カタツムリ．29 pp，名古屋生物多様性保全活動協議会．
川瀬基弘，2013．Ⅱ－7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成 24 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業），pp. 178-213，なごや生物多様性保全活動協議会．
川瀬基弘，2014．新城市の軟体動物．加藤貞亨ほか(編)．新城市の自然誌－昆虫・動物編－．pp. 1-24．新城市立鳳来寺山自然科学博物館．
川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.
川瀬基弘・西尾和久・市原　俊・村瀬文好，2013．名古屋市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(7): 12-17.

（川瀬基弘）

貝類　＜ヤマタニシ目ヤマタニシ科＞

ミジンヤマタニシ　*Nakadaella micron* (Pilsbry, 1900)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

山地性種であり（川瀬ほか，2012b）、緩やかな谷川沿いの落葉の下に生息する。市内の記録は熱田神宮のみであったが（守谷，2004：川瀬ほか，2012a）、2012 年に行われた市内の陸貝一斉調査で、名東区明徳公園のリター層から 1 個体のみが発見された（川瀬, 2013ab）。

形態

殻は微小で、殻高 1.2mm、殻径 1.8mm、約 4 層。白く半透明で、殻表は滑らかな光沢がある。螺塔は低く、各層はよくふくらみ円い。縫合は深い。殻口は全縁で、ややうすい。臍孔は広く深い。蓋は多旋型で、円くてうすく、黄色である。



愛知県西尾市三ヶ根山、2021 年 3 月 17 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：熱田区熱田神宮の本殿東方の窪地斜面の落葉下、名東区明徳公園のリター層。なごや生きもの一斉調査 2022 では発見されなかった。

県内：石巻山、嵩山、鳳来寺山麓、三河各地。

国内：北海道以南、日本全国。

世界：朝鮮、台湾（高雄州旗山）。



生息地の環境／生態的特性

山地性種であるため、主に自然度の高い山林やそれに準ずる環境に棲息している。リター層から発見されることが多い。

現在の生息状況／減少の要因

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

保全上の留意点

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

引用文献

川瀬基弘，2013a．なごやで探そう！カタツムリ．29 pp，名古屋生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘，2013b．Ⅱ－7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成 24 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業），pp.178-213，なごや生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘・守谷茂樹・石黒鐐三，2012a．（8）陸産貝類．熱田神宮の生物調査と外来生物対策．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成 23 年度 生物多様性保全推進支援事業），pp.136-140，なごや生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原　俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則，2012b．岐阜市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(6): 19-36.

守谷茂樹，2004．名古屋市の陸貝の現況 補足その 1 (熱田神宮)．かきつばた，(30): 23-26.

関連文献

川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.

川瀬基弘・村瀬文好・高柳茉友子・石黒鐐三，2014．9 陸産貝類調査［Ⅱ－4 熱田神宮の生物調査と外来生物対策］．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成 25 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業），134-143．なごや生物多様性保全活動協議会．

（川瀬基弘）

貝類　＜タニシ目タニシ科＞

オオタニシ　*Heterogen japonica* (Martens, 1861)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	国リスト
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

2009～2012 年に市内 15 のため池（守山区竜巻池／雨池／見返ヶ池、名東区明徳池、天白区大根池、千種区猫ヶ洞池／東山新池）で池干しや鋤簾により調査が行われたが、オオタニシが発見されたのは守山区竜巻池と天白区大根池の 2 つのため池だけであった。その他市内の水田を幅広く調査したが本種の確認は出来なかった。2017 年の一斉調査で南区曽池から発見された。調査のできていないため池も残されているが市内での生息状況は危機的である。

形態

殻は高い円錐形でヒメタニシに似るがそれより大型で、殻底に比較的明瞭な角があるものが多い。また、マルタニシよりは体層の周縁が角張る。殻高は 50～60 mm 程度で、環境条件がよいと 80 mm 前後まで成長する。



守山区竜巻池、2012 年 10 月 24 日、市原 俊　撮影

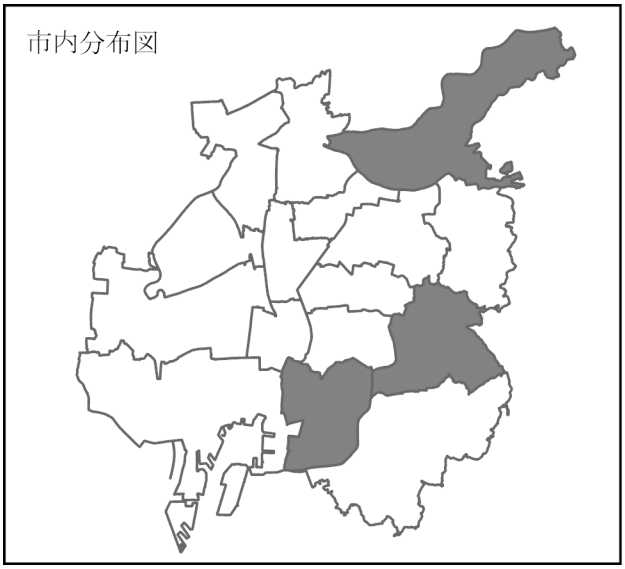
分布の概要

市内：守山区竜巻池、天白区大根池（川瀬・野呂，2013）、南区呼続公園曽池（川瀬，2018）。

県内：豊田市（川瀬ほか，2011）や新城市（川瀬，2014）などのほか、平野部の水田や用水路から丘陵地のため池などに広く分布する。

国内：北海道南部から九州、沖縄諸島。

世界：朝鮮半島。



生息地の環境／生態的特性

本種は、平野部の水田や用水路から丘陵地のため池などに広く分布し、かつては食用にするほど多産したが、近年では水質汚濁、農薬散布、用水路の改修などのため生息地、生息数とも著しく減少した。

現在の生息状況／減少の要因

前述の通り、市内の確実な生息地は前述の 3 か所のみである。

水質汚濁、農薬散布、用水路の改修などの影響の少ないため池は、市内にはほとんど存在しない。

保全上の留意点

用水路の改修、ため池の護岸工事、農薬散布には注意が必要である。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ419-14，GBJ420-14.

登録標本の採集地：天白公園大根池

DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

引用文献

川瀬基弘，2014．新城市の軟体動物．加藤貞亨ほか(編)．新城市の自然誌－昆虫・動物編－．pp. 1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館．

川瀬基弘，2018．なごや生きもの一斉調査～淡水貝編～．平成 29 年度なごや生物多様性保全活動協議会活動報告書．pp. 22-25. なごや生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘・早瀬善正・市原　俊，2011．豊田市に生息する淡水産貝類．陸の水，48：9-16.

川瀬基弘・野呂達哉，2013．名古屋市におけるヌマガイとオオタニシの生息状況．かきつばた，(38)：56.

関連文献

川瀬基弘・市原　俊・寺本匡寛・鵜飼　普，2018．名古屋市の淡水産貝類．なごやの生物多様性，5: 33-45.

木村昭一，1994．東海地方の淡水貝類相．研究彙報，(33): 14-34．全国高等学校水産教育研究会．

田中守彦，1959．愛知県産淡水産貝類目録，14pp，（謄写）．

田中守彦，1964．名古屋市産淡水貝類の研究，20pp．（謄写）．

（川瀬基弘）

貝類　＜オニノツノガイ目（タケノコカニモリ目）キバウミニナ科＞

フトヘナタリ　*Cerithidea moerchii* (A. Adams, 1855)

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に生息し、特にヨシ原群落内に高密度で生息する。愛知県ではヨシ原湿地という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村，1999）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。庄内川河口干潟に健全な個体群が残っているが（川瀬ほか，2009）、分布範囲は限られている。

形態

殻高約 4cm、殻径約 1.5cm の円筒形で殻頂部分は成長にともなって欠落する。殻表は粗い布目状で殻口は反転して肥厚する。蓋は円形で革質。



名古屋市港区野跡町・潮凪町（鴨浦地区）の港湾
2023 年 8 月 31 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：庄内川河口干潟（川瀬ほか，2009）、港区鴨浦地区（川瀬・横井，2024）。

県内：上記のほか、矢作川河口、矢作古川河口、汐川干潟、内海、知多奥田など（鈴木ほか，2006：木村・木村，1999）。特に三河湾汐川干潟では大きな個体群が残っている。

国内：東北地方～九州、南西諸島。

世界：朝鮮半島、中国大陸、インド・太平洋。



生息地の環境／生態的特性

上述したようにヨシ原湿地、特にヨシ原群落内に多く生息する。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

保全上の留意点

ヨシ原湿地の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ416-14

登録標本の採集地：名古屋市庄内川河口

引用文献

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19):11-20.

川瀬基弘・横井敦史，2024．名古屋市港区野跡町・潮凪町（鴨浦地区）の港湾で発見されたウミニナ Batillaria multiformis（Lischke，1869）なごやの生物多様性，11:123-127.

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54:44-56.

鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006．伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化．名古屋大学博物館報告，(22):31-64.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

木村昭一，2004．名古屋市より採集されたフトヘナタリの生貝．かきつばた，(30):34-35.

木村昭一・福田　宏，2012．フトヘナタリ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 29，東海大学出版会，神奈川.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘，2012．矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録．三河生物(西三河野生生物研究会)，3: 9-49.

（川瀬基弘）

貝類　＜クビキレガイ目ワカウラツボ科＞

ワカウラツボ　*Wakauraia sakaguchii* (Kuroda & Habe, 1954)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺の転石や朽ち木の下に生息する。愛知県ではヨシ原湿地という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村，1989：木村・木村，1999）。和田ほか（1996）では、絶滅寸前とランクされている。市内では藤前干潟に健全な個体群が残っている（木村，2001）。

形態

殻は殻長約 5mm と小型で、長卵形。臍孔はなく、蓋は革質で薄い。近似種のカワグチツボとは臍孔がない点、殻が厚い点などで区別される。



福岡県、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：藤前干潟の干潟より上部の転石地の深く埋もれた転石の下面に生息している（木村，2001：木村，2010）。2013 年にも確認した。

県内：矢作川（木村，2012）、佐奈川、汐川。

国内：三河湾～九州に分布する。模式産地の和歌山県和歌浦では、環境破壊のため採集されず、有明海から再発見されるまで長らく幻の貝であった（木村，1987）。

世界：朝鮮半島南部。



生息地の環境／生態的特性

愛知県下では、上述したようなヨシ原湿地周辺の10cm以上深く埋もれた石や朽ち木の下面に付着している。稀にヨシ原群落内の小さな水たまりにたまった朽ち木や落ち葉に付着している。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

保全上の留意点

ヨシ原湿地の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

特記事項

泥に埋もれた転石や流木など漂着物の下面の貧酸素的環境を好むが、時に干潟軟泥の表層を匍匐していることもある。

引用文献

木村昭一，1987．ワカウラツボを有明海にて採集．南紀生物，29(2)：95.

木村昭一，1989．ワカウラツボを汐川干潟（三河湾）にて採集．南紀生物，31(2): 130-131.

木村昭一，2001．藤前干潟で採集されたワカウラツボ．かきつばた，(27): 14-16.

木村昭一，2010．コラム：庄内川河口のヨシ原湿地の貝類とその保全，102-103．生き物から見た名古屋の自然 なごやの環境指標種 100（改訂版），三菱 UFJ 環境財団，東京．

木村昭一，2012．矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相．三河生物，三河生物(西三河野生生物研究会)，3: 1-8, 2pls.

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

関連文献

日本ベントス学会（編），2012．干潟の絶滅危惧動物図鑑－海岸ベントスのレッドデータブック，284pp．東海大学出版会，神奈川．

（川瀬基弘）

貝類　＜イトカケガイ目イトカケガイ科＞

クレハガイ　*Epitonium latifasciatum* (G. B. Sowerby II, 1874)

評価区分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾奥の干潟から潮下帯砂泥底に棲息する。愛知県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）、日間賀島南沖などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996：松岡ほか，1999）。

形態

殻高約 20mm の塔型で殻は淡褐色で体層に 3 本、各層 2 本の濃褐色帯をめぐらす。縦肋は白く細い。臍孔はやや広く開く。蓋は濃褐色から黒色で革質。



愛知県蒲郡市、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深 2～6 m の砂泥底から新鮮な死殻が 1 個体のみ採集された。

県内：豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）、佐久島、日間賀島南沖などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996：松岡ほか，1999：早瀬・木村, 2020）。

国内：房総半島・佐渡島～九州。

世界および国内：西太平洋。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したように現在でも生貝が少数採集されているが、生息場所、生息数とも明らかに減少している。

保全上の留意点

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種はアマモ場周辺で生息が確認されているので、同様に保全することが必要である。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

引用文献

早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33–79.

川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7): 38-48.

木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(9): 15-24.

関連文献

愛知県環境調査センター，2020. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020―動物編―. 愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋. 768 pp.

早瀬善正・木村昭一，2020. 佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相. ちりぼたん， 50(1): 33-79.

木村昭一，2012. クレハガイ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑. p. 62, 東海大学出版会，神奈川.

佐藤達也，2023. 鳥羽市 海のレッドデータブック 2023. 297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜イトカケガイ目イトカケガイ科＞

セキモリ　*Epitonium robillardi* (G. B. Sowerby III, 1894)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾奥の潮下帯砂泥底にすむ。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996：松岡ほか，1999）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻高約 1.5cm の低い塔型で殻は灰白色で螺層に濃褐色の色帯が 2 本ある。殻表は不規則にやや強い縦肋がある。臍孔は広く開く。蓋は濃褐色から黒色で革質。



西尾市佐久島（筒島）、2017 年 5 月 10 日
採集、撮影：川瀬基弘

分布の概要

市内：2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深 2〜6 m の砂泥底から生貝が 1 個体、死殻が少数ではあるが採集された。

県内：豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996：松岡ほか，1999）。

国内：房総半島・佐渡島〜九州。

世界および国内：インド・西太平洋。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したように現在でも生貝が少数採集されているが、生息場所、生息数とも明らかに減少している。

保全上の留意点

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種はアマモ場周辺で生息が確認されており、同様に保全することが必要である。

特記事項

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中，1998）、名古屋港浚渫地の半化石（河合，2000）や愛知県田原市高松の中部更新統（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

引用文献

蜂矢喜一郎・田中利雄，1998．名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石．化石の友，(45): 20-25.
河合秀高，2000．名古屋港浚渫地（金城埠頭）産貝類化石(3)巻貝(その 2)．化石の友，(47): 46-49.
川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)〜鵜飼修司コレクションの貝類化石〜．瀬木学園紀要，(7): 38-48.
木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会．
松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999．豊川下流域の貝類相．豊橋市自然史博物館研究報告，(9): 15-24.
和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

早瀬善正・木村昭一，2020．佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相．ちりぼたん，　50(1): 33-79.
木村昭一，2012．セキモリ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 63，東海大学出版会，神奈川.
佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

（川瀬基弘）

貝類　＜エゾバイ目オリイレヨウバイ科＞

ムシロガイ　*Nassarius livescens* (R. A. Philippi, 1849)

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾からやや外洋にかけての干潟から潮下帯砂泥底に棲む。本県では内湾域の干潟から潮下帯の環境は急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種もかつては三河湾から伊勢湾にかけて普通に生息していた（愛知県科学教育センター，1967）が、近年急速に生息場所、生息数共に激減し、生貝が全く採集されていなかった（木村，1996：木村, 2000）。2007 年に渥美半島先端部伊良湖岬周辺のアマモ場で健全な個体群が確認された。しかし、生息範囲は狭く予断を許さない。

形態

殻高約 1.5cm の卵形の貝で、殻は厚く、太く低い縦肋があるが、細い螺溝で横切られ、石畳状になる。殻口は丸く、内唇側に白い滑層が発達する。



福井県敦賀市、市原 俊　撮影

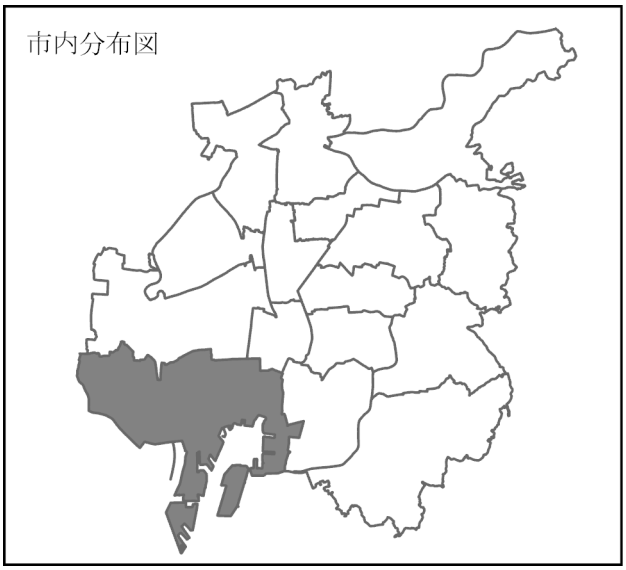
分布の概要

市内：2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深 2～6m の砂泥底から幼貝ではあるが生貝が数個体、死殻が少数ではあるが採集された。2018 年のドレッジ調や 2023 年のソリネット調査では、生貝・死殻ともに確認できなかった。

県内：上述したように県内の内湾域では、古い死殻は比較的多く見られるが、生貝は限られた海域のみで採集される。

国内：大槌湾～九州。

世界：朝鮮半島、中国大陸、フィリピン、熱帯インド・西太平洋。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような生息環境悪化のため減少していると考えられる。しかし、近年急激に減少し生貝が見られなくなった理由については不明。本種と生息場所をほぼ同じくするアラムシロガイは内湾奥から湾口部の干潟から潮下帯にかけて現在もきわめて多産する。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．
川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要, (7):38-48.
木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35):3-19．全国高等学校水産教育研究会．
木村昭一，2000．伊勢湾･三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26):18-20.

関連文献

福田　宏，2012．ムシロガイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 68，東海大学出版会，神奈川．
奥谷喬司（編），2017．日本近海産貝類図鑑［第二版］．1375 pp. 東海大学出版会，平塚．
佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽．
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子，2009．干潟生物調査ガイドブック～東日本編～．120pp，日本国際湿地保全連合，東京．

（川瀬基弘）

貝類　＜トウガタガイ目トウガタガイ科＞

ヌカルミクチキレ（未記載種）　"*Sayella*" sp.

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は和田ほか（1996）で和名だけが提唱された未記載種である。内湾奥の泥干潟にヨコイトカケギリ（トウガタガイ科）やカワグチツボ、エドガワミズゴマツボと共に生息する。三河湾、伊勢湾の干潟から潮下帯に広く分布するヨコイトカケギリと比べて、本種は生息範囲が狭く、県内では現在汐川干潟の奥部の泥干潟でのみ生息が確認されているにすぎない（藤岡・木村, 2000）。本種は未記載種であるが、本県における前述のような生息環境は比較的調査が行われたので、生息状況は明らかになってきている。市内からも生息が確認された。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻長約 4mm の微小な細いさなぎ型の貝。殻は黄褐色で成長脈は弱く、光沢が強い。殻口軸唇には弱い襞が 1 本ある。肉眼で見るとカワグチツボとよく似ているので混同されやすい。



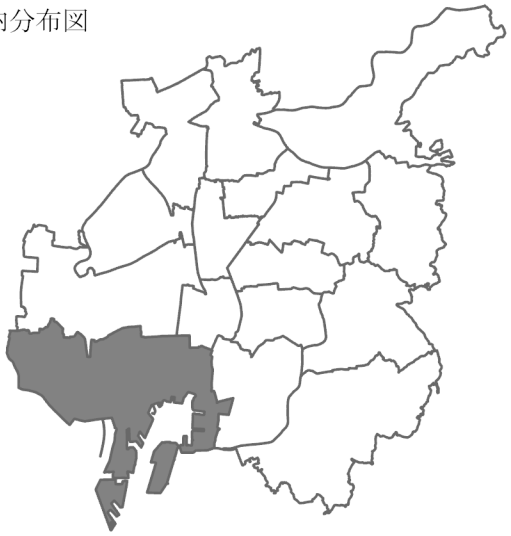
港区藤前干潟、2013 年 6 月 23 日、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：庄内川河口域より少数ながら生きた個体が採集された。

県内：上述したように生息場所は限られていて、生息が確認されたのは汐川干潟と庄内川河口域のみである。汐川干潟には、健全な個体群の生息が確認されている。死殻の採集記録があるのは、美浜町布土（河合，1998）のみである。

世界および国内：日本でのみ発見されている。三河湾、伊勢湾、瀬戸内海に分布する。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような内湾奥部の干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。

保全上の留意点

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

引用文献

藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10): 31-39.

河合秀高，1998．内湾性稀少種サザナミツボの新産地．かきつばた，(24): 16-17.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

福田　宏，2020．ヌカルミクチキレ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 464，岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

福田　宏・久保弘文，2012．ヌカルミクチキレ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 88，東海大学出版会，神奈川.

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典，2013．干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～．269pp，日本国際湿地保全連合，東京.

（川瀬基弘）

貝類　＜トウガタガイ目トウガタガイ科＞

カキウラクチキレモドキ　*Brachystomia bipyramidata* (Nomura, 1936)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	－

評価理由

本種はマガキの体液を吸う外部寄生生活を行っており（三浦，2008）、マガキのカキ礁中に見られる。しかし大規模なマガキ群集が存在しても、本種はマガキほど水質汚濁に対する抵抗性は強くないため、水質汚濁の進んだカキ礁では棲息が困難である。かつて港区藤前干潟のカキ礁ではマガキに寄生している本種を見つけることが出来たが、近年は棲息を確認できない。2013 年春の調査では、藤前干潟で本種を見つけることが出来ず、導流堤先端付近の庄内川河口右岸側のカキ礁からわずかな個体を発見した。市内では個体数が確実に減少している。

形態

殻長約 4mm。殻はやや薄質、乳白色で黄褐色の殻皮を被る。成長線は粗く、湾曲する。軸唇には弱い襞が 1 個ある。外唇縁後端が浅く湾入する。



庄内川河口、2013 年 4 月 27 日、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：導流堤先端付近の庄内川河口右岸のカキ礁から生貝を 2 個体のみ発見した。

県内：蒲郡市三谷町（木村，2004）、西尾市幡豆町（早瀬ほか，2011），南知多町河和（愛知県環境調査センター，2020）。

国内：松島湾、三河湾、瀬戸内海、有明海、富岡湾など（和田ほか，1996）、東北～九州の潮間帯岩礁域や干潟。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

本種の属するトウガタガイ科の各種は、軟体動物、環形動物、星口動物の体液を吸引する自由生活型の外部寄生種であり、本種は潮間帯の干潟や岩礁のマガキ *Crassostrea gigas* の体液を吸って生活している。

現在の生息状況／減少の要因

藤前干潟、庄内川河口の底泥は強熱減量の値が高く（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少が要因である。

保全上の留意点

内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

引用文献

愛知県環境調査センター，2020．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020―動物編―．愛知県環境局環境製作部自然環境課，名古屋．768 pp.

早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川　尚・松浦弘行・石川智士，2011．愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相．東海大学海洋研究所研究報告，(32): 11-33.

木村昭一，2004．蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相．かきつばた，(30): 14-20.

三浦知之，2008．干潟の生き物図鑑．197pp，南方新社，鹿児島．

Umemura, M. and Yagi, A., 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. Verhandlungen IVL, 29(3)：1228-1234.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

（川瀬基弘）

貝類　＜モノアラガイ目ヒラマキガイ科＞

ヒメヒラマキミズマイマイ　*Gyraulus* sp.

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	情報不足
全　　国 2020	絶滅危惧 IB 類

評価理由

主に止水域の水生植物に付着して生活しており（増田・内山, 2004）、市内では北区、守山区、千種区の限られた水田のみに棲息するが、市内のため池では発見されていない。市内の棲息地点は上記 3 区の 4 地点の水田のみであり、同科のヒラマキミズマイマイに比べて棲息地点が極めて少ない。

形態

殻は扁平な平巻き形で、殻径 2mm 程度。本種は同じサイズのヒラマキミズマイマイに比べると、螺管が細くて巻き数が多く殻高が低いことで区別できるが、これらの特徴は相対的で明確に区別するのが困難な場合もある。Mori（1938）の記載では、本種はヒラマキミズマイマイより小さく、周縁部が角張らない（キール状にならない）ことで容易に区別できるとされている。

実際には、ヒメヒラマキミズマイマイの殻径は 2 ㎜前後の個体が多く、ヒラマキミズマイマイは 3.5 ～6 ㎜程で、殻の大きさによって概ね区別できた。前種ヒラマキミズマイマイと比較して、ヒメヒラマキミズマイマイは COI 領域の変異が少ないことが報告されている（川瀬ほか, 2016）。



北区喜惣治新田、2013 年 7 月 28 日、市原 俊

分布の概要

市内：北区、守山区、千種区。
県内：岡崎市、豊田市、西尾市。
国内：本州～南西諸島（齊藤ほか, 2017）。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

主に止水域の水生植物に付着して生活する。

現在の生息状況／減少の要因

水田の水質汚濁やため池に棲息する水生植物の減少が影響していると考えられる。

保全上の留意点

水田の水質・底質の汚濁防止。

特記事項

本種の学名については、Mori (1938: 289–290, pl. 14, fig. 7) による Anisus (Gyraulus) pulcher のホロタイプ（京都大学総合博物館所蔵）がヒラマキミズマイマイとみなされるものであったことが報告されており（齊藤ほか, 2017）、Gyraulus sp. とした。

引用文献

川瀬基弘・松原美恵子・森山昭彦, 2016. 愛知県西三河地域から採集されたヒラマキガイ属 3 種: 形態と遺伝子情報による解析. 陸の水, 74:43-48.

増田　修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.

Mori, S., 1938. Classification of the Japanese Planorbidae. Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B, 14(2): 279-300, pls. 12-18.

齊藤　匠・平野尚浩・内田翔太・山崎大志, 2017. 石垣島および西表島におけるヒメヒラマキミズマイマイ（腹足綱：ヒラマキガイ科）の発見. Molluscan Diversity, 5(1-2): 79-82.

関連文献

川瀬基弘, 2018. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書. 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘・市原　俊・寺本匡寛・鵜飼　普, 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.

川瀬基弘・寺本匡寛, 2018. なごや生きもの一斉調査～淡水貝編～. 平成 29 年度なごや生物多様性保全活動協議会活動報告書. pp. 22-25, なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

（川瀬基弘）

貝類　＜モノアラガイ目ヒラマキガイ科＞

ヒラマキガイモドキ　*Polypylis hemisphaerula* (W. H. Benson, 1842)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は、ヒラマキミズマイマイやヒメヒラマキミズマイマイとともに愛知県内各地の水田に棲息しているが、市内のこれらの微小淡水貝は詳細な調査がなされていなかった. 今回の調査で市内の主要な水田を概ね調査したが、本種が発見されたのは守山区太田井の水田のみであった．年による消長が著しく、今後新たに別の場所で発見されたり個体数が増加したりする可能性もあるが、現時点で生息地、個体数とも限られている。

形態

殻径 5mm 程度の平巻き形。体層の底面は平らで、臍孔は急激に落ち込み狭く深い陥没となる。螺塔は緩やかな弧を描き、殻頂部は浅く陥没する。螺管下面からは畝状の内彫刻が数本透視できる。螺管内の反対側にも同様な内突起がある。



守山区中志段味沢田、2017 年 9 月 3 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：守山区太田井の水田。

県内：美浜町、日進市、岡崎市、西尾市、豊田市、新城市、田原市など県内各地（湖沼や水田の水草に付着して生活する)。

国内：北海道以南、本州、四国、九州。

世界：中国、朝鮮、台湾。



生息地の環境／生態的特性

湖沼の水草や水田の稲など水棲植物に付着して生活する。停滞性水域に棲息するため、流れのある河川や水路にはほとんど棲息していない。

現在の生息状況／減少の要因

例えば、岐阜市内では水質の綺麗な水田から汚濁の進んだ市街地の水田まで幅広く棲息しているが（川瀬ほか，2012)、極端に汚濁の進んだ水田ではやや個体数が少ない傾向にあった。過去の市内の情報がないため、もともと生息地と個体数少なかった可能性も否定できないが、市内の水田は水質汚濁が進んでおり、本種が生息できる環境は確実に減少している。

保全上の留意点

水質汚濁や冬季乾田化の防止。ため池では水草など、本種が付着できる水生植物が豊富な環境作りをする。

特記事項

ヒラマキガイ科の巻貝は、外来種が海外の水草に付着して観賞魚とともに輸入されており、それらが市内のため池などに帰化している可能性が高く、今後は水田などでも同科の外来種が発見される機会が増えると考えられる。

引用文献

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原　俊・森山昭彦・家山博史，2012．岐阜市に生息する淡水産貝類．陸の水，54: 33-42.

関連文献

川瀬基弘, 2018. なごや生きもの一斉調査･2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書. 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘・早瀬善正・市原　俊，2011．豊田市に生息する淡水産貝類．陸の水，48: 9-16.

川瀬基弘・市原　俊・寺本匡寛・鵜飼　普，2018．名古屋市の淡水産貝類．なごやの生物多様性，5: 33-45.

Mori, S.，1938．Classification of the Japanese Planorbidae. Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Ser.B, 14(2) : 279-300, pls.12-18.

（川瀬基弘）

貝類　＜アシヒダナメクジ目ホソアシヒダナメクジ科＞

イボイボナメクジ　*Granulilimax fuscicornis* Minato, 1989

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

近年の温暖化傾向や開発等のための森林伐採に伴う林床の乾燥化など、森林環境の悪化の影響を受けやすい種である。生息個体数は少なく、1 日調査を行っても確認できない場合が多い。愛知県には複数種が存在すると思われるが、発見自体が稀なため、分類学的研究が遅れている。分類学上の重要性も高く、貴重な種群である。将来的な絶滅の危険性を考慮すべき種である（早瀬，2020）。名古屋市では，2022 年 10 月なごや生きもの一斉調査 2022（陸貝編）において，守山区東谷山の雑木林で 2 個体発見されたのが市内初記録であった（川瀬ほか，2024）。

形態

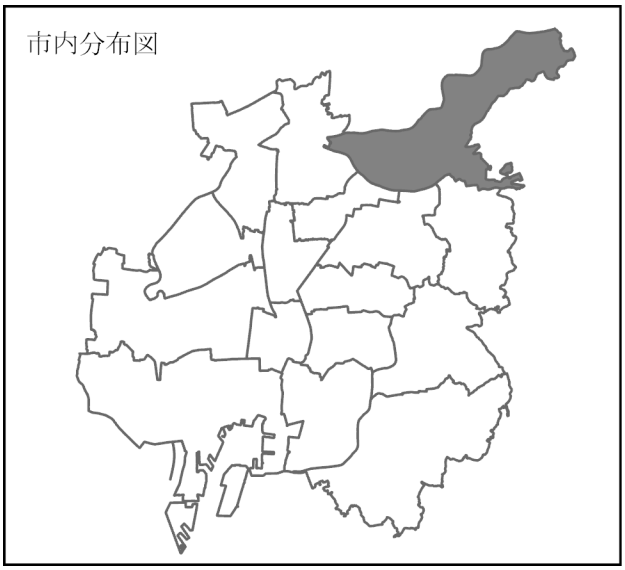
色彩は淡黄褐色で、黒褐色の縦線が前後両端で繋がり、細長い 1 個のリング状紋となる。体表背面に細密な顆粒が多数見られる。背面の正中には不鮮明なぼやけた縦帯が見られる。触角は黒い。



守山区東谷山，2022 年 10 月 10 日
採集：山田律子、撮影：川瀬基弘

分布の概要

市内：守山区東谷山。
県内：瀬戸市、豊田市（川瀬，2018）、新城市、西尾市、豊橋市、田原市など。
国内：本州～琉球列島。
世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

陸産貝類が多数生息する良好な森林環境に生息する。本種は陸貝のみを捕食する肉食性種である（早瀬，2002）。

現在の生息状況／減少の要因

近年の乾燥化、棲息環境の悪化、捕食対象陸貝の減少傾向が、減少の要因と考えられる。

保全上の留意点

生息地域の森林環境の維持と保全が重要である。

特記事項

瀬戸市、田原市、新城市で発見されている個体に比べて、本種はやや小さく伸長時の体長は 10 mm 弱であり、体色の褐色が多少濃い点で異なっている。このため未記載種の可能性も考えられる。

引用文献

早瀬善正, 2002. ホソアシヒダナメクジ科 2 種の捕食行動. かきつばた，28: 6-10.
早瀬善正，2020．イボイボナメクジ．愛知県環境調査センター(編). 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020－動物編－．p. 642, 愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋.
川瀬基弘，2018．第 3 節 身近で不思議な貝類．新修 豊田市史 23 別編 自然，p. 404-423. 愛知県豊田市.
川瀬基弘・山田律子・大矢美紀・今尾由美子，2024．名古屋で発見された記録すべき陸産貝類．なごやの生物多様性，11: 115-121.

関連文献

早瀬善正，2008．イボイボナメクジの卵と孵化の記録，かきつばた, (33): 47–48.
川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.
湊　宏，1989．日本産ナメクジ科の新属新種，イボイボナメクジの記載, Venus, 48(4): 255–258.

（川瀬基弘）

貝類　＜ネジレガイ目タワラガイ科＞

タワラガイ　*Sinoennea iwakawa* (Pilsbry, 1900)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

2012 年に、市民参加型（参加者 456 名）による名古屋市陸貝一斉調査（市内全 16 区 33 地点）が開催され、その際市内から初めて発見された種である（川瀬，2013a, b）。山地性種であるため（川瀬ほか，2012）、主に自然度の高い山林、雑木林やそれに準ずる環境に棲息している。発見された細根公園(緑区)は、一般公開される比較的最近まで手つかずの状態の自然が残っていたため本種が生き残っていたと考えられる。個体数は少なく、現時点で市内からの記録は細根公園のみであるため、今後の環境改変によって個体数は減少していく可能性が高い。

形態

殻高 4mm、殻径 1.5mm。殻は昔の米俵に似た白色蛹形で微小。体層に続く 3 層の殻幅はほとんど同じ。各螺層には多数の板状の強い縦肋がある 。殻口外唇には 2 個、軸唇上にも 1 個の結節状突起がある。軟体部は灰白色。





左：名古屋市緑区細根公園、2012 年 10 月 6 日、市原 俊
右：岐阜市長良志段見北野神社、2020 年 3 月 18 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：緑区細根公園（2012 年確認）。なごや生きもの一斉調査 2022 では発見されなかった。

県内：石巻山、嵩山（野々部ほか，1984）、豊田市各地（川瀬，2012）、新城市副川諏訪神社（川瀬，2014）など。

国内：関東地方以西、四国、九州、屋久島、奄美大島。

世界：朝鮮済州近郊。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

県内の分布域では、リター層中や腐葉土層中から発見されることが多いが、腐肉食性あるいは肉食性の陸貝とされており、大型陸貝の死殻の中から発見されることもある。

現在の生息状況／減少の要因

自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

保全上の留意点

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

引用文献

川瀬基弘，2012．愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物．豊田市史研究，(3): 57-80.

川瀬基弘，2013a．なごやで探そう！カタツムリ．29 pp, 名古屋生物多様性保全活動協議会.

川瀬基弘，2013b．Ⅱ－7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成 24 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業），pp. 178-213，なごや生物多様性保全活動協議会.

川瀬基弘，2014．新城市の軟体動物．加藤貞亨ほか(編)．新城市の自然誌－昆虫・動物編－．pp. 1-24．新城市立鳳来寺山自然科学博物館.

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原　俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則，2012．岐阜市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(6): 19-36.

野々部良一・高桑　弘・原田一夫，1984．陸産貝類．佐藤正孝・安藤　尚(編)．愛知の動物，23-40．愛知県郷土資料刊行会，名古屋市.

関連文献

川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.

（川瀬基弘）

貝類　＜カサマイマイ目シタラ科＞

ウラウズタカキビ　*Coneuplecta* sp.

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

評価理由

2022 年 10 月 10 日、なごや生きもの一斉調査 2022（陸貝編）において、守山区東谷山の雑木林で 1 個体のみ発見され、名古屋市初記録となった（川瀬ほか，2024）。2022 年 12 月および 2023 年 3 月に追加調査を実施したが本種を発見することは出来なかった。愛知県下では、近年存在が知られたばかりで（早瀬，2018）、過去の分布記録はない。愛知県下では、本種の主な分布地である里山的環境での開発の影響による減少が懸念され、将来的に絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される（早瀬，2020）。

形態

殻は微小で、殻長約 2.5 mm の高円錐型で、螺層は多く、周縁は弱く角張る。殻は薄質で淡褐色の半透明。各螺層にはごく弱い成長脈がみられる程度で、ほぼ平滑で光沢が強い。タカキビに似るが、周縁がキール状にならないこと、より小型であること、殻底には細かい螺状彫刻があることで区別できる。



守山区東谷山，2022 年 10 月 10 日
情報提供：山田律子、撮影：川瀬基弘

分布の概要

市内：守山区東谷山。

県内：瀬戸市（川平町）、岡崎市（真福寺町）、豊田市（稲武町）。

国内：国内に広く分布すると考えられているが、明確な記録があるのは、静岡県、愛知県、三重県、宮崎県、沖縄県である（早瀬，2020）。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

低山地の小川に面した雑木林で発見された。同所的に、ヒダリマキゴマガイ、イボイボナメクジ、カサキビ、ヒメカサキビ、カタマメマイマイなどが発見されている。

現在の生息状況／減少の要因

近年の乾燥化、棲息環境の悪化が、減少の要因と考えられる。

保全上の留意点

生息地域の森林環境の維持と保全が重要である。

特記事項

発見当初はタカキビ *Coneuplecta praealta* (Pilsbry, 1902)として報告されたが(川瀬, 2023)、その後の精査でウラウズタカキビに修正された（川瀬ほか，2024）。これまでタカキビの幼貝などに混同されてきた種であり、タカキビとして報告された全国各地の記録には本種が含まれる可能性がある（早瀬，2020）。

引用文献

早瀬善正，2018．東海地方で確認されたウラウズタカキビ，かきつばた, (43): 35–37.
早瀬善正，2020．ウラウズタカキビ．愛知県環境調査センター(編)．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020－動物編－．p. 651，愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋.
川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.
川瀬基弘・山田律子・大矢美紀・今尾由美子, 2024. 名古屋で発見された記録すべき陸産貝類. なごやの生物多様性, 11: 115-121.

関連文献

川瀬基弘，2018．第 3 節 身近で不思議な貝類．新修 豊田市史 23 別編 自然，p. 404-423. 愛知県豊田市.

（川瀬基弘）

貝類　＜カサマイマイ目シタラ科＞

ヒゼンキビ　*Parakaliella hizenensis* (Pilsbry, 1902)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

2012 年に、市民参加型（参加者 456 名）による名古屋市陸貝一斉調査（市内全 16 区 33 地点）が開催され、その際市内から初めて発見された種である（川瀬，2013a, b）。山地性種であるため（川瀬ほか，2012）、主に自然度の高い山林、雑木林やそれに準ずる環境に棲息している。発見された熱田区高座結御子神社では 19 種もの陸貝が発見されており、市内としては陸貝の種数が豊富で自然度が比較的高いと考えられる。一方、外来種の陸貝の個体数は市内最多であり、環境の改変が進んでいる。市内では他に本種の記録がなく、高座結御子神社においても本種の個体数は非常に少ない。

形態

殻径 3mm 程度の微小種。殻は薄く半透明で黄褐色～褐色。螺塔はやや高く円みのある円錐形。各螺層はよく膨らみ縫合はやや深い。ハリマキビよりも体層が一回り小さく、ヒメハリマキビよりも丸みをおびることで区別できる。



岐阜市雛倉、2011 年 3 月 30 日、川瀬基弘　撮影

分布の概要

市内：高座結御子神社(熱田区)。なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編では発見されなかった。

県内：豊田市足助地区桑田和町、野林町、室口町、篭林町、小原地区樽俣町、旭地区加塩町、坪崎町などで発見したが、各地点ともに個体数は非常に少ない。

国内：関東～九州まで記録があるが北限の記録については詳細な情報がないため不明。



生息地の環境／生態的特性

山地性種であるため（川瀬ほか，2012）、主に自然度の高い山林やそれに準ずる環境に棲息している。例えば、岐阜市内では雛倉、則松、外山、三田洞東、岩井、長良など比較的自然度の高い北部地域に生息し、市街地や平地の広がる自然度の低い南部地域では発見されていない（川瀬, 2014）。

現在の生息状況／減少の要因

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

保全上の留意点

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

引用文献

川瀬基弘，2013a．なごやで探そう！カタツムリ．29 pp，名古屋生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘，2013b．Ⅱ－７なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成 24 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業），pp. 178-213，なごや生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘，2014．11 貝類．岐阜市の自然情報～岐阜市自然環境基礎調査～．pp. 197-209．岐阜市役所自然共生部自然環境課．

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原　俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則，2012．岐阜市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(6): 19-36.

関連文献

川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.

（川瀬基弘）

貝類　＜カサマイマイ目シタラ科＞

ウメムラシタラ　*Sitalina japonica* Habe, 1964

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

平地性～山地性種であり低標高の比較的自然度の高い森林の落葉下での記録が多い。やや乾燥に弱いため、湿度のある環境を好むようである。市内では棲息記録が少なく、局所的に大量発生する例が知られているが、大量発生は一時的ですぐに激減、消滅することが多い。本調査では守山区と天白区から生貝を発見しているが、それぞれの生息地において個体数は少なかった。中区の護国神社では過去に多くの個体が記録されたことがあるが今回の調査では確認できなかった。

形態

殻は微小で、殻高約 1.2mm、殻径 1.8mm 程度。螺塔が低く、巻数は少なく、低い円錐形。縫合はくびれ、各層には段差を有し、3 本程度の螺状肋を持つ。体層底部は平たく、周縁の角は尖らない。殻は淡黄褐色。殻口は肥厚・反転せず、内部に歯はない。



天白区相生山緑地、2014 年 5 月 24 日、川瀬基弘　撮影

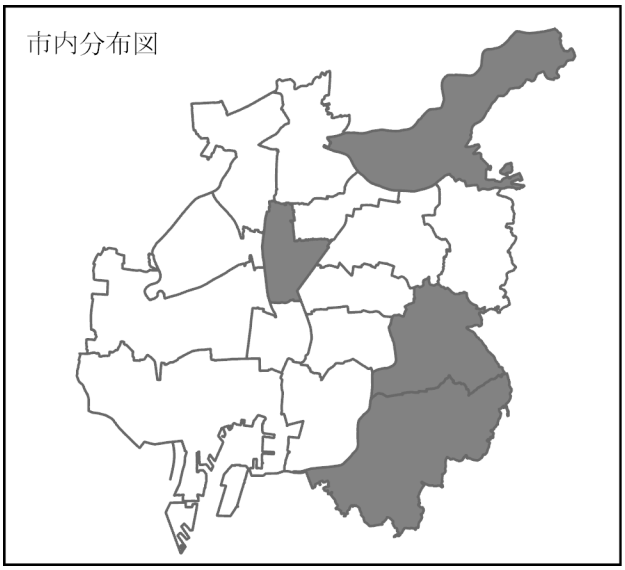
分布の概要

市内：天白区相生山緑地公園、中区護国神社、守山区竜泉寺、緑区大高町鷲津など。

県内：豊田市内の山地各地、新城市副川諏訪神社、豊橋市石巻町石巻山など。

国内：本州、四国、九州。

世界：巨文島（韓国）。



生息地の環境／生態的特性

平地性～山地性種であり低標高の比較的自然度の高い森林の落葉下での記録が多い。また、自然度の高い緑地公園、寺社林や河畔林のリター層や腐葉土層にも生息している。比較的乾燥に弱く、湿度のある環境を好むようである。極めて局所的に大量発生することがあるが、一時的であることが多い。

現在の生息状況／減少の要因

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

保全上の留意点

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ444-14

登録標本の採集地：名古屋市天白区相生山緑地

DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

関連文献

柏尾　翔・上地健琉，2024．泉州の陸淡水産貝類図鑑．きしわだ自然友の会・きしわだ自然資料館，岸和田．135 pp.
川瀬基弘，2012．愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物．豊田市史研究，(3): 57-80.
川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.
川瀬基弘・西尾和久・市原　俊・村瀬文好，2013．名古屋市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(7): 12-17.

（川瀬基弘）

貝類　＜ベッコウマイマイ目ベッコウマイマイ科＞

ヒラベッコウ　*Bekkochlamys micrograpta* (Pilsbry, 1900)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全国 2020	情報不足

評価理由

山麓～平地に棲息する種であり、例えば、愛知県豊田市（川瀬, 2012）や岐阜県岐阜市（川瀬ほか, 2012）などでは市内各地に分布するものの各地の個体数は極めて少なく希にしか見つからない。そのため分布情報も少なく、環境省や愛知県では情報不足にランクされている。市内では 2012 年に大規模な一斉調査が行われたが（川瀬, 2013ab）、本種の発見には至らず、2013 年に守山区吉根の荒地（庄内川左岸）で新鮮な死殻 1 個体のみが発見された。

形態

殻はやや小形で、殻高 5mm、殻径 10mm 程度。半透明、淡い黄褐色で光沢が強い。螺塔は低く扁平で、わずかに緩やかに突出する。各層は緩やかに広がり、体層は著しく広くなり、その幅は次体層の倍である。周縁は円い。殻表は滑らかで、繊細な成長線と細密な螺線によって彫刻されている。殻口はわずかに斜位で広い新月形、その周縁は鋭く尖る。殻軸は前方へ広がる。臍孔は狭く、その幅は殻径の 1/10 ぐらいである。



岐阜市奥（プラザ掛洞付近）、2020 年 2 月 12 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：2013 年に守山区吉根の荒地（庄内川左岸）で新鮮な死殻を 1 個体のみ確認した。2022 年に名東区猪高緑地で生貝 3 個体が確認された。

県内：長久手町、瀬戸市、豊田市、新城市など。

国内：本州、四国、九州とその属島。



生息地の環境／生態的特性

落葉樹林などの比較的自然度の高い雑木林に棲息している。ある程度の湿度を保ったリター層や朽ち木の中からも発見され、乾燥にはあまり強くない。

現在の生息状況／減少の要因

自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような劣悪な環境が増加している。

保全上の留意点

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。景観に重視した倒木や朽ち木の撤去を避け自然の状態を維持することが重要である。

引用文献

川瀬基弘，2012．愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物．豊田市史研究，(3): 57-80.
川瀬基弘，2013a．なごやで探そう！カタツムリ．29 pp，名古屋生物多様性保全活動協議会.
川瀬基弘，2013b．Ⅱ－７なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成 24 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業），pp. 178-213，なごや生物多様性保全活動協議会.
川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原　俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則，2012．岐阜市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(6): 19-36.

関連文献

柏尾　翔・上地健琉，2024．泉州の陸淡水産貝類図鑑．きしわだ自然友の会・きしわだ自然資料館，岸和田．135 pp.
川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.

（川瀬基弘）

貝類　＜マイマイ目ナンバンマイマイ科＞

カタマメマイマイ　*Lepidopisum conospira* (Pfeiffer,1851)

評　価　区　分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛　知　県 2025	絶滅危惧Ⅱ類
全　　国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

2022 年 10 月 10 日、なごや生きもの一斉調査 2022（陸貝編）において，守山区東谷山の雑木林で多数発見され、名古屋市初記録となった（川瀬，2023；川瀬ほか，2024）。2022 年 12 月および 2023 年 3 月に追加調査を実施したが、個体数は激減し、なごや生きもの一斉調査 2022 で大量発生した生き残り個体と判断した。本種は、河川敷の草地などに生息し、生息が確認されても数年のうちにその個体群が消失してしまうという「放浪種」的な性質があるとされている（黒住，2005）。発見された守山区東谷山の雑木林においても、個体数は激減しており、その後発見が困難なことから同様の結果をたどっていると考えられる。

形態

殻は小形で、殻長・殻径ともに 5.0mm 程度の丸味をおびた低円錐形である。殻は薄く、淡い茶褐色の殻皮に覆われる。殻皮全体に小さい鱗状の突起物がある。殻口は成貝で反転する。小さくて深い明瞭な臍孔がある。

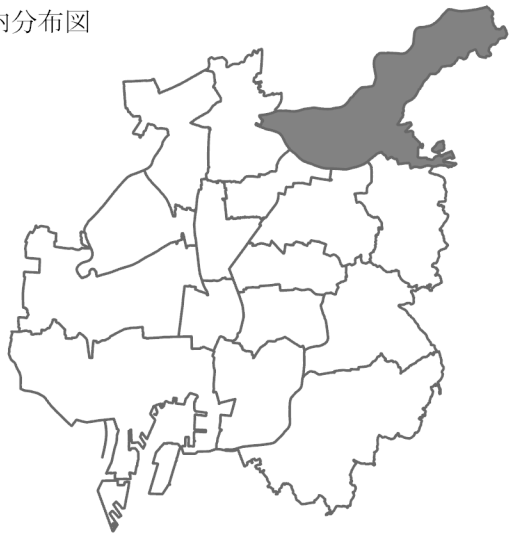


守山区東谷山，2022 年 10 月 10 日
情報提供：山田律子、撮影：川瀬基弘

分布の概要

市内：守山区東谷山。
県内：岡崎市、豊田市、西尾市。
国内：東京都、群馬県、神奈川県、埼玉県、静岡県、三重県、岐阜県、滋賀県、石川県、広島県、徳島県など。
世界：朝鮮半島全域（肥後・後藤, 1993）。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

低山地の小川に面した雑木林で発見された。同所的に、ヒダリマキゴマガイ、イボイボナメクジ、カサキビ、ヒメカサキビ、カタマメマイマイなどが発見されている。

現在の生息状況／減少の要因

近年の乾燥化、棲息環境の悪化が、減少の要因と考えられる。

保全上の留意点

生息地域の森林環境の維持と保全が重要。

引用文献

肥後俊一・後藤芳央, 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録, 3+22+693+13+148 pp. エル貝類出版局，八尾.
川瀬基弘．2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.
川瀬基弘・山田律子・大矢美紀・今尾由美子，2024．名古屋で発見された記録すべき陸産貝類．なごやの生物多様性，11: 115-121.
黒住耐二，2005．カタマメマイマイ，環境省自然環境局野生生物課(編)，改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－6 陸・淡水貝類，p. 294. 自然環境研究センター，東京都.

関連文献

川瀬基弘・大内陽子，2010．豊田市平戸橋町で発見されたカタマメマイマイ．かきつばた, (35): 41.
木村昭一，2000．愛知県より初めて採集されたカタマメマイマイ．かきつばた，(26): 11-13.

（川瀬基弘）

貝類　＜マイマイ目ナンバンマイマイ科＞

ビロウドマイマイ属の一種　*Nipponochloritis* sp.

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	情報不足

評価理由

本種が生息できるような自然度の高い環境は少ない。寺社林や緑地公園の雑木林の多くは、手入れが行き届いており、倒木や朽ち木が少なく、落葉なども定期的に清掃され、湿度を保ったリター層や腐葉土が堆積しにくくなっている。

形態

殻高 12mm、殻径 17mm 程度、殻はやや球形で、黄褐色。殻表には短い殻皮毛が密にある。螺塔はほとんど平らで、縫合の間は緩やかに中高となる。次体層と体層は下降し、円形となる。殻口はわずかに斜位、広い円形、その唇縁は薄い。滑層は内唇から外側へ広がり半円状となる。ケハダビロウドマイマイより殻皮毛の密度が高い。



守山区小幡、2012 年 10 月 5 日、西尾和久　撮影

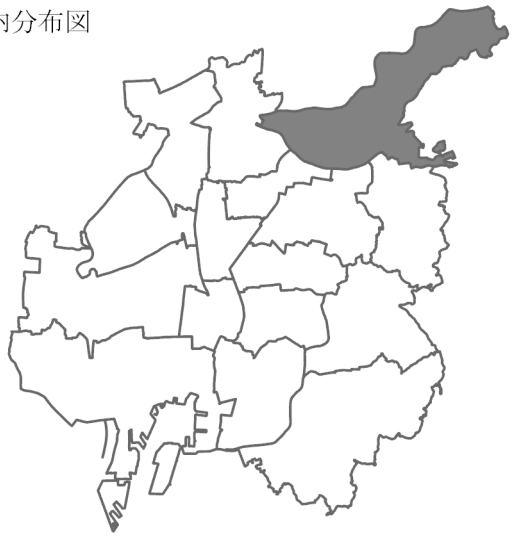
分布の概要

市内：八竜緑地（守山区）、小幡緑地公園（守山区）。

県内：新城市黄柳野、岡崎市滝尻町、犬山市栗栖、豊田市和合町、豊田市稲武町など。

国内：東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、四国地方など。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

山地性種であり、倒木の裏面や朽ち木の内部などに生息し、昼間に這いまわることは希で、生息数も少なく発見するのが難しい。

現在の生息状況／減少の要因

八竜緑地（守山区）および小幡緑地公園（守山区）の湿度の保たれた雑木林中の倒木や朽ち木の中から発見されたが、このような良好な環境が残されているところは市内には少ない。

保全上の留意点

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。また、景観を意識した環境美化のためだけに、倒木、朽ち木や落葉などをむやみに取り除くのではなく、少しでも自然の状態を維持するように心がける。

特記事項

DNA 分析の結果，　*N. oscitans* には複数種が含まれるため，*N.* sp. とした（川瀬ほか，2014）．

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ332-14、採集地：守山区小幡緑地
DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

引用文献

川瀬基弘・西尾和久・森山昭彦・市原　俊，2014．名古屋市で発見されたビロウドマイマイ類．なごやの生物多様性，1: 1-14.

関連文献

早瀬善正・多田　昭，2005．愛知県産のビロウドマイマイ属について．かきつばた，(31): 8-19.
早瀬善正・多田　昭，2008．中部地方に分布するビロウドマイマイ属．かきつばた，(33): 17-21.
早瀬善正・多田　昭，2009．東北地方に分布するビロウドマイマイ属．かきつばた，(34): 14-19.
早瀬善正・多田　昭，2010．関東地方に分布するビロウドマイマイ属．かきつばた，(35): 19-27.
川瀬基弘，2013．なごやで探そう！カタツムリ．29 pp，名古屋生物多様性保全活動協議会.
川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.
多田　昭，2005．中国地方産ビロウドマイマイ属貝類．まいご，(13): 12-25.

（川瀬基弘）

貝類　＜マイマイ目ナンバンマイマイ科＞

ニッポンマイマイ　*Satsuma japonica* (L. Pfeiffer, 1847)

評 価 区 分

名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛 知 県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

本州各地の山地から平地の雑木林や周辺の草むらなどに生息するが、市内の分布は極めて限られており、発見された 2 か所ともに生息個体数はとても少なかった。本種が生息する守山区（川瀬，2013）の環境が破壊されれば市内から絶滅する可能性もある。守山区竜泉寺と名東区猪高町藤森香流で確認したニッポンマイマイは同じ系統のものと判断され、かつての名古屋市北東部～東部には本種が広範囲に分布していたことが明らかにされている（川瀬ほか，2021）。

形態

殻は薄く半透明で黄褐色～濃褐色の山形に尖った円錐形。カドバリニッポンマイマイ、ヌノメニッポンマイマイ、マルニッポマイマイ、コニッポンマイマイなど亜種または型に分けられる。雑木林周辺の草むらなどで見られる。守山区で発見された個体は、ある程度周縁角が発達するカドバリニッポンマイマイ型 *Satsuma japonica carinata* の個体であった。



守山区竜泉寺、2022 年 10 月 10 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：守山区上志段味東谷山（瀬戸市との境界付近の雑木林）と守山区竜泉寺 1 丁目付近（庄内川左岸の雑木林）。名東区明徳緑地。

県内：県内各地。

国内：本州に広く分布する。



生息地の環境／生態的特性

守山区上志段味東谷山（瀬戸市との境界付近の雑木林）と守山区竜泉寺 1 丁目付近（庄内川左岸の雑木林）の 2 か所のみで発見されている。いずれも雑木林であり、倒木や朽ち木を起こして発見された。

現在の生息状況／減少の要因

守山区の志段味地区や吉根地区は、都市基盤の整備が遅く農地と山林が広がっていたが、2000 年頃から宅地化が急速に進み自然が激減した。これにより生息環境が破壊されたか、もしくは消失した。

保全上の留意点

現在本種が生息している環境を改変しないように保全することが大切である。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ436-14、採集地：守山区竜泉寺

DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

引用文献

川瀬基弘，2013．名古屋市内でニッポンマイマイを発見．生きものシンフォニー7 号，名古屋生物多様性センター，名古屋．

川瀬基弘・横山悠理・西尾和久・松原美恵子・横井敦史・熊澤慶伯, 2021. 名古屋市に棲息するニッポンマイマイ *Satsuma japonica* の COI 遺伝子からみた分子系統学的位置付け．なごやの生物多様性，8: 127-132.

関連文献

川瀬基弘，2012．愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物．豊田市史研究，(3): 57-80.

川瀬基弘，2014．新城市の軟体動物．加藤貞亨ほか(編)．新城市の自然誌－昆虫・動物編－．pp. 1-24．新城市立鳳来寺山自然科学博物館．

川瀬基弘，2014．11 貝類．岐阜市の自然情報～岐阜市自然環境基礎調査～．pp. 197-209．岐阜市役所自然共生部自然環境課．

川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．49 pp，なごや生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘・早瀬善正・市原　俊，2011．愛知県豊田市に生息する陸産貝類．豊橋市自然史博研報，(21): 31-43.

川瀬基弘・西尾和久・市原　俊・村瀬文好，2013．名古屋市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要, 7: 12-17.

（川瀬基弘）

貝類　＜マイマイ目ナンバンマイマイ科＞

コベソマイマイ　*Satsuma myomphala myomphala* (E. von Martens, 1865)

評価区分	
名古屋市 2025	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

本種は山麓から平地に棲息し、国内の分布域では西日本方面で小型化する傾向があり、多産する地域もあるが、東海地域では比較的個体数が少なく稀少な種である。愛知県では稀にしか見つからず、例えば豊田市では生息地は極めて限局的であり（川瀬，2012）、個体数も非常に少ない。名古屋市では、守山区吉根、千種区東山の森、名東区猪高緑地で発見されているが、個体数はいずれも非常に少ない（川瀬・村瀬，2014；川瀬，2023）。

形態

殻は大形でやや薄く、殻高 30～35mm、殻径 40～50mm。螺塔は低く、淡い黄褐～赤褐色。周縁に赤褐色の色帯がある。縫合は浅い。殻口は斜位でやや広い半円形。外唇はうすくわずかに反転する。臍孔は閉じる。軟体の背面はアメ色。



名東区猪高緑地，2024 年 6 月 23 日
採集：森川晴つみ、撮影：川瀬基弘

分布の概要

市内：守山区吉根、千種区東山の森、名東区猪高緑地で稀に生貝が発見される。

県内：野々部ほか（1984）によれば、県下では豊田地方に稀産と記されている。近年、豊田市小原地区四季桜公園や石野地区東広瀬町で生貝を確認している（川瀬ほか，2012）。

国内：本州（中部以西）・四国・九州に分布する。



生息地の環境／生態的特性

山麓から平地に棲息し、個体数は非常に少ないが、豊田市や岐阜市では河畔林の雑木林で発見されている。

現在の生息状況／減少の要因

守山区の志段味地区や吉根地区は、都市基盤の整備が遅く農地と山林が広がっていたが、2000 年頃から宅地化が急速に進み自然が激減した。これにより、多くの生息環境が破壊されたか、もしくは消失した。

保全上の留意点

現在本種が生息している環境を改変しないように保全することが大切である。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ438-14

登録標本の採集地：名古屋市守山区吉根

DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

引用文献

川瀬基弘，2012．愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物．豊田市史研究，3: 57-80.

川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．49 pp，なごや生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘・村瀬文好，2014．名古屋市初記録のヤマタニシとコベソマイマイ．かきつばた，39: 51.

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原　俊，2012．矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類．矢作川研究，16: 11-26.

野々部良一・高桑　弘・原田一夫，1984．陸産貝類．佐藤正孝・安藤　尚(編)．愛知の動物，pp. 23-40．愛知県郷土資料刊行会，名古屋市.

関連文献

柏尾　翔・上地健琉，2024．泉州の陸淡水産貝類図鑑．きしわだ自然友の会・きしわだ自然資料館，岸和田．135 pp.

守谷茂樹，2016．愛知県のコベソマイマイの分布．かきつばた，41: 46.

（川瀬基弘）

貝類　＜カキ目ハボウキガイ科＞

ズベタイラギ　*Atrina pectinate* (Linnaeus, 1767)

評 価 区 分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底に突き刺さるように深く埋没し、後端だけを出して棲息する。愛知県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は 1960 年代には三河湾奥部の渥美湾で海水浴客が誤って踏んで足をけがするほど多産した（愛知県科学教育センター，1967）。しかし、近年三河湾奥部では死殻すら採集できない。三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種となっているが、その量は年々減少している。和田ほか（1996）では危険にランクされている。

形態

殻長 30cm を越える大型種。長い三角形の殻で、黒褐色。殻はやや厚いが脆い。殻表に約 10 本の放射肋があり、肋上に棘がない。

分布の概要

市内：2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深 2～15 m の泥底から生貝が 1 個体、死殻が少数採集された。

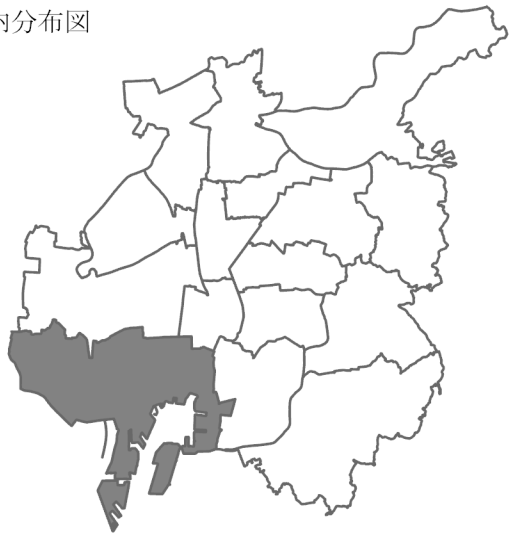
県内：三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺の潮下帯。西條ほか（2008）によるセントレア周辺海域の調査では、継続調査時に 2010 年の潜水調査で本種の生貝を確認した。

国内：本州～九州。

世界：中国大陸沿岸の類似種との関係は不明で、分布範囲も未解明である（山下・木村, 2012）。



セントレア近海、2010 年 9 月 2 日、撮影：大八木麻希



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したように県内の潮下帯は環境が悪化しているので、本種の生息場所、生息数とも減少している。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

水産資源保護協会（1997）では減少にランクされている。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．

西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008．中部国際空港島建設による水質，底質，底生生物群集の劣化．海の研究，17(4): 281-295.

水産資源保護協会，1997．軟体動物．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（IV），126pp.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

山下博由・木村昭一，2012．タイラギ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 114．東海大学出版会，神奈川．

関連文献

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽．

横川浩治，1996．タイラギ 2 型の遺伝的分化．Venus, 55(1): 25-39.

（川瀬基弘）

貝類　＜スエモノガイ目オキナガイ科＞

ソトオリガイ　*Laternula gracilis* (Reeve, 1860)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

評価理由

本種は内湾の河口域や奥部の泥干潟に生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡･木村，2000）、豊川河口域（松岡ほか，1999）、矢作川河口域（鳥居ほか，2012）などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。市内では庄内川河口域に生息しているが、生息数が少なく絶滅が危惧される。一方、藤前干潟では比較的多産する（川瀬ほか，2009）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻長 45mm、殻は長楕円形で膨らみは強い。左殻が右殻より少し大きく、前後端は開く。殻は非常に薄く、白色半透明。内面には真珠光沢がある。弾帯受けの前に殻帯がある。



港区藤前干潟，2020 年 8 月 6 日
採集、撮影：川瀬基弘

分布の概要

市内：大江川河口、天白川河口。庄内川河口域の泥質干潟より生きた個体が採集されたが、個体数は少ない。藤前干潟の泥質部分では個体数が多く、強熱減量が高い値を示す泥底にも棲息する。

県内：汐川干潟、豊川河口、矢作川河口、三河一色など。

国内：北海道～九州。

世界：中国、東南アジア。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

引用文献

藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10): 31-39.

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.

松岡敬二･木村妙子･木村昭一･三谷水産高等学校増殖部･山口啓子･高安克己，1999．豊川下流域の貝類相．豊橋市自然史博物館研究報告，(9): 15-24.

鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘，2012．矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録．三河生物(西三河野生生物研究会)，3: 9-49.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

川瀬基弘，2002．矢作川河口域における干潟の底生生物相．矢作川研究，(6): 81-98.

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋市大江川感潮域に棲息する貝類．なごやの生物多様性，11: 105-113.

川瀬基弘･横井敦史, 2024. 名古屋市港区野跡町･潮凪町（鴨浦地区）の港湾で発見されたウミニナ *Batillaria multiformis*（Lischke, 1869）なごやの生物多様性，11: 123-127.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006．伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化．名古屋大学博物館報告，(22): 31-64.

（川瀬基弘）

貝類　＜ツキガイ目ツキガイ科＞

ツキガイモドキ　*Lucinoma annulata* (Reeve, 1850)

評 価 区 分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	－

評価理由

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集されるが、個体数は少ない（中山，1980：木村，1996：木村，2000）。

形態

殻長約 30mm で殻は類円型で膨らみは弱い。殻表は間隔の広い板状の輪肋がある。殻は白色であるが、生時や新鮮な死殻には茶褐色の殻皮がある。殻頂は小さく低い。



名古屋港ポートアイランド周辺、2023 年 6 月 9 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深 2～15 m の泥底から生貝が少数個体、死殻が多数採集された。2023 年のソリネット調査で生貝が得られた。

県内：上述したように、生息場所、生息数が減少している。2003 年の潜水調査でセントレア周辺海域から生貝 1 個体を採集した。

国内：日本海、南西北海道以西。

世界：アラスカ、カリフォルニア。



生息地の環境／生態的特性

内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していてる。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、イセシラガイなどと共に本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

引用文献

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7): 38-48.

木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会．

木村昭一，2000．伊勢湾･三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26): 18-20.

中山　清，1980．知多湾南部海域の貝類相．かきつばた，(6): 10-12.

関連文献

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋港ポートアイランド周辺海域においてソリネット調査で得られた貝類．なごやの生物多様性，11: 85-91.

奥谷喬司（編），2017．日本近海産貝類図鑑［第二版］．1375 pp．東海大学出版会，平塚．

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽．

西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008．中部国際空港島建設による水質，底質，底生生物群集の劣化．海の研究，17(4): 281-295.

（川瀬基弘）

貝類　＜マテガイ目マテガイ科＞

マテガイ　*Solen strictus* A. Gould, 1861

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

評価理由

潮間帯の砂底にやや深く潜って生息し、名古屋市を除く愛知県下では各地で比較的普通に見られる。名古屋市の藤前干潟では極めて稀に生貝が発見されるが、死殻もほとんど見かけない。藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少により本種の個体数は確実に減少していると判断した。

形態

殻は薄質、細長い円筒形。殻頂は前端近くにあり、背腹縁は平行。前端はやや斜め裁断状、後端は直角に裁断状。殻の前後端は紡錘形に広く開口。殻表は平滑。前筋痕、後筋痕ともに細長い。套線は腹縁から離れる。



上：港区藤前干潟、2008 年 6 月 21 日、市原　俊　撮影
下：港区藤前干潟、2011 年 6 月 3 日、中村　肇　撮影

分布の概要

市内：港区藤前干潟の砂泥底で極めて稀に見つかることがある（川瀬ほか，2009）。

県内：六条干潟、美浜町、セントレア周辺海域、三河一色、東幡豆、矢作川河口など県内各地に棲息する。

国内：北海道南西部～九州。

世界：朝鮮半島、中国大陸沿岸。



生息地の環境／生態的特性

潮間帯の砂底にやや深く潜って生息する。干潮時に本種の巣穴に食塩をふりかけると、巣穴から飛び出す性質をもつ。

現在の生息状況／減少の要因

藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。なお、藤前干潟の底質は砂質部分が少なく泥質が優占するため、砂質を好む本種は棲息しにくいと考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少により本種の個体数は確実に減少していると判断した。

保全上の留意点

水質や底質の汚濁防止や砂粒子の流出防止。

特記事項

愛知県各地の潮間帯に棲息しているが、近年個体数が減少している地域が目立つ。

引用文献

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.
Umemura, M. and A. Yagi，2006．Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat．Verhandlungen IVL，29(3):1228-1234.

関連文献

早瀬善正・木村昭一，2020．佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相．ちりぼたん，50(1): 33-79.
早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川　尚・松浦弘行・石川智士，2011．愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相．東海大学海洋研究所研究報告，(32): 11-33.
川瀬基弘，2006．矢作川河口域における絶滅のおそれのある貝類．矢作川研究，(10): 75-84.
奥谷喬司（編），2000．日本近海産貝類図鑑，1173pp．東海大学出版会，秦野．
山本茂雄（編），2007．海のぷれ健康診断報告書，90pp．伊勢・三河湾流域ネットワーク山川里海 22 海の健康診断手法開発チーム，名古屋．

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目ニッコウガイ科＞

ヒメシラトリ　*Macoma incongrua* (E. von Martens, 1865)

評　価　区　分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛　知　県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

本種は内湾の奥部の泥干潟から潮下帯に生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村, 2000）、豊川河口域（松岡ほか, 1999）、蒲郡市などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。市内では庄内川河口から名古屋港沖合まで生息しているが、生息数が少なく、絶滅が危惧される。

形態

殻長約 2 cm で殻は卵形でこの類としては膨らみがやや強い。殻はやや薄く白色、殻頂部が紅彩される個体が多い。殻表には薄い殻皮をもつ。後端は裁断状。



庄内川河口、2008 年 3 月 24 日、市原　俊　撮影

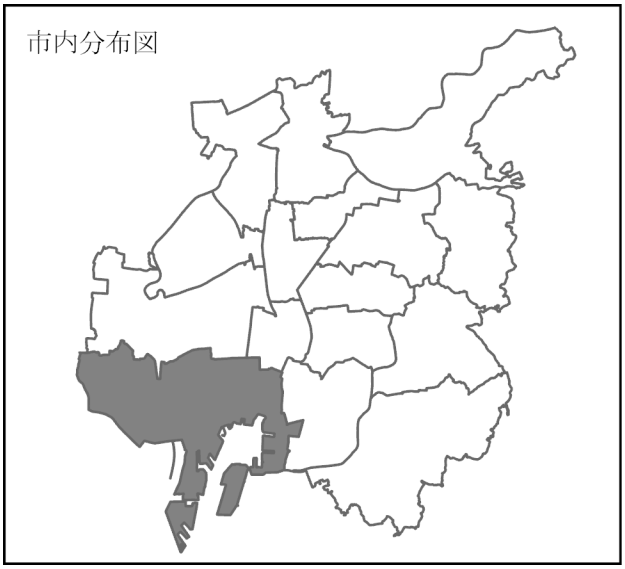
分布の概要

市内：藤前干潟、新川河口域、庄内川河口域の泥質干潟より少数ながら生きた個体が採集された。また、2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深 2～6 m の砂泥底から生貝が少数、新鮮な死殻が多数採集された。2023 年に天白川河口で新鮮な死殻を確認した。

県内：汐川、東幡豆、三河一色、神野新田、河和、師崎、矢作川、佐久島など。

国内：北海道～九州。

世界及び国内：サハリン、アラスカ、カナダ。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような干潟から潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

保全上の留意点

内湾の潮間帯から潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

引用文献

藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10): 31-39.

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7): 38-48.

松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999．豊川下流域の貝類相．豊橋市自然史博物館研究報告，(9): 15-24.

関連文献

早瀬善正・木村昭一，2020．佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相．ちりぼたん，　50(1): 33-79.

早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川　尚・松浦弘行・石川智士，2011．愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相．東海大学海洋研究所研究報告，(32): 11-33.

川瀬基弘，2002．矢作川河口域における干潟の底生生物相．矢作川研究，(6): 81-98.

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.

鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006．伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化．名古屋大学博物館報告，(22): 31-64.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目ニッコウガイ科＞

ゴイサギ　*Macoma tokyoensis* Makiyama, 1927

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	－

評価理由

本種は内湾の潮下帯の泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集され、健全な個体群が残されていたが（中山，1980：木村，1996，2000）近年著しく減少し、名古屋港沖合では死殻は多いが生貝の個体数は少なく、絶滅が危惧される。

形態

殻長約5cmで､殻は卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、白色で成長脈に沿って色彩の濃淡がある。殻周辺部の殻表にはやや厚い殻皮を持つ。後背縁は張り出して後端は少しとがる。



産地不詳、市原 俊　撮影

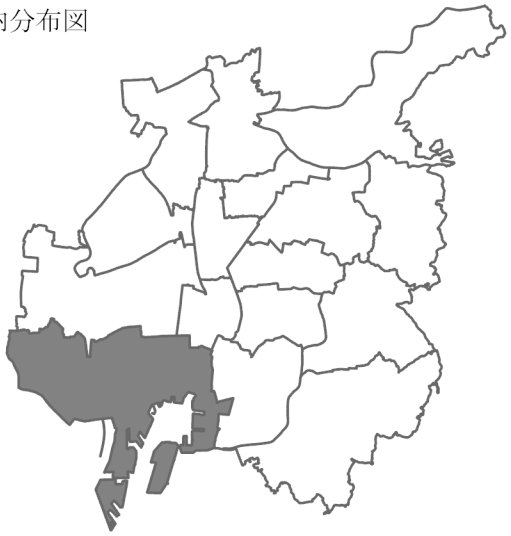
分布の概要

市内：2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深 10～15 m の泥底から生貝が少数個体、死殻が多数採集された。

県内：上述のほか、2011 年にセントレア周辺海域で生貝を確認した。

国内：北海道南西部～九州。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中，1998）、名古屋港浚渫地の半化石（河合・千葉，1996）や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

引用文献

蜂矢喜一郎・田中利雄，1998．名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石．化石の友，(45): 20-25.
河合秀高・千葉正己，1996．名古屋港 13 号地浚渫地より産出した貝類化石(1)二枚貝・角貝．化石の友，(43): 21-25.
川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7): 38-48.
木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会．
木村昭一，2000．伊勢湾･三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26): 18-20.
中山　清，1980．伊勢湾南部海域の貝類相．かきつばた，(6): 10-13.

関連文献

奥谷喬司 編著，2000．日本近海産貝類図鑑，1173pp，東海大学出版会，東京．
西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008．中部国際空港島建設による水質，底質，底生生物群集の劣化．海の研究，17(4): 281-295.
佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽．

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目ニッコウガイ科＞

ユウシオガイ　*Jitlada culter* (Hanley, 1844)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾の最も奥部の砂泥干潟に生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡･木村，2000）、豊川河口域（松岡ほか，1999）、蒲郡市などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

形態

殻長 15～20mm で殻は卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、白色、黄色、橙色など個体変異がある。後端は裁断状。トガリユウシオガイに似るが殻頂の成長脈が弱く密であることで区別できる。



庄内川河口、2008 年 12 月 11 日、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：藤前干潟（川瀬ほか，2009）や庄内川河口の泥質干潟より少数の生きた個体が採集された。2023 年に天白川河口で新鮮な死殻を確認。

県内：汐川干潟、豊川河口域、三河一色、東幡豆（早瀬ほか，2011）、蒲郡市。

国内：陸奥湾～九州。

世界及び国内：朝鮮半島、中国大陸、台湾。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

保全上の留意点

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

引用文献

藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10)：31-39.

早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川　尚・松浦弘行・石川智士，2011．愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相．東海大学海洋研究所研究報告，(32)：11-33.

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19)：11-20.

松岡敬二･木村妙子･木村昭一･三谷水産高等学校増殖部･山口啓子･高安克己，1999．豊川下流域の貝類相．豊橋市自然史博物館研究報告，(9)：15-24.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

福田　宏，2020．ユウシオガイ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 588, 岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

川瀬基弘・市原　俊・河合秀高，2015．中部更新統渥美層群の軟体動物化石．瑞浪市化石博物館研究報告，(41) : 51-131, 34 pls., 1 fig., 2 tables.

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋市大江川感潮域に棲息する貝類．なごやの生物多様性，11: 105-113.

木村昭一，2012．ユウシオガイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 126, 東海大学出版会，神奈川.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽.

鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006．伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化．名古屋大学博物館報告，(22): 31-64.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目ニッコウガイ科＞

サクラガイ　*Nitidotellina hokkaidoensis* (Habe, 1961)

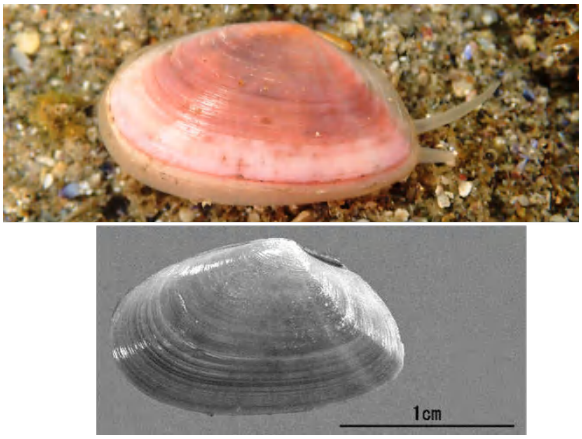
評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾の潮間帯から潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は 1960 年代には三河湾奥部から湾口部にかけての広い範囲で打ち上げられる貝としてごく普通で、また多産したが（愛知県科学教育センター，1967）、現在では打ち上げられる海岸も激減し、明らかに生息場所、生息数とも減少している。近年でも三河湾湾口部の一部では健全な個体群が残っているが、そのような場所は少ない（木村，1996：木村，2000）。

形態

殻長約 2cm で殻は長い卵形で膨らみは非常に弱く扁平。殻は薄く桃色で殻表は平滑で光沢がある。稀に白色個体が出現する。



上：佐久島、2017 年 7 月 26 日、川瀬基弘 撮影
下：名古屋港沖水深 6 m 、2008 年 10 月 9 日、木村昭一 撮影

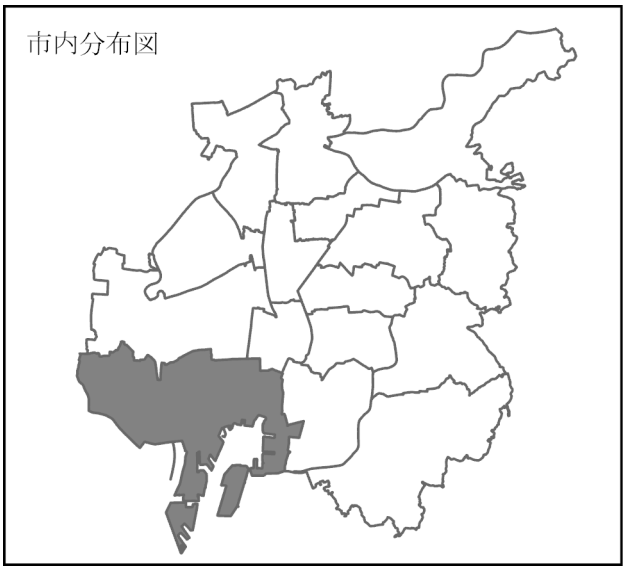
分布の概要

市内：2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深 2～6 m の砂泥底から生貝が少数、新鮮な死殻が多数採集された。

県内：東幡豆、寺部（早瀬ほか，2011）、佐久島。2002～07 年にかけてのセントレア中部国際空港東の水深 4 m 付近の潜水調査では、生貝が多数発見されている。

国内：北海道南西部～九州。

世界：朝鮮半島、中国大陸、ニューカレドニア。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

保全上の留意点

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．

早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川　尚・松浦弘行・石川智士，2011．愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相．東海大学海洋研究所研究報告，(32): 11-33.

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7): 38-48.

木村昭一，1996．ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35): 3-19．全国高等学校水産教育研究会．

木村昭一，2000．伊勢湾･三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）．かきつばた，(26): 18-20.

関連文献

早瀬善正・木村昭一，2020．佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相．ちりぼたん，　50(1): 33-79.

木村昭一，2012．サクラガイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 126，東海大学出版会，神奈川．

西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008．中部国際空港島建設による水質，底質，底生生物群集の劣化．海の研究，17(4): 281-295.

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽．

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目シオサザナミガイ科＞

イソシジミ　*Nuttallia japonica* (Reeve, 1857)

評　価　区　分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛　知　県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

潮間帯から水深 10m の砂泥底に生息し、愛知県下では比較的多産する地域もある。名古屋市の藤前干潟では死殻が多数打ち上がっていることがあるが、生貝は稀にしか見つからない。藤前干潟、庄内川河口干潟、新川河口干潟などで生貝を確認したがいずれも個体数は少なかった。底泥は強熱減量の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少により本種の個体数は確実に減少していると判断した。

形態

殻長約 43mm、殻高約 30mm。殻は薄く、卵形で膨らみは弱い。殻表は平滑で殻皮を被る。左殻が右殻より膨らみ、右殻は偏平。套線湾入はやや深く、やや尖る。殻頂付近には数本の放射状の白帯がある。内面は紫色。



新川河口干潟、2004 年 6 月 5 日、市原 俊　撮影

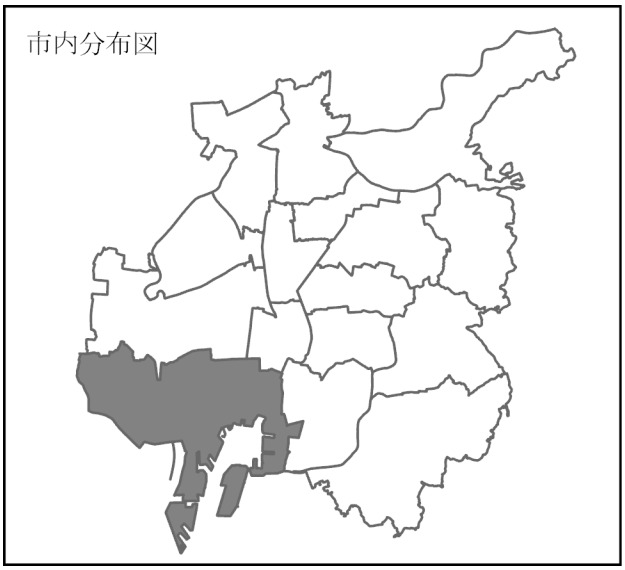
分布の概要

市内：新川河口、庄内川河口、藤前干潟（川瀬ほか，2009）、天白川河口。

県内：神野新田、東幡豆、三河一色、矢作川河口、汐川干潟、伊良湖岬、美浜町、日間賀島など県内各地。

国内：北海道～九州。

世界：サハリン、朝鮮半島、中国大陸沿岸。



生息地の環境／生態的特性

潮間帯～水深 10m ほどの砂泥底に潜って棲息する。水管を伸ばして水中の懸濁物を捕食する濾過摂食者。藤前干潟では砂泥底の深さ 50cm 程度に潜っている。矢作川河口域では、アサリの棲息帯より深い砂底に潜っており、30～50cm まで砂泥を掘ると比較的沢山の生貝を見つけることが出来た。

現在の生息状況／減少の要因

藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすい。干潟自体の減少、水質や底質の汚濁が個体数の減少要因と考えられる。

保全上の留意点

干潟環境の保全。水質や底質の汚濁防止。

引用文献

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.

関連文献

福田　宏，2020．イソシジミ．岡山県野生動植物調査検討会（編）．岡山県版レッドデータブック 2020 動物編．P. 606, 岡山県環境文化部自然環境課，岡山.

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋市大江川感潮域に棲息する貝類．なごやの生物多様性，11: 105-113.

川瀬基弘・梅村麻希・八木明彦，2009．干潟に生息する二枚貝類の炭素・窒素除去．第８回 海環境と生物および沿岸環境修復技術に関するシンポジウム 発表論文集: 67-72, 海底環境研究会，静岡.

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一，2014．庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種．かきつばた，(39): 31-36.

八木明彦・大八木麻希・川瀬基弘・横山亜希子，2014．藤前干潟の底泥・海水における炭素・窒素の除去－潮溜まり・底泥間隙水・二枚貝中心としてー．陸の水，64: 1-9.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目フナガタガイ科＞

ウネナシトマヤガイ　*Neotrapezium liratum* (Reeve, 1843)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛　知　県 2025	国リスト
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

津軽以南の河口の汽水域にかなり普通に棲息し、また比較的汚染にも強い貝であったが、大都市近郊の河川の河口では水の汚濁のためにほとんど絶滅している（和田ほか，1996）。また、外来種のコウロエンカワヒバリガイの急増に反比例して本種が減少する事例がある（福田・福田，1995）。名古屋市港区藤前干潟では、水質汚濁に加えてコウロエンカワヒバリガイが増え本種の生態的地位が失われつつある。

形態

殻は中型で、殻長 40mm 前後、厚質でやや堅固。長楕円形で膨らみはやや弱い。後端は裁断状。殻表は平滑、背縁部で成長線がやや立ち上がって粗くなる。主歯は横に倒れて２本、離れて弱い後側歯がある。前後の筋痕はほぼ円形。套線は湾入しない。



藤前干潟、2007 年 7 月 22 日、市原 俊　撮影

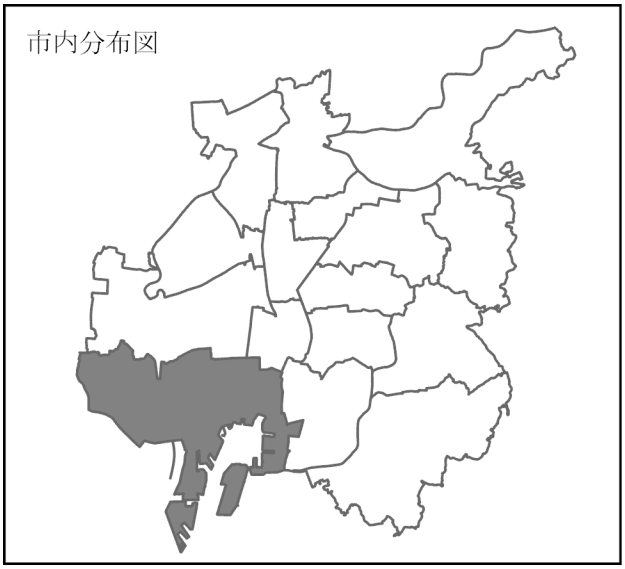
分布の概要

市内：新川河口、庄内川河口、藤前干潟、天白川河口、大江川河口、鴨浦。

県内：矢作川河口など県内各地に棲息し、カキ礁を構成する。

国内：津軽半島以南。

世界：台湾、中国大陸南岸。



生息地の環境／生態的特性

藤前干潟や庄内川河口域の底泥は強熱減量の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすい。水質や底質の汚濁も目立つ。

本種は、転石裏側やカキ礁中に足糸で付着して棲息している。

現在の生息状況／減少の要因

新川・庄内川河口、藤前干潟では個体数が少なく（川瀬ほか，2009）、外来種のコウロエンカワヒバリガイが転石やカキ礁に多数付着し、本種の生態的地位が奪われている。

保全上の留意点

コウロエンカワヒバリガイの増加や水質汚濁を防止する。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬ほか，2015）。

引用文献

福田　宏・福田敏一，1995．阿知須干拓にコウロエンカワヒバリガイ出現．山口の自然，(55): 16-20.

川瀬基弘・市原　俊・河合秀高，2015．中部更新統渥美層群の軟体動物化石．瑞浪市化石博物館研究報告，(41): 51-131, 34 pls., 1 fig., 2 tables.

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.

和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京.

関連文献

早瀬善正・木村昭一，2020．佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相．ちりぼたん，　50(1): 33-79.

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋市大江川感潮域に棲息する貝類．なごやの生物多様性，11: 105-113.

川瀬基弘･横井敦史, 2024. 名古屋市港区野跡町･潮凪町（鴨浦地区）の港湾で発見されたウミニナ *Batillaria multiformis*（Lischke, 1869）なごやの生物多様性，11: 123-127.

（川瀬基弘）

貝類　＜オオノガイ目オオノガイ科＞

オオノガイ　*Mya* (*Arenomya*) *arenaria oonogai* Makiyama, 1935

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾奥部の泥干潟に深く潜って生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村，2000）、一色干潟などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。名古屋市内では藤前干潟や庄内川河口に生息しているが、生息数が少なく絶滅が危惧される。藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。

形態

殻は大型で殻長約 10cm、長い卵形で、後端は細くなり開く。殻色は白色から灰褐色で、生きている時は褐色の殻皮を被る。内面は白色。殻質は薄質でもろい。水管は太く長いのでこの部分が食用になる。



北海道根室市、1990 年 8 月、市原 俊　撮影

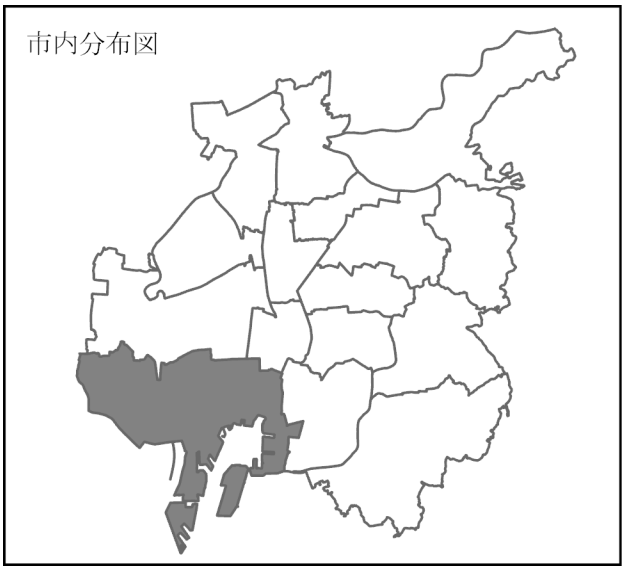
分布の概要

市内：藤前干潟、新川河口干潟、庄内川河口域の泥質干潟より少数ながら生きた個体が採集された。2023 年に天白川河口で新鮮な死殻を確認した。

県内：汐川干潟、東幡豆、矢作川、一色干潟などの三河湾奥部。

国内：北海道～九州。

世界：朝鮮半島、中国大陸。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

保全上の留意点

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

引用文献

藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10)：31-39.

Umemura, M. and Yagi, A., 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. Verhandlungen IVL, 29(3)：1228-1234.

関連文献

早瀬善正・木村昭一，2020．佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相．ちりぼたん，　50(1): 33-79.

早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川　尚・松浦弘行・石川智士，2011．愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相．東海大学海洋研究所研究報告，(32): 11-33.

川瀬基弘，2002．矢作川河口域における干潟の底生生物相．矢作川研究，(6): 81-98.

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.

木村昭一・山下博由，2012．オオノガイ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 167，東海大学出版会，神奈川．

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森　敬介・多留聖典，2013．干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～．269pp，日本国際湿地保全連合，東京．

（川瀬基弘）

貝類　＜ヤマタニシ目ゴマガイ科＞

ヒダリマキゴマガイ　*Palaina pusilla* (E. von Martens, 1877)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

2012 年に、市民参加型（参加者 456 名）による名古屋市陸貝一斉調査（市内全 16 区 33 地点）が開催され、天白区荒池のみで発見された種である（川瀬, 2013a, b）。山地性種であるため（川瀬ほか, 2012）、主に自然度の高い山林、雑木林やそれに準ずる環境に棲息している。市内では他に熱田神宮からの記録があるが熱田神宮においても棲息個体数は非常に少なく最近の調査でも稀にしか見つかっていない。2012 年に、新たに中村区枇杷島町（庄内川左岸）の雑木林のリター層から 1 個体だけが発見された。2013 年には名古屋城外堀から多数の個体が発見された。名古屋城外堀を除き各地の個体数は非常に少なく、本種の生息環境は激減している。

形態

殻は左巻で、殻高 2mm、殻径 1mm、5 層。卵形。表面には斜めの肋条がある。淡い黄色で光沢がある。縫合は深い。初めの 2 層は平滑、第 3 層は急に大きくなり、第 4 層は第 3 層と同じ大きさ。最終層は小さくなる。殻口は斜位で円い。口縁は二層で外方へ広がる。



豊田市大野瀬、2021 年 1 月 6 日、川瀬基弘

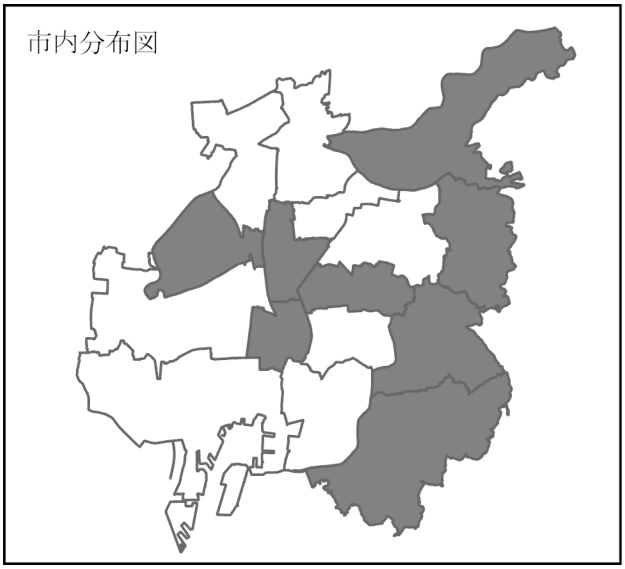
分布の概要

市内：天白区荒池、中村区枇杷島町、熱田区熱田神宮、中区名古屋城外堀、緑区大高町鷲津。

県内：犬山市、小牧市、豊田市、新城市、豊川市、田原市、西尾市などの県内各地。

国内：北海道、本州、八丈島、四国、九州。

世界：朝鮮。



生息地の環境／生態的特性

山地性種であるため（川瀬ほか, 2012）、主に自然度の高い山林やそれに準ずる環境に棲息している。リター層や腐葉土層中から発見されることが多い。

現在の生息状況／減少の要因

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

保全上の留意点

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

引用文献

川瀬基弘，2013a．なごやで探そう！カタツムリ．29 pp，名古屋生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘，2013b．Ⅱ－7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成 24 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業），pp. 178-213，なごや生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原　俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則，2012．岐阜市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(6): 19-36.

関連文献

柏尾　翔・上地健琉，2024．泉州の陸淡水産貝類図鑑．きしわだ自然友の会・きしわだ自然資料館，岸和田．135 pp.

川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原　俊，2012．矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類．矢作川研究，(16): 11-26.

守谷茂樹，2004．名古屋市内の陸貝の現況，かきつばた，(29): 25-31.

（川瀬基弘）

貝類　＜クビキレガイ目カワザンショウガイ科＞

クリイロカワザンショウ　*Angustassiminea castanea* (Westerlund, 1883)

評 価 区 分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。愛知県ではヨシ原湿地自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているの（木村・木村，1999）。市内では藤前干潟と庄内川下流に分布しているが（川瀬ほか，2009）、名古屋市の生息環境は確実に減少しており個体数の減少にも影響しているので（早瀬ほか，2014）、準絶滅危惧と判断した。

形態

殻高約 7mm、殻径約 3mm の小型種。カワザンショウガイ科は小型種が多く形態的にも近似していて同定は難しい。本種は螺塔が高く、貝殻が濃い栗色であることが特徴である。



新川河口干潟、2008 年 11 月 22 日、市原 俊　撮影

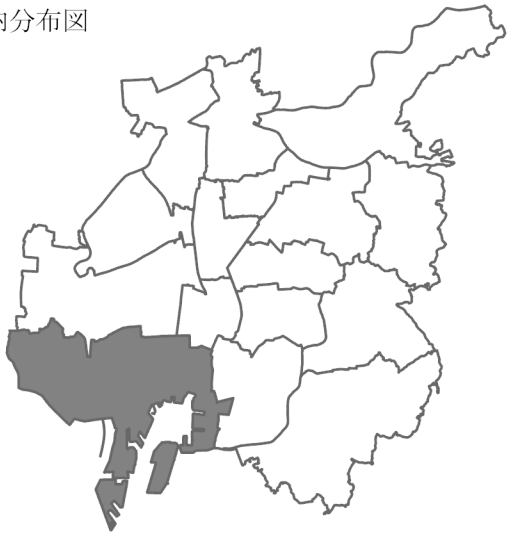
分布の概要

市内：藤前干潟の干潟上部の転石地、庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内に健全な個体群が分布しているが、生息範囲は狭い。

県内：県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村（1999）を含めて、約 20 か所生息地がある。生息地では群生する。

国内：陸奥湾～種子島。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

上述したようなヨシ原湿地周辺の落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。湿度が高いときにはヨシに登る。フトヘナタリと同所的に見られることが多い。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

保全上の留意点

ヨシ原湿地と上部の陸上植生の保全及び周辺水域の水質を保全する必要がある。

名古屋市ではレッドデータブックを作成して絶滅危惧種をリストアップしてきたが、これらの種が今尚もきわめて多種多数生息する庄内川河口域は、市内に残る最後の干潟貝類の楽園であり、庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟（ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟（庄内川河口干潟の一部）の範囲より外れる上流部分）の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考えられる（早瀬ほか，2014）。

引用文献

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一，2014．庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種．かきつばた，(39): 31-36.

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.

関連文献

愛知県環境調査センター，2020．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020―動物編―．愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋．768 pp.

福田　宏，2012．クリイロカワザンショウ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 46，東海大学出版会．

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽．

（川瀬基弘）

貝類　＜クビキレガイ目カワザンショウガイ科＞

ツブカワザンショウ　*Assiminea estuarina* Habe, 1946

評 価 区 分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。愛知県ではアシ原湿地やその周辺が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地､生息数とも減少した(木村･木村, 1999)。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。名古屋市でも生息環境が確実に減少しており個体数の減少にも影響している（早瀬ほか，2014)。

形態

殻高約 4mm の小型種。小型のカワザンショウガイと近似するが、本種は、殻質が厚く、螺塔は低く球形、狭いが臍孔が開く。



藤前干潟、2003 年 8 月 19 日、市原 俊

分布の概要

市内：藤前干潟のカキ礁（川瀬ほか，2009）および庄内川河口域のヨシ原湿地や付近の転石周辺より少数ながら生きた個体が採集された。

県内：上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村（1999）を含めて 5 か所生息地がある。

国内：宮城県志津川湾～九州、奄美大島、沖縄島。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

上述したようなヨシ原湿地周辺の砂利や転石上に生息する。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなヨシ原湿地やその周辺が護岸工事などで破壊され、生息地が確実に減少している。

保全上の留意点

庄内川河口域は市内に残存する最後の干潟貝類の好適生息環境（楽園）であり、ここに生息する一部の種のみに焦点を当て絶滅危惧種としてリストアップすることも重要ではあるが、もはや市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまった庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟（ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟（庄内川河口干潟の一部）の範囲より外れる上流部分）の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考える（早瀬ほか，2014)。

特記事項

螺層上部に螺肋を持つことで別種とされていたヒメカワザンショウは、分子系統解析の結果本種と同種とされた（福田，2012)。

引用文献

福田　宏，2012．ツブカワザンショウ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 48，東海大学出版会，神奈川．
早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一，2014．庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種．かきつばた，(39): 31-36.
川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.
木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.
和田恵次･西平守孝･風呂田利夫･野島　哲･山西良平･西川輝昭･五島聖治･鈴木孝男･加藤　真･島村賢正･福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

（川瀬基弘）

貝類　＜クビキレガイ目カワザンショウガイ科＞

ヒナタムシヤドリカワザンショウ　*Assiminea* aff. *parasitologica* Kuroda, 1958

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。愛知県ではヨシ原湿地自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村，1999）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。市内では、藤前干潟と庄内川下流から河口域にかけてのアシ原湿地内に分布している（川瀬ほか，2009；ムシヤドリカワザンショウとされているもの）。

形態

殻高約 6mm の小型種。カワザンショウガイ科は、小型種が多く形態的にも近似していて同定は難しい。本種は螺塔がやや高く、貝殻の色彩が赤く、縫合付近に黄白色の帯が入るので区別できる。臍孔はない。



庄内川河口、2023 年 11 月 29 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：藤前干潟の干潟上部の転石地、庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内。

県内：愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村（1999）を含めて 15 か所生息地がある。生息地では群生する。

国内：本州～九州の太平洋岸、瀬戸内海、九州。

世界：日本固有種。



生息地の環境／生態的特性

上述したようなヨシ原湿地周辺の落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。湿度が高いときにはヨシに登る。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

保全上の留意点

庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟（ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟（庄内川河口干潟の一部）の範囲より外れる上流部分）の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらない。

特記事項

川瀬ほか（2009）でムシヤドリカワザンショウとした種は本種の誤同定である。ムシヤドリカワザンショウは日本海側に棲息し、太平洋側には棲息していないため、これまでに記録された種はヒナタムシヤドリカワザンショウの可能性が高い（福田，2012）。

引用文献

福田 宏，2012．ヒナタムシヤドリカワザンショウ．日本ベントス学会（編）．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 48，東海大学出版会，神奈川．

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.

木村昭一，2001．藤前干潟で採集されたワカウラツボ．かきつばた，(27): 14-16.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

関連文献

佐藤達也，2023．鳥羽市 海のレッドデータブック 2023．297pp，鳥羽市役所観光商工課，鳥羽．

（川瀬基弘）

貝類　＜クビキレガイ目ワカウラツボ科＞

カワグチツボ　*Fluviocingula elegantula* (A. Adams, 1861)

評　価　区　分

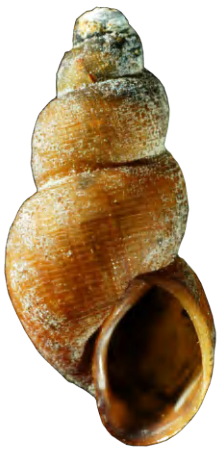
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛　知　県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。愛知県ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村，1999）。市内では藤前干潟に健全な個体群が残っているが（木村，2001：川瀬ほか，2009）、名古屋市の生息環境は確実に減少しており個体数の減少にも影響しているため（早瀬ほか，2014）、準絶滅危惧と判断した。

形態

殻は殻長約 5mm と小型で、長卵形。臍孔は狭いが開く、蓋は革質で薄い。近似種のワカウラツボとは臍孔が開く点、殻が薄い点などで区別される。



港区藤前干潟、2004 年 7 月 4 日、市原 俊　撮影

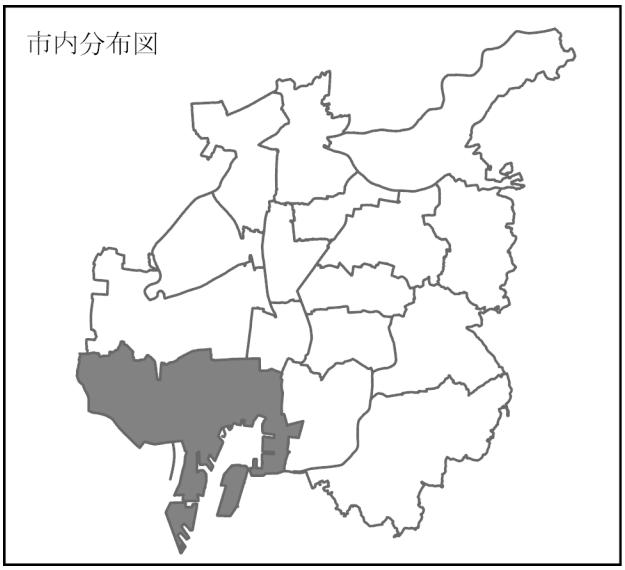
分布の概要

市内：藤前干潟（木村, 2001：川瀬ほか, 2009）、大江川河口（川瀬ほか，2024）。

県内：県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村（1999）を含めて 7 か所程度である。生息地では群生して多産する。

国内：北海道北部（クッチャロ湖）～九州。

世界：朝鮮半島、中国大陸、ロシア沿海州。



生息地の環境／生態的特性

県下では上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。藤前干潟ではエドガワミズゴマツボと同所的に棲息している。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなアシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

保全上の留意点

アシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ445-14

登録標本の採集地：港区庄内川河口干潟

DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

引用文献

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一，2014．庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種．かきつばた，(39): 31-36.

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋市大江川感潮域に棲息する貝類．なごやの生物多様性，11: 105-113.

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19)：11-20.

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.

木村昭一，2001．藤前干潟で採集されたワカウラツボ．かきつばた，(27): 14-16.

関連文献

福田　宏，2012．ワカウラツボ．日本ベントス学会(編)．干潟の準絶滅危惧危惧動物図鑑．p. 38，東海大学出版会，神奈川.

三浦知之，2008．干潟の生き物図鑑．197pp，南方新社，鹿児島.

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森　敬介・多留聖典，2013．干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～．269pp，日本国際湿地保全連合，東京.

（川瀬基弘）

貝類　＜クビキレガイ目ミズゴマツボ科＞

エドガワミズゴマツボ(ウミゴマツボ)　*Stenothyra edogawensis* (Yokoyama, 1927)

評 価 区 分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。愛知県ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる（木村・木村, 1999）。市内では藤前干潟に健全な個体群が残っているが（木村，2001：川瀬ほか，2009）、名古屋市の生息環境は確実に減少しており個体数の減少にも影響しているので（早瀬ほか，2014）、準絶滅危惧と判断した。

形態

殻は殻長約 2mm と微小で、卵形。殻口は体層から狭まり円形。臍孔はない。



新川河口干潟、2005 年 7 月 23 日、市原 俊　撮影

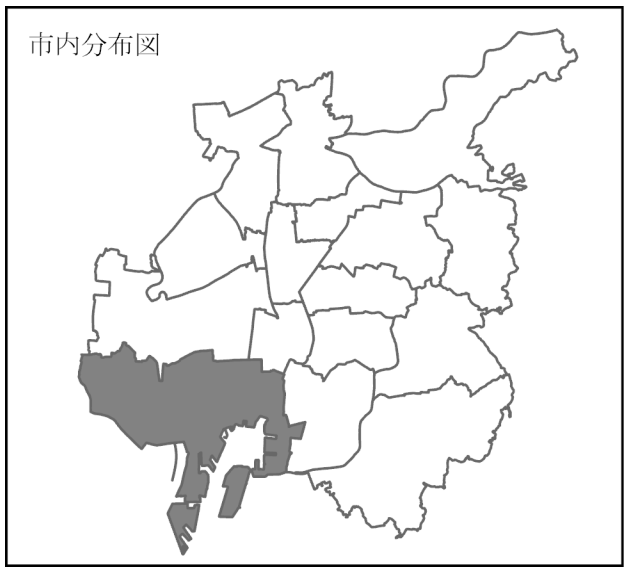
分布の概要

市内：藤前干潟（木村, 2001：川瀬ほか, 2009）、天白川河口、大江川河口（川瀬ほか，2024）。

県内：県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村（1999）を含めて現在 8 か所である。生息地では群生し、個体数は多い。

国内：宮城県万石浦・若狭湾～九州。沖縄県から近似した個体が知られるが同種か否かは検討の余地がある（福田，2012）。

世界：日本固有種。朝鮮の記録はトライミズゴマツボの誤同定（福田，2012）。



生息地の環境／生態的特性

愛知県下では、上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。

現在の生息状況／減少の要因

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

保全上の留意点

ヨシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ434-14、採集地：港区藤前干潟

DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

引用文献

福田　宏，2012．エドガワミズゴマツボ．日本ベントス学会(編)．干潟の絶滅危惧動物図鑑．p. 44，東海大学出版会，神奈川．

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一，2014．庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種．かきつばた，(39): 31-36.

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋市大江川感潮域に棲息する貝類．なごやの生物多様性，11: 105-113.

川瀬基弘・尾畑　功・市原　俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19): 11-20.

木村昭一・木村妙子，1999．三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相．日本ベントス学会誌，54: 44-56.

木村昭一，2001．藤前干潟で採集されたワカウラツボ．かきつばた，(27): 14-16.

関連文献

鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森　敬介・多留聖典，2013．干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～．269pp，日本国際湿地保全連合，東京．

（川瀬基弘）

貝類　＜モノアラガイ目ヒラマキガイ科＞

ヒラマキミズマイマイ　*Gyraulus chinensis* (Dunker, 1848)

評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	準絶滅危惧
全国 2020	情報不足

評価理由

市内のいくつかの水田から発見されたが、本種の生息する水田は限られており、市外の水田（川瀬ほか，2011：川瀬，2014）に比べて水田毎の生息個体数が非常に少ない。水草の輸入に伴い近似した外国産種が移入されており、市内でも本属の外来種と考えられる個体が見つかっている。

形態

殻径 5mm 程度の扁平な平巻き形。周縁は円いか、わずかにキール状になる。本種はヒメヒラマキミズマイマイに比べて大型で同サイズのそれと比較すると巻き数が少ないことで区別できる。殻表は灰褐色や黄褐色を帯びた半透明で微細な成長脈がある。殻は付着物に覆われていることが多い。



北区名城公園おふけ池、2017 年 9 月 1 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：市内分布図参照。ほぼ市内全域に生息すると考えられる。

県内：県内全域。

国内：北海道～九州、南西諸島までの日本全国。

世界：中国、朝鮮など大陸に広く分布。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

日本各地の池沼や湖、水路や水田などの止水環境に生息するが、市内では主に水田の水草や水のある休耕田の植物などに付着していた。流れの速い水域には生息しない。また、汚濁の進んだ水域にはあまり生息していなかった。

現在の生息状況／減少の要因

市内各地の水田に生息するが、本種の生息は特定の水田に限られ、全く生息していない水田も多い。また、水田毎の個体数は少ない。水質汚濁や冬季の乾田化などが減少の原因と考えられる。

保全上の留意点

水質汚濁や冬季乾田化の防止。ため池では水草など、本種が付着できる水生植物が豊富な環境作りをする。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ424-14、GBJ425-14、GBJ426-14、GBJ428-14

DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

引用文献

川瀬基弘，2014．新城市の軟体動物．加藤貞亨ほか(編)．新城市の自然誌－昆虫・動物編－．pp. 1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館．

川瀬基弘・早瀬善正・市原　俊，2011．豊田市に生息する淡水産貝類．陸の水，48: 9-16.

関連文献

川瀬基弘，2010．3 貝類．なごやため池生きもの生き生き事業報告書，pp. 69-72．名古屋ため池生物多様性保全協議会．

川瀬基弘，2018．なごや生きもの一斉調査～淡水貝編～．平成 29 年度なごや生物多様性保全活動協議会活動報告書，pp. 22-25. なごや生物多様性保全活動協議会．

川瀬基弘・松原美恵子・森山昭彦，2016．愛知県西三河地域から採集されたヒラマキガイ属 3 種：形態と遺伝子情報による解析．陸の水, 74: 43-48.

Mori, S.，1938．Classification of the Japanese Planorbidae. Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Ser.B, 14(2)：279-300, pls.12-18.

（川瀬基弘）

貝類　＜カサマイマイ目シタラ科＞

ヒメカサキビ　*Trochochlamys subcrenulata* (Pilsbry, 1901)

評 価 区 分

名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛 知 県 2025	準絶滅危惧
全　　国 2020	準絶滅危惧

評価理由

高座結御子神社、八竜緑地、相生山緑地、小幡緑地公園、東山公園などの比較的自然度の高い雑木林や緑地公園などで生息が確認されたが、個体数は少なく、宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化により生息地や個体数は減少していると考えられる。

形態

殻は微小で殻高 2.2mm、殻径 3mm 程度。淡い褐色で半透明。カサキビより著しく低い円錐形。螺層は緩やかに膨れる。体層の周縁角は鋭く突起している。殻表は繊細な糸状縦脈と多少不明瞭な螺状脈を現す。殻口はやや菱形、その周縁は薄い。軸唇はやや垂直にわずかに広がる。臍孔は狭く開いている。軟体は淡灰～赤褐色。触角は黒褐色。



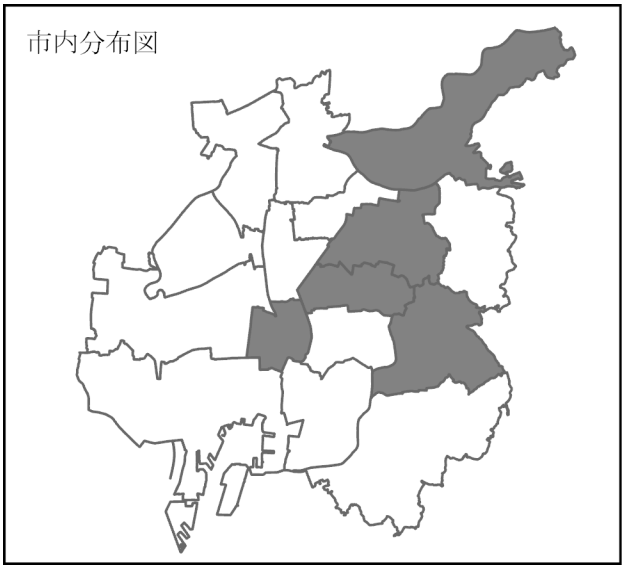
千種区東山の森（へいわの森）、2022 年 10 月 8 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：高座結御子神社（熱田区）、八竜緑地（守山区）、相生山緑地（天白区）、小幡緑地公園（守山区）、東山公園（千種区）。

県内：豊田市や新城市など県内各地。

国内：本州・三宅島・八丈島・四国・九州。



生息地の環境／生態的特性

湿度の保たれたリター層、落葉下などに生息する。岐阜市の全域調査では、本種の分布は北部から中部の山地に集中し南部の平地、市街地には分布しない（川瀬，2014）。豊田市では自然度の高い平地を除き、山地に分布記録が多い（川瀬，2012）。このように本種は山地性種であり、本種の分布は比較的自然度が高い指標になる。

現在の生息状況／減少の要因

上述したとおり、宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

保全上の留意点

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ439-14、採集地：天白区相生山緑地
DNA 分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター

引用文献

東　正雄，1982．原色日本陸産貝類図鑑．343 pp，保育社，大阪府．
川瀬基弘，2012．愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物．豊田市史研究，(3): 57-80.
川瀬基弘，2014．11 貝類．岐阜市の自然情報～岐阜市自然環境基礎調査～．pp. 197-209．岐阜市役所自然共生部自然環境課．

関連文献

川瀬基弘，2012．自然豊かな名古屋 41 種の陸貝を発見．生きものシンフォニー5 号，名古屋生物多様性センター，名古屋．
川瀬基弘，2013．なごやで探そう！カタツムリ．29 pp，名古屋生物多様性保全活動協議会．
川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.
川瀬基弘・西尾和久・市原　俊・村瀬文好，2013．名古屋市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(7): 12-17.

（川瀬基弘）

貝類　＜マイマイ目ナンバンマイマイ科＞

オオケマイマイ　*Aegista vulgivaga* (Schmacker & Boettger, 1890)

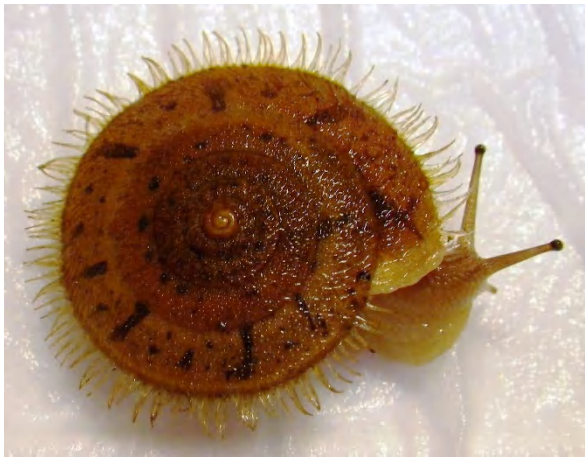
評価区分	
名古屋市 2025	準絶滅危惧
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

本種は山地性種であり（川瀬ほか，2012）、渓流沿いの緩やかな斜面や石灰岩地帯に多く棲息する。市内では、本種が棲息できる自然度の高い雑木林は少なく、生息地、個体数ともに減少している。中区三の丸 1 丁目の護国神社と守山区の庄内川河畔林にはある程度の個体群が維持されているが、分布域は狭い。また、2013 年には瑞穂区村上町の民家の庭でも本種の生体が発見されており、絶滅を免れた個体が飛び地的に生き残っていると考えられる。

形態

殻高 11～15 mm、殻径 20～30 mm 程度。殻は低く扁平なレンズ形をした螺塔。殻色は黄褐色から鈍い褐色。周縁角は鋭くとがり、殻表に鱗片状の剛毛を放射状にもち、臍孔は広く深い。殻口は菱形。その上縁は薄く、下縁は厚く白色で光沢がある。軟体は淡褐色である。



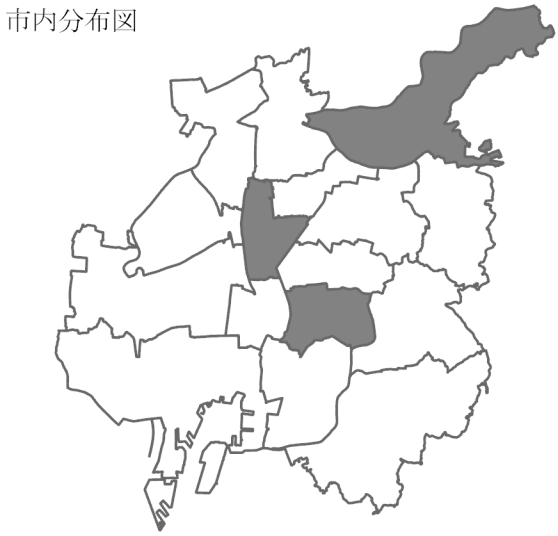
中区護国神社、2012 年 10 月 6 日、川瀬基弘　撮影

分布の概要

市内：名古屋城外堀(中区)、護国神社(中区)、瑞穂区上町、守山区竜泉寺。

県内：豊田市、新城市、田原市、岡崎市、豊橋市、豊川市など県内各地に広く分布する。

国内：本州（関東・越後・佐渡以南）、中部、近畿、中国、四国地方。



生息地の環境／生態的特性

本種が好む渓流沿いの緩やかな斜面や石灰岩地帯は市内に存在しないが、やや自然度の高い雑木林（名古屋城外堀や守山区竜泉寺）に棲息している。

現在の生息状況／減少の要因

中区三の丸の護国神社と守山区の庄内川河畔林にはある程度の個体群が維持されているが、分布域は狭く限られており、本種が棲息できるような湿度の保たれた自然度の高い雑木林は名古屋市にはあまり残されていない。

保全上の留意点

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

特記事項

DNA 分析の結果、守山区と中区または瑞穂区の個体間では、平均 23 塩基（3.5%）の違いが認められたため、両地点のオオケマイマイは異なる系統のものと判断された（川瀬ほか，2020）.

引用文献

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原　俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則，2012．岐阜市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(6):19-36.

川瀬基弘・西尾和久・松原美恵子・市原　俊・森山昭彦・熊澤慶伯，2020．名古屋市に棲息するオオケマイマイ *Aegista vulgivaga* の CO I 遺伝子からみた分子系統学的位置付け．なごやの生物多様性，7: 31-37.

関連文献

川瀬基弘，2013．Ⅱ－７なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編．都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成 24 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業），pp. 178-213，なごや生物多様性保全活動協議会.

川瀬基弘，2023．なごや生きもの一斉調査 2022 陸貝編 調査結果報告書．なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋．49 pp.

川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好，2013．名古屋市に生息する陸産貝類．瀬木学園紀要，(7): 12-17.

（川瀬基弘）

貝類　＜イシガイ目イシガイ科＞

ヤハズヌマガイ　*Buldowskia shadini* (Moskvicheva, 1973)

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

2019 年 12 月に西区山田町上小田井（庄内緑地公園）のガマ池の池干しにより名古屋市で初めて発見された。発見当初はフネドブガイ *Anemina arcaeformis* (Heude, 1877)として報告されたが（横井, 2021）、その後のミトコンドリア DNA の COI 遺伝子分析によって、ヤハズヌマガイ *Buldowskia shadini* (Moskvicheva, 1973)であることが判明した（川瀬ほか, 2020, 2021）。ガマ池の個体群と殻形態が異なるものの、千種区揚羽町（茶屋ヶ坂公園・茶屋ヶ坂池）の個体も、COI 遺伝子分析によって本種に同定された。殻形態に基づきフネドブガイに同定された全国各地の記録については、今後の遺伝子分析によりヤハズヌマガイに修正される記録があると考えられる。

西区のガマ池や千種区の茶屋ヶ坂池の本種が在来個体群である確かな証拠がなく、移入個体群である可能性も否定できないことから情報不足とした。

形態

殻は楕円形、膨らみは強い。殻長 145mm、殻高 91mm、殻幅 75mm。殻表は黒色～黒褐色で幼貝は緑色を帯びる。他のドブガイ属に比べて殻頂が中央寄りに位置する。背縁と腹縁がやや並行になる。



西区庄内緑地公園（ガマ池）、2019 年 12 月 8 日

分布の概要

市内：西区庄内緑地公園（ガマ池），千種区揚羽町茶屋ヶ坂公園（茶屋ヶ坂池）。

県内：豊橋市大岩町火打坂・三ッ池中池（川瀬ほか, 2021）、奥三河地方のため池（川瀬ほか, 2020）。

国内：宮城県名取市・樽水ダム（藤本ほか, 2024）、山梨県北杜市長坂町白井沢・みどり湖（川瀬ほか，2021）。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

おもにため池や湖など止水性の富栄養化水域の砂泥底で発見されている。

現在の生息状況／減少の要因

西区庄内緑地公園のガマ池の個体群は、2023 年の調査時に死殻の破片しか発見できず絶滅または絶滅寸前である。宿主魚類の減少や池干しなどが減少の要因と考えられる。

保全上の留意点

国内移入種か、或いは在来種かを見極めることが重要である。

特記事項

DNA 登録番号（International Nucleotide Sequence Database（INSD）のアクセッション番号）：NBC-MO-00039、NBC-MO-00040（ともに西区庄内緑地公園・ガマ池の標本）

引用文献

川瀬基弘・村松正雄・横山悠理・横井敦史・熊澤慶伯, 2020. 愛知県奥三河地域で発見された日本初記録の *Buldowskia shadini*. 瀬木学園紀要, 17: 3-8.

川瀬基弘・横山悠理・横井敦史・熊澤慶伯，2021. 愛知県名古屋市，豊橋市，山梨県北杜市で発見された *Buldowskia shadini* ヤハズヌマガイ（新称）. 瀬木学園紀要, 18: 3-9.

藤本泰文・鈴木勝利・相馬理央・内野　透・中村匡聡，2024. ヤハズヌマガイ *Buldowskia shadini*（イシガイ科）の東北地方における初確認. 水生動物，AA2024-6.

横井敦史，2021. 名古屋市西区で発見されたフネドブガイ. なごやの生物多様性，8: 87-90.

（川瀬基弘）

貝類　＜イシガイ目イシガイ科＞

タブネドブガイ属の未定種　*Buldowskia* sp.

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	－
全国 2020	－

評価理由

2011 年に天白区天白公園大根池で発見された当初は殻形態によりフネドブガイに同定された。その後、2019 年に西区庄内緑地公園ガマ池で発見され殻形態でフネドブガイに同定された個体群が、遺伝子分析によって、ヤハズヌマガイ *Buldowskia shadini* (Moskvicheva, 1973) であることが判明した（川瀬ほか，2020，2021）。そのため、天白公園大根池の個体もヤハズヌマガイの可能性があると考え、遺伝子分析を実施したところヤハズヌマガイやカタドブガイ *Buldowskia iwakawai* とは異なるタブネドブガイ属の未同定種 *Buldowskia* sp.であることが明らかになった（川瀬ほか，2023）。本種は市内では天白公園大根池のみでしか確認されておらず、2020 年の大根池の池干し調査では 2 個体しか発見されず、絶滅または絶滅寸前と考えられる。ただし外来種の可能性を否定できないため情報不足とした。

形態

殻形態ではヤハズヌマガイよりも膨らみが弱いことで区別できる。

分布の概要

市内：天白区天白公園大根池。
県内：記録なし。
国内：記録なし。

生息地の環境／生態的特性

発見された天白公園大根池は池底に厚くヘドロが堆積していた。種同定に至らず生態の詳細は不明であるが、ヤハズヌマガイやカタドブガイと似たような特徴を示すと思われる。

現在の生息状況／減少の要因

天白公園大根池での棲息状況は絶滅寸前である。ヘドロの堆積、貧酸素化、外来魚の捕食による宿主魚類の激減など総合的な環境破壊と考えられる。

保全上の留意点

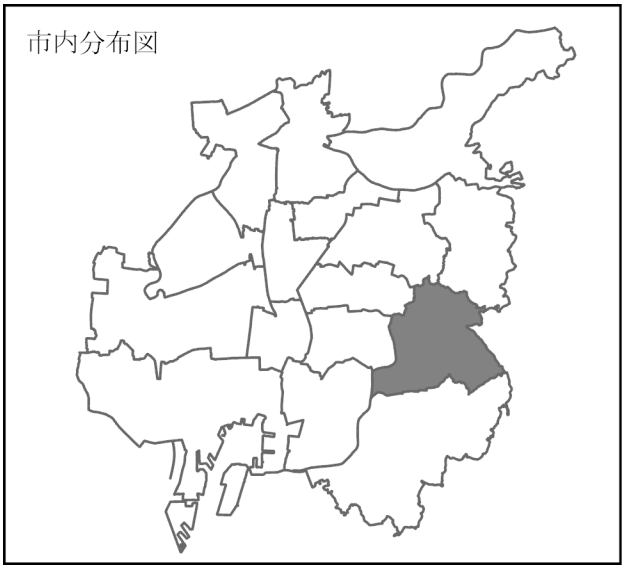
堆積したヘドロの除去、外来魚の駆除など環境全体の回復が必要である。

特記事項

名古屋市の個体群の遺伝子分析はミトコンドリア CO1 遺分析によるものであり、種同定には至らず、雑種や外来種である可能性も考慮し、将来的には核の遺伝子分析などより詳細な分析が必要である。



天白公園大根池、2011 年 11 月 3 日、川瀬基弘



引用文献

川瀬基弘・村松正雄・横山悠理・横井敦史・熊澤慶伯, 2020. 愛知県奥三河地域で発見された日本初記録の *Buldowskia shadini*. 瀬木学園紀要，17: 3-8.
川瀬基弘・横山悠理・横井敦史・熊澤慶伯，2021. 愛知県名古屋市，豊橋市，山梨県北杜市で発見された *Buldowskia shadini* ヤハズヌマガイ（新称）. 瀬木学園紀要，18: 3-9.
川瀬基弘・横山悠理・横井敦史・熊澤慶伯，2023. 名古屋市に棲息する Cristariini カラスガイ族（ドブガイ類）の種多様性. なごやの生物多様性，10: 125-133.

関連文献

川瀬基弘，2018. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書， 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋.
横井敦史，2021. 名古屋市西区で発見されたフネドブガイ. なごやの生物多様性，8: 87-90.

（川瀬基弘）

貝類　＜マルスダレガイ目　シジミ科＞

マシジミ　*Corbicula leana* Prime, 1864

評 価 区 分

名古屋市 2025	情報不足
愛 知 県 2025	情報不足
全　　国 2020	絶滅危惧 II 類

評価理由

マシジミは愛知県の平野部の河川、湖沼にごく普通に生息していた淡水二枚貝であった(愛知県科学教育センター, 1967 : 木村, 1994)。しかし、1990 年代にカネツケシジミ（タイワンシジミの黄色型）が愛知県にも移入、定着し、マシジミ分布域の多くで、移入したカネツケシジミと置き換わっていることが確認された（原田，2000 : 木村，2002)。名古屋市でも 2008 年にカネツケシジミの生息が確認された。1980 年代ですでにマシジミの生息場所が少なかった市内では現在、主な河川からマシジミの生息が確認できない。ところが、遺伝子分析の結果は、殻形態に基づく同定結果でマシジミ（またはタイワンシジミ）と同定できる個体には必ずしも対応しない。また、マシジミとタイワンシジミを同種とする見解もある（山田ほか，2010)。さらに、マシジミは近世期の外来種である可能性が高いとする見解もある（黒住，2014）。

このような理由から情報不足に位置づけた。なお、以下の文章の一部はマシジミが在来種であり、殻形態でタイワンシジミと区別できると仮定して記述している。

形態

殻長 30mm 程度の三角形に近い形をした二枚貝。殻表の成長脈はやや荒く、殻の色彩は黄褐色から黒色。カネツケシジミの典型的な個体は殻表の色彩が鮮やかな黄色で内面は白色になるので区別は明確であるが、マシジミかタイワンシジミ類か同定が困難な個体も多く出現する。



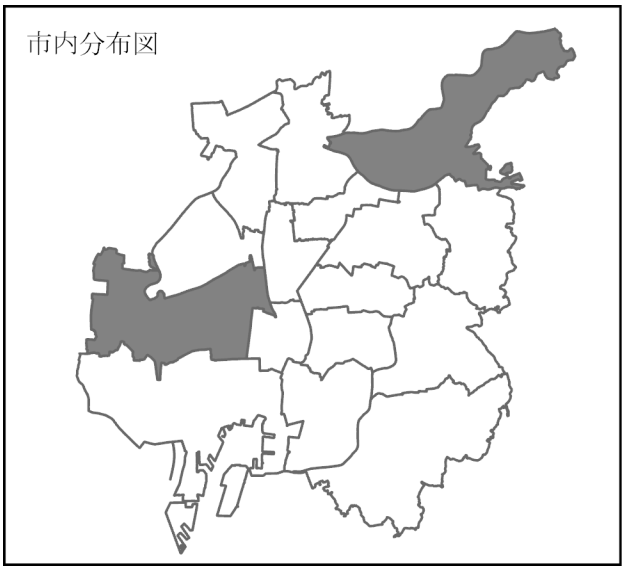
中川区の水路、2014 年 5 月 10 日、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：1980 年代の守山区での記録（酒井, 2002）の他、2014 年に中川区の水路で発見した。

県内：かつて県内各地に普通に棲息していたが近年は激減している。

国内：東北～九州・四国、奄美大島[国内移入の可能性あり]（増田・内山，2004)。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

評価理由の項参照。

保全上の留意点

タイワンシジミが移入した水域での対策はないが、移入していない生息地を早急に発見し、タイワンシジミが侵入しないように措置を講ずる必要がある。

特記事項

Barcode of Life Data Systems（BOLD）登録番号：GBJ432-14、採集地：守山区竜巻池
DNA 分析：名古屋市立大学大学院

引用文献

愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp，愛知県科学教育センター，名古屋．
原田一夫，2000．タイワンジジミが愛知県に侵入．かきつばた(26): 10.
木村昭一，1994．東海地方の淡水貝類相．研究彙報，(33): 14-34．全国高等学校水産教育研究会．
木村昭一, 2002. 豊田市におけるカネツケシジミの繁殖例．かきつばた，(28): 18-19.
黒住耐二，2014．淡水二枚貝マシジミは近世期の外来種か―遺跡出土貝類からの証明．高梨学術奨励金年報（平成 25 年度研究成果概要報告）: 67-73.
増田　修・内山りゅう，2004．日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類．240 pp，ピーシーズ，東京．
酒井　類，2002．名古屋市守山区の淡水産貝類．かきつばた，(28): 15-17.
山田充哉・石橋　亮・河村功一・古丸　明，2010．ミトコンドリア DNA のチトクローム b 塩基配列および形態から見た日本に分布するマシジミ，タイワンシジミの類縁関係．日本水産学会誌，76(5): 926-932.

（川瀬基弘）

貝類　＜オニノツノガイ（タケノコカニモリ）目カワニナ科＞

カワニナ　*Semisulcospira libertina* (A. Gould, 1859)

評　価　区　分

名古屋市 2025	情報不足
愛　知　県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

本種は 1950～60 年代に市内各地に棲息していたが（田中, 1964）、1980 年代には市内でほとんど見られなかったという情報があり、市内では絶滅寸前まで棲息地が減少した可能性が高い（川瀬ほか, 2018）。現在の市内の棲息地はホタル養殖やビオトープ作りにより人為的に放流された場所が多く、自然分布は確認できなかった。

田中（1964）の確認地点は、本星崎、天白橋、野並橋、菅田橋、島田橋、中根、植田橋、石川大橋、鳴海・白山、鳴海・天白、覚王山・法生池、汁谷・竹越、猪高弘山、守山瀬古、味鋺県営住宅、味鋺市営住宅、洗堰・蛇池、中小田井、名城濠、下ノ一色、富田町江松、野立、中野新町である。

形態

殻は高円錐形、殻高は 30～40mm 前後、螺塔は 3～5 層程度。殻高に対する螺塔の割合は 2/5 くらいで、残り 3/5 が体層を占める。一般的に殻頂部は欠損する。縦肋はない。殻底肋は 9 本前後のものが多い。殻表は黒褐色の殻皮で覆われ、内面は白色。縫合は浅い。殻口は卵形、外唇は薄くやや張り出す。蓋は革質で褐色、小旋型。



天白区野並二丁目、郷下川、2017 年 9 月 8 日

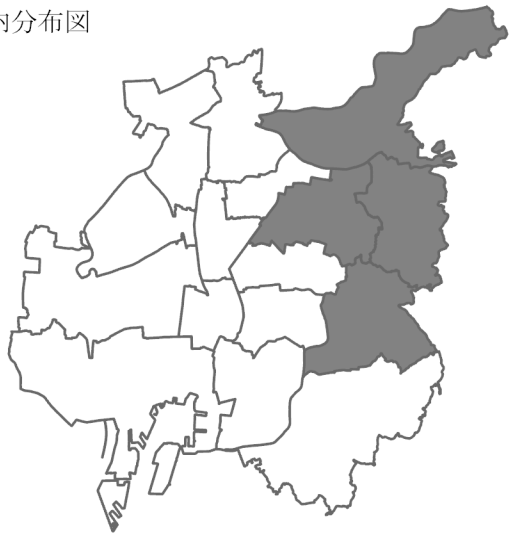
分布の概要

市内：市内分布図（川瀬, 2018）のとおり 2017 年には守山区、千種区、名東区、天白区で確認されたが、多くは人為的な放流による個体群の可能性が高い。

県内：県内各地。

国内：日本全国。

市内分布図



生息地の環境／生態的特性

河川、用水路、湖沼、ため池などの比較的有機質な砂泥底～砂礫底。雌雄異体の卵胎生、育児嚢をもつ。

現在の生息状況／減少の要因

現在の市内の棲息地のほとんどはホタル養殖やビオトープ作りのため人為的に放流された個体群である可能性が高い。高度経済成長期の棲息環境の破壊や水質汚濁等により激減した可能性が高い。

保全上の留意点

水質・底質の汚濁、コイの放流、ホタル養殖やビオトープ作りによる乱獲などの防止。

引用文献

川瀬基弘, 2018. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編 報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘・市原　俊・寺本匡寛・鵜飼　普, 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.

田中守彦, 1964. 名古屋市産淡水貝類の研究, 20pp.（謄写）.

関連文献

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.

川瀬基弘・寺本匡寛, 2018. なごや生きもの一斉調査～淡水貝編～. 平成 29 年度なごや生物多様性保全活動協議会活動報告書. pp. 22-25, なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

紀平　肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類, 131pp. たたら書房, 鳥取.

紀平　肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159 pp. ピーシーズ, 東京.

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, 33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

増田　修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.

田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録, 14pp,（謄写）.

（川瀬基弘）

貝類　＜オニノツノガイ（タケノコカニモリ）目カワニナ科＞

チリメンカワニナ　*Semisulcospira reiniana* (Brot, 1876)

評　価　区　分

名古屋市 2025	情報不足
愛　知　県 2025	－
全　　国 2020	－

評価理由

1950～60 年代に市内からの記録はなく（田中，1964）、1980 年代には市内でほとんど見られなかったという情報があり、市内では絶滅または絶滅寸前まで棲息地が減少した可能性が高い（川瀬ほか, 2018）。現在の市内の棲息地については、ホタル養殖やビオトープ作りによりカワニナ類が人為的に放流された場所が多く、カワニナの自然分布については確認できなかった。2017 年に実施された市内 61 地点の淡水産貝類の一斉調査では、守山区、千種区、昭和区、天白区、中川区の 5 区 6 地点で確認されているが（川瀬，2018）、これらの多くは人為的放流による個体群である可能性が高い。

形態

殻は高円錐形、殻頂方向へ緩やかに細くなる。殻高は 30～40mm 前後、螺塔は 4～5 層程度。一般的に殻頂部は欠損する。縦肋の顕著な個体が多いが不明瞭な場合もある。殻底肋は 6～12 本で 9 本前後のものが多い。殻表は黒褐色の殻皮で覆われ、内面は白色。縫合は浅い。殻口は卵形、外唇は薄くやや張り出す。蓋は革質で褐色、小旋型。



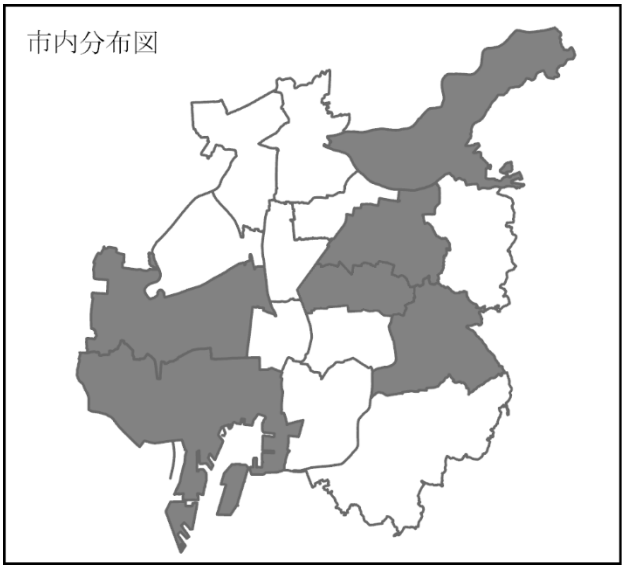
守山区上志段味東谷大矢川、2017 年 9 月 1 日、川瀬基弘

分布の概要

市内：市内分布図（川瀬，2018）のとおり 2017 年には守山区、千種区、昭和区、天白区、中川区で確認されたが、多くは人為的な放流による個体群の可能性が高い。

県内：県内各地。

国内：東北～西日本（増田・内山，2004）。



生息地の環境／生態的特性

河川、用水路、湖沼、ため池などの比較的有機質な砂泥底～砂礫底。雌雄異体の卵胎生、育児嚢をもつ。

現在の生息状況／減少の要因

現在の市内の棲息地のほとんどはホタル養殖やビオトープ作りのため人為的に放流された個体群である可能性が高い。古い記録が少なく、もともと市内には棲息していなかったか、棲息地点数・個体数ともに少なかった可能性がある。

保全上の留意点

水質・底質の汚濁、コイの放流、ホタル養殖やビオトープ作りによる乱獲などの防止。

引用文献

川瀬基弘, 2018. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう！水の中の妖精～淡水貝編報告書, 40 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘・市原　俊・寺本匡寛・鵜飼　普, 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.

増田　修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. 240pp. ピーシーズ, 東京.

田中守彦，1964. 名古屋市産淡水貝類の研究，20pp.（謄写）.

関連文献

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.

川瀬基弘・寺本匡寛，2018. なごや生きもの一斉調査～淡水貝編～. 平成 29 年度なごや生物多様性保全活動協議会活動報告書:22-25, なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

紀平　肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類, 131pp. たたら書房, 鳥取.

紀平　肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159 pp. ピーシーズ, 東京.

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, 33: 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

（川瀬基弘）

貝類　＜オニノツノガイ（タケノコカニモリ）目トゲカワニナ科＞

タケノコカワニナ　*Stenomelania crenulata* (Deshayes, 1838)

評　価　区　分

名古屋市 2025	情報不足
愛　知　県 2025	絶滅
全　　国 2020	絶滅危惧Ⅱ類

評価理由

愛知県では絶滅（EX）と評価されており（愛知県環境調査センター，2020），50 年以上，生貝は発見されていない。しかし，2022 年夏，大江川河口で幼貝が発見され，翌年には多くの亜成貝と成貝が発見された。2020～2021 年度の環境アセスメントでは発見されておらず，2022 年または 2021 に浮遊幼生が侵入し，2022 年には幼貝に成長した可能性が高いと考える（川瀬ほか，2024）。全国では絶滅危惧 II 類（VU）と評価されている（環境省，2020）。和田ほか（1996）では絶滅寸前と評価されている。2022～2023 年にかけて大江川で発見された個体群は死滅回遊による無効分散となることも考えられる（川瀬ほか，2024）。なお、ミトコンドリア CO I 分析において、大江川の個体は高知県および沖縄県の塩基配列と一致した。

形態

殻は黄褐色～黒褐色，塔状で細長い。殻表は平滑、縫合下に弱い螺状溝がある。軸唇は少し厚くなる。殻口は卵形で臍孔は閉じる。成長すると一般に殻高 60mm を超えるが、大江川の個体は 30～40mm 前後であった。



大江川河口、2023 年 7 月 7 日、撮影：川瀬基弘

分布の概要

市内：大江川河口。
県内：絶滅。
国内：紀伊半島以南。
世界：太平洋、インド洋。

生息地の環境／生態的特性

感潮域上限付近の砂や礫が混ざった泥底（ごく薄い塩濃度の塩性湿地を伴う環境）に棲息する。

現在の生息状況／減少の要因

堤防や河口堰の建設等で前述の生息環境が失われている。

保全上の留意点

感潮域上限付近の水が停滞するような泥底など、棲息環境の保全が不可欠であり、棲息環境が既に消失している場合には，新たに棲息環境を創出する必要がある。



特記事項

日本ベントス学会（2012）の *Stenomelania rufescens* (E. von Martens, 1860)は本種のシノニムである。最近の分子系統解析によりムチカワニナと同種であることが指摘されているが、両者は形態的に異なる（日本ベントス学会，2012）.

引用文献

愛知県環境調査センター，2020．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020―動物編―．愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋．768 pp.

環境省，環境省レッドリスト 2020. http://www.env.go.jp/press/files/jp/114457.pdf，2023 年 8 月 6 日確認

川瀬基弘・市原　俊・横井敦史，2024．名古屋市大江川感潮域に棲息する貝類．なごやの生物多様性，11: 105-113.

日本ベントス学会（編），2012．干潟の絶滅危惧動物図鑑．東海大学出版会，秦野．285 pp.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五嶋聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏，1996．日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状．WWF Japan サイエンスレポート，3．182 pp.

関連文献

小宮春平・今村陵佑・宗田一晃・中島 淳，2020．福岡県と佐賀県の日本海側におけるタケノコカワニナの記録．ニッチェ・ライフ, 8: 3-4.

（川瀬基弘）

貝類　＜シロネズミ目シロネズミガイ科＞

ヒナツボ　*Berthais egregia* (A. Adams, 1863)

評価区分	
名古屋市 2025	情報不足
愛知県 2025	情報不足
全国 2020	－

評価理由

本種は瀬戸内海を模式産地とし、和歌山県から九州の内湾域の潮下帯に生息することが知られているが、ほとんど生貝が採集された記録がなく（和田ほか，1996）、河合（2009）が金城埠頭造成時にサンドポンプで得られた新鮮な死殻の採集を報告するまで、愛知県からの産出の記録自体がなかった。小型種かつ希少種であるため、本種の情報が少なく、今回は情報不足と評価された。和田ほか（1996）では、希少とランクされている。

形態

殻高約 5mm で、貝殻は白色で細長い紡錘型。縫合部で強くくびれ、各層は肩部がやや角張る。殻表には肩部で湾曲する細長い縦肋と微細な螺肋がある。臍孔は閉じる。



中部更新統渥美層群産の化石、市原 俊　撮影

分布の概要

市内：金城埠頭造成時に周辺水域よりサンドポンプで新鮮な死殻が 1 個体のみ採集された。

県内：上記のとおり、金城埠頭周辺水域のサンドポンプで得られた新鮮な死殻が 1 個体以外に生貝の記録はない。化石記録については特記事項を参照。

国内：和歌山県田辺湾、佐賀県伊万里湾、熊本県天草富岡など、伊豆半島～九州西岸の潮下帯（水深 10～50 m）。

世界：記録なし。



生息地の環境／生態的特性

評価理由の項参照。

現在の生息状況／減少の要因

評価理由の項参照。

保全上の留意点

情報不足である。

特記事項

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。渥美層群豊橋層高松シルト質砂岩部層の *Tonna* Bed ヤツシロガイ層から 50 個体ほど発見されているが、全種の産出個体数から判断すると極めて稀産であり、当時から棲息個体数は少なかった可能性がある。

河合（2009）では、本種と共に、タクミニナ、ツキガイモドキ、ウラカガミ、ハナグモリが記録されている。

引用文献

河合秀高，2009．名古屋港のサンドポンプで得られた貝．かきつばた，(34): 20.

川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鵜飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要, (7): 38-48.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島　哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤　真・島村賢正・福田　宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp.世界自然保護基金日本委員会，東京．

関連文献

川瀬基弘・市原　俊・河合秀高，2015．中部更新統渥美層群の軟体動物化石．瑞浪市化石博物館研究報告, 41: 51-131, 34 pls., 1 fig., 2 tables.奥谷喬司 編著，2000．日本近海産貝類図鑑，1173pp，東海大学出版会，東京．

奥谷喬司 編著，2000．日本近海産貝類図鑑，1173pp，東海大学出版会，東京．

（川瀬基弘）

【 資 料 編 】

１．名古屋市版レッドリスト 2025（案）（2024 年 5 月公表）からの変更点

２．レッドデータブックなごや・動物編に関するＱ＆Ａ

３．執筆責任者および協力者

１．名古屋市版レッドリスト 2025（案）（2024 年 5 月公表）からの変更点

名古屋市版レッドリスト 2025（案）に掲載されていた動物のうち、今回見直しを行った結果レッドリストから追加・削除されたものの種名及び理由は以下の通りである。

（１）哺乳類

変更なし。

（２）鳥類

追加・削除はない。最新の「日本鳥類目録改訂第 8 版」（日本鳥学会，2024）に準拠したため、種の並びや学名を一部変更した。

（３）爬虫類

変更なし。

（４）両生類

追加・削除はない。ニホンアマガエルについて、最新の知見に従い名古屋市内の個体群は新種「ヒガシニホンアマガエル」と判断したため、種名と学名を変更した。

（５）魚類

追加・削除はない。最新の分類体系に準拠し再整理したため、種の並びを一部変更した。

（６）昆虫類

ウスバカマキリを情報不足としていたが、県内では多くはないものの散発的に産地が見つかっていることから、リスト外とした。

（７）クモ類

変更なし。

（８）エビ・カニ類

ミナミヌマエビを情報不足としていたが、名古屋市内での確実な生息記録が確認できなかったこと、分類的な問題をはらんでいることから、リスト外とした。

（９）貝類

ミジンマイマイを情報不足としていたが、再検討の結果リスト外とした。また、最新の分類体系に準拠し再整理したため、種の並びを一部変更した。

２．レッドデータブックなごや・動物編に関するＱ＆Ａ

以下に、今まで公表したレッドリスト／レッドデータブックに対して寄せられた主な質問、意見等について、回答（補足説明）を掲載した。

Q1：レッドリスト掲載種は、希少種と考えてよいか。

A1：レッドリストは、それぞれの種に対して現在加えられている圧力が将来もそのまま継続すると仮定した場合、その種の絶滅リスクがどの程度であるかという観点から評価が行われています。そのため、リスト掲載種はかならずしも希少種というわけではありません。例えば、以前からごく普通に見られ現在もまだかなりの個体数が存在している種 A でも、減少傾向が著しくこのまま減少した場合は、もともと希少であったが減少傾向が著しくない種 B よりも早く絶滅してしまうと考えられます。このような場合、種 A は種 B よりも高いランクに評価されます。ただし、生育地点が限られているという意味で希少な種は、たとえ今まで特に減少していなくても、その場所が何かの事情により破壊されれば容易に絶滅してしまう可能性があります。このように存続の基盤が脆弱な種は、その点も考慮して評価が行われています。

Q2：名古屋市のレッドデータブックは、名古屋市独自の基準で作ればよいと思う。なぜ国際基準や国の基準を考慮するのか。

A2：名古屋市のレッドデータブックは、絶滅危惧生物に関する広範な情報ネットワークの一部をなすものです。それぞれの地域がそれぞれ勝手な基準でレッドデータブックを作成しては、情報の互換性が保証されません。そのようなわけで名古屋市のレッドデータブックは、日本全体、あるいは愛知県全体のリストと整合性を持つように評価基準を設定し、実際の評価を行っています。

３．執筆責任者および協力者

レッドデータブックの作成にあたりましては、以下の方々に協力していただきました。また、敬称は略させていただきました。

執筆責任者

哺乳類

曽根啓子　　名和　明　　野呂達哉　　古山　歩

鳥類

金澤　智　　小笠原昭夫（故人）

爬虫類

矢部　隆

両生類

藤谷武史

魚類

間野静雄　　浅香智也　　荒尾一樹　　大仲知樹　　地村佳純　　谷口義則　　鳥居亮一
向井貴彦

昆虫類

江田信豊　　大野友豪　　岡田正哉　　佐藤正孝（故人）　　澤田宗一郎　　髙﨑保郎
田中多喜彦（故人）　戸田尚希　　成田茂生　　長谷川道明　間野隆裕　　水野利彦
矢崎充彦

クモ類

加藤修朗

エビ・カニ類

天野　勲　　中嶋清徳

貝類

川瀬基弘　　木村昭一

現地調査、遺伝子分析、情報や写真の提供等に協力していただいた方

哺乳類

石原則義（故人）　伊藤勇輝　宇地原永吉　宇地原優之　梅本洋子　小野知洋
加藤俊紀　熊澤慶伯　黒川　景　曽根啓子　髙木和彦　名和　明　野呂達哉
林希一郎　日野輝明　深田　仁　古山　歩
愛知守山自然の会　愛知用水総合管理所　中志段味の自然を次世代に伝える会
なごや生物多様性センター　なごや生物多様性保全活動協議会
名古屋市立大学大学院理学研究科熊澤研究室　名古屋大学未来材料・システム研究所林研究室
花水緑の会　名城大学農学部環境動物学研究室　名城大学野生動物生態研究会
名東自然倶楽部　四日市大学野生動物保全学研究室

鳥類

小笠原昭夫（故人）　金澤　智　新實　豊　西村祐輝　林　正直　竹田恵一郎
村上　修
日本野鳥の会　愛知県支部

爬虫類

石原則義（故人）　鵜飼　普　宇地原永吉　大矢美紀　鬼頭　保（故人）　研谷　厚
中西倜夫　野呂達哉　藤谷武史　堀田　守　矢部ユカ　矢部　隆

両生類

石原則義（故人）　市岡幸雄　岩山颯希　井土清司　鵜飼　普　梅本洋子
宇地原永吉　加藤航大　國枝奎吾　熊澤慶伯　佐藤利行　榊原正己　柴田美子
島田知彦　高木雅紀　瀧川正子　田中理映子　棚川菊蔵　水野いづみ　水谷康一
森川晴つみ　矢部　隆　山田律子　山田祥夫　渡辺滋子　野呂達哉　三浦郁夫
名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター
名古屋市東山動植物園　名古屋市立丸の内中学校

魚類

浅香智也　荒尾一樹　鵜飼　普　宇治原永吉　大仲知樹　大矢美紀　加藤航大
國村恵子　下山淳二　谷口義則　地村佳純　鳥居亮一　野呂達哉　古橋　芽
間野静雄　向井貴彦　淀　太我
犬山フィールドサイエンス　名古屋市水辺研究会　名城大学人間学部人間学科谷口研究室
山崎川グリーンマップ

昆虫類

安藤　尚（故人）　安藤泰樹　伊藤健太郎　鵜殿清文　岡田正哉（故人）
佐藤正孝（故人）　清水典之　髙崎保郎　田中多喜彦（故人）　戸田尚希　長谷川道明
福住和也（故人）　水野利彦　矢崎充彦　山本雅人　横地鋭典

クモ類

加藤修朗　　熊田憲一　　萩野典子　　板倉泰弘
熱田神宮　　名古屋城管理事務所

エビ・カニ類

浅香智也　　天野　勲　　岩谷康輝　　鵜飼　普　　宇地原永吉　梅村幸稔　　尾田愛実
加藤航大　　川瀬基弘　　岸　晃大　　國枝奎吾　　佐藤利行　　祖父江章好　戸苅辰哉
西部理恵　　原田千里　　藤谷武史　　間部裕子　　村上雄大　　山﨑陽子　　横井敦史
吉原悠太　　渡邊蒼太
稲永ビジターセンター　　環境省中部地方環境事務所　　建設省中部土木事務所
（公財）名古屋みなと振興財団（名古屋港水族館）　　名古屋港管理組合
藤前干潟活動センター　　藤前干潟を守る会　　名城大学農学部生物環境科学科

貝類

浅香智也　　古川善嗣　　早瀬善正　　家山博史　　市原　俊　　今尾由美子　石黒鐐三
河合秀高　　川瀬竣大　　木村昭一　　熊澤慶伯　　松原和純　　松原美恵子　森川晴つみ
森山昭彦　　守谷茂樹　　村松正雄　　中嶋清徳　　西　浩孝　　西尾和久　　野呂達哉
大八木麻希　大八木柊悟　大矢美紀　　柴田美世子　寺本匡寛　　鳥居亮一　　宇地原永吉
鵜飼　普　　山田律子　　横井敦史　　横山悠理
名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター
ＩＦＦ東海　　名古屋貝類談話会　　なごや生物多様性保全活動協議会
熱田神宮　　中部大学応用生物学部環境生物科学科

【　索　引　】

１．索引（和名五十音順）

２．索引（分類順）

１．索引（五十音順）

（１）哺乳類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	アカギツネ	食肉	イヌ	*Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)	－	－	EN	48
2	アカネズミ	齧歯	ネズミ	*Apodemus speciosus* (Temminck, 1844)	－	－	VU	49
3	アナグマ	食肉	イタチ	*Meles anakuma* Temminck, 1842	－	NT	CR	41
4	オオカミ	食肉	イヌ	*Canis lupus* Linnaeus, 1758	EX	EX	EX	32
5	オヒキコウモリ	翼手	オヒキコウモリ	*Tadarida insignis* (Blyth, 1862)	VU	DD	CR	39
6	カヤネズミ	齧歯	ネズミ	*Micromys minutus* (Pallas, 1771)	－	VU	EN	45
7	カモシカ	偶蹄	ウシ	*Capricornis crispus* (Temminck, 1836)	－	－	CR	43
8	コウベモグラ	真無盲腸	モグラ	*Mogera wogura* (Temminck, 1842)	－	LP	VU	50
9	スナメリ	鯨	ネズミイルカ	*Neophocaena asiaeorientalis* (Pilleri et Gihr, 1972)	－	NT	CR	44
10	タヌキ	食肉	イヌ	*Nyctereutes viverrinus* (Temminck, 1839)	－	－	NT	51
11	ニホンイタチ	食肉	イタチ	*Mustela itatsi* Temminck, 1844	－	－	CR	42
12	ニホンキクガシラコウモリ	翼手	キクガシラコウモリ	*Rhinolophus nippon* Temminck, 1835	－	NT	CR	38
13	ニホンジネズミ	真無盲腸	トガリネズミ	*Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842)	－	LP	CR	37
14	ニホンテン	食肉	イタチ	*Martes melampus* (Wagner, 1840)	－	NT	CR	40
15	ニホンノウサギ	兎形	ウサギ	*Lepus brachyurus* Temminck, 1844	－	NT	CR	36
16	ニホンリス	齧歯	リス	*Sciurus lis* Temminck, 1844	LP	NT	CR	33
17	ハタネズミ	齧歯	キヌゲネズミ	*Alexandromys montebelli* (Milne-Edwards, 1872)	－	NT	CR	35
18	ヒナコウモリ	翼手	ヒナコウモリ	*Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)	－	EN	EN	47
19	ヒミズ	真無盲腸	モグラ	*Urotrichus talpoides* Temminck, 1841	－	－	EN	46
20	ムササビ	齧歯	リス	*Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827)	－	NT	CR	34

（２）鳥類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	アオバズク	フクロウ	フクロウ	*Ninox japonica* (Temminck & Schlegel, 1845)	－	繁殖 EN 通過 VU	VU	80
2	アカアシシギ	チドリ	シギ	*Tringa totanus* (Linnaeus, 1758)	VU	通過 VU	NT	97
3	イカルチドリ	チドリ	チドリ	*Charadrius placidus* Gray & Gray, 1863	－	繁殖 VU 越冬 NT	NT	87
4	ウズラ	キジ	キジ	*Coturnix japonica* Temminck & Schlegel, 1849	VU	越冬 EN	DD	105
5	ウズラシギ	チドリ	シギ	*Calidris acuminata* (Horsfield, 1821)	－	通過 EN	VU	74
6	エリマキシギ	チドリ	シギ	*Calidris pugnax* (Linnaeus, 1758)	－	通過 CR	NT	94
7	オオコノハズク	フクロウ	フクロウ	*Otus semitorques* Temminck & Schlegel, 1844	－	繁殖 VU 越冬 NT	NT	103
8	オオジシギ	チドリ	シギ	*Gallinago hardwickii* (Gray, 1831)	NT	繁殖 EX 通過 VU	EN	63
9	オオソリハシシギ	チドリ	シギ	*Limosa lapponica* (Linnaeus, 1758)	VU	通過 EN	NT	91
10	オオタカ	タカ	タカ	*Accipiter gentilis* (Linnaeus, 1758)	NT	繁殖 VU 越冬 VU	NT	102
11	オグロシギ	チドリ	シギ	*Limosa limosa* (Linnaeus, 1758)	－	通過 EN	VU	73
12	オバシギ	チドリ	シギ	*Calidris tenuirostris* (Horsfield, 1821)	－	通過 VU	NT	92
13	カッコウ	カッコウ	カッコウ	*Cuculus canorus* Linnaeus, 1758	－	繁殖 VU 通過 NT	NT	84
14	クイナ	ツル	クイナ	*Rallus indicus* Blyth, 1849	－	越冬 NT	NT	85
15	クロツラヘラサギ	ペリカン	トキ	*Platalea minor* Temminck & Schlegel, 1849	EN	越冬 VU	CR	61
16	ケリ	チドリ	チドリ	*Vanellus cinereus* (Blyth, 1842)	DD	繁殖 NT 越冬 VU	国・県ﾘｽﾄ	108
17	コアジサシ	チドリ	カモメ	*Sternula albifrons* (Pallas, 1764)	VU	繁殖 EN 通過 VU	EN	65
18	コイカル	スズメ	アトリ	*Eophona migratoria* Hartert, 1903	－	－	VU	83

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
19	コオバシギ	チドリ	シギ	*Calidris canutus* (Linnaeus, 1758)	－	通過 VU	NT	93
20	コシアカツバメ	スズメ	ツバメ	*Cecropis daurica* (Laxmann, 1769)	－	－	VU	82
21	コノハズク	フクロウ	フクロウ	*Otus sunia* (Hodgson, 1836)	－	繁殖 CR 通過 VU	EN	68
22	サシバ	タカ	タカ	*Butastur indicus* (Gmelin, 1788)	VU	繁殖 EN 通過 NT	VU	79
23	サンショウクイ	スズメ	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus* (Raffles, 1822)	VU	繁殖 － 通過 －	NT	104
24	シベリアオオハシシギ	チドリ	シギ	*Limnodromus semipalmatus* (Blyth, 1848)	DD	通過 CR	DD	106
25	シロチドリ	チドリ	チドリ	*Charadrius alexandrinus* Linnaeus, 1758	VU	繁殖 EN 越冬 VU	NT	88
26	ズグロカモメ	チドリ	カモメ	*Saundersilarus saundersi* (Swinhoe, 1871)	VU	越冬 VU	VU	76
27	セイタカシギ	チドリ	セイタカシギ	*Himantopus himantopus* (Linnaeus, 1758)	VU	繁殖 VU 越冬 NT	NT	86
28	ダイシャクシギ	チドリ	シギ	*Numenius arquata* (Linnaeus, 1758)	－	越冬 VU	NT	90
29	タカブシギ	チドリ	シギ	*Tringa glareola* Linnaeus, 1758	VU	通過 EN	VU	75
30	タマシギ	チドリ	タマシギ	*Rostratula benghalensis* (Linnaeus, 1758)	VU	繁殖 EN 越冬 EN	EN	62
31	チュウサギ	ペリカン	サギ	*Ardea intermedia* Wagler, 1829	NT	繁殖 NT 通過 NT	NT	98
32	チュウヒ	タカ	タカ	*Circus spilonotus* Kaup, 1847	EN	繁殖 CR 越冬 VU	VU	78
33	ツミ	タカ	タカ	*Accipiter gularis* (Temminck & Schlegel, 1845)	－	繁殖 NT 通過 －	NT	100
34	ツルシギ	チドリ	シギ	*Tringa erythropus* (Pallas, 1764)	VU	通過 EN	EN	64
35	トモエガモ	カモ	カモ	*Sibirionetta formosa* (Georgi, 1775)	VU	越冬 VU	VU	70
36	ノジコ	スズメ	ホオジロ	*Emberiza sulphurata* Temminck & Schlegel, 1848	NT	繁殖 EX 通過 EN	DD	107
37	ハイタカ	タカ	タカ	*Accipiter nisus* (Linnaeus, 1758)	NT	越冬 NT	NT	101
38	ハチクマ	タカ	タカ	*Pernis ptilorhynchus* (Temminck, 1821)	NT	越冬 VU 通過リスト外	VU	77
39	ハマシギ	チドリ	シギ	*Calidris alpina* (Linnaeus, 1758)	NT	越冬 VU	NT	95
40	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	*Falco peregrinus* Tunstall, 1771	VU	繁殖 VU 越冬 NT	VU	81
41	ヒクイナ	ツル	クイナ	*Zapornia fusca* (Linnaeus, 1766)	NT	繁殖 VU 通過 NT	VU	71
42	フクロウ	フクロウ	フクロウ	*Strix uralensis* Pallas, 1771	－	繁殖 NT 越冬 NT	EN	69
43	ホウロクシギ	チドリ	シギ	*Numenius madagascariensis* (Linnaeus, 1766)	VU	通過 EN	VU	72
44	ミサゴ	タカ	ミサゴ	*Pandion haliaetus* (Linnaeus, 1758)	NT	繁殖 VU 越冬リスト外	NT	99
45	ミゾゴイ	ペリカン	サギ	*Gorsachius goisagi* (Temminck, 1836)	VU	繁殖 VU 通過 NT	EN	67
46	メダイチドリ	チドリ	チドリ	*Charadrius mongolus* Pallas, 1776	－	－	NT	89
47	ヤマシギ	チドリ	シギ	*Scolopax rusticola* Linnaeus, 1758	－	越冬 NT	NT	96
48	ヨシゴイ	ペリカン	サギ	*Ixobrychus sinensis* (Gmelin, 1789)	NT	繁殖 CR 通過 CR	EN	66
49	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	*Caprimulgus jotaka* Temminck & Schlegel, 1844	NT	繁殖 EN 通過 VU	CR	60

和名索引

（３）爬虫類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	クサガメ	カメ	イシガメ	*Mauremys reevesii* (Gray, 1831)	－	－	DD	126
2	シマヘビ	有鱗	ナミヘビ	*Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)	－	－	NT	125
3	ジムグリ	有鱗	ナミヘビ	*Euprepiophis conspicillatus* (Boie, 1826)	－	－	EN	120
4	シロマダラ	有鱗	ナミヘビ	*Lycodon orientalis* (Hilgendorf, 1880)	－	DD	EN	119
5	タカチホヘビ	有鱗	タカチホヘビ	*Achalinus spinalis* Peters, 1869	－	DD	DD	128
6	ニホンイシガメ	カメ	イシガメ	*Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel, 1838)	NT	NT	VU	121
7	ニホンスッポン	カメ	スッポン	*Pelodiscus japonicus* (Temminck et Schlegel, 1838)	DD	DD	DD	127
8	ニホンマムシ	有鱗	クサリヘビ	*Gloydius blomhoffii* (Boie, 1826)	－	－	VU	124
9	ヒバカリ	有鱗	ナミヘビ	*Hebius vibakari vibakari* (Boie, 1826)	－	－	VU	122
10	ヤマカガシ	有鱗	ナミヘビ	*Rhabdophis tigrinus* (Boie, 1826)	－	DD	VU	123

（４）両生類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	アカハライモリ	有尾	イモリ	*Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)	NT	NT	CR	134
2	アズマヒキガエル	無尾	ヒキガエル	*Bufo formosus* Boulenger, 1883	－	－	CR	135
3	オワリサンショウウオ	有尾	サンショウウオ	*Hynobius owariensis* Sugawara Fujitani Seguchi Sawahata et Nagano, 2022	VU	－	CR	133
4	シュレーゲルアオガエル	無尾	アオガエル	*Rhacophorus schlegelii* (Günther, 1858)	－	－	CR	139
5	タゴガエル	無尾	アカガエル	*Rana tagoi* Okada, 1928	－	－	DD	142
6	ツチガエル	無尾	アカガエル	*Glandirana rugosa* (Temminck et Schlegel, 1838)	－	－	CR	137
7	トノサマガエル	無尾	アカガエル	*Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)	NT	国リスト	VU	140
8	ナゴヤダルマガエル	無尾	アカガエル	*Pelophylax porosus brevipodus* (Ito, 1941)	EN	VU	CR	138
9	ニホンアカガエル	無尾	アカガエル	*Rana japonica* Boulenger, 1879	－	－	CR	136
10	ヒガシニホンアマガエル	無尾	アマガエル	*Dryophytes leopardus* Shimada, Matsui et Tanaka, 2025	－	－	DD	141

（５）魚類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	アカザ	ナマズ	アカザ	*Liobagrus reini* Hilgendorf, 1878	VU	NT	CR	153
2	アユ	サケ	アユ	*Plecoglossus altivelis altivelis* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	VU	166
3	ウキゴリ	スズキ	ハゼ	*Gymnogobius urotaenia* (Hilgendorf, 1879)	－	－	NT	174
4	ウグイ	コイ	コイ	*Tribolodon hakonensis* (Günther, 1877)	－	－	NT	170
5	ウシモツゴ	コイ	コイ	*Pseudorasbora pumila* subsp.	CR	CR	DD	177
6	ウツセミカジカ	スズキ	カジカ	*Cottus reinii* Hilgendorf, 1879	EN	VU	EN	160
7	エドハゼ	スズキ	ハゼ	*Gymnogobius macrognathos* Bleeker, 1860	VU	NT	EN	163
8	オイカワ（庄内川個体群）	コイ	コイ	*Opsariichthys platypus* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	LP	181
9	カマキリ（アユカケ）	スズキ	カジカ	*Rheopresbe kazika* (Jordan et Starks, 1904)	VU	EN	EN	159
10	カワアナゴ	スズキ	カワアナゴ	*Eleotris oxycephala* Temminck et Schlegel, 1845	－	NT	VU	169
11	カワバタモロコ	コイ	コイ	*Hemigrammocypris rasborella* Fowler, 1910	EN	EN	CR	149
12	カワヒガイ	コイ	コイ	*Saucocheilichthys variegatus variegatus* (Temminck et Schlegel, 1846)	NT	CR	DD	178
13	カワムツ	コイ	コイ	*Candidia temminckii* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	EN	157
14	キタドジョウ	コイ	ドジョウ	*Misgurnus* sp. (Clade A)	DD	CR	CR	150
15	クルメサヨリ	ダツ	サヨリ	*Hyporhamphus intermedius* (Cantor, 1842)	NT	DD	DD	180
16	コイ（在来型）	コイ	コイ	*Cyprinus carpio* Linnaeus, 1758	LP	DD	DD	175
17	サツキマス・アマゴ	サケ	サケ	*Oncorhynchus masou ishikawae* Jordan et McGregor, 1925	NT	DD	DD	179
18	シラウオ	サケ	シラウオ	*Salangichthys microdon* (Bleeker, 1860)	－	VU	VU	167
19	スナヤツメ類	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	*Lethenteron* sp.	VU	EN	CR	147
20	スミウキゴリ	スズキ	ハゼ	*Gymnogobius petschiliensis* (Rendahl, 1924)	－	－	NT	173
21	ゼゼラ	コイ	コイ	*Biwia zezera* (Ishikawa, 1895)	VU	NT	VU	164
22	タモロコ	コイ	コイ	*Gnathopogon elongatus elongatus* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	NT	171

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
23	トウカイコガタスジシマドジョウ	コイ	ドジョウ	*Cobitis minamorii tokaiensis* Nakajima, 2012	EN	EN	CR	151
24	トウカイヨシノボリ	スズキ	ハゼ	*Rhinogobius telma* Suzuki, Kimura and Shibukawa, 2019	NT	CR	CR	155
25	ドジョウ	コイ	ドジョウ	*Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor, 1842)	NT	VU	VU	165
26	トビハゼ	スズキ	ハゼ	*Periophthalmus modestus* Cantor, 1842	NT	VU	EN	161
27	ドンコ	スズキ	ドンコ	*Odontobutis obscura* (Temminck et Schlegel, 1845)	－	EN	CR	154
28	ナマズ	ナマズ	ナマズ	*Silurus asotus* Linnaeus, 1758	－	－	NT	172
29	ニシシマドジョウ	コイ	ドジョウ	*Cobitis* sp. BIWAE type B	－	VU	EN	158
30	ニホンウナギ	ウナギ	ウナギ	*Anguilla japonica* Temminck et Schlegel, 1847	EN	EN	EN	156
31	ヌマムツ	コイ	コイ	*Candidia sieboldii* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	DD	176
32	ホトケドジョウ	コイ	フクドジョウ	*Lefua echigonia* Jordan et Richardson, 1907	EN	EN	CR	152
33	マサゴハゼ	スズキ	ハゼ	*Pseudogobius masago* (Tomiyama, 1936)	VU	VU	EN	162
34	ミナミメダカ	ダツ	メダカ	*Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel, 1846)	VU	VU	VU	168
35	ヤリタナゴ	コイ	コイ	*Tanakia lanceolata* (Temminck et Schlegel, 1846)	NT	CR	CR	148

（６）昆虫類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	アオハダトンボ	トンボ	カワトンボ	*Calopteryx japonica* Selys, 1869	NT	国リスト	EX	189
2	アオヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Brachytron longistigma* (Selys, 1883)	NT	CR	CR	223
3	アカマダラハナムグリ	コウチュウ	コガネムシ	*Anthracophora rusticola* Burmeister, 1842	DD	NT	EN	263
4	アトジロキリガ	チョウ	ヤガ	*Dioszeghyana mirabilis* (Sugi, 1955)	－	－	NT	351
5	アヤコバネナミシャク	チョウ	シャクガ	*Acasis bellaria* (Leech, 1891)	－	－	VU	288
6	アヤスジミゾドロムシ	コウチュウ	ヒメドロムシ	*Graphelmis shirahatai* (Nomura, 1958)	EN	－	NT	325
7	イグチケブカゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Peronomerus auripilis* Bates, 1883	NT	－	NT	322
8	イチモンジチョウ	チョウ	タテハチョウ	*Limenitis camilla japonica* Ménétriès, 1857	－	－	VU	285
9	イトアメンボ	カメムシ	イトアメンボ	*Hydrometra albolineata* (Scott, 1874)	VU	VU	CR	231
10	イボタガ	チョウ	イボタガ	*Brahmaea japonica* Butler, 1873	－	－	NT	342
11	ウスミミモンキリガ	チョウ	ヤガ	*Eupsilia contracta* (Butler, 1878)	NT	国リスト	NT	349
12	ウラギンスジヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Argyronome laodice japonica* (Ménétriès, 1857)	VU	VU	EN	264
13	ウラギンヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Fabriciana adippe pallescens* (Butler, 1873)	－	－	EN	265
14	ウラクロシジミ	チョウ	シジミチョウ	*Iratsume orsedice orsedice* (Butler, 1882)	－	VU	VU	284
15	ウラゴマダラシジミ	チョウ	シジミチョウ	*Artopoetes pryeri pryeri* (Murray, 1873)	－	－	NT	335
16	ウラナミジャノメ	チョウ	タテハチョウ	*Ypthima multistriata* Butler, 1883	VU	VU	CR	247
17	エサキアメンボ	カメムシ	アメンボ	*Limnoporus esakii* (Miyamoto, 1958)	NT	NT	EN	258
18	エゾトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Somatochlora viridiaenea* (Uhler, 1858)	－	CR	CR	227
19	エチゴトックリゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Oodes echigonus* Habu & Baba, 1960	NT	EX	EX	213
20	エンスイミズメイガ	チョウ	ツトガ	*Eristena argentata* Yoshiyasu, 1988	－	NT	VU	287
21	オオアメンボ	カメムシ	アメンボ	*Aquarius elongatus* (Uhler, 1896)	－	NT	VU	278
22	オオイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Paracercion sieboldii* (Selys, 1876)	－	EN	CR	222
23	オオウラギンスジヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Argyronome ruslana* (Motschulsky, 1866)	－	NT	NT	336
24	オオウラギンヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Fabriciana nerippe* (C.Felder et R.Felder, 1862)	CR	EX	EX	220
25	オオキトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum uniforme* (Selys, 1883)	EN	CR	EX	193
26	オオクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	*Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse, 1874	VU	CR	CR	241
27	オオゴキブリ	ゴキブリ	オオゴキブリ	*Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki, 1906)	－	NT	NT	309
28	オオシモフリスズメ	チョウ	スズメガ	*Langia zenzeroides nawai* Rothschild & Jordan, 1903	－	－	DD	362
29	オオシロカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	*Olenecamptus cretaceus cretaceus* Bates, 1873	－	－	CR	245
30	オオチビマルハナノミ	コウチュウ	マルハナノミ	*Yoshitomia beattyi* (Pic, 1918)	－	－	NT	324
31	オオチャバネヨトウ	チョウ	ヤガ	*Nonagria puengeleri* (Schawerda, 1923)	VU	NT	EN	267
32	オオツノハネカクシ	コウチュウ	ハネカクシ	*Bledius* (*Bledius*) *salsus* Miyatake, 1963	DD	VU	VU	281
33	オオヒョウタンゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Scarites* (*Scarites*) *sulcatus sulcatus* Olivier, 1795	NT	VU	CR	238
34	オオミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Dineutus* (*Ciclous*) *orientalis* (Modeer, 1776)	NT	EN	CR	233
35	オオルリボシヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Aeshna crenata* Hagen, 1856	－	－	EN	251

索引（和名）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
36	オグマサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Trigomphus ogumai* (Asahina, 1949)	NT	EN	VU	271
37	オツネントンボ	トンボ	アオイトトンボ	*Sympecma paedisca* (Brauer, 1877)	－	－	EN	248
38	オナガミズアオ	チョウ	ヤママユガ	*Actias gnoma gnoma* (Butler, 1877)	NT	国リスト	NT	341
39	カギアシゾウムシ	コウチュウ	ゾウムシ	*Bagous bipunctatus* (Kôno, 1934)	－	DD	DD	360
40	カギモンハナオイアツバ	チョウ	ヤガ	*Cidariplura signata* (Butler, 1879)	NT	国リスト	DD	364
41	カトリヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Gynacantha japonica* Bartenev, 1910	－	－	VU	269
42	ガマヨトウ	チョウ	ヤガ	*Capsula aerata* (Butler, 1878)	VU	－	VU	292
43	ガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Hydrophilus* (*Hydrophilus*) *acuminatus* Motschulsky, 1854	NT	国リスト	EX	215
44	カワラゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Omophron* (*Omophron*) *aequale aequale* Morawitz, 1863	－	VU	EX	210
45	カワラハンミョウ	コウチュウ	オサムシ	*Chaetodera laetescripta laetescripta* (Motschulsky, 1860)	EN	EX	EX	208
46	キイロサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Asiagomphus pryeri* (Selys, 1883)	NT	VU	CR	225
47	キイロヤマトンボ	トンボ	ヤマトンボ	*Macromia daimoji* Okumura, 1949	NT	NT	EX	192
48	キシタアツバ	チョウ	ヤガ	*Hypena claripennis* (Butler, 1878)	NT	国リスト	NT	344
49	キスジウスキヨトウ	チョウ	ヤガ	*Capsula sparganii* (Esper, 1790)	VU	NT	VU	291
50	キトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum croceolum* (Selys, 1883)	－	EN	EN	254
51	ギフチョウ	チョウ	アゲハチョウ	*Luehdorfia japonica* Leech, 1889	VU	VU	EX	218
52	キベリクロヒメゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Ilybius apicalis* Sharp, 1873	NT	国リスト	CR	237
53	キベリマルクビゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Nebria* (*Paranebria*) *livida angulata* Bänninger, 1949	EN	EX	EX	212
54	キボシチビコツブゲンゴロウ	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	*Neohydrocoptus bivittis* (Motschulsky, 1859)	EN	NT	NT	319
55	クツワムシ	バッタ	クツワムシ	*Mecopoda niponensis* (de Haan, 1843)	－	－	CR	229
56	クロエンマムシ	コウチュウ	エンマムシ	*Hister concolor* Lewis, 1884	－	DD	DD	356
57	クロゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Cybister* (*Melanectes*) *brevis* Aubé, 1838	NT	VU	EX	202
58	クロホシコガシラミズムシ	コウチュウ	コガシラミズムシ	*Haliplus* (*Liaphlus*) *basinotatus latiusculus* Nakane, 1985	VU	CR	CR	232
59	クロマダラタマムシ	コウチュウ	タマムシ	*Nipponobuprestis* (*Nipponobuprestisia*) *querceti* (E. Saunders, 1873)	－	VU	EN	259
60	クロモンマグソコガネ	コウチュウ	コガネムシ	*Aphodius* (*Aphodaulacus*) *variabilis* Waterhouse, 1875	NT	EX	EX	216
61	クワトゲエダシャク	チョウ	シャクガ	*Apochima excavata* (Dyar, 1905)	NT	－	NT	340
62	グンバイトンボ	トンボ	モノサシトンボ	*Platycnemis sasakii* Asahina, 1949	NT	EN	EX	190
63	ゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Cybister* (*Scaphinectes*) *chinensis* Motschulsky, 1854	VU	CR	EX	203
64	ゲンジボタル	コウチュウ	ホタル	*Luciola* (*Luciola*) *cruciata cruciata* Motschulsky, 1854	－	－	EN	260
65	コウベツブゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Laccophilus kobensis* Sharp, 1873	NT	国リスト	CR	235
66	コオイムシ	カメムシ	コオイムシ	*Appasus japonicus* Vuillefroy, 1864	NT	国リスト	DD	355
67	コオナガミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Orectochilus* (*Orectochilus*) *punctipennis* Sharp, 1884	VU	NT	CR	234
68	コガタノゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Cybister* (*Cybister*) *tripunctatus lateralis* Fabricius, 1798	VU	EX	EX	204
69	コカブト	コウチュウ	コガネムシ	*Eophileurus* (*Eophileurus*) *chinensis chinensis* (Faldermann, 1835)	－	－	NT	329
70	コガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Hydrochara affinis* (Sharp, 1873)	DD	－	DD	358
71	コシボソヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Boyeria maclachlani* (Selys, 1883)	－	－	NT	298
72	コシロシタバ	チョウ	ヤガ	*Catocala actaea* Felder & Rogenhofer, 1874	NT	－	NT	346
73	コバネアオイトトンボ	トンボ	アオイトトンボ	*Lestes japonicus* Selys, 1883	EN	CR	EX	188
74	コバンムシ	カメムシ	コバンムシ	*Ilyocoris cimicoides exclamationis* (Scott, 1874)	EN	CR	CR	230
75	ゴマフツトガ	チョウ	ツトガ	*Chilo pulveratus* (Wileman & South, 1917)	NT	－	VU	286
76	コミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Gyrinus* (*Gyrinus*) *curtus* Motschulsky, 1866	EN	CR	EX	199
77	コヤマトンボ	トンボ	ヤマトンボ	*Macromia amphigena* Selys, 1871	－	－	NT	301
78	コロギス	バッタ	コロギス	*Prosopogryllacris japonica* (Matsumura et Shiraki, 1908)	－	－	NT	310
79	サメハダマルケシゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydrovatus stridulus* Biström, 1997	－	NT	NT	320
80	サラサヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Sarasaeschna pryeri* (Martin, 1909)	－	－	NT	297
81	シマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydaticus* (*Guignotites*) *bowringii* Clark, 1864	NT	CR	EX	201
82	ジャコウアゲハ	チョウ	アゲハチョウ	*Atrophaneura alcinous alcinous* (Klug, 1836)	－	－	NT	333
83	ジャノメチョウ	チョウ	タテハチョウ	*Minois dryas bipunctata* (Motschulsky, 1861)	－	－	NT	338
84	シルビアシジミ	チョウ	シジミチョウ	*Zizina emelina emelina* (de l'Orza, 1869)	EN	EX	EX	219
85	シロヘリツチカメムシ	カメムシ	ツチカメムシ	*Canthophorus niveimarginatus* Scott, 1874	NT	国リスト	NT	316
86	シワムネマルドロムシ	コウチュウ	マルドロムシ	*Georissus* (*Neogeorissus*) *kurosawai* Nakane, 1963	－	－	EX	214
87	スジゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydaticus bipunctatus* WEHNCKE, 1876	EX	EX	EX	206
88	セグロイナゴ	バッタ	バッタ	*Shirakiacris shirakii* (Bolívar, 1914)	－	－	EN	255

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
89	セスジイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Paracercion hieroglyphicum* (Brauer, 1865)	－	－	NT	295
90	タイコウチ	カメムシ	タイコウチ	*Laccotrephes japonensis* Scott, 1874	－	NT	NT	314
91	タイワンクツワムシ	バッタ	クツワムシ	*Mecopoda elongata* (Linnaeus, 1758)	－	NT	DD	352
92	タカネトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Somatochlora uchidai* Förster, 1909	－	－	NT	302
93	タガメ	カメムシ	コオイムシ	*Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy, 1864)	VU	EN	EX	196
94	タベサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Trigomphus citimus* (Needham, 1931)	NT	国リスト	VU	270
95	チッチゼミ	カメムシ	セミ	*Kosemia radiator* (Uhler, 1896)	－	－	VU	276
96	ツマグロキチョウ	チョウ	シロチョウ	*Eurema laeta betheseba* (Janson, 1878)	EN	NT	NT	334
97	ツヤネクイハムシ	コウチュウ	ハムシ	*Donacia* (*Donaciomima*) *nitidior* (Nakane, 1963)	－	－	NT	331
98	トウカイツマキリアツバ	チョウ	ヤガ	*Tamba roseopurpurea* Sugi, 1982	－	－	DD	363
99	トゲナナフシ	ナナフシ	トビナナフシ	*Neohirasea japonica* (de Haan, 1842)	－	－	NT	307
100	トゲナベブタムシ	カメムシ	ナベブタムシ	*Aphelocheirus nawae* Nawa, 1905	VU	EX	EX	197
101	トダセスジゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Copelatus nakamurai* V. B. Guéorguiev, 1970	VU	NT	CR	236
102	トビイロアカガネヨトウ	チョウ	ヤガ	*Euplexia albilineola* (Wileman & South, 1918)	－	－	VU	290
103	トラフトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Epitheca marginata* (Selys, 1883)	－	VU	VU	273
104	ナゴヤサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Stylurus nagoyanus* (Asahina, 1951)	VU	NT	EN	252
105	ナツアカネ	トンボ	トンボ	*Sympetrum darwinianum* (Selys, 1883)	－	－	NT	303
106	ナナフシモドキ	ナナフシ	ナナフシモドキ	*Ramulus mikado* (Rehn, 1904)	－	－	NT	306
107	ナミハンミョウ	コウチュウ	オサムシ	*Cicindela* (*Sophiodela*) *japonica* Thunberg, 1781	－	－	VU	279
108	ニホンアカジマウンカ	カメムシ	アカジマウンカ	*Ommatidiotus japonicus* Y.Hori, 1977	－	NT	EN	256
109	ニホンカワトンボ	トンボ	カワトンボ	*Mnais costalis* Selys, 1869	－	－	NT	293
110	ヌマベウスキヨトウ	チョウ	ヤガ	*Chilodes pacificus* Sugi, 1982	VU	－	VU	289
111	ネアカヨシヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Brachytron anisopterum* (Selys, 1883)	NT	NT	VU	268
112	ノシメトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum infuscatum* (Selys, 1883)	－	NT	VU	274
113	ハイイロボクトウ	チョウ	ボクトウガ	*Phragmataecia castaneae* (Hübner, 1790)	NT	国リスト	NT	339
114	ハウチワウンカ	カメムシ	グンバイウンカ	*Trypetimorpha japonica* Ishihara, 1954	VU	国リスト	EN	257
115	バッキンガムカギアシゾウムシ	コウチュウ	ゾウムシ	*Bagous buckinghami* O'Brien & Morimoto, 1994	－	NT	NT	330
116	ハッチョウトンボ	トンボ	トンボ	*Nannophya pygmaea* Rambur, 1842	－	－	NT	305
117	ハネナガイナゴ	バッタ	バッタ	*Oxya japonica* (Thunberg, 1824)	－	－	DD	354
118	ハネナシコロギス	バッタ	コロギス	*Nippancistroger testaceus* (Matsumura et Shiraki, 1908)	－	－	NT	311
119	ハネビロエゾトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Somatochlora clavata* Oguma, 1913	VU	EN	CR	228
120	ハルゼミ	カメムシ	セミ	*Terpnosia vacua* (Olivier, 1790)	－	－	NT	313
121	ヒオドシチョウ	チョウ	タテハチョウ	*Nymphalis xanthomelas japonica* (Stichel, 1902)	－	－	NT	337
122	ヒトツメアオゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Callistoides deliciolus* (Bates, 1873)	NT	CR	EX	209
123	ヒヌマイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Mortonagrion hirosei* Asahina, 1972	EN	EN	EX	191
124	ヒメカマキリ	カマキリ	ハナカマキリ	*Acromantis japonica* Westwood, 1889	－	－	NT	308
125	ヒメシジミガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Laccobius* (*Microlaccobius*) *fragilis* Nakane, 1966	－	－	DD	357
126	ヒメタイコウチ	カメムシ	タイコウチ	*Nepa hoffmanni* Esaki, 1925	－	NT	VU	277
127	ヒメヒカゲ	チョウ	タテハチョウ	*Coenonympha oedippus* (Fabricius, 1787)	EN	EN	EX	221
128	ヒメボタル	コウチュウ	ホタル	*Luciola* (*Hotaria*) *parvula* (Kiesenwetter, 1874)	－	－	NT	326
129	ヒラタクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	*Dorcus titanus pilifer* (Snellen *van* Vollenhoven, 1861)	－	－	NT	328
130	フシキキシタバ	チョウ	ヤガ	*Catocala separans* Leech, 1889	－	－	NT	345
131	フタスジサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Trigomphus interruptus* (Selys, 1854)	NT	VU	VU	272
132	フタモンマルクビゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Nebria* (*Eunebria*) *pulcherrima pulcherrima* Bates, 1873	EN	EX	EX	211
133	ヘイケボタル	コウチュウ	ホタル	*Luciola* (*Luciola*) *lateralis* Motschulsky, 1860	－	DD	EN	261
134	ベーツヒラタカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	*Eurypoda* (*Neoprion*) *batesi* Gahan, 1894	－	－	VU	282
135	ベッコウトンボ	トンボ	トンボ	*Libellula angelina* Selys, 1883	CR	CR	EX	195
136	ベニイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Ceriagrion nipponicum* Asahina, 1967	NT	VU	NT	294
137	ホソクビツユムシ	バッタ	ツユムシ	*Shirakisotima japonica* (Matsumura et Shiraki, 1908)	－	－	DD	353
138	ホソバオビキリガ	チョウ	ヤガ	*Dryobotodes angusta angusta* Sugi, 1980	－	－	NT	348
139	ホソバセセリ	チョウ	セセリチョウ	*Isoteinon lamprospilus* C.Felder et R.Felder, 1862	－	VU	NT	332
140	ホソハンミョウ	コウチュウ	オサムシ	*Cylindera* (*Cylindera*) *gracilis* Pallas, 1773	VU	CR	CR	239

和名索引

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
141	ホンサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Shaogomphus postocularis* (Selys, 1869)	－	－	EN	253
142	マイコアカネ	トンボ	トンボ	*Sympetrum kunckeli* (Selys, 1884)	－	NT	NT	304
143	マイマイカブリ	コウチュウ	オサムシ	*Carabus* (*Damaster*) *blaptoides oxuroides* (Schaum, 1862)	－	－	NT	323
144	マエジロツトガ	チョウ	ツトガ	*Pseudocatharylla infixella* (Walker, 1863)	－	－	EN	266
145	マダラウスズミケンモン	チョウ	ヤガ	*Acronicta subornata* (Leech, 1889)	－	DD	NT	347
146	マダラコガシラミズムシ	コウチュウ	コガシラミズムシ	*Haliplus* (*Liaphlus*) *sharpi* Wehncke, 1880	VU	NT	NT	317
147	マダラシマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydaticus* (*Guignotites*) *thermonectoides* Sharp, 1884	CR	EX	EX	207
148	マダラナニワトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum maculatum* Oguma, 1915	EN	CR	EX	194
149	マメハンミョウ	コウチュウ	ツチハンミョウ	*Epicauta* (*Epicauta*) *gorhami* (Marseul, 1873)	－	－	CR	243
150	マルガタゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Graphoderus adamsii* (Clark, 1864)	VU	EX	EX	205
151	マルタンヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Anaciaeschna martini* (Selys, 1897)	－	－	NT	299
152	マルチビゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Leiodytes frontalis* (Sharp, 1884)	NT	NT	NT	321
153	マルヒラタガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Enochrus* (*Lumetus*) *subsignatus* (Harold, 1877)	NT	国リスト	EN	262
154	ミズカマキリ	カメムシ	タイコウチ	*Ranatra chinensis* Mayr, 1865	－	NT	NT	315
155	ミスジキリガ	チョウ	ヤガ	*Jodia sericea* (Butler, 1878)	NT	－	NT	350
156	ミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Gyrinus* (*Gyrinus*) *japonicus* Sharp, 1873	VU	CR	EX	198
157	ミツノエンマコガネ	コウチュウ	コガネムシ	*Parascatonomus* (*Necramator*) *toricornis* (Wiedemann, 1823)	－	－	VU	280
158	ミヤマアカネ	トンボ	トンボ	*Sympetrum pedemontanum* (Müller *in* Allioni, 1766)	－	NT	VU	275
159	ミヤマセセリ	チョウ	セセリチョウ	*Erynnis montana montana* (Bremer, 1861)	－	－	VU	283
160	ミヤマチャバネセセリ	チョウ	セセリチョウ	*Pelopidas jansonis* (Butler, 1878)	－	EN	CR	246
161	ミルンヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Aeschnophlebia milnei* (Selys, 1883)	－	－	EN	250
162	ムカシヤンマ	トンボ	ムカシヤンマ	*Tanypteryx pryeri* (Selys, 1889)	－	－	CR	226
163	ムスジイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Paracercion melanotum* (Selys, 1876)	－	－	NT	296
164	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	*Canthydrus politus* (Sharp, 1873)	VU	NT	NT	318
165	メガネサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Stylurus oculatus* (Asahina, 1949)	VU	EN	CR	224
166	モートンイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Mortonagrion selenion* (Ris, 1916)	NT	VU	EN	249
167	ヤネホソバ	チョウ	ヒトリガ	*Eilema fuscodorsalis* (Matsumura, 1930)	NT	－	NT	343
168	ヤホシホソマダラ	チョウ	マダラガ	*Balataea octomaculata* (Bremer, 1861)	NT	－	DD	361
169	ヤマサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Asiagomphus melaenops* (Selys, 1854)	－	－	NT	300
170	ヤマトエンマムシ	コウチュウ	エンマムシ	*Hister japonicus* Marseul, 1854	－	－	NT	327
171	ヤマトオサムシダマシ	コウチュウ	ゴミムシダマシ	*Blaps* (*Blaps*) *japonensis japonensis* Marseul, 1879	NT	国リスト	CR	244
172	ヤマトヒメメダカカッコウムシ	コウチュウ	カッコウムシ	*Neohydnus hozumii* Nakane, 1981	－	－	DD	359
173	ヤマトフキバッタ	バッタ	バッタ	*Parapodisma setouchiensis* Inoue, 1979	－	－	NT	312
174	ヤマトホソガムシ	コウチュウ	ホソガムシ	*Hydrochus japonicus* Sharp, 1873	NT	EN	CR	240
175	ヤマトモンシデムシ	コウチュウ	ハネカクシ	*Nicrophorus japonicus* Harold, 1877	NT	CR	CR	242
176	ヨツボシカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	*Stenygrinum quadrinotatum* Bates, 1873	EN	EN	EX	217
177	ルイスツブゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Laccophilus lewisius* Sharp, 1873	VU	国リスト	EX	200

（７）クモ類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	アカイロトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne yunoharuensis* Strand, 1918	－	NT	VU	379
2	エビチャコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Arctosa ebicha* Yaginuma, 1960	－	EN	VU	383
3	オオトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne akirai* Tanikawa, 2013	－	NT	NT	390
4	オビジガバチグモ	クモ	ハチグモ	*Castianeira shaxianensis* Gong, 1983	－	NT	VU	386
5	オビボソカニグモ	クモ	カニグモ	*Xysticus trizonatus* Ono, 1988	－	VU	VU	385
6	カコウコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Pardosa nojimai* Tanaka, 1998	－	VU	CR	373
7	カトウツケオグモ	クモ	カニグモ	*Phrynarachne katoi* Tikuni, 1955	－	EN	DD	398
8	カネコトタテグモ	クモ	カネコトタテグモ	*Antrodiaetus roretzi* (L. Koch, 1878)	NT	VU	CR	369
9	キシノウエトタテグモ	クモ	トタテグモ	*Latouchia typica* (Kishida, 1913)	NT	VU	CR	371
10	キノボリトタテグモ	クモ	トタテグモ	*Conothele fragaria* (Dönitz, 1887)	NT	VU	CR	370
11	ギボシヒメグモ	クモ	ヒメグモ	*Chikunia albipes* (S.Saito, 1935)	－	－	NT	387
12	クリチャササグモ	クモ	ササグモ	*Oxyopes licenti* Schenkel, 1953	－	－	VU	382

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
13	ゲホウグモ	クモ	コガネグモ	*Poltys illepidus* C. L. Koch, 1843	－	NT	VU	381
14	コガネグモ	クモ	コガネグモ	*Argiope amoena* L. Koch, 1878	－	NT	NT	388
15	シロオビトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne nagasakiensis* Strand, 1918	－	NT	NT	392
16	シロスジグモ	クモ	カニグモ	*Runcinia insecta* (L.Koch, 1875)	－	－	DD	399
17	スジブトハシリグモ	クモ	キシダグモ	*Dolomedes saganus* Bösenberg et Strand, 1906	－	－	EN	377
18	スズミグモ	クモ	コガネグモ	*Cyrtophora ikomosanensis* (Bösenberg & Strand, 1906)	－	－	NT	393
19	チビクロドヨウグモ	クモ	アシナガグモ	*Meta nigridorsalis* Tanikawa, 1994	－	－	EN	376
20	テジロハリゲコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Pardosa yamanoi* Tanaka & Suwa, 1986	－	EN	CR	374
21	トゲグモ	クモ	コガネグモ	*Gasteracantha kuhli* C. L. Koch, 1837	－	VU	VU	380
22	トリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne bufo* (Bösenberg & Strand, 1906)	－	NT	NT	391
23	ハマキフクログモ	クモ	フクログモ	*Clubiona japonicola* Bösenberg & Strand, 1906	－	－	NT	394
24	ハヤテグモ	クモ	キシダグモ	*Perenethis fascigera* (Bösenberg & Strand, 1906)	－	－	EN	378
25	ヒゲナガツヤグモ	クモ	ワシグモ	*Micaria dives* (Lucas, 1846)	－	－	NT	395
26	ヒゴユウレイグモ	クモ	ユウレイグモ	*Pholcus higoensis* Irie & Ono, 2008	－	－	DD	396
27	ビジョオニグモ	クモ	コガネグモ	*Bijoaraneus komachi* Tanikawa, Yamasaki & Petcharad, 2021	－	－	NT	389
28	ミナミコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Piratula meridionalis* (Tanaka, 1974)	－	NT	VU	384
29	ムツトゲイセキグモ	クモ	コガネグモ	*Ordgarius sexspinosus* (Thorell, 1894)	－	EN	CR	372
30	ムロズミソレグモ	クモ	スオウグモ	*Takeoa nishimurai* (Yaginuma, 1963)	－	DD	DD	397
31	ヤギヌマフクログモ	クモ	フクログモ	*Clubiona yaginumai* Hayashi, 1989	－	－	DD	400
32	ワスレナグモ	クモ	ジグモ	*Calommata signata* Karsch, 1879	NT	VU	EN	375

（８）エビ・カニ類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	アカテガニ	十脚	ベンケイガニ	*Chiromantes haematocheir* (De Haan, 1833)	－	対象外	VU	406
2	ウモレベンケイガニ	十脚	ベンケイガニ	*Clistocoeloma sinense* Shen, 1933	－	対象外	VU	407
3	クシテガニ	十脚	ベンケイガニ	*Parasesarma affine* (De Haan, 1837)	－	対象外	NT	415
4	コメツキガニ	十脚	コメツキガニ	*Scopimera globosa* (De Haan, 1835)	－	対象外	VU	410
5	サメハダヘイケガニ	十脚	ヘイケガニ	*Paradorippe granulata* (De Haan, 1841)	－	対象外	NT	412
6	サワガニ	十脚	サワガニ	*Geothelphusa dehaani* (White, 1847)	－	対象外	CR	404
7	チゴガニ	十脚	コメツキガニ	*Ilyoplax pusilla* (De Haan, 1835)	－	対象外	VU	409
8	ハクセンシオマネキ	十脚	スナガニ	*Austruca lactea* (De Haan, 1835)	VU	対象外	EN	405
9	マキトラノオガニ	十脚	ケブカガニ	*Pilumnopeus makianus* (Rathbun, 1931)	－	対象外	NT	414
10	マメコブシガニ	十脚	コブシガニ	*Pyrhila pisum* (De Haan, 1841)	－	対象外	NT	413
11	ミゾレヌマエビ	十脚	ヌマエビ	*Caridina leucosticta*　Stimpson, 1860	－	対象外	NT	411
12	モクズガニ	十脚	モクズガニ	*Eriocheir japonica* (De Haan, 1835)	－	対象外	NT	416
13	ユビアカベンケイガニ	十脚	ベンケイガニ	*Parasesarma tripectinis* (Shen, 1940)	－	対象外	VU	408

（９）貝類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	アオサギガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Psammacoma gubernaculum* (Hanley, 1844)	－	CR	CR	435
2	アゲマキ	マルスダレガイ	ナタマメガイ	*Sinonovacula constricta* (Lamarck, 1818)	CR+EN	EX	EX	425
3	イシガイ	イシガイ	イシガイ	*Nodularia douglasiae* (J. E. Gray, 1833)	－	CR	CR	432
4	イセシラガイ	ツキガイ	ツキガイ	*Pegophysema bialata* (Pilsbry, 1895)	CR+EN	CR	CR	433
5	イソシジミ	マルスダレガイ	シオサザナミガイ	*Nuttallia japonica* (Reeve, 1857)	－	－	NT	498
6	イソチドリ	トウガタガイ（上科）	トウガタガイ	*Amathina tricarinata* (Linnaeus, 1767)	CR+EN	CR	CR	449
7	イチョウシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Serratina diaphana* (Deshayes, 1855)	CR+EN	EX	EX	426
8	イボイボナメクジ	アシヒダナメクジ（上科）	ホソアシヒダナメクジ	*Granulilimax fuscicornis* Minato, 1989	NT	NT	VU	480
9	イボウミニナ	オニノツノガイ（上科）	ウミニナ	*Batillaria zonalis* (Bruguiére, 1792)	VU	EN	CR	443
10	イボキサゴ	ニシキウズ	ニシキウズ	*Umbonium moniliferum* (Lamarck, 1822)	NT	EN	CR	442

和名索引

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
11	イヨスダレガイ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	*Paratapes undulatus* (Born, 1778)	－	NT	VU	466
12	ウエジマメシジミ	マルスダレガイ	シジミ	*Odhneripisidium uejii* (Mori, 1938)	－	－	EN	457
13	ウネナシトマヤガイ	マルスダレガイ	フナガタガイ	*Neotrapezium liratum* (Reeve, 1843)	NT	国リスト	NT	499
14	ウミタケ	オオノガイ	ニオガイ	*Barnea dilatata* (Souleyet, 1843)	VU	CR	CR	439
15	ウミニナ	オニノツノガイ（上科）	ウミニナ	*Batillaria multiformis* (Lischke, 1869)	NT	NT	EN	459
16	ウメムラシタラ	カサマイマイ（上科）	シタラ	*Sitalina japonica* Habe, 1964	NT	NT	VU	484
17	ウラウズタカキビ	カサマイマイ（上科）	シタラ	*Coneuplecta* sp.	－	NT	VU	482
18	ウラカガミ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	*Dosinia corrugata* (Reeve, 1850)	CR+EN	CR	CR	437
19	エドガワミズゴマツボ（ウミゴマツボ）	クビキレガイ（上科）	ミズゴマツボ	*Stenothyra edogawaensis* (Yokoyama, 1927)	NT	NT	NT	506
20	オオケマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Aegista vulgivaga* (Schmacker & Boettger, 1890)	－	－	NT	509
21	オオタニシ	タニシ（上科）	タニシ	*Heterogen japonica* (Martens, 1861)	NT	国リスト	VU	470
22	オオノガイ	オオノガイ	オオノガイ	*Mya* (*Arenomya*) *arenaria oonogai* Makiyama, 1935	NT	NT	NT	500
23	オカミミガイ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Ellobium chinense* (L. Pfeiffer, 1854)	VU	EN	CR	451
24	オキナガイ	スエモノガイ（上科）	オキナガイ	*Laternula anatina* (Linnaeus, 1758)	－	NT	EN	454
25	オバエボシガイ	イシガイ	イシガイ	*Inversidens brandtii* (Kobelt, 1879)	VU	EX	EX	421
26	オリイレボラ	コモロガイ（上科）	コモロガイ	*Trigonaphera bocageana* (Crosse & Debeaux, 1863)	VU	EN	EN	460
27	カキウラクチキレモドキ	トウガタガイ（上科）	トウガタガイ	*Brachystomia bipyramidata* (Nomura, 1936)	－	NT	VU	477
28	カタハガイ	イシガイ	イシガイ	*Obovalis omiensis* (Heimburg, 1884)	VU	CR	EX	424
29	カタマメマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Lepidopisum conospira* (Pfeiffer,1851)	VU	VU	VU	486
30	カワアイ	オニノツノガイ（上科）	キバウミニナ	*Pirenella pupiformis* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016	VU	CR	CR	445
31	カワグチツボ	クビキレガイ（上科）	ワカウラツボ	*Fluviocingula elegantula* (A. Adams, 1861)	NT	NT	NT	505
32	カワニナ	オニノツノガイ（上科）	カワニナ	*Semisulcospira libertina* (A. Gould, 1859)	－	－	DD	513
33	カワネジガイ	モノアラガイ（上科）	ヒラマキガイ	*Camptoceras hirasei* Walker, 1919	CR	EX	EX	429
34	キヌカツギハマシイノミ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Melampus cf. sincaporensis* L. Pfeiffer, 1855	VU	CR	CR	453
35	クシケマスオガイ	オオノガイ	オオノガイ	*Cryptomya elliptica* (A. Adams, 1851)	NT	VU	CR	441
36	クリイロカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Angustassiminea castanea* (Westerlund, 1883)	NT	NT	NT	502
37	クリイロコミミガイ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Laemodonta siamensis* (Morelet, 1875)	VU	CR	CR	452
38	クレハガイ	イトカケガイ（上科）	イトカケガイ	*Epitonium latifasciatum* (G. B. Sowerby II, 1874)	NT	NT	VU	473
39	ゴイサギ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Macoma tokyoensis* Makiyama, 1927	－	NT	NT	495
40	コベソマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Satsuma myomphala myomphala* (E. von Martens, 1865)	－	－	VU	489
41	サクラガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Nitidotellina hokkaidoensis* (Habe, 1961)	NT	NT	NT	497
42	サザナミツボ	クビキレガイ（上科）	ワカウラツボ	*Nozeba ziczac* (H. Fukuda & Ekawa, 1997)	NT	EN	CR	447
43	ササノハガイ（トンガリササノハガイ）	イシガイ	イシガイ	*Lanceolaria oxyrhyncha* (E. von Martens, 1861)	VU	CR	EX	422
44	サビシラトリ	マルスダレガイ	ザルガイ	*Macoma contabulata* (Deshayes, 1855)	NT	EN	EN	455
45	ズベタイラギ	カキ	ハボウキガイ	*Atrina pectinate* (Linnaeus, 1767)	NT	NT	NT	490

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
46	セキモリ	イトカケガイ（上科）	イトカケガイ	*Epitonium robillardi* (G. B. Sowerby III, 1894)	NT	NT	VU	474
47	ソトオリガイ	スエモノガイ（上科）	オキナガイ	*Laternula gracilis* (Reeve, 1860)	－	NT	NT	491
48	タクミニナ	タクミニナ（上科）	タクミニナ	*Mathilda sinensis* P. Fischer, 1867	CR	CR	CR	448
49	タケノコカワニナ	オニノツノガイ（上科）	トゲカワニナ（トウガタカワニナ）	*Stenomelania crenulata* (Deshayes, 1838)	VU	EX	DD	515
50	タブネドブガイ属の未定種	イシガイ	イシガイ	*Buldowskia* sp.	－	－	DD	511
51	タワラガイ	ネジレガイ（上科）	タワラガイ	*Sinoennea iwakawa* (Pilsbry, 1900)	－	－	VU	481
52	チリメンカワニナ	オニノツノガイ（上科）	カワニナ	*Semisulcospira reiniana* (Brot, 1876)	－	－	DD	514
53	ツキガイモドキ	ツキガイ	ツキガイ	*Lucinoma annulata* (Reeve, 1850)	－	NT	NT	492
54	ツブカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Assiminea estuarina* Habe, 1946	NT	NT	NT	503
55	ツヤガラス	イガイ	イガイ	*Jolya rhomboidea* (Reeve, 1857)	－	VU	VU	464
56	ドブシジミ	ドブシジミ（上科）	ドブシジミ	*Sphaerium japonicum* (Westerlund, 1883)	－	－	VU	465
57	ナガオカモノアラガイ	オカモノアラガイ（上科）	オカモノアラガイ	*Oxyloma hirasei* (Pilsbry, 1901)	NT	NT	EN	461
58	ナミギセル	キセルガイ（上科）	キセルガイ	*Stereophaedusa japonica* (Crosse, 1871)	－	－	EN	462
59	ナラビオカミミガイ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Auriculastra duplicata* (L. Pfeiffer, 1854)	VU	CR	CR	450
60	ニッポンマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Satsuma japonica* (L. Pfeiffer, 1847)	－	－	VU	488
61	ヌカルミクチキレ	トウガタガイ（上科）	トウガタガイ	*"Sayella"* sp.	NT	VU	VU	476
62	ヌマガイ	イシガイ	イシガイ	*Sinanodonta lauta* (Martens, 1877)	－	－	CR	430
63	ハイガイ	フネガイ	フネガイ	*Tegillarca granosa* (Linnaeus, 1758)	VU	EX	EX	420
64	ハナグモリ	マルスダレガイ	ハナグモリガイ	*Glauconome angulata* Reeve, 1844	VU	CR	CR	438
65	ハマグリ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	*Meretrix lusoria* (Röding, 1798)	VU	NT	EN	456
66	ヒゼンキビ	カサマイマイ（上科）	シタラ	*Parakaliella hizenensis* (Pilsbry, 1902)	NT	NT	VU	483
67	ヒダリマキゴマガイ	ヤマタニシ（上科）	ゴマガイ	*Palaina pusilla* (E. von Martens, 1877)	－	－	NT	501
68	ヒナタムシヤドリカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Assiminea* aff. *parasitologica* Kuroda, 1958	NT	NT	NT	504
69	ヒナツボ	シロネズミ（上科）	シロネズミガイ	*Berthais egregia* (A.Adams, 1863)	－	DD	DD	516
70	ヒメカサキビ	カサマイマイ（上科）	シタラ	*Trochochlamys subcrenulata* (Pilsbry, 1901)	NT	NT	NT	508
71	ヒメシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Macoma incongrua* (E. von Martens, 1865)	－	－	NT	494
72	ヒメヒラマキミズマイマイ	モノアラガイ（上科）	ヒラマキガイ	*Gyraulus* sp.	EN	DD	VU	478
73	ヒメマスオガイ	オオノガイ	オオノガイ	*Cryptomya busoensis* Yokoyama, 1922	VU	VU	CR	440
74	ヒラベッコウ	ベッコウマイマイ（上科）	ベッコウマイマイ	*Bekkochlamys micrograpta* (Pilsbry, 1900)	DD	VU	VU	485
75	ヒラマキガイモドキ	モノアラガイ（上科）	ヒラマキガイ	*Polypylis hemisphaerula* (W. H. Benson, 1842)	NT	NT	VU	479
76	ヒラマキミズマイマイ	モノアラガイ（上科）	ヒラマキガイ	*Gyraulus chinensis* (Dunker, 1848)	DD	NT	NT	507
77	ヒルゲンドルフマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Aegista hilgendorfi* (Kobelt, 1879)	NT	NT	EN	463
78	ビロウドマイマイ属の一種	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Nipponochloritis* sp.	DD	NT	VU	487

和名索引

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
79	ヒロクチカノコ	アマオブネガイ（上科）	アマオブネ	*Neripteron* sp.	NT	VU	VU	467
80	フトヘナタリ	オニノツノガイ（上科）	キバウミニナ	*Cerithidea moerchii* (A. Adams, 1855)	NT	NT	VU	471
81	ヘナタリ	オニノツノガイ（上科）	キバウミニナ	*Pirenella nipponica* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016	NT	NT	CR	444
82	マゴコロガイ	ウロコガイ（上科）	チリハギ	*Peregrinamor oshimai* Shôji, 1938	NT	CR	CR	434
83	マシジミ	マルスダレガイ	シジミ	*Corbicula leana* Prime, 1864	VU	DD	DD	512
84	マツカサガイ	イシガイ	イシガイ	*Pronodularia japanensis* (I. Lea, 1859)	NT	CR	EX	423
85	マテガイ	マテガイ（上科）	マテガイ	*Solen strictus* A. Gould, 1861	－	NT	NT	493
86	マメタニシ	クビキレガイ（上科）	エゾマメタニシ	*Parafossarulus manchouricus japonicus* (Pilsbry, 1901)	CR	CR	EX	427
87	マルタニシ	タニシ（上科）	タニシ	*Cipangopaludina* cf. l*aeta* (Martens, 1861)	VU	NT	EN	458
88	ミジンヤマタニシ	ヤマタニシ（上科）	ヤマタニシ	*Nakadaella micron* (Pilsbry, 1900)	－	－	VU	469
89	ミナミタガイ	イシガイ	イシガイ	*Beringiana fukuharai* Sano, Hattori and T. Kondo, 2020	－	－	CR	431
90	ムシロガイ	エゾバイ（上科）	オリイレヨウバイ	*Nassarius livescens* (R. A. Philippi, 1849)	NT	NT	VU	475
91	モノアラガイ	モノアラガイ（上科）	モノアラガイ	*Radix japonica* (Jay, 1857)	NT	DD	EX	428
92	ヤチヨノハナガイ	マルスダレガイ	バカガイ	*Raeta pellicula* (Reeve, 1854)	CR+EN	CR	CR	436
93	ヤハズヌマガイ	イシガイ	イシガイ	*Buldowskia shadini* (Moskvicheva, 1973)	－	－	DD	510
94	ヤマタニシ	ヤマタニシ（上科）	ヤマタニシ	*Cyclophorus herklotsi* E. von Martens, 1861	－	－	VU	468
95	ユウシオガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Jitlada culter* (Hanley, 1844)	NT	NT	NT	496
96	ヨシダカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Assiminea yoshidayukioi* Kuroda, 1959	NT	VU	CR	446
97	ワカウラツボ	クビキレガイ（上科）	ワカウラツボ	*Wakauraia sakaguchii* (Kuroda & Habe, 1954)	VU	VU	VU	472

２．索引（分類順）

（１）哺乳類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	ニホンリス	齧歯	リス	*Sciurus lis* Temminck, 1844	LP	NT	CR	33
2	ムササビ	齧歯	リス	*Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827)	－	NT	CR	34
3	ハタネズミ	齧歯	キヌゲネズミ	*Alexandromys montebelli* (Milne-Edwards, 1872)	－	NT	CR	35
4	アカネズミ	齧歯	ネズミ	*Apodemus speciosus* (Temminck, 1844)	－	－	VU	49
5	カヤネズミ	齧歯	ネズミ	*Micromys minutus* (Pallas, 1771)	－	VU	EN	45
6	ニホンノウサギ	兎形	ウサギ	*Lepus brachyurus* Temminck, 1844	－	NT	CR	36
7	ニホンジネズミ	真無盲腸	トガリネズミ	*Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842)	－	LP	CR	37
8	コウベモグラ	真無盲腸	モグラ	*Mogera wogura* (Temminck, 1842)	－	LP	VU	50
9	ヒミズ	真無盲腸	モグラ	*Urotrichus talpoides* Temminck, 1841	－	－	EN	46
10	ニホンキクガシラコウモリ	翼手	キクガシラコウモリ	*Rhinolophus nippon* Temminck, 1835	－	NT	CR	38
11	オヒキコウモリ	翼手	オヒキコウモリ	*Tadarida insignis* (Blyth, 1862)	VU	DD	CR	39
12	ヒナコウモリ	翼手	ヒナコウモリ	*Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)	－	EN	EN	47
13	オオカミ	食肉	イヌ	*Canis lupus* Linnaeus, 1758	EX	EX	EX	32
14	タヌキ	食肉	イヌ	*Nyctereutes viverrinus* (Temminck, 1839)	－	－	NT	51
15	アカギツネ	食肉	イヌ	*Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)	－	－	EN	48
16	ニホンテン	食肉	イタチ	*Martes melampus* (Wagner, 1840)	－	NT	CR	40
17	アナグマ	食肉	イタチ	*Meles anakuma* Temminck, 1842	－	NT	CR	41
18	ニホンイタチ	食肉	イタチ	*Mustela itatsi* Temminck, 1844	－	－	CR	42
19	カモシカ	偶蹄	ウシ	*Capricornis crispus* (Temminck, 1836)	－	－	CR	43
20	スナメリ	鯨	ネズミイルカ	*Neophocaena asiaeorientalis* (Pilleri et Gihr, 1972)	－	NT	CR	44

（２）鳥類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	トモエガモ	カモ	カモ	*Sibirionetta formosa* (Georgi, 1775)	VU	越冬 VU	VU	70
2	ウズラ	キジ	キジ	*Coturnix japonica* Temminck & Schlegel, 1849	VU	越冬 EN	DD	105
3	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	*Caprimulgus jotaka* Temminck & Schlegel, 1844	NT	繁殖 EN 通過 VU	CR	60
4	カッコウ	カッコウ	カッコウ	*Cuculus canorus* Linnaeus, 1758	－	繁殖 VU 通過 NT	NT	84
5	クイナ	ツル	クイナ	*Rallus indicus* Blyth, 1849	－	越冬 NT	NT	85
6	ヒクイナ	ツル	クイナ	*Zapornia fusca* (Linnaeus, 1766)	NT	繁殖 VU 通過 NT	VU	71
7	セイタカシギ	チドリ	セイタカシギ	*Himantopus himantopus* (Linnaeus, 1758)	VU	繁殖 VU 越冬 NT	NT	86
8	ケリ	チドリ	チドリ	*Vanellus cinereus* (Blyth, 1842)	DD	繁殖 NT 越冬 VU	国・県リスト	108
9	イカルチドリ	チドリ	チドリ	*Charadrius placidus* Gray & Gray, 1863	－	繁殖 VU 越冬 NT	NT	87
10	シロチドリ	チドリ	チドリ	*Charadrius alexandrinus* Linnaeus, 1758	VU	繁殖 EN 越冬 VU	NT	88
11	メダイチドリ	チドリ	チドリ	*Charadrius mongolus* Pallas, 1776	－	－	NT	89
12	タマシギ	チドリ	タマシギ	*Rostratula benghalensis* (Linnaeus, 1758)	VU	繁殖 EN 越冬 EN	EN	62
13	ホウロクシギ	チドリ	シギ	*Numenius madagascariensis* (Linnaeus, 1766)	VU	通過 EN	VU	72
14	ダイシャクシギ	チドリ	シギ	*Numenius arquata* (Linnaeus, 1758)	－	越冬 VU	NT	90
15	オオソリハシシギ	チドリ	シギ	*Limosa lapponica* (Linnaeus, 1758)	VU	通過 EN	NT	91
16	オグロシギ	チドリ	シギ	*Limosa limosa* (Linnaeus, 1758)	－	通過 EN	VU	73
17	オバシギ	チドリ	シギ	*Calidris tenuirostris* (Horsfield, 1821)	－	通過 VU	NT	92
18	コオバシギ	チドリ	シギ	*Calidris canutus* (Linnaeus, 1758)	－	通過 VU	NT	93

索引（分類）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
19	エリマキシギ	チドリ	シギ	*Calidris pugnax* (Linnaeus, 1758)	－	通過 CR	NT	94
20	ウズラシギ	チドリ	シギ	*Calidris acuminata* (Horsfield, 1821)	－	通過 EN	VU	74
21	ハマシギ	チドリ	シギ	*Calidris alpina* (Linnaeus, 1758)	NT	越冬 VU	NT	95
22	シベリアオオハシシギ	チドリ	シギ	*Limnodromus semipalmatus* (Blyth, 1848)	DD	通過 CR	DD	106
23	ヤマシギ	チドリ	シギ	*Scolopax rusticola* Linnaeus, 1758	－	越冬 NT	NT	96
24	オオジシギ	チドリ	シギ	*Gallinago hardwickii* (Gray, 1831)	NT	繁殖 EX 通過 VU	EN	63
25	アカアシシギ	チドリ	シギ	*Tringa totanus* (Linnaeus, 1758)	VU	通過 VU	NT	97
26	タカブシギ	チドリ	シギ	*Tringa glareola* Linnaeus, 1758	VU	通過 EN	VU	75
27	ツルシギ	チドリ	シギ	*Tringa erythropus* (Pallas, 1764)	VU	通過 EN	EN	64
28	ズグロカモメ	チドリ	カモメ	*Saundersilarus saundersi* (Swinhoe, 1871)	VU	越冬 VU	VU	76
29	コアジサシ	チドリ	カモメ	*Sternula albifrons* (Pallas, 1764)	VU	繁殖 EN 通過 VU	EN	65
30	クロツラヘラサギ	ペリカン	トキ	*Platalea minor* Temminck & Schlegel, 1849	EN	越冬 VU	CR	61
31	ヨシゴイ	ペリカン	サギ	*Ixobrychus sinensis* (Gmelin, 1789)	NT	繁殖 CR 通過 CR	EN	66
32	ミゾゴイ	ペリカン	サギ	*Gorsachius goisagi* (Temminck, 1836)	VU	繁殖 VU 通過 NT	EN	67
33	チュウサギ	ペリカン	サギ	*Ardea intermedia* Wagler, 1829	NT	繁殖 NT 通過 NT	NT	98
34	ミサゴ	タカ	ミサゴ	*Pandion haliaetus* (Linnaeus, 1758)	NT	繁殖 VU 越冬リスト外	NT	99
35	ハチクマ	タカ	タカ	*Pernis ptilorhynchus* (Temminck, 1821)	NT	越冬 VU 通過リスト外	VU	77
36	ツミ	タカ	タカ	*Accipiter gularis* (Temminck & Schlegel, 1845)	－	繁殖 NT 通過 －	NT	100
37	ハイタカ	タカ	タカ	*Accipiter nisus* (Linnaeus, 1758)	NT	越冬 NT	NT	101
38	オオタカ	タカ	タカ	*Accipiter gentilis* (Linnaeus, 1758)	NT	繁殖 VU 越冬 VU	NT	102
39	チュウヒ	タカ	タカ	*Circus spilonotus* Kaup, 1847	EN	繁殖 CR 越冬 VU	VU	78
40	サシバ	タカ	タカ	*Butastur indicus* (Gmelin, 1788)	VU	繁殖 EN 通過 NT	VU	79
41	アオバズク	フクロウ	フクロウ	*Ninox japonica* (Temminck & Schlegel, 1845)	－	繁殖 EN 通過 VU	VU	80
42	コノハズク	フクロウ	フクロウ	*Otus sunia* (Hodgson, 1836)	－	繁殖 CR 通過 VU	EN	68
43	オオコノハズク	フクロウ	フクロウ	*Otus semitorques* Temminck & Schlegel, 1844	－	繁殖 VU 越冬 NT	NT	103
44	フクロウ	フクロウ	フクロウ	*Strix uralensis* Pallas, 1771	－	繁殖 NT 越冬 NT	EN	69
45	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	*Falco peregrinus* Tunstall, 1771	VU	繁殖 VU 越冬 NT	VU	81
46	サンショウクイ	スズメ	サンショウクイ	*Pericrocotus divaricatus* (Raffles, 1822)	VU	繁殖 － 通過 －	NT	104
47	コシアカツバメ	スズメ	ツバメ	*Cecropis daurica* (Laxmann, 1769)	－	－	VU	82
48	コイカル	スズメ	アトリ	*Eophona migratoria* Hartert, 1903	－	－	VU	83
49	ノジコ	スズメ	ホオジロ	*Emberiza sulphurata* Temminck & Schlegel, 1848	NT	繁殖 EX 通過 EN	DD	107

（３）爬虫類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	クサガメ	カメ	イシガメ	*Mauremys reevesii* (Gray, 1831)	－	－	DD	126
2	ニホンイシガメ	カメ	イシガメ	*Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel, 1838)	NT	NT	VU	121
3	ニホンスッポン	カメ	スッポン	*Pelodiscus japonicus* (Temminck et Schlegel, 1838)	DD	DD	DD	127
4	タカチホヘビ	有鱗	タカチホヘビ	*Achalinus spinalis* Peters, 1869	－	DD	DD	128
5	シロマダラ	有鱗	ナミヘビ	*Lycodon orientalis* (Hilgendorf, 1880)	－	DD	EN	119
6	ジムグリ	有鱗	ナミヘビ	*Euprepiophis conspicillatus* (Boie, 1826)	－	－	EN	120
7	シマヘビ	有鱗	ナミヘビ	*Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)	－	－	NT	125
8	ヒバカリ	有鱗	ナミヘビ	*Hebius vibakari vibakari* (Boie, 1826)	－	－	VU	122
9	ヤマカガシ	有鱗	ナミヘビ	*Rhabdophis tigrinus* (Boie, 1826)	－	DD	VU	123
10	ニホンマムシ	有鱗	クサリヘビ	*Gloydius blomhoffii* (Boie, 1826)	－	－	VU	124

（４）両生類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	オワリサンショウウオ	有尾	サンショウウオ	*Hynobius owariensis* Sugawara Fujitani Seguchi Sawahata et Nagano, 2022	VU	－	CR	133
2	アカハライモリ	有尾	イモリ	*Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)	NT	NT	CR	134
3	アズマヒキガエル	無尾	ヒキガエル	*Bufo formosus* Boulenger, 1883	－	－	CR	135
4	ヒガシニホンアマガエル	無尾	アマガエル	*Dryophytes leopardus* Shimada, Matsui et Tanaka, 2025	－	－	DD	141
5	タゴガエル	無尾	アカガエル	*Rana tagoi* Okada, 1928	－	－	DD	142
6	ニホンアカガエル	無尾	アカガエル	*Rana japonica* Boulenger, 1879	－	－	CR	136
7	ツチガエル	無尾	アカガエル	*Glandirana rugosa* (Temminck et Schlegel, 1838)	－	－	CR	137
8	ナゴヤダルマガエル	無尾	アカガエル	*Pelophylax porosus brevipodus* (Ito, 1941)	EN	VU	CR	138
9	トノサマガエル	無尾	アカガエル	*Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)	NT	国リスト	VU	101
10	シュレーゲルアオガエル	無尾	アオガエル	*Rhacophorus schlegelii* (Günther, 1858)	－	－	CR	139

（５）魚類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	スナヤツメ類	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	*Lethenteron* sp.	VU	EN	CR	147
2	ニホンウナギ	ウナギ	ウナギ	*Anguilla japonica* Temminck et Schlegel, 1847	EN	EN	EN	156
3	ゼゼラ	コイ	コイ	*Biwia zezera* (Ishikawa, 1895)	VU	NT	VU	164
4	コイ（在来型）	コイ	コイ	*Cyprinus carpio* Linnaeus, 1758	LP	DD	DD	175
5	タモロコ	コイ	コイ	*Gnathopogon elongatus elongatus* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	NT	171
6	カワバタモロコ	コイ	コイ	*Hemigrammocypris rasborella* Fowler, 1910	EN	EN	CR	149
7	ヌマムツ	コイ	コイ	*Candidia sieboldii* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	DD	176
8	カワムツ	コイ	コイ	*Candidia temminckii* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	EN	157
9	オイカワ（庄内川個体群）	コイ	コイ	*Opsariichthys platypus* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	LP	181
10	ウグイ	コイ	コイ	*Tribolodon hakonensis* (Günther, 1877)	－	－	NT	170
11	ウシモツゴ	コイ	コイ	*Pseudorasbora pumila* subsp.	CR	CR	DD	177
12	カワヒガイ	コイ	コイ	*Saucocheilichthys variegatus variegatus* (Temminck et Schlegel, 1846)	NT	CR	DD	178
13	ヤリタナゴ	コイ	コイ	*Tanakia lanceolata* (Temminck et Schlegel, 1846)	NT	CR	CR	148
14	トウカイコガタスジシマドジョウ	コイ	ドジョウ	*Cobitis minamorii tokaiensis* Nakajima, 2012	EN	EN	CR	151
15	ニシシマドジョウ	コイ	ドジョウ	*Cobitis* sp. BIWAE type B	－	VU	EN	158
16	ドジョウ	コイ	ドジョウ	*Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor, 1842)	NT	VU	VU	165
17	キタドジョウ	コイ	ドジョウ	*Misgurnus* sp. (Clade A)	DD	CR	CR	150
18	ホトケドジョウ	コイ	フクドジョウ	*Lefua echigonia* Jordan et Richardson, 1907	EN	EN	CR	152
19	ナマズ	ナマズ	ナマズ	*Silurus asotus* Linnaeus, 1758	－	－	NT	172
20	アカザ	ナマズ	アカザ	*Liobagrus reini* Hilgendorf, 1878	VU	NT	CR	153
21	アユ	サケ	アユ	*Plecoglossus altivelis altivelis* (Temminck et Schlegel, 1846)	－	－	VU	166
22	シラウオ	サケ	シラウオ	*Salangichthys microdon* (Bleeker, 1860)	－	VU	VU	167

索引（分類）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
23	サツキマス・アマゴ	サケ	サケ	*Oncorhynchus masou ishikawae* Jordan et McGregor, 1925	NT	DD	DD	179
24	ミナミメダカ	ダツ	メダカ	*Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel, 1846)	VU	VU	VU	168
25	クルメサヨリ	ダツ	サヨリ	*Hyporhamphus intermedius* (Cantor, 1842)	NT	DD	DD	180
26	カマキリ（アユカケ）	スズキ	カジカ	*Rheopresbe kazika* (Jordan et Starks, 1904)	VU	EN	EN	159
27	ウツセミカジカ	スズキ	カジカ	*Cottus reinii* Hilgendorf, 1879	EN	VU	EN	160
28	ドンコ	スズキ	ドンコ	*Odontobutis obscura* (Temminck et Schlegel, 1845)	－	EN	CR	154
29	カワアナゴ	スズキ	カワアナゴ	*Eleotris oxycephala* Temminck et Schlegel, 1845	－	NT	VU	169
30	エドハゼ	スズキ	ハゼ	*Gymnogobius macrognathos* Bleeker, 1860	VU	NT	EN	163
31	スミウキゴリ	スズキ	ハゼ	*Gymnogobius petschiliensis* (Rendahl, 1924)	－	－	NT	173
32	ウキゴリ	スズキ	ハゼ	*Gymnogobius urotaenia* (Hilgendorf, 1879)	－	－	NT	174
33	トビハゼ	スズキ	ハゼ	*Periophthalmus modestus* Cantor, 1842	NT	VU	EN	161
34	マサゴハゼ	スズキ	ハゼ	*Pseudogobius masago* (Tomiyama, 1936)	VU	VU	EN	162
35	トウカイヨシノボリ	スズキ	ハゼ	*Rhinogobius telma* Suzuki, Kimura and Shibukawa, 2019	NT	CR	CR	155

（６）昆虫類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	オツネントンボ	トンボ	アオイトトンボ	*Sympecma paedisca* (Brauer, 1877)	－	－	EN	248
2	コバネアオイトトンボ	トンボ	アオイトトンボ	*Lestes japonicus* Selys, 1883	EN	CR	EX	188
3	ニホンカワトンボ	トンボ	カワトンボ	*Mnais costalis* Selys, 1869	－	－	NT	293
4	アオハダトンボ	トンボ	カワトンボ	*Calopteryx japonica* Selys, 1869	NT	国リスト	EX	189
5	グンバイトンボ	トンボ	モノサシトンボ	*Platycnemis sasakii* Asahina, 1949	NT	EN	EX	190
6	ベニイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Ceriagrion nipponicum* Asahina, 1967	NT	VU	NT	294
7	オオイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Paracercion sieboldii* (Selys, 1876)	－	EN	CR	222
8	セスジイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Paracercion hieroglyphicum* (Brauer, 1865)	－	－	NT	295
9	ムスジイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Paracercion melanotum* (Selys, 1876)	－	－	NT	296
10	モートンイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Mortonagrion selenion* (Ris, 1916)	NT	VU	EN	249
11	ヒヌマイトトンボ	トンボ	イトトンボ	*Mortonagrion hirosei* Asahina, 1972	EN	EN	EX	191
12	サラサヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Sarasaeschna pryeri* (Martin, 1909)	－	－	NT	297
13	コシボソヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Boyeria maclachlani* (Selys, 1883)	－	－	NT	298
14	ミルンヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Aeschnophlebia milnei* (Selys, 1883)	－	－	EN	250
15	アオヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Brachytron longistigma* (Selys, 1883)	NT	CR	CR	223
16	ネアカヨシヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Brachytron anisopterum* (Selys, 1883)	NT	NT	VU	268
17	カトリヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Gynacantha japonica* Bartenev, 1910	－	－	VU	269
18	マルタンヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Anaciaeschna martini* (Selys, 1897)	－	－	NT	299
19	オオルリボシヤンマ	トンボ	ヤンマ	*Aeshna crenata* Hagen, 1856	－	－	EN	251
20	タベサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Trigomphus citimus* (Needham, 1931)	NT	国リスト	VU	270
21	オグマサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Trigomphus ogumai* (Asahina, 1949)	NT	EN	VU	271
22	フタスジサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Trigomphus interruptus* (Selys, 1854)	NT	VU	VU	272
23	メガネサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Stylurus oculatus* (Asahina, 1949)	VU	EN	CR	224
24	ナゴヤサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Stylurus nagoyanus* (Asahina, 1951)	VU	NT	EN	252
25	ヤマサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Asiagomphus melaenops* (Selys, 1854)	－	－	NT	300
26	キイロサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Asiagomphus pryeri* (Selys, 1883)	NT	VU	CR	225
27	ムカシヤンマ	トンボ	ムカシヤンマ	*Tanypteryx pryeri* (Selys, 1889)	－	－	CR	226
28	コヤマトンボ	トンボ	ヤマトンボ	*Macromia amphigena* Selys, 1871	－	－	NT	301
29	キイロヤマトンボ	トンボ	ヤマトンボ	*Macromia daimoji* Okumura, 1949	NT	NT	EX	192
30	ホンサナエ	トンボ	サナエトンボ	*Shaogomphus postocularis* (Selys, 1869)	－	－	EN	253
31	トラフトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Epitheca marginata* (Selys, 1883)	－	VU	VU	273
32	タカネトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Somatochlora uchidai* Förster, 1909	－	－	NT	302
33	エゾトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Somatochlora viridiaenea* (Uhler, 1858)	－	CR	CR	227
34	ハネビロエゾトンボ	トンボ	エゾトンボ	*Somatochlora clavata* Oguma, 1913	VU	EN	CR	228
35	ナツアカネ	トンボ	トンボ	*Sympetrum darwinianum* (Selys, 1883)	－	－	NT	303
36	ノシメトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum infuscatum* (Selys, 1883)	－	NT	VU	274

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
37	マイコアカネ	トンボ	トンボ	*Sympetrum kunckeli* (Selys, 1884)	－	NT	NT	304
38	ミヤマアカネ	トンボ	トンボ	*Sympetrum pedemontanum* (Müller *in* Allioni, 1766)	－	NT	VU	275
39	キトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum croceolum* (Selys, 1883)	－	EN	EN	254
40	オオキトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum uniforme* (Selys, 1883)	EN	CR	EX	193
41	マダラナニワトンボ	トンボ	トンボ	*Sympetrum maculatum* Oguma, 19*1*5	EN	CR	EX	194
42	ハッチョウトンボ	トンボ	トンボ	*Nannophya pygmaea* Rambur, 1842	－	－	NT	305
43	ベッコウトンボ	トンボ	トンボ	*Libellula angelina* Selys, 1883	CR	CR	EX	195
44	ナナフシモドキ	ナナフシ	ナナフシモドキ	*Ramulus mikado* (Rehn, 1904)	－	－	NT	306
45	トゲナナフシ	ナナフシ	トビナナフシ	*Neohirasea japonica* (de Haan, 1842)	－	－	NT	307
46	ヒメカマキリ	カマキリ	ハナカマキリ	*Acromantis japonica* Westwood, 1889	－	－	NT	308
47	オオゴキブリ	ゴキブリ	オオゴキブリ	*Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki, 1906)	－	NT	NT	309
48	コロギス	バッタ	コロギス	*Prosopogryllacris japonica* (Matsumura et Shiraki, 1908)	－	－	NT	310
49	ハネナシコロギス	バッタ	コロギス	*Nippancistroger testaceus* (Matsumura et Shiraki, 1908)	－	－	NT	311
50	タイワンクツワムシ	バッタ	クツワムシ	*Mecopoda elongata* (Linnaeus, 1758)	－	NT	DD	352
51	クツワムシ	バッタ	クツワムシ	*Mecopoda niponensis* (de Haan, 1843)	－	－	CR	229
52	ホソクビツユムシ	バッタ	ツユムシ	*Shirakisotima japonica* (Matsumura et Shiraki, 1908)	－	－	DD	353
53	ヤマトフキバッタ	バッタ	バッタ	*Parapodisma setouchiensis* Inoue, 1979	－	－	NT	312
54	ハネナガイナゴ	バッタ	バッタ	*Oxya japonica* (Thunberg, 1824)	－	－	DD	354
55	セグロイナゴ	バッタ	バッタ	*Shirakiacris shirakii* (Bolívar, 1914)	－	－	EN	255
56	ハルゼミ	カメムシ	セミ	*Terpnosia vacua* (Olivier, 1790)	－	－	NT	313
57	チッチゼミ	カメムシ	セミ	*Kosemia radiator* (Uhler, 1896)	－	－	VU	276
58	ニホンアカジマウンカ	カメムシ	アカジマウンカ	*Ommatidiotus japonicus* Y.Hori, 1977	－	NT	EN	256
59	ハウチワウンカ	カメムシ	グンバイウンカ	*Trypetimorpha japonica* Ishihara, 1954	VU	国リスト	EN	257
60	タイコウチ	カメムシ	タイコウチ	*Laccotrephes japonensis* Scott, 1874	－	NT	NT	314
61	ヒメタイコウチ	カメムシ	タイコウチ	*Nepa hoffmanni* Esaki, 1925	－	NT	VU	277
62	ミズカマキリ	カメムシ	タイコウチ	*Ranatra chinensis* Mayr, 1865	－	NT	NT	315
63	コオイムシ	カメムシ	コオイムシ	*Appasus japonicus* Vuillefroy, 1864	NT	国リスト	DD	355
64	タガメ	カメムシ	コオイムシ	*Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy, 1864)	VU	EN	EX	196
65	コバンムシ	カメムシ	コバンムシ	*Ilyocoris cimicoides exclamationis* (Scott, 1874)	EN	CR	CR	230
66	トゲナベブタムシ	カメムシ	ナベブタムシ	*Aphelocheirus nawae* Nawa, 1905	VU	EX	EX	197
67	イトアメンボ	カメムシ	イトアメンボ	*Hydrometra albolineata* (Scott, 1874)	VU	VU	CR	231
68	オオアメンボ	カメムシ	アメンボ	*Aquarius elongatus* (Uhler, 1896)	－	NT	VU	278
69	エサキアメンボ	カメムシ	アメンボ	*Limnoporus esakii* (Miyamoto, 1958)	NT	NT	EN	258
70	シロヘリツチカメムシ	カメムシ	ツチカメムシ	*Canthophorus niveimarginatus* Scott, 1874	NT	国リスト	NT	316
71	クロホシコガシラミズムシ	コウチュウ	コガシラミズムシ	*Haliplus* (*Liaphlus*) *basinotatus latiusculus* Nakane, 1985	VU	CR	CR	232
72	マダラコガシラミズムシ	コウチュウ	コガシラミズムシ	*Haliplus* (*Liaphlus*) *sharpi* Wehncke, 1880	VU	NT	NT	317
73	ミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Gyrinus* (*Gyrinus*) *japonicus* Sharp, 1873	VU	CR	EX	198
74	コミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Gyrinus* (*Gyrinus*) *curtus* Motschulsky, 1866	EN	CR	EX	199
75	オオミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Dineutus* (*Ciclous*) *orientalis* (Modeer, 1776)	NT	EN	CR	233
76	コオナガミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	*Orectochilus* (*Orectochilus*) *punctipennis* Sharp, 1884	VU	NT	CR	234
77	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	*Canthydrus politus* (Sharp, 1873)	VU	NT	NT	318
78	キボシチビコツブゲンゴロウ	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	*Neohydrocoptus bivittis* (Motschulsky, 1859)	EN	NT	NT	319
79	ルイスツブゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Laccophilus lewisius* Sharp, 1873	VU	国リスト	EX	200
80	シマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydaticus* (*Guignotites*) *bowringii* Clark, 1864	NT	CR	EX	201
81	クロゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Cybister* (*Melanectes*) *brevis* Aubé, 1838	NT	VU	EX	202
82	コウベツブゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Laccophilus kobensis* Sharp, 1873	NT	国リスト	CR	235
83	トダセスジゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Copelatus nakamurai* V. B. Guéorguiev, 1970	VU	NT	CR	236
84	キベリクロヒメゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Ilybius apicalis* Sharp, 1873	NT	国リスト	CR	237
85	ゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Cybister* (*Scaphinectes*) *chinensis* Motschulsky, 1854	VU	CR	EX	203
86	サメハダマルケシゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydrovatus stridulus* Biström, 1997	－	NT	NT	320
87	マルチビゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Leiodytes frontalis* (Sharp, 1884)	NT	NT	NT	321
88	コガタノゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Cybister* (*Cybister*) *tripunctatus lateralis* Fabricius, 1798	VU	EX	EX	204
89	マルガタゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Graphoderus adamsii* (Clark, 1864)	VU	EX	EX	205

索引（分類）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
90	スジゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydaticus bipunctatus* WEHNCKE, 1876	EX	EX	EX	206
91	マダラシマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	*Hydaticus* (*Guignotites*) *thermonectoides* Sharp, 1884	CR	EX	EX	207
92	カワラハンミョウ	コウチュウ	オサムシ	*Chaetodera laetescripta laetescripta* (Motschulsky, 1860)	EN	EX	EX	208
93	ヒトツメアオゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Callistoides deliciolus* (Bates, 1873)	NT	CR	EX	209
94	カワラゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Omophron* (*Omophron*) *aequale aequale* Morawitz, 1863	－	VU	EX	210
95	フタモンマルクビゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Nebria* (*Eunebria*) *pulcherrima pulcherrima* Bates, 1873	EN	EX	EX	211
96	キベリマルクビゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Nebria* (*Paranebria*) *livida angulata* Bänninger, 1949	EN	EX	EX	212
97	オオヒョウタンゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Scarites* (*Scarites*) *sulcatus sulcatus* Olivier, 1795	NT	VU	CR	238
98	ホソハンミョウ	コウチュウ	オサムシ	*Cylindera* (*Cylindera*) *gracilis* Pallas, 1773	VU	CR	CR	239
99	エチゴトックリゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Oodes echigonus* Habu & Baba, 1960	NT	EX	EX	213
100	ナミハンミョウ	コウチュウ	オサムシ	*Cicindela* (*Sophiodela*) *japonica* Thunberg, 1781	－	－	VU	279
101	イグチケブカゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	*Peronomerus auripilis* Bates, 1883	NT	－	NT	322
102	マイマイカブリ	コウチュウ	オサムシ	*Carabus* (*Damaster*) *blaptoides oxuroides* (Schaum, 1862)	－	－	NT	323
103	オオチビマルハナノミ	コウチュウ	マルハナノミ	*Yoshitomia beattyi* (Pic, 1918)	－	－	NT	324
104	クロマダラタマムシ	コウチュウ	タマムシ	*Nipponobuprestis* (*Nipponobuprestisia*) *querceti* (E. Saunders, 1873)	－	VU	EN	259
105	アヤスジミゾドロムシ	コウチュウ	ヒメドロムシ	*Graphelmis shirahatai* (Nomura, 1958)	EN	－	NT	325
106	ゲンジボタル	コウチュウ	ホタル	*Luciola* (*Luciola*) *cruciata cruciata* Motschulsky, 1854	－	－	EN	260
107	ヘイケボタル	コウチュウ	ホタル	*Luciola* (*Luciola*) *lateralis* Motschulsky, 1860	－	DD	EN	261
108	ヒメボタル	コウチュウ	ホタル	*Luciola* (*Hotaria*) *parvula* (Kiesenwetter, 1874)	－	－	NT	326
109	ヤマトエンマムシ	コウチュウ	エンマムシ	*Hister japonicus* Marseul, 1854	－	－	NT	327
110	クロエンマムシ	コウチュウ	エンマムシ	*Hister concolor* Lewis, 1884	－	DD	DD	356
111	ヤマトホソガムシ	コウチュウ	ホソガムシ	*Hydrochus japonicus* Sharp, 1873	NT	EN	CR	240
112	シワムネマルドロムシ	コウチュウ	マルドロムシ	*Georissus* (*Neogeorissus*) *kurosawai* Nakane, 1963	－	－	EX	214
113	ガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Hydrophilus* (*Hydrophilus*) *acuminatus* Motschulsky, 1854	NT	国リスト	EX	215
114	マルヒラタガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Enochrus* (*Lumetus*) *subsignatus* (Harold, 1877)	NT	国リスト	EN	262
115	ヒメシジミガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Laccobius* (*Microlaccobius*) *fragilis* Nakane, 1966	－	－	DD	357
116	コガムシ	コウチュウ	ガムシ	*Hydrochara affinis* (Sharp, 1873)	DD	－	DD	358
117	オオクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	*Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse, 1874	VU	CR	CR	241
118	ヒラタクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	*Dorcus titanus pilifer* (Snellen *van* Vollenhoven, 1861)	－	－	NT	328
119	アカマダラハナムグリ	コウチュウ	コガネムシ	*Anthracophora rusticola* Burmeister, 1842	DD	NT	EN	263
120	ミツノエンマコガネ	コウチュウ	コガネムシ	*Parascatonomus* (*Necramator*) *toricornis* (Wiedemann, 1823)	－	－	VU	280
121	コカブト	コウチュウ	コガネムシ	*Eophileurus* (*Eophileurus*) *chinensis chinensis* (Faldermann, 1835)	－	－	NT	329
122	クロモンマグソコガネ	コウチュウ	コガネムシ	*Aphodius* (*Aphodaulacus*) *variabilis* Waterhouse, 1875	NT	EX	EX	216
123	ヤマトモンシデムシ	コウチュウ	ハネカクシ	*Nicrophorus japonicus* Harold, 1877	NT	CR	CR	242
124	オオツノハネカクシ	コウチュウ	ハネカクシ	*Bledius* (*Bledius*) *salsus* Miyatake, 1963	DD	VU	VU	281
125	ヤマトヒメダカカッコウムシ	コウチュウ	カッコウムシ	*Neohydnus hozumii* Nakane, 1981	－	－	DD	359
126	マメハンミョウ	コウチュウ	ツチハンミョウ	*Epicauta* (*Epicauta*) *gorhami* (Marseul, 1873)	－	－	CR	243
127	ヤマトオサムシダマシ	コウチュウ	ゴミムシダマシ	*Blaps* (*Blaps*) *japonensis japonensis* Marseul, 1879	NT	国リスト	CR	244
128	バッキンガムカギアシゾウムシ	コウチュウ	ゾウムシ	*Bagous buckinghami* O'Brien & Morimoto, 1994	－	NT	NT	330
129	カギアシゾウムシ	コウチュウ	ゾウムシ	*Bagous bipunctatus* (Kôno, 1934)	－	DD	DD	360
130	ヨツボシカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	*Stenygrinum quadrinotatum* Bates, 1873	EN	EN	EX	217
131	オオシロカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	*Olenecamptus cretaceus cretaceus* Bates, 1873	－	－	CR	245
132	ベーツヒラタカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	*Eurypoda* (*Neoprion*) *batesi* Gahan, 1894	－	－	VU	282
133	ツヤネクイハムシ	コウチュウ	ハムシ	*Donacia* (*Donaciomima*) *nitidior* (Nakane, 1963)	－	－	NT	331
134	ミヤマセセリ	チョウ	セセリチョウ	*Erynnis montana montana* (Bremer, 1861)	－	－	VU	283
135	ホソバセセリ	チョウ	セセリチョウ	*Isoteinon lamprospilus* C.Felder et R.Felder, 1862	－	VU	NT	332
136	ミヤマチャバネセセリ	チョウ	セセリチョウ	*Pelopidas jansonis* (Butler, 1878)	－	EN	CR	246
137	ギフチョウ	チョウ	アゲハチョウ	*Luehdorfia japonica* Leech, 1889	VU	VU	EX	218
138	ジャコウアゲハ	チョウ	アゲハチョウ	*Atrophaneura alcinous alcinous* (Klug, 1836)	－	－	NT	333
139	ツマグロキチョウ	チョウ	シロチョウ	*Eurema laeta betheseba* (Janson, 1878)	EN	NT	NT	334
140	ウラゴマダラシジミ	チョウ	シジミチョウ	*Artopoetes pryeri pryeri* (Murray, 1873)	－	－	NT	335
141	ウラクロシジミ	チョウ	シジミチョウ	*Iratsume orsedice orsedice* (Butler, 1882)	－	VU	VU	284

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
142	シルビアシジミ	チョウ	シジミチョウ	*Zizina emelina emelina* (de l'Orza, 1869)	EN	EX	EX	219
143	ウラギンスジヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Argyronome laodice japonica* (Ménétriès, 1857)	VU	VU	EN	264
144	オオウラギンスジヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Argyronome ruslana* (Motschulsky, 1866)	－	NT	NT	336
145	ウラギンヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Fabriciana adippe pallescens* (Butler, 1873)	－	－	EN	265
146	オオウラギンヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	*Fabriciana nerippe* (C.Felder et R.Felder, 1862)	CR	EX	EX	220
147	イチモンジチョウ	チョウ	タテハチョウ	*Limenitis camilla japonica* Ménétriès, 1857	－	－	VU	285
148	ヒオドシチョウ	チョウ	タテハチョウ	*Nymphalis xanthomelas japonica* (Stichel, 1902)	－	－	NT	337
149	ウラナミジャノメ	チョウ	タテハチョウ	*Ypthima multistriata* Butler, 1883	VU	VU	CR	247
150	ジャノメチョウ	チョウ	タテハチョウ	*Minois dryas bipunctata* (Motschulsky, 1861)	－	－	NT	338
151	ヒメヒカゲ	チョウ	タテハチョウ	*Coenonympha oedippus* (Fabricius, 1787)	EN	EN	EX	221
152	ヤホシホソマダラ	チョウ	マダラガ	*Balataea octomaculata* (Bremer, 1861)	NT	－	DD	361
153	ハイイロボクトウ	チョウ	ボクトウガ	*Phragmataecia castaneae* (Hübner, 1790)	NT	国リスト	NT	339
154	ゴマフツトガ	チョウ	ツトガ	*Chilo pulveratus* (Wileman & South, 1917)	NT	－	VU	286
155	マエジロツトガ	チョウ	ツトガ	*Pseudocatharylla infixella* (Walker, 1863)	－	－	EN	266
156	エンスイミズメイガ	チョウ	ツトガ	*Eristena argentata* Yoshiyasu, 1988	－	NT	VU	287
157	クワトゲエダシャク	チョウ	シャクガ	*Apochima excavata* (Dyar, 1905)	NT	－	NT	340
158	アヤコバネナミシャク	チョウ	シャクガ	*Acasis bellaria* (Leech, 1891)	－	－	VU	288
159	オナガミズアオ	チョウ	ヤママユガ	*Actias gnoma gnoma* (Butler, 1877)	NT	国リスト	NT	341
160	イボタガ	チョウ	イボタガ	*Brahmaea japonica* Butler, 1873	－	－	NT	342
161	オオシモフリスズメ	チョウ	スズメガ	*Langia zenzeroides nawai* Rothschild & Jordan, 1903	－	－	DD	362
162	ヤネホソバ	チョウ	ヒトリガ	*Eilema fuscodorsalis* (Matsumura, 1930)	NT	－	NT	343
163	キシタアツバ	チョウ	ヤガ	*Hypena claripennis* (Butler, 1878)	NT	国リスト	NT	344
164	トウカイツマキリアツバ	チョウ	ヤガ	*Tamba roseopurpurea* Sugi, 1982	－	－	DD	363
165	カギモンハナオイアツバ	チョウ	ヤガ	*Cidariplura signata* (Butler, 1879)	NT	国リスト	DD	364
166	フシキキシタバ	チョウ	ヤガ	*Catocala separans* Leech, 1889	－	－	NT	345
167	コシロシタバ	チョウ	ヤガ	*Catocala actaea* Felder & Rogenhofer, 1874	NT	－	NT	346
168	マダラウスズミケンモン	チョウ	ヤガ	*Acronicta subornata* (Leech, 1889)	－	DD	NT	347
169	ヌマベウスキヨトウ	チョウ	ヤガ	*Chilodes pacificus* Sugi, 1982	VU	－	VU	289
170	トビイロアカガネヨトウ	チョウ	ヤガ	*Euplexia albilineola* (Wileman & South, 1918)	－	－	VU	290
171	オオチャバネヨトウ	チョウ	ヤガ	*Nonagria puengeleri* (Schawerda, 1923)	VU	NT	EN	267
172	キスジウスキヨトウ	チョウ	ヤガ	*Capsula sparganii* (Esper, 1790)	VU	NT	VU	291
173	ガマヨトウ	チョウ	ヤガ	*Capsula aerata* (Butler, 1878)	VU	－	VU	292
174	ホソバオビキリガ	チョウ	ヤガ	*Dryobotodes angusta angusta* Sugi, 1980	－	－	NT	348
175	ウスミミモンキリガ	チョウ	ヤガ	*Eupsilia contracta* (Butler, 1878)	NT	国リスト	NT	349
176	ミスジキリガ	チョウ	ヤガ	*Jodia sericea* (Butler, 1878)	NT	－	NT	350
177	アトジロキリガ	チョウ	ヤガ	*Dioszeghyana mirabilis* (Sugi, 1955)	－	－	NT	351

（7）クモ類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	ワスレナグモ	クモ	ジグモ	*Calommata signata* Karsch, 1879	NT	VU	EN	375
2	カネコトタテグモ	クモ	カネコトタテグモ	*Antrodiaetus roretzi* (L. Koch, 1878)	NT	VU	CR	369
3	キノボリトタテグモ	クモ	トタテグモ	*Conothele fragaria* (Dönitz, 1887)	NT	VU	CR	370
4	キシノウエトタテグモ	クモ	トタテグモ	*Latouchia typica* (Kishida, 1913)	NT	VU	CR	371
5	ヒゴユウレイグモ	クモ	ユウレイグモ	*Pholcus higoensis* Irie & Ono, 2008	－	－	DD	396
6	ギボシヒメグモ	クモ	ヒメグモ	*Chikunia albipes* (S.Saito, 1935)	－	－	NT	387
7	コガネグモ	クモ	コガネグモ	*Argiope amoena* L. Koch, 1878	－	NT	NT	388
8	ビジョオニグモ	クモ	コガネグモ	*Bijoaraneus komachi* Tanikawa, Yamasaki & Petcharad, 2021	－	－	NT	389
9	オオトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne akirai* Tanikawa, 2013	－	NT	NT	390
10	トリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne bufo* (Bösenberg & Strand, 1906)	－	NT	NT	391
11	シロオビトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne nagasakiensis* Strand, 1918	－	NT	NT	392
12	アカイロトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	*Cyrtarachne yunoharuensis* Strand, 1918	－	NT	VU	379
13	スズミグモ	クモ	コガネグモ	*Cyrtophora ikomosanensis* (Bösenberg & Strand, 1906)	－	－	NT	393

索引（分類）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
14	トゲグモ	クモ	コガネグモ	*Gasteracantha kuhli* C. L. Koch, 1837	－	VU	VU	380
15	ムツトゲイセキグモ	クモ	コガネグモ	*Ordgarius sexspinosus* (Thorell, 1894)	－	EN	CR	372
16	ゲホウグモ	クモ	コガネグモ	*Poltys illepidus* C. L. Koch, 1843	－	NT	VU	381
17	チビクロドヨウグモ	クモ	アシナガグモ	*Meta nigridorsalis* Tanikawa, 1994	－	－	EN	376
18	ムロズミソレグモ	クモ	スオウグモ	*Takeoa nishimurai* (Yaginuma, 1963)	－	DD	DD	397
19	クリチャササグモ	クモ	ササグモ	*Oxyopes licenti* Schenkel, 1953	－	－	VU	382
20	ハヤテグモ	クモ	キシダグモ	*Perenethis fascigera* (Bösenberg & Strand, 1906)	－	－	EN	378
21	スジブトハシリグモ	クモ	キシダグモ	*Dolomedes saganus* Bösenberg et Strand, 1906	－	－	EN	377
22	エビチャコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Arctosa ebicha* Yaginuma, 1960	－	EN	VU	383
23	ミナミコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Piratula meridionalis* (Tanaka, 1974)	－	NT	VU	384
24	カコウコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Pardosa nojimai* Tanaka, 1998	－	VU	CR	373
25	テジロハリゲコモリグモ	クモ	コモリグモ	*Pardosa yamanoi* Tanaka & Suwa, 1986	－	EN	CR	374
26	カトウツケオグモ	クモ	カニグモ	*Phrynarachne katoi* Tikuni, 1955	－	EN	DD	398
27	シロスジグモ	クモ	カニグモ	*Runcinia insecta* (L.Koch, 1875)	－	－	DD	399
28	オビボソカニグモ	クモ	カニグモ	*Xysticus trizonatus* Ono, 1988	－	VU	VU	385
29	ハマキフクログモ	クモ	フクログモ	*Clubiona japonicola* Bösenberg & Strand, 1906	－	－	NT	394
30	ヤギヌマフクログモ	クモ	フクログモ	*Clubiona yaginumai* Hayashi, 1989	－	－	DD	400
31	ヒゲナガツヤグモ	クモ	ワシグモ	*Micaria dives* (Lucas, 1846)	－	－	NT	395
32	オビジガバチグモ	クモ	ハチグモ	*Castianeira shaxianensis* Gong, 1983	－	NT	VU	386

（８）エビ・カニ類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	ミゾレヌマエビ	十脚	ヌマエビ	*Caridina leucosticta*　Stimpson, 1860	－	対象外	NT	411
2	サメハダヘイケガニ	十脚	ヘイケガニ	*Paradorippe granulata* (De Haan, 1841)	－	対象外	NT	412
3	マメコブシガニ	十脚	コブシガニ	*Pyrhila pisum* (De Haan, 1841)	－	対象外	NT	413
4	マキトラノオガニ	十脚	ケブカガニ	*Pilumnopeus makianus* (Rathbun, 1931)	－	対象外	NT	414
5	サワガニ	十脚	サワガニ	*Geothelphusa dehaani* (White, 1847)	－	対象外	CR	404
6	アカテガニ	十脚	ベンケイガニ	*Chiromantes haematocheir* (De Haan, 1833)	－	対象外	VU	406
7	ウモレベンケイガニ	十脚	ベンケイガニ	*Clistocoeloma sinense* Shen, 1933	－	対象外	VU	407
8	クシテガニ	十脚	ベンケイガニ	*Parasesarma affine* (De Haan, 1837)	－	対象外	NT	415
9	ユビアカベンケイガニ	十脚	ベンケイガニ	*Parasesarma tripectinis* (Shen, 1940)	－	対象外	VU	408
10	モクズガニ	十脚	モクズガニ	*Eriocheir japonica* (De Haan, 1835)	－	対象外	NT	416
11	チゴガニ	十脚	コメツキガニ	*Ilyoplax pusilla* (De Haan, 1835)	－	対象外	VU	409
12	コメツキガニ	十脚	コメツキガニ	*Scopimera globosa* (De Haan, 1835)	－	対象外	VU	410
13	ハクセンシオマネキ	十脚	スナガニ	*Austruca lactea* (De Haan, 1835)	VU	対象外	EN	405

（９）貝類

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
1	ツヤガラス	イガイ	イガイ	*Jolya rhomboidea* (Reeve, 1857)	－	VU	VU	464
2	ハイガイ	フネガイ	フネガイ	*Tegillarca granosa* (Linnaeus, 1758)	VU	EX	EX	420
3	ズベタイラギ	カキ	ハボウキガイ	*Atrina pectinate* (Linnaeus, 1767)	NT	NT	NT	490
4	ヌマガイ	イシガイ	イシガイ	*Sinanodonta lauta* (Martens, 1877)	－	－	CR	430
5	ミナミタガイ	イシガイ	イシガイ	*Beringiana fukuharai* Sano, Hattori and T. Kondo, 2020	－	－	CR	431
6	ヤハズヌマガイ	イシガイ	イシガイ	*Buldowskia shadini* (Moskvicheva, 1973)	－	－	DD	510
7	タブネドブガイ属の未定種	イシガイ	イシガイ	*Buldowskia* sp.	－	－	DD	511
8	オバエボシガイ	イシガイ	イシガイ	*Inversidens brandtii* (Kobelt, 1879)	VU	EX	EX	421
9	ササノハガイ（トンガリササノハガイ）	イシガイ	イシガイ	*Lanceolaria oxyrhyncha* (E. von Martens, 1861)	VU	CR	EX	422
10	マツカサガイ	イシガイ	イシガイ	*Pronodularia japanensis* (I. Lea, 1859)	NT	CR	EX	423
11	カタハガイ	イシガイ	イシガイ	*Obovalis omiensis* (Heimburg, 1884)	VU	CR	EX	424
12	イシガイ	イシガイ	イシガイ	*Nodularia douglasiae* (J. E. Gray, 1833)	－	CR	CR	432

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
13	オキナガイ	スエモノガイ（上科）	オキナガイ	*Laternula anatina* (Linnaeus, 1758)	－	NT	EN	454
14	ソトオリガイ	スエモノガイ（上科）	オキナガイ	*Laternula gracilis* (Reeve, 1860)	－	NT	NT	491
15	ツキガイモドキ	ツキガイ	ツキガイ	*Lucinoma annulata* (Reeve, 1850)	－	NT	NT	492
16	イセシラガイ	ツキガイ	ツキガイ	*Pegophysema bialata* (Pilsbry, 1895)	CR+EN	CR	CR	433
17	マテガイ	マテガイ（上科）	マテガイ	*Solen strictus* A. Gould, 1861	－	NT	NT	493
18	アゲマキ	マルスダレガイ	ナタマメガイ	*Sinonovacula constricta* (Lamarck, 1818)	CR+EN	EX	EX	425
19	マゴコロガイ	ウロコガイ（上科）	チリハギ	*Peregrinamor oshimai* Shôji, 1938	NT	CR	CR	434
20	サビシラトリ	マルスダレガイ	ザルガイ	*Macoma contabulata* (Deshayes, 1855)	NT	EN	EN	455
21	ドブシジミ	ドブシジミ（上科）	ドブシジミ	*Sphaerium japonicum* (Westerlund, 1883)	－	－	VU	465
22	ヒメシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Macoma incongrua* (E. von Martens, 1865)	－	－	NT	494
23	ゴイサギ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Macoma tokyoensis* Makiyama, 1927	－	NT	NT	495
24	ユウシオガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Jitlada culter* (Hanley, 1844)	NT	NT	NT	496
25	サクラガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Nitidotellina hokkaidoensis* (Habe, 1961)	NT	NT	NT	497
26	アオサギガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Psammacoma gubernaculum* (Hanley, 1844)	－	CR	CR	435
27	イチョウシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	*Serratina diaphana* (Deshayes, 1855)	CR+EN	EX	EX	426
28	イソシジミ	マルスダレガイ	シオサザナミガイ	*Nuttallia japonica* (Reeve, 1857)	－	－	NT	498
29	ヤチヨノハナガイ	マルスダレガイ	バカガイ	*Raeta pellicula* (Reeve, 1854)	CR+EN	CR	CR	436
30	ウネナシトマヤガイ	マルスダレガイ	フナガタガイ	*Neotrapezium liratum* (Reeve, 1843)	NT	国リスト	NT	499
31	ウラカガミ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	*Dosinia corrugata* (Reeve, 1850)	CR+EN	CR	CR	437
32	ハマグリ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	*Meretrix lusoria* (Röding, 1798)	VU	NT	EN	456
33	イヨスダレガイ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	*Paratapes undulatus* (Born, 1778)	－	NT	VU	466
34	マシジミ	マルスダレガイ	シジミ	*Corbicula leana* Prime, 1864	VU	DD	DD	512
35	ウエジマメシジミ	マルスダレガイ	シジミ	*Odhneripisidium uejii* (Mori, 1938)	－	－	EN	457
36	ハナグモリ	マルスダレガイ	ハナグモリガイ	*Glauconome angulata* Reeve, 1844	VU	CR	CR	438
37	ウミタケ	オオノガイ	ニオガイ	*Barnea dilatata* (Souleyet, 1843)	VU	CR	CR	439
38	ヒメマスオガイ	オオノガイ	オオノガイ	*Cryptomya busoensis* Yokoyama, 1922	VU	VU	CR	440
39	クシケマスオガイ	オオノガイ	オオノガイ	*Cryptomya elliptica* (A. Adams, 1851)	NT	VU	CR	441
40	オオノガイ	オオノガイ	オオノガイ	*Mya* (*Arenomya*) *arenaria oonogai* Makiyama, 1935	NT	NT	NT	500
41	イボキサゴ	ニシキウズ	ニシキウズ	*Umbonium moniliferum* (Lamarck, 1822)	NT	EN	CR	442
42	ヒロクチカノコ	アマオブネガイ（上科）	アマオブネ	*Neripteron* sp.	NT	VU	VU	467
43	ヤマタニシ	ヤマタニシ（上科）	ヤマタニシ	*Cyclophorus herklotsi* E. von Martens, 1861	－	－	VU	468
44	ミジンヤマタニシ	ヤマタニシ（上科）	ヤマタニシ	*Nakadaella micron* (Pilsbry, 1900)	－	－	VU	469
45	ヒダリマキゴマガイ	ヤマタニシ（上科）	ゴマガイ	*Palaina pusilla* (E. von Martens, 1877)	－	－	NT	501
46	マルタニシ	タニシ（上科）	タニシ	*Cipangopaludina* cf. *laeta* (Martens, 1861)	VU	NT	EN	458
47	オオタニシ	タニシ（上科）	タニシ	*Heterogen japonica* (Martens, 1861)	NT	国リスト	VU	470
48	ウミニナ	オニノツノガイ（上科）	ウミニナ	*Batillaria multiformis* (Lischke, 1869)	NT	NT	EN	459
49	イボウミニナ	オニノツノガイ（上科）	ウミニナ	*Batillaria zonalis* (Bruguiére, 1792)	VU	EN	CR	443
50	フトヘナタリ	オニノツノガイ（上科）	キバウミニナ	*Cerithidea moerchii* (A. Adams, 1855)	NT	NT	VU	471
51	ヘナタリ	オニノツノガイ（上科）	キバウミニナ	*Pirenella nipponica* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016	NT	NT	CR	444
52	カワアイ	オニノツノガイ（上科）	キバウミニナ	*Pirenella pupiformis* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016	VU	CR	CR	445
53	カワニナ	オニノツノガイ（上科）	カワニナ	*Semisulcospira libertina* (A. Gould, 1859)	－	－	DD	513
54	チリメンカワニナ	オニノツノガイ（上科）	カワニナ	*Semisulcospira reiniana* (Brot, 1876)	－	－	DD	514

索引（分類）

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
55	タケノコカワニナ	オニノツノガイ（上科）	トゲカワニナ（トウガタカワニナ）	*Stenomelania crenulata* (Deshayes, 1838)	VU	EX	DD	515
56	クリイロカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Angustassiminea castanea* (Westerlund, 1883)	NT	NT	NT	502
57	ツブカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Assiminea estuarina* Habe, 1946	NT	NT	NT	503
58	ヨシダカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Assiminea yoshidayukioi* Kuroda, 1959	NT	VU	CR	446
59	ヒナタムシヤドリカワザンショウ	クビキレガイ（上科）	カワザンショウガイ	*Assiminea* aff. *parasitologica* Kuroda, 1958	NT	NT	NT	504
60	マメタニシ	クビキレガイ（上科）	エゾマメタニシ	*Parafossarulus manchouricus japonicus* (Pilsbry, 1901)	CR	CR	EX	427
61	カワグチツボ	クビキレガイ（上科）	ワカウラツボ	*Fluviocingula elegantula* (A. Adams, 1861)	NT	NT	NT	505
62	サザナミツボ	クビキレガイ（上科）	ワカウラツボ	*Nozeba ziczac* (H. Fukuda & Ekawa, 1997)	NT	EN	CR	447
63	ワカウラツボ	クビキレガイ（上科）	ワカウラツボ	*Wakauraia sakaguchii* (Kuroda & Habe, 1954)	VU	VU	VU	472
64	エドガワミズゴマツボ（ウミゴマツボ）	クビキレガイ（上科）	ミズゴマツボ	*Stenothyra edogawaensis* (Yokoyama, 1927)	NT	NT	NT	506
65	ヒナツボ	シロネズミ（上科）	シロネズミガイ	*Berthais egregia* (A.Adams, 1863)	－	DD	DD	516
66	クレハガイ	イトカケガイ（上科）	イトカケガイ	*Epitonium latifasciatum* (G. B. Sowerby II, 1874)	NT	NT	VU	473
67	セキモリ	イトカケガイ（上科）	イトカケガイ	*Epitonium robillardi* (G. B. Sowerby III, 1894)	NT	NT	VU	474
68	オリイレボラ	コモロガイ（上科）	コモロガイ	*Trigonaphera bocageana* (Crosse & Debeaux, 1863)	VU	EN	EN	460
69	ムシロガイ	エゾバイ（上科）	オリイレヨウバイ	*Nassarius livescens* (R. A. Philippi, 1849)	NT	NT	VU	475
70	タクミニナ	タクミニナ（上科）	タクミニナ	*Mathilda sinensis* P. Fischer, 1867	CR	CR	CR	448
71	ヌカルミクチキレ	トウガタガイ（上科）	トウガタガイ	*"Sayella"* sp.	NT	VU	VU	476
72	イソチドリ	トウガタガイ（上科）	トウガタガイ	*Amathina tricarinata* (Linnaeus, 1767)	CR+EN	CR	CR	449
73	カキウラクチキレモドキ	トウガタガイ（上科）	トウガタガイ	*Brachystomia bipyramidata* (Nomura, 1936)	－	NT	VU	477
74	モノアラガイ	モノアラガイ（上科）	モノアラガイ	*Radix japonica* (Jay, 1857)	NT	DD	EX	428
75	カワネジガイ	モノアラガイ（上科）	ヒラマキガイ	*Camptoceras hirasei* Walker, 1919	CR	EX	EX	429
76	ヒラマキミズマイマイ	モノアラガイ（上科）	ヒラマキガイ	*Gyraulus chinensis* (Dunker, 1848)	DD	NT	NT	507
77	ヒメヒラマキミズマイマイ	モノアラガイ（上科）	ヒラマキガイ	*Gyraulus* sp.	EN	DD	VU	478
78	ヒラマキガイモドキ	モノアラガイ（上科）	ヒラマキガイ	*Polypylis hemisphaerula* (W. H. Benson, 1842)	NT	NT	VU	479
79	ナラビオカミミガイ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Auriculastra duplicata* (L. Pfeiffer, 1854)	VU	CR	CR	450
80	オカミミガイ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Ellobium chinense* (L. Pfeiffer, 1854)	VU	EN	CR	451
81	クリイロコミミガイ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Laemodonta siamensis* (Morelet, 1875)	VU	CR	CR	452
82	キヌカツギハマシイノミ	オカミミガイ	オカミミガイ	*Melampus cf. sincaporensis* L. Pfeiffer, 1855	VU	CR	CR	453
83	イボイボナメクジ	アシヒダナメクジ（上科）	ホソアシヒダナメクジ	*Granulilimax fuscicornis* Minato, 1989	NT	NT	VU	480
84	タワラガイ	ネジレガイ（上科）	タワラガイ	*Sinoennea iwakawa* (Pilsbry, 1900)	－	－	VU	481
85	ナガオカモノアラガイ	オカモノアラガイ（上科）	オカモノアラガイ	*Oxyloma hirasei* (Pilsbry, 1901)	NT	NT	EN	461

No.	種名	目名	科名	学名	国 2020	県 2025	市 2025	掲載頁
86	ナミギセル	キセルガイ（上科）	キセルガイ	*Stereophaedusa japonica* (Crosse, 1871)	－	－	EN	462
87	ウラウズタカキビ	カサマイマイ（上科）	シタラ	*Coneuplecta* sp.	－	NT	VU	482
88	ヒゼンキビ	カサマイマイ（上科）	シタラ	*Parakaliella hizenensis* (Pilsbry, 1902)	NT	NT	VU	483
89	ウメムラシタラ	カサマイマイ（上科）	シタラ	*Sitalina japonica* Habe, 1964	NT	NT	VU	484
90	ヒメカサキビ	カサマイマイ（上科）	シタラ	*Trochochlamys subcrenulata* (Pilsbry, 1901)	NT	NT	NT	508
91	ヒラベッコウ	ベッコウマイマイ（上科）	ベッコウマイマイ	*Bekkochlamys micrograpta* (Pilsbry, 1900)	DD	VU	VU	485
92	ヒルゲンドルフマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Aegista hilgendorfi* (Kobelt, 1879)	NT	NT	EN	463
93	オオケマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Aegista vulgivaga* (Schmacker & Boettger, 1890)	－	－	NT	509
94	カタマメマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Lepidopisum conospira* (Pfeiffer,1851)	VU	VU	VU	486
95	ビロウドマイマイ属の一種	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Nipponochloritis* sp.	DD	NT	VU	487
96	ニッポンマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Satsuma japonica* (L. Pfeiffer, 1847)	－	－	VU	488
97	コベソマイマイ	マイマイ（上科）	ナンバンマイマイ（オナジマイマイ）	*Satsuma myomphala myomphala* (E. von Martens, 1865)	－	－	VU	489

索引（分類）

Threatened Wildlife of Nagoya City

RED DATA BOOK NAGOYA 2025

— Animals —

April 2025

Edited by

City of Nagoya Environmental Affairs Bureau
Environmental Planning Department Environmental Planning Division

Published by

City of Nagoya Environmental Affairs Bureau
Environmental Planning Department Environmental Planning Division
1-1 Sannomaru 3-chome, Naka-ku, Nagoya 460-8508, Japan
Tel: 052-831-8104
Fax: 052-839-1695
E-mail: bdnagoya@kankyokyoku.city.nagoya.lg.jp

名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物

レッドデータブックなごや 2025

— 動物編 —

発行年月　令和 7 年 4 月
編集　名古屋市環境局環境企画部環境企画課
発行　名古屋市環境局環境企画部環境企画課
〒460-8508　名古屋市中区三の丸三丁目 1 番 1 号
電話　052-831-8104
ファックス　052-839-1695
電子メール　bdnagoya@kankyokyoku.city.nagoya.lg.jp

本書に収録した写真は、著作者の了解を得て複製したものです。私的使用又は引用等著作権法上認められた行為を除き、著作者に無断で再複製を行うことはできません。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
古紙パルプ配合率60％再生紙を使用
本冊子は FSC® 認証を受けた OK マットコートエコグリーン EF 用紙で印刷しています。



Threatened Wildlife of Nagoya City
RED DATA BOOK NAGOYA 2025
Animals